

酒々井町飯積原山遺跡 1

旧石器時代 奈良時代～中・近世編

— 酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書2 —

平成26年3月

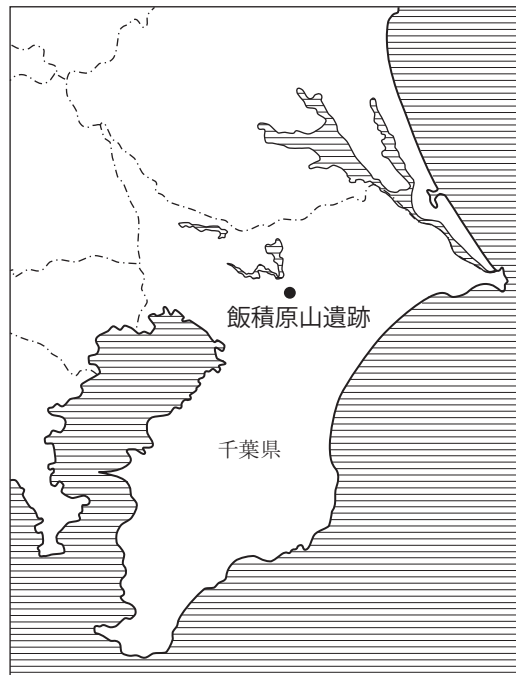
独立行政法人 都市再生機構

公益財団法人 千葉県教育振興財団

酒々井町飯積原山遺跡 1

旧石器時代 奈良時代～中・近世編

— 酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書2 —





遺跡東部航空写真 第1建物群 [(10) SB411・(10) SB413 ほか] 北から



(11) S11006 出土 人面ヘラ描き土製支脚

序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第720集として、独立行政法人都市再生機構の酒々井南部地区土地区画整理事業に伴って実施した酒々井町飯積原山遺跡の1冊目の発掘調査報告書（旧石器時代 奈良時代～中・近世編）を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器が検出され、また縄文時代や奈良・平安時代の集落跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願ってやみません。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成26年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 錦 織 總 夫

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による酒々井南部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県印旛郡酒々井町飯積字宮田台535-2ほかに所在する飯積原山遺跡（遺跡コード322-005）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は調査研究部長 伊藤智樹、整理課長 今泉 潔の指導のもと、主任上席文化財主事 糸川道行・新田浩三、主任主事 平井真紀子が担当した。執筆分担は、糸川が第1章、第4章2節、新田が第2章、第4章第1節、平井が第3章、第4章第3節である。編集は新田・平井が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構及び酒々井町教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は以下のとおりである。
第1・5図 都市再生機構 1/2,500現況図（平成6年作成）
第8図 国土地理院発行 1/25,000地形図「酒々井」（N1-54-19-10-4）
- 8 調査地周辺の航空写真は、京葉測量株式会社が1972（昭和48）年3月に撮影したものを、約1/10,000に拡大して使用した。
- 9 本書で使用した座標はすべて日本測地系に基づく平面直角座標（国家標準直角座標第IX系）で、図面の方位はすべてその座標北を示す。
- 10 黒曜石の産地同定について、明治大学黒曜石研究センターの池谷信之氏に分析を依頼し、その内容を第2章第9節に掲載した。
- 11 墨書土器の一部については、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館の平川 南館長に判読していただいた。
- 12 本文中においてブロックの大きさの表現は、（南北）m×（東西）mに統一した。
- 13 巻末に添付したCD-ROMには、第59～74表、旧石器属性表（全点）、母岩別組成表、黒曜石産地分析結果データ、写真図版の一部、及び、石器・出土状況のカラー写真のデータが収録されている。
- 14 図の表現の用例は、図中に指示しているものを除いて以下のとおりである。

遺構



カマド構築材・粘土



掘立柱建物柱痕跡



焼土



道路状遺構 硬化面

土器



黒色処理



油煙

奈良・平安時代遺構 遺物出土状況図

● 土器・土製品

▲ 石器・石製品

■ 鉄・金属製品

旧石器属性表の見方

属性表（添付 CD に収録）の記載事項は以下のとおりである。

挿図番号 実測図として掲載した遺物の番号であり、写真図版の番号とも一致する。ブロックごとに 1 から順につけた。

打面 C は自然面、P は点状打面、L は線状打面、1 は平坦剥離、2 以上は複剥離打面で、- は欠損等による打面なし・計測不可を示す。

打角・剥離角

打角は剥片の打面とポジティブバルブが作る角度、剥離角は石核の打面とネガティブバルブが作る角度。

背面構成 素材の情報が失われている石器に関しては記載しないが、背面構成のわかるものに関しては観察される範囲で記入した。H は主要剥離面と同一方向、T は主要剥離面と逆方向、R は右方向、L は左方向、D は背面方向、V は腹面方向からの加撃による剥離、C は自然面、J は節理面。

末端形状 F は直線状、H は蝶番状、S は階段状、O は石核の内側に力が向かったためにアーチ状または L 状になったもの。

調整角 削器の刃部、ナイフ形石器の刃潰しなどの調整剥離角。

刃部角 主にナイフ形石器の刃部の角度。

使用痕 N (Nicked edge) は刃こぼれ、H (Heated marks) は被熱痕。

欠損 定形的な石器で、欠損部分のあるものを + で表した。

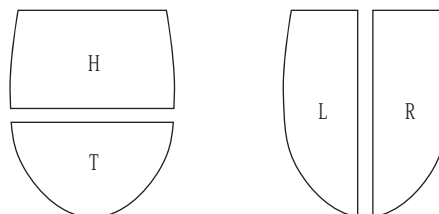
遺存部位 折れたあとに残存している部位。背面側から見た部位を表す。

H：頭部

T：尾部

L：背面側から見て左部

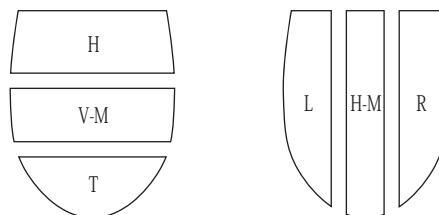
R：背面側から見て右部



中間部の表し方

V-M：垂直方向の中間部

H-M：水平方向の中間部



以下、アルファベットの組み合わせによって遺存部位を示す。

LH：左頭部

RH：右頭部

LM：左中間部

RM：右中間部

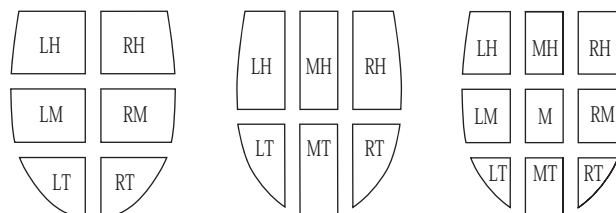
LT：左尾部

RT：右尾部

MH：中央頭部

MT：中央尾部

M：9分割された中間部



折れによる遺存部位の表示

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査・整理の方法	9
第2節 遺跡の位置と環境	17
1 遺跡の位置と地形	17
2 周辺の遺跡	17
第2章 旧石器時代	21
第1節 調査の概要	21
第2節 基本層序	21
第3節 第1文化層	24
第4節 第2文化層	27
第5節 第3文化層	43
第6節 第4文化層	103
第7節 第5文化層	111
第8節 単独出土石器	155
第9節 黒曜石の産地推定結果について	157
第3章 奈良・平安時代～中・近世の遺構と遺物	163
第1節 奈良・平安時代の竪穴住居跡とその出土遺物	163
第2節 奈良・平安時代の掘立柱建物跡とその出土遺物	292
第3節 土坑・ピット	330
第4節 遺構外出土遺物	334
第5節 溝状・道路状遺構および近世の遺構	337
第4章 まとめ	392
第1節 旧石器時代	392
第2節 掘立柱建物について	400
第3節 飯積原山遺跡出土の文字・記号	413
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図	調査対象範囲と地形 ……………	2	第40図	第3 a文化層第8ブロック器種別分布 ……………	69
第2図	平成6年度～10年度調査区全体図 ……………	7	第41図	第3 a文化層第8ブロック母岩別分布 ……………	70
第3図	グリッド名称例 ……………	9	第42図	第3 a文化層第8ブロック出土石器 (1) ……………	71
第4図	上層確認調査区全体図 ……………	10	第43図	第3 a文化層第8ブロック出土石器 (2) ……………	72
第5図	旧石器時代ブロックと確認グリッド位置図 ……………	11	第44図	第3 a文化層第8ブロック出土石器 (3) ……………	73
第6図	振り替え後の調査地区割り全体図 ……………	12	第45図	第3 a文化層第9ブロック遺物分布 ……………	75
第7図	上層遺構分布・本調査範囲全体図 ……………	15	第46図	第3 a文化層第9ブロック出土石器 (1) ……………	76
第8図	飯積原山遺跡周辺の旧石器時代遺跡分布図 ……………	18	第47図	第3 a文化層第9ブロック出土石器 (2) ……………	77
第9図	基本層序 ……………	21	第48図	第3 a文化層第9ブロック出土石器 (3) ……………	78
第10図	第1文化層第1ブロック出土石器 ……………	25	第49図	第3 a文化層第10ブロック遺物分布 ……………	80
第11図	第1文化層第1ブロック遺物分布 ……………	26	第50図	第3 a文化層第10ブロック出土石器 (1) ……………	81
第12図	第2 a文化層第2ブロック器種別分布 ……………	29	第51図	第3 a文化層第10ブロック出土石器 (2) ……………	82
第13図	第2 a文化層第2ブロック母岩別分布 ……………	30	第52図	第3 a文化層第10ブロック出土石器 (3) ……………	83
第14図	第2 a文化層第2ブロック出土石器 (1) ……………	31	第53図	第3 b文化層第11ブロック遺物分布 ……………	86
第15図	第2 a文化層第2ブロック出土石器 (2) ……………	32	第54図	第3 b文化層第11ブロック出土石器 ……………	87
第16図	第2 a文化層第2ブロック出土石器 (3) ……………	33	第55図	第3 b文化層第12ブロック出土石器 ……………	88
第17図	第2 a文化層第2ブロック出土石器 (4) ……………	34	第56図	第3 b文化層第12ブロック遺物分布 ……………	89
第18図	第2 b文化層第3ブロック器種別分布 ……………	36	第57図	第3 b文化層第13ブロック出土石器 ……………	90
第19図	第2 b文化層第3ブロック母岩別分布 ……………	37	第58図	第3 b文化層第13ブロック遺物分布 ……………	91
第20図	第2 b文化層第3ブロック出土石器 ……………	38	第59図	第3 c文化層第14ブロック出土石器 ……………	93
第21図	第2 c文化層第4ブロック遺物分布 ……………	40	第60図	第3 c文化層第14ブロック器種別分布 ……………	94
第22図	第2 c文化層第4ブロック出土石器 ……………	41	第61図	第3 c文化層第14ブロック母岩分布 ……………	95
第23図	第2 d文化層第5ブロック遺物分布と出土石器 ……………	42	第62図	第3 d文化層第15ブロック出土石器 ……………	96
第24図	第3 a文化層石材別分布 (1) [全点] ……………	48	第63図	第3 d文化層第15ブロック遺物分布 ……………	97
第25図	第3 a文化層石材別分布 (2) [黒曜石 (1)] ……………	49	第64図	第3 e文化層第16ブロック出土石器 ……………	99
第26図	第3 a文化層石材別分布 (3) [黒曜石 (2)] ……………	50	第65図	第3 e文化層第16ブロック器種別分布 (概念図) ……………	100
第27図	第3 a文化層石材別分布 (4) [黒曜石 (3)] ……………	51	第66図	第3 e文化層第16ブロック母岩別分布 (概念図) ……………	101
第28図	第3 a文化層石材別分布 (5) [黒曜石以外 (1)] ……………	52	第67図	第3文化層単独出土石器 ……………	102
第29図	第3 a文化層石材別分布 (6) [黒曜石以外 (2)] ……………	53	第68図	第4 a文化層第17ブロック器種別分布 ……………	104
第30図	第3 a文化層第6ブロック器種別分布 ……………	56	第69図	第4 a文化層第17ブロック母岩別分布 ……………	105
第31図	第3 a文化層第6ブロック母岩別分布 ……………	57	第70図	第4 a文化層第17ブロック出土石器 ……………	106
第32図	第3 a文化層第6ブロック出土石器 (1) ……………	58	第71図	第4 b文化層第18ブロック出土石器 ……………	108
第33図	第3 a文化層第6ブロック出土石器 (2) ……………	59	第72図	第4 b文化層第18ブロック遺物分布 ……………	109
第34図	第3 a文化層第6ブロック出土石器 (3) ……………	60	第73図	第4文化層単独出土石器 ……………	110
第35図	第3 a文化層第7ブロック器種別分布 ……………	62	第74図	第4文化層単独遺物分布 ……………	110
第36図	第3 a文化層第7ブロック母岩別分布 ……………	63	第75図	第5 a文化層石材別分布 (1) [全石材・黒曜石全点] ……………	116
第37図	第3 a文化層第7ブロック出土石器 (1) ……………	64			
第38図	第3 a文化層第7ブロック出土石器 (2) ……………	65			
第39図	第3 a文化層第7ブロック出土石器 (3) ……………	66			

第76図	第5 a文化層石材別分布 (2) [黒曜石以外・黒曜501]	117	第117図	(9) SI204②.....	179
第77図	第5 a文化層石材別分布 (3) [黒曜502・521]...	118	第118図	(9) SI205.....	180
第78図	第5 a文化層第19ブロック器種別分布	122	第119図	(10) SI358①	182
第79図	第5 a文化層第19ブロック母岩別分布	123	第120図	(10) SI358②	183
第80図	第5 a文化層第19ブロック出土石器 (1)	124	第121図	(10) SI396	184
第81図	第5 a文化層第19ブロック出土石器 (2)	125	第122図	(10) SI412①	186
第82図	第5 a文化層第19ブロック出土石器 (3)	126	第123図	(10) SI412②	187
第83図	第5 a文化層第20ブロック器種別分布	130	第124図	(10) SI412③	188
第84図	第5 a文化層第20ブロック母岩別分布	131	第125図	(10) SI448	190
第85図	第5 a文化層第20ブロック出土石器 (1)	132	第126図	(10) SI456	191
第86図	第5 a文化層第20ブロック出土石器 (2)	133	第127図	(10) SI536	193
第87図	第5 a文化層第20ブロック出土石器 (3)	134	第128図	(10) SI540A.....	194
第88図	第5 a文化層第20ブロック出土石器 (4)	135	第129図	(10) SI540B.....	195
第89図	第5 a文化層第20ブロック出土石器 (5)	136	第130図	(11) SI1001①.....	197
第90図	第5 a文化層第20ブロック出土石器 (6)	137	第131図	(11) SI1001②.....	199
第91図	第5 a文化層第20ブロック出土石器 (7)	138	第132図	(11) SI1003.....	201
第92図	第5 a文化層第21ブロック遺物分布	140	第133図	(11) SI1004①.....	203
第93図	第5 a文化層第21ブロック出土石器 (1)	141	第134図	(11) SI1004②.....	204
第94図	第5 a文化層第21ブロック出土石器 (2)	142	第135図	(11) SI1004③.....	205
第95図	第5 b文化層第22ブロック器種別分布	146	第136図	(11) SI1005.....	207
第96図	第5 b文化層第22ブロック母岩別分布	147	第137図	(11) SI1006.....	209
第97図	第5 b文化層第22ブロック出土石器 (1)	148	第138図	(11) SI1007.....	211
第98図	第5 b文化層第22ブロック出土石器 (2)	149	第139図	(11) SI1008①.....	212
第99図	第5 b文化層第22ブロック出土石器 (3)	150	第140図	(11) SI1008②.....	213
第100図	第5 b文化層第22ブロック出土石器 (4)	151	第141図	(11) SI1009①・(11) SK1053	215
第101図	第5 b文化層第22ブロック出土石器 (5)	152	第142図	(11) SI1009②.....	216
第102図	第5 b文化層第22ブロック出土石器 (6)	153	第143図	(11) SI1009③.....	217
第103図	第5 b文化層第22ブロック出土石器 (7)	154	第144図	(11) SI1010.....	218
第104図	第5文化層単独出土石器	155	第145図	(12) SI001	219
第105図	単独出土石器	156	第146図	(12) SI002①	221
第106図	飯積原山遺跡黒曜石産地推定結果	159	第147図	(12) SI002②	223
第107図	(9) SI157.....	164	第148図	(12) SI002③	224
第108図	(9) SI198①.....	166	第149図	(12) SI003	226
第109図	(9) SI198②.....	167	第150図	(12) SI004①	228
第110図	(9) SI199.....	168	第151図	(12) SI004②	230
第111図	(9) SI200.....	170	第152図	(12) SI005	231
第112図	(9) SI201①.....	172	第153図	(12) SI006①	233
第113図	(9) SI201②.....	173	第154図	(12) SI006②	234
第114図	(9) SI202.....	174	第155図	(12) SI013	236
第115図	(9) SI203.....	176	第156図	(12) SI045	237
第116図	(9) SI204①.....	178	第157図	(13) SI621	238
			第158図	(13) SI628	239

第159図	(13) SI629	241	第201図	(10) SB436・(10) SB437	302
第160図	(13) SI630	242	第202図	(10) SB440・(10) SB441①	303
第161図	(13) SI631	243	第203図	(10) SB440・(10) SB441②	304
第162図	(13) SI632	244	第204図	(10) SB445・(10) SB446①	305
第163図	(13) SI633	246	第205図	(10) SB446②	306
第164図	(13) SI636	248	第206図	(10) SB449・(10) SB503①	307
第165図	(13) SI637	249	第207図	(10) SB449・(10) SB503②	308
第166図	(13) SI638	250	第208図	(10) SB504	309
第167図	(13) SI648	251	第209図	(10) SB508・(10) SB509	310
第168図	(14) SI129	252	第210図	(10) SB513	311
第169図	(15) SI004①	254	第211図	(10) SB514・(10) SB515・(10) SB516①	313
第170図	(15) SI004②	255	第212図	(10) SB514・(10) SB515・(10) SB516②	314
第171図	(15) SI007	257	第213図	(10) SB517	315
第172図	(15) SI008	259	第214図	(10) SB518	316
第173図	(16) SI001	260	第215図	第3建物群配置図	317
第174図	(16) SI002	261	第216図	(12) SB016	318
第175図	(17) SI009	262	第217図	(12) SB017・(12) SB018	319
第176図	(17) SI010	264	第218図	(12) SB019	320
第177図	(17) SI011	267	第219図	(12) SB020・(12) SB021	321
第178図	(17) SI016	268	第220図	(12) SB022・(12) SB023	322
第179図	(19) SI677①	270	第221図	(12) SB044	323
第180図	(19) SI677②	272	第222図	(12) SB067・(12) P79～(12) P85	324
第181図	(19) SI678	274	第223図	(12) SB072	325
第182図	(19) SI679	276	第224図	(17) SB001	326
第183図	(19) SI680①	278	第225図	(17) SB002A ①	327
第184図	(19) SI680②	280	第226図	(17) SB002A ②	328
第185図	(20) SI662	281	第227図	(17) SB002B	329
第186図	(20) SI663	283	第228図	(17) SB003	330
第187図	(20) SI664	285	第229図	(11) SK1043・(11) SK1050・(12) SK027・ (15) SK007・(15) SK008・(17) SK010・ (19) SK684・(20) SK670・(20) SK674	331
第188図	(33) SI091	287	第230図	土坑出土遺物	332
第189図	(33) SI092	288	第231図	遺構外出土遺物	335
第190図	(34) SI121	290	第232図	溝状・道路状遺構位置(1)及び分割枠全体図	338
第191図	(40) SI001	291	第233図	溝状・道路状遺構位置(2)	339
第192図	(9) SB180	293	第234図	溝状・道路状遺構 第1分割区①	342
第193図	第1建物群配置図	294	第235図	溝状・道路状遺構 第1分割区②	343
第194図	(10) SB411	295	第236図	溝状・道路状遺構 第2分割区①	344
第195図	(10) SB413・(10) SB418	296	第237図	溝状・道路状遺構 第2分割区②	345
第196図	(10) SB419	297	第238図	溝状・道路状遺構 第3分割区	347
第197図	(10) SB420	298	第239図	溝状・道路状遺構 第4分割区	349
第198図	(10) SB421・(10) SB422	299			
第199図	(10) SB432	300			
第200図	(10) SB434	301			

第240図	溝状・道路状遺構	第5分割区	350	第260図	溝状・道路状遺構	第18分割区	377
第241図	溝状・道路状遺構	第6分割区	351	第261図	(24) 野馬土手		379
第242図	溝状・道路状遺構	第7分割区	353	第262図	馬骨出土シン穴状遺構	(25) SK001・(26) SK009・ (26) SK013	383
第243図	溝状・道路状遺構	第8分割区	354	第263図	馬骨出土シン穴状遺構	(26) SK016・(28) SK011・ (28) SK013・土坑 (33) SK101	385
第244図	溝状・道路状遺構	第9分割区	356	第264図	(37) SM003		389
第245図	溝状・道路状遺構	第10分割区①	357	第265図	(39) SM001		390
第246図	溝状・道路状遺構	第10分割区②	359	第266図	文化層別主要石器 (1)		394
第247図	溝状・道路状遺構	第11分割区①	360	第267図	文化層別主要石器 (2)		395
第248図	溝状・道路状遺構	第11分割区②	362	第268図	文化層別主要石器 (3)		396
第249図	溝状・道路状遺構	第11分割区③	364	第269図	文化層別主要石器 (4)		397
第250図	溝状・道路状遺構	第12分割区①	365	第270図	掘立柱建物跡集中箇所分布と名称		400
第251図	溝状・道路状遺構	第12分割区②	367	第271図	第1建物群の変遷		405
第252図	溝状・道路状遺構	第13分割区①	368	第272図	第2建物群—村落寺院全体図—		407
第253図	溝状・道路状遺構	第13分割区②	369	第273図	第3建物群の方位・建物の向き		411
第254図	溝状・道路状遺構	第14分割区	371	第274図	文字・記号資料の分布図		415・416
第255図	溝状・道路状遺構	第15分割区	372	第275図	文字・記号資料集成①		418
第256図	溝状・道路状遺構	第16分割区①	373	第276図	文字・記号資料集成②		419
第257図	溝状・道路状遺構	第16分割区②	374	第277図	文字・記号資料集成③		420
第258図	溝状・道路状遺構	第17分割区①	375				
第259図	溝状・道路状遺構	第17分割区②	376				

表 目 次

第1表	発掘調査面積一覧	4	第15表	第3文化層ブロック別組成表	44
第2表	上層調査対象面積一覧	6	第16表	第3 a文化層器種石材組成表	45
第3表	飯積原山遺跡地区割り一覧	13	第17表	第3 a文化層ブロック別組成表	45
第4表	飯積原山遺跡奈良・平安時代以降の遺構種別一覧	14	第18表	第3 a文化層母岩別ブロック組成表	46
第5表	文化層ブロック別器種組成表	22	第19表	第3 a文化層母岩別器種組成表	47
第6表	文化層ブロック別石材組成表	23	第20表	第3 a文化層第6ブロック組成表	61
第7表	第1文化層第1ブロック組成表	25	第21表	第3 a文化層第7ブロック組成表	67
第8表	第2文化層器種石材組成表	27	第22表	第3 a文化層第8ブロック組成表	68
第9表	第2文化層ブロック別組成表	27	第23表	第3 a文化層第9ブロック組成表	74
第10表	第2 a文化層第2ブロック組成表	28	第24表	第3 a文化層第10ブロック組成表	79
第11表	第2 b文化層第3ブロック組成表	35	第25表	第3 b文化層器種石材組成表	85
第12表	第2 c文化層第4ブロック組成表	39	第26表	第3 b文化層ブロック別組成表	85
第13表	第2 d文化層第5ブロック組成表	42	第27表	第3 b文化層第11ブロック組成表	87
第14表	第3文化層器種石材組成表	43	第28表	第3 b文化層第12ブロック組成表	88
			第29表	第3 b文化層第13ブロック組成表	92

第30表	第3 c 文化層第14ブロック組成表	92	第53表	溝・道路状遺構分割枠別遺構一覧	340
第31表	第3 d 文化層第15ブロック組成表	96	第54表	第1建物群の建物規模	402
第32表	第3 e 文化層第16ブロック組成表	98	第55表	第3建物群の建物規模	410
第33表	第3文化層単独出土組成表	102	第56表	墨書土器 器種別部位一覧	413
第34表	第4文化層器種石材組成表	103	第57表	主な文字と記載部位	413
第35表	第4文化層ブロック別組成表	103	第58表	出土文字一覧	421~424
第36表	第4 a 文化層第17ブロック組成表	104	第59表	奈良・平安時代竪穴住居跡計測表	CD-ROM
第37表	第4 b 文化層第18ブロック組成表	107	第60表	奈良・平安時代掘立柱建物跡計測表	CD-ROM
第38表	第4文化層単独出土組成表	110	第61表	奈良・平安時代土坑計測表	CD-ROM
第39表	第5文化層ブロック別組成表	111	第62表	奈良・平安時代ピット計測表	CD-ROM
第40表	第5文化層器種石材組成表	112	第63表	奈良・平安時代溝状・道路状遺構計測表	CD-ROM
第41表	第5 a 文化層器種石材組成表	113	第64表	シシ穴状遺構計測表	CD-ROM
第42表	第5 a 文化層ブロック別組成表	113	第65表	奈良・平安時代竪穴住居跡出土土器観察表	CD-ROM
第43表	第5 a 文化層母岩別ブロック組成表	114	第66表	奈良・平安時代掘立柱建物跡出土土器観察表	CD-ROM
第44表	第5 a 文化層母岩別器種組成表	115	第67表	奈良・平安時代土坑出土土器観察表	CD-ROM
第45表	第5 a 文化層第19ブロック組成表	120	第68表	奈良・平安時代溝状・道路状遺構出	CD-ROM
第46表	第5 a 文化層第20ブロック組成表	128	第69表	奈良・平安時代遺構外出土土器観察表	CD-ROM
第47表	第5 a 文化層第21ブロック組成表	139	第70表	土製品計測表	CD-ROM
第48表	第5 b 文化層第22ブロック組成表	144	第71表	石製品計測表	CD-ROM
第49表	単独出土組成表	155	第72表	金属製品観察表	CD-ROM
第50表	判別図法・判別分析による推定結果	160	第73表	鉄滓一覧	CD-ROM
第51表	判別図法・判別分析からの最終結果	161	第74表	馬骨同定表	CD-ROM
第52表	黒曜石の文化層別産地推定組成表	161			

図版目次

巻頭図版	遺跡東部航空写真 第1建物群 [(10) SB411・(10) SB413ほか] 北から	第2 c 文化層第4ブロック 北西から
	(11) S11006出土 人面ヘラ描き土製支脚	第2 d 文化層第5ブロック 南から
図版1	調査地周辺の航空写真	第3 b 文化層第11・13ブロック 南から
図版2	9地区 北から、11地区 北やや東から	第3 b 文化層第12ブロック 北西から
	12地区 西から	図版5
図版3	12地区 南西から、17地区 北から	第3 a 文化層第6~10ブロック 北西から
	26地区 西から	第3 a 文化層第6~10ブロック 南東から
図版4	第1文化層第1ブロック 北西から	第3文化層単独出土 (12I-96グリッド) 南西から
	第2 a 文化層第2ブロック 北東から	第3 c 文化層第14ブロック (西側) 南西から
	第2 b 文化層第3ブロック 北西から	第3 c 文化層第14ブロック (東側) 南西から
	第2 b 文化層第3ブロック 南西から	図版6
		第4 a 文化層第17ブロック 南東から
		第4 a 文化層第17ブロック 北東から
		第4 b 文化層第18ブロック 西から

	第4文化層単独出土 (19I-40グリッド) 北西から	図版17	(12) SI001西カマド、(12) SI001北カマド、
	第5 a文化層第19~21ブロック 西から		(12) SI002、(12) SI002・(12) SB016、(12) SI002
図版7	第5 a文化層第19・20ブロック 西から		カマド遺物出土状況、(12) SI002遺物出土状況、
	第5 a文化層第20ブロック 西から		(12) SI003、(12) SI003カマド
	第5 a文化層第21ブロック 西から	図版18	(12) SI003遺物出土状況、(12) SI004、(12) SI004
	第5 a文化層第21ブロック 北西から		カマド、(12) SI004遺物出土状況、(12) SI004遺物
	第5 b文化層第22ブロック 南東から		出土状況、(12) SI005、(12) SI005カマド、
	第5 b文化層第22ブロック 南東から		(12) SI006
	第5 b文化層第22ブロック 東から	図版19	(12) SI006遺物出土状況、(12) SI006遺物出土状況、
	第5 b文化層第22ブロック 南から		(12) SI006カマド遺物出土状況、(12) SI013、
図版8	(9) SI157、(9) SI157西カマド、(9) SI157北カマド、		(12) SI013カマド、(12) SI013カマド遺物出土状況、
	(9) SI198、(9) SI198遺物出土状況、(9) SI199、		(12) SI045、(13) SI621
	(9) SI199カマド、(9) SI200	図版20	(13) SI621遺物出土状況、(13) SI628、(13) SI628
図版9	(9) SI200カマド、(9) SI200カマド、(9) SI200遺		カマド、(13) SI628遺物出土状況、(13) SI629、
	物出土状況、(9) SI201、(9) SI201カマド、		(13) SI629カマド遺物出土状況、(13) SI630、
	(9) SI201遺物出土状況、(9) SI202、(9) SI202カマド		(13) SI631
図版10	(9) SI203、(9) SI203カマド遺物出土状況、	図版21	(13) SI631カマド遺物出土状況、(13) SI632遺物出
	(9) SI204、(9) SI204カマド、(9) SI204遺物出土		土状況、(13) SI633遺物出土状況、(13) SI636遺物
	状況、(9) SI205、(9) SI205カマド、(9) SI205遺		出土状況、(13) SI637、(13) SI638遺物出土状況、
	物出土状況		(14) SI129、(14) SI129カマド
図版11	(10) SI358、(10) SI358カマド、(10) SI396、	図版22	(14) SI129カマド、(15) SI004、(15) SI004カマド、
	(10) SI396カマド、(10) SI412、(10) SI412カマド、		(15) SI004カマド遺物出土状況、(15) SI007、
	(10) SI448、(10) SI456		(15) SI007カマド、(15) SI008、(15) SI008カマド
図版12	(10) SI456、(10) SI536、(10) SI536カマド、	図版23	(16) SI001、(16) SI001カマド遺物出土状況、
	(10) SI540B、(10) SI540A、(10) SI54Bカマド、		(16) SI001カマド、(16) SI001遺物出土状況、
	(11) SI1001、(11) SI1001カマド		(16) SI002、(16) SI002カマド、(17) SI009、
図版13	(11) SI1001遺物出土状況、(11) SI1003、		(17) SI009カマド
	(11) SI1003カマド、(11) SI1003遺物出土状況、	図版24	(17) SI010・I016、(17) SI010遺物出土状況、
	(11) SI1003貯蔵穴遺物出土状況、(11) SI1003・		(17) SI011、(17) SI011カマド、(17) SI016カマド、
	1004、(11) SI1004、(11) SI1004カマド	図版25	(19) SI677・(19) SI677遺物出土状況、(19) SI678
図版14	(11) SI1004遺物出土状況、(11) SI1004カマド遺物		(19) SI678カマド遺物出土状況、(19) SI679、
	出土状況、(11) SI1005、(11) SI1005カマド、		(19) SI679カマド遺物出土状況、(19) SI679カマ
	(11) SI1005遺物出土状況、(11) SI1005カマド遺物		ド遺物出土状況、(19) SI680、(20) SI662、
	出土状況、(11) SI1006、(11) SI1006カマド	図版26	(20) SI662カマド、(20) SI662カマド遺物出土状況
図版15	(11) SI1006遺物出土状況、(11) SI1006カマド遺物		(20) SI663、(20) SI663カマド、(20) SI664、
	出土状況、(11) SI1006、(11) SI1007、		(20) SI664遺物出土状況、(33) SI091、(33) SI091カ
	(11) SI1007カマド、(11) SI1007遺物出土状況、		マド遺物出土状況、(33) SI092、(33) SI092カマド
	(11) SI1008、(11) SI1008カマド	図版27	(33) SI092カマド遺物出土状況、(33) SI092遺物出
図版16	(11) SI1008カマド遺物出土状況、(11) SI1009、		土状況、(34) SI121、(34) SI121カマド、
	(11) SI1009カマド、(11) SI1009遺物出土状況、		(40) SI001、(40) SI001、(40) SI001北カマド、
	(11) SI1009遺物出土状況、(11) SI1009カマド炭化		(40) SI001東カマド
	物出土状況、(11) SI1010、(12) SI001	図版28	(40) SI001東カマド遺物出土状況、(40) SI001遺物

	出土状況、(10) SB411、(10) SB413、(10) SB418、 (10) SB419、(10) SB420、(10) SB432		(26) SD007、(25) SD002、(29) SD960・961、 (29) SD960・961
図版29	(10) SB434、(10) SB436・437、(10) SB440・441、 (10) SB445・446、(10) SB445炭化物出土状況、 (10) SB450・503、(10) SB504、(10) SB508・509	図版43	(29) SD962、(30) SD009・010、(35) SD005、 (37) SD105、(37) SD106、(37) SD107、(33) SD054、 (33) SD054
図版30	(10) SB513、(10) SB514・515、(10) SB516、 (10) SB517、(10) SB518、(12) SB016、 (12) SB017・018、(12) SB017・018	図版44	(6) SD008、(7) SD294・295、(6) SD013、(18) SD120、 (19) SD676、(20) SD661、(16) SD001、(19) SD675
図版31	(12) SB019、(12) SB020・021、(12) SB020・021、 (12) SB022・023、(12) SB022・023、 (12) SB022・023、(12) SB044、(12) SB067	図版45	(20) SD665、(23) SD669、(20) SD671、(20) SD666、 (21) SD952、(20) SD667、(21) SD951、(21) SD951
図版32	(12) SB067、(12) SB072、(17) SB002A・B・003・ 南門、(17) SB002A・B、(17) SB003、(11) SK1024、 (11) SK1029、(11) SK1050	図版46	(17) SD002、(17) SD002、(17) SD003、 (11) SD1049、(12) SD038、(8) SD033、(12) SD057、 (12) SD042
図版33	(11) SK1053、(11) SK1053遺物出土状況、 (12) SK027、(13) SK617、(15) SK007、(15) SK008、 (19) SK684、(20) SK670	図版47	(1) SD002、(1) SD003、(1) SD006、(1) SD008、 (39) SM001、(37) SM003、出羽三山塔
図版34	(11) SK1021、(16) SK001、(16) SK002、 (16) SK002土層断面、(16) SK003土層断面、 (16) SK006、(16) SK006、(18) SK120A	図版48	旧石器時代出土石器 (1)
図版35	(18) SK120B、(18) SK120C、(18) SK120D、 (18) SK120E、(18) SK120A 土層断面、(18) SK120B 土層断面、(19) SK676A、(19) SK676D	図版49	旧石器時代出土石器 (2)
図版36	(20) SK661A、(20) SK661B、(20) SK661C、 (20) SK661D、(20) SK661E、(25) SK001、 (26) SK002・014、(26) SK004	図版50	旧石器時代出土石器 (3)
図版37	(26) SK005、(26) SK006、(26) SK007、(26) SK008、 (26) SK009、(26) SK009馬骨出土状況、(26) SK010、 (26) SK011	図版51	旧石器時代出土石器 (4)
図版38	(26) SK012、(26) SK013馬骨出土状況、(26) SK015、 (26) SK015馬骨出土状況、(26) SK016、(26) SK020、 (28) SK001、(28) SK002	図版52	旧石器時代出土石器 (5)
図版39	(28) SK003、(28) SK004・018、(28) SK004・018、 (28) SK005、(28) SK006・007、(28) SK008、 (28) SK009、(28) SK010・016	図版53	旧石器時代出土石器 (6)
図版40	(28) SK010・016、(28) SK011、(28) SK011馬骨出土 状況、(28) SK012、(28) SK013、(28) SK014、 (28) SK017、(28) SK019	図版54	旧石器時代出土石器 (7)
図版41	(29) SD910、(28) SD001、(28) SD001、(28) 野馬土手、 (28) 野馬土手・堀、(26) SD001、(26) SD001、 (25) SD001・003	図版55	旧石器時代出土石器 (8)
図版42	(26) SD002、(26) SD003、(26) SD004、(26) SD004、	図版56	竪穴住居跡出土土器 (1)
		図版57	竪穴住居跡出土土器 (2)
		図版58	竪穴住居跡出土土器 (3)
		図版59	竪穴住居跡出土土器 (4)
		図版60	竪穴住居跡出土土器 (5)
		図版61	竪穴住居跡出土土器 (6)
		図版62	竪穴住居跡出土土器 (7)
		図版63	竪穴住居跡出土土器 (8)
		図版64	竪穴住居跡出土土器 (9)
		図版65	竪穴住居跡出土土器 (10)
		図版66	竪穴住居跡出土土器 (11) 土製品・石製品
		図版67	その他遺構・遺構外出土土器・中近世遺物 (1)
		図版68	中近世遺物 (2)
		図版69	鉄製品 (1)・銅製品
		図版70	鉄製品 (2)、鉄滓、銭貨
		図版71	墨書 (1)
		図版72	墨書 (2)
		図版73	墨書 (3)
		図版74	墨書 (4)
		図版75	墨書 (5)

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

独立行政法人都市再生機構（平成7年1月1日契約時は住宅・都市整備公団、平成11年～16年まで都市基盤整備公団）は、千葉県印旛郡酒々井町において、酒々井南部地区土地区画整理事業を計画した。実施に当たり、千葉県教育委員会へ事業予定地内の埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した結果、予定地内には飯積原山遺跡・飯積上台遺跡が所在する旨、回答があった。千葉県教育委員会は独立行政法人都市再生機構とその取扱いについて協議した結果、記録保存の措置を講ずることとし、発掘調査を公益財団法人千葉県教育振興財団（平成17年以前は財団法人千葉県文化財センター、平成17年から22年まで財団法人千葉県教育振興財団）に委託した。

酒々井南部地区の調査対象総面積は482,600㎡で、これは平成13年度の都市基盤整備公団・千葉県教育委員会及び（財）千葉県文化財センターの当初協定に基づくものである。そのうち飯積上台遺跡分の56,000㎡を引いた426,600㎡が飯積原山遺跡の総面積になる。

なお飯積上台遺跡については、当財団の平成13年度年報において飯積原山遺跡の一部としているが¹⁾、その後、飯積上台遺跡として調査されたため、前回の報告書でも飯積上台遺跡名で報告している²⁾。後述（第2節2）するが、地形や遺跡内容からも両者を区分する方がより妥当と思われる。

本遺跡の主な調査成果をあげると、旧石器時代遺物集中地点が22か所検出されたこと、縄文時代中期後半から後期初頭の集落跡や奈良・平安時代の集落跡が見つかったことである。

今回報告する内容は、飯積原山遺跡の平成22年度分までの発掘調査成果のうち、旧石器時代及び奈良・平安時代から中・近世までの分である。ただし平成23年2月～3月に確認調査が実施された対象規模10,230㎡分については、下層の本調査が平成23年度に行われたため、確認調査分も今回の報告対象から除外した。その分を除く調査年度ごとの発掘調査期間・担当者などは以下のとおりである。なお発掘調査面積については第1表にまとめた。縄文時代の調査成果については次回の報告を予定しているが、以下の期間・面積は縄文時代の調査に要した分を含んでいる。

平成6年度 調査期間 平成7年1月6日～平成7年3月31日

調査研究部長 西山太郎

印西調査事務所 所長 谷 旬

調査担当者 土屋潤一郎

平成7年度 調査期間 平成7年12月1日～平成8年3月27日

調査研究部長 西山太郎

印西調査事務所 所長 谷 旬

調査担当者 花島理典・佐藤 隆

平成8年度 調査期間 平成8年12月1日～平成9年3月27日

調査部長 西山太郎

北部調査事務所 所長 谷 旬

調査担当者 平野雅一・落合章雄
 平成9年度 調査期間 平成9年12月1日～平成10年3月27日
 調査部長 西山太郎
 東部調査事務所 所長 石田廣美
 調査担当者 石塚 浩・廣瀬和之
 平成10年度 調査期間 平成10年12月1日～平成11年3月26日
 調査部長 沼澤 豊
 東部調査事務所 所長 三浦和信
 調査担当者 石塚 浩
 平成11年度 調査期間 平成11年8月1日～平成11年12月24日
 調査部長 沼澤 豊
 東部調査事務所 所長 三浦和信
 調査担当者 石塚 浩
 平成12年度 調査期間 平成12年4月3日～平成13年3月30日
 調査部長 沼澤 豊
 東部調査事務所 所長 折原 繁
 調査担当者 遠藤治雄・加藤正信・大塚一美・豊田秀治・行川 永・矢野敬夫・
 鈴木弘幸・小笠原永隆
 平成13年度 調査期間 平成13年6月1日～平成14年3月29日
 調査部長 佐久間豊
 東部調査事務所 所長 折原 繁
 調査担当者 柴田龍司・香取正彦・大野康男・遠藤治雄・大塚一美・植草 均・大内千年
 平成19年度 調査期間 平成19年10月1日～平成19年10月26日
 (H1902) 調査研究部長 矢戸三男
 北部調査事務所 所長 豊田佳伸
 調査担当者 土屋潤一郎
 平成19年度 調査期間 平成19年10月29日～平成19年12月26日
 (H1903) 調査担当者 土屋潤一郎・小林信一
 平成19年度 調査期間 平成19年11月1日～平成19年12月7日
 (H1904) 調査担当者 小高幸弘・小林信一
 平成19年度 調査期間 平成19年12月6日～平成20年2月29日
 (H1905) 調査担当者 小高幸弘・小林信一
 平成19年度 調査期間 平成20年2月12日～平成20年3月28日
 (H1906) 調査担当者 小林信一
 平成19年度 調査期間 平成20年3月11日～平成20年3月27日
 (H1901) 調査担当者 島田裕之
 平成20年度 調査期間 平成20年4月4日～平成20年4月30日

第1表 発掘調査面積一覧

調査年度・ 調査次名称	規模(m ²)	確認(m ²)				本調査(m ²)		備考
		上層	対象	下層	対象	上層	下層	
H6 確認調査	43,000	4,300	43,000	1,396	43,000	—	—	
H7 確認調査	56,564	5,656	56,567	1,980	48,720	100	0	
H8 確認調査	47,352.1	5,135	47,352.1	1,545	36,660	—	—	
H9 確認調査	58,520	5,852	58,520	2,340	58,520	—	—	
H10 確認調査	43,700	4,370	43,700	1,748	43,700	—	—	本調査は塚1基
H11	11,000	—	—	200	5,100	11,000	0	
H12	40,381	—	—	512	12,800	39,969	860	
H13	31,400	1,694	16,942	904	22,682	18,100	688	
H19 H1902	1,778	200	1,778	64	1,778	484	0	
H19 H1903	3,270	337	3,270	132	3,270	3,040	0	
H19 H1904	6,280	710	6,280	290	6,280	0	0	
H19 H1905	6,966	—	—	—	—	6,966	—	
II19 II1906	5,500	—	—	60	1,500	5,500	—	
II19 II1901	1,259	130	1,259	12	544	0	0	
II20 II1906(2)	4,000	—	—	172	4,000	—	0	
H20 H2001	1,656	166	1,656	68	1,656	0	0	
H20 H2002	4,151	—	—	204	4,151	4,151	0	
H20 H2003	5,156	—	—	208	5,156	5,156	0	
H20 H2004	1,614	—	—	68	1,614	1,614	0	
H20 H2005	1,456	—	—	60	1,456	1,456	0	
H20 H2006	1,710	316	1,710	—	—	220	—	
H21 H2101	6,666	495	4,956	172	6,666	6,446	0	
H21 H2102	100	—	—	—	—	—	100	
H21 H2103	3,839	384	3,839	76	3,839	2,830	0	
H21 H2104	4,903	484	4,903	60	4,903	1,280	0	
H21 H2105	700	700	700	21	700	0	0	
H22 H2201	146	146	146	—	—	0	—	
H22 H2202	6,100	610	6,100	136	6,100	0	0	
調査面積 計		確認上層 31,685		確認下層 12,428		本調査上層 108,312	本調査下層 1,648	総計 154,073

(H1906 (2)) 調査研究部長 大原正義

北部調査事務所 所長 豊田佳伸

調査担当者 小林信一

平成20年度 調査期間 平成20年5月1日～平成20年5月23日

(H2001) 調査担当者 小林信一

平成20年度 調査期間 平成20年5月12日～平成20年7月31日

(H2002) 調査担当者 島田裕之

平成20年度 調査期間 平成20年7月22日～平成20年10月29日

(H2003) 調査担当者 宮 重行

平成20年度 調査期間 平成20年12月1日～平成21年1月15日

(H2004) 調査担当者 篠崎健一

平成20年度 調査期間 平成21年1月16日～平成21年3月26日

(H2005) 調査担当者 篠崎健一

平成20年度 調査期間 平成21年3月1日～平成21年3月26日

(H2006) 調査担当者 鈴木弘幸

平成21年度 調査期間 平成21年4月1日～平成21年8月10日

(H2101) 調査研究部長 及川淳一

	北部調査事務所	所長	野口行雄
	調査担当者	宮 重行・相京邦彦・内山 健・雨宮龍太郎	
平成21年度	調査期間	平成21年4月1日～平成21年5月8日	
(H2102)	調査担当者	猪鼻慎二	
平成21年度	調査期間	平成21年6月15日～平成21年9月14日	
(H2103)	調査担当者	宮 重行・雨宮龍太郎・内山 健	
平成21年度	調査期間	平成21年9月15日～平成21年11月6日	
(H2104)	調査担当者	雨宮龍太郎・内山 健	
平成21年度	調査期間	平成21年11月9日～平成21年11月13日	
(H2105)	調査担当者	内山 健	
平成22年度	調査期間	平成22年10月6日～平成22年10月19日	
(H2201)	調査研究部長	及川淳一	
	北部調査事務所	所長	野口行雄
	調査担当者	部 淳一	
平成22年度	調査期間	平成22年12月1日～平成22年12月27日	
(H2202)	調査担当者	池田大助	

各年度の面積についてまとめると、平成6年度から平成22年度 H2202調査までの対象面積は323,612㎡、同期間における調査完了面積は316,972㎡である（第2表①・②）。また同期間における延べの上層確認調査面積は31,685㎡、上層本調査面積は108,312㎡、下層確認調査面積は12,428㎡、下層本調査面積は1,648㎡、確認・本調査面積総計は154,073㎡（第1表）である。なお平成8年度調査の対象規模について正確には47,352.1㎡であるが、第1表を除く以下の記述では小数点以下を省略する。

ところで飯積原山遺跡の調査は平成6年度から平成10年度まで、多くの部分について確認調査を先行して実施し、その後平成11年度から順次本調査を実施している。そのため平成11年度以降の本調査における調査対象面積はそれ以前の確認調査対象面積に含まれている場合が大部分である。その重複分を除いて作成したものが第2表であり、①・②の数値はこれに基づいている。

ただし、本調査実施面積の全域が確認調査対象面積に含まれているわけではない。平成12年度本調査における仮1d区の一部（第2図のa）はそれ以前に手続き上の上層確認調査が未実施であるが、周囲の様相から上層の確認調査不要で本調査範囲とされた部分である。それと同様のものが第2図b部分である。

一方で確認調査は実施されたが、平成22年度 H2202調査までに本調査が実施されていない部分もある。それが第2図のcである。調査完了面積はそれまでの実対象面積からこのc部分を引いた面積である。

次に年度ごとの整理事業の概要を述べる。

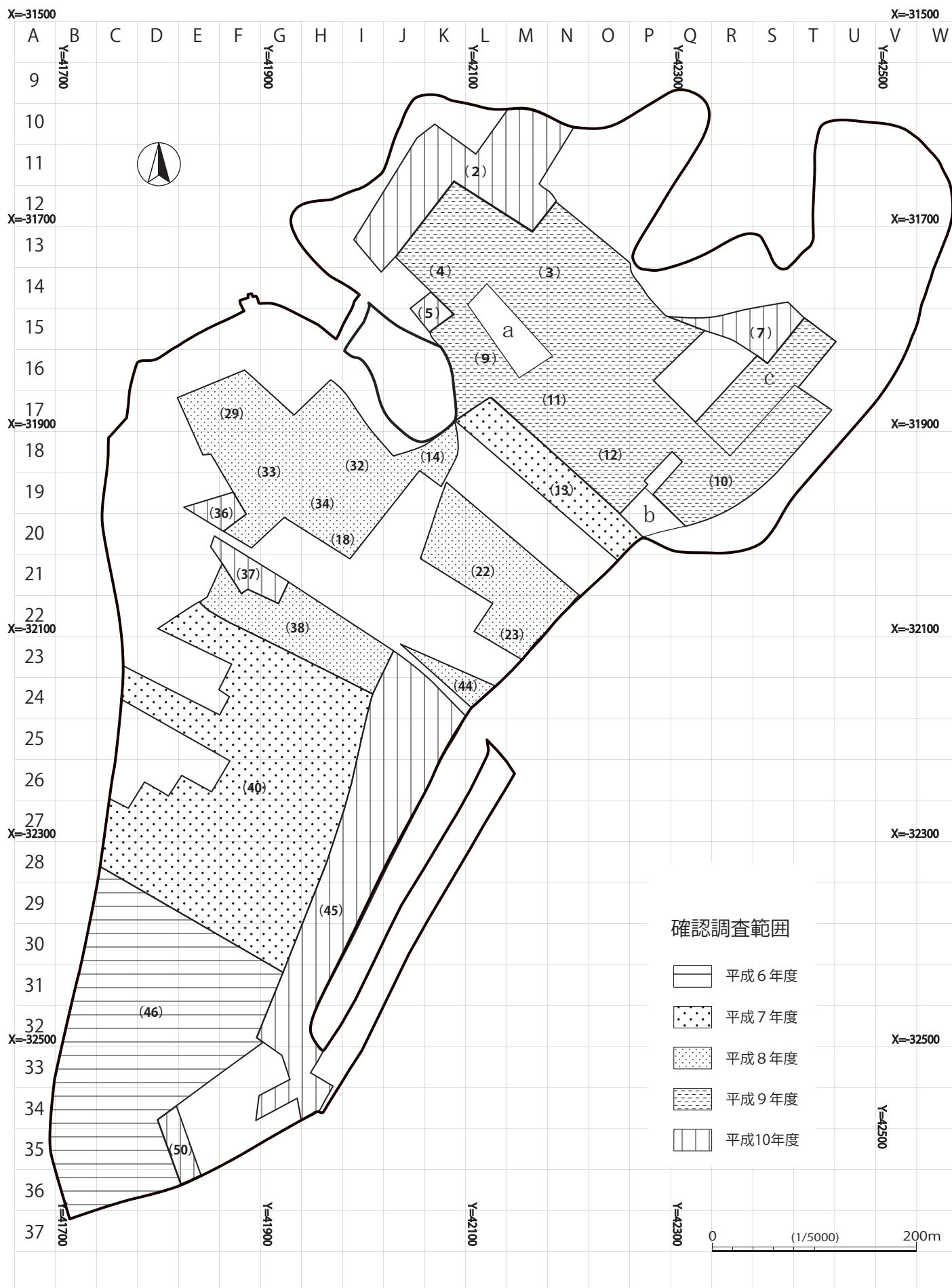
平成11年度	整理期間	平成11年1月1日～平成11年3月31日	
	整理内容	記録整理・水洗・注記・分類・接合・復元・実測の一部	
	調査部長	沼澤 豊	
	東部調査事務所	所長	三浦和信

第2表 上層調査対象面積一覧

調査年度	面積(m ²)	地区番号	備考・地区名称
平成6年度	43,000	46	
平成7年度	56,564	40	確認調査で終了
		13	平成12年度本調査 H12仮4区
平成8年度	47,352	29	提出書類は47,352.1 この表では小数点以下省略
		32	
		33	平成11年度本調査 H11B地点
		34を含む	34は平成12年度本調査 H12仮1b区
		14	平成12年度本調査 H12仮1c区
		22を含む	
		23を含む	
		38	
		44	
		18を含む	18は平成12年度本調査 H12仮1a区
平成9年度	58,520	3	
		4	平成11年度本調査 H11A地点
		9の一部を除く	9は平成12年度本調査 H12仮1d区
		10の一部を除く	10は平成12年度本調査 H12仮3区
		11	
		12	12は平成19年度本調査 H1905
平成10年度	43,700	2	
		5	H10 確認調査
		7	平成12年度本調査 H12仮2区
		36	
		37	平成11年度本調査 H11C地点
		45	
		50	
平成13年度	16,942	19	確認・本調査 H13C区
		21	確認・本調査 H13H区
		42	確認調査で終了 H13D区
		49	確認調査で終了 H13F区
平成19年度H1901	1,259	47	確認調査で終了 H1901
		48	確認調査で終了 H1901
平成19年度H1902	1,778	39	確認・本調査 H1902
平成19年度H1904	6,280	1	確認なし・本調査 H1904
平成19年度H1906	5,500	6	確認・本調査 H1906
平成20年度H2001	1,656	31	確認調査で終了 H2001
平成20年度H2002	4,151	8	確認調査なし・本調査 H2002
平成20年度H2003	5,156	16	確認調査なし・本調査 H2003
平成20年度H2004	1,614	15	確認調査なし・本調査 H2004
平成20年度H2005	1,456	17	確認調査なし・本調査 H2005
平成20年度H2006	1,710	27	確認・本調査 H2006
平成21年度H2101	6,666	26	確認・本調査 H2101
平成21年度H2103	3,839	30	確認・本調査 H2103
平成21年度H2104	4,903	28	確認・本調査 H2104A
		35	確認・本調査 H2104B
平成21年度H2105	700	41	確認調査で終了 H2105
平成22年度H2201	146	25	確認調査で終了 H2201
平成22年度H2202	6,100	43	確認調査で終了 H2202
平成12年度	2,770	9の一部	平成12年度本調査 H12仮1d区の一部 第2図a
平成12年度	1,850	10の一部	平成12年度本調査 H12仮3区の一部 第2図b
対象面積 計(①)	323,612		

上記総面積のうち本調査未了面積

平成9年度	6,640	9の一部	第2図c
調査完了面積(②)	316,972		対象面積合計値一本調査未了面積



第2図 平成6年度～10年度調査区全体図

- 整理担当者 石塚 浩・大椰一美
- 平成13年度 整理期間 平成13年9月1日～平成13年9月30日・平成14年1月1日～平成14年1月31日・平成14年3月1日～平成14年3月31日
- 整理内容 記録整理・水洗・注記の一部
- 調査部長 佐久間豊
- 東部調査事務所 所長 折原 繁
- 調査担当者 植草 均・大内千年
- 平成18年度 整理期間 平成19年1月1日～平成19年1月31日
- 整理内容 記録整理・水洗・注記・分類・接合・復元の一部
- 調査研究部長 矢戸三男
- 北部調査事務所 所長 古内 茂
- 整理担当者 土屋治雄・川島利道
- 平成22年度 調査研究部長 及川淳一
- 北部調査事務所 所長 野口行雄
- 整理期間 平成22年4月1日～平成23年3月31日までの1ヶ月間
- 整理内容 記録整理・水洗・注記・分類・接合・復元の一部
- 整理担当者 平井真紀子
- 平成23年度 調査研究部長 及川淳一
- 調査研究部副部長兼整理課長 西川博孝
- 整理期間 平成23年4月1日～平成24年3月31日までの2ヶ月間
- 整理内容 接合・復元の一部、実測・拓本・トレースの一部
- 整理担当者 上守秀明・木原高弘
- 平成24年度 調査研究部長 関口達彦
- 整理課長 高田 博
- 整理期間 平成24年4月1日～平成25年3月31日
- 整理内容 接合・復元、実測・拓本・トレース・写真撮影・挿図作成・図版作成・原稿執筆・編集の一部
- 整理担当者 木原高弘・平井真紀子・池田大助・糸川道行・新田浩三・西川博孝
- 平成25年度 調査研究部長 伊藤智樹
- 整理課長 今泉 潔
- 整理期間 平成25年4月1日～平成26年3月31日
- 整理内容 原稿執筆・編集の一部・校正・報告書印刷・刊行
- 整理担当者 新田浩三・平井真紀子

整理作業については飯積上台遺跡と合わせて実施したため、飯積原山遺跡のみの特定期間を抽出することができない。年度内における延べの期間である。また平成24年度の整理内容については、縄文時代分の作業内容を含んでいる。

注1 2003『千葉県文化財センター年報 No.27』(財)千葉県文化財センター

2 糸川道行ほか 2013『酒々井町飯積上台遺跡1 -酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書1-』(公財)千葉県教育振興財団

2 調査・整理の方法

酒々井南部地区の発掘調査は、飯積原山遺跡・飯積上台遺跡の全域を公共座標に基づく方眼網で覆って実施している。方眼は40m×40mの区画を大グリッドとし、起点から南へ1・2…、東へA・B…と振っている。その内部を100分割した4m×4mが小グリッドである。大グリッド内は北西隅の小グリッドを00とし、00を起点に東へ01・02…、南へ10・20…と振っており、南東隅が99である。小グリッド名は大グリッドと組み合わせて18L-35のように表記した。

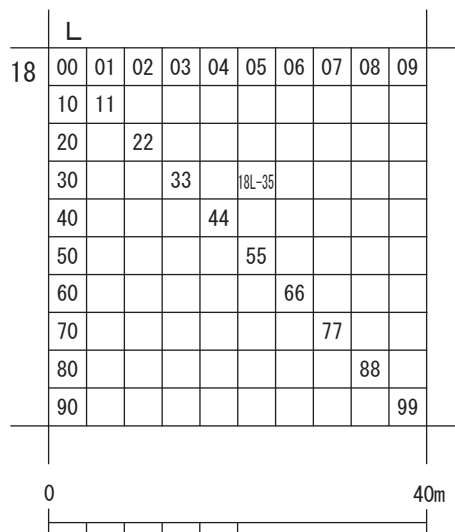
発掘調査はまず確認調査を行い、続いて本調査を実施するのが原則であるが、酒々井南部地区の場合、先述したとおり平成6年度から平成10年度までは広域な範囲を対象に確認調査のみを実施している。そして平成11年度以降は確認調査が終了した範囲の本調査を順次実施し、また平成10年度までに調査が実施されなかった範囲についての確認・本調査を実施している。

上層の確認調査は対象面積の10%を原則としてトレンチを設定し、遺構及び遺物の分布状況を調べた上で、本調査範囲を決定して本調査を実施した。遺構の調査は表土除去後、堆積土層観察用のベルトを設定して掘り下げ、土層断面図や平面図などの記録を作成した。確認調査及び本調査のための表土除去等については、重機を使用した。下層の確認調査は、対象面積の4%を原則にグリッドを設定して実施した。その結果、一定の石器の分布状況が認められたところについては、本調査範囲の確定後に本調査を実施して発掘を完了した。

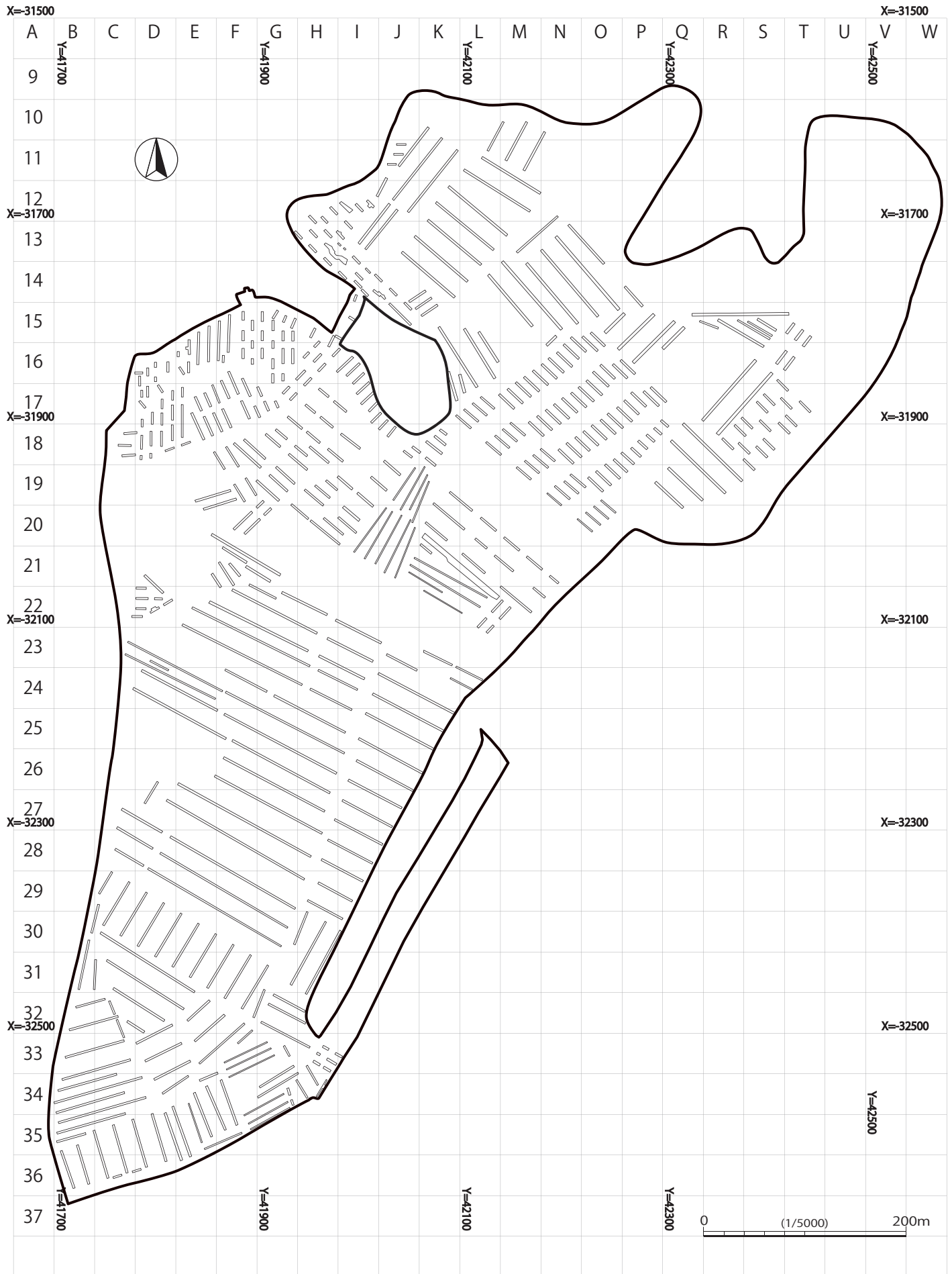
大グリッドの交点の一つである18L-00は、日本測地系座標でX=-31,900.0000、Y=42,100.0000である。JGD2000系変換値ではX=-31,544.7849、Y=41,806.2120、北緯35°42'53"、東経140°17'43"である¹⁾。

飯積原山遺跡の調査は、今回の報告分だけでも28次と多く実施されている。また同一の調査次でもH13B区、H13G区のように発掘区が分かれている場合があり、発掘区の様相はさらに複雑である。本報告ではより整った状態で報告するために、整理段階で各調査区について北から南への順で地区割りの通し番号を付与した。これは時系列ではなく、近接する空間順であるため、H1904調査区が(1)、H11A地点調査区が(4)というように、近い番号でも調査年次がかなり離れている場合がある。調査年度・調査区と地区割り番号の関係は第3表に記した。また地区割り番号を振った調査区全体図を第6図に示した。

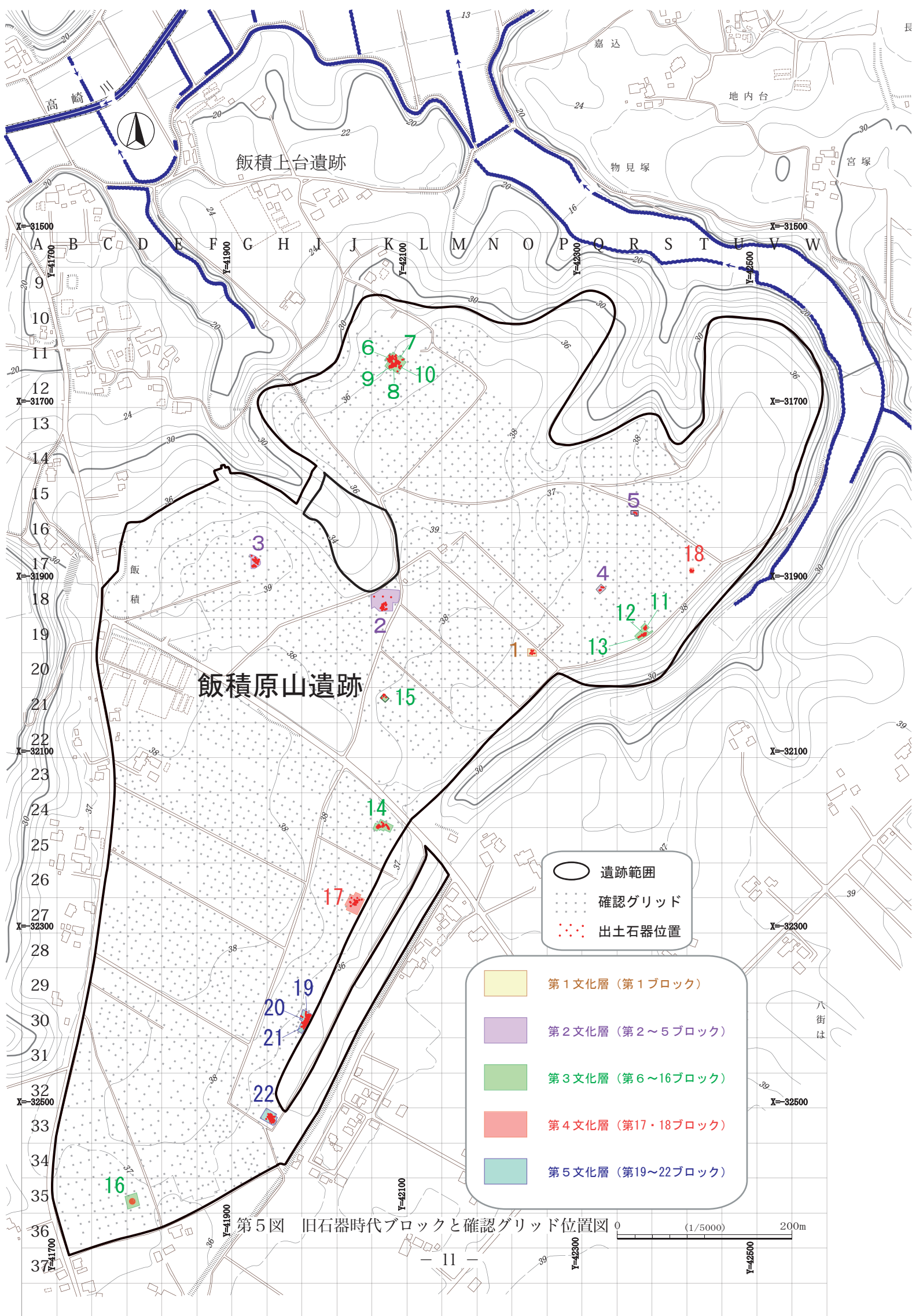
調査段階での遺構番号は、平成13年度までは遺構の種類に関わらず、数字のみの番号が付されている。数字番号は平成12年度までは3桁の通し番号であるが、(11)の平成13年度A地点調査では1001番から通し番号を付けている。また平成19年度以降の調査では、遺構種別を表すSI等の略号と3桁の数字を組み合わせてSI001のように呼称しているが、各調査次で001から付けたため、同一番号が重複している場合



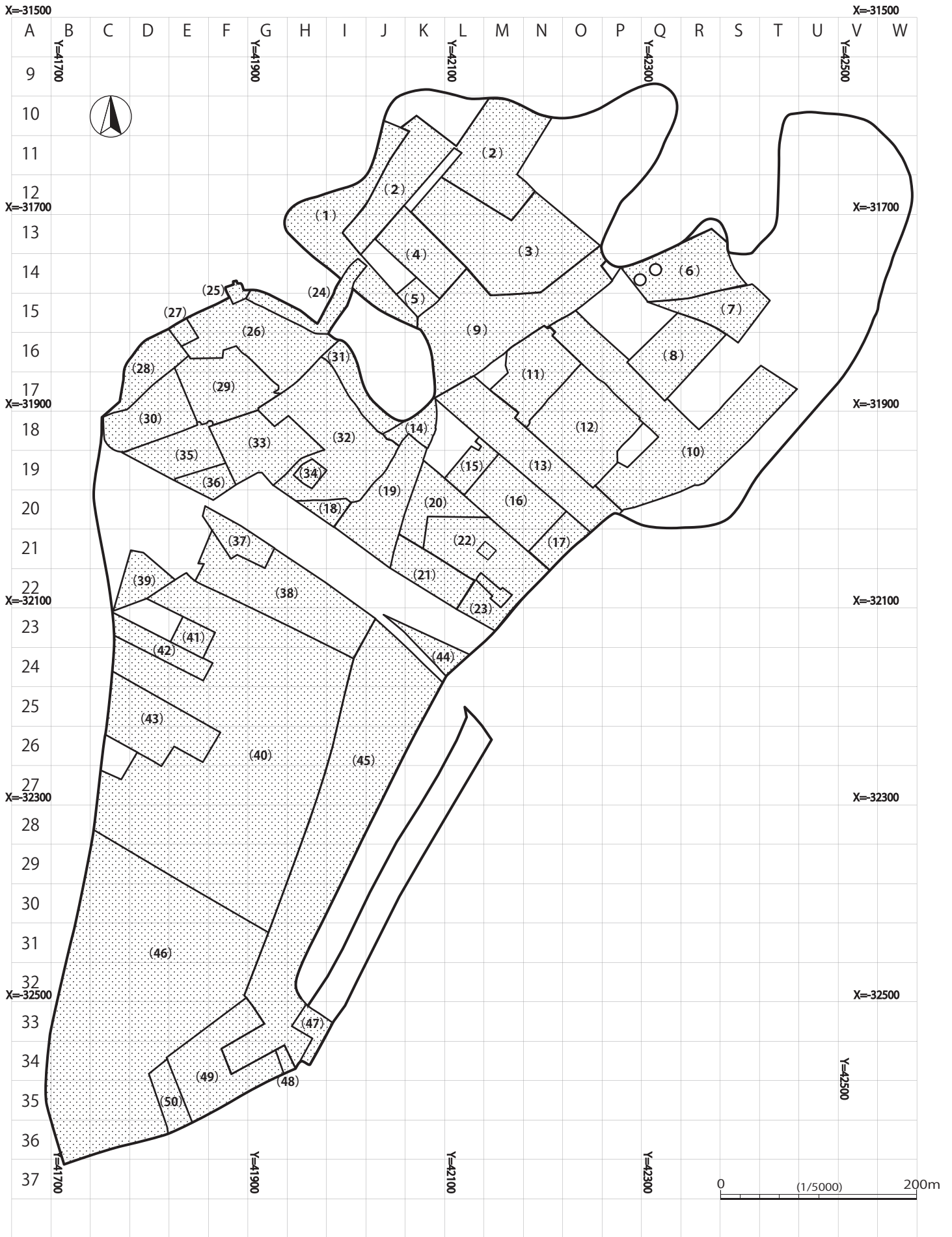
第3図 グリッド名称例



第4図 上層確認調査区全体図



第5図 旧石器時代ブロックと確認グリッド位置図



第6図 振り替え後の調査地区割り全体図

第3表 飯積原山遺跡地区割り一覧

No.	調査年度・調査区	No.	調査年度・調査区	No.	調査年度・調査区
1	H1904	18	H12仮1a区	35	H2104B
2	II10 確認調査	19	H13C区	36	III0 確認調査
3	II9 確認調査	20	H13B区	37	III1C地点
4	II1A地点	21	III3H区	38	H8 確認調査
5	H10 確認調査	22	H13B2区	39	H1902
6	H1906	23	H13B3区	40	H7 確認調査
7	H12仮2区	24	H2203	41	H2105
8	H2002	25	H2201	42	H13D区 確認調査のみ
9	II12仮1d区	26	H2101	43	H2202
10	II12仮3区	27	H2006・H2101	44	H8 確認調査
11	II13A区	28	H2104A	45	III0 確認調査
12	H1905	29	H13G区	46	II6 確認調査
13	II12仮4区	30	H2103	47	H1901
14	II12仮1c区	31	II2001	48	H1901
15	H2004	32	H8 確認調査	49	H13F区 確認調査のみ
16	H2003	33	H11B地点	50	H10 確認調査
17	H2005	34	H12仮1b区		

がある。その点と遺構番号の付け方に統一性がないことから、本報告では遺構番号を地区割り番号+略号+数字で表記することとした。一例を示すと、(9) SI157であり、これにより下3桁の数字が同じであっても一つだけのものとして、他と区別できる。なお下3桁または4桁の数字については調査時のものを踏襲しているが、これは遺物に記された遺構番号と本報告の遺構番号の対比が容易であることを考慮したためである。奈良・平安時代以降の遺構番号・遺構種別・遺構数量については第4表に記載した。

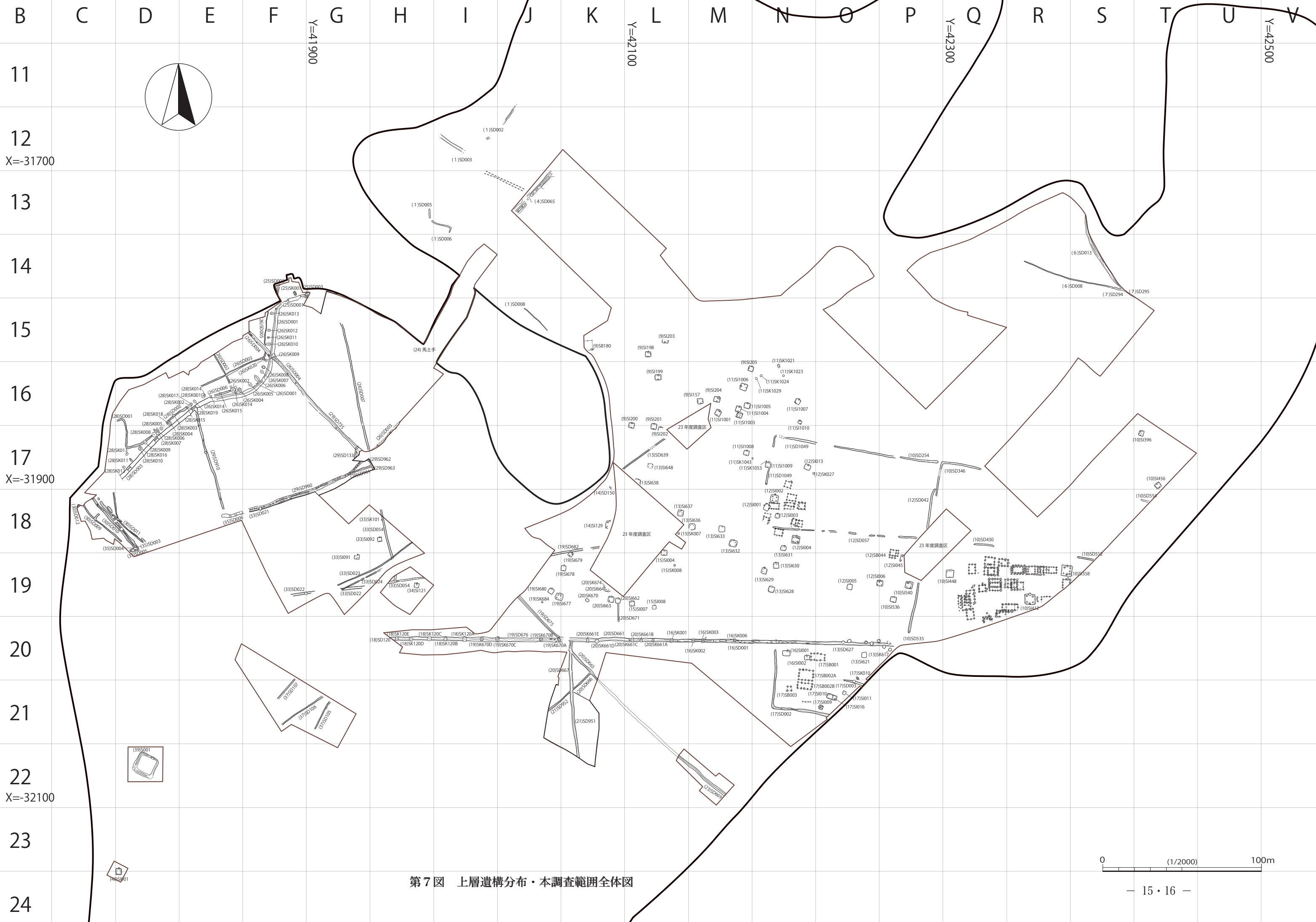
本書で報告する遺構の略号を記すと、竪穴住居がSI、掘立柱建物がSB、土坑がSK、溝状・道路状遺構がSD、塚がSMである。なお柱穴と思われる小規模な土坑についてはPとしている。中・近世の土坑のうち、列状をなしているものについては、シシ穴状遺構として報告した。また溝状・道路状遺構のうち調査次をまたぐものは、調査次ごとに異なる遺構番号が付いている。それらについて新たな遺構番号を付けていないが、本文の記述では一つの遺構としてまとめて記述している。

遺物の整理作業はまず水洗・注記を行った。注記は、遺跡コード、遺構番号、遺物台帳に記載された遺物番号を順に書き込んだ。遺構番号はすべて発掘調査時のままである。上層や下層の遺物包含層など、グリッド出土遺物については、上記の遺構番号がグリッド名に替わる。なお直接書き込むことが好ましくない遺物については、袋またはラベルに記入した。注記後、遺物を遺構ごとに種別分類し、接合作業等を実施した。その後、遺物出土状況図・遺物台帳に記載された位置と高さをもとに、接合関係等の遺物出土状況図を平面と断面で作成した。土器・土製品・石製品の実測は写真及び手計測による。鉄製品の実測については、X線写真撮影を実施した後に手計測を実施した。その後、遺物の拓本、遺構及び遺物等のトレース・挿図作成・写真図版作成、原稿執筆を行い、本報告書の刊行となった。

注1 変換値はWeb版TKY2JGD Ver.1.3.79 パラメータ Ver.2.1.1による。

第4表 飯積原山遺跡奈良・平安時代以降の遺構種別一覧

時代	遺構名	遺構番号	遺構数
奈良・平安時代	竪穴住居(SI)	(9)157, (9)198, (9)199, (9)200, (9)201, (9)202, (9)203, (9)204, (9)205, (10)358, (10)396, (10)412, (10)448, (10)456, (10)536, (10)540A, (10)540B, (11)1001, (11)1003, (11)1004, (11)1005, (11)1006, (11)1007, (11)1008, (11)1009, (11)1010, (12)001, (12)002, (12)003, (12)004, (12)005, (12)006, (12)013, (12)045, (13)621, (13)628, (13)629, (13)630, (13)631, (13)632, (13)633, (13)636, (13)637, (13)638, (13)648, (14)129, (15)004, (15)007, (15)008, (16)001, (16)002, (17)009, (17)010, (17)011, (17)016, (19)677, (19)678, (19)679, (19)680, (20)662, (20)663, (20)664, (33)091, (33)092, (34)121, (40)001	66
	掘立柱建物(SB)	(9)180, (10)411, (10)413, (10)418, (10)419, (10)420, (10)421, (10)422, (10)432, (10)434, (10)436, (10)437, (10)440, (10)441, (10)445, (10)446, (10)449, (10)503, (10)504, (10)508, (10)509, (10)513, (10)514, (10)515, (10)516, (10)517, (10)518, (12)016, (12)017, (12)018, (12)019, (12)020, (12)021, (12)022, (12)023, (12)044, (12)067, (12)072, (17)001, (17)002A, (17)002B(2005), (17)003	42
	土坑(SK)	(11)1023, (11)1024, (11)1029, (11)1043, (11)1050, (11)1053, (12)027, (13)617, (15)007, (15)008, (17)010, (19)684, (20)670, (20)674	20
	ピット(P)	(12)079, (12)080, (12)081, (12)082, (12)083, (12)084, (12)085	
中近世そのほか	溝状・道路状遺構(SD) (奈良・平安時代のものを含む) 野馬土手	(29)910, (28)001, (28)002, (28)003, (28)野馬堀1~3, (26)001, (26)002, (26)003, (26)004, (29)735, (26)005, (26)006, (26)007, (25)001, (25)002, (24)馬土手, (35)006, (33)021, (29)960, (29)933, (29)961, (29)962, (29)963, (26)008, (30)010, (35)003, (30)010, (35)004, (35)005, (30)009, (30)011, (30)012, (37)105, (37)106, (37)107, (33)022, (33)023, (33)024, (33)054, (4)065(1)002, (1)003, (1)005, (1)006, (1)008, (7)294, (6)008, (6)013, (7)295, (18)120, (19)676, (20)661, (16)001, (13)627, (19)675, (19)682, (20)671, (20)665, (20)666, (21)952, (20)667, (21)951, (17)002, (17)003, (23)669, (13)639, (11)1049, (12)038, (10)254, (12)057(1905), (12)042(1905), (10)535, (10)346, (8)033, (10)430, (10)512, (10)554	60
	シン穴状遺構・土坑(SK)	(11)1021, (16)001, (16)002, (16)003, (16)006, (18)120A, (18)120B, (18)120C, (18)120D, (18)120E, (19)676A, (19)676B, (19)676C, (19)676D, (20)661A, (20)661B, (20)661C, (20)661D, (20)661E, (25)001, (26)002, (26)004, (26)005, (26)006, (26)007, (26)008, (26)009, (26)010, (26)011, (26)012, (26)013, (26)014, (26)015, (26)016, (26)020, (28)001, (28)002, (28)003, (28)004, (28)005, (28)006, (28)007, (28)008, (28)009, (28)010, (28)011, (28)012, (28)013, (28)014, (28)015, (28)016, (28)017, (28)018, (28)019, (33)101	54
	塚(SM)	(39)001, (50)003	2
	その他	(40)SD002からの馬骨出土	
	欠番	(10)SB450 ((10)SB449と同一遺構のため)	



B
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24

C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V

Y=41900
Y=42100
Y=42300
Y=42500

X=-31700
X=-31900
X=-32100

第7図 上層遺構分布・本調査範囲全体図

0 (1/2000) 100m

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地形

飯積原山遺跡が所在する酒々井町は千葉県北部中央に位置する。千葉県北部には主な河川・湖沼の一つとして印旛沼が存在するが、酒々井町は印旛沼の南東方にあたる地域である。地形は、北総台地や下総台地などと呼ばれる比較的平坦な台地と、印旛沼及び中小の河川やそれらに面する低地から構成される。低地は台地に入り込み、支谷及び台地が樹枝状の平面形となる部分も多い。

飯積原山遺跡は、北に高崎川を望む標高36m～39mの台地上に立地する。台地上は若干の高低差があるが、概ね標高37m～38mの平坦地が広がっている。高崎川は富里市立沢や高野付近を源流として東から西に向かって流れ、佐倉市城内町、現在の国立歴史民俗博物館が存在する付近で鹿島川に合流する。鹿島川は北西に流れて印旛沼に注ぐ。

飯積原山遺跡の所在する台地の南方には、高崎川の支流である南部川とその低地、またその支谷が存在する。酒々井町付近の台地は印旛沼側の低地、高崎川本谷、南部川本谷により概ね南北に二分されている。各々の台地を巨視的にみると東西に長い。飯積原山遺跡は南北に二分された台地南側である高崎川本谷と南部川本谷に挟まれた台地上に立地する。

飯積原山遺跡の北方には、飯積上台遺跡が存在する。飯積上台遺跡は高崎川本谷に向かって若干突き出たところに位置する。飯積原山遺跡とは谷部を介さない地形であるが、標高が22m～24mであり、飯積原山遺跡より10m以上低い。この点で飯積原山遺跡と飯積上台遺跡は土地利用上の分離のされ方が、谷部を介する遺跡どうしほどではないが、若干高いと思われる。

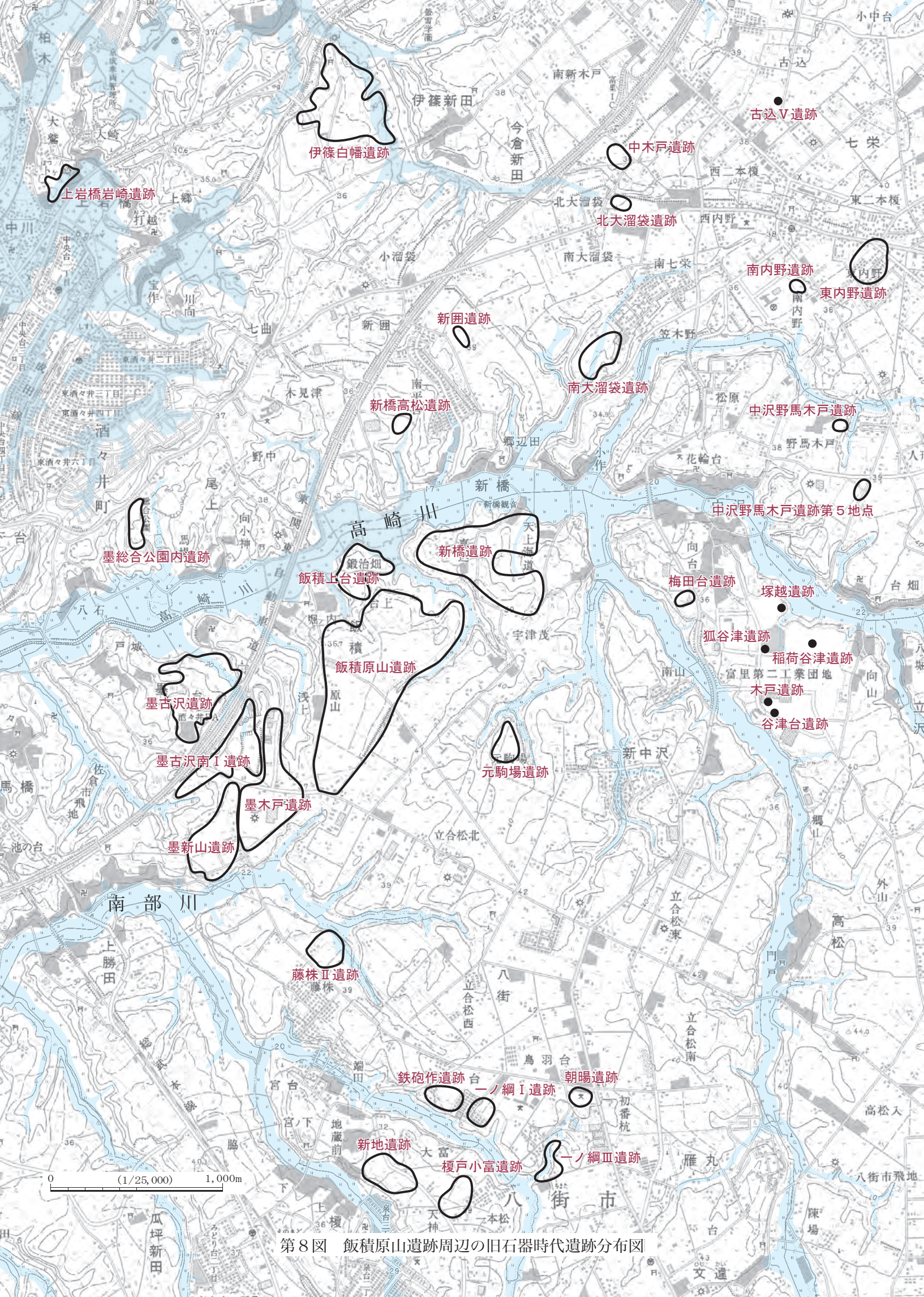
飯積原山遺跡・飯積上台遺跡が所在する台地は北方の高崎川本谷から南方に支谷が延びており、両遺跡が所在する台地北側は比較的独立性が高い地形である。また飯積上台遺跡が立地する部分の西方は高崎川本谷から短い支谷が入り込んでおり、飯積上台遺跡の地形的な独立性をより高めている。

飯積原山遺跡の遺構分布は北側で密度が高いが、高崎川の低地に面していることが理由の一つとして考えられる。なかでも奈良・平安時代の集落は、東方の逆「く」の字状に深く入り込んだ支谷と飯積上台遺跡西方の支谷にはさまれた空間を主体に広く展開している。それに比べて南側は遺構分布が希薄である。飯積原山遺跡南方は西から南部川による谷が延びているが、遺跡の南部東側は広大な台地中央部にあたり、利水のうえで不便であったことが希薄な遺構分布の要因の一つと思われる。

2 周辺の遺跡

飯積原山遺跡の調査対象範囲内には、『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区（改訂版）』¹⁾で示された飯積藤株遺跡・飯積宮田台遺跡・飯積台畑遺跡の3遺跡が含まれている。また飯積藤株遺跡の北方には飯積上台遺跡が所在するが、酒々井南部地区の事業範囲はこれら4遺跡の範囲と飯積宮田台遺跡・飯積台畑遺跡の南方部分を含むものである。このうち飯積上台遺跡を除く3遺跡周辺は遺跡を分ける地形上の差異がみられないため、本書ではそれら3遺跡周辺を飯積原山遺跡という一つの遺跡名で報告する。

それに対し、飯積上台遺跡の所在地については、前項で飯積原山遺跡よりも10m以上低く、地形的な差異があることを述べた。遺跡の内容も、飯積上台遺跡には古墳及び古墳時代の集落が存在するのに対して、飯積原山遺跡にはそれらがまったくみられない。飯積原山遺跡は飯積上台遺跡と近接して位置するが、地形・遺跡内容の両面から両者を区分するのがより妥当と考えられる。



第8図 飯積原山遺跡周辺の旧石器時代遺跡分布図

伊篠白幡遺跡

中木戸遺跡

古込V遺跡

上岩橋岩崎遺跡

北大溜袋遺跡

南内野遺跡

東内野遺跡

新圃遺跡

南大溜袋遺跡

中沢野馬木戸遺跡

新橋高松遺跡

中沢野馬木戸遺跡第5地点

新橋遺跡

梅田台遺跡

墨総合公園内遺跡

飯積上台遺跡

塚越遺跡

狐谷津遺跡

稻荷谷津遺跡

墨古沢遺跡

飯積原山遺跡

木戸遺跡

谷津台遺跡

墨古沢南I遺跡

墨木戸遺跡

元駒場遺跡

墨新山遺跡

藤株II遺跡

鉄砲作遺跡

朝暘遺跡

一ノ綱I遺跡

新地遺跡

榎戸小富遺跡

一ノ綱III遺跡

0 (1/25,000) 1,000m

前回の報告書（飯積上台遺跡1）²⁾では旧石器時代に関する周辺遺跡の記述を省略したため今回は旧石器時代の遺跡に絞って概観したい。

周辺の旧石器時代の遺跡群は、高崎川中・上流域の南方で、高崎川本谷と南部川本谷に挟まれた地域【地域A】、高崎川上流域南方【地域B】、高崎川上流域北方【地域C】、高崎川中・上流域北方【地域D】、南部側上流域【地域E】の5つの地域に分けることができ、地域ごとの遺跡は下記のとおりである。

地域A：飯積原山遺跡・飯積上台遺跡・墨古沢南I遺跡³⁾・墨古沢遺跡⁴⁾・墨木戸遺跡⁵⁾・墨新山遺跡⁶⁾・
新橋遺跡⁷⁾

地域B：梅田台遺跡⁸⁾・塚越遺跡⁹⁾・稲荷谷津遺跡⁹⁾・狐谷津遺跡⁹⁾・谷津台遺跡⁹⁾・木戸遺跡⁹⁾・元
駒場遺跡¹⁰⁾

地域C：南大溜袋遺跡^{11)・20)}・北大溜袋遺跡¹²⁾・中木戸遺跡¹³⁾・南内野遺跡¹⁴⁾・東内野遺跡¹⁵⁾・中沢野馬
木戸遺跡¹⁶⁾・中沢野馬木戸遺跡第5地点¹⁶⁾・古込V遺跡^{17)・20)}

地域D：新橋高松遺跡²¹⁾・新圃遺跡²⁰⁾・墨総合公園内遺跡²²⁾・上岩橋岩崎遺跡²³⁾・伊篠白幡遺跡²⁴⁾

地域E：藤株II遺跡²⁰⁾・鉄砲作遺跡²⁶⁾・一ノ綱I遺跡²⁶⁾・一ノ綱III遺跡²⁷⁾・朝陽遺跡²⁸⁾・新地遺跡²⁹⁾・
榎戸小富遺跡^{30)・20)}

地域ごとの主な旧石器時代遺跡の概要は下記のとおりである。

地域Aは、飯積原山遺跡が所在し、大規模な遺跡が形成されている地域である。墨古沢南I遺跡第1文化層（IX a層下部）は、直径約60m×54mの大規模な環状ブロック群が出土しており、石器総数3,946点で、多数の台形様石器とナイフ形石器が出土した。飯積上台遺跡は、2枚の文化層が検出された。第1文化層（VII層中部）は玉髓を主体としてナイフ形石器が3点出土している。墨新山遺跡は、III層～IV層にかけて計7ブロック、総数約500点の石器が検出されている。

地域Bは、小規模な遺跡が点在する地域である。梅田台遺跡は、X層から玉髓を用いたブロックが1か所検出されている。

地域Cは、濃密な遺跡分布を示す地域である。東内野遺跡は、5枚の文化層が検出された。東内野型尖頭器が含まれる第2文化層は、石器9,004点、礫10,445点以上出土している。南大溜袋遺跡は、旧石器時代末の本ノ木型尖頭器を主体とする石器群が検出されている。古込V遺跡は、X層～IX層下部から石器総数約1,500点、3か所のブロックが検出された。大量に搬入された黒曜石を用いた大型の石刃が多数作出され、台形様石器とナイフ形石器が多数出土している。

地域Dは、遺跡数が少なく、単独出土の遺跡で石器群の内容が明確ではない。そのなかで、上岩橋岩崎遺跡からはVII層段階と考えられる珪質頁岩製のナイフ形石器が出土している。

地域Eは、比較的遺跡密度の濃い地域である。朝陽遺跡は、採集資料であるが、III層から東内野型尖頭器がまとまって検出された。榎戸小富遺跡は、IV層下部段階の第1地点から、切出形を呈するナイフ形石器が2点検出され、VII層段階の第2地点から、下総型石刃再生技法による良好な珪質頁岩製の小型石刃が出土している。一ノ綱I遺跡は、III層から黒曜石製の搔器や尖頭器が出土している。

注1 渡邊智信ほか 1997『千葉県埋蔵文化財分布地図（I）－東葛飾・印旛地区（改訂版）－』千葉県教育委員会

2 新田浩三ほか 2013『酒々井町飯積上台遺跡1－酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書1－』（公財）千葉県教育振興財団

- 3 新田浩三 2005『東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書1 ー酒々井町墨古沢南I遺跡ー旧石器時代編』(財)千葉県文化財センター
- 4 横山 仁ほか 2007『東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書4 ー酒々井町墨古沢遺跡ー』(財)千葉県教育振興財団
- 5 中山俊之 1995『墨木戸』(財)印旛郡市文化財センター
- 6 小谷龍司ほか 1997『墨新山遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- 7 篠原正ほか 1978『新橋遺跡発掘調査報告書』富里村村史編纂委員会
- 8 塚田清啓 2012『梅田台遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- 9 小谷龍司ほか 1998『稲荷谷津遺跡・狐谷津遺跡・木戸遺跡・郷山遺跡・塚越遺跡・谷津台遺跡 ー富里町富里第二工業団地土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書ー』(財)印旛郡市文化財センター
- 10 八街町史研究会 1987『写真で見る八街の歴史』八街町教育委員会
- 11 戸田哲也 1973「千葉県南大溜袋遺跡の調査」『考古学ジャーナル』No.78 ニュー・サイエンス社
田村 隆・橋本勝雄 1984「南大溜袋遺跡」『房総考古学ライブラリー1 先土器時代』(財)千葉県文化財センター
戸田哲也 2000「南大溜袋遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)』千葉県
- 12 篠原 正ほか 1980『北大溜袋遺跡発掘調査報告』北大溜袋遺跡発掘調査会
- 13 雨宮龍太郎ほか 1988『国道409号道路改良事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書 中木戸遺跡 西二本榎遺跡西内野遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 14 鳴田浩司 1985『富里町南内野遺跡 ー県立富里地区(仮称)高等学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告書ー』(財)千葉県文化財センター
- 15 篠原 正ほか 1977『東内野遺跡第2次発掘調査概報』東内野遺跡発掘調査団
宇田川浩一 2000「東内野遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)』千葉県
岡本東三ほか 2003『富里市東内野遺跡旧石器時代石器資料調査報告書』(財)千葉県史料研究財団
- 16 宮 文子 1999『中沢野馬木戸遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
松田富美子 2005『中沢野馬木戸遺跡(第5地点) 天神谷津遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- 17 篠原 正 2002「富里市古込V遺跡ーオープンサイトの旧石器ー」『第6回 遺跡発表会 発表要旨』(財)印旛郡市文化財センター
- 18 篠原 正ほか 1977『獅子穴VI遺跡発掘調査報告』獅子穴VI遺跡発掘調査団
- 19 新田浩三・吉林昌寿 1994『獅子穴IX遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- 20 酒井弘志・宇井義典 2004『印旛の原始・古代ー旧石器時代編ー』(財)印旛郡市文化財センター
- 21 林田利之 1997『新橋高松遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- 22 高野博光ほか 1980『酒々井町総合公園遺跡発掘調査報告書』酒々井町教育委員会
- 23 高花宏行 1996『上岩橋岩崎遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- 24 田島 新ほか 1986『酒々井町伊篠白幡遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 25 小倉和重 2001『上本佐倉上宿遺跡(第4次)』(財)印旛郡市文化財センター
- 26 渋谷芳則 1993『一ノ綱I・鉄砲作遺跡発掘調査報告書』(財)印旛郡市文化財センター
- 27 中山俊之 1995「一ノ綱III遺跡」『一ノ綱II遺跡 一ノ綱III遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- 28 田村 隆・橋本勝雄 1984「朝陽遺跡」『房総考古学ライブラリー1 先土器時代』(財)千葉県文化財センター
- 29 松田富美子ほか 2003『不特定遺跡発掘調査報告書 新地遺跡第2地点・第3地点 藤株IV遺跡第1・第2地点 ナガラミ遺跡』八街市
- 30 酒井弘志 2000『榎戸小富遺跡』(財)印旛郡市文化財センター

第2章 旧石器時代

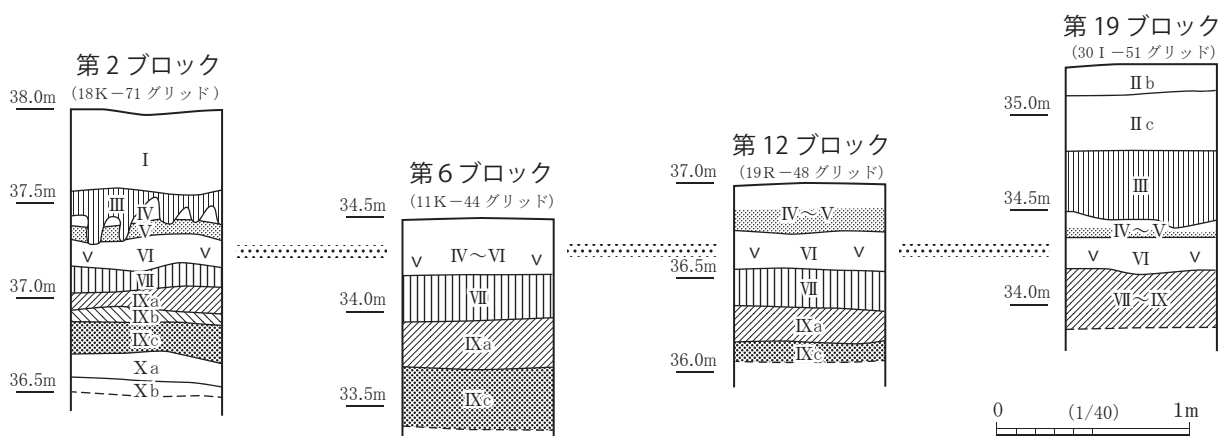
第1節 遺跡の概要 (第5図、第5・6表)

旧石器時代の確認調査範囲と文化層別ブロック位置図は第5図のとおりである。文化層は第1文化層～第5文化層の5枚の文化層が検出された。文化層・ブロック別の器種組成・石材組成は、第5・6表のとおりである。石器総数1,307点で、22か所のブロックが検出された。

第2節 基本層序 (第9図)

飯積原山遺跡の基本層序は第9図のとおりである。

- I 層 黑色の表土 II a層 黒褐色土 II b層 明褐色土 II c層 暗褐色土
- III 層 明黄褐色ローム土 立川ローム最上層に相当する。いわゆる「ソフトローム層」である。下部に向かってソフト化が進行している。赤色スコリアを少量含む。
- IV 層 明褐色ローム土 硬質のローム層でいわゆる「ハードローム層」である。2mm～3mm大の赤色スコリアを多く含み、全体に赤みを帯びて明色である。
- V 層 黄褐色ローム土 第1黒色帯に相当する。IV層に比べて赤色スコリアの量が少なく、全体に黒ずんでいる。IV層とV層とを明確に区分できる地点は少なかった。
- VI 層 明黄褐色ローム土 AT (始良丹沢火山灰) がブロック状に含まれる。
- VII 層 褐色ローム土 第2黒色帯上部に相当する。全体に黒ずんでいる。赤色スコリアを多く含む。
- IX a層 暗褐色ローム土 第2黒色帯下部の上半である。IX層を細分できた地点もあるが、細分できなかった地点も多い。VII層よりも黒ずんでいる。大粒の赤色スコリアが多く含まれる。
- IX b層 暗褐色ローム土 第2黒色帯下部の間層である。ほとんどの地点で、この層は見られなかった。
- IX c層 暗黄褐色ローム土 第2黒色帯下部の下半である。大粒の赤色スコリアが微量含まれる。
- X a層 暗黄褐色ローム土 スコリア粒がほとんど含まれない。X層を細分できる地点は少なかった。
- X b層 黄褐色ローム土 X a層に比べて暗色である。スコリア粒がほとんど含まれない。粘性が強い。立川ローム最下部層と捉えられるが、武蔵野ロームとの境界を識別するのが困難であった。
- XI 層 灰褐色ローム土 武蔵野ローム最上層である。粘性を帯びた灰褐色ロームである。



第9図 基本層序

第5表 文化層ブロック別器種組成表

文 化 層	ブ ロ ッ ク	尖 頭 器	ナイ フ 形 石 器	台 形 石 器	彫 刻 器	釜 形 石 器	二次 加工 のある 剥 片	微 細 剥 離 痕 のある 剥 片	石 刃	削 片	細 石 刃	細 石 核	細 石 対 石 核 原 型	剥 片	砕 片	石 核	局 部 限 製 石 斧	鏃 器	鼓 石	台 石	碟 片	点 数 合 計	点 数 効 率 (%)	重 量 合 計 (g)	重 量 効 率 (%)	
1	1	4											4									8	0.81	34.97	0.52	
第1文化層点数合計		4											4									8	0.61	34.97	0.52	
2	2a	1	1				2	1						31	2	1		1	1			41	3.14	534.77	7.93	
	2b					1	1							24	6		1		1			34	2.60	371.04	5.50	
	2c							1						5	1						1	8	0.61	31.33	0.51	
	2d	2												1								3	0.23	14.63	0.22	
第2文化層点数合計		3	1			1	3	2						61	9	1	1	1	2		1	86	6.58	954.77	14.17	
3	3a	1				1	7	4						68		7						88	6.73	422.71	6.77	
	7				3		4	6						40	5	1						59	4.51	159.07	2.36	
	8		3			4	4	16						64	11	6						108	8.26	307.55	4.56	
	9	3				1		4						15	2	1						27	2.07	81.78	1.36	
	10							2						5		1						9	0.59	88.98	1.04	
3a点数合計		4	3		4	1	5	16	32					192	18	16						291	22.26	1050.87	15.59	
	3b				1		1	1	2					7	1	1						14	1.07	153.33	2.27	
	12						1	1		2				25	6							35	2.68	57.95	0.86	
	13				1									6						1		8	0.61	158.90	23.20	
3b点数合計					1	1	1	2	3	2				38	7	1				1		57	4.36	1775.18	26.34	
	3c						2							39	3	1						45	3.44	325.05	4.82	
	3d	1						1						4	1							7	0.54	31.49	0.67	
	3e					1	1							42	9	1			1		1	56	4.28	503.14	7.46	
	单独						1							3							1	5	0.38	63.31	0.94	
第3文化層点数合計		5	3	1	5	1	7	20	38	2				318	38	19			1		2	467	35.27	3749.07	55.82	
4	4a	2												23	3	3						31	2.37	126.41	1.91	
	4b					1		2						9	2	2						16	1.22	173.90	1.84	
	单独						1							1								2	0.15	52.21	0.77	
第4文化層点数合計		2				1		3						33	5	5						49	3.75	304.60	4.52	
5	5a							3		6	7	1	14	9	1				1		1	43	3.29	291.19	4.32	
	20					1	4	4		155	6	1	134	73				1			5	384	29.36	677.10	10.05	
	21				1		4	1		28	3	1	33	14							1	86	6.59	74.30	1.10	
5a点数合計					1	1	8	8		189	16	3	181	96	1			1	1		7	513	39.75	1047.59	15.47	
	5b				3		7	9	4		26	5		91	18	1			3		2	169	12.93	387.14	5.74	
	单独									1												1	0.08	0.08	0.01	
第5文化層点数合計					4	1	7	17	12		216	21	3	272	114	2		1	4		9	683	52.26	1428.81	21.21	
单独出土点合計		3	1			1	2	1	1					9	1	1						20	1.53	767.06	3.95	
総計点数		3	15	4	1	9	4	15	45	53	1	2	216	21	3	697	167	28	1	2	7	1,307	100.00	6740.28	100.00	
点数組成比(%)		0.23	1.15	0.31	0.08	0.69	0.31	1.15	3.44	4.06	0.08	0.15	16.53	1.61	0.23	53.33	12.78	2.14	0.08	0.15	0.54	0.08	100.00			

第6表 文化層ブロック別石材組成表

文 化 層	ブ ロ ッ ク	ガ ラ ス 質 黒 色 安 山 岩	ト ロ ト ロ 石	安 山 岩	流 紋 岩	黒 曜 石	緑 色 凝 灰 岩	砂 岩	頁 岩	珪 質 頁 岩	粘 土 質 頁 岩	硬 質 頁 岩	粘 板 岩	ホ ル ン フ ェ ル ス	チ ャ ー ト	玉 髓	点 数 合 計	点 数 比 (%)	重 量 合 計 (g)	重 量 比 (%)
1	1	3	1	1					2						1	8	0.61	34.97	0.52	
第1文化層点数合計		3	1	1					2						1	8	0.61	34.97	0.52	
2	2a	2	22					1	8	1	1		8			41	3.14	534.77	7.93	
	2b	3	15		3		1	3		6			3	3		34	2.60	371.04	5.60	
	2c	4	1	1	1				4					1		8	0.61	34.33	0.51	
	2d	5		2						1						3	0.23	14.63	0.22	
第2文化層点数合計		38	3		4		1	4	12	8	1		11	4		86	6.58	954.77	14.17	
3	3a	6	2		1	35		5	14		1		1	14	15	88	6.73	422.71	6.27	
		7			2	52			1					3	1	58	4.51	159.07	2.36	
		8				85				6				12	5	108	8.26	307.35	4.56	
		9				21								2	4	27	2.07	91.78	1.36	
		10				6								1	2	9	0.69	69.96	1.04	
	3a点数合計		2			3	199		5	21		1		1	32	27	281	22.26	1050.87	15.59
	3b	11	1			4		2				6				1	14	1.07	153.33	2.27
		12										34				1	35	2.68	57.95	0.86
		13						2	2		1	2			1	8	0.61	1563.90	23.20	
	3b点数合計		1			4		4	2		1	42				3	57	4.36	1775.18	26.34
3c	14			1				1	29	10				4	45	3.44	325.08	4.82		
3d	15	5							1	1					7	0.54	31.49	0.47		
3e	16	28	4		3		2		11				2	6	56	4.28	503.14	7.46		
単 独		2					1			1	1					5	0.38	63.31	0.94	
第3文化層点数合計		38	4		4	206		12	3	62	13	44		3	38	34	461	35.27	3749.07	55.62
4	4a	17	1						16					2	12	31	2.37	126.41	1.91	
	4b	18	16													16	1.22	123.98	1.84	
	単 独									2							2	0.15	52.21	0.77
第4文化層点数合計		17							18					2	12	49	3.75	304.60	4.52	
5	5a	19				38		2	1	1				1		43	3.29	291.19	4.32	
		20	7	1		335	4	16		13		1	7			384	29.38	677.0	10.05	
		21				81		1			1		2		1	86	6.58	74.30	1.10	
	5a点数合計		7	1			454	4	19	1	14	1		3	7	2	513	39.25	1042.59	15.47
5b	22	38	2		4		2	4	70			6	32	11	169	12.93	387.14	5.74		
単 独																1	0.08	0.08	0.01	
第5文化層点数合計		45	3			459	4	21	5	84	1	3	13	34	11	683	52.26	1429.81	21.21	
単独出土点数合計		5		1		5						4	1	1	2	1	20	1.53	267.06	3.96
総 計 点 数		146	11	1	9	670	5	37	8	178	22	49	4	28	80	59	1307	100.00	6740.28	100.00
点 数 組 成 比 (%)		11.17	0.84	0.08	0.69	51.26	0.38	2.83	0.61	13.62	1.68	3.75	0.31	2.14	6.12	4.51	100.00			

第3節 第1文化層

1. 概要

第1文化層の石器群は、総計8点出土し、第1ブロックの1か所識別できた。調査区中央部東側の標高38m（現地表面）に分布する。X層上部～IXc層下部に生活面をもつ石器群と推定される。

2. 第1ブロック（第10・11図、第7表、図版4・48）

出土状況 調査区中央部東の190-95・96、200-05・06グリッドに分布している。4.5m×5.2mの範囲から8点の石器が出土した。ナイフ形石器は南東側、剥片は北西側に分布する傾向が見られる。出土層位は、X層上部からIXc層上部にかけてで、X層上部～IXc層下部に集中する。

出土遺物 器種組成は、ナイフ形石器4点、剥片4点である。石材組成は、ガラス質黒色安山岩3点、珪質頁岩2点、トロトロ石1点、流紋岩1点、玉髓1点である。

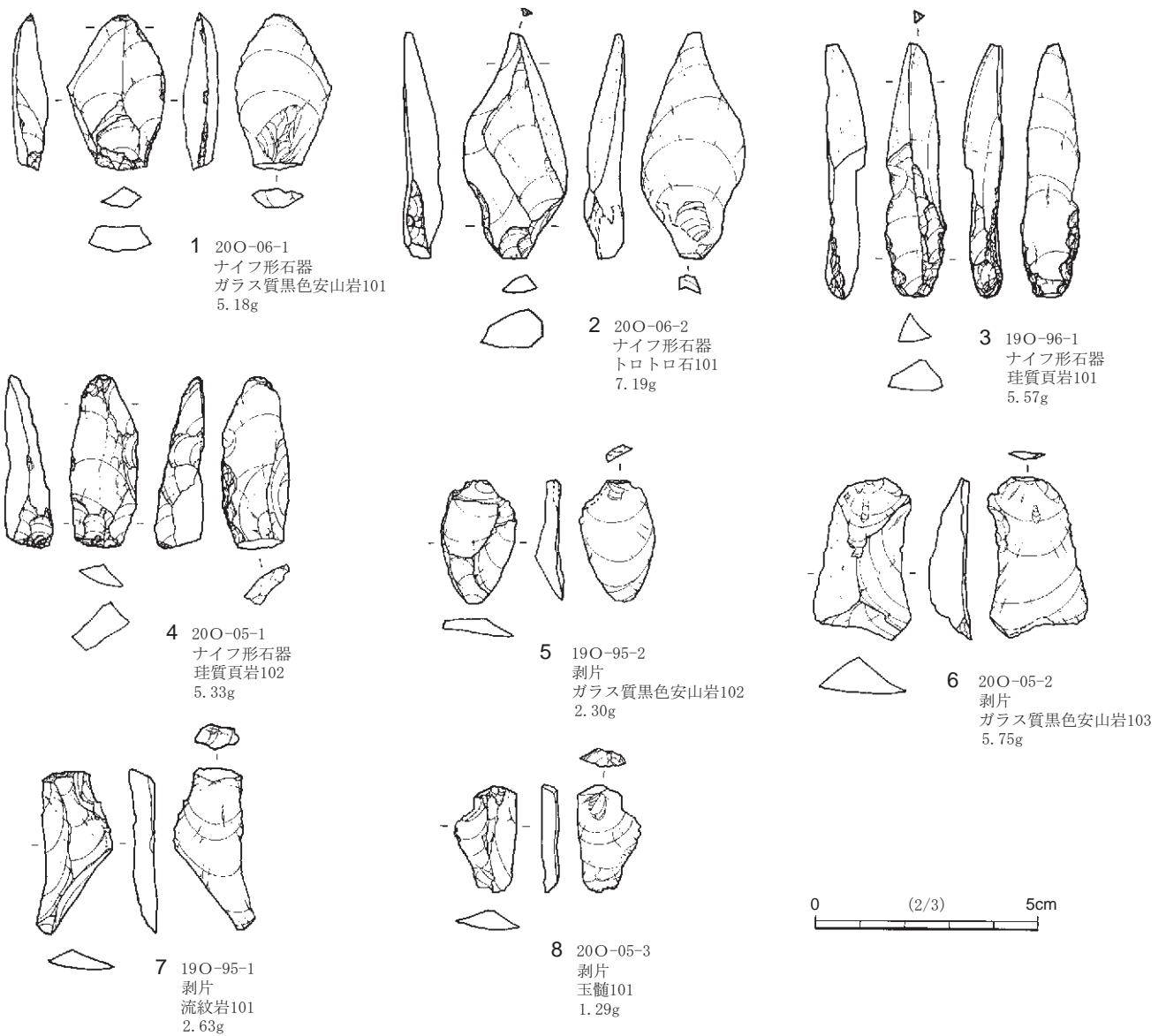
出土石器はいずれも単独母岩で構成されており、製品（あるいは利器）として搬入された可能性が高い。

1～4はナイフ形石器である。いずれも縦長剥片を素材として、打面を基部側に設置している。主に、基部側に調整加工が施されている。1は器体中央部付近に最大幅を有する縦長剥片を素材としている。打面部側の背面の調整加工は、基部側の両側縁の調整加工よりも新しいことから、ナイフ形石器の基部の刃潰し加工と判断した。基部側の調整加工は、両側縁から打面幅を狭くするような調整加工が施され、打面部中央は厚みをなくすような調整加工が施されている。先端部と右側縁に微細剥離が見られる。2は1と同様に器体中央部付近に最大幅を有する縦長剥片を素材としている。背面構成は、主要剥離面と同一方向及び反対方向と自然面で構成されている。基部側の調整加工は、両側縁から打面幅を狭くするような急角度の調整加工が施されている。打面部中央は厚みをなくすような調整加工が施されている。先端部は、わずかに折れている。素材の用い方や基部側の調整加工は1と類似する。3は細長い縦長剥片を素材としている。背面構成は、主要剥離面と同一方向のほかに側面からの剥離と自然面で構成される。基部側の調整加工は、1・2と同様に、両側縁から打面幅を狭くするような調整加工が施され、打面部中央は厚みをなくすような調整加工が施されている。基部右側の細長い剥離面は調整加工と判断される。腹面右側縁下部と下端部は平坦な調整加工が施されている。先端部はわずかに折れている。中央から先端にかけては厚みがあり、調整加工が施されておらず、基部側の調整加工とは対照的なあり方を示す。4は斜めにねじれて剥離された縦長剥片を素材としている。腹面左側縁下部には平坦な調整加工が施されている。打面部左側縁から中央部にかけては、打面の厚みをなくすような調整加工が施されている。先端部には微細剥離が観察される。このように、1～4のナイフ形石器は、縦長剥片を素材として、基部側に両側縁から打面幅を狭くするような調整加工、打面部は打面部の厚みをなくすような調整加工が施されている。また、先端部はすべて微細剥離や折れ面が見られ、これらの剥離を観察したところ、衝撃痕の可能性が高いと推測される。

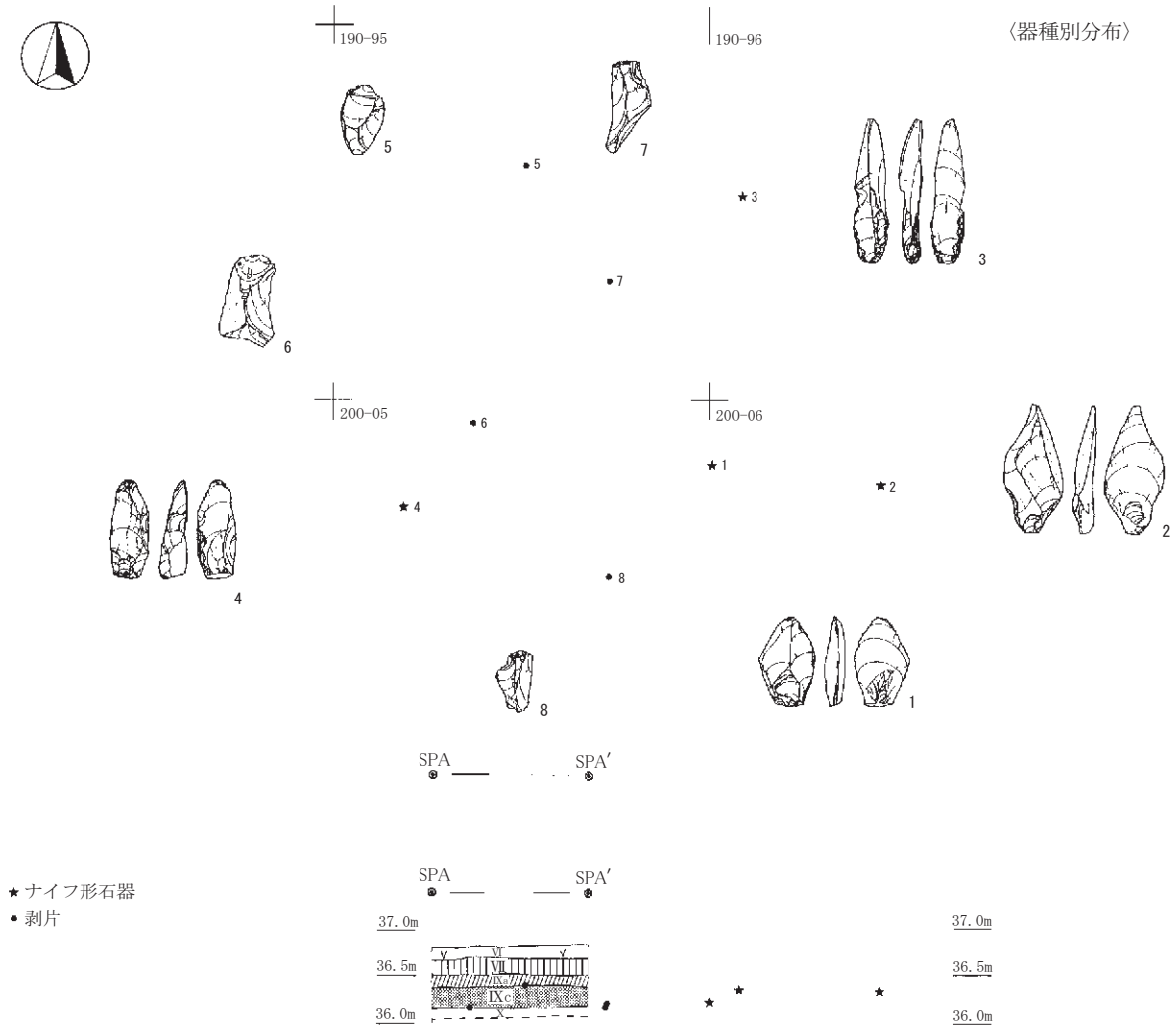
5～8は剥片である。いずれも器体中央から先端部に最大幅を有する縦長剥片であり、打面調整は見られない。また、いずれも打瘤が発達しており、間接打法、あるいは、ソフトハンマーによって剥離された可能性がある。1～4のナイフ形石器の素材と共通する特徴が見られる。5・6は背面が多方向からの剥離面で構成されている。7・8も側面からの剥離面が含まれている。これらの特徴からも、本ブロックの剥片剥離技術は、縦長剥片剥離技術を基盤とするが、石刃技法によるものではないと判断される。

第7表 第1文化層第1ブロック組成表

種別	母岩	丹岩番号	ナイフ形石器	剥片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
ガラス質黒色安山岩	黒色安山岩	101	1		1	12.50	5.18	14.81
		102		1	1	12.50	2.03	5.80
		103		1	1	12.50	5.75	16.44
ガラス質黒色安山岩 点数合計			1	2	3	37.50	12.96	37.06
トトロ石	トトロ石	101	1		1	12.50	7.19	20.56
珪質真岩	珪質真岩	101		1	1	12.50	2.63	7.52
珪質真岩	珪質真岩	101	1		1	12.50	5.57	15.93
		102	1		1	12.50	5.33	15.24
珪質真岩 点数合計			2		2	25.00	10.90	31.17
玉髓	玉髓	101		1	1	12.50	1.29	3.69
全体 点数合計			4	4	8	100.00	34.97	100.00
点数組成比 (%)			50.00	50.00	100.00			

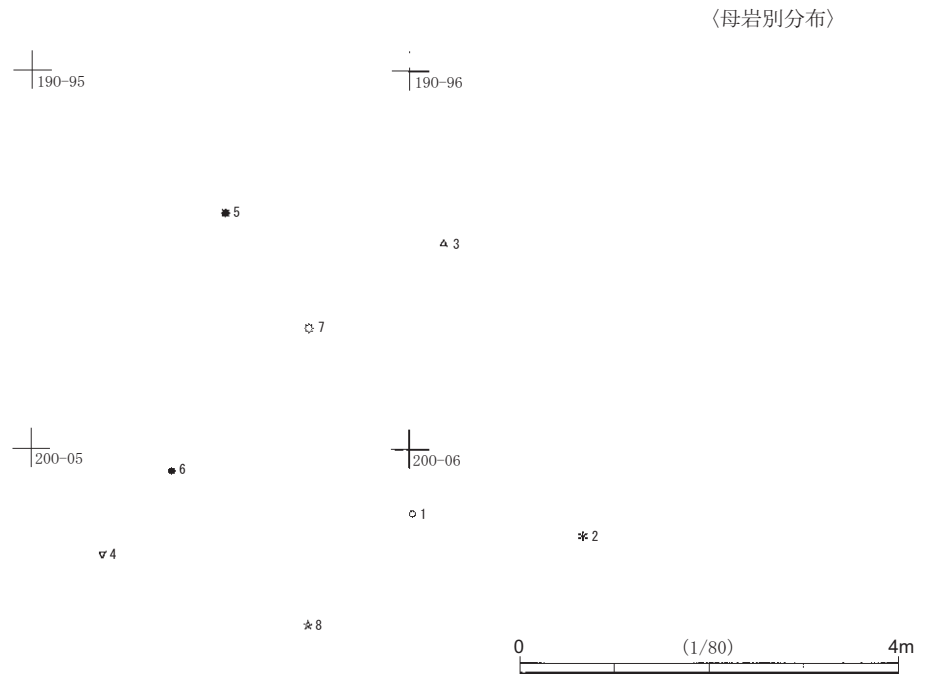


第10図 第1文化層第1ブロック出土石器



- ★ ナイフ形石器
- 剥片

- ガラス質黒色安山岩101
- ガラス質黒色安山岩102
- ガラス質黒色安山岩103
- * トロトロ石101
- 流紋岩101
- ▲ 珪質頁岩101
- ▼ 珪質頁岩102
- ★ 玉髄101



第11図 第1文化層第1ブロック遺物分布

第4節 第2文化層

1. 概要 (第8・9表)

第2文化層の石器群は、総計86点出土し、第2ブロックから第5ブロックの4か所識別できた。調査区中央部のやや北側に、東西に分布する。標高38m~39m(現地表面)にかけて分布しており、本遺跡において最も高い標高に分布することが特徴といえよう。IXc層上部~IXa層下部に生活面をもつ石器群と推

第8表 第2文化層器種石材組成表

石材	器種	ナイフ形石器	台形椀石器	楔形石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	砕片	石核	局部磨製石器	礫器	敲石	礫片	点数
ガラス質黒色安山岩	トロトロ石	1			1		34	1	1				1	38
流紋岩	緑色凝灰岩						2	2						4
砂	珪質頁岩		1		1		2			1	1			4
珪質頁岩	燧石	1			1		6	3						12
燧石	ホルンフェルス	1			1		5	1						8
ホルンフェルス	チャート			1										1
チャート						1	10							11
点	数						1	2		1				4
点	数	3	1	1	3	2	61	9	1	1	1	2	1	86

第9表 第2文化層ブロック別組成表

文化層	ブロック	石材	ナイフ形石器	台形椀石器	楔形石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	砕片	石核	局部磨製石器	礫器	敲石	礫片	点数	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
2a	2	ガラス質黒色安山岩						20	1				1		22	25.56	337.64	35.36
		砂													1	1.16	81.09	0.01
		珪質頁岩		1			1	3	2						8	9.30	22.83	2.39
		燧石				1									1	1.16	27.17	2.85
		燧石	1												1	1.16	4.55	0.48
第2a文化層点数合計			1	1		2	1	31	2	1		1	1	41	47.67	534.77	56.01	
2b	3	ガラス質黒色安山岩				1		13	1						15	17.44	51.32	5.38
		流紋岩						1	2						3	3.49	1.58	0.17
		緑色凝灰岩										1			1	1.16	34.03	3.56
		砂						2					1		3	3.49	261.61	27.40
		珪質頁岩						5	1						6	6.98	14.04	1.47
		燧石			1				2						3	3.49	7.72	0.81
第2b文化層点数合計					1	1	24	6		1		1		34	39.53	371.04	38.86	
2c	4	ガラス質黒色安山岩						1							1	1.16	12.04	1.26
		トロトロ石						1							1	1.16	2.84	0.30
		流紋岩											1		1	1.16	0.61	0.06
		珪質頁岩						3	1						4	4.65	2.58	0.27
		チャート													1	1.16	16.26	1.70
第2c文化層点数合計							5	1					1	8	9.30	34.33	3.60	
2d	5	ガラス質黒色安山岩	1					1							2	2.33	8.07	0.85
		チャート	1												1	1.16	6.96	0.69
第2d文化層点数合計			2				1							3	3.49	14.63	1.53	
第2文化層点数合計			3	1	1	3	2	61	9	1	1	1	2	1	86	100.00	954.77	100.00
点数組成比			3.49	1.16	1.16	3.49	2.33	70.93	10.47	1.16	1.16	1.16	2.33	1.16	100.00			

定される。主要器種は、局部磨製石斧・ナイフ形石器・台形様石器である。石材は、主にガラス質黒色安山岩が用いられ、次に珪質頁岩・ホルンフェルス・嶺岡産珪質頁岩が用いられている。

ブロック間の接合資料も見られず、ブロック間の距離が離れていることから、同時期に形成されたかは不明である。このため、第2文化層を第2 a文化層から第2 d文化層の4つの文化層に細分した。これらの細分した文化層の先後関係については、出土層位の差異がなく、石器群の様相も類似していることから明確ではない。

第2文化層のブロック別組成表は、第9表のとおりである。第2 a文化層第2ブロック41点、第2 b文化層第3ブロック34点、第2 c文化層第4ブロック8点、第2 d文化層第5ブロック3点で、第2ブロックと第3ブロックの出土点数が多い。

器種組成は、局部磨製石斧1点、ナイフ形石器3点、台形様石器1点、楔形石器1点、二次加工のある剥片3点、微細剥離痕のある剥片2点、礫器1点、敲石2点、剥片61点、碎片9点、石核1点、礫片1点である。石材組成は、ガラス質黒色安山岩38点、珪質頁岩12点、ホルンフェルス11点、嶺岡産珪質頁岩8点、流紋岩4点、砂岩4点、チャート4点、トロトロ石3点、緑色凝灰岩1点、硬質頁岩1点である。

2. 第2ブロック (第12～17図、第10表、図版4・48)

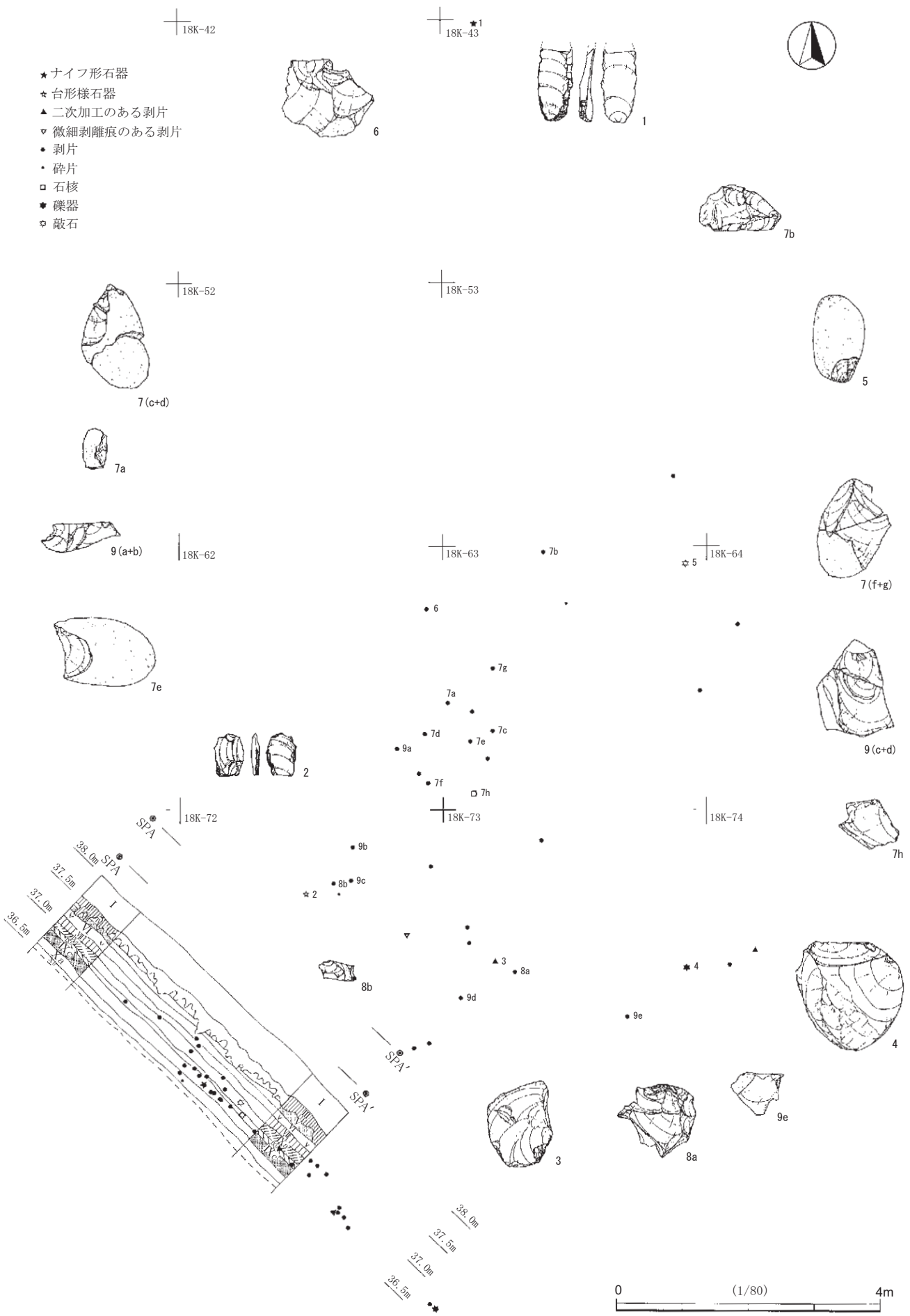
出土状況 調査区中央部西側の18K-43・53・62～64・72～74グリッドに分布している。北西に緩やかに傾斜する谷津の谷頭に立地する。北西に約150m離れて第3ブロックが分布する。14.4m×6.4mの範囲から41点の石器が出土した。分布を詳細に見ると、北部・中央部・南部の3か所の集中地点が見られる。大半の遺物は中央部・南部に密集して分布しており、北部に1のナイフ形石器が1点だけ離れて出土している。母岩別分布においては、中央部に接合資料201のガラス質黒色安山岩201が分布し、南部には接合資料205のホルンフェルス201と接合資料204の珪質頁岩201が分布している。出土層位は、X a層からVII層にかけて出土しており、IX c層上部からIX a層に集中する。

出土遺物 器種組成は、ナイフ形石器1点、台形様石器1点、二次加工のある剥片2点、微細剥離痕のある剥片1点、剥片31点、碎片2点、石核1点、礫器1点、敲石1点である。石材組成は、ガラス質黒色安山岩22点、珪質頁岩8点、ホルンフェルス8点、砂岩1点、嶺岡産珪質頁岩1点、硬質頁岩1点である。

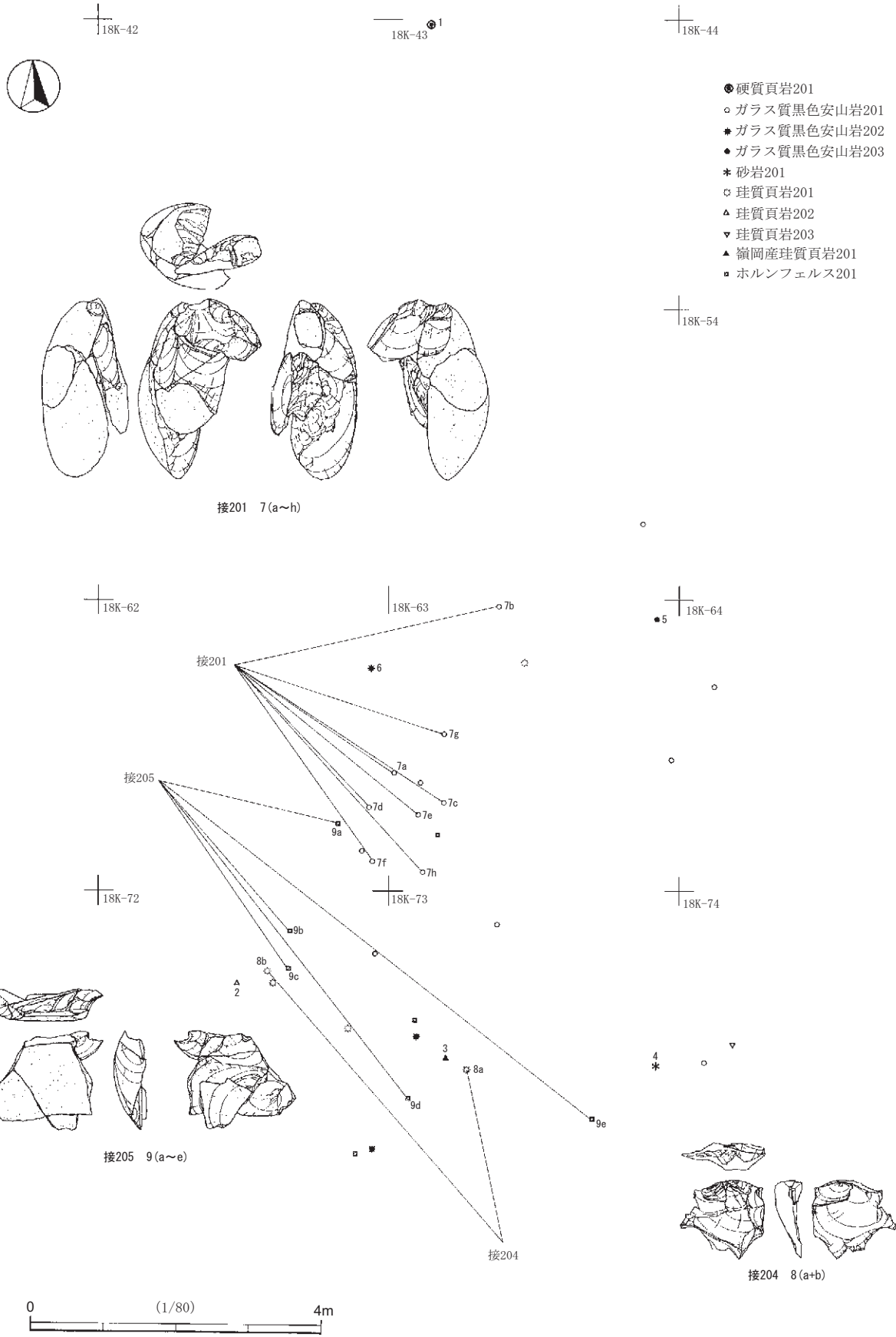
1はナイフ形石器である。良質の硬質頁岩201が用いられており、製品で搬入されている。縦長剥片を

第10表 第2 a文化層第2ブロック組成表

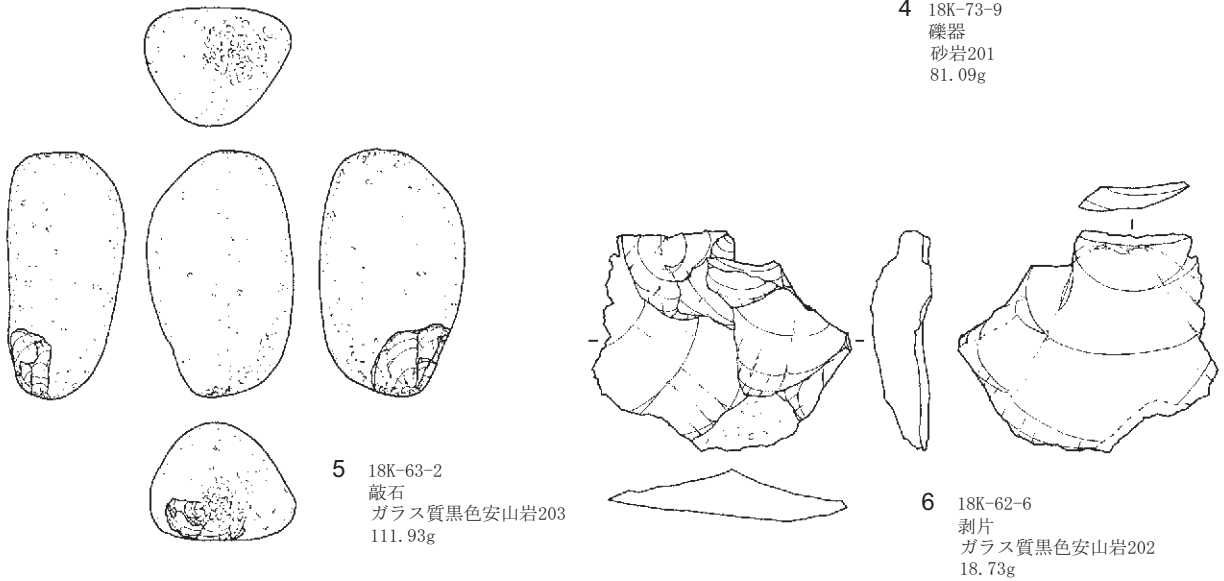
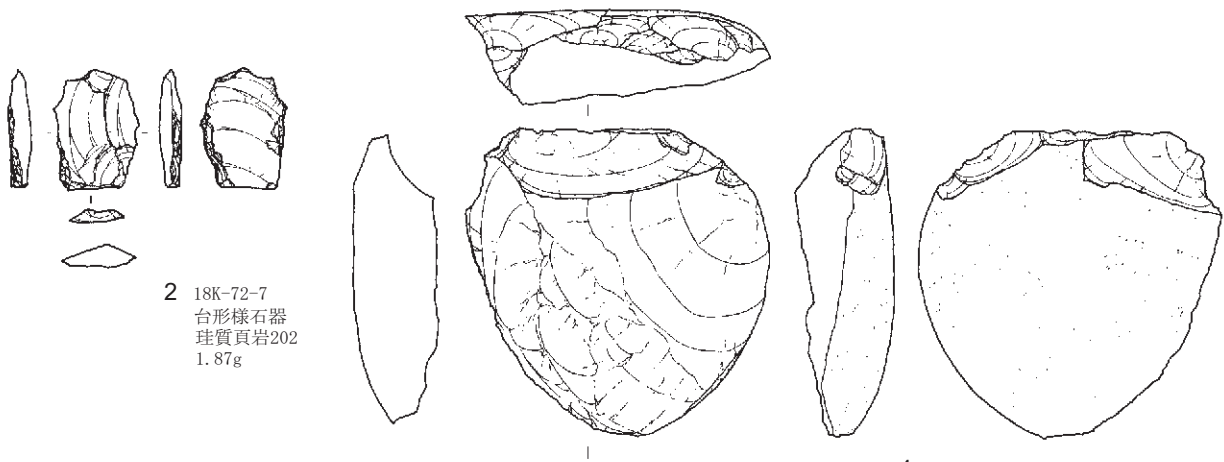
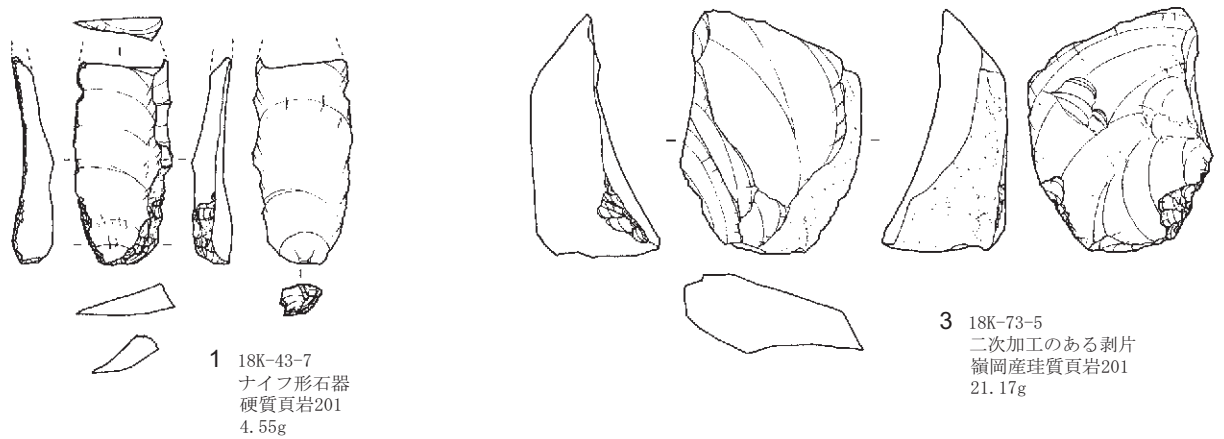
母岩	器種	母岩番号	ナイフ形石器	台形様石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	碎片	石核	礫器	敲石	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
ガラス質黒色安山岩		201					17		1			18	43.90	190.74	35.67
		202					3					3	7.32	34.97	6.54
		203									1	1	2.44	111.93	20.93
ガラス質黒色安山岩 点数合計							20		1		1	22	53.66	337.64	63.14
砂		201								1		1	2.44	81.09	15.16
珪質頁岩		201				1	2	2				5	12.20	9.04	3.56
		202		1								1	2.44	1.87	0.35
		203			1							1	2.44	1.49	0.28
		204					1					1	2.44	0.43	0.06
珪質頁岩 点数合計				1	1	1	3	2				8	19.51	22.83	4.27
嶺岡産珪質頁岩		201			1						1	2.44	27.17	5.06	
硬質頁岩		201	1									1	2.44	4.55	0.85
ホルンフェルス		201					8				8	19.51	61.49	11.50	
全体 点数合計			1	1	2	1	31	2	1	1	1	41	100.00	534.77	100.00
点数組成比(%)			2.44	2.44	4.88	2.44	75.81	4.88	2.44	2.44	2.44	100.00			



第12図 第2 a文化層第2ブロック器種別分布



第13図 第2 a文化層第2ブロック母岩別分布

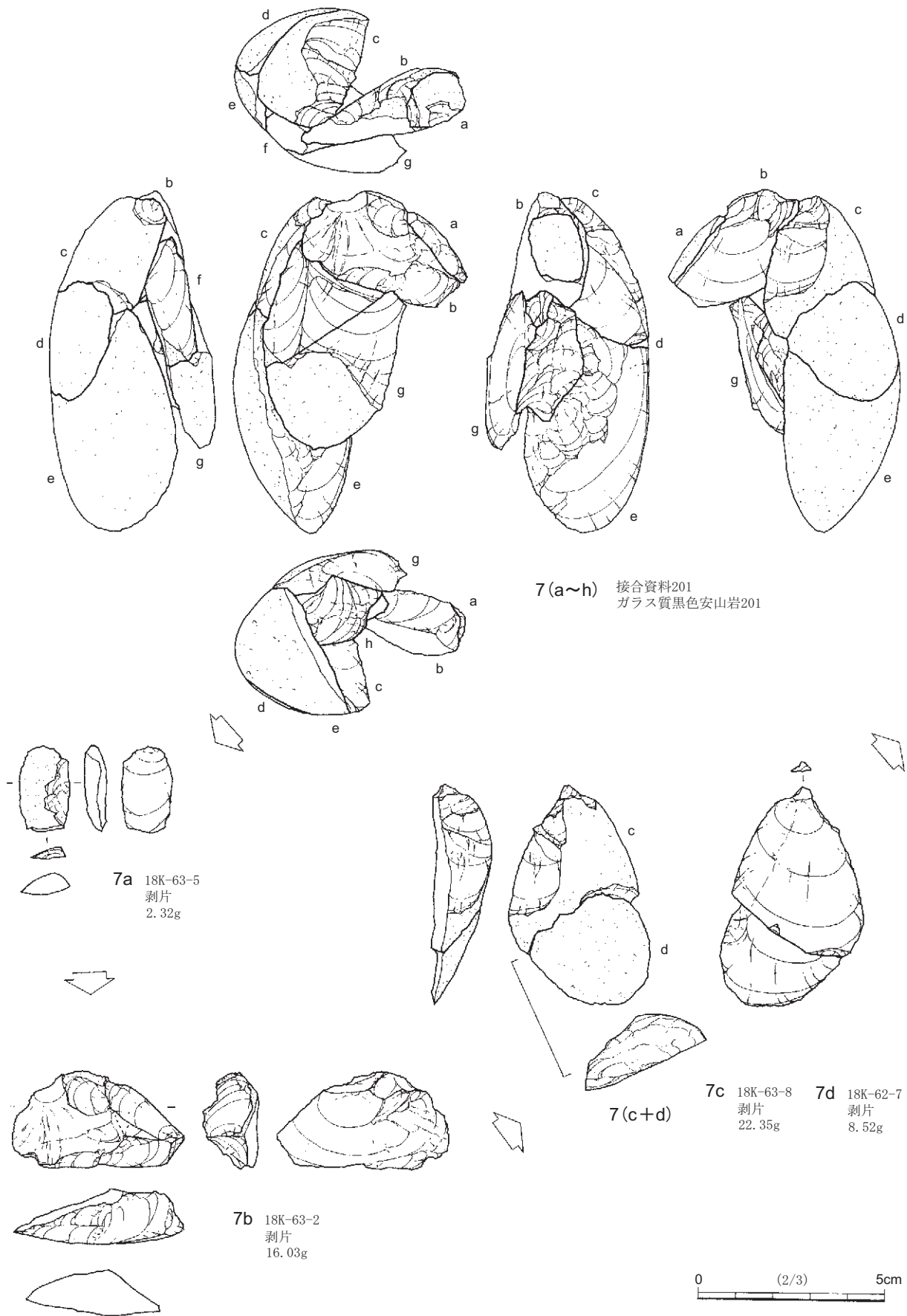


※ 5のみ1/2
(1/2)

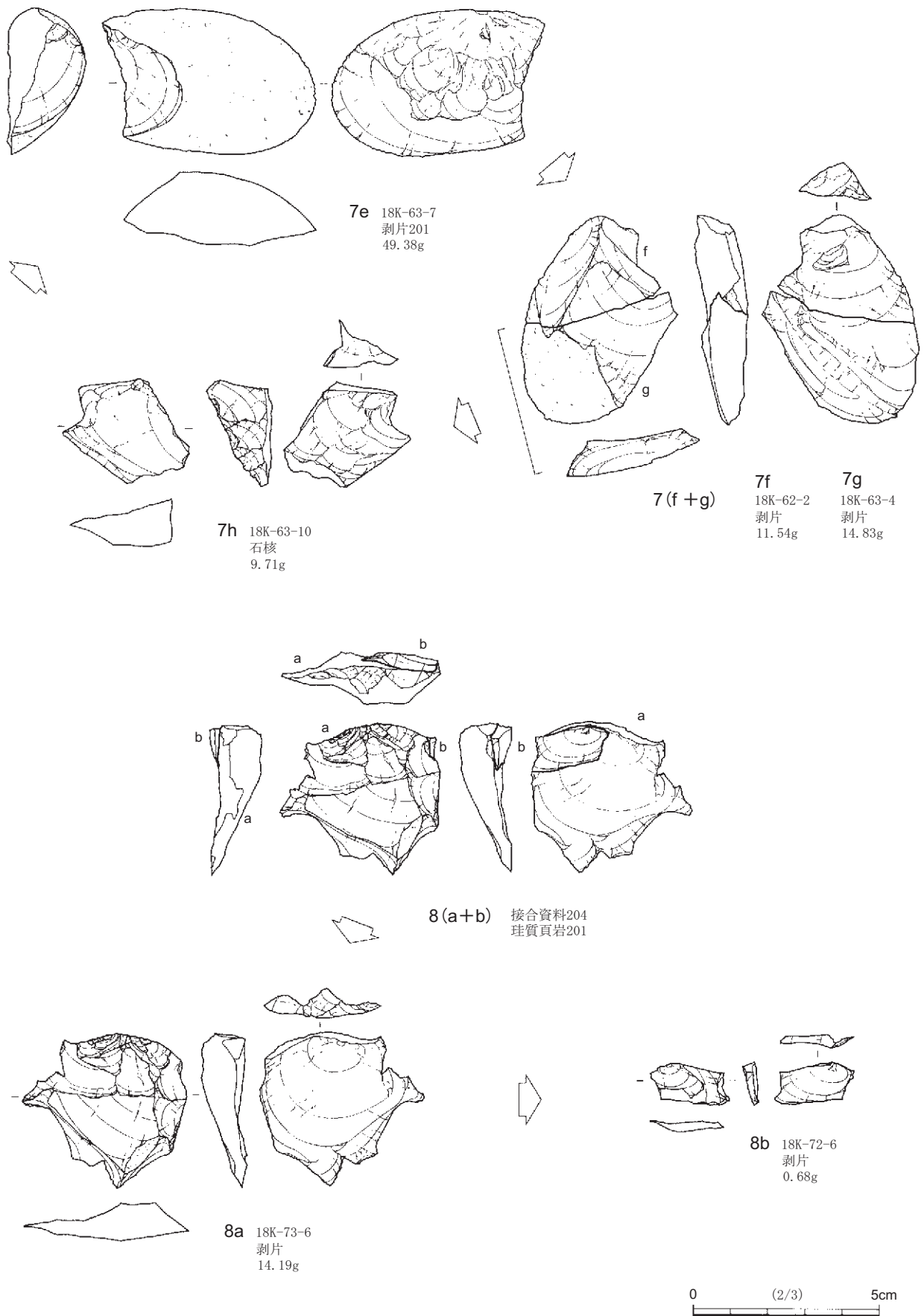
0 10cm

0 (2/3) 5cm

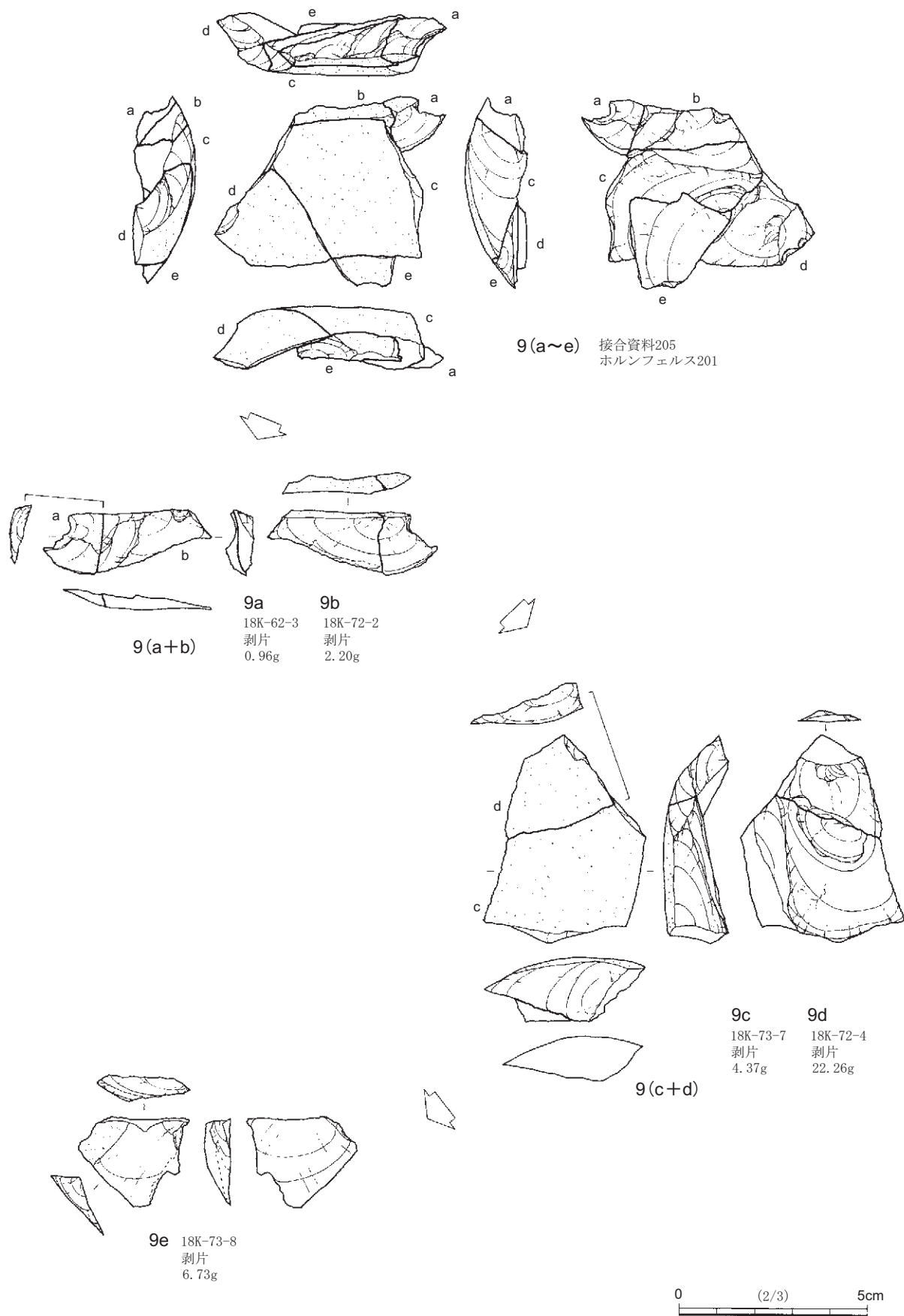
第14図 第2 a文化層第2ブロック出土石器 (1)



第15図 第2 a文化層第2ブロック出土石器 (2)



第16図 第2 a文化層第2ブロック出土石器 (3)



第17図 第2 a文化層第2ブロック出土石器 (4)

素材として、左側縁下部背面から急角度の調整加工が施され、右側縁下部は背面から階段状の調整加工が施されている。打面部は、腹面からの細かい調整加工により残存していない。先端部は、腹面から破損している。左側縁には、微細剥離が顕著に見られる。2は台形様石器である。背面左側にはポジティブ面が残されている。良質の珪質頁岩202が用いられており、製品で搬入されている。下端部を折断した後に、右側縁下部と左側縁中央部は背面から、左側縁下部は腹面からそれぞれ平坦な調整加工が施されている。先端部は折れている。3は二次加工のある剥片である。厚みのある不定形な剥片が用いられ、両側縁の下部に平坦な調整加工が施されている。4は礫器で、緻密な砂岩が用いられている。単独で搬入されている。裏面に自然面が大きく残されている。上端部は背腹両面から交互剥離が行われている。礫器と器種分類したが、同一文化層の第3ブロックから局部磨製石斧が出土していることから、局部磨製石斧の製作に関連した資料である可能性も高い。5は敲石である。楕円形礫を用いており、上下両端に敲打痕が見られ、特に下端部は強い敲打による剥離痕が見られる。6は剥片である。背面構成は多方向からの剥離面で構成されており、3と類似する剥片剥離によるものである。

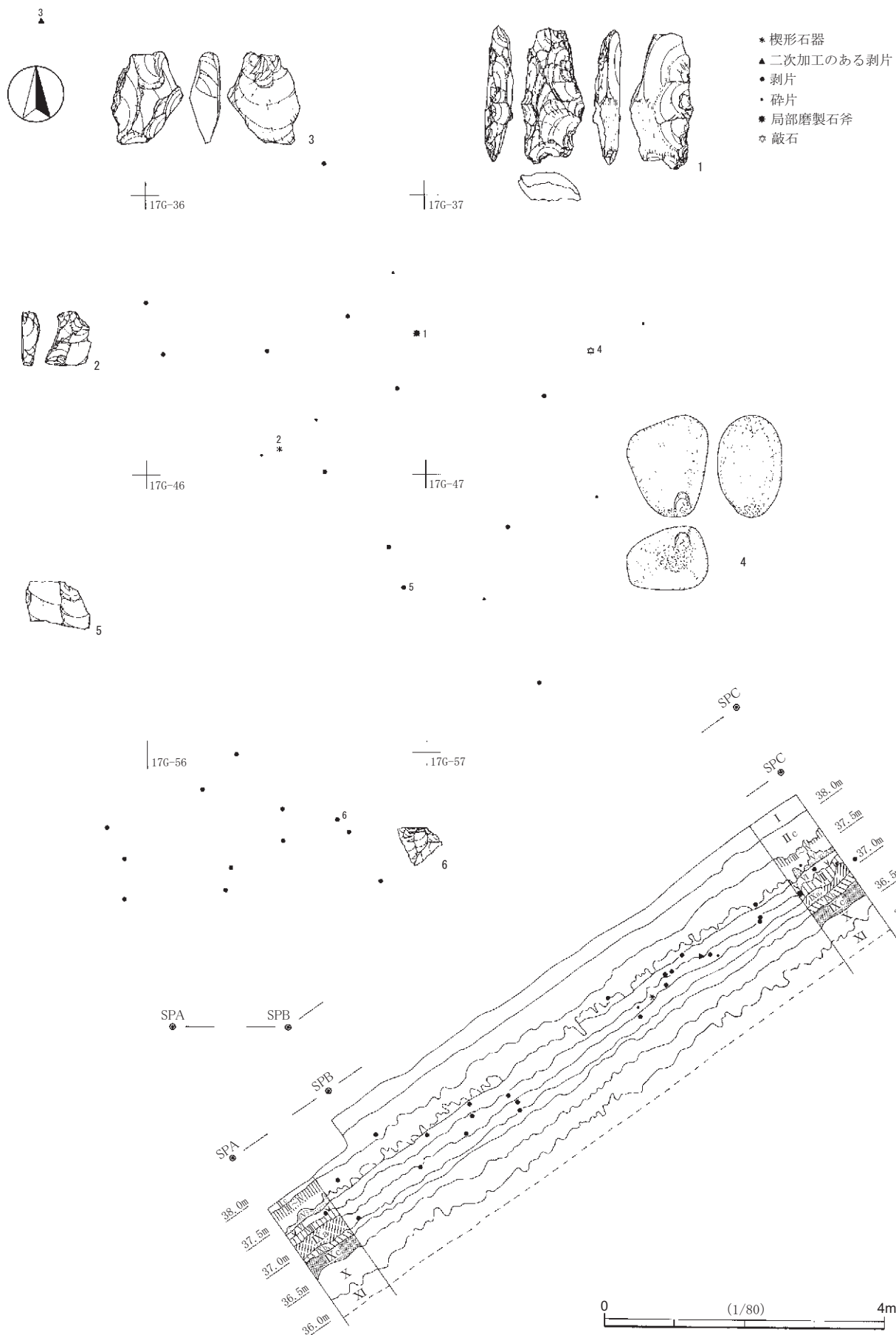
7(a~h)は、楕円形の礫を素材として、不定形な剥片を剥離した接合資料である。表面右上部から小型の剥片7aを剥離後、打面を表面上端部にして横長剥片7bと縦長剥片7(c+d)を剥離している。その後、表面左側面中央部に打面転移して、横長剥片7eを剥離している。次に、再び打面を表面上端部に転移して7(f+g)と7hを剥離している。7hは石核として分類される。幅広剥片を素材として、右側縁からさらに小型の剥片が剥離されている。打面を頻繁に転移しながら剥離していることを示す接合資料で、3・6と類似する剥片剥離を示す資料である。8(a+b)は、背面が多方向からの剥離面で構成される8aを剥離した後に、上端部から小型の横長剥片8bが剥離されている。9(a~e)は、表面上部から横長剥片9(a+b)を剥離した後に、裏面右下部に打面を転移して9(c+d)と9eを剥離している。本接合資料も、打面を頻繁に転移していることを示す接合資料である。

3. 第3ブロック (第18~20図、第11表、図版4・48)

出土状況 調査区中央部の17G-25・26・36・37・46・47・55・56グリッドに分布している。北西に緩やかに傾斜する谷津の南側に立地する。南東に約150m離れて第2ブロックが分布する。12.5m×6.4mの

第11表 第2b文化層第3ブロック組成表

出 土 品 種	母岩番号	楔形石器	二次加工のある剥片	剥片	砕片	局部磨製石斧	敲石	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
ガラス質黒色安山岩	204			6	1			9	26.47	15.70	4.23
	205			5				5	14.71	8.84	2.38
	206			1				1	2.84	26.78	7.22
ガラス質黒色安山岩 点数合計			1	13	1			15	44.12	51.32	13.83
凝 結 岩	201			1	2			3	8.82	1.56	0.43
緑 色 凝 灰 岩	201					1		1	2.94	34.03	9.17
	202						1	1	2.94	258.43	69.92
	203			1				1	2.94	1.33	0.36
砂	204			1				1	2.94	0.85	0.23
	砂 岩 点 数 合 計				2		1	3	8.82	281.81	70.51
強 固 産 達 質 頁 岩	203			5	1			6	17.85	14.04	3.78
ホルンフェルス	202	1						1	2.94	4.95	1.33
	203			2				2	5.88	2.77	0.75
ホルンフェルス 点数合計		1		2				3	8.82	7.72	2.08
ア ャ ー ト	202				2			2	5.88	0.46	0.12
	203			1				1	2.94	0.28	0.08
ア ャ ー ト 点 数 合 計				1	2			3	8.82	0.74	0.20
全 体 点 数 合 計			1	1	24	6	1	34	100.00	371.04	100.00
点 数 組 成 比 (%)			2.94	2.94	70.59	17.65	2.94	2.94	100.00		



第18図 第2 b文化層第3ブロック器種別分布



17G-25

17G-26

17G-27

▲3

17G-35

17G-36

17G-37

17G-45

17G-46

17G-47

17G-55

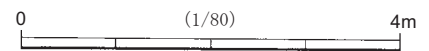
17G-56

17G-57

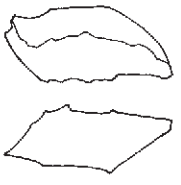
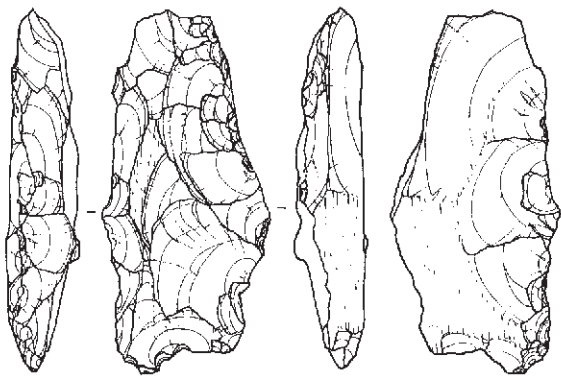
- ガラス質黒色安山岩204
- ガラス質黒色安山岩205
- ▲ ガラス質黒色安山岩206
- ▼ 流紋岩201
- ▲ 緑色凝灰岩201
- ▼ 砂岩202
- 砂岩203
- ◇ 砂岩204
- 嶺岡産珪質頁岩203
- ◆ ホルンフェルス202
- ホルンフェルス203
- ◎ チャート202
- ◎ チャート203

接202

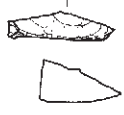
接203



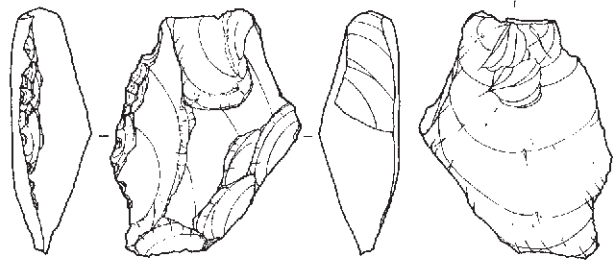
第19図 第2 b文化層第3ブロック母岩別分布



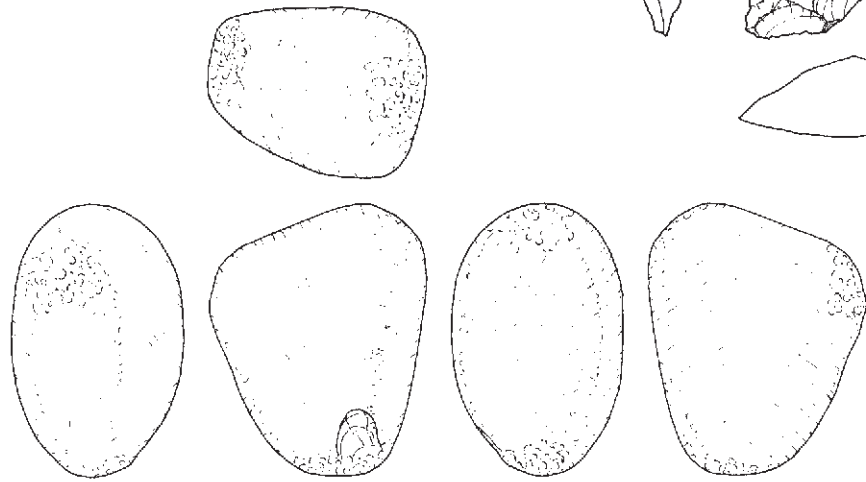
1 17G-130
局部磨製石斧
緑色凝灰石201
34.03g



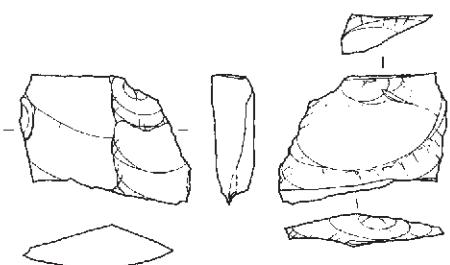
2 17G-125
楔形石器
ホルンフェルス202
4.95g



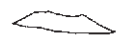
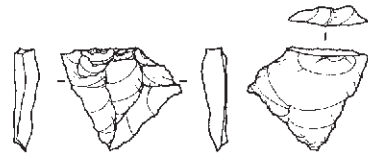
3 17G-135
二次加工のある剥片
ガラス質黒色安山岩206
26.78g



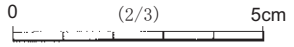
4 17G-121
敲石
砂岩202
259.43g



5 17G-115
剥片
ガラス質黒色安山岩204
7.57g



6 17G-112
剥片
嶺岡産珪質頁岩203
1.77g



第20図 第2 b文化層第3ブロック出土石器

範囲から34点の石器が出土した。分布を詳細に見ると、集中地点が北部と南部の2か所に分かれる。北部には局部磨製石斧・楔形石器・敲石などの製品が分布し、南部には剥片のみが分布し、製品は出土していない。出土層位は、IX a層からIII層で、IX a層下部に集中する。

出土遺物 器種組成は、楔形石器1点、二次加工のある剥片1点、剥片24点、碎片6点、局部磨製石斧1点、敲石1点である。石材組成は、ガラス質黒色安山岩15点、嶺岡産珪質頁岩6点、流紋岩3点、砂岩3点、ホルンフェルス3点、チャート3点、緑色凝灰岩1点である。

1は局部磨製石斧である。良質の緑色凝灰岩が用いられ、単独母岩で搬入されている。裏面左下に自然面が残されており、自然面は研磨されている。裏面の稜線は研磨により磨滅している。表面中央左側に、わずかにポジティブ面が残されており、この面は顕著に研磨されている。表面の剥離面の稜線が磨滅していないことから、局部磨製石斧を再生加工して小型化した資料である可能性が高い。大きなサイズの局部磨製石斧であった時点の部位は、裏面の平坦面と裏面右下部、表面中央左側に残されていると推察される。左側縁は、表面に平坦な調整加工を施した後に、裏面に鋸歯状の加工が施されており、側縁形状は波状を呈する。右側縁は、表面に下部から上部の順番に階段状の調整加工が施され、特に上部の調整加工は入念に施されている。先端部と下端部は鋭利な縁辺を持ち、わずかに磨滅している。本遺跡において、局部磨製石斧は本資料しか出土していない。ただし、前述したように、第2ブロックの礫器は局部磨製石斧の製作に関連した資料である可能性もある。

2は楔形石器である。板状の剥片を素材として、上下両端を折断した後に、折断面を打面として上下両端から両極剥離が行われている。3は二次加工のある剥片である。厚みのある剥片を素材として、左側縁上部に平坦な調整加工が施されている。4は敲石である。3か所突出した楕円形の礫を素材として、突出部には敲打痕が見られる。特に下端部の敲打は潰れ痕が顕著で、敲打による剥離面も観察される。5・6は剥片である。平坦打面から剥離されており、背面は腹面と同一方向からの剥離面で構成されている。

4. 第4ブロック (第21・22図、第12表、図版4・48)

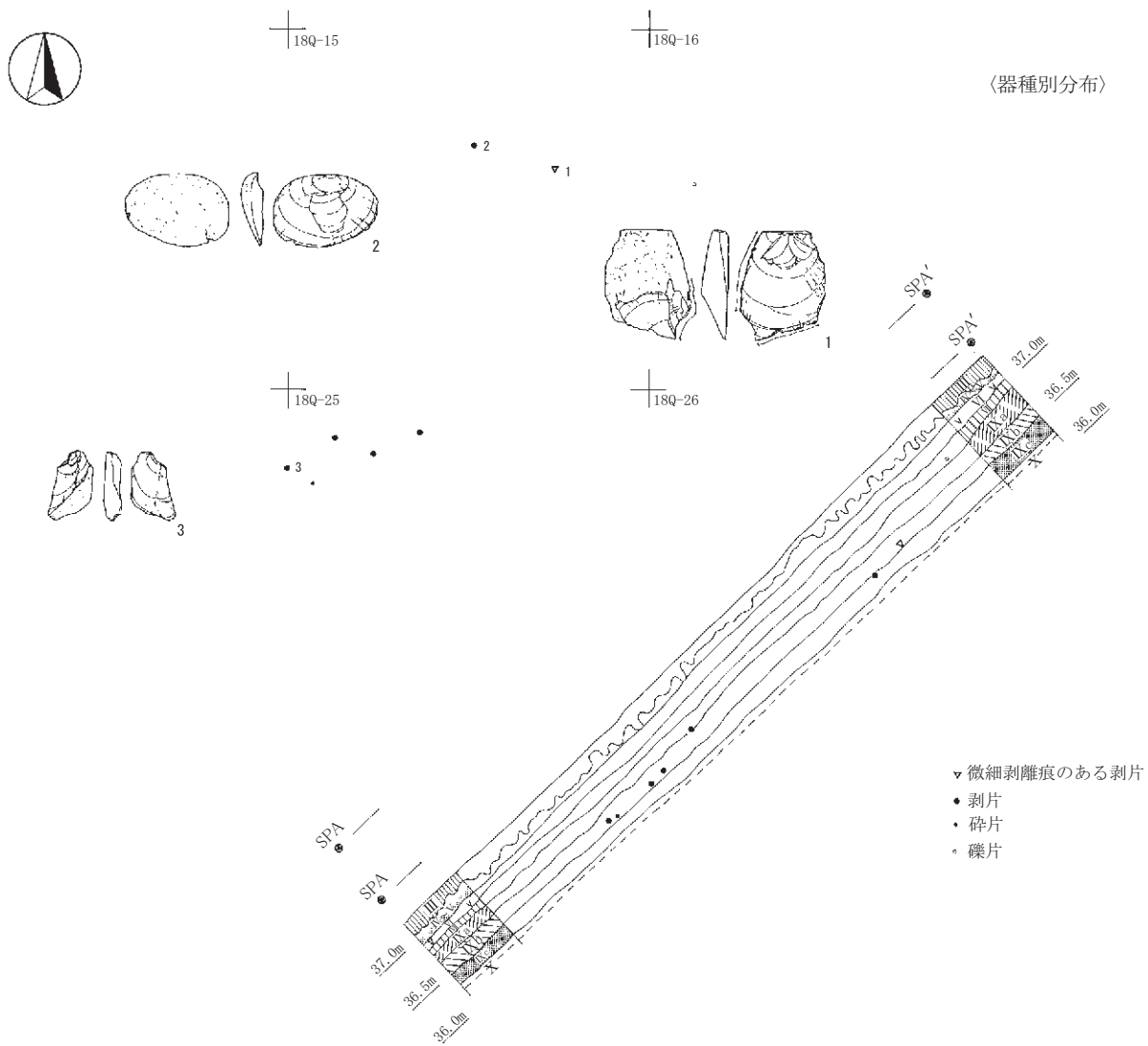
出土状況 調査区北東部の18Q-15・16・24・25グリッドに分布している。北東に細長く続く谷津の北側に立地する。北東に約100m離れて第5ブロックが分布する。3.9m×3.4mの範囲から8点の石器が出土した。分布を詳細に見ると、北東部と南西部の2か所に集中地点が見られる。出土層位は、IX c層からVII層にかけて分布しており、IX c層上部～IX a層下部に集中する。

出土遺物 器種組成は、微細剥離痕のある剥片1点、剥片5点、碎片1点、礫片1点である。石材組成は、珪質頁岩4点、ガラス質黒色安山岩1点、トロトロ石1点、流紋岩1点、チャート1点である。

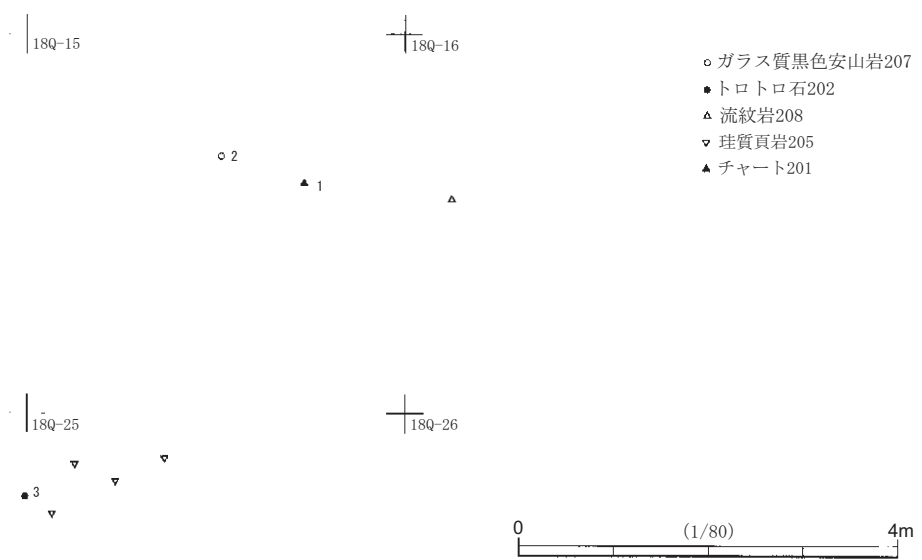
製品は出土しておらず、剥片も不定形な剥片で占められる。1は微細剥離痕のある剥片である。良質のチャート201が用いられており、単独で搬入されている。背面上部に自然面を大きく残し、平坦打面から

第12表 第2c文化層第4ブロック組成表

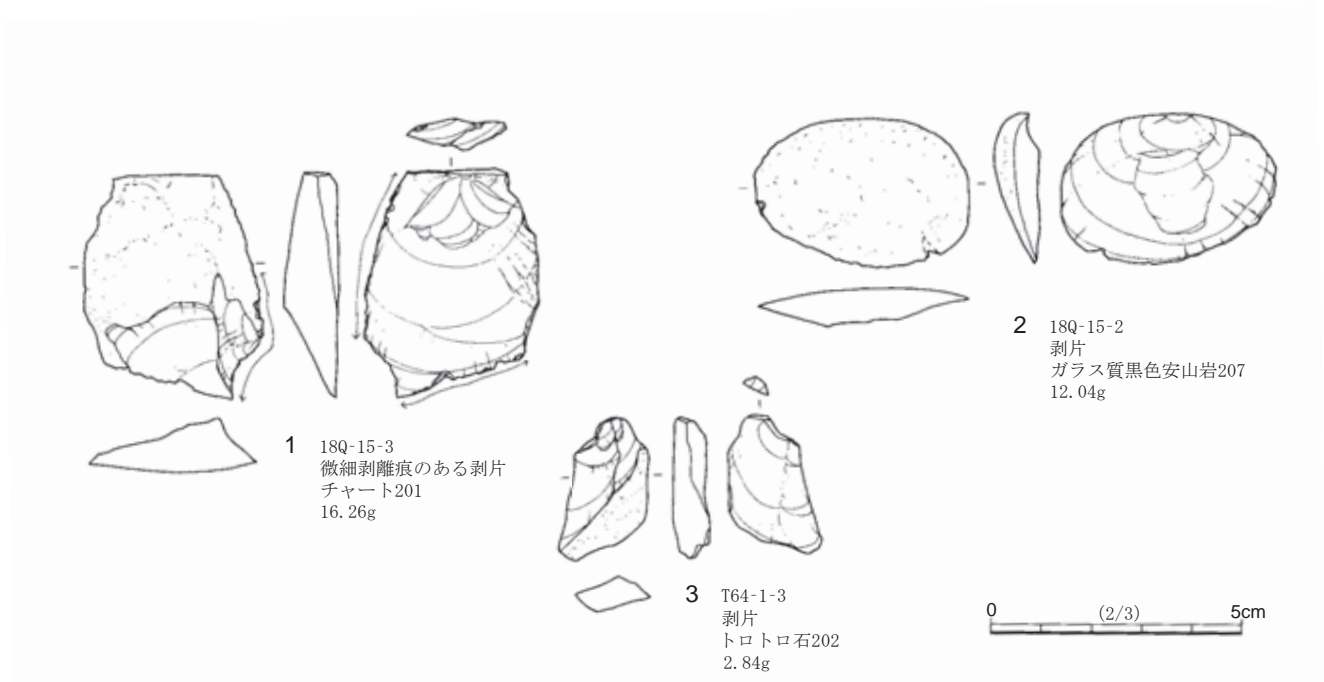
母岩	母岩番号	微細剥離痕のある剥片	剥片	碎片	礫片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
ガラス質黒色安山岩	207		1			1	12.50	17.04	35.07
トロトロ石	202		1			1	12.50	2.84	8.27
流紋岩	208				1	1	12.50	0.51	1.78
珪質頁岩	205		3	1		4	50.00	2.58	7.52
チャート	201	1				1	12.50	16.26	47.36
全体点数合計		1	5	1	1	8	100.00	34.33	100.00
点数組成比 (%)		12.50	62.50	12.50	12.50	100.00			



母岩別分布



第21図 第2c文化層第4ブロック遺物分布



第22図 第2c文化層第4ブロック出土石器

剥離された縦長剥片を素材としている。裏面左上部から右下部にかけて連続的に微細剥離が見られる。2は背面全面が自然面の横長剥片である。3は平坦打面から剥離された縦長剥片である。剥片剥離技術は第2ブロックと類似する。

5. 第5ブロック (第23図、第13表、図版4・48)

出土状況 調査区北東部の16R-04・05グリッドに分布している。北東に細長く続いている谷津の北側に立地する。南西に約100m離れて第4ブロックが分布する。1.6m×2.8mの範囲から3点の石器が出土した。出土層位は、IX a層からVII層にかけて分布しており、IX a層に集中する。

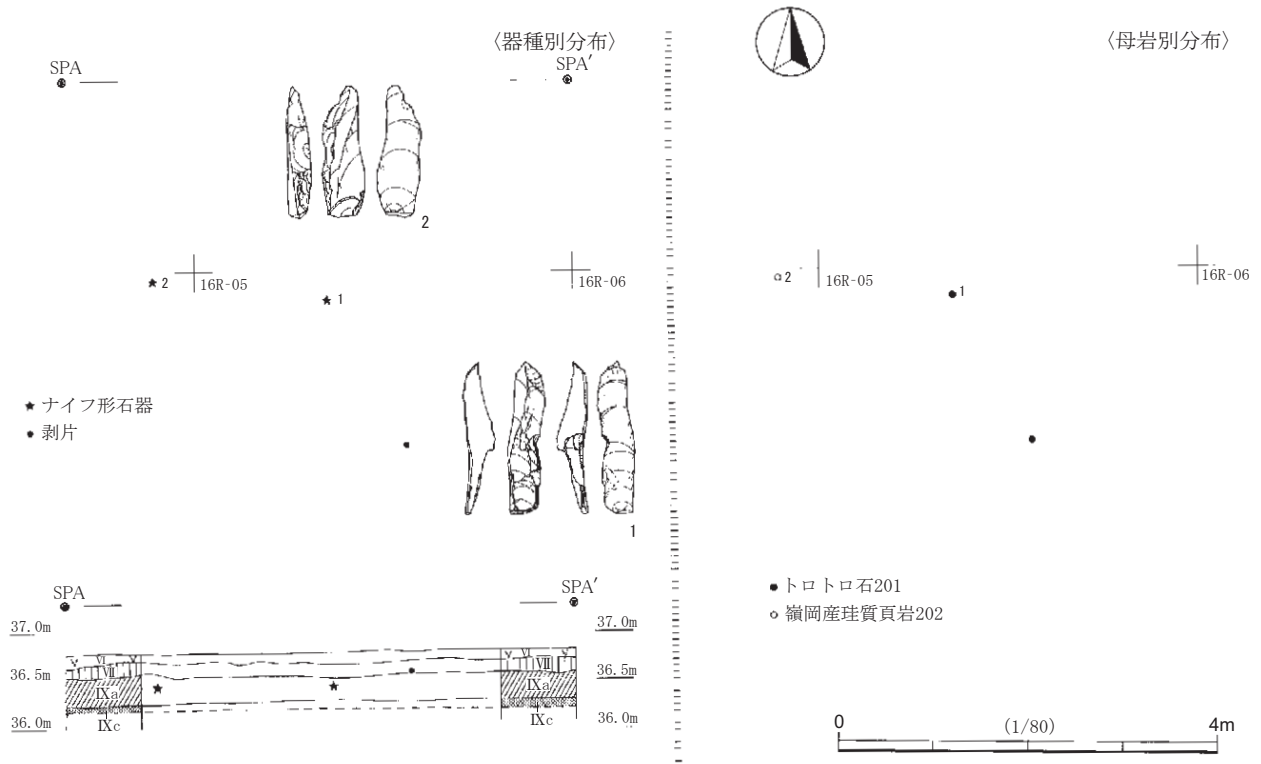
出土遺物 器種組成は、ナイフ形石器2点、剥片1点である。石材組成は、トロトロ石2点、嶺岡産珪質頁岩1点である。

1・2はナイフ形石器である。いずれも縦長剥片を素材として基部に調整加工が施されている。

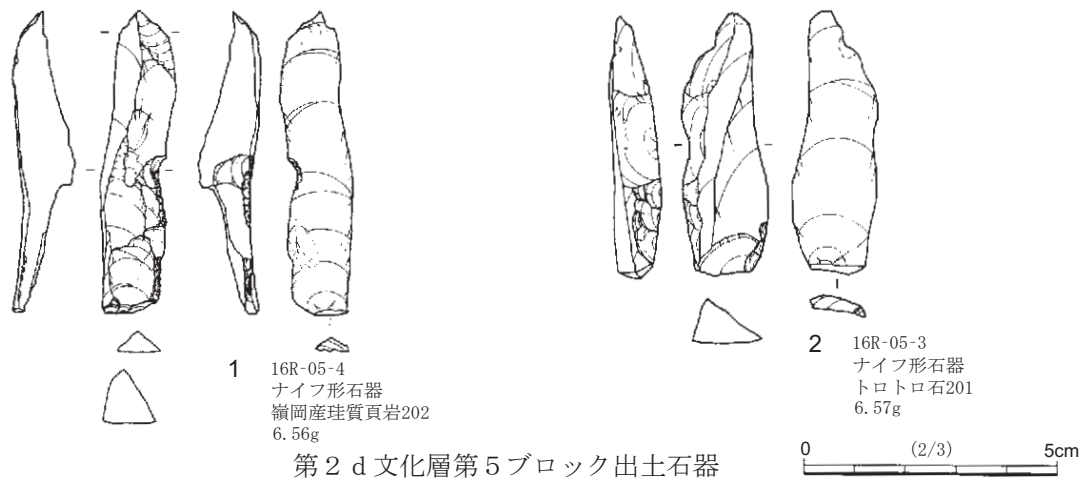
1は細長い縦長剥片を素材としている。中間部から右側にややねじれた形状をしている。背面中央部には、ステップ状の剥離面が観察され、中央部付近に厚みがある。右側縁中央と右側縁下部に急角度の調整加工が施されている。打面部付近の細かい剥離面は、右側縁下部の調整加工よりも新しい面であることから、頭部調整ではなく調整加工であると判断される。2は厚みのある縦長剥片を素材としている。素材の縦長剥片は、左側の剥離面から打面再生剥片、あるいは、稜上調整剥片と判断される。右側縁下部に急角度の調整加工が施されている。本ブロックからは、3点の石器しか出土していないが、ナイフ形石器が2点出土しており、製品の割合が高いことが特徴といえる。また、ナイフ形石器の特徴は、第1文化層第1ブロックのナイフ形石器と類似しており、1は第1ブロックの3、2は第1ブロックの2と極めてよく似た形状をしている。第5ブロックの出土層位がIX a層に集中することから、第1ブロックとは異なる文化層として識別したが、同一段階の石器群となる可能性がある。

第13表 第2 d文化層第5ブロック組成表

母岩番号	ナイフ形石器	剥片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
ト	1	1	2	66.67	8.07	55.16
嶺岡産珪質頁岩	1	1	2	33.33	6.56	44.84
全体点数合計	2	1	3	100.00	14.63	100.00
点数組成比 (%)	66.67	33.33	100.00			



第2 d文化層第5ブロック遺物分布



第2 d文化層第5ブロック出土石器

第23図 第2 d文化層第5ブロック遺物分布と出土石器

第5節 第3文化層

1. 概要 (第14・15表)

第3文化層の石器群は、総計461点出土し、第6ブロックから第16ブロックの11か所を識別できた。IX a層上部～VII層下部に生活面をもつ石器群と推定される。調査区全域に分布しており、ブロック間の距離が離れていることから、これらのブロックが同時期に形成されたかは不明である。そのため、ブロック間接合しているすべてのブロック群を有意なまとまりとして捉えて、第3文化層を第3 a文化層から第3 e文化層の5つの文化層に細分した。これらの細分した文化層の先後関係については、出土層位の差異がなく、石器群の様相も類似していることから明確ではない。

第3文化層のブロック別組成表は、第15表のとおりである。細分した文化層別の出土点数は、第3 a文化層291点、第3 b文化層57点、第3 c文化層45点、第3 d文化層7点、第3 e文化層56点、単独出土5点である。複数のブロック群で構成されるものは、第3 a文化層と第3 b文化層である。このうち、ブロック間接合が見られたものは、第3 a文化層である。

第14表 第3文化層器種石材組成表

石材	器種	黒曜石産地推定地	ナイフ	台形	彫	削	搔	楔	二次	微細	削	剥	砕	石	穀	台	礫	点	
			形	様	器	器	器	器	加工	剥	剥	片	核	石	石	片	計		
黒曜石	黒曜石	高原山甘湯沢群	4	3		3		5	14	21		126	18	12				206	
ガラス	質黒色	安山岩						1				29	8					38	
ト	口	石										4						4	
流	紋	岩										4						4	
砂		岩										8			1	1	2	12	
頁		岩										3						3	
珪	質	頁	1							3		52	3	3				62	
隴	産	頁							2			10	1					13	
硬	質	頁			1	1		1	2	3	2	27	7					44	
ホル	ン	フ										3						3	
チ	ヤ	ー				1			2	3		30	1	1				38	
玉		髓					1		2	6		22		3				34	
点	数	総	計	5	3	1	5	1	7	20	38	2	318	38	19	1	1	2	461

2. 3 a文化層 (第24～29図、第16～19表、図版5・49・50)

(1) 概要 第3 a文化層の石器群は、総計291点出土し、第6ブロックから第10ブロックの6か所を識別できた。標高36m～37m（現地表面）にかけて分布しており、調査区北西部の北西に緩やかに傾斜する台地の縁辺に立地する。IX a層上部～VII層下部に生活面をもつ石器群と推定される。6か所のブロック間の接合関係は多量に見られる。

(2) 石器組成 第3 a文化層のブロック別組成表は第17・18表のとおりである。ブロック別に見ると、第6ブロック88点、第7ブロック59点、第8ブロック108点、第9ブロック27点、第10ブロック9点で、第8ブロックと第6ブロックの出土点数が圧倒的に多い。

器種組成は、ナイフ形石器4点、台形様石器3点、削器4点、搔器1点、楔形石器5点、二次加工のあ

第15表 第3文化層ブロック別組成表

文 化 層	ブ ロ ッ ク	石 材	単 独 の 産 地 推 定 地	ナ イ フ 形 石 器	合 形 石 器	彫 刻 器	削 器	播 種 器	標 形 石 器	二 次 加 工 の あ る 剥 片	微 細 制 造 の あ る 剥 片	削 片	剥 片	砕 片	石 核	熱 石	合 石	摩 片	点 数 合 計	点 数 比 (%)	重 量 合 計 (g)	重 量 比 (%)
3a	6	ガラス製黒色安山岩												2					2	0.43	8.36	0.22
		流紋岩												1					1	0.22	0.68	0.02
		黒曜石	1							1	4			24		5			35	7.59	167.43	4.47
		砂												5					5	1.08	12.07	0.32
		埴輪質頁岩												1					14	3.04	74.64	1.99
		硬質頁岩												1					1	0.22	1.14	0.03
	ホルンフェルト												1					1	0.22	2.46	0.06	
	チャート												1					14	3.04	44.52	1.19	
	土										2	2		9		2		15	3.25	110.40	2.94	
	第6ブロック点数合計				1					1	7	4		68		7			88	13.99	422.71	1.28
7	流紋岩												2					2	0.43	5.56	0.15	
	黒曜石					2				4	5		35	5	1			52	11.28	120.96	3.35	
	埴輪質頁岩												1					1	0.22	19.67	0.52	
	硬質頁岩												1					3	0.65	7.65	0.20	
チャート												1					1	0.22	0.53	0.01		
土												1					1	0.22	0.53	0.01		
第7ブロック点数合計						3			4	6		40	5	1				59	12.30	199.07	4.24	
8	黒曜石	高 原 山 甘 湯 沢 群		3					4	4	13		46	11	4			85	18.44	168.81	4.50	
	埴輪質頁岩												1					6	1.30	63.05	1.38	
チャート												1						12	2.60	29.84	0.80	
土												1						5	1.06	45.69	1.22	
第8ブロック点数合計				3					4	4	16		84	11	6			106	23.43	307.36	8.20	
9	黒曜石	高 原 山 甘 湯 沢 群		3					1	2			12	2				21	4.56	46.17	1.28	
	埴輪質頁岩												1					2	0.43	8.19	0.22	
チャート												1					4	0.87	35.42	0.94		
土												2			1			4	0.87	35.42	0.94	
第9ブロック点数合計				3					1	4		15	2	1				27	5.86	91.73	2.45	
10	黒曜石	高 原 山 甘 湯 沢 群											4		1			6	1.30	19.03	0.51	
	埴輪質頁岩												1					1	0.22	2.05	0.05	
チャート												1						2	0.43	48.96	1.30	
土												1						2	0.43	48.96	1.30	
第10ブロック点数合計												2			1			9	1.95	69.96	1.87	
第3 a 文化層点数合計				4	3			4	1	5	16	32	182	18	18				291	63.12	1050.87	28.03
3b	11	ガラス製黒色安山岩												1					1	0.22	32.78	0.87
		流紋岩												2		1			4	0.87	24.81	0.66
		砂												2					2	0.43	84.04	2.24
		埴輪質頁岩												2	1				6	1.30	9.65	0.26
	硬質頁岩												1					1	0.22	2.25	0.06	
	土												1					1	0.22	2.25	0.06	
	第11ブロック点数合計									1	2		7	1	1				14	3.04	153.33	4.09
	12	埴輪質頁岩												1					34	7.38	46.40	1.24
		硬質頁岩											2	24	6				1	0.22	1.55	0.01
	第12ブロック点数合計												2	25	6				35	7.59	57.95	1.56
13	砂												1					2	0.43	1520.58	40.58	
	埴輪質頁岩												2					2	0.43	17.80	0.47	
	福岡県埴輪質頁岩												1					1	0.22	5.01	0.13	
	硬質頁岩												1					2	0.43	3.59	0.10	
土												1					1	0.22	17.01	0.45		
第13ブロック点数合計												6						8	1.74	1563.20	41.71	
第3 b 文化層点数合計					1	1		1	2	3	2	38	7	1	1				57	12.38	1775.18	47.35
3c	14	流紋岩												1					1	0.22	4.26	0.11
		埴輪質頁岩												1					1	0.22	7.76	0.21
		硬質頁岩												1					29	6.29	287.41	5.97
		福岡県埴輪質頁岩												1					10	2.17	49.08	1.23
土												4					4	0.87	5.57	0.15		
第3 c 文化層点数合計												2		3	1			45	9.76	325.01	8.67	
3d	15	ガラス製黒色安山岩											4	1					5	1.08	15.87	0.37
		埴輪質頁岩												1					1	0.22	1.95	0.05
第3 d 文化層点数合計												1						1	0.22	15.97	0.42	
3e	16	ガラス製黒色安山岩								1				20	7				28	6.07	107.75	2.87
		トコト石												4					4	0.87	15.57	0.42
		黒曜石	高 原 山 甘 湯 沢 群											3					3	0.65	9.40	0.25
		砂												1					2	0.43	280.20	7.47
		埴輪質頁岩												9	1	1			11	2.39	74.28	1.98
		硬質頁岩												2					2	0.43	3.55	0.09
ホルンフェルト												4	1				6	1.30	12.39	0.33		
チャート												1					1	0.22	2.46	0.06		
第3 e 文化層点数合計									1	1		42	9	1	1			56	12.15	903.14	13.42	
3	単独	ガラス製黒色安山岩												2					2	0.43	26.56	0.71
		砂												1					1	0.22	25.04	0.67
第3 文化層単独出土点数合計													3					3	0.65	51.60	1.38	
第3 文化層点数合計				5	3	1	5	1	7	20	38	2	318	38	19	1	1	2	461	100.00	3748.07	100.00
点 数 組 成 比				1.08	0.65	0.22	1.08	0.22	1.52	4.34	8.24	0.43	68.96	8.24	4.12	0.22	0.22	0.43	100.00			

第16表 第3 a文化層器種石材組成表

石材	器種	黒曜石産地推定地	ナイフ	台	削	搔	楔	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥	砕	石	点数 総計	
			形石器	形石器	器	器	形石器	片	片	片	片	核		
黒曜石	流紋岩	高原山甘湯沢群	4	3	3			5	13	21	121	18	11	199
ガラス質黒色	流紋岩	安山岩									2			2
砂											3			3
珪質頁岩										2			1	21
硬質頁岩									1					1
ホルンフェルト											1			1
チャート					1			1	3		26		1	32
玉髓						1		2	5		16		3	27
点数	総計		4	3	4	1	5	16	32	192	18	16	291	

第17表 第3 a文化層ブロック別組成表

文化層	ブロック	石材	黒曜石産地推定地	ナイフ	台	削	搔	楔	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥	砕	石	点数 合計	点数 比 (%)	重量 合計 (g)	重量 比 (%)		
				形石器	形石器	器	器	形石器	片	片	片	片	核						
3a	6	ガラス質黒色安山岩	高原山甘湯沢群								2				2	0.89	836	0.80	
		流紋岩									1				1	0.34	0.69	0.07	
		砂		1				1	4			24		5	35	12.03	16743	15.93	
		珪質頁岩										5				5	1.72	1207	1.15
		硬質頁岩										1	13			14	4.81	74.04	7.10
		ホルンフェルト										1				1	0.34	1.14	0.11
		チャート								1			13			14	4.81	44.52	4.24
玉髓								2	2	9			2	15	5.15	11040	10.51		
第6ブロック点数合計				1			1	7	4	68			7	88	30.24	42271	40.22		
7	7	流紋岩	高原山甘湯沢群			2				4	5	35	5	1	52	17.87	123.66	11.96	
		黒曜石										1			1	0.34	19.67	1.87	
		珪質頁岩										1				1	0.34	7.65	0.73
		チャート				1						1				3	1.03	7.65	0.73
玉髓										1			1	0.34	0.53	0.05			
第7ブロック点数合計					3			4	5	40		5	1	59	20.77	159.07	15.14		
8	8	黒曜石	高原山甘湯沢群		3			4	4	13	46	11	4	85	29.21	160.31	16.06		
		珪質頁岩								1	4			6	2.06	63.05	6.00		
		チャート								1	10			1	12	4.12	29.84	2.84	
		玉髓									1	4			5	1.72	45.85	4.34	
第8ブロック点数合計					3			4	4	16	64	11	6	108	37.11	307.35	29.25		
9	9	黒曜石	高原山甘湯沢群		3		1		2	1	12		2	21	7.22	48.17	4.58		
		珪質頁岩								1	1			2	0.69	8.19	0.78		
		チャート								1	2			1	4	1.37	35.42	3.37	
		玉髓									1	2			2	0.69	91.78	8.73	
第9ブロック点数合計				3		1		2	3	15		2	27	9.28	91.78	8.73			
10	10	黒曜石	高原山甘湯沢群						1	4				6	2.06	19.03	1.81		
		珪質頁岩								1				1	0.34	2.05	0.20		
		チャート									1				2	0.69	48.88	4.65	
		玉髓								1					2	0.69	69.96	6.66	
第10ブロック点数合計									2	5			1	9	3.09	69.96	6.66		
全体点数合計				4	3	4	1	5	16	32	192	18	16	291	100.00	36087	100.00		
点数組成比				1.37	1.03	1.37	0.34	1.72	5.50	11.00	65.88	6.19	5.50	100.00					

第18表 第3a文化層母岩別ブロック組成表

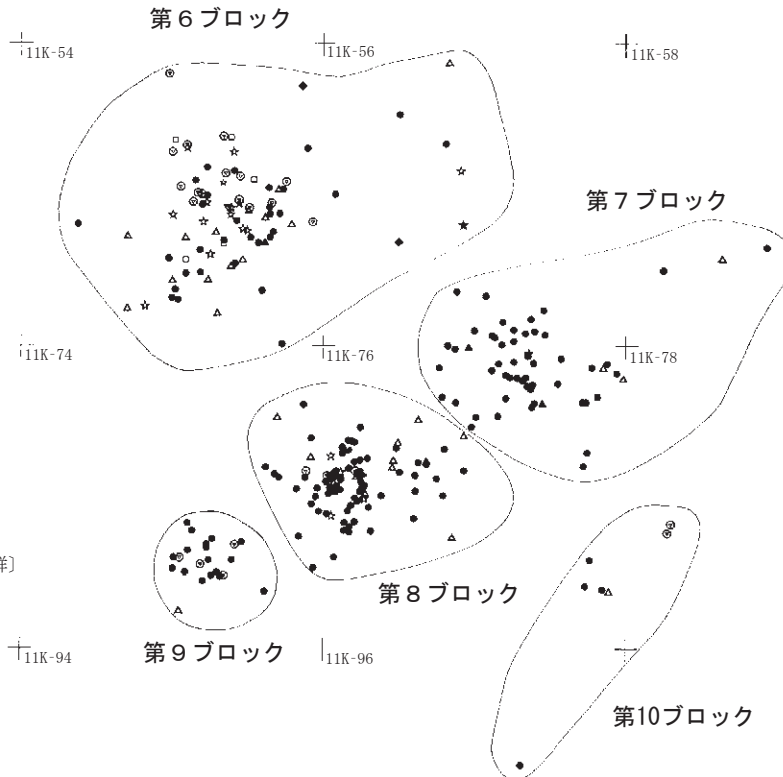
石 材	母 岩 番 号	合 計 ・ 接 合 番 号	ブ ロ ッ ク 出 土 ブ ロ ッ ク 数	ブロック					点 数 合 計	重 量 合 計 (g)
				6	7	8	9	10		
黒 輝 石	301 [高原山甘湯沢群]	総 数	5	12	18	52	16	4	102	172.33
		接304	5	1	4	15	6	2	28	88.73
		接305	1			3			3	14.96
		接306	2	1		2			3	3.75
		接307	1			2			2	7.78
		接308	2		1	1			2	6.97
		接309	2	1		1			2	6.34
		接310	1	2					2	7.63
		接311	2	1			2		3	7.10
		接312	1				2		2	0.96
	接313	2				3	1	4	5.11	
	接314	2		1				2	3.14	
	接315	1				2		1	2	0.62
	302 [高原山甘湯沢群]	総 数	5	14	29	8	3	2	56	211.58
		接316	2		5	4			9	75.91
		接317	2	1	3				4	27.77
		接318	1	3					3	12.07
		接319	1		6				6	10.37
		接320	1	2					2	1.70
		接321	2		1		1		2	15.88
		接322	2		1			1	2	2.79
		接323	1	2					2	7.80
		接324	1		3				3	4.17
	303 [高原山甘湯沢群]	総 数	4	7	5	21	2		35	100.14
		接325	2			3	1		4	14.24
		接326	1			3			3	14.96
		接327	1	2					2	7.96
	304 [高原山甘湯沢群]	接328	1			4			4	7.15
		総 数	2	2		4			6	45.05
		接329	2	2		1			3	29.42
	合計	接330	1			3			3	15.63
		合 計	5	35	52	85	21	6	199	529.10
		302	総 数	1	1				1	5.82
ガラス質黒色安山岩	303	総 数	1	1				1	2.74	
	合 計	1	2					2	8.36	
流 紋 岩 砂	301	総 数	2	1	2			3	6.25	
	303	総 数	1	5				5	12.07	
珪 質 頁 岩	301	接334	1	3				3	7.79	
		総 数	2	11		1		12	72.72	
		接335	1	6				6	32.04	
		接336	1	2				2	31.07	
	302	接337	1	2				2	4.37	
		総 数	2		1	4		5	77.31	
		接338	1			2		2	33.80	
	303	接339	2		1	2		3	43.51	
		総 数	2	3		1		4	7.33	
	合 計	3	14	1	6			21	157.36	
硬 質 頁 岩	305	総 数	1	1				1	1.14	
	301	総 数	1	1				1	3.46	
ホ ル ン フェ ル ス チ ャ ー ト	301	総 数	5	5	1	4	1	1	12	26.26
		接346	2	1	1			2	7.76	
		接347	1	2				2	2.87	
	302	総 数	3	1		6	1		8	27.51
		接348	1			2		2	8.74	
		接349	2	1		1		2	5.49	
	303	接350	1			2		2	5.52	
		総 数	1	8				8	24.78	
		接351	1	3				3	13.87	
	304	接362	1	2				2	4.92	
		総 数	2		2	2		4	13.70	
		接353	2		1	1		2	11.60	
	合 計	5	14	3	12	2	1	32	92.25	
	五 觔	301	総 数	5	15	1	5	4	2	27
接354			4	8		3	3	2	16	185.99
点 重 量 合 計 (g)	合 計	合 計		88	59	108	27	9	291	1050.87

第19表 第3 a文化層母岩別器種組成表

石 材	母 岩 番 号	總 数 ・ 接 合 番 号	ナ イ フ 形 石 器	台 形 様 石 器	削 器	掻 器	埴 形 石 器	二 次 加 工 の あ る 剥 片	微 細 剥 離 痕 の あ る 剥 片	剥 片	碎 片	石 核	点 数 合 計	
黒 曜 石	301 〔高原山甘湯沢群〕	總 数	3		1		4	7	12	54	17	4	102	
		接304	3		1			3	11	9		1	28	
		接305					1					2	3	
		接306					3						3	
		接307									1		1	2
		接308							2					2
		接309									2			2
		接310									2			2
		接311									3			3
		接312									2			2
		接313							1		3			4
		接314									2			2
		接315								1	1			2
		302 〔高原山甘湯沢群〕	總 数		1		2		3	6	41	3	1	56
	接316				1				6	1			9	
	接317							1		3			4	
	接318									1		2	3	
	接319							1		5			6	
	接320									2			2	
	接321					1				1			2	
	接322									2			2	
	接323									2			2	
	接324									3			3	
	303 〔高原山甘湯沢群〕	總 数		3			1	2	3	24	1	1	35	
		接325							2	2			4	
		接326		3									3	
		接327								1		1	2	
		接328								4			4	
	304 〔高原山甘湯沢群〕	總 数						1		2		3	6	
		接329								1		2	3	
		接330							1	1		1	3	
	合 計			4	3	3		5	13	21	121	18	11	199
	ガラス質黒色安山岩	302	總 数								1			1
		303	總 数								1			1
	合 計										2			2
	流 紋 岩 砂	301	總 数								3			3
303		總 数								5			5	
珪 質 頁 岩	301	接331								3			3	
		總 数							1	11			12	
		接335								6			6	
		接336							1	1			2	
	302	接337								2			2	
		總 数								4		1	5	
	303	接338								1		1	2	
		接339								3			3	
	合 計								1	3		1	4	
	硬 質 頁 岩	305	總 数							1				1
301		總 数								1			1	
ホ ル ン フ ェ ル ス チ ャ ー ト	301	總 数			1			1		10			12	
		接345			1					1			2	
		接347									2		2	
	302	總 数							1	6		1	8	
		接348								1		1	2	
		接349								2			2	
		接350								2			2	
	303	總 数								8			8	
		接351								3			3	
		接352								2			2	
	304	總 数							2	2			4	
		接353							2	2			2	
	合 計					1		1	3	26		1	32	
	五 髓	301	總 数				1		2	5	16		3	27
			接354				1		2	5	6		2	16
	点 数 合 計			4	3	4	1	5	16	32	192	18	16	291



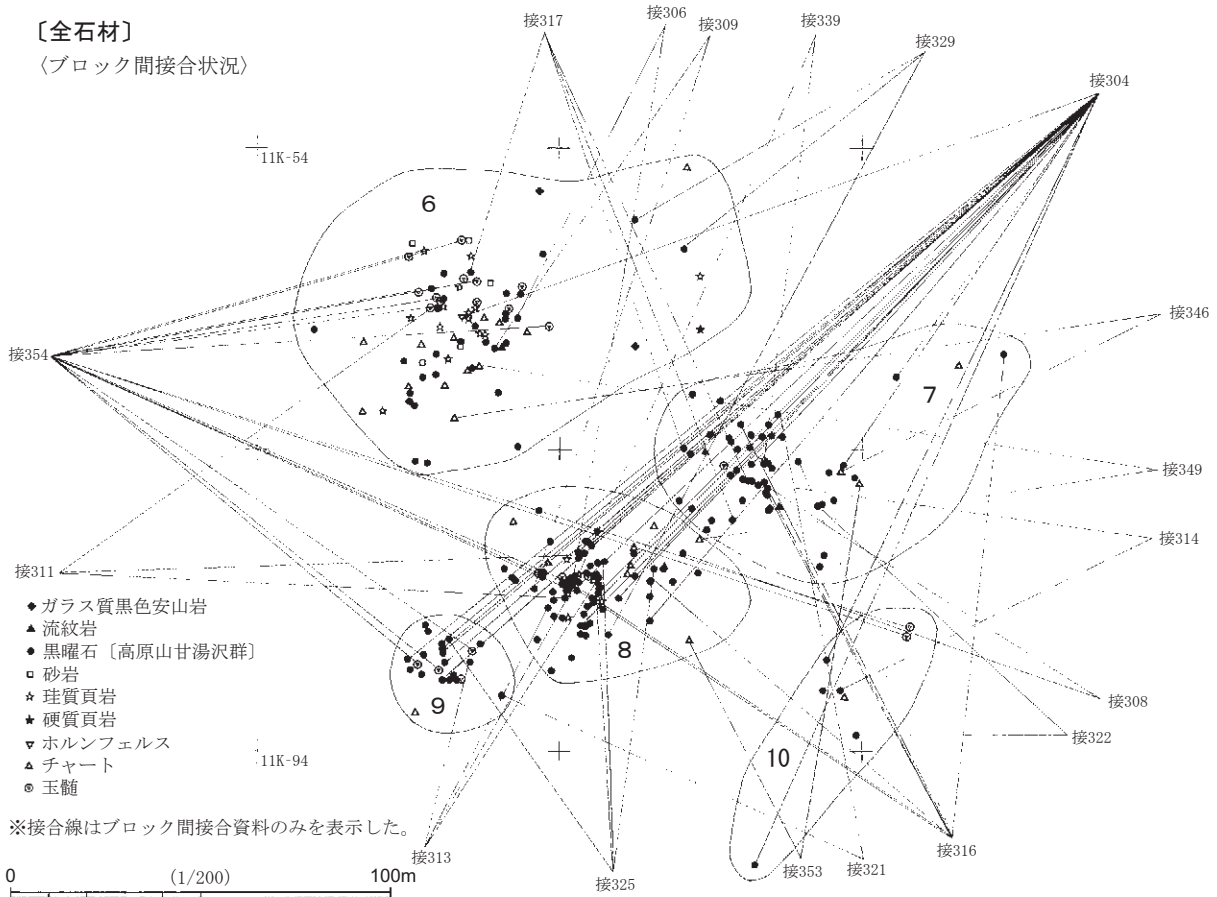
〔全石材〕



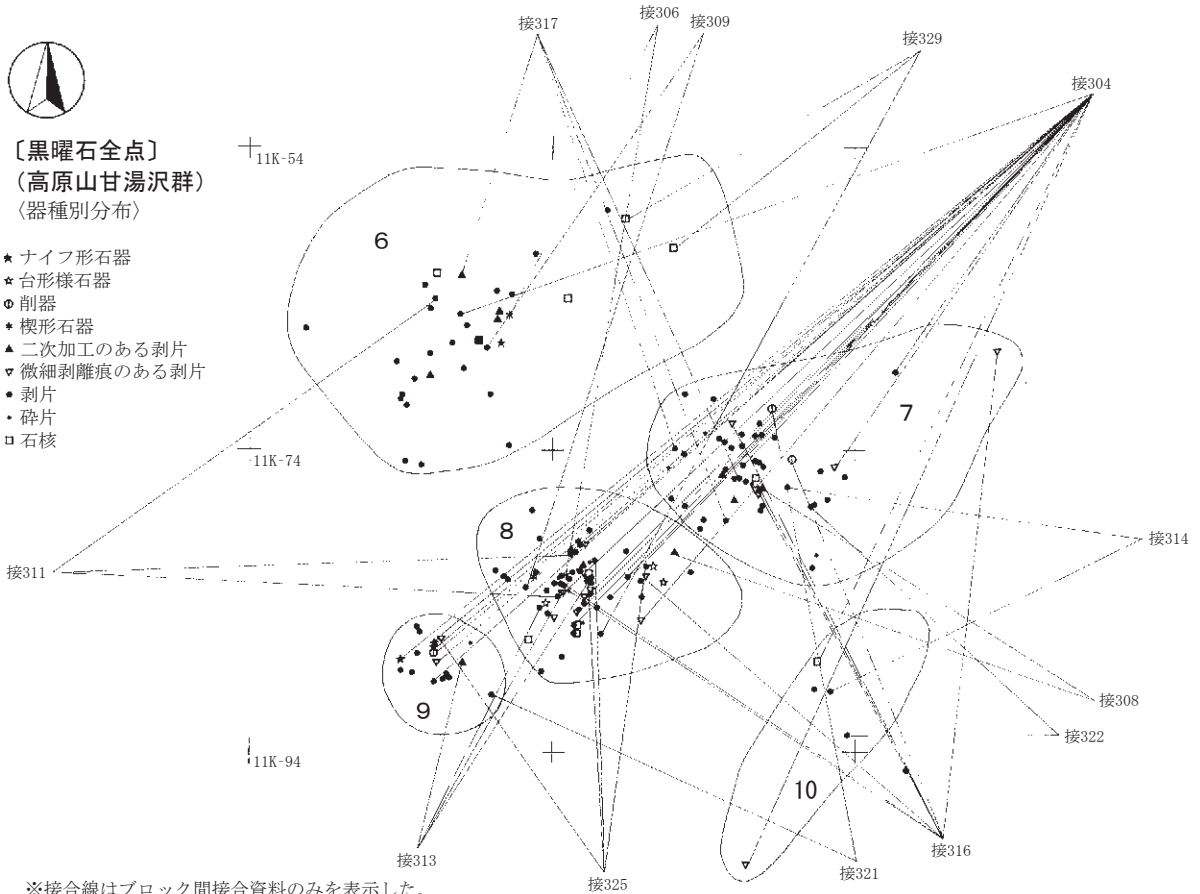
- ◆ ガラス質黒色安山岩
- ▲ 流紋岩
- 黒曜石〔高原山甘湯沢群〕
- 砂岩
- ☆ 珪質頁岩
- ★ 硬質頁岩
- ▼ ホルンフェルス
- △ チャート
- ◎ 玉髄

〔全石材〕

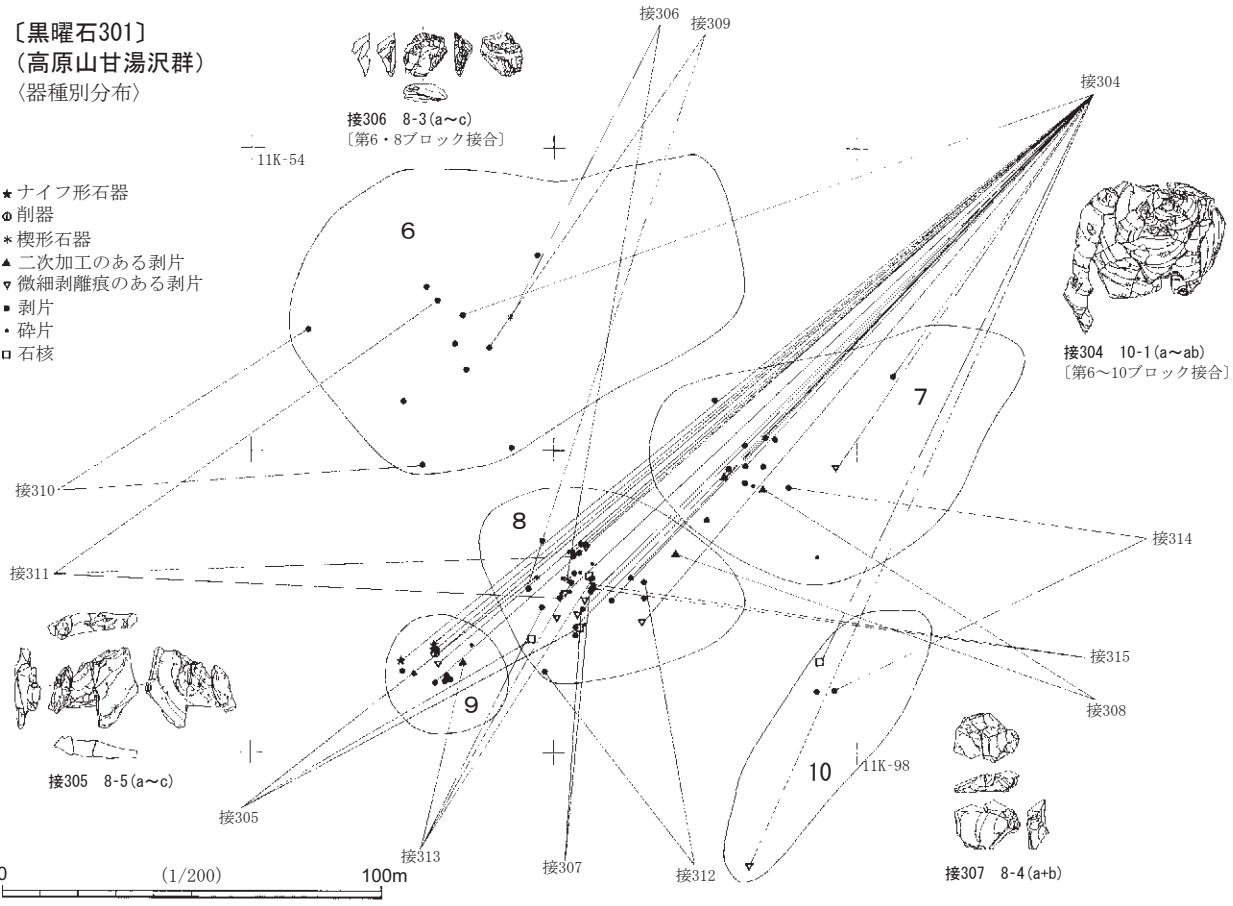
〈ブロック間接合状況〉



第24図 第3 a文化層石材別分布 (1) [全点]



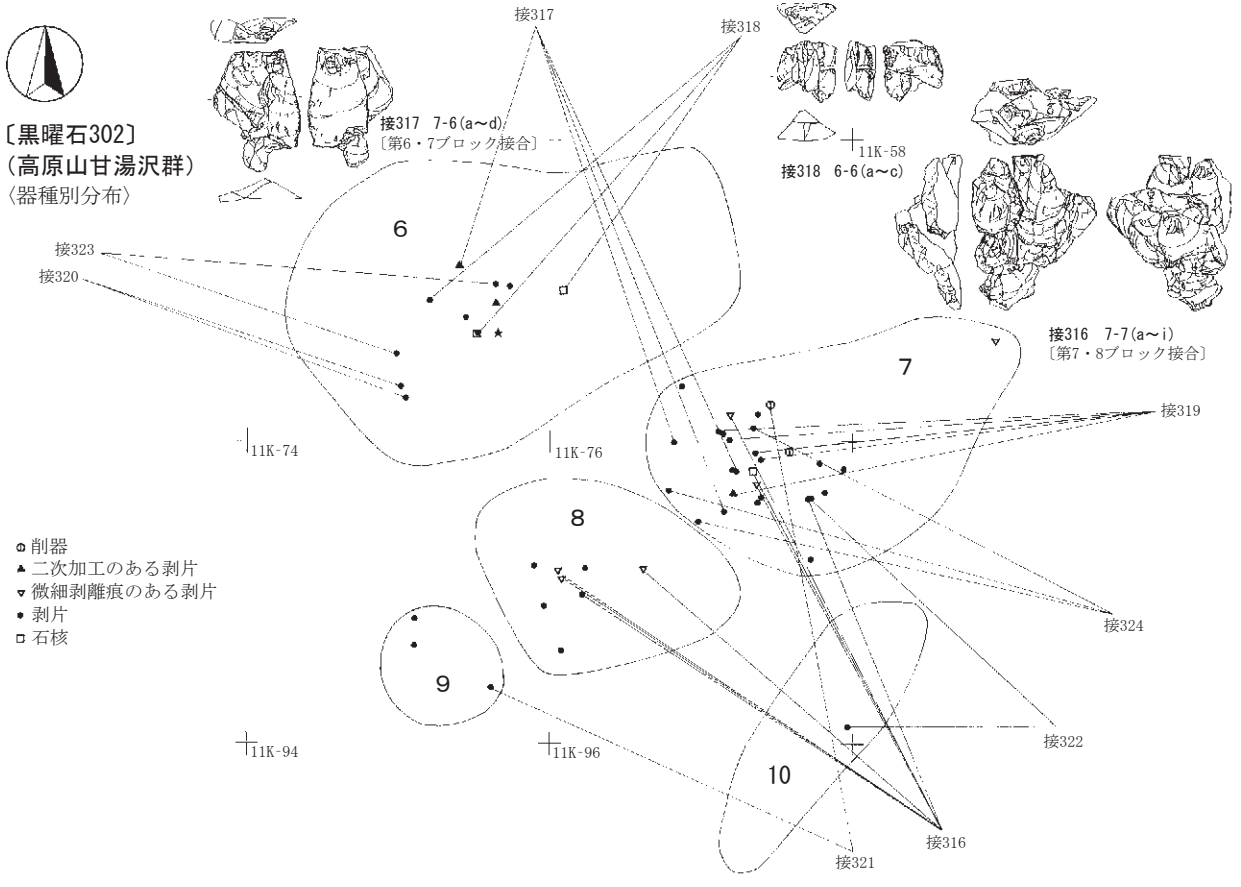
※接合線はブロック間接合資料のみを表示した。



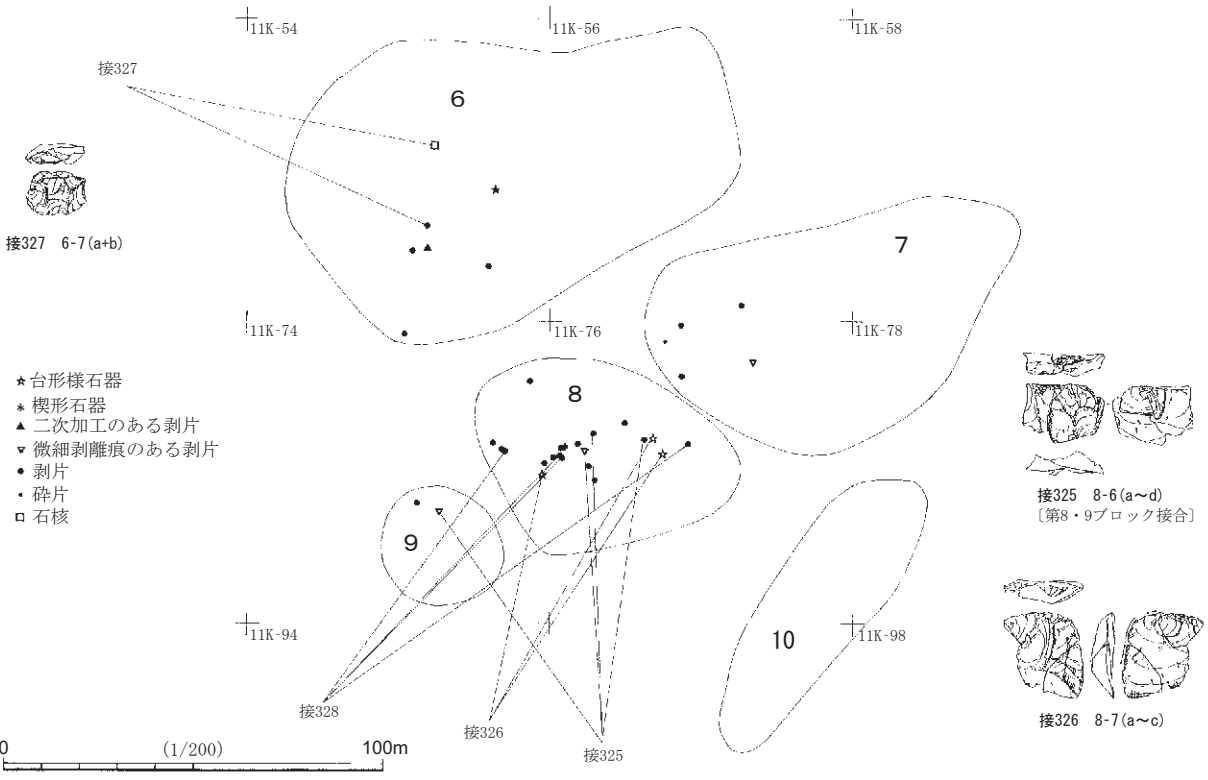
第25図 第3 a文化層石材別分布 (2) [黒曜石 (1)]



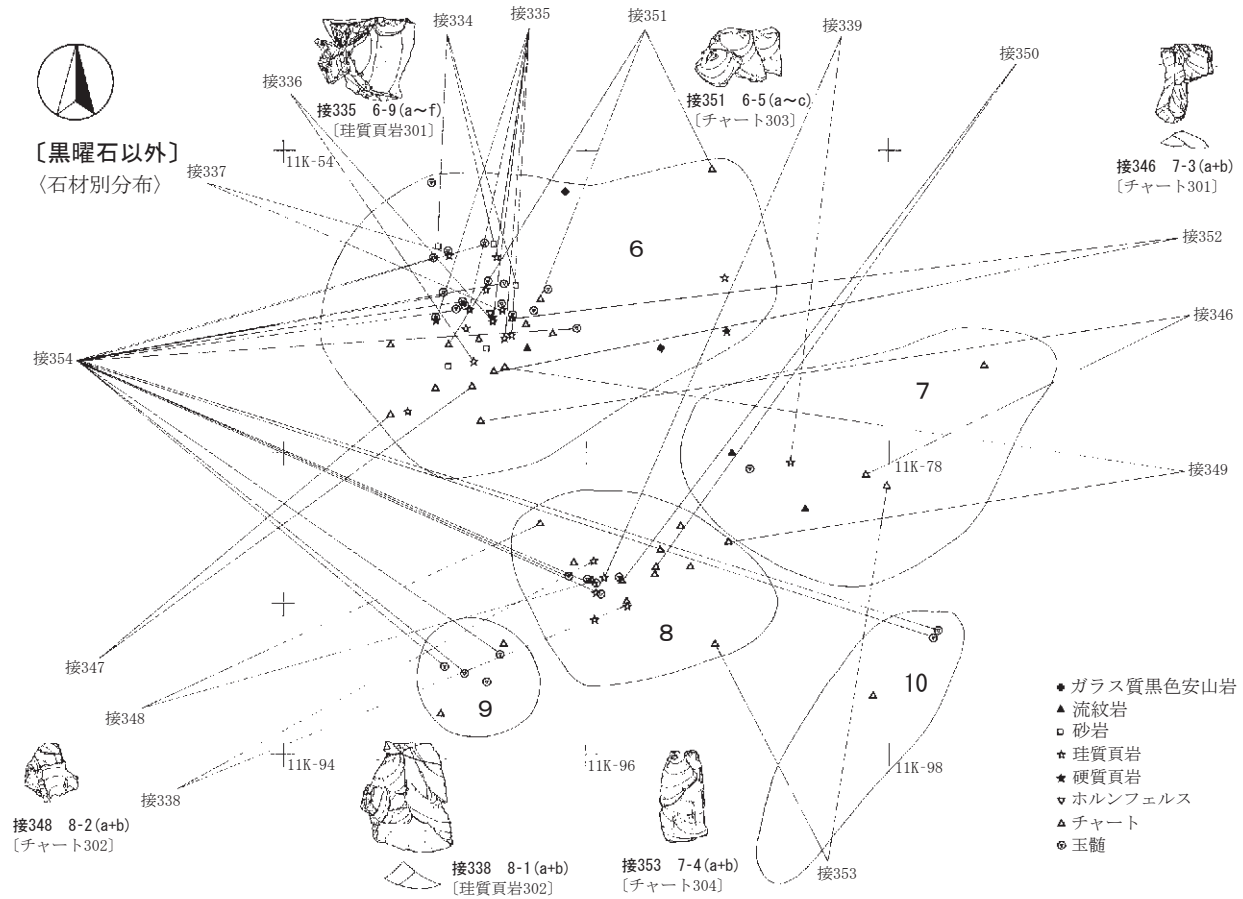
[黒曜石302]
(高原山甘湯沢群)
(器種別分布)



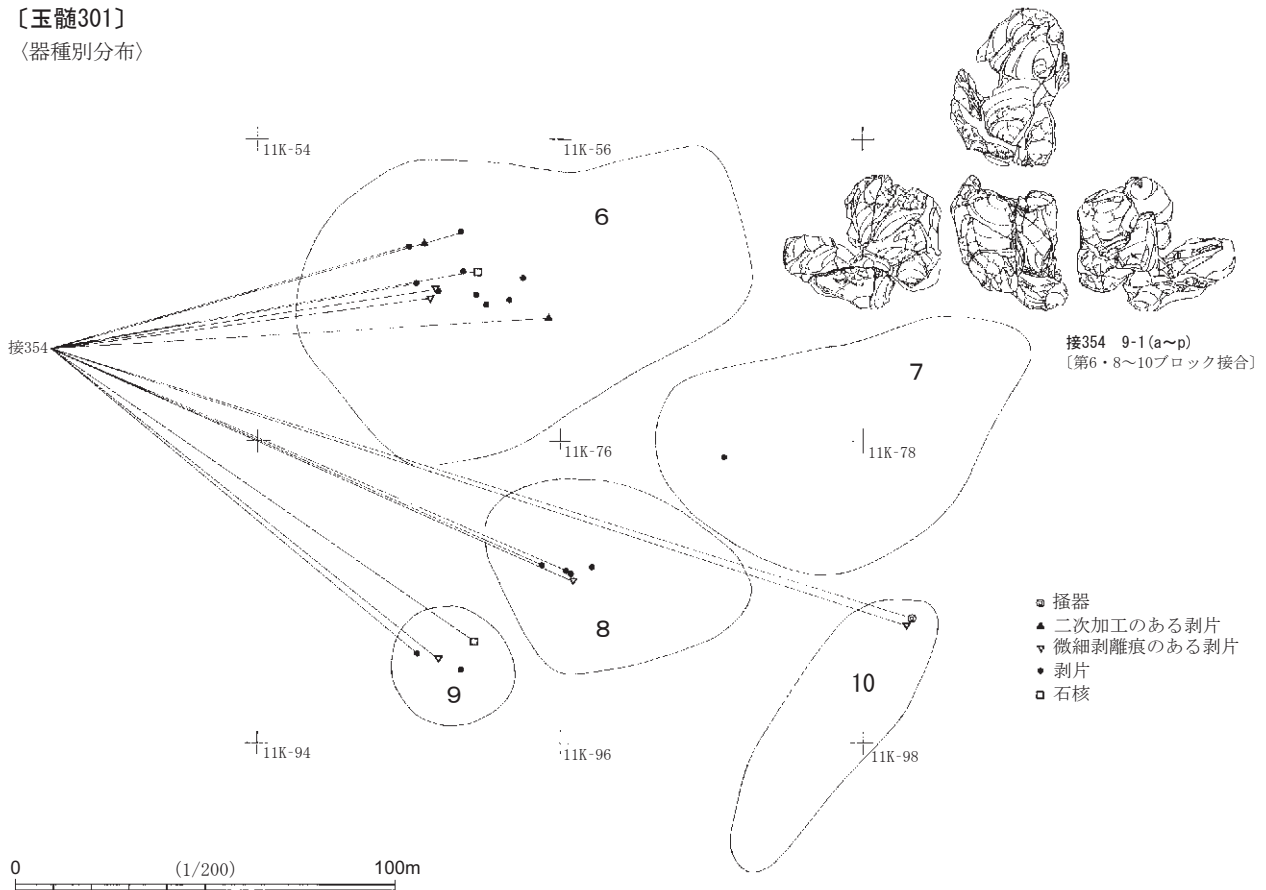
[黒曜石303]
(高原山甘湯沢群)
(器種別分布)



第26図 第3 a文化層石材別分布 (3) [黒曜石 (2)]



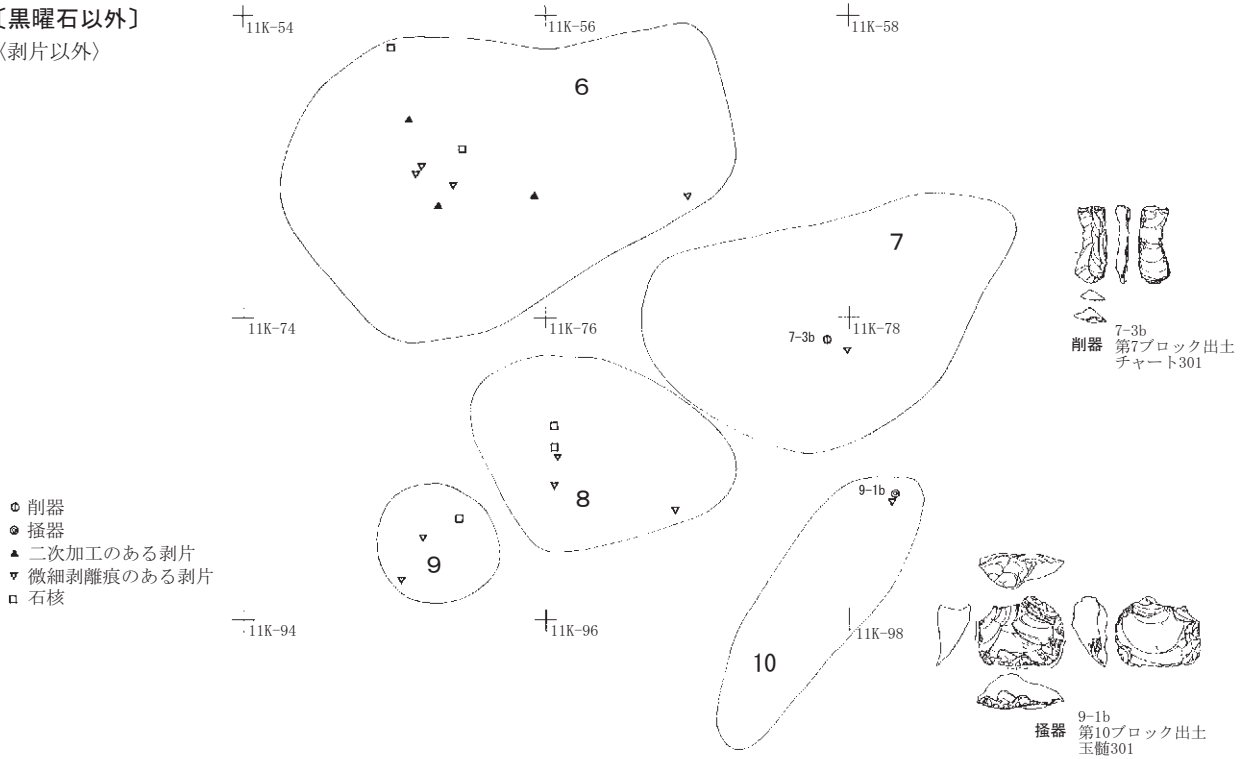
〔玉髄301〕
〈器種別分布〉



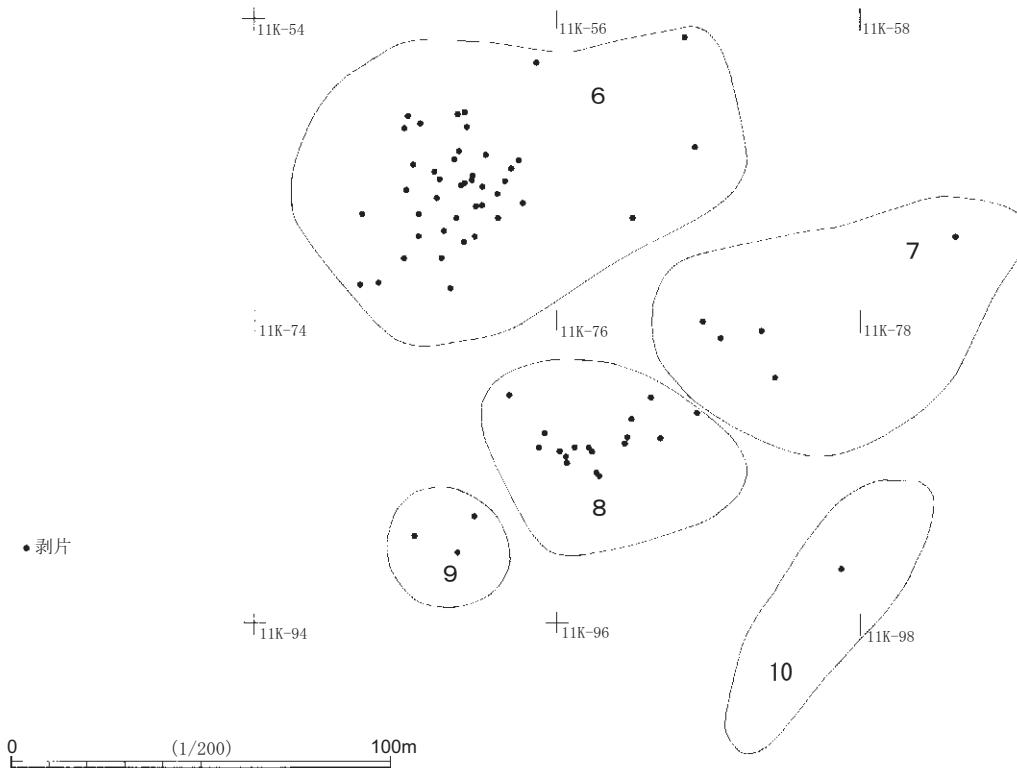
第28図 第3 a文化層石材別分布 (5) [黒曜石以外 (1)]



〔黒曜石以外〕
 (剥片以外)



〔黒曜石以外〕
 (剥片)



第29図 第3 a文化層石材別分布 (6) [黒曜石以外 (2)]

る剥片16点、微細剥離痕のある剥片32点、剥片192点、碎片18点、石核16点である。主要器種は、台形様石器・ナイフ形石器・搔器である。3点出土している台形様石器は第2文化層においても出土しており、両文化層の様相を検討するには重要な器種といえよう。

石材組成は、黒曜石199点、チャート32点、玉髓27点、珪質頁岩21点、砂岩5点、流紋岩3点、ガラス質黒色安山岩2点、硬質頁岩1点、ホルンフェルス1点である。黒曜石の占める割合が68%と非常に高く、産地推定地はすべて高原山甘湯沢群であった。

母岩別の組成は、第18表にブロック別、第19表に器種別の組成表をそれぞれ掲載した。母岩は9石材・18母岩で構成される。主な母岩は、黒曜石301～303、珪質頁岩301、チャート301である。

(3) 分布状況 石材別に分布状況を示したものが第24～29図である。母岩別資料一覧は第18・19表のとおりである。ブロック間接合が多量で、一つのブロック群を形成している。このブロック群は、全体で19m×19mの範囲に分布している。明確な円環状の分布を呈しておらず、下総台地でよく見られる「環状ブロック群」とはやや異なる分布形状をしている。

分布状況を検討するために、石材別・母岩別に分布状況をみていくことにしよう。

①全石材 (第24図)

全石材の分布状況は、第24図のとおりである。上段が接合線のないもの、下段がブロック間接合のある資料のみを接合線で示したものである。ブロック間接合資料は、総数18資料である。この内訳は、黒曜石が13資料、チャート3資料、玉髓1資料、珪質頁岩1資料である。黒曜石の占める割合が非常に高い。この傾向は、石材組成の比率とほぼ一致する。接合資料は、42資料のうちブロック間接合資料が18資料(43%)とかなり高い割合を示す。

②黒曜石 (第25～27図)

黒曜石の接合資料は、27資料である。そのうちブロック間接合資料は13資料(48%)でかなり高い割合を示す。第25図上段はブロック間接合のある資料のみを接合線で示したものである。第6～10ブロック間で多量に接合している。これらを母岩別にみていくことにしよう。黒曜石は、黒曜石301～304の4母岩で構成される。

黒曜石301の分布状況は、第25図下段である。黒曜石301は総計102点出土している。接合資料12資料のうち、ブロック間接合資料は7資料である。接304(接合資料は以後、接304のように表記する)は、第6～10ブロックのすべてとの接合関係が見られ、黒曜石301の母岩消費過程をみるには良好な接合資料である。ナイフ形石器3点・削器1点・二次加工のある剥片4点・微細剥離痕のある剥片11点を含む28点で構成される。このうち半数が第8ブロックから出土している。製品であるナイフ形石器と削器は、第9ブロックから出土している。その他のブロック間接合資料の6資料は、出土ブロック数がすべて2ブロックである。このうち、第8ブロックとの接合関係をもつものが5資料である。石核は、接304・305・307で見られることから、黒曜石301は分割した剥片を素材にして、剥片剥離を行っていることがうかがえる。黒曜石301は、第6～10ブロックのすべてのブロックから出土しており、第8ブロックを中心に、分割した剥片を素材として剥片剥離を行っている。

黒曜石302の分布状況は、第26図上段である。黒曜石302は総計56点出土している。黒曜石301と同様に、第6～10ブロックのすべてのブロックから出土している。接合資料9資料のうち、ブロック間接合資料は4資料である。ブロック間接合資料は、出土ブロック数がすべて2ブロックであり、第7ブロックとの接

合関係をもつものである。これらのことから、第7ブロックを中心にして剥片剥離が行われたことがうかがえる。

黒曜石303の分布状況は、第26図下段である。黒曜石303は総計35点出土している。第6～9ブロックから出土しており、第8ブロックの出土点数が最も多い。接合資料4資料のうち、ブロック間接合資料は、第8ブロックと第9ブロックとで接合した接325の1資料のみである。

黒曜石304は総計6点出土している。第6・8ブロックから出土しており、第8ブロックの出土点数が多い。接合資料2資料のうち、ブロック間接合資料は、接329の1資料である。

第27図は黒曜石の器種別分布状況を示したものである。上段の剥片・碎片以外の分布と下段の剥片・碎片の分布はほぼ一致する。分布域がやや異なる点としては、第6ブロックにおいて東側に石核がまとまって出土していることがあげられる。ナイフ形石器・台形様石器は第8ブロックに集中している。

③黒曜石以外（第28・29図）

第28図上段は、黒曜石以外の石材別分布状況を示したものである。第6ブロックの出土点数が最も高い。この傾向は、黒曜石が第7・8ブロックに集中していた点で異なる。黒曜石以外の石材は、ガラス質黒色安山岩・流紋岩・砂岩・珪質頁岩・硬質頁岩・ホルンフェルス・チャート・玉髄で構成される。これらの石材は、14母岩で接合資料は15資料である。ブロック間接合資料は、5資料になる。

第28図下段は、玉髄301の分布状況である。玉髄301は総計27点出土している。第6～10ブロックから出土しており、第6ブロックの出土点数が大半を占める。搔器1点、二次加工のある剥片2点、微細剥離痕のある剥片5点、剥片16点、石核3点で構成される。接合資料は接354の1資料のみで、第6・8～10ブロックとの接合関係が見られる。黒曜石301の接304に次いで良好な接合資料である。第10ブロックは2点しかしていないが、この母岩の唯一の製品である搔器と微細剥離痕のある剥片が出土している。

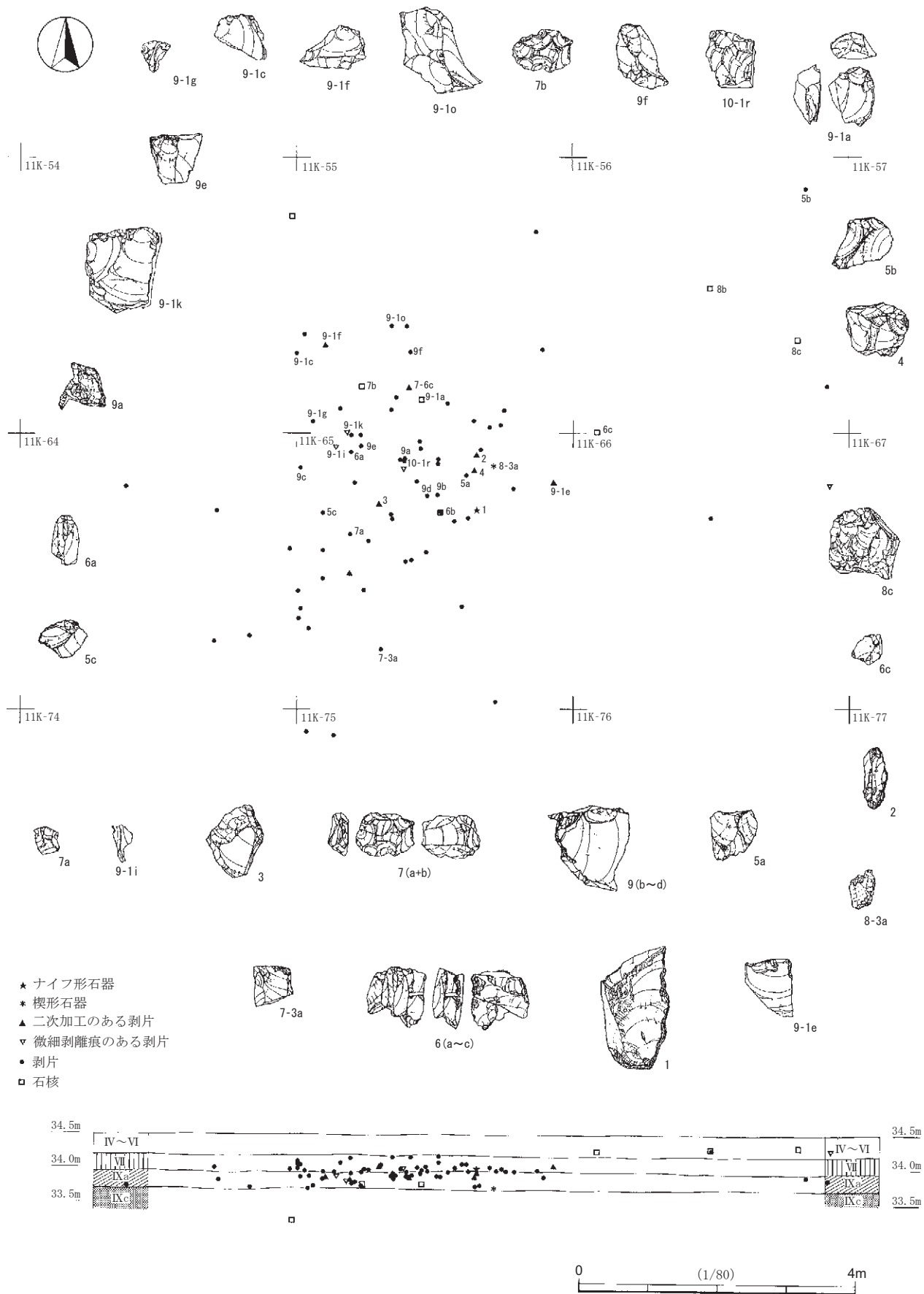
第29図は黒曜石以外の器種別分布状況を示したものである。黒曜石と同様に、上段の剥片・碎片以外の分布と下段の剥片・碎片の分布はほぼ一致する。

3. 第6ブロック（第30～34図、第20表、図版5・49）

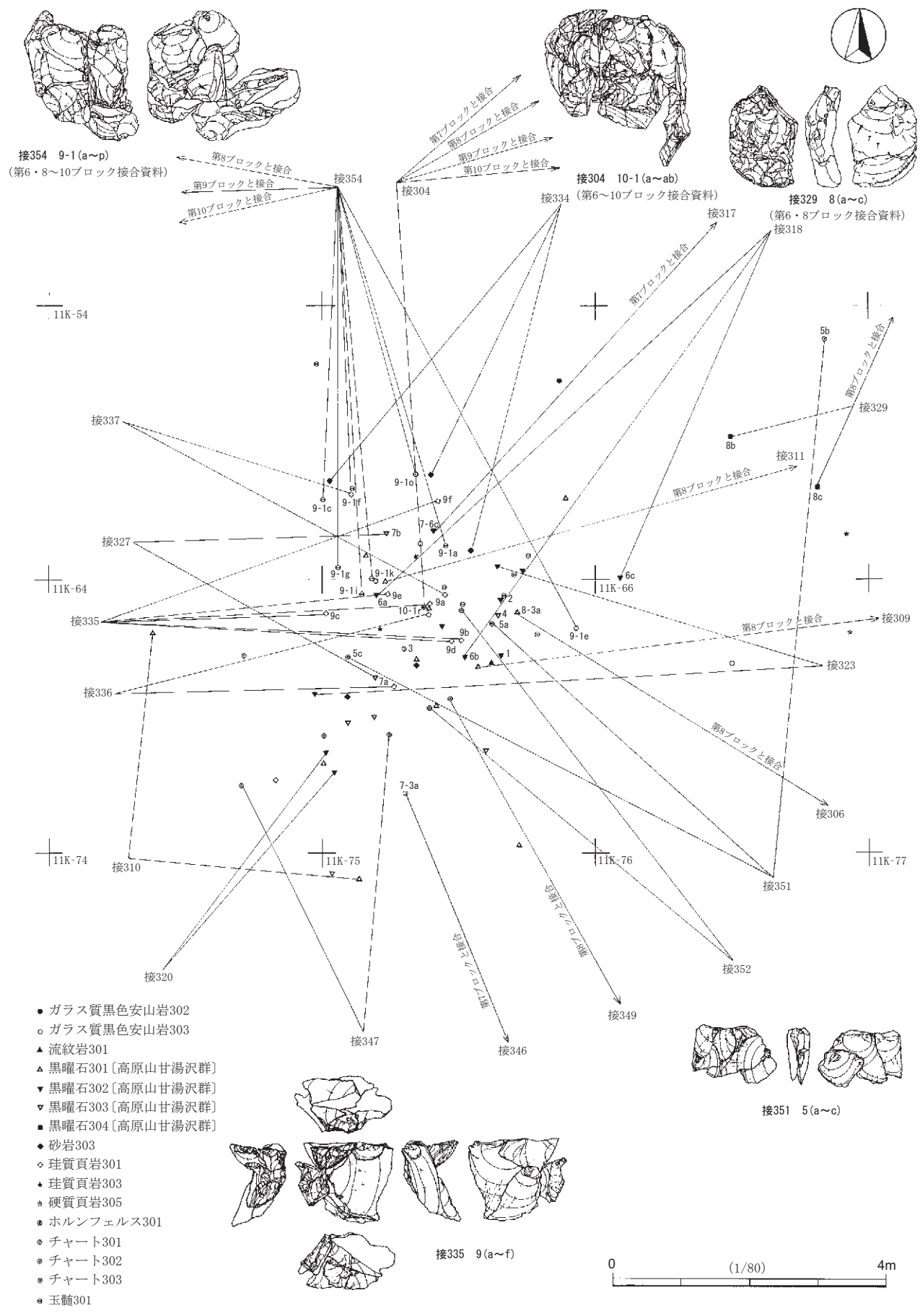
出土状況 11K-54～56・64～66・75グリッドに分布している。第3a文化層のブロック群においては、比較的広い範囲に分布し、北西に位置する。7.5m×10.2mの範囲から88点の石器が出土した。分布を詳細に見ると、南西部と北東部の2か所に集中地点が見られる。南西部は密集しており、剥片が多く出土している。北東部は比較的散漫に分布しており、石核が多く分布する傾向が見られる。接合関係は多量で、ブロック間接合が多く見られる。南西部の集中地点では玉髄301の接354の資料が集中する。出土層位はIXc層からVI層にかけてで、IXa層上部～VII層下部に集中する。

出土遺物 器種組成は、ナイフ形石器1点、楔形石器1点、二次加工のある剥片7点、微細剥離痕のある剥片4点、剥片68点、石核7点である。石材組成は、黒曜石35点、玉髄15点、珪質頁岩14点、チャート14点、砂岩5点、ガラス質黒色安山岩2点、流紋岩1点、硬質頁岩1点、ホルンフェルス1点である。黒曜石の産地推定地は、すべて高原山甘湯沢群である。

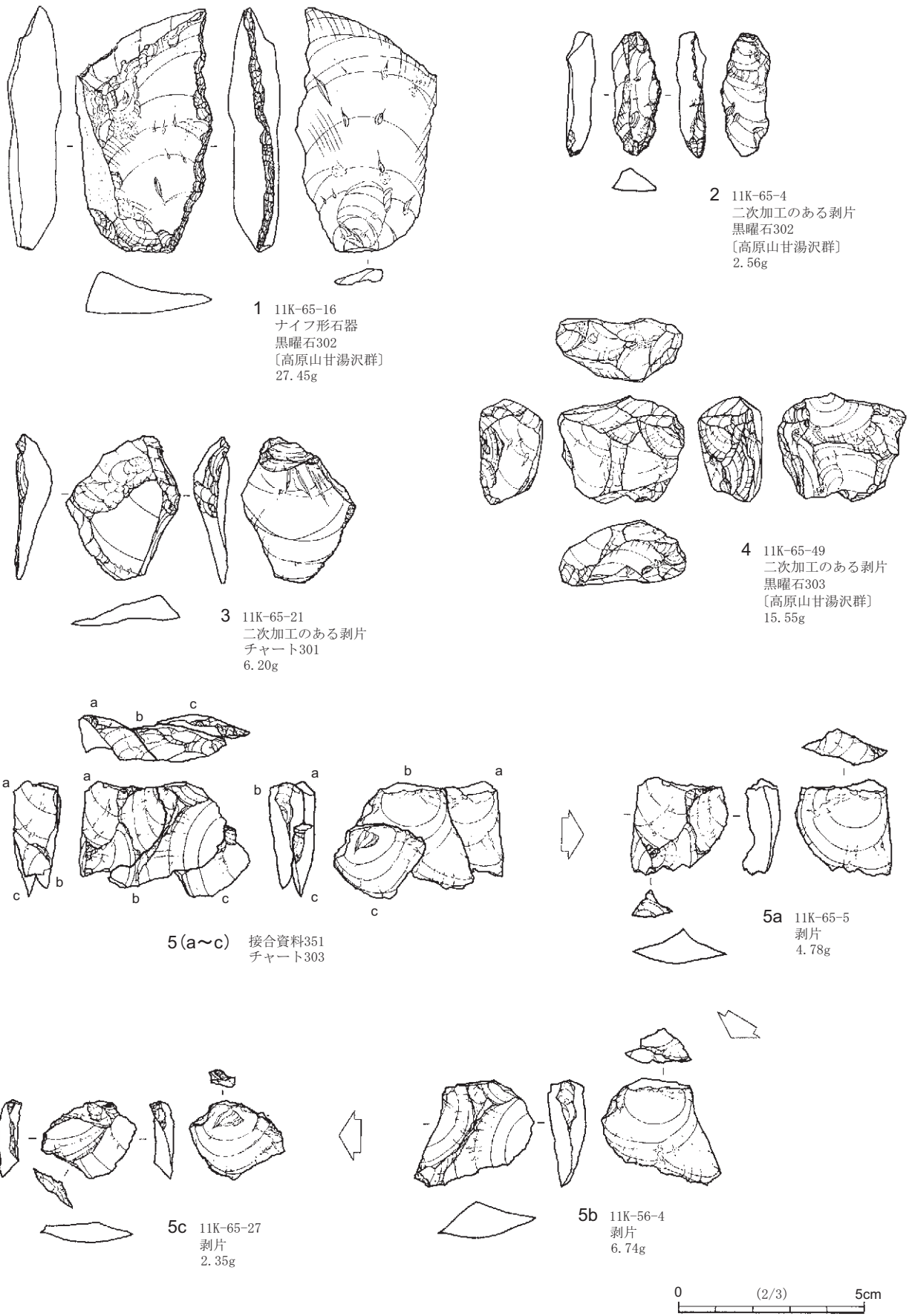
1はナイフ形石器である。厚みのある縦長剥片を素材として、右側縁全体と左側縁下部に粗い調整加工が施されている。左上部の素材剥片の縁辺には微細剥離が見られる。2～4は二次加工のある剥片である。2は細長の縦長剥片を素材として、上下両端に調整加工が施されている。両極剥離によるものである可能



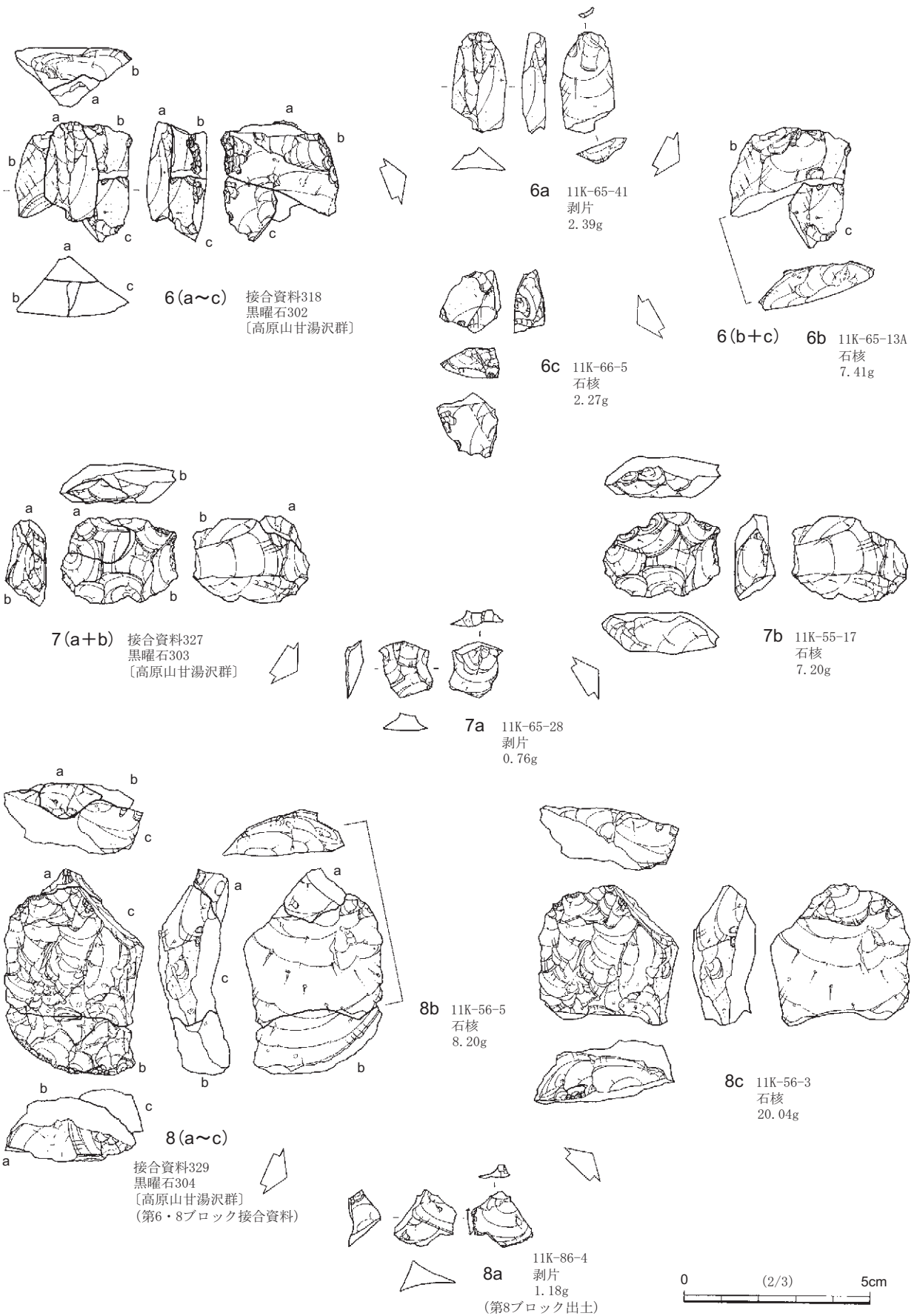
第30図 第3 a文化層第6ブロック器種別分布



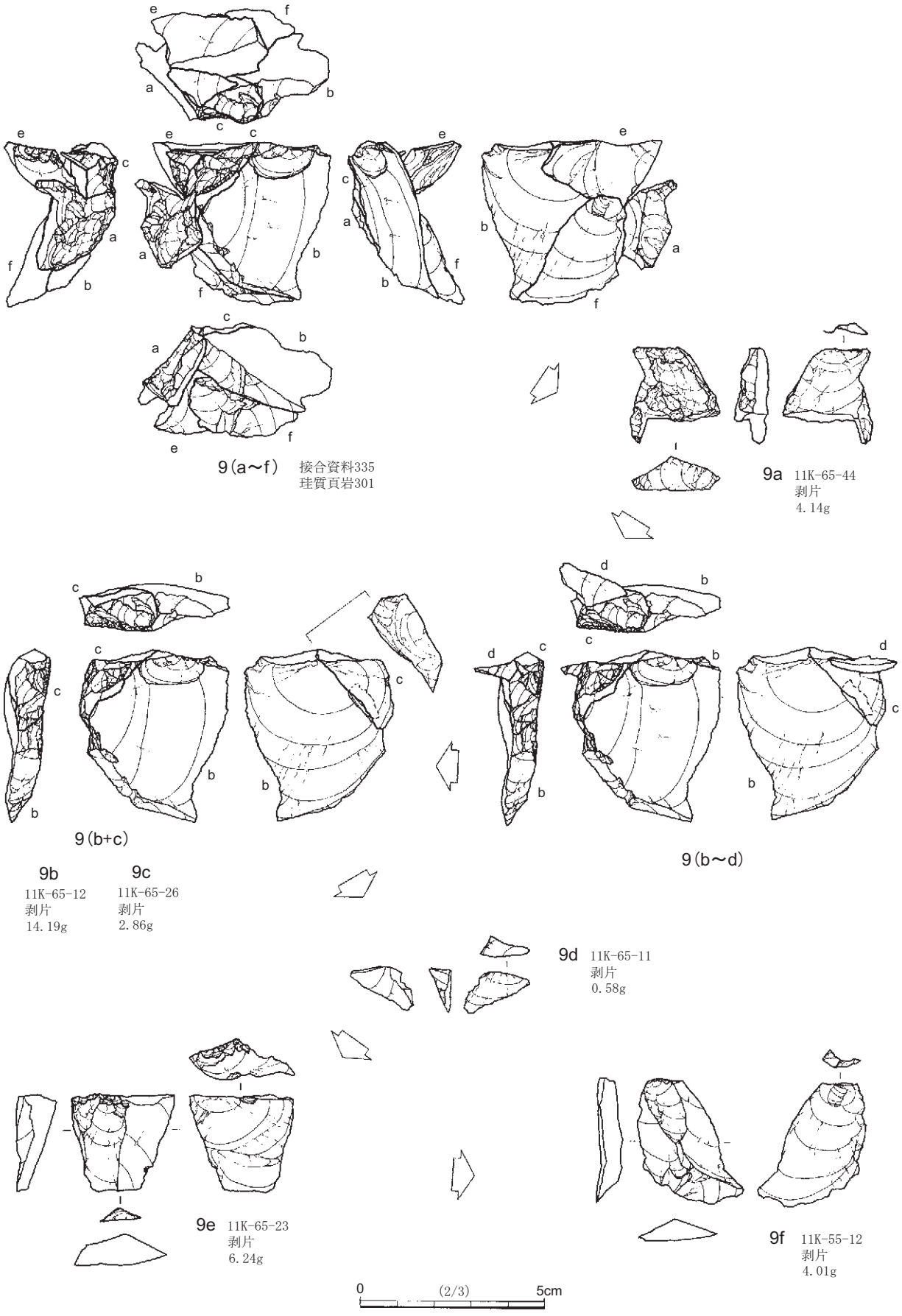
第31図 第3 a文化層第6ブロック母岩別分布



第32図 第3 a文化層第6ブロック出土石器 (1)



第33図 第3 a文化層第6ブロック出土石器 (2)



第34図 第3 a文化層第6ブロック出土石器 (3)

性もあり、楔形石器と分類することもできる。3は板状の剥片を素材として、右側縁上部と裏面上部に粗い調整加工が施されている。4は厚みのある分割剥片を素材として、左側縁に粗い調整加工が施されている。裏面に上下両端から大きな剥離面が見られることから、同一母岩の7(a+b)と同様の剥片剥離が行われた可能性もあり、石核と分類することもできる。

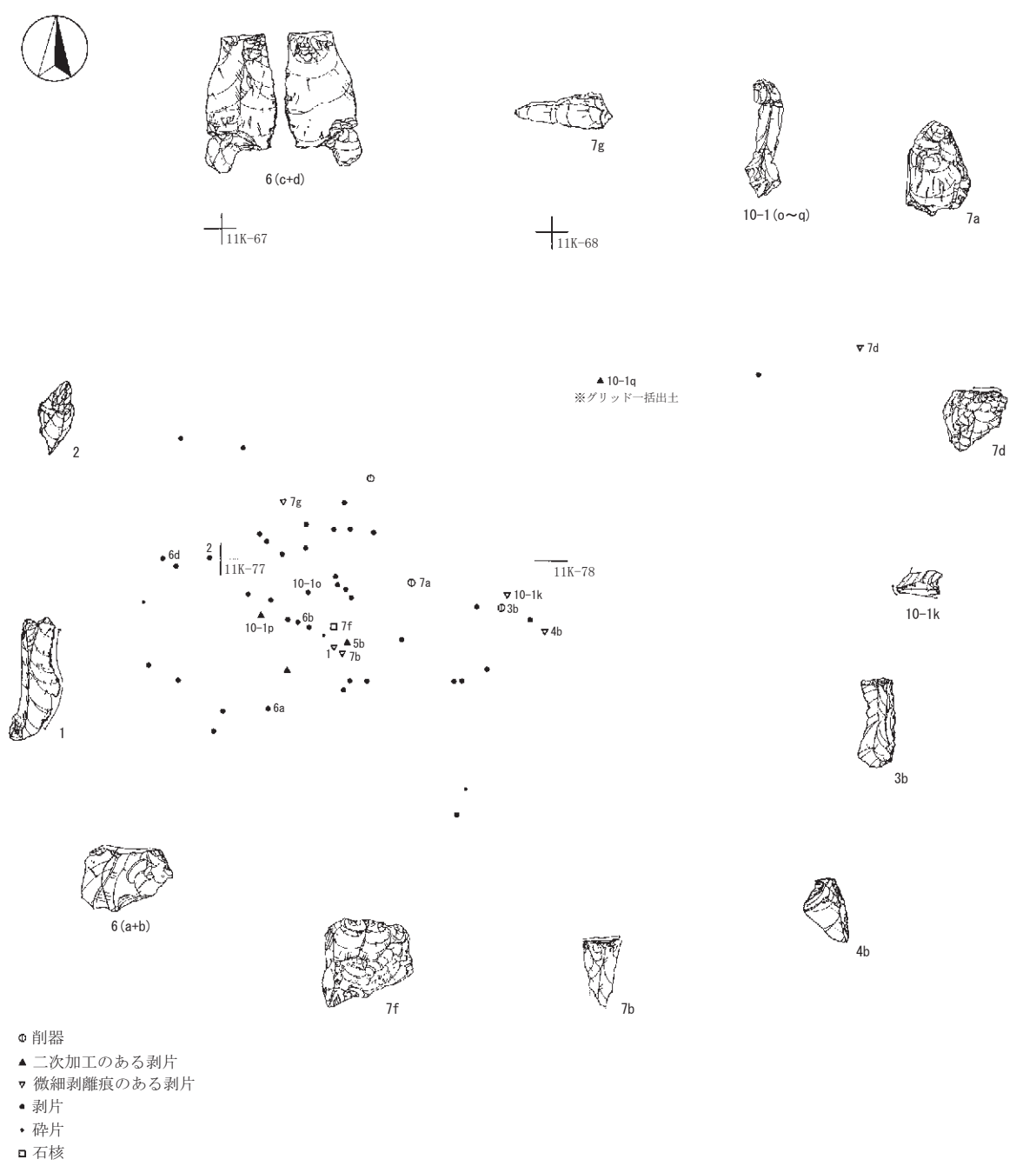
5～9は接合資料である。5(a～c)は、上面左側を打面として、幅広の剥片5aと5bを連続して剥離した後に、打面を右側縁に転移して幅広の剥片5cを剥離している。6(a～c)は分割面を打面として、縦長剥片6aと厚みのある剥片6(b+c)を剥離している。6(b+c)は分割されている。6cは石核として用いられ、小型の剥片が剥離されている。分割した剥片を素材として剥片剥離を行ったことを示す接合資料である。7(a+b)は、盤状の厚みのある剥片を素材として、小型の剥片7aなどを数枚剥離した接合資料である。8(a～c)は、厚みのある縦長剥片8(a～c)を素材として、上下両端を分割した後に、小型の剥片8aを剥離している。9(a～f)は良質な珪質頁岩が用いられている。表面左中央部を打面として幅広剥片9aを剥離した後に、打面を上面に転移して9(b～d)を剥離している。9(b～d)の3点は、剥離時に同時割れした資料と思われる。次に、左面上部に打面を転移して9eの剥片を剥離した後に、9eの剥離面を打面として縦長剥片9fを剥離している。

第20表 第3a文化層第6ブロック組成表

母岩	種別	母岩番号	黒曜石産地推定地	ナイフ形石器	楔形石器	二次加工のある剥片	動物刺痕のある剥片	剥片	石核	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
黒曜石	燧石	301	高原山甘通沢群		1			11		12	13.64	30.54	7.22
		302	高原山甘通沢群	1		2		9	2	14	15.91	71.22	16.85
		303	高原山甘通沢群			2		4	1	7	7.85	37.43	8.85
		304	高原山甘通沢群						2	2	2.27	28.24	6.88
黒曜石点数合計				1	1	4		24	5	35	39.77	167.43	38.61
ガラス質黒色安山岩		302						1	1	1	1.14	5.62	1.33
		303						1	1	1	1.14	2.74	0.65
ガラス質黒色安山岩点数合計								2	2	2	2.27	8.36	1.98
流紋岩	燧石	301						1	1	1	1.14	0.69	0.16
		303						5	5	5	5.68	12.37	2.86
流紋岩点数合計								6	6	6	6.82	3.05	0.72
珪質頁岩		301					1	10		11	12.50	71.63	16.95
		303						3	3	3	3.41	3.01	0.71
珪質頁岩点数合計							1	13		14	15.91	74.64	17.66
板状頁岩		305						1	1	1	1.14	1.14	0.27
ホルンフェルス		301						1	1	1	1.14	3.45	0.82
チャート		301				1		4		5	5.68	15.26	3.61
		302						1		1	1.14	4.46	1.06
		303						8		8	9.09	24.78	5.88
チャート点数合計						1		13		14	15.91	44.52	10.53
玉	燧石	301				2	2	9	2	15	17.05	10.40	25.12
全体点数合計						7	4	68	7	88	100.00	422.71	100.00
点数組成比(%)				1.14	1.14	7.95	4.55	77.27	7.95				

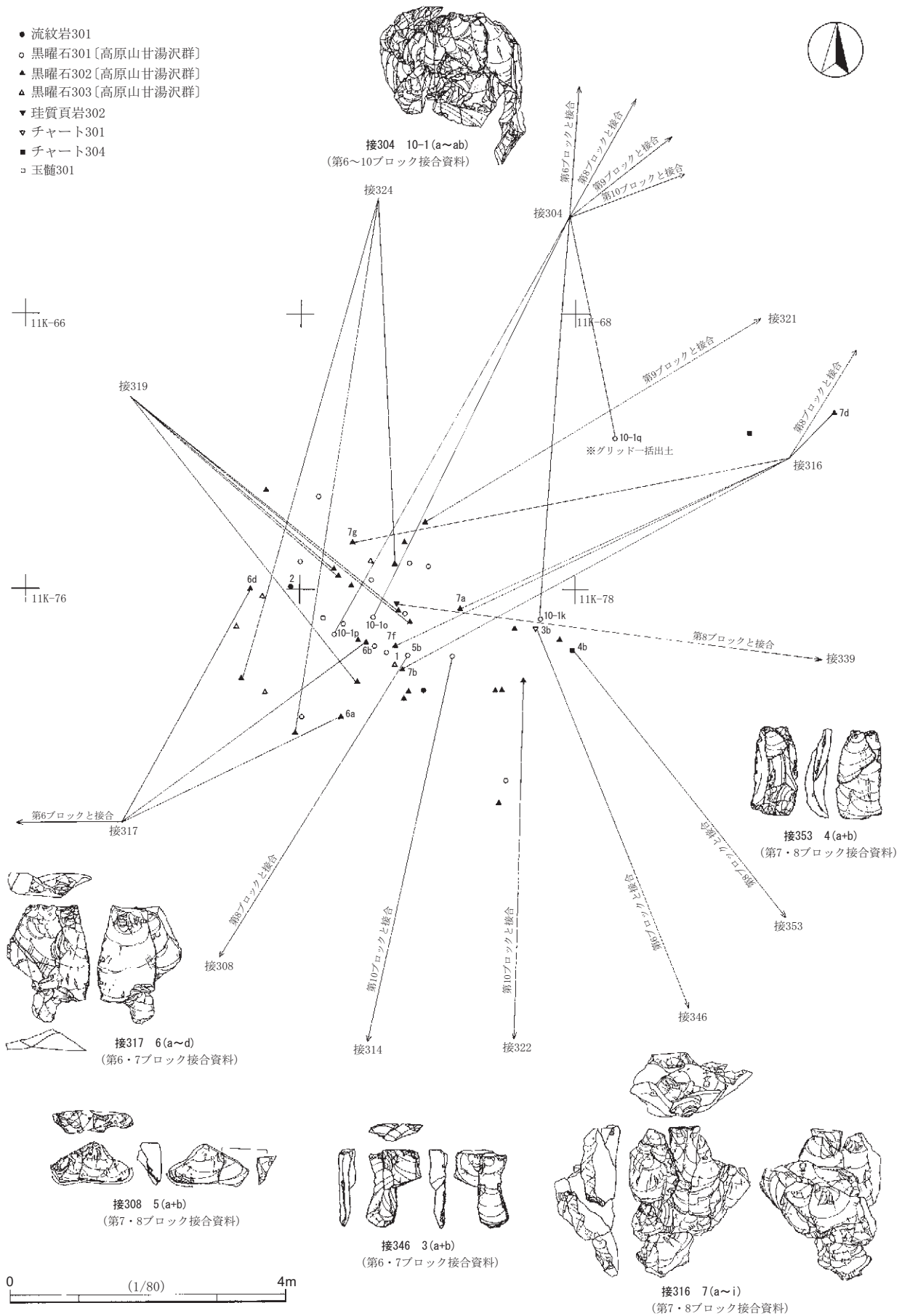
4. 第7ブロック (第35～39図、第21表、図版5・49)

出土状況 11K-66～68・76・77グリッドに分布している。第3a文化層のブロック群においては、第6ブロックの次に広い範囲に分布し、北東に位置する。第6ブロックの南西部に分布する。5.8m×9.1mの範囲から59点の石器が出土した。分布を詳細に見ると、南西部と北東部の2か所に集中地点が見られる。南西部は密集しており、ほとんどの石器が分布している。接合関係は多量で、ブロック間接合が多く見られる。南西部の集中地点では、黒曜石301・302の資料が集中する。出土層位はIXc層からVI層にかけて出土しており、IXa層上部～VII層下部に集中する。

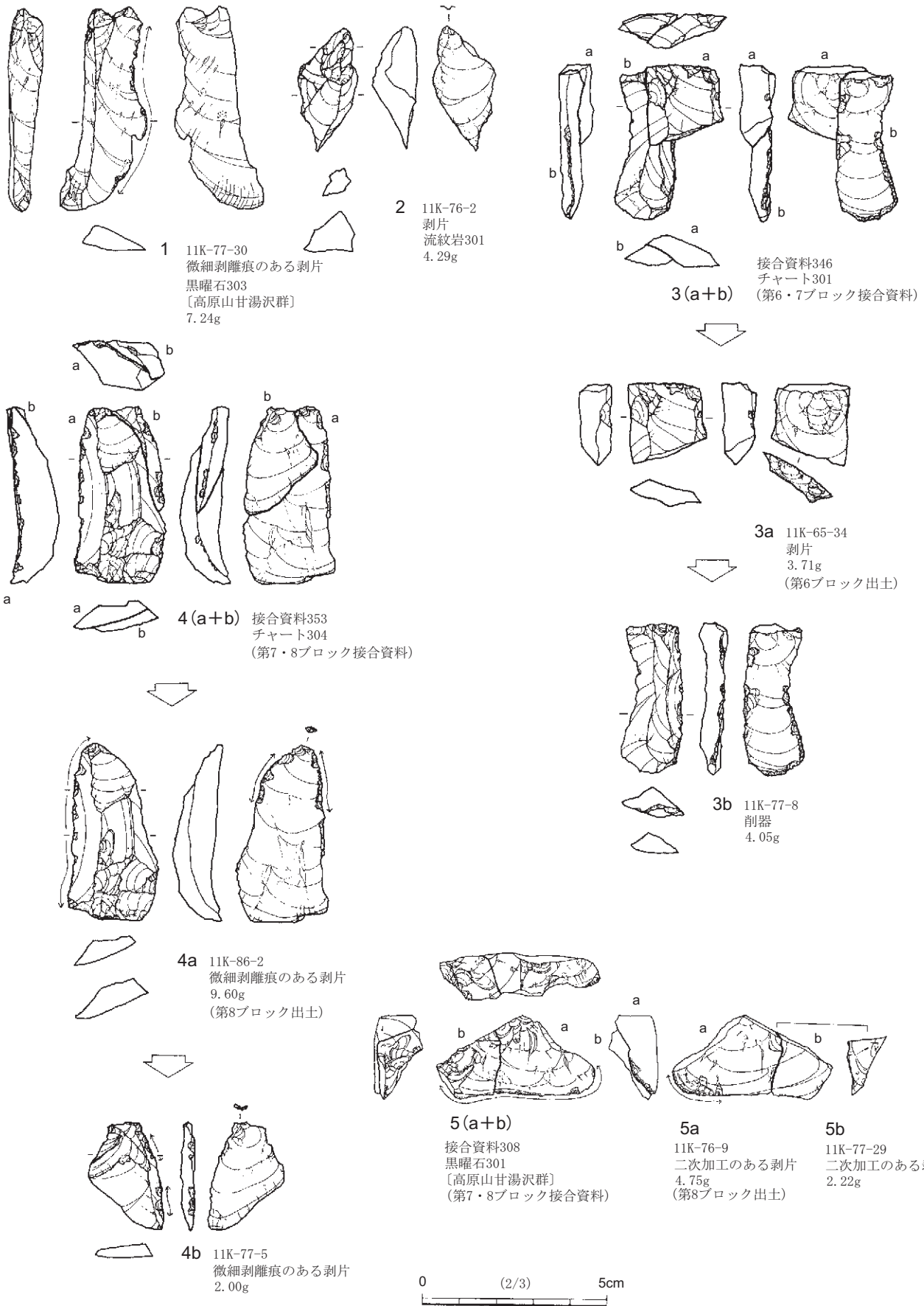


第35図 第3 a文化層第7ブロック器種別分布

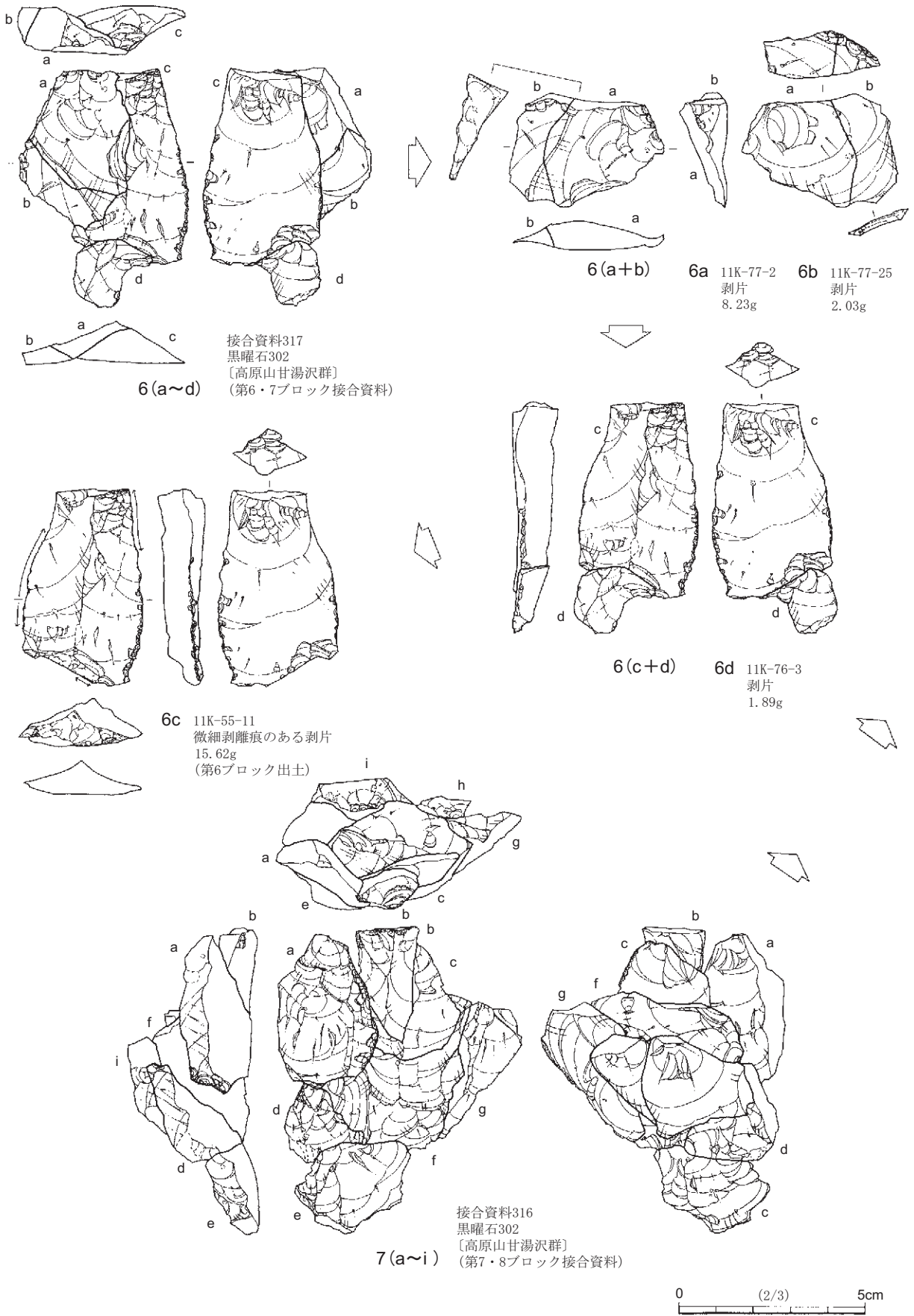
- 流紋岩301
- 黒曜石301〔高原山甘湯沢群〕
- ▲ 黒曜石302〔高原山甘湯沢群〕
- △ 黒曜石303〔高原山甘湯沢群〕
- ▼ 珪質頁岩302
- ▽ チャート301
- チャート304
- 玉髄301



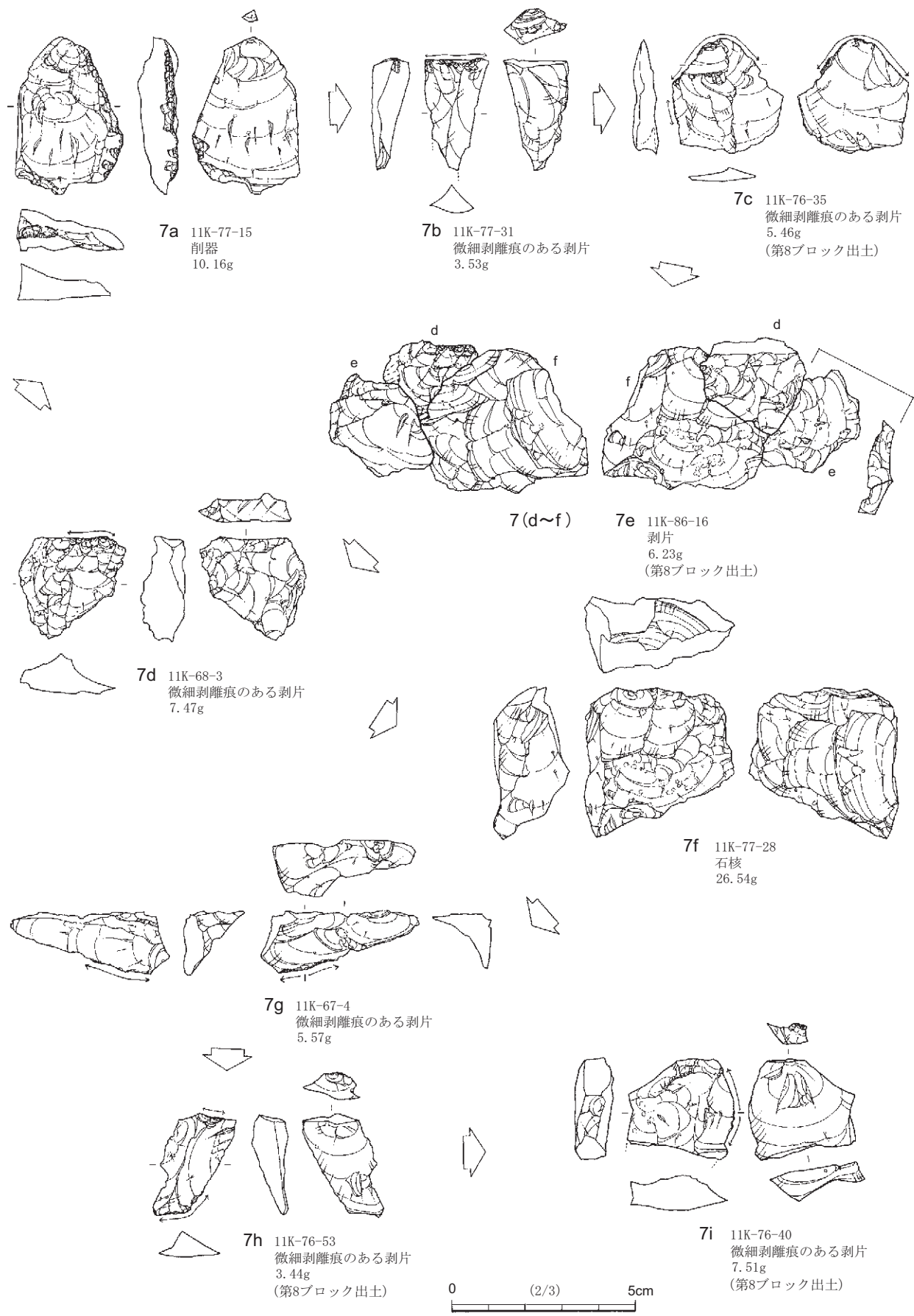
第36図 第3 a文化層第7ブロック母岩別分布



第37図 第3 a文化層第7ブロック出土石器 (1)



第38図 第3 a文化層第7ブロック出土石器 (2)



第39図 第3 a文化層第7ブロック出土石器 (3)

第21表 第3 a文化層第7ブロック組成表

器種	器種	器種番号	黒曜石産地推定地	両側	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	碎片	石核	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
流紋岩	岩	301					2			2	3.39	5.58	3.90
黒曜石	岩	301	高原山甘湯沢群		3	1	10	4		18	30.51	16.78	10.55
		302	高原山甘湯沢群	2	1	3	22		1	29	49.15	99.51	62.56
		303	高原山甘湯沢群			1	3	1		5	8.47	9.37	5.89
黒曜石点数合計				2	4	5	35	5	1	52	88.14	123.86	79.00
珩質頁岩	岩	302					1			1	1.69	13.67	12.37
チャート		301		1						1	1.69	4.05	2.55
		304				1	1			2	3.39	3.80	2.26
チャート点数合計				1		1	1			3	5.08	7.65	4.81
玉髓	髓	301					1			1	1.69	0.53	0.33
全体点数合計				3	4	6	40	5	1	59	100.00	159.07	100.00
点数組成比(%)				5.08	6.78	10.17	67.80	8.47	1.69				

出土遺物 器種組成は、削器3点、二次加工のある剥片4点、微細剥離痕のある剥片6点、剥片40点、碎片5点、石核1点である。石材組成は、黒曜石52点、チャート3点、流紋岩2点、珩質頁岩1点、玉髓1点である。黒曜石の割合が88%で極めて高い。黒曜石の産地推定地はすべて高原山甘湯沢群である。

1は微細剥離痕のある剥片である。縦長剥片を素材として、右側縁に連続した微細剥離が見られる。2は剥片である。点状の打面から剥離されている。

3～7は接合資料である。いずれもブロック間接合資料である。3(a+b)は、平坦剥離面を打面として、縦長剥片を連続的に剥離している。わずかに頭部調整が施されている。3aは器体の中央部から折断されている。3bは、両側縁と末端部に細かい調整加工が施された削器である。4(a+b)は、頭部調整を行い、点状の打面から縦長剥片を連続して剥離している。4aは両側縁の上部に微細剥離が見られる。4bは右側縁に微細剥離が見られる。5(a+b)は山形の打面から剥離された横長剥片である。末端部に微細剥離が見られる。裏面左下部の微細剥離は非常に顕著で、器体の奥まで及ぶほどの剥離面が見られる。裏面右上部からの加撃により5aと5bとに分割されている。6(a～d)は、左側面の平坦剥離面を打面として横長剥片6(a+b)を剥離した後に、上面に打面を転移して縦長剥片6(c+d)を剥離している。頭部調整はわずかに施されている。6(a+b)は6(c+d)や同一母岩の7(a～i)の資料に比べて、光沢が見られず、表面が白みを帯びていることから火熱を受けた可能性が高い。また、6aと6bの剥離面は打点が剥離面中央部に見られることから、火熱による剥離と思われる。6(c+d)は両側縁の下部に微細剥離が見られる。6cの末端部は、6dを剥離した後に粗い調整加工が施されている。7(a～i)は、上面の平坦打面左側から右側に順次移動して、7a～7cを連続して剥離している。7aは右側縁上部と下端部に調整加工が施された削器である。7b・7cは打面付近に微細剥離が見られる。7a～7cはいずれもわずかに頭部調整が施されている。7a～7cを剥離後に、左側縁から剥離が行われ、この剥離面を打面として、厚みのある横長剥片7(d～f)が剥離されている。さらに、7(d～f)を素材として、裏面上部から幅広剥片7dを剥離した後に7eを剥離している。残核である7fの表面上部には、数枚の小型の剥片が剥離されたことが窺える剥離面が見られる。7(d～f)を剥離後に、打面を右側縁から器体中央部に打点を順次移動して7g～7iを剥離している。剥離された剥片の縁辺のほとんどのものには、微細剥離が見られる。

5. 第8ブロック (第40～44図、第22表、図版5・49)

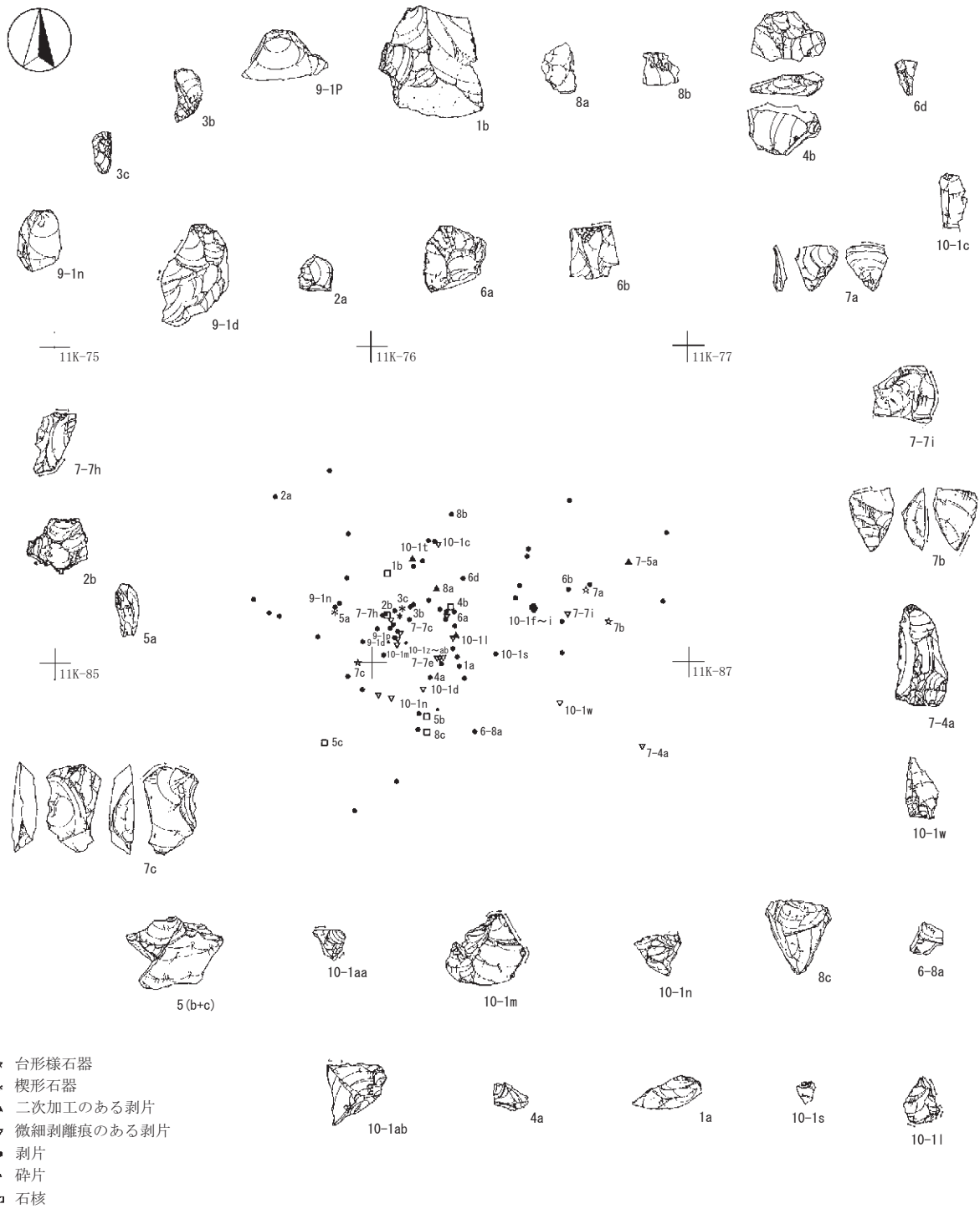
出土状況 11K-75・76・85・86グリッドに分布している。第3 a文化層のブロック群においては、中央部に位置する。4.6m×5.2mの範囲から108点の石器が出土した。第3 a文化層のなかでは、最も出土点数が多いブロックである。分布を詳細に見ると、西部と東部の2か所に集中地点が見られる。西部の集中地点は、第3 a文化層のなかで最も石器が濃密に分布する。石核の出土点数も多い。東部は西部に比べて出土点数が少ないが、台形様石器が2点出土している。接合関係は多量で、ブロック間接合が多く見られる。出土層位はIX c層からVI層にかけてで、IX a層上部～VII層下部に集中する。

出土遺物 器種組成は、台形様石器3点、楔形石器4点、二次加工のある剥片4点、微細剥離痕のある剥片16点、剥片64点、碎片11点、石核6点である。石材組成は、黒曜石85点、チャート12点、珪質頁岩6点、玉髓5点である。黒曜石の割合が79%と極めて高い。黒曜石の産地推定地はすべて高原山甘湯沢群である。

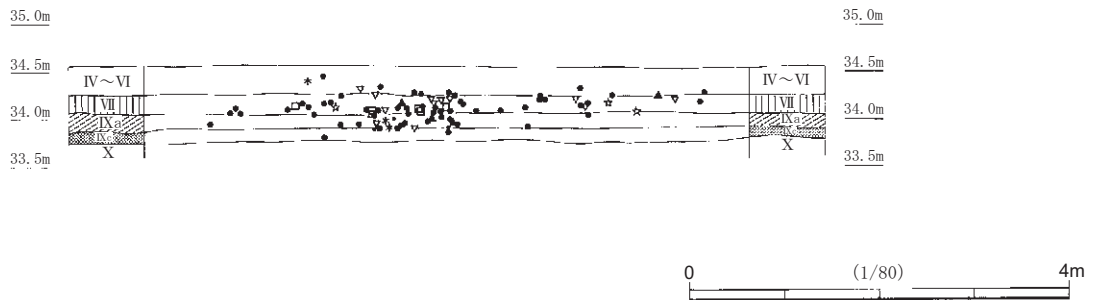
1～8は接合資料である。1(a+b)は良質の珪質頁岩を用いている。1(a+b)の状態、右側縁と末端部に連続した微細剥離が見られる。左側縁中央には平坦な調整加工が施されている。打面部は、左側縁上部を打面として、2条の樋状剥離が行われている。さらに、表面上部中央を打点として、細長の剥片1 aが剥離されている。1 aの剥離面を打面として、上面左側から幅広の剥片が剥離されている。この剥離面を捉えて1 bを石核と分類したが、打面部側に施された一連の剥離が樋状剥離に関連するものであることから、彫器と分類する方が妥当かもしれない。良質な珪質頁岩を用いて樋状剥離を行う本資料は、VII層～VI層に見られる「下総型石刃再生技法」に関連するものとして捉えられる可能性がある。2(a+b)は厚みのある剥片を素材として、裏面下部から2枚の幅広剥片を剥離した後に、表面左側から数枚の小型剥片を剥離し、打面を上部に転移して幅広剥片2 aを剥離している。なお、2 aと2 bは接合しているものの、色調が大きく異なっていた。2 aは光沢があまり見られず、白みを帯びていることから、おそらく火熱を受けた可能性が高い。3(a～c)は、厚みのある剥片を素材として上下両端を対とした打面から両極剥離を行っており、3個体に分割された楔形石器である。4(a+b)は板状の厚みのある剥片を素材として、上面左上から右下にかけて順次打面を転移して小型の剥片を剥離した後に、右側縁に打面を転移して小型の横長剥片を剥離、さらに、上面下部中央に打面を転移して4 aを含む数枚の小型の横長剥片を剥離している。5(a～c)は幅広の板状の剥片を素材とし、上面左側を打面として縦長剥片5

第22表 第3 a文化層第8ブロック組成表

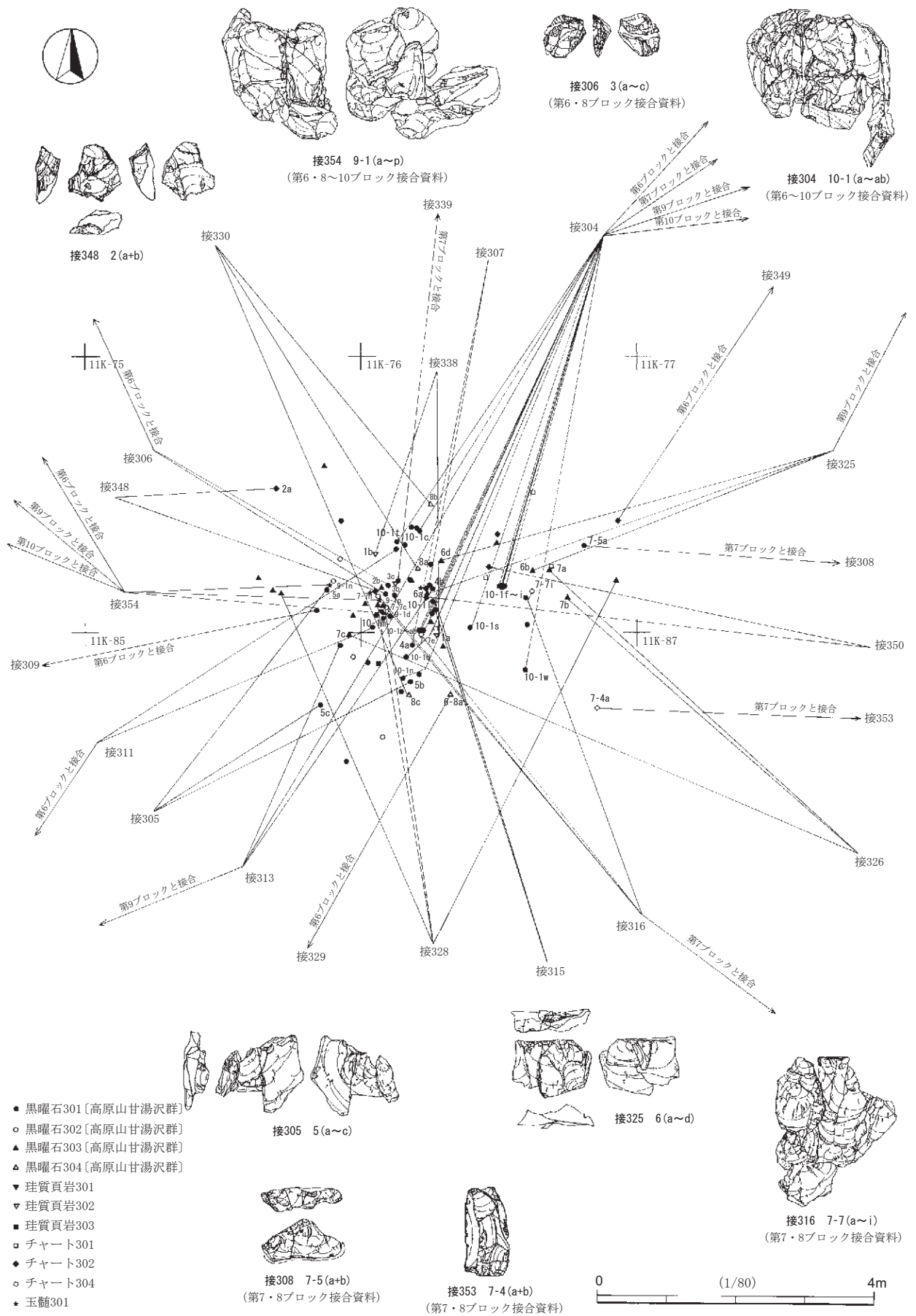
母岩	器種	母岩番号	黒曜石産地推定地	台形様石器	楔形石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	碎片	石核	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
黒曜石	301	301	高原山甘湯沢群		3	3	9	23	11	3	58	48.15	75.39	24.53
		302	高原山甘湯沢群				3	5			8	7.41	24.35	7.92
		303	高原山甘湯沢群	3	1		1	16			21	19.44	52.25	17.00
		304	高原山甘湯沢群			1		2		1	4	3.70	16.81	5.47
黒曜石点数合計				3	4	4	13	46	11	4	85	78.70	168.81	54.92
珪質頁岩	301	301						1			1	0.93	1.09	0.35
		302					3			1	4	3.70	57.64	18.75
		303						1			1	0.93	4.32	1.41
珪質頁岩点数合計							1	4		1	6	5.56	63.05	20.51
チャート	301	301						4			4	3.70	2.04	0.66
		302					5				6	5.56	17.70	5.76
		304					1	1			2	1.85	10.10	3.29
チャート点数合計							1	10		1	12	11.11	29.84	9.71
玉髓		301					1	4			5	4.53	45.65	14.85
全体点数合計				3	4	4	16	64	11	6	108	100.00	307.35	100.00
点数組成比(%)				2.78	3.70	3.70	14.81	59.26	10.19	5.56	100.00			



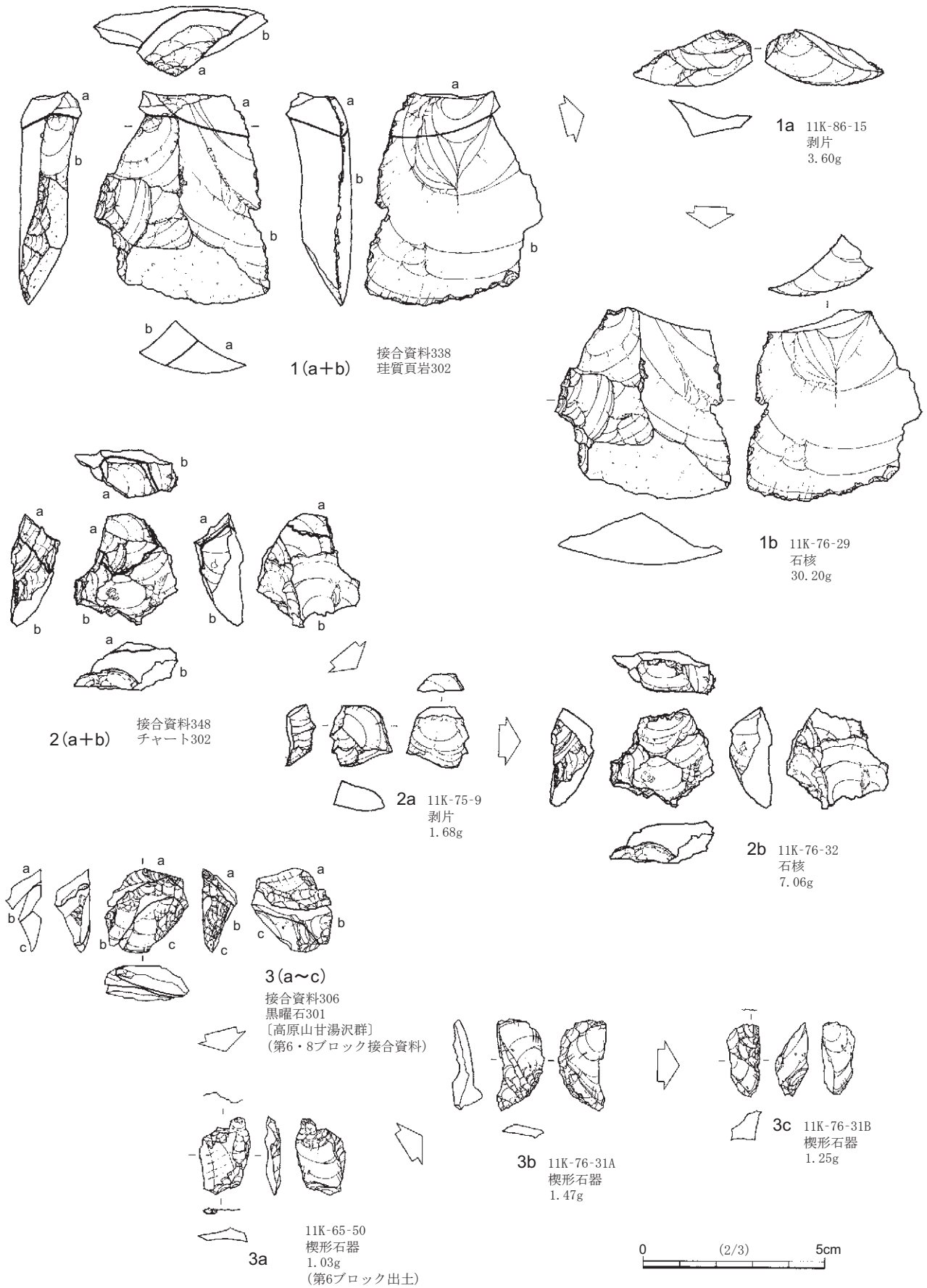
- ★ 台形様石器
- * 楔形石器
- ▲ 二次加工のある剥片
- ▼ 微細剥離痕のある剥片
- 剥片
- 碎片
- 石核



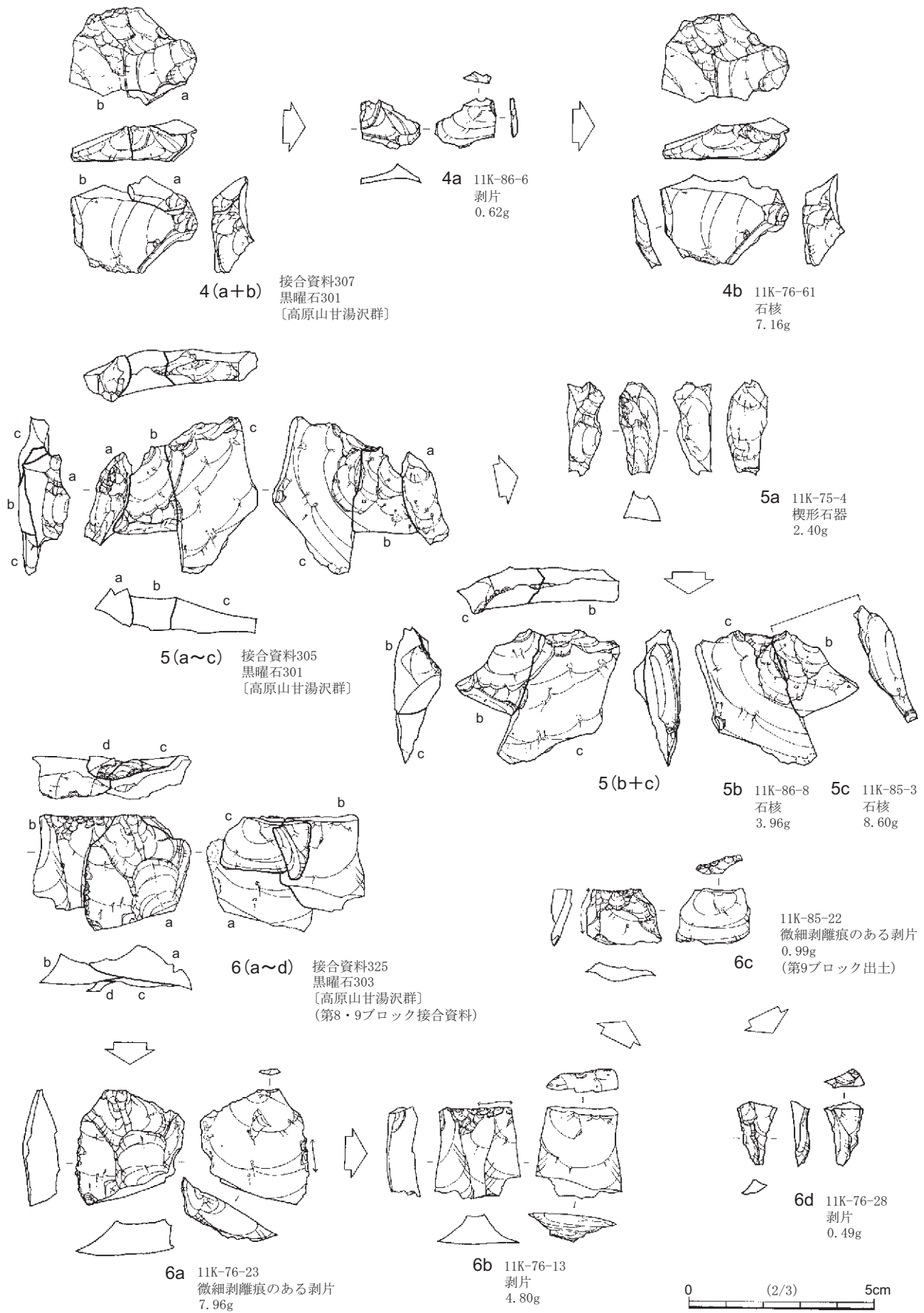
第40図 第3 a文化層第8ブロック器種別分布



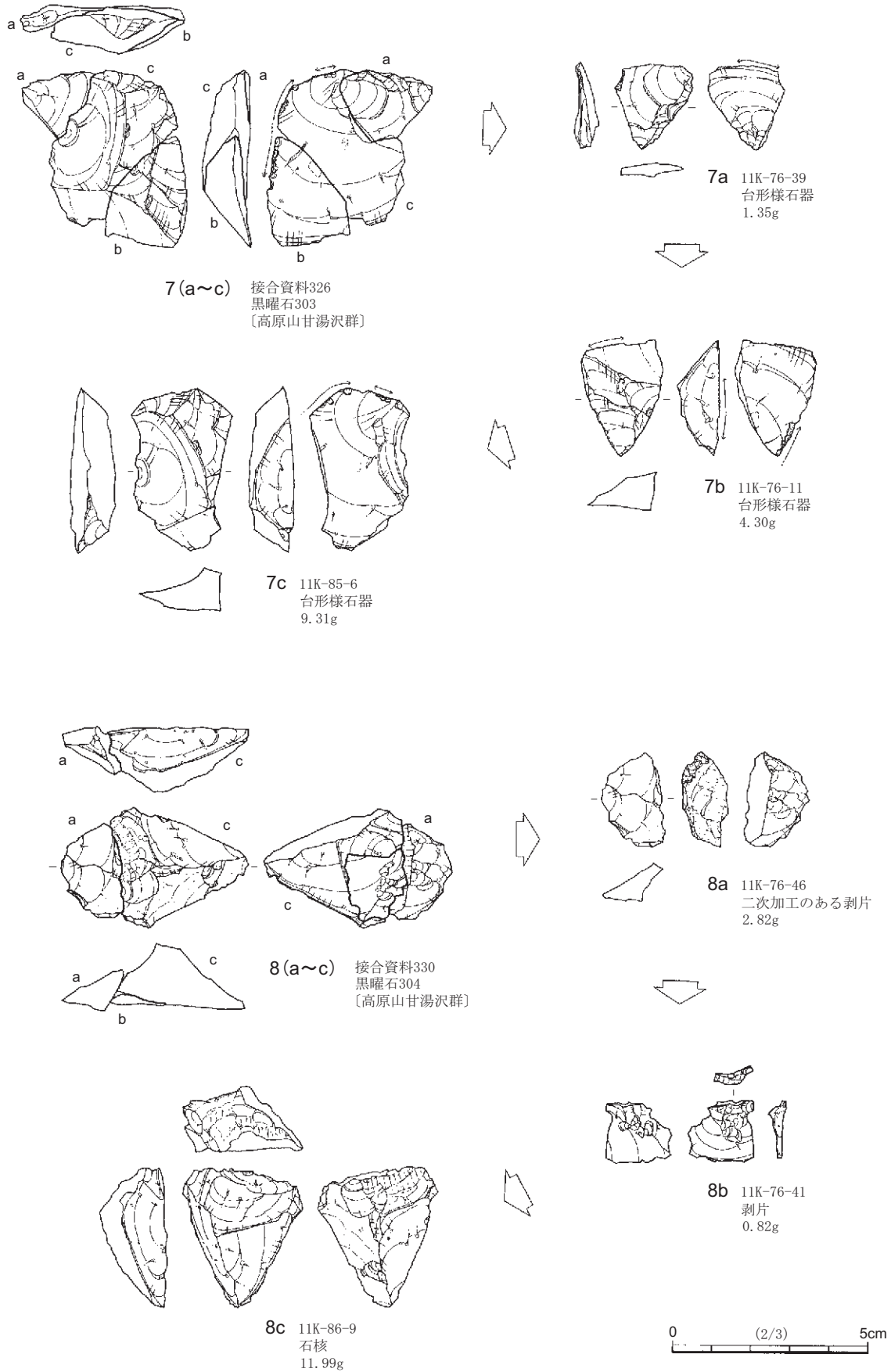
第41図 第3 a文化層第8ブロック母岩別分布



第42図 第3 a文化層第8ブロック出土石器 (1)



第43図 第3 a文化層第8ブロック出土石器 (2)



第44図 第3 a文化層第8ブロック出土石器 (3)

aを剥離している。剥離された5 aは両極剥離が施されている。5 (b + c) は表面上部から横長剥片を剥離した後に、裏面右上部から横長剥片を数枚剥離している。この剥離により、5 bと5 cに分割されている。6 (a ~ d) は上面の平坦剥離面を打面として、打点を右側→左側→中央に転移して6 a~6 dを剥離している。頭部調整が顕著に、打面調整はわずかに行われている。7 (a ~ c) は、幅広の剥片を素材に、左側面上部を打面として7 aを剥離した後に、器体中央部を打面として7 bと7 cに分割している。7 aは左側縁を折断した後に、左側縁上部と右側縁下部に細かい調整加工が施されている。7 bは裏面右側縁下部に平坦な調整加工が施されている。7 cは左側縁中央から剥離が行われ、鋭利な縁辺が形成されている。左側縁下部は粗い調整加工が施されている。7 a~7 cは、鋭利な縁辺を有する剥片を規格的に剥離した後に、形状を整えるような調整加工が施されていることから、台形様石器として分類した。本文文化層を特徴づける接合資料といえよう。本文文化層においては、この3点のみを台形様石器として捉えたが、本資料に類似する石器が本文文化層において多く見られる。二次加工のある剥片と分類した石器のうち、数点は台形様石器として分類したほうが良いのかもしれない。8 (a ~ c) は厚みのある剥片を素材として、裏面右側を打面として8 aを剥離した後に、8 aの剥離面を打面として8 bを剥離している。

6. 第9ブロック (第45~48図、第23表、図版5・50)

出土状況 11K-84・85グリッドに分布している。第3 a文化層のブロック群においては、南西部に位置する。1.8m×2.0mの範囲から27点の石器が出土した。第3 a文化層のなかでは、最も分布範囲が狭いブロックである。狭い範囲に密集して分布している。接合関係は多量で、ブロック間接合が多く見られる。出土層位はIX a層からVI層にかけてで、IX a層上部~VII層下部に集中する。

出土遺物 器種組成は、ナイフ形石器3点、削器1点、二次加工のある剥片1点、微細剥離痕のある剥片4点、剥片15点、碎片2点、石核1点である。石材組成は、黒曜石21点、玉髄4点、チャート2点である。黒曜石の割合が78%と極めて高い。黒曜石の産地推定地はすべて高原山甘湯沢群である。

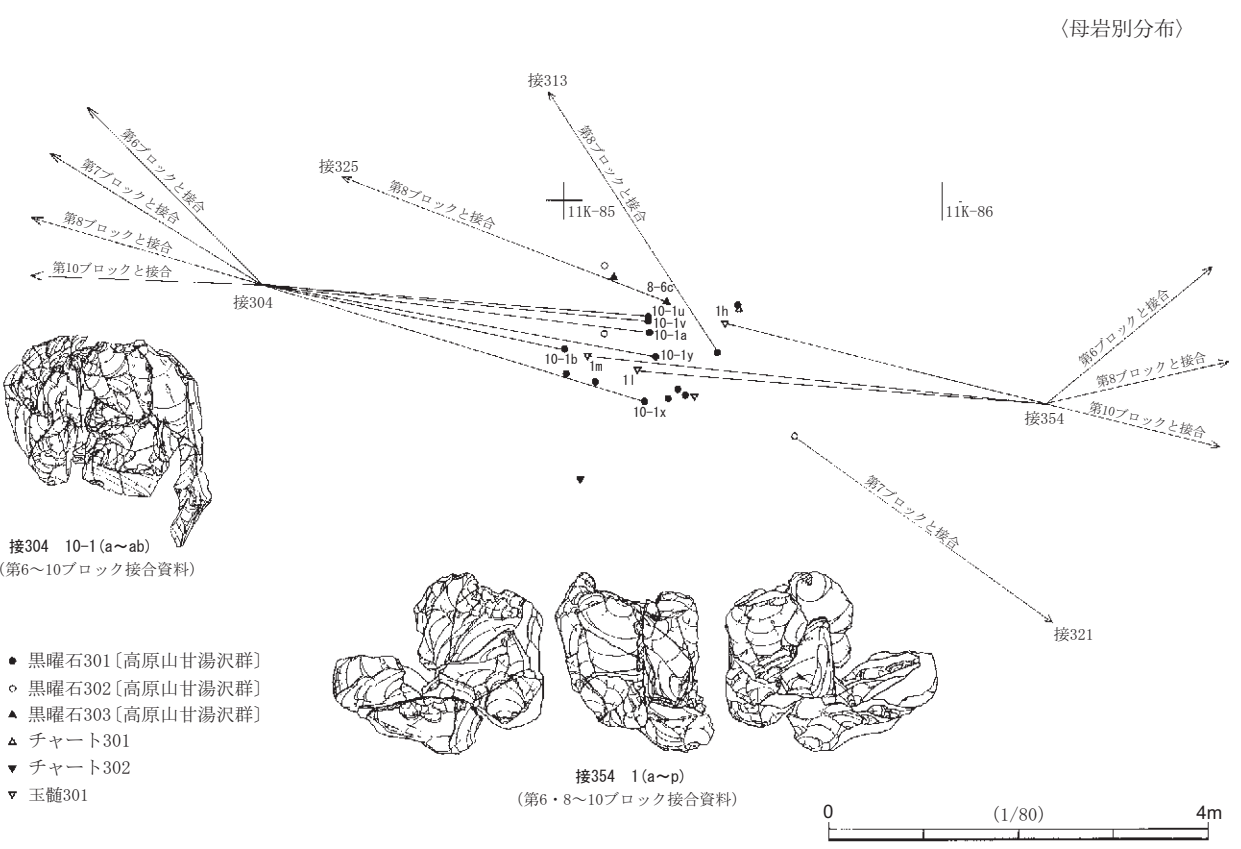
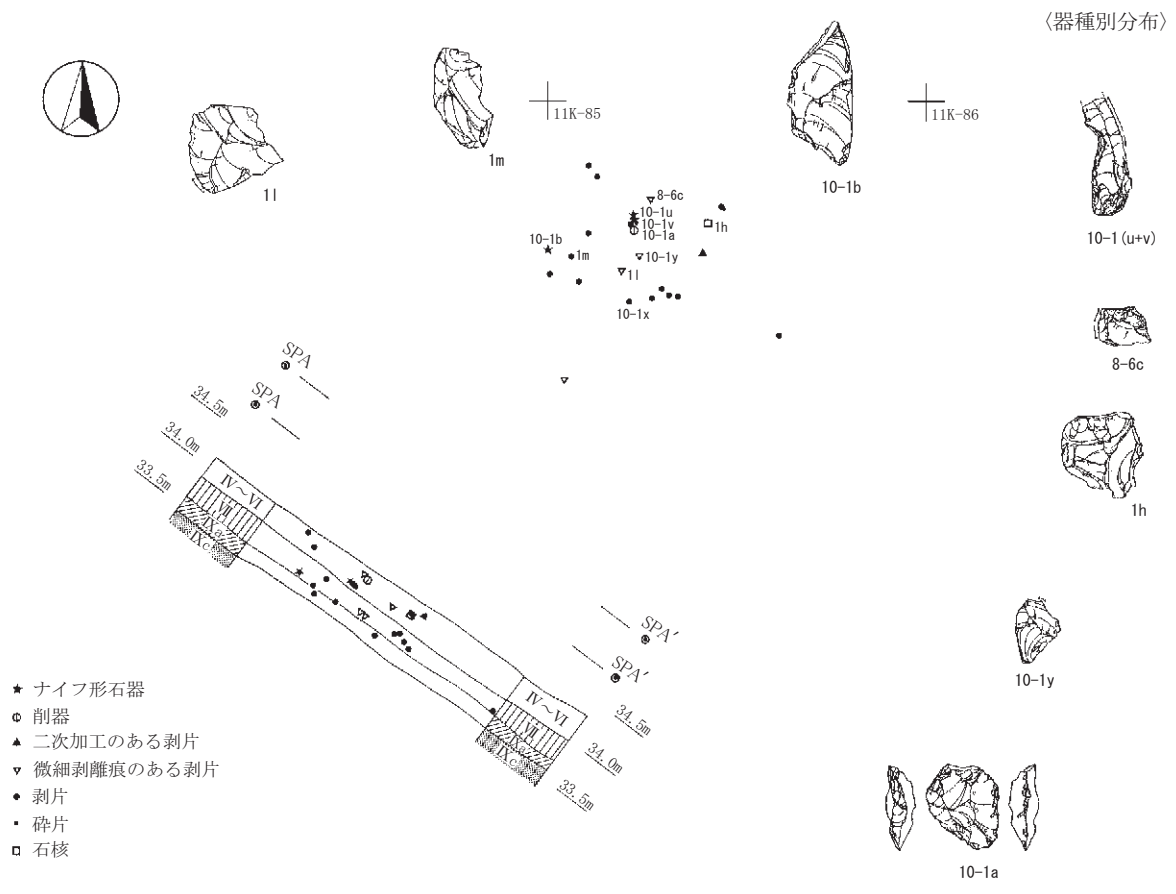
1 (a ~ p) は接合資料354で、良質な玉髄301を用いている。第6・8~10ブロックの4つのブロックで接合関係が見られた資料である。拳大の母岩を搬入して剥片剥離を行っている。剥離過程は大きく分けて次の3工程に分けることができる。なお、玉髄301の母岩別の分布状況は、第28図の下段に掲載し、母岩別分布と接合状況については55ページに記載してあるので参照していただきたい。

【第1工程】 [母岩の表皮部分の自然面を除去する工程。全体図下面右側を打面として幅広剥片を剥離。]

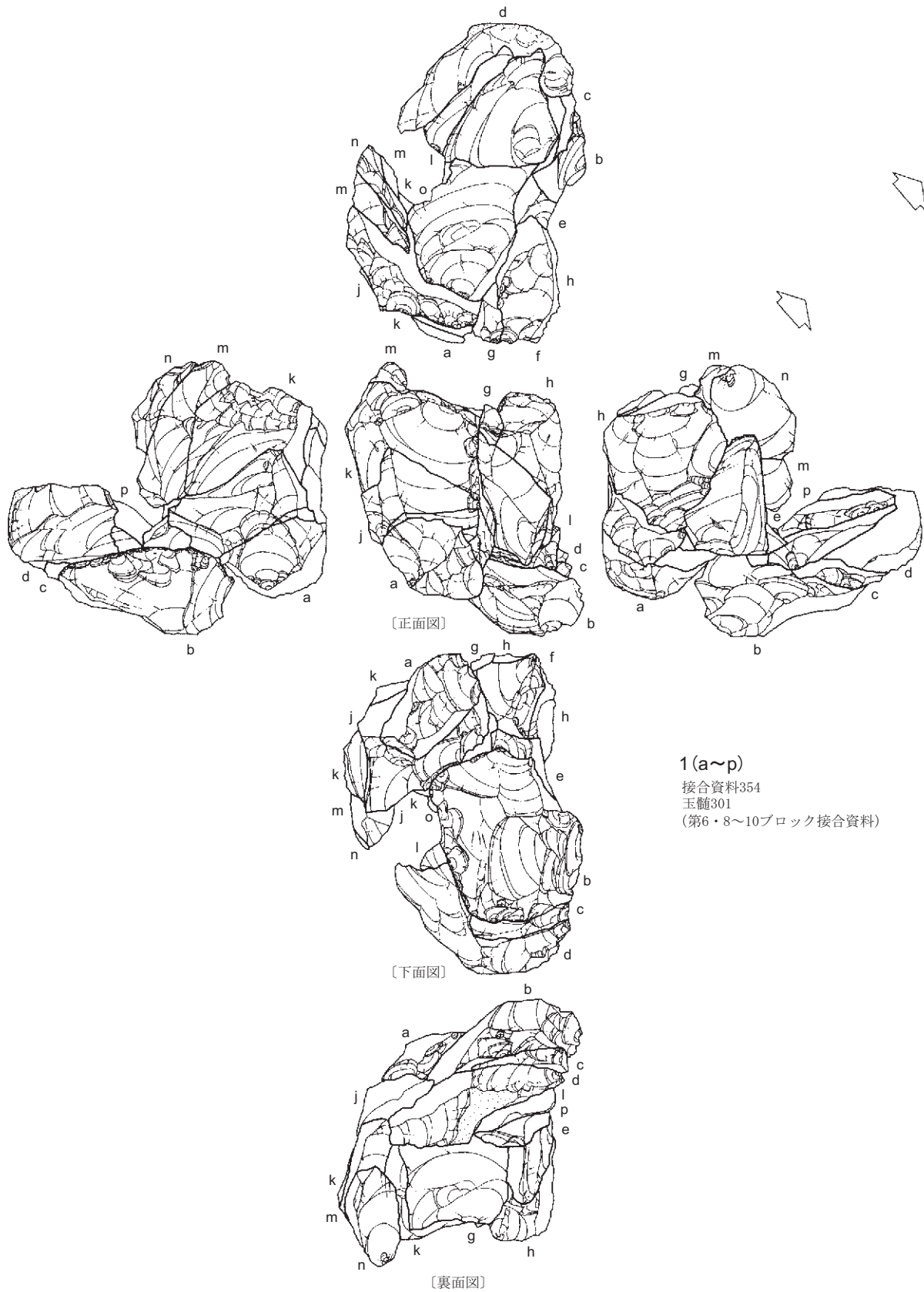
裏面右上部を打面として、厚みのある剥片1 aを剥離している。1 aは石核として用いられており、左

第23表 第3 a文化層第9ブロック組成表

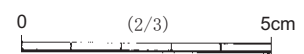
母岩	母岩番号	黒曜石産地推定地	ナイフ形石器	削器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	碎片	石核	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
黒曜石	301	高原山甘湯沢群	3	1	1	1	8	2		16	59.26	36.51	39.78
	302	高原山甘湯沢群					3			3	11.11	10.58	11.53
	303	高原山甘湯沢群				1	1			2	7.41	1.08	1.13
黒曜石点数合計			3	1	1	2	12	2		21	77.78	48.17	52.48
チャート	301						1			1	3.70	2.88	3.12
	302					1				1	3.70	5.33	5.81
チャート点数合計						1	1			2	7.41	8.19	8.92
玉髄	301					1	2		1	4	14.81	35.42	38.59
全体点数合計			3	1	1	4	15	2	1	27	100.00	91.78	100.00
点数組成比(%)			11.11	3.70	3.70	14.81	55.56	7.41	3.70				



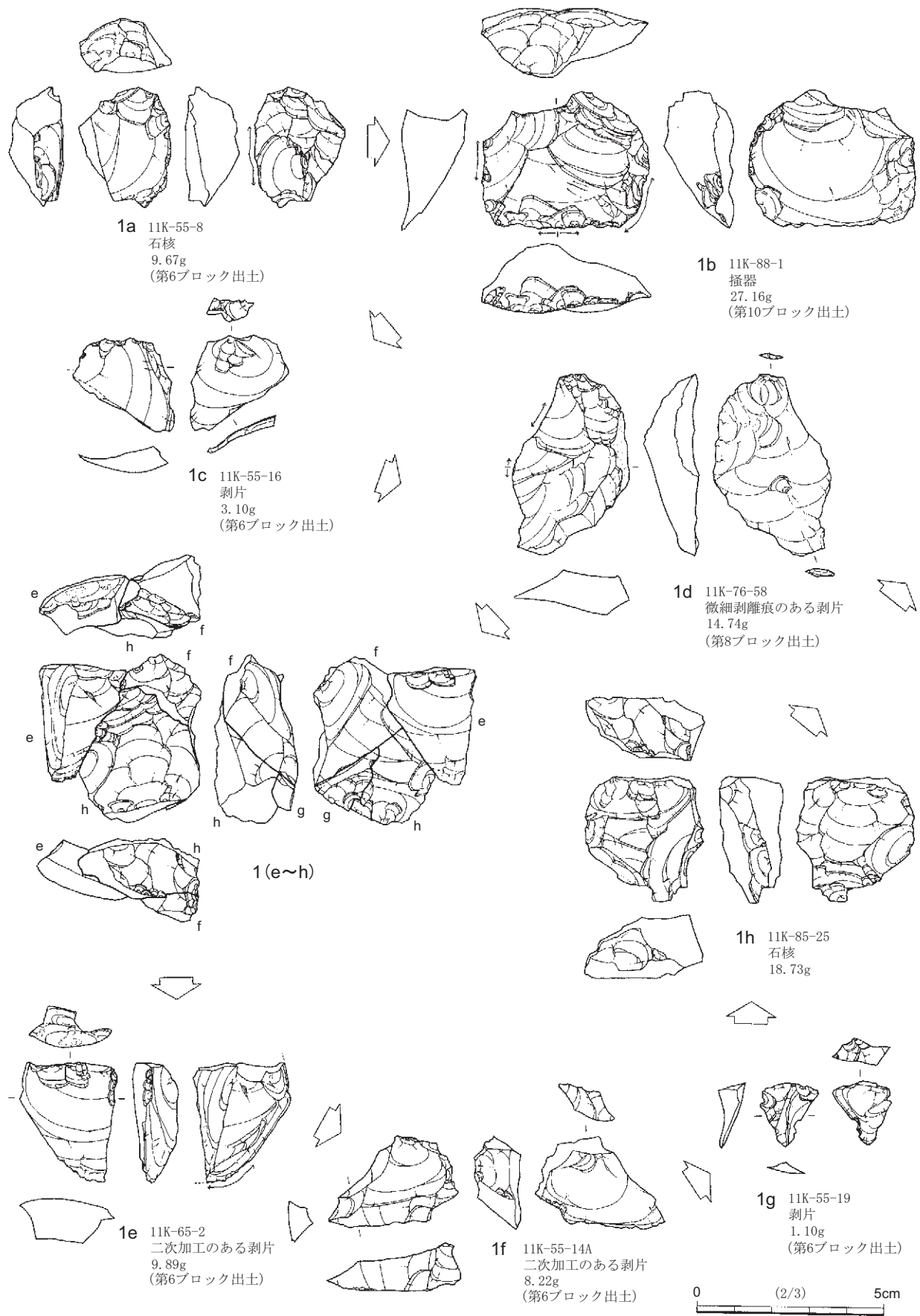
第45図 第3 a文化層第9ブロック遺物分布



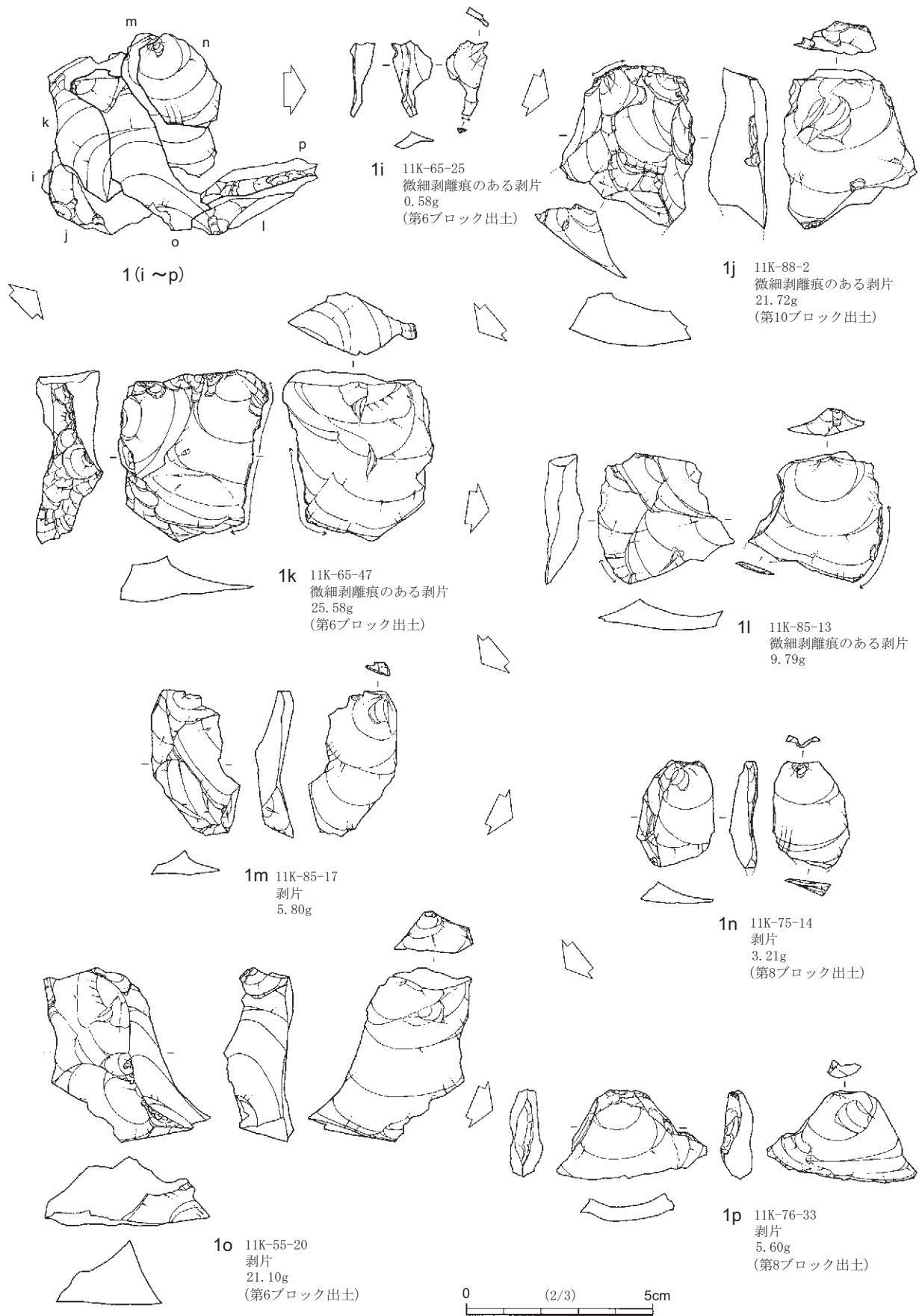
1(a~p)
 接合資料354
 玉髓301
 (第6・8~10ブロック接合資料)



第46図 第3 a文化層第9ブロック出土石器 (1)



第47図 第3 a文化層第9ブロック出土石器 (2)



第48図 第3 a文化層第9ブロック出土石器 (3)

側縁を折断した後に、表面上部から小型の剥片を剥離している。下面右中央部を打面として、1 bと1 cを剥離している。1 bは末端部に平坦な剥離が施された搔器である。下面右下部を打面として、縦長剥片1 dを剥離している。

【第2工程】[母岩を分割する工程。全体図正面中央やや右下を打面として、分割剥片1 (e～h) を剥離。]

分割剥片1 (e～h) は、1 bの剥離面を打面としている。厚みのある分割剥片1 (e～h) を素材に、上面左側を打面として1 eを剥離している。1 eには右側縁上部に粗い調整加工が施されている。次に、上面右側を打面として1 fを剥離している。1 fは右側縁に粗い調整加工が施されている。次に、裏面左下部に打面を転移して1 gを剥離している。石核1 hは、さらに右側縁や上面において、小型の貝殻状の剥片が剥離されている。

【第3工程】[最終的な残核から剥片を剥離する工程。最終的な残核である1 (i～p) から剥片を剥離。]

最終的な残核1 (i～p) は全体図正面左側に位置する。1 (i～p) の実測図を用いて剥離過程を説明する。左下部を打面として1 iと1 jを剥離した後に、左中央部を打面として幅広剥片1 kを剥離している。次に、打面を右下部に転移して1 lを剥離し、さらに、打面を180度転移して上部から1 m・1 n・1 oを剥離している。最後に、打面を180度転移して、下部から1 pを剥離している。

7. 第10ブロック (第49～52図、第24表、図版5・50)

出土状況 11K-87・88・97グリッドに分布している。第3 a文化層のブロック群においては、南東部に位置する。6.3m×4.1mの範囲から9点の石器が出土した。第3 a文化層のなかでは、最も出土点数の少ないブロックである。楕円形の細長い範囲に、散漫に分布している。接合関係は多量で、ブロック間接合が多く見られる。出土層位はIX a層からVI層にかけてで、IX a層上部～VII層下部に集中する。

出土遺物 器種組成は、ナイフ形石器1点、微細剥離痕のある剥片2点、剥片5点、石核1点である。石材組成は、黒曜石6点、玉髓2点、チャート1点である。黒曜石の割合が67%と非常に高い。黒曜石の産地推定地はすべて高原山甘湯沢群である。

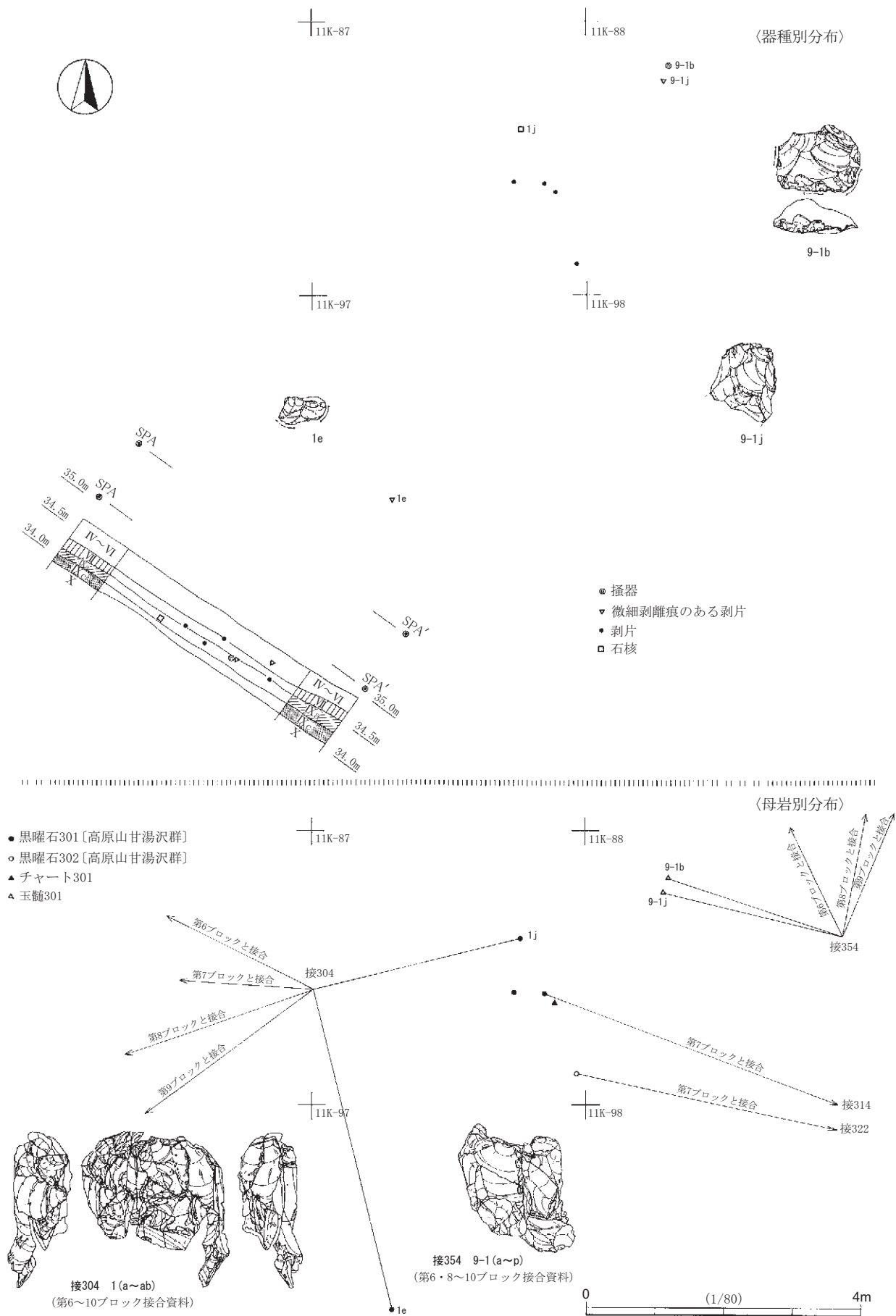
1 (a～a b) は接合資料304で、良質な黒曜石301を用いている。第6～10ブロックの5つのブロックで接合関係が見られた資料である。分布状況や剥片剥離技術において、本文化層を特徴づける接合資料である。拳大の母岩を搬入して剥片剥離を行っている。剥離過程は大きく分けて次の3工程に分けることができる。なお、黒曜石301の母岩別の分布状況は、第25図の下段に掲載し、母岩別分布と接合状況については54ページに記載してあるので参照していただきたい。

【第1工程】[母岩の表皮部分の自然面を除去する工程。全体図上面右側を打面として幅広剥片を剥離。]

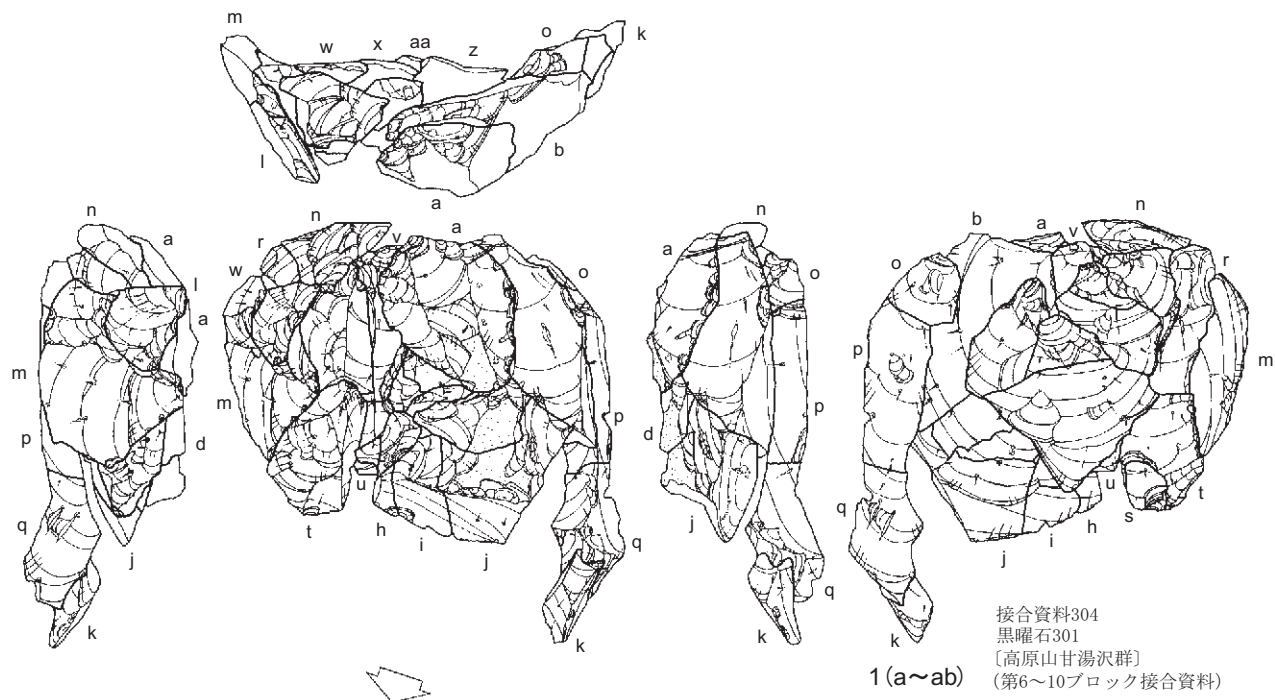
全体図上面右側を打面として、1 aと厚みのある幅広剥片1 (b～j) を剥離している。1 aは右側縁と左側縁上部に細かい調整加工が施された削器である。厚みのある幅広剥片1 (b～j) を素材として、

第24表 第3 a文化層第10ブロック組成表

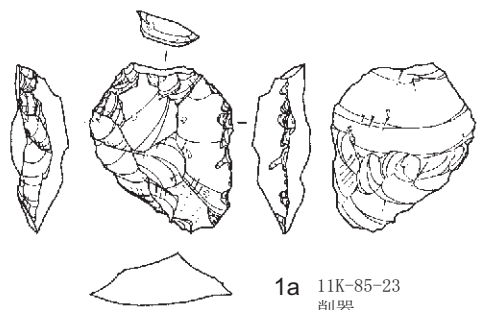
分類	目録番号	黒曜石産地推定地	ナイフ形石器	微細剥離痕のある剥片	剥片	石核	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
黒曜石	301	高原山甘湯沢群		1	2	1	4	44.44	13.11	18.74
	302	高原山甘湯沢群			2		2	22.22	5.97	8.46
黒曜石点数合計				1	4	1	6	66.67	19.03	27.20
チャート	301				1		1	11.11	2.05	2.93
玉髓	301		1	1			2	22.22	48.88	69.87
全体点数合計			1	2	5	1	9	100.00	69.96	100.00
点数相対比 (%)			11.11	22.22	55.56	11.11	100.00			



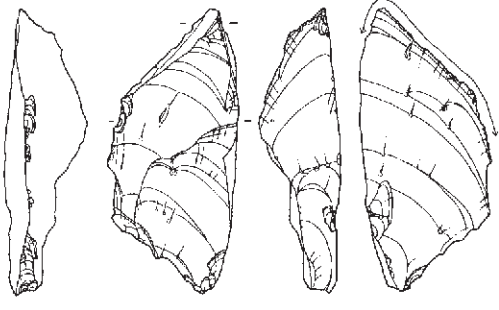
第49図 第3 a文化層第10ブロック遺物分布



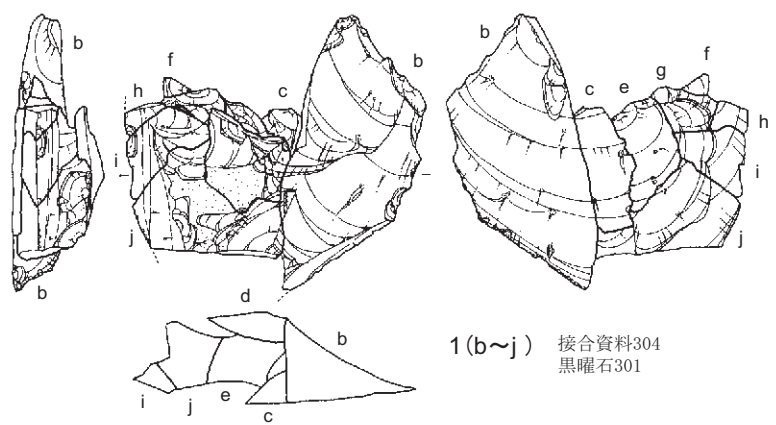
接合資料304
黒曜石301
〔高原山甘湯沢群〕
1(a~ab) (第6~10ブロック接合資料)



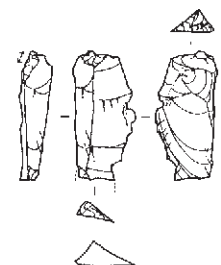
1a 11K-85-23
削器
8.30g
(第9ブロック出土)



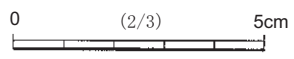
1b 11K-85-18
ナイフ形石器
15.33g
(第9ブロック出土)



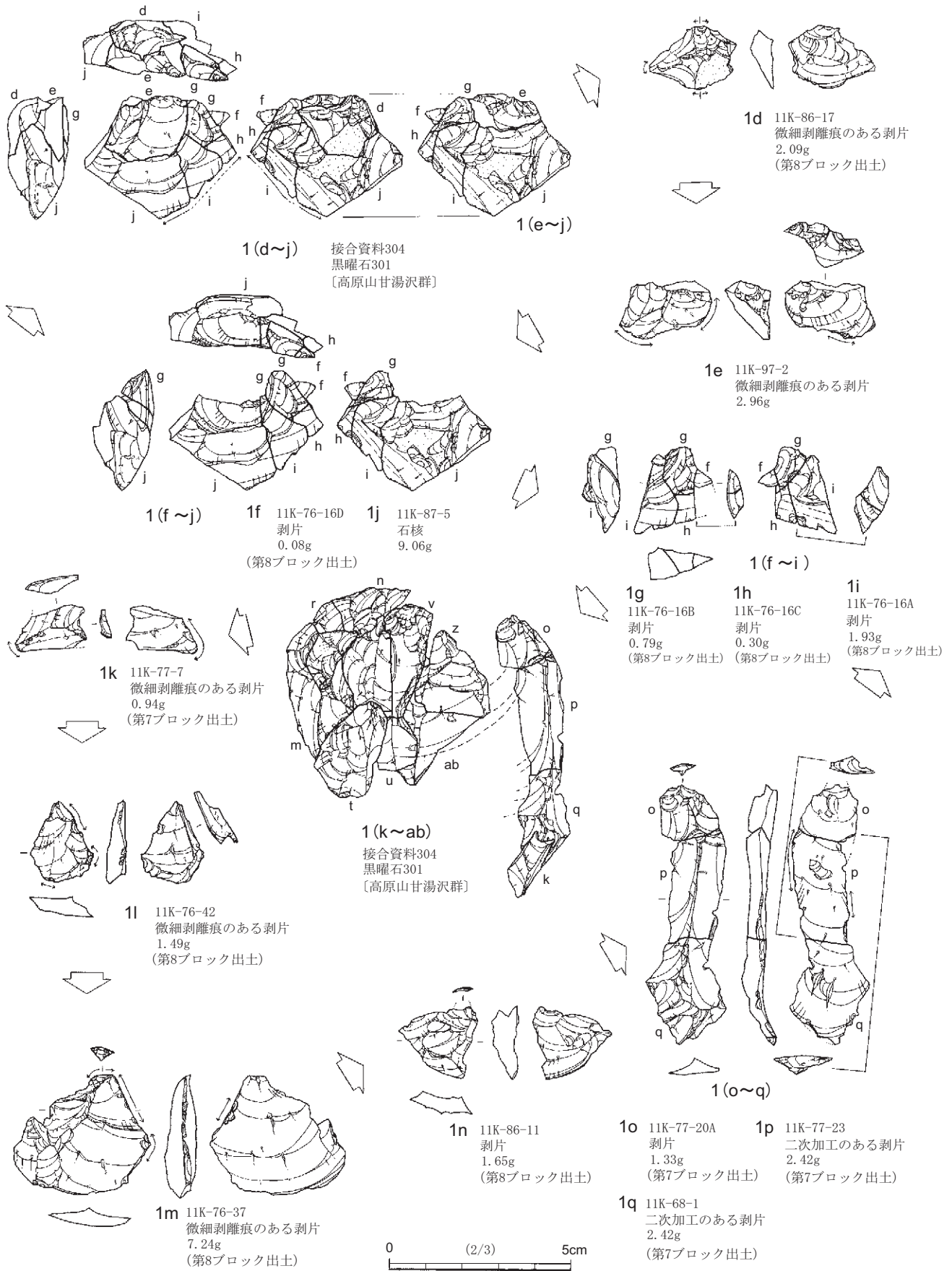
1(b~j) 接合資料304
黒曜石301



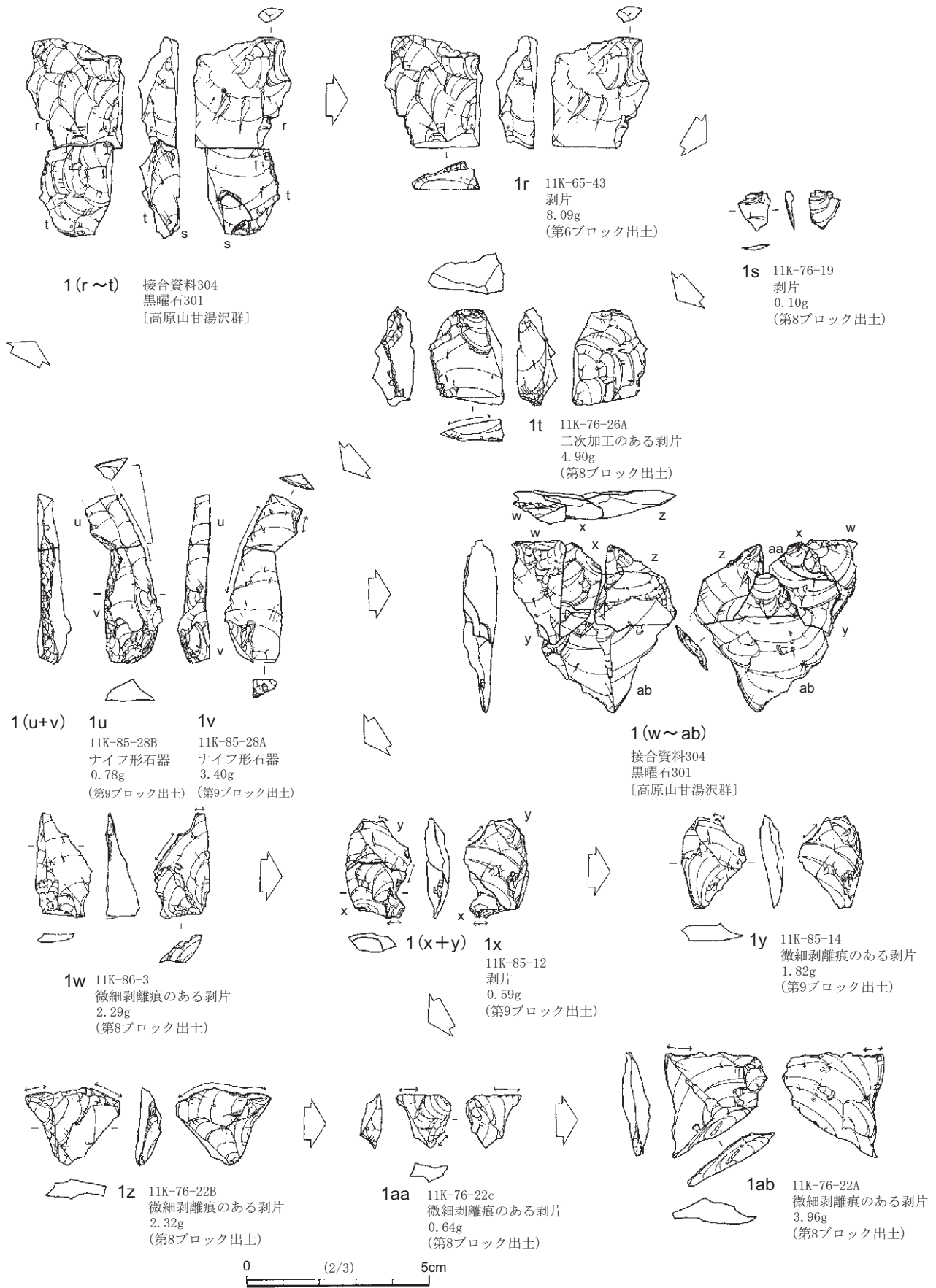
1c 11K-76-27
微細剝離痕のある剥片
1.51g
(第8ブロック出土)



第50図 第3 a文化層第10ブロック出土石器 (1)



第51図 第3 a文化層第10ブロック出土石器 (2)



第52図 第3 a文化層第10ブロック出土石器 (3)

1 bと1 (c～j) に分割している。1 bはナイフ形石器である。分割した後に、左側縁下部に調整加工が施されている。第6ブロック1と全体形状及びサイズが類似する。左上部の素材剥片の縁辺に微細剥離が見られる。1 (c～j) は上面中央部を打面として、縦長剥片1 cが剥離されている。1 (d～j) は上部中央から小型の幅広剥片1 dと1 eを剥離している。1 (f～j) は器体中央部付近を打面として、1 (f～i) と1 jとに分割されている。1 (f～i) はさらに細かく分割される。石核1 jはさらに幅広剥片が剥離されている。

【第2工程】 [石核を成形する工程。全体図正面右下部や左上部の石核の形状を整える剥離。]

全体図右下部を打面として、1 kを剥離した後、打面を全体図左上部に転移して、1 l～1 nを剥離している。

【第3工程】 [成形された石核から形状の整った縦長剥片1 (o～q) を剥離する工程。]

全体図正面右上部を打面として、細長い縦長剥片1 (o～q) を剥離している。1 (o～q) は三分割されている。

【第4工程】 [中心部の石核から縦長剥片1 (r～t) と1 (u+v) を剥離する工程。]

1 (k～a b) の実測図の上面を打面として、縦長剥片1 (r～t) と1 (u+v) を剥離している。1 (r～t) は、器体中央部から1 rと1 (s+t) に分割し、1 (s+t) からは1 sが剥離されている。1 (u+v) は、左側縁と右側縁下部に急角度の調整加工が施されたナイフ形石器である。先端部と器体上部付近で1 uと1 vに分割されているため、全体形状が不明である。製作途中で破損したナイフ形石器の未製品となる可能性もある。

【第5工程】 [中心部の石核から横長剥片1 (w～a b) を剥離する工程。]

1 (k～a b) の実測図の上面を打面として、幅広の横長剥片1 (w～a b) を剥離している。1 (w～a b) を素材として、鋭利な縁辺をもつ小型の剥片1 w～1 a bが剥離されている。素材剥片を用いて鋭利な縁辺をもつ剥片を剥離する過程は、第8ブロックの7 (a～c) と類似しており、1 w～1 a bを台形様石器と分類することも可能である。

第3工程～第5工程により剥離された剥片は、整った形状をしていた。しかも不純物の少ない良質な石質であった。これらの剥片を素材として、鋭利な縁辺をもつ小型の剥片を量産していた。このような剥離過程は他の母岩においても観察することができたが、最も良好な接合資料は、接合資料304である。

8. 第3 b文化層 (第25・26表、図版4・50)

概要 第3 b文化層の石器群は、総計57点出土し、第11ブロックから第13ブロックの3か所識別できた。調査区中央部東側の標高38m (現地表面) 付近に分布するIX a層上部～VII層下部に生活面をもつ石器群と推定される。主要器種は、彫器・削器・楔形石器である。石材は、主に硬質頁岩 (73%) が用いられ、次に黒曜石・砂岩・玉髓が用いられている。黒曜石の産地推定地はすべて高原山甘湯沢群である。ブロック間の接合資料は見られなかった。しかしながら、近接して出土し、出土層位に差異がなく、石器群の様相も類似していることから、第11ブロックから第13ブロックの石器群を第3 b文化層として設定した。第3 b文化層のブロック別組成表は、第26表のとおりである。第11ブロック14点、第12ブロック35点、第13ブロック8点で、第12ブロックの出土点数が多い。

第25表 第3 b文化層器種石材組成表

石材	器種	黒曜石産地推定地	彫	削	楔	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	削	剥	砕	石	台	点数
			器	器	器	片	片	片	片	片	核	石	
黒曜石	燧石	黒色				1			2		1		4
月砂	燧石	黒色							1				1
貝類	燧石	黒色							3			1	4
燧石	燧石	黒色							2				2
燧石	燧石	黒色							1				1
燧石	燧石	黒色	1	1	1	1	2	2	27	7			42
燧石	燧石	黒色					1		2				3
燧石	燧石	黒色	1	1	1	2	3	2	38	7	1	1	57

第26表 第3 b文化層ブロック別組成表

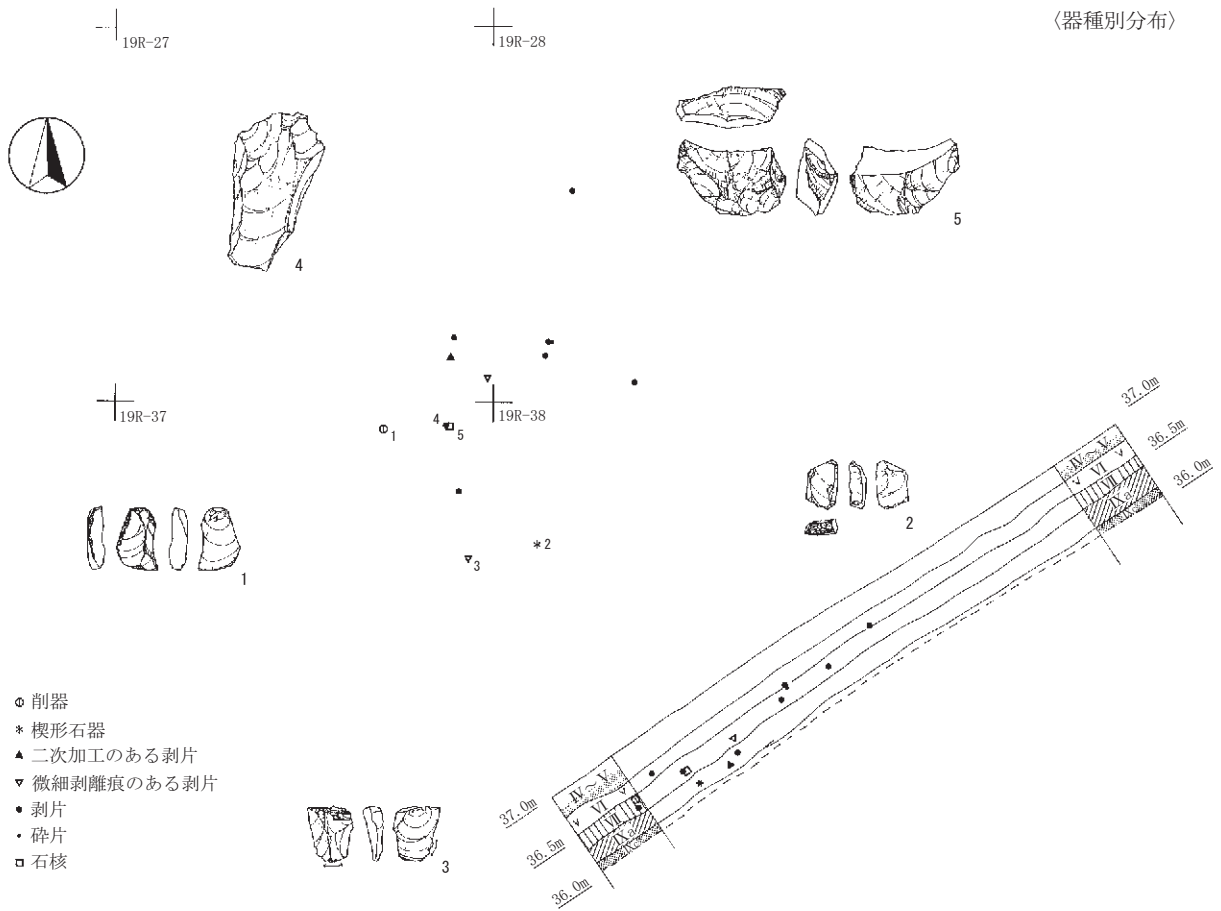
文化層	ブロック	石材	黒曜石産地推定地	彫	削	楔	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	削	剥	砕	石	台	点数	重量	平均重量	比重	
				器	器	器	片	片	片	片	片	核	石					
3b	11	ガラス質黒色安山岩								1					1	1.75	32.78	1.85
		燧石	黒色				1			2			1		4	7.02	24.81	1.39
		砂岩								2					2	3.51	84.04	4.73
		硬質頁岩						1		2	1				6	10.53	9.85	0.54
		燧石						1							1	1.75	2.25	0.13
	第11ブロック点数合計					1	1	1	2	7	1	1			14	24.56	153.33	8.54
	12	硬質頁岩					1	1	2	24	6				34	56.65	46.40	2.81
		燧石								1					1	1.75	11.55	0.85
	第12ブロック点数合計							1	1	2	25	6			35	61.40	57.95	3.26
	13	砂岩									1			1	2	3.51	1520.69	85.60
		頁岩									2				2	3.51	17.90	0.99
燧石										1				1	1.75	5.01	0.28	
燧石										1				2	3.51	3.69	0.21	
第13ブロック点数合計										6			1	8	14.04	1563.90	88.10	
全体点数総合					1	1	1	2	3	2	38	7	1	1	57	100.00	775.18	100.00

9. 第11ブロック (第53・54図、図版4・50)

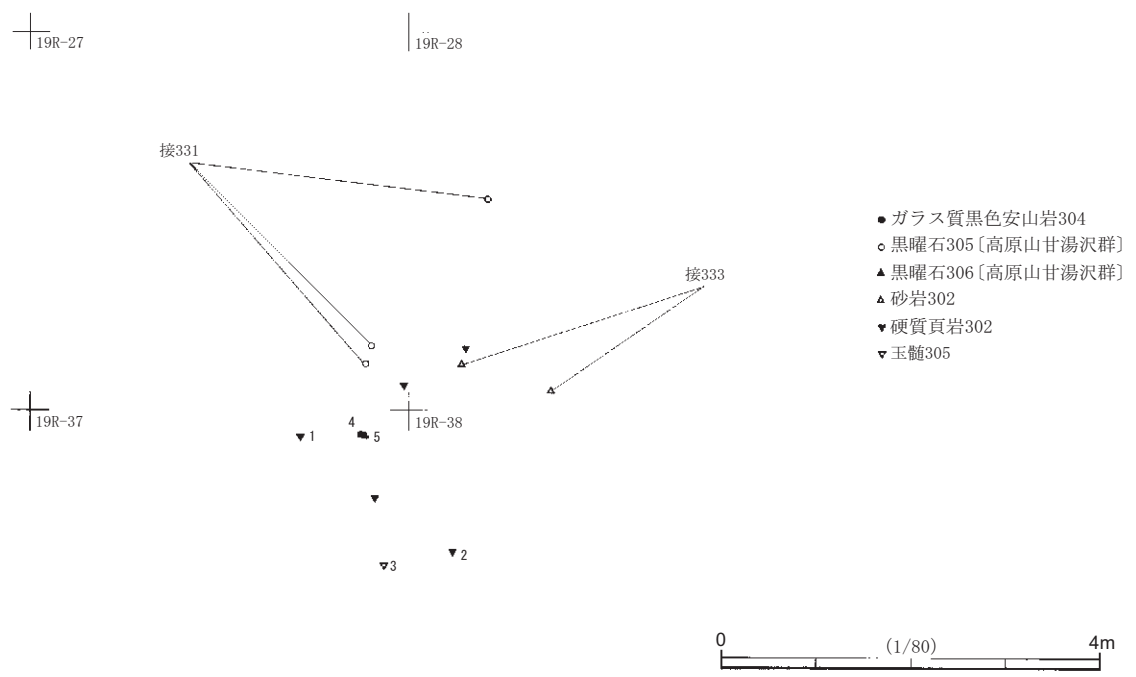
出土状況 19R-27・28・37・38グリッドに分布している。第3 b文化層のブロック群においては、西部に位置する。3.9m×3.5mの範囲から14点の石器が出土した。分布を詳細に見ると、南側に大半の遺物が集中するが、北側にやや離れて黒曜石が分布する傾向がある。出土層位はIX a層からVI層にかけてで、IX a層上部～VII層に集中する。

出土遺物 器種組成は、削器1点、楔形石器1点、二次加工のある剥片1点、微細剥離痕のある剥片2点、剥片7点、砕片1点、石核1点である。石材組成は、硬質頁岩6点、黒曜石4点、砂岩2点、ガラス質黒色安山岩1点、燧石1点である。

1は削器である。良質の硬質頁岩302が用いられている。縦長剥片を素材としている。末端部は肥厚した形状を呈する。左側縁上半部に平坦な調整加工が施されている。2は楔形石器である。1と同一母岩である。縦長剥片を素材として、末端部に急角度の調整加工を施した後に、上下両端から両極剥離が行われ



〈母岩別分布〉

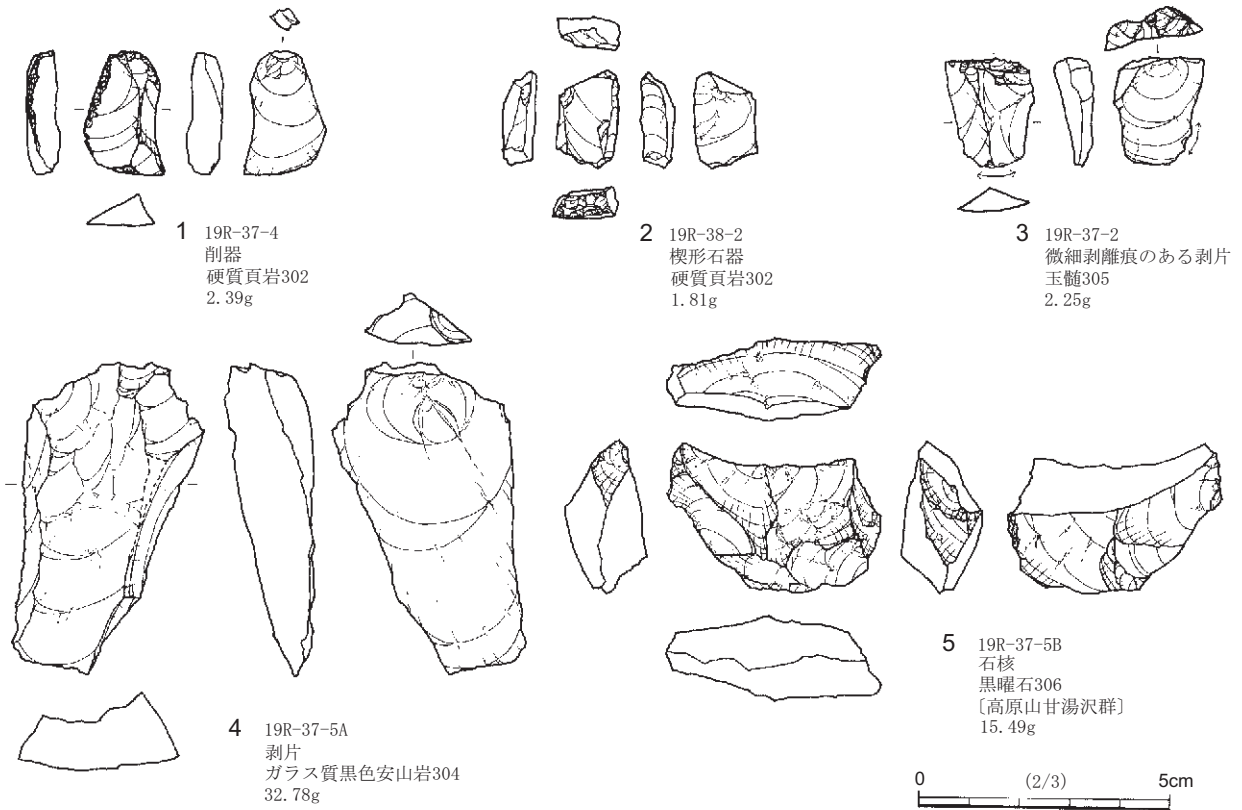


第53図 第3b文化層第11ブロック遺物分布

ている。3は微細剥離痕のある剥片である。頭部調整と打面調整が顕著に行われている。末端部に微細剥離が見られる。4は剥片である。ガラス質黒色安山岩が用いられている。第3b文化層でのガラス質黒色安山岩の出土は1点のみである。5は石核である。高原山甘湯沢群の黒曜石306が用いられている。黒曜石306は本資料のみで、石核として搬入されていた。厚みのある剥片を素材として、裏面右側から縦長剥片を剥離した後に、表面左下部から横長剥片を剥離、表面上部を折断した後に、折断面を打面として横長剥片を剥離している。

第27表 第3b文化層第11ブロック組成表

品名	母岩番号	黒曜石産地推定地	削器	楔形石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	砕片	石核	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
ガラス質黒色安山岩	304						1			1	7.14	32.78	21.38
黒曜石	305	高原山甘湯沢群			1		2			3	21.43	9.12	5.95
	306	高原山甘湯沢群							1	1	7.14	15.49	10.10
黒曜石点数合計					1		2		1	4	28.57	24.81	16.05
砂	302						2			2	14.29	84.04	54.81
硬質頁岩	302		1	1		1	2	1		6	42.86	9.65	6.29
玉髓	305					1				1	7.14	2.25	1.47
全体点数合計			1	1	1	2	7	1	1	14	100.00	153.33	100.00
点数組成比(%)			7.14	7.14	7.14	14.29	50.00	7.14	7.14	100.00			



第54図 第3b文化層第11ブロック出土石器

10. 第12ブロック (第55・56図、第28表、図版4・50)

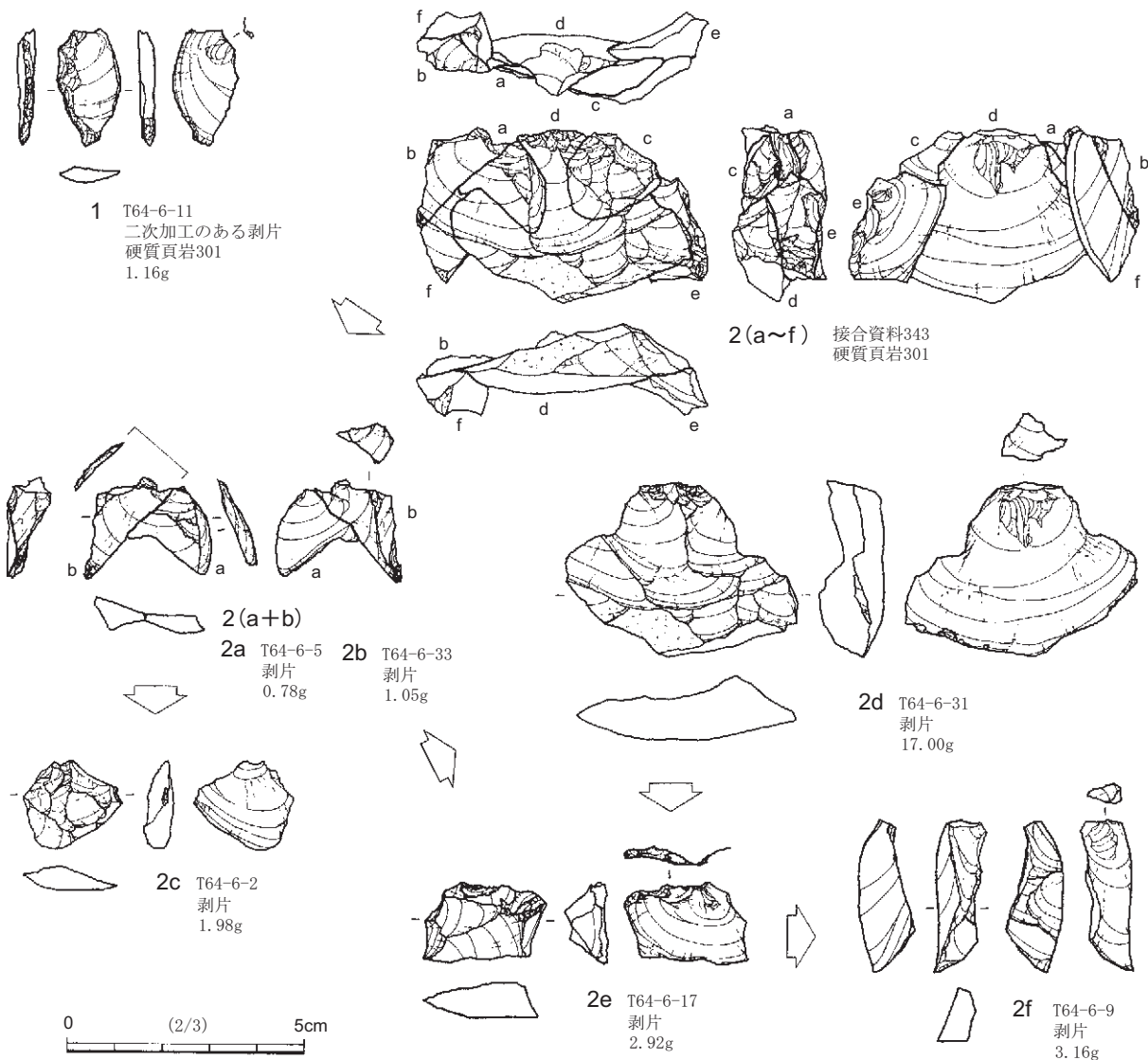
出土状況 19R-47・48・57グリッドに分布している。第3b文化層のブロック群においては、中央部に位置する。3.4m×3.1mの範囲から35点の石器が出土した。分布を詳細に見ると、北東部と南西部の2か所に集中地点があり、北東部の集中地点が大半を占める。出土層位はIXa層からVI層で、IXa層上部～VII層に集中する。

出土遺物 器種組成は、二次加工のある剥片1点、微細剥離痕のある剥片1点、削片2点、剥片25点、
 碎片6点である。石材組成は、硬質頁岩34点、玉髓1点である。硬質頁岩の占める割合（97%）が非常に
 高く、そのうち硬質頁岩301が26点（74%）である。硬質頁岩301に接合関係はないが、第13ブロックから
 も出土している。

1は二次加工のある剥片である。横長の剥片を素材として、左側縁と右側縁下部に急角度の調整加工が

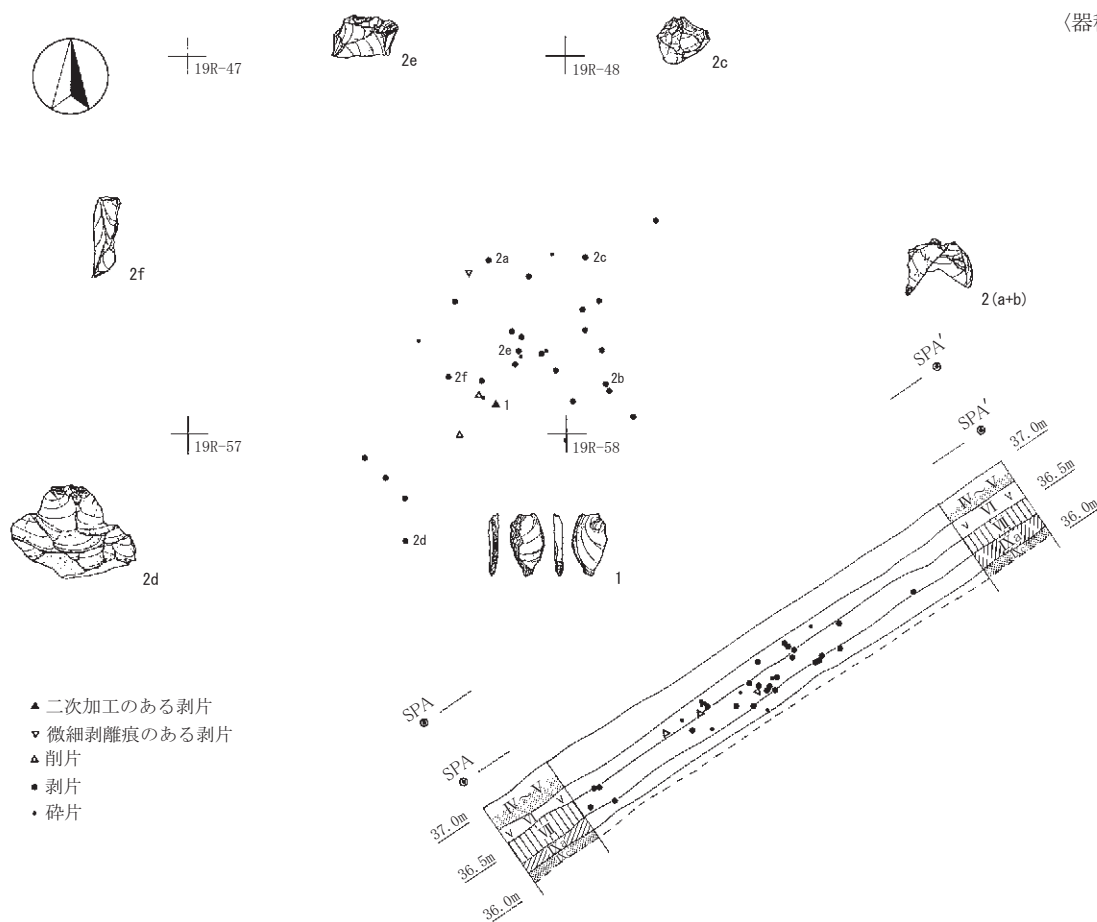
第28表 第3b文化層第12ブロック組成表

品名	器種	母體番号	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	削片	剥片	碎片	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
硬質頁岩		301	1	1	?	19	3	26	74.29	38.40	66.26
		303				5	3	8	22.86	8.00	13.81
砂質玉髓			1		2	24	6	34	97.14	46.40	80.07
玉髓		304				1		1	2.86	11.55	19.93
全体			1	1	2	25	6	35	100.00	57.95	100.00
点数組成比(%)			2.86	2.86	5.71	71.43	17.14				

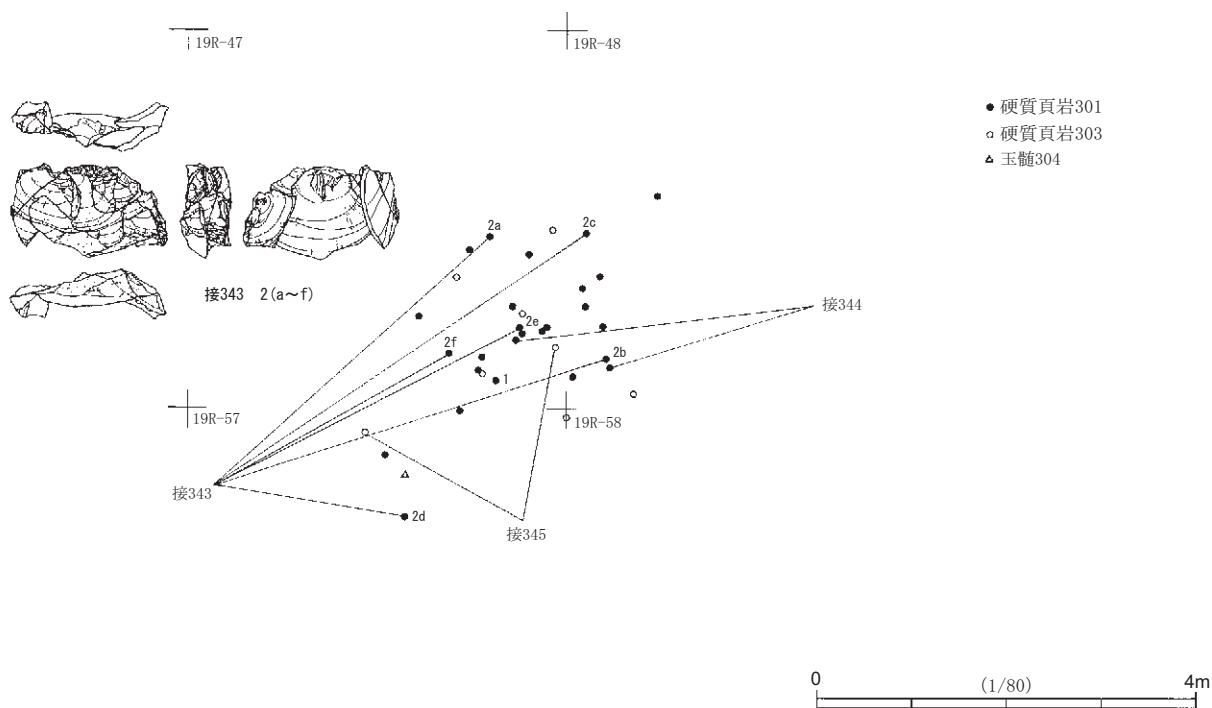


第55図 第3b文化層第12ブロック出土石器

〈器種別分布〉



〈母岩別分布〉

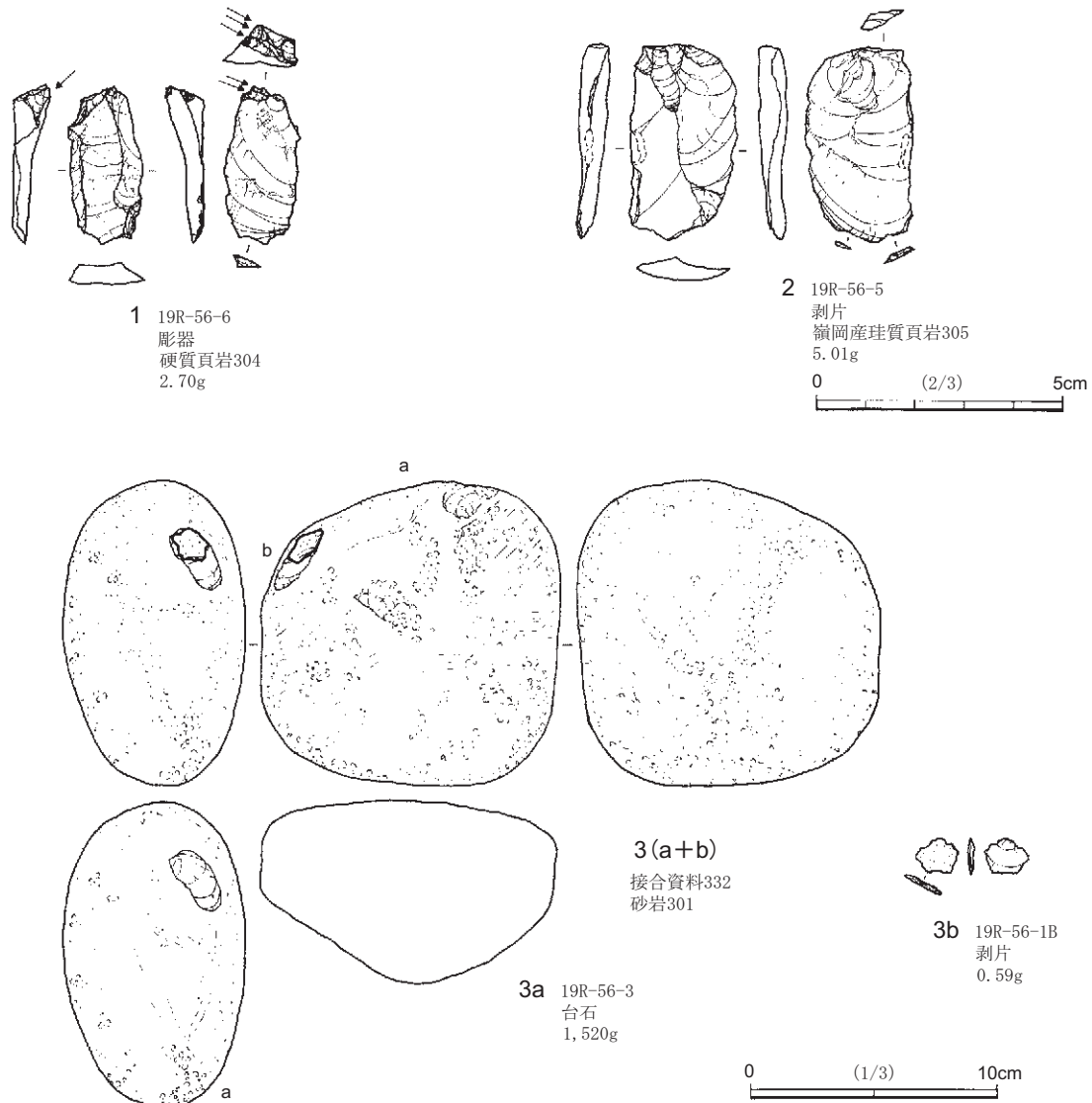


第56図 第3 b文化層第12ブロック遺物分布

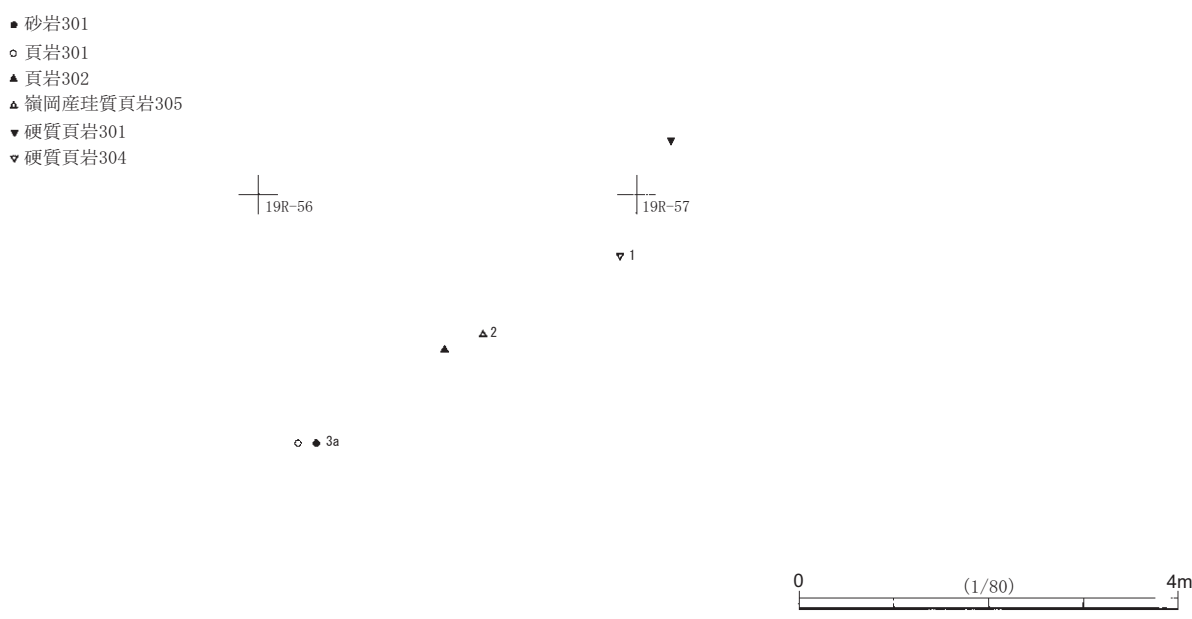
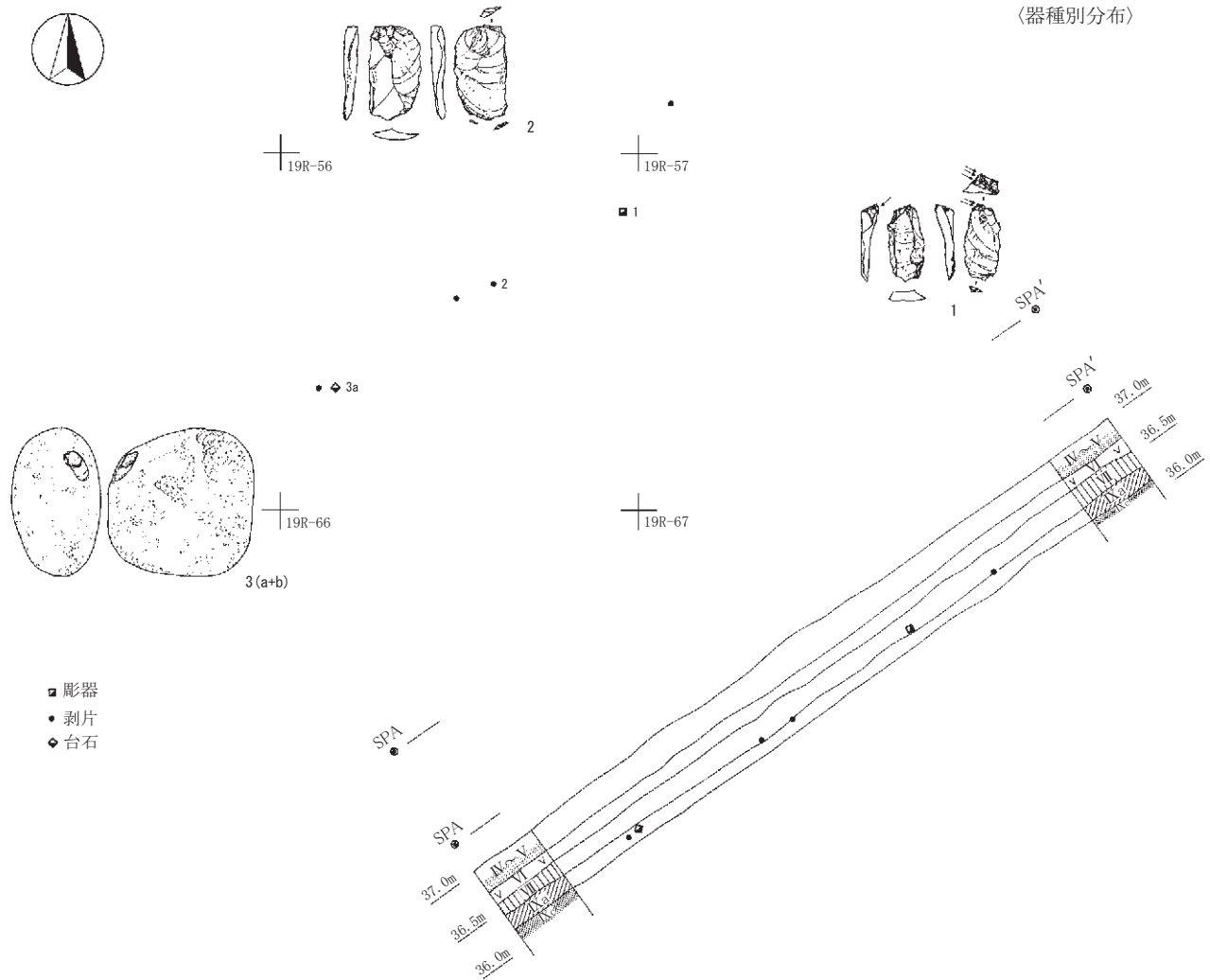
施されている。ナイフ形石器と分類することも可能である。2(a~f)は厚みのある横長剥片を素材として、入念に頭部調整を行いながら剥片を剥離した接合資料である。素材である厚みのある剥片の主要剥離面は、全体図裏面の2bと2fの剥離面に残されている。上面左部を打面として、横長剥片2(a+b)を剥離している。2aと2bは、2(a+b)を剥離した際の同時割れによるものと思われる。上面右部を打面として、横長剥片2cを剥離している。さらに、上面中央部を打面として、横長剥片2dを剥離し、次に右側縁中央部に打面を転移して、横長剥片2eを剥離している。最後に、上面左部に打面を転移して、細長の剥片2fを剥離している。

11. 第13ブロック (第57・58図、第29表、図版4・50)

出土状況 19R-47・56グリッドに分布している。第3b文化層のブロック群においては、東部に位置する。3.1m×3.8mの範囲から8点の石器が出土した。南西から北西にかけて細長く分布している。南西部には台石が出土した。出土層位はIXa層上部~VII層に集中する。



第57図 第3b文化層第13ブロック出土石器



第58図 第3b文化層第13ブロック遺物分布

第29表 第3b文化層第13ブロック組成表

産地	種別	母岩番号	彫器	剥片	台石	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
砂岩	岩	301		1	1	2	25.00	1520.58	97.23
頁岩	岩	301		1		1	12.50	13.15	0.84
		302		1		1	12.50	4.45	0.28
頁岩点数合計				2		2	25.00	17.60	1.13
嶺岡産珪質頁岩	岩	305		1		1	12.50	5.01	0.32
硬質頁岩	岩	301		1		1	12.50	0.99	0.06
		304	1			1	12.50	2.70	0.17
硬質頁岩点数合計			1	1		2	25.00	3.69	0.24
玉髓	髓	303		1		1	12.50	17.01	1.09
全体点数合計			1	6	1	8	100.00	1563.90	100.00
点数組成比(%)			12.50	75.00	12.50	100.00			

出土遺物 器種組成は、彫器1点、剥片6点、台石1点である。石材組成は、硬質頁岩2点、頁岩2点、砂岩2点、嶺岡産珪質頁岩1点、玉髓1点である。

1は彫器である。良質な硬質頁岩304が単独で搬入されている。縦長剥片を素材として、打面部側に4条の樋状剥離が行われている。いずれも右側縁上部を打面としている。最初の樋状剥離は、表面側に施され、後の3条の樋状剥離は裏面側に施されている。2は剥片である。良質の嶺岡産珪質頁岩305が用いられている。頭部調整が入念に施される。3は台石である。粒子のやや粗い砂岩が用いられている。非常に大型で、1,520gと重量感のある楕円形礫を素材としている。敲打痕が部分的に見られ、表面平坦面の敲打痕と線条痕が顕著である。3aと3bとの接合資料であるが、剥離面の色調は茶褐色であり、台石全体もやや赤化していることから、火熱を受けた可能性がある。なお、剥落した3bの明確な出土地点は不明だが、3aと同じグリッドの19R-56から出土している。

12. 第3c文化層 (第30表、図版5・50)

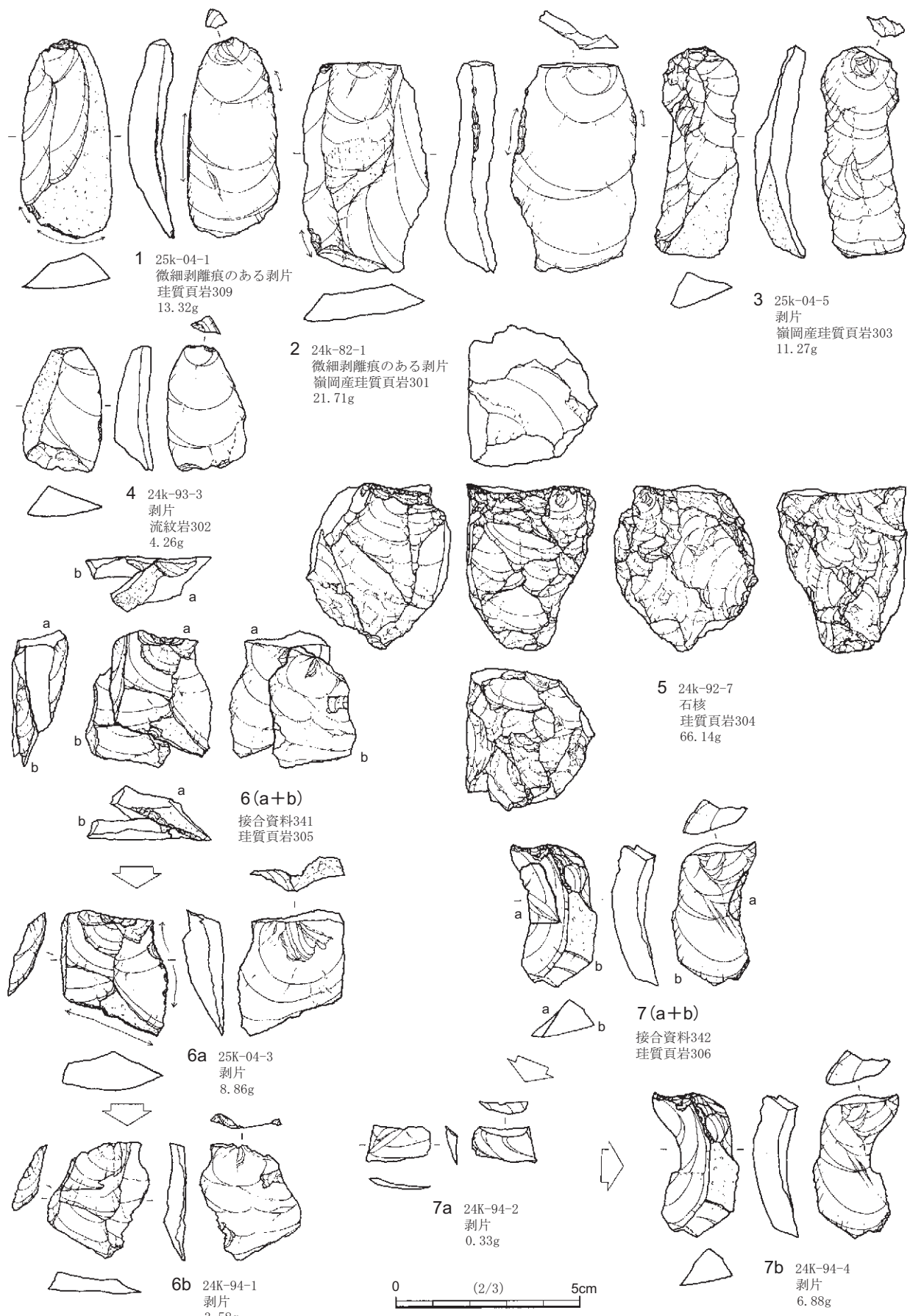
概要 第3c文化層の石器群は、総計45点出土し、第14ブロックの1か所を識別できた。調査区中央部の標高37m~38m(現地表面)にかけて分布する。IXa層~VII層に生活面をもつ石器群と推定される。

13. 第14ブロック (第59~61図、第30表、図版5・50)

出土状況 24K-82・83・91~94、25K-01・04グリッドに分布している。7.4m×13.7mの範囲から45点の石器が出土した。楕円形の細長い範囲に散漫に分布している。分布を詳細に見ると、西部・中央部・東部の3か所に集中地点がある。西部の集中地点が大半を占める。出土層位はIXa層上部~VII層に集中する。

第30表 第3c文化層第14ブロック組成表

産地	種別	母岩番号	微細剥離痕のある剥片	剥片	砕片	台石	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
塊状	岩	302		1			1	2.22	4.28	1.31
頁岩	岩	310		1			1	2.22	7.76	2.39
珪質頁岩	岩	304		15	2	1	18	40.00	202.85	62.40
		305		4			4	8.89	17.44	5.36
		306		3			3	6.67	12.68	3.90
		307		2			2	4.44	13.75	4.23
		308		1			1	2.22	1.37	0.42
		309		1			1	2.22	13.32	4.10
		珪質頁岩点数合計			1	25	2	1	29	64.44
嶺岡産珪質頁岩	岩	301	1				1	2.22	21.71	6.68
		302		6	1		7	15.56	12.03	3.70
		303		2			2	4.44	12.34	3.80
嶺岡産珪質頁岩点数合計			1	8	1		10	22.22	46.08	14.17
玉髓	髓	302		4			4	8.89	5.57	1.71
全体点数合計			2	39	3	1	45	100.00	325.08	100.00
点数組成比			4.44	86.67	6.67	2.22	100.00			



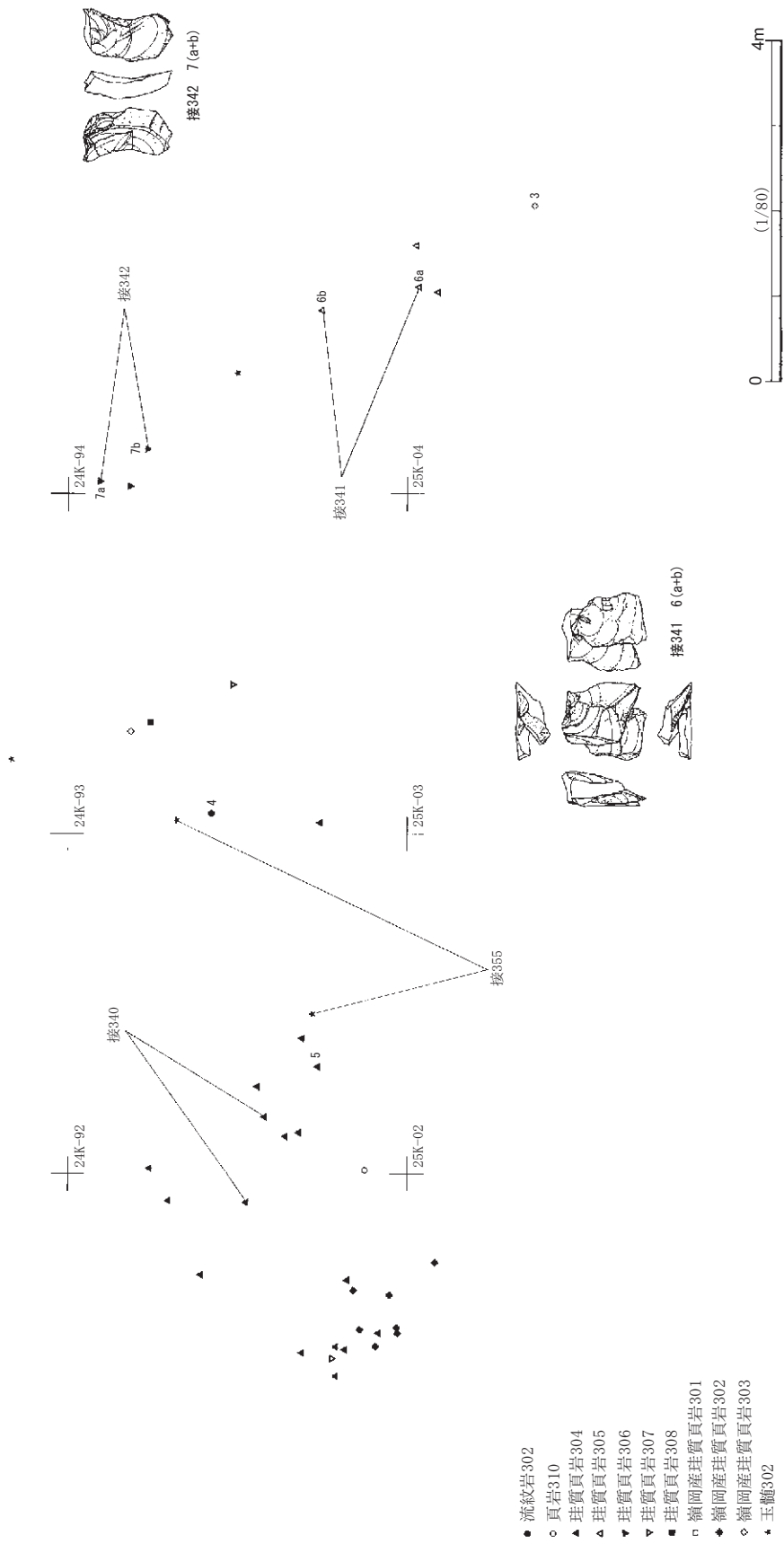
第59図 第3c文化層第14ブロック出土石器



第60図 第3c文化層第14ブロック器種別分布



□ 2



第61図 第3c文化層第14ブロック母岩分布

出土遺物 器種組成は、微細剥離痕のある剥片2点、剥片39点、碎片3点、石核1点である。石材組成は、珪質頁岩29点、嶺岡産珪質頁岩10点、玉髓4点、頁岩1点、流紋岩1点である。

1・2は微細剥離痕のある剥片である。1は顕著に頭部調整が行われた縦長剥片を素材として、末端部左側と裏面の両側縁に微細剥離が見られる。2は打面幅の広い縦長剥片を素材としている。3・4は剥片である。1～4は、背面の剥離方向と主要剥離面の剥離方向が一致する規格性の高い縦長剥片であることから、石刃技法によるものである可能性が高い。5は石核である。正面と左面には、上面の平坦打面から連続的に縦長剥片が剥離されている。石核の下端部は石核成形が行われている。これらのことから、石刃技法による石核と捉えることができる。頭部調整が顕著に行われ、打面調整は見られない。6(a+b)は、節理面を打面として、幅広の打面から連続して剥離された剥片である。7(a+b)は、縦長剥片である。7aは7(a+b)を剥離した際に同時割れした剥片と思われる。

14. 第3d文化層 (第31表)

概要 第3d文化層の石器群は、7点出土し、第15ブロックの1か所を識別できた。調査区中央部の標高37m～38m（現地表面）にかけて分布する。南東に緩やかに傾斜する台地の縁辺部に立地する。IXa層～VII層に生活面をもつ石器群と推定される。

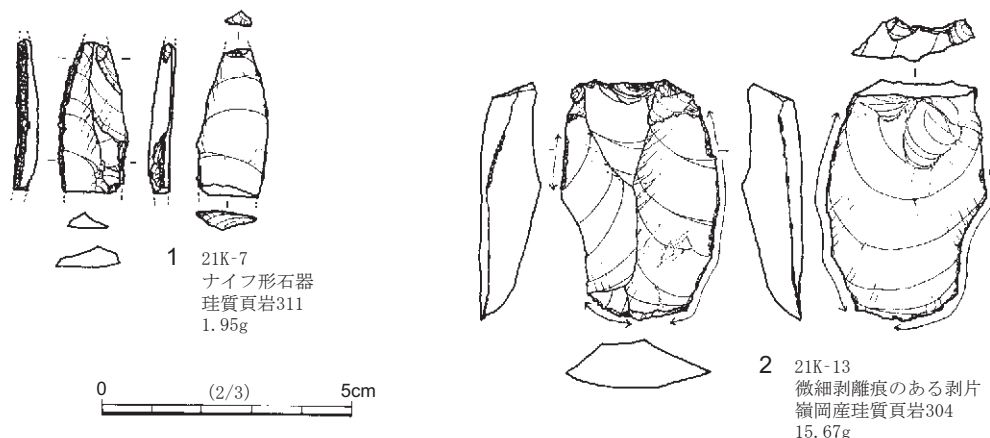
15. 第15ブロック (第62・63図、第31表、図版50)

出土状況 21K-22～24グリッドに分布している。4.1m×4.8mの範囲から7点の石器が出土した。楕円形の範囲に散漫に分布している。分布を詳細に見ると、北側に集中地点があり、南東に離れてナイフ形石器が出土している。出土層位は、IXa層からVI層で、IXa層上部～VII層に集中する。

出土遺物 器種組成は、ナイフ形石器1点、微細剥離痕のある剥片1点、剥片4点、碎片1点である。石材組成は、ガラス質黒色安山岩5点、珪質頁岩1点、嶺岡産珪質頁岩1点である。

第31表 第3d文化層第15ブロック組成表

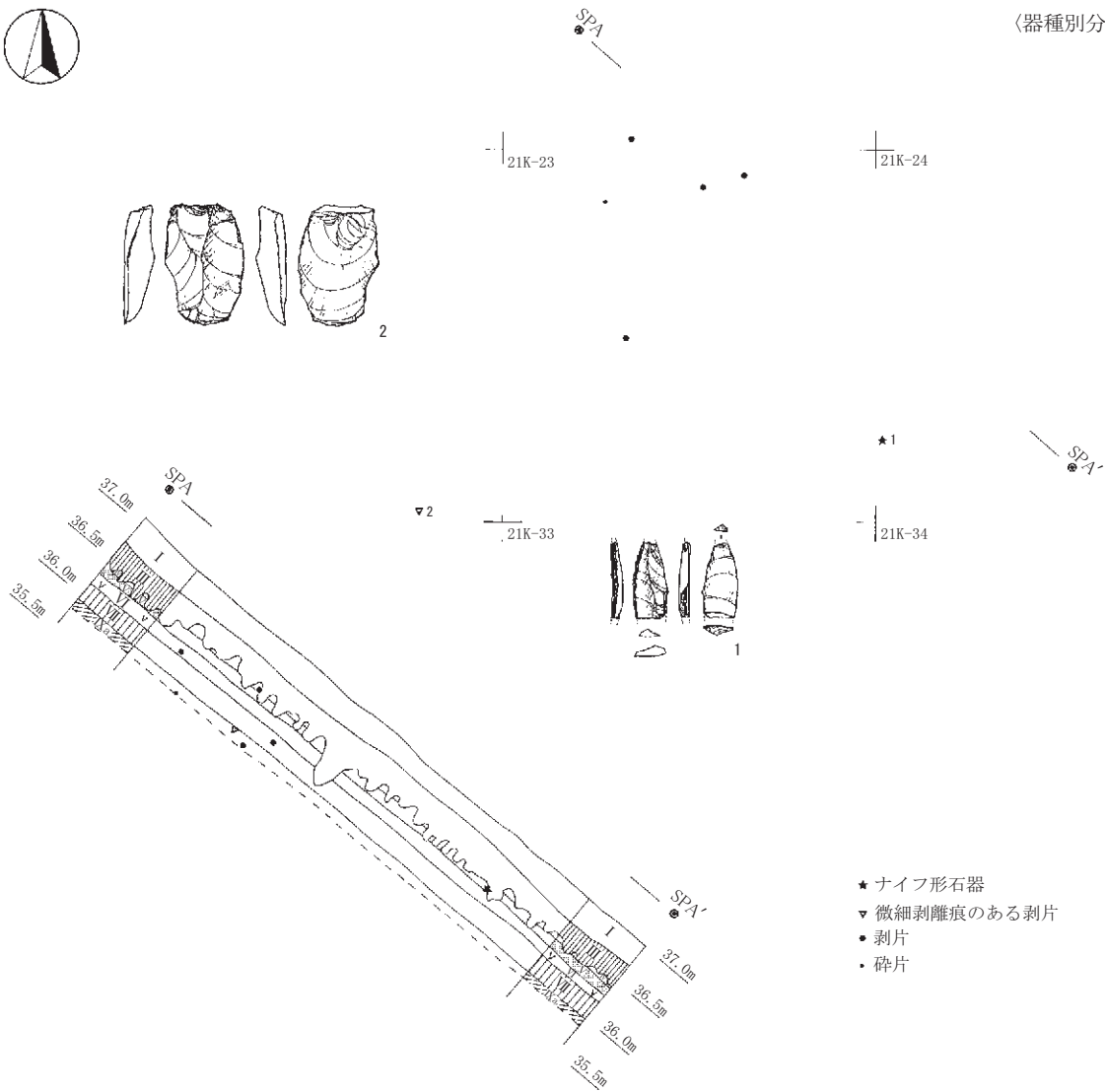
母岩	器種	母岩番号	ナイフ形石器	微細剥離痕のある剥片	剥片	碎片	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
ガラス質黒色安山岩		301			4	1	5	71.43	13.87	44.05
珪質頁岩		311	1				1	14.29	1.95	6.19
嶺岡産珪質頁岩		304		1			1	14.29	15.67	49.76
全体点数合計			1	1	4	1	7	100.00	31.49	100.00
点数組成比			14.29	14.29	57.14	14.29	100.00			



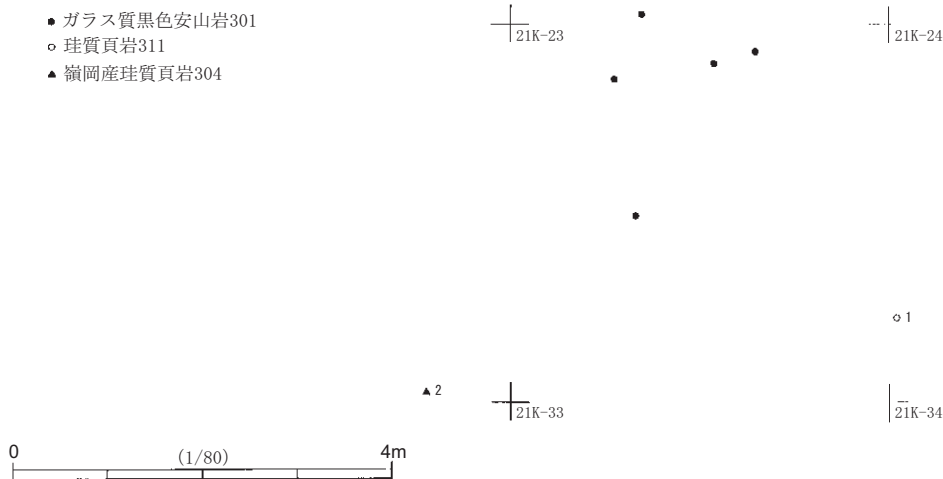
第62図 第3d文化層第15ブロック出土石器



〈器種別分布〉



〈母岩別分布〉



第63図 第3d文化層第15ブロック遺物分布

1はナイフ形石器である。縦長剥片を素材として、左側縁と右側縁下部に刃潰し加工が施されている。上下両端は折れている。良質の珪質頁岩311が用いられており、製品として搬入されている。2は微細剥離痕のある剥片である。頭部調整が非常に顕著に行われた縦長剥片を素材として、右側縁から下端部にかけて連続した微細剥離が見られる。

16. 第3e文化層 (第32表)

概要 第3e文化層の石器群は、総計56点出土し、第16ブロックの1か所を識別できた。調査区南西部の標高36m～37m(現地表面)にかけて分布する。北東に緩やかに傾斜する台地の縁辺部に立地する。出土層位は明確に確認することができなかったが、第3文化層の石器群の様相と類似していることから、第3e文化層として捉えた。

17. 第16ブロック (第64～66図、第32表、図版51)

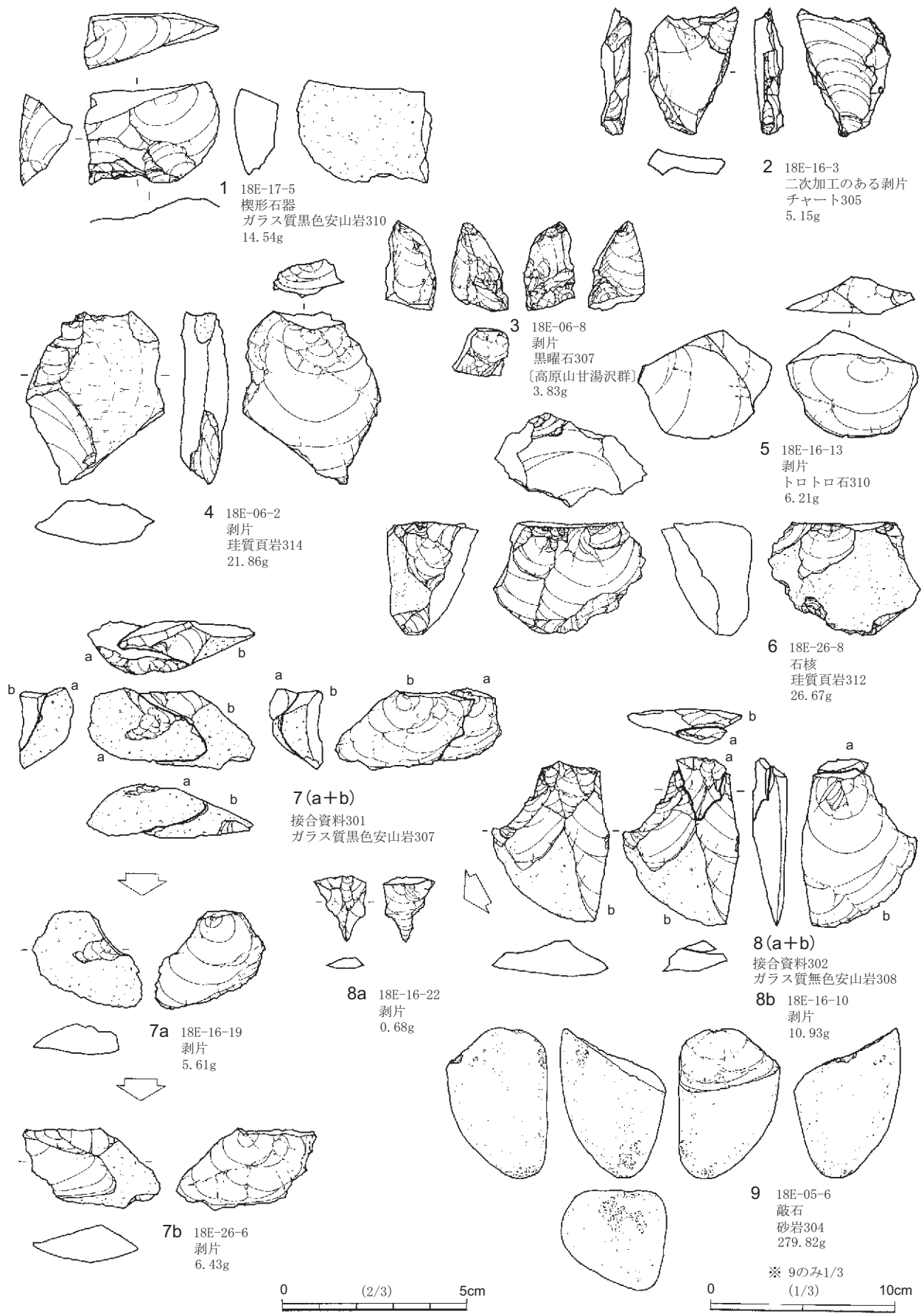
出土状況 35D-50・51・60～62・71グリッドに分布している。10.0m×9.5mの範囲から56点の石器が出土した。出土状況については、出土グリッドは明確に確定できたものの、グリッド内の正確な位置は不明であった。そのため、分布図については、出土点数に応じて均等に割り付けして作成した。出土層位についても、明確ではない。

出土遺物 器種組成は、楔形石器1点、二次加工のある剥片1点、剥片42点、破片9点、石核1点、敲石1点、礫片1点である。石材組成は、ガラス質黒色安山岩28点、珪質頁岩11点、チャート6点、トロトロ石4点、黒曜石3点、砂岩2点、ホルンフェルス2点である。黒曜石の産地推定地はすべて高原山甘湯沢群である。

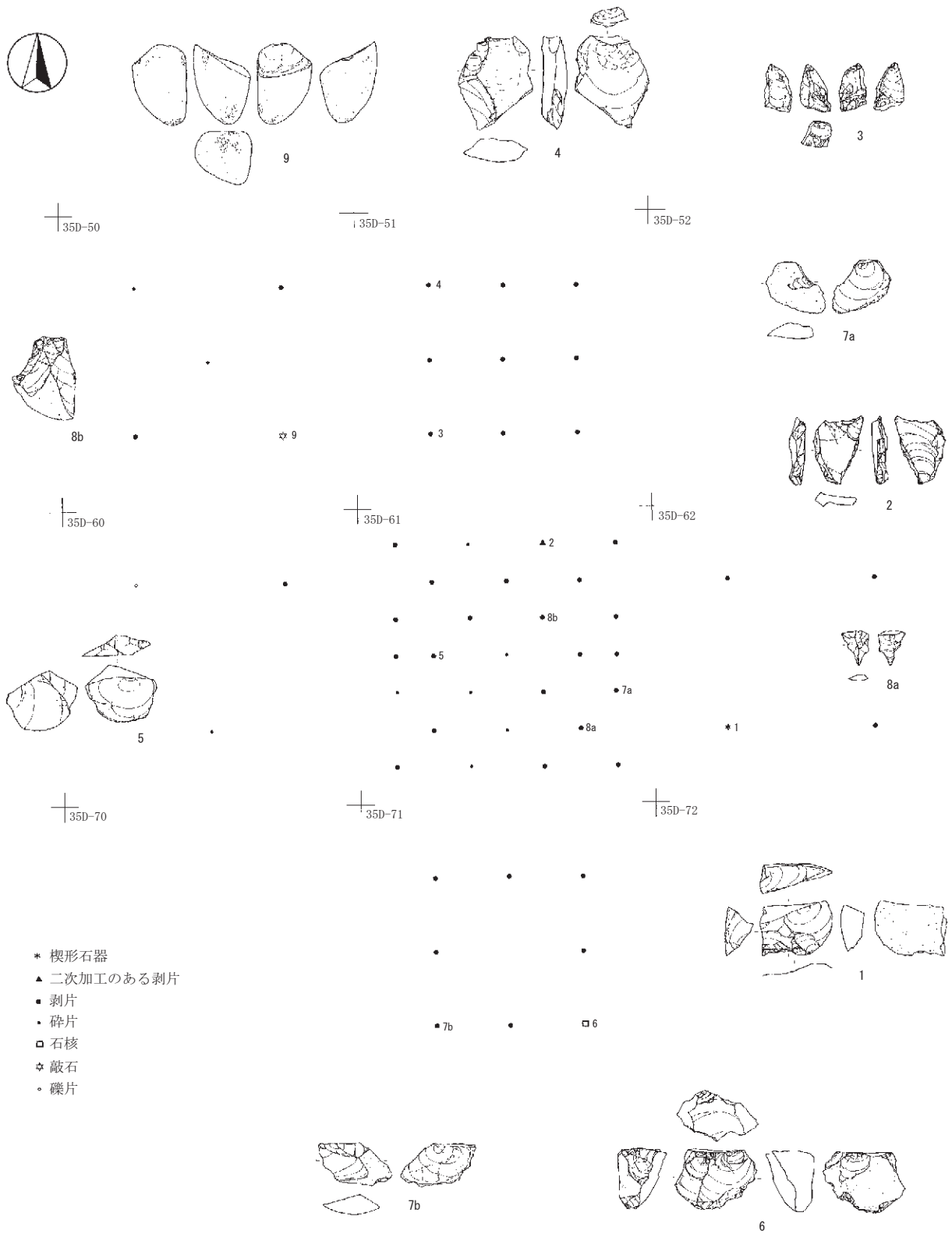
1は楔形石器である。厚みのある分割剥片を素材として、両極剥離が行われている。上面は折れている。2は二次加工のある剥片である。良質のチャート305が用いられている。おそらく両極剥離により剥離さ

第32表 第3e文化層第16ブロック組成表

器種	母岩番号	黒曜石産地推定地	楔形石器	二次加工のある剥片	剥片	破片	石核	敲石	礫片	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
ガラス質黒色安山岩	307				10	7				17	30.36	49.40	9.82
	308				3					3	5.36	17.95	3.57
	309				2					2	3.57	5.13	1.07
	310				3					4	7.14	28.25	5.22
	311				1					1	1.79	5.90	1.17
	312				1					1	1.79	3.12	0.62
	ガラス質黒色安山岩点数合計			1		20	7				28	50.00	107.75
トロトロ石	302				1					1	1.79	7.13	1.47
	310				3					3	5.36	8.44	1.68
トロトロ石点数合計					4					4	7.14	15.57	3.09
黒曜石	307	高原山甘湯沢群			3					3	5.36	9.40	1.87
	304							1		1	1.79	279.92	55.61
砂岩								1		1	1.79	0.38	0.08
砂岩点数合計								1		2	3.57	280.20	55.69
珪質頁岩	312				2		1			3	5.36	28.92	5.75
	313				2	1				3	5.36	3.30	0.66
	314				2					2	3.57	36.61	7.28
	315				1					1	1.79	1.73	0.34
	316				1					1	1.79	3.16	0.63
	317				1					1	1.79	0.56	0.11
珪質頁岩点数合計					9	1	1			11	19.64	74.78	14.76
ホルンフェルス	302				1					1	1.79	3.09	0.61
	303				1					1	1.79	0.46	0.09
ホルンフェルス点数合計					2					2	3.57	3.55	0.71
チャート	305			1		1				2	3.57	5.57	1.11
	306					3				3	5.36	3.28	0.65
	307					1				1	1.79	3.34	0.70
チャート点数合計				1		4				6	10.71	12.39	2.48
全体点数合計					42	9	1	1	1	56	100.00	503.14	100.00
点数組成比					1.79	1.79	75.00	16.07	1.79	1.79	1.79	100.00	



第64図 第3e文化層第16ブロック出土石器

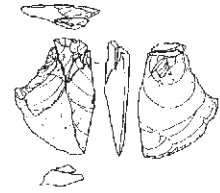


- * 楔形石器
- ▲ 二次加工のある剥片
- 剥片
- 碎片
- 石核
- ☆ 蔽石
- 礫片

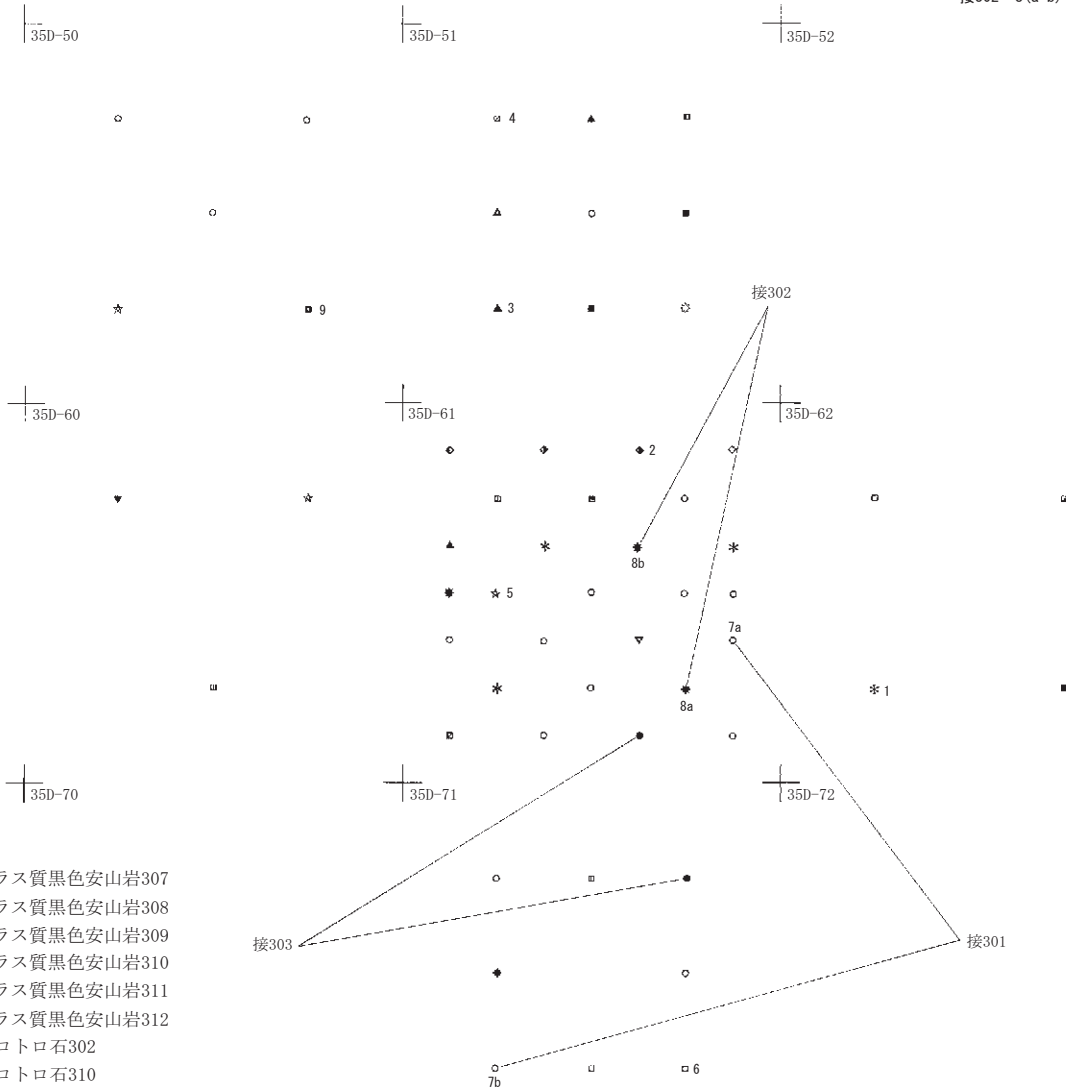
※石器の出土位置については、グリッド内の正確な位置は不明であった。ただし、それぞれのグリッドから出土したことは明確であったため、出土状況が濃密か希薄かの判断ができるように、グリッド単位で出土点数に応じて均等割付けして分布図を作成してある。

0 (1/80) 4m

第65図 第3 e文化層第16ブロック器種別分布 (概念図)



接302 8(a+b)

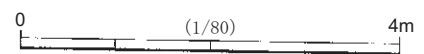


- ガラス質黒色安山岩307
- ★ ガラス質黒色安山岩308
- ガラス質黒色安山岩309
- * ガラス質黒色安山岩310
- ◇ ガラス質黒色安山岩311
- ▲ ガラス質黒色安山岩312
- ▼ トロトロ石302
- ☆ トロトロ石310
- ▲ 黒曜石307〔高原山甘湯沢群〕
- ▼ 砂岩
- 砂岩304
- 珪質頁岩312
- 珪質頁岩313
- 珪質頁岩314
- 珪質頁岩315
- 珪質頁岩316
- 珪質頁岩317
- ホルンフェルス302
- ◆ ホルンフェルス303
- チャート305
- チャート306
- チャート307



接301 7(a+b)

※石器の出土位置については、グリッド内の正確な位置は不明であった。ただし、それぞれのグリッドから出土したことは明確であったため、出土状況が濃密か希薄かの判断ができるように、グリッド単位で出土点数に応じて均等割付けして分布図を作成してある。



第66図 第3 e 文化層第16ブロック母岩別分布（概念図）

れた板状の剥片を素材として、右側縁に粗い調整加工が施されている。3～5は剥片である。3は両極剥離により剥離されている。4は右下端部が折れている。5は幅広の剥片である。6は石核である。裏面に自然面を大きく残している。厚みのある分割剥片を素材とし、上面の分割面を打面として、縦長剥片を剥離している。7(a+b)は、6と同様に厚みのある分割剥片を素材とし、上面の分割面を打面として、幅広の剥片7aと7bを連続して剥離している。8(a+b)は、頭部調整剥片8aと縦長剥片8bが接合した資料である。9は敲石である。楕円形礫を素材とし、下端部の突出部の敲打痕が顕著である。その他左上部などにも数か所の敲打痕が見られる。上半部は破損している。

18. 第3文化層単独出土石器 (第67図、第33表、図版5・51)

出土状況 ブロックとして分けすることができなかった石器のうち、第3文化層に帰属すると思われるものを第3文化層単独出土石器として扱うこととした。

出土遺物 器種組成は、二次加工のある剥片1点、剥片3点、礫片1点である。石材組成は、ガラス質黒色安山岩2点、硬質頁岩1点、嶺岡産珪質頁岩1点、砂岩1点である。

1は12I-96グリッド出土の幅広の剥片である。12I-96グリッドから2点出土した。発掘時の出土層位の所見がIXa層であることから第3文化層に帰属させた。ガラス質黒色安山岩が用いられている。2は15J-29グリッド出土の二次加工のある剥片である。良質の硬質頁岩が用いられている。裏面右上部から打面部を除去するような剥離をした後に、右上部を打面として腹面方向に平坦な調整加工が施されている。槌状剥離として捉えることも可能で、彫器と分類することもできる。第13ブロック出土の1の彫器と類似していることから、第3文化層に帰属させた。



第67図 第3文化層単独出土石器

第33表 第3文化層単独出土組成表

器種	母岩番号	二次加工のある剥片	剥片	礫片	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
ガラス質黒色安山岩	305		1		1	20.00	18.67	29.49
	306		1		1	20.00	7.89	12.46
ガラス質黒色安山岩 点数合計			2		2	40.00	26.56	41.95
嶺岡産珪質頁岩	306		1	1	1	20.00	25.04	39.55
硬質頁岩	306	1			1	20.00	4.43	7.00
砂岩	306				1	20.00	7.28	11.50
全体点数合計		1	3	1	5	100.00	63.31	100.00
点数組成比		20.00	60.00	20.00	100.00			

第6節 第4文化層

1. 概要 (第34・35表)

第4文化層の石器群は、総計49点出土し、第17ブロックと第18ブロックの2か所に識別できた。V層～IV層下部に生活面をもつ石器群と推定される。両ブロックは出土地点が離れており、ブロック間の接合関係が見られないことから、文化層を第4 a文化層と第4 b文化層に細別した。

第34表 第4文化層器種石材組成表

石 材	器 種	器 種					点 数 総 計
		ナイフ形石器	掻 器	二次加工のある剥片	剥 片	砕 片	
ガラス質黒色安山岩			1	2	10	2	17
珪質黒色安山岩		2		1	12	3	18
手ヤマト					2		2
玉髓					9	3	12
点 数 総 計		2	1	3	33	5	49

第35表 第4文化層ブロック別組成表

文 化 層	ブ ロ ッ ク	石 材	器 種					点 数 合 計	点 数 比 (%)	重 量 合 計 (g)	重 量 比 (%)	
			ナイフ形石器	掻 器	二次加工のある剥片	剥 片	砕 片					
4a	17	ガラス質黒色安山岩			1			1	2.04	1.87	0.61	
		珪質黒色安山岩	2			11		3	16	32.65	107.33	35.24
		手ヤマト				2			2	4.08	12.47	4.09
		玉髓				9	3		12	24.49	6.74	2.21
第4 a文化層点数合計			2			23	3	31	63.27	128.41	42.16	
4b	18	ガラス質黒色安山岩		1	2	9	2	2	16	32.65	123.98	40.70
		第4 b文化層点数合計		1	2	9	2	2	16	32.65	123.98	40.70
4	単独	珪質黒色安山岩			1	1			2	4.08	52.21	17.14
第4文化層単独出土点数合計					1	1		2	4.08	52.21	17.14	
第4文化層点数合計			2	1	3	33	5	49	100.00	304.60	100.00	
点 数 組 成 比			4.08	2.04	6.12	67.35	10.20	10.20	100.00			

2. 第4 a文化層 (第36表、図版6・51)

概要 第4 a文化層の石器群は、総計31点出土し、第17ブロックのみで構成される。調査区南東部の標高38m (現地表面) 付近に分布する。北東に細長く延びる谷津の谷頭に位置する。V層～IV層下部に生活面をもつ石器群と推定される。

3. 第17ブロック (第68～70図、第36表、図版6・51)

出土状況 27J-04～07・13～15・23グリッドに分布している。6.2m×6.8mの範囲から31点の石器が出土した。楕円形の範囲に散漫に分布している。分布を詳細に見ると、北東部と南西部の2か所の集中地点が見られる。出土層位は、V層～IV層下部に集中する。

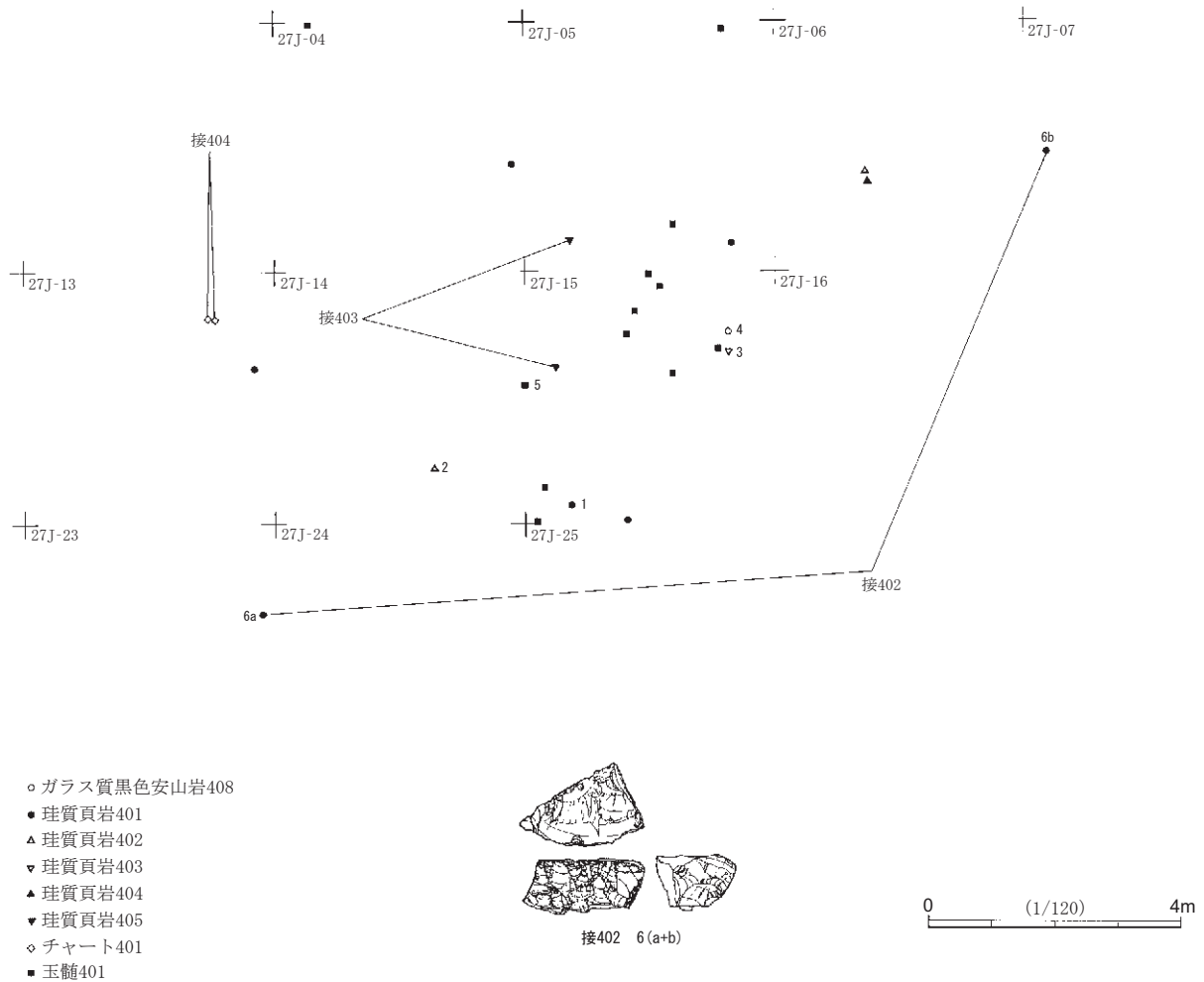


第68図 第4 a文化層第17ブロック器種別分布

第36表 第4 a文化層第17ブロック組成表

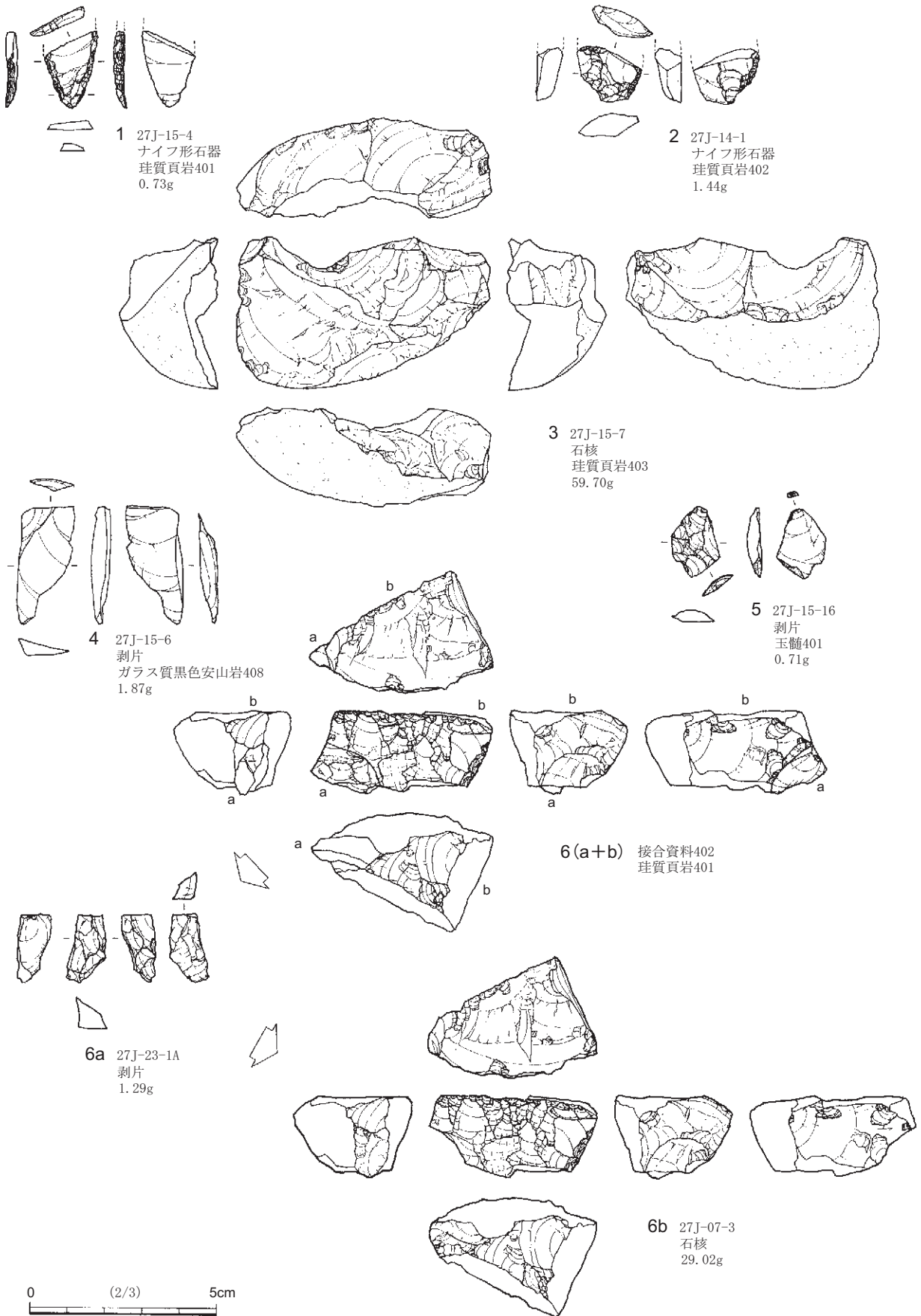
母岩種	母岩番号	ナイフ形石器	剥片	碎片	石核	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
黒曜石	408					1	3.23	1.87	1.46
珪質頁岩	401	1	7		2	10	32.26	39.66	30.89
	402	1	1			2	6.45	5.41	4.21
	403				1	1	3.23	59.76	46.49
	404		1			1	3.23	0.57	0.44
	405		2			2	6.45	1.99	1.55
珪質頁岩点数合計		2	11		3	16	51.61	107.33	83.58
チャート	401		2			2	6.45	12.47	9.71
玉髓	401		9	3		12	38.71	6.74	5.25
全体点数合計		2	23	3	3	31	100.00	128.41	100.00
点数組成比 (%)		6.45	74.19	9.68	9.68				

出土遺物 器種組成は、ナイフ形石器2点、剥片23点、碎片3点、石核3点である。石材組成は、珪質頁岩16点、玉髓12点、チャート2点、黒曜石1点である。



第69図 第4 a文化層第17ブロック母岩別分布

1・2はナイフ形石器である。1は良質の珪質頁岩401が用いられている。右側縁と左側縁下部に刃潰し加工が施されている。器体の中央部から上部が破損しているため全体形状は不明である。2は良質の珪質頁岩402が用いられている。右側縁下部と裏面右側縁下部に平坦な調整加工が施されている。器体の大半が破損しているため全体形状は不明である。平坦な調整加工が施されていることから、尖頭器の基部となる可能性もある。3は石核である。分割した厚みのある剥片を素材として、表面上部から数枚の横長剥片を剥離している。4・5は剥片である。4は器体の中央部から折れている。5は点状の打面から剥離された剥片で、背面には多方向からの細かい剥離面が見られる。6(a+b)は分割した厚みのある剥片を素材とし、上面の分割面を打面として、小型の縦長剥片を数枚剥離した後に、打面を左側面下部に転移して、小型の縦長剥片6aを剥離している。



第70図 第4 a文化層第17ブロック出土石器

4. 第4 b文化層 (第37表、図版6・51)

概要 第4 b文化層の石器群は、総計16点出土し、第18ブロックのみで構成される。調査区北東部の標高37m～38m (現地表面) にかけて分布する。北東に細長く伸びる谷津の北側に位置する。V層～IV層下部に生活面をもつ石器群と推定される。第4 a文化層に比べてやや下位から石器が出土している。

5. 第18ブロック (第71・72図、第37表、図版6・51)

出土状況 17T-60・61グリッドに分布している。2.2m×3.5mの範囲から16点の石器が出土した。楕円形の範囲に分布している。分布を詳細に見ると、西部に石器が集中し、東部にやや離れて2の二次加工のある剥片が分布している。出土層位は、VI層からIV層にかけてで、V層～IV層下部に集中する。

第37表 第4 b文化層第18ブロック組成表

母岩種	母岩番号	掻器	二次加工のある剥片	剥片	碎片	石核	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
ガラス質黒色安山岩	401	1		3			4	25.00	22.47	18.12
	402			3			3	18.75	12.87	10.38
	403			2	1		3	18.75	6.87	5.54
	404		1	1			2	12.50	14.72	11.87
	405					1	2	12.50	20.73	16.72
	406		1				1	6.25	21.49	17.33
	407						1	6.25	24.83	20.03
ガラス質黒色安山岩 点数合計		1	2	9	2	2	16	100.00	123.98	100.00
全体 点数合計		1	2	9	2	2	16	100.00	123.98	100.00
点数組成比 (%)		8.25	12.50	56.25	12.50	12.50	100.00			

出土遺物 器種組成は、掻器1点、二次加工のある剥片2点、剥片9点、碎片2点、石核2点である。石材組成は、ガラス質黒色安山岩16点である。

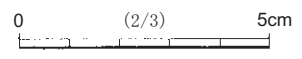
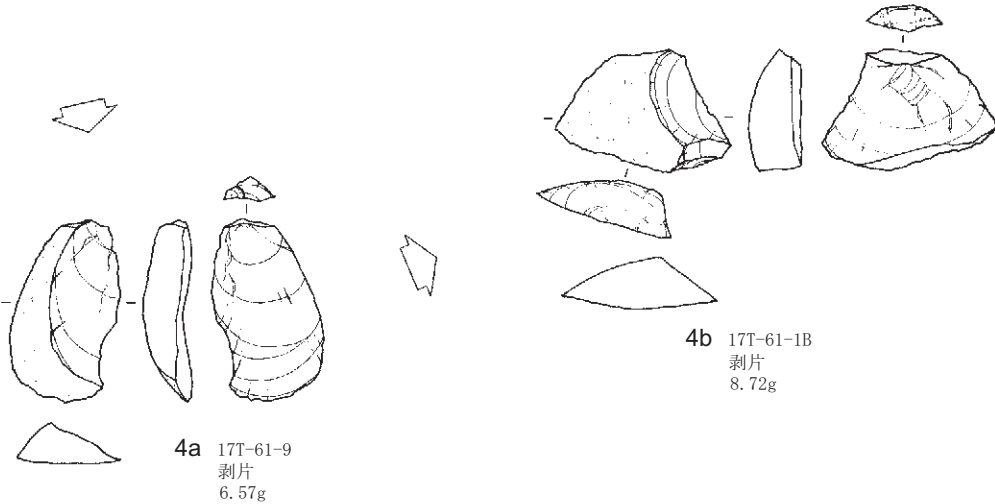
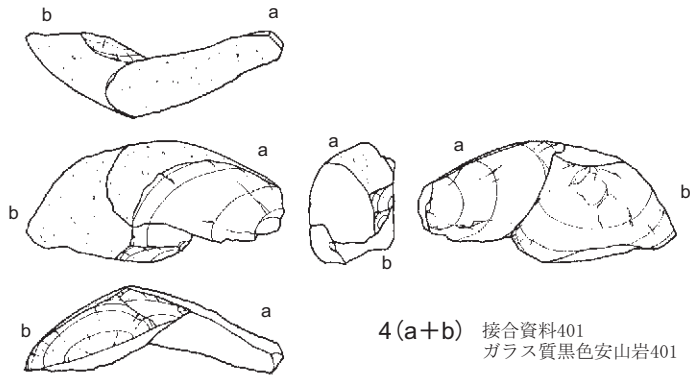
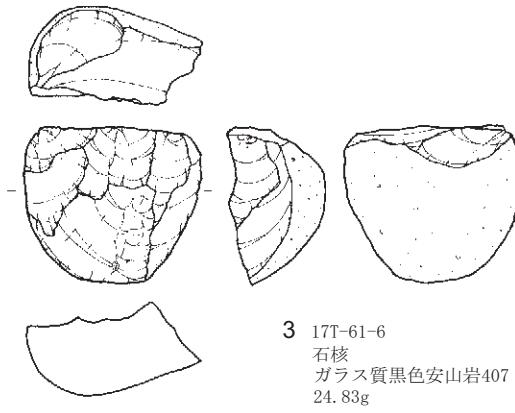
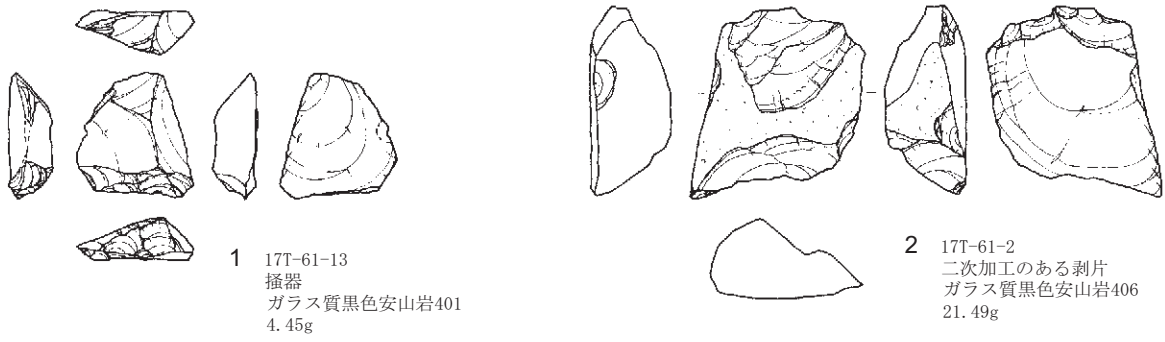
1は掻器である。幅広の剥片の末端部に調整加工が施されている。2は二次加工のある剥片である。背面に自然面を残した横長剥片を素材としている。腹面上部に平坦な調整加工が施されている。3は石核である。裏面に大きく自然面を残した厚みのある剥片を素材としている。分割面を打面として、数枚の縦長剥片を剥離している。4(a+b)は、2枚の剥片の接合資料である。右面下部を打面として縦長剥片4 aを剥離した後に、打面を上面左側に転移して横長剥片4 bを剥離している。

6. 第4文化層単独出土石器 (第73・74図、第38表、図版6・51)

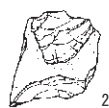
出土状況 ブロックとして分けすることができなかった石器のうち、第4文化層に帰属すると思われるものを第4文化層単独出土石器として扱うこととした。19I-40グリッドから2点出土した。出土層位はソフトロームの上部から出土している。

出土遺物 器種組成は、二次加工のある剥片1点、剥片1点である。石材組成は、珉質頁岩2点である。

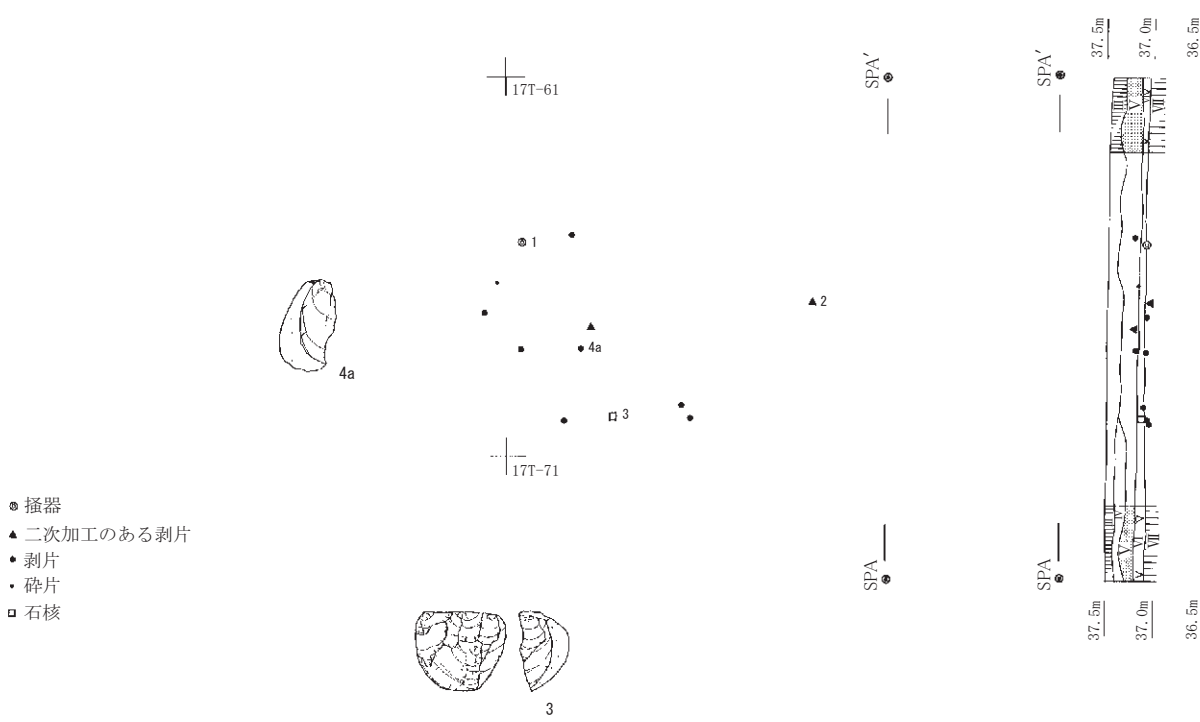
1は二次加工のある剥片である。幅広の剥片を素材として、両側縁上部を折断した後に、裏面左上部に平坦な調整加工が施されている。2は幅広の剥片である。



第71図 第4 b文化層第18ブロック出土石器

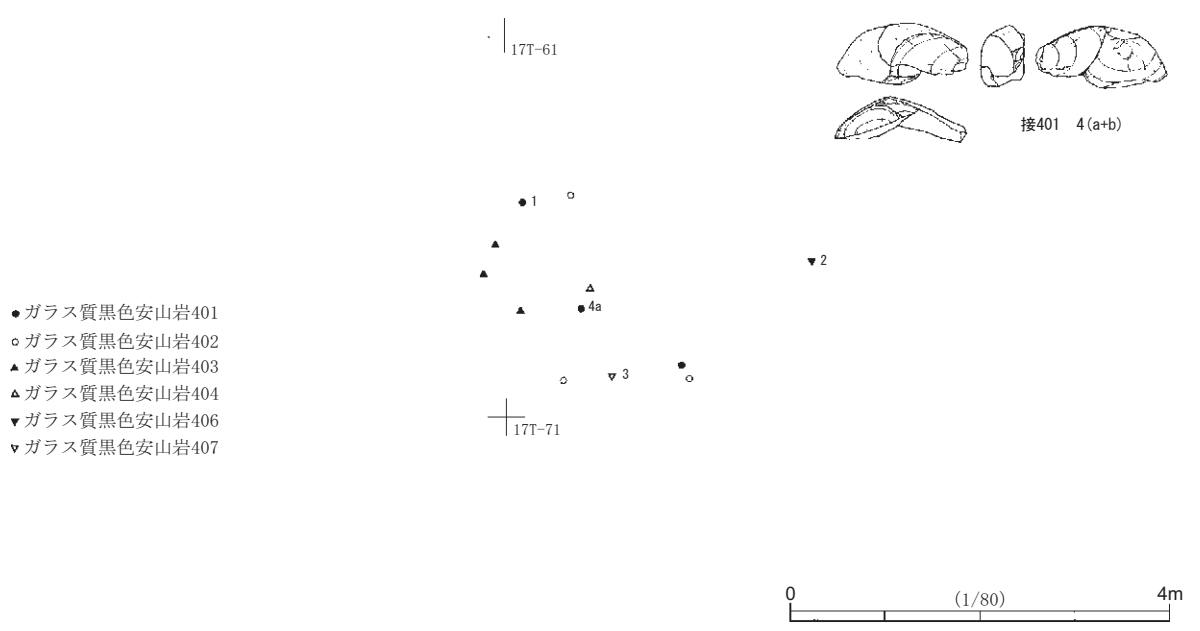


〈器種別分布〉



- 搔器
- ▲ 二次加工のある剥片
- 剥片
- 碎片
- 石核

〈母岩別分布〉

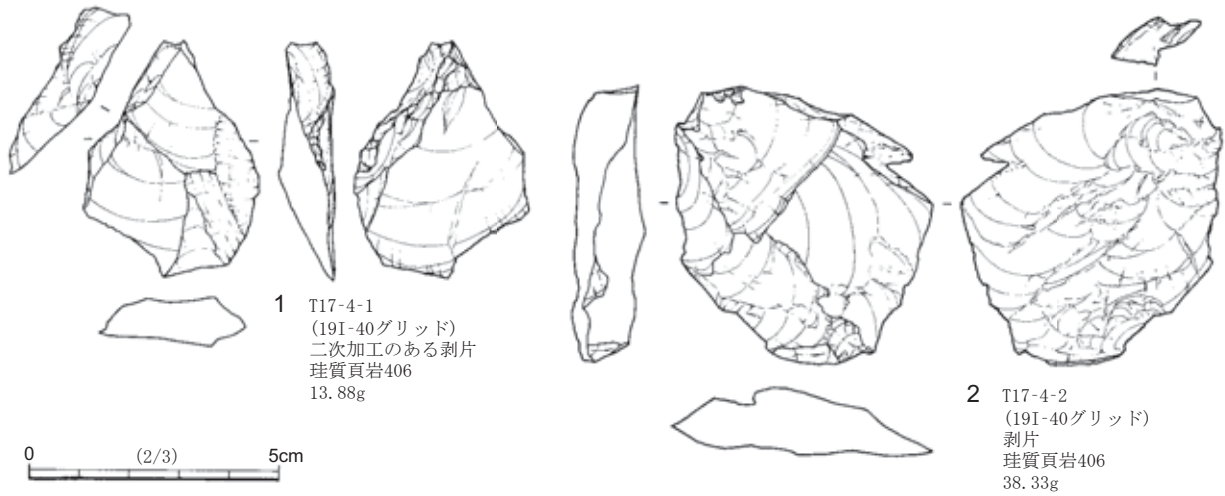


- ガラス質黒色安山岩401
- ガラス質黒色安山岩402
- ▲ ガラス質黒色安山岩403
- △ ガラス質黒色安山岩404
- ▼ ガラス質黒色安山岩406
- ▽ ガラス質黒色安山岩407

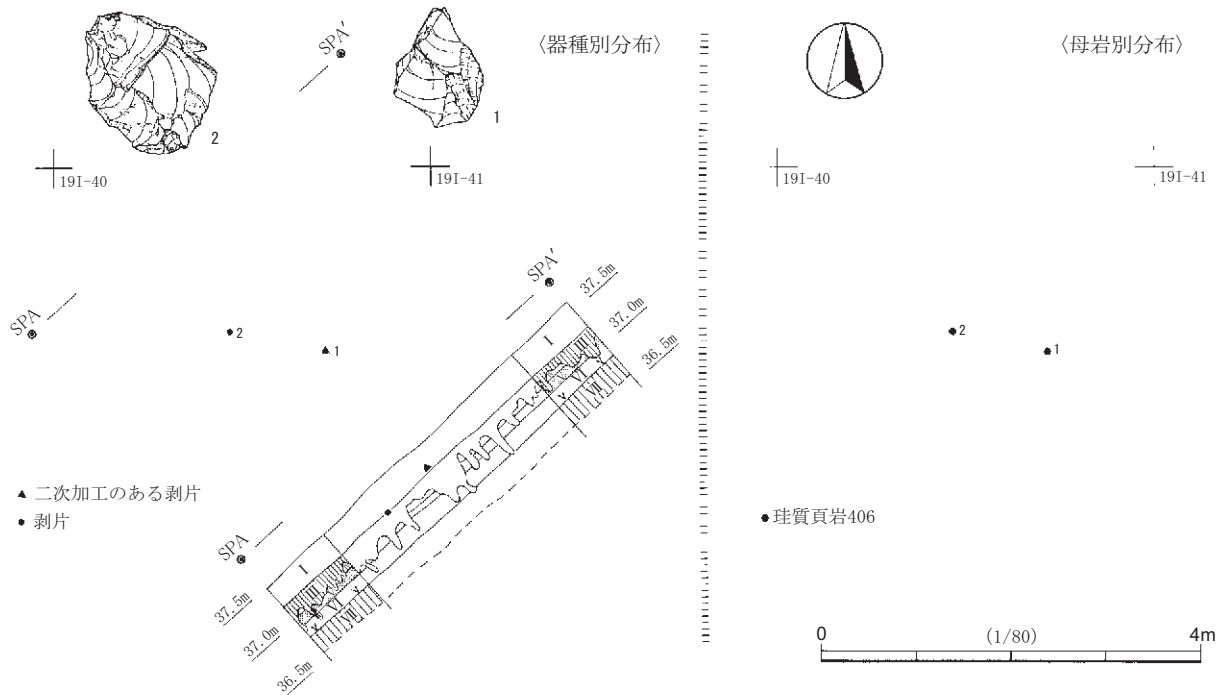
第72図 第4 b文化層第18ブロック遺物分布

第38表 第4文化層単独出土組成表

母岩種別	母岩番号	二次加工のある剥片	剥片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩	406	1	1	2	100.00	52.21	100.00
全体点数合計		1	1	2	100.00	52.21	100.00
点数組成比 (%)		50.00	50.00	100.00			



第73図 第4文化層単独出土石器



第74図 第4文化層単独遺物分布

第7節 第5文化層

1. 概要 (第39・40表)

第5文化層の石器群は、総計683点出土し、第19ブロックから第22ブロックの4か所を識別できた。野辺山型の細石刃石核を有する石器群である。Ⅲ層上面に生活面をもつ石器群と推定される。調査区南東部にまとまっており、標高36m～37m（現地表面）にかけて分布する。本文化層が最も低い標高に位置し、北東に細長く延びる谷津の谷頭を取り囲むように立地している。谷頭付近に埋没谷が形成され、その縁辺を選地して居住したことが推定される。

第39表 第5文化層ブロック別組成表

文 化 層 ク ラ ス	ブ ロ ッ ク	石 材	黒 曜 石 産 地 推 定 地	細	細	細	耐	撻	撻	撻	二	微	割	砕	石	燧	燧	燧	点	点	重	重	
				石	石	石	器	器	器	次	細	片	片	核	石	片	片	片	計	比	量	量	
				刃	核	核	器	器	器	片	片	片	片	片	核	器	石	片	数	数	合	合	
				推	推	推	推	推	推	推	推	推	推	推	推	推	推	推	推	推	推	推	
				定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	
				地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	
5a	19	黒曜石	神津島豊島群	6	7	1					2	14	8						38	5.56	51.94	3.03	
		砂岩														1	1		2	0.23	198.97	13.92	
		頁岩																1	1	0.15	38.22	2.74	
		注資頁岩																	1	0.15	0.95	0.07	
	チャート																	1	0.15	0.11	0.01		
	第19ブロック点数合計				6	7	1				3	14	8						43	6.30	291.19	20.37	
	20	ガラス管黒色安山岩										6	1						7	1.02	15.81	1.11	
		トロトロ石										1							1	0.15	2.02	0.14	
		黒曜石	神津島豊島群	147	3	1		1	4	4	103	45							306	45.10	123.61	8.65	
			測定不可	2	1						1	23							27	3.95	2.54	0.18	
黒曜石点数合計				149	4	1		1	4	4	104	68						335	49.05	126.15	8.82		
緑色凝灰岩											4							4	0.56	17.25	1.21		
砂岩											7	3			1		5	16	2.34	419.75	29.36		
注資頁岩				6	2					4	1						13	1.90	20.03	1.40			
粘板岩										1							1	0.15	0.24	0.02			
ホルンフェルス										7							7	1.02	75.85	5.30			
第20ブロック点数合計				155	6	1		1	4	4	134	73			1		5	364	56.22	577.10	47.36		
21	黒曜石	神津島豊島群	28	2	1	1				3	1	32	10					78	11.42	57.77	4.04		
		測定不可										3						3	0.44	0.03	0.00		
	黒曜石点数合計				28	2	1	1			3	1	32	13					81	11.88	57.80	4.04	
	砂岩																1	1	0.13	9.05	0.63		
福岡産注資頁岩				1													1	0.15	6.03	0.43			
粘板岩										1	1						2	0.29	0.49	0.03			
チャート										1							1	0.15	0.87	0.06			
第21ブロック点数合計				20	3	1	1			4	1	33	14				1	86	12.59	74.30	5.20		
第5a文化層点数合計				189	16	3	1	1		8	8	181	96		1	1	1	7	51.3	75.11	1042.58	72.82	
5b	22	ガラス質黒色安山岩					2			2		29	4					38	5.56	105.81	7.61		
		トロトロ石										1	1					2	0.29	0.93	0.07		
		黒曜石	神津島豊島群									3						4	0.59	4.01	0.28		
		砂岩																2	0.29	9.20	0.64		
		頁岩										1					3	4	0.59	77.28	5.40		
		注資頁岩				20	3				3	2	36	5					70	10.25	114.56	8.02	
		ホルンフェルス										6						6	0.88	12.12	0.92		
チャート				2	1				6	2	2	13	5				32	4.69	32.17	2.25			
玉髓				4	1					2	2	2	2				11	1.61	25.90	1.88			
第22ブロック点数合計				26	5		3		7	9	4	91	18		1	3	2	169	24.74	387.14	27.08		
第5b文化層点数合計				26	5		3		7	9	4	91	18		1	3	2	169	24.74	387.14	27.08		
5	単独	黒曜石	神津島豊島群	1														1	0.15	0.08	0.01		
第5文化層単独出土点数合計				1														1	0.15	0.08	0.01		
第5文化層点数合計				216	21	3	4		1	7	17	12	272	114		2	1	4	9	68.3	100.00	1423.81	100.00
点数組成比				31.63	3.07	0.44	0.59		0.15	1.02	2.49	1.76	39.82	16.69		0.29	0.15	0.59	1.32	100.00			

第41表 第5 a文化層器種石材組成表

器種	石材	黒曜石産地推定地	細石	細石	細石	削	掻	二次	微細	剥	碎	石	礫	敲	礫	点
			刃	刃	刃	器	器	加工のある	剥離痕のある	片	片	核	器	石	片	計
黒曜石	神津島恩馳島群	測定不可	181	12	3	1	1	7	7	149	63					424
黒曜石	測定不可		2	1						1	26					30
ガラス	黒色安山岩		183	13	3		1	1	7	7	150	89				454
ト	ト	ト								6	1					7
緑色凝灰岩										1						1
砂質										4						4
球状	竹	頁岩								7	3		1	1	7	19
球状	竹	頁岩	6	2					1	4	1					14
粘板岩				1												1
ホルンフェルト										2	1					3
チャート										7						7
点致	総計		189	16	3	1	1	8	8	181	96	1	1	1	7	513

第42表 第5 a文化層ブロック別組成表

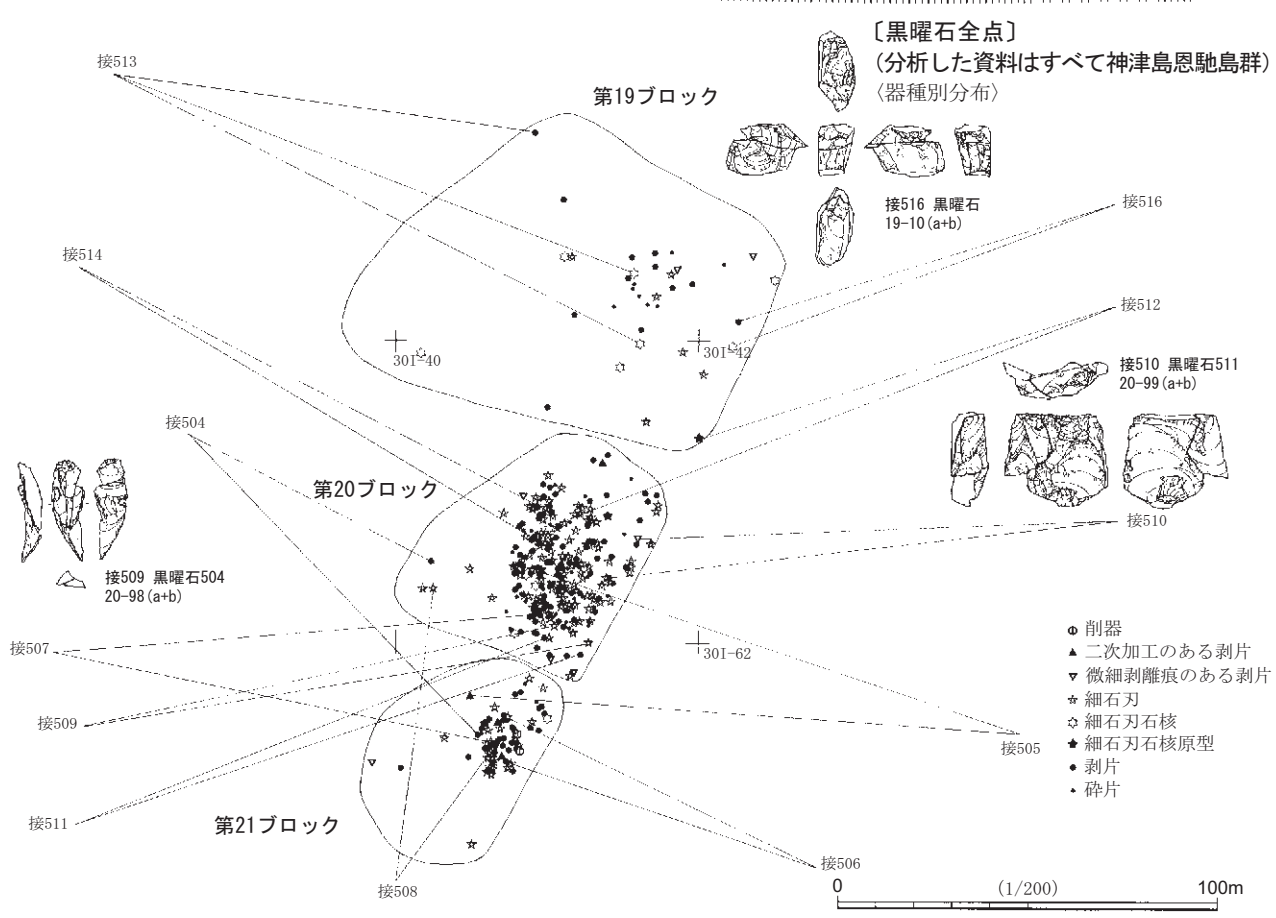
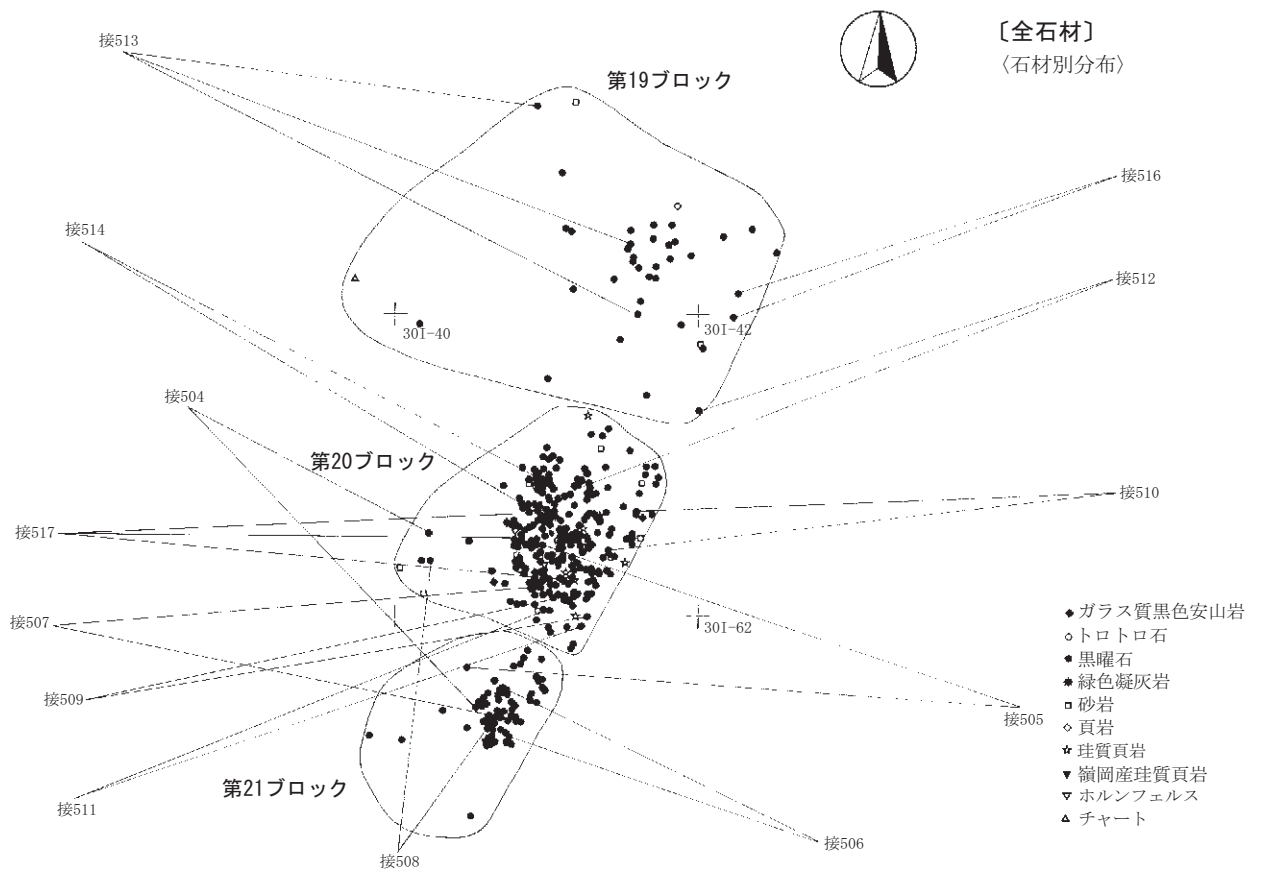
文化層	ブロック	石材	黒曜石産地推定地	細石	細石	細石	削	掻	二次	微細	剥	碎	石	礫	敲	礫	点	重量	重量	重量
				刃	刃	刃	器	器	加工のある	剥離痕のある	片	片	核	器	石	片	計	(%)	(g)	(%)
5a	19	黒曜石	神津島恩馳島群	6	7	1				2	14	8					38	7.41	51.94	4.98
		砂質													1	1	2	0.39	198.97	19.08
		粘板岩								1							1	0.19	39.22	3.76
		チャート															1	0.19	0.95	0.05
	第19ブロック点致合計				6	7	1			3	14	9	1	1	1	43	8.38	291.19	27.93	
	20	ガラス	黒色安山岩								6	1					7	1.36	15.81	1.52
		ト	ト								1						1	0.19	2.02	0.18
		黒曜石	神津島恩馳島群	147	3	1		1	4	4	103	45					308	60.04	123.61	11.88
			測定不可	2	1							1	23				27	5.26	2.54	0.24
		黒曜石点致合計				149	4	1		1	4	104	68				335	65.30	126.15	12.10
		緑色凝灰岩									4						4	0.78	17.25	1.65
		砂質									7	3		1	5	16	3.12	419.75	40.26	
	粘板岩				6	2				4	1				13	2.53	29.03	1.92		
	ホルンフェルト									1					1	0.19	0.24	0.02		
	第20ブロック点致合計				155	6	1		1	4	4	134	73	1	5	384	74.85	677.10	64.94	
	21	黒曜石	神津島恩馳島群	28	2	1	1		3	1	32	10					78	15.20	57.77	5.54
			測定不可									3					3	0.58	0.03	0.00
		黒曜石点致合計				28	2	1	1		3	1	32	13			81	15.79	57.80	5.54
		砂質														1	1	0.19	9.05	0.87
粘板岩										1	1				2	0.39	0.49	0.05		
第21ブロック点致合計				28	3	1	1		4	1	33	14		1	86	16.76	74.30	7.13		
第5a文化層点致合計				189	16	3	1	1	8	8	181	96	1	1	1	7	513	100.00	1042.59	100.00
点致組成比				36.84	3.12	0.58	0.19	0.19	1.56	1.56	35.28	18.71	0.19	0.19	0.19	1.36	100.00			

第43表 第5a文化層母岩別ブロック組成表

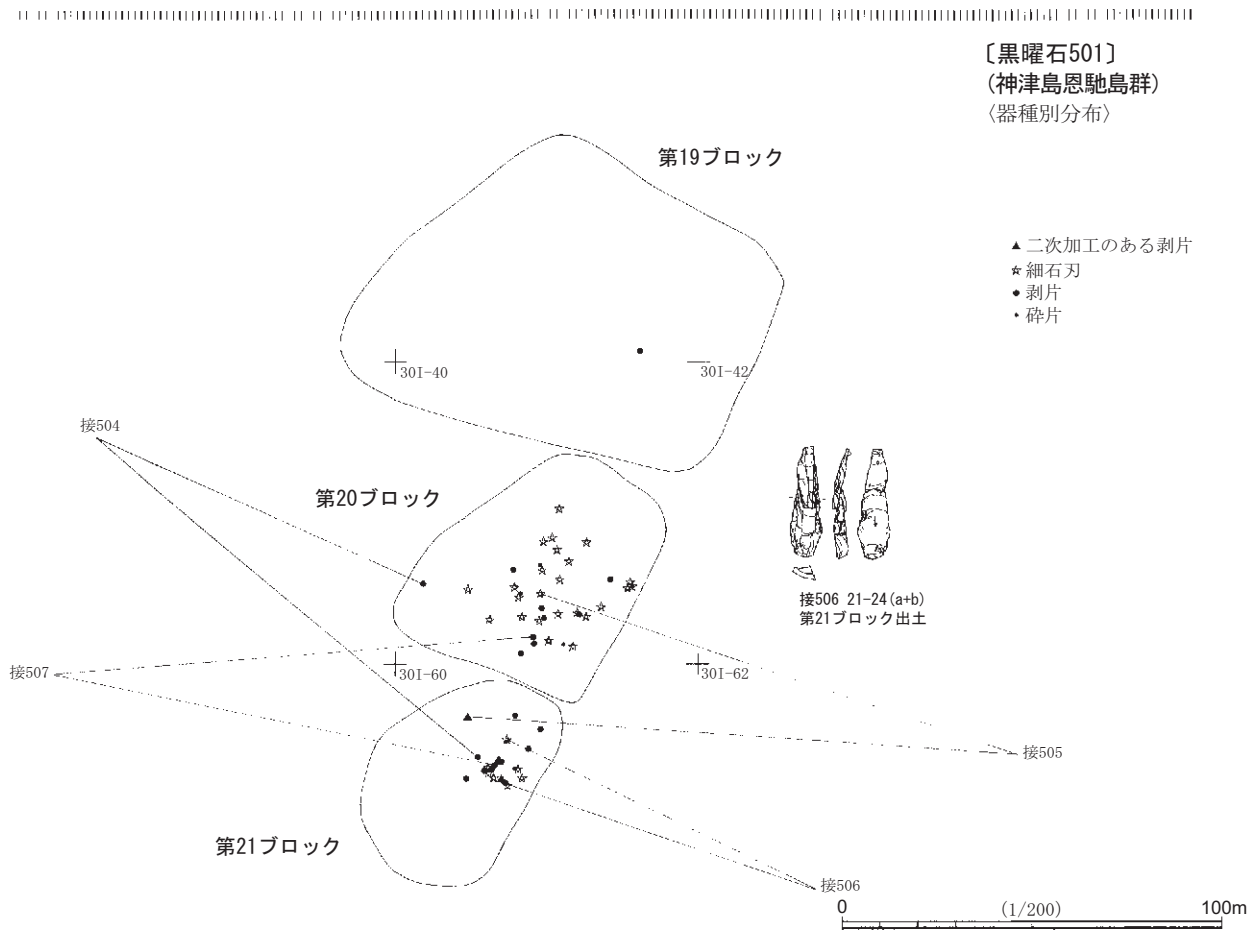
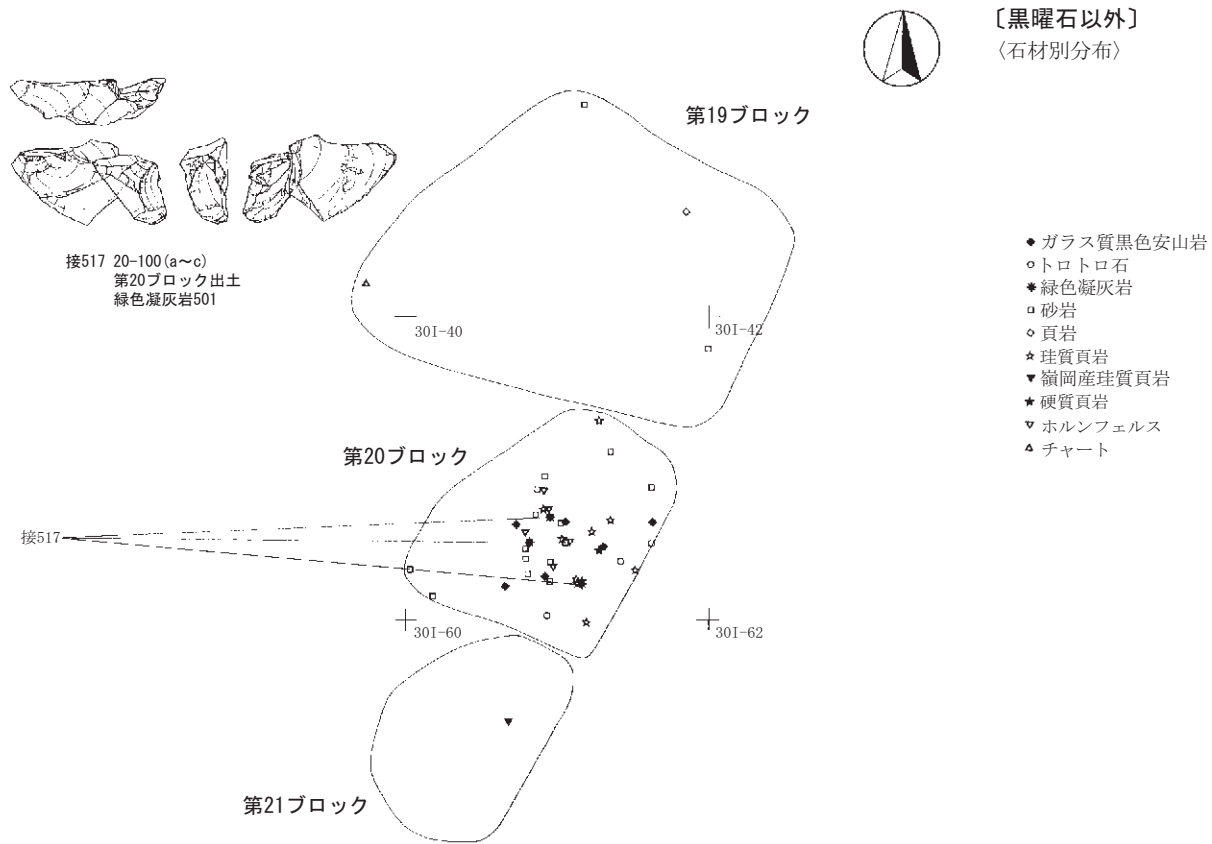
石 材	母 岩 番 号	黒 曜 石 産 地 推 定	総 数 ・ 接 合 番 号	ブ ロ ッ ク 出 土 ブ ロ ッ ク 数	19	20	21	点 数 合 計	重 量 合 計 (g)	
黒 曜 石	501	神津島恩馳島群	総 数	3	1	43	24	68	20.49	
			接504	2		1	1	2	4.34	
			接505	2		1		2	2.00	
			接506	1			2	2	1.17	
			接507	2		1	1	2	0.11	
	502	神津島恩馳島群	総 数	3	1	43	12	56	5.68	
			接508	2		1	1	2	0.94	
	503	神津島恩馳島群	総 数	3	3	28	5	36	23.46	
	504	神津島恩馳島群	総 数	2		13	5	18	8.37	
			接509	1		2		2	1.36	
	511	神津島恩馳島群	総 数	3	4	35	6	45	27.39	
			接510	1		2		2	8.47	
			接511	1		2		2	0.64	
	512	神津島恩馳島群	総 数	3	1	1	1	3	13.80	
	513	神津島恩馳島群	総 数	3	3	23	3	29	1.88	
	514	神津島恩馳島群	総 数	1		2		2	5.50	
	515	神津島恩馳島群	総 数	2	2	1		3	16.63	
	516	神津島恩馳島群	総 数	1		12		12	0.92	
	521	神津島恩馳島群	総 数	3	12	55	4	71	55.90	
			接512	2	1	1		2	15.03	
			接513	1	3			3	9.02	
			接514	1		2		2	8.73	
	522	神津島恩馳島群	総 数	3	2	16	7	25	8.83	
	531	神津島恩馳島群	総 数	3	3	21	6	30	18.10	
	532	神津島恩馳島群	総 数	2		1	1	2	11.64	
	533	神津島恩馳島群	総 数	2	2		1	3	6.08	
			接516	1	2			2	4.99	
	534	神津島恩馳島群	総 数	1			1	1	2.02	
	535	神津島恩馳島群	総 数	2	1	7		8	2.64	
	536	神津島恩馳島群	総 数	1		2		2	1.01	
	537	測定不可	総 数	1		1		1	2.08	
	538	神津島恩馳島群	総 数	1		3		3	0.95	
	540	神津島恩馳島群	総 数	3	3	2	2	7	2.23	
	550	測定不可	総 数	2		26	3	29	0.49	
		合計			3	38	335	81	454	235.89
	ガラス質黒色安山岩	506		総 数	1		5		5	12.99
		507		総 数	1		1		1	2.28
		508		総 数	1		1		1	0.54
			合計			1		7		7
	ト ロ ト ロ 石	501		総 数	1		1		1	2.02
	緑 色 凝 灰 岩	501		総 数	1		4		4	17.25
				接517	1		3		3	16.53
	砂 岩	501		総 数	1		9		9	383.40
		502		総 数	1		1		1	23.23
		503		総 数	1	2			2	198.97
				総 数	2		6	1	7	22.17
			合計			3	2	16	1	19
	珪 質 頁 岩	501		総 数	1	1			1	0.95
		508		総 数	1		6		6	5.64
		509		総 数	1		4		4	3.83
510			総 数	1		3		3	10.56	
		合計			2	1	13		14	20.98
嶺 岡 産 珪 質 頁 岩	501		総 数	1			1	1	6.09	
ホ ル ン フ ェ ル ス	501		総 数	1		7		7	75.85	
チ ャ ー ト	507		総 数	1			1	1	0.87	
	508		総 数	1	1			1	0.11	
		合計			2	1		1	2	0.98
頁 岩	501		総 数	1	1			1	39.22	
粘 板 岩	501		総 数	2		1	2	3	0.73	
点 数 合 計			合 計		43	384	86	513		
重 量 合 計			(g)		291.19	677.10	74.30		1042.59	

第44表 第5 a文化層母岩別器種組成表

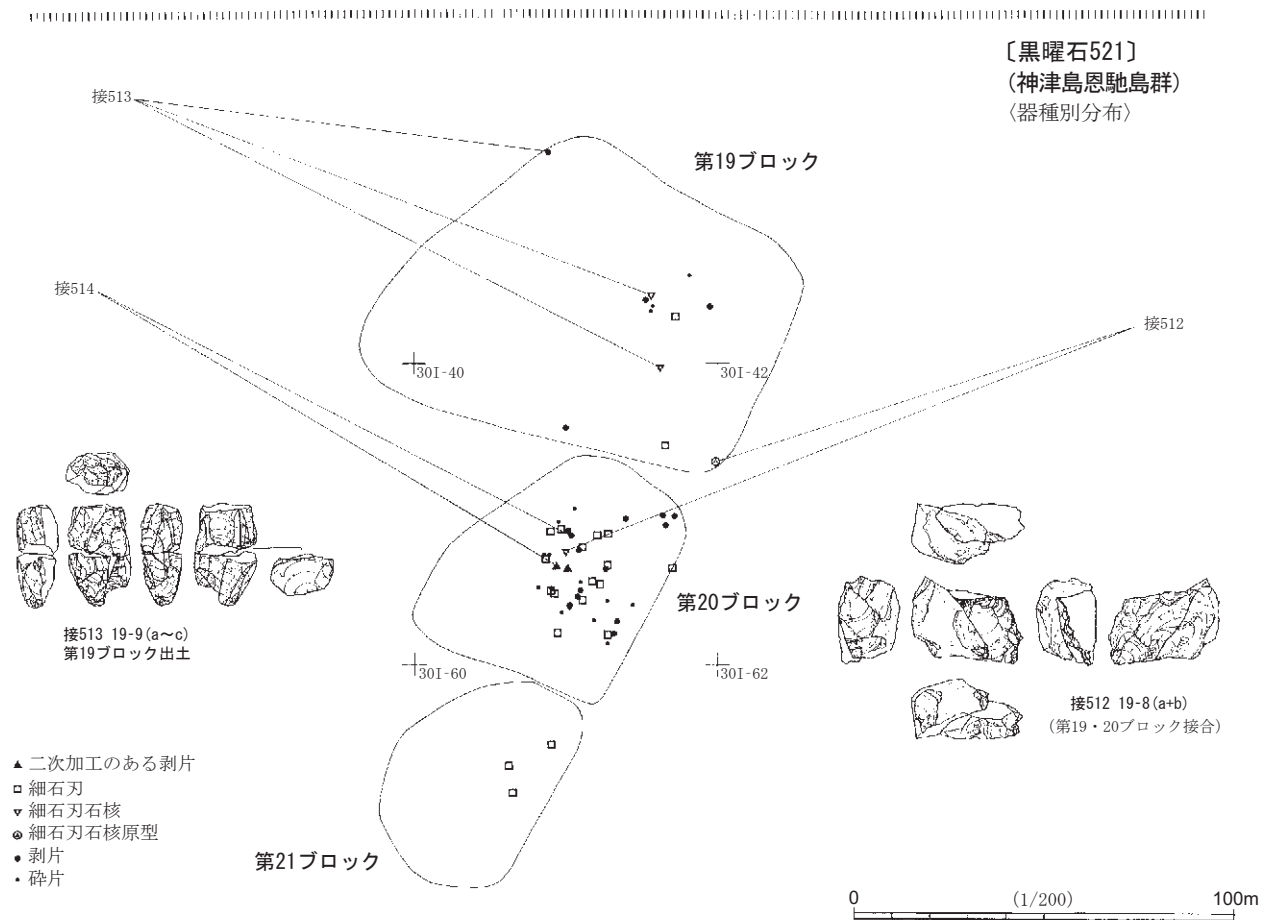
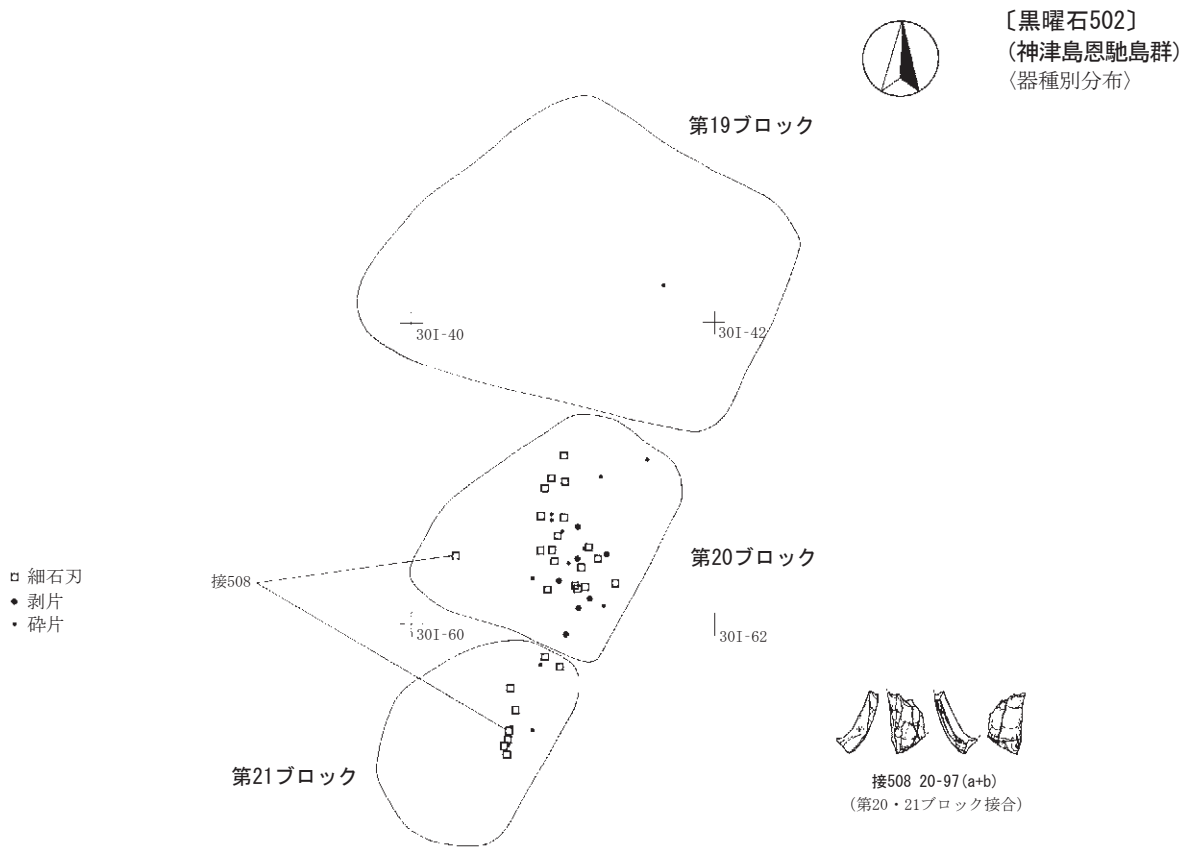
石 材	母 岩 番 号	黒 曜 石 産 地 推 定	総 数 ・ 接 合 番 号	細 石 刃	細 石 刃 石 核	細 石 刃 石 核 原 型	削 器	搔 器	二 次 加 工 の あ る 剥 片	微 細 剥 離 痕 の あ る 剥 片	剥 片	砕 片	石 核	鏃 器	鼓 石	礫 片	点 数 合 計		
黒 曜 石	501	神津島恩馳島群	総 数	33					1	2		22	7				68		
			接504									2						2	
			接505	1							1								2
			接506	2															2
	接507											2					2		
	502	神津島恩馳島群	総 数	33								8	15					56	
	接508		2														2		
	503	神津島恩馳島群	総 数	14	2					1	1	14	4					36	
	504	神津島恩馳島群	総 数	10								8						18	
			接509	2														2	
	511	神津島恩馳島群	総 数	15							1	3	26					45	
			接510									1	1					2	
			接511	1									1					2	
	512	神津島恩馳島群	総 数		2	1												3	
	513	神津島恩馳島群	総 数	13								10	6					29	
	514	神津島恩馳島群	総 数									1						2	
	515	神津島恩馳島群	総 数		2								1					3	
	516	神津島恩馳島群	総 数	9								2	1					12	
	521	神津島恩馳島群	総 数	23	3	1				2		23	19						71
			接512		1	1													2
			接513		2								1						3
			接514								1		1						2
	522	神津島恩馳島群	総 数	10						1		14						25	
	531	神津島恩馳島群	総 数	12	2			1			1	6	8					30	
	532	神津島恩馳島群	総 数			1						1						2	
	533	神津島恩馳島群	総 数		1								2					3	
			接516		1								1					2	
	534	神津島恩馳島群	総 数									1						1	
	535	神津島恩馳島群	総 数	3							1	4						8	
	536	神津島恩馳島群	総 数	1								1						2	
537	未 定 不 可	総 数		1													1		
538	神津島恩馳島群	総 数									3						3		
540	神津島恩馳島群	総 数	2								2	3					7		
550	未 定 不 可	総 数	2								1	26					29		
		合 計		183	13	3	1	1	7	7	150	89					454		
ガラス質黒色安山岩	506		総 数								4	1					5		
	507		総 数								1						1		
	508		総 数								1						1		
		合 計									6	1					7		
ト口ト口石	501		総 数							1							1		
緑色凝灰岩	501		総 数								4						4		
			接517								3						3		
砂 岩	501		総 数								5	3		1				9	
			502	総 数							1							1	
			503	総 数												1	1	2	
				総 数									1				6	7	
	合 計									7	3		1	1	7	19			
珪質頁岩	501		総 数							1							1		
	508		総 数	5	1												6		
	509		総 数	1							2	1					4		
	510		総 数		1						2						3		
		合 計		6	2						1	4	1				14		
瀬岡産珪質頁岩	501		総 数		1												1		
ホルンフェルス	501		総 数							7							7		
チャート	507		総 数						1								1		
	508		総 数									1					1		
		合 計							1			1					2		
頁岩 粘板	501		総 数										1				1		
	501		総 数								2	1					3		
点		合 計		189	16	3	1	1	8	8	181	96	1	1	1	7	513		



第75図 第5 a文化層石材別分布 (1) [全石材・黒曜石全点]



第76図 第5 a文化層石材別分布 (2) [黒曜石以外・黒曜501]



第77図 第5 a文化層石材別分布 (3) [黒曜502・521]

片7点である。細石刃・細石刃石核を主体とする石器群である。

石材組成は、黒曜石454点、砂岩19点、珪質頁岩14点、ガラス質黒色安山岩7点、ホルンフェルス7点、緑色凝灰岩4点、粘板岩3点、チャート2点、トロトロ石1点、頁岩1点、嶺岡産珪質頁岩1点である。黒曜石の占める割合（88%）が高く、分析した資料の産地推定地はすべて神津島恩馳島群であった。

母岩別の組成は、第43表にブロック別、第44表に器種別の組成表をそれぞれ掲載した。母岩は11石材・40母岩で構成される。主な母岩は、黒曜石501～504・511・521・531、珪質頁岩508である。

(3) 分布状況 石材別に分布状況を示したものが第75～77図である。母岩別資料一覧は第43・44表のとおりである。ブロック間接合が見られるものの、第3 a文化層の石器群ほどブロック間接合は多量ではなく、ほとんどのものがブロック内の接合資料である。

分布状況を検討するために、石材別・母岩別に分布状況をみていくことにしよう。

①全石材（第75図上段）

全石材の分布状況は、第75図上段のとおりである。接合資料は13資料、ブロック間接合資料は5資料である。ブロック間接合資料はすべて黒曜石である。黒曜石以外のものは第20ブロックに集中する。

②黒曜石（第75図下段・第76図下段・第77図）

黒曜石全点の分布状況は、第75図下段のとおりである。ブロック間接合資料は、黒曜石501が3資料、黒曜石502が1資料、黒曜石521が1資料である。ブロック間接合資料は、隣接するブロック同士の接合である。離れて分布する第19ブロックと第21ブロックとの接合資料は見られなかった。

器種別に見ると、第19ブロックは出土点数が少ないものの、細石刃石核が7点（第5 a文化層全体）まとまって出土している。第20ブロックや第21ブロックでは、細石刃が密集して分布するのに対して、第19ブロックは散漫に分布しており、分布密度においても違いが見られた。

黒曜石501の分布状況は、第76図下段である。黒曜石501は総計68点出土している。第19ブロックからは剥片が1点のみ出土している。第20ブロックからは43点出土しており、そのうち細石刃が29点出土している。細石刃石核は出土していない。接合資料は、接504～507の4資料のうち、ブロック間接合資料は3資料である。ブロック間接合は、いずれも隣接する第20ブロックと第21ブロックとの接合である。

黒曜石502の分布状況は、第77図上段である。黒曜石502は総計56点出土している。第19ブロックからは破片が1点のみ出土している。第20ブロックからは43点出土しており、そのうち細石刃が25点出土している。細石刃石核は出土していない。黒曜石501とほぼ同様の分布状況を示す。

黒曜石521の分布状況は、第77図下段である。黒曜石521は総計71点出土している。第19ブロックが19点、第20ブロックが55点、第21ブロックがわずかに4点である。接合資料は、接512～514の3資料のうち、ブロック間接合は接512の1資料のみである。接512は第19ブロック出土の細石刃石核原型と第20ブロック出土の細石刃石核との接合資料である。接513は細石刃石核が2点と剥片が1点接合したもので、第19ブロックから出土している。第20ブロックからは細石刃が23点出土している。黒曜石521は母岩→細石刃石核原型→細石刃石核→細石刃の細石刃製作過程を把握する上で重要な接合資料をもつとともに、3か所のブロックにおいて、それぞれ異なる器種組成を示す。

③黒曜石以外（第76図上段）

第76図上段は、黒曜石以外の石材別分布状況を示したものである。第20ブロックの出土点数が最も多い。黒曜石以外の石器は、第19ブロックが5点、第20ブロックが49点、第21ブロックが5点である。第20ブロッ

クからは、珪質頁岩を用いた細石刃6点、細石刃石核2点、砂岩を用いた礫器1点出土している。黒曜石以外の石器の第20ブロックでの出土状況は、南西に約100m離れて分布する第5 b文化層の第22ブロックと類似する。第22ブロックは、珪質頁岩・ガラス質黒色安山岩・チャートを主体として、黒曜石の割合が少なくなる。器種・石材組成やブロックの規模・分布状況も類似する点が多い。

3. 第19ブロック (第78～82図、第45表、図版6・7・52)

出土状況 30H-39、30I-20・21・31・32・40～42グリッドに分布している。第5 a文化層のブロック群においては、比較的広い範囲に分布し、北東に位置する。8.4m×10.8mの範囲から43点の石器が出土した。分布を詳細に見ると、南東部に集中地点があり、この集中地点に黒曜石が分布し、西部と北部に黒曜石以外の石器が点在する。器種別に見ると、北部に敲石が集中区から離れて単独で出土している。出土層位はⅢ層上部からⅡc層下部にかけてで、Ⅲ層上面に集中する。

出土遺物 器種組成は、細石刃6点、細石刃石核7点、細石刃石核原型1点、微細剥離痕のある剥片3点、剥片14点、碎片9点、石核1点、敲石1点、礫片1点である。細石刃の出土点数が少ない割には、細石刃石核の出土点数が多いことが特徴である。

石材組成は、黒曜石38点、砂岩2点、頁岩1点、珪質頁岩1点、チャート1点である。黒曜石の割合が88%と極めて高い。黒曜石の産地推定地はすべて神津島恩馳島群である。

1・2は細石刃である。いずれも完形品である。1は裏面右下部に微細剥離が見られる。2は背面に細石刃石核の稜上調整と思われる調整加工が見られる。

3～6は細石刃石核である。3は分割剥片を素材としている。分割面は右面上部に残されている。まず、裏面上部を打面として数枚の細石刃を剥離した後に、表面上部を打面として打面再生が行われている。右側面と表面右下部には石核整形の剥離が行われている。次に、打面再生した剥離面を打面として、表面上部から細石刃を剥離している。良質の黒曜石503が用いられている。黒曜石503は総計36点出土しており、ブロック別の内訳は、第19ブロックが3点、第20ブロックが28点、第21ブロックが5点である。細石刃石

第45表 第5 a文化層第19ブロック組成表

母岩	器種	母岩番号	黒曜石産地推定地	細石刃	細石刃石核	細石刃石核原型	微細剥離痕のある剥片	剥片	碎片	石核	敲石	礫片	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)	
黒曜石		501	神津島恩馳島群					1					1	2.33	0.05	0.02	
		502	神津島恩馳島群						1				1	2.33	0.02	0.01	
		503	神津島恩馳島群		1	1		1					3	6.98	2.45	0.84	
		511	神津島恩馳島群		1			2	1				4	9.30	3.51	1.21	
		512	神津島恩馳島群			1							1	2.33	4.98	1.70	
		513	神津島恩馳島群		1				1	1			3	6.98	0.17	0.06	
		515	神津島恩馳島群			1			1				2	4.65	7.14	2.45	
		521	神津島恩馳島群		2	2	1		4	3			12	27.91	21.55	7.40	
		522	神津島恩馳島群						2				2	4.65	1.12	0.38	
		531	神津島恩馳島群			1			1	1			3	6.98	3.41	1.86	
		533	神津島恩馳島群			1			1				2	4.65	4.99	1.71	
	535	神津島恩馳島群										1	2.33	0.13	0.04		
	540	神津島恩馳島群						1	2			3	6.98	0.44	0.15		
黒曜石点数合計				6	7	1	2	14	8				38	88.37	51.94	17.84	
砂岩		503								1	1		2	4.65	198.97	68.33	
頁岩		501					1						1	2.33	39.22	13.47	
珪質頁岩		b01											1	2.33	0.95	0.33	
チャート		b08							1				1	2.33	0.11	0.04	
全体点数合計				6	7	1	3	14	9	1	1	1	43	100.00	291.19	100.00	
点数組成比(%)				13.95	16.28	2.33	6.98	32.56	20.93	2.33	2.33	2.33		100.00			

核が2点（第19ブロックの3と第21ブロックの17）出土していることから、母岩を分割して細石刃を剥離していることがうかがえる。黒曜石503と同様に細石刃石核が2点以上で構成される母岩は、黒曜石512・515・521・531の4母岩が存在する。このように、一つの母岩を分割して、複数の細石刃石核から多量の細石刃を剥離する細石刃製作過程を検証することができた。

4は左面に大きく自然面を残している。分割剥片を素材としている。分割面は下面と裏面に残されている。上面を打面として、打面調整を頻繁に行いながら細石刃を剥離している。黒曜石515が用いられている。黒曜石515は総計3点で、細石刃石核2点（第19ブロックの3と第20ブロックの70）、剥片1点で構成される。本母岩からは細石刃が剥離されていない。4は裏面に大きく自然面が残されて、ほとんど細石刃が剥離されていない。これらのことから、黒曜石515はほとんど消費されていない母岩としてストックされた可能性がある。

5は分割剥片を素材としている。分割面は裏面に大きく残されている。下面左側面から石核整形が行われ、上面の打面には入念に調整加工が施されている。正面から左面にかけて細石刃が連続的に剥離されている。黒曜石531が用いられている。3・4と同様に、黒曜石531は細石刃石核2点（第19ブロックの5と第21ブロックの18）を含む30点で構成されている。

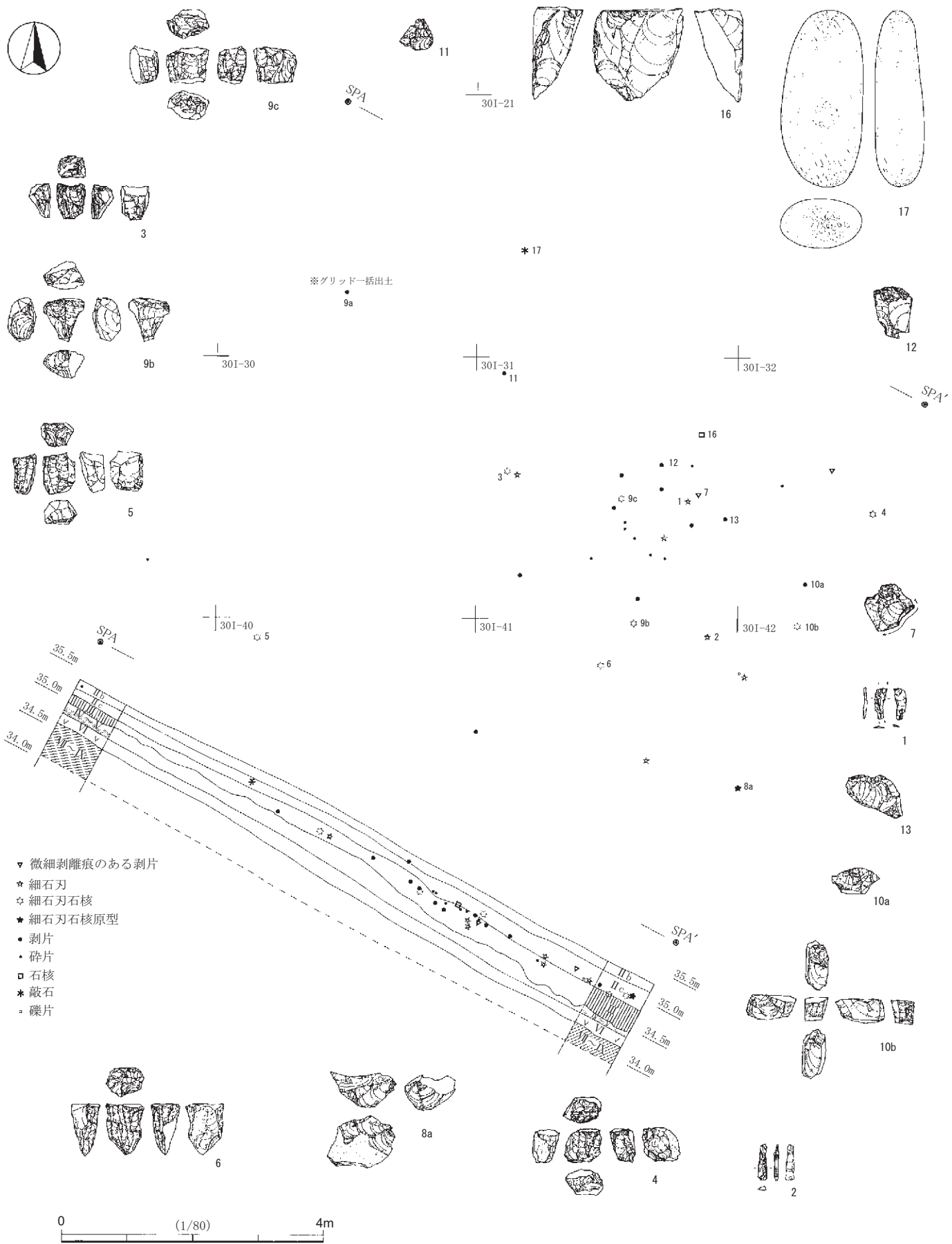
6は分割剥片を素材としている。分割面は、裏面に大きく残されている。左面には石核整形が行われ、上面の打面は平坦な打面調整剥離が入念に行われている。上面を打面として、表面から右側面にかけて細石刃が連続的に剥離される。黒曜石512が用いられている。黒曜石512は細石刃石核2点（第19ブロックの6と第20ブロックの68）と細石刃石核原型1（第21ブロックの20）の3点で構成されている。このことから、4の黒曜石515と同様に、黒曜石512は、ほとんど消費されていない母岩としてストックされた可能性が高い。

第19ブロックから出土した4点の細石刃石核は、複数の母岩で構成されていた。第19ブロックからは、第5 a文化層の半数近い7点の細石刃石核が出土していることから、第19ブロックは母岩の消耗に備えてのストック機能の高いブロックと推察される。

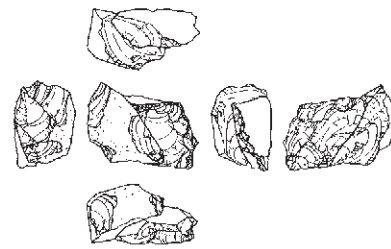
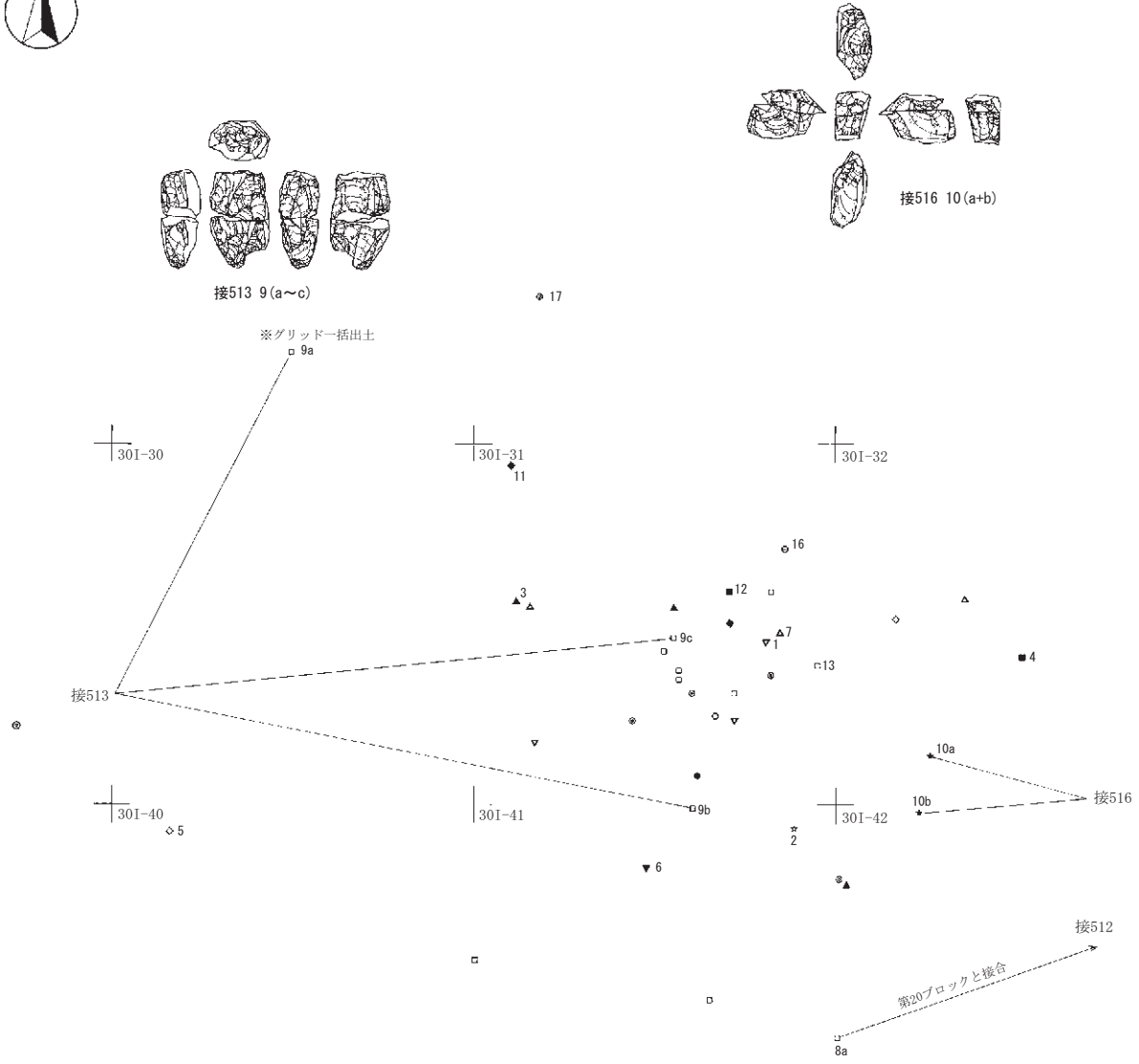
7は微細剥離痕のある剥片である。頭部調整が顕著に行われた幅広の剥片を素材として、右側縁下部に微細剥離が見られる。

8(a+b)は細石刃石核原型と細石刃石核の接合資料512である。分割剥片である8(a+b)は裏面左下部を打面として、さらに8aと8bとに分割している。細石刃石核原型である8aは下面に大きく自然面を残しており、分割後には剥離が行われていない。細石刃石核である8bは、8aとの分割面を左面にわずかに残している。右側面から石核整形した後に、上面の剥離面を打面として、細石刃が2枚以上剥離されている。

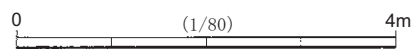
9(a~c)は大型の細石刃石核を分割して、2つの細石刃石核から多量の細石刃を剥離したことを示す良好な接合資料513である。当初の大型の細石刃石核である9(a~c)は、上面を打面として細石刃が剥離されており、右面左側に2枚、左面右側に1枚の細石刃の剥離面が観察される。次に、9(a~c)の細石刃石核は、裏面器体中央部を打面として、9(a+b)と9cとに分割されている。9(a+b)は裏面右側面を打面として4枚以上の細石刃を剥離した後に、表面上部に打面を転移して5枚以上の細石刃を剥離している。さらに、分割面である右面下部を打面として、小型の剥片9aが剥離されている。9aの剥離の際に夾雑物により左下部が大きく剥離してしまったため、細石刃石核9bは9aの剥離後に細石



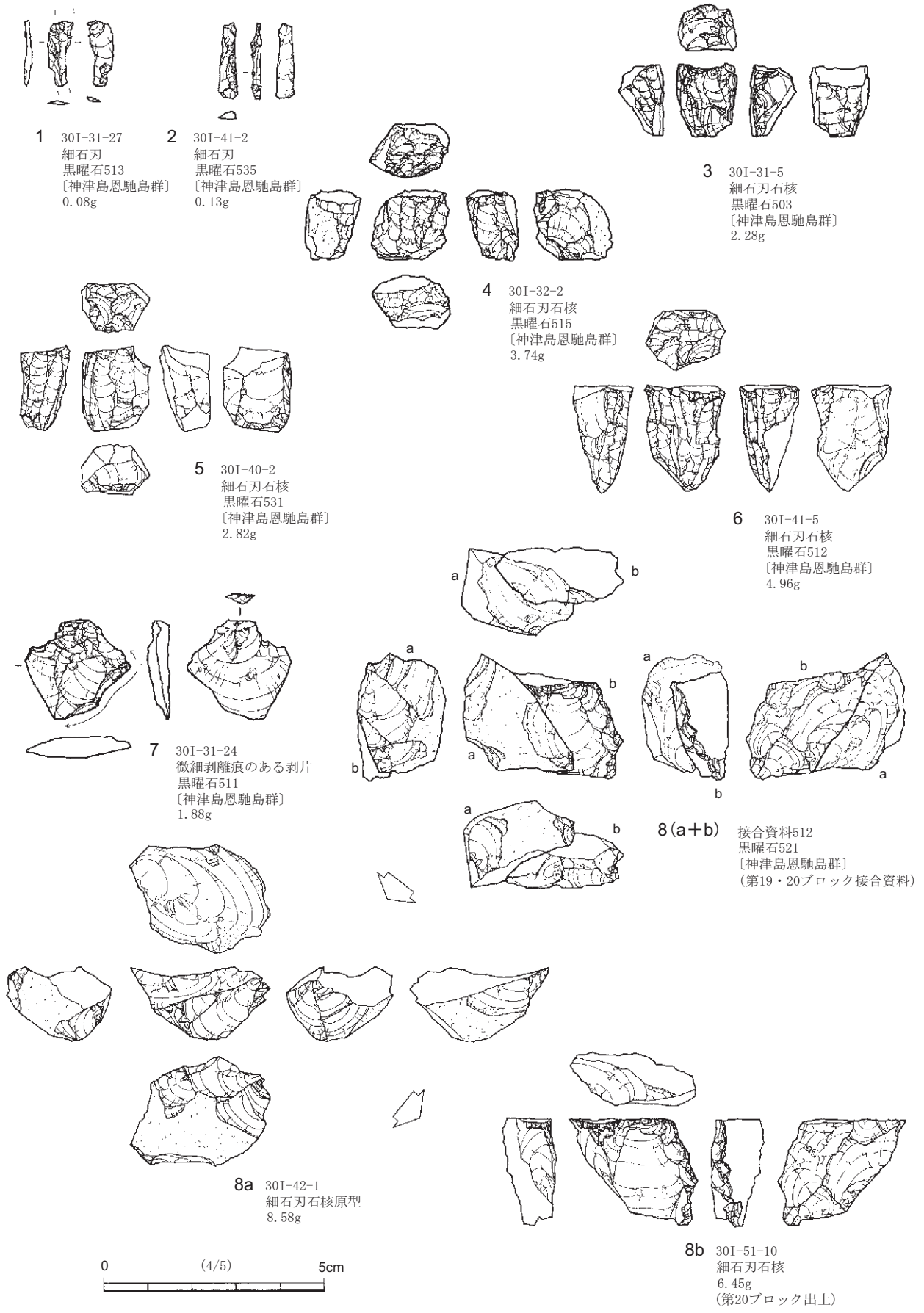
第78図 第5 a文化層第19ブロック器種別分布



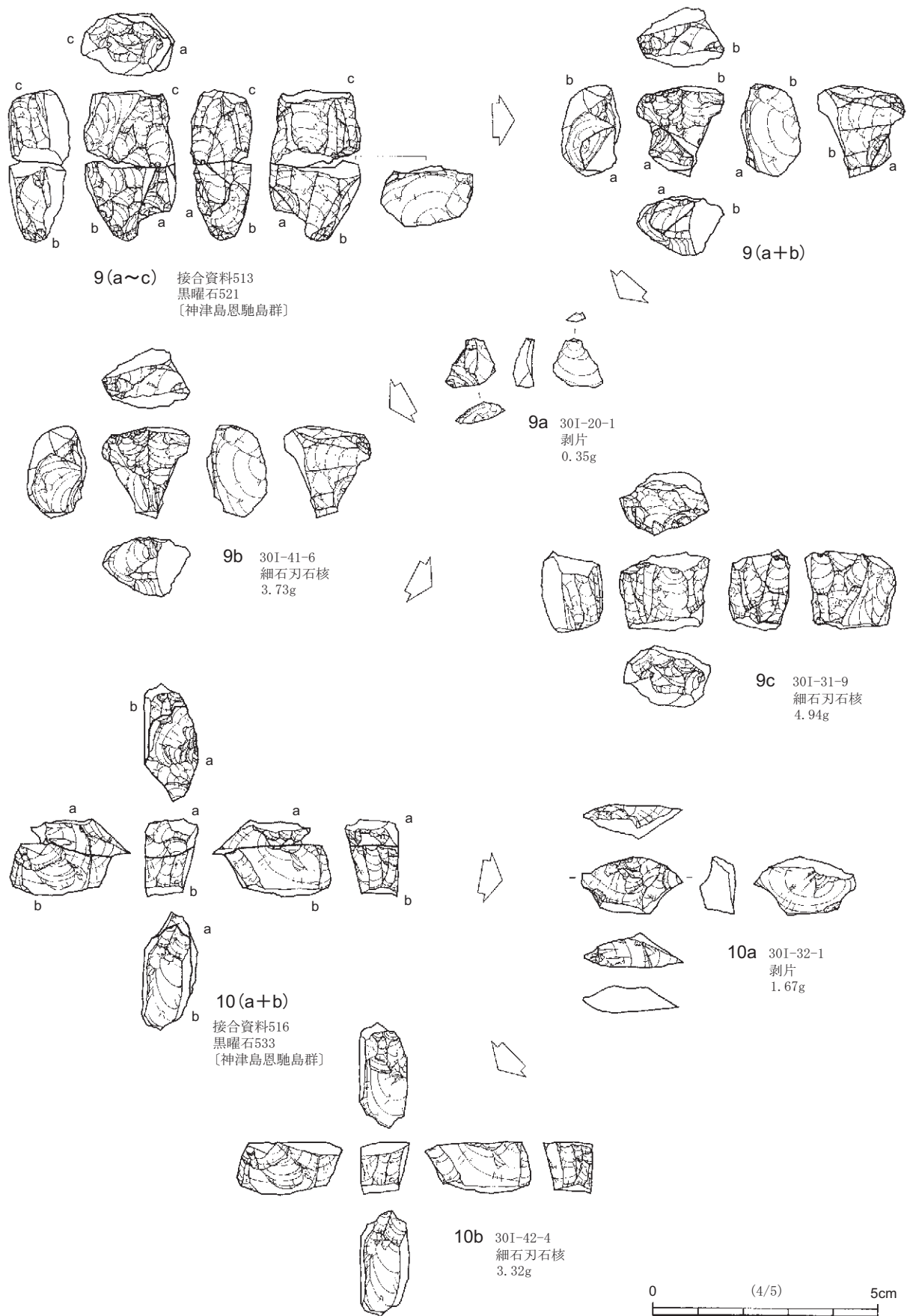
接512 8(a+b)
(第19・20ブロック接合資料)



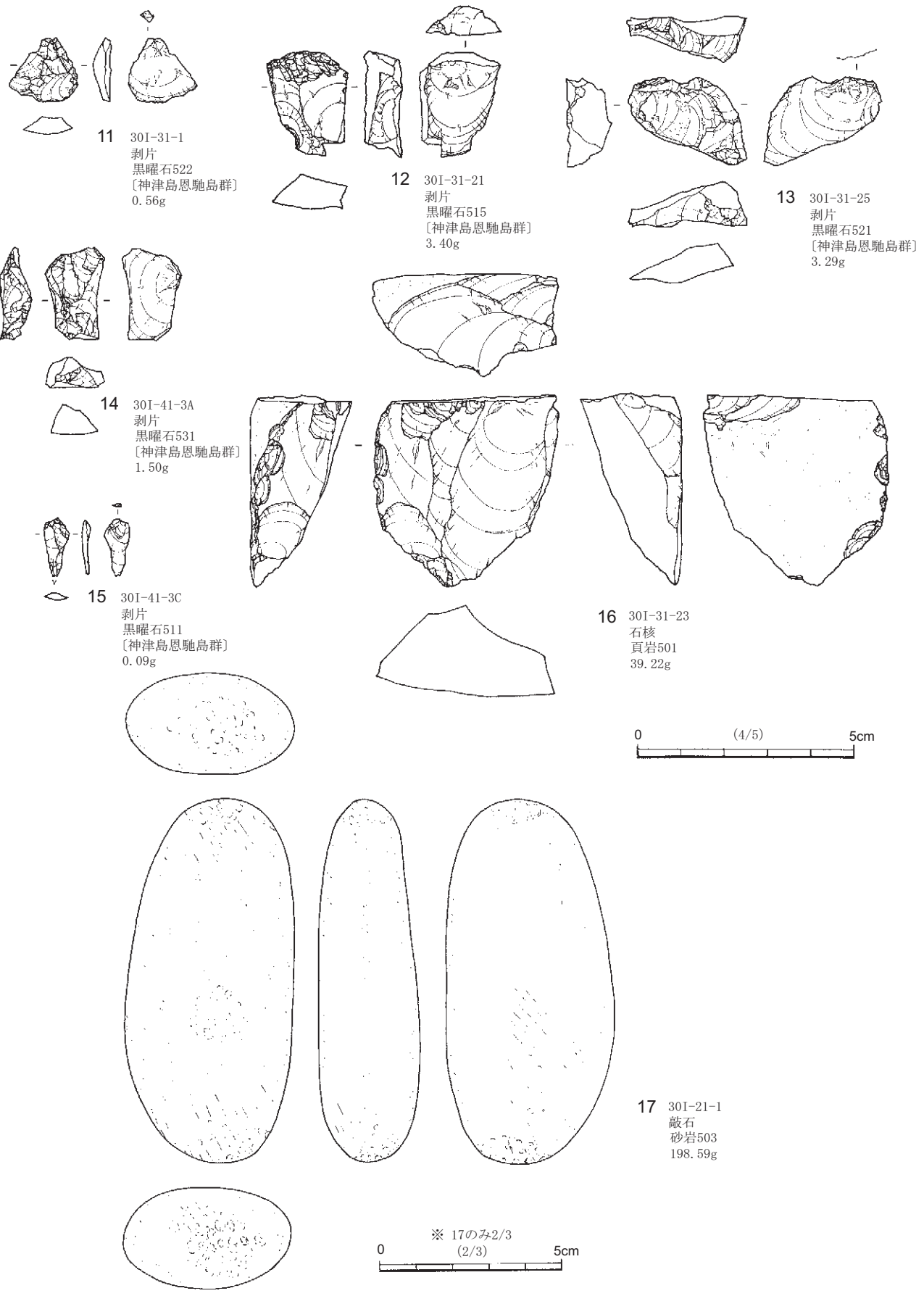
第79図 第5 a文化層第19ブロック母岩別分布



第80図 第5 a文化層第19ブロック出土石器 (1)



第81図 第5 a文化層第19ブロック出土石器 (2)



第82図 第5 a文化層第19ブロック出土石器 (3)

刃が剥離されていない。もう一つの細石刃石核である9cは、分割面を打面として、表面から右面にかけて細石刃を連続的に剥離している。なお、下端部を打面として右面右下部に2枚、左面に1枚見られる剥離面は、当初の細石刃石核である9(a~c)から剥離された細石刃の剥離面である。

8(a+b)と9(a~c)は同一母岩の黒曜石521が用いられている。黒曜石521は細石刃23点、細石刃石核3点、細石刃石核原型1点、二次加工のある剥片2点、剥片23点、碎片19点の71点で構成される。第19ブロックからは、このうち9b・9cの2点の細石刃石核と8aの細石刃石核原型が出土し、第20ブロックからは細石刃など55点の石器が出土していた(第78図下段)。これらのことから、第19ブロックにおいて細石刃石核や細石刃石核原型を保管し、第20ブロックにおいて細石刃を消費するというような場の機能があったことが推察される。

10(a+b)は細石刃石核と打面再生剥片の接合資料516である。板状の剥片を素材として、下端部を折断した後に、裏面器体上部を打面として、10aの横長剥片を剥離して打面を作出している。10bの細石刃石核は、上面上側に平坦な打面調整が入念に行われ、裏面上部を打面として5枚以上の細石刃が剥離されている。その後、打面を180度転移し、上面下部を打面として表面に2枚以上の細石刃を剥離している。

11~15は剥片である。11の背面は多方向からの平坦剥離面で構成されている。12は背面上部に4枚以上の細石刃の剥離面が見られる。13は上面と下面に4枚以上の細石刃の剥離面が見られる。14は背面上部に3枚以上の細石刃の剥離面が見られる。11~14は細石刃石核の打面再生剥片、あるいは石核整形剥片の可能性が高い。15は細石刃と分類可能な形状をしている。

16は石核である。頁岩501が単独母岩で搬入されている。左側縁には平坦な調整加工が連続的に施されていることから、石核を転用した削器と分類したほうが妥当かもしれない。裏面右側縁から下端部にかけて微細剥離が連続的に見られる。

17は敲石である。楕円形礫を素材として、上下両端の突出部の敲打痕が顕著である。平坦面には斜め方向にわずかに擦痕が観察される。

4. 第20ブロック(第83~91図、第46表、図版6・7・52・53)

出土状況 30I-40・41・50・51・61グリッドに分布している。第5a文化層のブロック群においては、最も出土点数が多く、密集して分布し、ブロック群の中央に位置する。5.9m×6.0mの範囲から384点の石器が出土した。細石刃の大半が本ブロックから出土し、黒曜石以外の石材の石器も本ブロックから出土している。分布を詳細に見ると、中央部・北東部・南西部の3か所に集中地点がある。中央部が最も密集しており、北東部と南西部は散漫に分布する。大型の礫器が中央部の東端から出土している。出土層位はⅢ層上部からⅡc層下部で、Ⅲ層上面に集中する。

出土遺物 器種組成は、細石刃155点、細石刃石核6点、細石刃石核原型1点、搔器1点、二次加工のある剥片4点、微細剥離痕のある剥片4点、剥片134点、碎片73点、礫器1点、礫片5点である。石材組成は、黒曜石335点、砂岩16点、珪質頁岩13点、ガラス質黒色安山岩7点、ホルンフェルス7点、緑色凝灰岩4点、トトロ石1点、粘板岩1点である。黒曜石の割合が87%と非常に高い。黒曜石の産地推定地はすべて神津島恩馳島群である。

1~66は細石刃である。遺存部位別に見ると、完形品が1~10、頭部及び上半部が11~42、中間部が43~56、末端部及び下半部が57~66である。微細剥離が見られるものは2・5・8~12・14~18・20・23・

25~28・30~33・35~37・43~52・54~57・62・63・65である。細石刃のほとんどに微細剥離が見られる。打面調整が見られるものは、線状打面が多いこともあり、打面調整の有無を確認できる資料が少なかった。明確に打面調整が見られるものは、2・3・20・24・40のみである。頭部調整の見られるものは、1・2・5~22・24・26~29・31~39・41・42である。ただし、67~71の細石刃石核には打面調整と頭部調整が顕著に行われていることから、ほとんどの細石刃は打面調整と頭部調整を行って剥離されたものと思われる。

67~71は細石刃石核である。67は表面左側と裏面中央に5枚以上の細石刃を剥離した痕跡が見られる。その後、上下両端から両極剥離が行われている。68は分割剥片を素材としている。裏面に分割面が大きく残されている。上面は打面調整が入念に行われ、裏面下部には石核整形剥離が見られる。表面と両側面にかけて細石刃が連続的に剥離されている。69は良質の珪質頁岩が用いられている。表面下部には石核整形剥離が見られる。上端を打面として細石刃を剥離した後に、裏面下端部からの剥離の際に器体が大きく破損している。70は板状の厚い剥片を素材として、上面は打面調整が入念に施され、左側面と下端部には石核整形剥離が見られる。上面を打面として表面から右面にかけて細石刃が連続的に剥離されている。71は良質の珪質頁岩が用いられている。裏面下部と左面には石核整形剥離が見られる。裏面に自然面を大きく残している。表面上部には、自然面を打面として、数枚の細石刃が剥離されているようだが、規格的な細石刃は剥離されていない。67~71の細石刃石核のうち、最終剥離で細石刃を剥離しているものは68と70である。

第46表 第5a文化層第20ブロック組成表

母岩種別	母岩番号	黒曜石産地推定地	細石刃	細石刃石核	細石刃石核原型	器部	二次加工のある剥片	微細剥離のある剥片	剥片	破片	破片	破片	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
ガラス質黒色安山岩	506								4	1			5	1.30	12.98	1.92
	507												1	0.26	2.28	0.34
	508												1	0.26	0.54	0.08
ガラス質黒色安山岩点数合計									6	1			7	1.82	15.81	2.33
黒曜石	501	神津島恩馳島群	25			1			9	4			13	1.20	8.69	1.28
	502	神津島恩馳島群	25						8	10			18	1.20	4.19	0.62
	503	神津島恩馳島群	12				1	1	11	3			14	7.23	8.22	1.21
	504	神津島恩馳島群	8						5				5	3.39	4.21	0.62
	511	神津島恩馳島群	13				1	1	20				21	8.11	21.35	3.15
	512	神津島恩馳島群		1									1	0.26	3.21	0.47
	513	神津島恩馳島群	11						8	4			12	5.99	1.30	0.19
	514	神津島恩馳島群						1	1				2	0.52	5.30	0.81
	515	神津島恩馳島群		1									1	0.26	9.49	1.40
	516	神津島恩馳島群	9						2	1			3	3.13	0.92	0.14
	521	神津島恩馳島群	18	1			2		18	16			34	4.82	33.73	4.98
	522	神津島恩馳島群	8						8				8	4.17	4.38	0.65
	531	神津島恩馳島群	10						4	7			11	5.47	3.12	0.46
	532	神津島恩馳島群			1								1	0.26	10.70	1.58
	535	神津島恩馳島群	2					1	4				4	1.82	2.51	0.37
	536	神津島恩馳島群	1										1	0.52	1.01	0.15
	537	未定不可		1									1	0.26	2.08	0.31
	538	神津島恩馳島群							3				3	0.78	0.95	0.14
	540	神津島恩馳島群	1										1	0.52	0.13	0.02
	550	未定不可	2								23		23	6.11	0.46	0.07
	黒曜石点数合計			149	4	1	1	4	4	104	68			176	87.24	126.15
緑色凝灰岩	501								4				4	1.04	17.25	2.55
	502									3	1		4	2.34	383.40	56.62
砂	501											5	0.26	23.23	3.43	
	502											5	1.56	13.12	1.94	
砂点数合計									7	3	1	5	16	4.17	419.75	63.19
珪質頁岩	508		5	1									6	1.56	5.64	0.83
	509		1						2	1			3	1.04	3.83	0.57
	510			1									1	0.78	10.56	1.56
珪質頁岩点数合計			6	2					2	1			3	3.39	20.03	2.96
粘板岩	501								1				1	0.26	0.24	0.04
	501								7				7	1.82	75.85	11.20
粘板岩点数合計									7				7	1.82	75.85	11.20
全体点数合計			155	6	1	1	4	4	134	73	1	5	184	100.00	677.10	100.00
点数組成比(%)			40.36	1.56	0.26	0.26	1.04	1.04	34.90	19.01	0.26	1.30	100.00			

72は細石刃石核原型である。背面に大きく自然面を残している。板状の剥片を素材として、左面と下面に石核整形と思われる調整加工が行われている。表面左上部には2枚以上の細石刃を剥離した痕跡が見られることから、稜上調整剥片を素材としている可能性が高い。73は稜上調整剥片である。表面には3枚の細石刃の剥離が見られる。裏面と表面右側の細石刃との切り合い関係は判別が困難であったが、裏面が新しいと判断した。ただし、この切り合い関係が逆だと、器種分類は細石刃石核と変更する必要がある。

74～79は打面再生剥片と判断されるものである。74は上面に多方向からの平坦な打面調整剥離が見られる。腹面には微細剥離が見られる。75は表面に2枚の細石刃を剥離した剥離面が見られる。打面調整はほとんど行われていない。76には表面に細石刃を剥離した痕跡のある剥離面を示した。主要剥離面は左面に示した。77～79は平坦な剥離により打面が再生されたことを示す資料である。77・78の表面にはわずかに細石刃を剥離した痕跡が見える。

80は搔器である。下端部に急角度の調整加工が施されていることから搔器として分類した。ただし、右面に細石刃を剥離したような痕跡が見られることから、非常に小型の細石刃石核となる可能性もある。

81～83は二次加工のある剥片である。81は縦長剥片を素材として、右部を折断した後に、折断面下部に調整加工が施されている。82は厚みのある剥片を素材として、左部と下部を折断し、折断面の交わる突出部に調整加工が施されている。右側面には粗い調整加工が施されている。83は非常に小型の剥片を素材として、両側縁を折断した後に、突出部に調整加工が施されている。

84・85は微細剥離痕のある剥片である。いずれも幅広の剥片を素材として、鋭利な縁辺に微細剥離が見られる。このほか、84・85よりも細かい微細剥離の見られるものもあったが、より明確な微細剥離が連続的に見られるものを微細剥離痕のある剥片として器種分類した。

86～95は剥片である。86～93は黒曜石、94はトロトロ石、95はガラス質黒色安山岩がそれぞれ用いられている。86・87・90・92は細石刃石核の調整剥片と思われる。88・91・93は細石刃と分類可能な剥片である。

96～100は接合資料である。96(a+b)は2点の打面再生剥片が接合した資料である。表面と右面に細石刃を剥離した剥離面が観察される。97(a+b)は2点の細石刃が接合した資料である。2点とも器体上部に内在している夾雑物付近から折れている。98(a+b)も2点の細石刃が接合した資料である。99(a+b)は両設打面の細石刃石核の調整剥片が接合した資料である。上下面に細石刃石核の打面が残されている。100(a～c)は横長剥片を連続して剥離したことを示す接合資料である。良質の緑色凝灰岩が用いられている。左面上部を打面として、100(a+b)を剥離している。100bは、100(a+b)を剥離した際に打瘤部が同時に割れた資料と思われる。100cは厚みのある横長剥片で、右面は折れている。

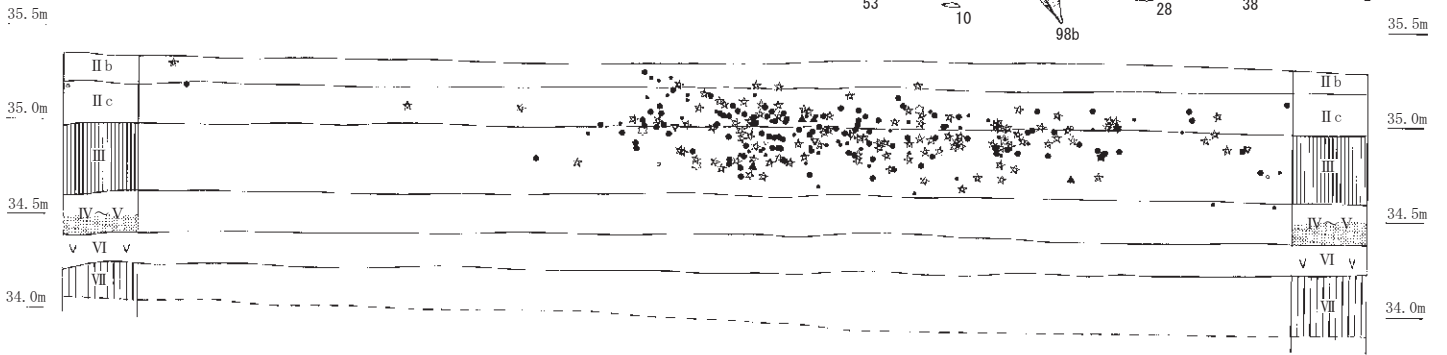
101は大型の横長剥片である。粗粒のホルンフェルス501が用いられている。黒曜石は細石刃製作に関連するもので占められていたのに対して、粗粒のホルンフェルスやガラス質黒色安山岩はこのような大型の剥片が剥離されていた。

102は礫器である。粗粒の砂岩501が用いられている。大型の楕円形礫を素材として、上面右部を打面として分割した後に、分割面の縁辺に細かい加工が施されている。表面中央部、上面周辺部、下面突出部には敲痕が顕著に見られる。特に、下面は、強い敲打により中央部が大きく剥離し、さらにその剥離面の縁辺部には、敲打による潰れ痕が顕著に見られる。



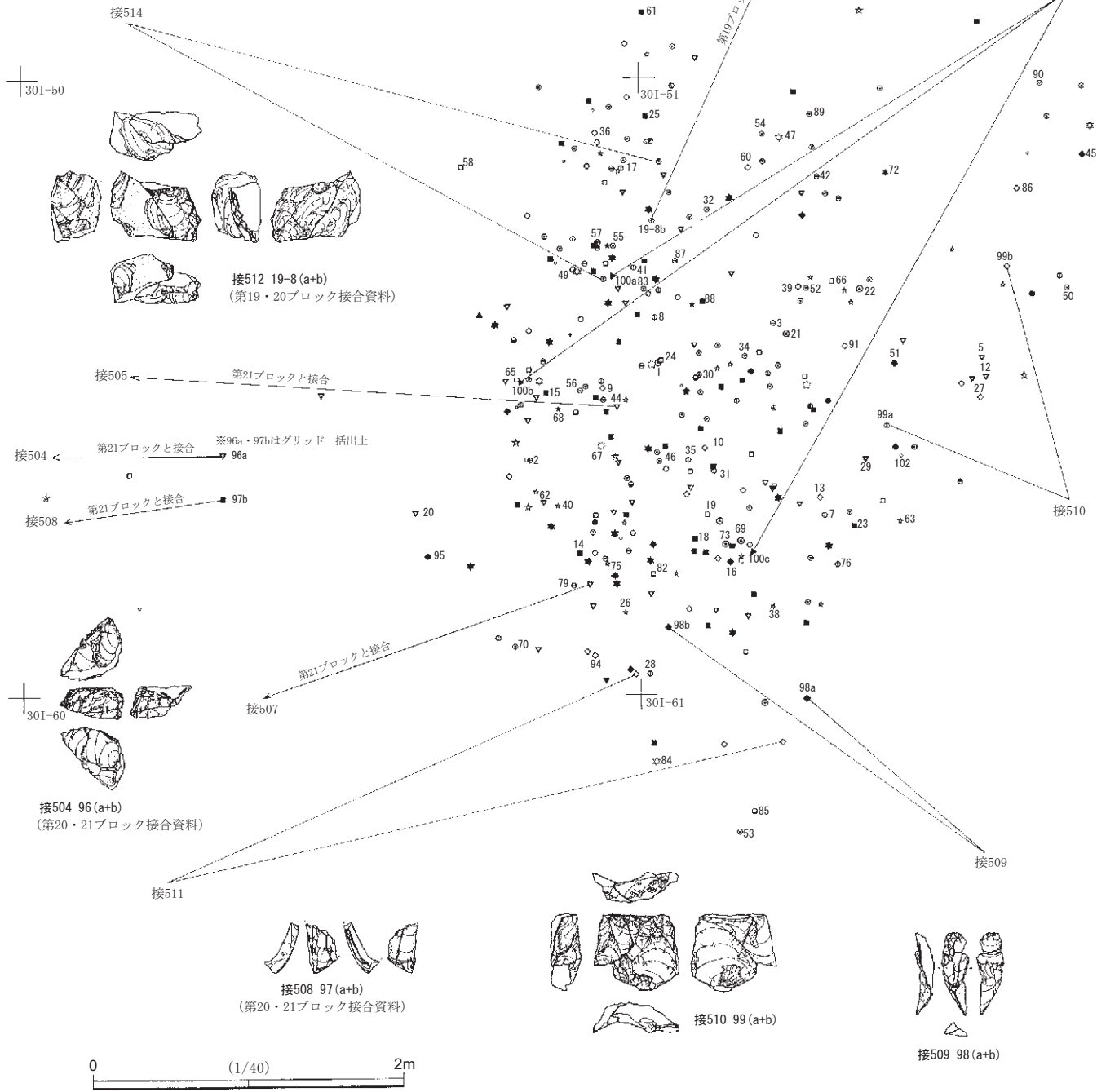
- ▲ 二次加工のある剥片
- ▼ 微細剥離痕のある剥片
- ★ 細石刃
- 細石刃石核
- ◆ 細石刃石核原型
- 剥片
- 碎片
- ★ 礫器
- 礫片

301-50

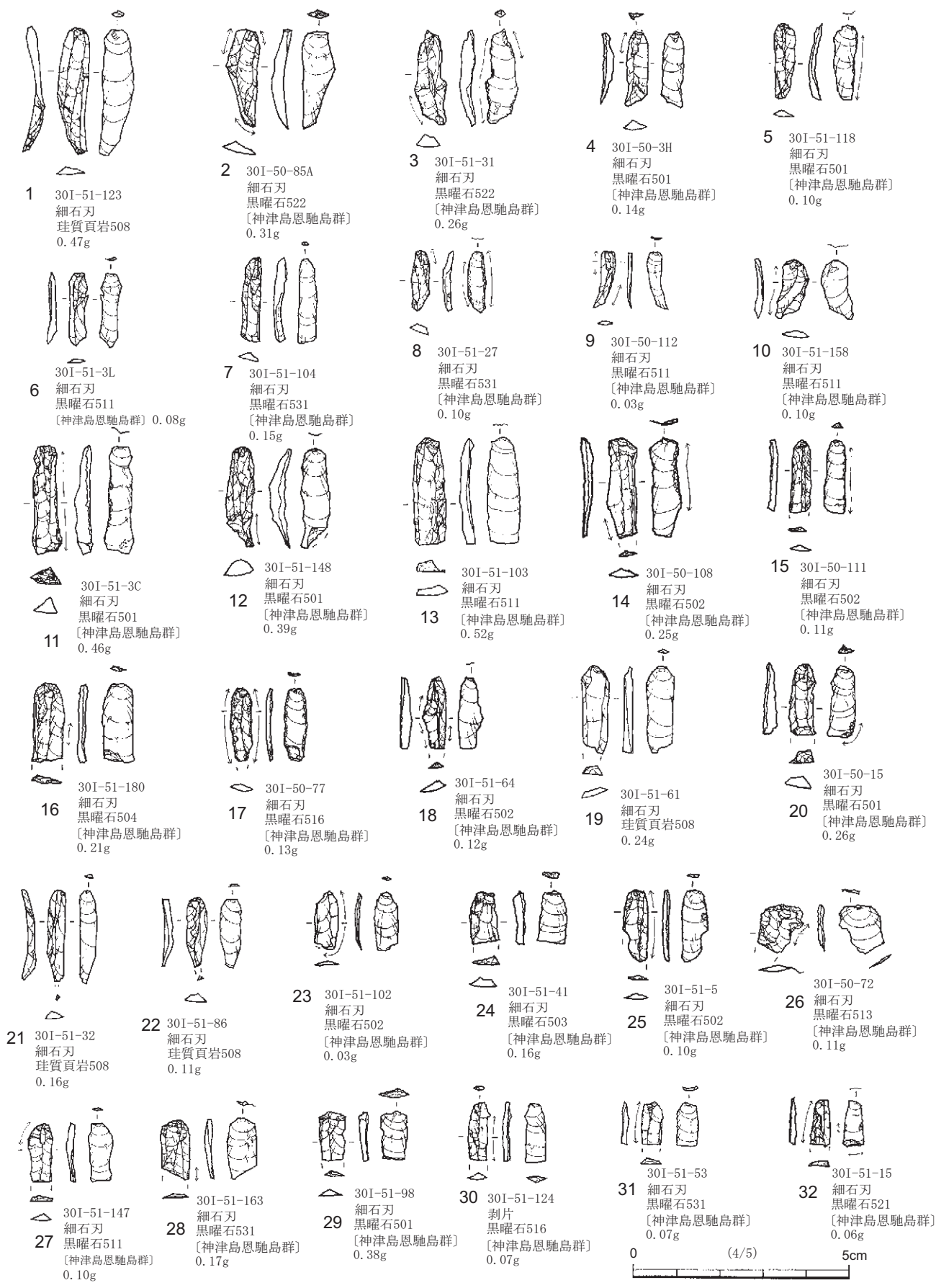


第83図 第5 a文化層第20ブロック器種別分布

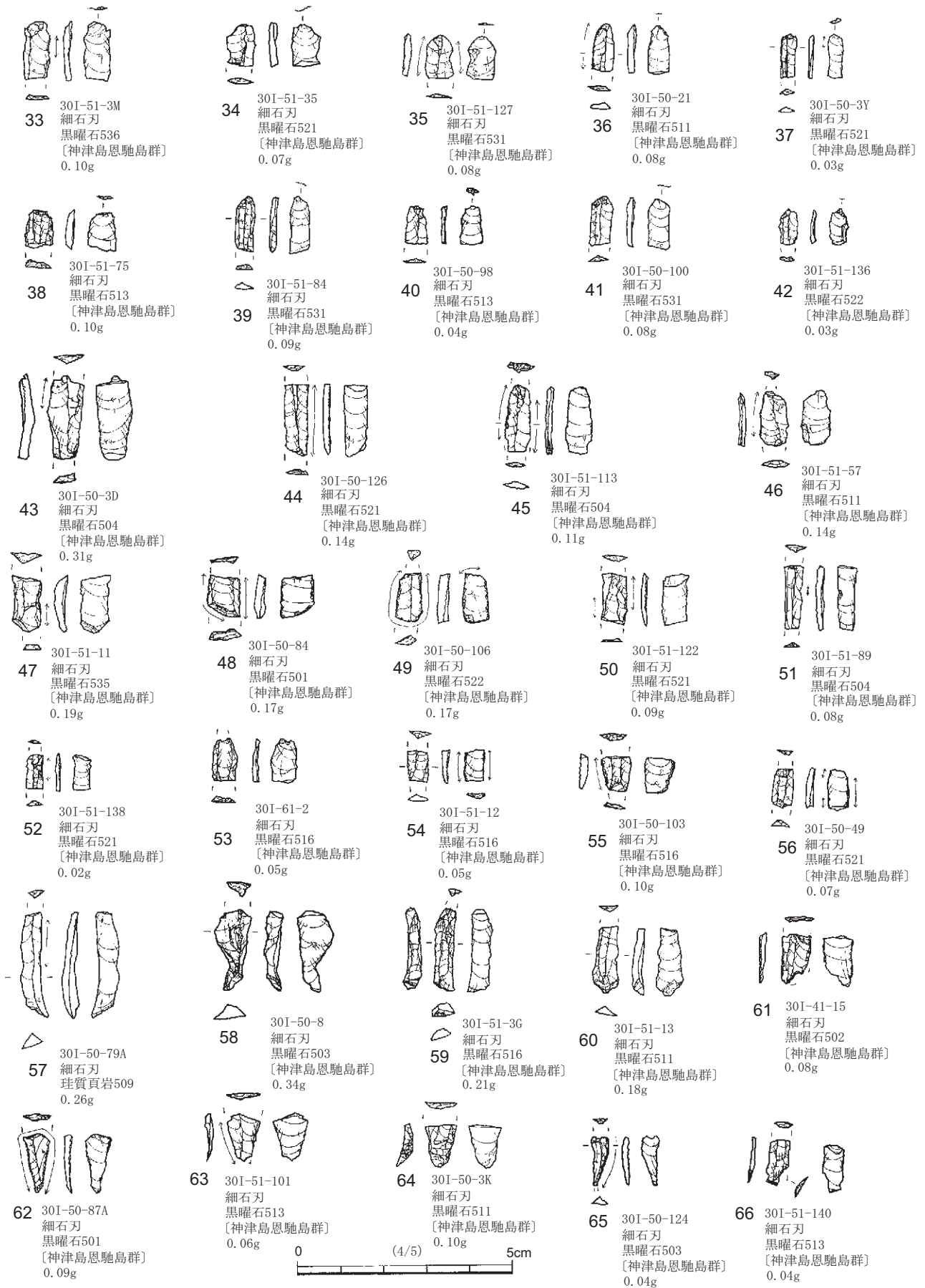
- ガラス質黒色安山岩506
- ガラス質黒色安山岩507
- ▲ ガラス質黒色安山岩508
- ▼ トロトロ石501
- ▽ 黒曜石501〔神津島恩馳島群〕
- 黒曜石502〔神津島恩馳島群〕
- 黒曜石503〔神津島恩馳島群〕
- ◆ 黒曜石504〔神津島恩馳島群〕
- ◇ 黒曜石511〔神津島恩馳島群〕
- ★ 黒曜石512〔神津島恩馳島群〕
- ◇ 黒曜石513〔神津島恩馳島群〕
- ◎ 黒曜石514〔神津島恩馳島群〕
- ◎ 黒曜石515〔神津島恩馳島群〕
- ◎ 黒曜石516〔神津島恩馳島群〕
- ◎ 黒曜石521〔神津島恩馳島群〕
- ◎ 黒曜石522〔神津島恩馳島群〕
- ◎ 黒曜石531〔神津島恩馳島群〕
- ★ 黒曜石532〔神津島恩馳島群〕
- ☆ 黒曜石535〔神津島恩馳島群〕
- ★ 黒曜石536〔神津島恩馳島群〕
- ◇ 黒曜石537〔測定不可〕
- ★ 黒曜石538〔神津島恩馳島群〕
- ◇ 黒曜石540〔神津島恩馳島群〕
- ★ 黒曜石550〔測定不可〕
- ▶ 緑色凝灰岩501
- 砂岩501
- ・ 砂岩502
- ★ 砂岩
- ◎ 珪質頁岩508
- ◎ 珪質頁岩509
- ◎ 珪質頁岩510
- ◎ 硬質頁岩508
- ホルンフェルス501



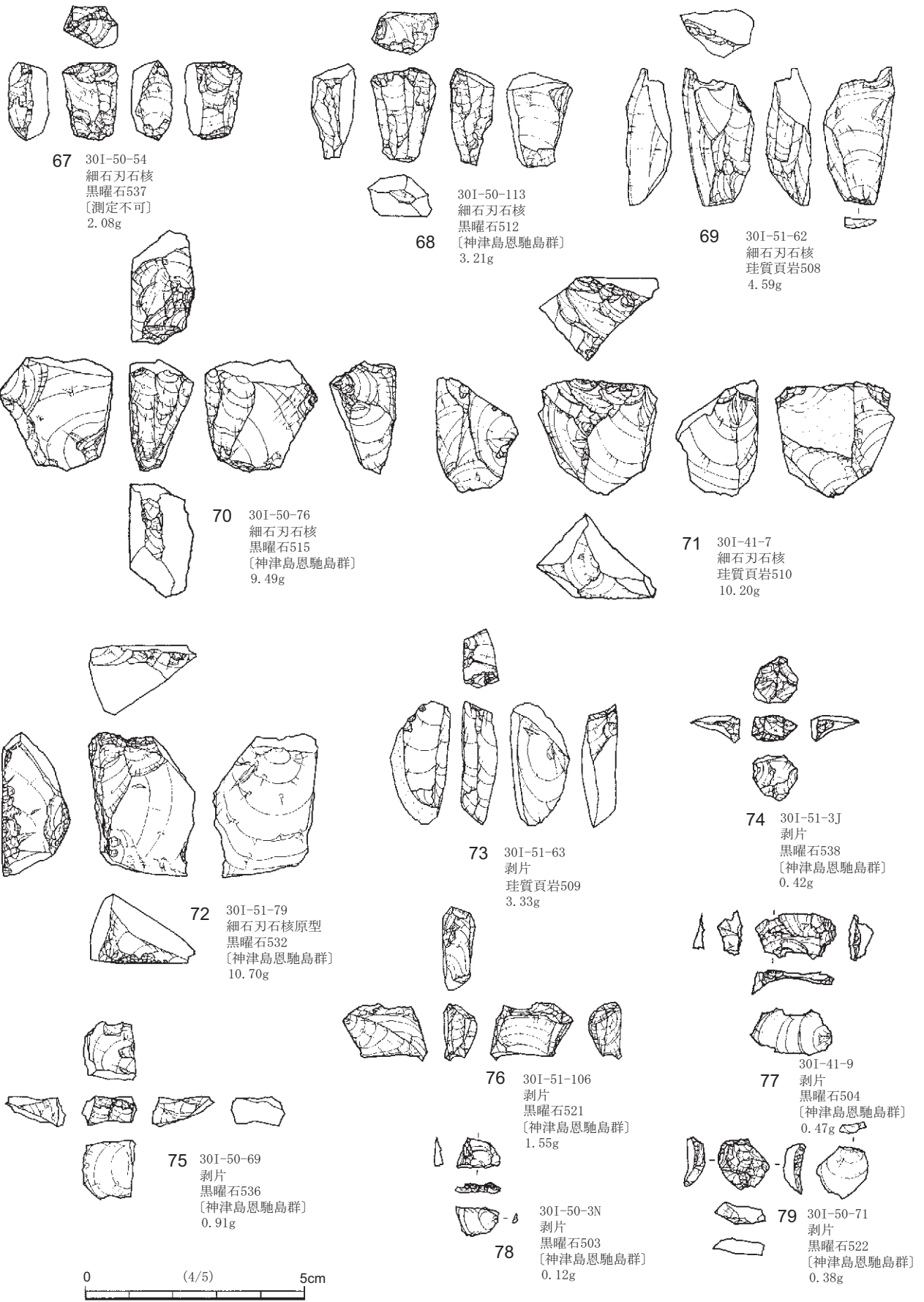
第84図 第5 a文化層第20ブロック母岩別分布



第85図 第5 a文化層第20ブロック出土石器 (1)



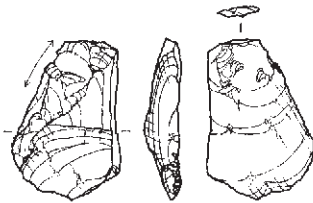
第86図 第5 a文化層第20ブロック出土石器 (2)



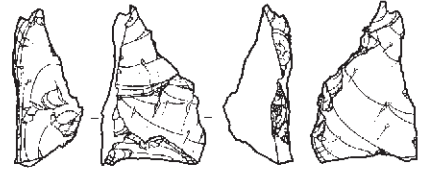
第87図 第5 a文化層第20ブロック出土石器 (3)



80 30I-50-3F
搔器
黒曜石501
〔神津島恩馳島群〕
0.48g



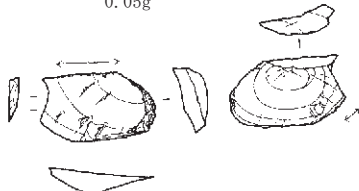
81 30I-41-16
二次加工のある剥片
黒曜石511
〔神津島恩馳島群〕
2.31g



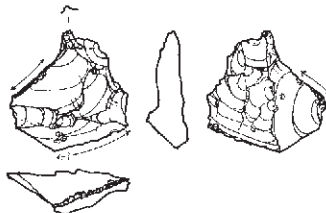
82 30I-51-134
二次加工のある剥片
黒曜石503
〔神津島恩馳島群〕
3.49g



82 30I-51-24
二次加工のある剥片
黒曜石521
〔神津島恩馳島群〕
0.05g



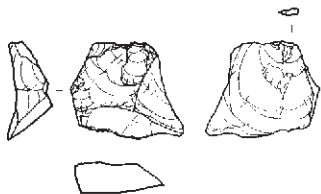
84 30I-61-4
微細剥離痕のある剥片
黒曜石535
〔神津島恩馳島群〕
0.79g



85 30I-61-6
微細剥離痕のある剥片
黒曜石503
〔神津島恩馳島群〕
1.90g



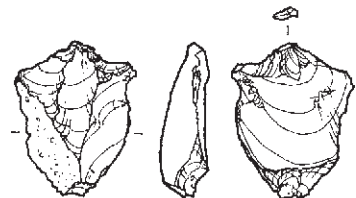
86 30I-51-114
剥片
黒曜石511
〔神津島恩馳島群〕
1.97g



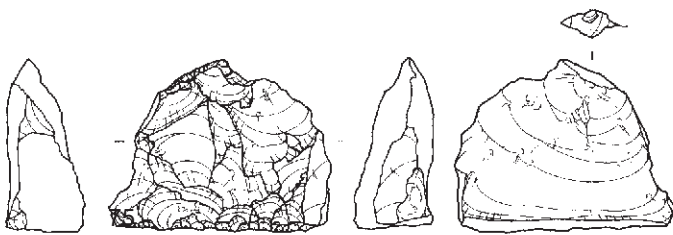
87 30I-51-21
剥片
黒曜石522
〔神津島恩馳島群〕
1.33g



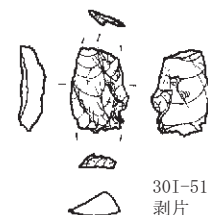
88 30I-51-30
剥片
黒曜石502
〔神津島恩馳島群〕
0.13g



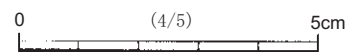
89 30I-51-77
剥片
黒曜石514
〔神津島恩馳島群〕
2.70g



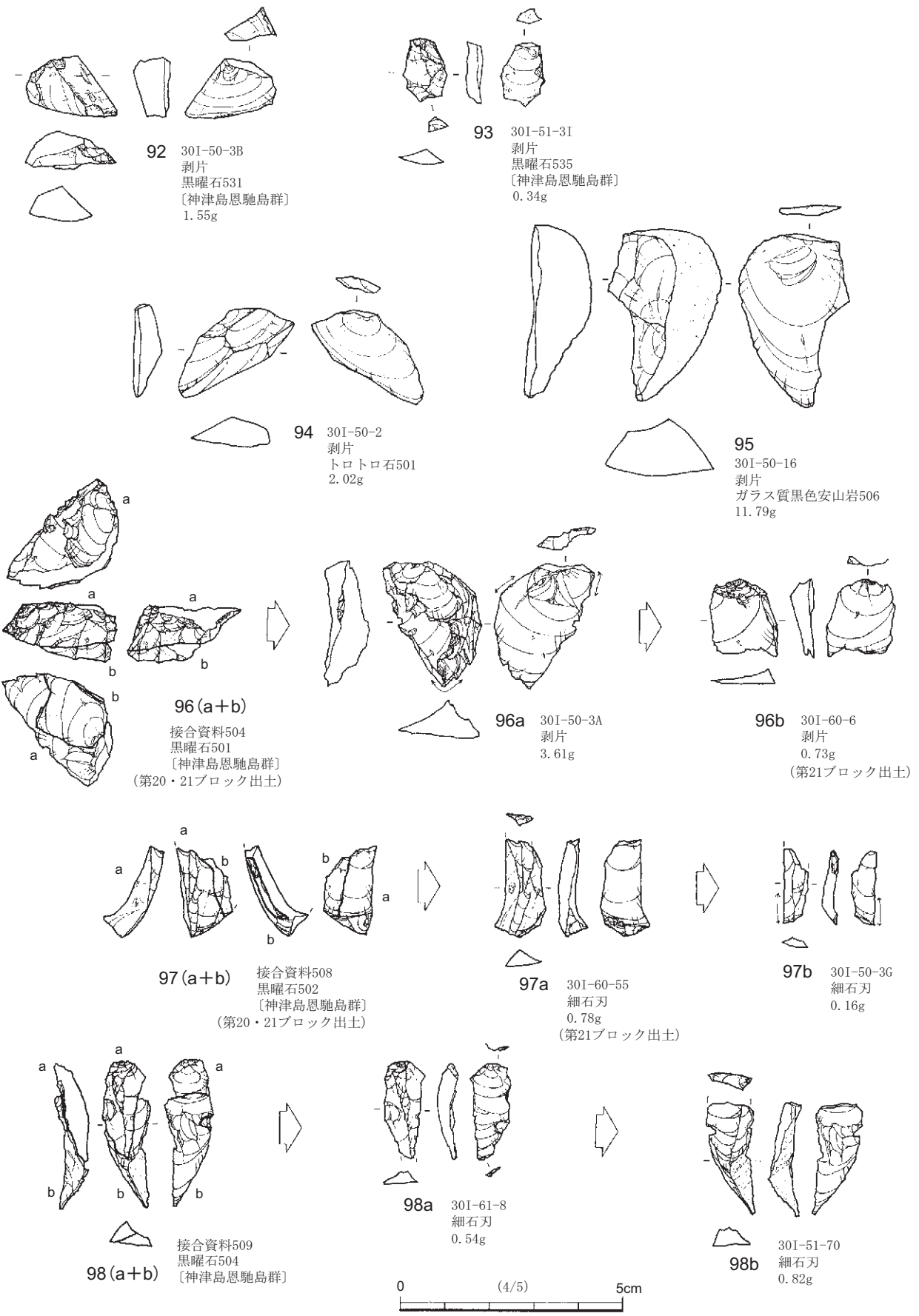
90 30I-51-2
剥片
黒曜石521
〔神津島恩馳島群〕
11.19g



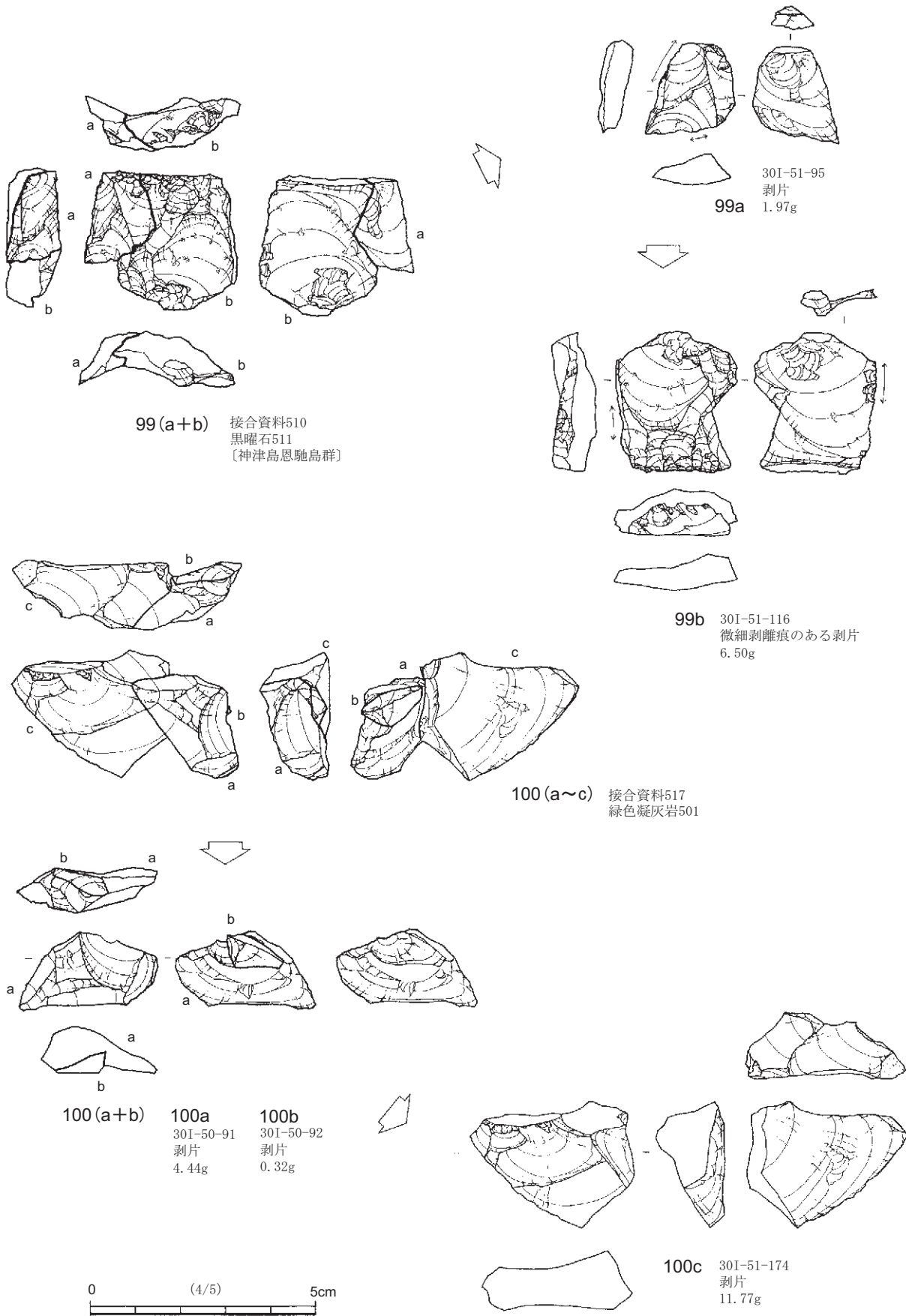
91 30I-51-90
剥片
黒曜石511
〔神津島恩馳島群〕
0.42g



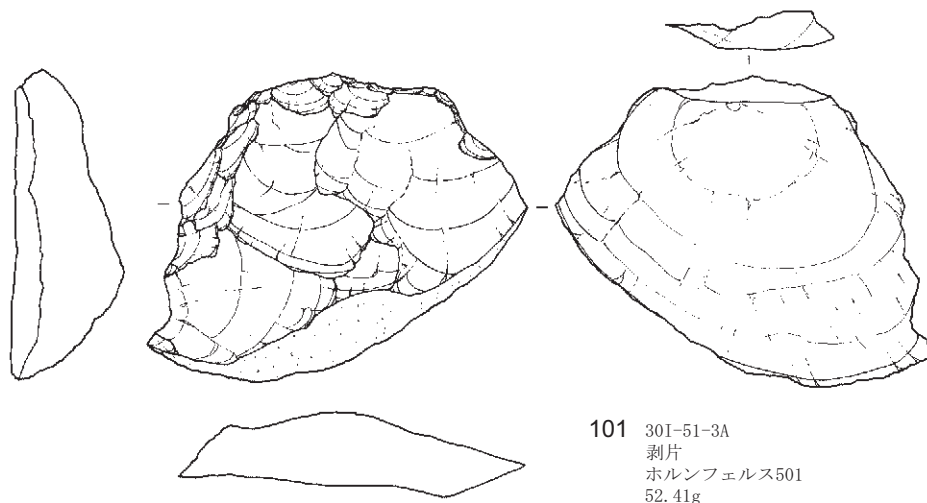
第88図 第5 a文化層第20ブロック出土石器 (4)



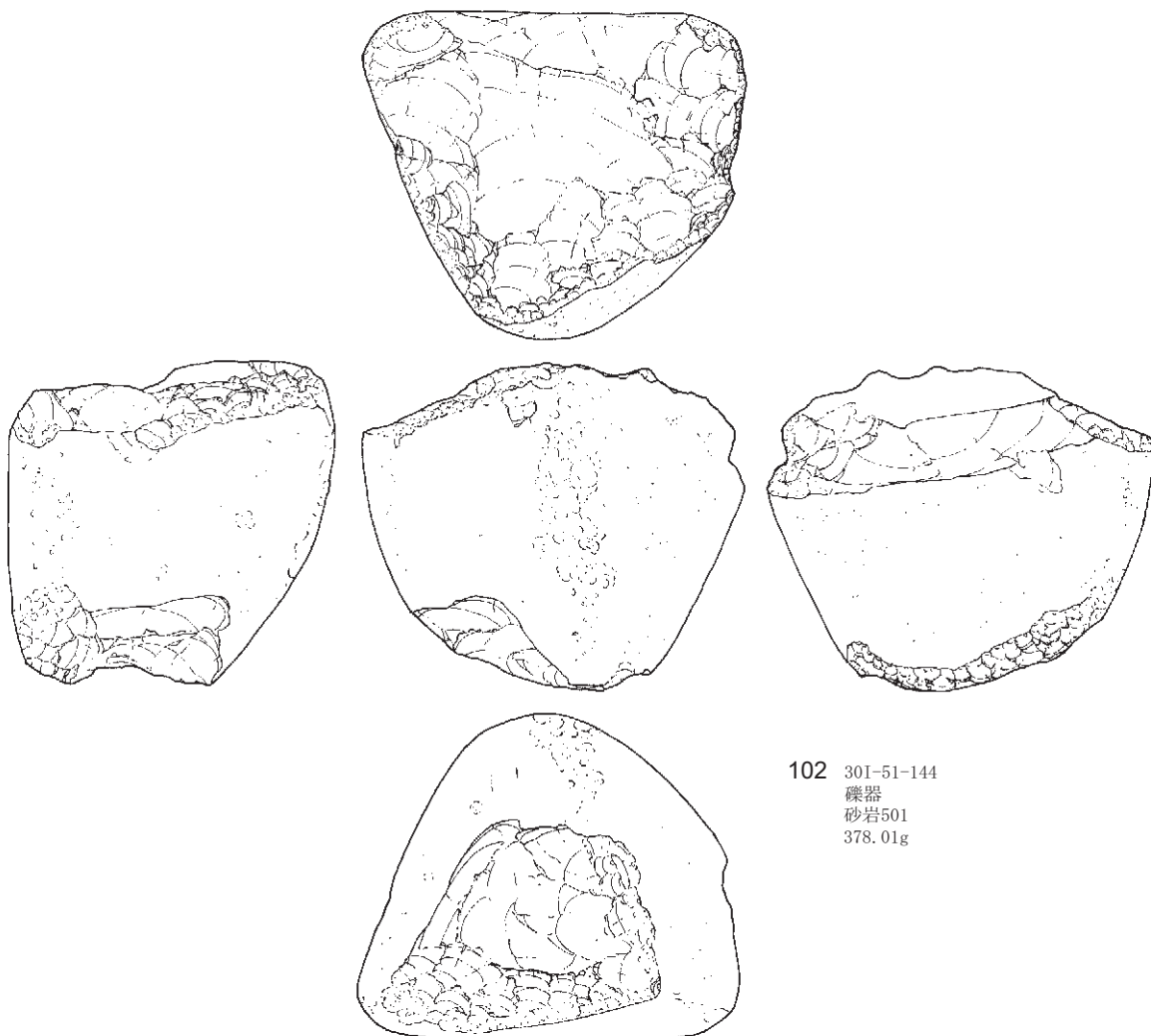
第89図 第5 a文化層第20ブロック出土石器 (5)



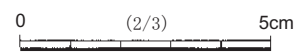
第90図 第5 a文化層第20ブロック出土石器 (6)



101 30I-51-3A
剥片
ホルンフェルス501
52.41g



102 30I-51-144
礫器
砂岩501
378.01g



第91図 第5 a文化層第20ブロック出土石器 (7)

5. 第21ブロック (第92～94図、第47表、図版6・7・54)

出土状況 30H-69、30I-60・70グリッドに分布している。第5 a文化層のブロック群においては、最も分布範囲が狭く、南西に位置する。5.2m×4.4mの範囲から86点の石器が出土した。分布を詳細に見ると、中央部・北東部・南西部の3か所に集中地点がある。中央部が最も密集しており、北東部と南西部は散漫に分布する。出土層位はⅢ層下部からⅡb～Ⅱc層下部で、Ⅲ層上面に集中する。

出土遺物 器種組成は、細石刃28点、細石刃石核3点、細石刃石核原型1点、削器1点、二次加工のある剥片4点、微細剥離痕のある剥片1点、剥片33点、碎片14点、礫片1点である。石材組成は、黒曜石81点、粘板岩2点、砂岩1点、嶺岡産珪質頁岩1点、チャート1点である。黒曜石の割合が94%と極めて高い。黒曜石の産地推定地はすべて神津島恩馳島群である。

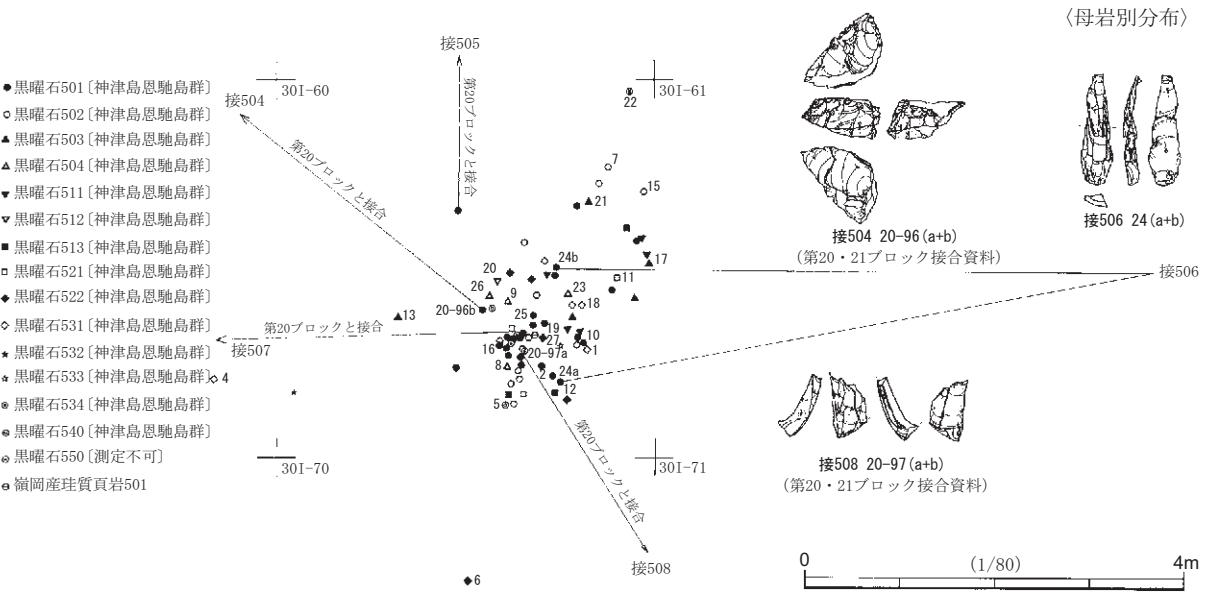
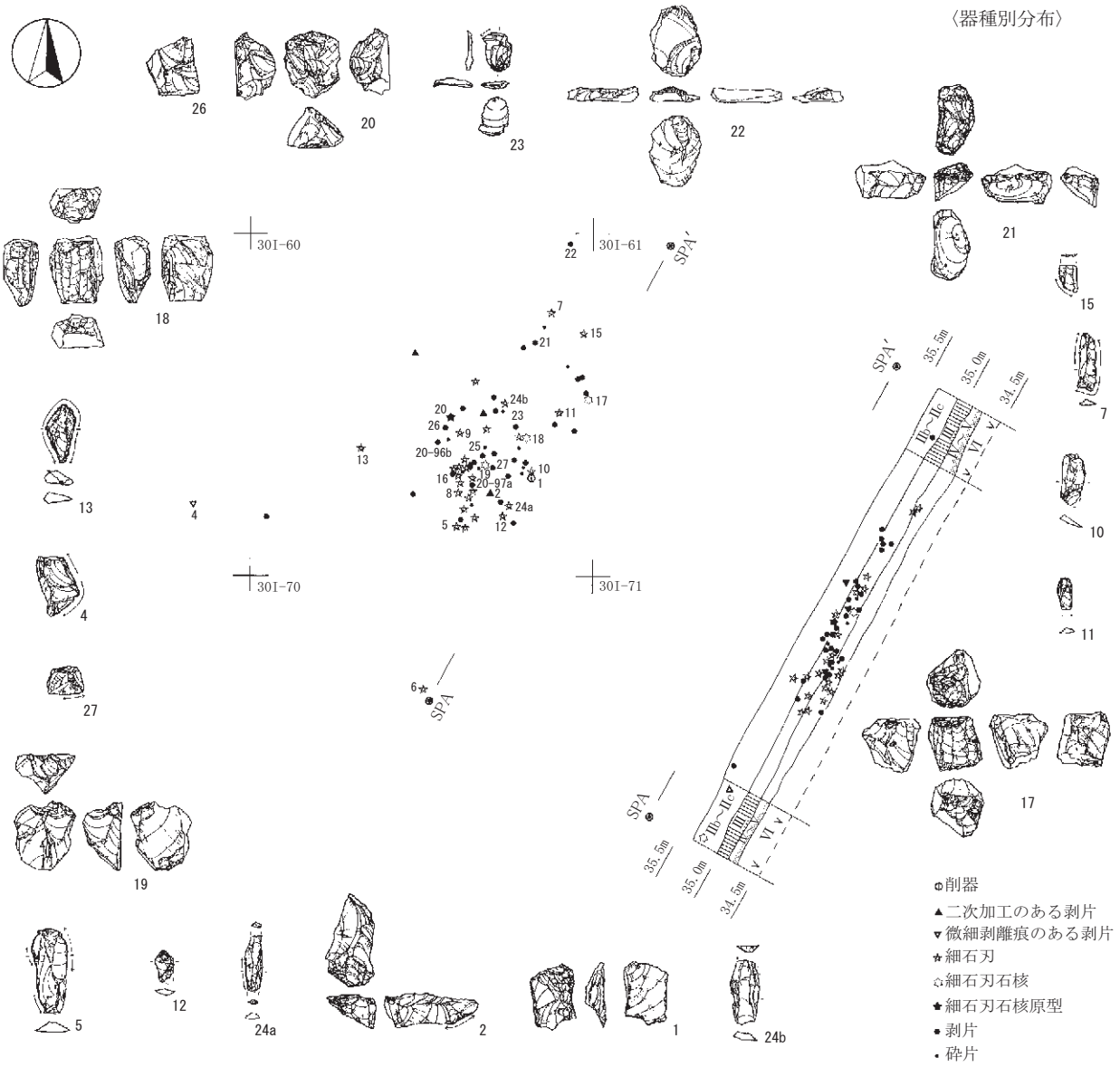
1は削器である。点状の打面から剥離された縦長剥片を素材として、左側縁に急角度の調整加工が施されている。2・3は二次加工のある剥片である。2は打面再生剥片を素材として、右面下部に調整加工が施されている。表面右側に2枚の細石刃の剥離面が観察される。3は単独母岩であるチャート507が用いられている。板状の剥片を素材として、上面と右面を折断し、左面と下面に調整加工が施されている。4は微細剥離痕のある剥片である。縦長剥片を素材として、右側面と裏面右下部に微細剥離が見られる。

5～16は細石刃である。遺存部位別に見ると、完形品が5～8、頭部及び上半部が9～12、末端部及び下半部が11～16である。微細剥離が見られるものは5～9・11・13～16である。細石刃のほとんどに微細剥離が見られる。線状打面が多いこともあり、打面調整の有無を確認できる資料が少なかった。頭部調整の見られるものは、5～9である。5は長さ・幅ともに本文化層出土の細石刃のなかで最も大きい。7・9・13・14はほぼ全周にわたって微細剥離が見られる。

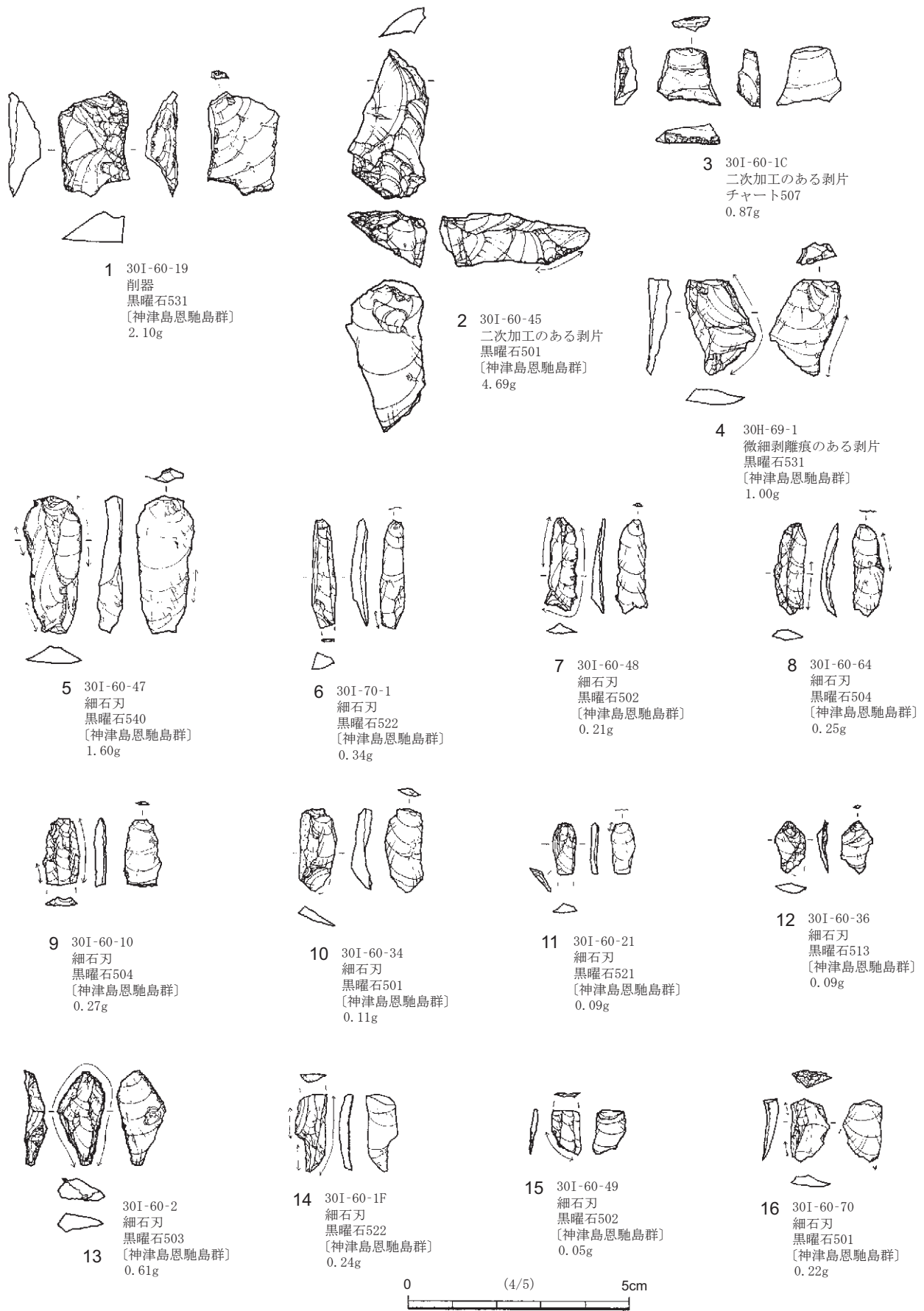
17～19は細石刃石核である。17は分割剥片を素材としている。分割面は左面・右面・裏面に残されており、大型で厚みのある剥片を素材としている。17は下面から石核整形が行われている。上面には平坦な打面調整が入念に施されている。表面に細石刃石核の底面まで及ぶ細石刃の連続的剥離痕が見られる。18は裏面右上部に分割面が残されている。裏面左下部から石核整形が行われている。上面には平坦な打面調整が入念に施されている。表面から左面にかけて、石刃石核の底面まで及ぶ細石刃の連続的剥離痕がある。19は

第47表 第5 a文化層第21ブロック組成表

母岩	器種	母岩番号	黒曜石産地推定地	細石刃	細石刃石核	細石刃石核原型	削器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	碎片	礫片	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
黒曜石		501	神津島恩馳島群	7				2		12	3		24	27.91	11.75	15.81
		502	神津島恩馳島群	8						4			12	13.95	1.47	1.98
		503	神津島恩馳島群	1	1					2	1		5	5.81	12.79	17.21
		504	神津島恩馳島群	2						3			5	5.81	4.16	5.60
		511	神津島恩馳島群	1						5			6	6.98	2.53	3.41
		512	神津島恩馳島群			1							1	1.16	5.63	7.58
		513	神津島恩馳島群	1						1	1		3	3.49	0.21	0.28
		521	神津島恩馳島群	3						1			4	4.65	0.62	0.83
		522	神津島恩馳島群	2				1			4		7	8.14	3.33	4.48
		531	神津島恩馳島群	2	1								6	6.98	9.57	12.88
		532	神津島恩馳島群				1						1	1.16	0.94	1.27
		533	神津島恩馳島群							1			1	1.16	1.09	1.47
		534	神津島恩馳島群							1			1	1.16	2.02	2.72
		540	神津島恩馳島群	1							1		2	2.33	1.66	2.23
		550	測定不可									3	3	3.49	0.03	0.04
黒曜石 点数合計				28	2	1	1	3	1	32	13	81	94.19	57.80	77.79	
砂岩											1	1	1.16	0.05	12.18	
嶺岡産珪質頁岩					1							1	1.16	6.09	8.20	
粘板岩										1	1	2	2.33	0.48	0.66	
チャート								1				1	1.16	0.87	1.17	
全体 点数合計				28	3	1	1	4	1	33	14	1	86	100.00	74.30	100.00
点数組成比(%)				32.56	3.49	1.16	1.16	4.65	1.16	38.37	16.28	1.16	100.00			



第92図 第5 a文化層第21ブロック遺物分布



第93図 第5 a文化層第21ブロック出土石器 (1)



第94図 第5 a文化層第21ブロック出土石器 (2)

良質の嶺岡産珪質頁岩501が用いられており、単独母岩で搬入されている。厚みのある剥片を素材として、右面は細石刃石核の底面まで及ぶ細石刃が剥離されている。表面上部にも細石刃を剥離しようとした剥離面が見られるが、黒曜石のように規格的な細石刃が量産されてはいない。20は細石刃石核原型である。厚みのある剥片を素材として、裏面左部と下面に調整加工が施されている。

21～23は打面再生剥片である。21の上面には、多方向からの平坦剥離で構成される打面調整が見られる。表面には上面から剥離された細石刃の剥離面、裏面には上下両方向から剥離された細石刃の剥離面が見られる。22は上面に平坦な打面調整剥離面が2面見られる。表面には細石刃石核の頭部調整と細石刃の剥離面がわずかに見られる。23は、上面に多方向からの平坦剥離で構成される打面調整が見られる。表面には細石刃石核の頭部調整の剥離面がわずかに見られる。24(a+b)は2点の細石刃が接合した資料である。上面を打面として、24(a+b)の下端部まで及ぶ細長い細石刃24aが剥離されている。次に、打面を180度転移して、下端部から細石刃24bが剥離されている。24aと24bは上半部が折断されている。25～27は剥片である。25については細石刃と分類することも可能である。剥片と分類したなかにも、このような細石刃と分類可能なものも多く含まれている。26は石核の底面を下端部に取り込んだ剥片である。27は小型の横長剥片である。

6. 第5b文化層 (第48表)

概要 第5b文化層の石器群は、総計169点出土し、第22ブロックの1か所で構成される。標高36m～37m(現地表面)にかけて分布している。北東に細長く伸びる谷津の谷頭に立地する。北東約100mの位置に第5a文化層の石器群が分布する。Ⅲ層上面に生活面をもつ石器群と推定される。なお、第5a文化層の石器群との関連については、接合資料や共有する母岩がないことから先後関係は明確ではない。相違点としては、第5a文化層においては黒曜石が大半を占めるのに対し、第22ブロックは黒曜石4点のみの出土である。類似点としては、第5a文化層における黒曜石以外の分布が、第76図上段のように第20ブロックにまとまっていた。このように、黒曜石以外の石器の分布規模だけを見ると、第22ブロックと類似している。

7. 第22ブロック (第95～103図、第48表、図版7・55)

出土状況 調査区南東部の33H-10・11・20～22・30～32・41、33G-39グリッドに分布している。今回調査を実施した調査範囲のなかでは、最も標高の低い地点に遺物が分布している。10.2m×9.4mの範囲から169点の石器が出土した。分布を詳細に見ると、北西部と南東部の2か所に集中地点がある。北西部に密集しており、南東部は散漫に分布している。出土層位はⅢ層上部からⅡc層下部で、Ⅲ層上面に集中する。

出土遺物 器種組成は、細石刃26点、細石刃石核5点、削器3点、楔形石器7点、二次加工のある剥片9点、微細剥離痕のある剥片4点、剥片91点、碎片18点、石核1点、敲石3点、礫2点である。石材組成は、珪質頁岩70点、ガラス質黒色安山岩38点、チャート32点、玉髓11点、ホルンフェルス6点、黒曜石4点、頁岩4点、トロトロ石2点、砂岩2点である。黒曜石の割合が2%と極めて低い。黒曜石の産地推定地は、第5a文化層と同様にすべて神津島恩馳島群である。

1～21は細石刃である。黒曜石を用いた細石刃はなく、珪質頁岩・玉髓・チャートが用いられている。

第5 a文化層の細石刃の大半(97%)が黒曜石を用いていたのとは対照的な石材の用い方をしている。遺存部位別に見ると、完形品が1~5、頭部及び上半部が6~14、中間部が15~20、末端部及び下半部が21である。打面調整の見られるものはなかった。頭部調整の見られるものは、1・3~14である。打面調整を行わず、頭部調整を顕著に行つて細石刃を剥離したことが推察される。1・2・21は比較的大型のものであり、細石刃石核の底面を取りこんでおり、末端部は肥厚した形状をしている。1~3・5・6・8・9・11は末端部が左右のどちらかにねじれている。微細剥離が見られるものは16・17である。

22~24は細石刃石核である。いずれも、細石刃と同様に、打面調整は行われておらず、頭部調整が顕著に行われていることが観察できる。22は厚みのある剥片を素材として、上面から2枚以上の細石刃を剥離している。23は上面を打面として表面上部から左面上部に順次打点を移動して、細石刃を剥離している。細石刃の最後の剥離面の左面上部に打点があり、裏面の大きな剥離面も左面上部に打点が観察されることから、左面上部を打点として細石刃を剥離した際に、細石刃石核の器体が破損したものと思われる。24は裏面に多方向からの石核整形が行われ、上面の節理面を打面として、表面に3枚以上の細石刃が剥離されている。

25・26は削器である。25は縦長剥片を素材として、裏面の両側縁に平坦な調整加工が施されている。26は厚みのある縦長剥片を素材として、裏面の右側縁に平坦な調整加工が施されている。27~31は楔形石器である。27~29は幅広の剥片を素材として、上下両端から両極剥離が行われている。30・31は縦長剥片を

第48表 第5 b文化層第22ブロック組成表

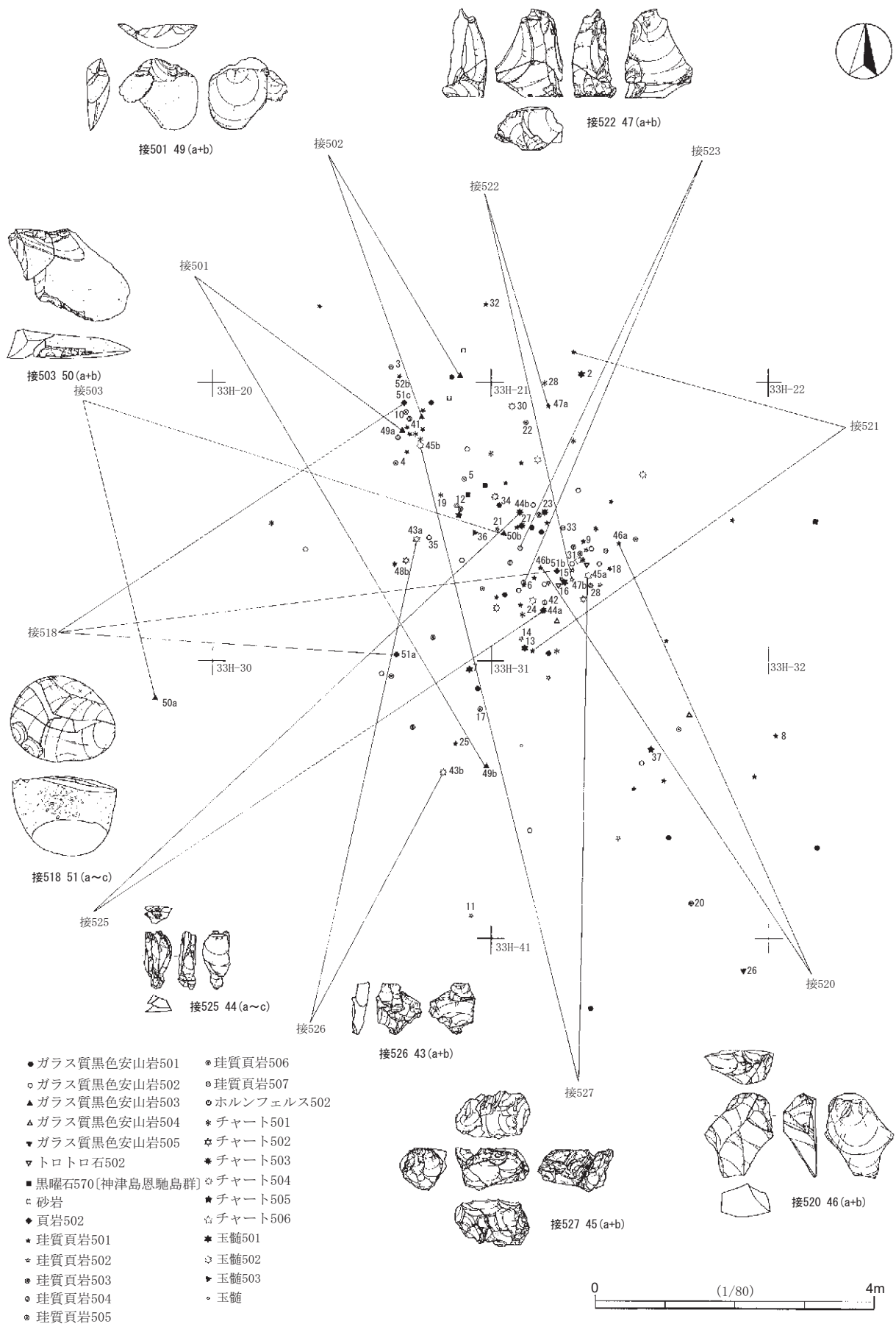
品名	母洲番号	黒曜石産地推定地	細石刃	細石刃石核	削器	楔形石核	二次加工のある剥片	微細剥離のある剥片	剥片	砕片	石核	数石	破片	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
黒曜石	570	神楽島忠誠島群				1			3					4	2.37	4.01	1.04
ガラス質黒色安山岩	501						1		11					12	7.10	33.87	8.75
	502						1		11	4				16	9.47	7.2	4.45
	503				1				4		1			6	3.55	40.39	10.43
	504								3					3	1.75	5.73	1.48
	505				1									1	0.59	11.61	3.00
ガラス質黒色安山岩点数合計					2		2		29	4	1			38	22.49	108.81	28.11
トロトロ石	502								1	1				2	1.18	0.98	0.26
砂													2	1.18	9.20	2.36	
頁岩	501								1					1	0.59	1.17	0.30
	502											3		3	1.78	76.11	19.66
頁岩点数合計									1			3		4	2.37	77.28	19.96
透輝頁岩	501		4	1	1		2		21	3				32	18.93	77.26	19.96
	502		7					1	6					14	8.28	23.22	6.00
	503		3	1					5	1				10	5.92	6.95	1.80
	504		4					1						5	2.98	2.22	0.57
	505		2						2	1				5	2.96	1.19	0.31
	506			1					1					2	1.18	0.87	0.24
	507								1					2	1.18	2.90	0.75
透輝頁岩点数合計			20	3	1		3	2	36	5				70	41.42	114.66	29.82
ホロンフェルス	502								6					6	3.55	13.12	3.39
チャート	501			1		2			4	4				12	7.10	14.64	3.76
	502				2			1	1	1				5	2.96	4.89	1.26
	503		2						3					5	2.96	2.73	0.71
	504				1				5	1				7	4.14	4.34	1.12
	505						2							2	1.18	3.35	0.87
	506				1									1	0.59	2.22	0.57
チャート点数合計			2	1		6	2	2	13	6				32	18.93	32.7	8.31
干	501		4											4	2.37	2.74	0.71
	502			1			1		1	2				5	2.96	13.11	3.39
	503						1							1	0.59	10.50	2.75
									1					1	0.59	0.25	0.06
干点数合計			4	1		2			2	2				11	6.51	26.99	6.95
全体点数合計			26	5	3	7	9	4	81	18	1	3	2	169	100.00	387.14	100.00
点数組成比(%)			15.38	2.96	1.78	4.14	5.33	2.37	53.85	10.65	0.59	1.78	1.18	100.00			

素材として、上下両端から両極剥離が行われている。32～37は二次加工のある剥片である。32～34は幅広の剥片を折断した後に、調整加工が施されている。35は横長剥片を素材として、左側面に調整加工が施されている。36は縦長剥片を素材として、右側縁に鋸歯状の調整加工が施されている。37は縦長剥片を素材として、下端部と右側縁に調整加工が施されている。38は微細剥離痕のある剥片である。右側縁下部に微細剥離が見られる。39～42は剥片である。39・40は頭部調整が顕著に行われている。41・42の背面は、多方向からの剥離面で構成されている。

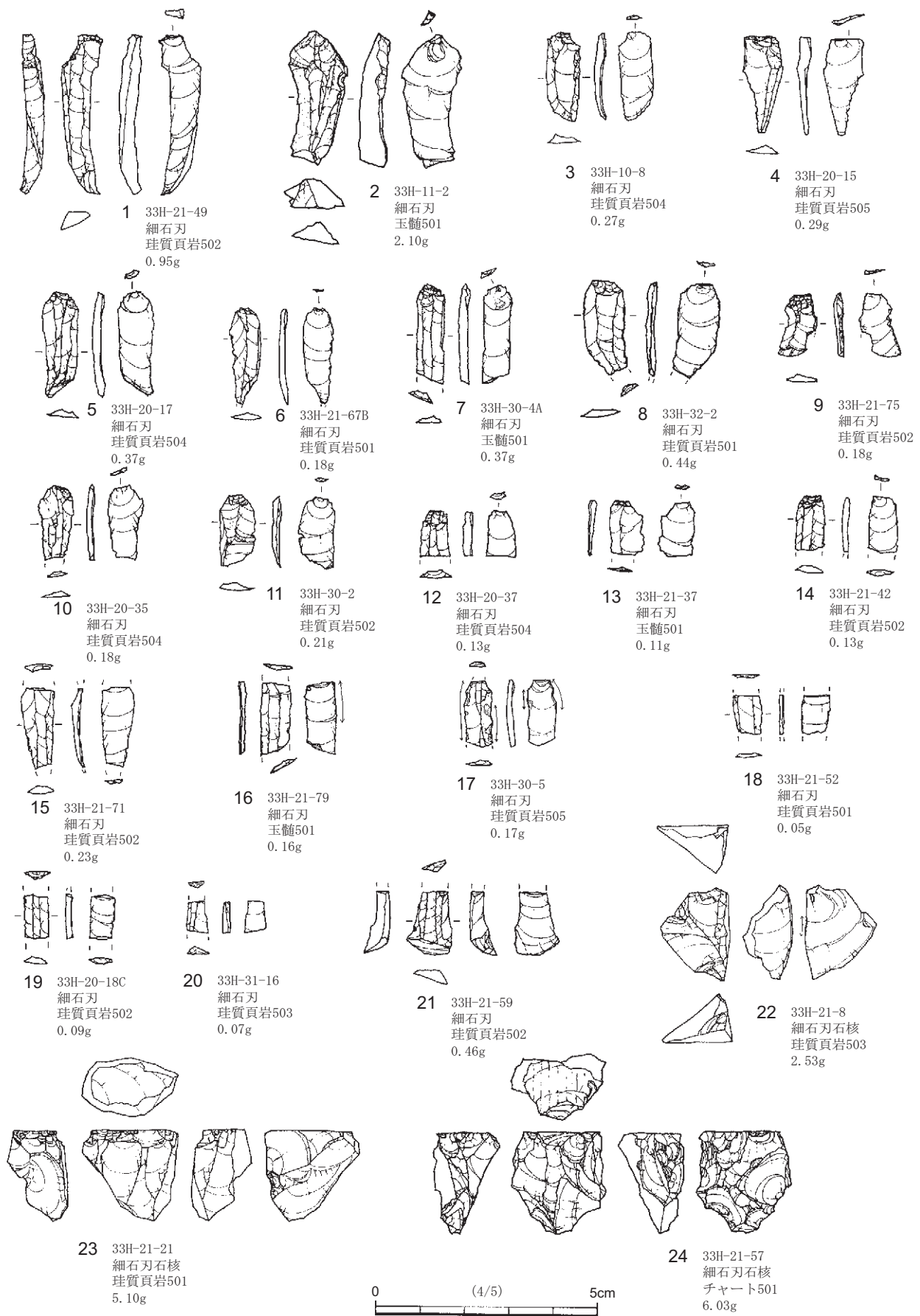
43～48は接合資料である。43(a+b)は多方向からの平坦な剥離が行われたことを示す接合資料である。細石刃石核の打面調整剥片の可能性はある。43aと43bは色調が大きく異なり、43aが白みを帯びていることから、火熱を受けている可能性がある。44(a～c)は、細石刃2点と剥片1点を連続して剥離したことを示す接合資料である。いずれも頭部調整が顕著に行われている。44cは幅広であるために剥片として分類したが、細石刃である44aと44bを剥離した後に、連続して剥離していることから、細石刃と分類することも可能である。45(a+b)は上面の分割面を打面として、表面から左面にかけて4枚以上の細石刃が剥離されている。上面左部を打面として、作業面の再生を行ったと思われる幅広の剥片45aを剥離している。45aは左側縁に調整加工が施されている。45bの細石刃石核は、45aを剥離した後に、45aの剥離面を打面として、2枚以上の細石刃が剥離されている。46(a+b)は、上面の平坦面から小型の剥片46aと厚みのある縦長剥片46bが剥離されている。47(a+b)は、両設打面の石核の稜上調整された剥片の接合資料である。右面下部を打面として幅広剥片47が剥離されている。次に、打面を180度転移して上面から幅広剥片47bが剥離されている。48(a+b)は右面上部を打面として幅広剥片48aを剥離した後に、48bは48aの剥離面を打面として上下両端から両極剥離が行われている。48bを楔形石器と分類したが、上面から3枚以上の細石刃を剥離している細石刃石核として分類することも可能である。49(a+b)は、上面の平坦面を打面として小型の剥片49aと縦長剥片49bが剥離されたことを示す接合資料である。50(a+b)も49(a+b)と同様に、上面の平坦打面から、小型の剥片50aと削器50bを剥離したことを示す接合資料である。50bは左側縁に調整加工が施されている。51(a～c)は楕円形礫を素材とした敲石である。表面・裏面・左面には敲打痕が見られる。特に、表面の敲打痕は顕著で、数条の線条痕が見られる。下部と上部は右面を打面として輪切り状に分割されている。上面は、裏面上部を打面として、51aと51bが剥離されている。敲石を転用した剥片と石核の接合資料と分類することも可能である。52(a+b)は上面の平坦面を打面として、幅広剥片52aと縦長剥片52bを剥離している。どちらの剥片も頭部調整が顕著に行われている。



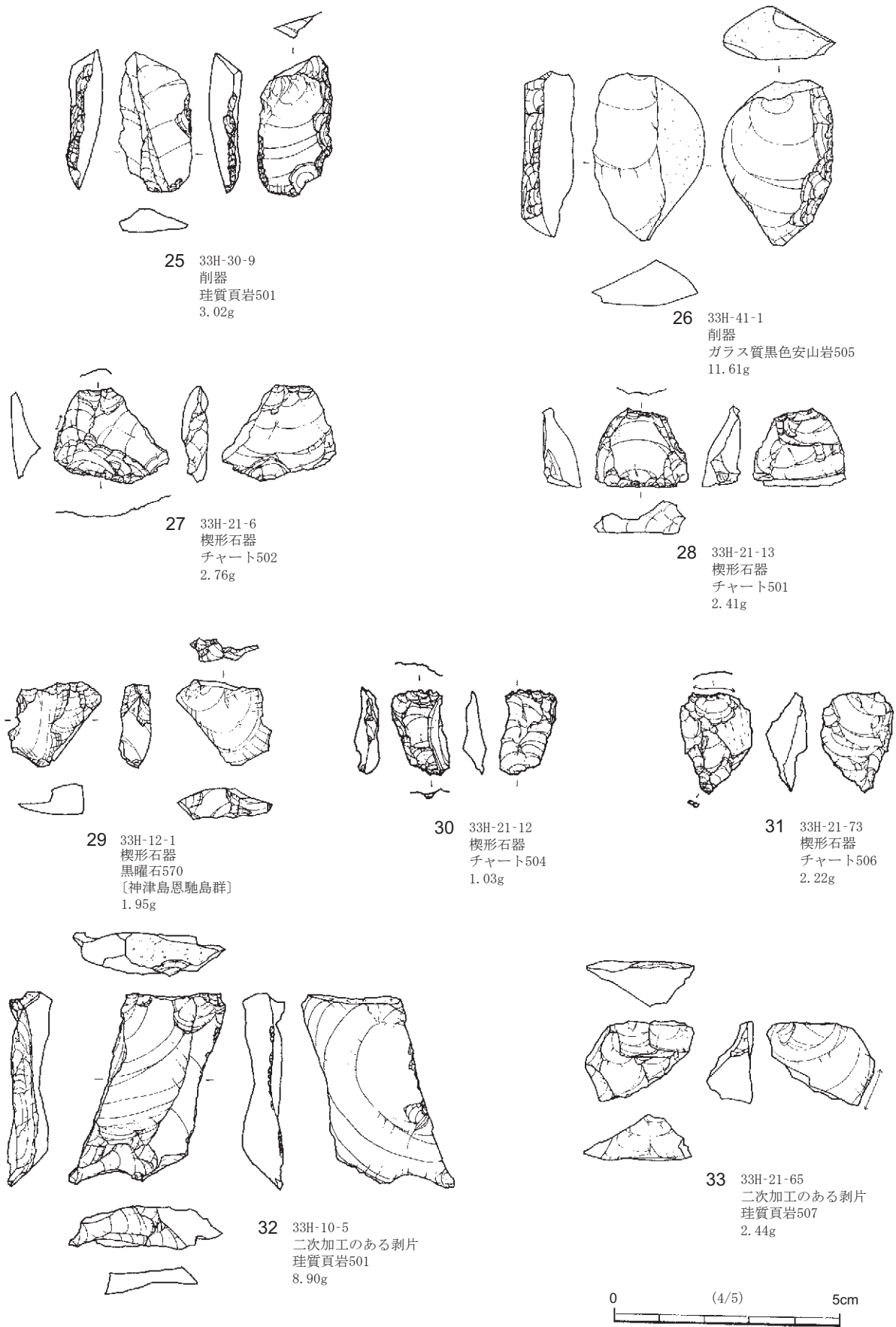
第95図 第5b文化層第22ブロック器種別分布



第96図 第5 b文化層第22ブロック母岩別分布



第97図 第5b文化層第22ブロック出土石器 (1)



25 33H-30-9
削器
珪質頁岩501
3.02g

26 33H-41-1
削器
ガラス質黒色安山岩505
11.61g

27 33H-21-6
楔形石器
チャート502
2.76g

28 33H-21-13
楔形石器
チャート501
2.41g

29 33H-12-1
楔形石器
黒曜石570
〔神津島恩馳島群〕
1.95g

30 33H-21-12
楔形石器
チャート504
1.03g

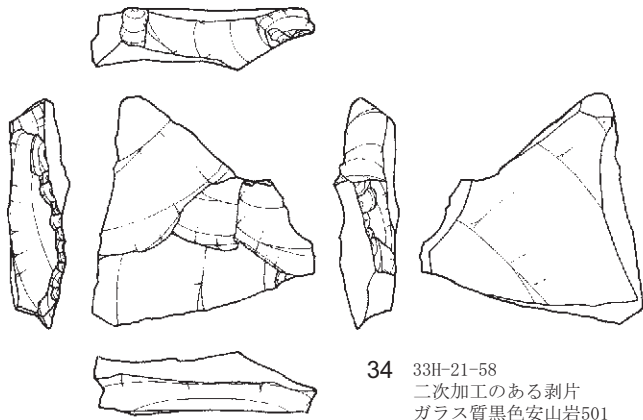
31 33H-21-73
楔形石器
チャート506
2.22g

32 33H-10-5
二次加工のある剥片
珪質頁岩501
8.90g

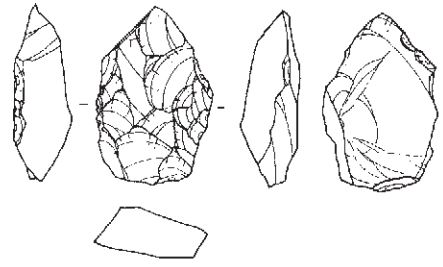
33 33H-21-65
二次加工のある剥片
珪質頁岩507
2.44g

0 (4/5) 5cm

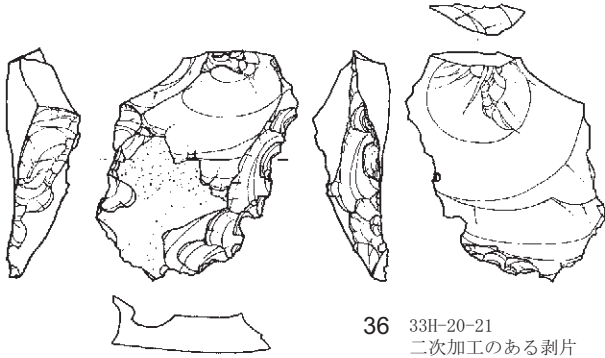
第98図 第5b文化層第22ブロック出土石器(2)



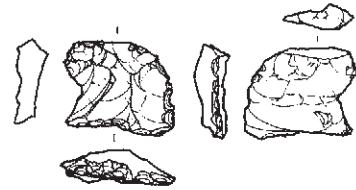
34 33H-21-58
二次加工のある剥片
ガラス質黒色安山岩501
14.38g



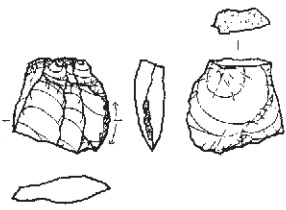
35 33H-20-20
二次加工のある剥片
ガラス質黒色安山岩502
5.71g



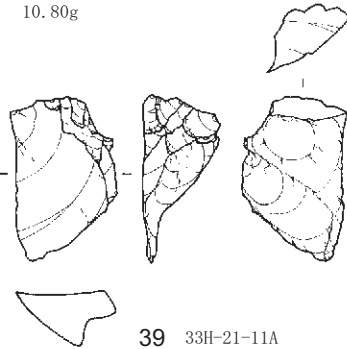
36 33H-20-21
二次加工のある剥片
玉髓503
10.80g



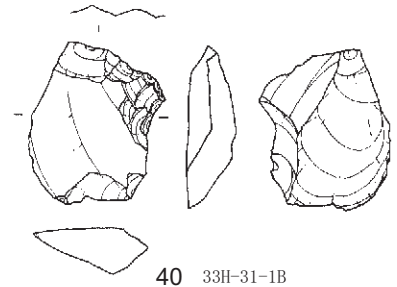
37 33H-31-7
二次加工のある剥片
チャート505
1.40g



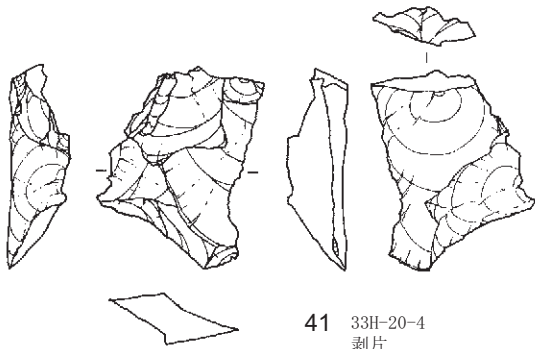
38 33H-21-47
微細剥離痕のある剥片
珪質頁岩504
1.27g



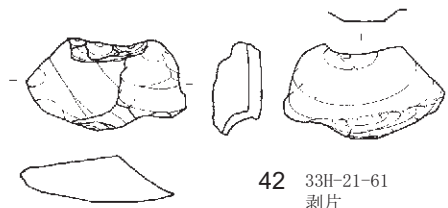
39 33H-21-11A
剥片
ガラス質黒色安山岩501
3.78g



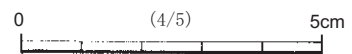
40 33H-31-1B
剥片
ガラス質黒色安山岩504
4.34g



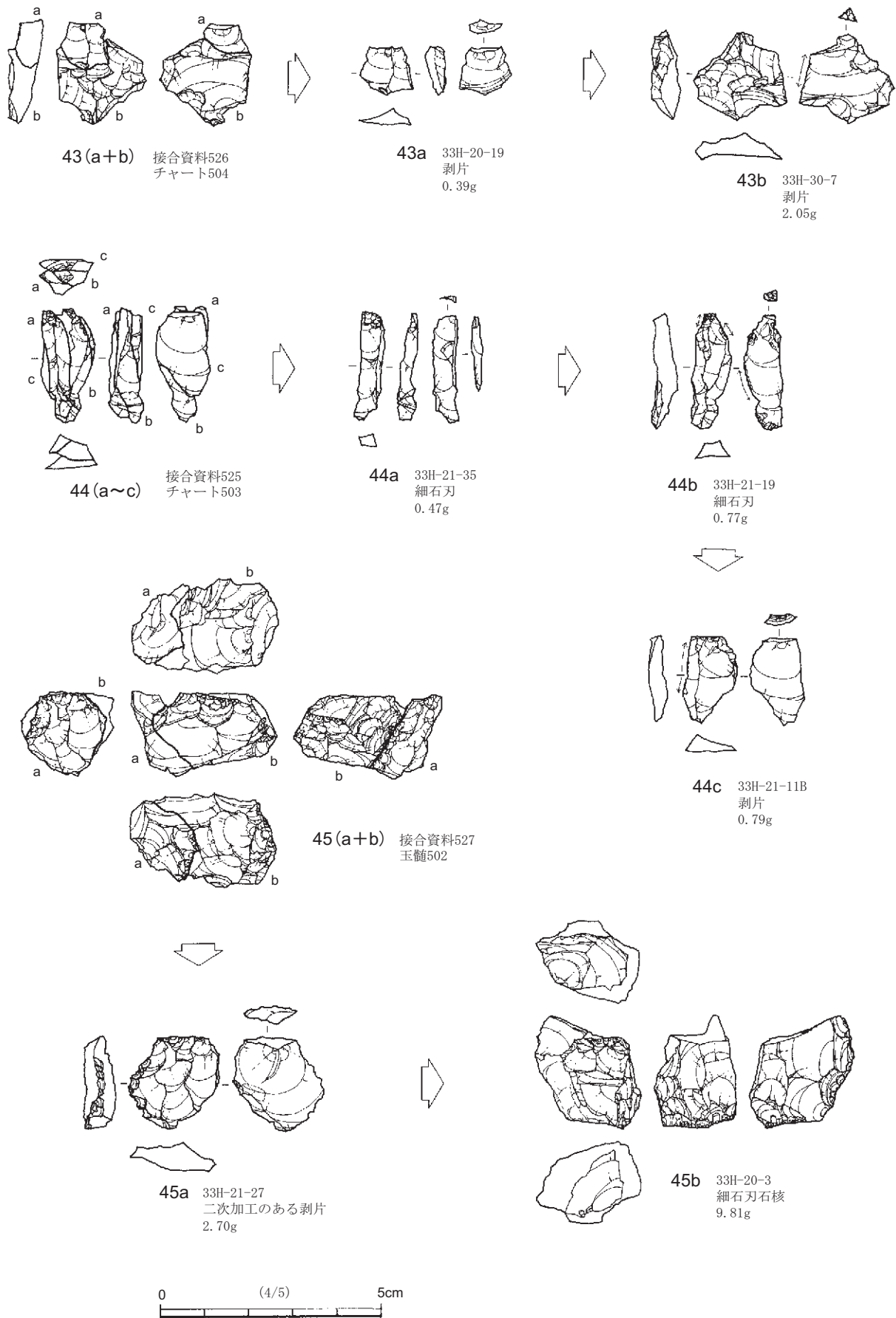
41 33H-20-4
剥片
珪質頁岩501
4.86g



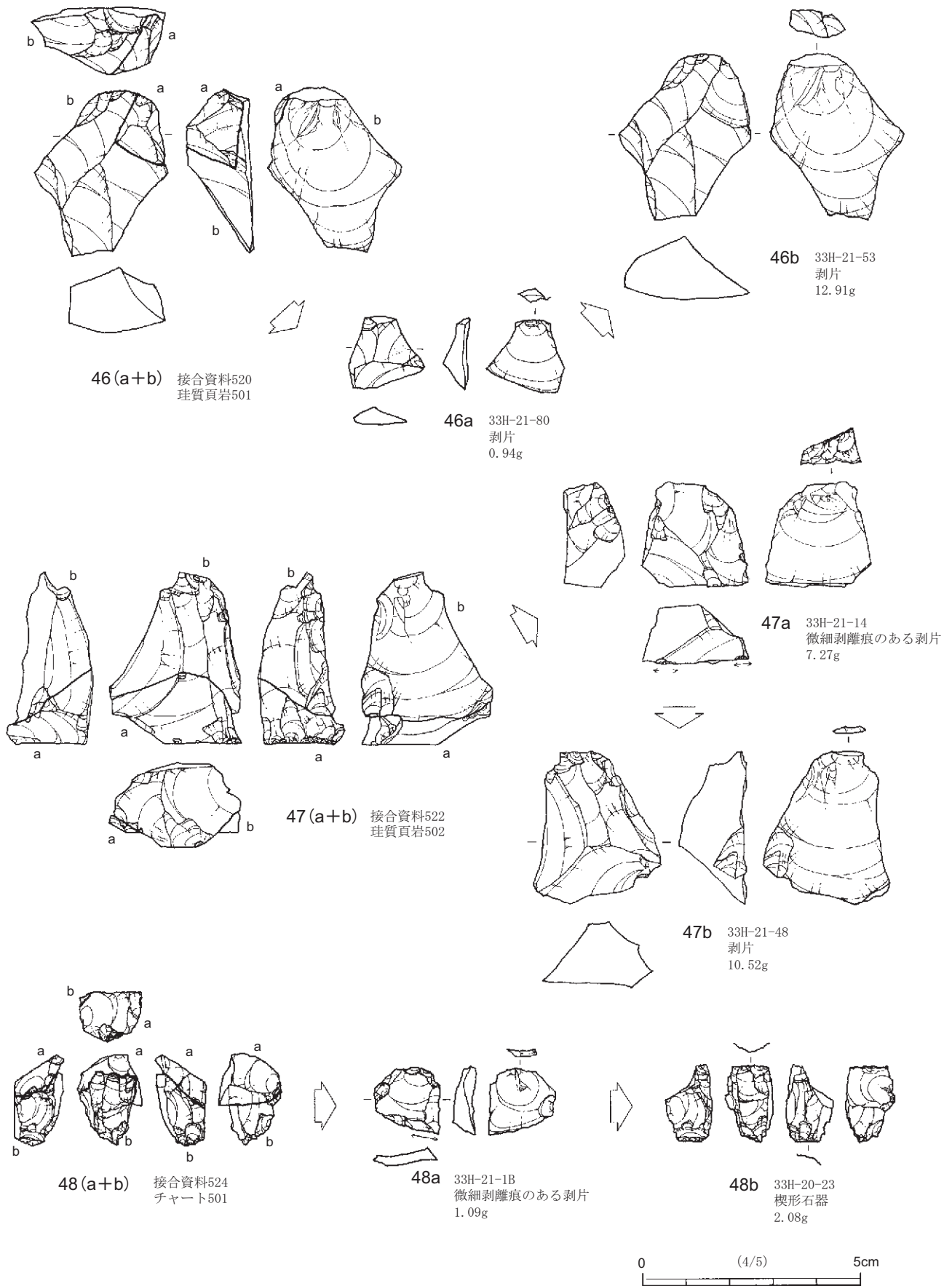
42 33H-21-61
剥片
ホルンフェルス502
3.08g



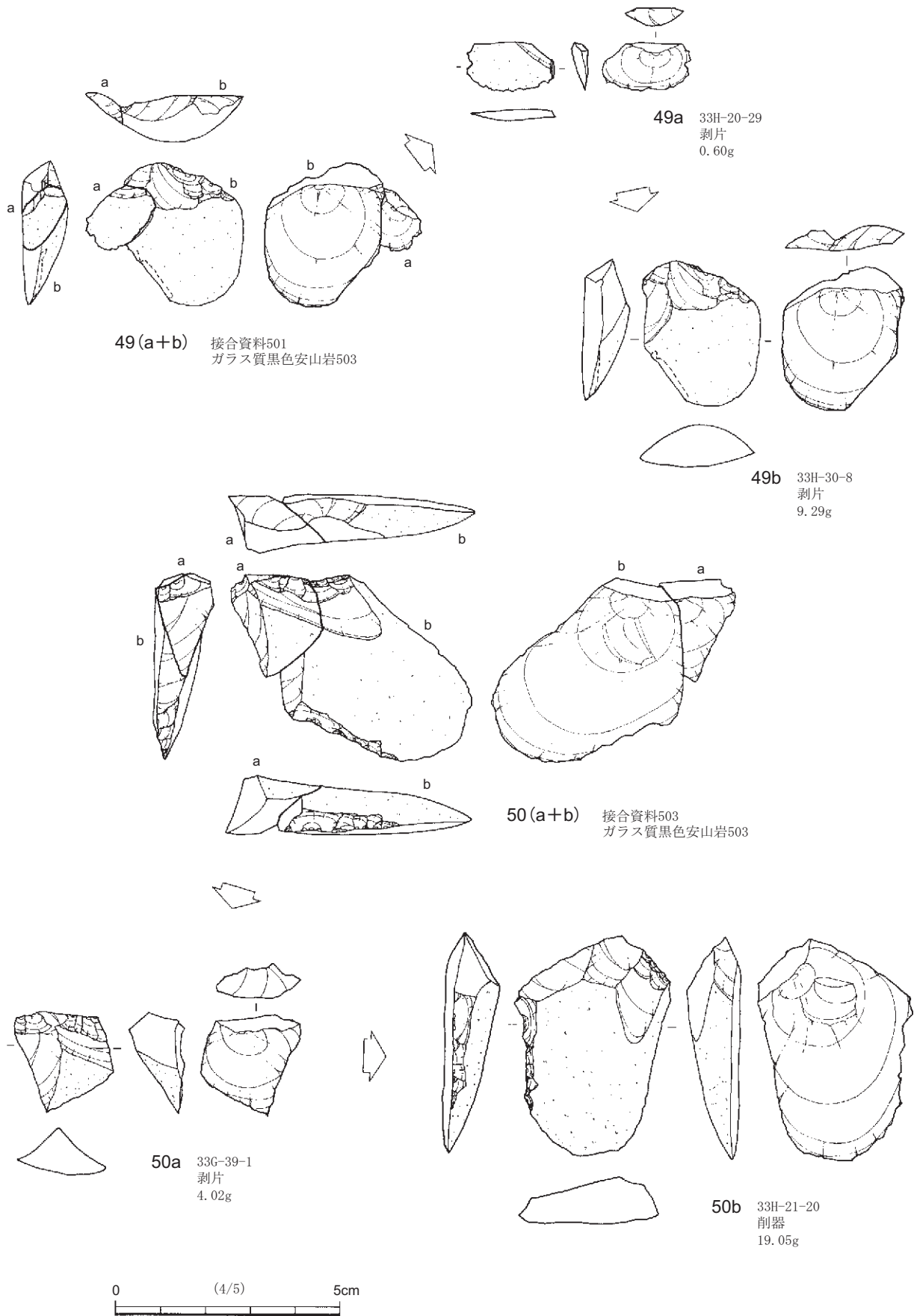
第99図 第5b文化層第22ブロック出土石器 (3)



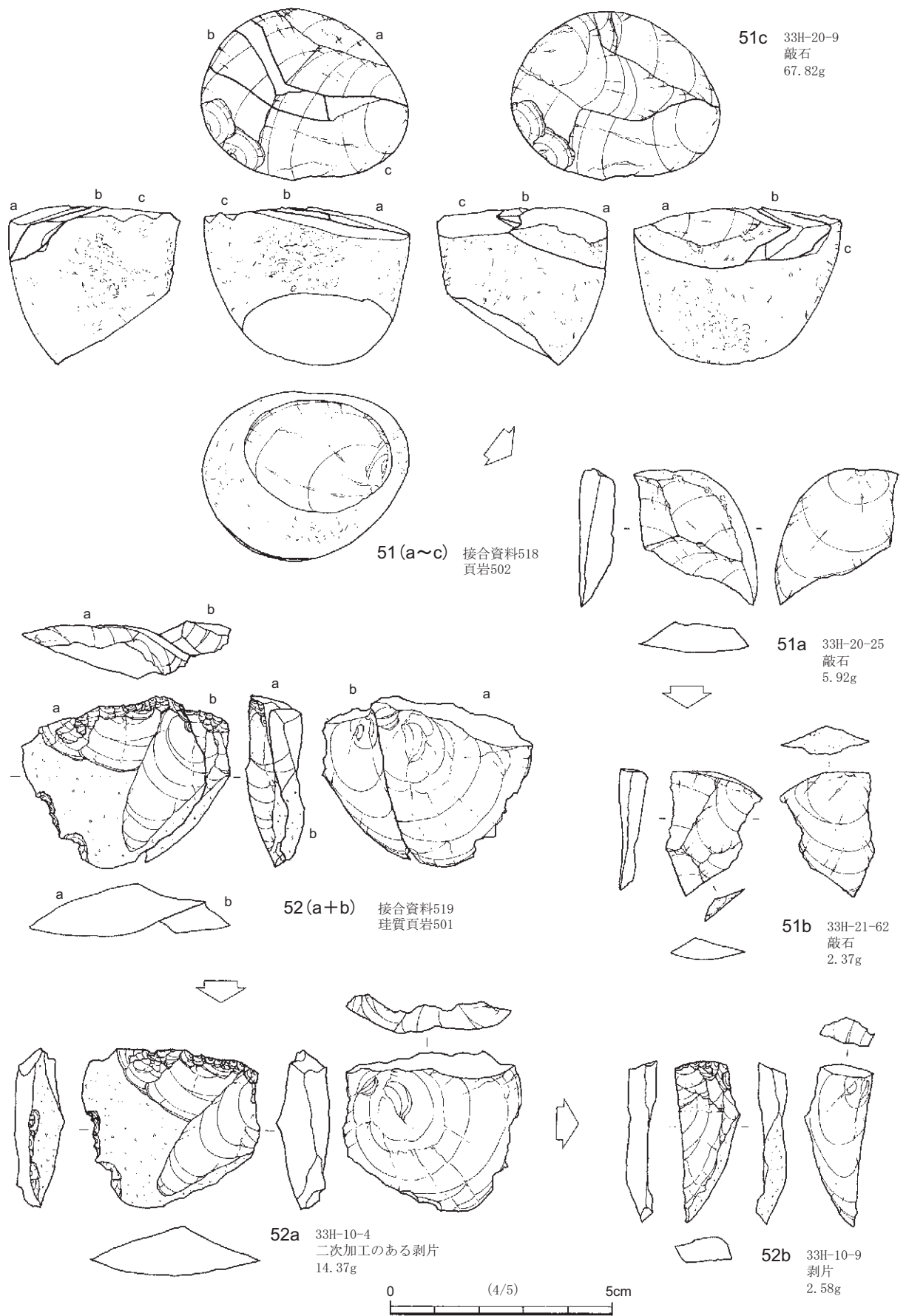
第100図 第5b文化層第22ブロック出土石器(4)



第101図 第5b文化層第22ブロック出土石器 (5)



第102図 第5 b文化層第22ブロック出土石器 (6)



第103図 第5b文化層第22ブロック出土石器(7)

8. 第5文化層単独出土石器 (第104図)

ブロックとして区分けすることができなかった石器のうち、第5文化層に帰属すると思われるものを第5文化層単独出土石器として扱うこととした。第5 a文化層第19ブロックの北西の29 I - 91グリッドから出土した1点の細石刃が該当する。神津島恩馳島群の黒曜石が用いられている。頭部が折れて、下半部が残存している。左側縁には微細剥離が見られる。南西部に近接して分布する第5 a文化層の石器群においても、神津島恩馳島群の黒曜石を用いた細石刃が多量に出土していることから、第5 a文化層に帰属する石器と思われる。



第104図 第5文化層単独出土石器

第8節 単独出土石器 (第105図、第49表、図版55)

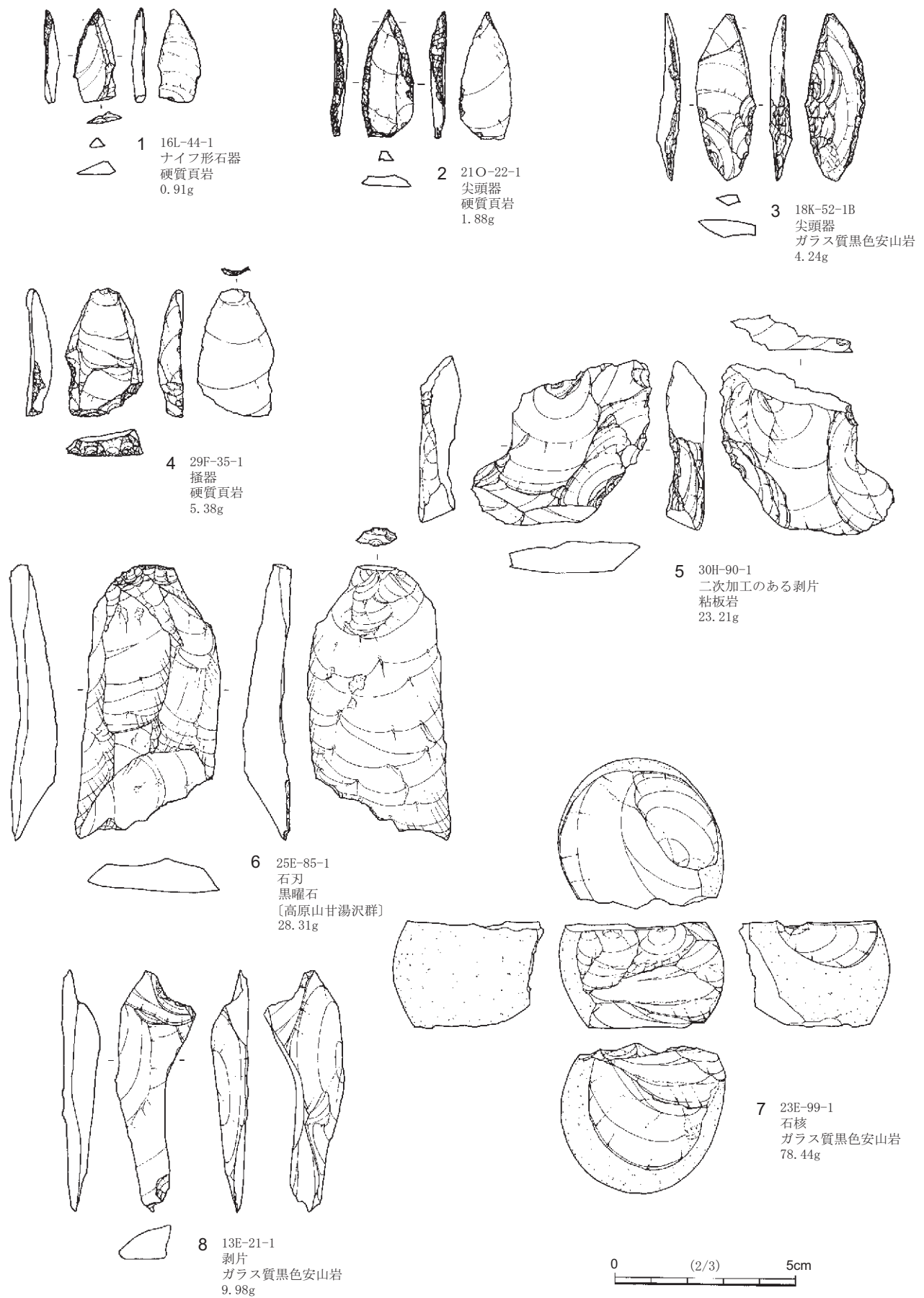
旧石器時代の石器で、いずれの文化層に帰属するか明確でなく、単独で出土したものを本節では単独出土石器としてまとめて取り扱うことにする。

尖頭器3点、ナイフ形石器1点、搔器1点、二次加工のある剥片2点、微細剥離痕のある剥片1点、石刃1点、剥片9点、碎片1点、石核1点の総計20点を単独出土石器として取り扱う。

1はナイフ形石器である。良質の硬質頁岩が用いられている。石刃を素材として、左側縁上部に刃潰し加工が施されている。下部は折れている。北東約100m離れて分布する第2文化層第2ブロックの1のナイフ形石器も良質の硬質頁岩を用いられており、形態的にも類似することから、本資料は第2文化層に帰属する可能性が高い。2・3は尖頭器である。2は良質の硬質頁岩が用いられている。左側縁と右側縁に急角度の調整加工が施されている。3は横長剥片を素材として、裏面左側縁は器体の奥まで入る平坦剥離が施され、左側縁は急角度の調整加工が施されている。2・3の尖頭器は、第4文化層より新しく、第5文化層よりも古い時期の石器と思われる。4は搔器である。良質の硬質頁岩が用いられ、石刃を素材として、末端部に急角度の調整加工が施されている。第2文化層に帰属する可能性もある。5は二次加工のある剥片である。幅広の剥片を素材として、右側縁下部に調整加工が施されている。6は大型の石刃である。高原山甘湯沢群の黒曜石が用いられている。末端部に微細剥離が見られる。帰属時期は1点のみの出土で明確ではないが、第3 a文化層の石器群では高原山甘湯沢群の黒曜石が多用されていたことから、第3 a文化層に帰属する可能性がある。7は石核である。上下両端を分割して、上面の分割面を打面として、幅広の剥片が剥離されている。8は剥片である。右面は折れている。

第49表 単独出土組成表

品名	黒曜石産地推定地	尖頭器	ナイフ形石器	搔器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	石刃	剥片	碎片	石核	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)
ガラス質黒色安山岩		1					3			1	5	25.00	104.92	39.29
安山岩							1				1	5.00	54.57	20.43
黒曜石	高原山甘湯沢群						1				1	5.00	28.31	10.80
	測定不可				1	1	1	1			4	20.00	5.55	2.08
黒曜石点数合計					1	1	1	1			5	25.00	33.86	12.88
硬質頁岩		2	1	1							4	20.00	10.05	3.76
粘板岩					1						1	5.00	23.21	8.69
ホルンフェルス							1				1	5.00	7.25	2.71
チャート								2			2	10.00	6.54	2.45
玉髄								1			1	5.00	28.88	9.98
全体点数合計		3	1	1	2	1	1	9		1	20	100.00	267.06	100.00
点数組成比(%)		15.00	5.00	5.00	10.00	5.00	5.00	45.00	5.00	5.00	100.00			



第105図 単独出土石器

第9節 黒曜石の産地推定結果について（第106図、第50～52表）

黒曜石の産地同定は、明治大学黒曜石研究センターの池谷信之氏に依頼した。

1. 分析方法

（1）判別図法 [図による産地推定]（第106図）

蛍光X線分析法により得られた各元素の蛍光X線強度から下記の4つの指標を計算する。

指標1 $Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$

指標2 $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$

指標3 $Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$

指標4 $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

指標1・2と指標3・4をそれぞれX軸とY軸とした2つの判別図を作成し、原産地黒曜石の散布域と遺跡出土黒曜石の照合によって産地を決定する。

（2）判別分析 [多変量解析による産地推定]（第50表）

判別図法による産地推定結果を検証するために、多変量解析の一手法である判別分析を行っている。判別分析では遺跡出土の資料1点ごとに、各原産地との距離（マハラノビス距離）を計算し、資料との距離が最も小さい産地がその資料の産地であると推定される。またそれぞれの産地とのマハラノビス距離から、資料が各原産地に属する確率も計算され、その数値が1に近いほど推定結果の信頼性が高くなる。

2. 分析結果（第106図、第50～52表）

（1）分析資料数とデータ解析方法について

飯積原山遺跡では、第52表のとおり670点の黒曜石が出土した。このうち、分析した資料数は60点である。分析対象としたものは、あらかじめ肉眼観察により母岩分類を行い、各母岩から数点ずつ分析を行った。60点の分析番号は、IH - XR001～IH - XR060（池谷氏分析番号は飯積原山1～飯積原山60）である。これらの分析推定結果は、元素の組成・産地の候補地を第50表、分析資料の遺物属性を第51表にそれぞれ掲載した。また、未分析資料の産地推定については、第50・51表の推定結果から判明した母岩の産地推定地と肉眼観察による母岩とを対応させて産地推定を行った。これらの成果をまとめたものが、第52表の文化層別産地推定組成である。

（2）文化層別産地推定結果（第52表）

①第3 a文化層（IX a層上部～VII層下部）：黒曜石が199点・4母岩で、すべて高原山甘湯沢群。

②第3 b文化層（IX a層上部～VII層下部）：黒曜石が4点・2母岩で、すべて高原山甘湯沢群。

③第3 e文化層（IX a層上部～VII層下部）：黒曜石が3点・1母岩で高原山甘湯沢群。

④第5 a文化層（III層上面）：黒曜石が454点・22母岩で、このうち、2つの母岩が測定不可であったが、その他の母岩は、すべて神津島恩馳島群であった。測定不可とされた2母岩について検討してみよう。黒曜石537は分析番号が飯積原山26の1点で、判別図ではわずかに神津島恩馳島群の散布域からはずれるものの、候補1が神津島恩馳島群で確率1が1.00であることから、神津島恩馳島群のものである可能性がある。黒曜石550（29点）は、微小遺物のために測定不可とされたものであるが、肉眼観察でも神津島恩馳島群と判定されたものと石質や色調が類似していた。この2母岩についても、神津島恩馳島群のものである可能性が高い。

⑤第5 b文化層(Ⅲ層上面)：黒曜石が4点・1母岩で、すべて神津島恩馳島群。

⑥単独出土：黒曜石が5点で、分析したものが1点のみで、高原山甘湯沢群のものである。

(3) 黒曜石の石材搬入の変遷

第3文化層は、すべて高原山甘湯沢群のものであった。IX a層～VII層下部に生活面をもつ石器群である。周辺遺跡では、北側に隣接して所在する飯積上台遺跡第1文化層¹⁾で、VII層中部に生活面をもち、高原山甘湯沢群のものであった。その他、鎌ヶ谷市五本松No.3遺跡第II a文化層²⁾、柏市原山遺跡第II b文化層³⁾、流山市大久保遺跡第1文化層⁴⁾、市野谷向山遺跡第2文化層⁴⁾など多くの石器群では、IX層～VII層にかけて高原山甘湯沢群の黒曜石が用いられている。

第5文化層は、すべて神津島恩馳島群のものであった。野辺山型の細石刃石核を有する石器群である。周辺遺跡で本段階の石器群のうち黒曜石産地推定分析が行われているものは少ない。神津島恩馳島群が用いられている石器群は、印西市荒野前遺跡第6文化層⁵⁾であり、わずかに1点のみ出土している。神津島恩馳島群以外の黒曜石が用いられている石器群としては、以下のものがあげられる。成田市十余三稲荷峰遺跡(空港No.67遺跡)第6文化層⁶⁾で分析した123点の内訳は、和田小深沢群118点(96%)、伊豆・箱根(天城柏峠群か箱根畑宿群)2点、諏訪星ヶ塔1点、高原山甘湯沢群2点であり、和田小深沢群が圧倒的多数を占めた。流山市野谷入台遺跡第5文化層⁷⁾で分析した8点の内訳は、蓼科エリア4点・和田エリア1点・高原山エリア3点であり、3つのエリアの黒曜石が用いられていた。一方、他地域では、相模野台地や長野県矢出川遺跡において「信州系+神津島系」という共存関係が認められる⁸⁾。飯積原山遺跡第5文化層では、神津島恩馳島群のみで構成され、ほかのエリアの黒曜石との共存関係が認められなかった。今後は、下総台地における分析資料の増加をはかり、周辺地域との関連を追及していく必要がある。

注1 新田浩三ほか 2013『酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書1-酒々井町飯積上台遺跡1-』(公財)千葉県教育振興財団

2 矢本節朗ほか 2005『新鎌ヶ谷地区埋蔵文化財調査報告書II-鎌ヶ谷市五本松No.3遺跡2』(財)千葉県文化財センター

3 新田浩三 2009『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書2-柏市原山遺跡(旧石器時代編)-』(財)千葉県教育振興財団

4 新田浩三ほか 2011『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書5-流山市大久保遺跡(下層)・市野谷向山遺跡(下層)・東初石六丁目第I遺跡(下層)・東初石六丁目第II遺跡・十太夫第II遺跡-』(財)千葉県教育振興財団

5 新田浩三 2012『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXV-印西市荒野前遺跡(下層)-』(財)千葉県教育振興財団

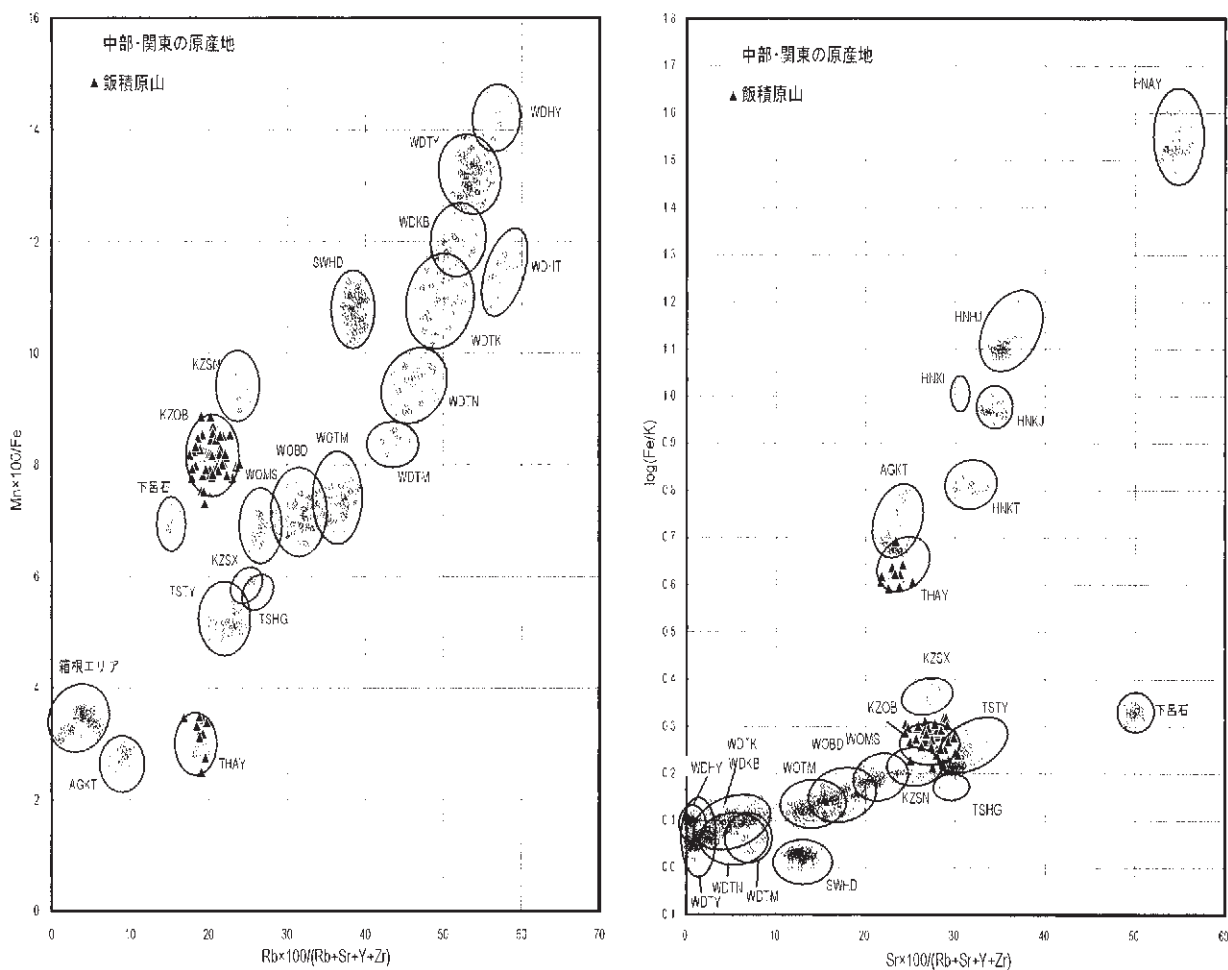
6 永塚俊司 2004『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XX-十余三稲荷峰遺跡(空港No.67遺跡)-』(財)千葉県文化財センター

7 新田浩三ほか 2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3-流山市市野谷入台遺跡-』(財)千葉県教育振興財団

8 堤 隆 2003『細石刃石器群の石材需給とセトルメントシステム』『日本の細石刃文化II-細石器文化研究の諸問題-』八ヶ岳旧石器研究グループ

エリア	判別群	記号	試料数	%
和田(WD)	フオーライト	WDHY	0	0.0
	鷹山	WDTY	0	0.0
	小深沢	WDKB	0	0.0
	土屋橋北	WDTK	0	0.0
	土屋橋西	WDTN	0	0.0
	土屋橋南	WDTM	0	0.0
和田(WO)	高松沢	WOTM	0	0.0
	フドウ沢	WOBD	0	0.0
	牧ヶ沢	WOMS	0	0.0
諏訪	星ヶ台	SWHD	0	0.0
蓼科	冷山	TSTY	0	0.0
	双子山	TSHG	0	0.0
天城	柏峠	AGKT	0	0.0
	畑宿	HNHJ	0	0.0
箱根	鍛冶屋	HNKJ	0	0.0
	黒岩橋	HNKI	0	0.0
	上多賀	HNKT	0	0.0
	芦ノ湯	HNAY	0	0.0
	恩馳島	KZOB	48	81.4
神津島	砂糠崎	KZSN	0	0.0
	砂糠崎X	KZSX	0	0.0
高原山	甘湯沢	THAY	11	18.6
合計			59	100.0
不可			1	
総計			60	

飯積原山遺跡出土黒曜石産地組成



飯積原山遺跡出土黒曜石産地判別図

第106図 飯積原山遺跡黒曜石産地推定結果

第50表 判別図法・判別分析による推定結果

No	分析番号 (池谷氏)	推定産地	判別図 判別群	判別分析						Rb%	Mn/Fe	Sr%	Fe/K
				候補1	距離1	確率1	候補2	距離2	確率2				
1	飯積原山1	THAY	THAY	THAY	19.32	1.00	AGKT	67.85	0.00	16.48	3.52	23.37	4.93
2	飯積原山2	THAY	THAY	THAY	7.52	1.00	AGKT	107.73	0.00	18.92	3.22	21.11	3.98
3	飯積原山3	THAY	THAY	THAY	6.21	1.00	AGKT	123.32	0.00	19.32	3.45	23.18	4.30
4	飯積原山4	THAY	THAY	THAY	5.62	1.00	TSTY	132.73	0.00	19.77	3.42	23.86	4.19
5	飯積原山5	THAY	THAY	THAY	5.20	1.00	AGKT	124.98	0.00	19.72	3.39	21.78	4.15
6	飯積原山6	THAY	THAY	THAY	2.89	1.00	AGKT	132.79	0.00	19.26	3.18	23.79	3.95
7	飯積原山7	THAY	THAY	THAY	3.61	1.00	AGKT	132.73	0.00	18.44	3.33	24.14	4.39
8	飯積原山8	THAY	THAY	THAY	5.30	1.00	AGKT	147.79	0.00	19.58	2.76	22.56	3.92
9	飯積原山9	THAY	THAY	THAY	5.03	1.00	AGKT	123.01	0.00	18.79	3.49	22.95	4.34
10	飯積原山10	THAY	THAY	THAY	9.20	1.00	AGKT	125.14	0.00	19.40	2.40	23.27	4.20
11	飯積原山11	THAY	THAY	THAY	5.85	1.00	TSTY	141.21	0.00	18.83	3.13	25.25	4.05
12	飯積原山12	KZOB	KZOB	KZOB	16.87	1.00	KZSN	40.00	0.00	23.01	7.77	28.73	2.09
13	飯積原山13	KZOB	KZOB	KZOB	20.25	0.99	KZSN	27.68	0.01	19.04	8.92	25.01	1.69
14	飯積原山14	KZOB	KZOB	KZOB	11.71	1.00	KZSN	24.35	0.00	19.20	8.54	27.95	1.79
15	飯積原山15	KZOB	KZOB	KZOB	8.28	1.00	KZSN	37.06	0.00	20.71	7.92	29.98	1.75
16	飯積原山16	KZOB	KZOB	KZOB	27.64	0.99	KZSN	33.89	0.01	24.50	7.97	28.57	1.99
17	飯積原山17	KZOB	KZOB	KZOB	6.42	1.00	KZSN	34.98	0.00	18.14	8.24	27.43	1.89
18	飯積原山18	KZOB	KZOB	KZOB	3.55	1.00	KZSN	38.67	0.00	18.35	7.98	28.00	1.90
19	飯積原山19	KZOB	KZOB	KZOB	11.77	1.00	KZSN	25.38	0.00	23.48	7.97	27.47	1.63
20	飯積原山20	KZOB	KZOB	KZOB	3.19	1.00	KZSN	23.29	0.00	21.91	8.04	27.21	1.86
21	飯積原山21	KZOB	KZOB	KZOB	0.87	1.00	KZSN	23.07	0.00	20.90	8.13	26.86	1.86
22	飯積原山22	KZOB	KZOB	KZOB	7.89	1.00	KZSN	33.81	0.00	18.63	8.48	30.31	1.74
23	飯積原山23	KZOB	KZOB	KZOB	17.66	1.00	KZSN	42.57	0.00	20.27	8.45	28.65	1.96
24	飯積原山24	KZOB	KZOB	KZOB	3.52	1.00	KZSN	12.29	0.00	20.56	8.70	27.38	1.96
25	飯積原山25	KZOB	KZOB	KZOB	5.87	1.00	KZSN	28.38	0.00	18.90	8.28	28.83	1.79
26	飯積原山26	不可	不可	KZOB	17.99	1.00	WOMS	49.03	0.00	21.01	7.56	27.22	2.89
27	飯積原山27	KZOB	KZOB	KZOB	4.70	1.00	KZSN	32.40	0.00	20.05	8.20	27.33	1.93
28	飯積原山28	KZOB	KZOB	KZOB	4.70	1.00	KZSN	32.40	0.00	20.05	8.20	27.33	1.93
29	飯積原山29	KZOB	KZOB	KZOB	12.39	0.99	KZSN	19.53	0.01	23.90	8.02	24.97	1.85
30	飯積原山30	KZOB	KZOB	KZOB	5.98	1.00	KZSN	51.63	0.00	19.07	7.54	28.82	1.91
31	飯積原山31	KZOB	KZOB	KZOB	13.54	1.00	KZSN	23.02	0.00	22.22	8.14	24.44	2.03
32	飯積原山32	KZOB	KZOB	KZOB	3.20	1.00	KZSN	16.02	0.00	21.48	8.30	25.74	1.99
33	飯積原山33	KZOB	KZOB	KZOB	9.68	1.00	KZSN	48.25	0.00	20.10	7.80	28.97	2.09
34	飯積原山34	KZOB	KZOB	KZOB	20.09	1.00	KZSN	63.26	0.00	19.48	7.31	25.64	1.88
35	飯積原山35	KZOB	KZOB	KZOB	12.07	1.00	KZSN	42.68	0.00	19.25	7.81	26.63	1.88
36	飯積原山36	KZOB	KZOB	KZOB	12.13	1.00	KZSN	30.32	0.00	22.30	7.81	24.77	1.98
37	飯積原山37	KZOB	KZOB	KZOB	3.38	1.00	KZSN	26.77	0.00	20.39	8.18	25.87	2.00
38	飯積原山38	KZOB	KZOB	KZOB	5.92	1.00	KZSN	27.80	0.00	21.39	8.20	27.59	1.98
39	飯積原山39	KZOB	KZOB	KZOB	20.92	1.00	KZSN	37.58	0.00	21.05	7.97	24.45	1.94
40	飯積原山40	KZOB	KZOB	KZOB	11.42	1.00	KZSN	51.19	0.00	17.86	7.77	27.55	1.95
41	飯積原山41	KZOB	KZOB	KZOB	14.14	1.00	KZSN	33.55	0.00	20.53	8.57	27.93	1.94
42	飯積原山42	KZOB	KZOB	KZOB	13.72	0.99	KZSN	21.90	0.01	22.72	8.54	27.40	1.88
43	飯積原山43	KZOB	KZOB	KZOB	7.01	0.98	KZSN	12.63	0.02	20.23	8.91	27.94	1.96
44	飯積原山44	KZOB	KZOB	KZOB	11.70	1.00	KZSN	57.51	0.00	19.37	7.52	26.23	1.81
45	飯積原山45	KZOB	KZOB	KZOB	13.39	1.00	KZSN	27.44	0.00	21.87	8.51	26.61	1.97
46	飯積原山46	KZOB	KZOB	KZOB	8.78	1.00	KZSN	31.10	0.00	21.72	8.01	29.23	1.86
47	飯積原山47	KZOB	KZOB	KZOB	4.67	1.00	KZSN	43.26	0.00	17.91	7.93	28.44	1.96
48	飯積原山48	KZOB	KZOB	KZOB	14.39	1.00	KZSN	51.58	0.00	20.16	7.92	27.13	1.97
49	飯積原山49	KZOB	KZOB	KZOB	5.62	1.00	KZSN	22.88	0.00	22.11	8.19	27.32	1.81
50	飯積原山50	KZOB	KZOB	KZOB	19.63	1.00	KZSN	60.54	0.00	17.59	8.18	26.63	2.05
51	飯積原山51	KZOB	KZOB	KZOB	4.90	1.00	KZSN	27.13	0.00	21.21	7.90	27.90	1.74
52	飯積原山52	KZOB	KZOB	KZOB	9.61	1.00	KZSN	37.49	0.00	20.34	8.21	29.09	2.01
53	飯積原山53	KZOB	KZOB	KZOB	20.27	1.00	KZSN	42.08	0.00	20.93	8.46	28.33	1.79
54	飯積原山54	KZOB	KZOB	KZOB	6.84	0.98	KZSN	12.92	0.02	21.46	8.53	28.37	1.79
55	飯積原山55	KZOB	KZOB	KZOB	10.54	1.00	KZSN	33.73	0.00	18.33	8.33	29.85	1.89
56	飯積原山56	KZOB	KZOB	KZOB	9.31	1.00	KZSN	35.95	0.00	20.39	7.78	27.00	1.98
57	飯積原山57	KZOB	KZOB	KZOB	2.94	1.00	KZSN	33.12	0.00	20.52	7.84	28.60	1.67
58	飯積原山58	KZOB	KZOB	KZOB	4.89	1.00	KZSN	33.20	0.00	19.61	7.92	27.74	2.02
59	飯積原山59	KZOB	KZOB	KZOB	1.54	1.00	KZSN	25.75	0.00	20.44	8.17	26.76	1.93
60	飯積原山60	KZOB	KZOB	KZOB	18.27	0.71	HNKT	19.85	0.29	4.37	3.93	35.38	7.20

第51表 判別図法・判別分析からの最終結果

黒曜石 分析番号	分析番号 (池谷氏)	文化層	ブ ロ ック	グ リ ッド	遺物番 号	枝 記	挿 図 番 号	黒曜石 母岩番号	器種	重量	接合 番号	黒曜石測定結果 (池谷氏分析結果)
IH-XR001	飯積原山1	3a	06	11K-55	17		06-07b	303	石核	7.20	327	高原山甘湯沢群
IH-XR002	飯積原山2	3a	06	11K-56	3		06-08c	304	石核	20.04	329	高原山甘湯沢群
IH-XR003	飯積原山3	3a	06	11K-65	16		06-03	302	二次加工のある剥片	27.45		高原山甘湯沢群
IH-XR004	飯積原山4	3a	06	11K-65	49		06-04	303	二次加工のある剥片	15.55		高原山甘湯沢群
IH-XR005	飯積原山5	3a	08	11K-76	23		08-06a	303	微細刺離痕のある剥片	7.96	325	高原山甘湯沢群
IH-XR006	飯積原山6	3a	07	11K-77	15		07-07a	302	削器	10.16	316	高原山甘湯沢群
IH-XR007	飯積原山7	3a	09	11K-85	18		10-1b	301	二次加工のある剥片	15.33	304	高原山甘湯沢群
IH-XR008	飯積原山8	3e	16	18E-06	8		16-03	307	剥片	3.83		高原山甘湯沢群
IH-XR009	飯積原山9	3b	11	19R-27	2			305	二次加工のある剥片	4.45	331	高原山甘湯沢群
IH-XR010	飯積原山10	3b	11	19R-37	5	B	11-05	306	石核	15.49		高原山甘湯沢群
IH-XR011	飯積原山11	単独	単独	25E-85	1		06		石刃	28.31		高原山甘湯沢群
IH-XR012	飯積原山12	5	単独	29I-91	1		01	517	細石刃	0.08		神津島恩馳島群
IH-XR013	飯積原山13	5a	19	30I-31	5		19-03	503	細石刃石核	2.28		神津島恩馳島群
IH-XR014	飯積原山14	5a	19	30I-31	9		19-09c	521	細石刃石核	4.94	513	神津島恩馳島群
IH-XR015	飯積原山15	5a	19	30I-31	24		19-07	511	微細刺離痕のある剥片	1.88		神津島恩馳島群
IH-XR016	飯積原山16	5a	19	30I-31	27		19-01	513	細石刃	0.08		神津島恩馳島群
IH-XR017	飯積原山17	5a	19	30I-32	2		19-04	515	細石刃石核	3.74		神津島恩馳島群
IH-XR018	飯積原山18	5a	19	30I-40	2		19-05	531	細石刃石核	3.82		神津島恩馳島群
IH-XR019	飯積原山19	5a	19	30I-41	3	A	19-14	531	剥片	1.50		神津島恩馳島群
IH-XR020	飯積原山20	5a	19	30I-41	5		19-06	512	細石刃石核	4.96		神津島恩馳島群
IH-XR021	飯積原山21	5a	19	30I-41	6		19-09b	521	細石刃石核	3.73	513	神津島恩馳島群
IH-XR022	飯積原山22	5a	20	30I-41	16		20-081	511	二次加工のある剥片	2.31		神津島恩馳島群
IH-XR023	飯積原山23	5a	19	30I-42	4		19-10b	533	細石刃石核	3.32	516	神津島恩馳島群
IH-XR024	飯積原山24	5a	20	30I-50	3	A	20-096a	501	剥片	3.61	504	神津島恩馳島群
IH-XR025	飯積原山25	5a	20	30I-50	3	D	20-043	504	細石刃	0.31		神津島恩馳島群
IH-XR026	飯積原山26	5a	20	30I-50	54		20-067	537	細石刃石核	2.08		測定不可
IH-XR027	飯積原山27	5a	20	30I-50	69		20-075	536	剥片	0.91		神津島恩馳島群
IH-XR028	飯積原山28	5a	20	30I-50	76		20-070	515	細石刃石核	9.49		神津島恩馳島群
IH-XR029	飯積原山29	5a	20	30I-50	108		20-014	502	細石刃	0.25		神津島恩馳島群
IH-XR030	飯積原山30	5a	20	30I-50	113		20-068	512	細石刃石核	3.21		神津島恩馳島群
IH-XR031	飯積原山31	5a	20	30I-51	2		20-090	521	剥片	11.19		神津島恩馳島群
IH-XR032	飯積原山32	5a	20	30I-51	3	C	20-011	501	細石刃	0.46		神津島恩馳島群
IH-XR033	飯積原山33	5a	20	30I-51	3	G	20-059	516	細石刃	0.21		神津島恩馳島群
IH-XR034	飯積原山34	5a	20	30I-51	3	J	20-074	538	剥片	0.42		神津島恩馳島群
IH-XR035	飯積原山35	5a	20	30I-51	10		19-08b	521	細石刃石核	6.45	512	神津島恩馳島群
IH-XR036	飯積原山36	5a	20	30I-51	11		20-047	535	細石刃	0.19		神津島恩馳島群
IH-XR037	飯積原山37	5a	20	30I-51	21		20-087	522	剥片	1.33		神津島恩馳島群
IH-XR038	飯積原山38	5a	20	30I-51	31		20-003	522	細石刃	0.26		神津島恩馳島群
IH-XR039	飯積原山39	5a	20	30I-51	77		20-089	514	剥片	2.70		神津島恩馳島群
IH-XR040	飯積原山40	5a	20	30I-51	79		20-072	532	細石刃石核原型	10.70		神津島恩馳島群
IH-XR041	飯積原山41	5a	20	30I-51	103		20-013	511	細石刃	0.52		神津島恩馳島群
IH-XR042	飯積原山42	5a	20	30I-51	106		20-076	521	剥片	1.55		神津島恩馳島群
IH-XR043	飯積原山43	5a	20	30I-51	114		20-086	511	剥片	1.97		神津島恩馳島群
IH-XR044	飯積原山44	5a	20	30I-51	116		20-099b	511	微細刺離痕のある剥片	6.50	510	神津島恩馳島群
IH-XR045	飯積原山45	5a	20	30I-51	148		20-012	501	細石刃	0.39		神津島恩馳島群
IH-XR046	飯積原山46	5a	20	30I-51	163		20-028	531	細石刃	0.17		神津島恩馳島群
IH-XR047	飯積原山47	5a	21	30I-60	2		21-13	503	細石刃	0.61		神津島恩馳島群
IH-XR048	飯積原山48	5a	21	30I-60	7		21-26	504	剥片	2.25		神津島恩馳島群
IH-XR049	飯積原山49	5a	21	30I-60	14		21-24b	501	細石刃	0.82	506	神津島恩馳島群
IH-XR050	飯積原山50	5a	21	30I-60	24		21-21	503	剥片	3.84		神津島恩馳島群
IH-XR051	飯積原山51	5a	21	30I-60	25		21-22	534	剥片	2.02		神津島恩馳島群
IH-XR052	飯積原山52	5a	21	30I-60	39		21-17	503	細石刃石核	7.24		神津島恩馳島群
IH-XR053	飯積原山53	5a	21	30I-60	42		21-18	531	細石刃石核	6.34		神津島恩馳島群
IH-XR054	飯積原山54	5a	21	30I-60	45		21-02	501	二次加工のある剥片	4.69		神津島恩馳島群
IH-XR055	飯積原山55	5a	21	30I-60	47		21-05	540	細石刃	1.60		神津島恩馳島群
IH-XR056	飯積原山56	5a	21	30I-60	48		21-07	502	細石刃	0.21		神津島恩馳島群
IH-XR057	飯積原山57	5a	21	30I-60	55		20-097a	502	細石刃	0.78	508	神津島恩馳島群
IH-XR058	飯積原山58	5a	20	30I-61	4		20-084	535	微細刺離痕のある剥片	0.79		神津島恩馳島群
IH-XR059	飯積原山59	5b	22	33H-12	1		22-29	570	楔形石器	1.95		神津島恩馳島群
IH-XR060	飯積原山60	5b	22	33H-20	1			570	剥片	1.10		神津島恩馳島群

第52表 黒曜石の文化層別産地推定組成表

文化層	推定産地エリア	推定産地群	母岩番号	点数	点数比(%)	重量(g)	重量比(%)
3a	高 原 山	甘 湯 沢 群	301	102	51.26	172.33	32.57
			302	56	28.14	211.58	39.99
			303	35	17.59	100.14	18.93
			304	6	3.02	45.05	8.51
第 3 a 文 化 層 合 計				199	100.00	529.10	100.00

3b	高 原 山	甘 湯 沢 群	305	3	75.00	9.12	37.06
			306	1	25.00	15.49	62.94
高 原 山 小 計				4	100.00	24.61	100.00

3e	高 原 山	甘 湯 沢 群	307	3	100.00	9.40	100.00
----	-------	---------	-----	---	--------	------	--------

第 3 文 化 層 合 計				206		563.11	
---------------	--	--	--	-----	--	--------	--

文化層	推定産地エリア	推定産地群	母岩番号	点数	点数比(%)	重量(g)	重量比(%)
5a	神 津 島	恩 馳 島 群	501	68	16.04	20.49	8.78
			502	56	13.21	5.68	2.43
			503	36	8.49	23.46	10.05
			504	18	4.25	8.37	3.59
			511	45	10.61	27.39	11.74
			512	3	0.71	13.80	5.91
			513	29	6.84	1.68	0.72
			514	2	0.47	5.50	2.36
			515	3	0.71	16.63	7.13
			516	12	2.83	0.92	0.39
			521	71	16.75	55.90	23.96
			522	25	5.90	8.83	3.78
			531	30	7.08	18.10	7.76
			532	2	0.47	11.64	4.99
			533	3	0.71	6.08	2.61
			534	1	0.24	2.02	0.87
			535	8	1.89	2.64	1.13
			536	2	0.47	1.01	0.43
538	3	0.71	0.95	0.41			
540	7	1.65	2.23	0.96			
神 津 島 恩 馳 島 群 小 計				424	100.00	233.32	100.00
推 定 不 可				30		2.57	
第 5a 文 化 層 合 計				454		235.89	

5b	神 津 島	恩 馳 島 群	570	4	100.00	4.01	100.00
----	-------	---------	-----	---	--------	------	--------

単独	神 津 島	恩 馳 島 群	517	1	100.00	0.08	100.00
----	-------	---------	-----	---	--------	------	--------

第 5 文 化 層 産 地 推 定 地 判 明 分 合 計				429		237.41	
-------------------------------	--	--	--	-----	--	--------	--

第 5 文 化 層 合 計 (推定不可を含む)				459		239.98	
-------------------------	--	--	--	-----	--	--------	--

文化層	推定産地エリア	推定産地群	母岩番号	点数	点数比(%)	重量(g)	重量比(%)
単独	高 原 山	甘 湯 沢 群		1	100.00	28.31	100.00
			未 分 析	4		5.55	
単 独 出 土 産 地 推 定 地 判 明 分 合 計				1		28.31	
単 独 出 土 合 計 (未分析を含む)				5		33.86	

推 定 産 地 判 明 分 合 計				636		828.63	
全 体 総 計				670		836.95	

※ 点数比は、推定産地判明の組成を示す
[推定不可と未分析(空白)のデータは含まない]

第3章 奈良・平安時代～中・近世の遺構と遺物

第1節 奈良・平安時代の竪穴住居跡とその出土遺物

(9)SI157 (第107図、図版8・56・66)

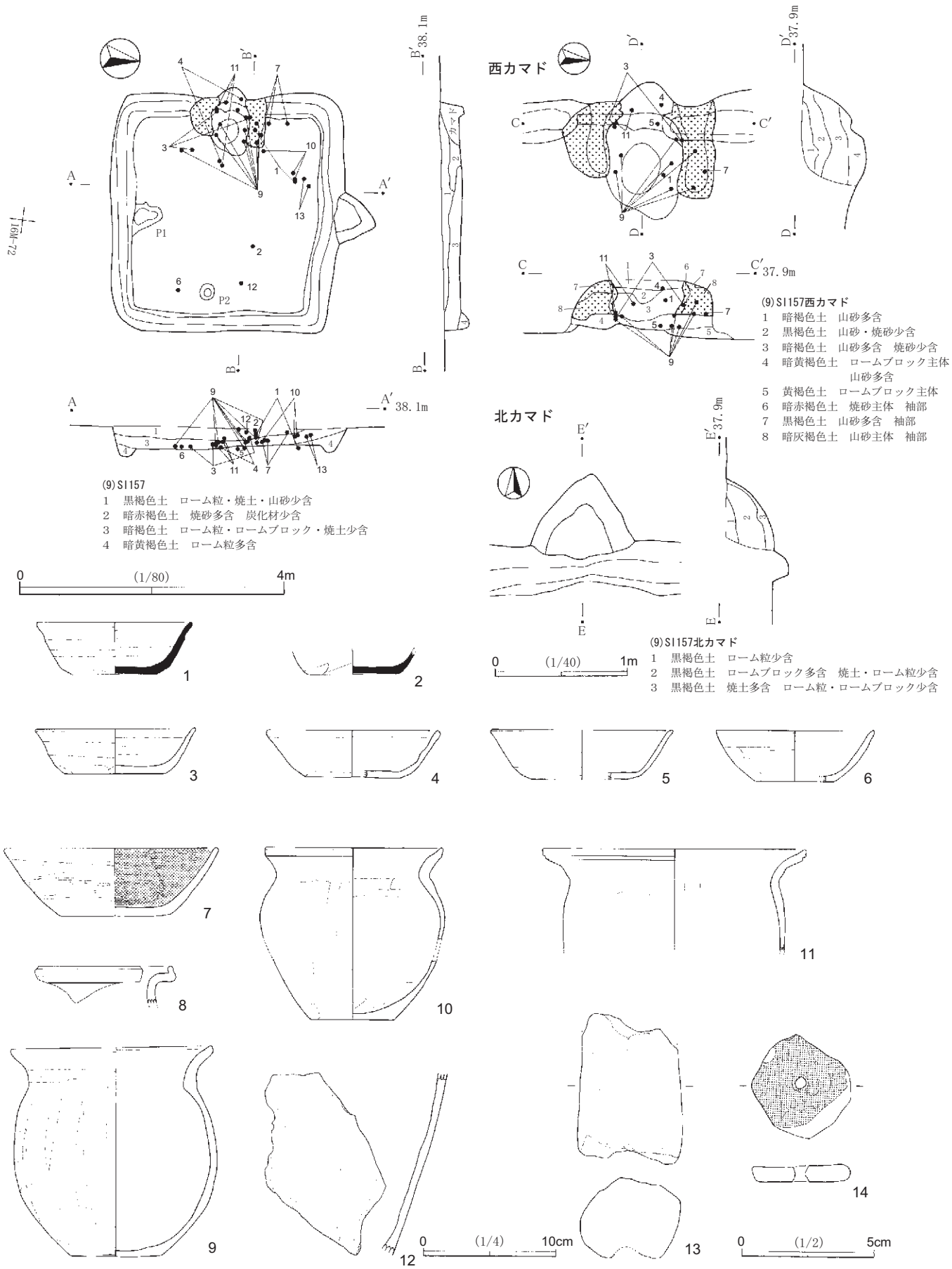
16M-51グリッド周辺に位置する。平面形は東西にやや長い方形である。主軸はN-92°-W、規模は主軸長3.20m、幅3.62mを測る。掘り込みは確認面から17.7cm～37.7cmで、床面は北に向かって緩やかに傾斜している。カマドは北壁及び西壁中央に2か所検出された。北カマドを壊して埋め戻し、西カマドを新設している。北カマドは左右の壁に一部焼けた山砂が遺存するほかは焼けた部分は見られない。西カマドは煙道部の掘り込みが短く、火床部はほとんど焼けていない。遺物は西カマド周辺に集中しており、燃焼部内壁に貼り付けていた可能性がある。新旧カマドそれぞれに対応する位置に梯子ピットがあり、南壁際中央のP1は深さ15.7cm、東壁中央のP2は17.6cmである。周溝は幅28cm～40cm、深さ4cm～12cmで全周する。

遺物は床面から覆土上層にかけて分布し、西カマド周辺に特に集中する。1、2は須恵器杯である。1の胎土は3～5の土師器杯に近く、外面赤褐色を呈する。底部全面と体部下端に手持ちヘラケズリが施され、はっきりとしたロクロ目が残っている。2は杯の底部で、灰色を呈する。砂粒を多く含むやや粗い胎土である。底部全面と体部下端に手持ちヘラケズリを施している。いずれも下総産である。

3～6は土師器杯で、胎土に白色粒子、大粒の赤色スコリア等を含み、砂質を帯びている。3、4は口径に比して底径がやや大きく、器高の浅い杯で、ともに橙色を呈している。3は底部回転糸切りの後体部下端と底部外周に手持ちヘラケズリ、4は底部全面と体部下端に手持ちヘラケズリを加える。5は口径の1/2程の大きさの底部から内湾気味に立ち上がる杯で、褐色を呈する。底部回転糸切りの後体部下端と底部外周に回転ヘラケズリが施される。6は小さめの底部から体部が内湾しながら開く杯で、橙色を呈する。外面は口縁部直下まで手持ちヘラケズリが施される。胎土に雲母と微量の白色針状物を含んでいる。

7は内面黒色処理される土師器杯である。色調は橙色を呈し、胎土に白色粒子、金雲母、大粒の赤色スコリアとごく微量の白色針状物を含むものの、3～6と異なり精緻な印象である。底部糸切りの後外面体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ、内面は密に、外面は疎らにミガキが施される。

8～12は土師器甕である。8は常陸型甕の口縁部、12は胴部片である。いずれも多量の長石・石英粒・雲母を含む。8は明褐色、12は黄褐色を呈する。9は橙色を呈し、胎土に多量の砂粒と大粒の赤色スコリアを含む。最大径は胴部中位に有り、15.5cmを測る。器壁の薄い胴部に肥厚する口縁部が付き、口唇部はわずかにつまみ上げるように作られる。胴部外面は縦位及び斜位のヘラケズリ、内面はヘラナデである。外面胴部中位から下位にかけて煤が付着しており、同部位の内面側は被熱により剥離している。10は胴部上位に最大径を持ち、14cmを測る。口唇部のつまみ上げは9よりも強い。色調は明赤褐色、胎土は白色粒子を多く含み、砂質を帯びる。胴部外面は縦位及び横方向のヘラケズリ、内面はヘラナデである。11は口縁部に最大径を持ち、胴部はあまり張らないようである。口唇部はわずかにつまみ上げるように作られ、口唇直下に沈線上の凹みを有する。胴部外面は縦位のヘラケズリ、内面はヘラナデで仕上げられる。色調は赤褐色を呈する。



第107図 (9)SI157

13は土製支脚の一部である。表面は面取りされ、所々に山砂が付着している。砂質で摩滅が著しい。

14は内面黒色処理された土師器杯の底部片を利用した有孔円板である。側面は打ち欠いたままである。

(9)SI198 (第108・109図、図版8・56・66・70)

15L-83グリッド周辺に位置する。平面形は東西にやや長い方形である。主軸はN-2°-E、規模は主軸長3.32m、幅3.59mを測る。掘り込みは確認面から16.0cm～33.8cmで、床面中央に焼土と炭化材が見られる。カマドは北壁中央に設置される。火床部に硬化面は遺存せず、覆土上層に焼けた山砂を含んだブロック状の焼土が多く認められた。ピットは、東壁に接する位置からP1が、南壁側中央からP2が検出された。P1は深さ5.2cm、P2は2つが連結するような形で右が13.2cm、左が8.1cmである。周溝は幅17cm～40cm、深さ1cm～8cmで全周する。

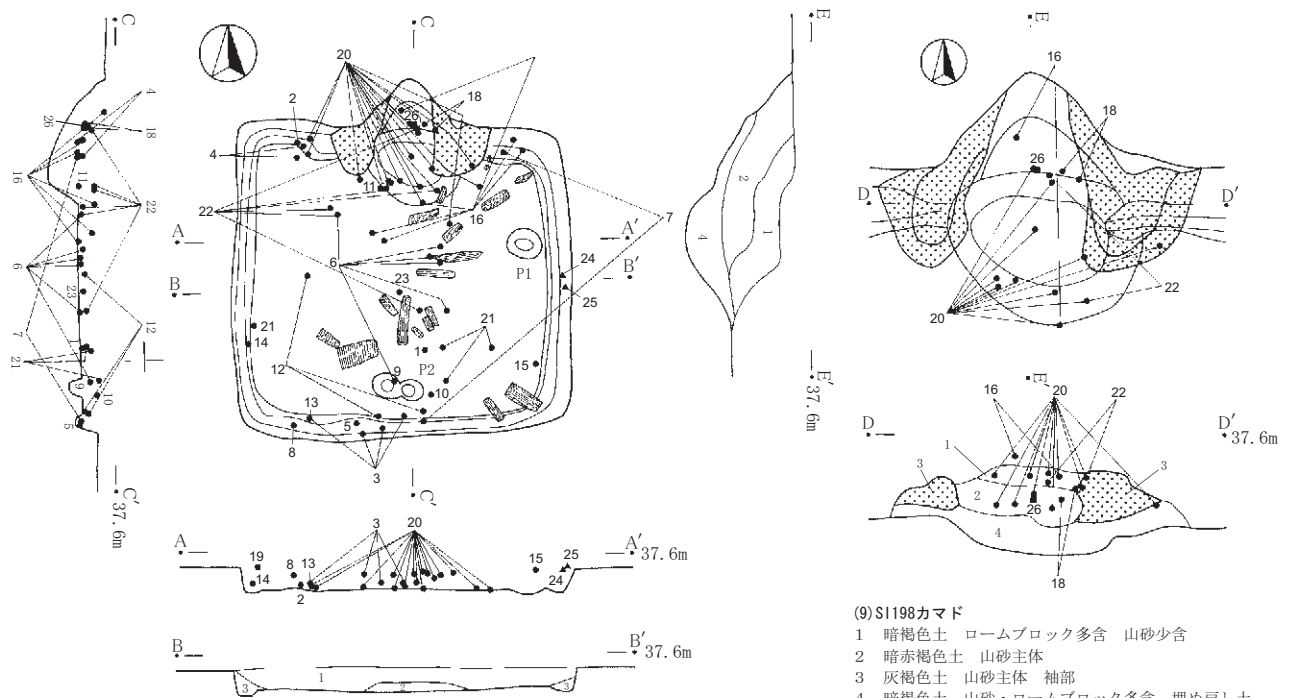
遺物は床面から覆土中層にかけて遺存し、特にカマドから多く出土している。1～4、12～14は土師器杯である。胎土はほぼ共通しており、砂粒と少量の赤色スコリアを含んでいる。器形も口縁部の形状に若干バリエーションがあるものの、口径の1/2程の底部から内湾気味に体部が立ち上がる点では共通している。底部回転糸切り後体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリを加えるものが多い中、2のみ回転糸切り後無調整である。

1は橙色でロクロ目がやや強く、口唇部の一部に煤の付着が見られる。2はロクロ成形後ナデているためロクロ目がはっきりしない。色調は橙色である。3は底部外面に墨痕のようなものが広範囲に見られる。12、13の体部外面には横位に墨書が記されている。12は「三倉」と判読でき、13も同じく「三倉」であろうと思われる。14は体部外面に「十」の墨書が正位で記されている。

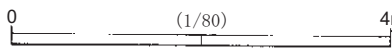
5～9は内面にミガキが施される土師器杯である。胎土はミガキの施されない杯と共通しており、砂粒と赤色スコリアを含んでいる。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される点も共通している。黒色処理は5、7、9に施されている。6は口径19.8cm、底径9.1cm、器高6.3cmを測る大型の杯で、褐色を呈する。8は口径に比して底径がやや大きく器高も低い。色調は明黄褐色である。10は土師器皿である。外面体部下端に回転ヘラケズリ、内面にはミガキ及び黒色処理が施される。11は土師器高台付皿である。高台部を接合した痕が断面から観察できる。10、11とも胎土は杯と同じく砂粒と赤色スコリアを含み、色調は明黄褐色を呈する。

15～17は須恵器甕である。15は頸部から肩部にかけての破片で、16と同様の器形になると思われる。器表面の色調は暗褐色、断面は黒色でサンドイッチ状になっている。胎土に多量の白色粒子と赤色スコリアを含む。16は頸部から胴部上半の破片である。丸く張った胴部が頸部で窄まり、口縁部で逆「ハ」の字状に開く。色調は橙色、胎土は15と同様であるが、15の方が表面堅緻な印象を受ける。胴部外面は叩き、内面はヘラナデで当て具痕は見られない。17は胴部中位に最大径をもつ折り返し口縁の甕である。色調は黄褐色を呈する。胎土は白色粒子と赤色スコリアを若干量含む程度だが、被熱のためか非常に脆い。胴部外面は叩きで下端にヘラケズリを加える。内面はヘラナデ、底部は無調整である。いずれも下総産である。

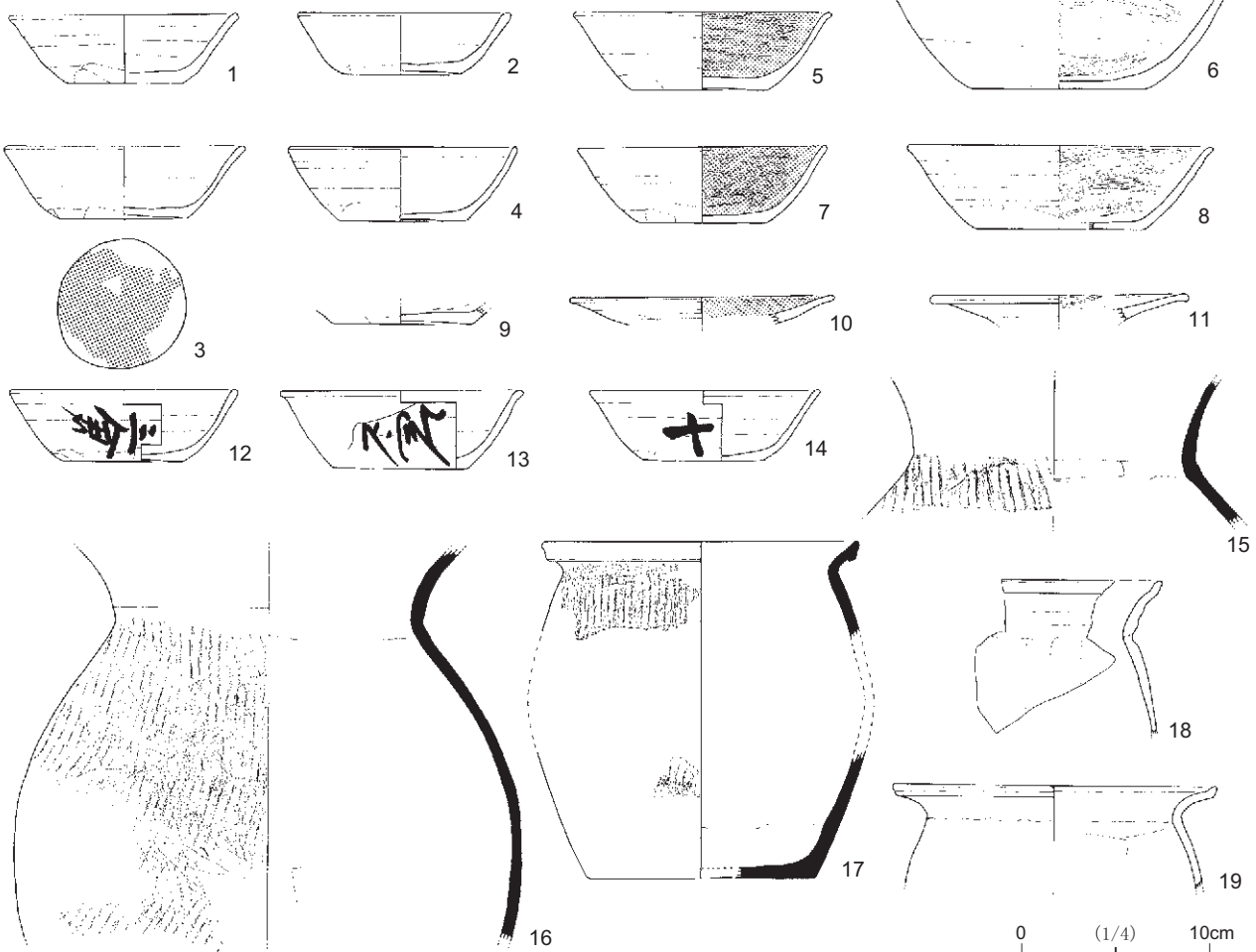
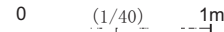
18～23は土師器甕である。常陸型の甕以外は土師器杯と同様の胎土である。18、19は口縁部に最大径をもつと思われる口縁部片である。18は明赤褐色、19は褐色を呈する。20は胴部中位に最大径を持ち、20.8cmを測る。器壁が薄く、口唇部はつまみ上げるように作られる。外面胴部上位は縦方向、中位から下位にかけて横方向のヘラケズリが施される。21は胴部中位に最大径をもつ薄手の甕で、底径がやや大きい。色調は橙色を呈し、胎土は杯と同じく砂粒と赤色スコリアを含む。外面胴部上半は縦位、下半は横位



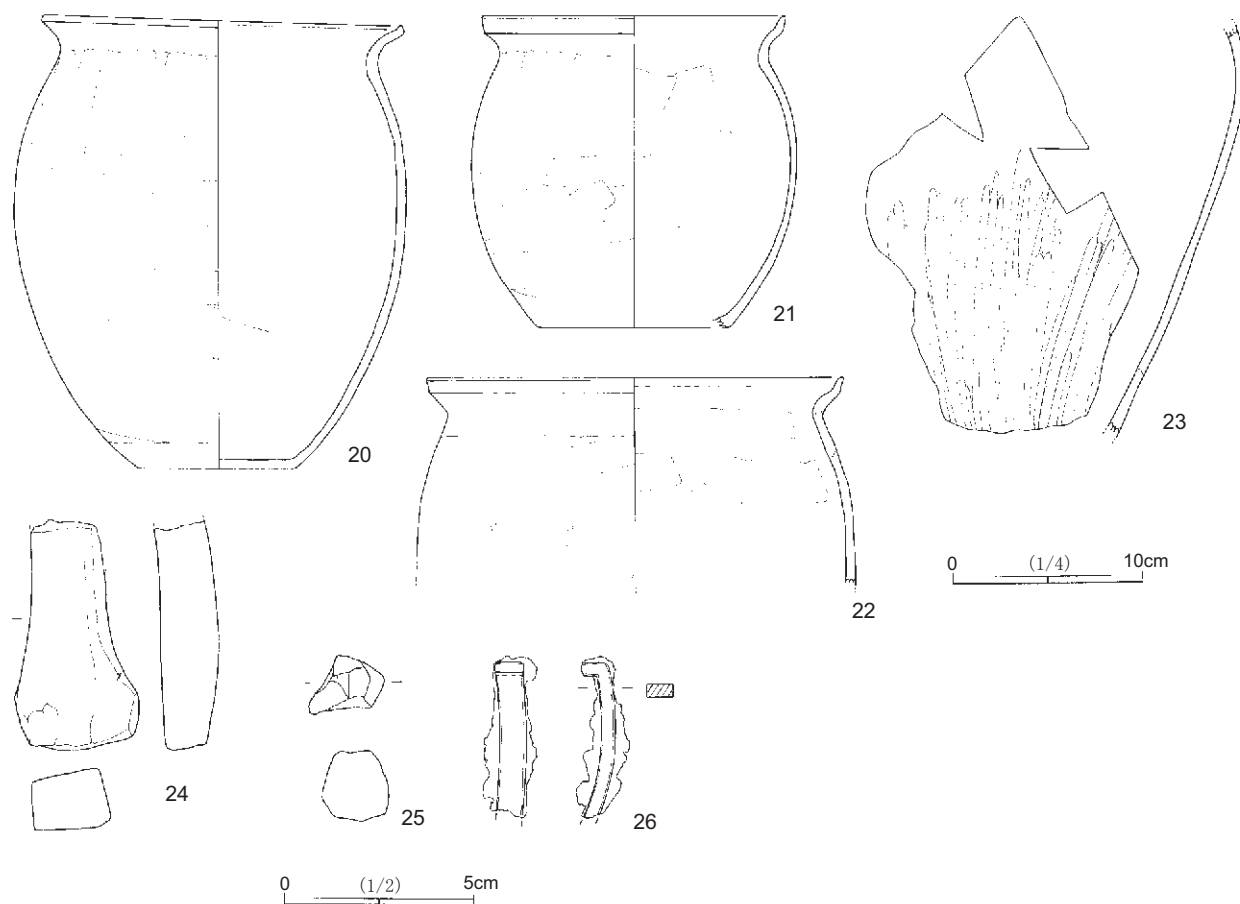
(9) SI198カマド
 1 暗褐色土 ロームブロック多含 山砂少含
 2 暗赤褐色土 山砂主体
 3 灰褐色土 山砂主体 袖部
 4 暗褐色土 山砂・ロームブロック多含 埋め戻し土



(9) SI198
 1 黒褐色土 ローム粒・炭化物少含
 2 暗赤褐色土 焼土・炭化物・ローム粒多含
 3 暗褐色土 ローム粒多含



第108図 (9) SI198①



第109図 (9)SI198②

のヘラケズリ、内面はヘラナデで仕上げられる。22は常陸型甕で、橙色を呈し、胎土に多量の長石、石英粒、雲母を含む。23は常陸型甕の胴部片である。胎土に長石、石英粒、雲母を含み、色調は明赤褐色を呈する。

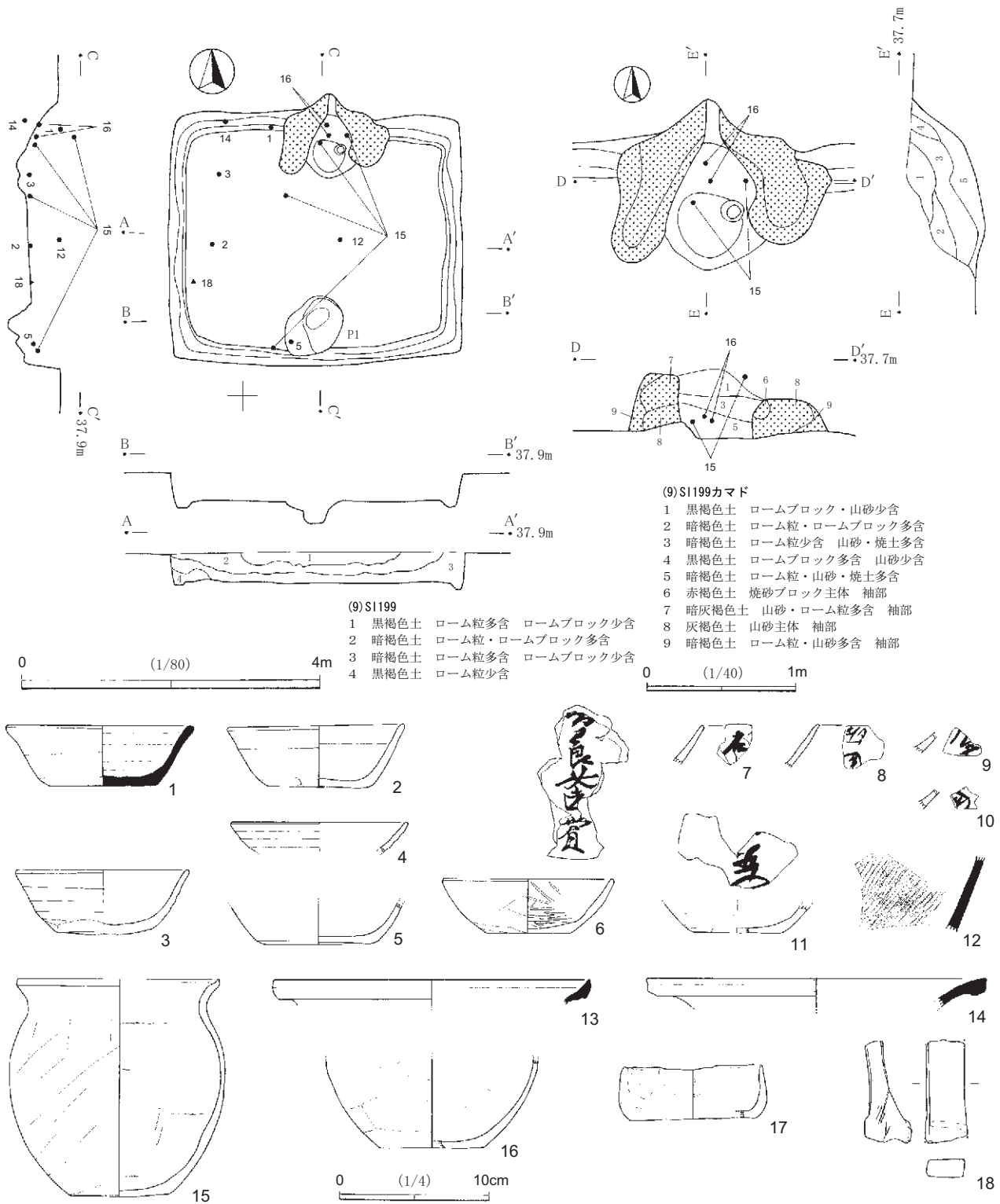
24は凝灰岩の砥石で、上端は欠損、下端はあまり使い込まれていない。他は使い込まれてすり減っている。25はメノウ製の火打ち石、26は鉄製の釘である。25は鉄錆の付着により変色している箇所がある。

(9)SI199 (第110図、図版8・56)

16L-24グリッド周辺に位置する。平面形は東西に長い方形である。主軸はN-1°-E、規模は主軸長3.27m、幅3.97mを測る。掘り込みは確認面から36.6cm~43.7cmで床面は平坦である。カマドは北壁中央に設置される。カマド下の掘り込みは焼けておらず、一度掘り窪めた後埋め戻し、その上に火床を作っていることが分かった。右袖付近には堅く焼き締まったようなロームブロックが見られ、ブリッジ部の残存と思われる。ピットは南壁際中央から梯子ピット1基が検出された。深さは31.8cmである。周溝は幅22cm~38cm、深さ4cm~14cmで全周する。

遺物は床面から覆土上層にかけて散在している。1は須恵器杯である。カマド脇の周溝覆土から出土した。色調は黒褐色に近い灰色で、断面は褐色を呈する。胎土は多量の白色粒子と少量の赤色スコリアを含む。底部回転ヘラ切りの後体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリを施す。下総産である。

2~5は土師器杯である。いずれも色調は橙色を呈し、胎土に砂粒と赤色スコリアを含んでいる。2は底部回転系切り後体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。底部内面が黒変し、外面には所々煤の付着が見られる。3は体部下端及び底部全面に手持ちヘラケズリが施され、やや丸みを帯びてい



第110図 (9)SI199

る。4は口縁部のみの遺存で、強いロクロ目が残る。口唇部外面に墨書の残画が見られる。5は底部回転糸切りの後体部下端と底部外周に回転ヘラケズリが加えられる。

6～11は内面に墨書のある土師器杯である。破片がほとんどであるが、胎土、調整が似ていることから同じような器形になるものと思われる。7～10は6、11いずれかと同一個体になる可能性がある。破片の形状によって、小さめの底部に内湾気味に開く体部をもつ器形と推定される。外面は口縁部直下まで手持

ちヘラケズリ、内面はミガキが施される。明確に読み取れる文字は少なく、6は「□□良女□□」、7は「在」あるいは「庄」か。他が比較的細書きであるのに対し、7は太書きで墨痕も黒々としている。

12～14は須恵器の甕である。12は胴部片で、外面に叩きが施されている。13は暗赤褐色で、白色粒子と大粒の赤色スコリアを含む。14は灰色を呈し、胎土に白色粒子と雲母を含む。12、14は新治産、13は下総産である。小片のため図化していないが、雲母、白色粒子を含む厚手の須恵器甕片も見られる。

15は胴部中位に最大径をもつ土師器甕で、14.5cmを測る。器高が14.6cmであり、ほぼ同じ数値となる。口縁部は直立した後緩やかに外反し、口唇部でわずかにつまみ上げられる。胴部外面はヘラケズリのちナデ、内面はヘラナデが施される。外面には所々煤が付着している。16はカマド火床部から出土した土師器甕の底部である。色調は外面褐色、内面明赤褐色で、土師器杯と同様の胎土である。

17は手捏ね土器である。外面灰色、内面にぶい黄色を呈し、砂粒を含むややザラついた胎土である。外面はナデで、口縁部に指頭痕が残る。内面はハケで仕上げられる。

18は凝灰岩製の砥石で上下両端を欠損している。良く使い込まれ、所々線状の細い擦痕が見られる。

(9)SI200 (第111図、図版8・9・56・57)

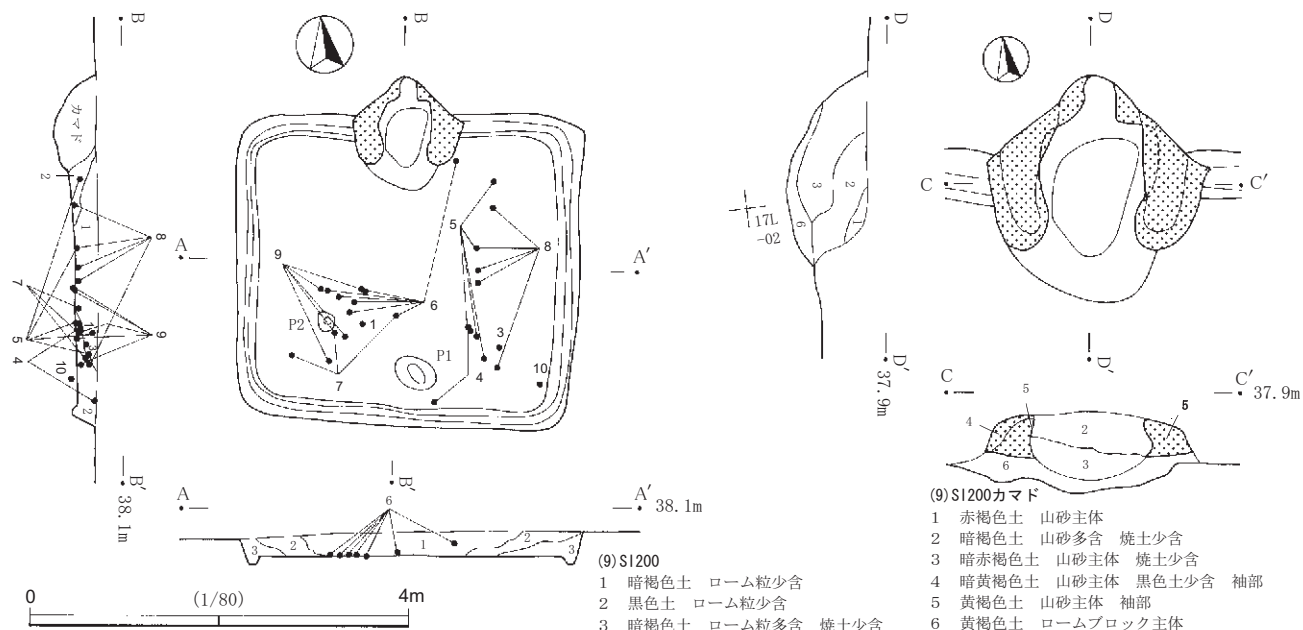
16L-90グリッド周辺に位置する。平面形は東西にやや長い方形である。主軸はN-5°-E、規模は主軸長3.30m、幅3.63mを測る。掘り込みは確認面から17.9cm～30.3cmで、床面は平坦である。カマドは北壁中央に設置され、遺存状態は良好である。ピットは住居の南側から2基検出された。南壁側中央のP1は梯子ピットで深さ13.2cm、それより西に位置するP2の深さは20.6cmである。周溝は幅18cm～30cm、深さ2cm～10cmで全周する。

遺物の出土は多く、床面から覆土上層にかけて全体に分布している。1～3は土師器杯である。1は内面黒色処理される杯の口縁部片である。外面は赤褐色を呈し、胎土に砂粒、赤色スコリアと微量の白色針状物を含む。外面体部下端にわずかながら手持ちヘラケズリが見られる。被熱によるものか、器面が剥落している部分がある。2は体部外面に「□倉」と判読できる墨書が記されている。やや細めながら均一の太さで、墨痕も黒々としている。色調は橙色を呈し、胎土に砂粒と大粒の赤色スコリアを含む。底部糸切りの後体部下端と底部外周に手持ちヘラケズリを加える。外面のロクロ目は強く、内面のロクロ目は弱い。3は底部である。色調は橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。底部回転糸切りの後体部下端と底部に回転ヘラケズリを施している。内外面に煤が若干付着している。

4、5、7は叩き目をもつ須恵器で、4、7が甕、5が甔である。4は胴部片で褐色を呈し、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。7の表面の色調は灰色、断面は褐色を呈する。やや軟質で胎土に多量の白色粒子を含む。外面底部は無調整、胴部下端にはヘラケズリが加えられる。4、7とも内面はナデで当て具痕は見られない。下総産である。5は底部の遺存状況から五孔になると思われる。色調は外面が黄橙色、内面が灰色を呈する。胎土に多量の雲母と砂粒を含む。外面は叩きの後胴部下位にヘラケズリを加える。胴部内面上位はヘラナデ、下位はヘラケズリで器面が整えられ、中位に当て具痕が見られる。新治産である。

6は灰釉陶器長頸壺の肩部である。外面のほぼ全面に釉の付着が見られる。外面は褐灰色、内面は灰色を呈し、胎土に白色粒子を含む。外面胴部下端は回転ヘラケズリの可能性があるが、遺存部位が少なく、また釉の付着により不明瞭である。

8～10は土師器甕である。8は常陸型甕で、最大径を胴部上位に有し、24.0cmを測る。口唇部は上方につまみ上げられ、S字状を呈する。外面の色調は赤褐色、内面は褐色を呈する。胎土に多量の長石、石



第111図 (9)SI200

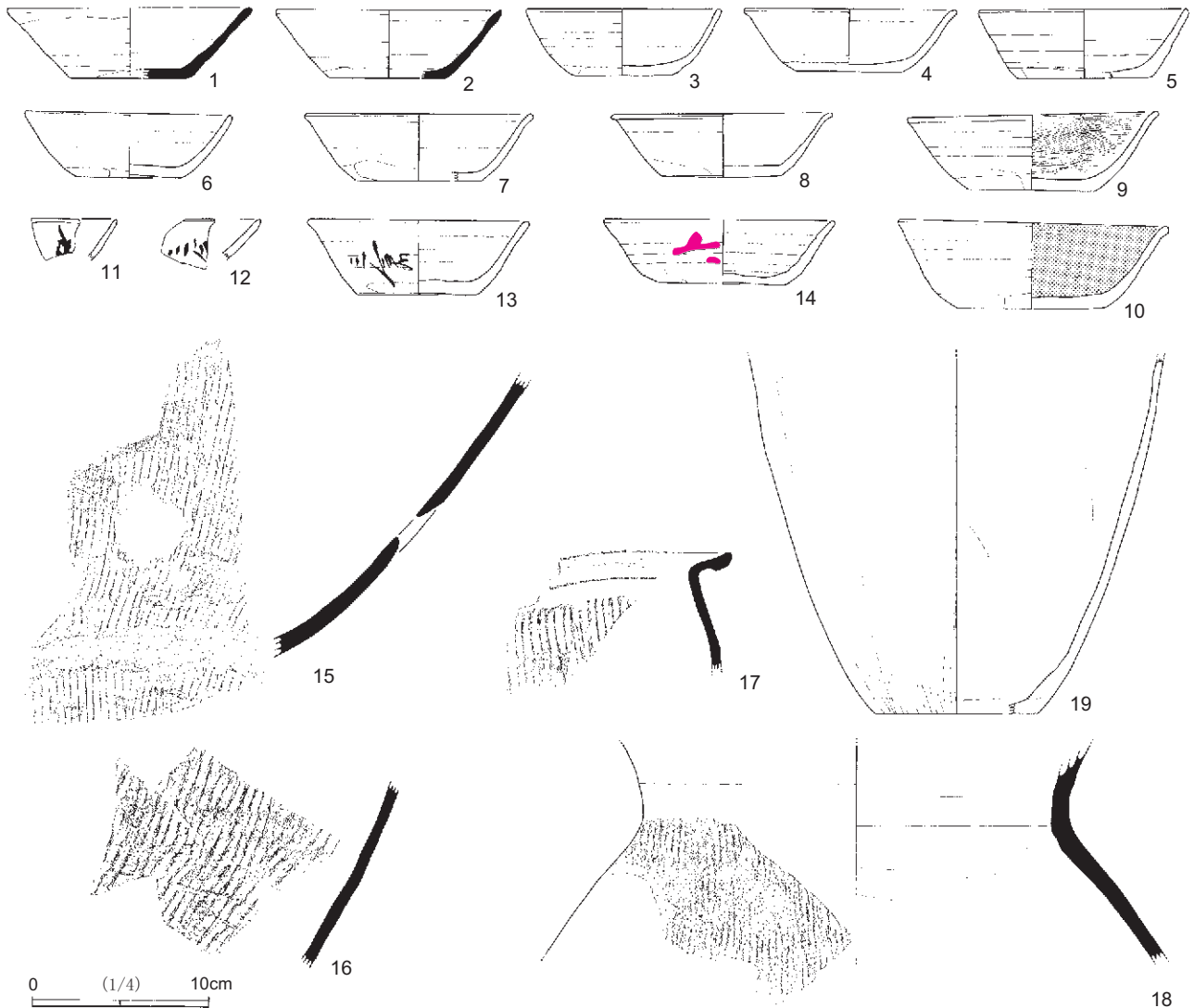
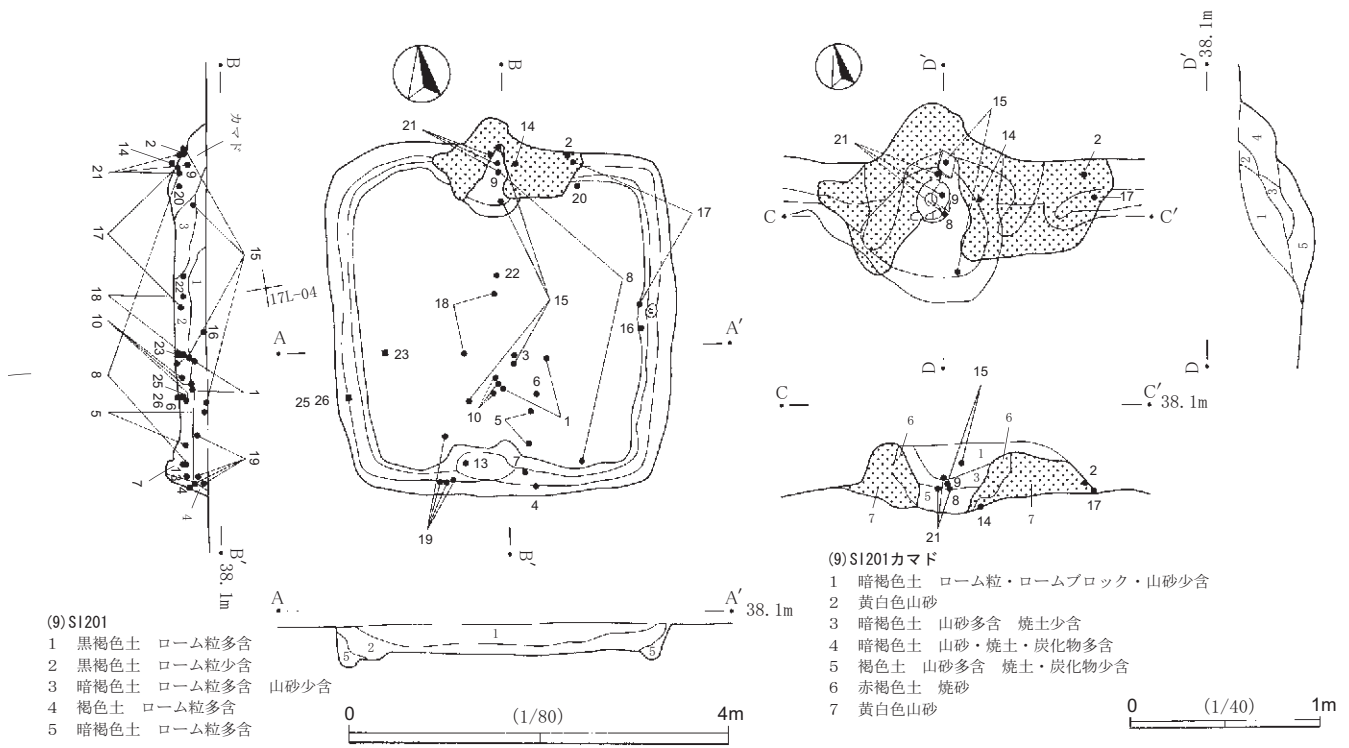
英粒、赤色スコリアを含む。雲母は少なめである。外面胴部下半にミガキが施されるが、胴部中位は煤が付着しているため調整不明瞭である。9はやや歪みがあるものの、口径23.1cm、胴部最大径22.9cmとほぼ同程度の数値である。非常に薄手の作りで、口縁部でわずかに肥厚する。口唇部外面にはナデによる凹凸が見られるが、内面はごく弱い段になっている。色調は褐色を呈し、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。10は常陸型甕の胴部である。外面の色調は明赤褐色、内面は褐色を呈し、多量の長石、石英粒、雲母を含む。胴部内面に煤が付着している。

(9)SI201 (第112・113図、図版9・57・69・70)

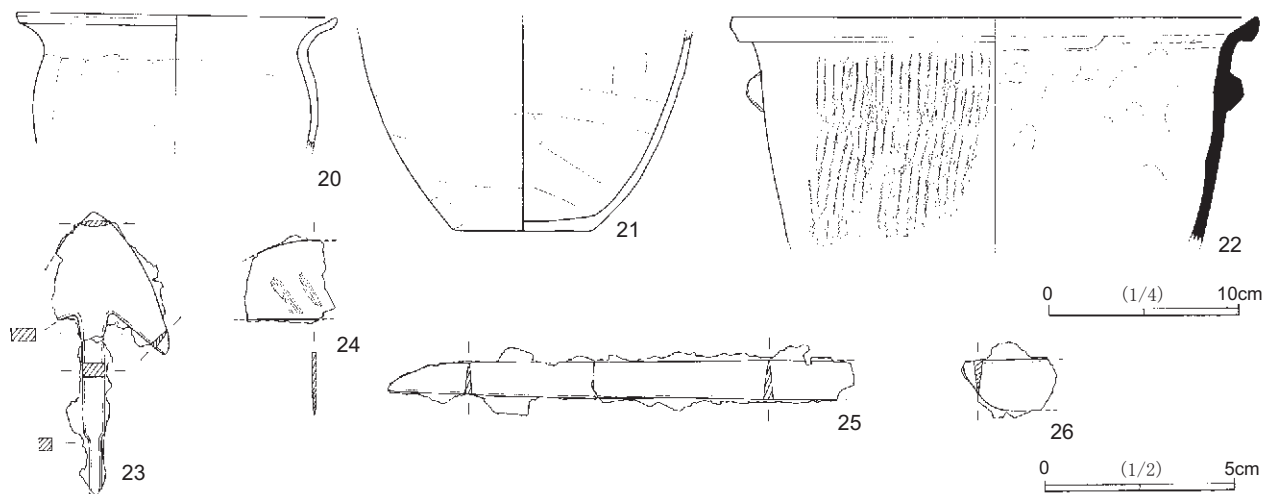
(9)SI200の10m東、16L-94グリッド周辺に位置する。平面形は正方形に近く、主軸はN-6°-E、規模は主軸長3.75m、幅3.62mである。掘り込みは確認面から25.7cm~33.9cmで床面は平坦である。カマドは北壁中央に設置される。左袖際の火床面から土師器杯2点と甕が伏せられた状態で重なって出土した。下から9、8、21の順で、甕の胴部下半が一番上に重なっていた。また、煙道部入り口からは胴部が穿孔された須恵器甕片も出土している。床面からピットは検出されていないが、カマドと向かい合う南壁中央に深さ13.9cmの掘り込みがある。周溝は幅26cm~42cm、深さ3cm~12cmで全周する。

遺物は床面から覆土上層にかけて全体に分布している。1、2は須恵器杯である。1は口径の1/2以下の底部から体部が直線的に開く。砂粒を多く含み、色調は黒褐色を呈する。ロクロ目は強くはつきりとしており、外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。底部外面には火襻のような痕も見られる。2も体部が直線的に開き、口縁部で肥厚する。色調は黒褐色で、胎土に多量の細砂粒と赤色スコリアを含む。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。いずれも下総産である。

3~14は土師器杯である。3は口径の1/2ほどの底部から内湾しながら立ち上がる杯で、ロクロ目はごく弱い。内面の色調は黒褐色、外面はにぶい黄橙色を呈し、砂粒を多く含む。口縁部から体部にかけて1/2周程欠損しているが、割れ口が若干擦れていることから、故意に割った可能性がある。4は口径の1/2程の底部に外反する口縁部が付く。色調は明赤褐色で、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。底部糸切り後体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリを施す。底部外面には「⊕」とヘラ書きしてあるように見えるが、ヘラケズリの際の砂粒の動きの可能性も有り、意図的なものかどうかは不明である。5は口径に比してやや底径が大きい。色調は橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。外面には強いロクロ目が残り、底部回転糸切りの後体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。6は色調橙色の杯で、胎土に多量の砂粒と大粒の赤色スコリアを含む。底部回転糸切りの後体部下端と底部外周に手持ちヘラケズリを加えている。口縁部から体部にかけて2/3周程欠けており、そのうち1か所が接合する。割れ口が若干擦れているため、意図的に打ち欠いた可能性がある。7は色調、胎土ともに4に類似する。器形的な特徴も口縁部が外反する等共通するが、法量はやや大きめである。8は口縁端部が強く外反する。カマドから重なって出土した土器の内、真中の杯である。色調は明赤褐色を呈し、胎土に砂粒、白色粒子、赤色スコリアを含む。被熱により器面が剥離しているためかロクロ目はほとんど見られず、外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。9はカマド左袖際火床面から重なって出土した3点の土器の内、最も下側の杯である。色調は内面橙色、外面明赤褐色で、胎土に微砂粒、微量の白色針状物を含む。内面はミガキが施され、体部下端から底部にかけて黒色を呈している。被熱による器面の剥離が見られることから、本来は黒色処理されていたが、被熱により変色してしまった可能性がある。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。10は内面黒色処理され、器形に歪みが見られる。色調は橙色を呈



第112図 (9)SI201①



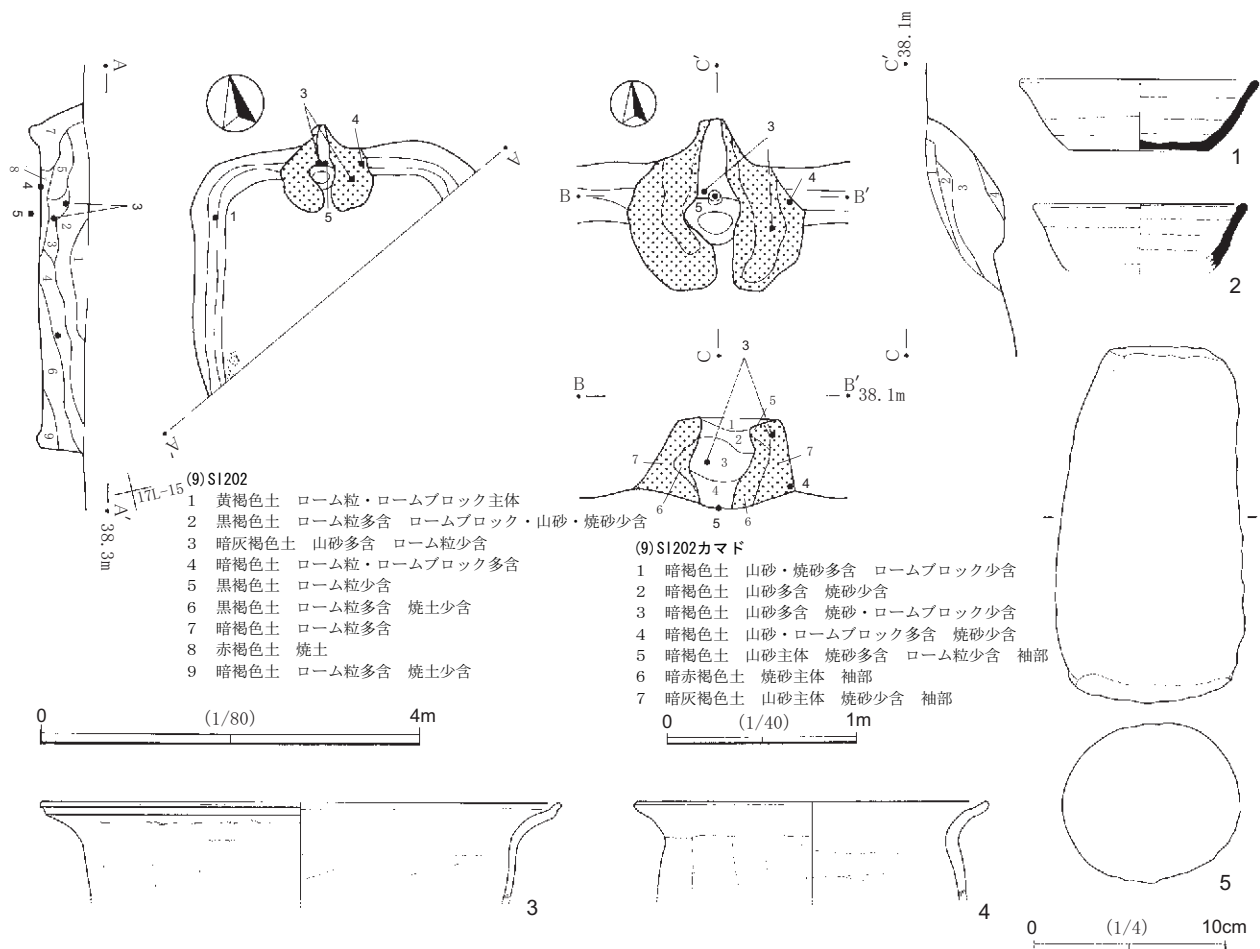
第113図 (9)SI201②

し、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。外面のロクロ目ははっきりとしており、体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリが加えられる。内面はミガキが施されるが、被熱による剥離のため不明瞭である。

11～14は墨書土器である。11は横位に「倉」、12も横位に「三倉」と読めそうな文字が見られる。13は体部外面に「三倉」と記されている。起筆が細く、次第に太くなる柔らかい筆運びである。色調は橙色、胎土に砂粒、雲母、大粒の赤色スコリアを含む。底部からの立ち上がりがかっきりとしており、硬質な印象を受ける。底部は回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリを加えている。14はほぼ完形だが、口唇部が2か所欠けている。ロクロ目ははっきりとしており、底部回転ヘラ切り後体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリを加えている。体部外面には朱書きで「六」と判読できる文字が正位に記されている。色調は内面がにぶい褐色、外面が橙色を呈し、胎土に多量の砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。

15～18は須恵器甕である。15は焼成後胴部に穿孔している。穿孔後破碎したものか、カマド煙道部と火床部、床面から出土した破片が接合している。穿孔は直径1.5cm前後、外面が剥離面していることから、内面から穿孔したものと思われる。胎土、色調とも18と類似するため同一個体の可能性がある。16は胴部片で、にぶい赤褐色を呈する。胎土に白色粒子と赤色スコリアを含む。硬く焼き締まっている。下総産である。17は口縁部片である。折り返し状の口縁で、胴部はわずかに丸みを帯びる。色調は内外面とも灰色で断面は赤褐色を呈する。胎土は多量の砂粒と大粒の赤色スコリアを含む。胴部外面は叩き、内面は円形の凹凸が残る。当て具痕と思われるが、遺存部位が少ないため判然としない。下総産である。18は壺形で、頸部ですぼんだ後口縁部で大きく外反する。頸部の最も細い部分の径は24.2cmである。色調は内外面とも黒褐色、断面は褐色ないし暗褐色を呈する。胎土は多量の白色粒子と大粒の赤色スコリアを含む。胴部外面は叩き、内面はナデで仕上げられる。

19～21は土師器甕である。19は常陸型甕の胴部片である。色調は内面が橙色、外面が灰褐色を呈し、胎土に雲母と長石、石英粒を多量に含む。外面には山砂が付着しており、ミガキの単位は見えにくい。内面はヘラナデで、胴部と底部の接合痕が明瞭である。わずかに残る底部は無調整と思われ、植物の種子による圧痕のようなものが見られる。20は口縁部に最大径を有し、口唇部がわずかにつまみ上げるように作られる。色調は褐色で、胎土に多量の砂粒と赤色スコリアを含む。21はカマドから重なって出土した土器の内一番上の甕である。色調は明赤褐色を呈し、胎土に多量の砂粒と大粒の赤色スコリアを含む。外面はへ



第114図 (9) SI202

ラケズリ、内面はヘラナデで仕上げられる。

22は須恵器甌である。色調は内面が褐色、外面が灰褐色を呈し、胎土に多量の白色粒子と大粒の赤色スコリアを含む。被熱のせいやや砂質を帯びた胎土である。胴部外面は叩き、内面は当て具痕によるものか器面に凹凸が残る。把手は貼り付け後ヘラで面取り整形されている。口縁部外面と内面の一部に煤の付着が見られる。また外面には山砂の付着も見られる。下総産である。

23は鉄鏃、24は穂摘み具、25は刀子、26は鎌先の一部と思われる。他に鉄滓が1点出土している。

(9) SI202 (第114図、図版9・57・66)

(9) SI201の1m南東、17L-05グリッド周辺に位置する。北東隅を含む南半分が調査区外のため規模は不明だが、平面形は方形を呈するものと思われる。主軸はN-7°-E、掘り込みは確認面から40.0cm~47.2cmと深い。カマドは北壁中央に設置され、火床部奥側から支脚が出土している。周溝は現存部分で全周し、幅26cm~40cm、深さ2cm~8cmである。

遺物はカマド周辺からややまとまって出土している。1、2は須恵器杯である。周溝北西隅付近の覆土中から出土した。表面の色調は灰色であるが、断面は褐色を呈する。胎土は砂粒、スコリアを多く含み、2mm以下の小礫も見られる等やや粗い。外面体部下端と底部に回転ヘラケズリが施される。新治産である。2は口縁部片である。表面の色調は黒褐色、断面は褐色を呈する。白色粒子を多量に含み、口唇部内面には強いナデによって稜が形成されている。外面体部下端にヘラケズリが加えられるが、遺存部位が少ないため詳細は不明である。下総産である。

3は土師器甗である。非常に薄い作りで、口唇部はつまみ上げるように作られる。色調は橙色、胎土に多量の細砂粒、赤色スコリア、微量の白色針状物を含む。4は土師器甗の口縁部片である。最大径を口縁部に有し、口唇部のつまみ上げは弱い。胎土に多量の砂粒と赤色スコリアを含む。色調は赤褐色を呈する。5は円柱状の支脚である。カマドから出土しており、表面は火を受けて脆くなっている。先端から基部まで遺存しているが、基部は表面が剥落しているようである。胎土は緻密で調整も比較的丁寧である。

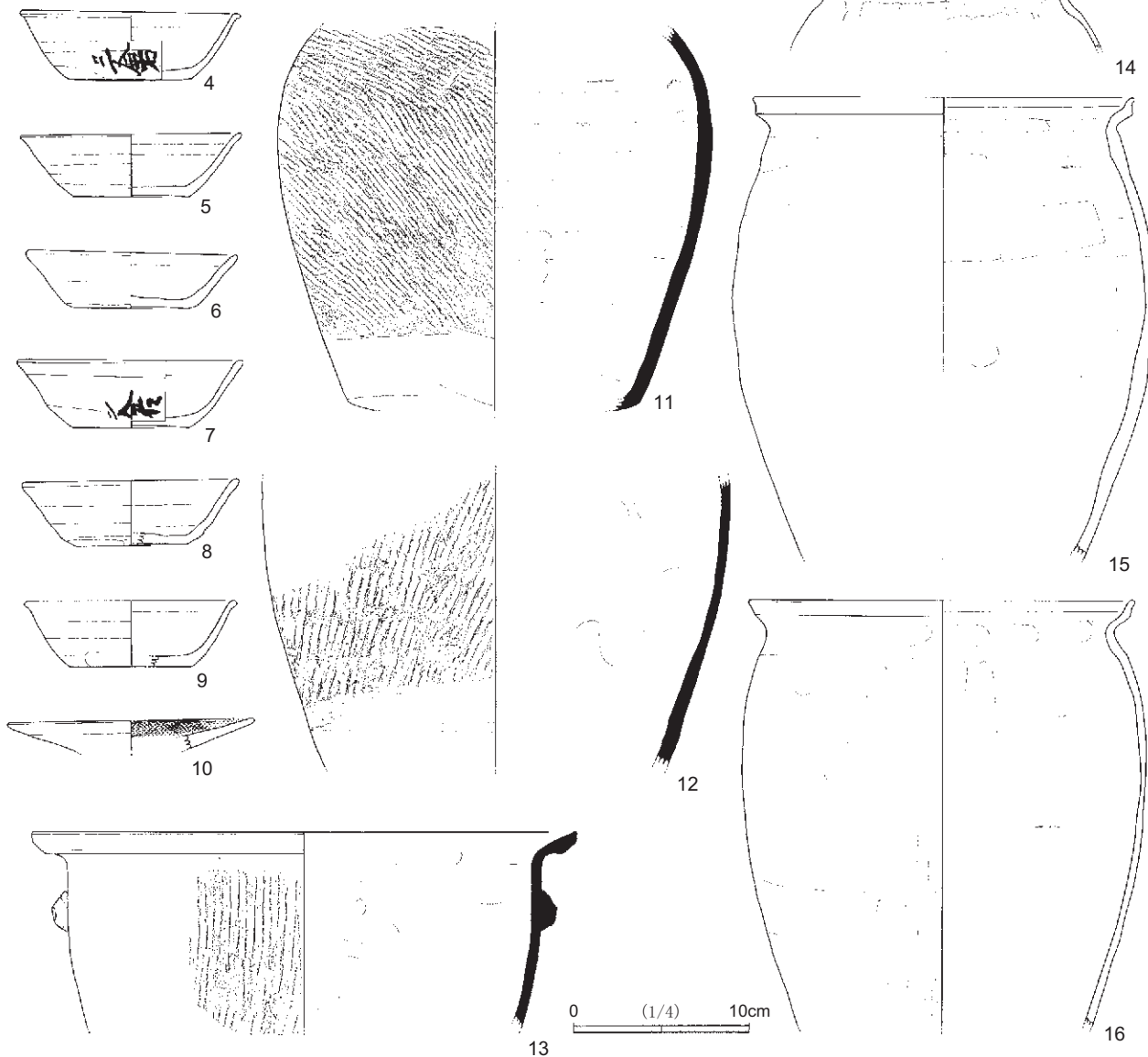
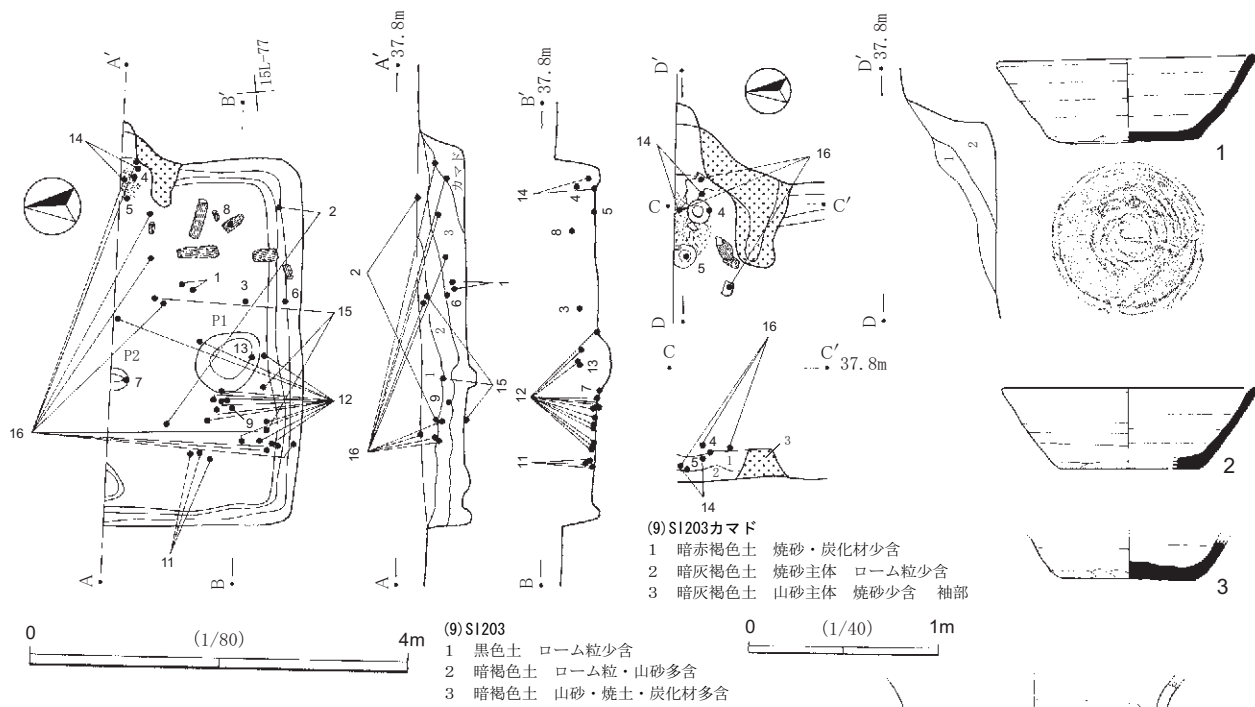
(9) SI203 (第115図、図版10・57)

15L-65グリッド周辺に位置し、北側半分が調査区外となる。平面形は方形を呈すると思われ、主軸はN-94°-E、規模は主軸長3.86m、幅は不明である。掘り込みは確認面から30.1cm~43.3cmで床面は平坦である。カマドは東壁中央に設置され、遺存状態は良好である。ピットは南壁際中央のP1、床面中央のP2、西壁際中央のP3が検出された。深さはP1が13.6cm、P2が10.7cm、P3が16.1cmである。P2、P3は南半分の検出で詳細は不明であるが、P3は梯子ピットの可能性がある。周溝は幅16cm~36cm、深さ3cm~12cmで現存部分では全周する。床面全体に焼土が広がり、南東コーナーからは炭化材も出土している。

覆土中から多数の遺物が出土している。1~3は須恵器杯である。1は白色粒子を多く含み、灰色~黒褐色を呈する。底部に回転ヘラ切り痕を残す。切り離し後外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリを加える。2は体部が直線的に開き口唇部で肥厚する。表面の色調は黒褐色、断面は褐色である。わずかに残る底部と体部下端に手持ちヘラケズリを加える。3は底部片で色調は灰色を呈する。胎土は8と似ており、大粒の赤色スコリアを含む。底部回転ヘラ切りの後体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリを施す。いずれも下総産である。

4~9は土師器杯で、外面体部下端から底部にかけての調整は全て手持ちヘラケズリである。4~6、9は胎土も共通しており、砂粒、赤色スコリアを含む。4は完存品で、カマド火床部の覆土上層から伏せた状態で出土した。底部からわずかに内湾しながら立ち上がった後、口唇部で外屈する。体部外面に「三倉」という墨書が横位に記されている。色調は橙色である。5は口唇部にわずかに欠けはあるもののほぼ完存する。カマド火床部の覆土中層から出土した。色調は内面が明黄橙色、外面が橙色である。6は南壁周溝の覆土から出土した完形の杯である。内面体部下位から底部にかけて、被熱のため器面が剥離している。色調は明赤褐色である。7は明赤褐色を呈し、砂粒、赤色スコリアの他に雲母を含む。体部外面に横位の墨書が見られ、「口倉」と判読できる。8は橙色を呈し、大粒の赤色スコリアを多く含む。軟質の須恵器に類似した胎土のため、須恵器の可能性も考えられる。9は他の杯に比べて口縁部の外反が強い。内面の色調はにぶい黄褐色、外面は明赤褐色を呈する。10は内面黒色処理される土師器皿である。色調は橙色で、内面に丁寧にミガキを施している。胎土は土師器の杯同様、砂粒、赤色スコリアを含む。

11、12は須恵器甗である。11の色調は灰色、胎土に大粒の白色粒子と雲母を多量に含む。胴部内面は横方向のナデ痕が顕著で、所々指紋が残っている。外面に施された斜方向の叩きは、胴部上位へ行くほど傾きが緩やかになり、肩部では横方向に近くなる。わずかに残る底部の調整は剥離のため不明瞭である。新治産である。12の色調は黒褐色で、胎土に白色粒子、赤色スコリアを含む。外面の調整は叩きで、胴部下位にヘラケズリを施す。内面は当て具痕が明瞭に確認できる。13は須恵器甗である。色調は内面が黒褐色、外面はにぶい赤褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。外面は叩きで、2個一對の把手が貼り付けられる。胴部内面はヘラナデが施される。器面に凹凸があるものの、当て具痕は明瞭ではない。12、13は下総産である。



第115図 (9) S1203

14～16は土師器甕である。14は頸部から肩部にかけての破片で頸部径14.0cmを測る。カマド内から出土している。赤褐色を呈し、多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。15は常陸型甕に近い形状であるが、16に比して器壁が厚く調整も粗い。色調は内面が黄褐色、外面が橙色を呈し、多量の雲母と白色粒子を含む。最大径は胴部上位にあり、24.4cmを測る。外面胴部下位の調整は、白色粘土が付着しているため不明瞭である。16は常陸型甕で、橙色を呈する。カマド内から出土しており、外面に山砂が付着している。最大径は胴部上位に有り、径23.4cmを測る。胴部上位には内外面ともに押捺した痕が見られる。

(9) SI204 (第116・117図、図版10・57・66)

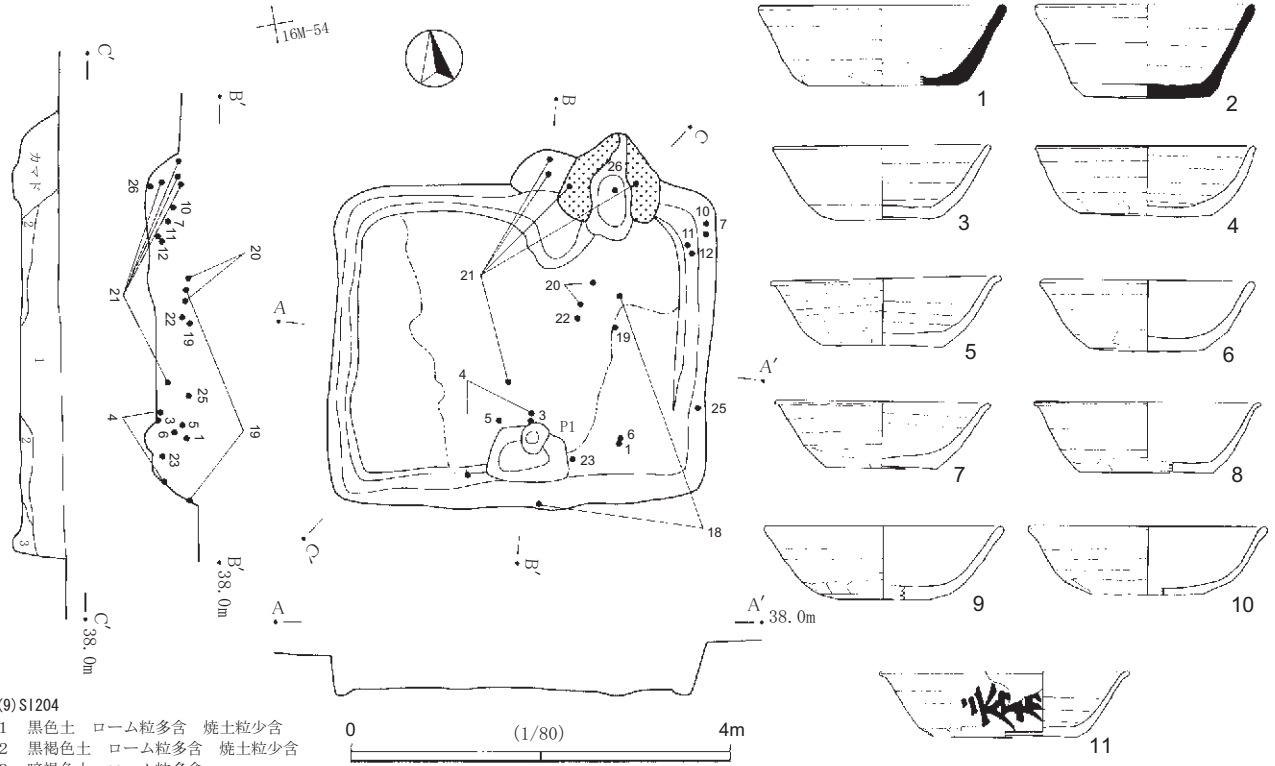
16M-54グリッド周辺に位置する。北東半分は平成12年度、南西半分は平成13年度に調査されている。平面形は東西に長い長方形である。主軸はN-11°-E、規模は主軸長3.50m、幅3.98mである。掘り込みは、確認面が南東から北西へ向かって緩やかに傾斜しているため、北東で51.0cm、南西で27.5cmと差があるものの、床面は平坦である。床面中央に硬化面が見られる。カマドは北壁から2基検出された。北壁中央にカマドを設置した後、その東隣にカマドを造り替えている。ピットは南壁側中央の旧カマドの向かい側から、深さ29.5cmのP1が検出された。梯子ピットと思われる。P1と重なる位置に深さ13.1cmの長方形の掘り込みがある。周溝は幅30cm～47cm、深さ4cm～9cmで、南東隅を除いて全周する。

遺物は床面から覆土中層にかけて全体に分布する。1、2は須恵器杯である。1の底径は口径の1/2程で、体部の立ち上がりは曖昧である。内面の色調は黒褐色、外面は褐色で、胎土に砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。底部回転糸切りの後外周部に回転ヘラケズリを加える。2は口径と底径の差が小さく高さのある杯である。表面の色調は黒褐色で、断面は赤褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子と赤色スコリアを含む。外面体部下端から底部にかけての調整は回転ヘラケズリである。下総産である。

3は口径と底径の差が比較的少なく、体部が直線的に開く土師器杯である。表面の色調は灰黄褐色、断面は灰色を呈し、胎土に多量の白色粒子と赤色スコリアを含む。ロクロ目が強く、外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。下総産の須恵器の可能性はある。

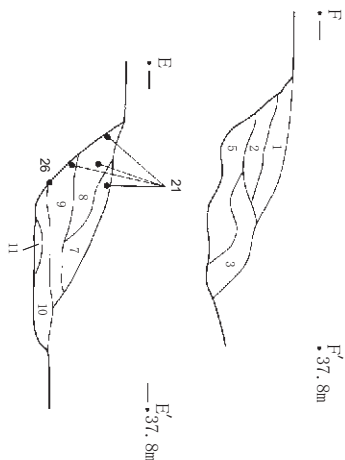
4～15は土師器杯である。おおむね胎土は共通しており、砂粒と赤色スコリアを含んでいる。12、13のみ胎土が異なり、砂粒、赤色スコリアに白色針状物を微量含む。外面体部下端から底部にかけての調整はすべて手持ちヘラケズリであり、4、5、8、11、15は底部中央に回転糸切り痕が見られる。4、6、9、10は体部が内湾しながら開き、口縁部で外反する器形、5、8、11は体部が直線的に開く器形である。7は口径に比して底径が小さく、わずかに内湾しながら開く器形である。色調はにぶい橙色ないしにぶい黄褐色を呈するものが多い。12、13は内面ミガキ及び黒色処理され、12、14の体部外面には墨書が見られる。12は口縁部外面に記号の「○」が記されている。14は体部外面に横位に記された墨書が見られる。口縁部を欠損しているため一部のみであるが、他の出土例から「三倉」と記されていたと思われる。1と4は梯子ピット北側の床面直上から出土している。

16～21は土師器甕である。16、17、19の胎土は類似しており、多量の白色粒子と赤色スコリアを含み、やや脆い。16は底部で胴部外面に煤が付着している。色調は暗赤褐色である。17、19の色調はともににぶい赤褐色である。口唇部の形状がやや異なり、17は緩やかに外反し、19は短く斜め上方につまみ上げられるように収める。18は器形・胎土ともに17、19とは異なっている。胎土に多量の砂粒と赤色スコリア、微量の白色針状物を含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。全体的に器壁が厚く、頸部に輪積み痕を残している。口唇部は丸く収められ、部分的に折り返し状になる箇所も見られる。内面口縁部と胴部の境にヘラナデに



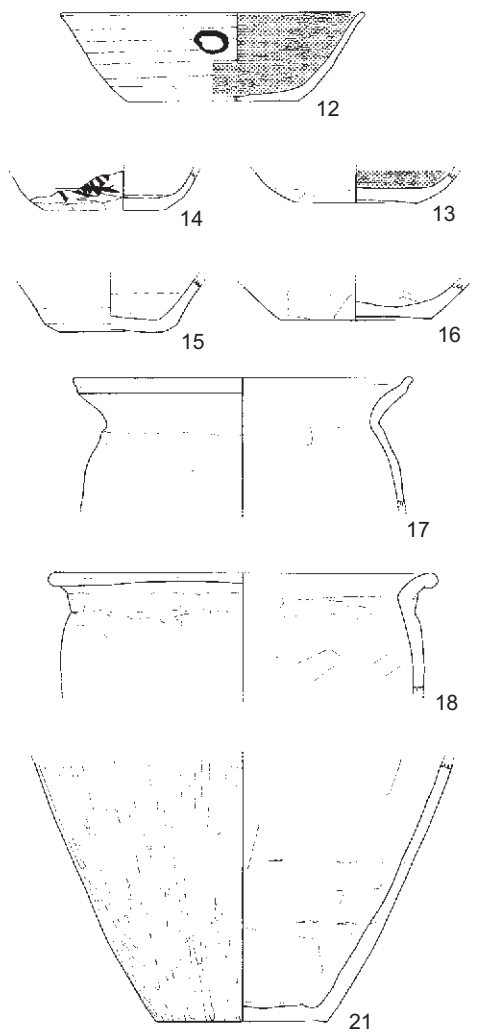
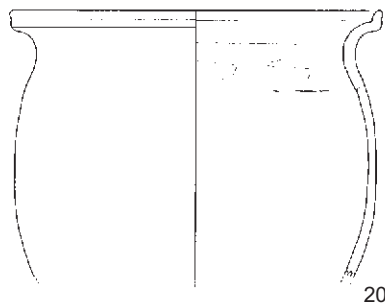
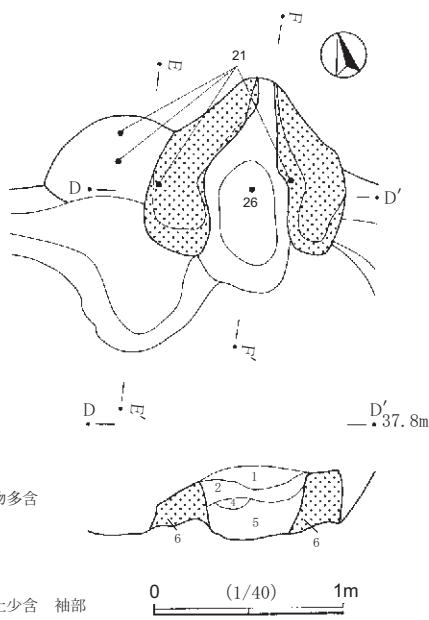
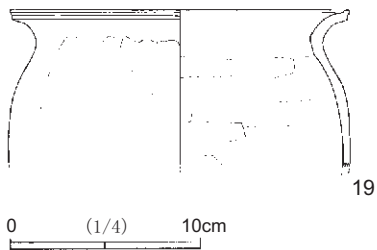
(9) S1204

- 1 黒色土 ローム粒多含 焼土粒少含
- 2 黒褐色土 ローム粒多含 焼土粒少含
- 3 暗褐色土 ローム粒多含

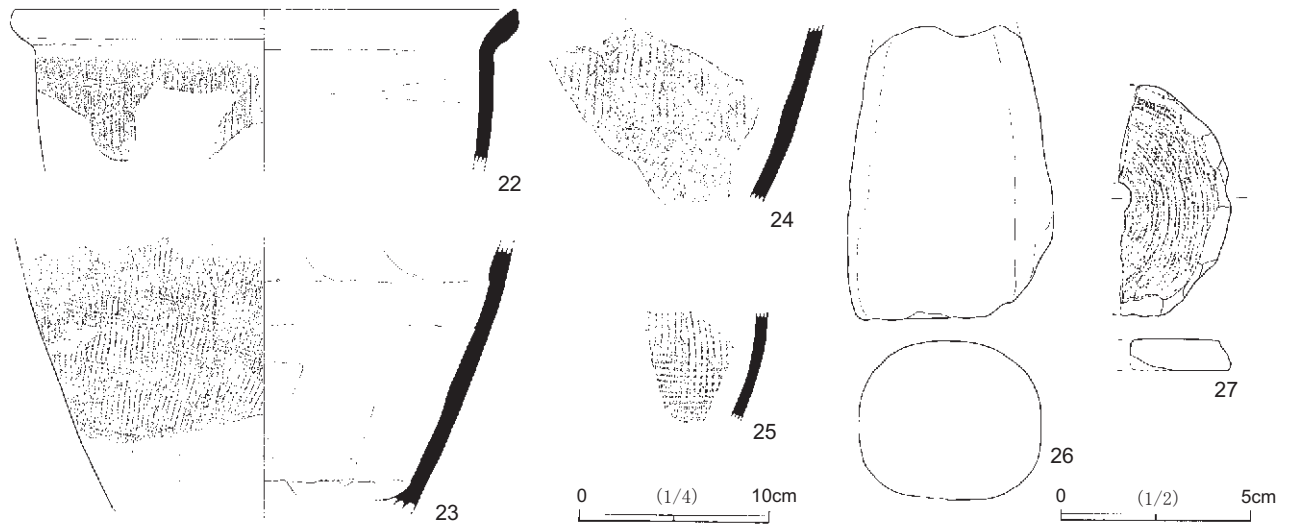


(9) S124カマド

- 1 黒褐色土 ローム粒・山砂・焼土多含 炭化物多含
- 2 暗褐色土 ローム粒・山砂多含
- 3 暗赤褐色土 ローム粒・山砂多含
- 4 暗褐色土 山砂・焼土多含
- 5 暗赤褐色土 山砂・焼土多含
- 6 暗灰褐色土 山砂・ロームブロック多含 焼土少含 袖部
- 7 黒褐色土 山砂少含
- 8 暗灰褐色土 山砂多含
- 9 暗灰褐色土 ロームブロック少含 山砂多含
- 10 暗褐色土 ローム粒多含 山砂・焼土少含
- 11 暗赤褐色土 焼土主体



第116図 (9) S1204①



第117図 (9) SI204②

よる稜が形成されている。20、21は常陸型甕で、胎土に多量の長石、石英粒と雲母を含む。20の色調は内面がにぶい褐色、外面が橙色である。胴部最大径は19.2cmを測り、わずかではあるが口径の方が大きい。口唇部は緩やかに外反する。胴部外面に横方向に平行する線状の痕跡が見られる。叩きに近いが、内面に当たり痕のようなものは見られず、叩き痕かどうか不明である。内外面に煤が付着している。21は胴部下半でカマドから出土している。にぶい黄褐色を呈する。内面底部と胴部の境に強いナデによる凹みが見られる。底部外面の調整は粗く、部分的にケズリ痕が見られるが、基本的には無調整である。

22～25は須恵器甕である。22は最大径を口縁部に有し、胴部が直線的に開く器形で、甕の可能性もある。色調は内面が暗灰黄色、外面が黄灰色で、胎土に多量の白色粒子を含む。胴部外面には叩きが施される。外面の一部と内面の広範囲に煤が付着している。23は胴部下位の破片で、色調は灰黄色を呈する。胎土に多量の白色粒子、雲母、大粒の赤色スコリアを含む。外面は叩きの後胴部下位にヘラケズリを加える。内面はヘラナデで、胴部上位には当て具痕も見られる。24は胴部片で、にぶい褐色を呈し、胎土に白色粒子を含む。叩きが施される。25は叩きが格子状に重なって見える。内面はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色で、胎土に雲母、長石、石英粒を含む。24のみ下総産、他は新治産である。

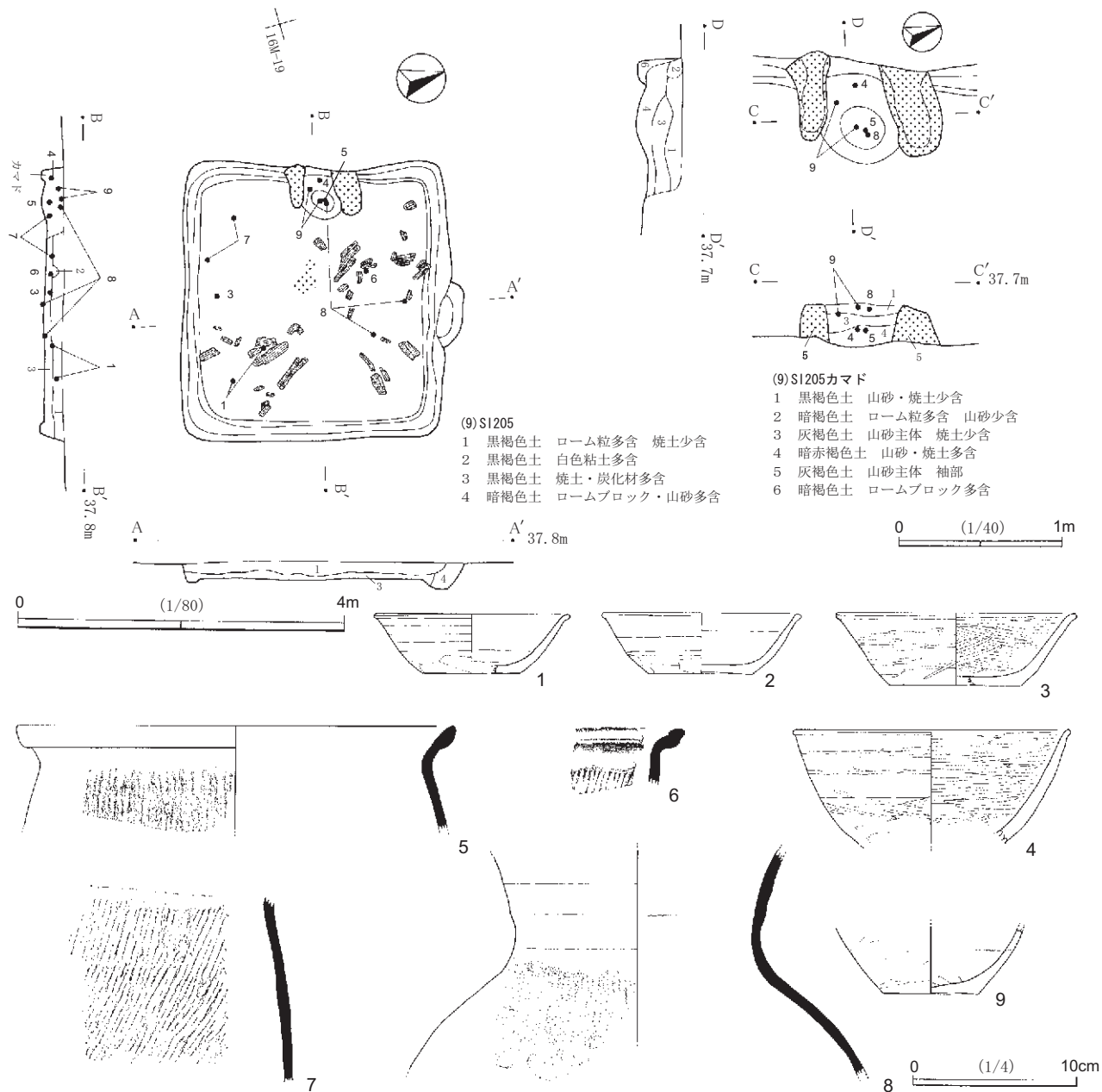
26はやや角張った円柱状の支脚である。頭部を欠損しており、基部も表面が剥離している。砂質を帯び、カマドから出土したため表面は脆い。表面の調整は比較的丁寧で、明黄褐色を呈する。

27は須恵器杯の底部を転用した紡錘車である。回転糸切り痕が残っており、周縁部打ち欠きによって径6cm程の大きさに整えている。孔径は推定0.8cmで、器面の剥離状況から打ち欠き・穿孔とも本来の底部外面側から行われたものと思われる。色調は黒褐色、胎土に白色粒子を含む。

これらの遺物の他に鉄滓が1点出土している。

(9) SI205 (第118図、図版10・58)

16M-09グリッド周辺に位置する。平面形は東西にやや長い方形である。主軸はN-74°-E、規模は主軸長3.32m、幅3.10mを測る。掘り込みは確認面から10.0cm～30.8cmで、床面は攪乱が著しい。カマドは2基検出された。北壁中央に旧カマドの掘り込みが見られ、西壁中央に新たにカマドを設置している。西カマドは煙道部の掘り込みがほとんど無く、ほぼ壁の内側に収まる程度で、遺存状況は良好である。ピットは検出されなかった。床面中央に白色粘土が固まっている箇所があり、全体に炭化材が分布している。



第118図 (9) S1205

周溝は幅14cm～34cm、深さ4cm～10cmで全周する。

遺物は床面から覆土上層にかけて分布する。1～3は土師器杯である。胎土はほぼ類似しており、砂粒と赤色スコリアを含む。色調も橙色で共通している。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリを施す点も共通するが、3のみ内外面にミガキを施す。1、2はミガキを施さないものの、ナデによって平滑に仕上げられている。口唇部は外反し、2は玉縁に近くなる。

4は土師器碗で底部を欠損する。体部は内湾気味に開き、口唇部で外反する。色調は内面が明赤褐色、外面が橙色を呈し、胎土に砂粒、大粒の赤色スコリア、微量の白色針状物を含む。外面の調整は体部下位に手持ちヘラケズリを施した後粗いミガキ、内面は丁寧なミガキである。

5～8は須恵器甕である。5、6はあまり胴部の張らない甕もしくは甕の口縁部片で、5は胎土に多量

の白色粒子と赤色スコリアを含む。色調はにぶい黄褐色で、折り返し口縁は丸く取められる。6の口唇部は内側に折り返した状態になっている。内面の色調は灰黄褐色、外面は暗灰黄色で、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリア、雲母を含む。新治産か。7は胴部片で、色調は赤褐色を呈し、胎土に多量の雲母と白色粒子、赤色スコリアを含む。外面に叩きを施す。新治産である。8は丸く張った胴部に、すぼまった後大きく外傾する頸部が付く。色調はやや黒みを帯びたにぶい黄褐色で、断面は赤褐色を呈する。胎土は5と類似している。下総産である。

9は土師器甕の底部である。薄い作りで橙色を呈し、胎土に赤色スコリアと微量の白色針状物を含む。カマド火床部の覆土上層から出土しており、内面に煤が付着している所がある。

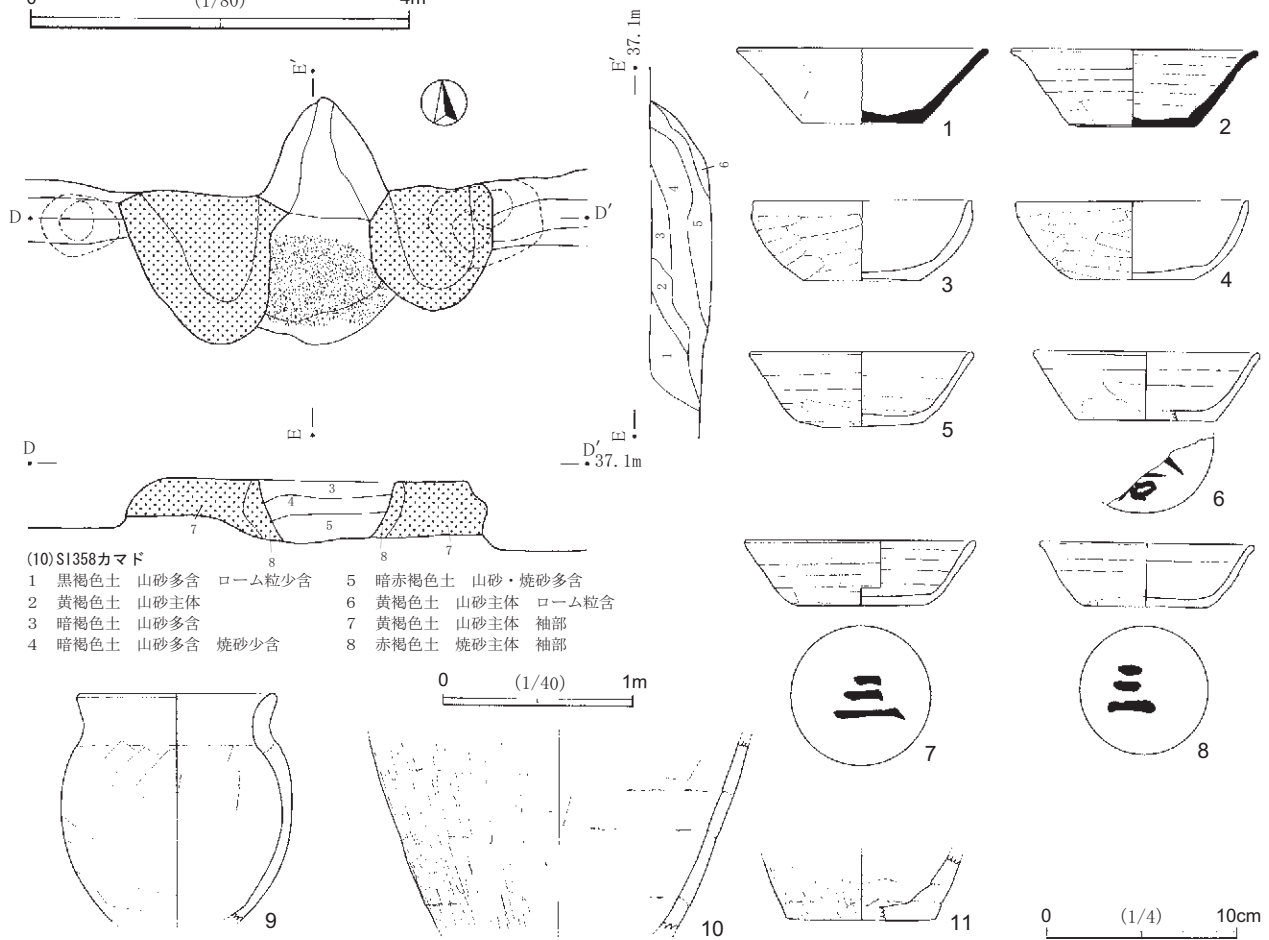
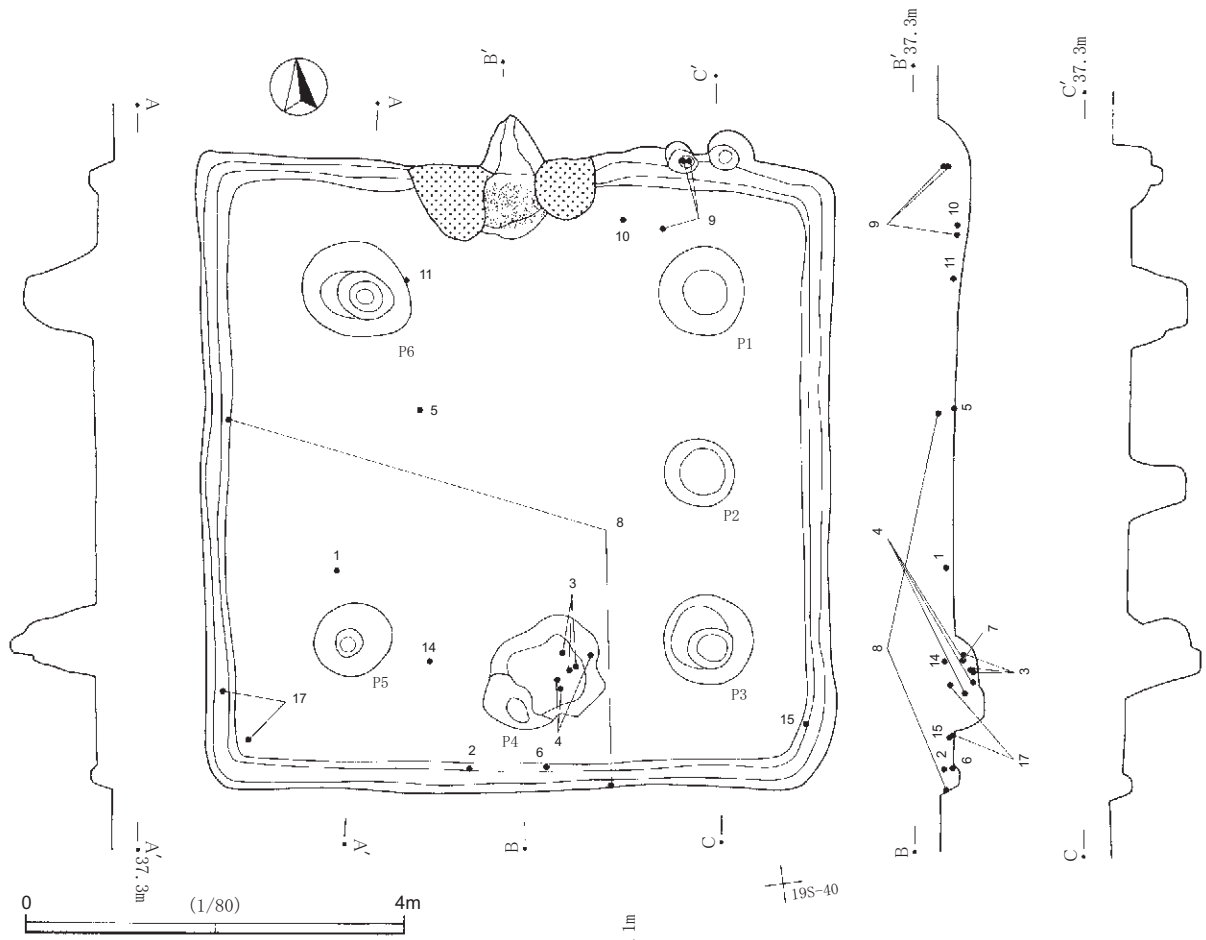
(10) SI358 (第119・120図、図版11・58)

遺跡の東端、19R-18グリッド周辺に位置する。掘立柱建物跡が集中する一角の東側にあたる。平面形は正方形である。主軸はN-6°-E、規模は主軸長6.65m、幅6.62mを測る。本遺跡の同時代の竪穴住居跡の中では大型である。掘り込みは確認面から9.6cm~25.5cmとやや浅い。カマドは北壁中央に設置される。煙道部が住居の壁から50cmほど外側に掘り込まれ、遺存状態は良好であった。ピットは支柱穴5基と梯子ピット1基が検出された。深さはP1が69.5cm、P2が61.3cm、P3が77.3cm、P4(出入り口)が31.3cm、P5が87.6cm、P6が82.6cmである。P1~P3、P6には柱痕跡が認められる。このうちP3は柱痕跡が2か所あり、埋め戻し後やや外側に掘り込んでいることから、わずかにサイズを大きくして拡張したものと思われる。床面の踏み固め面は不明瞭で、部分的にロームブロックが認められる程度であり、全体的には軟弱である。周溝は幅22cm~38cm、深さ4cm~18cmで全周し、北壁東隅付近が一番深い。

遺物は床面から覆土上層にかけて全体に分布する。1、2は須恵器杯である。口径の1/2前後の底部から体部が直線的に開く器形で、2は口縁部で外反する。外面底部全面と体部下端に手持ちヘラケズリが施される。1の色調は灰オリーブ色で、胎土に多量の白色粒子と雲母を含む。2の切り離し方法は回転ヘラ切りのものである。ロクロ目が強くはつきり残っており、内面体部と底部の境には凹みが見られる。色調は灰色で、胎土に多量の白色粒子、小礫、スコリアを含む。いずれも新治産である。このほかに体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリを施す須恵器杯もある。

3、4はロクロ未使用の土師器杯である。胎土は共通しており多量の白色粒子と赤色スコリアを含む。外面口縁部直下までヘラケズリが施され、内面はナデで仕上げられる。3の底部中央には木葉痕らしきものが残っている。色調は3の内面が極暗赤褐色、外面が黒褐色、4は赤褐色を呈する。

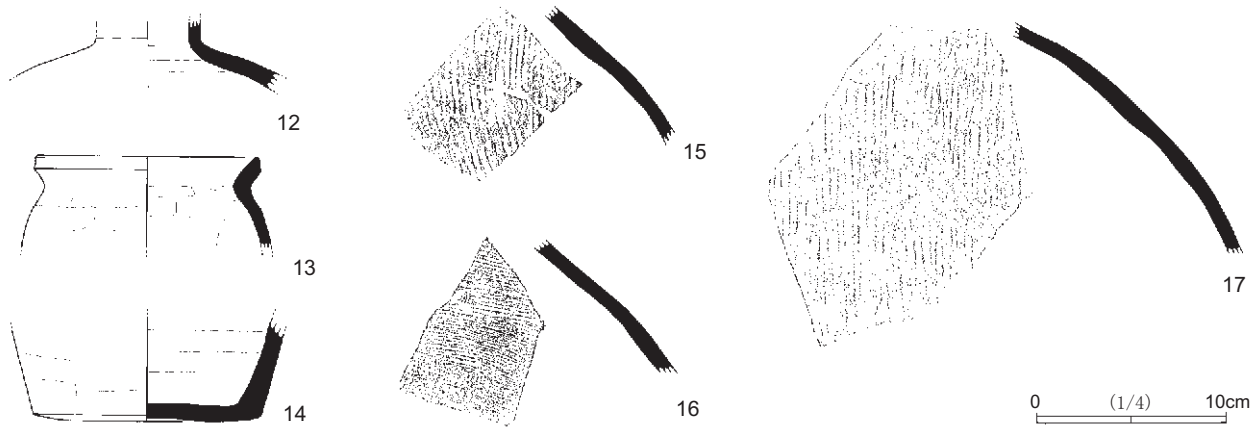
5~8はロクロ使用の土師器杯である。5は底部ヘラケズリによって凹凸が生じた杯である。回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリを加える際、挟り取るように削っている。6は体部が直線的に開く杯で、外面体部下半から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。底部外面に「倉」と思われる墨書が見られる。7は体部が直線的に開く杯で、底部回転糸切りの後体部下端と底部周縁に手持ちヘラケズリが施され、体部の立ち上がりは曖昧である。口縁部内外面に油煙が付着しており、器面には被熱による剥離も見られる。底部外面に「三」の墨書が記されている。梯子ピット北側の掘り込みからの検出である。8は口径に比して底径がやや大きい杯である。わずかに内湾しながら開く体部は口唇部で外反する。底部回転糸切りの後体部下端と底部周縁部に手持ちヘラケズリを施す。底部外面に「三」の墨書が見られる。底部は文字部分も含めて3片に割れ、西壁と南壁の周溝覆土から検出された破片が接合した物である。いずれも色調は橙色で、5、8は白色粒子と赤色スコリア、6、7は砂粒と赤色スコリアを含む胎土である。



(10) SI358カマド

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1 黒褐色土 山砂多含 ローム粒少含 | 5 暗赤褐色土 山砂・焼砂多含 |
| 2 黄褐色土 山砂主体 | 6 黄褐色土 山砂主体 ローム粒含 |
| 3 暗褐色土 山砂多含 | 7 黄褐色土 山砂主体 袖部 |
| 4 暗褐色土 山砂多含 焼砂少含 | 8 赤褐色土 焼砂主体 袖部 |

第119図 (10) SI358①



第120図 (10) SI358②

9は土師器小型甕である。被熱による器面の剥離が著しい。胴部中位に最大径を有し、12.3cmを測る。肥厚する口縁部は緩やかに外反し、端部を丸く収めている。色調はにぶい黄橙色で、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。10、11は常陸型の土師器甕である。10は胴部片で、外面の色調は橙色、内面はにぶい褐色を呈する。胎土に多量の雲母と長石・石英粒、赤色スコリアを含む。11は底部片で、底部外面にはヘラケズリが施されている。色調はにぶい褐色で、胎土に多量の長石・石英粒、雲母を含む。被熱により煤や赤く焼けた部分が見られる。

12は灰釉陶器壺の頸部下位から肩部にかけての破片である。外面全面と頸部内面に釉が掛かっている。色調は灰色で、胎土に白色粒子、スコリアを含む。気泡により器面が膨れている所が見られる。

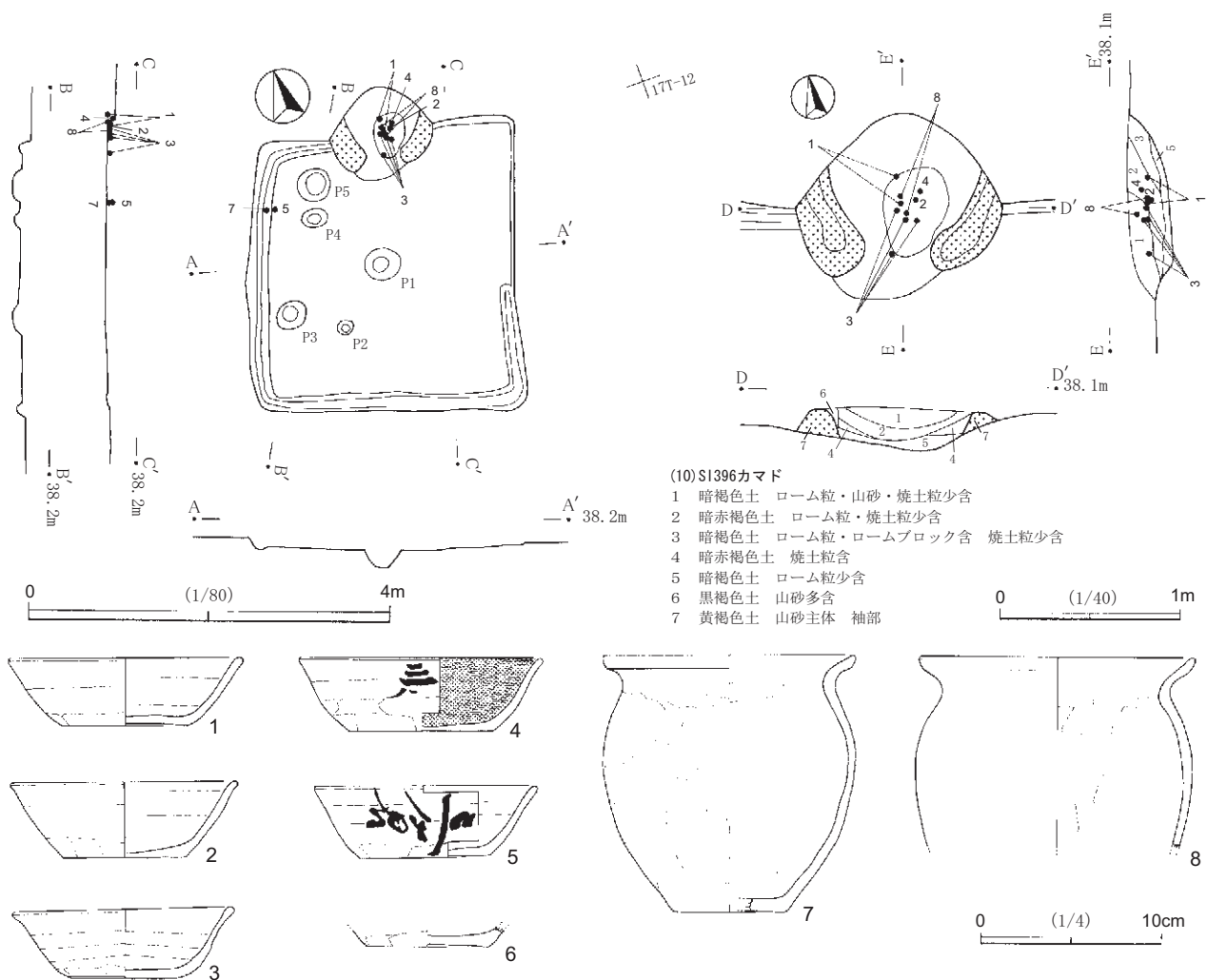
13～17は須恵器甕である。13は口縁部で色調は浅黄色、胎土に白色粒子を含む。新治産か。14は底部である。胴部外面はヘラケズリで、上端にわずかに叩き目が見られる。底部外面は無調整である。内面の色調は灰黄褐色、外面はにぶい黄橙色を呈する。胎土に雲母、白色粒子を含む。15～17は胴部片である。いずれも外面に叩きが施される。15、16は胎土に雲母を含む。17は内面褐灰色、外面灰黄褐色で、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。17のみ下総産、他は新治産である。

本住居跡からは鉄滓が1点出土している。

(10) SI396 (第121図、図版11・58)

17T-00グリッド周辺に位置する。平面形は南北に長い方形である。主軸はN-19°-E、規模は主軸長3.24m、幅2.98mを測る。掘り込みは確認面から3.6cm～13.5cmとかなり浅い。カマドは北壁中央に設置され、遺存状態は良好である。ピットは床面西側から5基検出された。深さはP1が19.5cm、P2が11.9cm、P3が9.0cm、P4が7.1cm、P5が8.9cmである。このうちP1、P2は住居に伴うものと考えられる。P3、P4は覆土がP1、P2と異なり、住居に伴わない可能性がある。P5はカマド脇にあるため、何らかの施設の可能性が考えられる。周溝は幅16cm～24cm、深さ1cm～8cmで、カマド東脇から東壁中程にかけて途切れる。

カマドからややまとまって遺物が出土している。1～6は土師器杯である。1はわずかに内湾しながら開く杯、2は口縁部が緩やかに外反する杯で、外面体部下端から底部にかけての調整はともに手持ちヘラケズリである。色調はにぶい橙色で、1は内外面に煤が付着している。3は口縁部が肥厚し外反する杯である。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施され、底部からの立ち上がりは曖昧になっている。色調は浅黄橙色である。4は内面ミガキ及び黒色処理される杯である。やや大きめの底部から内湾



第121図 (10) SI396

気味に立ち上がり、口縁部で外反する。底部回転糸切り後、底部全面と体部下位に手持ちヘラケズリが施される。口縁部外面に「三倉」と思われる墨書が正位に記されている。「倉」の字は器面が荒れているため判然とせず一部のみの残存であるが、他の墨書の出土例から「倉」と推定した。5は体部外面に墨書が見られる杯である。横位に「三倉」と記されている。底部外面の調整は4と同じく回転糸切りの後底部全面と体部下端に手持ちヘラケズリが施される。完形品であるが、墨書と対面する位置が割れ、接合している。同位置の外面、口縁部から底部にかけて広範囲に黒斑が見られる。意図的なものがあるのかどうかは不明である。色調は4、5とも明黄褐色である。本住居跡出土の杯、甕とも胎土は共通しており、多量の砂粒と赤色スコリアを含むが、ごく微量白色針状物を含むものもある。6は底部のみの遺存であるが、割れ口が若干摩滅しているため、意図的に打ち欠いたものと思われる。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。色調はにぶい黄橙色である。小片のため図化はしていないが、口縁部外面に墨書の見られる杯もある。

7、8は土師器甕である。7の胴部最大径は口径と同じ14.0cmを測る。胴部外面はヘラケズリによって面が形成されている。内面の色調は暗褐色、外面はにぶい黄褐色を呈し、内外面に煤の付着が見られる。8も口径、胴部最大径ともに同じで15.4cmを測る。口唇部はわずかにつまみ上げるように仕上げられる。内面の色調は明黄褐色、外面はにぶい黄橙色で、内外面に煤の付着が見られる。

(10) SI412 (第122～124図、図版11・58・69・70)

遺跡の東端、19R-62グリッド周辺に位置する。掘立柱建物跡が集中する一角の南東側にあたる。平面形は東西にやや長い長方形で、南隅がわずかに調査区外にかかる。主軸はN-2°-E、規模は主軸長6.53m、幅6.76mを測る。本遺跡の奈良・平安時代の竪穴住居跡の中では(10)SI358と同様大型の住居である。掘り込みは確認面から12.6cm～28.5cmとやや浅い。カマドは北壁中央に設置され、遺存状態は良好である。ピットは主柱穴4基と梯子ピット1基、壁柱穴14基が検出された。主柱穴の深さはP1が88.0cm、P2が77.2cm、P4が84.8cm、P5が63.9cmである。梯子ピットであるP3は南北に2個連結したような形状で、深さはそれぞれ北側が45.0cm、南側が54.4cmである。壁柱穴は径22.0cm～34.0cm、深さ14.5cm～45.7cmで、おおむね東側の壁柱穴の方が深い。床面は平坦で、北側から炭化材が出土している。周溝は幅28cm～72cm、深さ2cm～14cmで全周する。覆土は山砂を含んだ焼土が主体である。

遺物は床面から覆土上層にかけて全体に分布している。1は須恵器杯蓋で、円筒状のつまみ部分が残存している。白色粒子を多く含み、色調は灰色である。2は須恵器杯である。内面はにぶい黄橙色、外面は灰黄色、多量の白色粒子と大粒の赤色スコリアを含む。被熱のためか断面は赤褐色を呈し、芯の部分が所々灰色をとどめている。外面底部及び体部下端の調整は回転ヘラケズリである。いずれも下総産である。

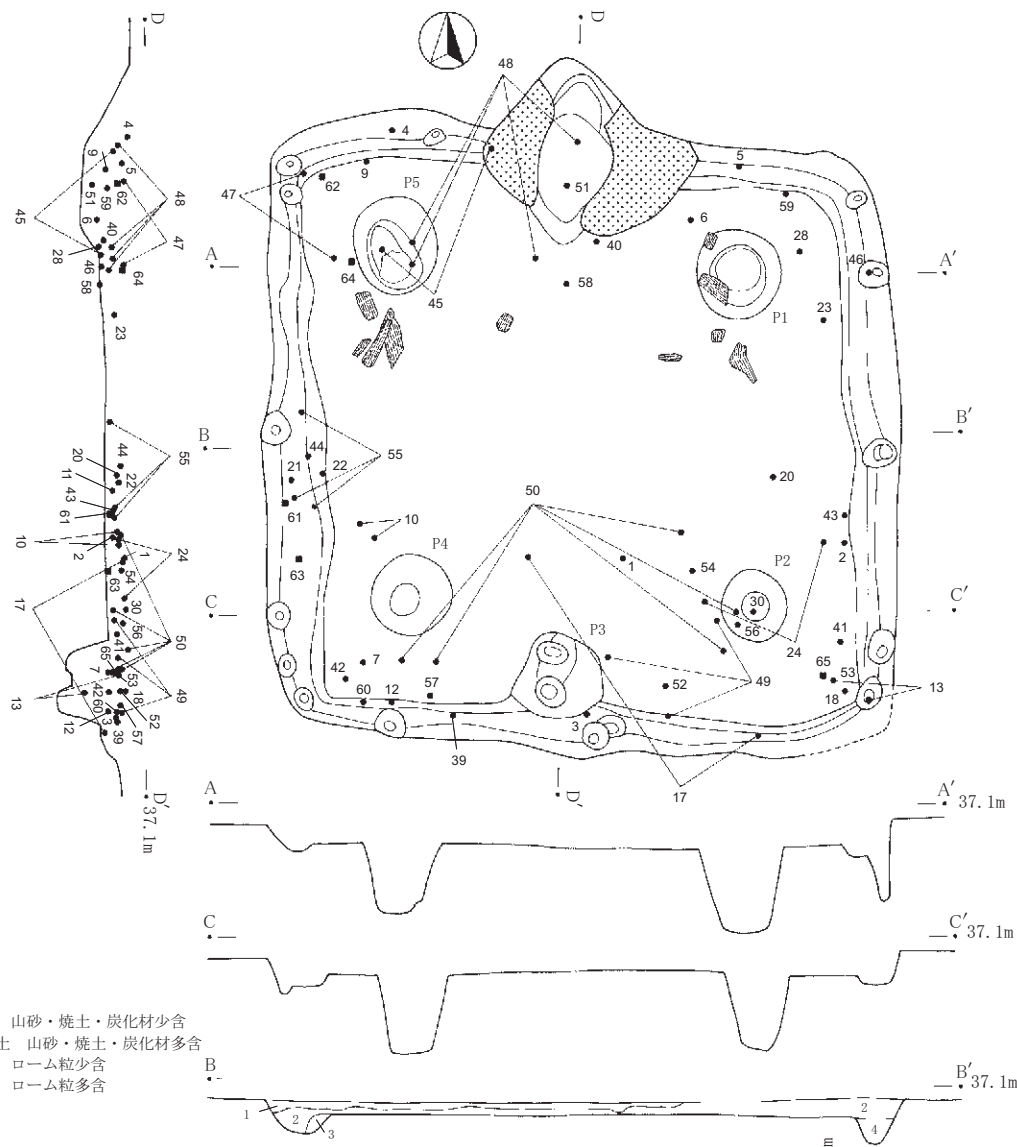
3～39は土師器杯である。9～13、20、25～29の内面調整はミガキで、11～13、20、25～28は黒色処理が施される。また、12～19、25～38の口縁部・体部外面には墨書が見られる。外面体部下位から底部にかけての調整は、確認できるものは全て手持ちヘラケズリである。胎土は多量の砂粒と赤色スコリアを含むものがほとんどで、4、5はやや砂質を帯びている。20、28は微量の白色針状物を含み、28は少量の雲母も混入している。12、25、26に含まれる砂粒は細かい。11はやや砂質を帯び他と若干胎土が異なる。

墨書は多数出土しており、総数65点を数える。そのうち文字を判読できるものを図化した。はっきりと「三倉」と判読できるものは8点、「三倉」と推測されるもの5点、「三」と推測されるもの1点、「倉」と推測されるもの8点である。墨書の向きは、正位に縦書きされたものは3点で、全て「三倉」と判読できる。横位のもの19点で、このうち口縁部を上にして右向きに記されたものが12点、左向きが7点であった。また、図化していない破片43点中「三」と推測されるもの3点、「倉」と推測されるものが4点ある。他は残画のみで判読は難しい。墨書の記されている部位は口縁部外面が19点、体部外面が18点、底部外面が1点である。内面黒色処理される杯は6点ある。16は太書きで、肉眼でも筆の運びが確認できる。17は口縁部をほとんど欠いており、体部外面に記された墨書も欠落している。半折された一方の底部内面に墨痕が広がっている。37は良く焼き締まっており、そのせいか墨痕がくっきりしている。35も墨痕がかなり濃い。「三倉」と思われるが、「倉」の字はかなり変形している。

40は土師器高台付皿である。口縁端部が外反する皿にやや低めの高台が付く。内面の調整はミガキ、底部外面は回転ヘラケズリである。胎土は土師器杯と同様砂粒と赤色スコリアを含む。色調は橙色である。

41、42は土師器碗である。42は口縁部、底部ともに欠損するが、41とほぼ同様の分量になるものと思われる。胎土に砂粒と赤色スコリアを含み、色調は41が橙色、42が浅黄橙色を呈する。

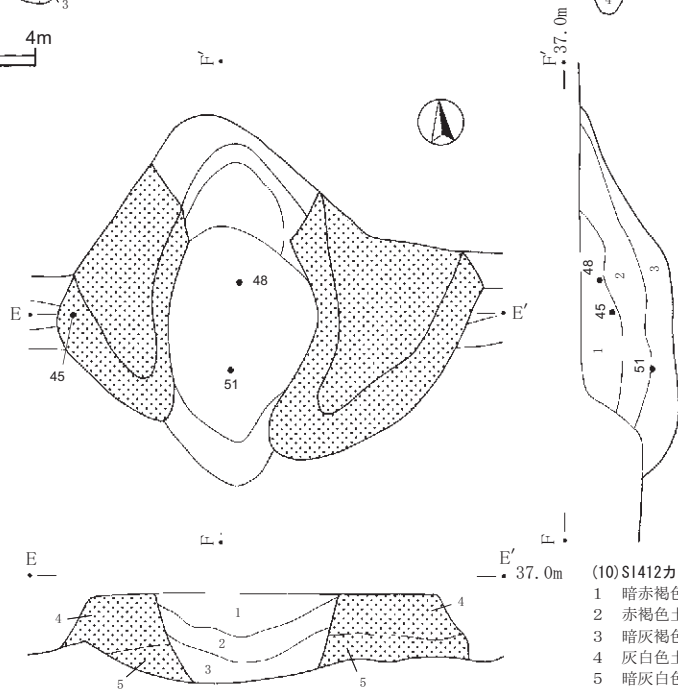
43～45、48～54は須恵器甕、46、55～57は須恵器甌、47は須恵器壺である。43、44は新治産で、口縁部が「ハ」の字状に開く。43は灰白色を呈し、胎土に多量の長石、石英粒、雲母を含む。器面の荒れが著しく、調整は不明瞭である。44は折り返し状口縁の端部をつまみ上げている。色調は灰色、胎土は白色粒子とスコリアを含みやや脆い。ロクロによる横撫で調整で、外面には緩やかなロクロ目が残る。45、46、51は白色粒



(10) SI412

- 1 黒褐色土 山砂・焼土・炭化材少含
- 2 暗赤褐色土 山砂・焼土・炭化材多含
- 3 暗褐色土 ローム粒少含
- 4 暗褐色土 ローム粒多含

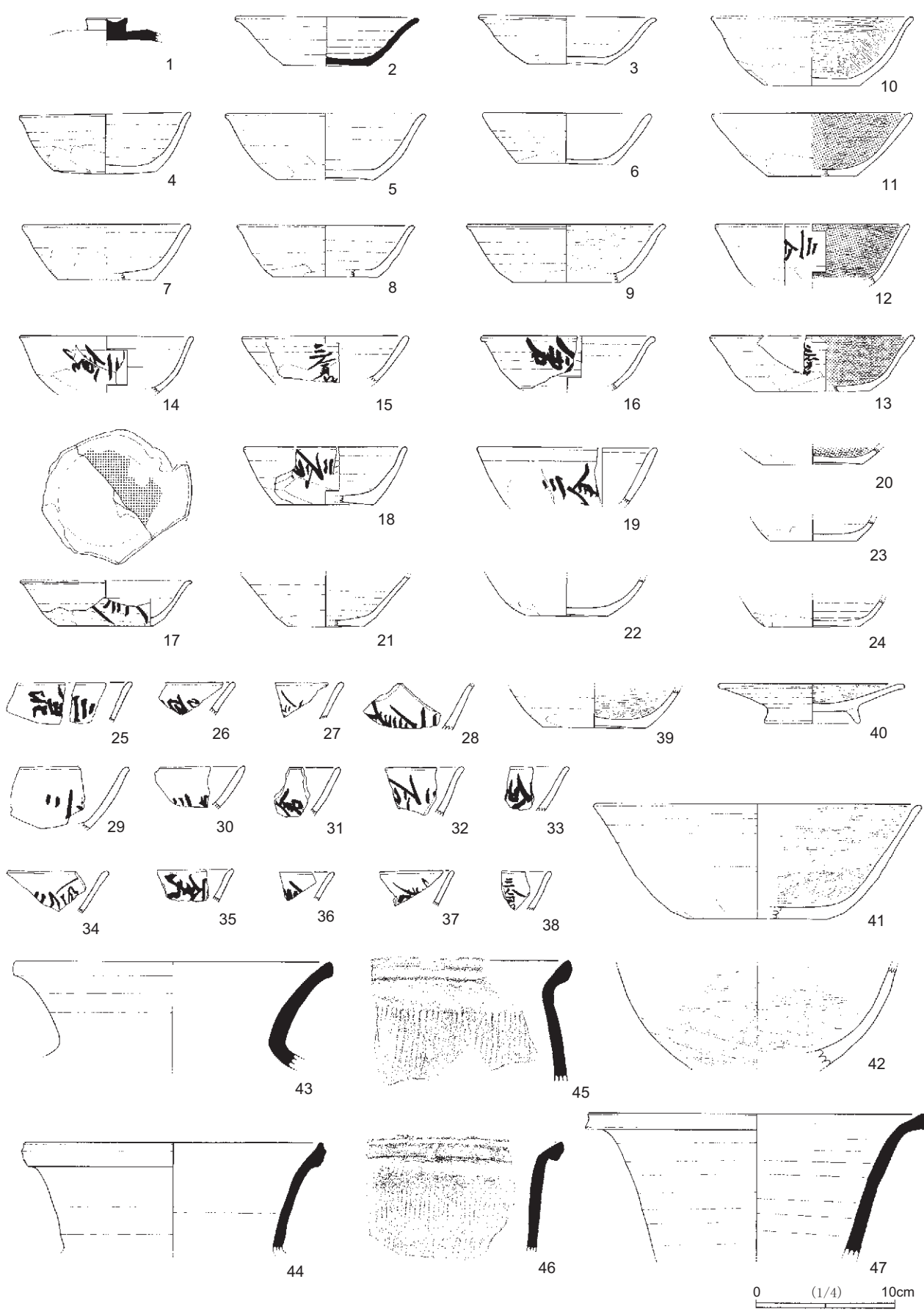
0 (1/80) 4m



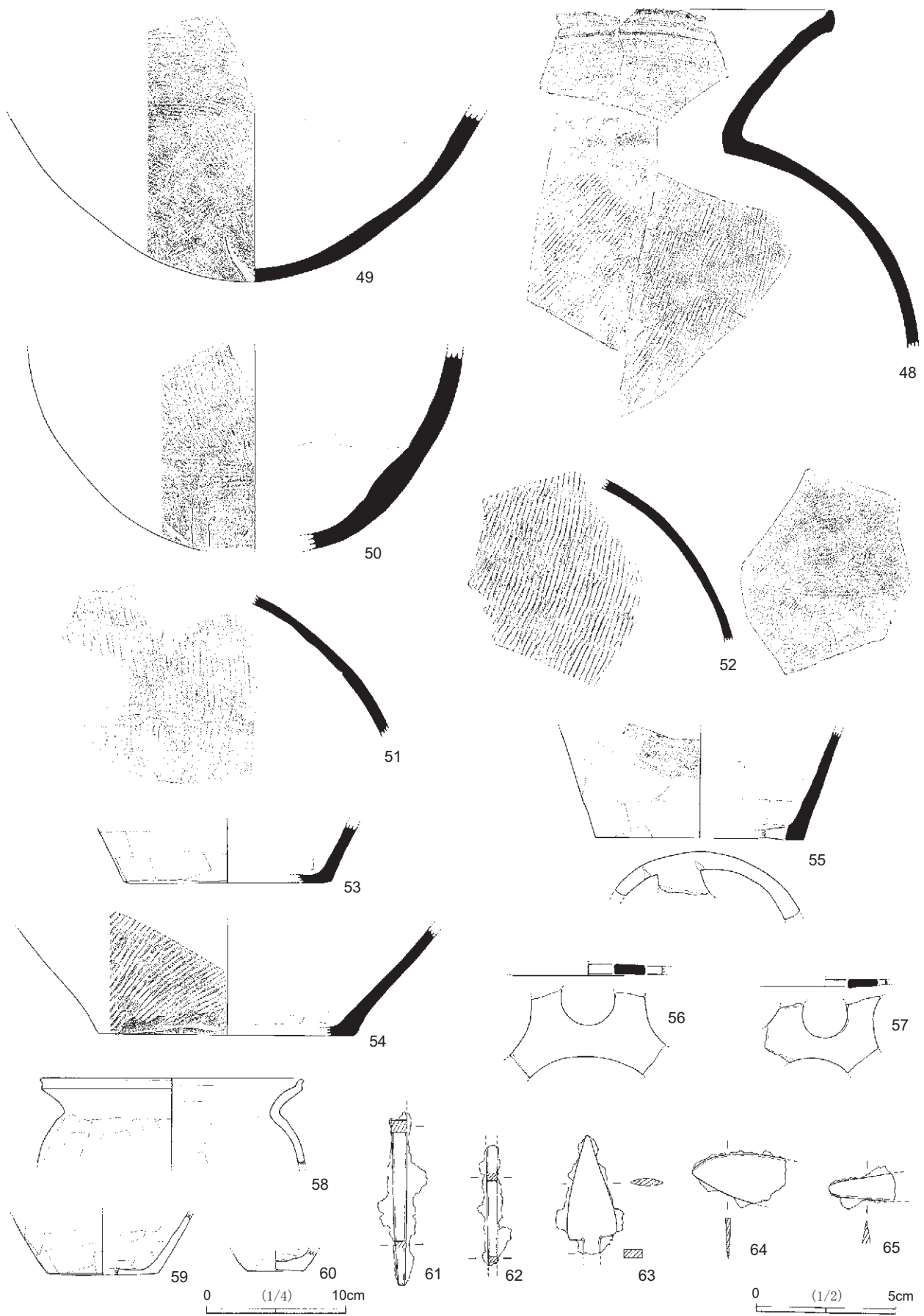
(10) SI412カマド

- 1 暗赤褐色土 焼砂多含
- 2 赤褐色土 焼砂主体
- 3 暗灰褐色土 山砂多含 焼砂少含
- 4 灰白色土 山砂主体 焼砂少含 袖部
- 5 暗灰白色土 山砂主体 ローム粒少含

第122図 (10) SI412①



第123图 (10) SI412②



第124图 (10) SI412③

子、スコリアを含む下総産の須恵器で、外面に叩きが見られる。いずれも内面の当て具痕は不明瞭である。47は灰白色を呈する東海産の壺口縁部で、胎土に白色粒子、スコリアを含む。口縁部は「ハ」の字状に開いた後水平方向に延び、端部が斜め下方につまみ出される。内外面に釉が掛かっている。48は丸く張った胴部に「ハ」の字状に大きく開く口縁部をもち、口縁端部はつまみ上げられる。色調は灰色、胎土に長石、スコリアを含み、5mm前後の小礫も見られる。口縁部の調整はロクロによるナデ、胴部外面は叩きである。胴部内面には同心円状の当て具痕が残っている。東海産もしくは北武蔵産か。

49、50は丸底で大型の甕である。外面に叩き目を持ち、内面はヘラナデで仕上げられる。49は比較的丁寧な作りで、胴部外面には赤色の釉が掛かっている。色調はにぶい赤褐色、胎土に多量の白色粒子を含む。焼成は堅緻で、焼き締め陶器のような印象である。猿投産か。50はかなり厚みをもっており、器面に凹凸が残る。底部内面に釉が溜まっており、外面も底部近くまで釉が流れて付着している。色調は灰白色、胎土に白色粒子、スコリアを含む。東海産である。52は甕の胴部片である。内面黒褐色、外面は黒色を呈し、釉が付着しているものか、光沢を帯びている。外面の調整は叩き、内面は同心円状の当て具痕が残る。53、55は45、46、51と同様の胎土で、53は被熱による器面の剥離が著しい。54は底径19.0cmと推測される甕の底部片である。色調は内面が灰色、外面が灰オリーブ色を呈し、胎土に多量の白色粒子を含む。胴部外面は叩きで光沢を帯びている。49同様非常に堅緻である。52、54はともに東海産である。

55～57は五孔の甕である。55の表面の色調は黒色で、断面は赤褐色を呈する。56は灰白色を呈し、堅緻で丁寧な作りである。57は多量の白色粒子と赤色スコリアを含む下総産の須恵器で、明褐色を呈する。

58は土師器甕の口縁部である。肩部は丸く、口唇部はつまみ上げるように作られる。胎土は杯と同様である。色調は明褐色を呈する。被熱により器面が荒れている。59は土師器甕の底部、60は土師器小型甕の底部である。胎土は杯と同様で、60には微量の白色針状物が含まれる。

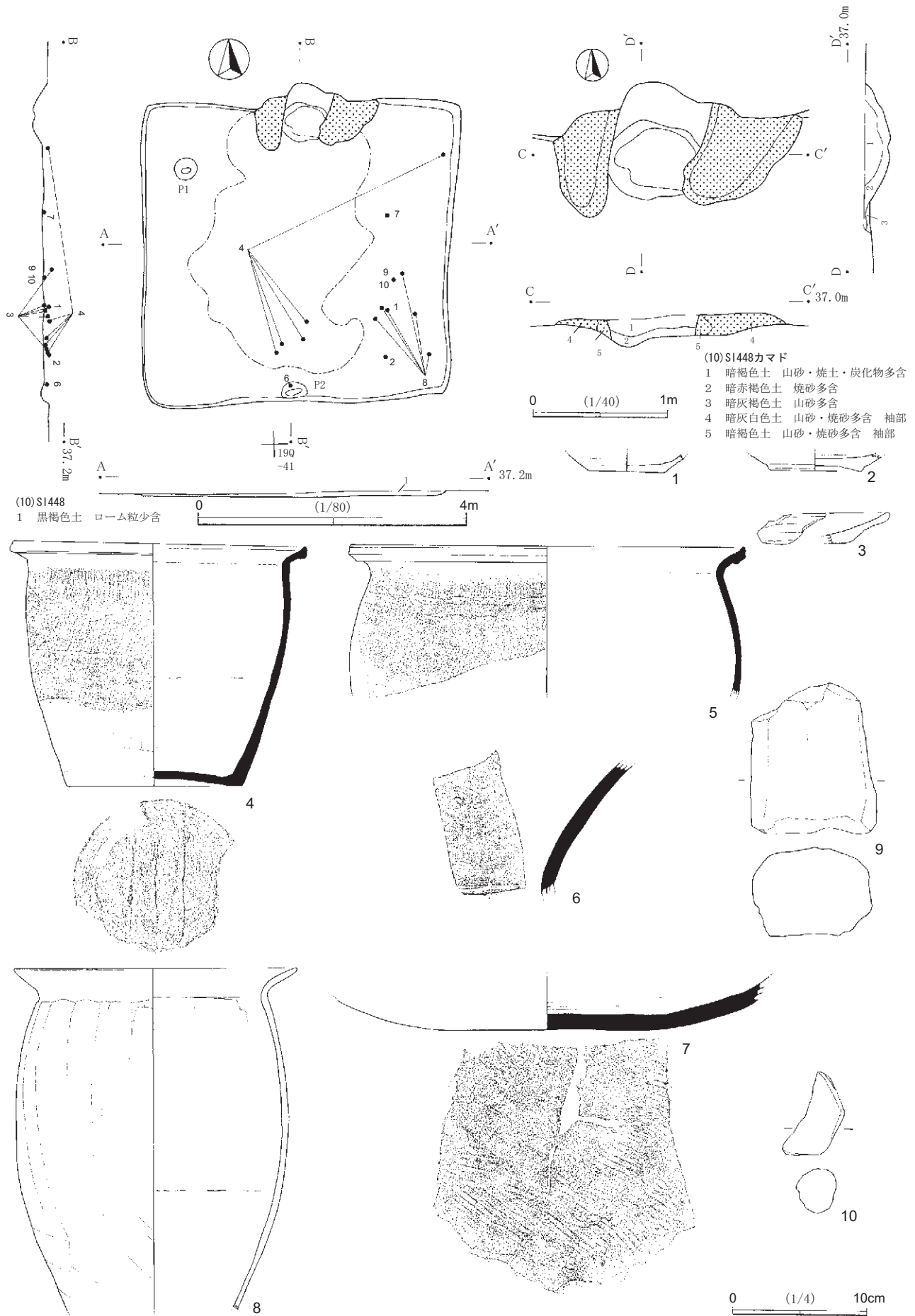
61～65は鉄製品である。61、62は断面四角形の棒状製品で、鉄鏃の棒状部もしくは釘の可能性はある。63は鉄鏃、64は穂摘具、65は刀子である。65は南東隅の床面直上からの出土である。

(10) SI448 (第125図、図版11・58)

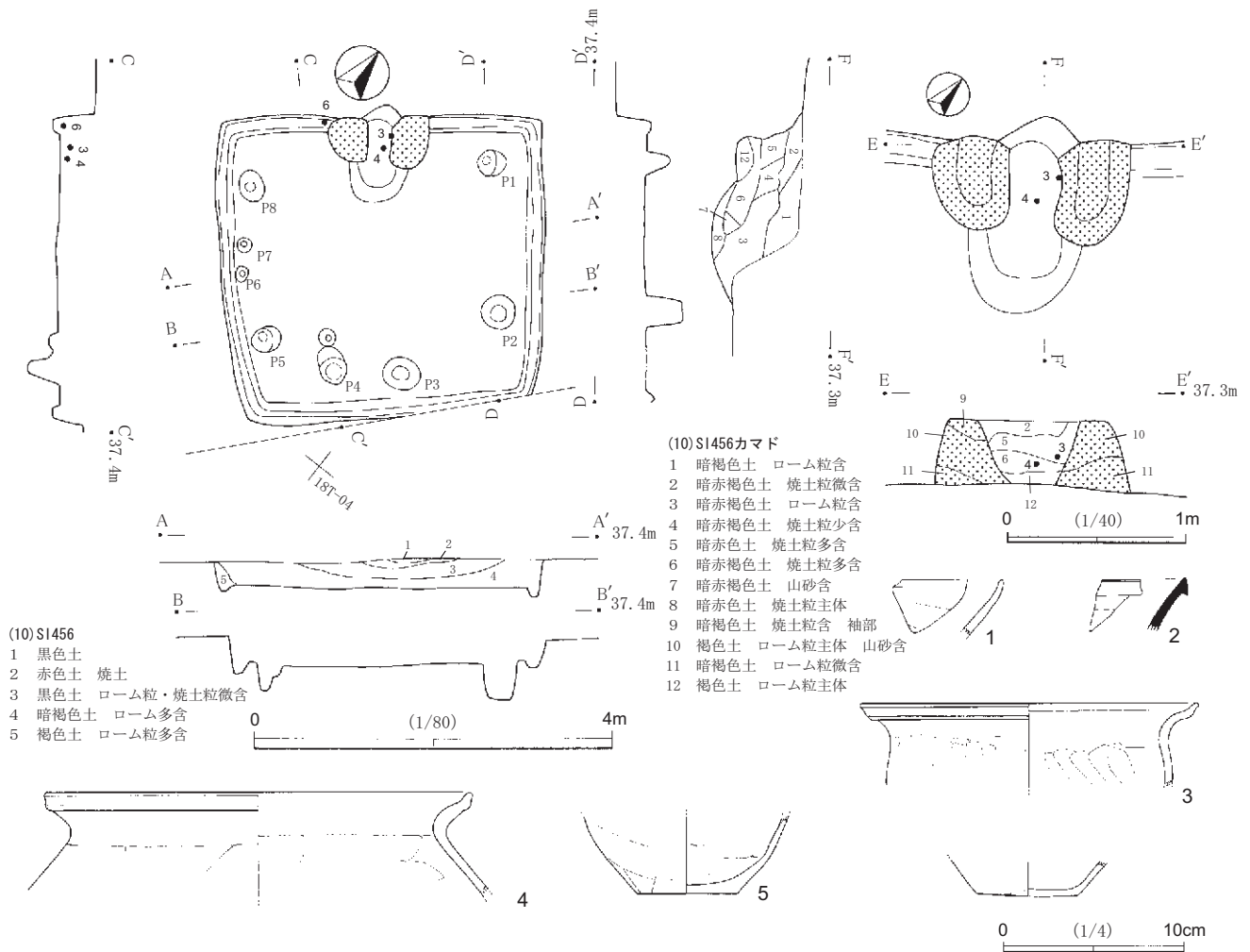
19Q-20グリッド周辺に位置し、掘立柱建物跡が集中する一角の西側にあたる。平面形は正方形に近く、主軸はN-4°-E、規模は主軸長4.48m、幅4.53mを測る。掘り込みは確認面から1.3cm～9.0cmと非常に浅い。カマドは北壁中央に設置されるが、攪乱により著しく破壊されており、煙道の掘り込みは不明瞭である。火床の一部は赤色硬化している。ピットは床面北西からP1、南壁際中央からP2が検出された。深さはP1が27.2cm、P2が6.0cmである。床面中央がよく踏み固められている。周溝は巡らない。

遺物は住居南東の床面直上から覆土中層にかけて分布している。1は土師器杯の底部である。破碎しているものの、底部はほぼ遺存する。色調は橙色、胎土に砂粒、赤色スコリア、雲母を含む。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。2は低い高台が付く土師器碗で、底部の1/2ほどが遺存する。色調はにぶい黄褐色、胎土にやや多めの砂粒と赤色スコリアを含む。内面の調整はミガキ、外面は回転ヘラケズリの後外周部ナデで、削り出し高台と思われる。3は土師器皿である。ごく一部の遺存で、色調は明赤褐色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。体部が直線的に開き、口縁端部で肥厚しわずかに内湾する。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。

4～7は須恵器甕である。4は口縁部に最大径をもつ甕で、口唇部は受け口状を呈する。内面の色調は橙色、外面は明赤褐色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリア、砂粒を含む。胴部外面上半には叩き、下



第125図 (10) SI448



第126図 (10) SI456

半はヘラケズリ、内面にはヘラナデが施される。底部には回転台の圧痕が見られる。5はやや丸く張った胴部に折り返し状の口縁部が付く形で、口唇部は受け口状を呈する。色調は灰色、胎土に多量の白色粒子とスコリアを含む。胴部外面は叩き、内面はナデである。6は長頸を呈する甕の頸部片である。内面の色調はオリーブ灰色、外面はオリーブ黒色を呈する。胎土に砂粒、スコリア、小礫を含む。7は甕の底部片である。器壁が厚く、底部からの立ち上がりが曖昧である。色調は赤褐色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリア、砂粒を含む。胴部外面遺存部上位にヘラケズリの痕が見え、その後叩きを施している。底部外面は無調整、内面は横撫で仕上げられる。6のみ東海産、他は下総産である。

8は口縁部に最大径を有する土師器甕で底部を欠損する。器壁は薄く、口縁部は「く」の字に大きく外反する。内面の色調はにぶい赤褐色、外面は明赤褐色を呈する。胎土に砂粒を含む。胴部外面全体に山砂が付着しており、胴部下位には煤も付着している。

9は支脚である。先端部・基部ともに欠損している。表面は面取りされ、多角形を成す。10は脚付土器の脚部分で、上端は接合面で剥離している。色調は橙褐色である。砂質で脆く全体的に表面が剥離している。1脚のみの残存であるため、全体像は不明である。9、10は住居の中央東側、床面直上からの出土である。

(10) SI456 (第126図、図版11・12)

17T-83グリッド周辺に位置し、南東壁の一部が調査区外にかかる。平面形は北西壁に比して南東壁が

やや短く台形に近い。主軸はN-40°-W、規模は主軸長3.35m、幅3.62mを測る。掘り込みは確認面から24.2cm~40.2cmで、北隅が一番深い。カマドは北西壁中央に設置され、遺存状態は良好である。ピットは壁際から8基検出された。深さはP1が27.0cm、P2が40.6cm、P3が23.1cm、P4が34.8cm、P5が34.6cm、P6が32.5cm、P7が40.1cm、P8が12.3cmである。周溝は幅14cm~25cm、深さ3cm~10cmで全周する。

出土遺物は少なく、カマド火床部覆土中層から3、4などが検出された。1は土師器杯の口縁部片である。体部が直線的に開いた後、口唇部で内湾する。外面は口唇部直下までヘラケズリが施される。内面の色調は赤褐色、外面は明赤褐色で、胎土に多量の白色粒子を含む。

2は須恵器甕もしくは壺の口縁部片である。内面の色調は暗緑色、外面は緑灰色で胎土にスコリア、白色粒子と小礫を含む。内面から口縁部外面にかけて釉が付着している。東海産である。

3~6は土師器甕である。3は口縁部に最大径をもつ。口唇部は弱いS字を描く。内面の色調は赤褐色、外面はにぶい赤褐色、胎土に多量の白色粒子と赤色スコリアを含む。4は常陸型甕の口縁部片で明褐色を呈し、胎土に多量の長石、雲母を含む。5、6は甕の底部である。とも3に類似した胎土で、5は赤褐色、6は明褐色を呈する。

(10) SI536 (第127図、図版12・59)

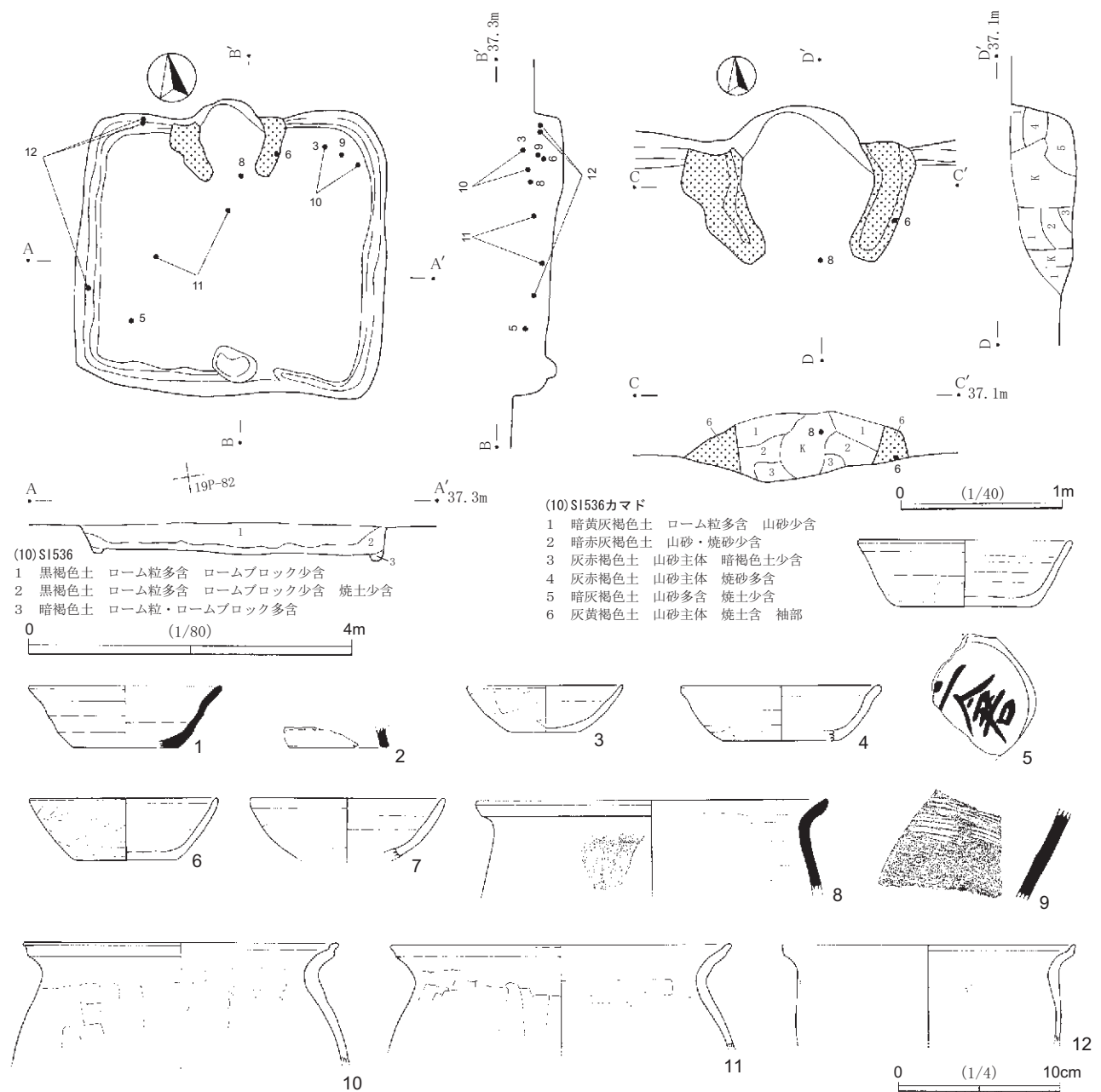
19P-61グリッド周辺に位置する。平面形は東西にやや長い方形である。主軸はN-10°-E、規模は主軸長3.50m、幅3.86mを測る。掘り込みは確認面から27.0cm~35.5cmである。カマドは北壁中央に設置されるが、火床部の攪乱が著しく不明瞭である。ピットはカマドと向かい合う南壁中央からP1が検出された。深さは20.0cmである。周溝は幅12cm~30cm、深さ5cm~12cmで、南壁中央、P1の東側でわずかに途切れる以外は全周する。

遺物は覆土中に散在している。1は須恵器杯である。ロクロ目が強くはっきりしている。色調は灰オリーブ色、胎土に白色粒子を含む。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。下総産である。2は須恵器高台付杯の高台部分である。灰色を呈し、白色粒子を含む。開きは弱く、断面四角形を呈する。新治産である。

3~7は土師器杯である。3、6、7は手持ち調整と思われる杯で、外面口唇部直下までヘラケズリが施される。3は小さめの底部から体部が内湾気味に開く器形である。内面の色調は明赤褐色、外面はにぶい褐色で、胎土に砂粒と大粒の赤色スコリアを含む。6はカマド右袖から出土した。外面全体に煤が付着している。色調はにぶい橙色、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。体部がわずかに内湾しながら開く器形である。7は底部を欠損する。色調は明黄褐色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。4は内湾する体部に緩やかに外反する口縁部が付く。色調は明赤褐色、胎土に白色粒子、赤色スコリアを含む。口唇部に煤の付着が見られる。5は底部外面に「三倉」の墨書が見られる。口径と底径の差が小さく、箱形を呈する。底部回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリが加えられる。色調は赤褐色で、胎土に多量の白色粒子と砂粒、赤色スコリアを含む。出土地点は南西コーナー付近の覆土上層である。

8、9は須恵器甕である。8は折り返し状口縁で、端部が丸く仕上げられる。色調は褐色、胎土に白色微粒子を含む。胴部外面は叩きが施される。内面の当て具痕ははっきりしない。9は新治産の甕の胴部片である。胎土に多量の長石・石英粒、雲母を含み、灰オリーブ黒色を呈する。外面は横方向の叩きで、遺存部下位にはヘラケズリが見られる。内面にはヘラナデが施され、所々に指紋が残されている。

10~12は土師器甕である。10は常陸型甕の口縁部で、口唇部がS字を描く。色調は赤褐色、胎土に多量

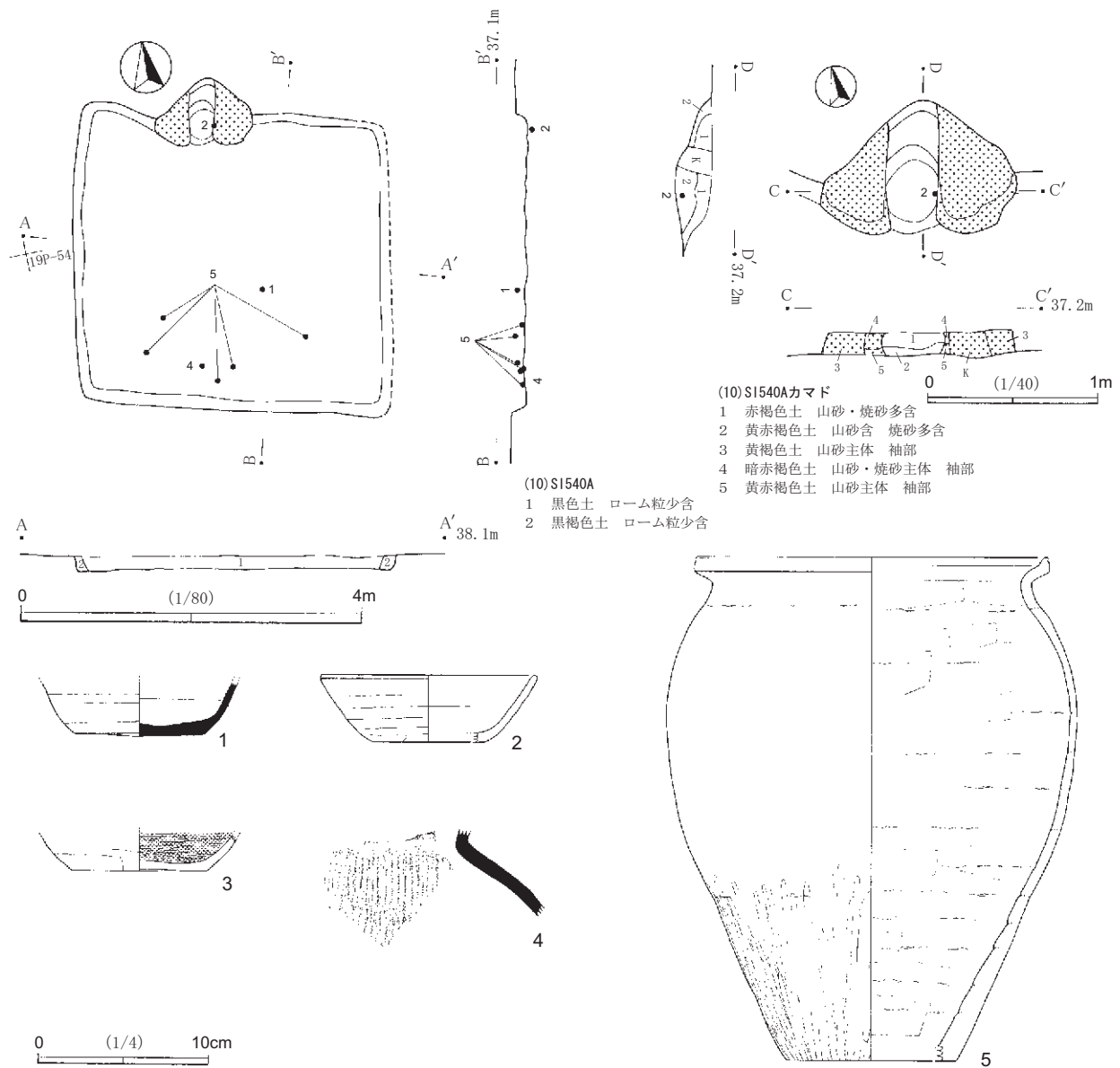


第127図 (10) SI536

の長石、雲母、赤色スコリアを含む。11は胴部上位に最大径をもつと思われる甕の口縁部である。色調は赤褐色、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。12は胴部の張りが弱く、口縁部に最大径をもつ。色調はにぶい赤褐色を呈する。胎土は5に類似し、多量の白色粒子と砂粒、赤色スコリアを含む。

(10) SI540A (第128図、図版12・59)

19P-44グリッド周辺に位置する。建て替えが行われた住居で、覆土の状況から旧住居の床上にローム粒を少量含む黒褐色土を5cmほど盛り、整形していることがうかがえる。西壁は旧住居の壁を利用し、北壁と東壁は50cm～80cm、南壁はわずかに内側に造り替えられている。平面形は東西にやや長い方形で、主軸はN-12°-E、規模は主軸長3.50m、幅3.75mである。掘り込みは確認面から9.9cm～17.5cmと浅い。カマドは建て替え前後とも北壁に設置され、建て替え後は旧カマドより西に新設している。一部攪乱を受けているものの遺存状況は良好である。ピット、周溝は検出されなかった。



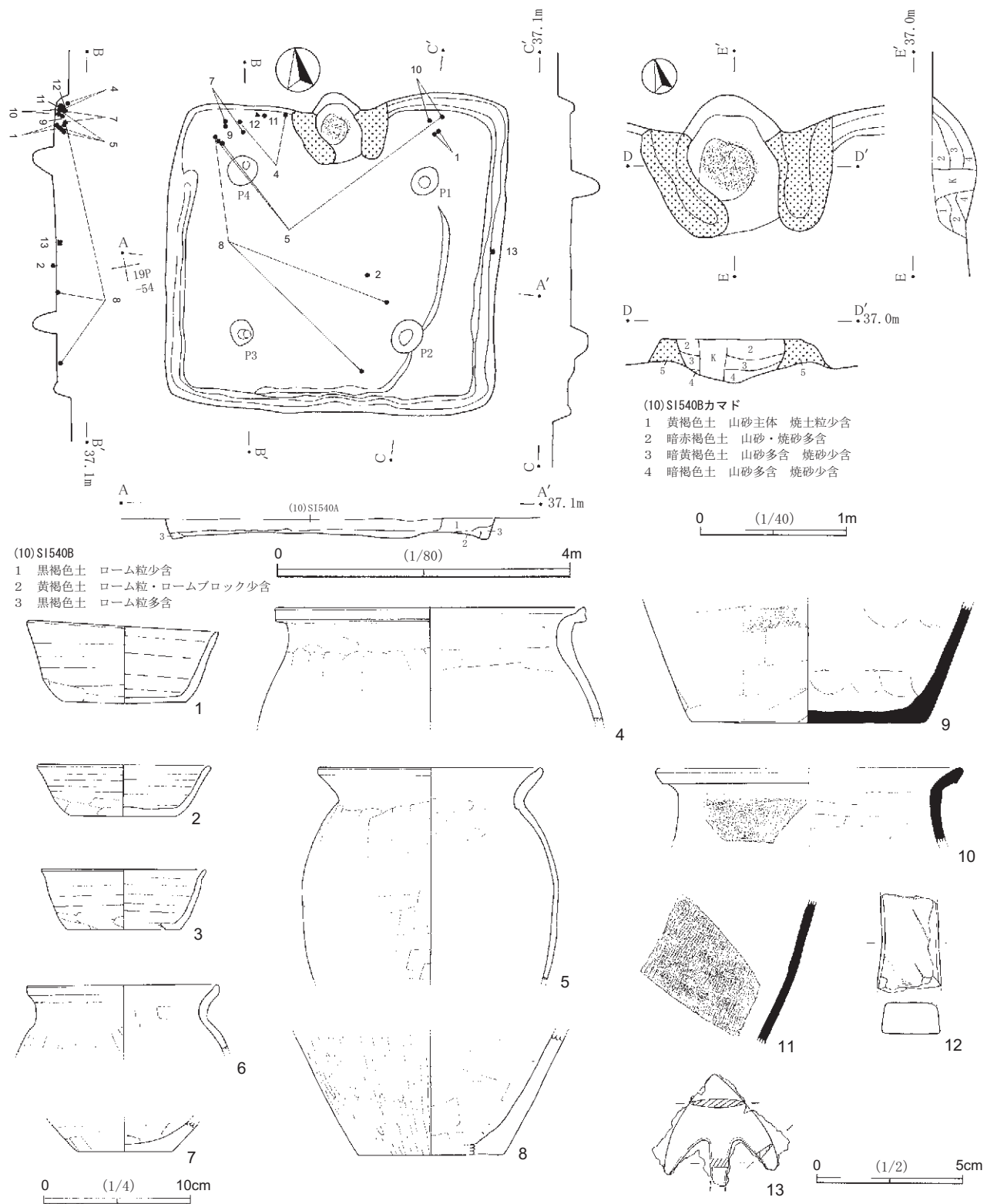
第128図 (10) SI540A

遺物は床面南側からややまとまって出土している。1は須恵器杯である。口縁部を欠損するが、割れ口が若干摩滅しているため意図的に打ち欠いた可能性がある。内面の色調は暗灰黄色、外面は黄灰色、断面は褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子と赤色スコリア、砂粒を含む。外面体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。下総産である。

2は土師器杯でカマド内から出土した。小さめの底部から体部が直線的に開く器形である。色調は橙色、胎土に砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。外面にはロクロ目が残り、体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。3は内面黒色処理される土師器杯の底部である。2と同様の胎土で、色調は橙色を呈する。底部回転系切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリが施される。

4は須恵器甕の胴部片である。外面に叩きが見られる。色調は灰オリーブ色、胎土に多量の白色粒子と大粒のスコリアを含む。下総産か。

5は常陸型の土師器甕である。最大径を胴部上位に有し、24.2cmを測る。外面胴部下位は横方向のヘラケズリ後縦方向のやや雑なミガキ、胴部上半はナデで器面に凹凸が残る。底部は遺存部分が少なく不明



第129図 (10) SI540B

際であるが、木葉痕の可能性はある。胴部内面には輪積痕が多数残っている。胴部外面には山砂が付着している。色調はにぶい橙色、胎土に多量の長石・石英粒、雲母、赤色スコリアを含む。

(10) SI540B (第129図、図版12・59・66・70)

平面形は東西にやや長い方形で、主軸はN-13°-E、規模は主軸長4.25m、幅4.60m、掘り込みは

確認面から14.7cm～23.5cmである。カマドは北壁中央に設置され、遺存状態は良好である。ピットは(10) SI540Aの貼床下から主柱穴が4基検出された。深さはP1が38.8cm、P2が23.6cm、P3が37.5cm、P4が29.9cmである。周溝はカマド左から北西隅で途切れる。幅20cm～36cm、深さ1cm～12cmとやや差があり、南壁で浅くなる。

遺物は床面から覆土中層にかけて分布する。1～3は土師器杯である。口径と底径の差が小さく箱形を呈する。外面体部下端から底部にかけての調整は手持ちヘラケズリである。胎土はほぼ共通しており、白色粒子、微砂粒、赤色スコリアを含む。1は器高が深めのタイプで歪みを有する。色調は橙色で、外面には煤の付着が見られる。2は器高の浅いタイプで、3は内外面ともに強いロクロ目が残る。内面の色調は明黄褐色、外面はにぶい黄橙色を呈する。

4～8は土師器甕である。4は常陸型甕の口縁部である。内面の色調はにぶい黄褐色、外面は明黄褐色、胎土に多量の長石、雲母、大粒の赤色スコリアを含む。胴部外面のケズリの痕跡はあまり明瞭ではない。5は最大径を胴部上位に有し、17.6cmを測る。口唇部はわずかにつまみ上げられ、外面に弱い稜を形成する。内外面に煤が付着している。6は「コ」の字に近い形状の口縁部である。内面の色調は橙色、外面は明赤褐色を呈する。7は甕の底部で橙色を呈する。5～7の胎土は杯とほぼ同様であるが、5は杯よりも混入物が多くややザラつく。8は常陸型甕の底部である。にぶい黄褐色を呈し、多量の長石、石英粒、雲母、大粒の赤色スコリアを含む。底部外面には木葉痕が見られる。外面に煤が付着している。

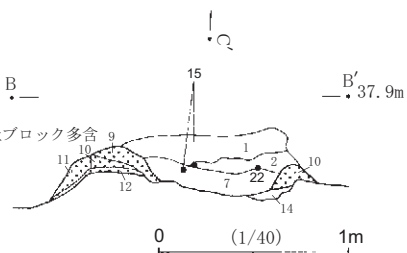
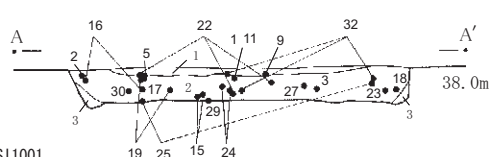
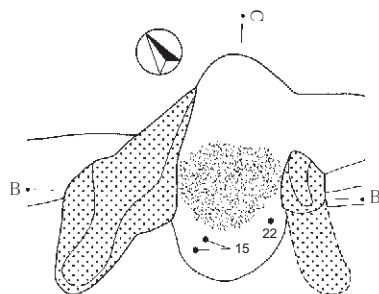
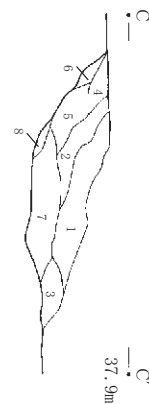
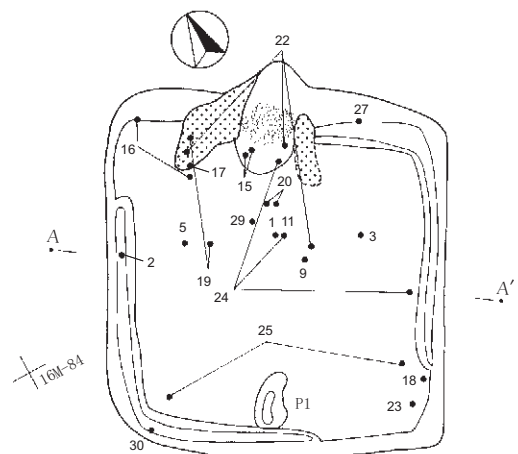
9～11は須恵器甕である。9は底部で灰黄色を呈する。外面遺存部上端にわずかに叩き目が見られ、内面には当て具痕が明瞭に残る。胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。新治産か。10は口縁部で、口唇部外面に稜を持ち、端部は丸く収められる。外面は折り返し状口縁の直下まで叩きの痕跡が見られる。胴部内面の当て具痕は顕著である。色調はにぶい橙色、胎土に多量の白色粒子、砂粒を含む。下総産である。11は甕の胴部片で、外面に叩きが施される。灰色を呈し、胎土に多量の白色粒子を含むが、焼成は良好で堅緻である。新治産である。

12は凝灰岩製の砥石で、カマド西側の壁際から出土した。上下両端を欠損する。下端は欠損後若干使用している。13は鉄鏝の刃部である。深い逆刺を有する広身の三角形で、東側周溝の中央から出土した。

(11) SI1001 (第130・131図、図版12・13・59・69・70)

16M-74グリッド周辺に位置する。平面形は南北にやや長い方形である。主軸はN-30°-E、規模は主軸長3.93m、幅3.57mを測る。掘り込みは確認面から31.7cm～43.2cmで、床面全体が硬化している。カマドは北壁中央に設置され、右袖先端が流失しているものの残存状況は良好である。ピットは南壁際中央から梯子ピット1基が検出された。南北方向に長い不正な楕円形を呈し、深さは18.4cmで底面は南に向かって6cmほど傾斜している。周溝は幅21cm～55cm、深さ2cm～9cmで北隅と南隅で途切れる。壁の立ち上がりは緩やかで、特に北壁は緩やかである。

遺物は床面から覆土上層にかけて分布する。1～12は土師器杯である。底径は口径の1/2前後で、外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリを施すものが大半を占める。胎土にやや多めの砂粒と赤色スコリアを含む点ほどの土器も共通している。1は住居中央の覆土上層から出土した。口縁部から体部にかけて1/2周程欠損している。色調は橙色である。2は西側周溝の覆土上層から出土した。内面はにぶい黄褐色、外面は灰黄褐色を呈する。外面に煤の付着が見られる。3は住居東側の覆土中層から出土した。にぶい褐色を呈し、胎土に少量の白色針状物を含む。外面体部下端から底部にかけての調整は回転ヘラケズ



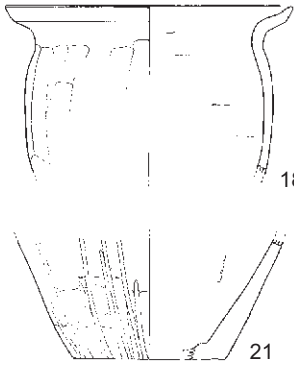
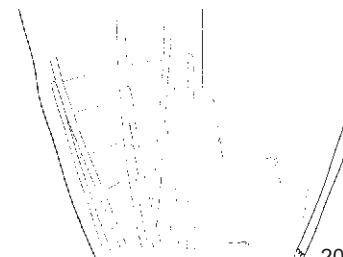
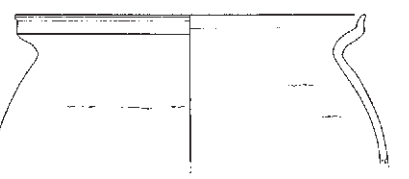
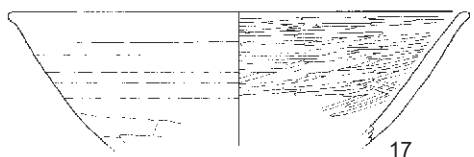
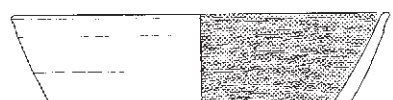
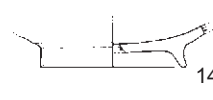
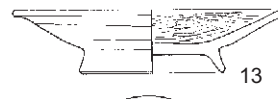
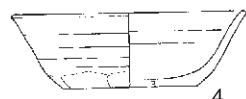
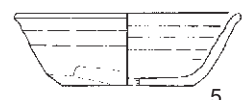
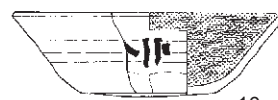
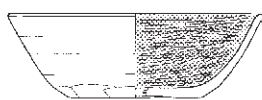
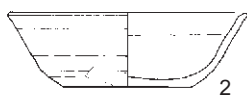
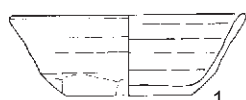
(11) S11001

- 1 暗褐色土 ローム粒少含
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多含
- 3 暗褐色土 ローム粒多含

0 (1/80) 4m

(11) S11001カマド

- 1 暗褐色砂質土 ローム粒・焼土粒・山砂含
- 2 暗褐色砂質土 焼土粒・山砂多含
- 3 暗褐色砂質土 ロームブロック・山砂・焼土ブロック多含
- 4 暗赤色土 焼土粒多含
- 5 暗褐色土 焼土粒少含
- 6 暗褐色土 ローム粒含
- 7 赤色土 焼土粒主体
- 8 暗褐色土 焼土粒少含
- 9 灰白砂質土
- 10 暗灰白砂質土
- 11 暗灰褐色土
- 12 暗灰色土 ロームブロック含
- 13 灰黒色砂質土
- 14 暗灰褐色土 ローム粒含



0 (1/4) 10cm

第130図 (11) S11001①

りである。4は回転糸切り痕がわずかに確認できる。内面の色調はにぶい褐色、外面は灰褐色である。5は西側中央の覆土上層から出土した。口径に比して底径がやや大きく、口唇部が玉縁状を呈する。底部外面に墨書の残画がごくわずかに見られる。

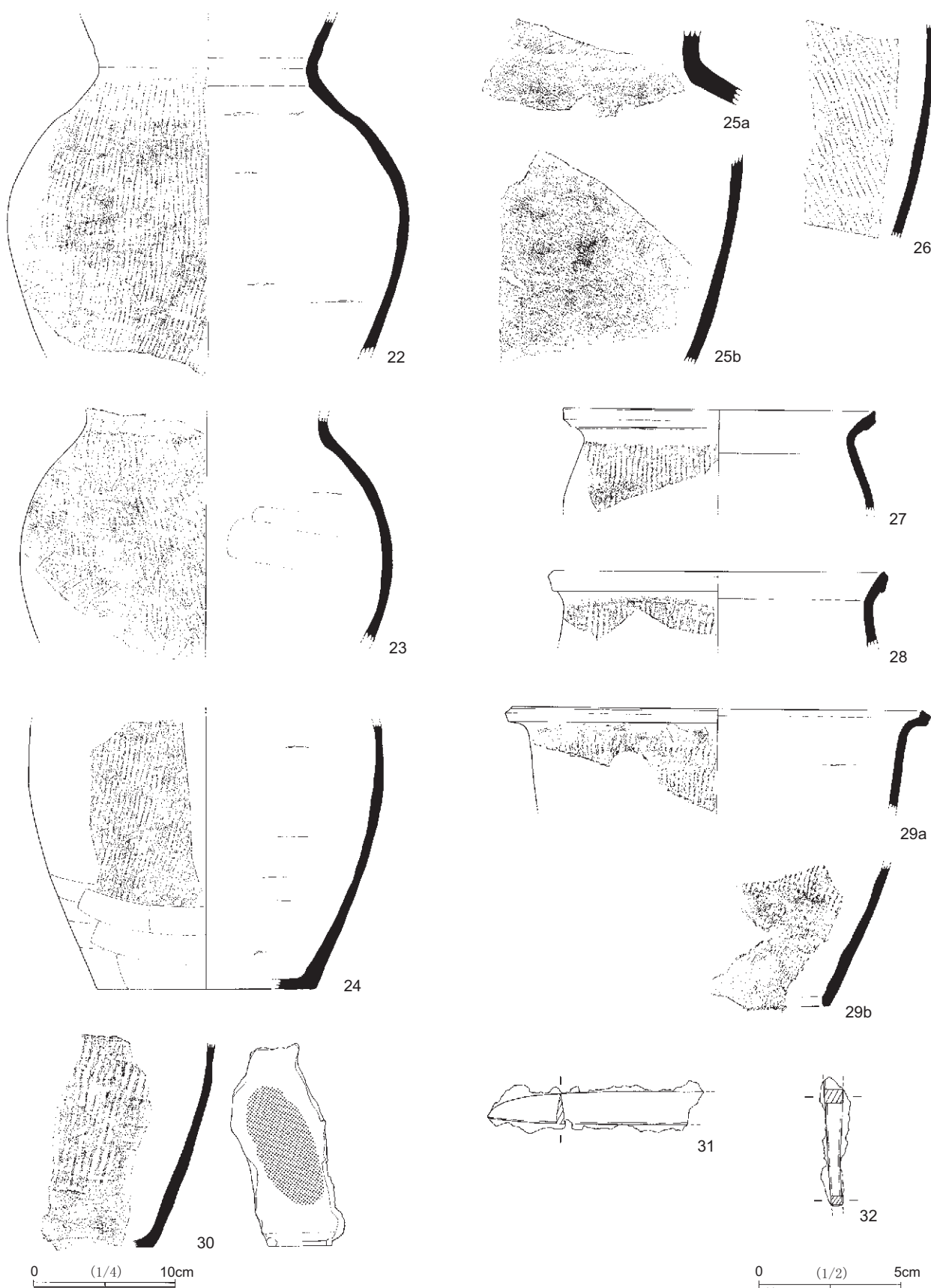
6～12は墨書土器である。9、11以外は全て覆土中からの出土である。6は表面の色調が灰褐色、断面が橙色を呈する底部片で、底部外面に墨書が見られる。7、8は口縁部外面に横位の墨書が見られる。「倉」と記されたものか。9、10は内面にミガキ及び黒色処理が施された杯である。9は住居中央付近の覆土上層から出土した。底部外面に見られる墨書は「弘口」で、一文字目は「弘」の異体字、二文字目は「洋」あるいは「祥」等と推測されるが、欠損部分が文字に掛かっているため判読は難しい。10は体部外面に横位の墨書が見られる。二文字以上の記載と思われるが、二文字目は一部を残して欠損している。他の出土例から「三倉」と記されていたと思われる。11は住居中央の覆土上層から出土した底部片である。底部外面の調整は回転ヘラケズリ、体部下端には手持ちヘラケズリが施される。底部外面には「継」と思われる墨書が見られるが、墨痕が薄く不鮮明である。12は体部外面に「倉」の墨書が横位に記されている。

13～15は土師器高台付皿である。いずれも底部は回転ヘラケズリの後高台が貼り付けられている。13は口縁部1/4周程を残して割れた後接合している。底部外面には朱書きの文字が記されている。遺物取り上げ時の番号が重複しているため、詳細な出土地点・状況は不明であるが、南側周溝際の覆土中層から出土したようである。色調はにぶい橙色で、胎土に少量の白色針状物を含む。14は高台部のみの遺存である。にぶい橙色を呈し、体部が黒変している。15はカマド火床部の覆土中層から出土した。明赤褐色を呈し、白色粒子、砂粒などをやや多く含む。

16、17は土師器碗である。2点ともカマド及びカマド周辺から出土している。胎土は土師器杯と同様砂粒、赤色スコリアを含んでいる。16は外面体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリ、内面に黒色処理が施される。胎土に少量の白色針状物を含み、被熱のためか表面がザラついている。17は底部を欠損するが、口径の1/2前後になるものと思われる。外面体部下位の調整は手持ちヘラケズリである。内面に黒色処理は見られないが、所々黒いところが見られることから本来は黒色処理が施されていた可能性がある。

18～21は土師器甕である。18は口縁部に最大径をもつ。南東隅の覆土中層から出土した。胴部の張りは弱く、最大で13.2cmである。外面と口縁部内面に煤が付着している。色調は内面がにぶい赤褐色、外面が褐色である。19～21は常陸型甕で、胎土に多量の白色粒子と雲母を含んでいる。19はカマド左袖の覆土中層などから出土した。器壁が薄く、口唇部をつまみ上げるように作っている。色調は灰褐色を呈する。20は胴部片でカマド前覆土中層から出土した。色調は灰褐色で、内面胴部中位に煤が付着している。21は底部片で、内面の色調は明黄褐色、外面は明赤褐色を呈する。

22～28は須恵器甕である。22、23は丸く張った胴部に「ハ」の字状に開く口縁部がつく壺形タイプ、27、28は口縁部が短く外反するタイプ、24は胴部中位から底部にかけて遺存する。22はカマド火床部の覆土中層などから出土した。表面の色調は暗灰色、断面は褐色で、胎土に多量の白色粒子を含む。胴部内面に同心円状の当て具痕が見られる。23は南東隅の覆土中層から出土し、胴部最大径26.2cmを測る。明褐色ないし褐色を呈し、白色粒子を多く含む。24はカマド火床部の覆土上層などから出土した。表面の色調は暗灰色、断面は赤褐色で、多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。25は破片ではあるが壺形と思われる。25の頸部は南西隅の床面から、胴部は南東隅の覆土中層から出土した。色調は暗褐色で、多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。26は灰色で、胎土に7mm以下の小礫を含む。27は東側周溝の覆土中層から出土した。



第131图 (II) S11001②

胎土、色調ともに24に類似する。28は覆土中からの出土で、にぶい赤褐色を呈する。

29は須恵器甗で、床面中央付近から出土した破片と覆土中から出土した破片が接合した。胎土に多量の雲母と白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。底部は遺存部位が少ないため、単孔か五孔かは不明である。胴部外面の叩きは格子目状を呈するところがある。内面の色調はにぶい黄褐色、外面は灰褐色を呈する。

30は須恵器甗を転用した硯である。周溝南西隅の覆土中層から出土した。色調は褐色ないし暗褐色、胎土に多量の白色粒子を含む。内面には縦9.1cm、横4.2cmの墨痕が見られる。

31は鉄製の刀子、32は鉄製の棒状製品で、いずれも覆土中からの出土である。

(11) SI1003 (第132図、図版 13・59・66)

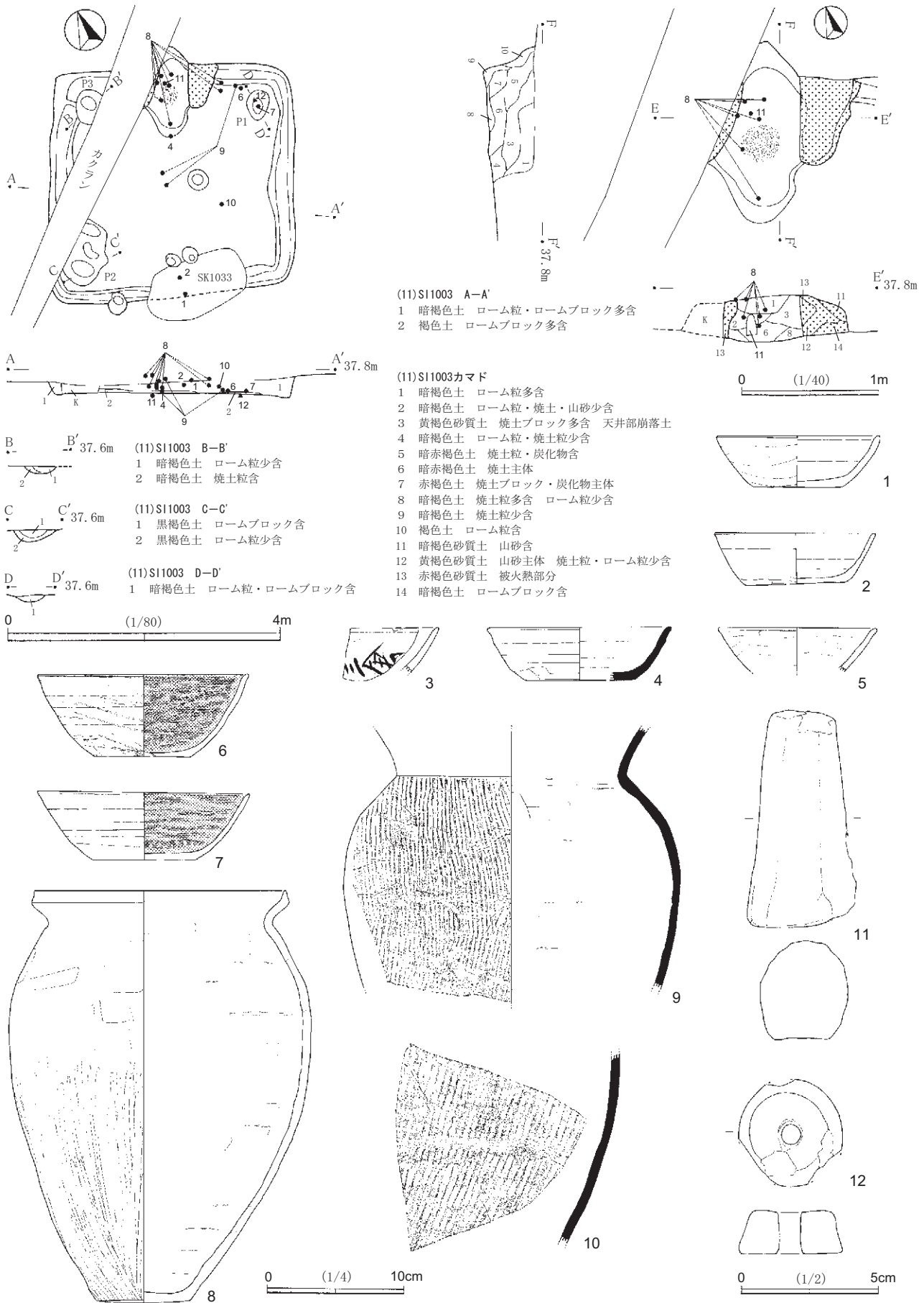
16M-77グリッド周辺に位置する。平面形は正方形に近く、カマド左袖から西壁南端にかけて攪乱を受けている。また南壁中央は縄文時代の土坑1033と重なっており、壁面及び周溝は検出できなかった。主軸はN-22°-E、規模は主軸長3.46m、幅3.59m、掘り込みは確認面から20.4cm～35.7cmである。カマドは北壁中央に設置される。火床部は強く焼けて赤化しており、火床部奥の覆土中から支脚が正位で出土している。ピットは南を除く各コーナー付近から検出され、深さはP1が12.8cm、P2が18.2cm、P3が8.4cmである。調査所見によると、東隅のP1は貯蔵穴と考えられるようである。覆土はローム粒・ブロックを含む暗褐色土の単一層で、覆土中から石製紡錘車と土師器杯が伏せた状態で出土している。周溝は北壁西側で途切れ、幅16cm～40cm、深さ1cm～7cmである。

遺物は床面から覆土上層にかけて分布し、カマド周囲にやや集中する。1～3、5は土師器杯である。1は完形品で南壁際の覆土上層から出土した。外面口唇部直下までヘラケズリが施される。色調は暗赤褐色から明赤褐色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。外面に煤の付着が見られる。2は南壁際の覆土上層から出土した。底径が口径の2/3程で、箱形に近い形状である。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。内面の色調は灰褐色、外面はにぶい橙色、胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。外面の一部に煤の付着が見られ、内面には斑に変色している所がある。3は覆土中から出土した口縁部片である。体部外面に横位の墨書「三倉」が見られる。内面の調整はヨコナデ、外面は口唇部直下までヘラケズリが施される。色調は明赤褐色、胎土に砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。5も覆土中から出土した口縁部片である。体部が直線的に開き、口縁端部で外反する。内面の調整はやや光沢を帯びたヘラナデ、外面は口唇部直下までヘラケズリが施される。体部外面に煤の付着が見られる。色調は赤褐色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。

4は下総産の須恵器杯で、カマド前の床面付近から出土した。底径と口径の差が比較的少なく、口縁部が外反する。外面体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。内面の色調は暗赤褐色、外面は赤黒色を呈する。胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。

6、7は内面黒色処理された土師器杯である。6は北壁際の床面から出土した。明褐色を呈し、多量の砂粒と赤色スコリアを含む。内面は丁寧なミガキ、外面は体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリののち疎らなミガキが施される。外面体部中位には帯状に煤が付着している。7は北東隅ピット内覆土上層から伏せた状態で出土した。器形にやや歪みが見られるものの、胎土は精緻で、少量の白色針状物を含む。内面はロクロ目の凹凸を消すように丁寧に磨いている。外面は底部糸切りの後体部下端と底部に回転ヘラケズリを施す。色調は橙色を呈する。

8は常陸型の土師器甗で、カマド周辺の覆土中層から上層にかけて点在していた。最大径を胴部中位よ



第132図 (11) S11003

り上に有し、22.3cmを測る。外面胴部中位の半周に煤が付着しており、胴部下位には山砂の付着も見られる。底部の調整はやや雑ながらヘラケズリのちナデが施されている。色調は明赤褐色、胎土に多量の白色粒子と雲母、赤色スコリアを含む。

9、10は須恵器甕である。9は丸く張った胴部に「ハ」の字状に開く口縁部がつく器形で、胴部最大径は24.8cm、頸部径17.0cmを測る。肩部内面は当て具痕が顕著で、外面も丸みを出すためか叩き目が深くはつきりしている。内面の色調は褐灰色、外面は灰色を呈する。胎土に多量の白色粒子と雲母、大粒の赤色スコリアを含む。10は外面に叩き目の見られる胴部片である。内面はナデで、当て具痕は見られない。内面の色調はオリーブ黒色、外面は暗オリーブ灰色、胎土に白色粒子、赤色スコリアを含む。

11は支脚でカマド煙道部付近の覆土中層から正位に立った状態で出土した。所々欠損するものの、先端部から基部までほぼ残存しており、全長15.9cmである。面取りされ、断面は多角形を呈する。

12は石製紡錘車で北東隅ピット内覆土上層から出土した。最大径3.9cm、下面径2.9cm、厚さ1.6cm、孔径0.7cmである。石材は、一般的にホルンフェルスと呼ばれている堆積岩起源の変成岩と見られる。表面は丁寧に研磨されている。

(11) SI1004 (第133～135図、図版13・14・59・60・66)

16M-67グリッド周辺に位置し、(11) SI1003の北壁西側に接する。平面形は南北に長い方形で、南東隅は攪乱を受けている。主軸はN-18°-E、規模は主軸長3.76m、幅3.38mを測る。掘り込みは確認面から21.9cm～38.5cmで床面はやや凸凹をもつ。カマドは北壁中央に設置され、遺存状況は良好である。南壁側中央から梯子ピット1基が検出された。深さは14.7cmである。周溝は北壁東側から東壁にかけてと、南壁及び西壁の一部に見られ、幅14cm～40cm、深さ3cm～7cmである。南壁と西壁の周溝は壁よりかなり内側に周り、土層セクションに切り合いが見られないことから拡張した可能性が考えられる。

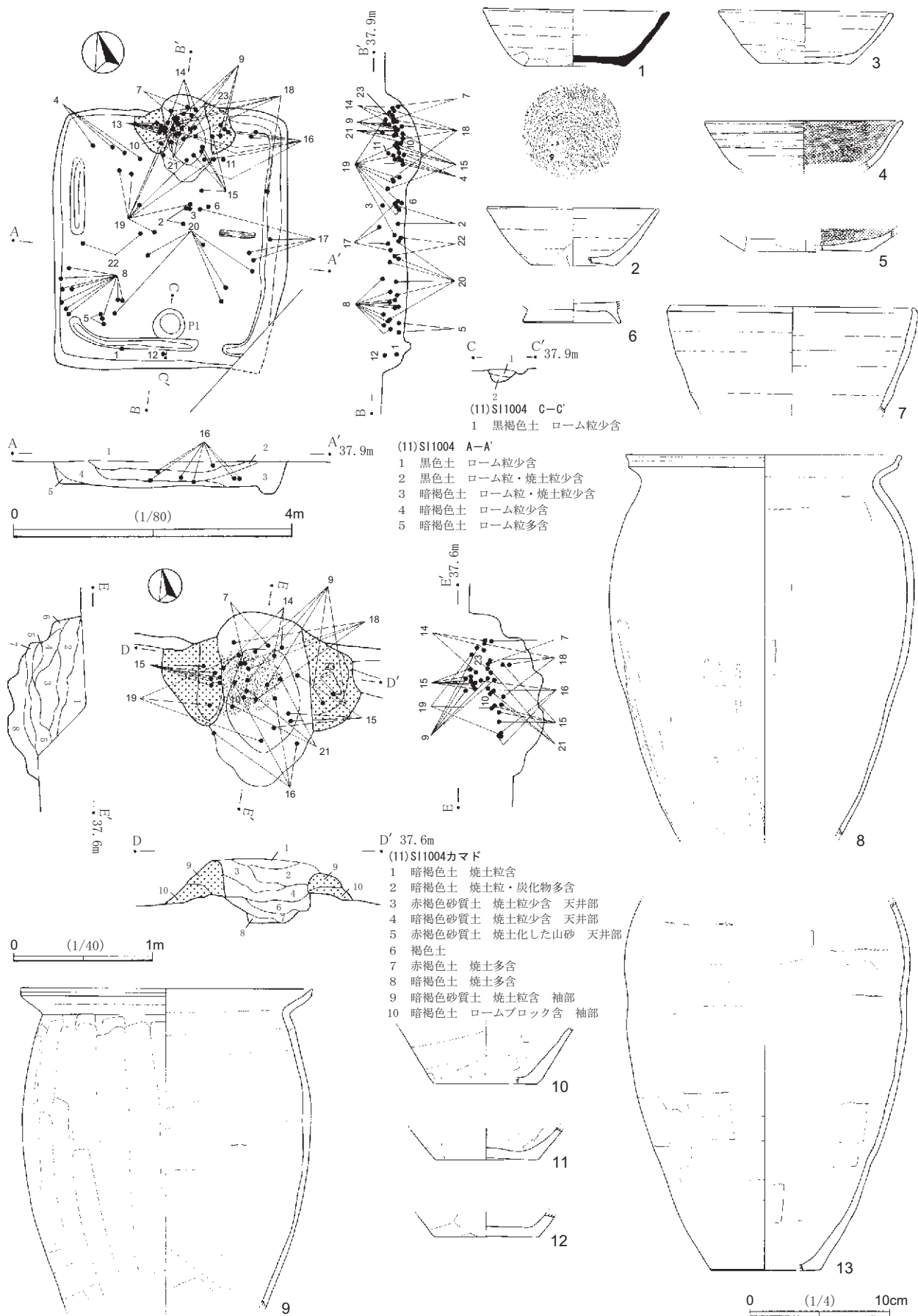
遺物は覆土下層から上層にかけて多数出土し、特にカマド周辺に集中する。カマド右袖からは支脚も出土している。1は下総産の須恵器杯である。口縁部が楕円形で最大径13.4cm、最小径12.5cmと歪みが大きい。底部に回転糸切り痕を有し、体部下端と底部外周に手持ちヘラケズリが施される。内面の色調はオリーブ黒色、外面は灰色で、胎土に白色粒子を多く含む。

2～5は土師器杯で、外面体部下位から底部にかけての調整は手持ちヘラケズリである。2、3は器形、胎土などがよく似ている。底径は口径の1/2、体部が直線的に開く。胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。色調は橙色である。全体に細かく割れていて、覆土中からの出土が多い。4、5は内面にミガキ及び黒色処理が施される。4は底部を欠損するが、口縁部は完存する。色調は褐色、胎土に細砂粒、赤色スコリアを含む。5は底部1/2周程の遺存で、色調はにぶい赤褐色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。

6は土師器高台付杯の高台部である。住居中央やや東寄りの覆土下層から出土した。体部は殆ど残っておらず、意図的な打ち欠きの可能性がある。内面の調整はミガキ、外面は底部回転糸切り後高台を貼り付けている。色調はにぶい黄橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。

7は土師器鉢で、カマド煙道部の覆土中層から出土した。口縁部の一部のみの遺存であるため不明瞭だが、片口鉢の可能性もある。色調は赤褐色、胎土に白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。

8～15は土師器甕である。8、13以外の胎土はおおむね共通しており、多量の砂粒と大粒の赤色スコリアを含む。8、13は常陸型甕で、胎土に多量の白色粒子と雲母を含む。8は住居北西の覆土中～上層に点在していた。最大径を胴部上位に有し22cmを測る。外面胴部下半のミガキは粗く、ヘラケズリに伴う混



第133図 (11) S11004①



第134图 (11) S11004②



第135図 (11) SI1004③

入物の動きが目立つ。内面胴部下半に白色物質が付着している。色調はにぶい赤褐色を呈する。13はカマド左袖の覆土上層から出土した。胴部最大径20.6cmの長胴で口縁部を欠損している。胴部外面の調整は粗く、ヘラケズリののちやや光沢のあるナデが施される程度で、器面に凹凸が残る。底部外面は無調整と思われるが、遺存部位が少ないため不明瞭である。内面には黒色の付着物が見られる。色調は褐色を呈する。9はカマド右袖及び煙道部の覆土上層から出土した。口径21.0cm、胴部最大径20.8cmとわずかだが口径の方が大きい。にぶい赤褐色を呈し、内面胴部下位が黒変している。10～12は底部である。10はカマド火床部の覆土上層から、11、12は覆土中からの出土である。14はカマド煙道部覆土上層から出土した。最大径を胴部に有し、17.8cmを測る。器壁がかなり薄く、口唇部はわずかにつまみ上げられる。色調は赤褐色を呈する。15はカマド火床部の覆土中層から出土した。口径17.8cm、胴部最大径18.1cmで、口唇部のつまみ上げは弱い。色調は赤褐色である。

16～22は須恵器甕である。16はカマド火床部の覆土上層から出土した。口縁部を欠損する。胴部の最大径は上位にあり、28.3cmを測る。外面は叩きの後胴部下位にヘラケズリが施される。内面はヘラナデで、器面に凹凸があるものの明瞭な当て具痕は見られない。内面の色調は橙色、外面はにぶい褐色を呈し、胎土に多量の白色粒子を含む。

17は丸底を呈する甕で、住居東側の覆土中層から上層にかけて点在していた。外面は叩き、内面胴部は横方向、底部付近は斜方向のヘラナデで、所々にやや光沢を伴ったナデが加わる。当て具痕は見られない。内面の色調は灰オリーブ色、外面は灰色で底部は灰白色を呈する。胎土は少量の白色粒子を含み精緻、焼成は堅緻である。

18はカマド周辺や東側周溝の覆土中層から出土した。安定感のある平底で、外面の所々に叩き目が見られる。底部外面は無調整である。色調は橙色、胎土に多量の雲母、白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。

19はカマド周辺の覆土中層から上層にかけて点在していた。底部は径8.0cmで丸底に近い形状である。胴部最大径は54.3cm、現存高40.9cmを測る。外面の調整は目の細かい叩きで、胴部下位から底部にかけてヘラケズリが施される。内面はヘラナデで仕上げられ、当て具痕は見られない。底部付近の内面のヘラナデと外面のヘラケズリは横方向に連続しており、回転台を利用した可能性がある。色調は橙色、胎土は白色粒子を多く含むが、比較的精緻である。

20は胴部片で、外面全体に釉を受けており、遺存部上半は特に濃く付着している。外面は叩き、内面はナデで、所々に当て具痕が見られる。胎土は生地練りの甘いのか、マーブル状に層になっている。色調はオリーブ黒色、焼成は堅緻である。

21はカマド火床部の覆土中層から出土した。外面の調整は叩き後ヘラケズリ、内面はヘラナデで、器面に凹凸が残るが明瞭な当て具痕は見られない。色調は表面が灰オリーブ色、断面は橙色を呈する。胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。

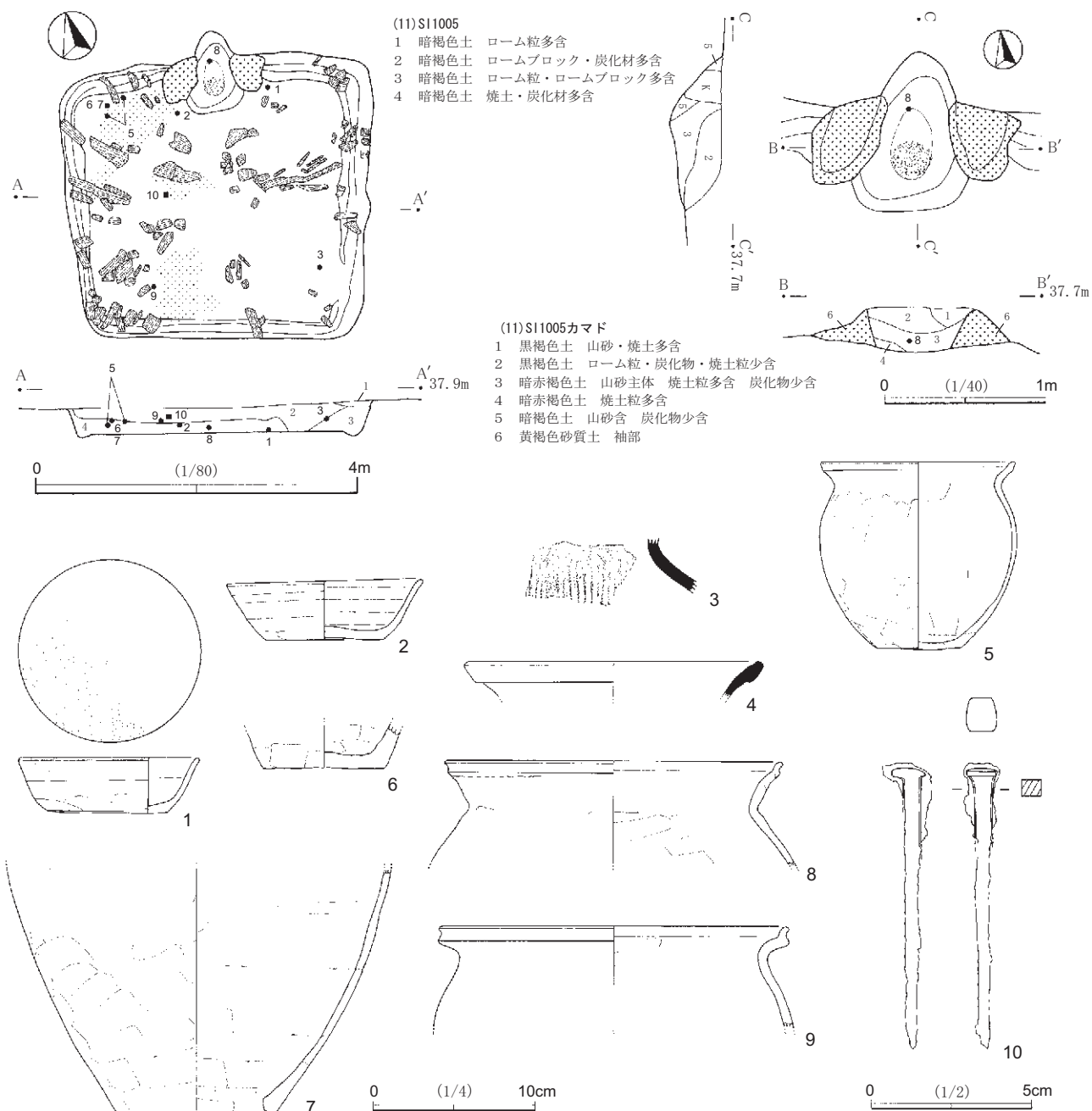
22も胴部片で下端が気泡により膨らんでいる。内外面とも釉が薄く付着し光沢を帯びている。内面底部付近は他の部位より釉の付着がはっきりしている。外面の調整は叩き、内面はナデで当て具痕は見られない。色調は灰オリーブ色、胎土は白色粒子、黒色粒子を含み精緻、焼成は堅緻である。

23はカマド右袖の覆土中層から出土した支脚である。基部を煙道部、先端部を南東方向へ向けていた。先端部から基部まで残存するが、途中で2つに折損している。表面は面取りされ、断面八角形を呈する。

(11) SI1005 (第136図、図版14・60・70)

16M-68グリッド周辺に位置する。平面形は北壁に比して南壁が短い台形である。主軸はN-7°-E、規模は主軸長3.49m、幅3.77m、掘り込みは確認面から16.9cm～33.5cmである。床面全面に炭化材が散乱しており、攪乱も著しい。カマドは北壁中央に設置され、攪乱を受けているものの残存状況は良好である。ピットは検出されなかった。周溝は幅16cm～36cm、深さ2cm～12cm、東壁南端で途切れるほかは全周する。

遺物は覆土下層から中層にかけて分布する。1、2は土師器杯である。1はカマド右袖前の床面から出土した。口唇部に欠けている所があるが、ほぼ完存する。底部回転糸切りの後体部下位と底部外周に手持ちヘラケズリが施される。内面の1/3周程の範囲に油煙が付着している。灯明皿として使用したと思われる、内面は被熱による器面の剥離が著しい。外面に油煙が見られるのは2箇所である。内面の色調は橙色、外面は明赤褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子、砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。2はカマド左袖前の



第136図 (11) S11005

覆土中層から出土した。口縁部1/2周弱を残して欠けており、覆土中から出土した破片が接合している。色調はにぶい橙色、胎土・底部調整は1と同様である。

3は明褐色を呈する須恵器甕の胴部片、4は灰色を呈する須恵器甕の口縁部である。いずれも多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。

5は住居北西の覆土中層から出土した土師器小型甕である。胴部は非常に薄く作られ、口縁部は肥厚し端部はわずかにつまみ上げられる。胴部最大径は12.3cmを測り、口径とほぼ同様の数値である。色調は黒褐色を呈し、胎土に白色粒子、赤色スコリアを含む。6は住居北東の覆土中層から出土した土師器甕の底部である。胎土に多量の白色粒子と雲母、赤色スコリアを含むことから常陸型甕と思われる。底部外面

に木葉痕を有し、胴部外面の調整はヘラケズリでミガキは見られない。色調はにぶい褐色で、内外面とも煤が付着している。

7は6と同じ地点から出土した土師器甕である。にぶい褐色を呈し、外面に煤が付着している。胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。

8、9は土師器甕である。8はカマド煙道部覆土中層から出土した。にぶい赤褐色を呈し、多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。9は常陸型甕の口縁部で、住居南西の覆土中層から出土した。色調はにぶい黄橙色、胎土に多量の白色粒子と雲母、少量の赤色スコリアを含む。

10は鉄製の釘で住居中央の西寄り、覆土上層から出土した。長さ8.75cm、幅6.0cmである。

(11) SI1006 (第137図、図版14・15・60・66・69)

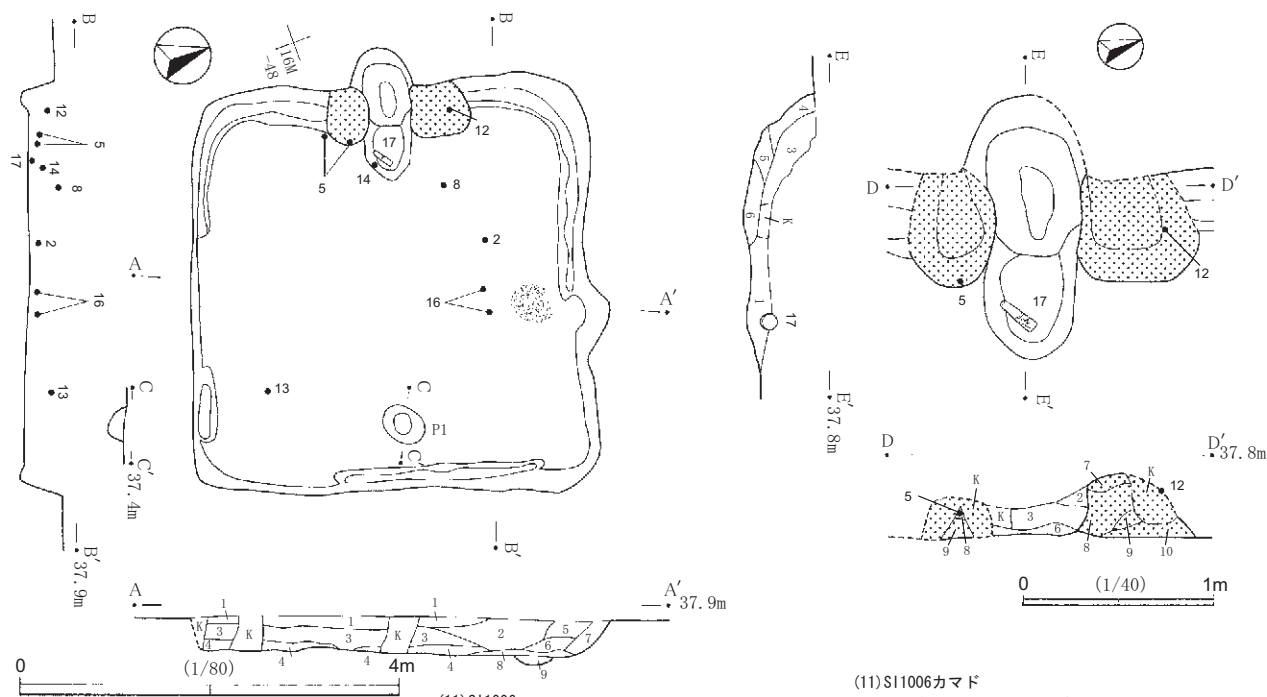
16M-38グリッド周辺に位置する。平面形は正方形に近い。西側に拡張が行われ、カマドが北から西へ付け替えられている。西にカマドをもつ新住居が、北にカマドをもつ旧住居の床面より若干深いため、旧住居の床面は残らず、カマド火床部底面と周溝の下部が辛うじて確認できた。旧住居の主軸はN-17°-E、規模は主軸長3.26m、幅3.65mを測り、カマドは北壁中央に設置される。新住居の主軸はN-72°-W、規模は主軸長4.29m、幅4.16m、掘り込みは確認面から24.8~44.0cmである。カマドは西壁中央に設置される。攪乱により上部の遺存状況は悪い。焚き口付近から床面よりやや浮いた状態で人面へラ描き土製支脚が出土している。新住居に伴うと思われる梯子ピットが東壁側中央から1基検出されている。深さは17.6cmである。周溝は幅24cm~46cm、深さ1cm~4cmで北東隅、南東隅、南壁中央で途切れる。

遺物の出土量はやや少なく、覆土下層から上層にかけて分布する。1は覆土中から出土した須恵器杯である。口径と底径の差がやや小さく、口縁部が肥厚して外反する。外面体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。色調は灰色、胎土に白色粒子を多く含む。

2~10は土師器杯である。2はにぶい褐色ないしにぶい橙色を呈する。住居北側の覆土下層から出土した。体部外面に墨書「六」が見られ、墨書と対面する位置の口縁部が弧状に欠けている。底部回転糸切りの後体部下端と底部外周に手持ちヘラケズリが施される。胎土は多量の白色粒子と砂粒、大粒の赤色スコリア等の混入物が多くザラついている。3~6、8~10は外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。胎土に砂粒と赤色スコリアを含んでいる。3、4は外面に墨書が見られる。3は内面黒色処理された杯の体部片で、文字は「倉」の一部と推測される。4は口縁部片で遺存部位が少ないため文字の判読は難しい。5はカマド左袖覆土中層から出土した。色調は橙色を基調とし、口縁部外面が明赤褐色を呈する。6は覆土中から出土した。被熱による器面の荒れが著しい。内面の色調はにぶい橙色、外面は褐灰色を呈する。7は外面口縁部直下までヘラケズリが施された非ロクロ成形の杯である。口縁部にはナデによる沈線状の凹みが見られる。内面の色調はにぶい橙色、外面は黒色を呈する。8は住居西側の覆土上層から出土した。6と同様被熱により器面が荒れている。内面の色調は橙色、外面はにぶい橙色である。9は覆土中からの出土で、にぶい黄橙色を呈する。底径がやや大きく、口縁端部が外反する。10は口縁部だけの遺存で、口径10.8cmと小型である。内面の色調はにぶい黄橙色、外面は灰黄色、胎土に微量の白色針状物を含む。

11は「ハ」の字状に開く須恵器甕の口縁部である。口縁端部は肥厚し折り返し状になる。表面の色調はにぶい黄橙色、断面は褐色を呈する。胎土に大粒の赤色スコリア、砂粒を含む。

12~16は土師器甕である。12はカマド右袖から出土した。口径と胴部最大径は同程度と思われる。色調

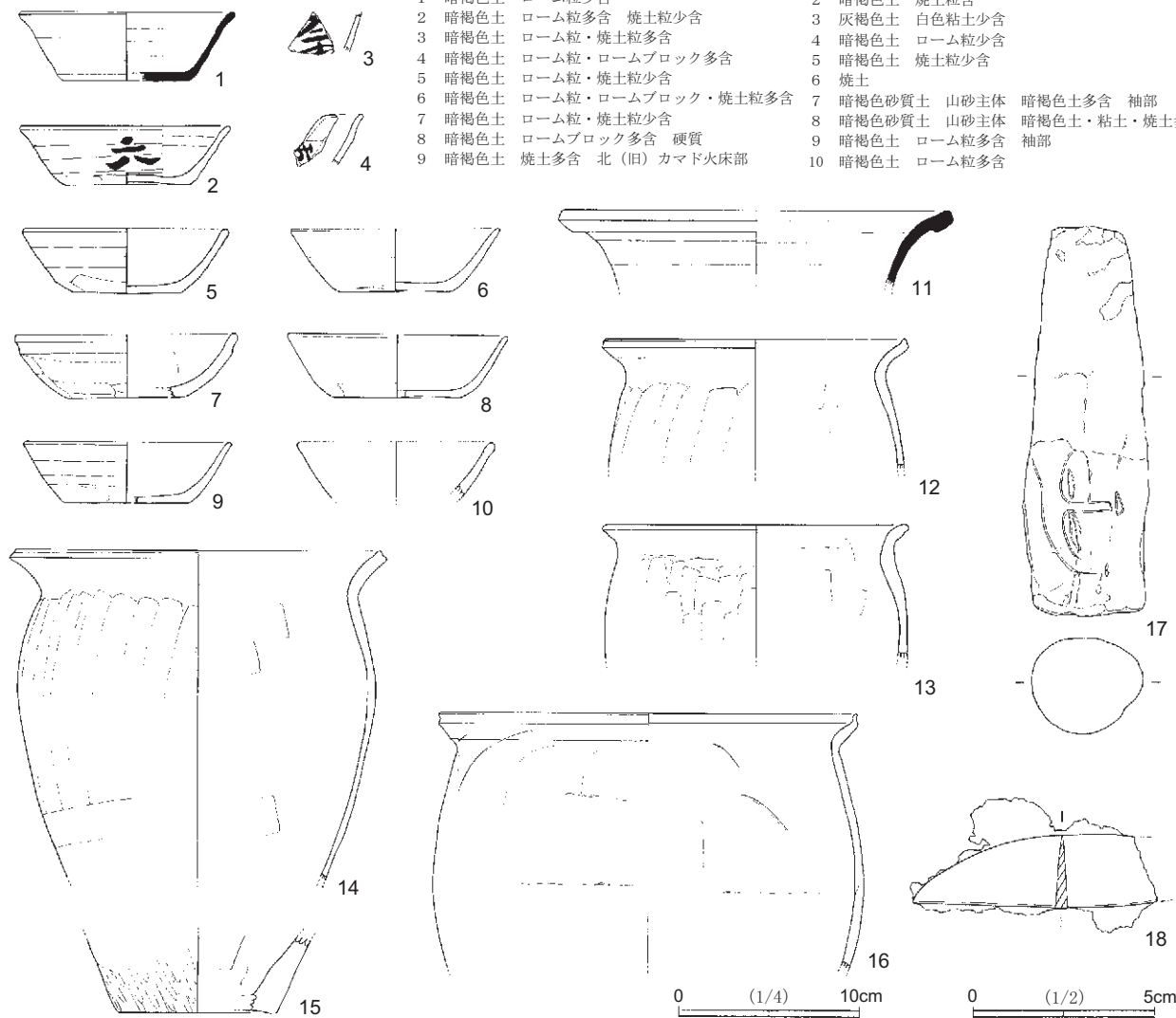


(11)SI1006

- 1 暗褐色土 ローム粒少含
- 2 暗褐色土 ローム粒多含 焼土粒少含
- 3 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多含
- 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多含
- 5 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少含
- 6 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒多含
- 7 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少含
- 8 暗褐色土 ロームブロック多含 硬質
- 9 暗褐色土 焼土多含 北(旧)カマド火床部

(11)SI1006カマド

- 1 暗褐色土 焼土粒・粘土含
- 2 暗褐色土 焼土粒含
- 3 灰褐色土 白色粘土少含
- 4 暗褐色土 ローム粒少含
- 5 暗褐色土 焼土粒少含
- 6 焼土
- 7 暗褐色砂質土 山砂主体 暗褐色土多含 袖部
- 8 暗褐色砂質土 山砂主体 暗褐色土・粘土・焼土多含 袖部
- 9 暗褐色土 ローム粒多含 袖部
- 10 暗褐色土 ローム粒多含



第137図 (11) SI1006

は赤褐色、胎土に白色粒子を多く含む。13は住居南東の覆土中層から出土した。胴部の張りが弱く、口径と胴部最大径はほぼ同じくらいである。胴部外面に煤が付着している。内面の色調は褐灰色、外面はにぶい黄橙色を呈する。胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。14はカマド火床部の覆土中層から出土した。胴部最大径は19.9cmで、口径の方がわずかに大きい。胴部は非常に薄く、口縁部が肥厚する。内面の色調は灰赤色、外面は明赤褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。15は常陸型甕の底部で、胴部下位はかなり厚みがある。内面にはヘラナデによる工具痕が顕著である。外面には山砂が付着している。色調はにぶい橙色ないし褐色、胎土に多量の白色粒子、雲母、赤色スコリアを含む。16は住居北側、旧カマド火床部前の覆土下層から出土した。最大径を胴部中位に有し、24.0cmを測る。口縁部は肥厚しながら外反し、端部をつまみ上げている。胴部の調整は内外面ともヘラナデで、胴部上位に工具痕が見られる。外面胴部中位に山砂が付着している。色調は橙色、胎土に多量の白色粒子、雲母、赤色スコリアを含む。

17はカマドの焚き口付近から出土した支脚である。基部付近に人面が刻み込まれており、先端部を南西に、基部を北東方向に向けた状態で、2つに折れていた。柱状を呈し全長21.6cm、最大径6.6cmを測る。人面は焼成前にヘラで描かれ、縦4.6cm、横7.0cmの範囲に頭、眉、目、鼻、口が表現されている。顔の各部分の大きさは右目2.4cm、左目1.8cm、鼻の長さ2.2cm、幅0.6cm、口1.4cmである。表面に山砂が付着しており、先端部付近に被熱による剥離が見られることから、実際に使用されていたことがうかがえる。

18は鉄製刀子の刀身部である。覆土中からの出土で詳細な出土地点は不明である。

(11) SI1007 (第138図、図版15・60)

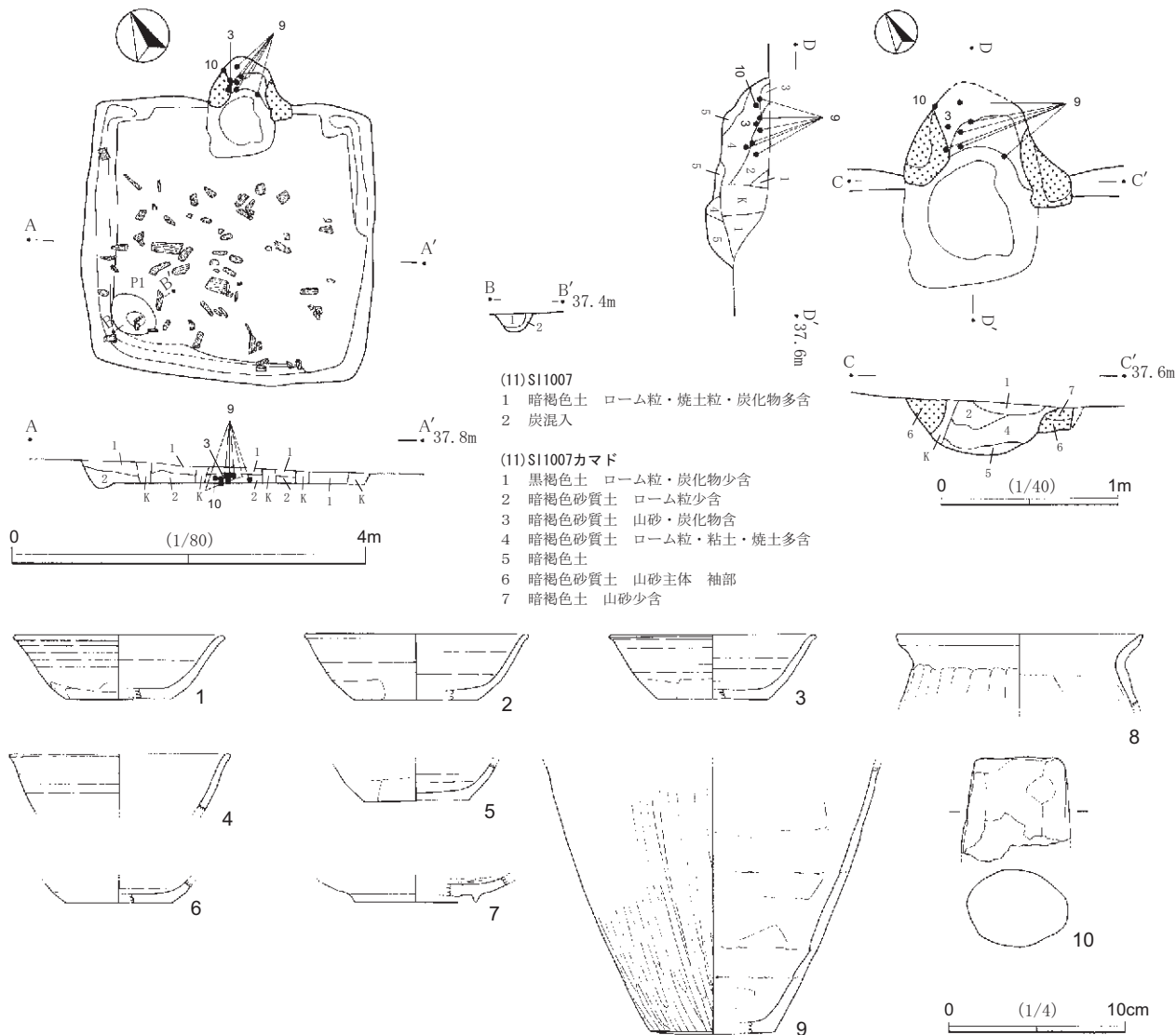
16N-56グリッド周辺に位置する。平面形は正方形に近い。主軸はN-29°-E、規模は主軸長3.19m、幅3.29mを測る。掘り込みは確認面から14.5cm~31.5cmで、床面は攪乱が著しく遺存状態が悪い。カマドは北東壁中央に設置されるが攪乱を受けている。ピットは西隅に1基検出され、深さは19.6cmである。周溝は幅25cm~39cm、深さ1cm~7cmでカマドの両脇には見られない。南東壁中央から南隅にかけては攪乱により不明瞭である。カマド周辺を除いた床面全体に炭化材が散乱している。

遺物はカマド煙道部に数点集中して見られる他は覆土中からの出土である。1~6は土師器杯である。器形の特徴はおおむね似ており、底径が口径の1/2前後、口唇部が外反して玉縁状となる。外面体部下端から底部にかけての調整は、6を除き手持ちヘラケズリである。胎土は砂粒、白色粒子、赤色スコリアを含む。ほとんどの土器が被熱している。1はにぶい赤褐色を呈し、被熱による剥離が見られる。3はカマド煙道部から出土した。にぶい黄橙色を呈し、全体的に摩滅している。2、4はにぶい褐色、5はにぶい橙色を呈する。6は底部回転糸切りの後体部下端と底部外周に回転ヘラケズリを施す。色調は橙色である。

7は土師器高台付皿の底部である。内面の調整はミガキ、底部はヘラケズリの後高台を貼り付け及びナデが施される。色調は橙色を呈する。

8、9は土師器甕である。8は口縁部で、色調は明褐色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。9は常陸型甕の胴下半部で、カマド煙道部から出土した。調整はやや粗く、内面に複数の輪積み痕が見られる。また外面はミガキが疎らな箇所があり、ヘラケズリの痕跡が残っている。内面の色調は橙色、外面は黒褐色で外面に煤が付着している。胎土は多量の白色粒子、雲母、赤色スコリアを含む。

10はカマド煙道部から出土した支脚の頭部である。断面がやや扁平な楕円形で、器面に凹凸が見られる。

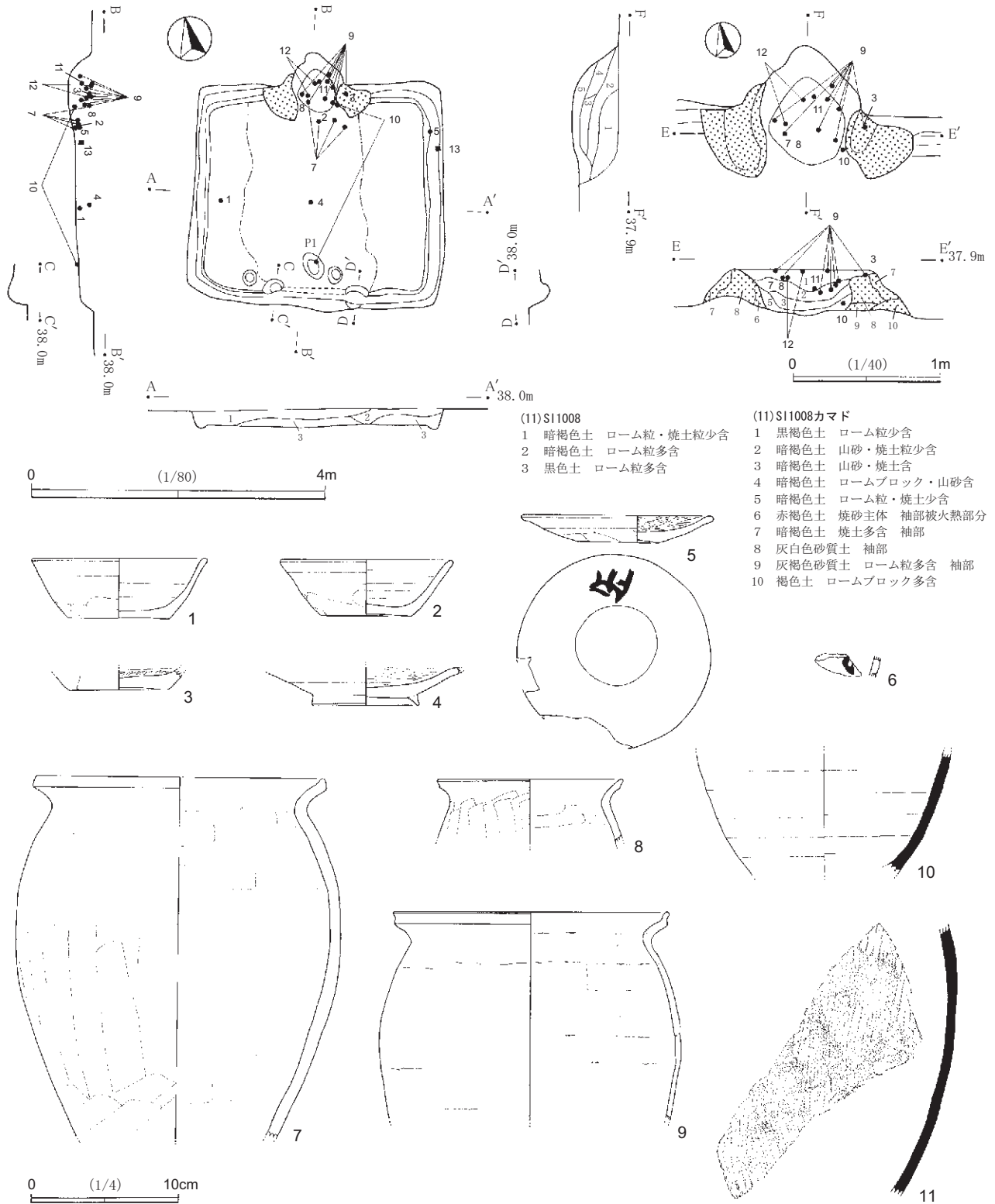


第138図 (11) S11007

(11) S11008 (第139・140図、図版15・16・60・69)

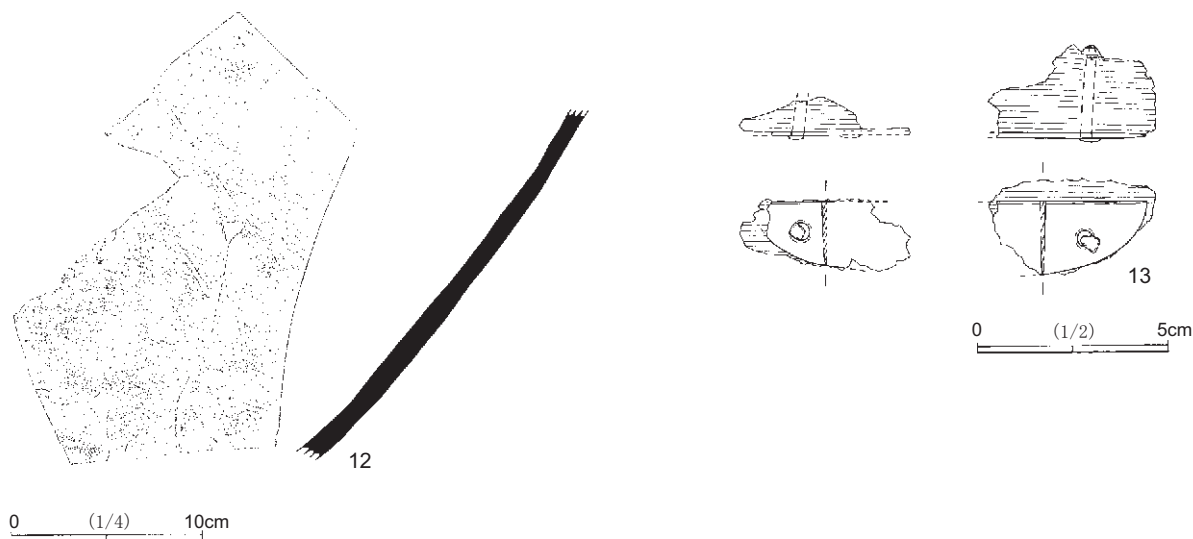
17M-49グリッド周辺に位置する。平面形は東西にやや長い方形である。主軸はN-13°-E、規模は主軸長3.10m、幅3.42mを測る。掘り込みは確認面から18.1cm~27.5cmとやや浅いが、床面中央はよく踏み固められている。カマドは北壁中央に設置され、遺存状態は良好である。カマドと向き合う南壁付近にピットが4基検出されたが、いずれも浅くはつきりしない。これらのうち中央のピットが梯子ピットと考えられ、深さは8.1cmであった。周溝は幅17cm~30cm、深さ2cm~15cmで全周する。

遺物はカマド付近からややまとまって出土している。1~3は土師器杯である。いずれも外面体部下位から底部にかけての調整は手持ちヘラケズリである。胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。1は住居西側の覆土下層から出土した。色調はにぶい橙色である。2はカマド前覆土下層から出土した。底径は口径の1/2程度で、体部が直線的に開く。色調はにぶい褐色ないしにぶい橙色である。3は内面にミガキが施される底部片で、カマド右袖上から出土した。全体的に摩耗しており、特に割れ口がかなり摩耗しているため意図的に打ち欠いた可能性がある。色調はにぶい褐色ないしにぶい橙色である。



第139図 (11) SI1008①

4は土師器高台付皿で、カマド火床部覆土上層から出土した。内面はミガキ、底部外面は手持ちヘラケズリの後高台が貼り付けられている。色調はにぶい黄橙色、胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。5は土師器皿で東側周溝の覆土中層から出土した。体部外面に横位の墨書が見られる。「庄」か。口縁部に



第140図 (11) SI1008②

欠損があり、2/3周程がいくつかに分れて割れている。1箇所は墨書に掛かるように割れているため、意図的に打ち欠いた可能性がある。内面の調整はミガキ、外面は体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリである。色調は橙色、胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。底部内面に黒色を呈する部分がある。黒色処理の痕跡か。

6は覆土中から出土した土師器杯の体部片で、外面に墨書が見られる。遺存部位が少ないため判読は難しい。色調はにぶい黄橙色、胎土に白色粒子を含む。

7～9は土師器甕である。7はカマド火床部及びカマド周辺から出土した。器厚0.8cm 前後と厚手で、胴部最大径は22.2cm である。口縁部外面に稜を有し、口唇部がわずかにつまみ上げられる。外面胴部上位を横方向にナデた後、胴部下位から上位へ向けて縦方向に削っている。色調はにぶい黄褐色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。8はカマド火床部覆土上層から出土した。色調は橙色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。内外面とも煤が付着している。9はカマド火床部覆土中層から上層にかけて出土した常陸型甕である。最大径を胴部上位に有し、20.6cm を測る。全体的に薄手で、器面には凹凸が残る。色調はにぶい黄橙色、胎土に多量の白色粒子と雲母を含む。

10は須恵器長頸壺の胴部片である。カマド内覆土下層と梯子ピット覆土上層から出土した破片が接合した。遺存部の上端で径17.4cm を測る。外面胴部下位に回転ヘラケズリが施される。色調は灰白色、胎土に黒色粒子を含む。11、12は須恵器甕の胴部片である。11はカマド火床部覆土上層から出土した。表面はにぶい褐色、断面は赤褐色を呈する。胎土に白色粒子を多く含む。12もカマド火床部覆土上層から出土した。外面の調整は叩きのち斜方向のナデ、内面は所々に当て具痕と輪積み痕が見られる。色調は灰色で、断面はやや褐色を帯びるが焼成は堅緻である。胎土に白色粒子、小礫を含む。

13は東側周溝の覆土中層から出土した鉄製の穂摘具で、木製の握り部と目釘が残存している。釘孔の径は左が0.5cm、右が0.4cm、長さ2.5cm である。

(11) SI1009 (第141～143図、図版16・60・61・69)

17N-52グリッド周辺に位置する。平面形は東壁に比して西壁が短い台形を呈する。主軸はN-9°-E、規模は主軸長3.48m、幅3.52mを測る。掘り込みは確認面から16.0cm～22.7cm とやや浅い。カマド

は北壁中央に設置されるが残りが悪く、周辺に炭化材が見られる。また焚き口からは支脚が出土している。ピットは支柱穴4基と梯子ピットが1基検出された。深さはP1が6.0cm、P2が10.3cm、P3が10.4cm、P4が30.9cm、P5が9.9cmである。周溝は北壁中央から東壁中央にかけて攪乱により不明瞭だが、全周すると思われる。幅は27cm～38cm、深さは1cm～13cmである。床面や周溝に焼土が点在しており、覆土は炭化物を含んだ黒褐色土が主体となる。

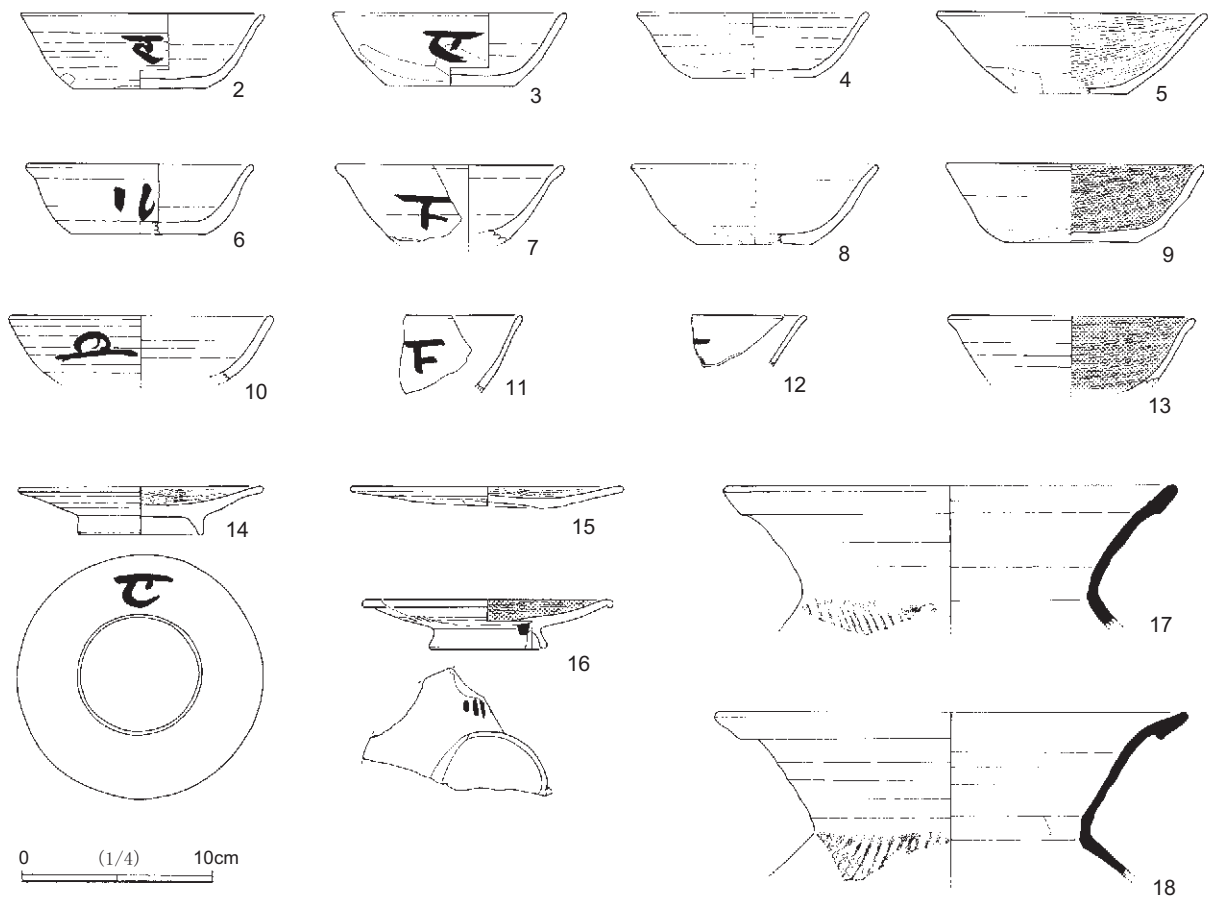
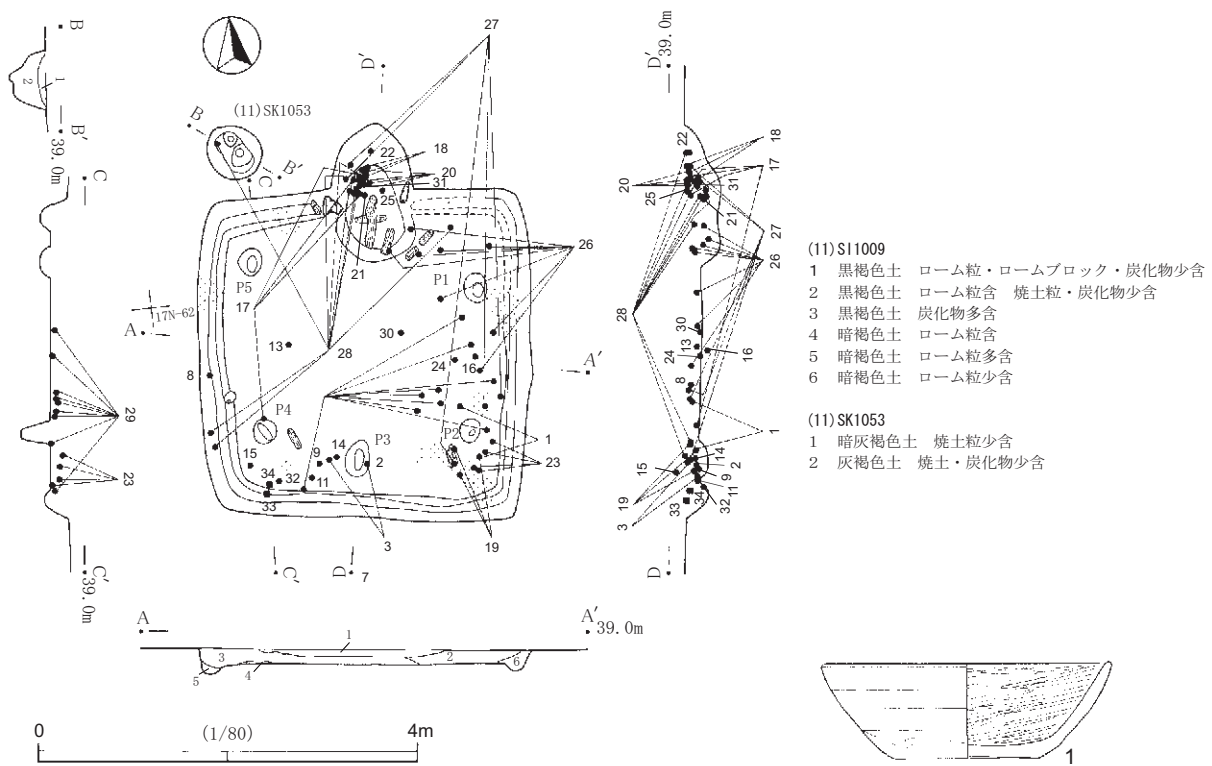
床面から覆土上層にかけて多くの遺物が分布している。1～13は土師器杯である。1、5、9、13は内面にミガキが施される土師器杯で、9、13は黒色処理される。外面体部下位から底部にかけての調整は、ミガキの施されない土器同様手持ちヘラケズリである。2、3、6、7、10～12は体部外面に墨書が見られる。外面体部下端から底部にかけての調整は、6のみ回転ヘラケズリで他は手持ちヘラケズリである。また、胎土に白色粒子、赤色スコリアを含むものが殆どである。

1は住居南東の覆土下層・中層から出土した。口径15.0cmとやや大ぶりで、体部がわずかに内湾しながら開く器形である。内面の色調はにぶい橙色、外面は灰褐色である。2は梯子ピットの覆土上層から出土した。被熱しており、内外面に煤が付着している。色調はにぶい黄褐色を呈する。3は梯子ピット周辺の覆土下層及び上層から出土した。にぶい橙色を呈し、胎土に微量の白色針状物を含む。2、3の体部外面には共通の墨書が見られる。文字がかなり崩れているため判読は難しいが、「万呂」の可能性もある。2の方が3よりも原型をとどめていると思われる。

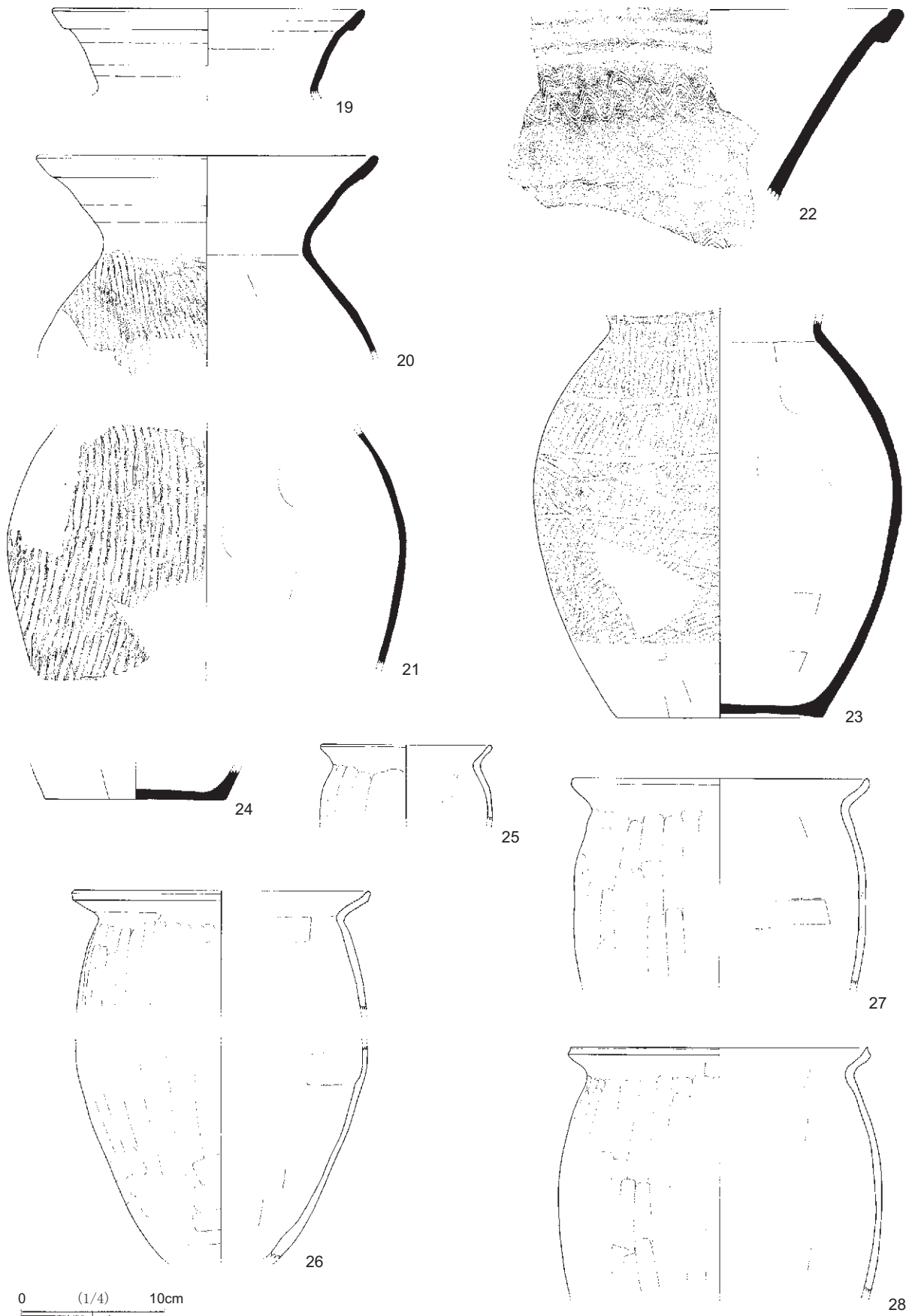
4、6は平成9年度の確認調査時に出土した杯である。4の色調は橙色、外面に煤が付着している。5はカマド覆土中から出土した。底径が口径の1/2以下と小さく、体部が内湾気味に大きく開いて口縁部で外反する。内面の色調は橙色、外面はにぶい褐色である。6は口径に比して底径がやや大きく、口縁部が外反する杯である。外面体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。体部外面に墨書が見られるが判読できない。色調は橙色を呈する。

7、10、12は覆土中からの出土である。7はやや小ぶりの杯で、底径は口径の1/2前後と思われる。にぶい黄褐色を呈し、体部外面に正位の墨書「下」が見られる。8は西側周溝の覆土上層から出土した。底径は口径の1/2、体部が内湾しながら立ち上がり口縁部で外反する。内面の色調はにぶい橙色、外面は明赤褐色である。9は住居南側の床面付近から出土した完形品である。底径は口径の1/2に近く、外面体部下位にヘラケズリによる面取りが成されている。底部には糸切り痕が見られる。色調は褐灰色を呈する。10は体部が内湾しながら開く杯で、橙色を呈する。体部外面に半円と「一」を組み合わせた記号が墨書されている。11は住居南側の覆土下層から出土した杯の口縁部片である。外面に「下」の墨書が見られる。色調はにぶい橙色を呈する。12は外面にわずかに墨書の残画が見られる口縁部片である。色調はにぶい黄褐色、胎土に細砂粒を含む。13は住居中央西寄りの覆土中層から出土した。底部を欠損する。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土に微量の白色針状物を含む。

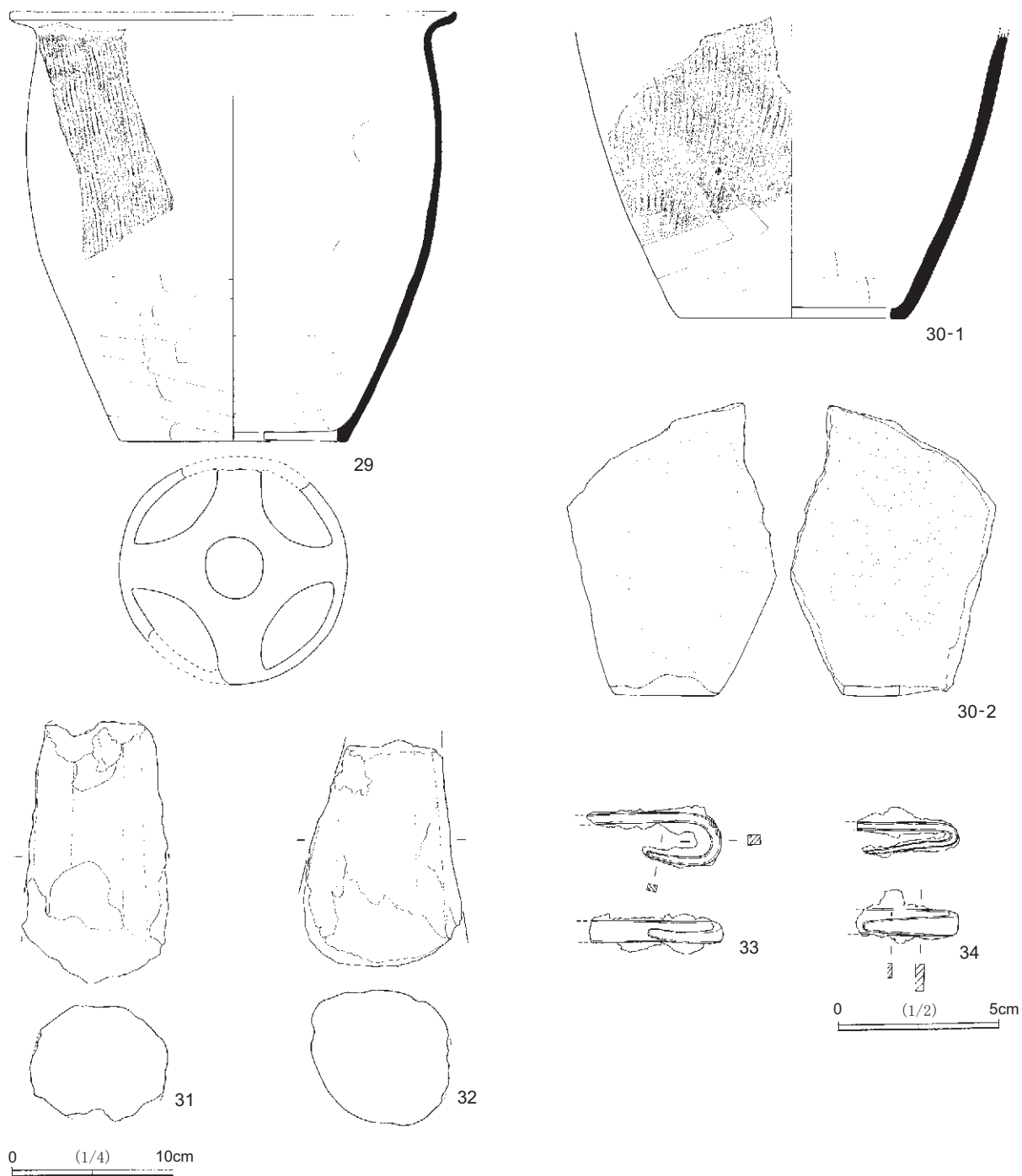
14、16は土師器高台付皿である。14は梯子ピット西の覆土中層から出土した。口縁部にわずかに欠損があるが、ほぼ完存する。内面の調整はミガキ、外面は高台を貼り付けた後丁寧になでている。体部外面に土師器杯2、3と同様の墨書が見られる。「万」もしくは「万呂」か。色調はにぶい黄橙色、内面1/3周程の範囲に煤が付着している。16は住居東側の床面から出土した。内面はミガキ及び黒色処理、外面は体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリを施し高台を貼り付けている。体部外面には90°近く離れた2箇所に墨書が見られる。一つは横位に「三〇」と判読でき、二文字目以降の痕跡がわずかに見られる。もう一



第141図 (11) SI1009①・(11) SK1053



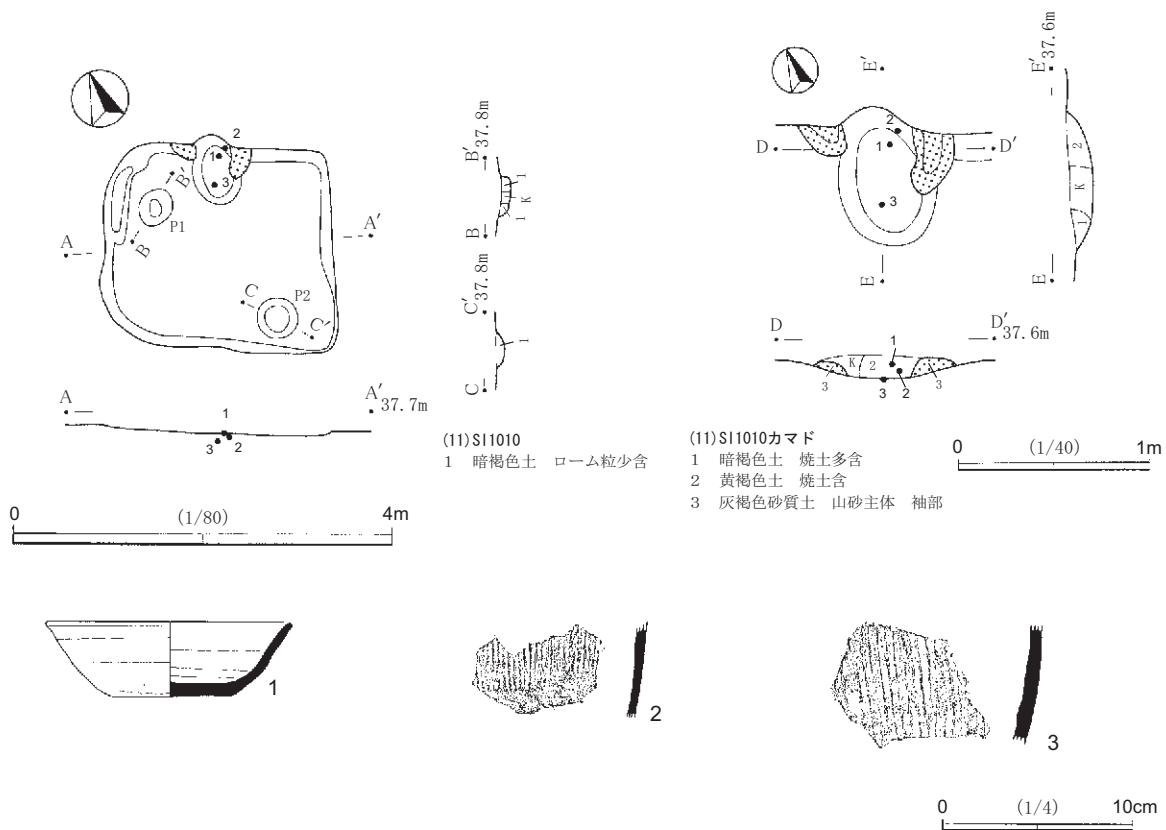
第142図 (11) S11009②



第143図 (11) S11009③

つは残画が確認できるのみで、詳細は不明である。色調はにぶい赤褐色を呈する。15は土師器皿で、住居南西隅の覆土上層から出土した。器形に歪みがあり、器高に0.6cm程の差が生じている。内面の調整はミガキ、外面体部下位から底部にかけては手持ちヘラケズリが施される。色調はにぶい橙色を呈する。内面1/3周程被熱のためか暗褐色に変色しており、変色した範囲の外側に煤が付着している。

17～24は須恵器甕である。17～21、23は丸く張った胴部に「ハ」の字状に開く口縁部を有する器形である。いずれも胎土に白色粒子を多く含み、軟質である。色調は明褐色ないし赤褐色で、23のみ灰褐色を呈

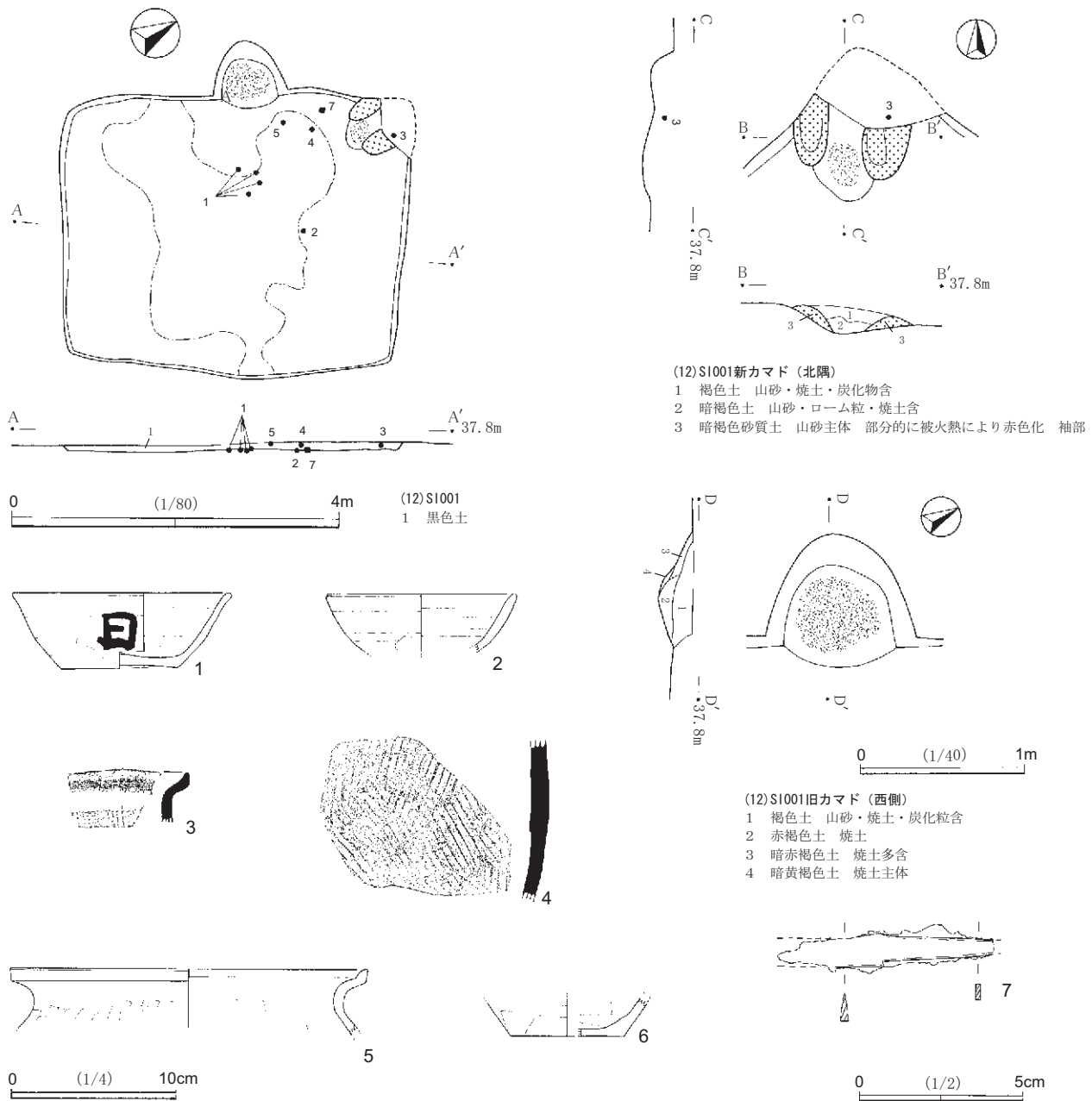


第144図 (11) SI1010

する。17~20は折り返し状の口縁部で、端部を丸く収める。23は大きく安定した底部に丸く張った胴部を持ち、胴部最大径26.0cmを測る。叩きの上に沈線状のナデが4~5条見られる。内面胴部上位には当て具痕が顕著である。22は大型甕の口縁部で、カマド煙道部の覆土上層から出土した。6条一組の櫛描波状文が2段見られる。内面の色調は灰黄褐色、外面は明褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含み、やや砂質を帯びる。

25~28は土師器甕である。25はカマド火床部の覆土上層から出土した小型の甕である。内面の色調は褐灰色、外面はにぶい橙色を呈する。胎土は白色粒子、大粒の赤色スコリアを含み、砂質を帯びる。26はカマド、住居北東の覆土下層から中層に分布していた。最大径を口縁部に有する。胴部最大径は口径よりわずかに小さく20.5cmを測る。口唇部はわずかにつまみ上げられる。内面の色調はにぶい褐色、外面は黒褐色、胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。27はカマド火床部及び住居東側の覆土中~上層に点在していた。口径と胴部最大径は同一で20.6cmを測る。内面の色調はにぶい橙色、外面は褐灰色、胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。外面の所々に煤が付着している。28はカマド火床部、周溝南西、SK1053の覆土中~上層に点在していた。最大径を胴部上位に有し、22.8cmを測る。口縁部は短く外反し、端部がつまみ上げられる。色調はにぶい黄橙色、胎土に白色粒子、赤色スコリアを含み、砂質を帯びる。

29、30は須恵器甕である。29は五孔の甕で住居東側の覆土下層を中心に出土した。浅黄色を呈し、非常に薄く作られている。30は住居のほぼ中央、床面付近から出土した。遺存部位が少なく単孔か五孔か不明である。にぶい黄橙色を呈し、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。外面胴部下端に研磨痕が認められる。また、外面には縦16.8cm、横10.0cmの範囲で煤が付着している。中心部分には煤が見られず、直接火を受けた範囲と思われる。内面は外面の煤と対応した範囲が黒ずんでいる。



第145図 (12) SI001

31、32は支脚である。31はカマド火床部の覆土上層から出土した。頭部・基部ともに欠損し、砂質で脆い。表面は所々崩れているが、残存している表面は平滑に整えられ、面取りされている。32は南西隅の床面付近から出土した。砂質で非常に脆く、頭部を欠損している。基部は器面が荒れているため不明瞭である。平面形は先端に向かって幅が狭まる円錐形と思われる。表面はナデによって平滑に整えられている。

33、34は鉄製刀子の茎を曲げた物である。2点とも周溝南西の覆土上層から出土している。

(11) SI1010 (第144図、図版16・61)

16N-97グリッドに位置する。平面形は東西に長い不正な方形で、北隅と西隅が丸みを帯びる。全体に攪乱が著しい。主軸はN-24°-E、規模は主軸長2.10m、幅2.43mと小型である。掘り込みは確認面か

ら3.5cm～8.6cmで、南隅で最も浅くなる。カマドは北壁中央に設置されるが、遺存状態が悪く袖の一部が残存する程度であった。煙道部の張り出しも少ない。直径40cm前後のピットが南隅と北隅から検出された。深さはP1が18.6cm、P2が16.0cmである。周溝は北隅付近に部分的に見られ、幅25cm、深さ4cm～6cmである。

遺物の出土量は少なく、いずれもカマドからの出土である。1は須恵器杯である。カマド火床部の覆土上層から出土した。底径は口径の1/2で、体部が内湾気味に立ち上がる。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。表面の色調はにぶい褐色だが、断面中心部分は灰色を呈している。胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。

2、3は須恵器甕の胴部片である。2はカマド煙道部の覆土中層から、3はカマド火床部の床面から出土した。外面の調整は叩きで、2は下位にヘラケズリが施されている。2の色調はにぶい黄橙色、3は黒褐色を呈し、ともに胎土に白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。

(12) SI001 (第145図、図版16・17・61・69)

18N-21グリッド周辺に位置する。平面形は長方形で、カマドの付け替えが行われた住居である。主軸はN-57°-W、規模は主軸長3.50m、幅4.19m、掘り込みは確認面から1.2cm～13.5cmとかなり浅い。床面中央に硬化面が見られる。カマドは北西壁中央と北隅の2基を有する。北西壁カマドは袖等の残存が見られず、良く焼けた火床面のみが検出された。北隅のカマドは煙道部に攪乱を受けているものの、袖の基底部が残っていた。遺存状況から北西壁中央から北隅へ付け替えられたものと思われる。ピット、周溝は検出されなかった。

遺物の出土は少なく、北側に集中している。1、2は土師器杯である。1は住居中央北西寄りの床面から出土した。体部外面に墨書「日」が見られ、墨書を含む口縁部1/3周～底部を残して他は割れていた。欠失か破砕かは不明である。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。色調は橙色で底部外面に黒斑が見られる。胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。2は住居中央北東寄りの床面から出土した。底部を欠損する。体部が内湾気味に開く器形で、外面体部下位に手持ちヘラケズリが施される。色調はにぶい黄橙色、胎土は1と同様である。

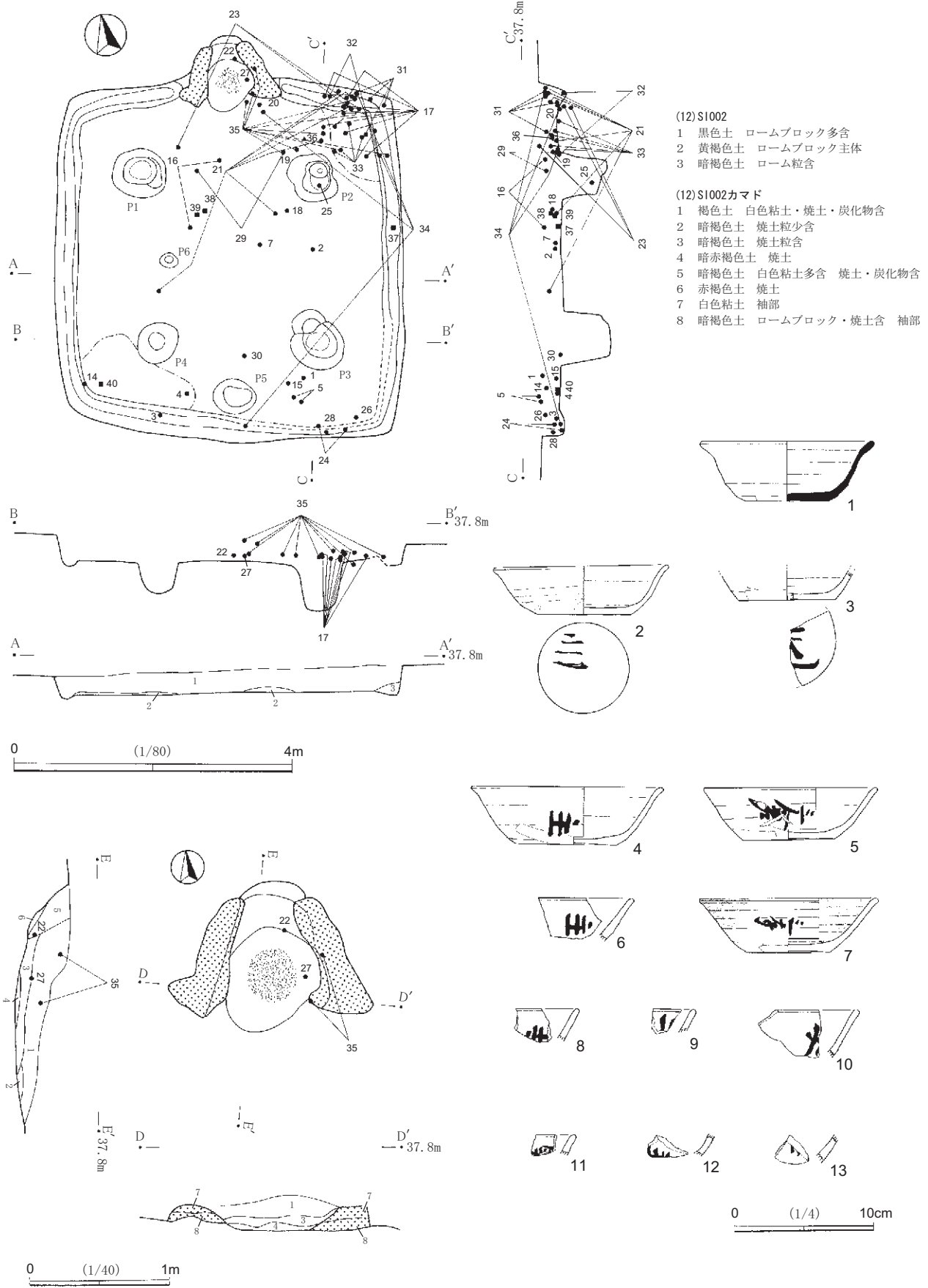
3は須恵器甕の口縁部片である。北隅新カマドの攪乱部から出土した。胴部外面に叩きが見られる。色調は橙色、胎土に白色粒子を多く含む。4は須恵器甕の胴部片である。住居北側の覆土上層から出土した。外面の調整は叩きだが、胴部中位付近で叩きの向きが変わっている。内面には当て具痕が見られる。色調は灰色、胎土に多量の白色粒子、スコリアを含む。

5はカマド前の覆土上層から出土した土師器甕である。口縁部は直立した後大きく開いて端部をつまみ上げている。色調は橙色、胎土は土師器杯と同様である。6は土師器甕の底部で、カマド内から出土した。内面は被熱による器面の剥離が著しく、割れ口には山砂が付着している。内面の色調は橙色、外面は灰褐色を呈する。

7は鉄製刀子で、住居北側新旧カマドの中間付近の床面から出土した。刀身部の関付近から茎にかけて残存している。

(12) SI002 (第146～148図、図版17・61・69・70)

18N-02グリッド周辺に位置する。平面形は南北に長い方形である。柱穴の検出状況から建て替えが行われた住居と思われる。主軸はN-11°-E、規模はやや大型で主軸長5.26m、幅5.00mを測る。掘り込



第146図 (12) SI002①

みは確認面から24.2cm～39.0cmである。カマドは北壁中央に設置され、遺存状況は比較的良好である。ピットは支柱穴4基と梯子ピットが検出された。支柱穴のうちP1～P3は新旧があるが、P4には見られない。深さもP1が68.2cm、P2が65.0cm、P3が67.5cmとかなり深いのに対してP4は44.6cmと異なる。P5は梯子ピットで17.2cmと浅い。周溝は南東隅が攪乱により判然としないながらも、カマド両脇を除いて全周すると思われる。幅は28cm～42cm、深さ6cm～15cmである。硬化面は北東隅と南西隅を除いたほぼ全面に見られ、北東隅からは焼土及び粘土を検出した。ピット、周溝とも遺存状況がよくしつかりとしている。

出土遺物は多く、特に北東隅付近に集中している。1は須恵器杯である。住居南側の覆土上層から出土した。やや小さめの底部から体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部で肥厚し大きく外反する。表面の色調は灰色、断面は赤褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。

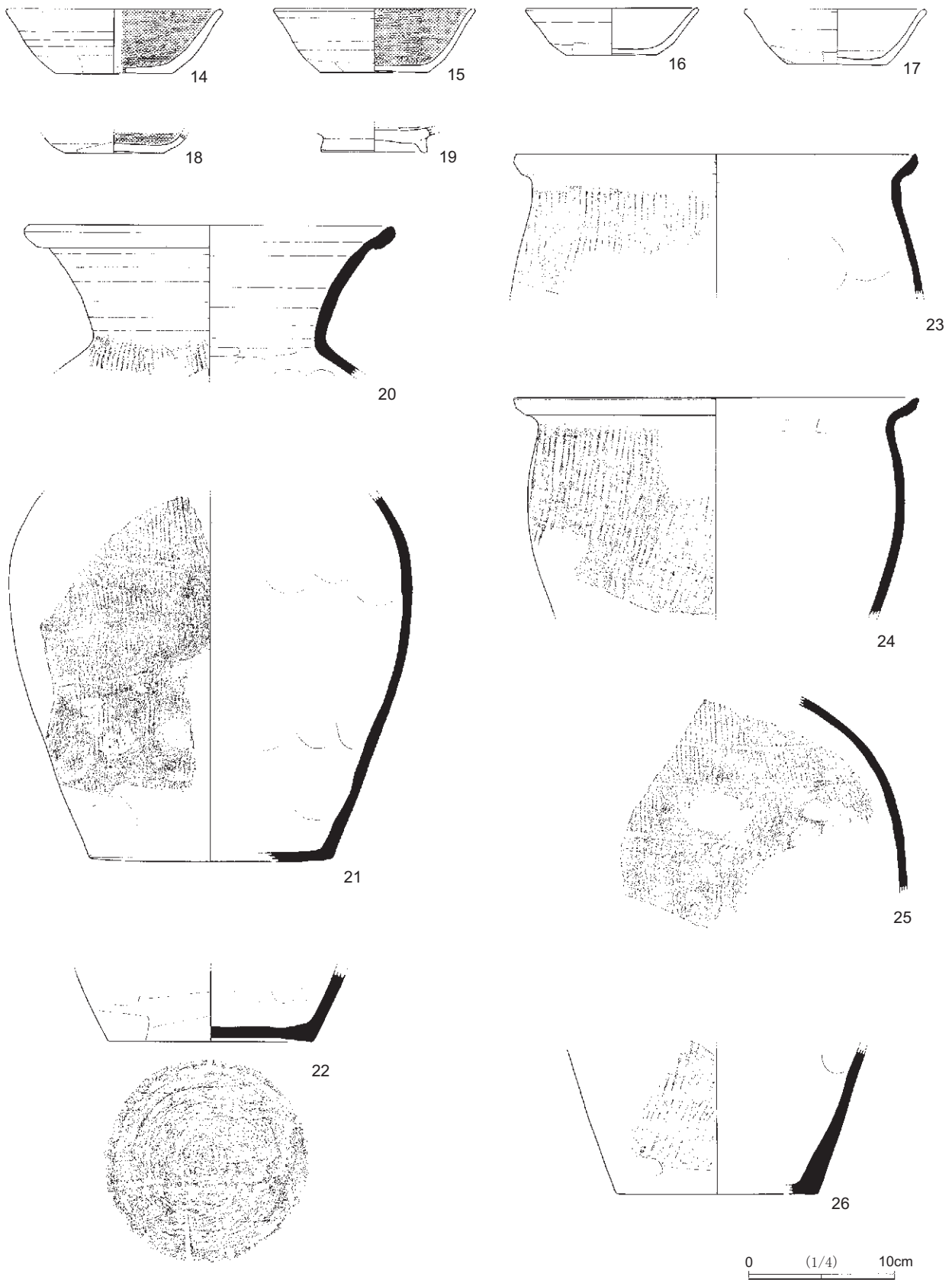
2～18は土師器杯である。底径は口径の1/2よりやや大きく、体部が内湾気味に開く器形が主体を占める。外面体部下端から底部にかけての調整は全て手持ちヘラケズリである。胎土はやや多めの砂粒と赤色スコリアを含むものが多い。2は住居中央西寄りの覆土下層から出土した。底部外面に「主」の墨書が見られるが、墨痕は薄い。口縁部2/3周程が割れており、残りの1/3周から底部にかけては欠けが見られない。欠失か破砕かは不明である。色調はにぶい橙色で、外面に煤が付着している。3は住居南側周溝内の覆土下層から出土した。底部の1/4周程が遺存しており、底部外面には墨書が見られる。(11) SI1001の11と似ており「継」の一部と思われるが、遺存部が少ないため詳細は不明である。色調はにぶい橙色を呈する。4は住居南側の床面付近から出土した。口縁部のほとんどを欠損している。体部外面に横位の墨書「主」が見られる。5は住居南側の覆土上層から出土した。体部外面に横位の墨書「三倉」が見られる。色調は橙色を呈する。底部に回転糸切り痕が見られる。

6、8～13は外面に墨書が見られる口縁部片及び体部片で、すべて覆土中からの出土である。6のみ横位の「主」と確認できる。他は残画で「主」あるいは「倉」と推測されるものもある。7は住居中央の覆土下層から出土した。口縁部から体部を2/3周程欠損している。口縁部を数回に分けて細かく割った可能性がある。体部外面横位に「三寺」の墨書が見られ、墨書の周囲に煤や油煙が付着している。

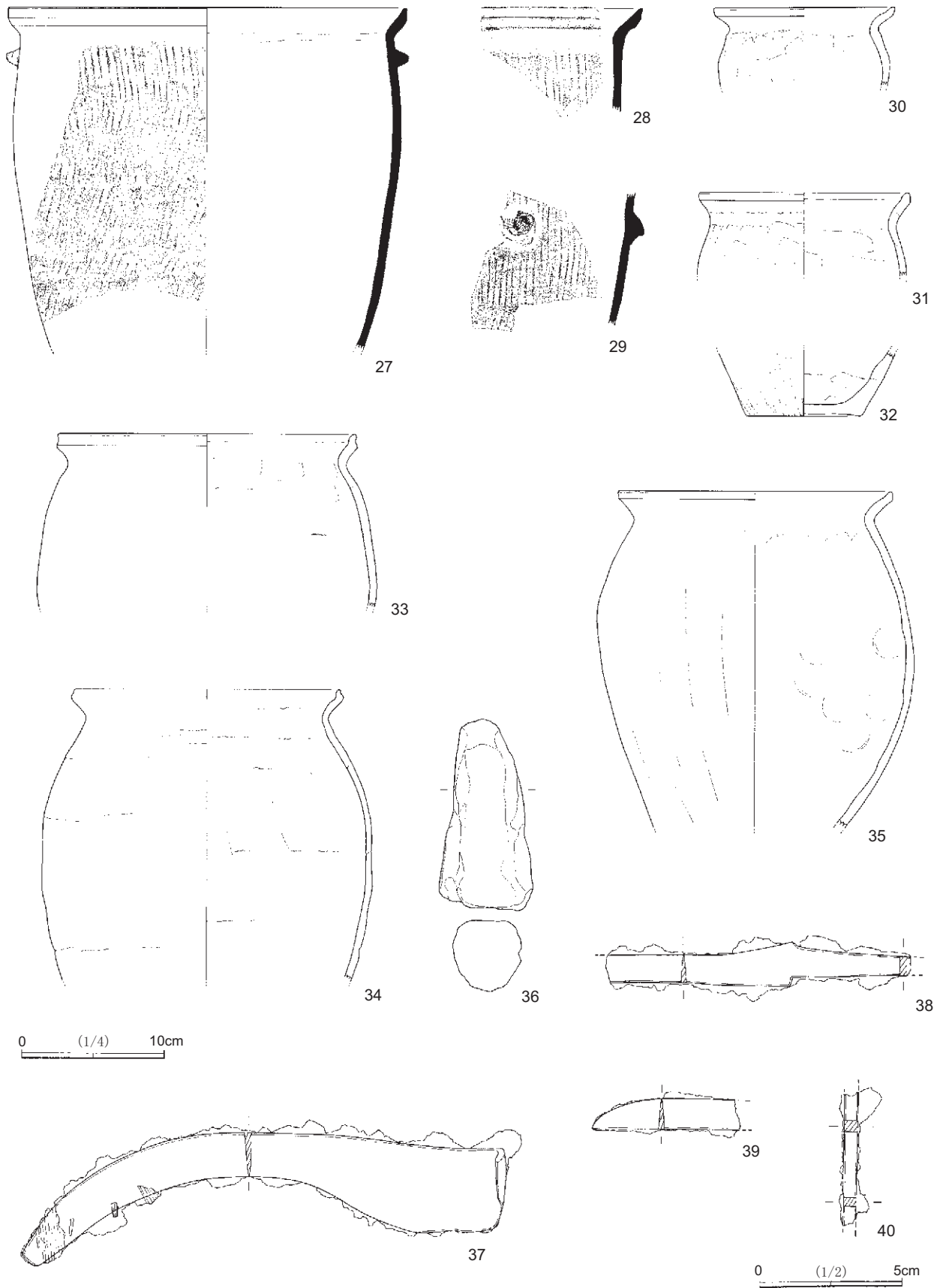
14、15は内面にミガキ及び黒色処理が施された杯で、14は南西周溝の覆土上層から出土した。外面体部下位から底部にかけて煤が付着している。色調はにぶい橙色である。15は住居南側の覆土下層から出土した。体部内面に朶と思われる種子の圧痕が見られる。色調はにぶい黄橙色である。16は住居中央付近の覆土上層から出土した。にぶい黄褐色を呈し、全体的に摩滅している。17は北東隅の覆土下層から出土した。内外面とも被熱による器面の摩滅が目立つ。色調はにぶい黄橙色を呈する。18は内面黒色処理された杯の底部で、住居中央付近の覆土中層から出土した。割れ口が摩滅しているため意図的に打ち欠いた可能性がある。橙色を呈し、胎土に少量の白色針状物と雲母を含む。

19は土師器高台付碗である。住居北側P1付近の覆土中層から出土した。底部のみの遺存で、内面はミガキ及び黒色処理、外面底部回転糸切りの後高台が貼り付けられる。色調は橙色、胎土に雲母を含む。

20～26、28は外面に叩き目をもつ須恵器甕である。20、23は胴部内面に当て具痕が見られる。胎土に多量の白色粒子と大粒の赤色スコリアを混入するものがほとんどで、20は少量の白色針状物を、21、25は雲母を含んでいる。20は「ハ」の字状に大きく開く甕の口縁部で、カマド右袖前の覆土下層から出土した。表面の色調は黒褐色、断面は明赤褐色である。21は北東隅の覆土中層から上層にかけて分布していた。胴部上位が丸く張る甕で、胴部最大径は24.0cmとなる。内面には当て具痕が残るが、摩滅・剥離が著しい。



第147图 (12) SI002②



第148図 (12) SI002③

内面の色調は橙色、外面はにぶい褐色である。22はカマド煙道部覆土下層から出土した底部片である。底部外面には敷物圧痕が残る。色調は褐色である。外面に煤が付着している。23は住居北東及びカマド前の覆土上層から出土した。表面の色調は灰オリーブ色、断面は明赤褐色を呈する。24は口縁部に最大径を持ち、胴部が丸くなる甕である。住居南東側の周溝覆土から出土した。内面はヘラナデで当て具痕は残っていない。色調は暗灰黄色である。25はP1内覆土下層から出土した胴部片である。内外面とも所々被熱により器面が剥離している。外面には沈線状のナデが数本見られる。色調は内面がにぶい黄褐色、外面が黒褐色を呈する。26は住居南東隅の覆土上層から出土した底部である。外面の調整は叩きの後胴部下端にヘラケズリが施される。内面はヘラナデで、当て具痕が残る。内面の色調は灰黄褐色、外面は暗灰黄褐色である。28は住居南側の覆土中層から出土した口縁部片である。焼成は堅緻であるが、断面の色調は灰黄褐色と明赤褐色が層状になっている。

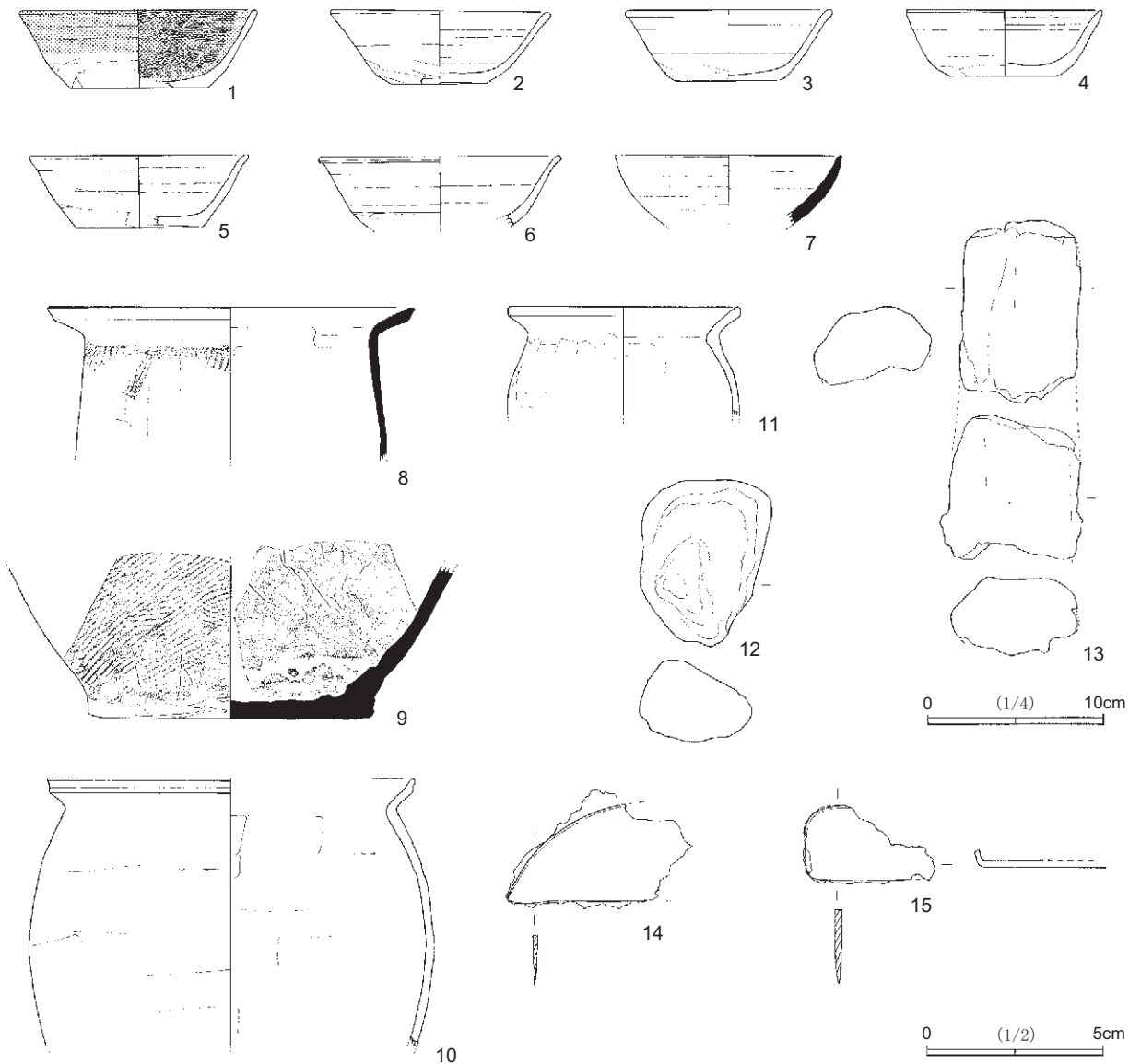
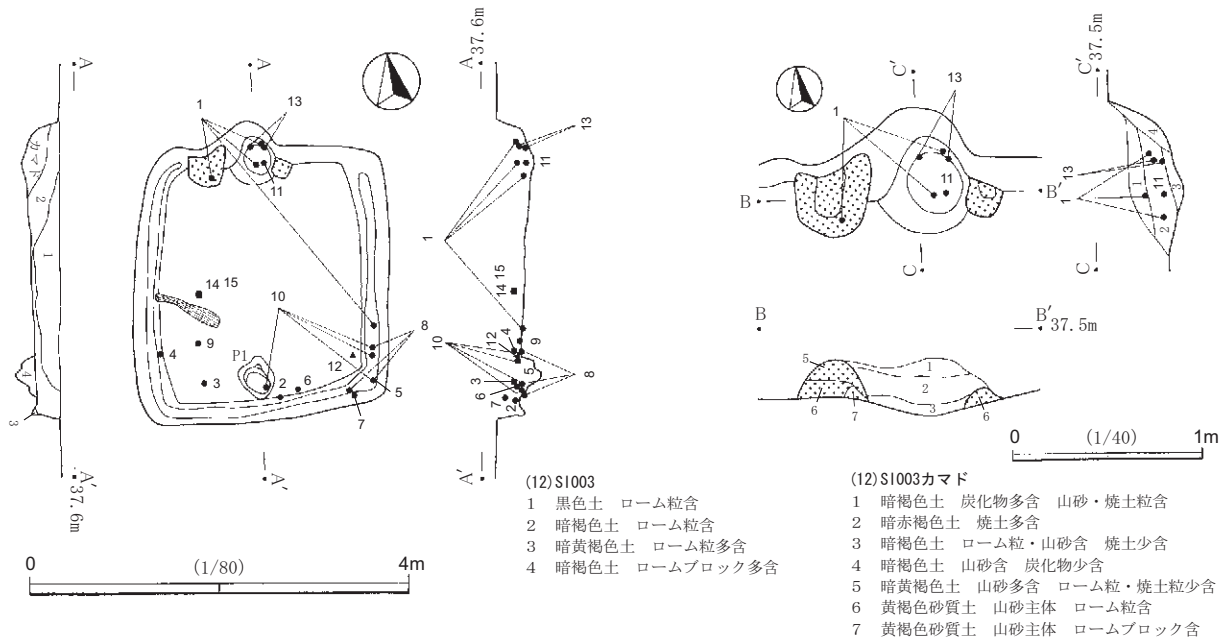
27、29は須恵器甕である。27はカマド火床部の覆土中層から出土した。最大径を口縁部に持ち、胴部上位に2個一對の把手がつく。把手はヘラ先状工具で四隅を囲むように圧着させている。把手の直下で胴部がやや膨らみ、直径27.4cmとなる。色調は暗赤褐色、胎土に白色粒子を多く含む。29は甕の把手を含む胴部片である。住居北側中央の覆土下～中層から出土した。内面の色調は灰黄褐色、外面はにぶい黄橙色である。胎土に白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。

30～35は土師器甕である。30は住居南側中央の床面付近から出土した小型甕である。全体的にやや厚手で、口縁部に最大径を有する。内面の色調は黒褐色、外面はにぶい赤褐色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。31は住居北東隅の覆土中層から上層にかけて出土した。口径と胴部最大径がほぼ同一になる。緩やかに外反する口縁部は肥厚し、端部がわずかにつまみ上げられる。外面口縁下部に輪積み痕を有する。内面の色調は暗赤褐色、外面はにぶい赤褐色、胎土に細砂粒、大粒の赤色スコリアを含み、砂質を帯びる。

32～34は常陸型甕で、胎土に白色粒子、雲母、赤色スコリアを多量に含む。32は北東隅の覆土中層から出土した。外面の調整は縦方向のミガキ、内面はヘラナデで、胴部下位に輪積み痕が残る。混入物が多く、器面が凸凹している。内面の色調は黒褐色、外面は明赤褐色を呈する。33は住居北東隅の覆土下層から出土した。胴部の張りはさほど強くなく、径24.0cmとなる。口縁部は短く外反し、端部をつまみ上げている。胴部の調整は内外面ともヘラナデで、器面に凹凸が残る。内面の色調は明黄褐色、外面はにぶい橙色を呈し、34は住居南側周溝、カマド前、北東隅の覆土下層から上層にかけて出土した。最大径を胴部中位に有し、23.4cmを測る。口縁部は短く外反し、端部をつまみ上げている。胴部外面には横方向に平行する木口状工具の当たりが多数見られる。色調はにぶい赤褐色、胎土は33ほどではないが混入物が多く、器面に凹凸がある。35はカマド及び住居北東隅の覆土下層から上層にかけて出土した。胴部最大径は22.2cmであるが、器形には歪みがある。外面胴部上位の調整は単位がはっきりしない。内面には当て具痕状の丸い凹みが多数残っている。色調はにぶい黄橙色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。

36は住居北東の覆土下層から出土した石製品である。砂岩製で先端に向かって細くなる形状である。非常に脆く、用途は不明である。

37～40は鉄製品である。37は東側周溝の覆土上層から出土した鎌である。全長17.28cm、基部長3.35cm、幅2.85cm、刃部中央幅1.53cm、厚さ0.2cmである。38、39は住居中央付近の覆土中層から出土した刀子で、38は刀身から茎部にかけての部位、39は刀身先端部である。刃部折損部の幅が異なるため、別個体と思われる。40は住居南西隅の床面から出土した棒状製品で、断面方形を呈する。



第149図 (12) SI003

(12) SI003 (第149図、図版17・18・61・69)

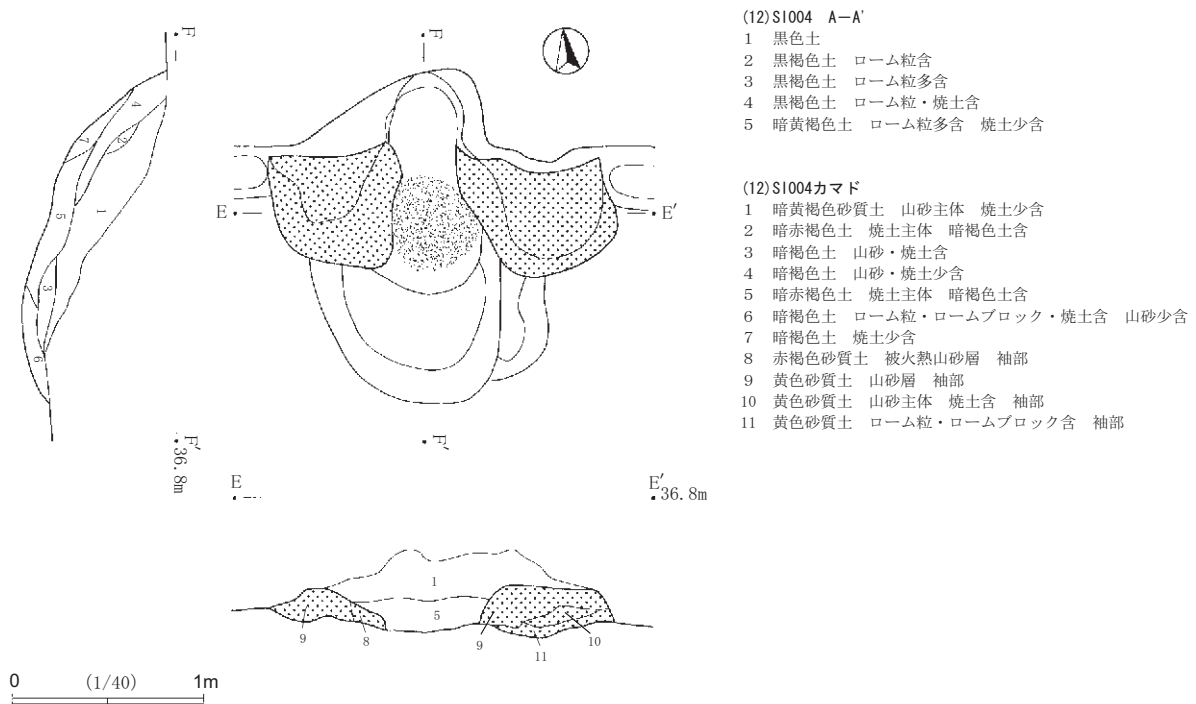
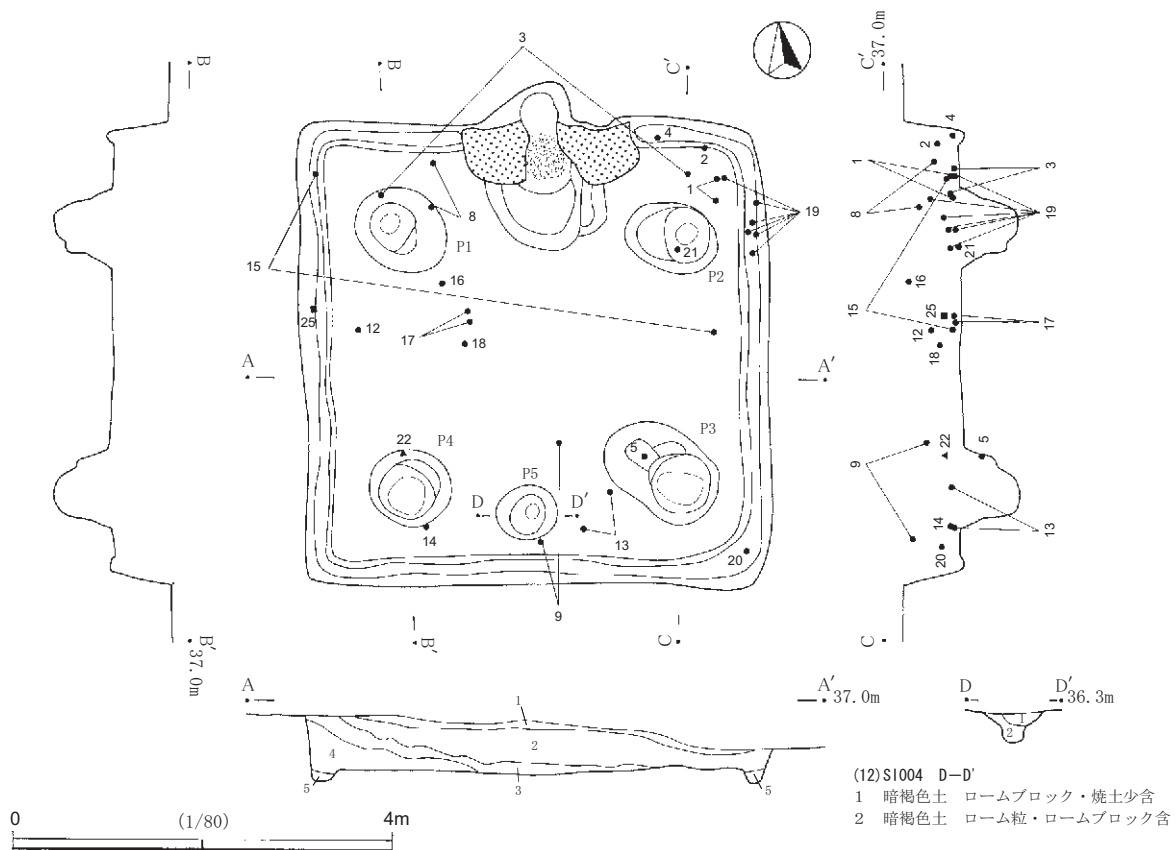
18N-33グリッド周辺に位置する。平面形は南北にやや長い方形である。主軸はN-9°-E、規模は主軸長2.95m、幅2.70m、掘り込みは確認面から21.8cm~36.2cmである。カマドは北壁西寄りに設置されるが、残りは悪く袖の一部が検出された程度である。カマド内からは投げ込んだと思われる土器・土製支脚が出土している。支柱穴は見られず、梯子ピット1本のみの検出で深さは21.9cmである。周溝は幅20cm~38cm、深さ3cm~16cmでカマドのある北壁には巡らない。床面は平坦で全面が硬化面となっている。

遺物は床面から覆土上層にかけて分布し、炭化材も出土している。1~6は土師器杯である。1は内面ミガキ及び黒色処理が施される。カマド周辺覆土中層、周溝南東から出土した。口径に比して底径がやや大きく、体部は内湾気味に立ち上がったのち直線的に開く。外面体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。色調はにぶい橙色、胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリア、少量の白色針状物を含む。2~6の胎土はおおむね共通しており、白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。外面体部下位から底部にかけての調整は全て手持ちヘラケズリである。2は南側周溝際の床面から出土した。完形品だが口縁部に歪みがあり、最大径12.6cm、最小径11.7cmである。いずれにしても、底径は口径の1/2以下となる。内面の色調は橙色、外面は明赤褐色を呈する。被熱による器面の剥離が内面に見られる。3は住居南西の覆土中層から出土した。底径は口径の1/2程で、体部が直線的に開き、口縁端部が肥厚し外反する。内面の色調はにぶい黄橙色、外面は橙色で、外面の広範囲に煤が付着している。4は周溝南西の覆土中層から出土した。ほぼ完形に近く口唇部を所々欠くが、割れ口に油煙が付着していることから意図的に欠いて灯明器として使用したと思われる。油煙は4箇所が付着している。やや大きめの底部から内湾気味に立ち上がった後、直線的に開く。色調はにぶい黄橙色を呈する。5は周溝南東隅の覆土上層から出土した。外面底部からの立ち上がりは鋭く、口縁部が緩やかに外反する。内面の色調はにぶい黄橙色、外面は黒褐色を呈し、外面に煤が付着している。6は底部を欠損する。住居南端覆土上層から出土した。口縁部に向かって器厚を減じ、端部がやや下方に垂れ下がる。色調は橙色である。

7は周溝南東隅の覆土上層から出土した下総産の須恵器杯である。体部が内湾しながら開く器形で、底部を欠損する。内面の色調はオリーブ褐色、外面は明赤褐色を呈する。胎土は白色粒子の混入が多く、軟質の須恵器の胎土に似ている。

8、9は須恵器甕である。8は周溝南東隅の覆土上層から出土した。口縁部に最大径をもつ。胴部は張らず口縁部が端部に向かって肥厚しながら大きく開く。胴部外面の調整は叩きの後縦方向のヘラケズリで、上端に叩きが残っている。内面はヘラナデで、当て具痕は見られない。内面の色調は明赤褐色、外面は赤褐色を呈し、胎土に白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。9は住居南西の床面から出土した。胴部外面は斜位の叩き、内面には同心円状の当て具痕が見られる。内面胴部下位に後から付け足したものか、粘土塊が貼り付けられている。色調は灰色、胎土に白色粒子、スコリアを含む。東海産である。

10、11は土師器甕である。10は常陸型で、周溝南東隅及び梯子ピットの覆土上層から出土した。最大径を胴部中位に有し、23.3cmを測る。口縁部は短く外反し、端部をつまみ上げている。胎土に多量の白色粒子、雲母、赤色スコリアを含むためか、器面には凹凸が残る。外面胴部中位には縦方向のミガキがわずかにみえる。内面の色調はにぶい黄褐色、外面は黒褐色を呈する。11はカマド火床部覆土中層から出土した。最大径は胴部が口径よりわずかに大きく13.3cmを測る。口唇部は肥厚し、外面に稜を形成する。内面の色調は明赤褐色、外面は橙色を呈する。



第150図 (12) SI004①

12は住居南東隅の床面から出土した用途不明の石製品である。雲母片岩と思われ、特に研磨面などは見られない。13はカマド火床部覆土中層から出土した支脚である。先端部付近と、やや離れた部位の2点が検出された。先端部は被熱により表面が荒れているため、剥離している可能性がある。表面は平滑に整えられ、しっかりとした面を形成している。裏面は欠損している。所々山砂が付着している。14、15は住居中央西寄りの覆土中層から出土した鉄製鎌の一部と思われる。

(12) SI004 (第150・151図、図版18・61・66・70)

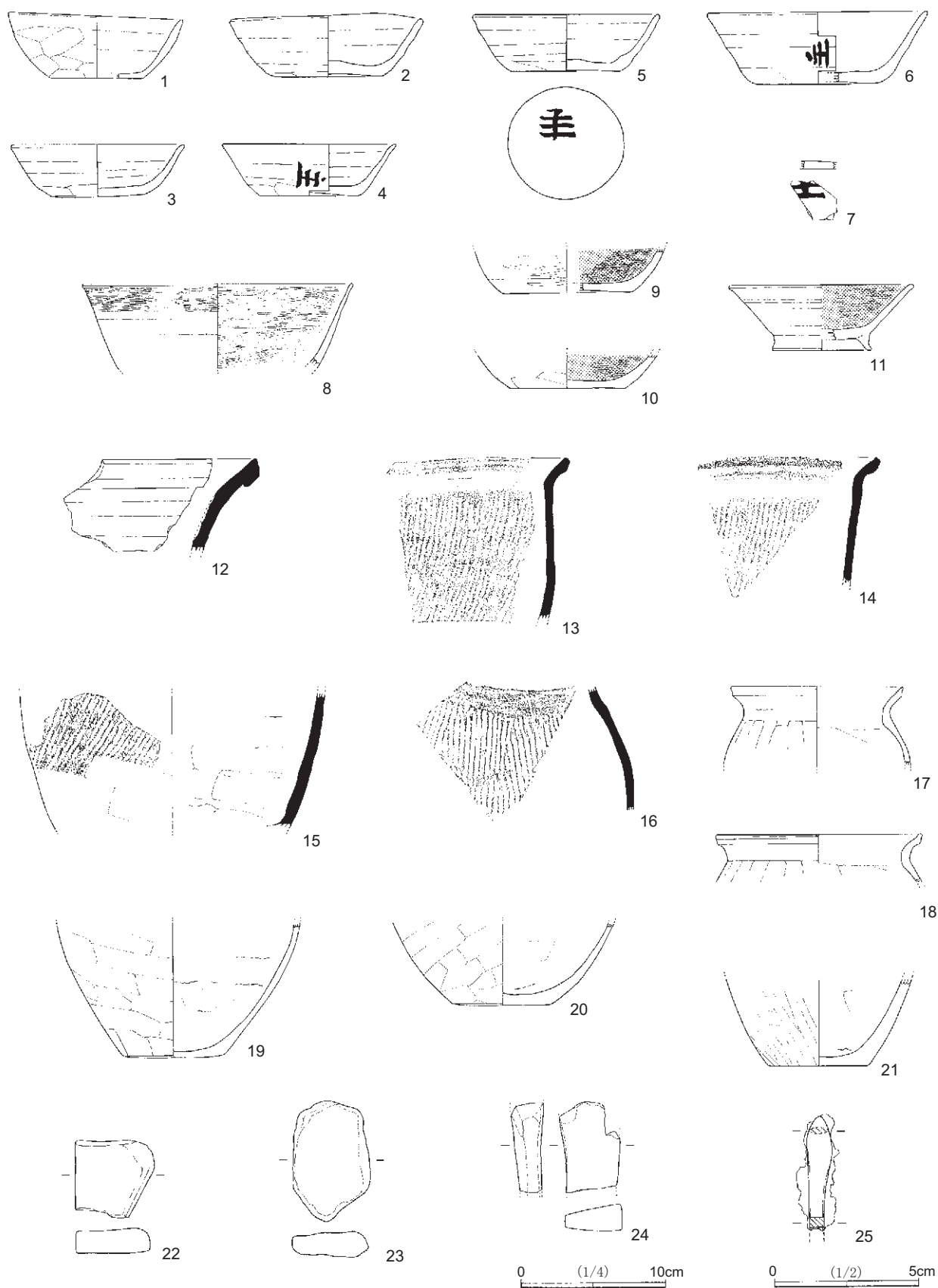
18N-76グリッド周辺に位置する。本住居跡の北30cmほどのところには東西に走る溝(12)SD057が存在する。平面形は正方形である。主軸はN-10°-E、規模は主軸長、幅とも4.93mである。掘り込みは確認面が西から東へ傾斜しているため29.5cm~65.7cmと差があるが、床面は平坦である。カマドは北壁中央に設置される。袖の遺存状況は良好であり、煙道には被熱痕が見られた。ピットは支柱穴4基と梯子ピットが検出され、深さはP1が66.0cm、P2が59.3cm、P3が65.6cm、P4が59.0cm、P5が37.4cmである。支柱穴は4基とも段を有しており、調査所見によると建て替えよりも柱抜き取りの可能性の方が高そうである。周溝は幅20cm~33cm、深さ5cm~13cmでカマド部分を除いて全周する。

遺物は床面から覆土上層にかけて分布している。1~7は土師器杯である。外面体部下端から底部にかけての調整は手持ちヘラケズリが主体を占める。1は外面口縁部直下までヘラケズリが施される土師器杯である。住居北東の覆土下層から出土した。器形に歪みが見られ、0.6cm程の器高差がある。色調はにぶい橙色、胎土に雲母微粒子を含む。2は北東隅の覆土中層から出土した。口縁部に歪みを有する。色調は橙色ないしにぶい橙色で、黒褐色を呈している部分もある。胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。3は北東と北西の覆土下層から出土した破片が接合した。わずかに内湾する体部に外反する口縁部が付く。色調は明赤褐色で、胎土に白色粒子と大粒の赤色スコリアを含む。4はカマド脇の周溝覆土から出土した。体部外面に横位の墨書「主」が見られる。内外面とも煤が付着しており、色調はにぶい橙色を呈する。胎土にやや多めの砂粒、白色粒子、赤色スコリアを含む。5は南東ピットP2の覆土中層から出土した。口径に比して底径がやや大きく、体部が直線的に開くが、器形に歪みが見られる。底部外面には墨書「主」が記され、外周が摩滅している。色調は褐灰色を呈する。6は確認調査時のトレンチから出土した。体部が直線的に開く器形で、底部からの立ち上がりは丸みを帯びている。体部外面に横位の墨書「主」が見られる。色調はにぶい褐色、胎土に白色粒子を多く含む。内外面とも煤が付着している。7は覆土中から出土した土師器杯の底部片で、外面に墨書が見られる。遺存部位が少ないため、文字の判読はできない。色調は橙色である。

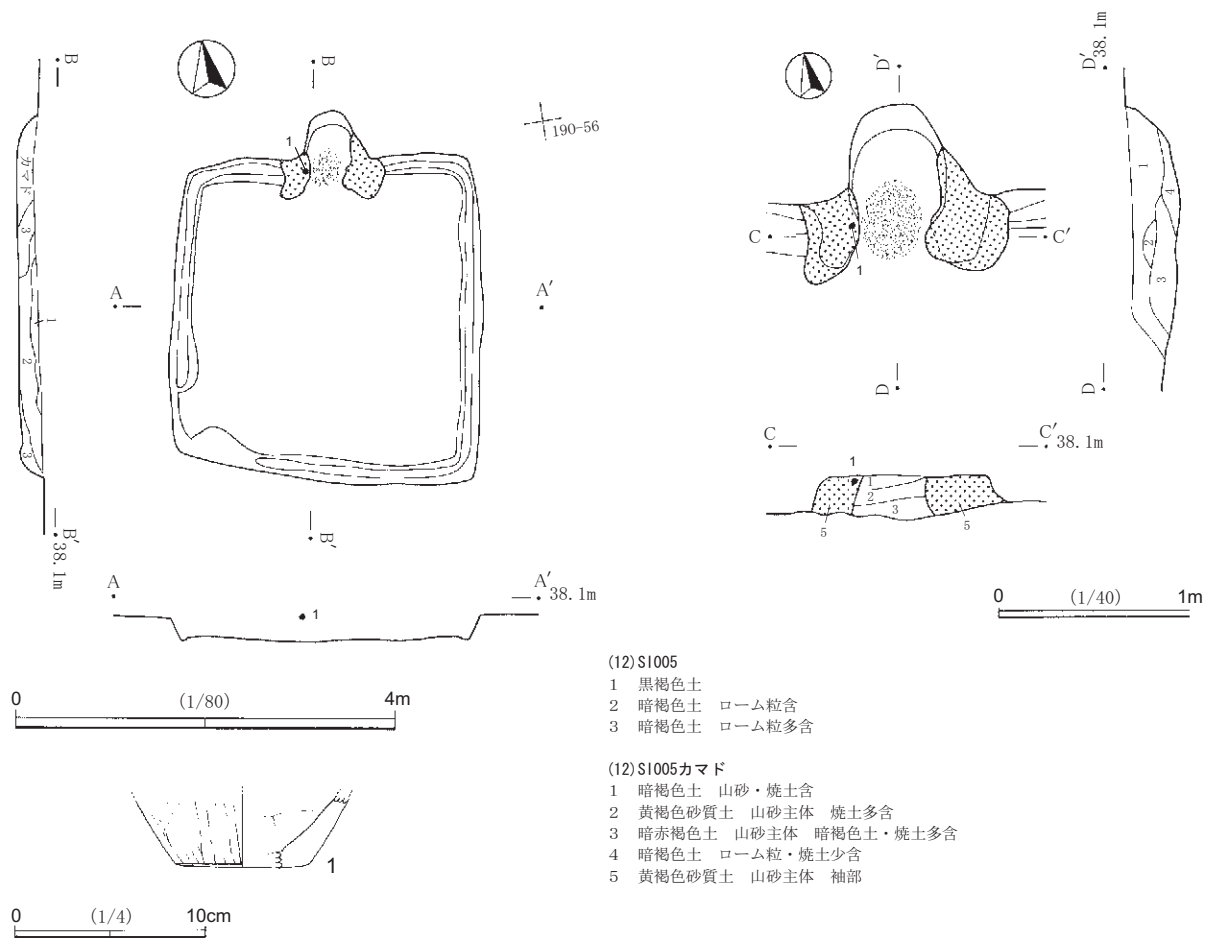
8~10は土師器碗で、8は内面及び口縁部外面にミガキが施される。住居北側の覆土中層から上層にかけて出土した。体部から口縁部へ向けて器厚を減じながら緩やかに開く。内面は明赤褐色、外面はにぶい橙色を呈し、砂粒をやや多く含む。9、10は内面ミガキ及び黒色処理が施される。9は住居南側中央の覆土上層から出土した。口縁部を欠損する。精緻な胎土で、色調はにぶい橙色である。底部回転糸切りの後体部下端から底部外周にかけて回転ヘラケズリが施される。10は確認調査時のトレンチから出土した。にぶい橙色を呈し、砂粒、少量の白色針状物を含む。

11はミガキ及び内面黒色処理された土師器高台付杯である。底部糸切り後高台を貼り付けている。外面体部下位の調整は遺存部位が少なく不明瞭である。色調は明赤褐色、胎土に少量の白色針状物を含む。

12~16は須恵器甕で、12~14は口縁部片である。12は住居西側の覆土中層から出土した。口縁部が「ハ」



第151图 (12) SI004②



第152図 (12) SI005

の字状に開くタイプの甕で、内外面ともナデで仕上げられる。表面の色調は灰黄褐色ないし褐灰色、断面は橙色を呈する。胎土に細砂粒、赤色スコリアを適量含む。13は住居南側の覆土下層、14はP3の南際覆土下層から出土した。ともに最大径を口縁部に有する器形で、胴部外面には叩きが施される。色調は灰色、胎土に白色粒子を多く含む。13の胴部内面には当て具痕が残る。15、16は胴部片である。15は西側周溝の覆土下層から出土した。13と同一個体の可能性がある。16は住居中央西寄りの覆土上層から出土した。雲母を多く含み、内面は明赤褐色、外面は橙色を呈する。

17～21は土師器甕である。17は小型の甕で、住居の中央西寄り覆土下層から出土した。口縁部内面と割れ口の一部に煤が付着している。丸く張った胴部に肥厚し緩やかに外反する口縁部が付き、端部を軽くつまみ上げている。18は口縁部片である。住居中央のやや西、覆土中層から出土した。口縁部は短く外反し、端部をわずかにつまみ上げている。胎土に細砂粒を含み、色調は赤褐色を呈する。19～21は底部片である。19は東側周溝北寄りの覆土上層から出土した。外面に横方向のヘラケズリが施される薄手の甕である。多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含むザラついた胎土で、褐灰色を呈する。20は周溝南東隅の覆土上層から出土した。底部から内湾気味に立ち上がる胴部には斜方向のヘラケズリが施される。胎土は19と同様ザラついており、白色粒子をやや多く含む。色調はにぶい赤褐色である。21は常陸型甕で、P1内の覆土上層から出土した。底部外面に木葉痕を有する。胴部外面にはミガキが施される。色調はにぶい橙色、胎土に多量の白色粒子、雲母、赤色スコリアを含む。

22～24は砥石で、22はP3の覆土中層から、23は確認調査時のトレンチから、24は覆土中から出土した。22は砂岩製で全面磨っており、厚さがほぼ均一である。23は雲母片岩か。意図的に形を整えたものかどうかは不明である。24は凝灰岩製で、上下両端を欠損する。被熱によるものか黒ずんでいる箇所がある。

25は西側周溝の覆土内から出土した鉄鏃である。錆のため不明瞭であるが、鑿箭式の刃部から頸部にかけての破片と思われる。関は不明瞭で、頸部から刃部へ曲線的に緩やかに移行する。刃部の形態はやや左右非対称である。

(12) SI005 (第152図、図版18)

190-45グリッド周辺に位置する。平面形は南北にやや長い方形である。主軸はN-9°-E、規模は主軸長3.40m、幅3.28m、掘り込みは確認面から10.3cm～31.0cmである。カマドは北壁中央に設置され、比較的良好に遺存していた。床面に硬化面は認められず凸凹しており、ピットも検出されなかった。周溝は幅14cm～30cm、深さ1cm～6cmを測り、南西隅で途切れる。

遺物の出土は少なく、1点を図化した。1はカマド左袖から出土した常陸型の土師器甕の底部である。遺存部位が少ないため不明瞭であるが、底部外面に木葉痕を残すものと思われる。胴部外面のミガキはナデに近く、光沢を伴わない。内面の色調はにぶい橙色、外面はにぶい赤褐色である。胎土に多量の白色粒子、雲母を含む。

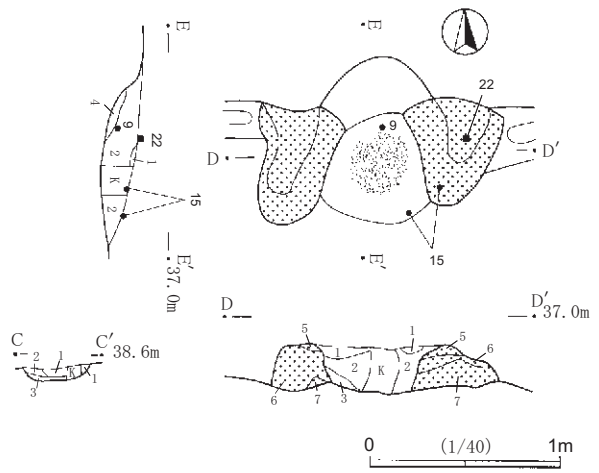
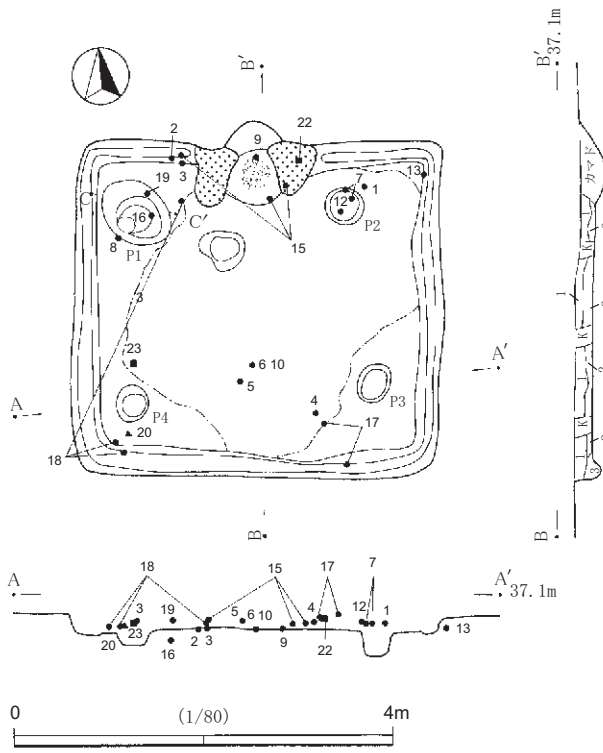
(12) SI006 (第153・154図、図版18・19・61・62・66・69・70)

190-49グリッド周辺に位置する。平面形は東西にやや長い方形である。主軸はN-6°-E、規模は主軸長3.56m、幅3.95mを測る。掘り込みは確認面から8.6cm～28.0cmと浅い。トレンチの痕跡が多く床面には多少凹凸があるものの床面中央に硬化面が認められた。カマドは北壁中央に設置される。遺存状態は比較的良く、火床面が強く被熱していた。ピットは支柱穴が4基検出され、深さはP1が19.1cm、P2が30.8cm、P3が22.1cm、P4が11.2cmである。周溝は幅18cm～34cm、深さ3cm～13cmで全周する。

遺物は床面から覆土上層にかけて分布する。1は北東ピット北側の覆土下層から出土した須恵器杯である。底径は口径の1/2以下、立ち上がりは丸みを帯び曖昧である。口縁部が大きく外反する。器厚が薄く、器形に歪みが見られる。底部の切り離しは全面に手持ちヘラケズリが施されているため不明瞭だが、回転ヘラ切りの可能性がある。色調は灰オリーブ色、胎土に多量の白色粒子と大粒の赤色スコリアを含む。

2～11は土師器杯である。2、3は内面にミガキ及び黒色処理が施される。2はカマド左脇周溝内から出土した。3に比べ器高がやや低く、底径も大きい。体部外面に墨書が記される。倒位の「十」か。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。色調はにぶい黄橙色、胎土に砂粒をやや多く含む焼成堅緻である。3はカマド左脇周溝際の床面から出土した。底部回転糸切り後体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。焼成は堅緻で、胎土に細砂粒、大粒の赤色スコリア、少量の白色針状物を含む。色調はにぶい褐色、被熱のためか斑に黒変している部分がある。

4～11は底径が口径の1/2前後のものが主体を占める。外面体部下端から底部にかけての調整は全て手持ちヘラケズリである。胎土に砂粒をやや多く含むものが目立つ。色調は橙色ないしにぶい橙色を呈するものが多い。4は住居南側の覆土下層から出土した。外面口縁部から体部にかけて煤が付着している。口唇部を小さく打ち欠いている所が1か所あり、割れ口が摩滅していることから意図的に打ち欠いた可能性がある。5は住居南側中央の覆土中層から出土した。やや深さがあり、底部に回転糸切り痕がある。6は住居中央南寄りの床面から出土した。口径と底径の差が比較的小さく、焼成堅緻で、他の杯とは異なり硬

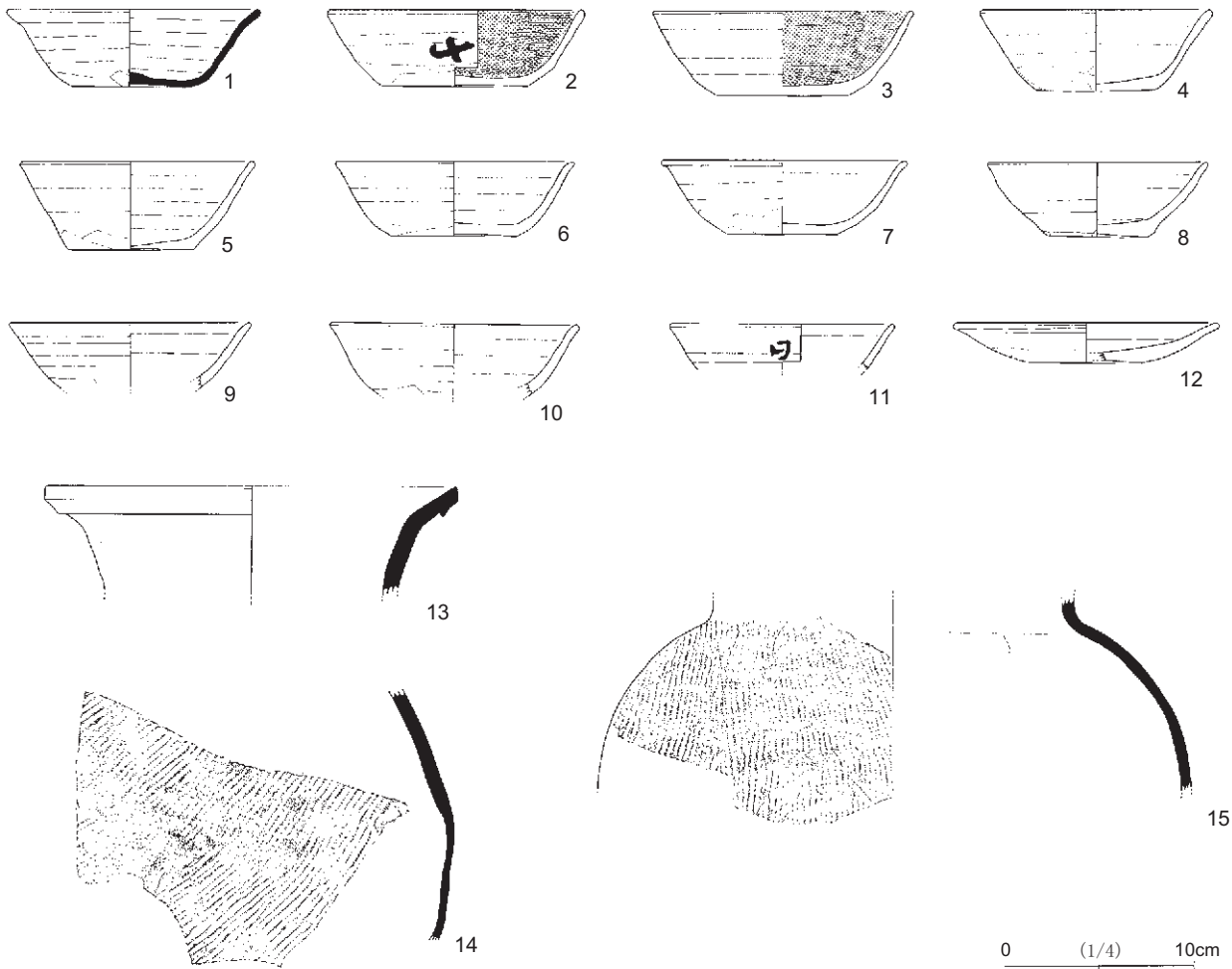


(12)SI006

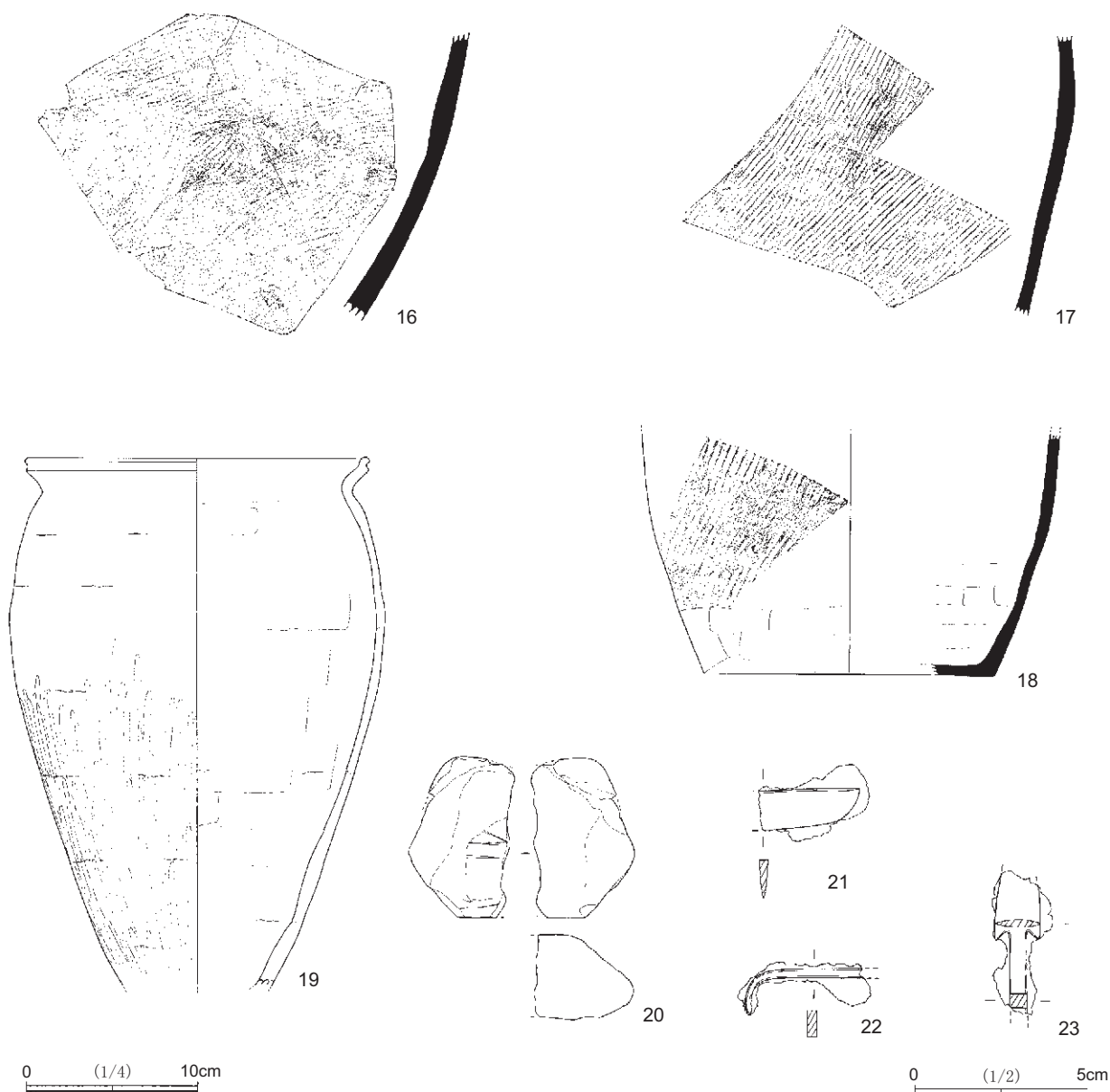
- 1 暗褐色土 焼土粒・炭化物含
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多含 焼土粒・炭化物少含
- 3 暗黄褐色土 焼土粒少含

(12)SI006カマド

- 1 赤褐色土 焼土主体
- 2 暗赤褐色土 焼土粒・山砂含
- 3 黄褐色砂質土 山砂主体 焼土含
- 4 暗褐色土 ローム粒・焼土含
- 5 黄褐色砂質土 焼土含 袖部
- 6 黄褐色砂質土 袖部
- 7 黄褐色砂質土 ロームブロック含 袖部



第153図 (12) SI006①



第154図 (12) SI006②

質な印象を受ける。7は北東ピットの覆土上層から出土した。口唇部が強く外反し、玉縁状を呈する。全体的に摩滅しており、やや大粒の混入物が目立つ。8は北西ピットの南側、覆土中層から出土した。底部は径が小さく、回転糸切り後無調整である。9、10は体部が内湾しながら開き口縁部で緩やかに外反する器形である。ともに底部を欠損する。9はカマド火床部の覆土中層から、10は6と同じ場所から出土した。11は体部外面に正位の墨書「日」が記されている。覆土中からの出土である。

12は北東ピット内の覆土上層から出土した土師器皿である。外面体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。内面の色調は橙色、外面は浅黄色、胎土に砂粒をやや多く含む。図化はしていないが、ほかに墨書の残画が見られる土師器杯口縁部片が2点出土している。

13～18は須恵器甕である。13は「ハ」の字状に開く口縁部で北東周溝際から出土した。灰黄褐色を呈し、胎土に白色粒子、雲母を多く含む。14は覆土中から出土した胴部片である。胴部の最大径付近、もしくは

肩部と思われ、遺存部下半で急激に器厚を減じる。成形中に穴が開いてしまったようで、胎土の異なる粘土で塞いだ痕が見られる。外面は斜位の叩きで上半部に釉が付着している。内面には同心円状の当て具痕が見られる。色調は灰オリーブ色、胎土に白色粒子、スコリアを適量含む。15はカマド周辺から出土した。肩部が丸く張り、頸部で急激にすぼまる。胴部外面は叩き、内面は明瞭な当て具痕はないが、器面に凹凸が見られる。色調は橙色、胴部内面に煤が付着している。16は北西ピットの覆土中から出土した胴部片である。表面の色調は灰オリーブ色、断面はにぶい橙色を呈する。胎土に小礫、赤色スコリアをやや多く含む。17は住居南側の覆土中層から出土した胴部片である。灰オリーブ色を呈し、外面上半に釉が付着している。内面上半には同心円状の当て具痕がかすかに残る。焼成堅緻、胎土は精緻である。18は住居西側の覆土下層に点在していた。胴下半から底部にかけての破片を図上で復元している。外面は叩きの後胴部下位にヘラケズリ、内面はヘラナデで仕上げられる。外面に煤が付着している。色調は灰オリーブ色、胎土に多量の砂粒と白色粒子、赤色スコリアを含む。

19は北西ピットの覆土上層から出土した常陸型の土師器甕である。底部を欠損する。最大径を胴部上位に有し、22.0cmを測る。口縁部は短く外反し端部をつまみ上げている。内外面とも輪積み痕が残り、胴部外面のミガキもやや粗い。色調はにぶい褐色、胎土に多量の白色粒子と雲母を含む。外面胴部下位に煤が付着している。

20は住居南西隅の覆土下層から出土した砥石である。安山岩製と思われ、四角く整形されている。片面に刃先が当たったような痕跡が見られる。

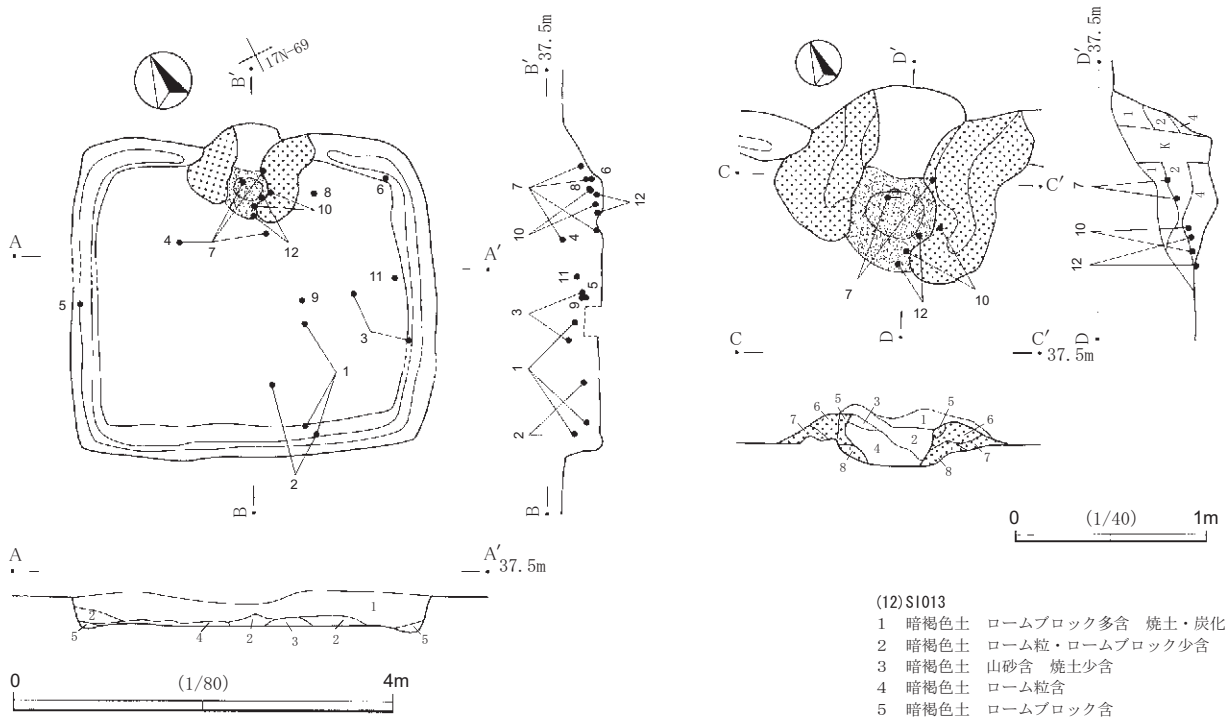
21～23は鉄製品である。21は刀子の刃部で覆土中から出土した。22はカマド左袖から出土した。厚さ2.5mm、幅7.8mmの板状のものがL字に曲がっている。23は鉄鏝で住居南西の覆土中層から出土した。

(12) SI013 (第155図、図版19・62)

17N-68グリッド周辺に位置する。遺構中央部が水道管によって破壊されている。平面形は東西に長い方形である。主軸はN-27°-E、規模は主軸長3.37m、幅3.86mを測る。確認面が西から東へ向かってやや傾斜しているため、掘り込みの深さは25.4cm～48.0cmであるが床面はほぼ平坦である。カマドは北東壁中央に設置され、一部に攪乱を受けるものの遺存状態は良好である。ピットは検出されなかった。周溝は幅26cm～39cm、深さ1cm～11cmで、カマド部分を除き全周する。

遺物は床面から覆土上層にかけて分布し、カマド周辺にやや集中する。1～4は土師器杯である。1、2は外面口縁部直下までヘラケズリが施される杯で、1は住居南側の覆土中層及び南側周溝の覆土中から出土した。器高に差があり、左右で3mmほど異なっている。体部が内湾しながら開き、口縁部で外反する。内面の色調は明赤褐色、外面は橙色を呈する。胎土にやや多めの白色粒子と砂粒、赤色スコリアを含む。2は住居南の覆土中層から上層にかけて出土した。体部は内湾し、底部に向かって急激に器厚を減ずる。外面には墨書が正位に記されている。細書きで筆運びが柔らかく、「栄信」と読める。色調はにぶい橙色を呈し、胎土に白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。3、4は底部糸切り後外面体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される底部片である。3は住居東側の覆土中層から出土した。ロクロ成形で、やや大きめの底部から体部が内湾気味に立ち上がる。底部外面には墨書「人」が記される。色調は赤褐色、胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。4は住居北側の覆土上層から出土した。体部が直線的に開く器形である。色調は赤褐色、胎土に多めの白色粒子、砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。

5は高台付杯の底部で、西側周溝の覆土上層から出土した。内面にミガキ及び黒色処理が施される。高

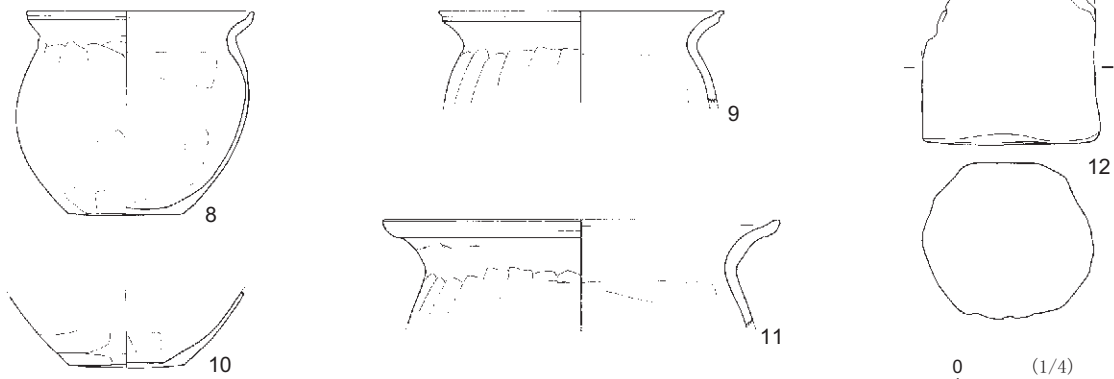
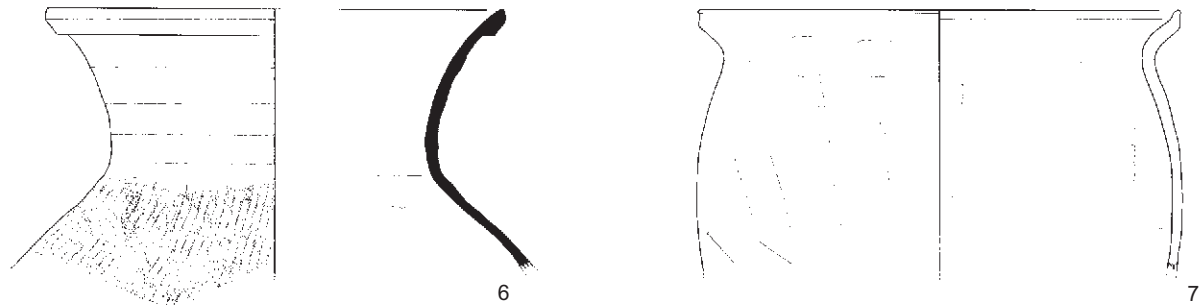
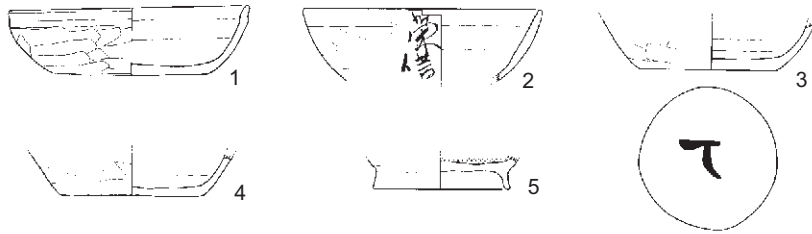
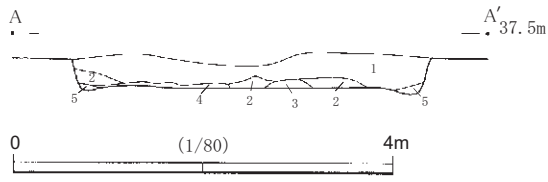


(12) SI013

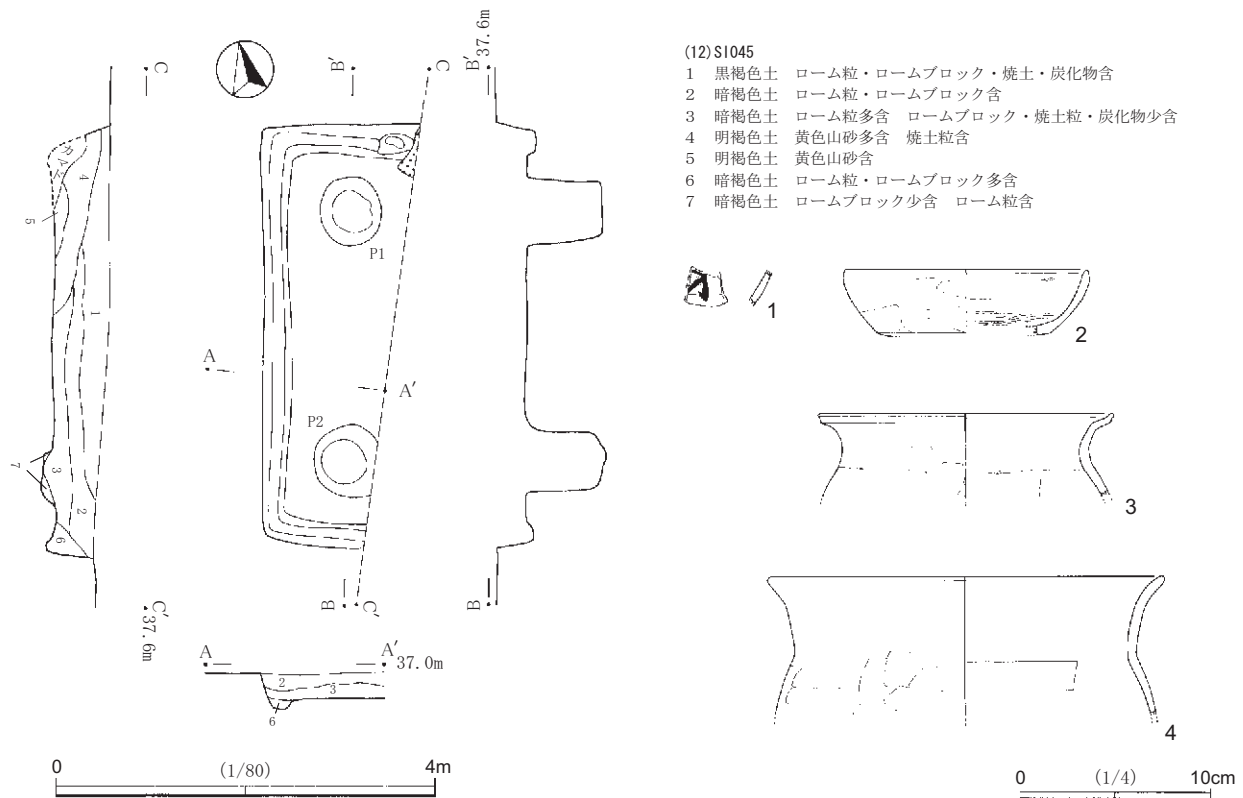
- 1 暗褐色土 ロームブロック多含 焼土・炭化物含
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少含
- 3 暗褐色土 山砂含 焼土少含
- 4 暗褐色土 ローム粒含
- 5 暗褐色土 ロームブロック含

(12) SI013カマド

- 1 暗黄褐色土 山砂含 焼土少含
- 2 暗褐色土 山砂少含 焼土含
- 3 暗赤褐色土 焼土主体
- 4 黄褐色砂質土 山砂・焼土多含
- 5 赤褐色土 砂質粘土が被熱赤化した部分 袖部
- 6 黄灰褐色砂質土 暗褐色土少含
- 7 黄灰褐色砂質土 暗褐色土含
- 8 赤褐色砂質土 焼土含



第155図 (12) SI013



第156図 (12) SI045

台内と摩滅した割れ口に煤が付着している。色調は赤褐色、胎土に砂粒を多く含む。

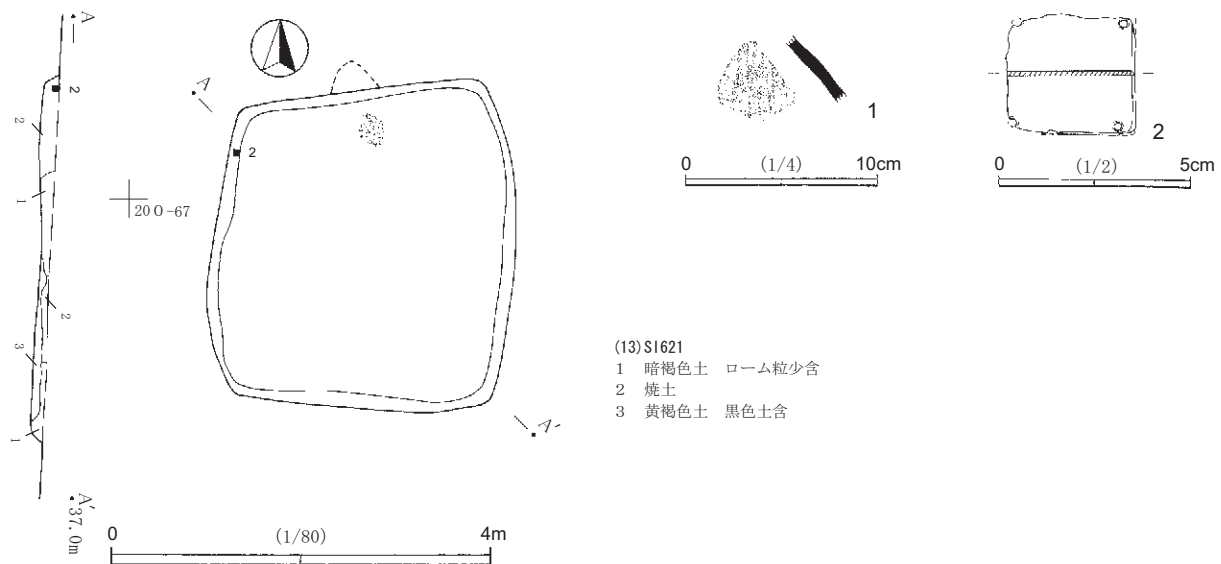
6は東隅周溝内から出土した須恵器甕である。肩部が張り、口縁部が「ハ」の字状に開くタイプで、胴部外面に叩きが施される。内面の色調は灰黄色、外面はオリーブ灰色、断面は橙色を呈する。胎土に白色粒子と大粒の赤色スコリアを多く含む。

7～11は土師器甕である。7はカマド火床部及びカマド周辺から出土した。胴部の張りは弱く、最大径25.7cmで口径よりわずかに大きい程度である。内面の色調は橙色、外面は明赤褐色で、胎土に多量の砂粒、赤色スコリア、少量の雲母を含む。8はカマド右側の覆土下層から出土した小型甕である。胴部が非常に薄く、器形に歪みを生じている。胴部最大径は12.2cmと口径とさほど変わらない。外面胴部上位は縦方向のヘラケズリ、中位より下半は横方向のヘラケズリが施される。胴部外面には煤が付着している。色調は褐色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。9は住居中央東寄りの覆土中層から出土した。暗赤褐色を呈し、白色粒子を多く含む。10はカマド火床部の覆土下層及び右袖から出土した底部である。非常に薄く、底部がわずかに丸みを帯びる。内面の色調は明赤褐色、外面は橙色、胎土に多量の白色粒子、少量の雲母、赤色スコリア、白色針状物を含む。11は東側周溝近くの覆土中層から出土した甕の口縁部である。口縁部は折り返し状になっており、外面口縁直下には輪積み痕も見られる。色調は赤褐色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。

12はカマド火床部から出土した支脚である。断面円形の柱状支脚で、表面は平滑に整えられる。他にもう1個体出土しているが、遺存状態が悪く基部のみを図示した。

(12) SI045 (第156図、図版19)

19P-03グリッド周辺に位置する。東側が調査区外のため西側1/3ほどを調査した。平面形は方形と思



第157図 (13) SI621

われる。主軸はN-16°-E、規模は主軸長4.48mを測る。掘り込みは確認面から20.5cm~33.0cmで、住居のプランがしっかりとしている。カマドは袖の一部が残っており、北壁中央に設置されたと思われる。ピットは支柱穴が2基検出された。径70cm前後で、深さはP1が78.3cm、P2が81.2cmである。周溝は現存部分では全周し、幅23cm~35cm、深さ7cm~12cmである。

遺物は少なく、全て覆土中からの出土である。1、2は土師器杯である。1は体部片で、外面に墨書が見られるが、遺存部位が少なく判読は難しい。2は底部を欠損する。体部が内湾し、外面口縁部直下までヘラケズリ、内面は体部下位から底部にかけてミガキが施される。にぶい橙色を呈し、胎土に砂粒を含む。外面体部下位から底部にかけて煤が付着している。

3、4は土師器甕である。3は砂粒を多く含むザラついた胎土で、褐灰色ないし褐色を呈する。胴部外面の調整はヘラケズリのちナデで、やや光沢を帯びている。口縁上部で強く外反し、口唇部をつまみ上げている。4は器厚が薄く、口縁部が緩やかな「コ」の字を描く。胴部外面は横方向のヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。色調はにぶい褐色、胎土に多量の砂粒、雲母を含む。武蔵型の甕と思われる。

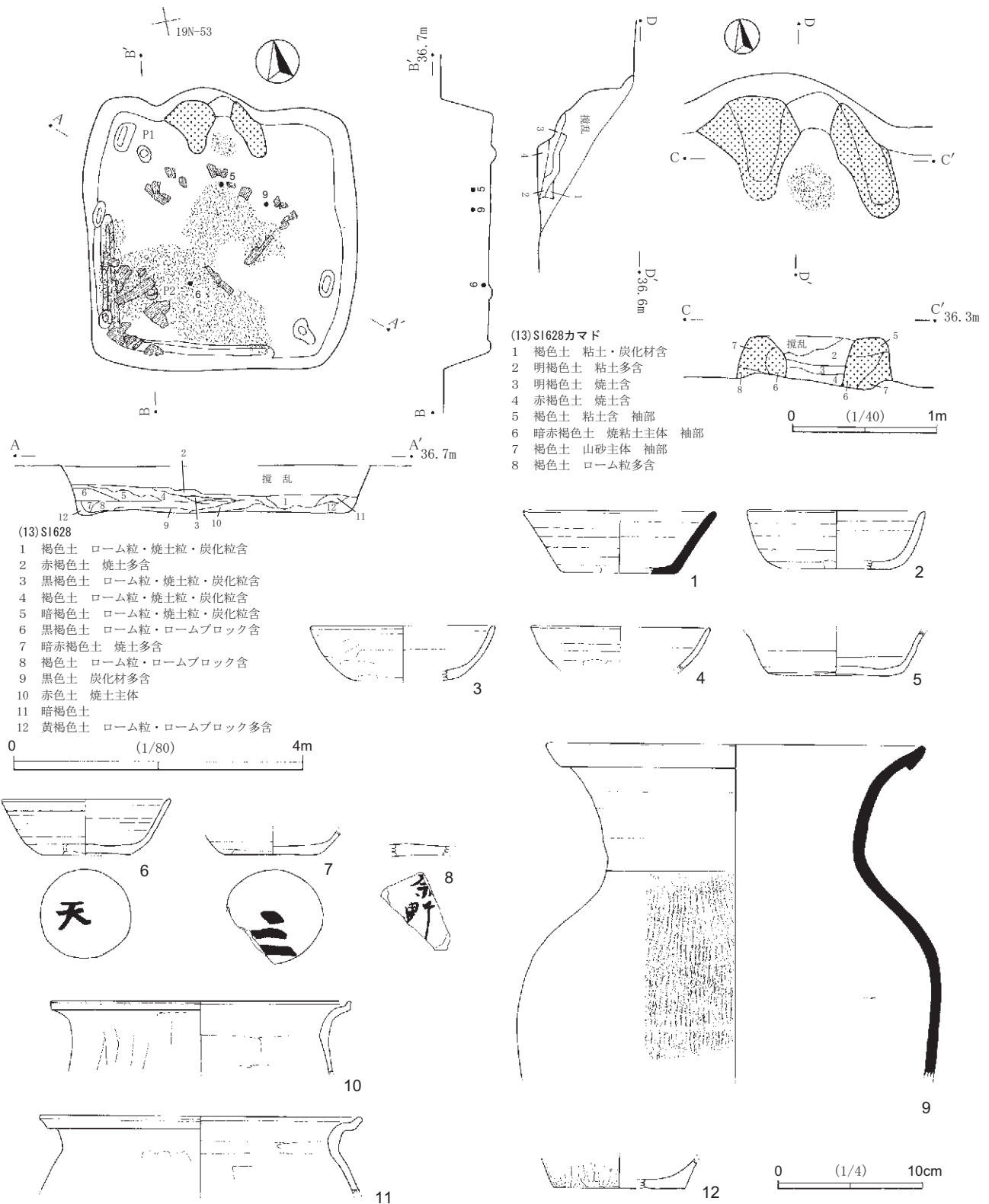
(13) SI621 (第157図、図版19・20・69)

遺跡の東端、200-57グリッド周辺に位置する。本住居跡の北4mほどの所には遺跡中央を東西に横切る溝が走っている。平面形は南北にわずかに長い方形であるが、焼失住居で攪乱も著しく残存状況は極めて悪い。主軸はN-0°-E、規模は主軸長3.30m、幅3.20mを測る。掘り込みは確認面から7.5cm~15.5cmと浅い。カマドは北壁中央に痕跡を確認するのみで、ピット、周溝は検出されなかった。

遺物は北西の壁際から帯金具が出土している。1は須恵器甕の胴部片である。灰オリーブ色を呈し、胎土に白色粒子、スコリアを含む。外面に叩きが見られる。2は銅製帯金具の裏金である。現存する長さ34.3mm、幅32.0mm、厚さ1.2mmで、径1.8mmの孔を四方に有する。

(13) SI628 (第158図、図版20・62)

19N-52グリッド周辺に位置する。床面部分が焼けており、多量の焼土・炭化材が検出されたことから火災住居と考えられる。土層の堆積状況を見ると、火災後人為的な埋め戻しは行われておらず、自然堆積で埋まった状態である。遺物出土状況も原位置を保った遺物の出土が認められないため、住居を廃棄する



第158図 (13) SI628

際に火を付けて燃やしたものと推察される。平面形は東西にやや長い方形で、主軸は $N-9^{\circ}-E$ 、規模は主軸長3.60m、幅3.72mを測る。掘り込みは確認面から57.1cm~73.8cmとかなり深い。カマドは北壁中央に設置されるが、攪乱が著しい。ピットは住居西側から2基検出された。深さはP1が6.9cm、P2が2.0cm

で、住居に伴うものかどうか不明である。周溝は西壁中央から南壁にかけての一部で、幅16cm～25cm、深さ2cm～5cmである。

遺物は覆土中層に散見される。1は体部が直線的に開く新治産の須恵器杯で、器壁がやや厚い。胎土に多量の雲母、砂粒を含み、灰色を呈するが、被熱により内外面とも黒く変色している。外面体部下端から底部にかけての調整は手持ちヘラケズリである。

2～8は土師器杯である。2～4、6～8の胎土はほぼ共通しており、白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。外面体部下端及び底部の調整は全て手持ちヘラケズリである。2は底部に丸みをもつ杯、3は外面口唇部直下までヘラケズリが施される。内面にはやや光沢をもった横方向のナデが施される。色調は赤褐色である。4は体部が内湾気味に開く杯である。色調は明褐色、にぶい橙色を呈する。5は口縁部を欠損するが、底径の大きい箱形に近い形状を呈すると思われ、須恵器の可能性もある。色調は黒褐色、胎土に多量の白色粒子と大粒の赤色スコリアを含む。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。6は底部中央に回転糸切り痕を残す。また、中央より外れた位置に「天」の墨書を記している。色調は明赤褐色であるが、外面は煤によって黒く変色している。7も同じく回転糸切り痕が見られ、「三」の墨書が記される。明赤褐色を呈する。8は底部片で、外面に「奈野」の墨書があり、赤褐色を呈する。

9は広口壺に近い形状の下総産須恵器甕である。最大径は胴部上位にあり、23.9cmを測る。色調は黒褐色、胎土に多量の白色粒子、スコリアを含む。胴部外面は叩き、内面はナデで当て具痕は明瞭でない。

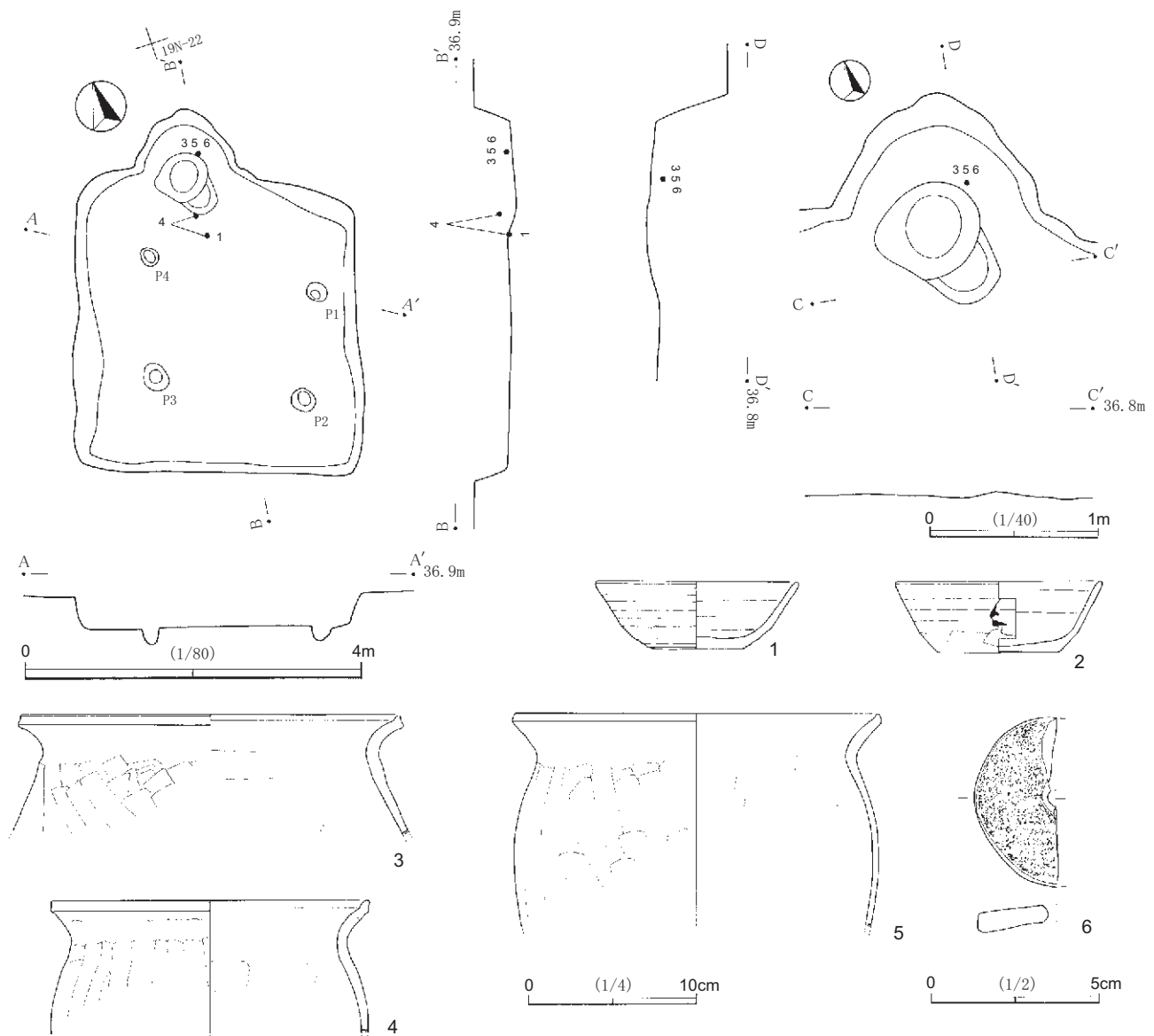
10～12は土師器甕である。10は口縁部に最大径をもつと思われる薄手の甕で、胎土は土師器杯とほぼ同様である。内面の色調は赤褐色、口縁部と外面は黒色を呈する。11は常陸型甕の口縁部、12は底部である。胎土に多量の長石、石英粒、雲母、赤色スコリアを含む。11の口縁部は直立した後、緩やかなS字を描く。内面は褐色、外面はにぶい橙色を呈する。12は底部外面に木葉痕が見られる。内面の色調は橙色、外面はにぶい赤褐色である。図化はしていないが、9と同様の器形と思われる須恵器甕片がある。胎土に白色粒子と雲母を含み、黄灰色を呈する。

(13) SI629 (第159図、図版20・66)

19N-21グリッド周辺に位置する。平面形は南北にやや長い方形であるが、攪乱が著しい。主軸はN-12°-E、規模は主軸長3.60m、幅3.19mを測る。掘り込みは確認面から24.5cm～45.5cmで、東壁南寄りがやや浅くなる。カマドは北壁中央に設置されるが、遺存状態が悪く袖は残っていない。ピットは支柱穴が4基検出された。深さはP1が15.3cm、P2が13.1cm、P3が11.4cm、P4が17.3cmである。周溝は検出されなかった。攪乱のため本来の覆土はほとんど残っておらず、床面直上にローム粒を多量に含む暗黄褐色土がわずかに認められる。

遺物はカマド周辺に散見される程度である。1、2は土師器杯である。1は底径が口径の1/2以下と小さく、外面に強いロクロ目を残す。外面体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリ、のち体部下端にナデを加えている。色調は明黄褐色、胎土に白色粒子、赤色スコリア、砂粒を含む。2は体部外面に墨書が見られる。残画がわずかに確認できる程度で文字の判読は難しい。色調は橙色、胎土は1と同様である。底部回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリを施す。図化はしていないが、他に土師器杯の底部が2点出土している。

3～5は土師器甕である。3は杯と同様の胎土ながら堅緻で、口唇部をつまみ上げるように形作っている。色調は橙色である。4は口径と胴部最大径がほぼ同じくらいの甕で、他に比べて白色粒子の混入量が



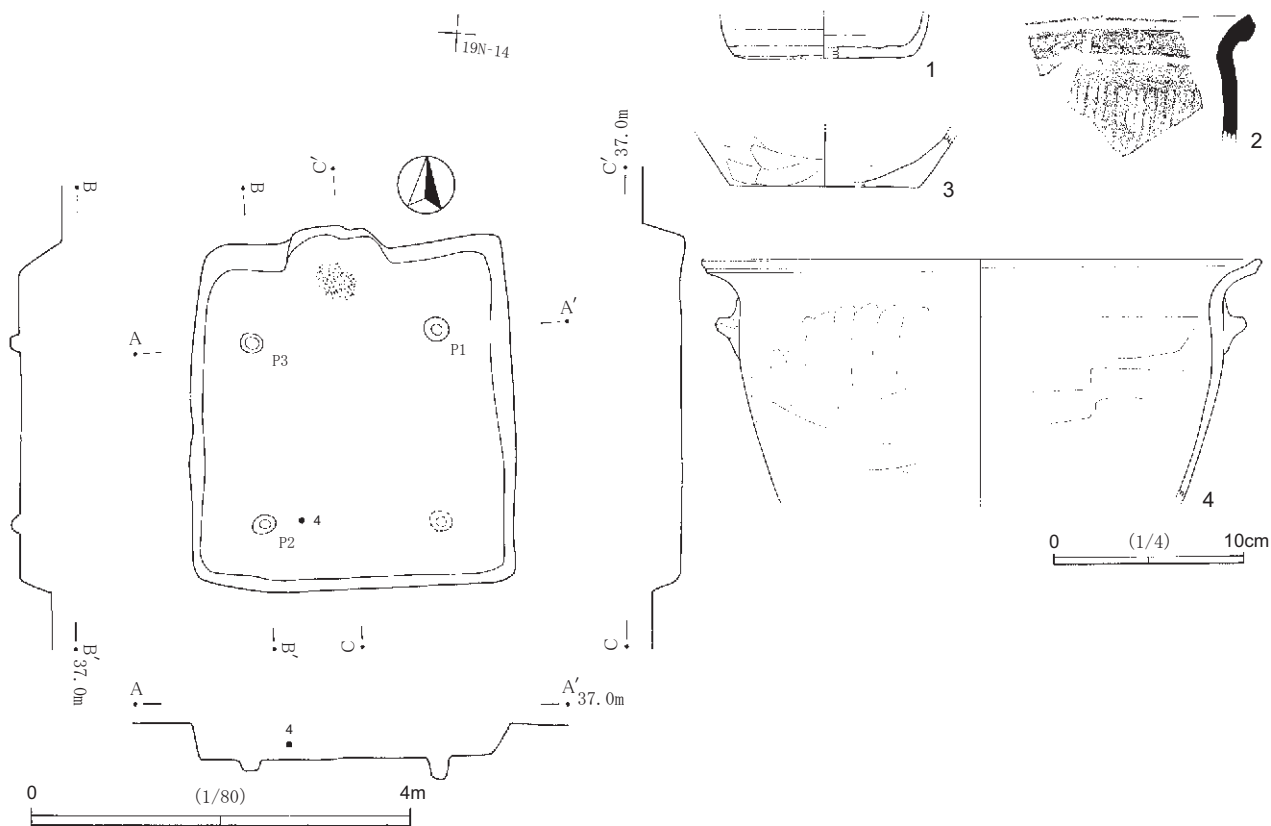
第159図 (13) SI629

多く、ややザラつく。にぶい褐色を呈し、内外面に煤が付着している。5は非常に薄手の甕で、口径と胴部最大径がほぼ同一である。肥厚する口縁部の端部は弱いつまみ上げで、外面に面を有する。色調は明黄褐色、胎土は5と同じである。

6は須恵器甕片を転用した有孔円板で、周縁部は丁寧に研磨されている。1/2ほどの遺存で、現存の最大径5.0cm、厚さ0.6cm、孔径は0.5cmである。色調はにぶい黄橙色、胎土に白色粒子、雲母、赤色スコリアを含む。表面に叩き目が認められる。3、5、6はカマド内から出土、4はカマド前の床面直上及び覆土下層から出土している。

(13) SI630 (第160図、図版20)

19N-13グリッド周辺に位置する。平面形は南北にやや長い方形である。主軸はN-6°-W、規模は主軸長3.66m、幅3.42mを測る。掘り込みは確認面から21.5cm~41.4cmで、攪乱が著しい。カマドは北壁中央に設置されるが、遺存状態が悪く痕跡をとどめる程度である。ピットは直径25cm前後の支柱穴が



第160図 (13) SI630

3基確認され、深さはP1が20.2cm、P2が11.0cm、P3が11.0cmである。周溝は巡らない。攪乱のため本来の覆土はほとんど残っておらず、床面直上にローム粒を含む黄褐色土と褐色土がわずかに認められる。

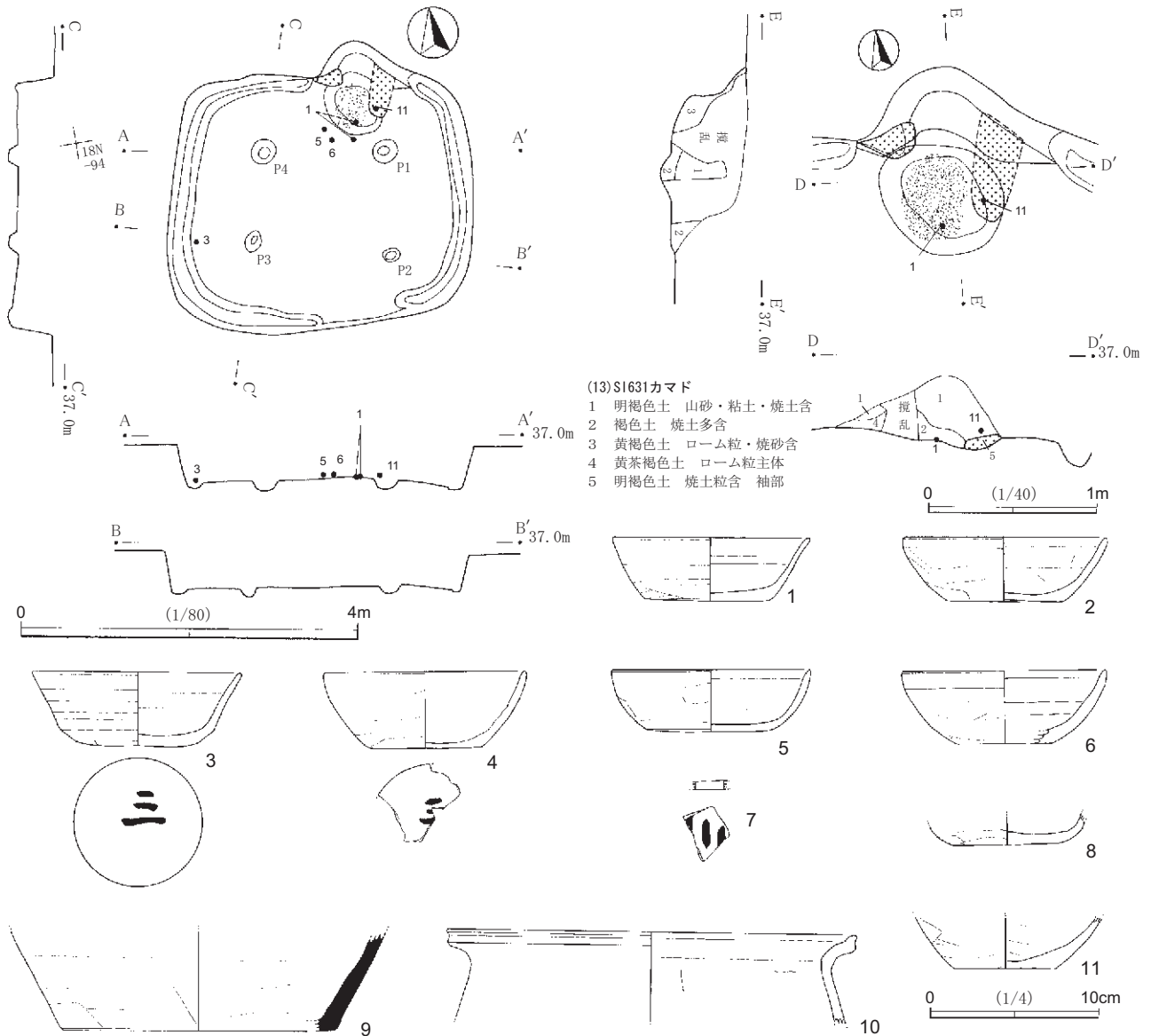
遺物の出土量は少なく、4点を図化した。1は土師器杯の底部である。底部からの立ち上がりに丸みを持ち、箱形を呈するものと思われる。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。底部内面には強いロクロ目が残る。色調は赤褐色、胎土に多量の白色粒子と赤色スコリアを含む。

2は須恵器甕の口縁部片である。胎土に含まれる混入物は3、4とほぼ同様であるものの堅緻である。胴部外面は叩き、内面はナデで当て具痕は不明瞭である。内面の色調は明褐色、外面は橙色である。

3は土師器甕の底部である。にぶい赤褐色で、多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含みややザラついている。4は土師器甕である。最大径を口縁部に有し、胴部はあまり張らずに器厚を減じながら底部へ向かうものと思われる。肩部に2個一対になる把手が付く。胎土は3とほぼ同様で、器面にややザラつきがある。色調は暗赤褐色を呈する。

(13) SI631 (第161図、図版20・21・62)

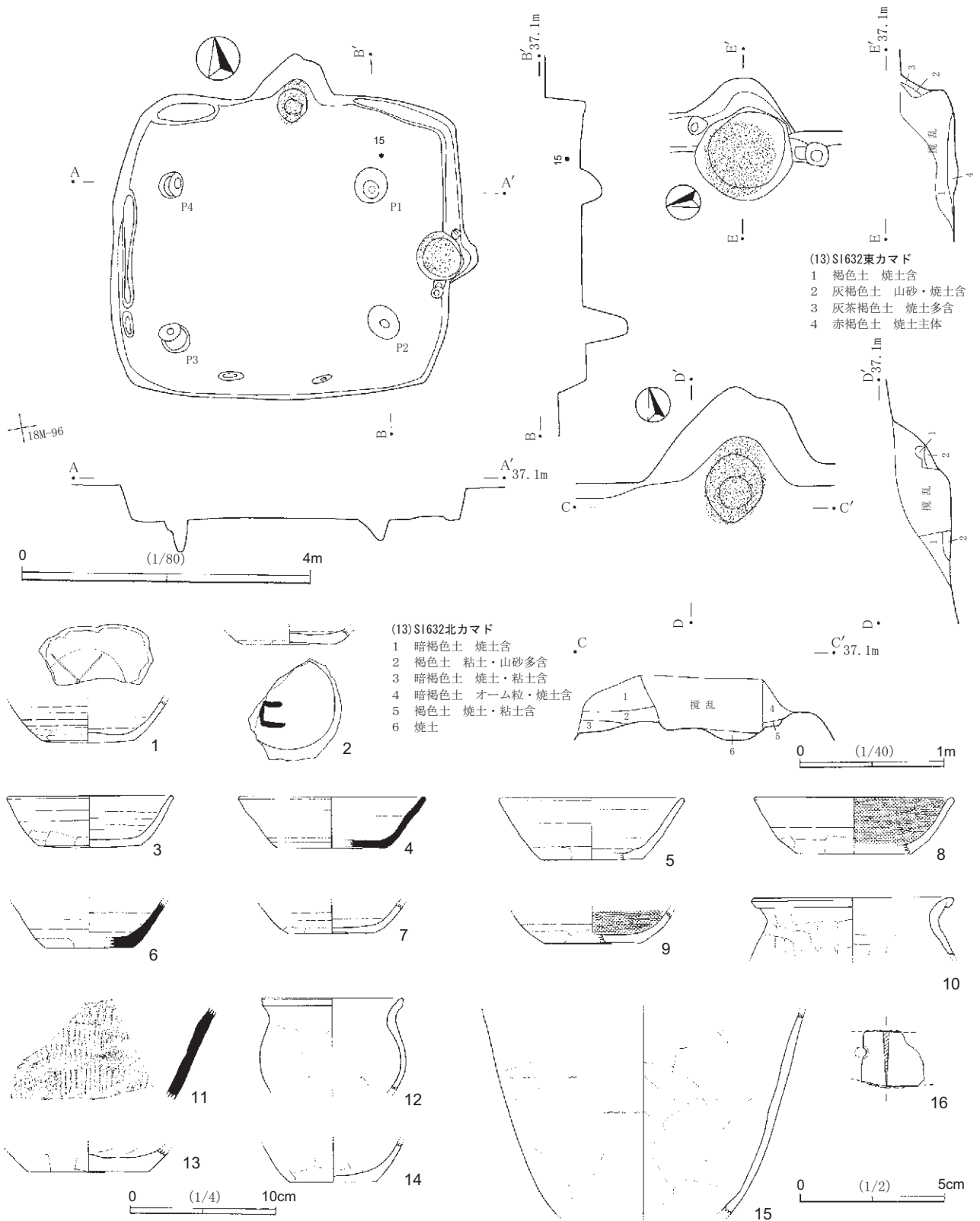
18N-84グリッド周辺に位置する。平面形は東西に長い隅丸方形である。主軸はN-8°-E、規模は主軸長3.03m、幅3.62mを測る。掘り込みは確認面から35.8cm~48.5cmで、攪乱が著しい。カマドは北壁東寄りに設置されるが、遺存状態が悪く両袖の一部が残る程度である。ピットは支柱穴4基が検出され、深さはP1が14.4cm、P2が6.4cm、P3が10.1cm、P4が11.7cmである。周溝は幅12cm~31cm、深さ4cm~10cmで、南壁中央から東にかけて途切れる。攪乱のため本来の覆土はあまり残っていないが、床面直上にはローム粒を多く含む褐色土が堆積していた。また、覆土中層には炭化粒を含む暗褐色土も見られた。



第161図 (13) SI631

カマド周辺の床面から遺物が数点出土している。1～8は土師器杯である。1、3、7、8がロクロ成形、2、4～6が非ロクロ成形である。1はカマド内から出土した。底径が比較的大きめで、口縁部が緩やかに外反する。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。内面の色調は明褐色、外面にはぶい褐色、胎土に白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。底部内面に煤の付着が見られる。3の底部は手持ちヘラケズリ調整によりやや丸みをもつ。また、外面体部下端にはナデによる面が形成されている。底部外面には「三」の墨書が見られる。内面の色調は明赤褐色、外面は黄褐色を呈する。混入物は1とほぼ同様であるが、1に比べて白色粒子の混入量が多い。住居の西側周溝際、床面直上から出土した。

2、4～6は外面口縁部直下までヘラケズリが施される。2、6の胎土は同じで、白色粒子、砂粒、赤色スコリアなどの混入物が多く、ザラついている。6はカマド前の床面直上から出土した。口縁部外面に煤が帯状に付着している。4は比較的混入物が少なく堅緻であるが、内面は被熱のため荒れている。色調はぶい黄橙色を呈する。底部外面に「三」と思われる墨書が見られる。5は大きめの底部から体部が内



第162図 (13) SI632

湾しながら立ち上がる器形である。内面の色調はにぶい赤褐色、外面は明赤褐色を呈し、口縁部外面に煤が付着している。胎土は微砂粒と大粒の赤色スコリアを含み、やや砂質を帯びる。7は外面に「三」の墨書が見られる底部片である。糸切り後手持ちヘラケズリが施されている。色調は明赤褐色である。8は底

部のみ2/3弱遺存する。回転糸切り後無調整で、体部下端に手持ちヘラケズリが加えられる。色調は明赤褐色、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。

9は新治産須恵器甕の底部である。色調は灰オリーブ色、胎土に多量の長石・石英粒、雲母、赤色スコリアを含む。胴部外面にごくわずかではあるが叩き目を確認することができる。底部外面は残りが少なく判然としないが、無調整であろう。

10は土師器常陸型甕の口縁部で、橙色を呈し、胎土に長石、石英粒、雲母、赤色スコリアを多量に含む。11は土師器甕の底部でカマド内から出土した。多量の白色粒子、砂粒、大粒の赤色スコリアを含む2、6とよく似た胎土である。外面胴部下端に煤が付着している。

(13) SI632 (第162図、図版21・62・69)

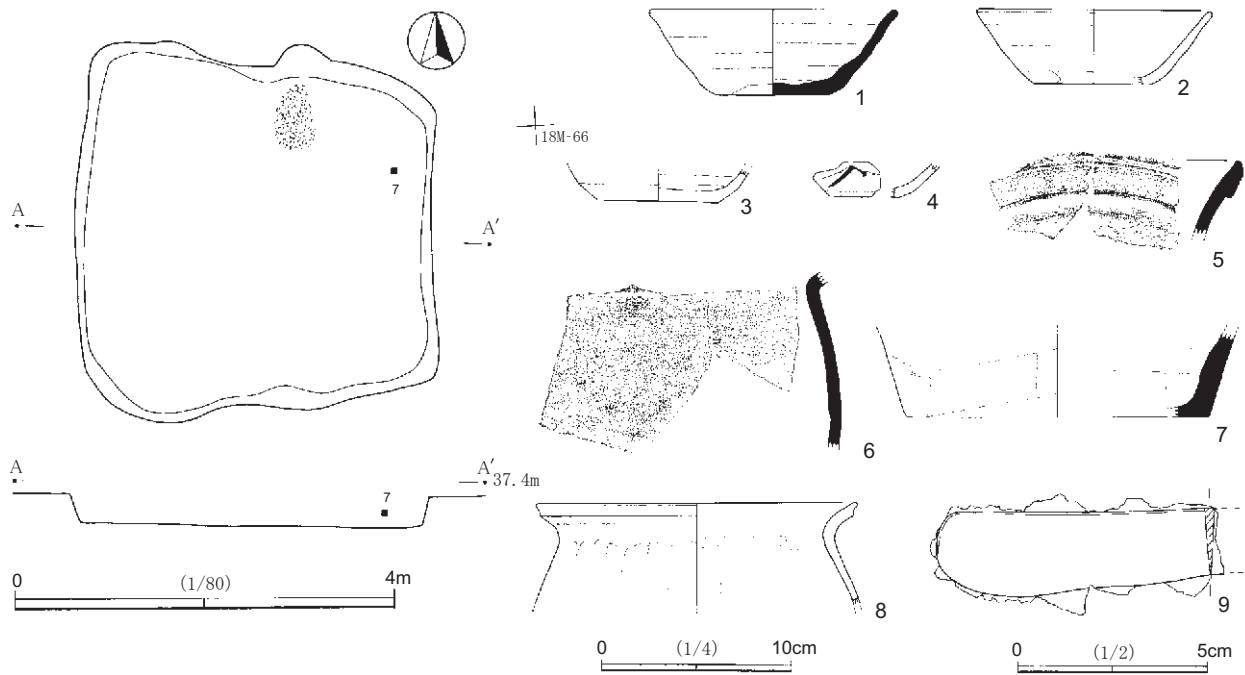
18M-77グリッド周辺に位置する。平面形は東西にやや長い方形で、カマドの付け替えが行われている。北カマドを中心とした主軸はN-13°-E、東カマドを中心とした主軸はN-104°-E、規模は南北4.20m、東西4.37mを測る。掘り込みは確認面から40.4cm~53.5cmで南東側がやや深くなる。カマドは北壁中央と東壁中央に設置されるが、2基とも攪乱が著しく新旧関係は不明である。ピットは支柱穴が4基検出され、深さはP1が27.1cm、P2が58.9cm、P3が46.4cm、P4が43.0cmである。周溝は北壁及び北カマドと東カマドの間、西壁中央に見られ、幅10cm~43cm、深さ3cm~10cmである。西壁の周溝は壁から離れている。攪乱のため本来の覆土はほとんど残っておらず、床面直上にカマドから流出したと思われる灰白色砂や焼土、炭化物を多量に含んだ赤褐色土がわずかに認められる。

遺物は覆土から一括で取り上げたものがほとんどである。3、5の土師器杯、13の土師器甕底部はカマドから出土している。1~3、5、7は土師器杯である。1は底部内面に線刻が見られる杯である。破片であるため全体像は分からないが、交差する二本の線が残っている。回転糸切りの後手持ちヘラケズリが施される底部外面には、焼成前に篋で多方向に線を引いたような痕跡も見られる。2は外面に墨書の残画が見られる底部片である。色調は浅黄色、胎土に砂粒、白色粒子、赤色スコリアを含む。3は口径に比して底径が大きめの杯で、口縁部がわずかに外反する。底部回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリを加えている。色調は橙色、胎土に多量の砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。5はやや小さめの底部から体部が直線的に開く器形である。ロクロ目がはっきりとしており、外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。色調は橙色を呈する。多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含んだ砂質の胎土でザラついている。7は底部片でにぶい褐色を呈し、多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。

4、6は須恵器杯である。4は体部が蛇行しながら大きく開く。表面の色調は黒色であるが、断面は褐色を呈し、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。外面体部下端から底部にかけての調整は回転ヘラケズリである。6は底部である。内面の色調は灰色、外面はオリーブ黒色を呈し、多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。焼成がやや甘く、底部など厚みのある箇所断面は褐色である。外面体部下端から底部にかけての調整は手持ちヘラケズリである。いずれも下総産である。

8、9は内面黒色処理の土師器杯であるが、胎土が異なっている。8が砂粒、赤色スコリア、微量の白色針状物を含むのに対し、9は白色粒子と赤色スコリア、少量の雲母・白色針状物を含む。色調は8がにぶい黄橙色、9が黒褐色である。外面体部下端から底部にかけては両者とも手持ちヘラケズリである。

10、12~15は土師器甕である。10は胴部が薄く、頸部で肥厚しながら外反する器形で、口縁端部は折り返し状に作られる。色調はにぶい黄褐色、胎土は砂粒を少量含み堅緻である。



第163図 (13) SI633

11は須恵器甕の胴部片である。多量の雲母、白色粒子、スコリアを含み、灰色を呈する。内外面とも輪積み痕が顕著で、外面は叩き、内面は当て具痕と思われる木口状の工具痕が見られる。新治産である。

12は土師器小型甕である。胴部最大径は口径よりわずかに大きく10.2cmを測る。白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含み、褐色を呈する。13はカマド覆土中から出土した。色調は橙色、胎土に砂粒、赤色スコリア、微量の白色針状物を含み堅緻である。外面には山砂が付着している。14は土師器杯5と同様の胎土で、白色粒子と赤色スコリアを含みザラついている。15は甕の胴部片である。内面の色調はにぶい黄橙色、外面は灰黄褐色である。砂粒、赤色スコリアを含み、13に近い胎土である。外面には山砂が付着している。

16は鉄製穂摘み具で、釘孔がわずかに残る。

図化はしていないが、ほかに内外面に線刻のようなものが認められる土師器杯底部片、外面体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される土師器杯底部片、須恵器五孔の甕底部片、鉄滓が出土している。

(13) SI633 (第163図、図版21・62・69)

18M-54グリッド周辺に位置する。平面形は不正な方形で攪乱が著しい。主軸はN-9°-E、規模は主軸長3.68m、幅3.80m、掘り込みは確認面から23.9cm~42.2cmである。カマドは北壁中央に設置されるが、遺存状態が悪く煙道部の掘り込みと焼土が確認される程度であった。ピット、周溝は確認されなかった。攪乱のため本来の覆土はほとんど残っておらず、ローム粒、焼土、炭化材を含む暗赤茶褐色土がわずかに認められた。

遺物は住居東側の覆土中層から鉄製穂摘み具が出土したほか、覆土中に散見している。1は須恵器杯である。多量の白色粒子と微量の雲母を含む軟質の下総産須恵器で、内面は黒褐色、外面は黄灰色を呈する。底径は小さく、体部が直線的に開く。内外面とも強いロクロ目が残り、外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。底部切り離しは回転ヘラ切りによるものと思われる。

2~4は土師器杯である。2の底径は口径の1/2で、体部が直線的に開く。色調はにぶい橙色、胎土に砂粒、

大粒の赤色スコリアを含む。被熱による器面の荒れが著しいが、外面体部下端及び底部の調整は手持ちヘラケズリである。3は浅黄橙色を呈する。胎土に砂粒、白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。底部回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリを加えている。4は体部外面に墨書の残画が見られる底部片である。ごく一部の遺存であるため文字の判読はできない。胎土に砂粒、赤色スコリア、雲母微粒子を含むが、混入物は細かく2、3の胎土とは異なる。色調は橙色を呈する。外面体部下端から底部にかけての調整は手持ちヘラケズリである。

5～7は下総産の須恵器甕である。5は折り返し状の口縁部で、にぶい褐色を呈し、白色粒子を多く含む。6は胴部上位がやや張る器形になると思われる。外面の調整は叩きの後ナデで、叩きの痕跡は薄い。内面も当て具痕の痕跡は見当たらない。色調は黒褐色、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。7は底部である。にぶい赤褐色を呈し、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。

8は土師器甕の口縁部で、口唇部を斜め上方につまみ出すように作っている。内面の色調はにぶい赤褐色、外面は暗赤褐色で、胎土に多量の細砂粒、赤色スコリアを含む。

9は鉄製品である。孔はないが、刃部の形状から穂摘み具の一種と考えられる。

ほかに内面黒色処理された杯が1点出土している。

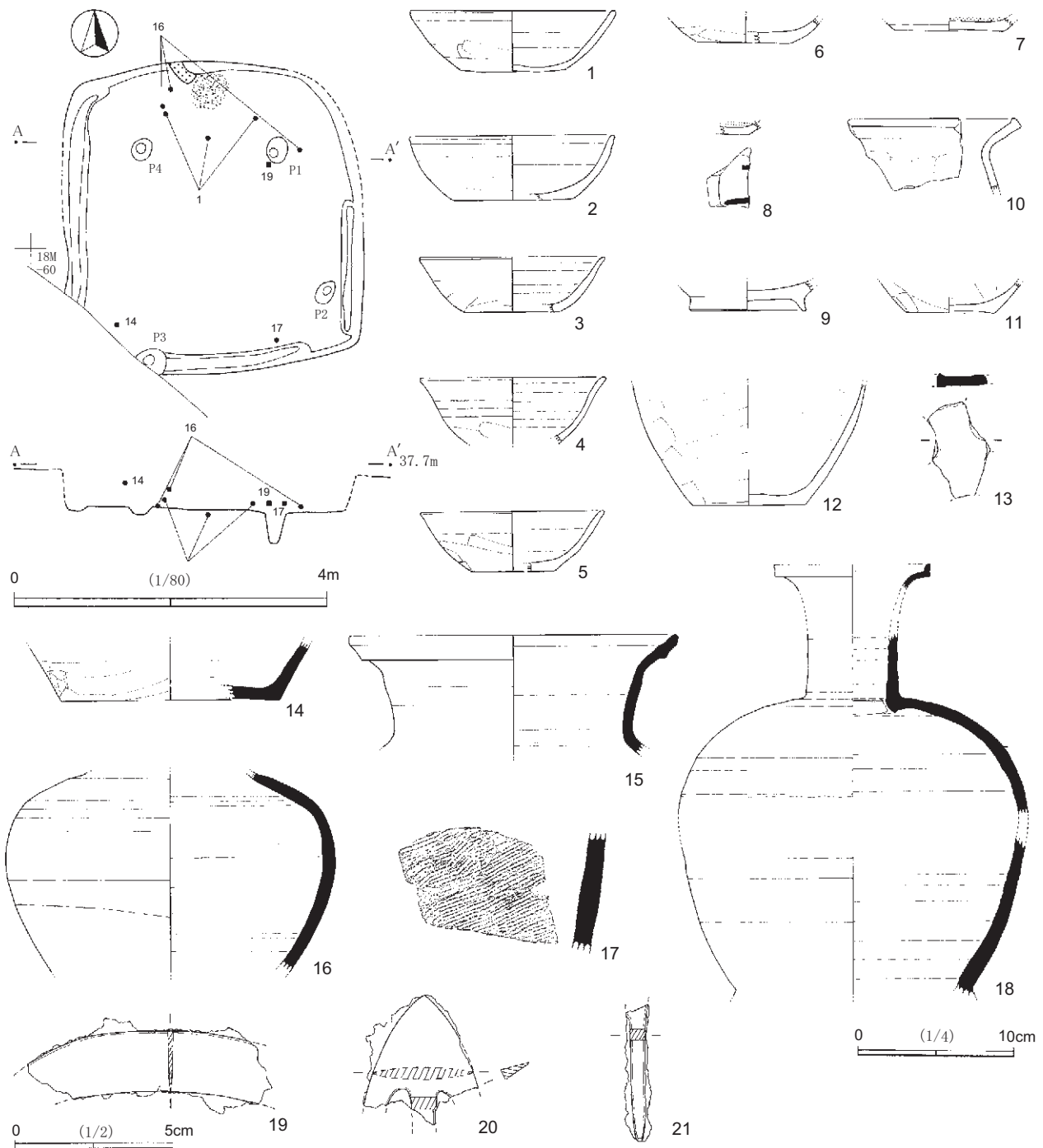
(13) SI636 (第164図、図版21・69・70)

18M-50グリッド周辺に位置する。平面形は南北に長い隅丸方形で、南西隅が調査区外にかかる。主軸はN-0°-E、規模は主軸長4.02m、幅3.76m、掘り込みは確認面から41.5cm～50.9mとやや深い。カマドは北壁中央に設置されるが遺存状態が悪く、左袖の基底部と焼土が残る程度であった。ピットは支柱穴が4基検出され、深さはP1が35.3cm、P2が20.3cm、P3が24.8cm、P4が25.9cmである。P3は南壁周溝上にあるため、住居に伴うものかどうかは不明である。周溝は東壁の南半と、西壁、南壁から検出され、幅26cm～34cm、深さ6cm～7cmである。攪乱のため本来の覆土はほとんど残っておらず、ローム粒、焼土を含む暗褐色土がわずかに認められる。

遺物は床面から覆土中層にかけて分布する。1～8は土師器杯で、7、8は内面黒色処理される。1、3～6の胎土は共通しており、砂粒と大粒の赤色スコリアを含む。外面体部下端から底部にかけての調整は全て手持ちヘラケズリである。1のみ回転糸切り痕が確認できる。小さめの底部から体部が直線的に開き口縁部でわずかに外反する器形が大半を占める。色調は6が橙色を呈するほかは明赤褐色を呈する。2は外面口縁部直下までヘラケズリが施される。被熱のためか黒褐色を呈する。胎土は白色粒子を含む。7は底部回転糸切り後回転ヘラケズリが施される。色調は赤褐色で、胎土に細砂粒と微量の白色針状物を含む。8は底部外面に墨書が見られるが、遺存部位が少なく判読できない。9は高台付杯の高台部である。高さはあまりなく、開きも弱い。内面の調整はミガキ、底部は回転ヘラケズリの後高台を貼り付けている。色調は明赤褐色、胎土に砂粒を含む。内面に煤の付着が見られる。

10～12は土師器甕である。10は口縁部片で、杯と同様砂粒、赤色スコリアを含む。口唇部はつまみ上げるように作られ、外面に稜を有する。色調は明赤褐色である。11の底部は楕円形を呈する。砂粒、赤色スコリアを含み、内面の色調は明赤褐色、外面は暗赤褐色である。12は混入物が多く、多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含んでいる。内面の色調は褐色、外面は褐灰色である。

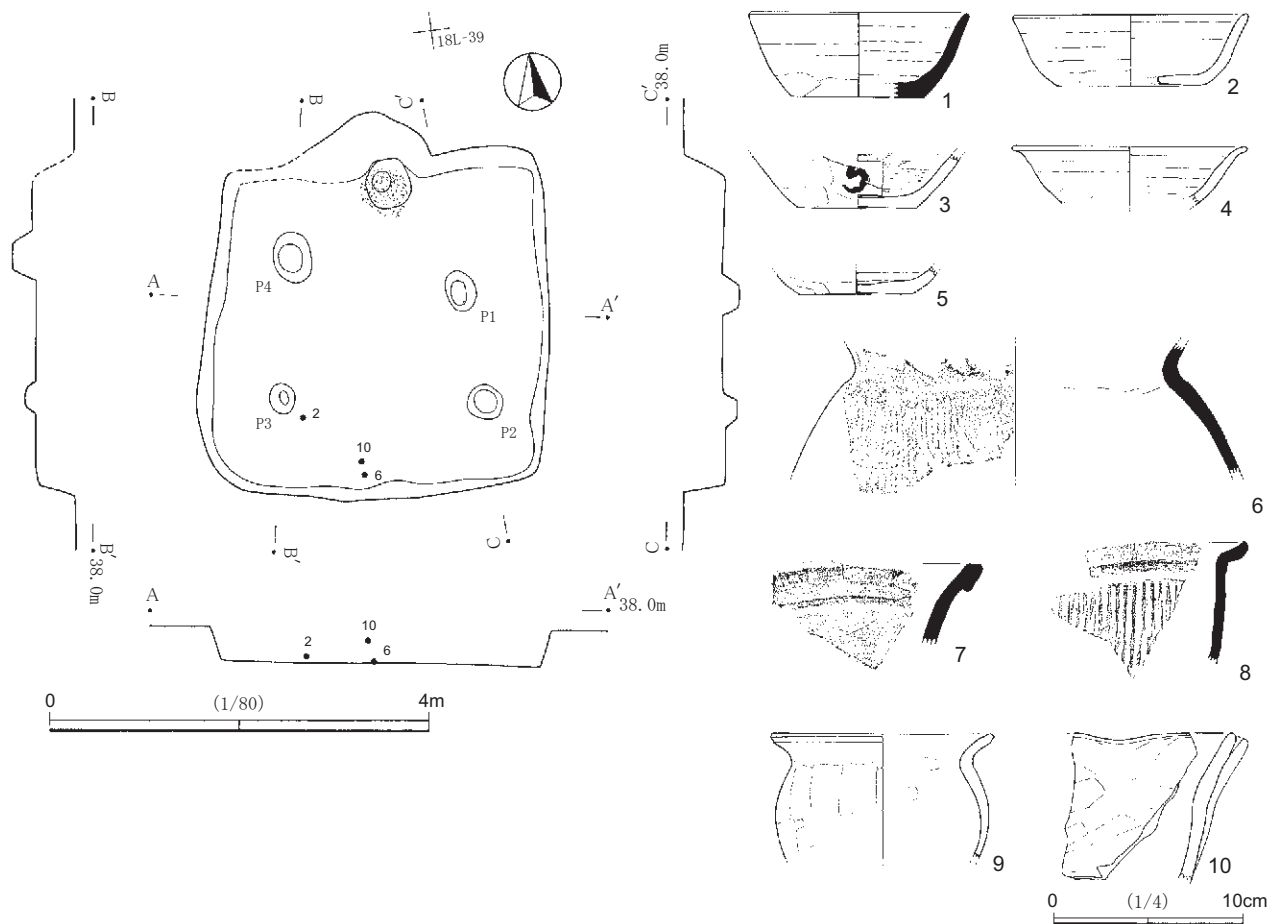
13～15は下総産の須恵器である。13は五孔の甕の底部片である。内面は黒色、外面は黒褐色を呈し、胎土に白色粒子を含む。外面は無調整、内面はヘラナデで仕上げられる。14は甕の底部で胎土に白色粒子、



第164図 (13) SI636

赤色スコリアを含む。内面は褐灰色、外面は黒色、断面は褐色を呈する。底部外面は無調整である。15はすばまった頸部に外反する折り返し状の口縁部が付く甕で、色調は暗赤褐色、胎土に白色粒子を多く含む。

16、18は灰釉陶器である。16は壺の胴部片で最大径は21.0cmと推測される。胎土はスコリアを若干含み精緻である。内面及び素地の色調は灰色味の強いにぶい黄橙色である。外面は胴部上位から中位にかけて釉が掛かっており、灰オリーブ色、中位は黒褐色、下位は暗褐色と色調が変化している。18は胴部最大径を中位よりやや上に有する長頸壺で、22.4cmと推測される。頸部は直立し、口縁部で大きく広がって受け



第165図 (13) SI637

口状になる。内面の色調は灰色～暗灰黄褐色、外面は赤褐色に発色し、頸部から胴部中位にかけて釉が掛かっている。胎土に4mm以下の白色粒子を多量に含む。外面胴部下位には回転ヘラケズリが施される。

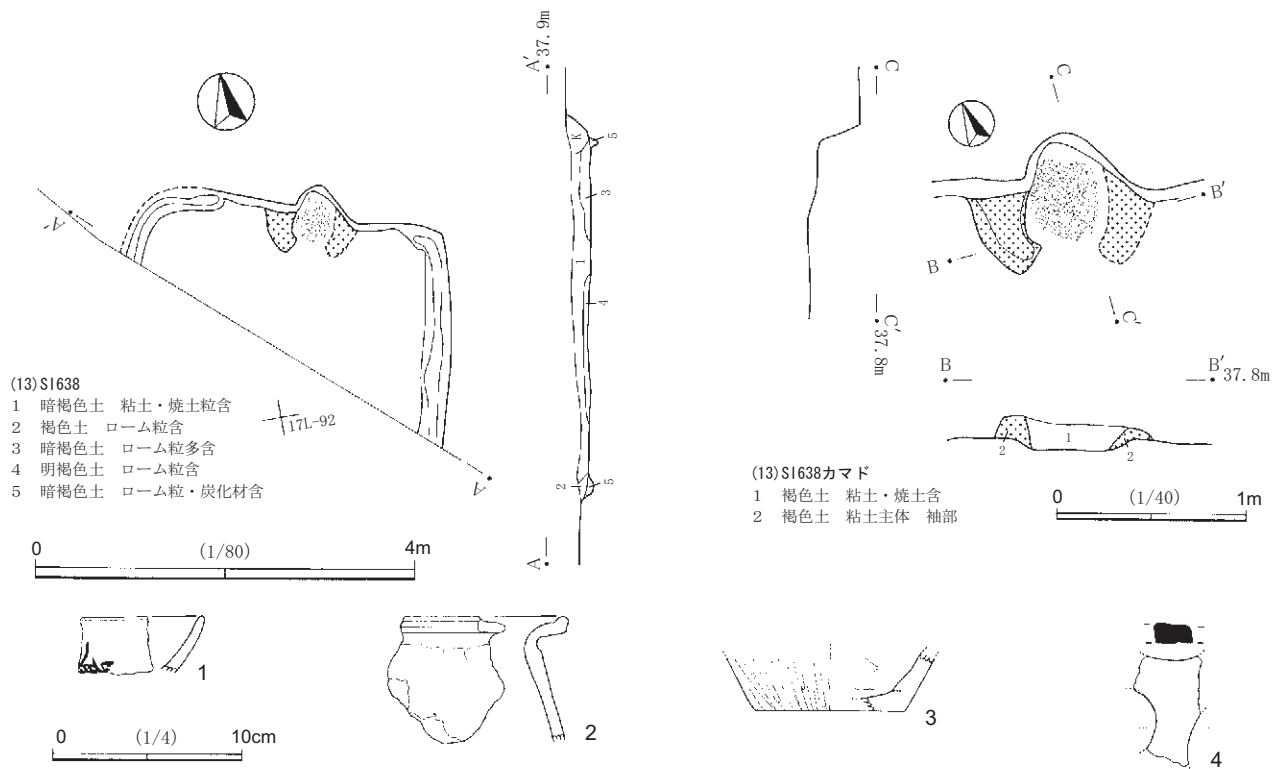
17は外面に叩きが施された須恵器甕の胴部片である。内面には当て具痕が見られる。色調は灰白色、白色粒子、スコリアを含む砂質を帯びた胎土である。東海産である。

19はP1の南、覆土下層から出土した鉄製鎌、20は広身の三角形鍬の刃部である。21は鉄鍬の茎部か。20と21は同一個体の可能性がある。図化はしていないが、他に土師器杯、高台付杯、須恵器甕口縁部（折り返し状口縁、素口縁）、底部、叩きが施された胴部片が出土している。

(13) SI637 (第165図、図版21)

18L-38グリッド周辺に位置する。平面形は南北にやや長い方形で攪乱が著しい。主軸はN-8°-E、規模は主軸長3.95m、幅3.65mを測る。掘り込みは確認面から38.0cm～46.7cmである。カマドは北壁中央に設置されるが遺存状態が悪く、煙道部の掘り込みと火床部が確認できる程度である。ピットは支柱穴4基が検出され、深さはP1が23.0cm、P2が15.5cm、P3が11.7cm、P4が21.5cmである。周溝は巡らない。覆土は攪乱が著しいものの、上層にローム粒を含む暗褐色土、下層に焼土・粘土・ローム粒を多く含む明褐色土が確認できた。

覆土下層から中層にかけて遺物が散見する。1は褐灰色を呈する須恵器杯である。口径に比して底径が大きく、器高も高い。白色粒子、大粒のスコリアを含む。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。新治産である。



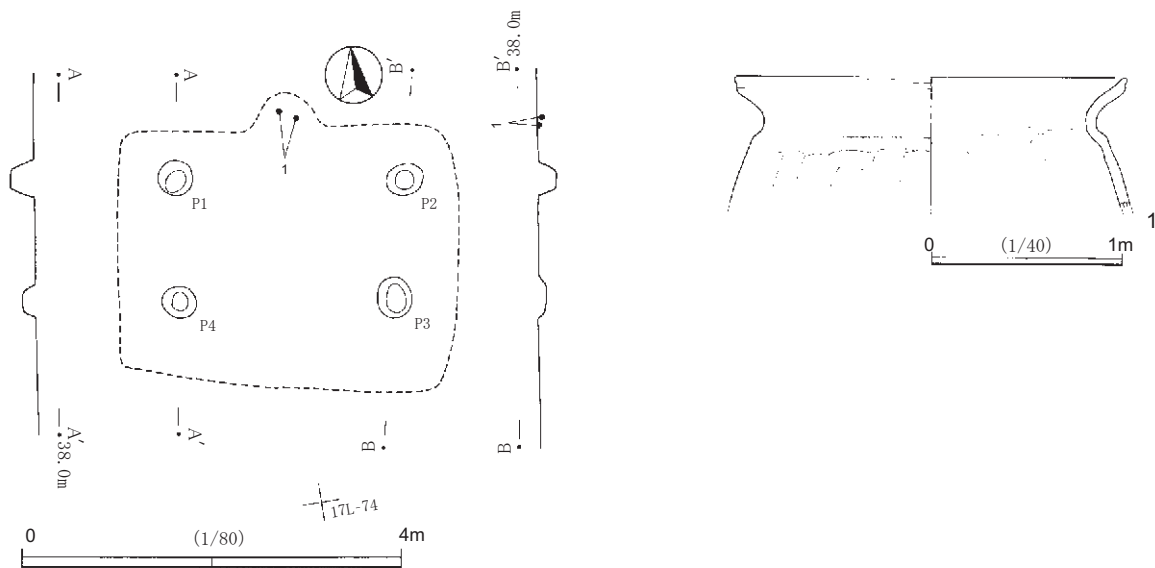
第166図 (13) SI638

2～5は土師器杯である。2は底部からの立ち上がりに丸みを有し、口縁部がわずかに外反する。砂粒、赤色スコリアを含み、にぶい橙色を呈する。底部回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリを加えている。底部内面は被熱のため器面が剥離している。3は体部外面に墨書が見られるが、遺存部位が少なく判読できない。内面はミガキ、外面は手持ちヘラケズリで仕上げられる。黒色処理は施されていない。色調は橙色、胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。4は口縁端部が強く外反する杯で、底部を欠損する。にぶい橙色を呈し、胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。外面体部下位の調整は手持ちヘラケズリである。5は底部のみ遺存する。内面は浅黄橙色、外面はにぶい橙色で、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。底部回転糸切りの後体部下端と底部周縁部に手持ちヘラケズリが施される。

6～8は須恵器甕である。6は頸部から胴部上位にかけて遺存し、南壁際中央、床面直上から出土した。器表面の色調は灰オリーブ色、断面は黒灰色を呈する。胎土に多量の雲母、白色粒子、赤色スコリア、6mmほどの小礫を含んでいる。胴部外面は叩き、内面はヘラナデであるが、内外面とも器面が荒れている。新治産である。7は口縁部が大きく開く壺の口縁部である。口唇部上端は沈線状に窪んでいる。内面の色調はにぶい黄橙色、外面は灰黄橙色、胎土に多量の白色粒子、砂粒、微量の白色針状物を含む。下総産か。8は短く外反する口縁部の端部を受け口状に作り出した下総産の甕である。内面の色調は褐灰色、外面は灰黄褐色、胎土に白色粒子、赤色スコリア、微量の白色針状物を含む。胴部外面の叩きは深くはっきりとしている。

9は土師器甕である。胴部最大径より口径がわずかに大きい。胴部下位に向かって器厚を減じていくようである。色調はにぶい橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。

10は土師器片口鉢の口縁部片である。内湾しながら開く体部に外傾する口縁部がつく。片口部分は大きく緩やかに作り出されている。内面の調整はミガキ、外面は口唇部直下までヘラケズリが施されている。色調はにぶい橙色、胎土に多量の砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。



第167図 (13) SI648

(13) SI638 (第166図、図版21)

17L-81グリッド周辺に位置する。平面形は方形と思われるが、南西半分は調査区外のため検出できなかった。北西壁が攪乱を受けている。主軸は $N-12^{\circ}-E$ 、規模は現存する東西長で3.50mを測る。掘り込みは確認面から20.4cm～31.3cmである。カマドは北壁中央やや東寄りに設置される。左袖は比較的良好に遺存しているが、右袖は基部のみ確認できる程度である。ピットは検出されなかった。周溝はカマド両脇を除いて全体に見られ、幅22cm～30cm、深さ2cm～5cmである。

遺物の量は少なく、4点を図化した。1は土師器杯の口縁部片である。体部外面横位に「倉」の墨書が見られる。色調は橙色で、胎土に砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。内面の調整はミガキ、外面は口縁部直下までヘラケズリが施される。

2、3は胎土に多量の白色粒子、雲母、赤色スコリアを含む常陸型の土師器甕である。2は口唇部がS字を描く口縁部片で、にぶい黄橙色を呈する。胴部内面には木口状のヘラの当たりが確認できる。3は木葉痕が見られる底部片である。色調は褐色で、底部外面には煤が付着している。

4は須恵器甕の底部片で、五孔になるものと思われる。色調は灰色で、胎土に白色粒子を多量に含む。

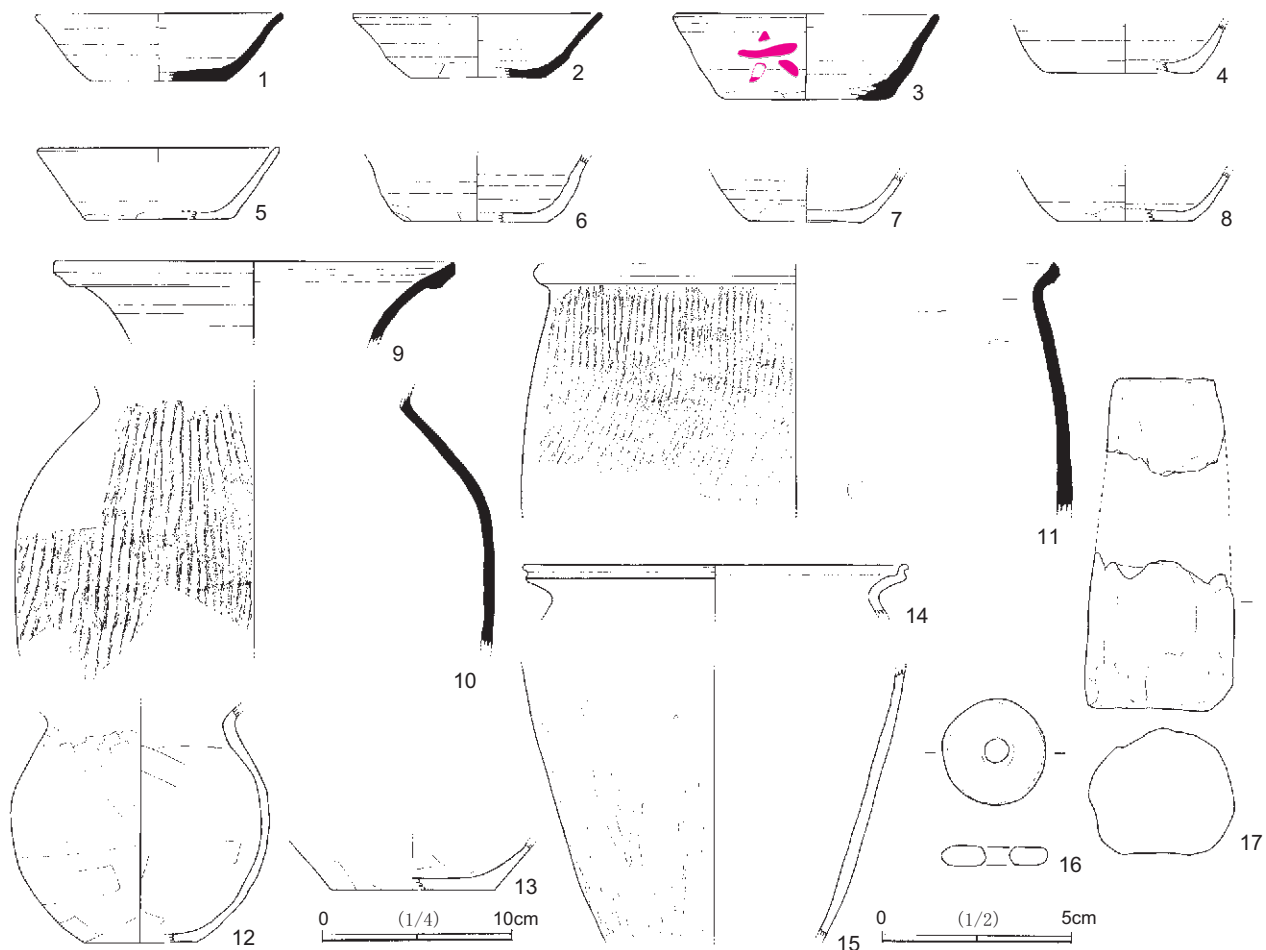
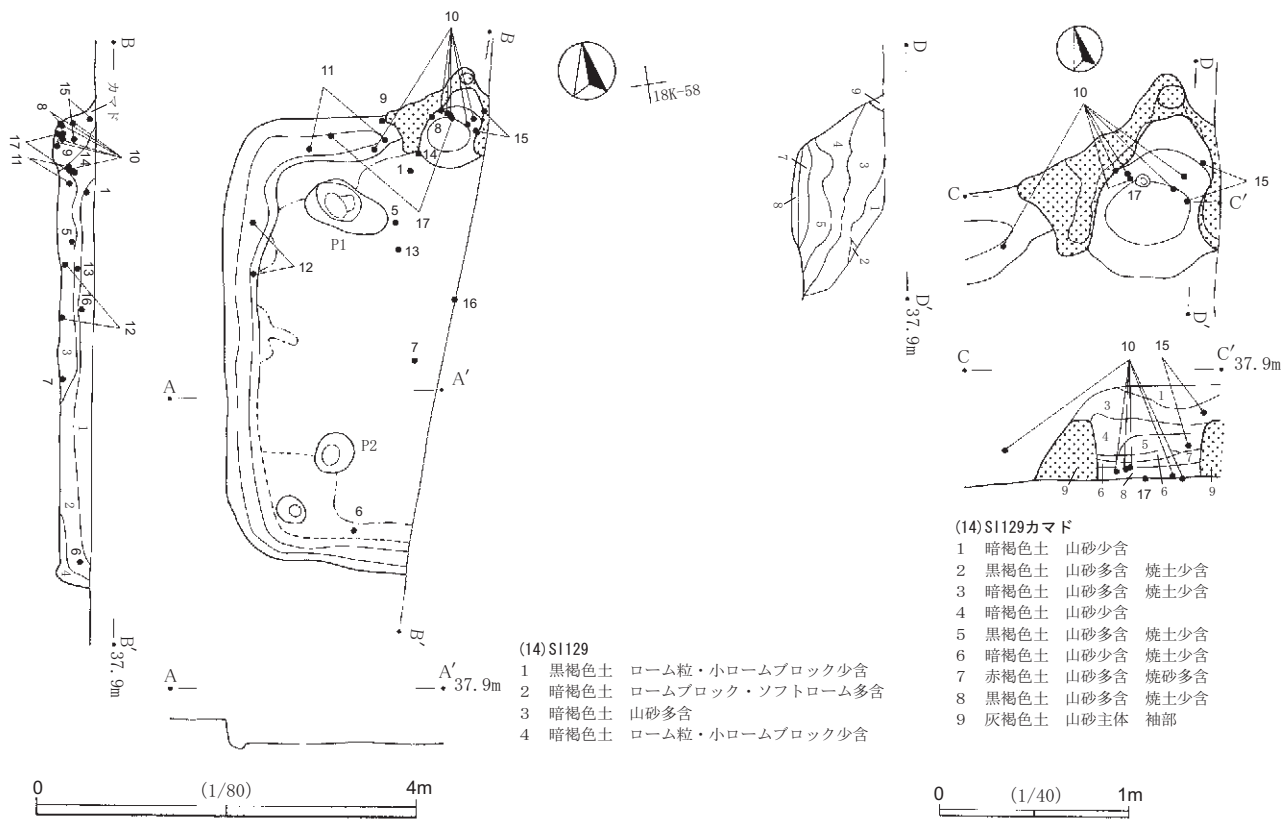
(13) SI648 (第167図)

17L-53グリッド周辺に位置する。掘り込みがほとんど無く、プランのみの検出である。平面形は東西に長い長方形で、主軸は $N-8^{\circ}-E$ 、規模は推定で主軸長2.73m、幅3.60mを測る。カマドは北壁中央に痕跡が確認された。ピットは支柱穴4基が検出され、深さはP1が23.2cm、P2が17.1cm、P3が6.6cm、P4が13.5cmである。

遺物は少なく、カマドから出土した土師器甕1点を図化した。肩部に稜を有し、口縁部が外反する器形で、端部は斜めにつまみ上げている。肩部外面には叩きのような調整痕がある。口縁部にもその痕跡が認められ、叩きの後口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリを施している。内面の色調は明褐色、外面は橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。

(14) SI129 (第168図、図版21・22・62・66)

18K-56グリッド周辺に位置する。台地中央で西側に谷を望む。東側は調査区外のため未調査である。検出された西側部分から推察すると、平面形は方形を呈するものと思われる。主軸は $N-10^{\circ}-E$ 、規模



第168図 (14) SI129

は主軸長4.70mを測る。掘り込みは確認面から27.2cmで、床面はしっかりと踏み固められている。カマドは北壁中央に設置され、煙道部の遺存状態は良好であった。燃焼部からは支脚が出土している。ピットは支柱穴が2基検出され、深さはP1が58.4cm、P2が70.5cmである。周溝は南西隅がやや不明瞭であるが、幅34cm～55cm、深さ3cm～10cmで現存部分では全周する。

遺物は床面から覆土上層にかけて分布し、カマド周辺に集中する。1～3は須恵器杯である。やや小さい底部から体部が内湾気味に開く器形で、器高は低い。1は底部回転糸切りの後体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ、2は底部と底部下端に手持ちヘラケズリが施されるが、切り離し手法は不明である。色調は1、2とも黄灰色を呈する。3は口径の1/3ほどの大きさの底部から体部が直線的に開く器形で、体部外面に「六」と朱書きされている。色調は黄灰色で、胎土に多量の砂粒と大粒の赤色スコリアを含んでいる。ロクロ目は比較的はっきりしており、外面体部下端と底部に手持ちヘラケズリが施される。

4～8は土師器杯である。4は底部回転糸切りの後体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。色調は褐色である。土師器としたが、下総産の須恵器の可能性もある。5は体部が直線的に開く器形で、外面体部下端と底部に手持ちヘラケズリが施される。色調は内外面とも橙色、断面は黒色を呈している。6は口縁部を欠損しているが、意図的に打ち欠いた可能性がある。内面の色調は灰色、外面は黒褐色を呈し、白色粒子を多く含む。4と同様ロクロ目ははっきりしており、外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。7は体部が内湾しながら開く杯で口縁部を欠損している。色調は橙色で胎土に砂粒を含んでいる。外面体部下端と底部に手持ちヘラケズリが施される。外面体部中に煤が帯状に付着している。8も口縁部を欠損する杯で、底部回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリを施す。他に内面黒色処理の施された土師器杯の口縁部片があるが、小片のため図化しなかった。

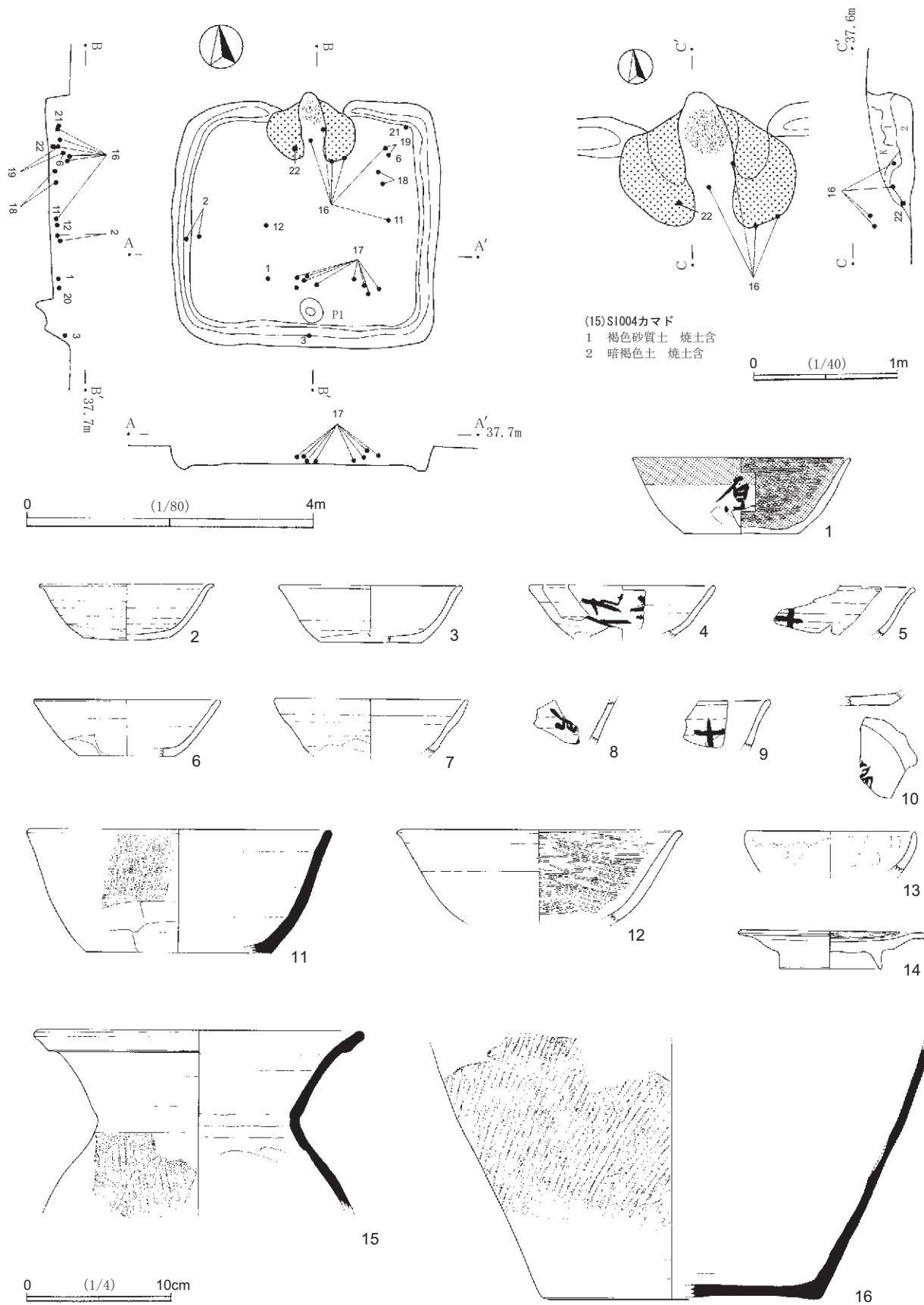
9～11は須恵器甕である。9は逆「ハ」の字状に開く折り返し口縁で、にぶい橙色を呈する。砂粒を多く含み、外面には煤の付着が見られる。10は丸く張った胴部と絞り込んだ頸部が特徴の甕で、胴部最大径は25.4cmを測る。色調は赤褐色、胎土に白色粒子を多く含む。外面は叩き、内面はヘラナデで、当て具痕は見られない。11は短く屈曲する折り返し口縁で、端部がわずかにつまみ上げられる。胴部は少し膨らみ、最大径29.0cmを測る。胴部外面は叩き、内面はヘラナデで仕上げられる。色調は赤褐色を呈する。

12は土師器小型甕で、口縁部を欠損する。器壁が薄く頸部で肥厚し、胴部最大径は13.7cmを測る。色調は赤褐色、胎土に多量の砂粒を含み、被熱のためか脆い。13は土師器甕底部で明赤褐色を呈する。薄手で胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。14はいわゆる常陸型甕の口縁部で、口唇部がS字状に外反する。色調はにぶい橙色、胎土は雲母、白色粒子を多く含む。頸部内面に煤の付着が見られる。15は常陸型甕の胴部片で、にぶい黄橙色を呈し、胎土に多量の長石、石英粒と雲母を含む。外面は縦方向のミガキ、内面はヘラナデで、内面の一部に山砂が付着している。

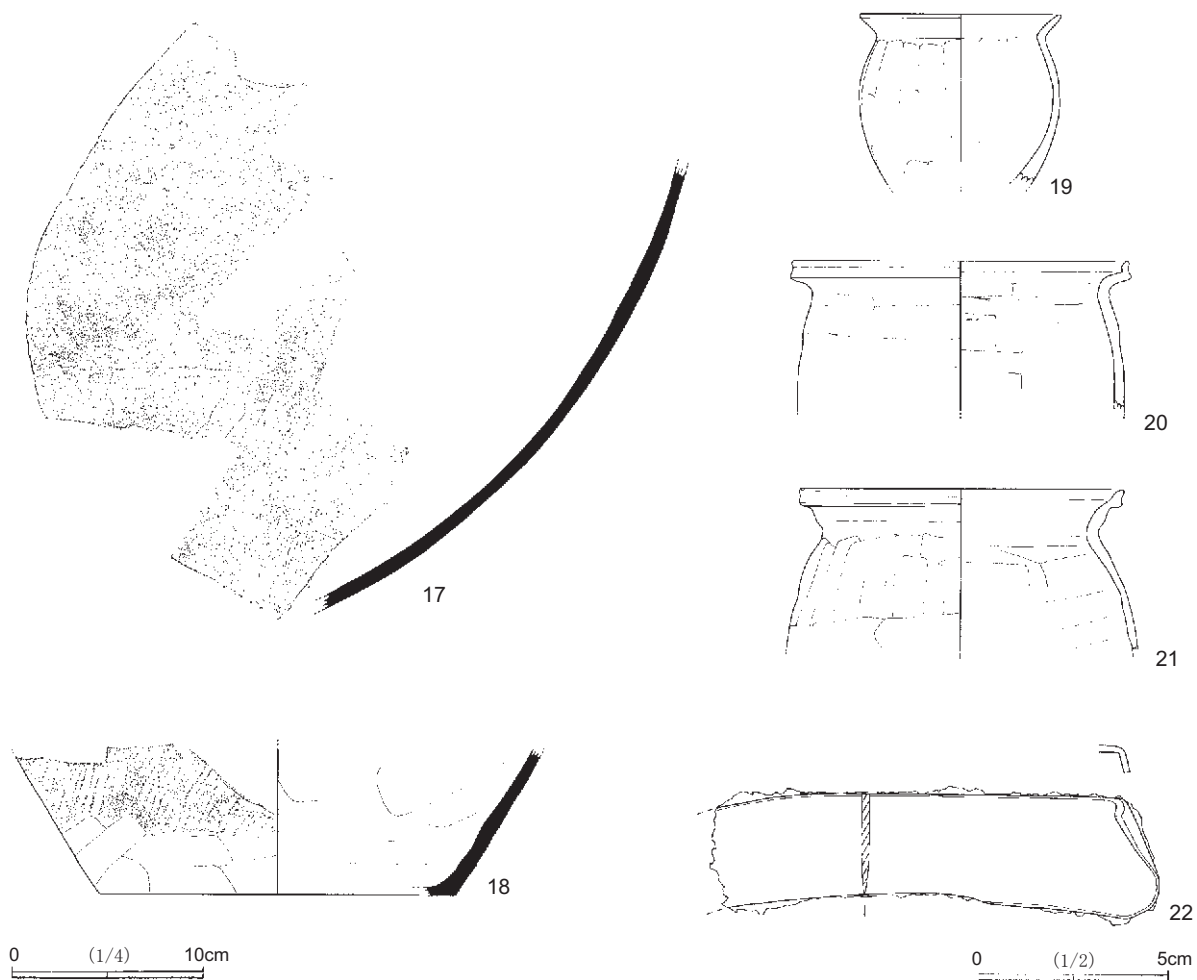
16は土師器甕片転用の有孔円板である。直径2.8cm、厚さ0.5cm、孔径0.7cmで側面は丁寧に研磨されている。表面の色調は橙色、裏面はにぶい黄褐色を呈する。17は土製支脚である。頭部と基部と思われるが、もう少し延びる可能性もある。推定復元した部分を含めた現存長は17.6cm、最大幅7.7cmを測る。表面はヘラケズリによって面が形成されている。色調は橙色で、胎土は砂質で脆い。

(15) SI004 (第169・170図、図版22・62・63・69)

18L-95グリッド周辺に位置する。平面形は東西にやや長い方形である。主軸はN-5°-E、規模は主軸長3.45m、幅3.72mを測る。掘り込みは確認面から21.6cm～41.0cmで攪乱が著しい。カマドは北壁



第169図 (15) SI004①



第170図 (15) SI004②

中央に設置される。ピットは梯子ピット1基のみの検出で、深さは19.0cmである。周溝は幅20cm～38cm、深さ3cm～8cmでカマドを除き全周する。

遺物は住居東側にやや集中している。1は内面ミガキ及び黑色処理が施される土師器杯で、住居西側の覆土下層から出土した。底径は口径の1/2よりやや大きく、口縁部が器厚を減じながらわずかに外反する。底部回転糸切りの後体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。体部外面に正位の墨書「原」が見られる。色調はにぶい橙色、胎土に白色粒子、赤色スコリアを含む。

2～10は土師器杯で、このうち4、5、8～10は覆土中から出土した墨書土器である。外面体部下位から底部にかけての調整を確認できるものはすべて手持ちヘラケズリである。2は西側周溝の覆土中層から出土した。底部に丸みをもち、口唇部が強く外反する。内面に煤が付着しており、底部付近には被熱によると思われる器面の剥離が見られる。内面の色調は黒褐色、外面は灰褐色、胎土に細砂粒、赤色スコリア、少量の雲母と白色針状物を含む。3は南側周溝中央の覆土上層から出土した。底径は口径の1/2よりやや大きく、口縁部が緩やかに外反する。色調は橙色ないしにぶい橙色、胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。4は土師器杯で底部を欠損する。体部外面に横位の「佐口」と思われる墨書が見られる。色調は橙色、胎土に多量の砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。5は内面にミガキ及び黑色処理が施される土師器杯で、

外反する口縁部の端部が肥厚し丸くなる。赤褐色を呈し、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。墨書は文字の一部のみで、判読はできない。6は覆土中から出土し、体部が直線的に開く。色調は橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含み、砂質を帯びている。7も覆土中からの出土で、底部を欠損する。体部中位にわずかにくびれを持ち、口縁部は直線的に開く。内面の色調は橙色、外面は明赤褐色で、胎土に白色粒子を含む。口縁部内面に煤が付着している。8は杯の体部片である。墨書は体部外面に横書きされているようである。これまでの出土例から「倉」と考えられる。9は口縁部片である。橙色を呈し、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。墨書は体部外面に見られるが、遺存部位が少ないため判読不能である。10は底部片である。糸切り後手持ちヘラケズリが施される。色調は橙色、胎土に細砂粒、赤色スコリアを含む。底部外面に墨書が見られるが、遺存部位が少ないため判読不能である。

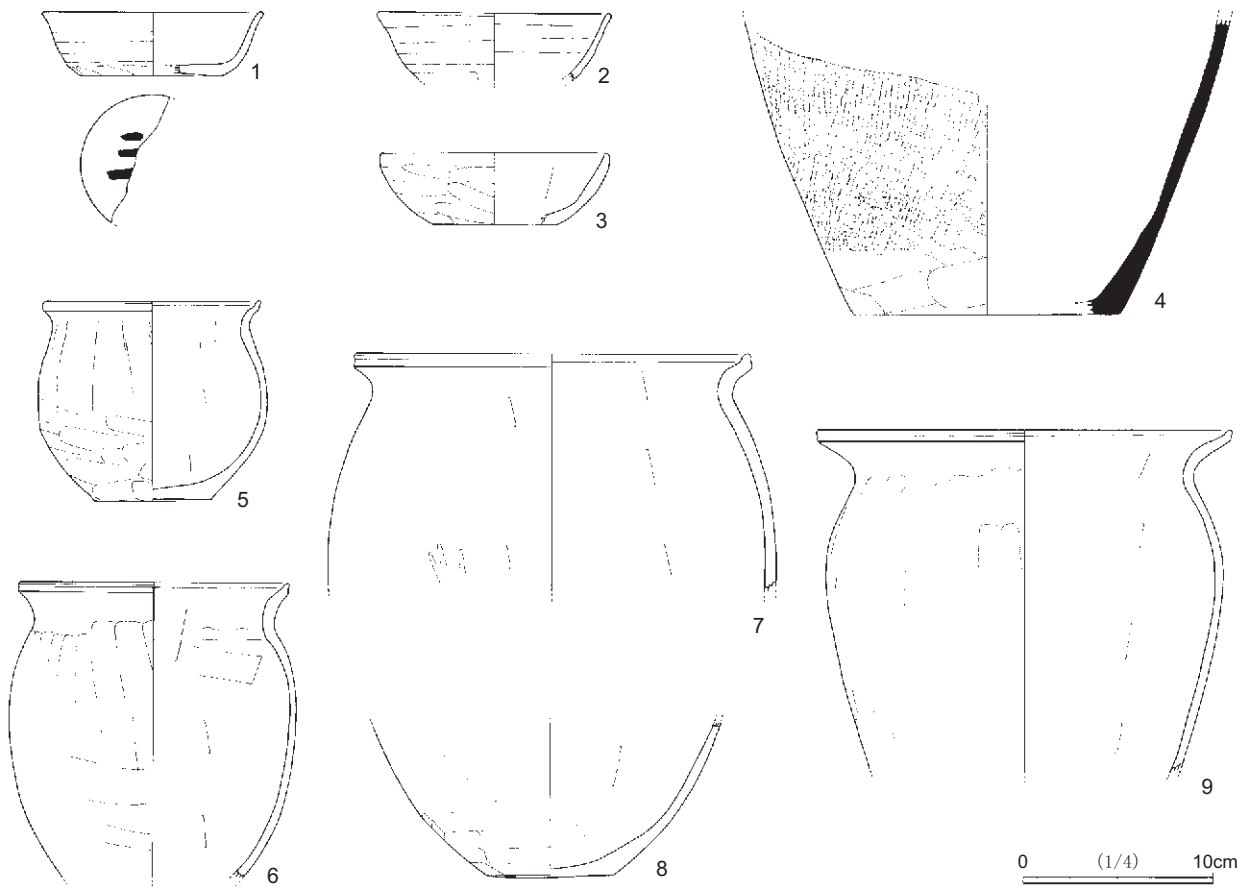
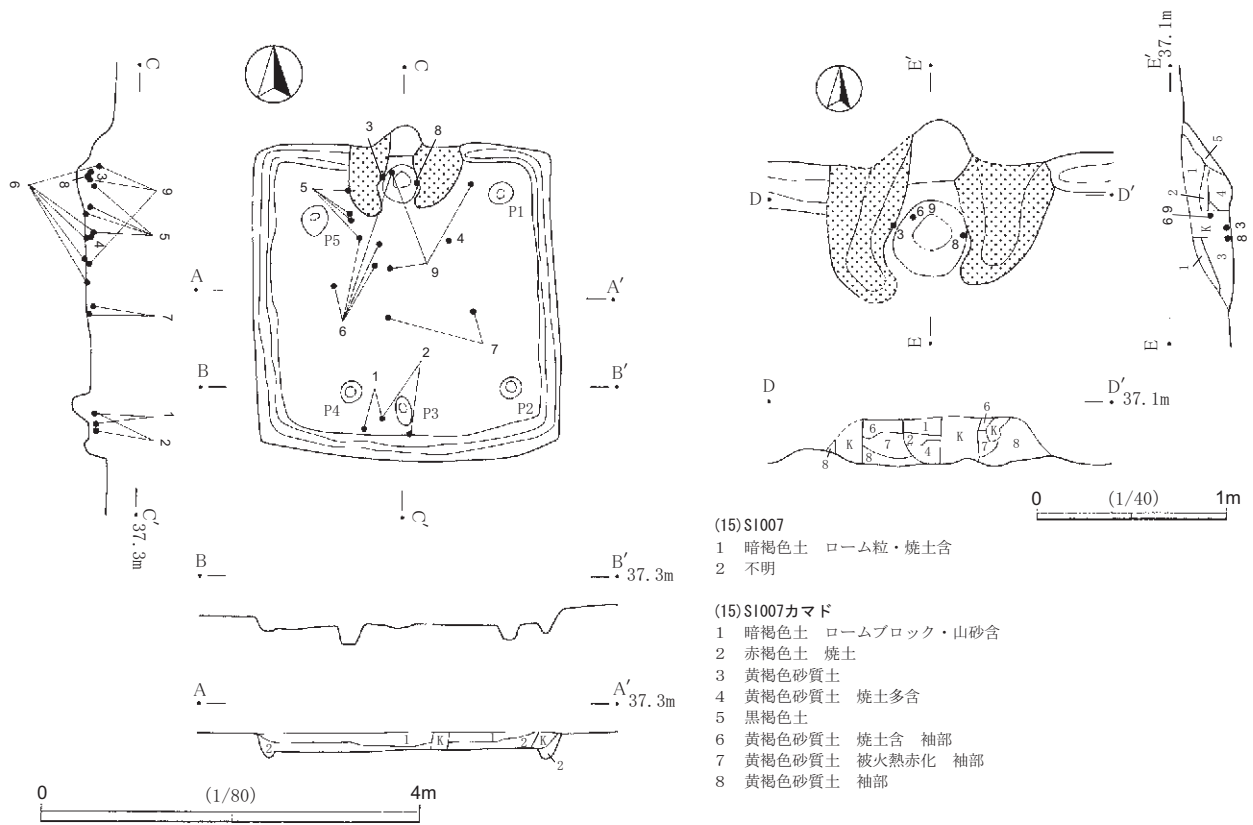
11は東側中央の覆土中層から出土した須恵器碗である。口縁部外面に叩きの痕跡があり、体部下位に手持ちヘラケズリを施している。内面の色調は黄灰色、外面はにぶい黄色で胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。下総産である。

12は内面にミガキが施される土師器碗で、住居中央西寄りの覆土中層から出土した。底部を欠損する。体部は内湾しながら立ち上がった後直線的に開き、口唇部で外反する。色調は明赤褐色、胎土に多量の砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。13は外面口縁部直下までヘラケズリが施される土師器杯である。覆土中からの出土で底部を欠損している。内外面とも口縁部に油煙が付着している。色調は赤褐色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。14は覆土中から出土した土師器高台付皿である。やや高めの高台はほぼ直立する。口縁部は強く外反して水平に開き、弧状に2回割ったかのように1/3周程欠損するが、割れ口が摩滅しているため意図的に打ち欠いた可能性がある。外面口縁部1/4周程に煤が付着している。色調は橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。

15～18は須恵器甕である。15は覆土中から出土した。口縁部が「ハ」の字状に大きく開くタイプで、胴部外面には叩き、内面には強い当て具痕が残る。色調は灰色、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。16はカマド周辺の覆土中層から出土した。外面は叩きの後胴部下位にヘラケズリを施している。内面は器面が荒れているため不明瞭であるが、ナデと思われる。内面の色調はにぶい赤褐色、外面は黒褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。17は胴部片で住居南側の覆土下層から上層にかけて分布していた。外面は目の粗い叩き、内面はナデが施される。内面の色調は暗褐色、外面は黒褐色、胎土に小礫を多く含む。焼成堅緻である。南比企産か。18は甕の底部で、住居東側の覆土下層から出土した。胴部外面は叩きの後胴部下位にヘラケズリを施している。内面には強い当て具痕が残る。内面の色調はオリーブ黒色、外面は暗オリーブ灰色を呈する。胎土は15と同様で、15、18は同一個体の可能性がある。15、16、18は下総産である。

19～21は土師器甕である。19は住居北東の覆土中層から出土した小型甕である。口径と胴部最大径がほぼ同じ大きさで、口唇部は素口縁となる。外面胴部下半に被熱による剥離が見られる。色調は褐色、胎土に砂粒を含む。20は南側中央の覆土下層から出土した常陸型甕である。胴部はあまり張らず、口縁部に最大径を有する。色調はにぶい橙色、胎土に多量の白色粒子、雲母を含む。21は北東隅の覆土中層から出土した。口縁部中位に膨らみをもち、端部がつまみ上げられる。色調は赤褐色、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。

22は鉄製鎌でカマド左袖から出土した。基部上端の角を折り返す曲刃鎌で、先端部を欠損している。



第171図 (15) SI007

(15) SI007 (第171図、図版22・63)

19L-70グリッド周辺に位置する。平面形は正方形に近い。主軸はN-1°-W、規模は主軸長3.35m、幅3.22mを測る。掘り込みは確認面から13.6cm~26.7cmとやや浅い。カマドは北壁中央に設置される。耕作時の攪乱を受けているが、比較的良好に遺存している。ピットは支柱穴4基と梯子ピットが検出された。深さはP1が16.2cm、P2が18.1cm、P3が18.5cm、P4が20.5cm、P5が29.1cmである。周溝は幅14cm~35cm、深さ3cm~10cmで全周する。

遺物は床面から覆土中層にかけて分布する。1~3は土師器杯である。1は住居南端中央付近の覆土下層から出土した。箱形に近い形状で口縁部が緩やかに外反する。底部回転糸切りの後体部下端から底部外周にかけて手持ちヘラケズリを施す。色調はにぶい橙色、胎土に白色粒子、砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。底部外面に墨書が見られる。遺存部位が少ないため不明瞭だが、これまでの例から「三」と思われる。2は住居南端中央の覆土下層から出土した。口縁部から体部にかけて1/2周程が遺存するが、底部を欠損する。外面に強いロクロ目を残す。色調はにぶい橙色、胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。3はカマド内覆土下層から出土した杯で、外面口縁部直下までヘラケズリが施される。にぶい赤褐色を呈し、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリア、少量の白色針状物を含む。

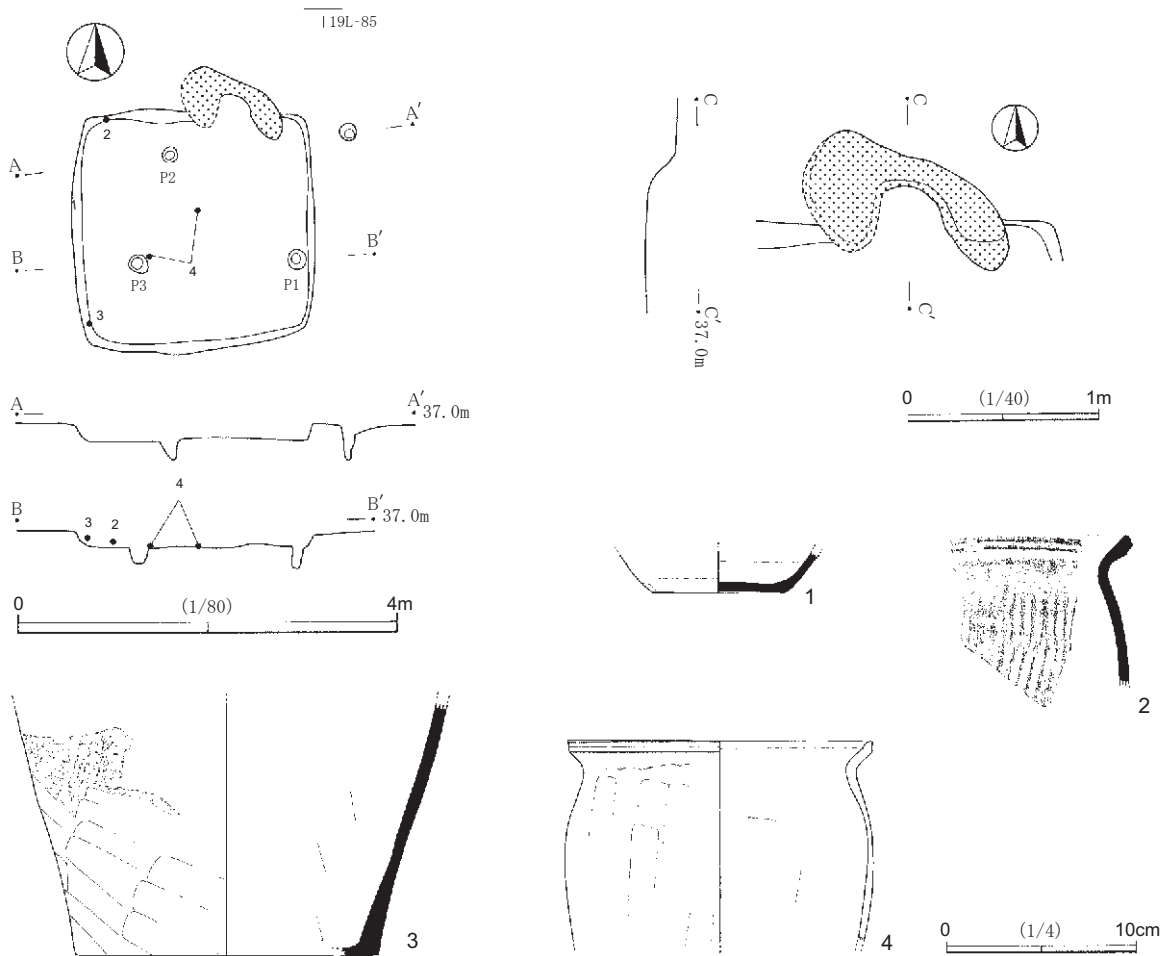
4は住居中央北東寄りの覆土下層から出土した須恵器甕である。胴部は直線的に開く。外面は叩き後胴部下位にヘラケズリ、内面に同心円状の当て具痕が残る。内面の色調は黄灰色、外面は黒色を呈する。胎土に多量の雲母微粒子、白色粒子を含む。内面には被熱によると思われる器面の剥離が見られる。

5~9は土師器甕である。5はカマド左袖周辺の覆土下層から出土した。接合しない口縁部片と胴部・底部片を図上で復元した。やや下膨れの形状で、胴部最大径は12.1cmである。頸部内面が帯状に黒変しており、外面には煤が付着している。色調は明赤褐色、胎土は多量の白色粒子、赤色スコリアを含んで砂質を帯びる。6は住居中央より西寄りの床面、カマド火床部などから出土した。最大径を胴部上位に有し15.2cmを測る。口縁部は肥厚しながら緩やかに外反し、口唇部をつまみ上げている。色調は赤褐色、胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。7は常陸型甕の上半部である。住居中央付近の床面および覆土下層から出土した。胴部中位に最大径を有し、23.8cmを測る。口縁部は短く外反し、端部をつまみ上げている。色調はにぶい橙色、胎土に多量の白色粒子と雲母を含む。内面胴部中位に白い付着物が見られる。接合しない同一個体の胴部片も内面が灰色に変色している。8は内湾しながら大きく開く胴下半部である。カマド火床部の覆土下層から出土した。色調は明赤褐色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。9はカマド火床部、床面中央付近などから出土した。最大径を口縁部にもち、口唇部は短くつまみ上げられる。色調は橙色、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。接合はしないが、同一個体と思われる底部片があり、底径7.0cmを測る。

(15) SI008 (第172図、図版22・63)

19L-84グリッド周辺に位置する。平面形は正方形である。主軸はN-2°-W、規模は主軸長2.52m、幅2.57mを測る。掘り込みは確認面から9.8cm~20.5cmと浅い。カマドは北壁東寄りに袖の一部が残存していた。検出されたピットは直径20cm前後の小ピット3基で、深さはP1が24.6cm、P2が22.1cm、P3が18.8cmである。周溝は巡らない。耕作時に攪乱を受けており、床面には凸凹が見られる。

遺物の出土量は少なく4点を図化した。1~3は下総産の須恵器である。1は覆土中から出土した杯の底部片である。底径がやや大きく、体部の立ち上がりは直線的である。底部回転ヘラ切りの後体部下位か



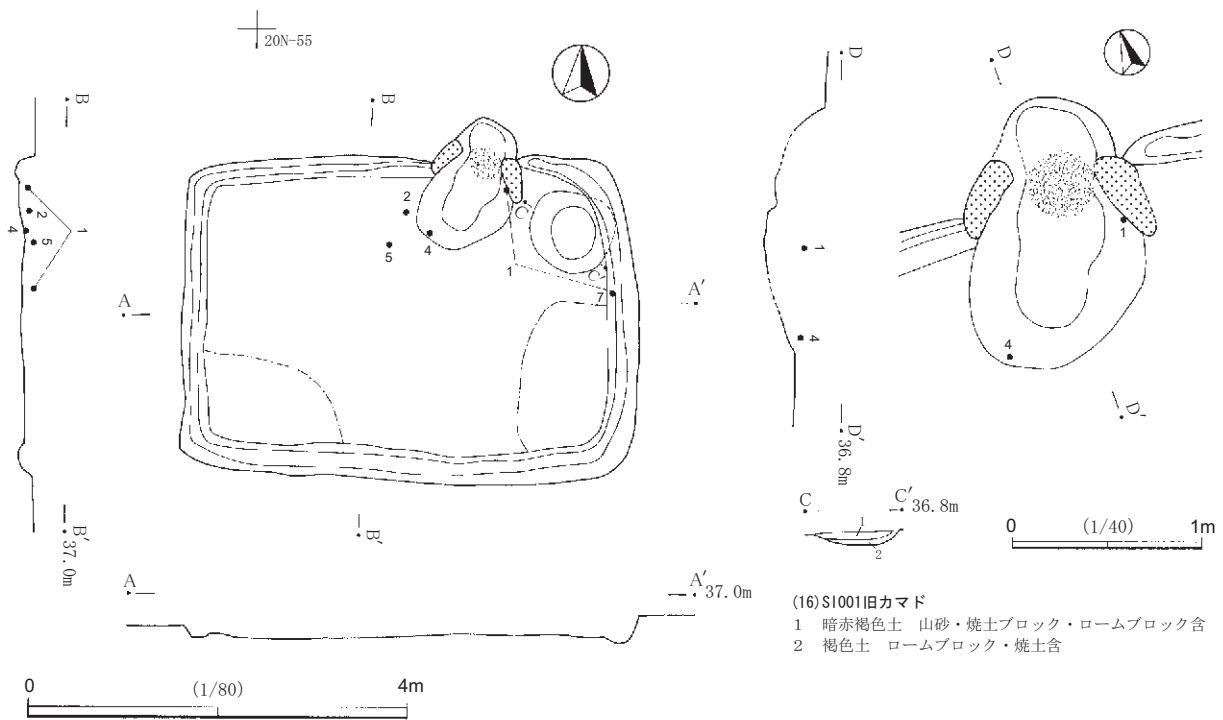
第172図 (15) SI008

ら底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。内面の色調はにぶい黄橙色、外面は褐灰色、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。2は住居北東の覆土下層から出土した甕の口縁部片で、やや膨らみをもった胴部に緩やかに外反する口縁部が付く。外面には叩きが施される。色調は黒褐色、胎土に多量の白色粒子、スコリアを含む。3は甕の胴下半部で、住居西南隅の覆土中層から出土した。外面は叩き後胴部下位にヘラケズリを施す。内面胴部中位に近い部位は当て具痕により器面が凸凹している。色調はにぶい黄橙色、外面胴部下端は赤褐色を呈している。胎土に砂粒と大粒の赤色スコリアを多く含む。

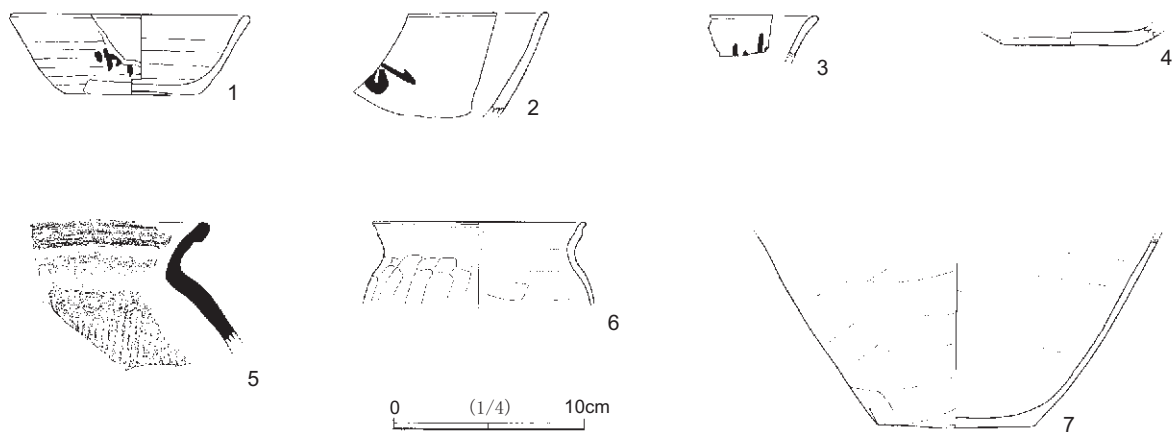
4は住居中央の床面から出土した土師器甕である。最大径を胴部上位に有し、16.4cmを測る。口縁部は肥厚しながら外反し、端部をつまみ上げている。内面の色調はにぶい赤褐色、外面は灰赤色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。

(16) SI001 (第173図、図版23)

20N-54グリッド周辺に位置する。カマドの付け替えが行われた住居で、平面形は東西に長い長方形である。主軸はN-1°-E、規模は主軸長3.48m、幅4.82mを測る。掘り込みは確認面から11.7cm～28.3cmとやや浅く攪乱が著しい。カマドは北東隅と北壁東寄りから2基検出された。北東隅のカマドは砂で埋め戻し、貼床されていた。北壁東寄りのカマドは攪乱により遺存が悪く、袖の一部が辛うじて残っていた。調査所見によると、もともと袖のかなりの部分が取り払われていたようである。ピットは検出さ



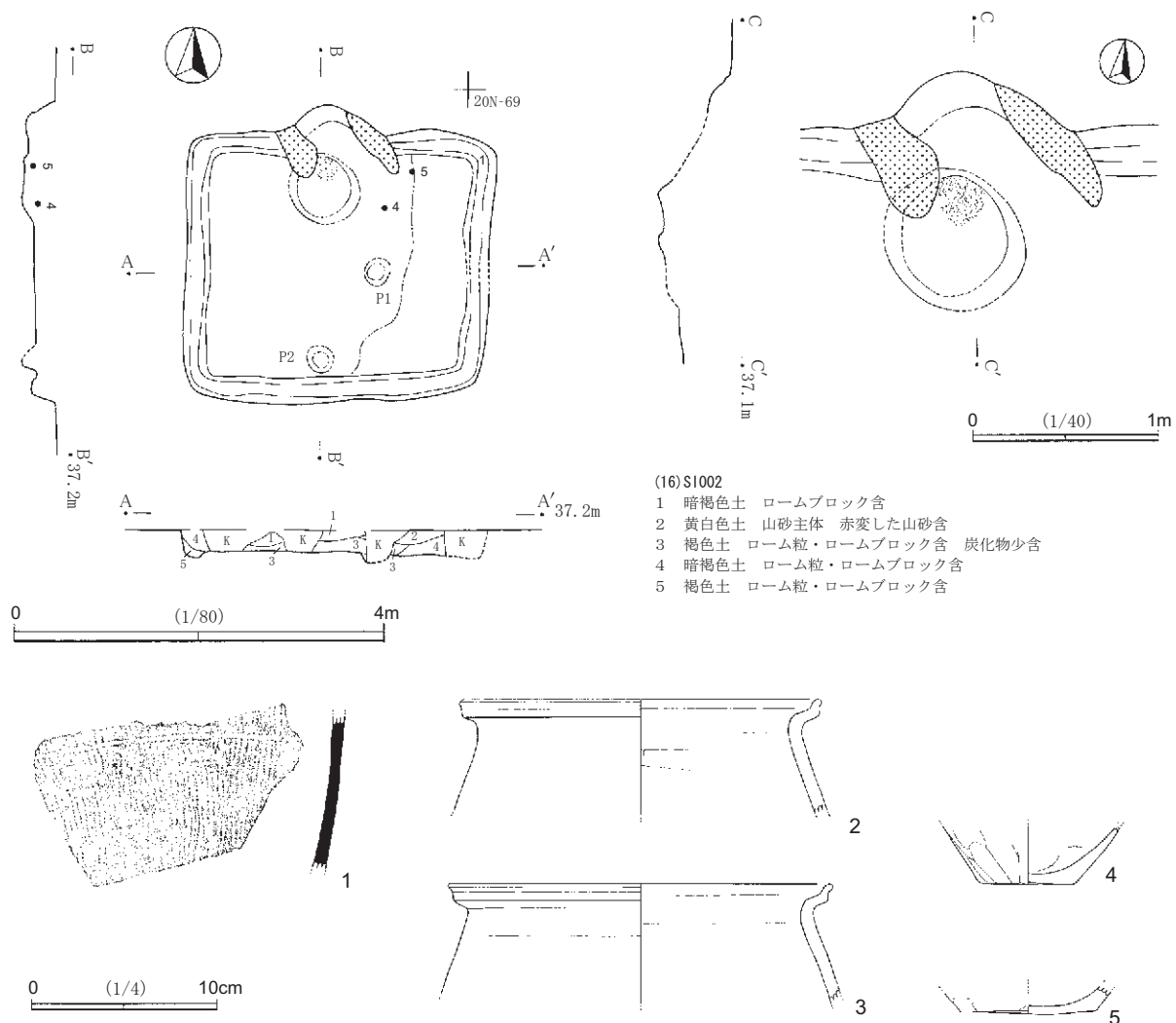
(16)SI001旧カマド
 1 暗赤褐色土 山砂・焼土ブロック・ロームブロック含
 2 褐色土 ロームブロック・焼土含



第173図 (16) SI001

れなかった。周溝は幅21cm～37cm、深さ1cm～9cmで全周する。床面は南東隅と南西隅を除き硬化面が見られた。

遺物の出土量は少なく、カマド周辺に散見される。1～4は土師器杯である。1～3は体部外面に墨書が見られる。1はカマド右袖際から出土した口縁部片と、東側周溝の覆土上層から出土した底部が接合した。底径は口径の1/2よりやや大きく、口縁部が肥厚しながら緩やかに外反する。底部回転糸切りの後底部外周と体部下端に手持ちヘラケズリが施される。色調は褐色、胎土に白色粒子、砂粒を多く含む。墨書は横位の「主」か。2はカマド火床部の西脇覆土中層から出土した。体部が内湾気味に開く器形である。墨書は墨痕が薄く、遺存部位が少ないため判読不能である。色調はにぶい黄橙色、胎土にやや多めの砂粒、赤色スコリアを含む。3は覆土中からの出土で、口縁端部が肥厚し外反する。墨痕が濃くはっきりしているが、遺存部位が少ないため判読不能である。白色粒子、砂粒を多く含み砂質を帯びた胎土である。色調は赤褐色を呈する。4は底部片で、カマド火床部の覆土上層から出土した。底部回転糸切りの後体部下端



第174図 (16) SI002

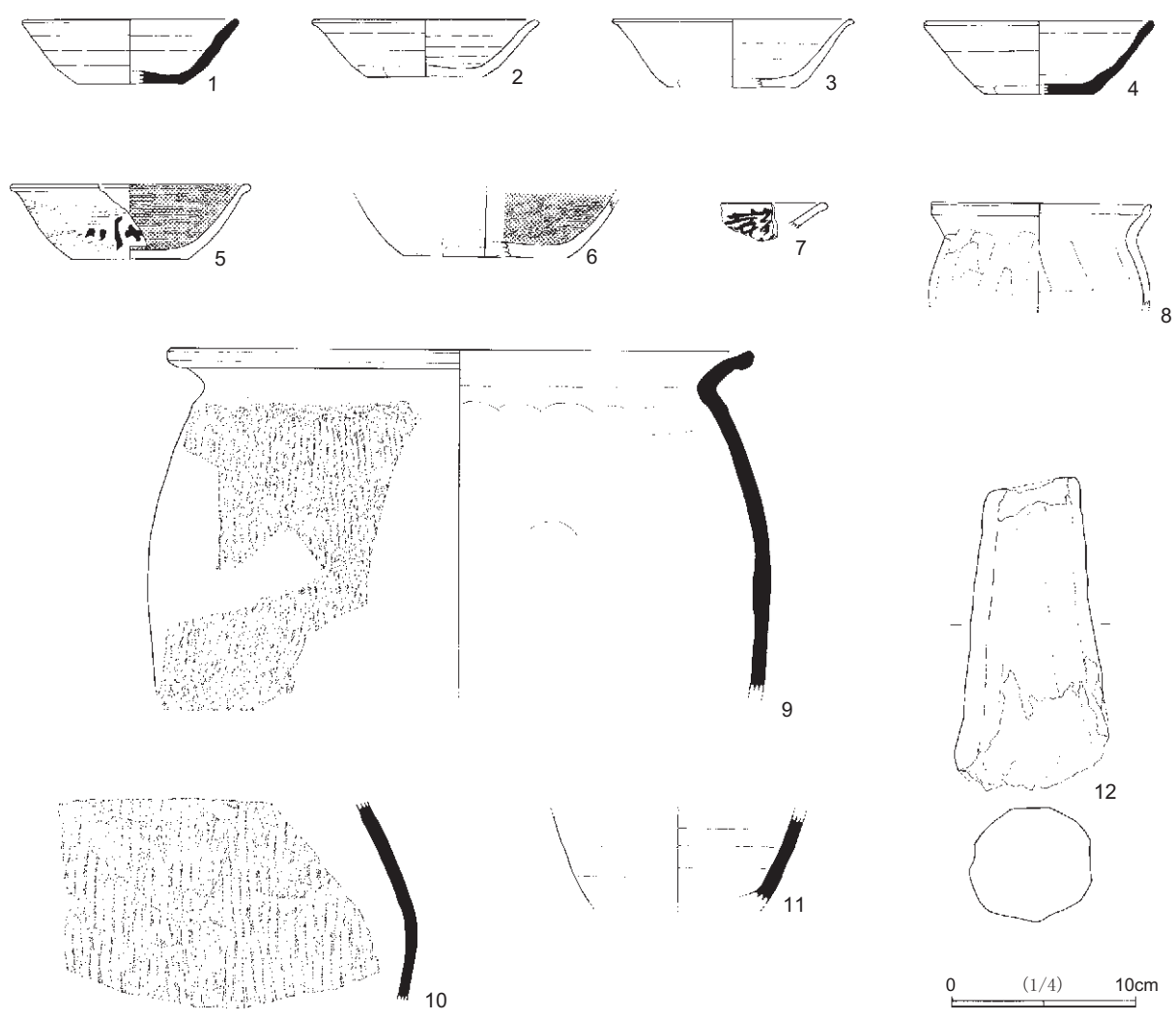
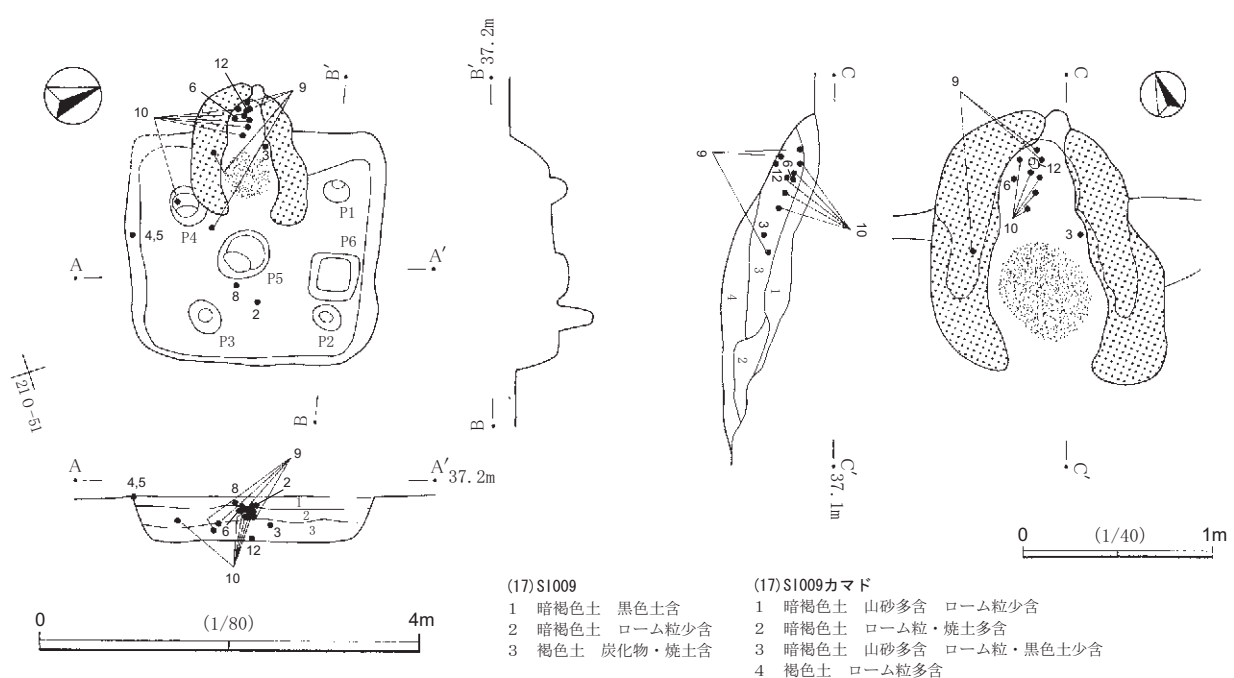
から底部外周にかけて手持ちヘラケズリ、内面にはミガキが施されている。内面黒色処理の可能性があるが、被熱のため不明である。内面には煤の付着が見られ、体部の割れ口も被熱していることから、意図的に打ち欠いたとも思われる。色調は褐色、胎土に白色粒子、砂粒、赤色スコリアを適当量含む。

5は須恵器甕の口縁部片で、カマド付近の覆土上層から出土した。厚みをもって丸く張る肩部に「ハ」の字状に開く口縁部が付く。口縁端部は折り返し状を呈する。外面と口縁部内面が剥離している。色調は暗赤褐色ないしにぶい赤褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。下総産である。

6は覆土中から出土した土師器甕の上半部である。口唇部が緩やかなS字を描く。色調は褐色、胎土に多量の細砂粒、赤色スコリアを含む。7は土師器甕の胴下半部である。東側周溝の覆土上層から出土した。薄手で、胴部が直線的に開く。外面は横方向のヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。色調は赤褐色ないしにぶい赤褐色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。

他に凶化はしていないが鉄滓が2点出土している。1点は住居中央東寄りの覆土下層から出土している。
(16) SI002 (第174図、図版23)

20N-68グリッド周辺に位置する。平面形は東西にやや長い方形である。主軸はN-0°-E、規模は



第175図 (17) SI009

主軸長2.94m、幅3.30mを測る。掘り込みは確認面から18.5cm～30.2cmで攪乱が著しい。カマドは北壁中央に設置され、比較的良好に残っている。ピットは床面中央やや東寄りと南壁側中央から2基検出された。南壁側中央のピットは梯子ピットであろう。深さはP1が10.2cm、P2が15.5cmである。周溝は幅24cm～28cm、深さ2cm～9cmで全周する。床面中央から西側にかけて硬化面が見られた。

遺物の出土量は少なく5点を図化した。1は覆土中から出土した新治産須恵器甕の胴部片である。外面は叩き、内面には当て具痕が見られる。内面の色調は明赤褐色、外面は灰色を呈する。胎土に多量の白色粒子と雲母を含む。

2～5は土師器甕である。2、3は覆土中から出土した常陸型甕の口縁部である。やや厚みのある胴部が直線的に開き、口唇部はS字状につまみ上げられる。胎土に多量の白色粒子と少量の雲母を含み、2には赤色スコリアも見られる。内面の色調は灰褐色、外面は橙色を呈する。4、5は底部片で、4は住居北側の床面から出土した。外面に煤が付着し、器面の剥離している箇所も見られる。内面は明赤褐色、外面は橙色を呈し、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。5はカマド近くの床面から出土した。胴部に比べて底部が薄く、やや丸みを帯びている。色調は赤褐色、胎土に多量の白色粒子と大粒の赤色スコリアを含む。

(17) SI009 (第175図、図版23・66)

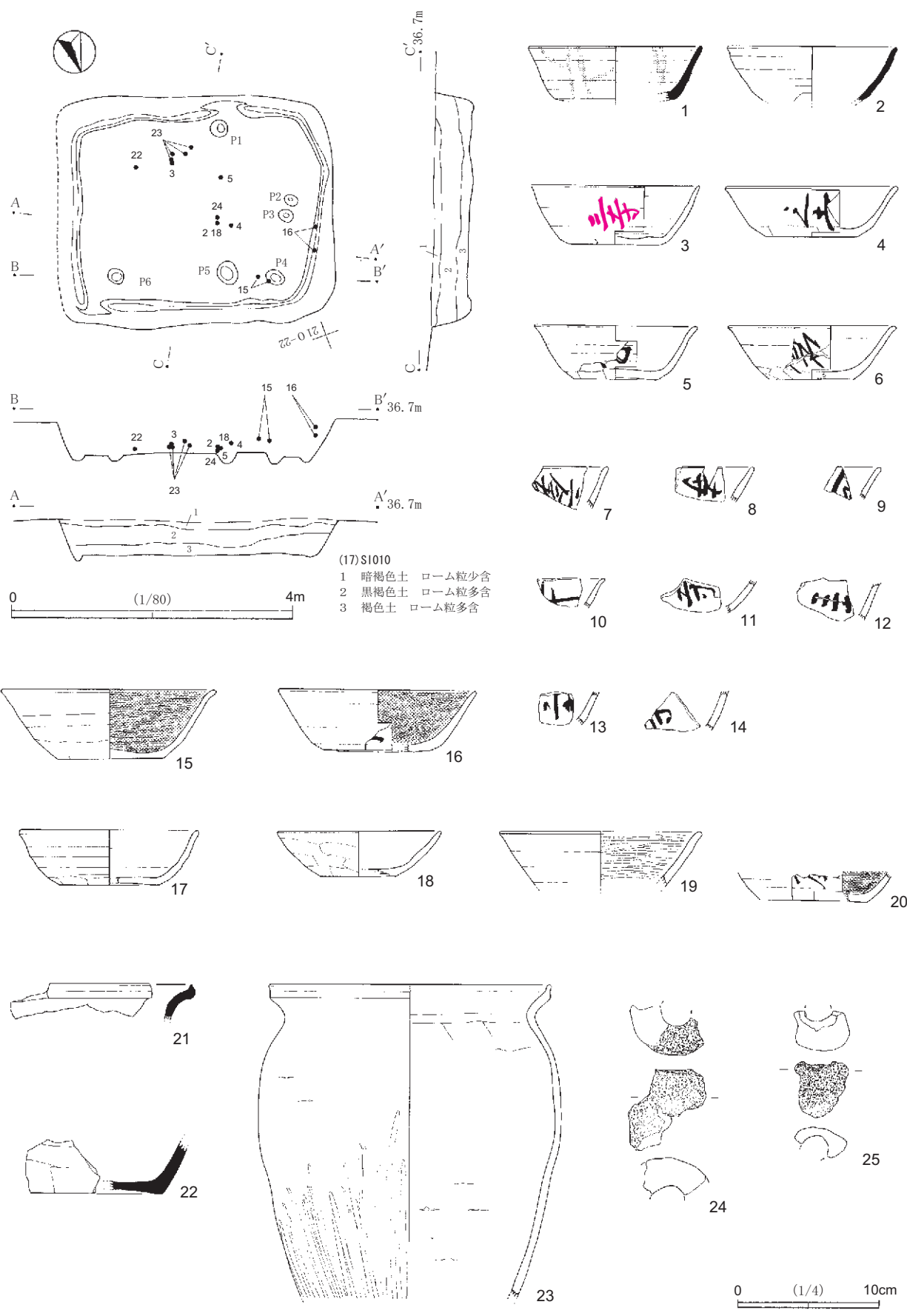
210-30グリッド周辺に位置する。平面形は南北にやや長い方形である。主軸はN-69°-W、規模は主軸長2.45m、幅2.70m、掘り込みは確認面から34.8cm～47.2cmである。カマドは西壁中央に設置される。住居の規模に比して大きく長軸1.45m、短軸1.24mを測り、煙道部からは支脚と土師器杯などが出土している。ピットは支柱穴4基の他に床面中央からP5が、東壁側中央からP6が検出されている。深さはP1が12.0cm、P2が12.4cm、P3が14.2cm、P4が12.4cm、P5が15.7cm、P6が13.6cmである。P6は長軸52.0cm、短軸49.0cmの方形で、覆土の中心部に白砂が混入していた。周溝は巡らない。

遺物はカマド煙道部に集中する。1、4は下総産の須恵器杯である。1は覆土中から出土した。底径は口径の1/2で、外面体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。色調は灰オリーブないし灰色、胎土に砂粒と大粒の赤色スコリアをやや多く含む。4は南壁中央の覆土上層から出土した。表面の色調は黒褐色、断面は赤褐色を呈する。胎土に微砂粒、赤色スコリアを含み、砂質を帯びる。

2、3は土師器杯である。口径の1/2前後の底部から体部が直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。外面体部下位から底部にかけての調整は2点とも手持ちヘラケズリである。2は住居東側中央の覆土上層から出土した。他に比べて器高がやや低く扁平である。内面の色調はにぶい黄褐色、外面は黒褐色で、口縁部外面と底部内面は斑に黒変している。胎土に砂粒を多く含む。3はカマド内の覆土中層から出土した。口縁部は器厚を減じながら直線的に開き、端部で強く外反する。色調は浅黄橙色を呈する。二次焼成によるものか、外面の一部が赤く焼けている。胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。全体的に磨耗している。

5、6は内面にミガキ及び黒色処理が施される土師器杯である。外面体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。5は南壁中央の覆土上層から出土した。墨書を含む破片は接合しないが、図上で復元した。底径が小さく、口唇部は外反して玉縁状を呈するところもある。色調はにぶい橙色、胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。墨書は体部外面に横位に「三□」と記される。二文字目の残画から「三寺」の可能性がある。6はカマド煙道部から出土した。口縁部を欠損し、外面は被熱により摩滅している。色調はにぶい黄橙色、胎土に多量の砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。

7は覆土中から出土した土師器皿の口縁部片である。口唇部がわずかに外反し丸みを帯びている。内面



第176図 (17) SI010

にはミガキが施される。外面には墨書が見られ、一度書いた文字をなぞって書いている。遺存部位が少ないため判読は難しい。

8は中央ピット東側の覆土上層から出土した土師器甕である。胴部最大径は12.1cmで、口径と同じである。口唇部はつまみ上げられ、外面に稜をもつ。胴部外面は縦方向の不規則なヘラケズリ、内面はヘラナデで幅広の工具痕が残っている。外面及び口縁部内面に煤が付着している。色調はにぶい赤褐色、胎土に白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。

9、10は外面に叩き目をもつ須恵器甕で、内面には当て具痕が見られる。9はカマド左袖、煙道部覆土中層などから出土した。最大径を胴部上位に有し34.1cmを測る。口縁部は短く外反し端部を折り返している。内面の色調は橙色、外面はにぶい赤褐色で、胎土に多量の白色粒子、小礫、赤色スコリアを含む。外面は被熱による器面の荒れが著しい。新治産である。10はカマド煙道部の覆土中層から出土した。色調はにぶい橙色、胎土に多量の雲母、白色粒子、赤色スコリアを含む。下総産である。

11は須恵器長頸壺の胴部片である。覆土中から出土した。外面は回転ヘラケズリが施されている。灰白色を呈し、気泡により膨らんでいる箇所が見られるものの焼成堅緻である。胎土は白色粒子、スコリアを少量含み精緻である。東海産である。

12はカマド煙道部から正位で出土した支脚である。頭部、基部ともに欠損する。被熱により表面が剥離したようで、煤の付着と赤く焼けた部分が残存している。表面は面取りされ、断面は多角形状である。

(17) SI010 (第176図、図版63・66)

210-21グリッド周辺に位置する。平面形は東西に長い長方形である。カマド未検出のため長軸を主軸とするとN-108°-E、長軸長3.73m、短軸長3.26mを測る。掘り込みは確認面から51.7cm～56.5cmと深い。ピットは直径20cm～30cm前後のものが6基検出された。深さはP1が11.4cm、P2が10.7cm、P3が8.4cm、P4が12.0cm、P5が13.1cm、P6が6.9cmである。周溝は幅18cm～50cm、深さ3cm～9cmで、北東隅と南壁の一部で途切れるほかは全周する。本住居跡の東に(17)SI016が接しているが、主軸方位が同じであり、東壁のプランがはっきりしないことから、2軒の住居跡は同一住居、或いは拡張住居の可能性がある。また、床面中央などから羽口片が出土しているが、鉄滓や製鉄に関わる痕跡は検出されなかった。

遺物は覆土下層から上層にかけて分布する。1、2は須恵器杯である。1は覆土中からの出土で、箱形を呈する。底部を欠損し、内外面に火襷が見られる。外面体部下位に回転ヘラケズリが施される。内面の色調は暗灰黄色、外面は黄灰色、胎土に細砂粒、スコリア、微量の白色針状物を含む。南比企産である。2は住居中央の覆土中層から出土した。底部を欠損し、体部が内湾しながら開く。外面体部下位に手持ちヘラケズリが施される。軟質で黒褐色を呈し、断面はセピア色である。胎土に白色粒子を多く含む。

3～20は土師器杯である。覆土中からの出土が多い。このうち7～14は墨書土器の小片である。外面体部下端から底部にかけての調整は手持ちヘラケズリが主体である。3は体部の立ち上がりがあまく、口縁部はわずかに外反する。色調は黒褐色で断面はにぶい褐色を呈する。胎土に白色粒子を多く含む。体部外面横位に「三寺」と朱書きされている。4は住居中央西寄りの覆土中層から出土した。外面体部下端は手持ちヘラケズリによって面取りされている。体部外面の墨書は、二文字目の残画から「三寺」と思われる。5は中央やや南寄りの覆土下層から出土した。口縁部をほとんど欠損している。体部外面に墨書が見られるが、遺存部位が少ないため判読不能である。6は体部が内湾気味に開き、口縁部で外反する器形である。外面体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。4、5、6の色調は橙色、胎土に砂粒、赤

色スコリアを含む。体部外面に横位の墨書が見られる。他の出土例から「倉」と思われる。

7～14は外面に墨書が見られる破片で、おおむね橙色ないしにぶい黄橙色を呈する。胎土も共通しており、砂粒、赤色スコリアを含む。他の出土例から「三」あるいは「寺」と推測できるものもあるが、小片のため判断は難しい。7～10は口縁部片である。7は「三倉」か。8は「寺」と読める。外面口唇部直下までヘラケズリが施されている。9は内面にミガキ及び黒色処理が施される。墨痕は比較的是っきりしているが、文字の判読はできない。10は墨痕が濃くはっきりとしているが、小片のため判読不能である。11～14は体部片で、全て横位の墨書である。11は外面体部下位に手持ちヘラケズリが施される。墨書は「寺」と記されている。12は混入物がやや多い。墨書は「三口」と記されている。文字は太字だが、墨痕は薄い。14は胎土に少量の雲母を含み、墨痕がはっきりとしている。

15、16は内面ミガキ及び黒色処理が施される。15は住居北西の覆土中層から出土した。底径は口径の1/2で、口縁部が外反する。色調はにぶい黄橙色、胎土に多量の砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。口縁部から体部にかけて1/2周程欠損している。16は西側周溝の覆土上層から出土した。体部は口唇部に向かって器厚を減じながら直線的に開く。底部回転糸切り後体部下端と底部に回転ヘラケズリが施される。色調は黄橙色、胎土に砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。外面体部下位に墨書が見られるが、遺存部位が少ないため判読不能である。

17は体部が内湾しながら開く器形で、外面に強いロクロ目を残す。色調はにぶい黄橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。18は底径が小さく体部が内湾しながら開く器形で、外面口縁部直下までヘラケズリが施される。色調はにぶい黄橙色、底部内面は黒色を呈する。胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。

19は体部が直線的に開き、口縁部でわずかに外反する。底部を欠損している。内面にはミガキが施され、外面にも粗いミガキが見られる。色調はにぶい褐色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。20は内面にミガキ及び黒色処理が施され、口縁部を欠損している。外面体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。体部に墨書の残画が見られるが、遺存部位が少なく判読は難しい。色調はにぶい黄橙色、胎土は精緻で少量の雲母を含む。図化はしていないが、この他に墨書の残画が見られる破片が14点ある。内訳は口縁部片7点、体部片6点、内黒土器体部片1点である。中には「三」と推測されるもの、「寺」の一部と思われるものも見られる。

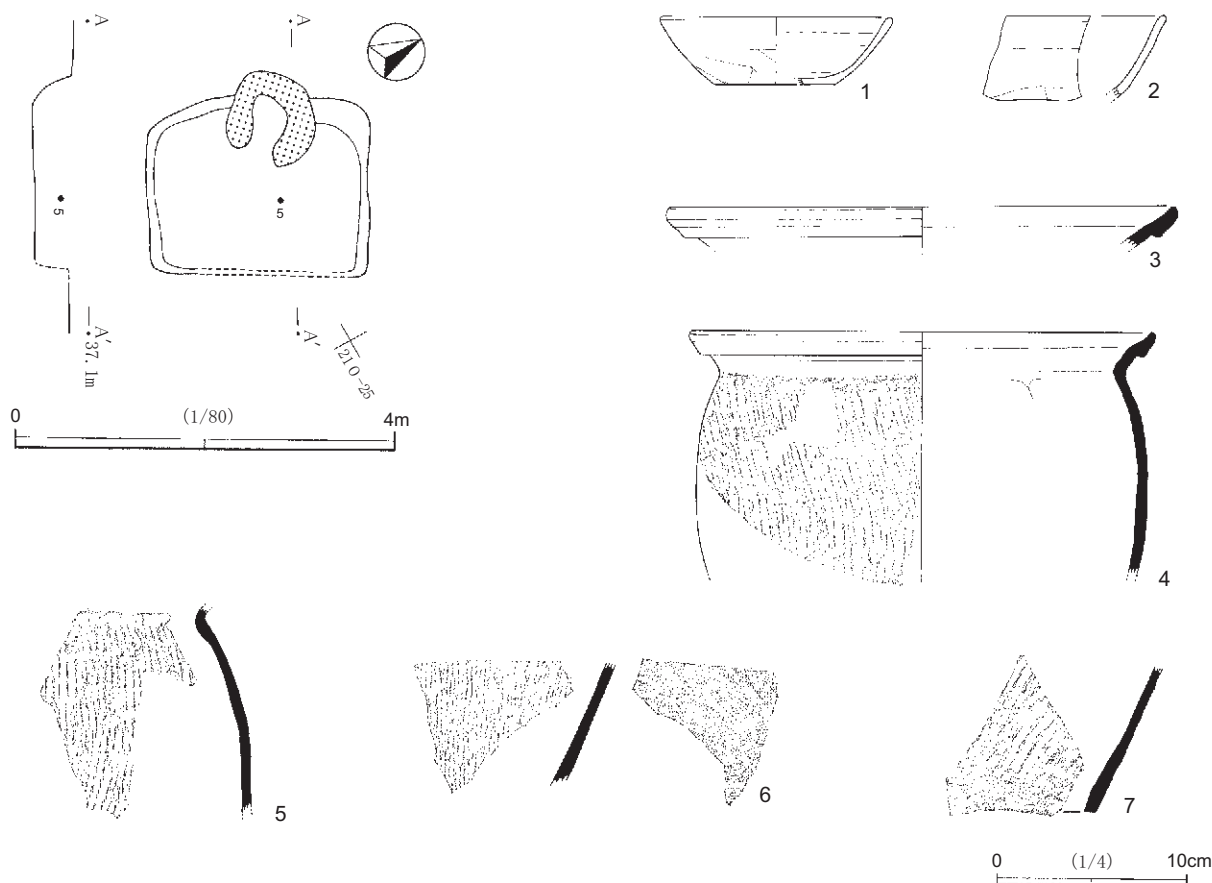
21、22は下総産の須恵器甕である。21は口縁部片で、口唇端部は上下に軽くつまみ出されている。内面の色調はオリーブ褐色、外面は黒褐色、断面は明褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。22は住居南東の覆土下層から出土した底部片である。内面の調整はヘラナデ、外面はヘラケズリである。色調は黄褐色、胎土に白色粒子、赤色スコリアを含む。底部内面に煤が付着している。

23は住居南側の覆土中層から出土した常陸型の土師器甕である。最大径を胴部上位に有し21.6cmを測る。外面胴部下半に縦方向のミガキが施される。内面の色調は橙色、外面はにぶい橙色ないし灰褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子、雲母、赤色スコリアを含む。胴部外面に煤が付着している。

24、25は鞆の羽口である。羽口片は10点出土しており、そのうち2点を図化した。24は住居中央の覆土下層から、25は覆土中から出土した。発泡した鉄滓が溶着し、一部はガラス化している。内径は2.0cm～2.3cmである。

(17) SI011 (第177図、図版24)

210-14グリッド周辺に位置する。平面形は南北に長い不整な方形である。主軸はN-63°-W、規模



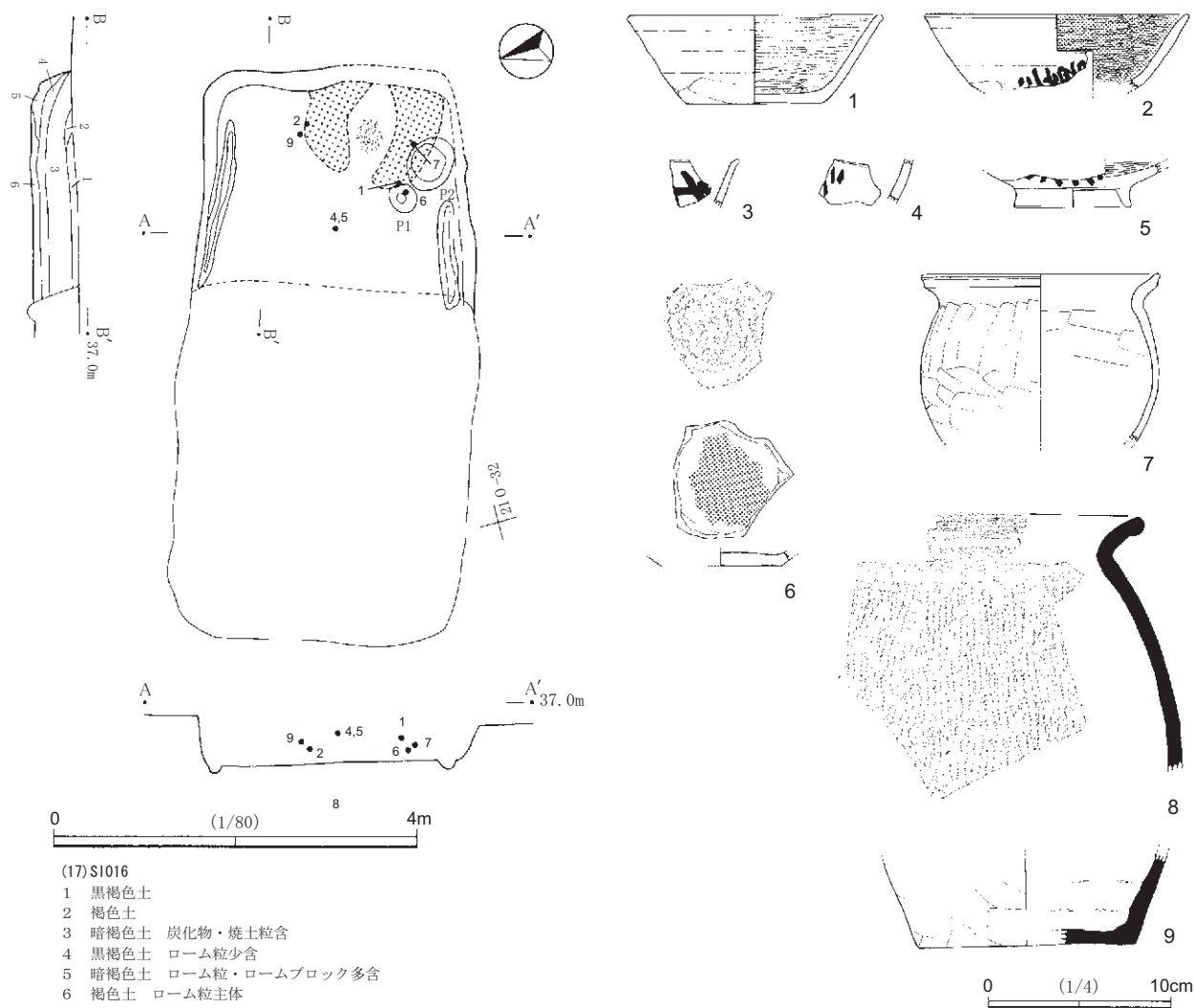
第177図 (17) SI011

は主軸長1.90m、幅2.33mを測る。掘り込みは確認面から32.8cm～42.4cmである。カマドは西壁中央やや北寄りから袖の一部が検出された。周溝、ピットともに検出されなかった。覆土は攪乱を受けているため不明瞭だが、ローム粒を含む暗褐色土が主体のようである。

遺物は少なく、すべて覆土中からの出土である。1、2は土師器杯である。1は体部が内湾しながら開き、口縁部で肥厚する。外面体部下半から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。色調は橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。2は内面にミガキ及び黒色処理が施される。体部が内湾気味に開き、外面体部下位に手持ちヘラケズリが施される。色調はにぶい橙色、胎土に砂粒、赤色スコリア、少量の白色針状物を含む。外面には煤が付着している。

3～6は須恵器甕で、6のみ東海産、他は下総産である。3は「く」の字状口縁になるものと思われる。色調は赤褐色、胎土に白色粒子と大粒の赤色スコリアをやや多く含む。4は最大径を口縁部に有する。胴部は膨らみをもち、口縁部が「く」の字状に外反する。口唇部はやや受け口状を呈する。胴部外面は叩き、内面は明瞭な当て具痕はないが、器面に凹凸が見られる。色調は赤褐色、胎土に多量の白色粒子と砂粒、赤色スコリアを含む。5は住居中央の覆土中層から出土した胴部片である。胴部上位に膨らみをもち、外面に叩きが施される。内面の色調は灰オリーブ色、外面は灰褐色で胎土に白色粒子を多く含む。6は胴部片で外面に叩き、内面に同心円状の当て具痕が見られる。内面の色調は灰白色、外面はオリーブ灰色、胎土にスコリアを多く含む。

7は須恵器甕の底部片である。遺存部位が少ないものの底部の形状から五孔の甕の可能性はある。外面



第178図 (17) SI016

は叩きの後胴部下端にヘラケズリを施している。内面の色調は明褐色、外面は褐色、胎土に白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。下総産である。

(17) SI016 (第178図、図版24・63)

210-22グリッド周辺に位置する。(17) SI010と同一住居もしくは拡張住居跡の可能性が高い。長方形を呈する形状から工房跡とも考えられる。南東隅は攪乱により欠損している。主軸はN-108°-E、規模は(17) SI010を含めた長軸長6.30m、短軸長3.05mを測る。掘り込みは確認面から31.6cm~60.9cmで、北側がやや深くなる。カマドは東壁南寄りに設置される。煙道部が攪乱を受けているため判然としないが、住居の壁より内側に取まるものと思われる。ピットはカマド右袖の右脇から2基検出された。深さはP1が12.6cm、P2が20.5cmである。周溝は北壁と南壁に壁から離れた状態で掘り込まれている。幅10cm~18cm、深さ5cm~8cmである。

遺物はカマド周囲に散見される。1~4、6は土師器杯である。1はカマド右袖付近の覆土中層から出土した。底径は口径の1/2よりやや大きく、体部が直線的に開く。内面の調整はミガキ、底部回転糸切りの後外面体部下端から底部外周にかけて手持ちヘラケズリが施される。内面の色調はにぶい橙色、外面は

明赤褐色、胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。2は内面にミガキ及び黒色処理が施される杯で、カマド左袖の覆土下層から出土した。底部を欠損する。体部は内湾気味に立ち上がった後直線的に開く。外面体部下位に手持ちヘラケズリが施される。体部外面には横位の墨書が記されており、これまでの出土例から「三倉」と思われる。色調は明黄褐色、胎土に白色粒子、赤色スコリアを含み精緻である。3は覆土中から出土した口縁部片で、外面に墨書が見られる。遺存部位が少ないため判読不能である。色調はにぶい橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。4は住居東寄りの覆土中層から出土した体部片で、外面に「三」と思われる横位の墨書が見られる。混入物は少なく、橙色を呈する。6はカマド前ピットの覆土上層から出土した。底部内面に墨痕のようなものが見られる。線刻のような文様も見られるが、詳細は不明である。色調はにぶい橙色ないし橙色、胎土に砂粒、スコリアを含む。

5は住居東寄りの覆土中層から出土した土師器高台付杯の底部である。底部回転ヘラケズリの後貼り付けられた高台は、やや高めだが外反は弱い。内面はミガキが施される。体部外面に墨書の残画が見られるが、文字の判読は難しい。内面の色調は橙色、外面は浅黄橙色、胎土に白色粒子、砂粒を含む。

7はカマド左袖の覆土中層から出土した土師器小型甕である。口径と胴部最大径がほぼ同じで、肥厚し外反する口縁部の端部をつまみ上げている。内面に煤が付着し、頸部は黒変している。色調はにぶい赤褐色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。

8、9は下総産の須恵器甕である。8は覆土中から出土した。丸く張った胴部に「く」の字状に外反する口縁部が付く。胴部外面は叩き、内面はヘラナデで当て具痕も見られる。色調は明赤褐色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。外面は器面が剥離している。9はカマド左袖付近の覆土中層から出土した。内面胴部下位に輪積み痕が残る。色調は灰色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。

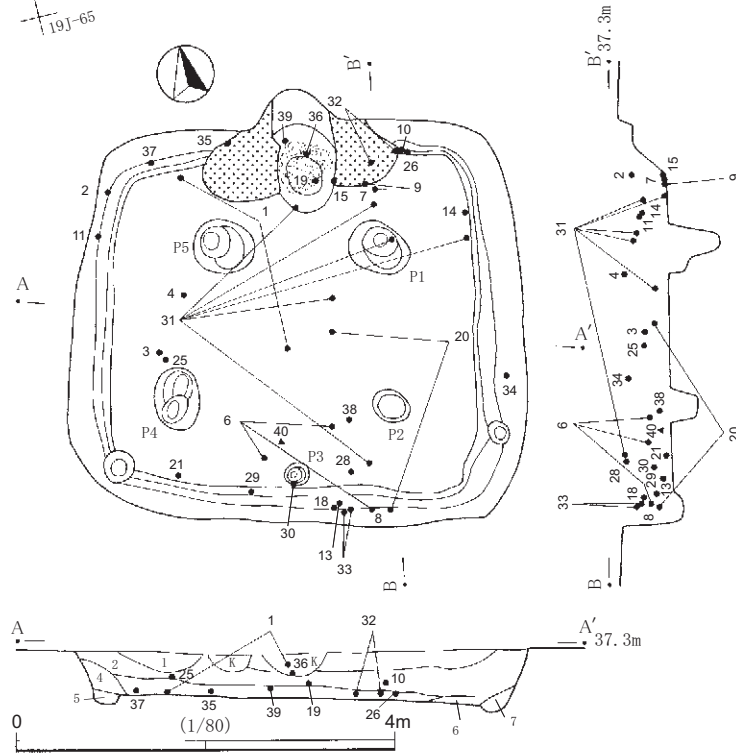
(19) SI677 (第179・180図、図版24・63・66)

16J-69グリッド周辺に位置する。平面形は東西にやや長い方形である。主軸はN-4°-E、規模は主軸長4.20m、幅4.74mを測る。掘り込みは確認面から43.0cm~57.1cmと深く、床面全体が硬化している。カマドは北壁中央に設置され、遺存状態は良好である。燃焼部覆土中から支脚が出土している。ピットは支柱穴4基と梯子ピット1基、壁柱穴と思われるピット2基が検出している。深さはP1が51.0cm、P2が30.8cm、P3(梯子ピット)が25.0cm、P4が37.0cm、P5が43.0cmである。壁柱穴は南東隅付近と南西隅から検出され、深さが32.0cmと9.6cmであった。周溝は幅27cm~58cm、深さ2cm~13cmで全周する。

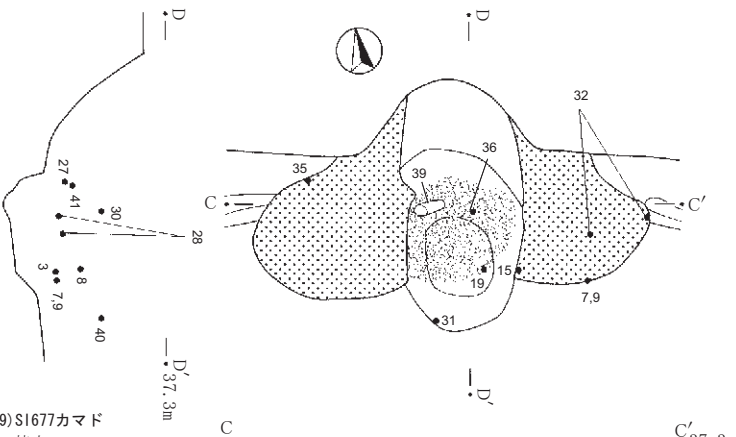
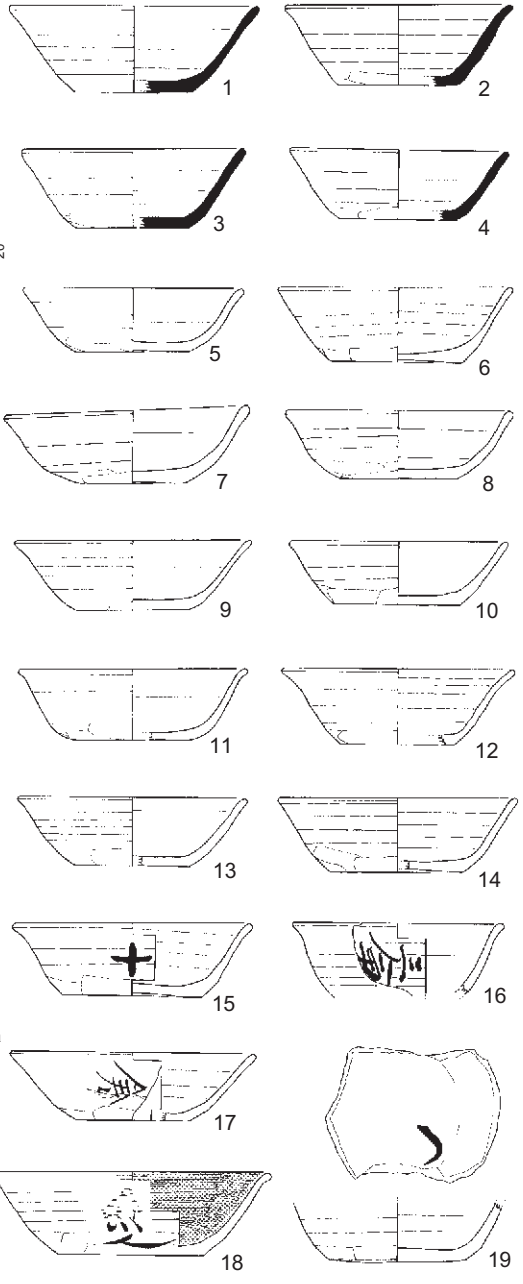
遺物は床面から覆土上層にかけて遺構全体に分布している。1~4は須恵器杯で、いずれも口縁部~底部1/4周以下の破片である。胎土はほぼ共通しており、多量の白色粒子と赤色スコリアを含む。器形は土師器杯と同様で、底径は口径の1/2前後、口縁部が緩やかに外反する。外面体部下端から底部にかけての調整は、1のみ回転ヘラケズリ、他は手持ちヘラケズリである。1はカマド左袖西の床面から出土した破片と、床面中央の覆土上層から出土した小片が接合した。内面の色調は灰オリーブ色、外面は灰色で、断面は赤褐色を呈する。内面には輪積み痕が見られる。2は北西壁周溝の覆土上層から出土した。胎土に小礫を含むが、焼成は堅緻である。内面の色調はにぶい黄橙色、外面は濁灰色を呈する。3は西側中央付近の覆土中層から出土した。器表面の色調は暗灰黄色、断面は中央が灰白色、両側は橙褐色を呈する。4は西側中央の覆土上層から出土した。色調は灰色である。いずれも下総産である。

5~19、22~25は土師器杯である。おおむね底径は口径の1/2前後で、口縁部が緩やかに外反する器形が多い。外面体部下端から底部にかけての調整は、確認できるものは全て手持ちヘラケズリである。中に

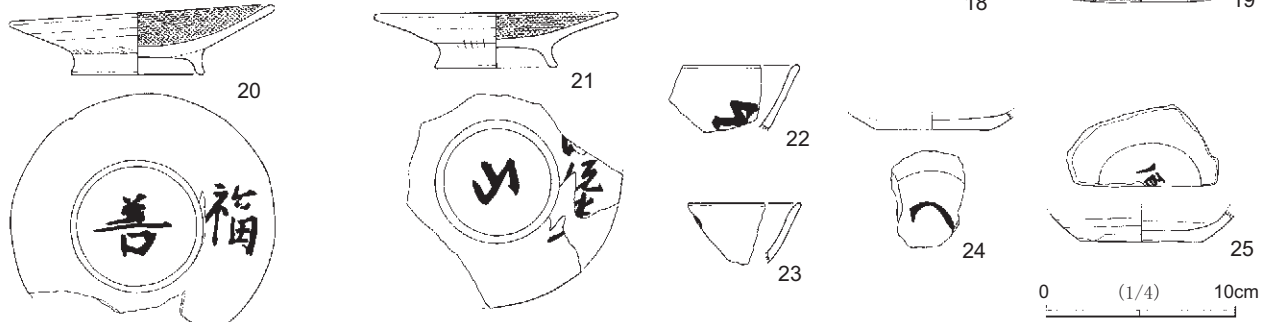
19J-65



- (19)SI677
 1 明灰褐色土
 2 黒褐色土 ロームブロック少含
 3 黒褐色土 ローム粒少含
 4 明灰褐色土 ローム粒主体
 5 暗灰褐色土 ローム粒含
 6 暗灰褐色土 ロームブロック含
 7 灰褐色土 灰白砂ブロック・焼土ブロック多含



- (19)SI677カマド
 1 焼土
 2 灰白色砂土
 3 暗灰色土 灰白色砂ブロック多含
 4 暗灰褐色砂土
 5 暗灰褐色砂土 ローム粒・炭化物含
 6 赤褐色砂土 被熱赤化
 7 暗灰白色砂土
 8 灰黒色土 ローム粒少含
 9 灰黒色土 ローム粒多含



第179図 (19) SI677①

は回転糸切り痕が見られるものもある。胎土は砂粒、白色粒子、赤色スコリアを含むものがほとんどであるが、7、16のみ異なり、細砂粒、雲母、赤色スコリアを含む。

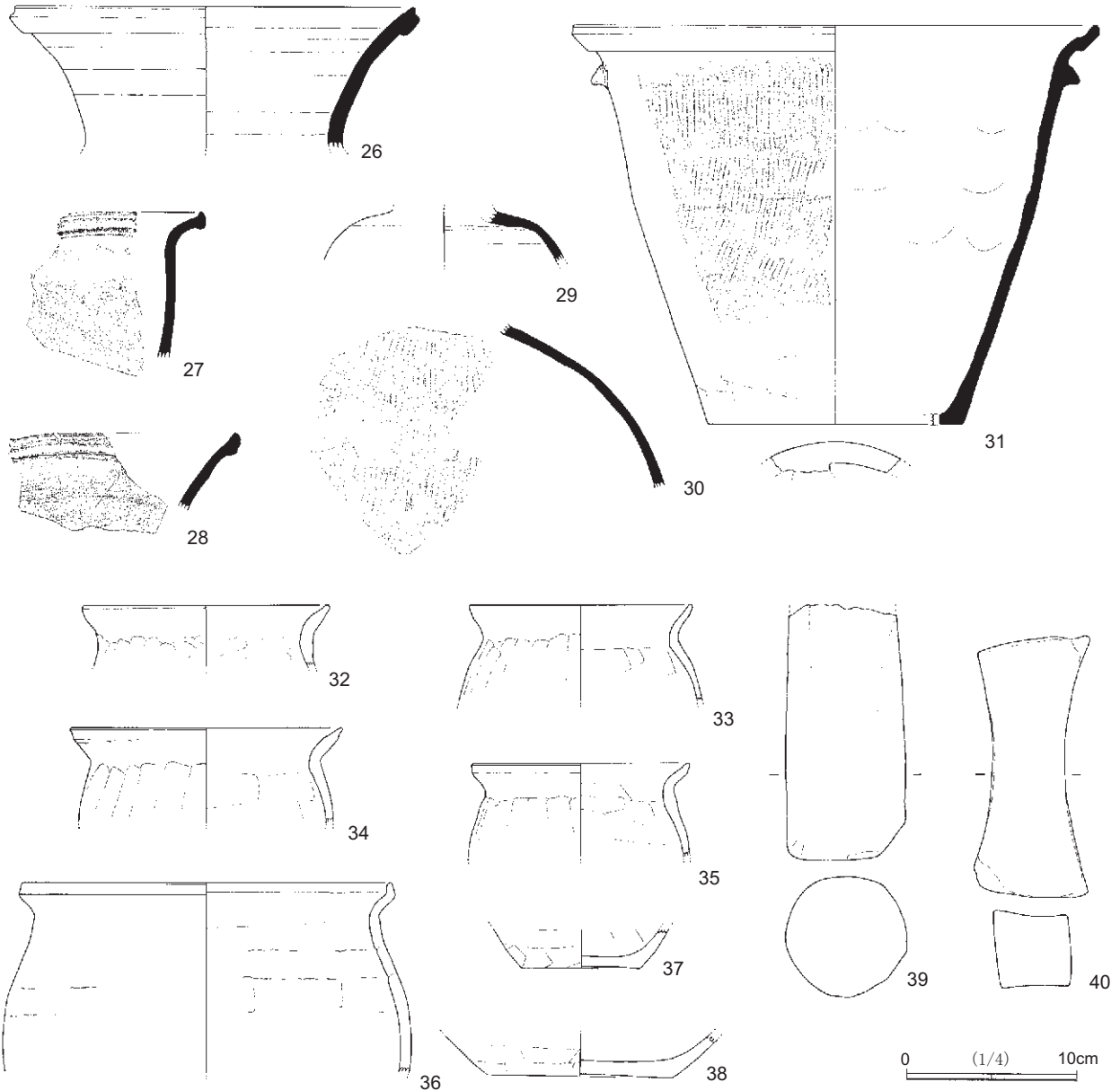
5、11、13は覆土中からの出土で、いずれも被熱している。6は住居の南側の覆土中層から上層にかけて散在していた。7はカマド右袖の覆土下層から出土した。底径が小さく、器形に歪みを生じている。8は南側周溝内の覆土中層から出土した。底部は完存するが、口縁部は1/4周程度の遺存である。9はカマド右袖前の床面から出土した。8と同じく底部は完存し、1/6周程残る口縁部が接合する。口縁部が底部の近くから出土している点、他の割れ口が摩滅している点などから、口縁部の一部を残して意図的に打ち欠いた可能性がある。10は完形の杯でカマド右袖の東際、覆土中層から倒位で出土した。12は覆土からの出土で、口縁部が大きく外反する。14は東壁際の覆土中層から出土した。全体の1/2弱が残存し、残存部に欠損は見られない。

15は体部外面に「十」の墨書が見られる杯である。墨書を正面に見て90°左の口縁部がU字状に欠けている。カマド右袖と燃焼部の境、床面から出土している。出土時の向きは不明である。15、19、25は割れ口が摩滅していることから意図的な打ち欠きの可能性がある。16は外面に墨書が見られる口縁部片である。横位に「三倉」と記され、「倉」の字に掛かるように弧状に割れている。17は体部外面に「倉」の墨書が見られる杯で、墨痕は薄く判読しづらい。19はカマド火床部床面から出土した。底部内面に墨書が見られるが、墨痕はかなり薄い。底部の一部と口縁部から体部のほとんどを欠損する。23は口縁部外面に、24は底部外面に墨痕が見られる。25は内面に墨書が見られる底部片である。底部外面にヘラ書きのようなものが見られるが、遺存部位が少ないため詳細不明である。住居西側、P3（南西の支柱穴）の北側、覆土中層から出土した。底部回転糸切りの後外周部に手持ちヘラケズリを施している。体部下端のヘラケズリはごく一部で、立ち上がりは曖昧である。墨書は「酒」と記されている。図化はしていないが、意図的な打ち欠きと思われる底部片が1点、住居北西の覆土下層から出土している。

18、22は内面に黒色処理が施される。18は南側周溝の覆土上層から出土した。全体の1/2強の遺存で、外面体部下位に正位の墨書が見られる。一見すると「小人」と読めるが、墨書の位置が下過ぎること、墨書の上の器面が荒れていることから文字を削り取った可能性が考えられる。内面の調整は丁寧なミガキ、外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。胎土は白色粒子、砂粒、赤色スコリアの他に少量の白色針状物を含む。22は口縁部片で、体部外面に墨書が見られる。横位に「山」と記されたものか。混入物等は特に見られない。

20、21は土師器高台付皿で内面に黒色処理が施される。2点とも外面に墨書が見られる。20は高台内に「善」、体部外面横位に「福」と記されており、土器をふせて二文字を続けて読むように配置している。「福」の字を含む口縁～体部片は底部を含む大きい破片と接合しているが、割れ口に若干の隙間があることから意図的に打ち欠いているものと思われる。他の欠損部位も意図的に打ち欠いたか。底部を含む大きい破片は住居中央付近の覆土中層から、「福」の字が記された口縁部片は南側周溝の覆土上層から出土した。21は南壁際西寄りの覆土下層からふせた状態で出土した底部片と、覆土から出土した口縁部片2点が接合したものである。高台内面には「山」の文字が見られる。2点の口縁部片にも墨書が見られるが、判読は難しい。口縁部はごく一部を除いて弧状に打ち欠いている。

26～28、30は須恵器甕である。26、28は「ハ」の字状に開く甕の口縁部である。26はカマド右袖の東脇、覆土下層から出土した。色調は明赤褐色で、内外面とも頸部下端は黒褐色を呈する。胎土に白色粒子を多



第180図 (19) SI677②

く含む。28は住居南の覆土上層から出土した。器表面の色調は黒褐色、断面はにぶい褐色を呈する。胎土は多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。27は口縁部に最大径をもつ口縁部で貼り床下から出土した。胴部外面の調整はヘラナデで、叩きは見られない。色調はにぶい黄橙色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。30は胴部片である。梯子ピット付近の覆土中層から出土した。外面に叩き、内面には当て具痕を有する。内面の色調はにぶい黄橙色、外面は明黄褐色を呈し、胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。いずれも下総産である。

29は南側周溝の覆土下層から出土した灰釉陶器壺の胴部片である。色調は灰色で、外面に釉が見られる。

31は須恵器甌である。底部の遺存は少ないが五孔になると思われる。破片は住居東側の覆土下層から上層にかけて点在していた。器表面の色調は黒褐色、断面は赤褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。胴部外面の調整は叩きで、胴部下位にヘラケズリが施される。内面胴部中位は当て具痕

が顕著である。下総産である。

32～38は土師器甕である。32はカマド右袖の覆土下層から出土した。内面の色調は明赤褐色、外面はにぶい赤褐色で、口縁部内面に煤が付着している。微量の白色針状物を含む。33は南側周溝の覆土上層から出土した。外面口唇部は被熱のため赤化している。内面口縁部と胴部上位に炭化物が付着しているが、頸部には付着していない。34は東側周溝の覆土上層から出土した。内面の色調は明赤褐色、外面は暗赤褐色で、口縁内面及び胴部外面は黒変している。胎土に白色粒子、赤色スコリアを含む。35はカマド左袖の覆土下層から出土した。胴部最大径は口縁部と同じか若干大きい程度であると思われる。内面の色調はにぶい赤褐色、外面は黒褐色で、内外面ともに煤が付着している。36はカマド火床部の覆土中層から出土した常陸型甕で、外面胴部上位に山砂が付着している。最大径を胴部上位に有し、24.1cmを測る。胎土に雲母、長石を多く含む。色調は橙色で、内面胴部中位が暗褐色に変色している。37、38は底部である。37は北側周溝西端の覆土下層から出土した。明赤褐色を呈し、白色粒子、赤色スコリアの他に微量の白色針状物を含む。38は住居南側、P2の西の覆土下層から出土した。底径11cmとやや大きく、胴部は粘土の接合面で剥離しているようである。欠損部分は摩滅している。色調は橙色、胎土に白色粒子、砂粒、赤色スコリア、微量の白色針状物を含む。

39は断面円形を呈する支脚である。頭部を欠損し、表面には山砂が付着している。カマド火床部の覆土中層から、基部を東に向けた横位で出土した。西側が5cm程高くなっていた。

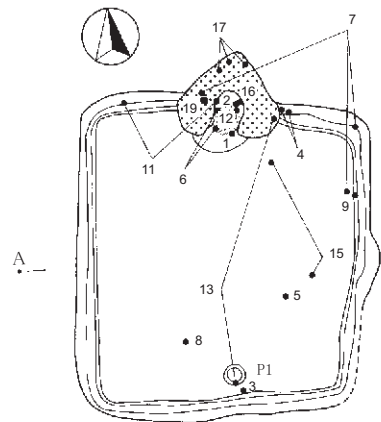
40は凝灰岩製の砥石である。南壁付近の覆土下層から出土した。断面方形を呈する。良く使い込まれ、中央部が磨り減っている。

(19) SI678 (第181図、図版24・25・64・69・70)

19J-19グリッド周辺に位置する。平面形は南北にやや長い方形で、カマドの付け替えが行われている。主軸はN-3°-E、規模は主軸長3.36m、幅3.10mを測る。掘り込みは確認面から35.0cm～44.0cmで、床面は全体に硬化している。カマドは東壁中央と北壁中央に設置される。北カマドの遺存状態が良好であること、及び貼床下から東カマドの火床部と、カマドに対応する西壁側中央から深さ10.0cmのピットが検出されたことから、東カマドを埋め戻し北カマドに付け替えていることが分かる。ピットは南壁側中央の深さ10.0cmの梯子ピット1基のみ確認された。周溝は幅14cm～25cm、深さ5cm～9cmで全周する。

遺物は床面から覆土上層にかけて分布し、北カマド周辺にやや集中する。火床部から土師器杯が数点出土している。1～3は須恵器杯である。1、2は回転ヘラ切りの後体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリを施す。直線的に開く体部にはロクロ目が残る。1はカマド火床部床面付近から出土した。口縁部から体部を1/2周程欠損し、一部カマド覆土中から出土した破片と接合している。内面の色調は黒褐色、外面は暗赤褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。2はカマド火床部覆土中層、12の下から出土した。口縁から体部を1/3周ほど欠損する。表面の色調は黒色、断面は褐色を呈する。白色粒子を多く含む。3は外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される杯で、立ち上がり甘い。南壁中央覆土中層から出土し、外面に煤が付着している。内面の色調はにぶい黄褐色、外面は褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。底部外面にヘラ書きのようなものが見られるが、遺存部位が少ないため詳細は不明である。いずれも下総産である。

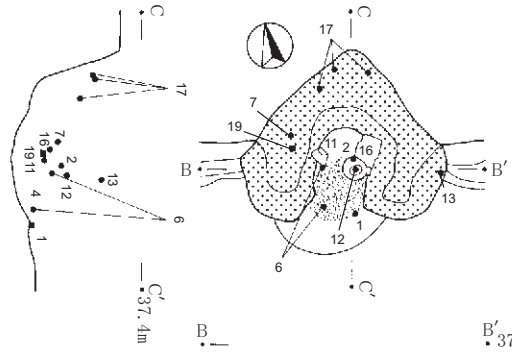
4～12は土師器杯である。4～7は底径が口径の1/2よりやや大きく回転糸切りの後体部下端と底部外周に手持ちヘラケズリが施される。そのうち4、6は体部が内湾気味に開くタイプ、5、7は体部が直線



19K-21

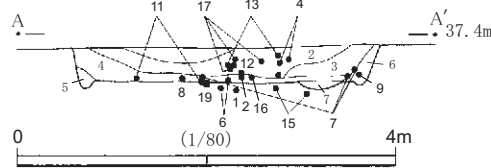
(19) SI678

- 1 暗灰褐色土 ロームブロック少含
- 2 灰褐色土 ロームブロック多含
- 3 黒色土 ロームブロック少含
- 4 暗灰褐色土 ロームブロック含
- 5 暗灰褐色土
- 6 灰色土 焼土 灰含
- 7 暗褐色土 焼土粒多含 旧カマド埋め土



37.4m

37.2m



37.4m

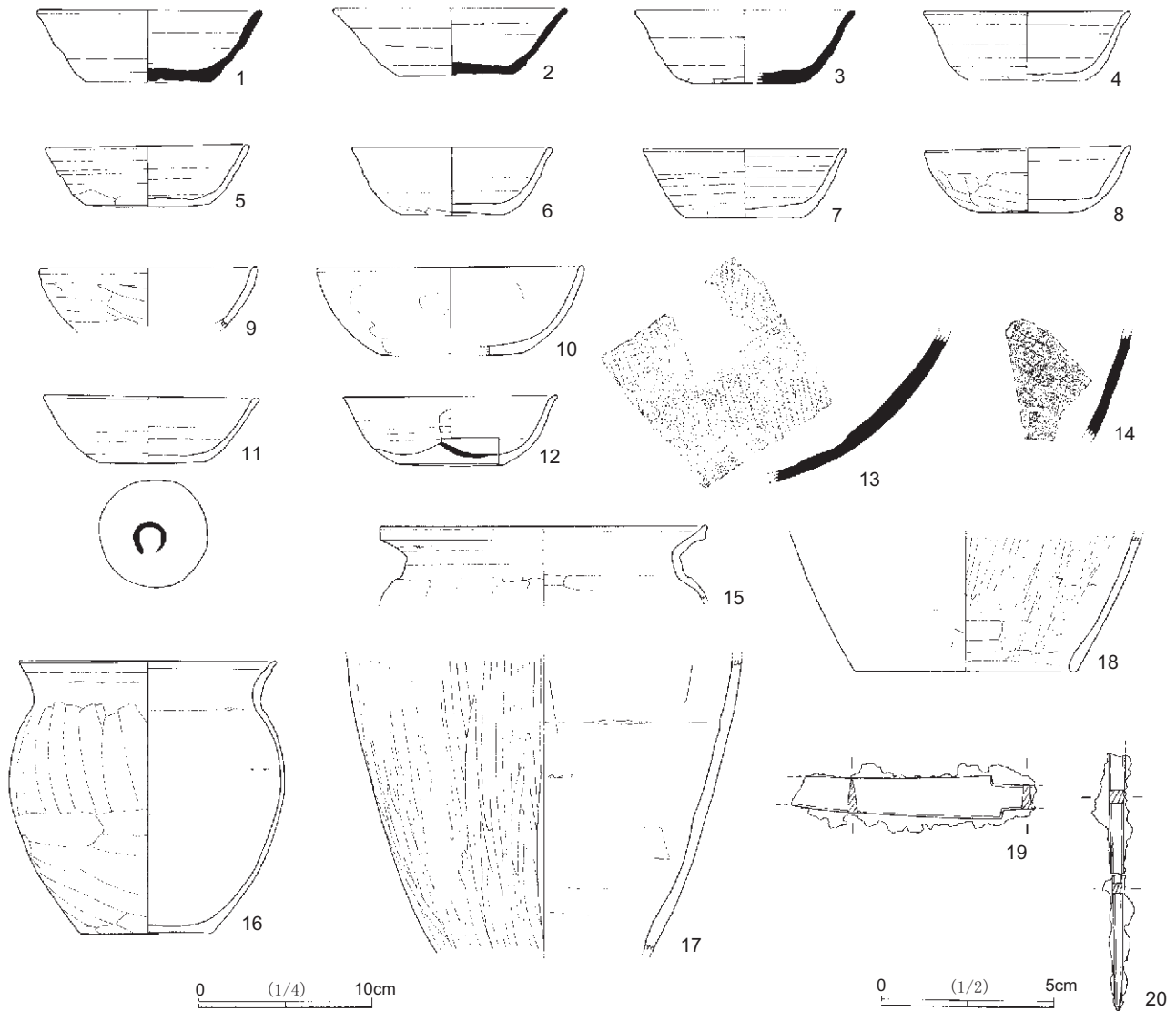
(19) SI678カマド

- 1 黄灰色砂質土 袖部
- 2 赤褐色砂質土 袖部 被火熱部分
- 3 黄灰色砂質土 ロームブロック含 袖部
- 4 黄灰色砂質土 黒色土含 袖部



0 (1/80) 4m

0 (1/40) 1m



第181図 (19) SI678

的に開き強いロクロ目を残すタイプに分けられる。4はカマド右脇の周溝内から出土、6はカマド火床部から出土した。いずれも胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。5は住居南東の覆土下層から出土した。色調は赤褐色である。被熱のためか、底部外面に剥離している箇所がある。7はカマドから出土した破片と東側周溝から出土した破片が接合した。にぶい黄褐色を呈する。

8～10は外面口縁部直下までヘラケズリが施されるタイプである。8は住居南側の床面から出土した。口唇部にわずかな欠けが見られるが完形品である。明赤褐色を呈する。9は口縁部片で東側周溝の覆土下層から出土した。色調は赤褐色である。10は大型品で赤褐色を呈する。胎土は4～7と同様である。

11、12は底径が口径の1/2前後で内湾しながら立ち上がった後口縁部で外反するタイプで、底部にのみ手持ちヘラケズリが施される。11は底部外面に墨書「○」が見られ、墨書を境に大きく2つに割れている。墨書を含む破片は北側周溝西寄りの床面から、墨書を含まない破片はカマド内覆土中層から出土し、底部内外面に煤が付着している。さらに、口縁部の対面する位置が小さく三角形に割れており、1点はカマド内の覆土から出土したが、もう1点は欠けたままである。意図的に破碎した可能性がある。12はカマド火床部の覆土中層から2の須恵器杯に重なった状態で出土した。体部外面に墨書が見られるが、墨書部分を含む口縁部1/5周ほどが欠損している。色調は明赤褐色で、口縁部外面の1/2周程が暗褐色に変色している。胎土に砂粒、白色粒子、赤色スコリアと微量の白色針状物を含む。

13、14は須恵器甕の胴部片である。13は丸底の甕の底部付近と思われ、内面の当て具痕が顕著である。外面は叩きで、一部格子状に重なっている。多量の白色粒子と雲母を含み、内面は黄灰色、外面は灰オリーブ色を呈する。14の外面は格子状叩きが施される。内面は器面に凹凸が見られるものの当て具痕は確認できない。白色粒子を多く含み内面は黒褐色、外面は暗オリーブ褐色、断面は橙褐色を呈する。

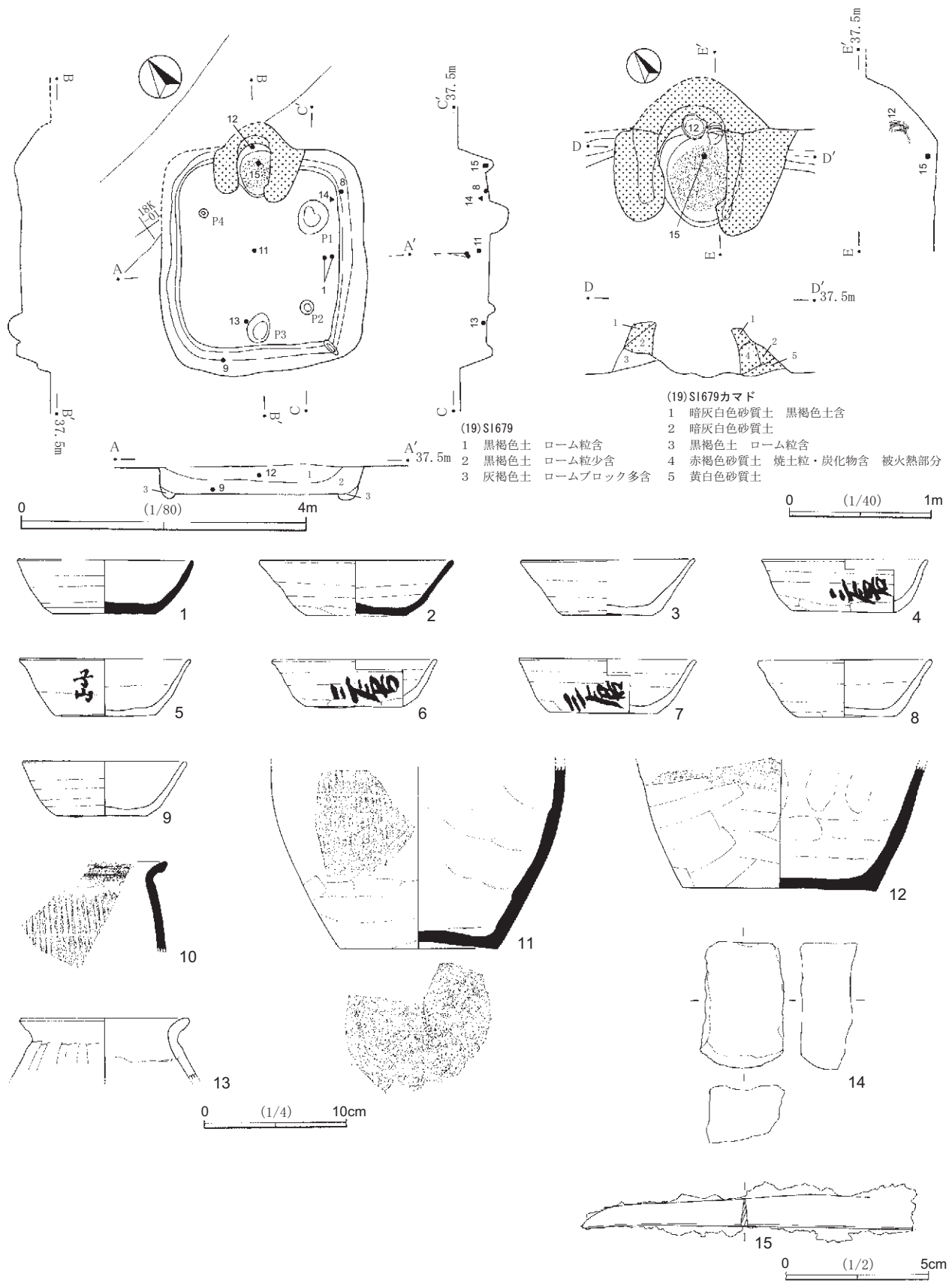
15～17は土師器甕である。15は口縁部片で、肩部が張り「コ」の字に近い形状を呈する。口唇部はわずかにつまみ上げられる。白色粒子を多く含む砂質の胎土で、にぶい赤褐色を呈する。16はカマド煙道部覆土中層、2、12の下から出土した。口縁部から底部まで半分に割ったような状態で、底部を煙道部に、口縁部を焚き口に向けており、焚き口に近い口縁部付近に杯2点が重なっていた。内面の色調は赤褐色、外面は明赤褐色、胎土に白色粒子、砂粒、少量の赤色スコリアを含み、砂質を帯びる。胴部は非常に薄く、胴部最大径16.0cmを測る。外面胴部下半横方向のヘラケズリはヘラナデに近い。17は常陸型甕の胴部で、カマド煙道部覆土中層から出土した。多量の白色粒子と雲母を含み、内面は暗褐色、外面は赤褐色を呈する。外面胴部上位と内面胴部下位に煤が付着している。

18は土師器甕の底部である。白色粒子を多く含み暗褐色を呈する。内面には縦方向のミガキが見られる。

19は鉄製刀子、20は鉄鏝の茎部か。ほかに鉄滓が1点出土している。

(19) SI679 (第182図、図版25・64・66・69)

18K-91グリッド周辺に位置する。平面形は南北に長い方形である。北側に東西方向に走る溝(19)SD682があり、本住居跡のカマドが(19)SD682の覆土を掘り込んで設置されていることから、本住居跡の方が新しいと考えられる。主軸はN-33°-E、規模は主軸長3.17m、幅2.97m、掘り込みは確認面から34.0cm～46.0cmで床面全体がよく踏み固められている。カマドは北壁中央に設置される。遺存状態が良く、煙道部から須恵器甕底部1点、その右側から土師器、須恵器の杯6枚が重なって出土した。杯は底部を奥に向けた横向きの状態で、床面から20cmほど浮いている。ピットは支柱穴と思われるものが3基、梯子ピットが1基検出された。深さはP1が27.0cm、P2が9.0cm、P3が17.0cm、P4が13.0cmである。周溝は幅27cm



第182図 (19) SI679

～42cm、深さ2cm～8cmで全周する。

遺物は床面から覆土上層にかけて散在している。カマド煙道部から出土した杯は、煙道部から焚き口に向かって2、3、4、5、6、7の順で重なっていた。一番上が須恵器杯、下4個は墨書土器である。1、2は須恵器杯である。1は住居南東の覆土上層から出土した。内外面とも煤のようなものが付着している。外面体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施されるが、体部下端は摩滅のため判然としない。色調は灰黄色、胎土に砂粒を含む。2は口縁部から体部を1/3周程欠損する。底部回転ヘラ切り後外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリを施す。色調は灰色で、胎土に細砂粒、赤色スコリアを含む。

3～9は土師器杯である。3は口縁部を1/3周程欠損する。被熱により内面は器面の剥離が著しい。底部は回転糸切り後無調整、外面体部下端に手持ちヘラケズリが施される。色調は橙色を呈し、胎土に白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。4、6、7は器形・胎土ともによく似ており、雲母、砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。底部回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリを施し、体部外面に「三倉」と横書きしている。7のみ完形品で4、6は口縁部を1/3周程欠損している。いずれも被熱による器面の剥離が見られる。色調は明黄褐色から橙色を呈する。5は体部外面に「子山」と正位に記している。口縁部から体部を1/2周以上欠損し、墨書の左側を欠いている。覆土中から出土した口縁部片2点が接合した。内外面とも被熱による器面の剥離が見られる。色調は明赤褐色、胎土に白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。8は東側周溝の床面付近から出土した。完形品であるが、被熱による器面の剥離が著しい。底部は回転糸切り後無調整、外面体部下端に手持ちヘラケズリが施される。内面の色調はにぶい黄褐色、外面は橙色、胎土に白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。9は南側周溝の覆土下層から出土した。内面は被熱による器面の剥離が著しい。底部回転糸切りの後体部下端と底部外周に回転ヘラケズリを施す。内面の色調は明黄褐色、外面は橙色、胎土に砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。

10～12は須恵器甕である。10は胴部外面に叩きの見られる口縁部片である。色調はにぶい黄褐色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。11は同一個体と思われる破片を図上で復元した。胴部片は住居中央の覆土中層から、底部は覆土から出土した。外面は叩きの後胴部下位にヘラケズリを施す。内面に明瞭な当て具痕が見られる。底部外面にはヘラ書き「×」が記されている。色調は赤褐色、胎土に多量の白色粒子、砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。12はカマド煙道部の覆土中層、6枚重なった杯の左側に正位で出土した。胴部は意図的な打ち欠きによるものか。外面は叩きの後胴部下位にヘラケズリを施す。内面には当て具痕が見られる。にぶい黄色を呈し、胎土に大粒で多量の赤色スコリア、白色粒子を含む。

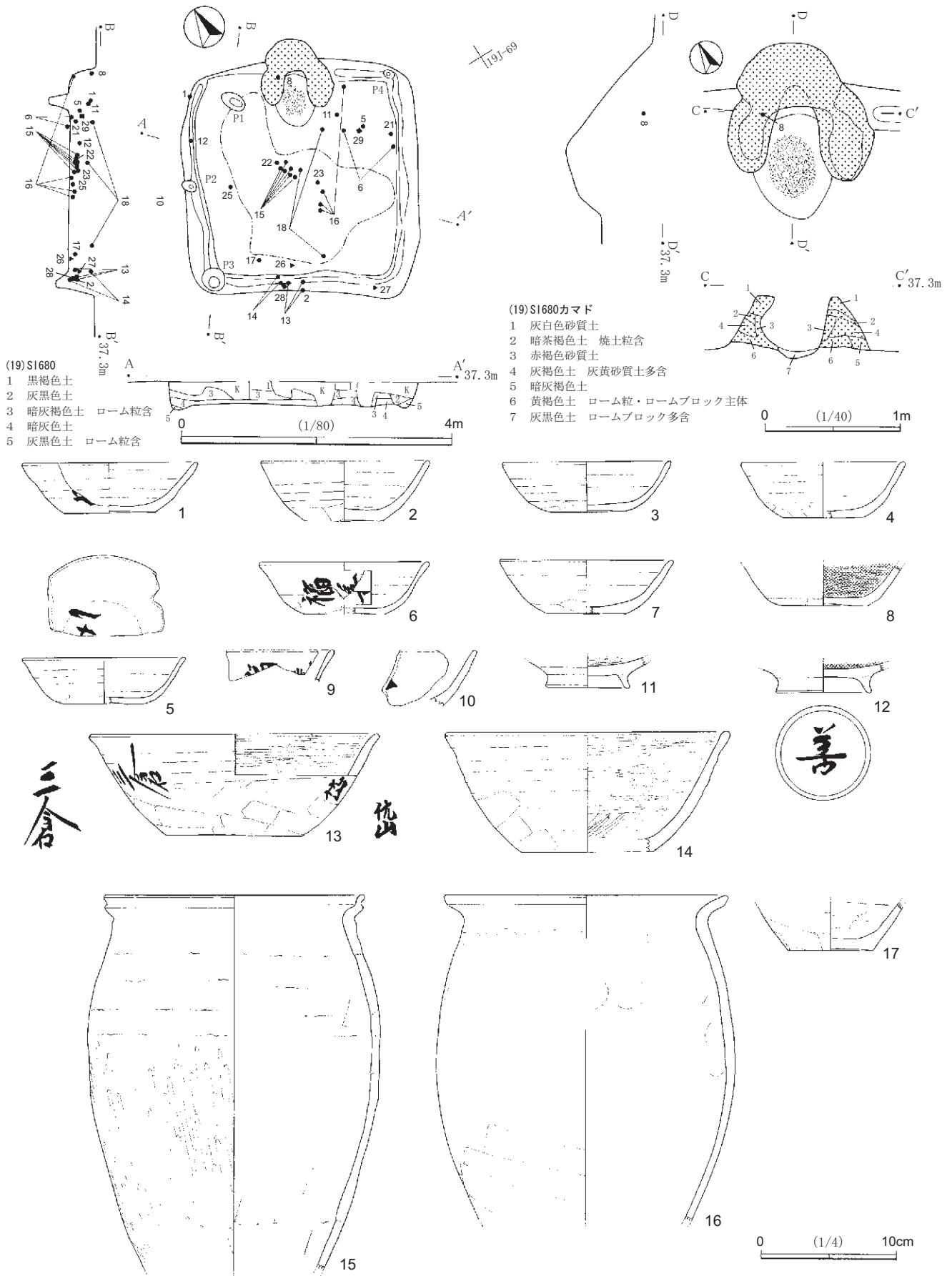
13は土師器甕である。梯子ピットの北西、覆土下層から出土した。厚手で口縁部が短く外反し、端部を丸く収める。色調は赤褐色、胎土に多量の差粒、赤色スコリアを含む。

14は石皿を転用したと思われる石製品であるが、用途は不明である。住居の東隅付近の覆土中層から出土した。上下両端は生きており、上端には暗赤褐色の付着物が見られる。

15は鉄製刀子の刀身部で、カマド火床部の覆土下層から出土した。

(19) SI680 (第183・184図、図版25・64・65・66・69)

19J-57グリッド周辺に位置する。平面形は東西にやや長い方形である。主軸はN-28°-E、規模は主軸長3.39m、幅3.48mを測る。掘り込みは確認面から35.0cm～40.0cmで、カマド左脇から床面中央にかけて硬化面が見られる。カマドは北壁中央に設置される。遺存状態が非常に良好で、天井部が一部確認できた。支柱穴と思われるピットは1基のみで、深さは25.0cmである。壁際から検出されたピットは3



第183図 (19) SI680①

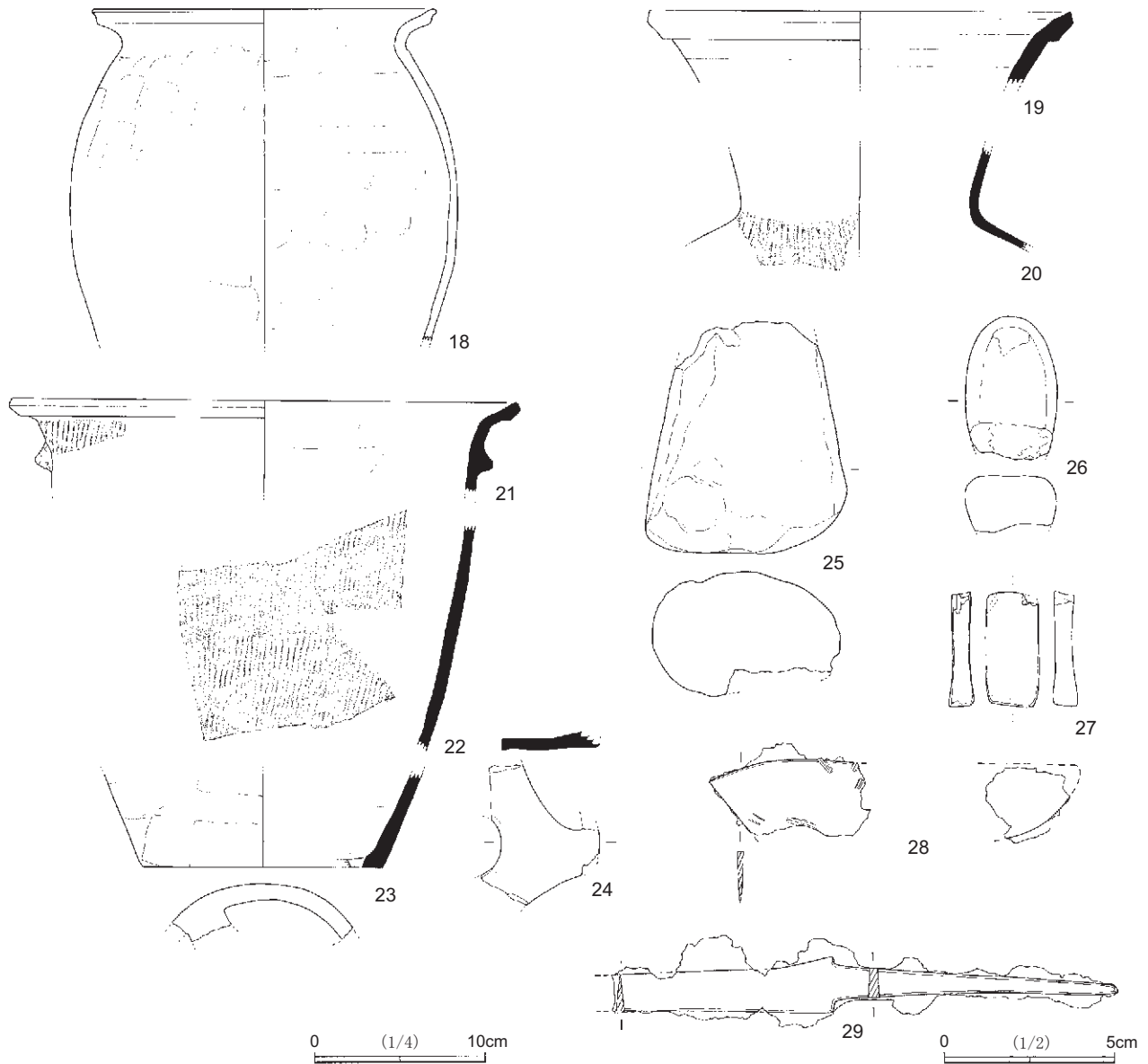
基あり、それぞれの深さは西壁中央のP2が15.0cm、西隅のP3が20.0cm、東隅のP4が16.0cmであった。周溝は幅20cm～33cm、深さ2cm～9cmで、北壁西側で途切れる。

遺物は床面から覆土上層にかけて分布し、床面中央にやや集中する。1～10は土師器杯である。底径が口径の1/2前後のものが殆どで、回転糸切り後の調整は1を除き全て手持ちヘラケズリである。1は北隅付近の覆土上層から出土した。体部外面に墨書が見られるが、墨書を含む口縁部1/3周程が欠損している。回転糸切りの後体部下端と底部外周に回転ヘラケズリを施す。色調はにぶい橙色、胎土に白色粒子、砂粒、赤色スコリア、少量の白色針状物を含み、砂質を帯びる。2は南壁中央の覆土中層から出土した。全体的に厚手で重みがある。内面は灰黄褐色、外面はにぶい黄橙色を呈し、内外面ともに煤が付着している。胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。3、4は覆土中からの出土で、底部からの立ち上がり丸みがあり、1に比べ精緻な胎土である。5は住居の北東、覆土中層から出土した。底部内面に墨書が見られるが、墨痕が薄く一部のみで遺存であるため、判読は難しい。「酒」の異体字か。色調は浅黄色、胎土に細砂粒、赤色スコリアを含む。6は住居東側の床面から出土した。体部外面に横位の墨書が見られる。欠損部分があるが、「福善」と推測される。内面の色調は明黄褐色、外面はにぶい黄橙色で、胎土に白色粒子、赤色スコリアを含む。7は小さめの底部から体部が内湾しながら立ち上がる杯で、やや砂質を帯びる。色調は橙色を呈する。8はカマド左袖の覆土上層から出土した。内面黒色処理された杯で、口縁部を欠損する。内面は被熱により器面が剥離している。砂質を帯び、1に近い胎土である。9は体部外面に墨書が見られる。残画から横位に「福善」と記されたと思われる。胎土、色調とも8に類似する。10も体部外面に墨書が見られるが、遺存部位が少なく判読できない。色調は橙色、胎土は7に類似する。

11は土師器高台付杯の底部である。住居北東の覆土中層から出土した。にぶい橙色を呈し、胎土に多量の砂粒、雲母、少量の白色針状物を含む。図化はしていないが、土師器高台付杯で体部、高台裾部を欠いて円盤状になった底部片が1点覆土中から出土している。12は内面黒色処理される土師器高台付碗の底部である。西側周溝の覆土中層から出土した。底部外面に墨書「善」が記されるが墨痕はかなり薄い。色調は浅黄褐色、胎土に細砂粒、白色針状物、赤色スコリアを含む。ほぼ底部のみの遺存で、意図的に打ち欠いた可能性がある。

13、14は土師器碗である。13は口径21.5cm、底径10.0cm、器高7.6cm、14は口径21.0cm、底径9.8cm、器高9.8cmと近似している。外面体部下半から底部にかけての調整は手持ちヘラケズリ、内面はミガキで、黒色処理は施されていない。2点の出土地点は近く、南側周溝の覆土下層から出土した。13は体部外面に横位の墨書が見られる。「三倉」と「佐山」の文字が離れた位置に記されている。色調は橙色で、一部口縁部内面に煤が付着している。14は被熱により外面に煤が付着している。色調は黄褐色である。

15～18は土師器甕である。15は常陸型甕で、住居中央の覆土中層から出土した。最大径を胴部上位にもち、21.7cmを測る。胴部はあまり張らず、口唇部のつまみ上げが強い。外面には山砂が付着している。内面の色調は灰黄褐色、外面はにぶい黄褐色、胎土に多量の白色粒子と雲母、赤色スコリアを含む。16は最大径を胴部中位よりやや上に有し、22.2cmを測る。外面胴部下半に煤が付着している。橙色を呈し、胎土に砂粒、白色粒子、赤色スコリアを含む。17は底部で、住居南端の覆土下層から出土した。内面は被熱により所々剥離している。色調は黒褐色、胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。18は最大径を胴部上位に有し、22.9cmを測る。外面胴部中位には山砂が多く付着している。内面胴部上位から中位にかけて指頭痕が見られる。色調は黒褐色、胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。



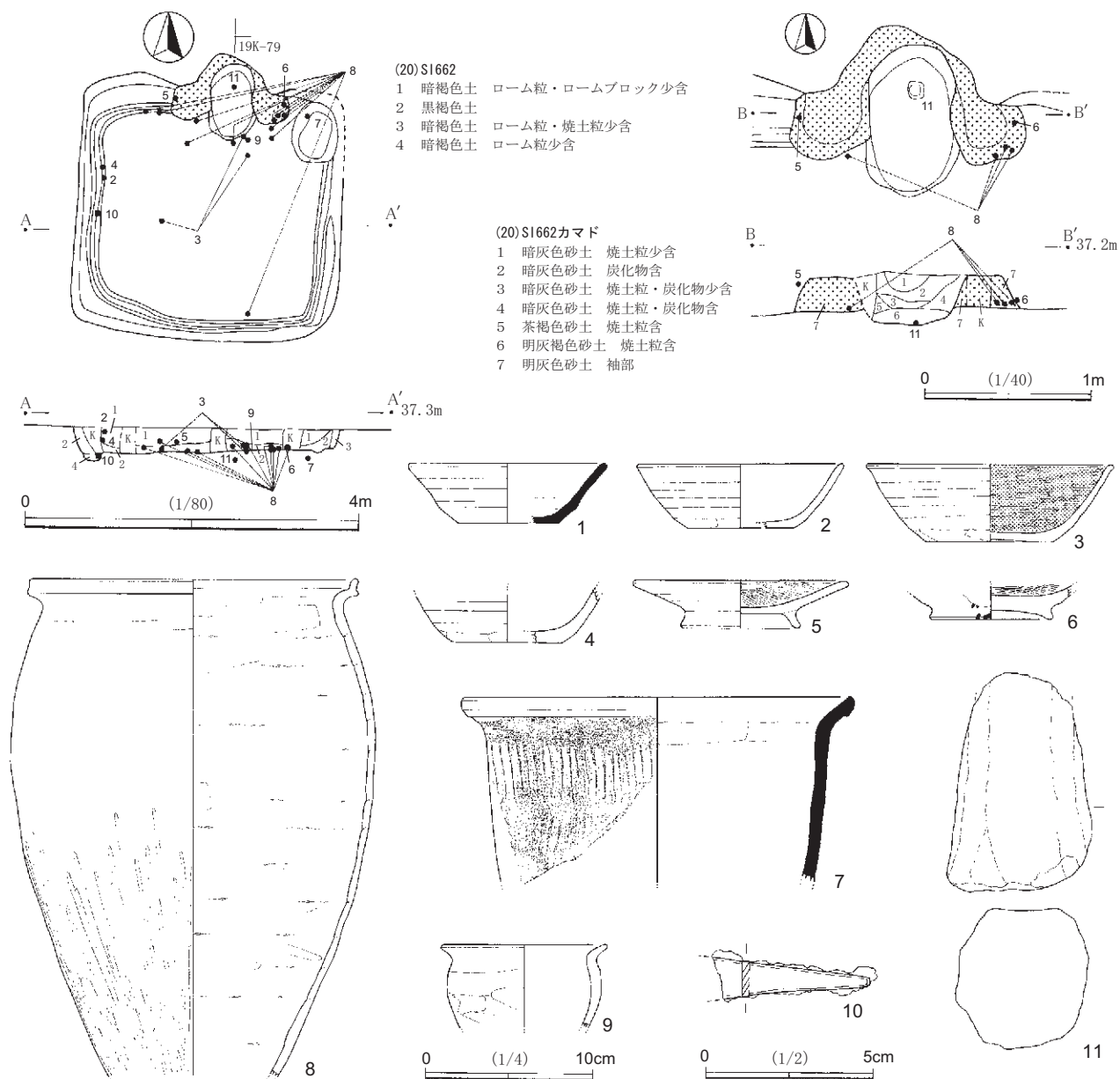
第184図 (19) SI680②

19、20は下総産の須恵器甕である。19は「ハ」の字状に開く甕の口縁部である。内面の色調は黄灰色、外面は黒褐色で胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。20は頸部から胴部上位にかけての破片である。表面の色調は灰オリーブ色、断面は橙色で芯の部分が表面と同じ灰オリーブ色を呈する。胎土に白色粒子、赤色スコリアを含む。

21～23は接合しないものの同一個体と思われる須恵器五孔の甕である。黒褐色を呈し、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。外面口縁部直下に2個一対になるとと思われる把手が付く。内面に当て具痕は見られない。24は須恵器五孔の甕の底部片である。色調は明褐色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。いずれも下総産である。

25は住居中央西端の覆土下層から出土した支脚で、先端部を欠損する。断面形は扁平な楕円形である。

26は住居南端の床面付近から出土した石製品である。平面形は楕円形で、表面に自然面を残し、下端と裏面が欠損している。欠損部には鉄錆が見られる。27は周溝南東隅の覆土中層から出土した砥石である。



第185図 (20) SI662

上端に孔が2個開けられているが、2か所とも欠けているため、詳細な形状は不明である。

28は鉄製の穂摘み具と思われる。周溝南側中央の覆土下層から出土した。29は鉄製の刀子で、住居北東の覆土中層から出土した。

(20) SI662 (第185図、図版25・65・69)

19K-78グリッド周辺に位置する。平面形はわずかに東西に長い方形である。主軸はN-3°-E、規模は主軸長3.10m、幅3.20m、掘り込みは確認面から23.7cm~40.4cmを測る。カマドは北壁中央に設置され、遺存状態は良好であった。燃焼部から支脚が、右袖内から土師器甕が出土している。ピットは検出されなかった。周溝は幅1cm~3cm、深さ2cm~7cmでカマド右脇を除き全周する。南壁中央から南東隅付近にかけて壁に近接するが、他は壁から離れて巡っている。耕作による攪乱を受けているものの床面は平坦で、カマド右脇・北東隅に南北72cm、東西56cm、深さ15cmの掘り込みが見られる。

遺物はカマド周辺から集中して出土している。1は下総産の須恵器杯で、胎土に多量の白色粒子と赤色スコリアを含む。内面の色調は黒褐色、外面は褐灰色を呈する。外面体部下端から底部にかけての調整は回転ヘラケズリである。

2、4は土師器杯である。2点とも西側周溝の覆土内から出土している。胎土は共通しており、多量の砂粒と大粒の赤色スコリアを含む。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。3は内面黒色処理された土師器杯である。にぶい黄橙色を呈し、砂粒と大粒の赤色スコリアをやや多く含む。底部回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリが施される。

5、6は土師器高台付皿である。内面は丁寧に磨かれるが、黒色処理は施されていない。5は底部回転ヘラケズリ、6は回転糸切りの後高台を貼り付けている。5は6に比べて高台が高い。また全体的に器厚も薄い。胎土も若干異なり、6は白色粒子、赤色スコリアに加えて雲母と微量の白色針状物を含む。5は口縁部から体部まで3/4ほど欠いており、6は底部のみの遺存である。ともに割れ口が摩滅しているため、意図的に打ち欠いた可能性が考えられる。5はカマドの左袖から、6は右袖からの出土である。

7は須恵器甗である。灰白色を呈し、胎土に白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。胴部外面は叩き、内面はナデで当て具痕は見られない。住居北東隅のピット内からの出土である。下総産か。

8は常陸型の土師器甗である。カマド周辺の床面付近に破片が点在していた。最大径を胴部上位に有し、21.9cmを測る。にぶい黄橙色を呈し、胎土に多量の白色粒子、雲母、大粒の赤色スコリアを含む。胴部内面の調整は粗いヘラナデで、輪積み痕が多数残っている。外面胴部上半は木口の荒れた工具でなでたものか、横方向に平行するハケ状の痕跡が見られる。胴部下半は横方向のヘラケズリ後縦方向のミガキを施す。全体的に調整が粗く、器面に凹凸が残る。胴部外面には山砂が付着している。9は口縁部に最大径をもつ土師器小型甗である。カマド前床面付近からの出土であり、内外面に煤が付着している。

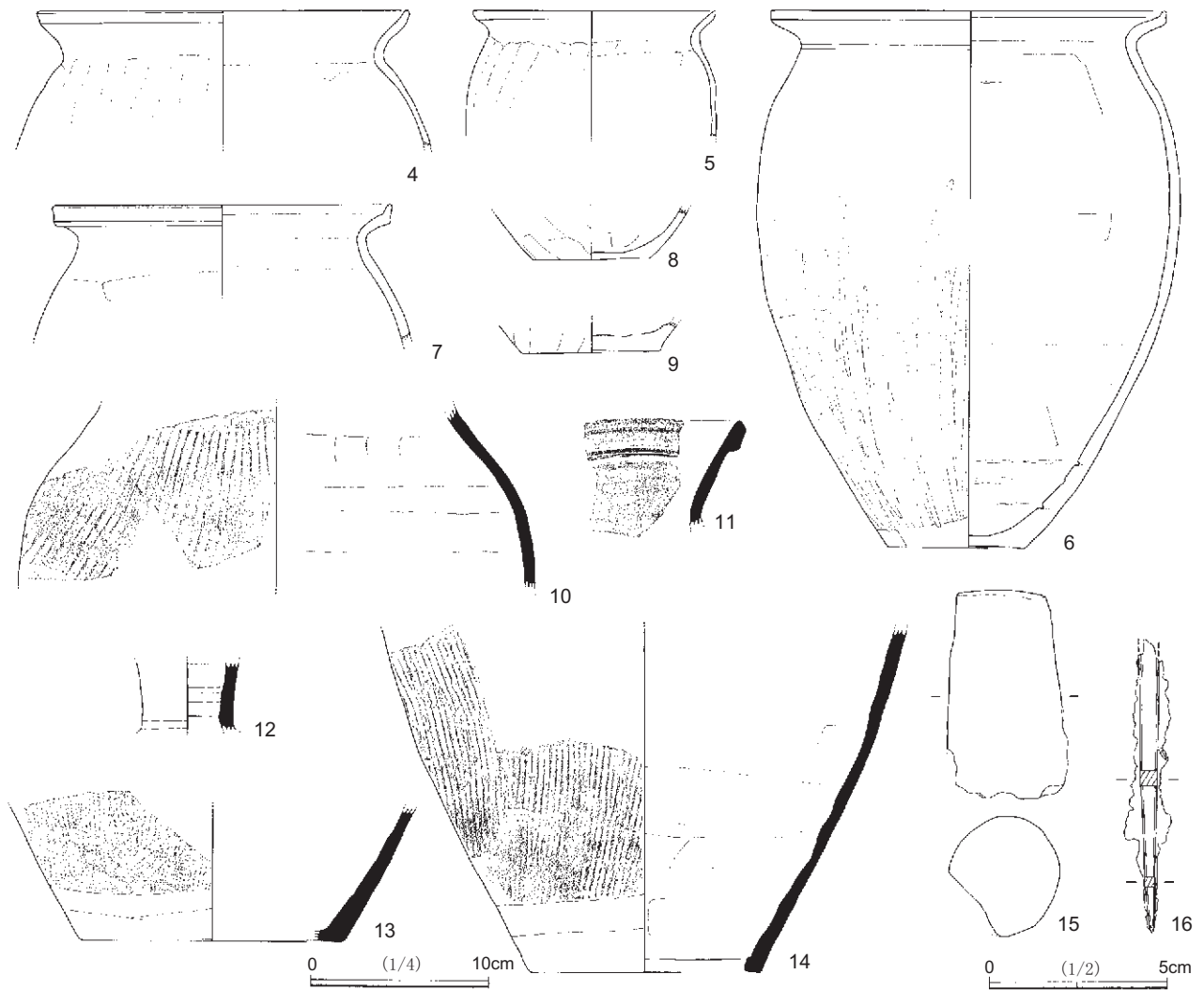
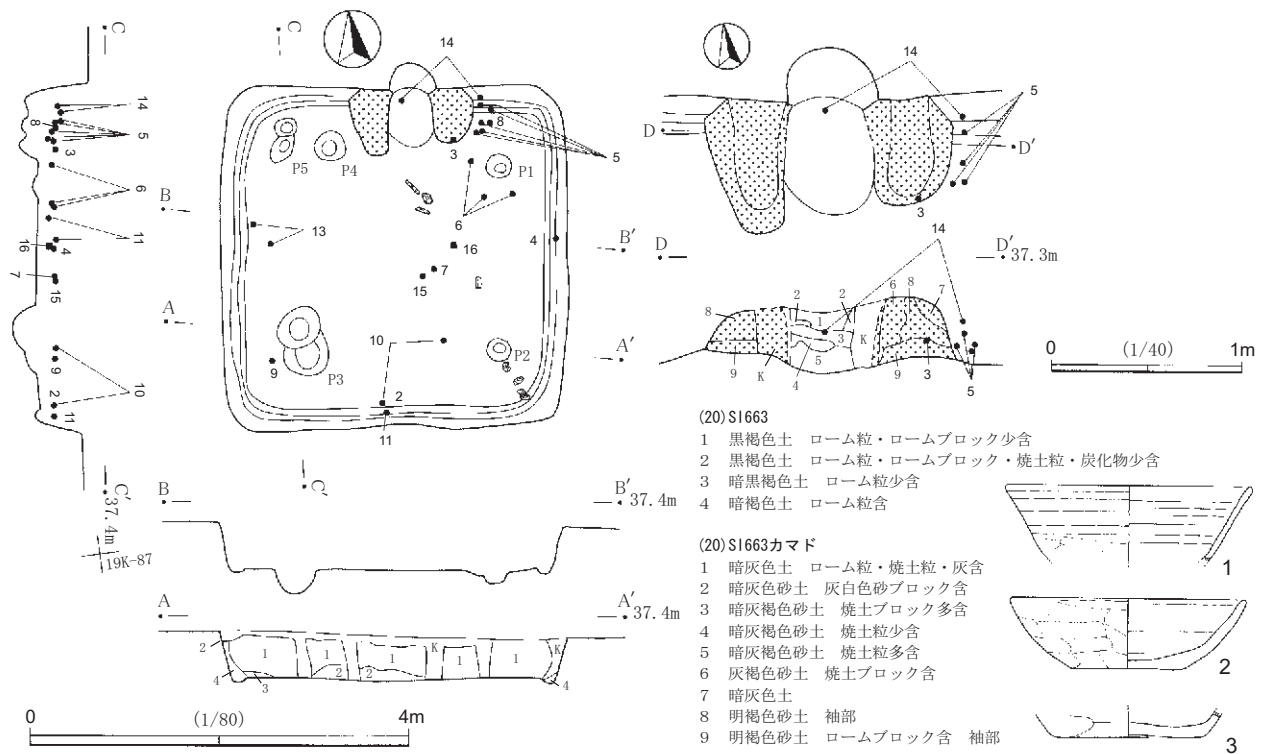
10は鉄製品である。平面形は現存長47.5mm、最大幅10.5mmの三角形で、断面は厚さ2.0mmの長方形である。刀子の茎部か。西側周溝の床面付近から出土した。

11は支脚で、カマド燃焼部の床面から出土した。先端部を欠損するが基部は残っており、断面多角形を呈する。

(20) SI663 (第186図、図版26・65・70)

19K-67グリッド周辺に位置する。平面形は東西にやや長い方形である。主軸はN-8°-E、規模は主軸長3.58m、幅3.68mを測る。掘り込みは確認面から37.5cm～51.5cmで、北西隅で深くなる。カマドは北壁中央に設置され、遺存状態は良好である。ピットは支柱穴4基と北西隅から小ピットが検出された。いずれも貼床下からの検出で、深さはP1が10.3cm、P2が10.6cm、P3が12.3cm、P4が11.9cm、P5が13.4cmと浅い。周溝は幅18cm～30cm、深さ1cm～8cmで、カマドを除いて全周する。覆土は黒褐色土主体で、床面中央に焼土粒・炭化物を少量含んだ黒褐色土が見られる。調査所見によると、覆土中に炭化材小片が含まれるが、焼失住居ではない、と報告されている。

遺物は床面から覆土中層にかけて分布し、特にカマド右袖外側に集中する。1～3は土師器杯である。1は底部を欠損するが、口径に比して底径がやや大きくなるものと思われる。橙色を呈し、砂粒、大粒の赤色スコリア、少量の雲母を含む。2は外面口唇部直下までヘラケズリが施される杯である。内面底部からの立ち上がりは厚みがあり、曖昧である。色調は暗赤褐色、胎土に砂粒を含む。図化はしていないが、口唇部直下までヘラケズリが施される杯はもう1点出土している。3は糸切り痕を有する底部片である。



第186図 (20) SI663

外面体部下端から底部周縁部にかけて手持ちヘラケズリが施される。色調は明赤褐色で、胎土に砂粒、赤色スコリア、雲母を含む。

4～9は土師器甕である。4は口縁部から胴部上位にかけての破片である。全体的に薄手で、頸部から口縁部に向かってやや肥厚し、緩やかなカーブを描く。色調は赤褐色、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。5はカマド右袖脇の覆土中層から出土した。最大径は胴部上位にあると思われ、14.5cmを測る。内面の色調は赤褐色、外面はにぶい褐色で、胎土に白色粒子を多く含む。6、7は常陸型甕である。6は最大径を胴部中位よりやや上に有し、24.0cmを測る。外面胴部上端、頸部との境に沈線状のナデの痕が見られる。底部には木葉痕が残る。色調は褐色ないし黒褐色、胎土に多量の雲母と白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。内面の所々に煤が付着している。7は6に比べて口唇部のつまみ上げが強い。内面の色調は褐色、外面は明褐色で胎土に多量の雲母と白色粒子を含む。8、9は底部である。8はカマド右袖脇の覆土中層から出土した。外面赤褐色を呈し、白色粒子を多く含む。9は住居西隅の覆土中層から出土した。胴部外面にミガキは見られないが、底部外面に木葉痕を有し、胎土に多量の白色粒子と雲母を含むことから常陸型甕であると思われる。外面には煤及び山砂が付着しており、内面は器面の剥離が目立つ。内面の色調は灰黄褐色、外面はにぶい黄橙色を呈する。

10、11、13は須恵器甕である。10は丸く張った胴部に大きく外反する口縁部が付くタイプの肩部である。現存の胴部最大径は29.0cm、頸部径は20.0cmを測る。胴部外面の調整は叩き、内面はナデである。色調は褐色、胎土に多量の白色粒子、微量の白色針状物を含む。下総産である。11は端部が折り返し状になる口縁部片である。色調はにぶい褐色ないしにぶい黄橙色で、断面の芯の部分は灰褐色を呈する。胎土に白色粒子、細砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。新治産か。13は外面に叩きを有する胴部片で、わずかに残る底部は無調整と思われるが、器面が荒れているため判然としない。内面の色調は灰色、外面はオリーブ黒色を呈し、胎土に多量の白色粒子と雲母を含む。新治産である。

12は灰釉陶器壺の頸部である。灰白色を呈し、目立った混入物のない精緻な胎土である。外面のほぼ全面に釉が見られるが、内面は所々に痕跡をとどめる程度である。

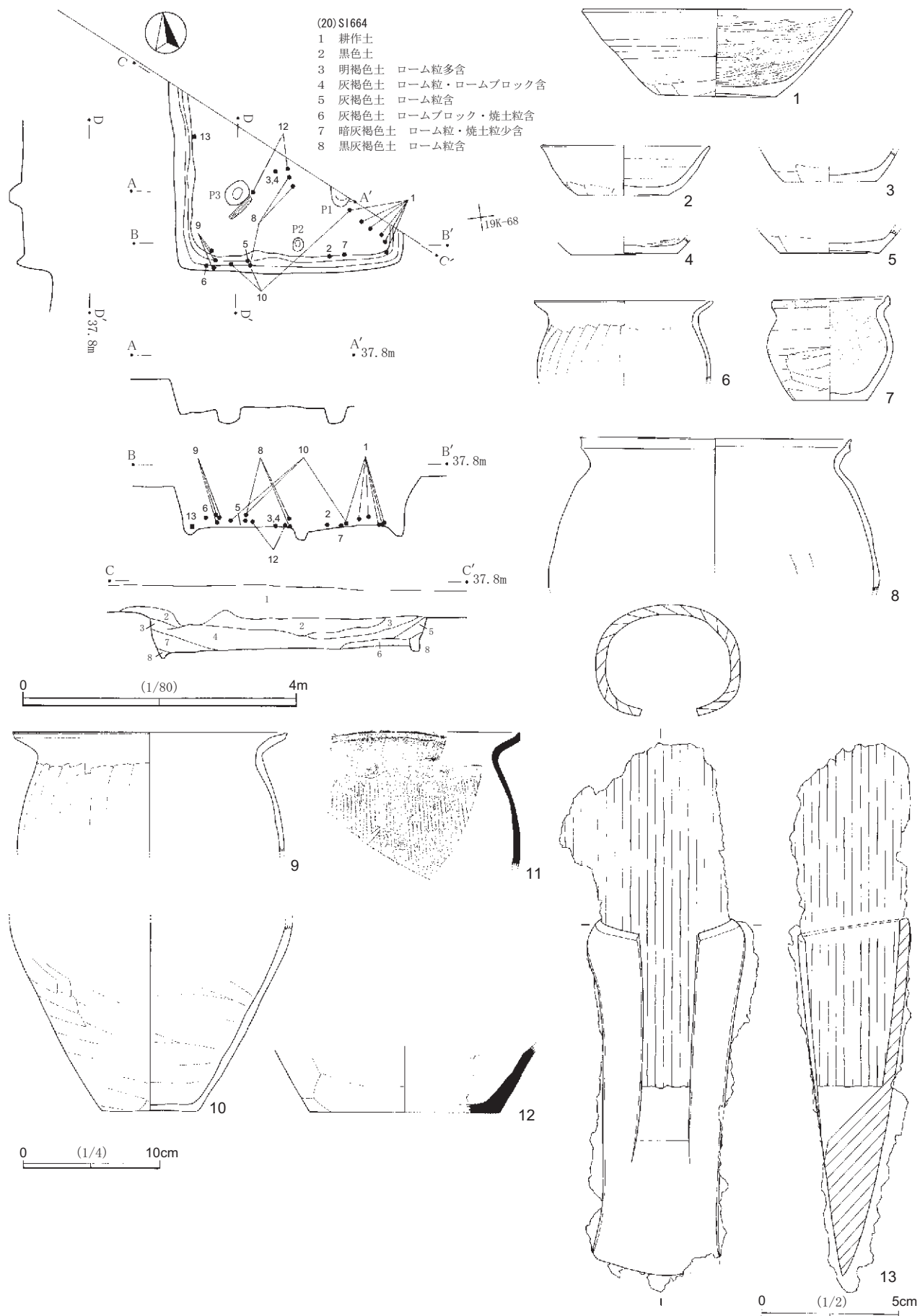
14は須恵器甕である。底部の遺存が少なく、単孔か五孔かは不明である。調整は胴部外面叩きの後胴部下位にヘラケズリ、内面はヘラナデで当て具痕が散見する。内面の色調は褐色、外面はにぶい橙色で、胎土に多量の雲母と白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。新治産である。

15は断面円形を呈する支脚である。床面中央付近の覆土中層から出土した。先端部の2/3周程が遺存している。砂質でスサの混入はなく、表面は平滑に仕上げられる。先端部の表面は良く焼けている。

16は鉄鏝の棒状部～茎部と思われる。現存長83.0mm、断面は幅5.0mm、厚さ4.5mmの方形を呈する。

(20) SI664 (第187図、図版26・65・69)

19K-56グリッド周辺に位置する。南西側のみを検出で、北半は調査区外のため確認できなかった。平面形は方形と思われる。主軸はN-8°-E、規模は現存する東西長で3.34mを測る。掘り込みは確認面から36.5～48.0cmで、床面は全体に硬化している。カマドは調査区外のため不明であるが、南壁側中央から検出された小ピットが梯子ピットと考えられる点と、他の住居跡の検出状況から北壁に設置されていたものと想定される。ピットは支柱穴2基と梯子ピットが検出された。深さは東側の支柱穴P1は一部のみの検出であるが25.5cm、P2(出入口)は13.9cm、P3は20.3cmである。周溝は現存部では全周し、幅22cm～32cm、深さ5cm～10cmである。P3の南東脇で炭化材が出土している。



第187図 (20) SI664

遺物は床面から覆土中層にかけて分布している。1～5は土師器杯である。1は大型の杯で、口縁部から体部を1/2周程欠損する。色調は橙色、胎土に多量の白色粒子と砂粒、赤色スコリアを含む。内面の調整はミガキ、外面体部下端から底部にかけては手持ちヘラケズリである。黒色処理は施されていない。2は口縁部から底部にかけて内外面に特徴的な黒斑が見られる。口縁部は器厚を減じながら外反する。回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリが施されるが、体部下端はヘラケズリによって面取りされたようになっている。内面の色調はにぶい黄褐色、外面は明黄褐色で、胎土に多量の砂粒と大粒の赤色スコリアを含む。3は底部片で外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。表面の色調はにぶい橙色であるが、断面は黒色を呈する。4、5は内面にミガキの施された底部片である。ともに黒色処理は見られず、外面の調整は手持ちヘラケズリである。4にはわずかに回転糸切りの痕が観察される。4は赤褐色、5はにぶい黄褐色を呈する。3～5の胎土は共通しており、多量の砂粒と大粒の赤色スコリアを含む。4にのみ微量の白色針状物が混入している。3、4は住居中央の床面から出土している。

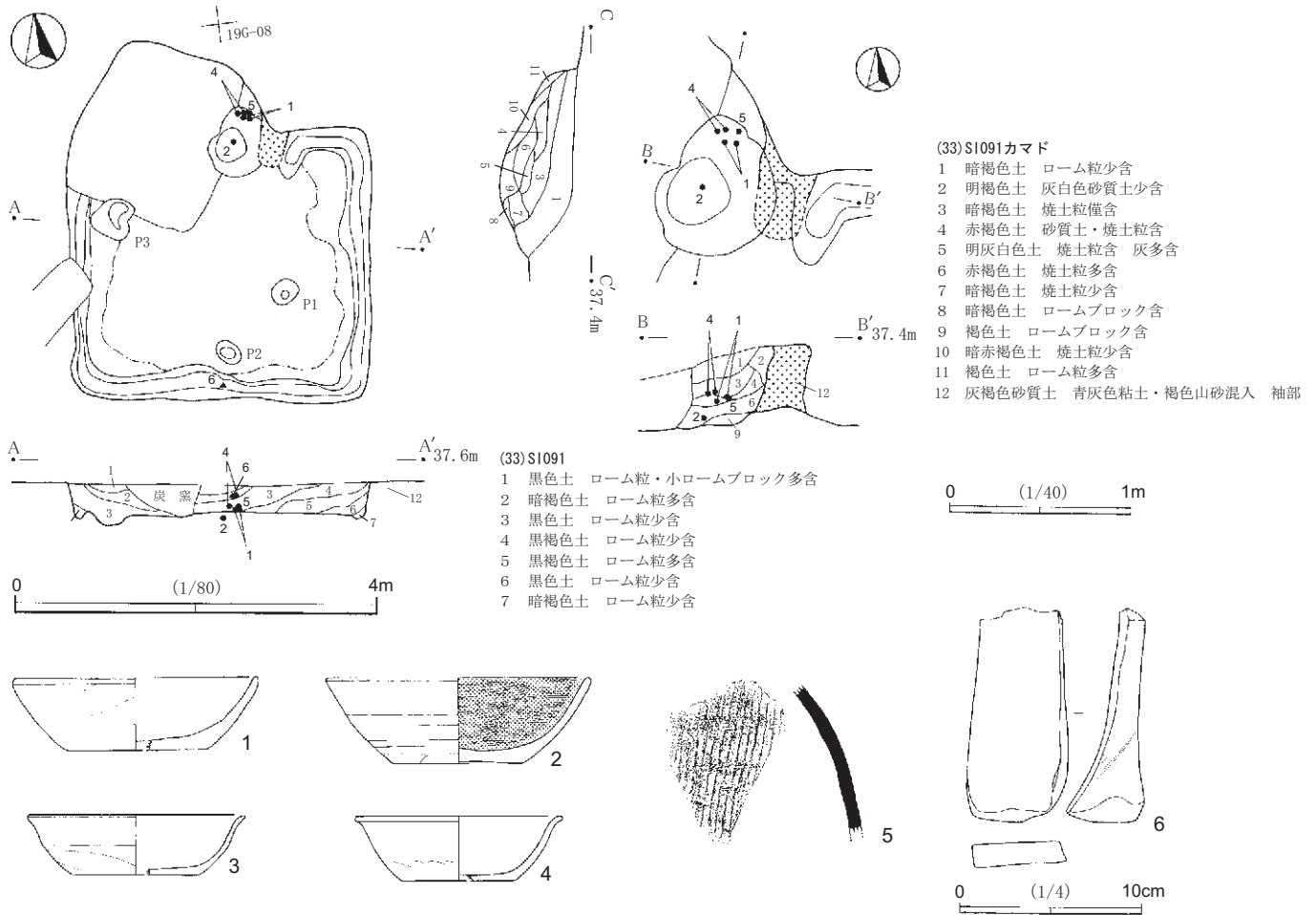
6、8～10は土師器甕、7は土師器小型甕である。6は口縁部に最大径をもつ甕で、頸部が直立しゆるい「コ」の字を描く。胴部外面に煤が付着している。また、内面は全体にアメーバ状の付着物が見られ、頸部が黒変している。砂粒を多く含み、にぶい黄褐色を呈する。7は南壁際の床面から出土した。灯明器として使用されたようで、内面口縁部から体部中位にかけて1/3周程の範囲にタール状の煤が付着している。その一部は口縁部外面にまで及ぶ。ロクロによって成形されたと考えられ、外面胴部下半に横方向の手持ちヘラケズリを施す。底部は一定方向の手持ちヘラケズリが施されているため判然としないが、回転ヘラ切りの可能性がある。内面の色調は灰褐色、外面はにぶい褐色、胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。8は胴部に最大径をもつ甕で24.3cmを測る。胎土に多量の白色粒子、雲母、赤色スコリアを含む。常陸型甕と思われる。内外面に煤、外面に山砂が付着している。9は口径が胴部最大径よりわずかに大きく、口唇部のつまみ上げが弱い。10は甕の胴部下半で、外面に山砂が付着している。胎土に多量の白色粒子、赤色スコリア、微量の白色針状物を含み、堅緻である。外面胴部上半の調整は縦方向のヘラケズリが施されるようである。

11、12は下総産の須恵器甕である。11は胴部に丸みを有し、口唇部をつまみ上げている。胴部外面は叩き、内面はヘラナデで当て具痕は見られない。色調はにぶい黄褐色、細砂粒を含み堅緻である。12はにぶい黄褐色を呈する底部片である。多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。外面胴部は横方向のヘラケズリ、底部は無調整である。内面は横方向に撫でた痕が顕著である。

13は柄の装着部分を袋状に作り出した鉄斧である。袋部には木片が残っており、柄を装着したままの状態であったと思われる。西壁際の床面から出土した。木片を含めた全長は194.5mm、鉄斧のみの全長は130.5mmである。袋部の長さは51.5mm、幅52.8×40.5mm、厚さ3.0mm、刃部の幅は一部を欠損するが推定で46.3mmである。木片の長さは126.0mmあり、袋部に62.0mm入り込んでいる。

(33) SI091 (第188図、図版26・65・66)

台地中央より西側、19G-08グリッド周辺に位置する。平面形は東西にやや長い方形で、北西隅およびカマド左側は近世の炭窯によって切られている。主軸はN-6°-E、規模は主軸長3.06m、幅3.37mである。掘り込みは確認面から36.7cmで床面はよく踏み固められている。カマドは北壁中央に設置される。左袖は炭窯によって破壊されているが、右袖の遺存状況は良好である。ピットは3基検出され、最も南側のP2は梯子ピットと思われる。深さはP1が6.8cm、P2が22.0cm、P3が15.3cmである。周溝は幅12cm～



第188図 (33) SI091

40cm、深さ5cm～10cmで全周すると思われる。

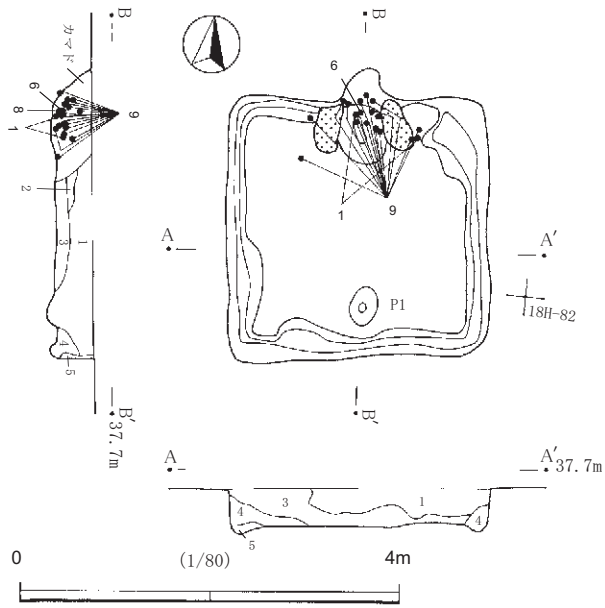
遺物はカマドから出土しているほか、南壁溝から砥石が出土している。1～4は土師器の杯である。1は外面口唇部直下まで手持ちヘラケズリが施されている。内面はミガキの可能性もあるが、遺存部が少なく、また被熱により器面が荒れているため不明瞭である。2の底部と外面体部下端は手持ちヘラケズリ、内面はミガキ調整で黒色処理される。色調はにぶい黄橙色を呈し、砂粒を多く含むものの精緻な胎土である。3、4も底部と外面体部下端に手持ちヘラケズリが施されるが、4の底部中心付近には糸切り痕が残っている。3はにぶい黄橙色を呈し、細砂粒と大粒の赤色スコリアを含む。4の色調は明褐色、胎土に砂粒を多く含む。被熱により器面が所々はじけている。

5は明赤褐色を呈する須恵器の甕片で、外面には叩きが見られる。下総産である。

6は凝灰岩製の砥石で上端が欠けている。良く使い込まれ、中央がすり減っている。

(33) SI092 (第189図、図版26・27・65)

台地中央より西側、18H-71グリッド周辺に位置する。平面形は正方形で、主軸はN-6°-E、規模は主軸長2.83m、幅2.80mである。掘り込みは確認面から40.0cmである。カマドは北壁中央に設置され、袖内側面上部は被熱により硬化していた。煙道の遺存状態も良好で、検出時に円筒状に確認された。ピットはカマドと向かい合う南壁中央から梯子ピット1基のみの検出で、深さは14.9cmである。周溝は深さ2cm～14cmでカマド右脇を除き全周する。床面が軟弱なため幅17cm～70cmと一定ではない。

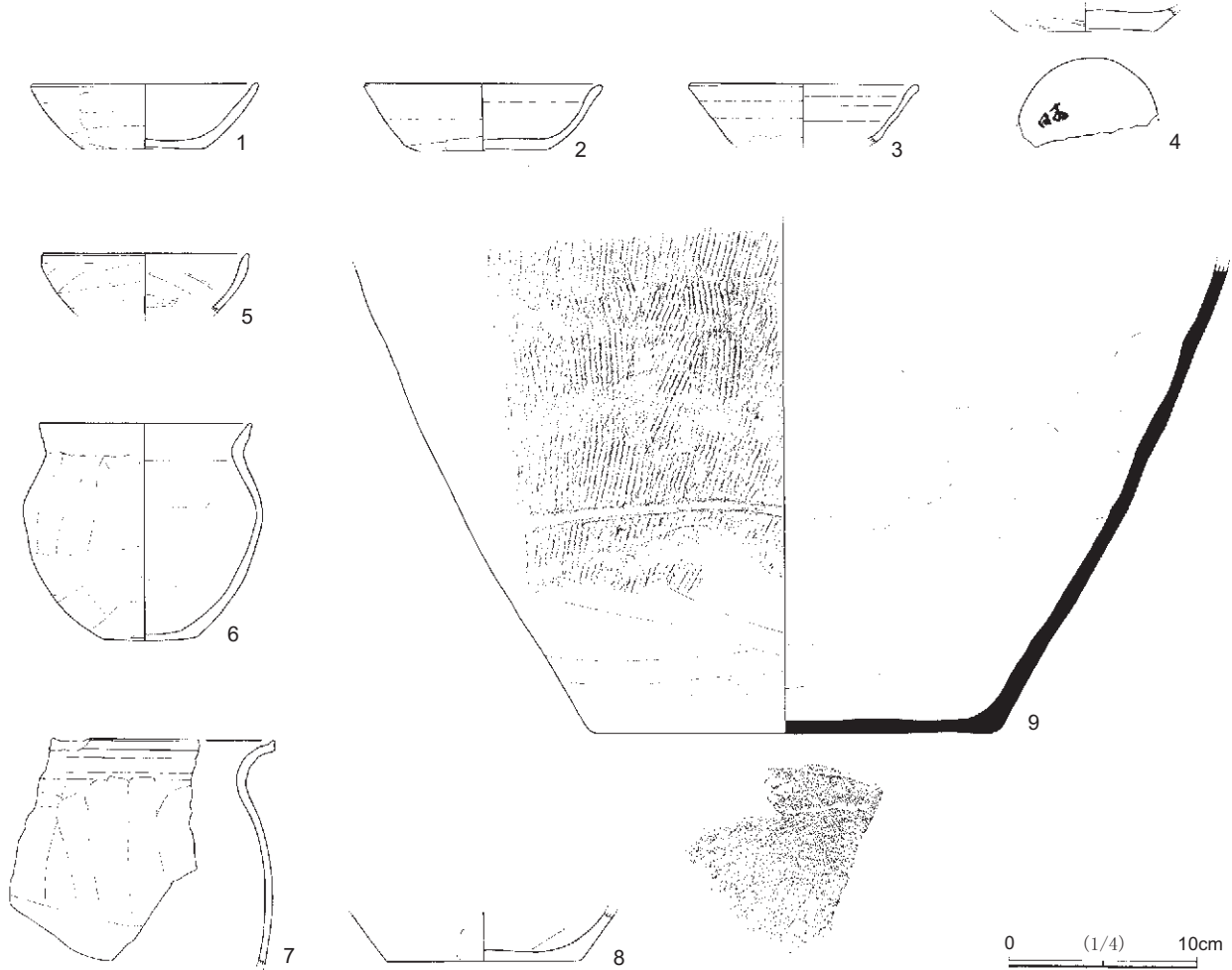
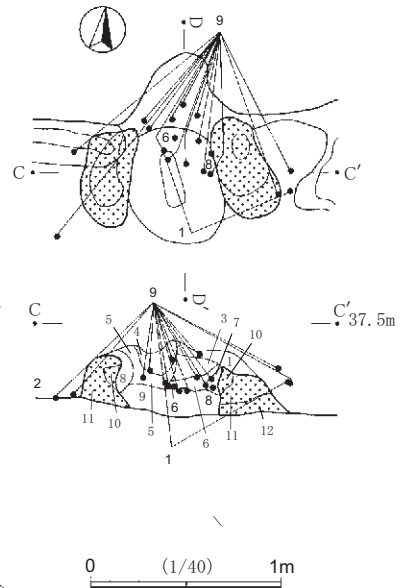


(33) SI092

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少含
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多含 山砂少含
- 3 黒褐色土 ローム粒多含 ロームブロック少含
- 4 黒褐色土 ローム粒・焼土少含
- 5 明褐色土 ソフトローム

(33) SI092カマド

- 1 暗褐色土 山砂含
- 2 暗褐色土 山砂・ローム粒含
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 赤褐色土 焼土粒・灰含
- 6 明褐色土 山砂多含
- 7 赤褐色土 被熱硬化山砂含
- 8 暗褐色土
- 9 赤褐色土 焼土粒多含 灰少含
- 10 赤褐色砂質土 被熱 袖部
- 11 明褐色砂質土 袖部
- 12 褐色土 山砂含
- 13 褐色土 ローム粒含
- 14 暗赤褐色土 焼土粒少含
- 15 灰白褐色土 灰多含 炭化粒少含
- 16 明赤褐色土 山砂多含 被熱
- 17 暗褐色土 煙道



第189図 (33) SI092

遺物の出土はカマド周辺に集中しており、燃焼部からは土師器甕がふせた状態で検出されている。1～5は土師器杯である。1の色調は明赤褐色で、赤色スコリアと多量の砂粒を含んでいる。外面口縁部直下までヘラケズリ及びヘラナデが施され、内面はナデで仕上げられる。2は明赤褐色を呈し、胎土に白色粒子を多量に含む。底部糸切りの後底部と体部下端に手持ちヘラケズリが加えられる。内面体部下端から底部外周にかけてと、外面のほぼ全面に煤が付着している。3は口縁部1/4周ほどの遺存で底部を欠損しているが、外面体部下端にわずかに手持ちヘラケズリが見られる。明赤褐色を呈し、白色粒子と少量の赤色スコリアを含む。4は外面に墨書が見られる底部片で橙色を呈し、胎土に白色粒子、雲母、赤色スコリア、微量の白色針状物を含む。底部糸切り後外周部に手持ちヘラケズリを加える。外面はヘラケズリのち粗いミガキ、内面はミガキ後黒色処理が施される。墨書は比較的外周に近い場所に「財」と記されている。5は口径11.0cmの小型の杯で、内湾する体部に直立する口縁部がつく。口縁端部の外反はさほど強くない。色調は褐色を呈し、胎土に多量の砂粒を含む。外面は口縁直下までヘラケズリ、内面は粗いミガキが施される。

6～8は土師器甕である。6はやや小型の甕である。最大径を胴部中位よりやや上に有し、12.8cmを測る。胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施され、底部は若干丸みを帯びる。胴部内面は被熱により黒変しており、胴部最大径のあたりに白っぽく変色している所も見られる。7は薄手で口唇部が弱いS字状を呈し、胴部外面はヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施される。8は底部で外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整である。6～8はいずれも赤褐色を呈し、胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。6のみ被熱のためか表面がザラついている。

9は下総産の須恵器の大型甕である。色調は橙色で、胎土に白色粒子と大粒の赤色スコリアを含む。外面は叩きの後胴部下位に横方向のヘラケズリが施される。内面の当て具痕はさほど強くない。底部外面は無調整で、ヘラ書き「×」が見られる。

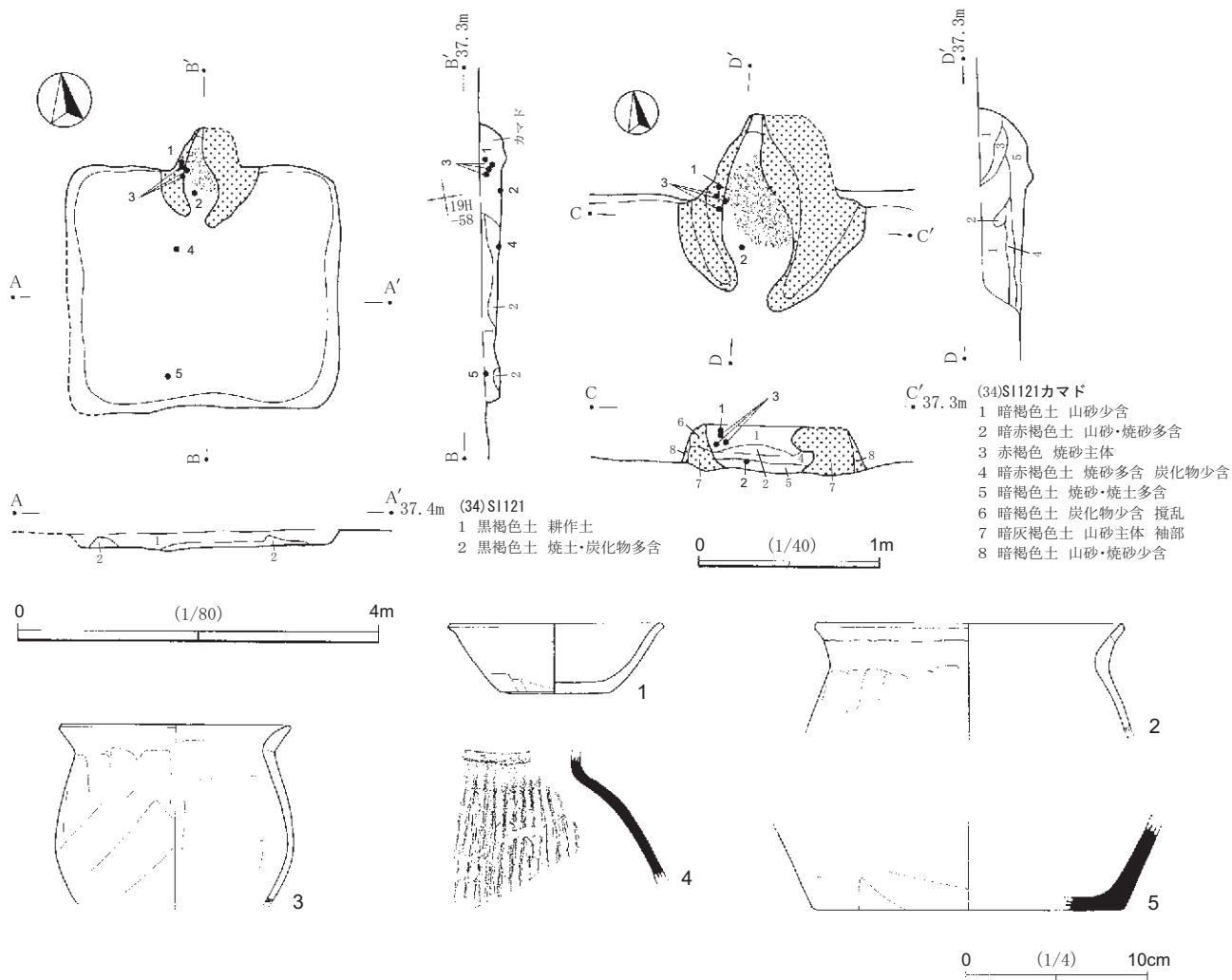
(34) SII21 (第190図、図版27・65)

台地中央より西側、19H-47グリッド周辺に位置する。平面形は東西にやや長い長方形で、主軸はN-9°-E、規模は主軸長2.76m、幅3.05mである。掘り込みは確認面から22.8cmで、攪乱が著しいものの貼床が部分的に残っている。カマドは北壁中央に設置される。煙道部右側は攪乱により損なわれているが、袖は比較的良好に残っていた。左袖からは土師器杯・小型甕が出土している。周溝、柱穴・ピット等は検出されなかった。

1はカマド左袖から出土した土師器杯で、底部糸切りの後底部と外面体部下端に手持ちヘラケズリを加えている。色調は橙色である。

2、3は土師器甕である。2はカマド焚き口付近から出土した口縁部片で、口縁部外面に輪積み痕が1条見られる。胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデで仕上げられる。色調は赤褐色で、外面と口縁部内面に煤が付着している。砂粒を多く含み、被熱のためかやや脆い。3は住居中央付近の床面から出土した小型甕である。最大径は胴部中位にあり、13.3cmを測る。薄手の作りであるが、口縁部で肥厚し「く」の字に外反する。胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデで仕上げられ、色調は褐色である。

4、5は下総産の須恵器甕である。4はカマド左袖から出土した肩部片である。丸く張った胴部に外反する口縁部が付くものと思われる。外面は叩き、内面には当て具痕が見られる。酸化焰焼成ながら硬く焼き締まっている。5は住居南端の覆土上層から出土した底部である。外面底部と胴部はヘラケズリ、内面



第190図 (34) SI121

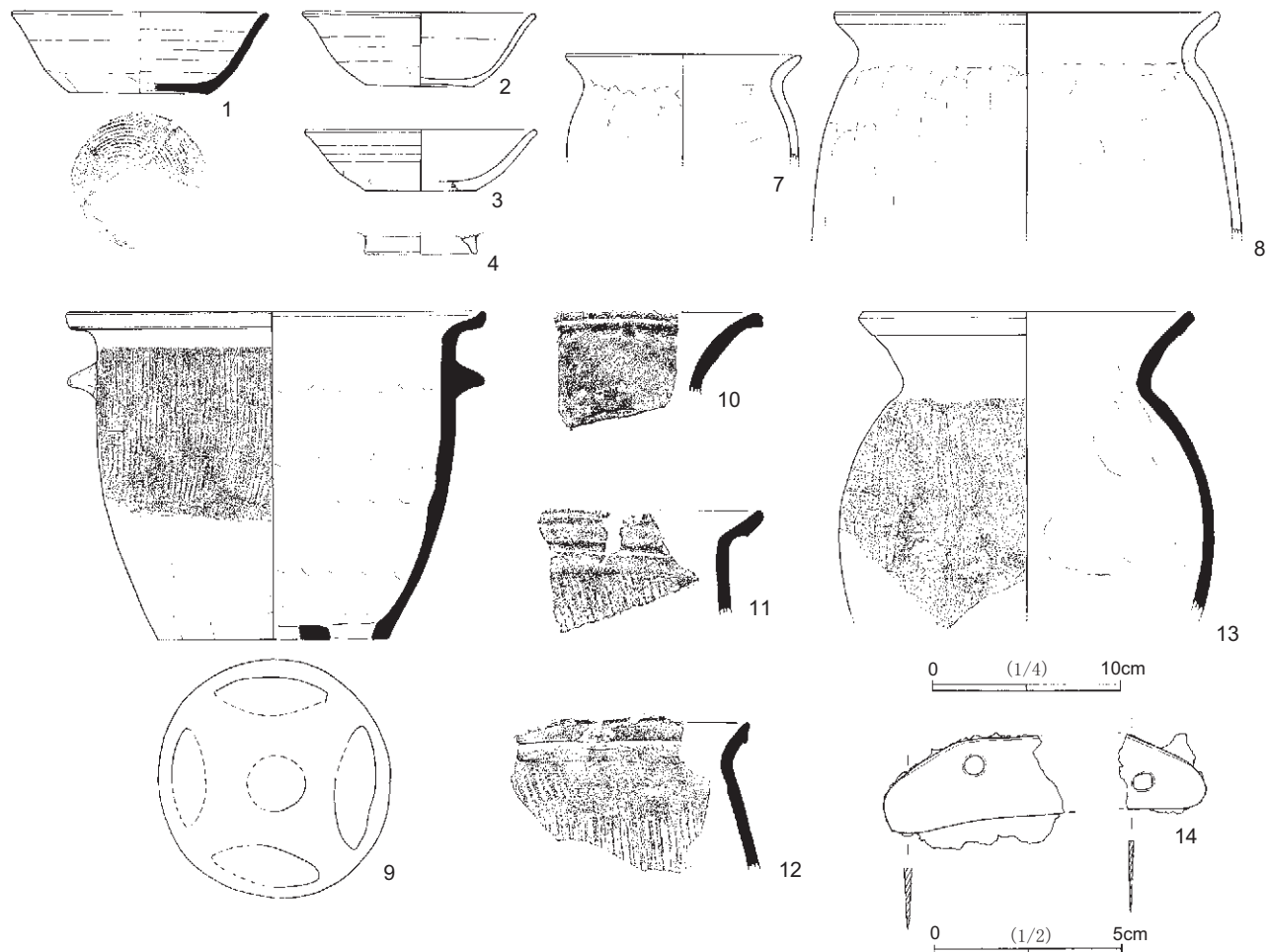
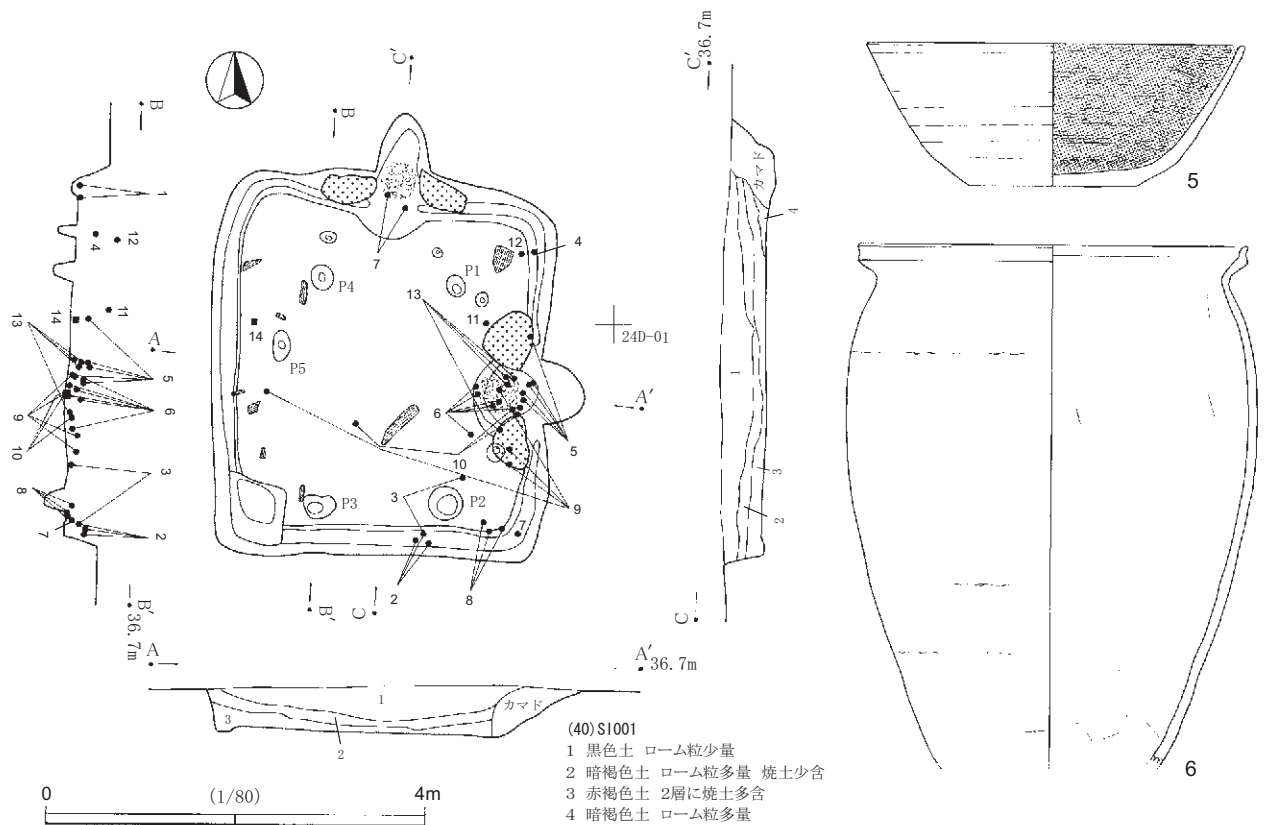
はナデである。色調は黒褐色を呈する。砂粒を多く含み、わずかではあるが白色針状物も見られる。

(40) SI001 (第191図、図版27・28・65・66・69)

24D-00グリッド周辺の台地西端に位置する。平面形は南北に長い方形で、主軸はN-2°-E、規模は主軸長3.96m、幅3.55mである。掘り込みは確認面から37.9cmである。カマドは北壁中央と東壁中央の2か所に設置される。北カマドの袖が壊され中央部に粘土や砂などの部材が流れ込んでいること等から判断して、北カマドの方が先に構築されたものと思われる。ピットは支柱穴が4基検出された。深さはP1が15.3cm、P2が23.5cm、P3が22.7cm、P4が26.7cmである。南側の柱穴P2、P3ははっきりしているが、北側のP1、P4は床面をはがした後に検出された。東カマドと向かい合う西壁側中央に深さ9.2cmのピットがあり、カマドを掛け替えた後の梯子ピットと考えられる。周溝は幅32cm、深さ5cmで全周する。西南隅にいびつな四角形で、床面から6.4cmとやや低く平坦になった所があるが、貯蔵穴ではないと思われる。床面全体に20cmほどの厚さで焼土が広がっており、炭化材も見られる。

遺物は東カマド周辺から集中して出土しており、1のみ北カマドからの出土である。1は須恵器杯で、口径の1/2前後と小さめの底部から内湾気味に立ち上がり口縁部で外反する。底部回転糸切りの後底部外周と体部下端に手持ちヘラケズリが施される。色調は暗褐色、胎土に砂粒を多く含みザラついている。

2、3は土師器杯で、底部と外面体部下端に手持ちヘラケズリが施される。胎土は赤色スコリアと砂粒



第191図 (40) SI001

を含み比較的堅緻である。2の色調は黄橙色、3は明赤褐色を呈する。

4は土師器高台付杯の高台部分で、接合面から剥がれている。高さはなく、開きも弱い。

5は口径20.1cmと推測される土師器甕である。内面はミガキ、外面底部及び体部下端は回転ヘラケズリで仕上げられ、黒色処理が施される。細砂粒を含む精緻な胎土で、色調は明黄褐色を呈する。

6～8は土師器甕である。6は常陸型甕で、口径20.6cm、胴部最大径21.8cmを測り、口唇部はS字を描くように外反する。にぶい橙色を呈し、胎土に雲母や多量の白色粒子を含む。胴部外面はナデ、内面はヘラナデで器面に凹凸が残る。外面胴部下半にミガキは施されず、所々に輪積み痕が見られる。7は口縁部に最大径をもつ小型甕である。口縁部は緩やかに外反し、丸く収められる。内面は黒褐色、外面は明褐色を呈し、胎土に砂粒、赤色スコリア、微量の白色針状物を含む。内外面に煤の付着が見られる。8は口縁端部に弱い稜をもつ。色調は鈍い黄橙色で、胎土は砂粒を含むものの堅緻である。胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。内外面に煤の付着が見られる。

9は須恵器五孔の甕で、口唇部は受け口状を呈する。胎土に砂粒、赤色スコリアを多く含み、微量の白色針状物も見られる。円錐状の把手が1個残存しているが、2個で一对になるものと思われる。外面胴部上半は叩き、下半は横方向のヘラケズリ、内面には当て具痕が見られる。底部外面はヘラケズリで、孔の周囲はヘラナデによって整えられる。色調は内面が鈍い黄橙色、外面が明黄褐色を呈する。内外面とも煤の付着が見られる。下総産である。

10～13は須恵器の甕である。10、13は口縁部が大きく開く壺型、11、12は口縁部の短いタイプである。いずれも胴部外面に叩きが施され、内面に当て具痕が見られる。10は灰色で多量の白色粒子と少量の雲母を含む。11は明褐色を呈し、多量の白色粒子と少量の赤色スコリアを含む。甕の可能性もある。12の色調は褐色で、細砂粒と赤色スコリア、微量の白色針状物を含む。13は明黄褐色で、多量の白色粒子と少量の赤色スコリアを含みザラついている。外面に煤が付着している。10のみ新治産、他は下総産である。

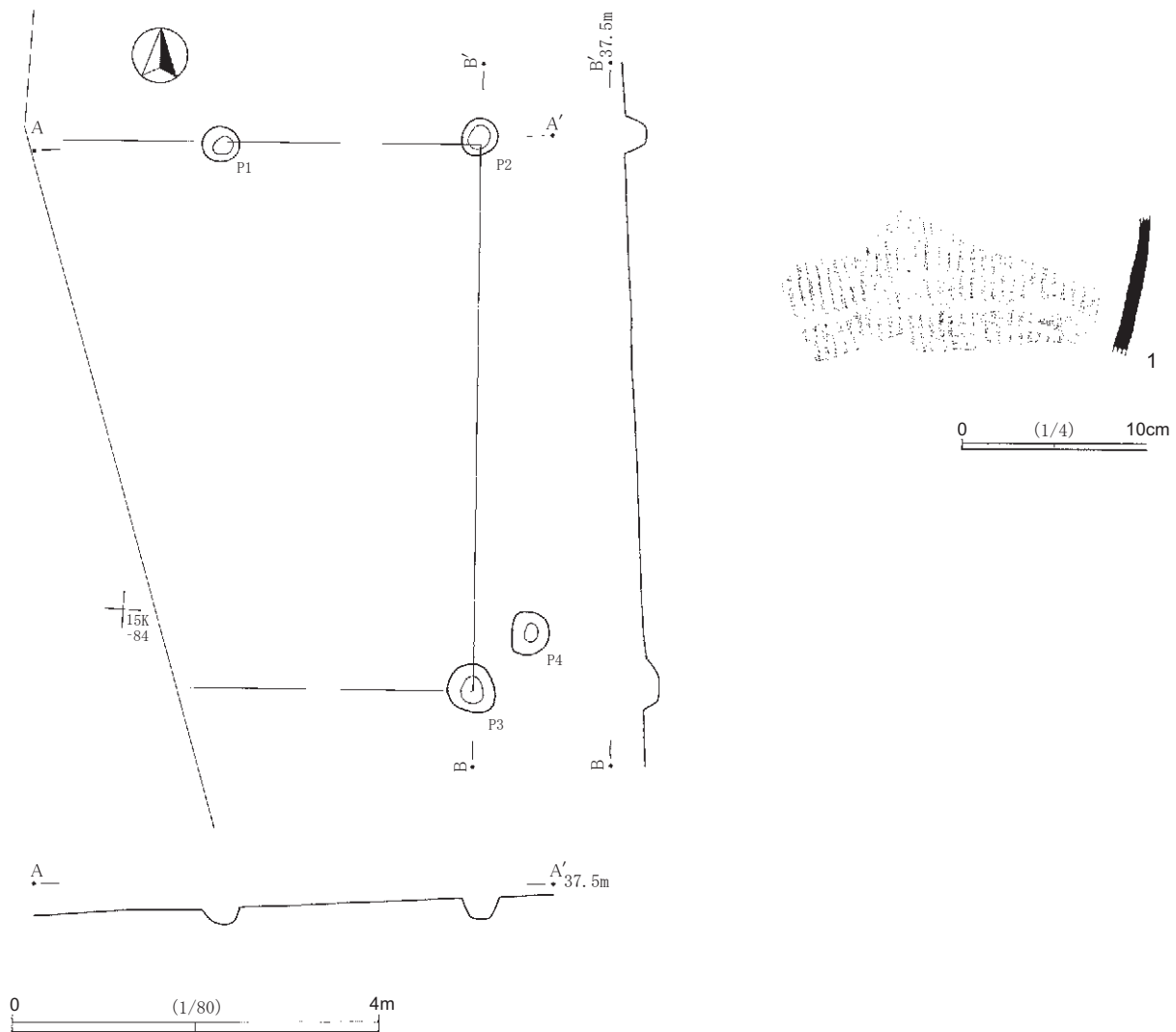
14は鉄製の穂摘み具で、柄あるいは握り部を固定した孔が一对穿たれている。右側の破片の裏面に木質が付着している。東カマドと対面する西壁側中央付近から出土している。

第2節 奈良・平安時代の掘立柱建物跡とその出土遺物

掘立柱建物跡の分布は、遺跡北東部に限定され、竪穴建物跡とあわせた全体の分布からみて、東部・東南部・中央部の3か所に偏っている。各々の集中箇所について、東部のものを「第1建物群」、東南部を「第2建物群」、中央部を「第3建物群」として呼称する(第193・215・270図参照)。この「建物群」には掘立柱建物跡だけでなく、近接する竪穴建物跡及び関連する区画溝などほかの遺構も含める。なお、第4章第2節において、これらの3か所の建物群について検討を行った。併せて、参照していただきたい。

(9) SB180 (第192図)

15K-74グリッド周辺に位置する。西から入り込んだ谷に面し、西側は調査区外に続く。周辺に奈良・平安時代の遺構はなく、当初縄文時代のピット群と捉えられていたが、P2から平安時代の土師器・須恵器が出土しており、その一部を掘立柱建物跡として復元した。桁行2間以上、梁行1間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-85°-Eである。現存部分の桁行は総長4.96m、柱間2.80m、梁行は総長6.00mである。柱穴の掘り方は円形で、径は40cm～52cm、深さは17.5cm～46.0cmである。遺物の出土量は少なく、須恵器甕片1点を図示した。外面に叩きが施された下総産の甕で、色調は暗灰黄色を呈する。



第192図 (9) SB180

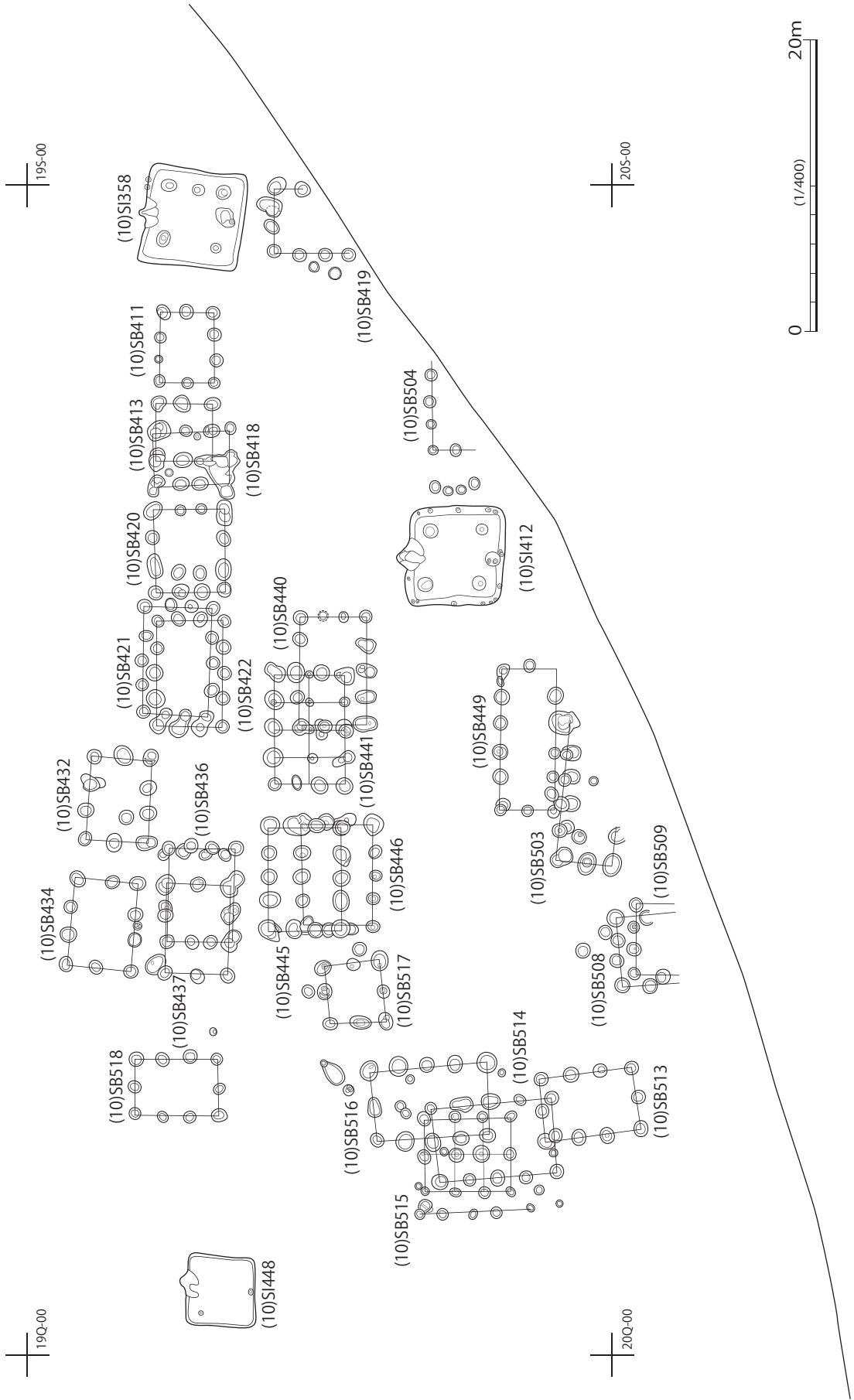
(10) SB411 (第194図、図版28)

19R-27グリッド周辺、(10) SI358の西2.6mに位置する。桁行3間、梁行2間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-90°-Wである。桁行は総長4.82m、柱間1.50~1.70m、梁行は総長3.80m、柱間1.80m~1.90mである。柱穴の掘り方は円形で、径は56cm~101cmを測り、深さは6.2cm~25.3cmと浅い。東側の柱穴と北西隅、南西隅の柱穴には柱痕跡が見られた。柱痕跡部分の土層は黒褐色土が主体である。遺物の出土量は少なく土師器甕1点を図示した。木葉痕が見られる底部片で、内面は器面の荒れが著しい。

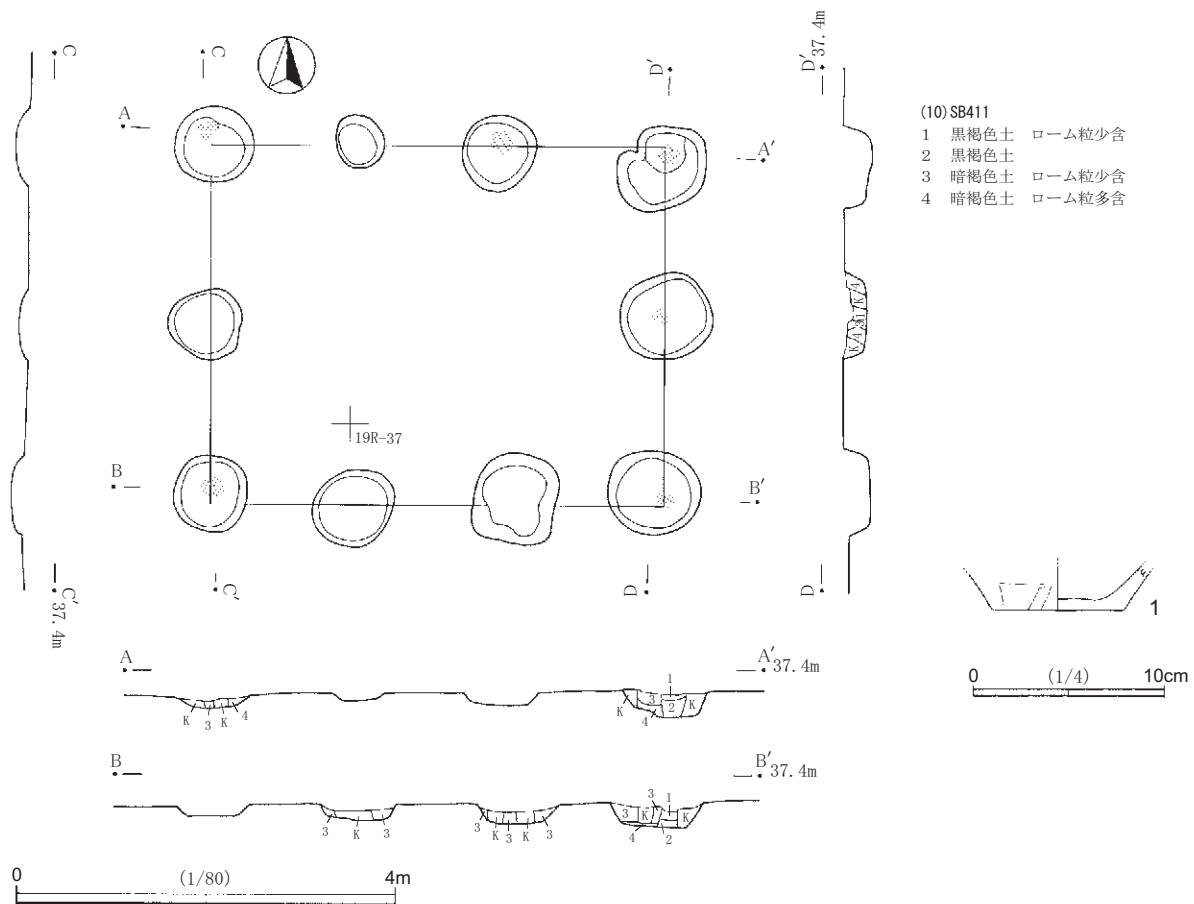
(10) SB413 (第195図、図版28)

19R-25グリッド周辺、(10) SB411の西0.5mに位置する。西側半分が(10) SB418と重なり合う。桁行2間、梁行2間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-3°-Eである。桁行は総長4.00m、柱間1.90m~2.10m、梁行は総長3.30m、柱間1.30m~1.65mである。柱穴の掘り方は円形で、径は80cm~120cmを測り、深さは23.4cm~43.2cmである。南西隅と西側中央の柱穴を除き柱痕跡が見られた。覆土はローム粒を含む黒褐色土・暗褐色土が主体である。

遺物は墨書のある土師器杯、須恵器甕片などを図示した。1~3は土師器杯である。1は体部外面横位に墨書が見られる。細筆で「三」と記されているようである。2は体部片で、外面に墨書の残画が見られるが、遺存部位が少ないため判読できない。3は底部片で、底部回転糸切りの後体部下端と底部に手持ち



第193图 第1 建物群配置图



第194図 (10) SB411

ヘラケズリを施す。胎土に微量の白色針状物を含む。4、5は須恵器甕である。4は口縁部が大きく開く壺形で、色調は浅黄色である。5は肩部で、胴部外面に叩きが見られる。いずれも新治産である。

(10) SB418 (第195図、図版28)

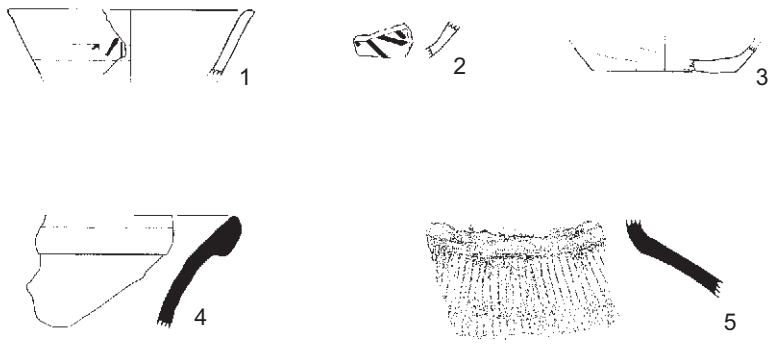
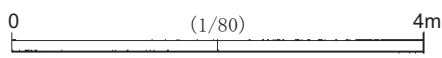
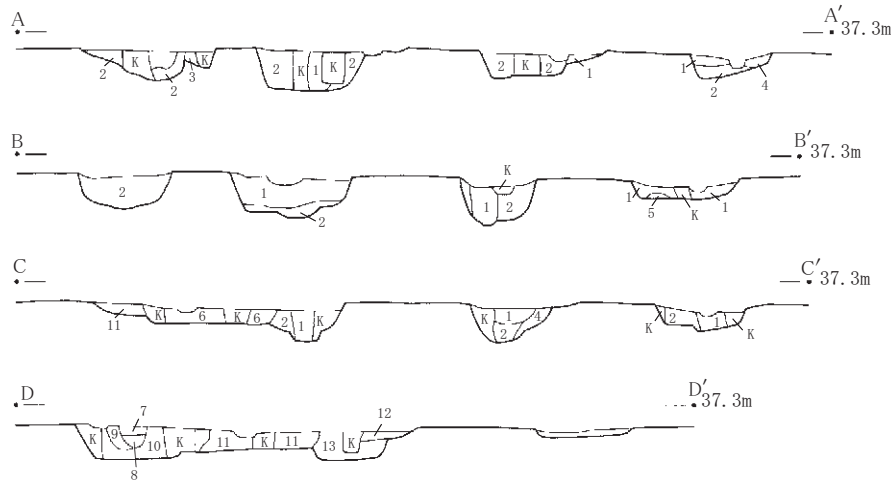
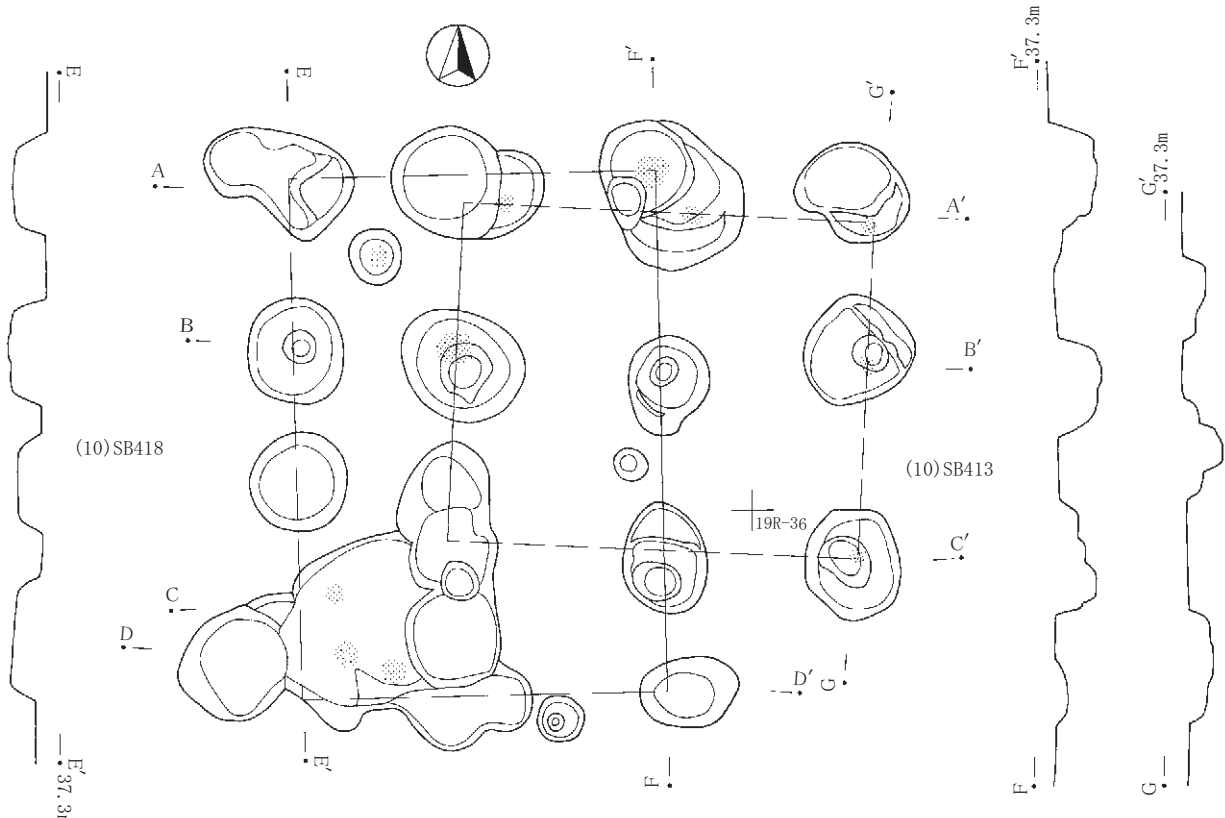
19R-24グリッド周辺に位置する。(10) SB413と東側の柱穴が重複するが、新旧関係は不明である。桁行3間、梁行2間の側柱南北棟建物で、主軸方位はN-1°-Wである。桁行は総長5.08m、柱間1.20m~2.10m、梁行は総長3.56m、柱間1.80mである。柱穴の掘り方は円形で、径は95cm~140cmを測り、深さは21.7cm~44.4cmである。北東隅の柱穴にのみ柱痕跡が見られた。南側柱列の西寄り2本は縄文時代の土坑と重なっており、形状は不明瞭である。時期を特定できる遺物は出土しなかった。

(10) SB419 (第196図、図版28)

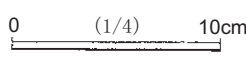
19R-48グリッド周辺、(10) SI358の南約1mに位置する。南東側が調査区外となる。調査した範囲では桁行3間もしくはそれ以上、梁行2間の側柱南北棟建物と考えられる。梁行の中間柱は近接して2つの掘り込みがあるが、柱痕跡のある柱穴1本を遺構に伴うものとして判断した。主軸方位はN-0°-E、桁行は現存長5.10m、柱間1.70m~2.20m、梁行4.60m、柱間1.40m~1.90mである。柱穴の掘り方は円形で、径は90cm~128cmを測り、深さは12.3cm~33.2cmとややばらつきがある。確認面で東側柱列を除く柱穴に柱痕跡が見られたが、土層断面では明瞭でなかった。時期を特定できる遺物は出土しなかった。

(10) SB420 (第197図、図版28)

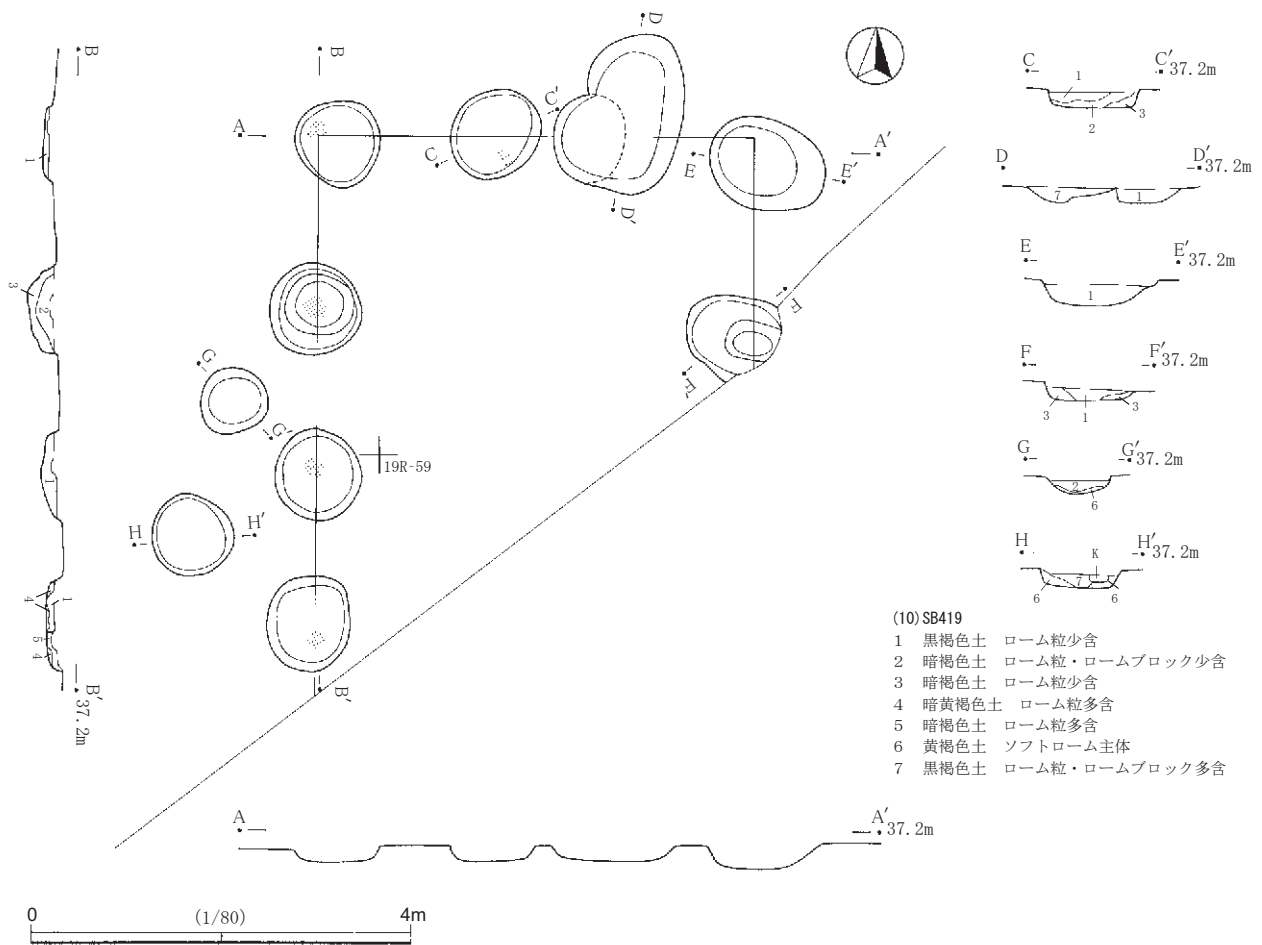
19R-23グリッド周辺に位置し、東に(10) SB418が、西に(10) SB422が近接する。桁行3間、梁行3



- (10) SB413 (SB418含む)
- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多含
 - 2 黒褐色土 ローム粒少含
 - 3 黒褐色土 ローム粒多含
 - 4 黒色土 ローム粒少含
 - 5 黄褐色土 ロームブロック多含
 - 6 黒褐色土 ローム粒少含
 - 7 黒褐色土 ローム粒多含
 - 8 暗褐色土 ローム多含
 - 9 暗褐色土 ローム粒多含 ロームブロック少含
 - 10 暗褐色土 ローム粒多含 炭化物少含
 - 11 黒褐色土 ローム粒少含
 - 12 暗褐色土
 - 13 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多含



第195図 (10) SB413・(10) SB418



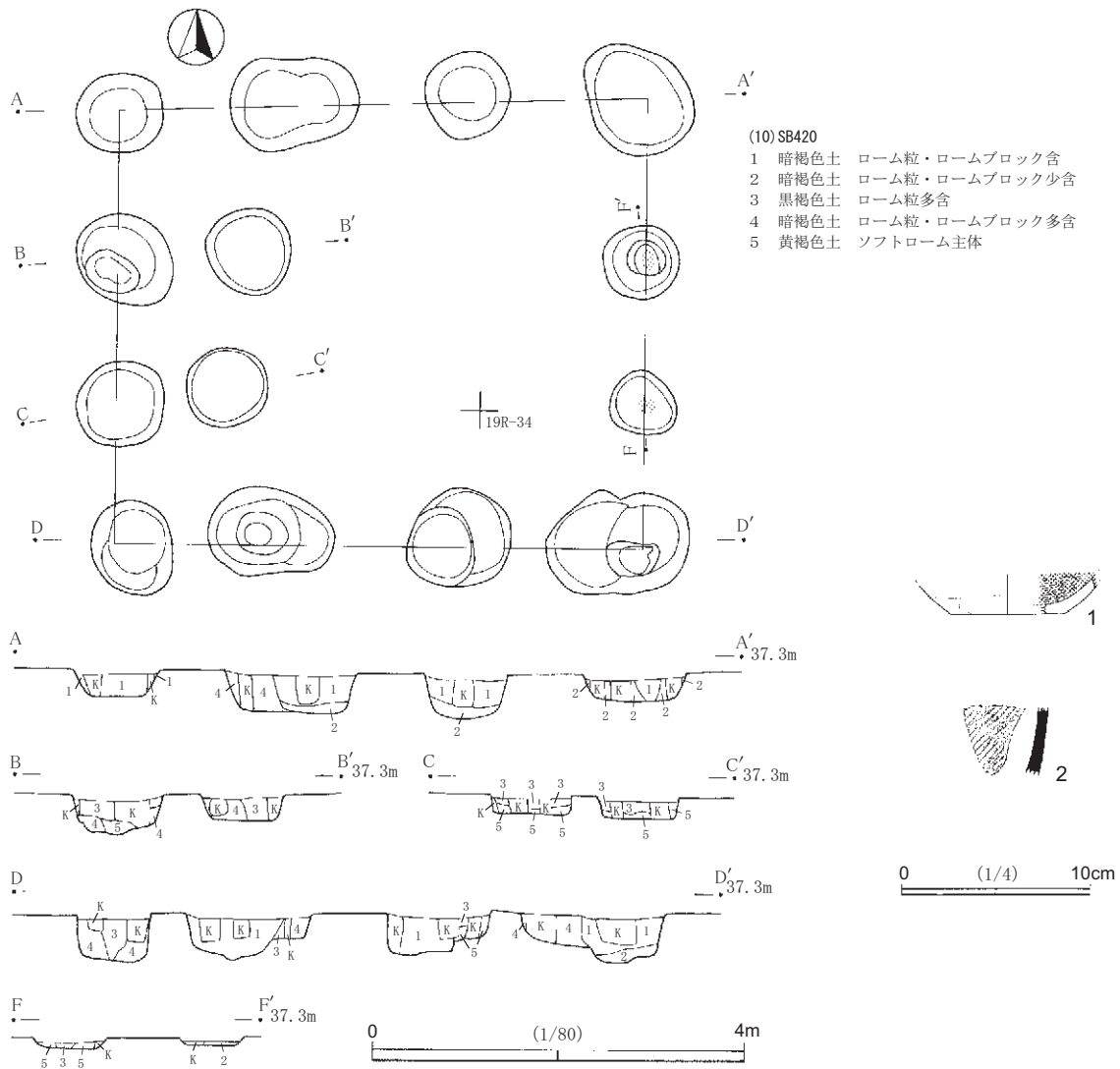
第196図 (10) SB419

間の側柱東西棟建物だが、西側柱列が2列並ぶことから建て替えが想起される。土層の堆積状況から建て替え前は桁行3間梁行2間の南北棟建物と考えられる。主軸方位はN-90°-W、桁行は総長5.69m、柱間1.65m~2.03m、梁行は総長4.85m、柱間1.46m~1.76mである。柱穴の掘り方は円形で、径は70cm~130cm、深さは8.6cm~55.7cmとかなりばらつく。東側柱列の中間柱2穴は径も小さくかなり浅いものの柱アタリが見られた。旧掘立柱建物に伴うと思われる覆土最下層はソフトローム主体の黄褐色土、その上にローム粒を含む暗褐色土ないし黒褐色土が堆積していた。新掘立柱建物に伴う覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体である。

遺物は土師器杯1点と須恵器甕1点を図示した。1は内面黒色処理された土師器杯の底部である。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。2は外面に叩きが見られる須恵器甕の胴部片で、釉の付着も見られる。東海産である。

(10) SB421 (第198図)

19R-21グリッド周辺に位置し、東に(10) SB420が近接する。(10) SB422と重複し、土層の堆積状況から(19) SB422よりも古いことを確認している。桁行4間、梁行3間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-88°-Wである。桁行は総長7.46m、柱間1.70m~1.94m、梁行は総長4.56m、柱間1.40m~1.74mである。柱穴の掘り方は円形で、径は82cm~98cmを測り、深さは19.8cm~40.4cmとばらつきがある。南側柱列と西側柱列の一部に柱痕跡が見られた。南側柱列の西から2番目の柱穴には焼土・炭化物を含む暗褐色土が堆積していた。

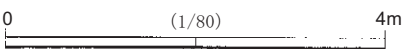
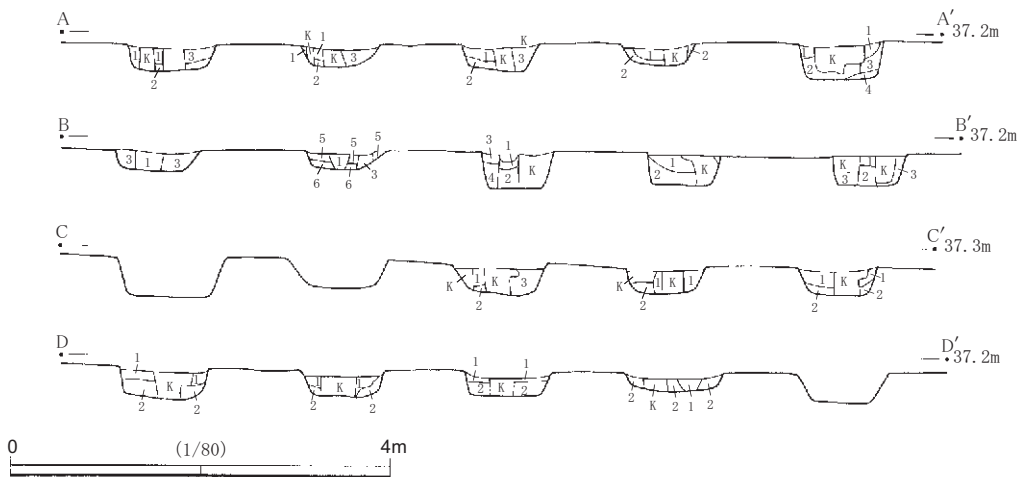
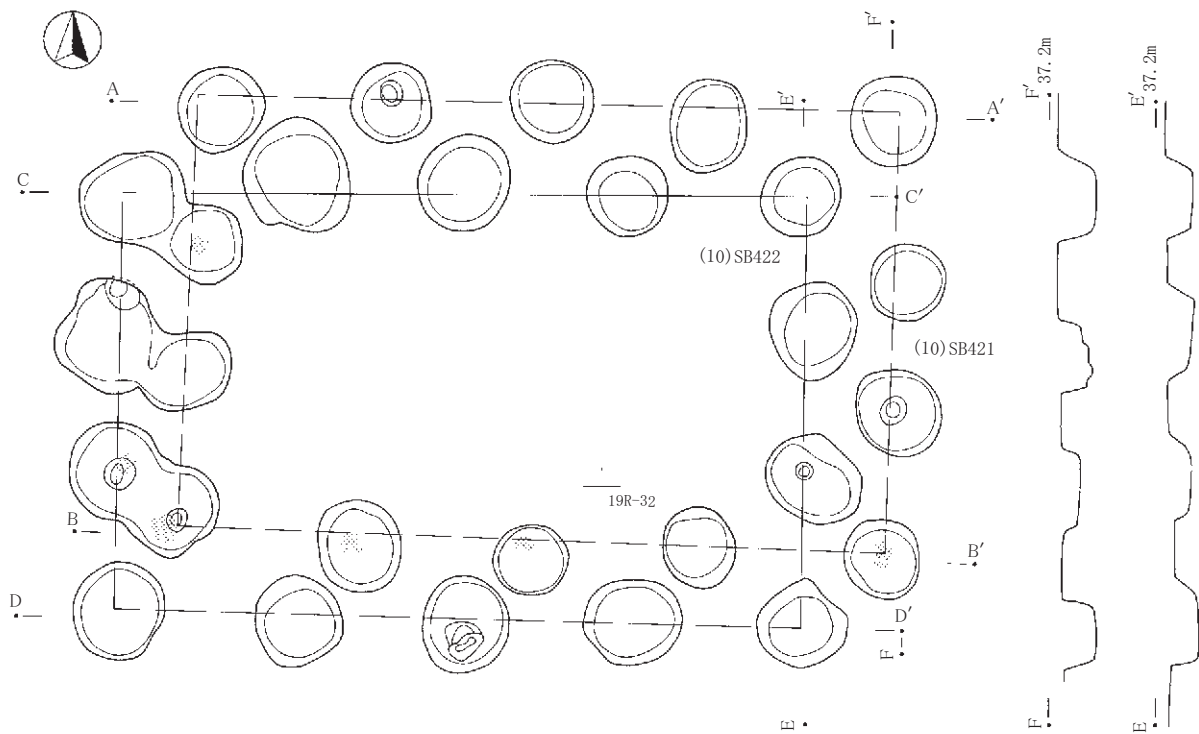


第197図 (10) SB420

遺物は墨書のある土師器杯、須恵器杯、須恵器甕等を図示した。1、2は土師器杯の口縁部片である。1は明赤褐色を呈し、胎土に白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。2は外面に横位の墨書「三」が見られる。胎土に少量の雲母を含む。3は下総産須恵器杯の底部片である。オリーブ黄色を呈し、胎土に多量の白色粒子と大粒のスコリアを含む。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。底部外面には火襴が見られる。4は雲母微粒子を多量に含む新治産須恵器甕の口縁部である。5は外面に釉の付着が見られる須恵器壺の胴部である。内面は灰色を呈する。

(10) SB422 (第198図)

19R-21グリッド周辺に位置する。(10) SB421と南西へ1mほどずれて重複し、(10) SB421よりも新しい。桁行4間、梁行3間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-89°-Wである。桁行は総長7.24m、柱間1.70m~1.94m、梁行は総長4.40m、柱間1.40m~1.60mで(10) SB421とほぼ同規模である。柱穴の掘り方は円形で、径は86cm~122cm、深さは20.3cm~48.5cmである。西側柱列南から2本目の柱穴にのみ柱痕跡が見られた。柱痕跡部分の覆土はローム粒・ロームブロックをやや多く含む黒褐色土である。時期を特定できる遺物は出土しなかった。



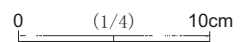
(10)SB421

- 1 黒褐色土 ローム粒含
- 2 暗褐色土 ローム粒含
- 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック含
- 4 暗褐色土 ローム粒多含
- 5 暗褐色土 焼土・炭化物含
- 6 暗褐色土 ローム粒・焼土・炭化物含

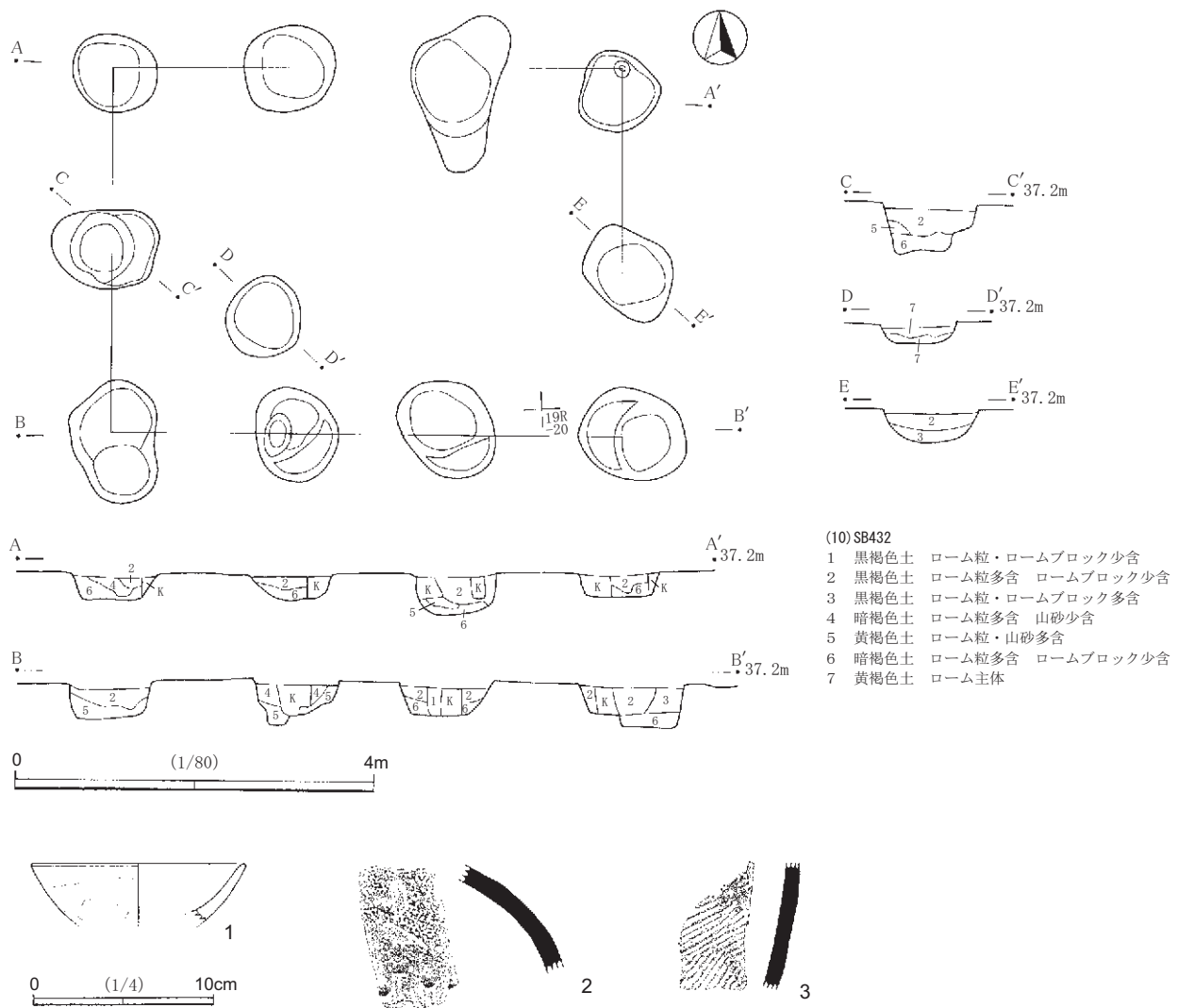


(10)SB422

- 1 暗褐色土 ローム粒多含
- 2 黒褐色土 ローム粒少含
- 3 黄褐色土 ローム粒主体



第198図 (10) SB421・(10) SB422



第199図 (10) SB432

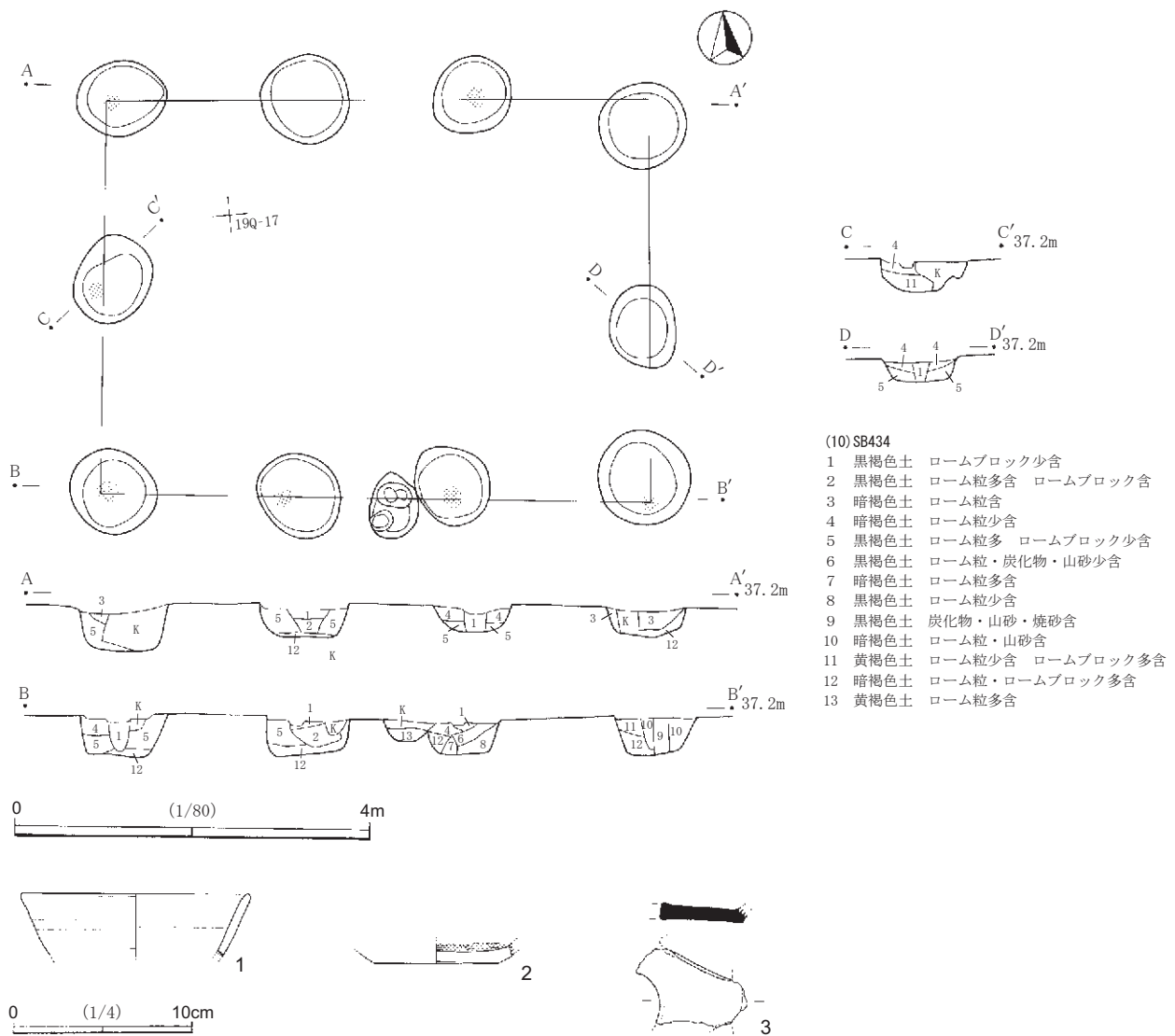
(10) SB432 (第199図、図版28)

19Q-19グリッド周辺422の北西1mに位置する。桁行3間、梁行2間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-86°-Wである。桁行は総長5.72m、柱間1.80m~2.00m、梁行は総長4.10m、柱間1.90m~2.20mである。柱穴の掘り方は円形で、径は90cm~126cmを測り、深さは29.3cm~51.3cmである。柱痕跡は確認できなかった。

遺物の出土量は少なく、土師器杯1点と須恵器甕2点を図示した。1は内湾気味に開く土師器杯で、外面は口唇部直下までヘラケズリが施されている。2、3は須恵器甕の胴部片で、外面に叩きと釉が見られる。2は内面には当て具痕がある。3は東海産である。

(10) SB434 (第200図、図版29)

19Q-17グリッド周辺に位置し、(10) SB432の西、(10) SB437の北に近接する。桁行3間、梁行2間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-85°-Wである。桁行は総長6.27m、柱間1.80m~2.26m、梁行は総長4.57m、柱間2.00m~2.56mである。柱穴の掘り方は円形で、径は93cm~106cmを測り、深さは26.2cm



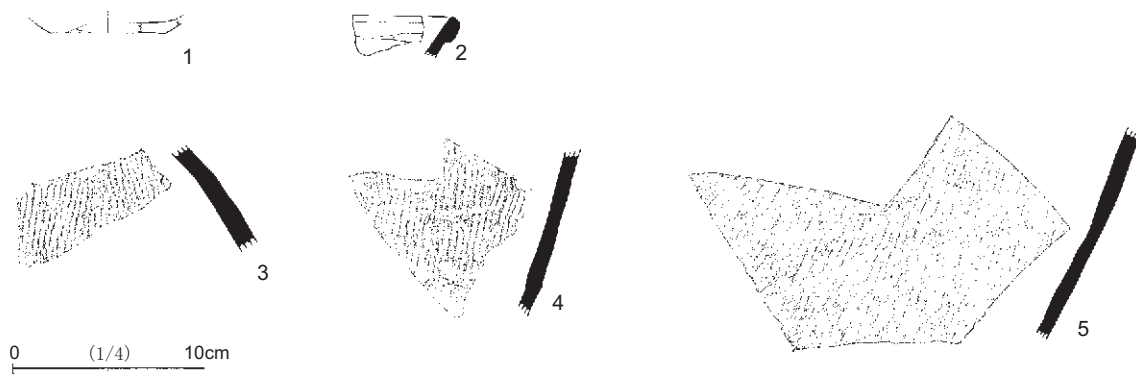
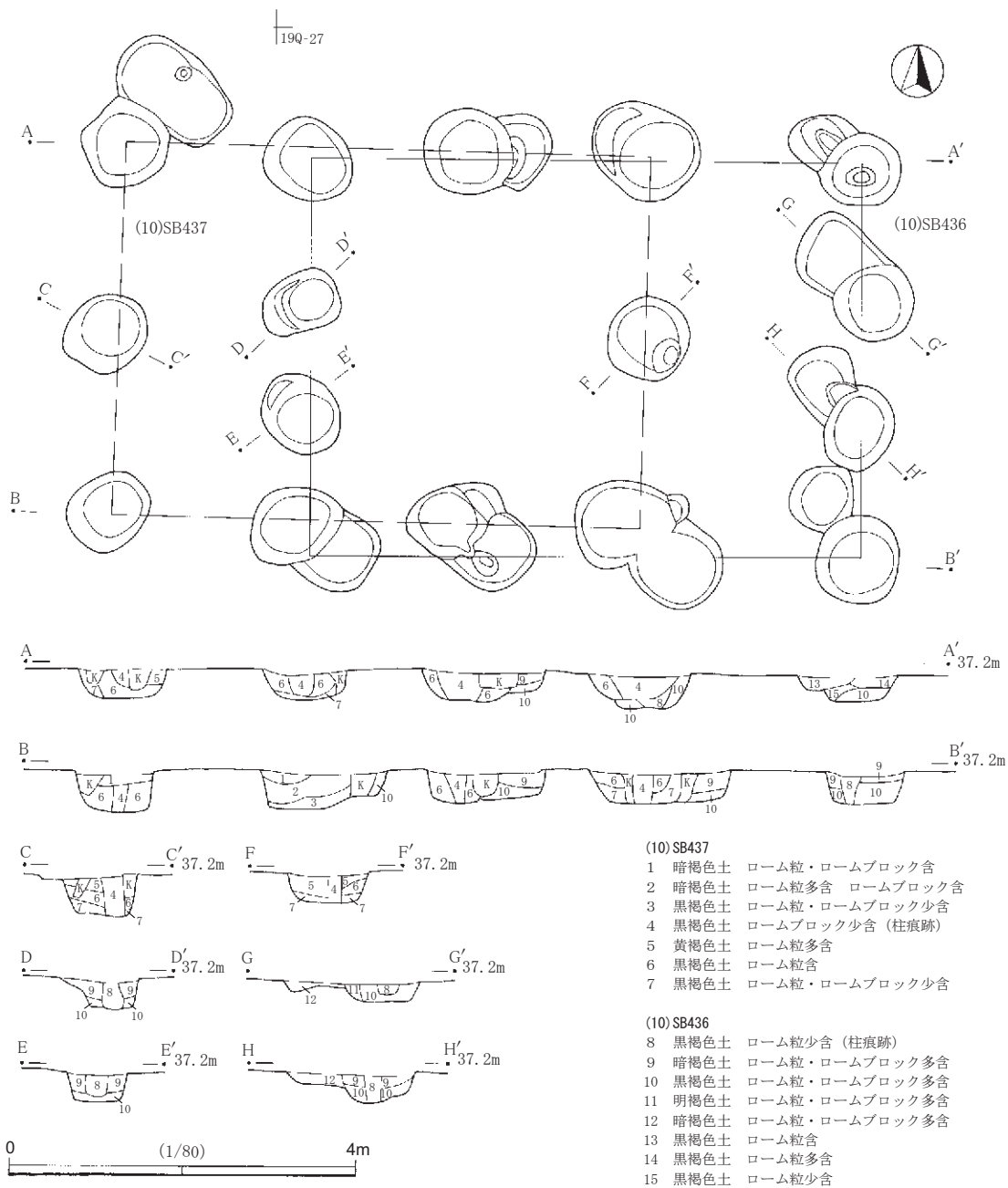
第200図 (10) SB434

～53.4cm とばらつきがある。西側柱列と南側柱列の柱穴には柱痕跡が見られ、覆土はローム粒を含む黒褐色土ないし暗褐色土である。南東隅の柱穴覆土は炭化物、山砂、焼土を含んでおり、西隣の柱穴覆土にも山砂を含む層が見られる。

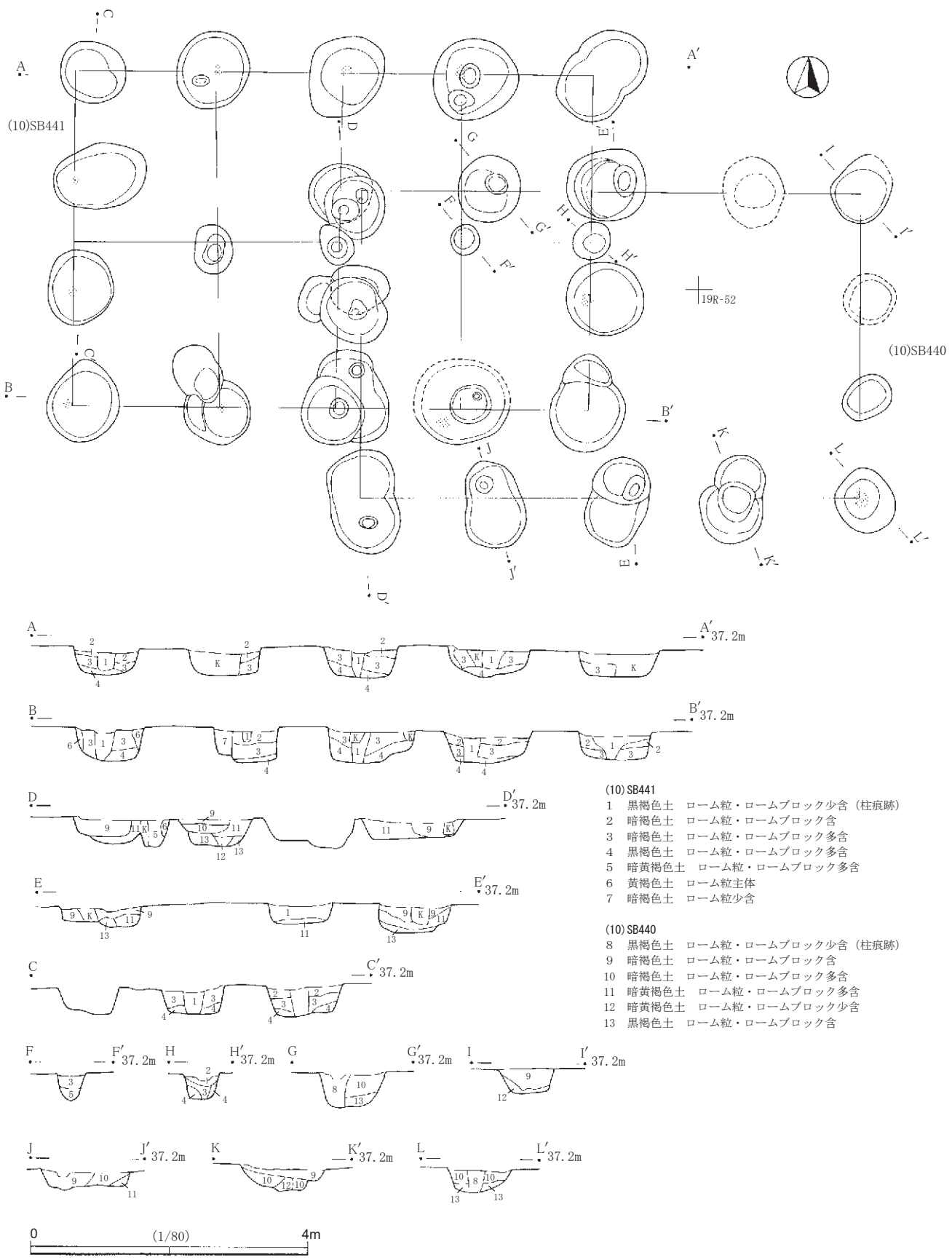
遺物は土師器杯2点と須恵器甕片を図示した。1、2は土師器杯である。1は口縁部で、橙色を呈し、胎土に砂粒、雲母、赤色スコリアを含む。体部外面に墨痕らしきものが認められるが、遺存部位が少なく詳細不明である。2は内面黒色処理された底部片である。回転系切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリが施される。胎土に微砂粒と微量の白色針状物を含む。3は須恵器五孔の甕の底部片である。にぶい黄褐色を呈し、多量の雲母を含む。新治産である。

(10) SB436 (第201図、図版29)

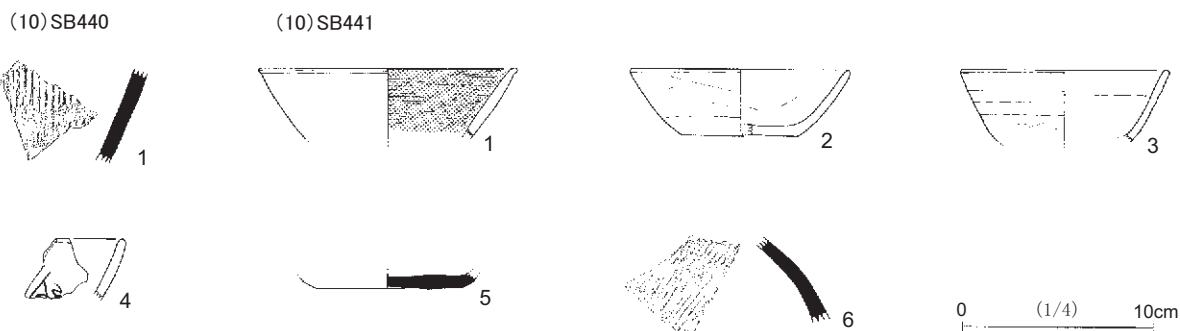
19Q-27グリッド周辺、(10) SB434の南、(10) SB445の北に位置する。(10) SB437と重複し、土層の堆積状況から(10) SB437よりも古いことを確認している。桁行3間、梁行3間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-90°-Wである。桁行は総長6.40m、柱間1.73m～2.30m、梁行は総長4.60m、柱間1.40m



第201図 (10) SB436・(10) SB437



第202図 (10) SB440・(10) SB441①



第203図 (10) SB440・(10) SB441②

～1.60mである。柱穴の掘り方は円形を基本とし、東側柱列の柱穴には北西に延びる楕円形の浅い掘り込みが付属する。径は86cm～130cmを測り、深さは24.8cm～40.4cmである。柱痕跡は確認面では明瞭でなかったが、土層断面において確認できた柱穴もあった。柱痕跡部分の覆土はロームブロックを含む黒褐色土である。遺物は少なく、須恵器甕1点がP1から出土しているが、(10) SB437から出土した甕と接合したため一括して図示した。

(10) SB437 (第201図、図版29)

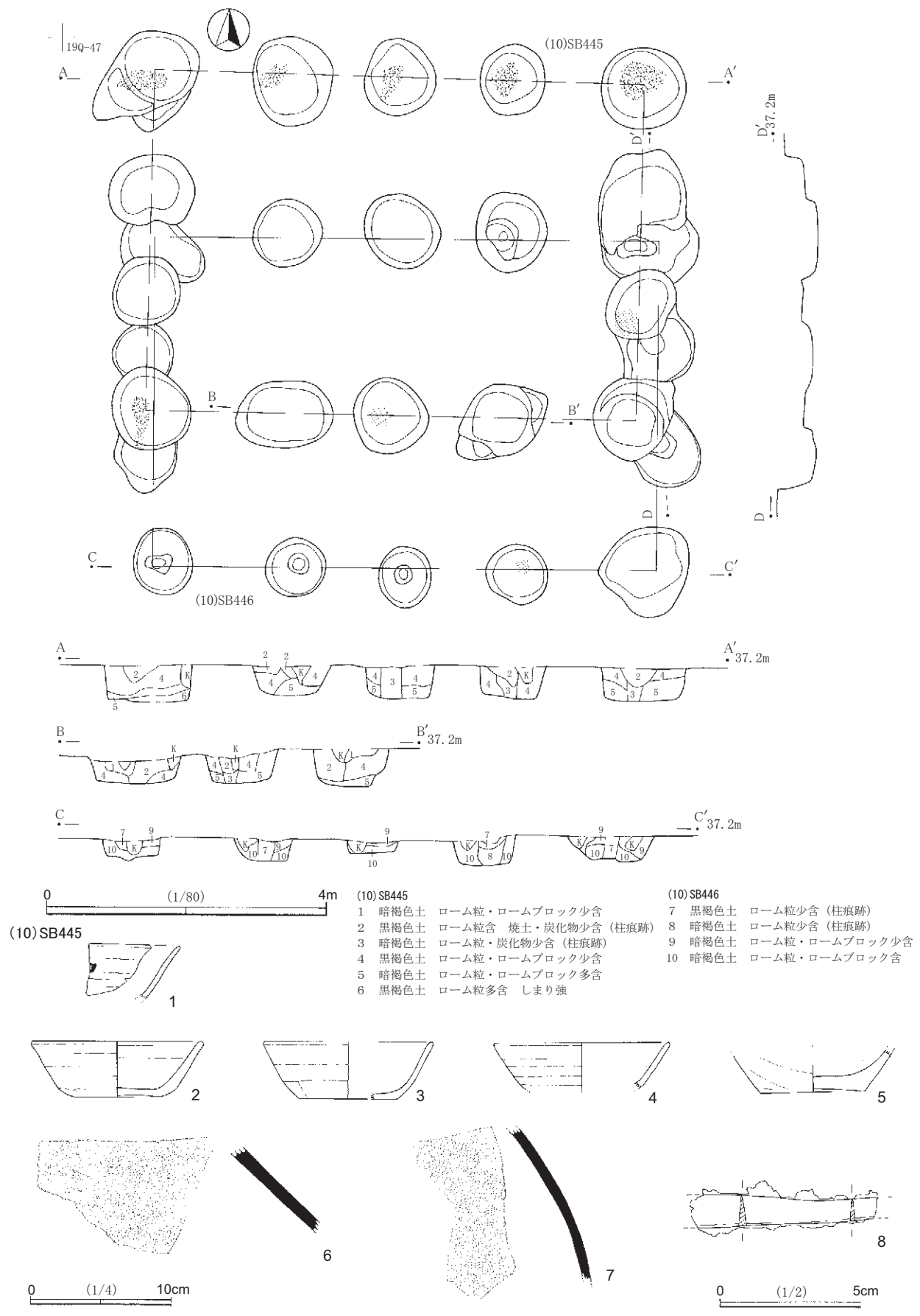
19Q-26グリッド周辺に位置する。(10) SB436と西へ1.8mほどずれて重複し、(10) SB436よりも新しい。桁行3間、梁行2間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-89°-Wである。桁行は総長6.12m、柱間1.84m～2.14m、梁行は総長4.30m、柱間2.10m～2.20mである。柱穴の掘り方は円形で、径は95cm～130cmを測り、深さは35.6cm～48.5cmである。柱痕跡は確認面では明瞭でなかったが、土層断面では南側柱列西から2本目の柱穴を除き確認できた。柱痕跡部分の覆土はロームブロックを少量含む黒褐色土である。

遺物の出土量は少なく、土師器杯と須恵器甕を図示した。1は土師器杯の底部である。色調はにぶい黄橙色、砂粒、赤色スコリアを含む精緻な土器である。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。2は須恵器甕の口縁部である。色調は灰色を呈し、胎土に雲母と白色粒子を含む。新治産である。3～5は外面に叩き目をもつ須恵器甕の胴部片である。3は外面に釉が付着しており、灰色を呈する。東海産である。4は胎土に雲母を多く含みにぶい橙色を呈する。新治産である。5は内面に当て具痕が見られ、多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。外面の色調は黒褐色、内面及び断面はにぶい橙色である。下総産である。(10) SB436から出土した破片と接合するが、どちらの遺構に伴うものか判然としないため、(10) SB437に一括して含めた。

(10) SB440 (第202・203図、図版29)

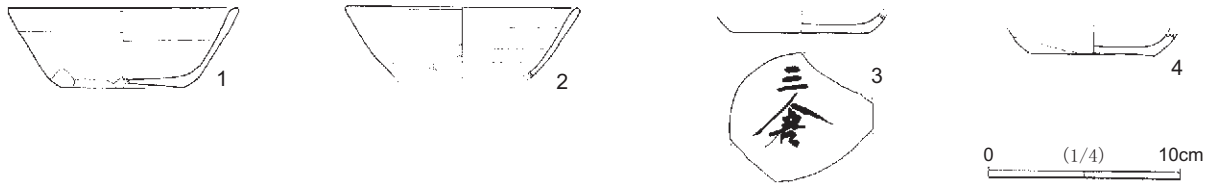
19R-51グリッド周辺、(10) SB422の南5mに位置する。(10) SB441と重複するが、柱穴がほとんど切り合っていないため土層断面から新旧関係を判断することは難しい。確認面での柱掘り方検出状況から(10) SB440が(10) SB441よりも古いと考えられる。桁行4間、梁行3間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-90°-Wである。桁行は総長5.25m、柱間1.55m～2.10m、梁行は総長4.44m、柱間1.30m～1.70mである。柱穴の掘り方は円形を基本とし、南側柱列を中心に一部長円形のものが見られる。径は72cm～152cm、深さは22.8cm～69.8cmとかなりばらつきがある。柱痕跡は南東隅の柱穴のみに見られ、柱痕跡部分の覆土はローム粒・ロームブロックを少量含む黒褐色土である。

遺物の出土量は少なく、須恵器甕を図示した。外面に叩き目をもつ下総産須恵器甕の胴部で、胎土に白色粒子、赤色スコリアを含む。色調は灰オリーブである。



第204図 (10) SB445・(10) SB446①

(10)SB446



第205図 (10) SB446②

(10) SB441 (第202・203図、図版29)

19R-40グリッド周辺に位置し、(10) SB440と北西へ3mほどずれて重複する。桁行4間、梁行3間の東西棟床東建物で、西側柱列を除き南北の柱穴間に径45.0cm~72.0cmの小ピットが配されている。主軸方位はN-89°-W、桁行は総長7.52m、柱間1.69m~2.13m、梁行は総長4.88m、柱間1.60m~1.70mである。小柱穴の柱間寸法は桁行1.77m~2.09m、梁行2.40m~2.49mである。柱の掘り方は円形で、径は98cm~145cm、深さは33.8cm~51.6cmである。柱痕跡は北西隅、北東隅、南東隅の柱穴を除いて見られ、柱痕跡部分の覆土はローム粒・ロームブロックを少量含む黒褐色土である。

遺物は土師器杯、須恵器杯、須恵器甕を図示した。1~4は土師器杯で、色調は橙色ないしにぶい黄橙色を呈する。1は内面黒色処理、2は外面口唇部直下までヘラケズリが施される。3の外面体部下端の調整は手持ちヘラケズリである。4は体部外面に横位の墨書「倉」が見られる。5は須恵器杯で回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリが施される。胎土は微砂粒とスコリアを含み、砂質を帯びている。6は外面に叩き目と釉の付着が見られる須恵器甕胴部片である。

ほかに図化はしていないが、鉄滓が6点出土している。

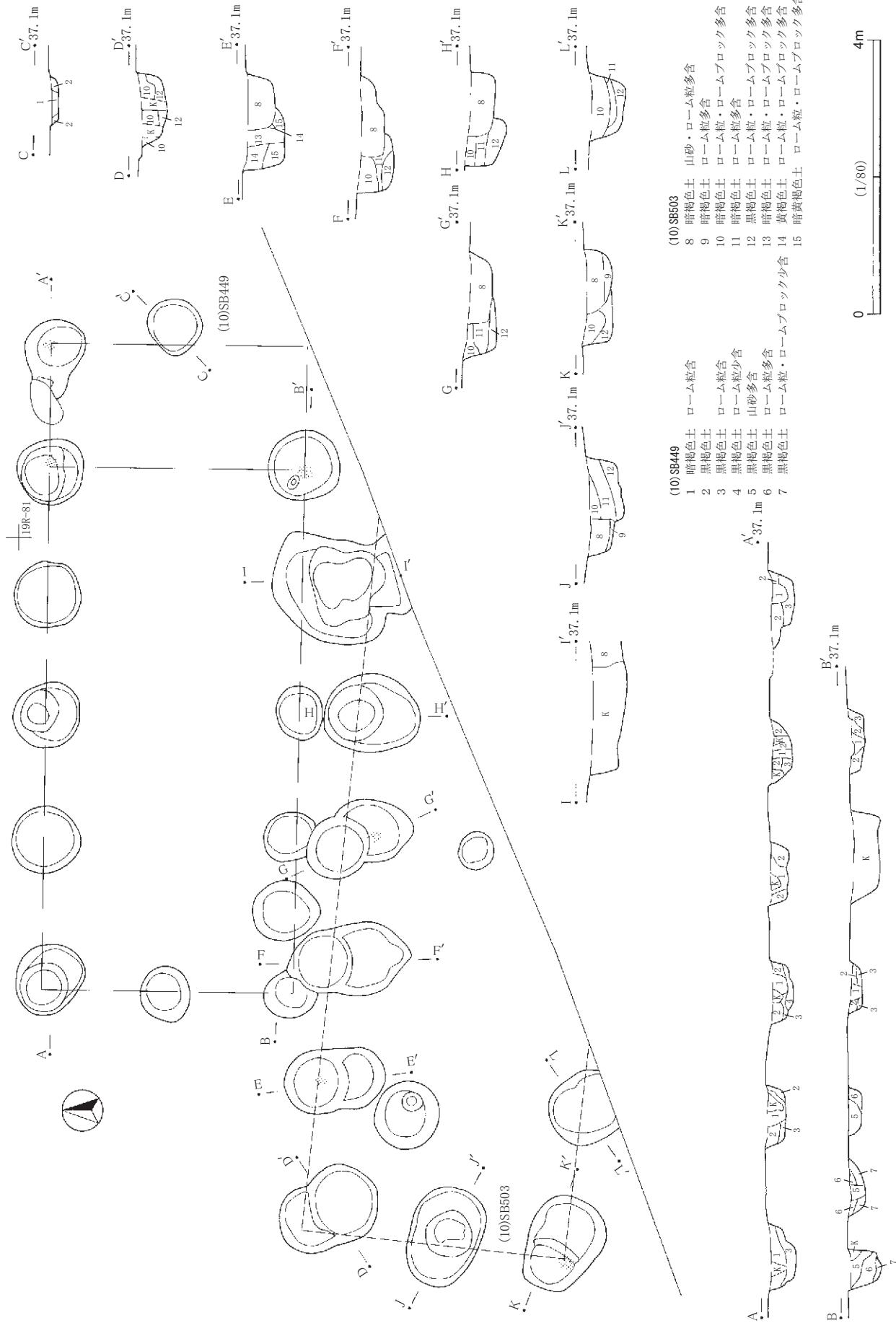
(10) SB445 (第204図、図版 29・67・69)

19Q-48グリッド周辺、(10) SB436の南、(10) SB441の西に近接する。(10) SB446とは北へ1mほどずれて重複する。土層断面から明瞭な切り合いは観察できなかったが、柱穴の検出状況から(10) SB445が新しいと思われる。桁行4間、梁行3間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-89°-Wである。桁行は総長7.04m、柱間1.50m~2.02m、梁行は総長4.88m、柱間1.50m~1.72mである。柱掘り方は円形で、径は100cm~175cmを測る。深さは32.4cm~62.5cmで南東隅の柱穴が最も深く、他はおおむね50cm前後である。北側の柱穴列からは焼土・炭化材片が検出された。南側中央の柱穴と東側南端二つ目の柱穴に柱痕跡が見られた。柱痕跡部分下層の覆土はローム粒・炭化物を少量含む暗褐色土、上層はローム粒・焼土・炭化物を少量含む黒褐色土である。

遺物の出土量は少なく、土師器杯、甕、須恵器甕を図示した。1~4は土師器杯である。1は内面黒色処理され、体部外面に墨書が見られる。ごく一部のみの遺存で文字の判読はできないが、墨痕は濃くはっきりしている。2~4の外面体部下端から底部にかけての調整は全て手持ちヘラケズリで、2のみ回転糸切り痕が見られる。5は土師器甕の底部である。杯、甕ともに胎土に砂粒と大粒の赤色スコリアを含む。6、7は須恵器甕の胴部片である。白色粒子と赤色スコリアを含む砂質の胎土で、外面の叩き目ははっきりしない。いずれも下産産である。8は鉄製の刀子か。ほかに鉄滓が3点出土している。

(10) SB446 (第204・205図、図版29・67・69)

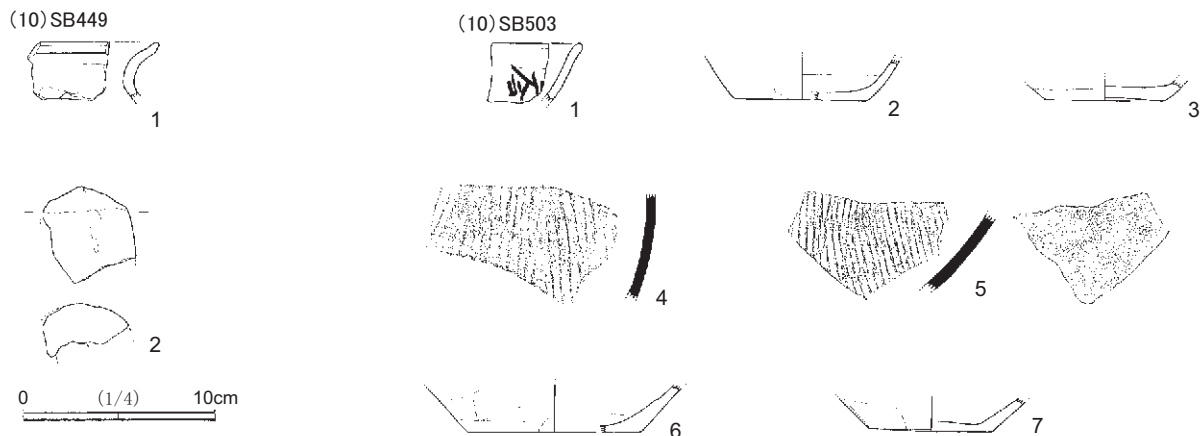
19Q-58グリッド周辺、(10) SB440の西5mほどの所に位置する。(10) SB445と南へ1mほどずれて重複する。桁行4間、梁行3間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-90°-Wである。桁行は総長7.20m、



- (10)SB503
- 8 暗褐色土 山砂・ローム粒多含
 - 9 暗褐色土 ローム粒多含
 - 10 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多含
 - 11 暗褐色土 ローム粒多含
 - 12 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多含
 - 13 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多含
 - 14 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多含
 - 15 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多含

- (10)SB449
- 1 暗褐色土 ローム粒含
 - 2 黒褐色土 ローム粒含
 - 3 黒褐色土 ローム粒少含
 - 4 黒褐色土 山砂多含
 - 5 黒褐色土 ローム粒多含
 - 6 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多含
 - 7 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多含

第206図 (10) SB449・(10) SB503①



第207図 (10) SB449・(10) SB503②

柱間1.50m～2.10m、梁行は総長4.74m、柱間1.46m～1.80mである。柱掘り方は円形で、径は87cm～140cmを測り、深さは23.5cm～54.6cmである。南側柱列東から二つ目の柱穴にのみ柱痕跡が見られた。柱痕跡部分の覆土は下層がローム粒を少量含む暗褐色土、上層はローム粒を少量含む黒褐色土である。

遺物は「三倉」の墨書がある土師器杯、須恵器杯などを図示した。1は暗灰黄色を呈する須恵器杯である。白色粒子を多く含み、被熱のためか器面がザラついている。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。2～4は土師器杯である。2は口縁部に向かって肥厚しながら開く杯で、にぶい橙色を呈する。外面口唇部から口縁部にかけて煤が付着している。3、4は底部片で、3は外面に「三倉」と墨書されている。4は回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリが施されている。ほかに外面に叩き目をもつ須恵器甕片が出土している。

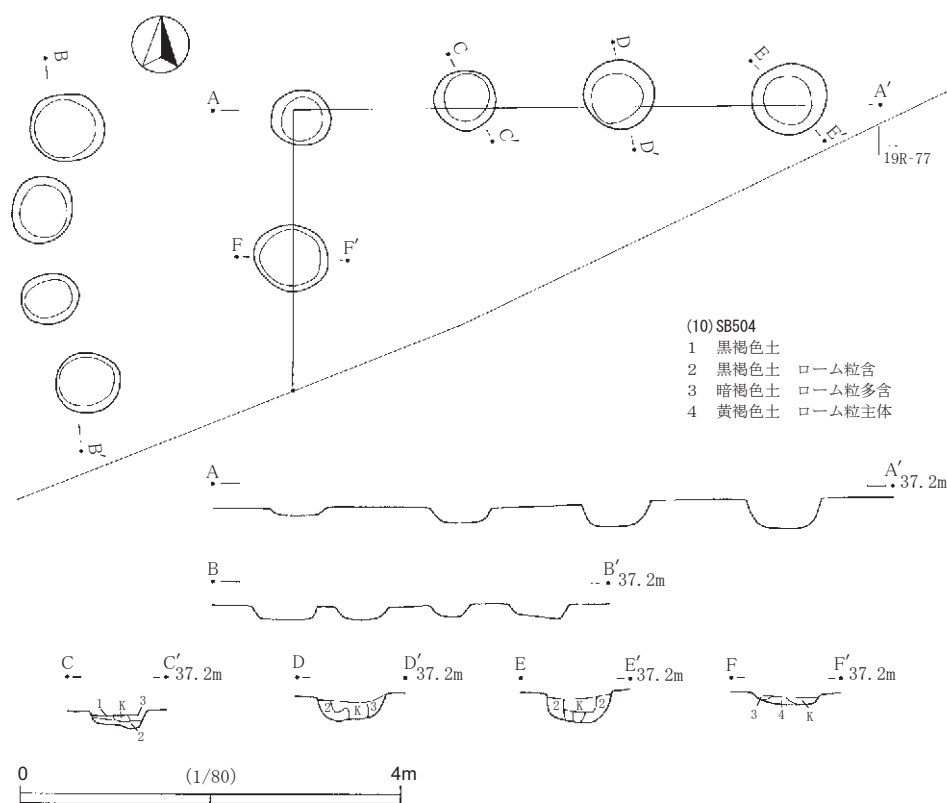
(10) SB449 (第206・207図、図版29)

19Q-89グリッド周辺、(10)SB440から南へ9mに位置し、北側の掘立柱建物跡群とは少し離れる。当初、(10)SB449と(10)SB450の2棟と考えられていたが、柱穴に重複や切り合いが見られず、建て替え等想定できないことから、一続きの建物であると判断した。基本的に桁行6間、梁行2間の側柱東西棟建物と考えられるが、北側は5間であり、南側は南東隅に柱穴が見られない。また、北側の柱穴は比較的規則的に並んでいるが、南側は乱れている。主軸方位はN-89°-W、桁行は総長9.48m、北側の柱間1.80m～2.20m、南側の柱間1.10m～9.50m、梁行は総長3.76m、柱間1.80m～1.88mである。柱間は桁行でばらつきが目立つものの、桁行・梁行とも基本は1.8m間隔と思われる。柱穴の掘り方は円形で、径は75cm～150cm、深さは17.3cm～55.2cmである。北側及び南側柱穴列の東寄りの柱穴に柱痕跡が見られた。

遺物の出土量は少なく、土師器甕、羽口片を図示した。1は口唇部外面に稜を有する土師器甕である。赤褐色を呈し、白色粒子を多く含む。2は羽口である。先端部に近い部位と思われ、遺存部上端がわずかに灰色に変色している。

(10) SB503 (第206・207図、図版29)

19Q-98グリッド周辺に位置する。(10)SB449の南に隣接し、(10)SB449の柱穴を一部切っている。桁行6間以上、梁行2間と思われるが、南東側が調査区外のため判然としない。主軸方位はN-84°-W、桁行は総長10.54m以上、柱間1.70m～2.30m、梁行は総長3.88m、柱間1.80m～2.10mで、(10)SB449と同規模の掘立柱建物跡である。柱穴の掘り方は円形を基本とするが、長円形に重なり合っているものが



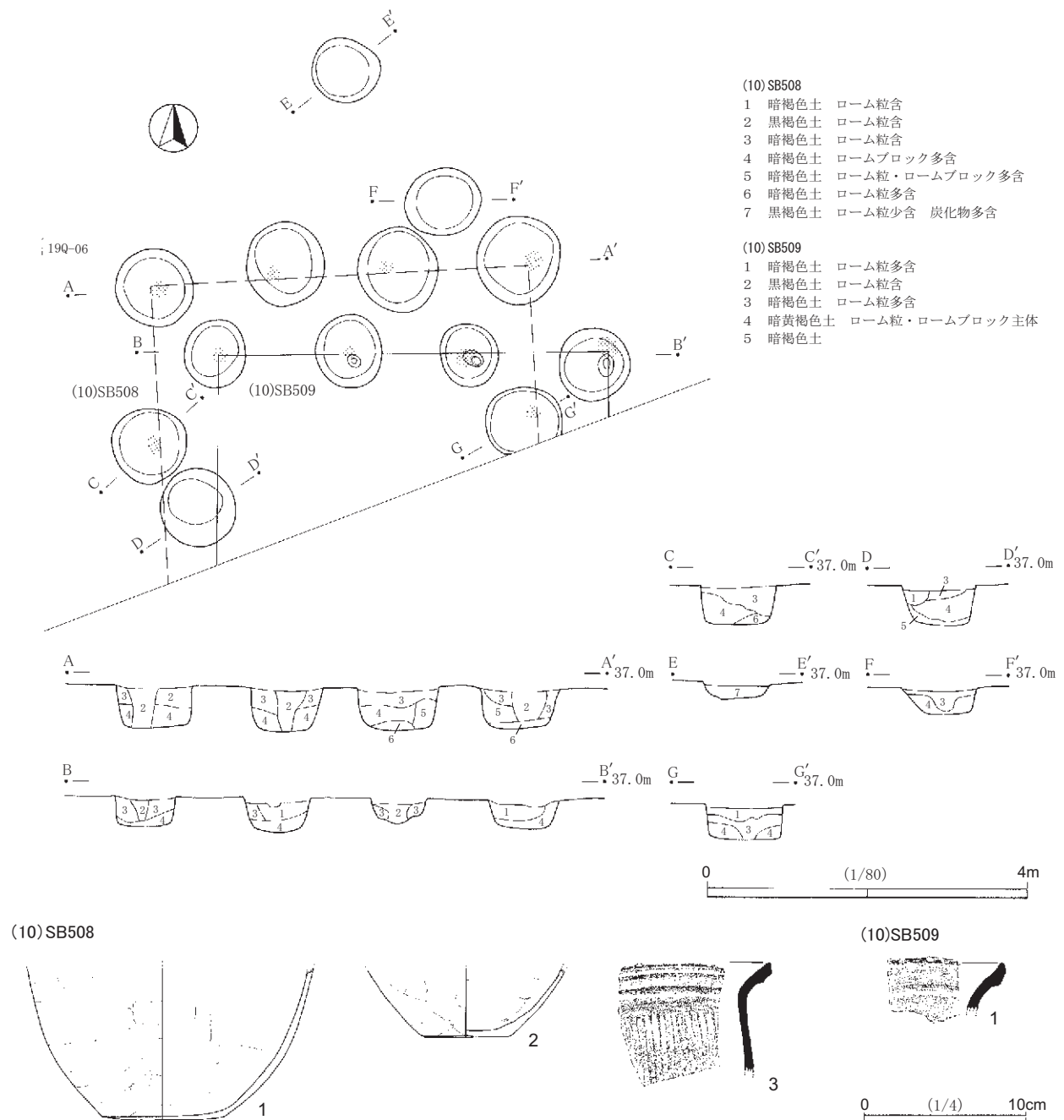
第208図 (10) SB504

多く、更なる建て替えも想起される。径は103cm～182cm、深さは41.8cm～73.8cmと深い。南西隅と北側柱穴列の一部に柱痕跡が見られた。柱痕跡部分の覆土はローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土である。建て替え後と思われる部分の覆土は山砂とローム粒を多く含む暗褐色土の単一層、あるいはローム粒を多く含む暗褐色土との二層からなり、特異な様相を呈する。

遺物は墨書のある土師器杯、土師器甕、須恵器甕などを図示した。1は外面に墨書が見られる土師器杯の口縁部片である。墨痕がかなり薄く判然としないが、横位に「三倉」と記されているようである。胎土に砂粒を多く含み、明赤褐色を呈する。2、3は土師器杯の底部である。砂粒、雲母と少量の赤色スコリアを含み、橙色を呈する。回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリが施される。4、5は外面に叩き目を有する須恵器甕の胴部片である。4は赤褐色を呈する軟質の須恵器で、砂粒を多く含む。5は灰色を呈し、外面遺存部上端に釉が付着している。内面には同心円状の当て具痕が見られる。6、7は土師器甕の底部である。胎土は共通しており多量の白色粒子と少量の赤色スコリアを含む。

(10) SB504 (第208図、図版29)

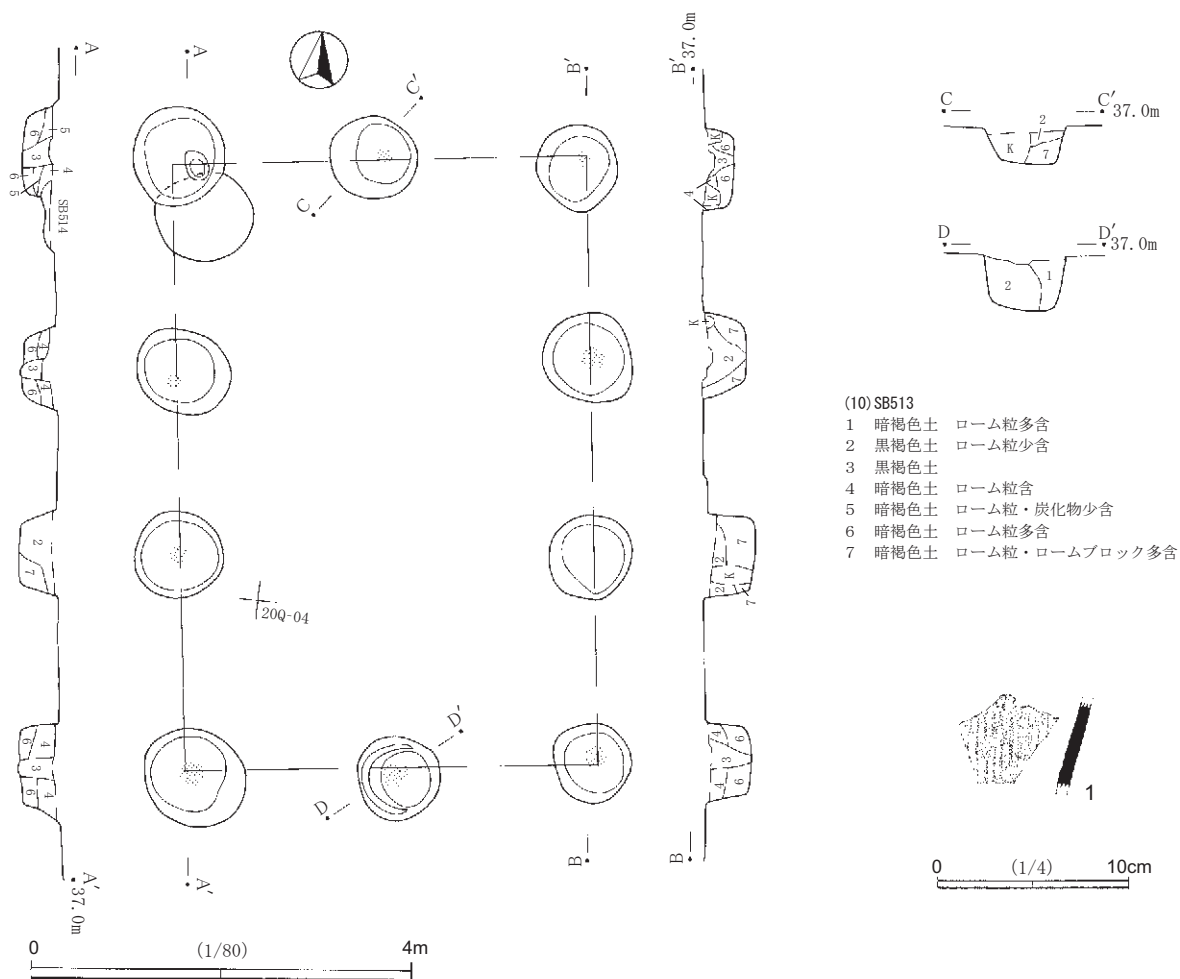
19R-75グリッド周辺、奈良・平安時代の大型竪穴住居跡 (10) SI412の東3mほどに位置する。南東部分の大半が調査区外であり、他の掘立柱建物跡と離れている。桁行4間以上、梁行2間以上の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-89°-Eである。調査した範囲での桁行は総長6.2m、柱間1.65～1.8m、梁行は総長2.96m、柱間1.60mである。柱穴の掘り方は円形で、径は63cm～84cmとやや小さい。深さは7.8cm～31.7cmで、北西隅の柱穴が浅く、東端の柱穴が最も深い。覆土はローム粒を含む黒褐色土・暗褐色土が主体である。遺物は出土しなかった。



第209図 (10) SB508・(10) SB509

(10) SB508 (第209図、図版29・67)

20Q-06グリッド周辺に位置する。東へ2m程の所に(10)SB503が、西へ4m程の所に(10)SB513が所在し、掘立柱建物群の一角を担うが、北側は(10)SB517まで15mと空間が存在する。(10)SB509と重複し、南半は調査区外である。桁行3間、梁行2間以上の側柱東西棟建物と考えられるが、桁梁逆の可能性もある。主軸方位はN-87°-E、桁行は総長4.73m、柱間1.40m~1.65m、梁行は総長3.73m、柱間1.90m~2.00mである。柱穴の掘り方は円形で、径は95cm~112cmを測り、深さは48.6cm~57.6cmである。すべての柱穴に柱痕跡が見られ、柱痕跡部分の覆土は下層がロームブロックを多く含む暗褐色土、上層がローム粒を含む暗褐色土である。



第210図 (10) SB513

遺物の出土量は少なく、土師器甕、須恵器甕を図示した。1、2は土師器甕である。1は砂粒と赤色スコリアを含み、胴部中位は縦方向、下位は横方向のヘラケズリによってかなり薄く仕上げられている。2は白色粒子を多く含み、赤褐色を呈する。3は胴部外面に叩きが見られる須恵器甕の口縁部片である。色調はオリーブ黒色で、胎土に白色粒子を多く含む。

(10) SB509 (第209図、図版29)

20Q-06グリッド周辺に位置する。(10) SB508とは南東方向へずれて重複するが、柱穴が切り合っていないため新旧関係は不明である。南東側は調査区外で、北側柱穴列と西側柱穴列の一部が検出された。桁行3間、梁行2間以上の側柱東西棟建物と考えられるが、桁梁が逆の可能性もある。主軸方位はN-89°-E、桁行は総長4.87m、柱間1.56m~1.70m、梁行は総長2.63m、柱間1.84mである。柱穴の掘り方は円形で、径は80cm~96cm、深さは26.4cm~49.5cmである。北側のすべての柱穴に柱痕跡が見られた。覆土は下層がローム粒・ロームブロック主体の暗黄褐色土、上層がローム粒を含む暗褐色土及び黒褐色土である。遺物の出土量は少なく須恵器甕を図示した。内面橙色、外面明赤褐色を呈する甕の口縁部である。

(10) SB513 (第210図、図版30)

19Q-94グリッド周辺、(10) SB508の西5mに位置する。掘立柱建物群の西側に並び、南北棟建物4棟が重なり合う。(10) SB513は4棟のうち一番南にあたる。北西部で(10) SB514と重なり合うが、新旧関係は不明である。桁行3間、梁行2間の側柱南北棟建物で、主軸方位はN-1°-Wである。桁行は総長6.56

m、柱間1.96m～2.25m、梁行は総長4.38m、柱間2.10m～2.26mである。柱穴の掘り方は円形で、径は84cm～113cm、深さは31.6cm～59.3cmである。北西隅と東側柱列の南から二つ目の柱穴を除き柱痕跡が見られた。柱痕跡部分の覆土は黒褐色土である。柱痕跡周囲の埋土は下層がローム粒を多く含む暗褐色土、上層がローム粒を含む暗褐色土である。

遺物の出土量は少なく、須恵器甕を図示した。外面に叩き目を有する胴部片で、にぶい黄褐色を呈する。白色粒子、雲母を多く含む。

(10) SB514 (第211・212図、図版30)

19Q-83グリッド周辺に位置する。北東部で(10)SB516、北北西で(10)SB515、南東部で(10)SB513と重なり合う。柱穴同士は切り合っていないため、新旧関係は不明である。桁行4間、梁行2間の側柱南北棟建物で、主軸方位はN-6°-Wである。桁行は総長8.12m、柱間1.90m～2.17m、梁行は総長5.32m、柱間2.40m～2.89mである。柱穴の掘り方は円形で、径は75cm～147cm、深さは20.5cm～44.5cmである。北西隅と南側中央の柱穴、及び西側柱列の南から二つ目の柱穴に柱痕跡が見られた。柱痕跡部分の覆土はローム粒を多く含む黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

(10) SB515 (第211・212図、図版30)

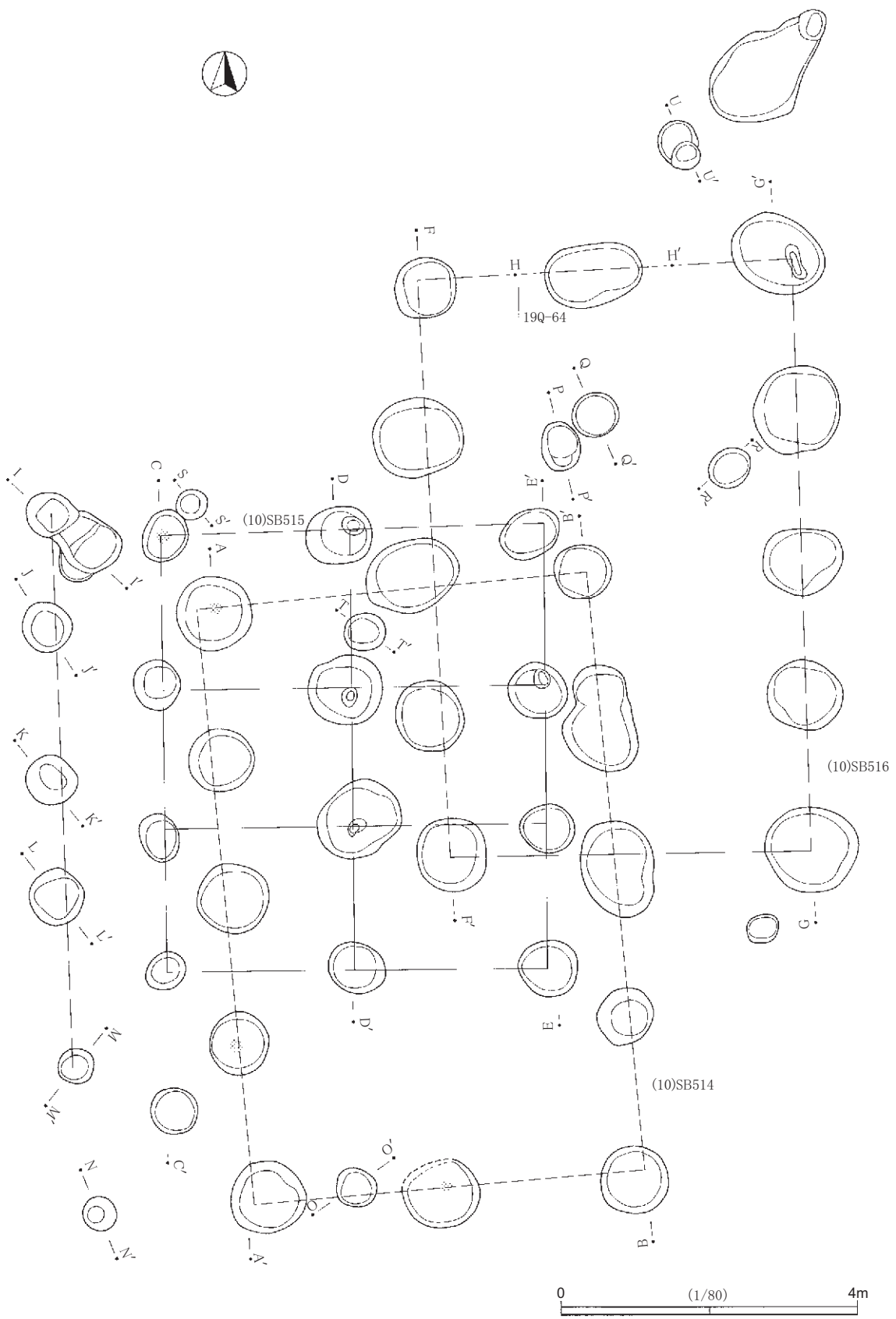
19Q-73グリッド周辺、重なり合う4棟の建物の最も西寄りに位置する。本調査区で検出された掘立柱建物群全体からみても、最西端にあたる。桁行3間、梁行2間の総柱南北棟建物で、西側には更に柱穴列が並ぶ。本遺構に伴う堀跡であろう。建物の主軸方位はN-1°-W、桁行は総長6.04m、柱間1.90m～2.10m、梁行は総長5.20m、柱間2.55m～2.63mである。柱穴の掘り方は円形で、径は56cm～117cm、深さは17.0cm～56.6cmである。確認面で北西隅の柱穴に柱痕跡が見られたものの、土層断面でははっきりとしなかった。柱穴列の主軸方位はN-2°-Wで、柱穴間の距離は1.60m～2.30m、柱掘り方の径は48.0cm～78.0cm、深さは25.7cm～37.0cmである。遺物は出土しなかった。

(10) SB516 (第211・212図、図版30)

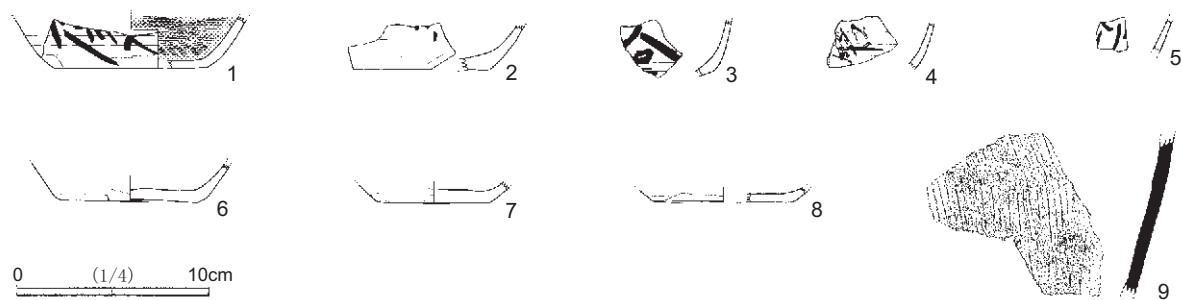
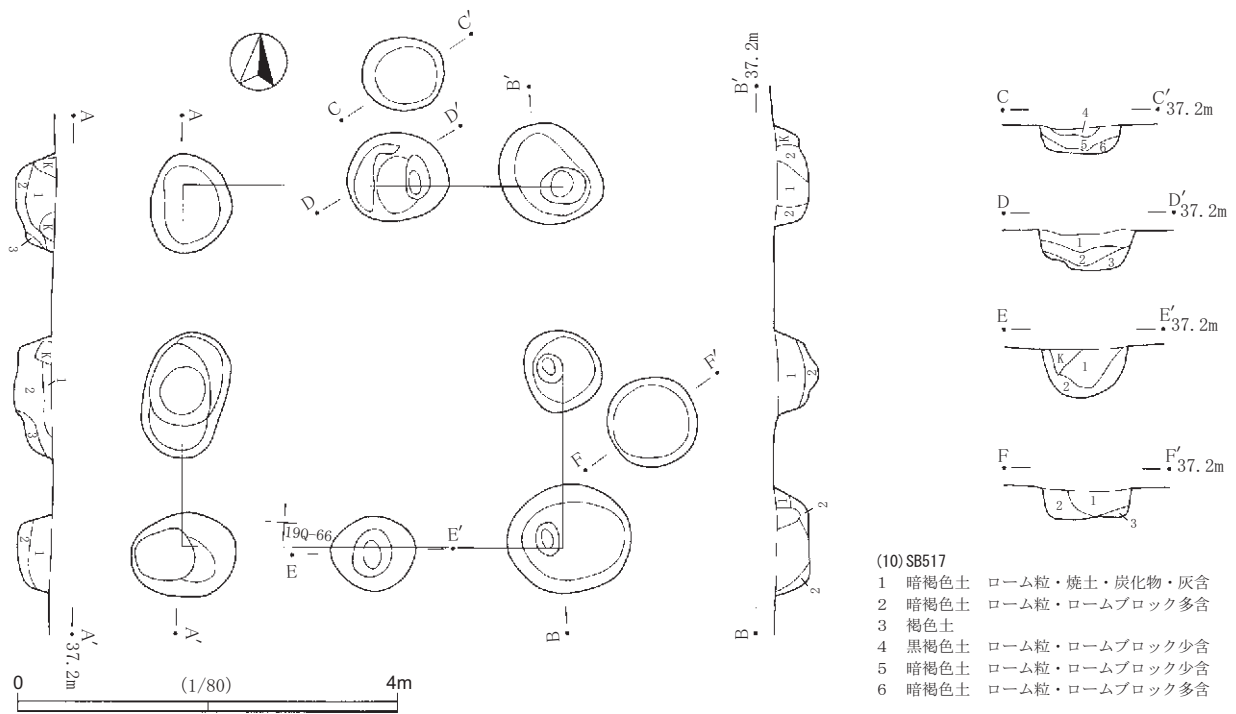
19Q-64グリッド周辺に位置し、(10)SB514、(10)SB515の北東部分と重なり合い、一部の柱穴は(10)SB514と共有する。桁行4間、梁行2間の側柱南北棟建物で、主軸方位はN-3°-Wである。桁行は総長8.04m、柱間1.83m～2.12m、梁行は総長5.04m、柱間2.30m～2.66mである。柱穴の掘り方は円形で、径は85cm～132cm、深さは34.5cm～45.5cmである。明瞭な柱痕跡はみつからなかった。覆土は下層がローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土、上層はローム粒を多く含む暗褐色土である。遺物の出土は少なく、墨書「三」のある土師器杯1点を図化した。外面に手持ちヘラケズリが施された底部片で、橙色を呈する。

(10) SB517 (第213図、図版30)

19Q-56グリッド周辺に位置する。(10)SB517の東には(10)SB446が、西には(10)SB516が2mほどのほぼ同距離で所在する。南側の(10)SB508とは約15m離れている。桁行2間、梁行2間の側柱建物で、東西方向が若干長いこと南北棟と考えた。主軸方位はN-86°-E、桁行は総長4.20m、柱間1.80m～2.40m、梁行は総長3.84m、柱間1.70m～2.14mである。柱穴の掘り方は円形で、径は87cm～134cm、深さは29.8cm～56.1cmである。覆土中層から上層にかけて焼土粒・炭化物・灰白色土(灰か)を含む層が見られる。灰白色土は焼土を少量含み、粘性が強い。特に中央より北寄りの柱穴で顕著で、建物焼失後柱跡を埋め戻した可能性がある。覆土下層はローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土である。



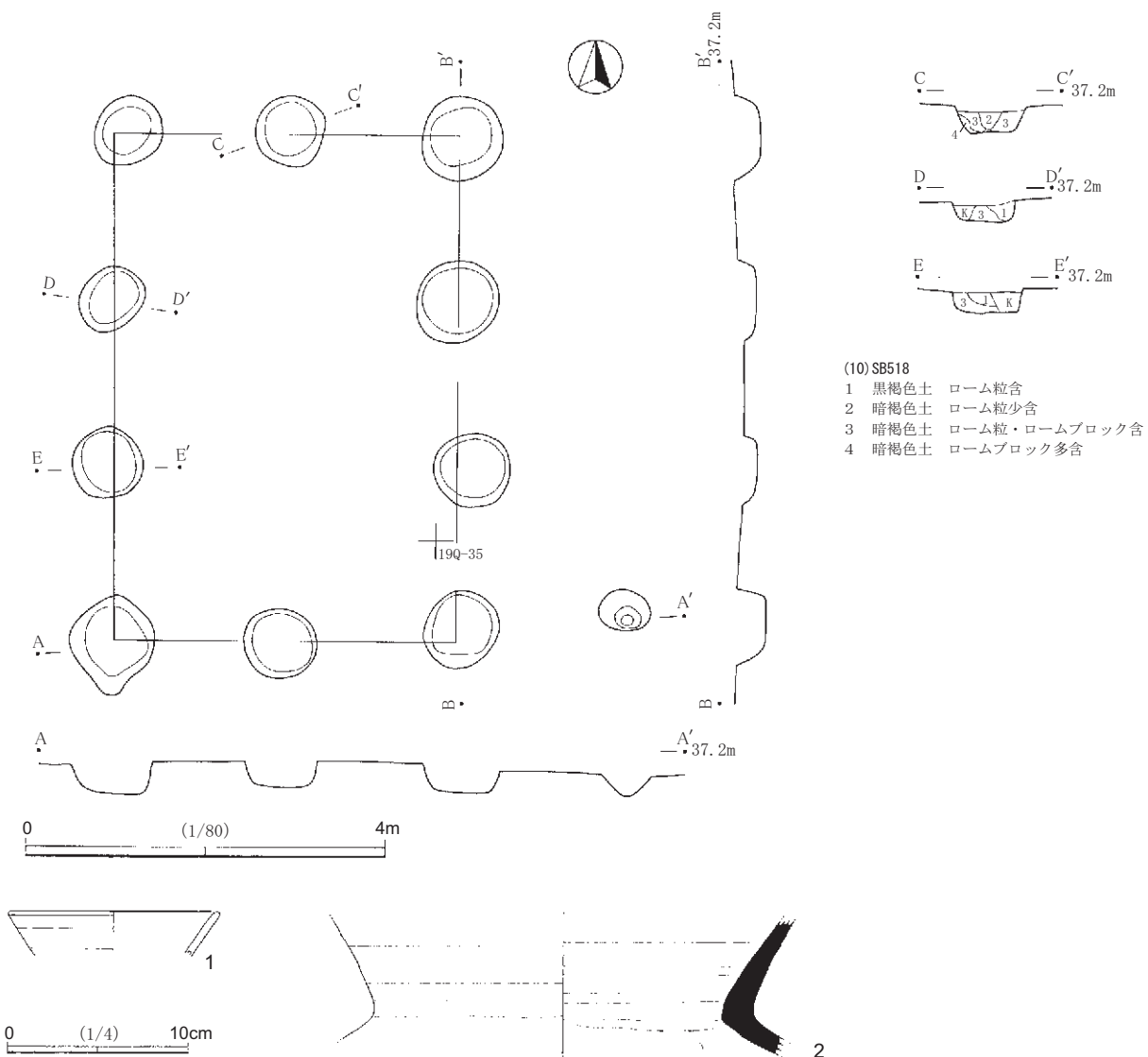
第211图 (10) SB514 · (10) SB515 · (10) SB516①



第213図 (10) SB517

遺物は「倉」「三倉」の墨書が記された土師器杯、須恵器甕、鉄滓などが出土した。1～8は土師器杯である。1は内面黒色処理された杯である。体部外面横位に墨書が記されているが、一部のみの遺存のため判読は難しい。色調は赤褐色、胎土に砂粒、赤色スコリア、雲母、微量の白色針状物を含む。内面の調整はミガキ、外面体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。2～5は体部外面に墨書が見られる杯である。2は体部下位から底部にかけての破片で、体部に残画が見られる。横位の「三」か。3は正位に、4は横位に「倉」と記されているようである。5はごく一部のため判然としないが、横位に「三倉」と記されたものか。6～8は底部片である。6は胎土に砂粒、赤色スコリアを含むものの堅緻であり、にぶい黄橙色を呈する。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。7は大粒の赤色スコリアを含み、にぶい橙色を呈する。底部回転糸切りの後回転ヘラケズリを施す。外面体部下端の調整は手持ちヘラケズリである。8の胎土も6と同様であるが、ややザラついている。回転糸切りの後体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。

9は須恵器甕の胴部片である。外面に叩きを有する。内面の色調は灰色、外面は灰黄灰色で、断面は赤褐色である。胎土に白色粒子を多く含む。

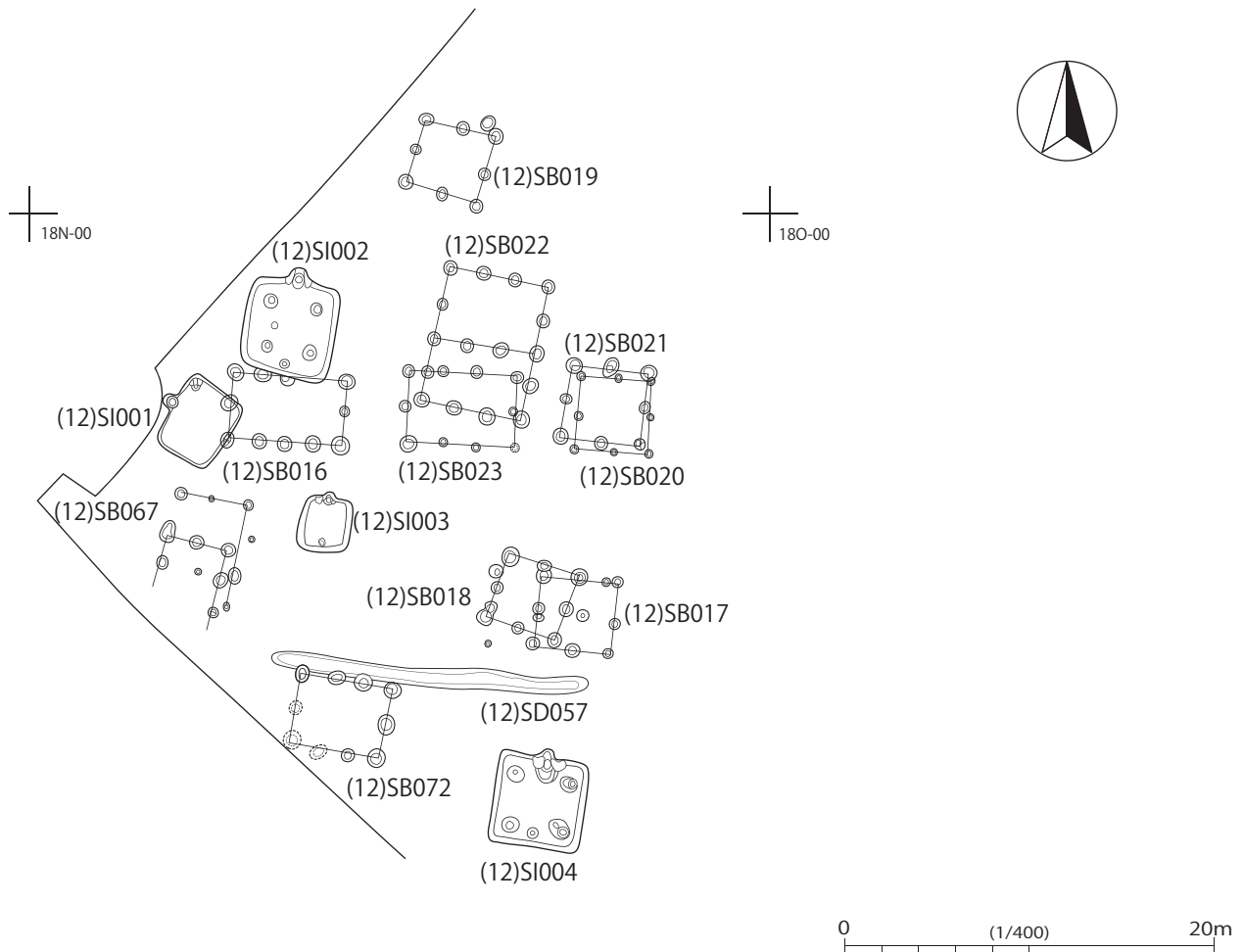


第214図 (10) SB518

(10) SB518 (第214図、図版30)

19Q-24グリッド周辺、(10) SB437の西5m程に位置する。北側の掘立柱建物群の西端にあたるが、棟の方向が異なる。(10) SB518と同じ南北棟の掘立柱建物群は西側に並び、その北端とも考えられるが、最も近い(10) SB516から10mほど離れている。桁行3間、梁行2間の側柱南北棟建物で、主軸方位はN-0°-Eである。桁行は総長5.68m、柱間1.80m~2.00m、梁行は総長3.87m、柱間1.82m~2.00mである。柱穴の掘り方は円形で、径は76cm~112cmを測る。深さは9.0cm~36.7cmで、北西隅がかなり浅い。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体である。

遺物の出土量は少なく、土師器杯1点、須恵器甕片、有孔円板を図示した。1は土師器杯の口縁部片である。色調は橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを適量含む。2は須恵器甕の肩から頸部にかけての破片である。頸部の最も細い箇所を21.2cmを測る。内面の色調は黄灰色、外面は暗褐色である。頸部内面と肩部外面に釉が見られる。胎土に白色粒子、スコリアを含む。



第215図 第3建物群配置図

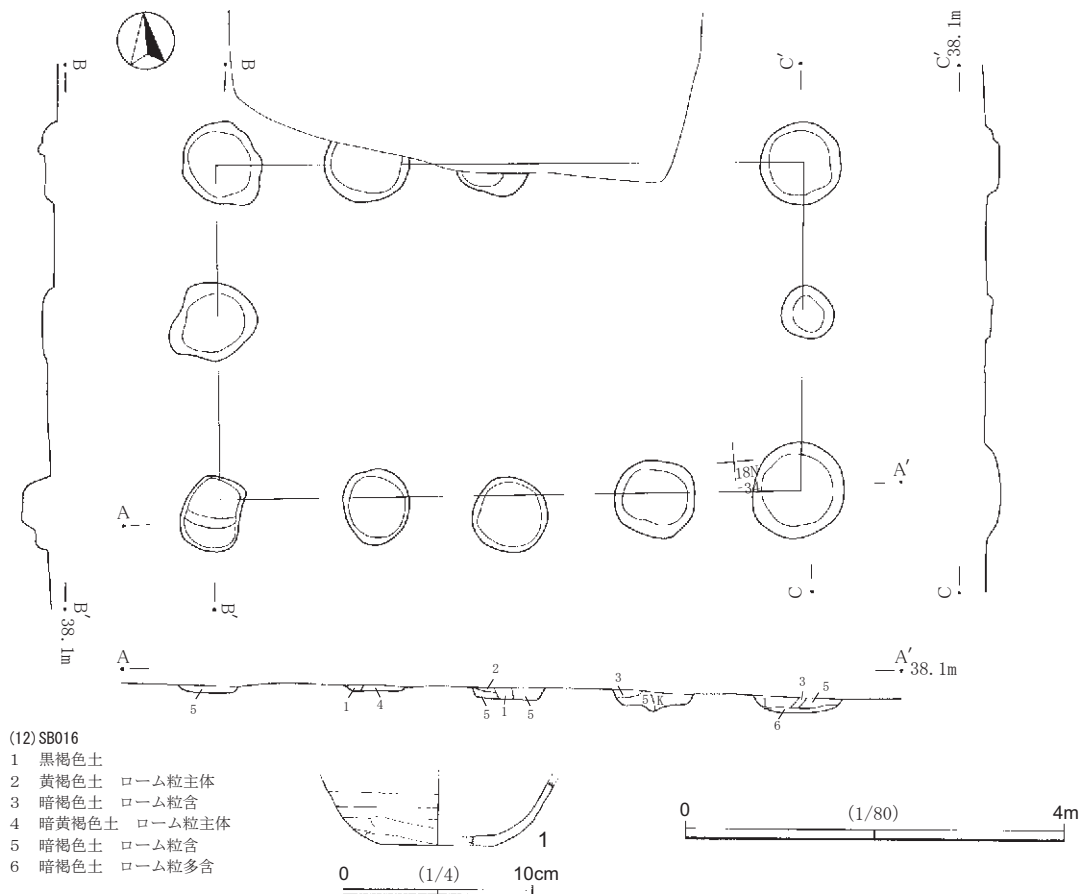
(12) SB016 (第216図、図版30)

18N-22グリッド周辺、(12) SB023の西3mに位置する。本遺構の西に(12) SI001、北に(12) SI002の一部が重なる。桁行4間、梁行2間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-86°-Wである。桁行は総長6.22m、柱間1.32m~1.74m、梁行は総長3.54m、柱間1.60m~2.00mである。柱穴の掘り方は円形で、径は57cm~100cm、深さは6.2cm~28.8cmである。柱穴は浅く、柱痕跡は見られなかった。

遺物の出土量は少なく、1点を図化した。小さめの底部から内湾しながら立ち上がる土師器杯で、口縁部を欠損する。外面は強いロクロ目を有し、体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリを施す。内面は被熱により器面が剥離している。色調はにぶい褐色、胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。

(12) SB017 (第217図、図版30)

18N-46グリッド周辺、東西に走る溝(12) SD057から北へ1m、(12) SB020の南6mに位置する。西側は(12) SB018と重なり、柱掘り方の検出状況や土層の観察結果から、(12) SB017の方が古いと思われる。桁行2間、梁行2間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-85°-Wである。桁行は総長4.16m、柱間2.00m~2.08m、梁行は総長3.85m、柱間1.70m~2.15mである。柱穴の掘り方は円形で、径は62cm~92cm、深さは12.9cm~41.6cmである。建物の内側に径62cm、深さ25.6cmの柱穴がある。建物中心より東へずれているが、底面には柱あたりが見られた。



第216図 (12) SB016

(12) SB018 (第217図、図版30)

18N-46グリッド周辺に位置する。(12) SB017と重なり、(12) SB017より新しい。桁行2間、梁行2間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-72°-Wである。桁行は総長3.98m、柱間1.88m~2.08m、梁行は総長3.76m、柱間1.70m~1.90mである。柱穴の掘り方は円形で、径は60cm~90cmを測る。深さは17.3cm~42.6cmと総じて浅く、非常に浅いところも存在する。柱痕跡は断面では確認できなかった。柱あたりと考えられる黒く硬化した面が底面に見られるところもあった。

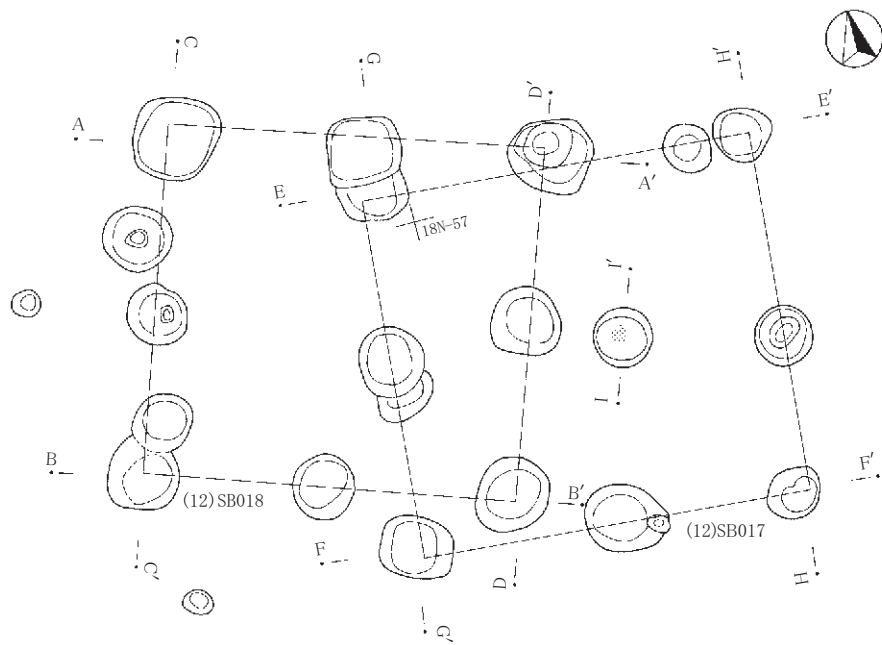
遺物の出土は少なく、須恵器甕の口縁部片1点を図化した。折り返し状の口縁で、端部がわずかに肥厚する。褐灰色を呈し、胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。下総産である。

(12) SB019 (第218図、図版31)

17N-95グリッド周辺、(12) SB022の北北西3mに位置する。桁行2間、梁行2間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-75°-Wである。桁行は総長3.78m、柱間1.80m~2.13m、梁行は総長3.61m、柱間1.70m~1.90mである。柱穴の掘り方は円形で、径は70cm~87cmを測る。深さは7.5cm~16.9cmとかなり浅く、柱痕跡も見られない。

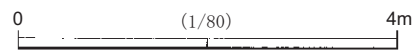
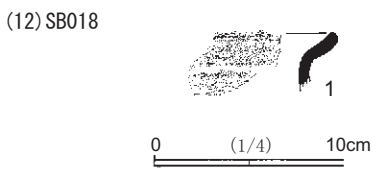
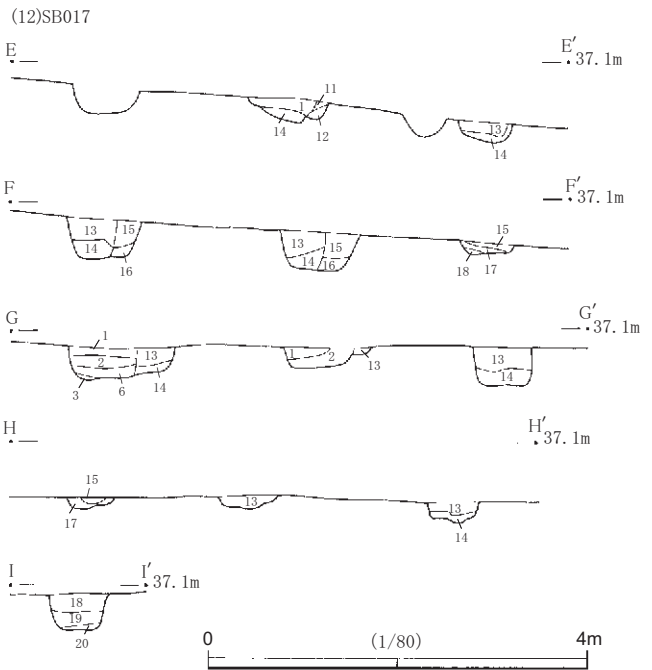
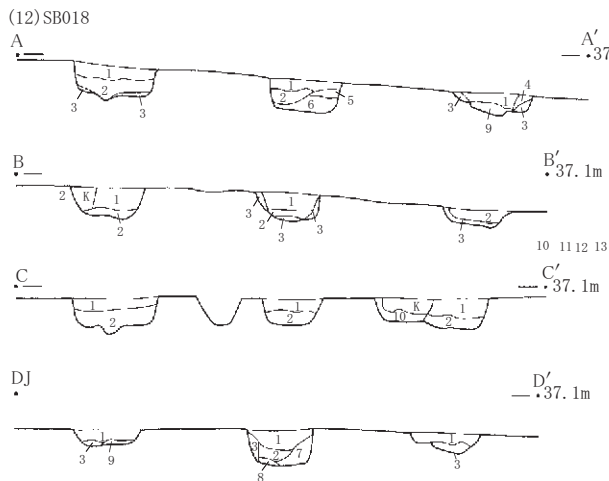
(12) SB020 (第219図、図版31)

18N-27グリッド周辺、(12) SB017の北7m弱の所に位置する。本遺構の西1.5mほどの所には(12) SB022、(12) SB023が所在する。(12) SB021と重なり合い、(12) SB021より新しい。桁行2間、梁行2間



- (12)SB017
- 13 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少含
 - 14 暗褐色土
 - 15 暗褐色土 ローム粒含
 - 16 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少含
 - 17 暗黄褐色土 ローム粒主体 暗褐色土含
 - 18 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多含
 - 19 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少含
 - 20 暗黄褐色土 ローム粒多含

- (12)SB018
- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土少含
 - 2 暗褐色土 ローム粒少含
 - 3 暗黄褐色土 ローム粒多含
 - 4 暗褐色土 ローム粒多含
 - 5 暗黄褐色土 ローム粒主体
 - 6 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック含
 - 7 暗黄褐色土 ローム粒含
 - 8 暗褐色土 ローム粒少含
 - 9 暗黄褐色土 ローム粒主体 焼土少含
 - 10 暗褐色土 ローム粒少含
 - 11 暗黄褐色土 ローム粒含
 - 12 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック含

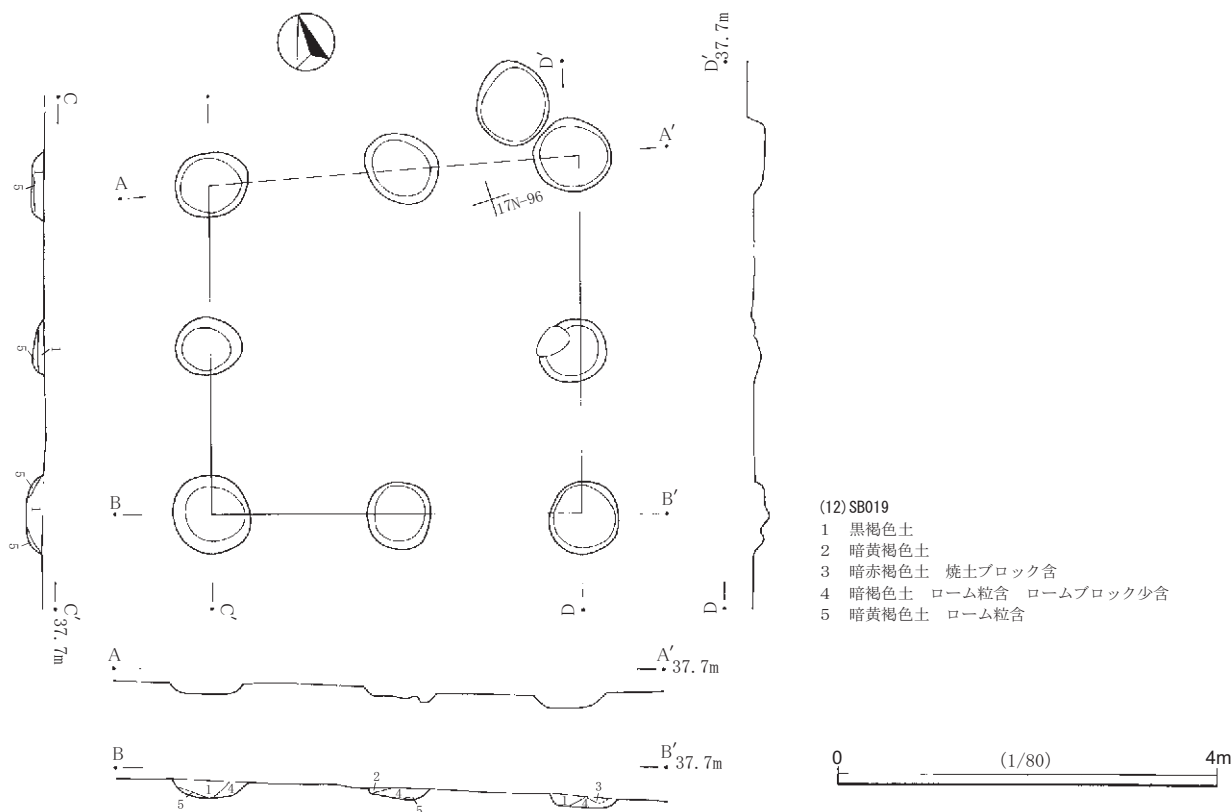


第217図 (12) SB017・(12) SB018

の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-85°-Wである。桁行は総長3.93m、柱間1.84m~2.20m、梁行は総長3.88m、柱間1.88m~2.05mである。柱穴の掘り方は円形で、径は32cm~44cm、深さは25.7cm~55.6cmである。東側は斜面のため柱穴の残存はよくない。遺物の出土は少なく、須恵器甕胴部片を1点図化した。外面に叩き目を有するが摩滅している。色調はにぶい褐色を呈し、砂粒、赤色スコリアを含む。

(12) SB021 (第219図、図版31)

18N-27グリッド周辺に位置する。(12) SB020と重なり、(12) SB020より古い。桁行2間、梁行2間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-83°-Wである。桁行は総長4.50m、柱間2.00m~2.20m、梁行は



第218図 (12) SB019

総長4.00m、柱間1.80m～2.10mである。柱穴の掘り方は円形で、径は60cm～104cm、深さは10.5cm～41.1cmである。

遺物の出土は少なく、6点を図化した。1、2は内面ミガキ及び黒色処理が施された土師器杯の底部である。外面体部下位から底部にかけての調整は手持ちヘラケズリである。1はにぶい褐色を呈する。2は内外面とも被熱によると思われる器面の剥離が見られる。色調はにぶい橙色で、胎土に白色針状物を少量含む。3、4は土師器杯の底部片で、3は黄橙色を呈する。外面体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリが施され、底部に糸切り痕がわずかに残る。胎土に砂粒、雲母、赤色スコリアを含む。4は底部外面に墨書の残画が見られる。胎土は3と類似しており、同一個体の可能性がある。

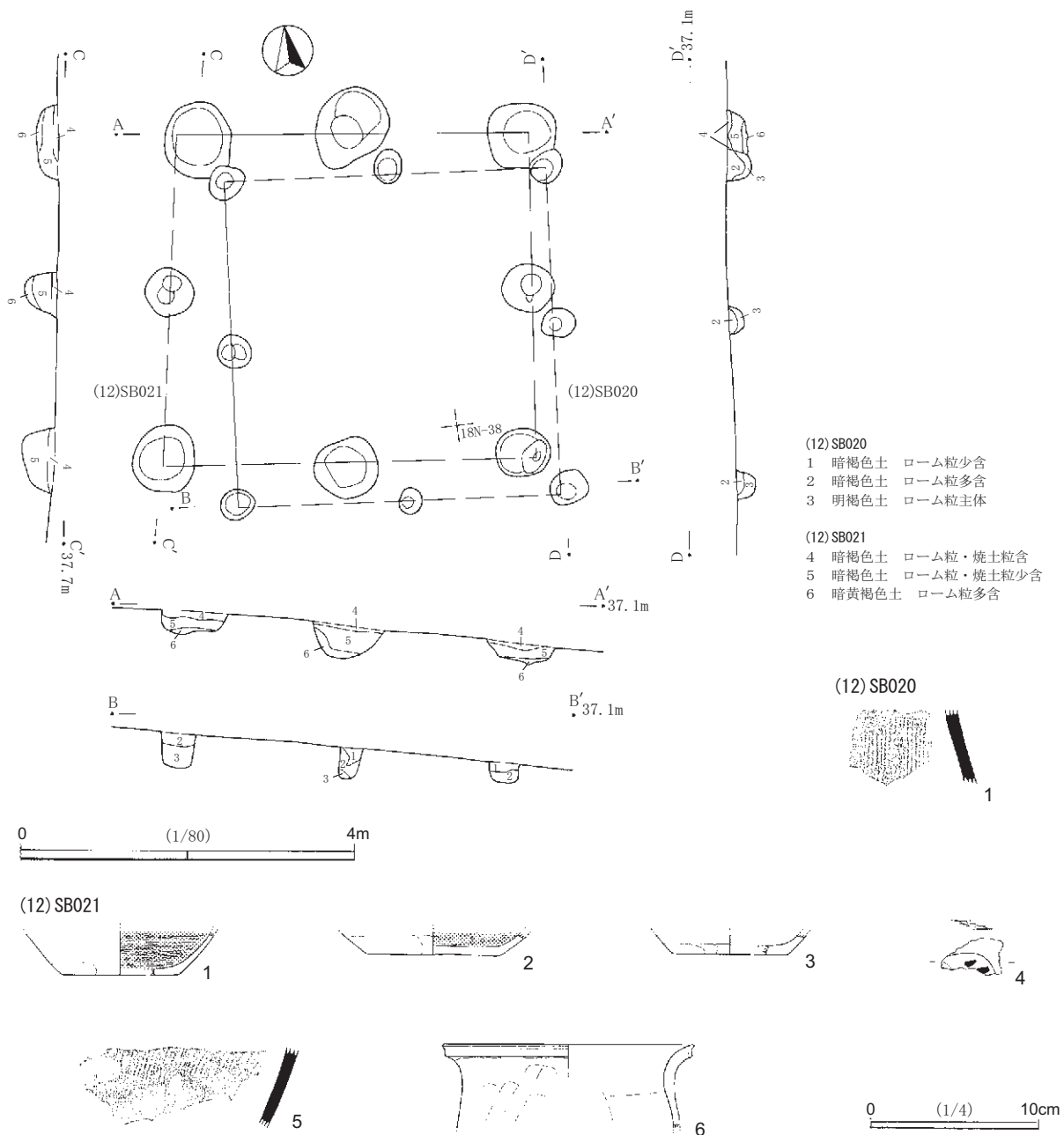
5は須恵器甕の胴部片である。叩きの後下位にヘラケズリが施される。内面の色調は褐灰色、外面は黒褐色、胎土に多量の白色粒子、スコリアを含む。下総産である。

6は土師器甕の口縁部である。胴部があまり張らず、口縁部に最大径をもつものと思われる。口縁部は肥厚しながら外反し、外面に稜をもつ。色調は明赤褐色、胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。

(12) SB022 (第220図、図版31)

18N-05グリッド周辺、(12) SB019の南3mに位置する。南側で(12) SB023と重なる。桁行4間、梁行3間の側柱南北棟建物で、桁行中央に間仕切柱を有する。主軸方位はN-12°-E、桁行は総長7.40m、柱間1.50m～2.10m、梁行は総長5.56m、柱間1.80m～1.90mである。桁行の柱間は東西とも南端がやや狭い。柱穴の掘り方は円形で、径は75cm～94cmを測り、深さは13.1cm～25.1cmである。

遺物の出土は少なく、土師器甕1点を図化した。1は厚みのある小型の甕で、口縁部が短く外反し、端

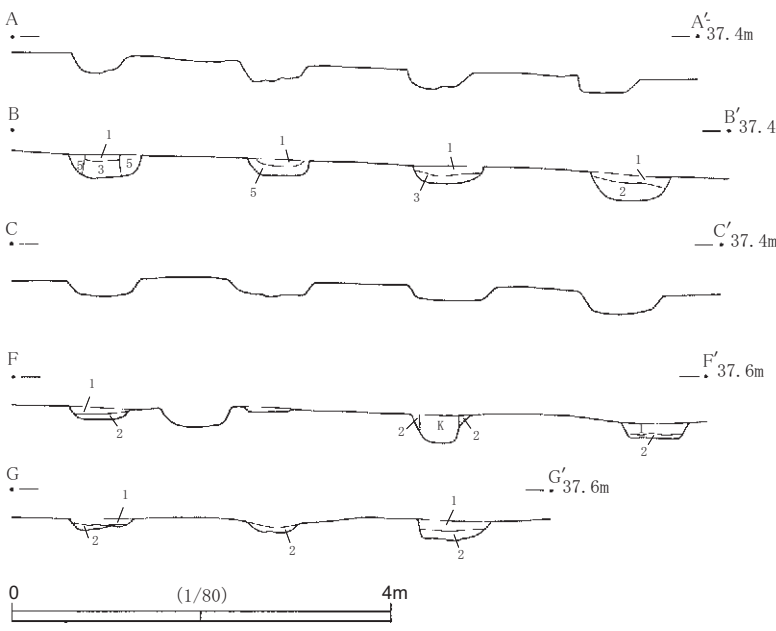
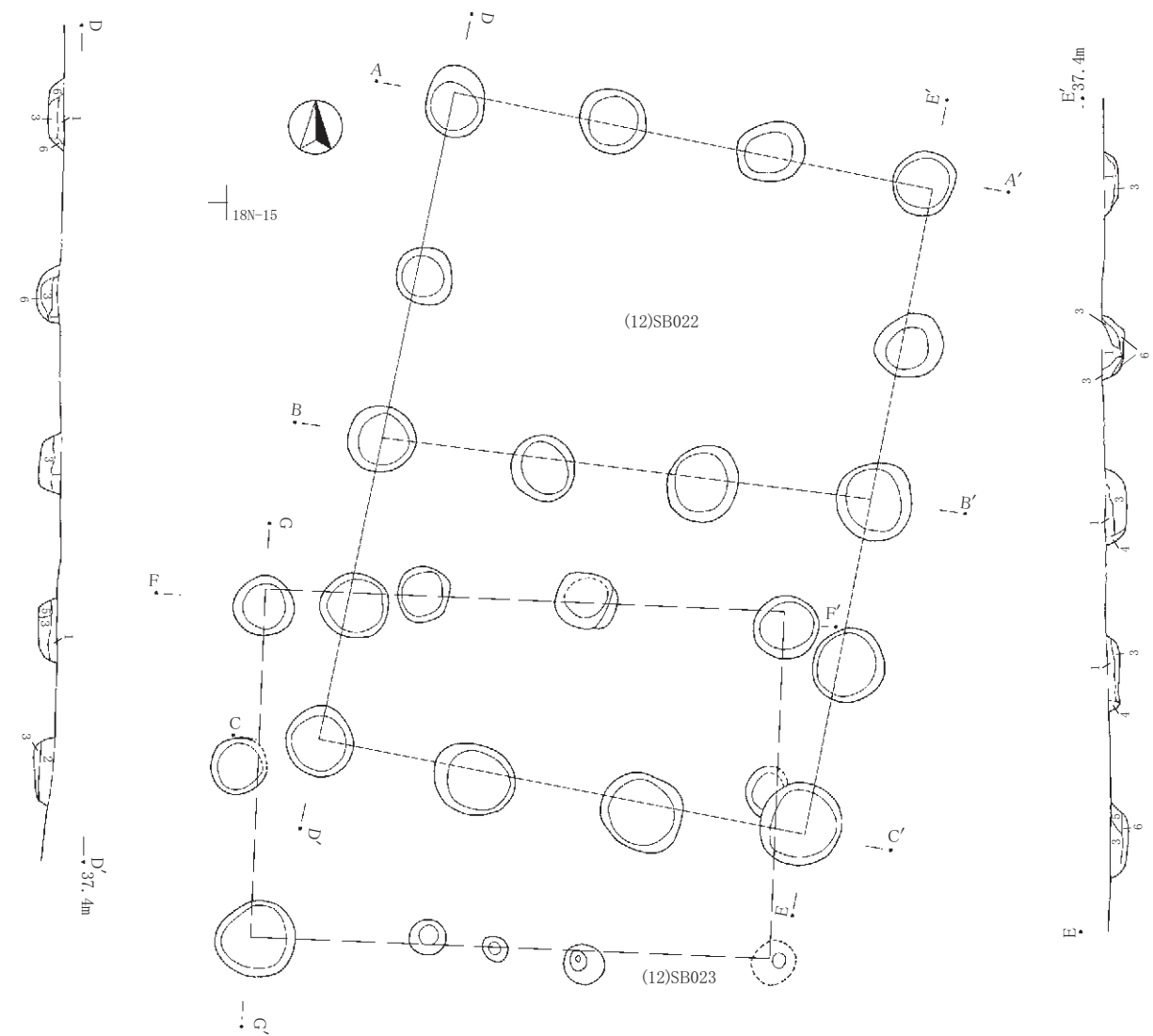


第219図 (12) SB020・(12) SB021

部をつまみ上げている。胴部外面に縦方向のヘラケズリが施される。赤灰色を呈し、砂粒を多く含む。

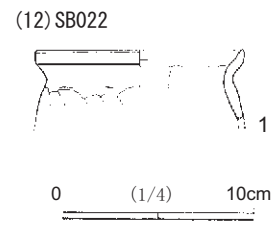
(12) SB023 (第220図、図版31)

18N-25グリッド周辺に位置し、2m西に(12)SB016、5m南に(12)SB018、2m東には(12)SB021が所在する。(12)SB022と重なり合うが、新旧関係ははっきりしない。桁行3間、梁行2間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-87°-Wである。桁行は総長5.80m、柱間1.70m~2.20m、梁行は総長3.92m、柱間1.90m~2.00mである。柱穴の掘り方は円形で、径は42cm~90cm、深さは4.0cm~34.7cmと総じて浅い。

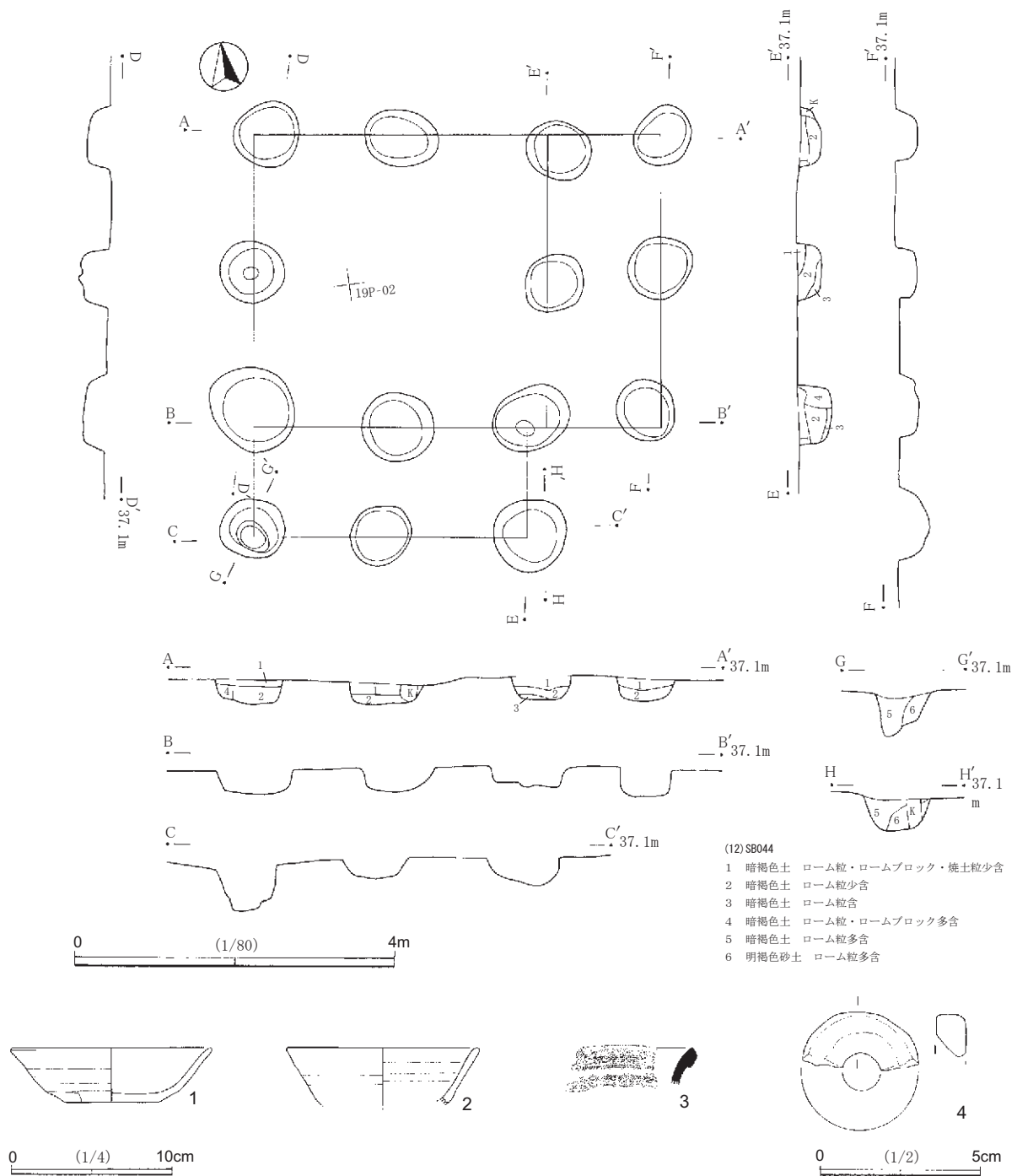


- (12) SB022
- 1 暗褐色土 ローム粒多含 焼土粒・炭化物少含
 - 2 暗褐色土 ローム粒含 焼土粒・炭化物少含
 - 3 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物含
 - 4 暗黄褐色土 ローム粒主体
 - 5 暗褐色土 ロームブロック含
 - 6 暗褐色土 ローム粒含

- (12) SB023
- 1 暗褐色土 ローム粒少含
 - 2 暗褐色土 ローム粒含



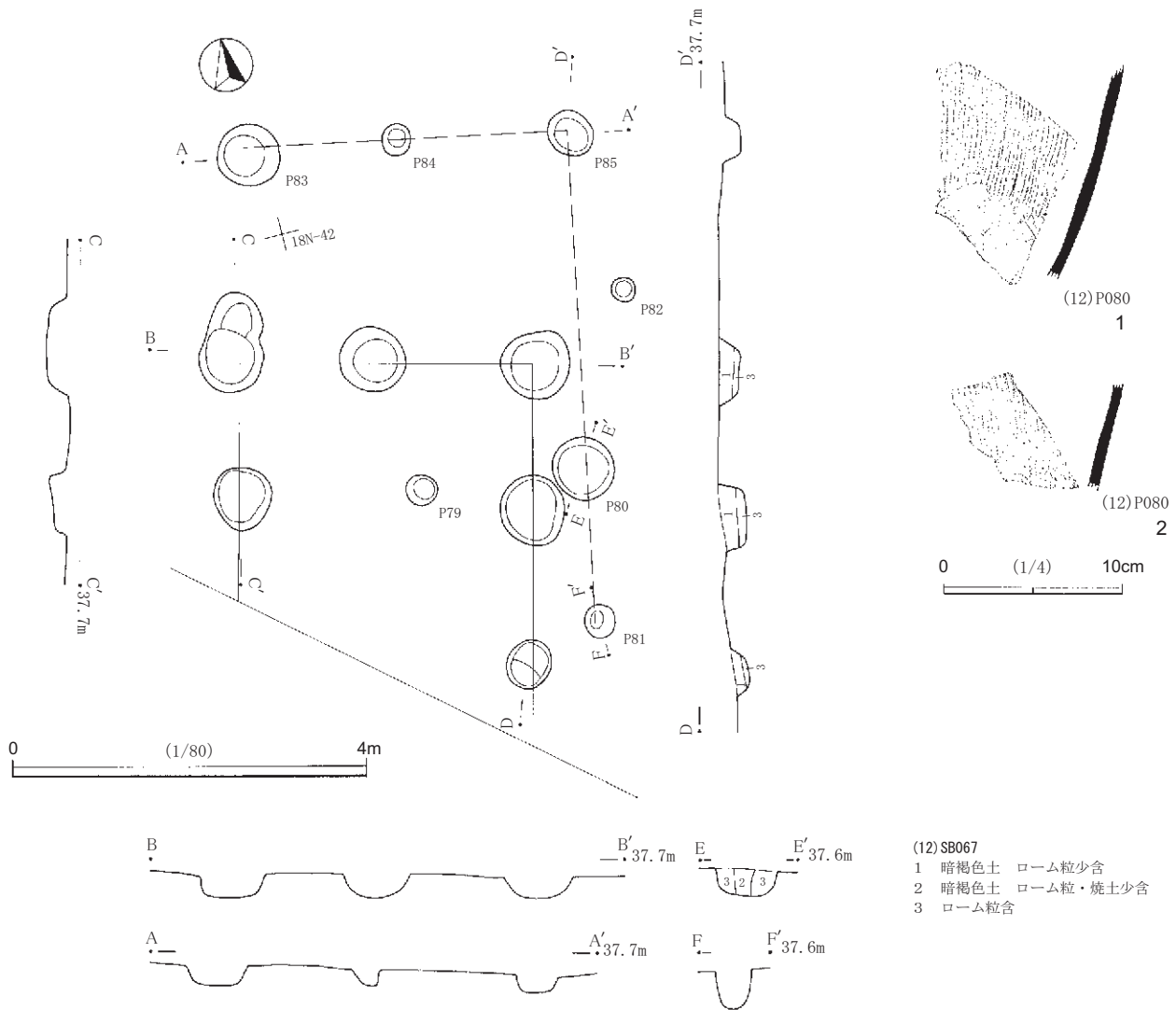
第220図 (12) SB022・(12) SB023



第221図 (12) SB044

(12) SB044 (第221図、図版31)

19P-91グリッド周辺、(12) SI045の西1.5m、東西に走る溝 (12) SD057から南へ7mほどの所に位置する。東の掘立柱建物跡群 (平成12年度調査) と西の掘立柱建物跡群 (平成19年度調査) の中間にあたり、東西ともに50mほどの距離である。建て替えが行われた建物跡で、桁行3間、梁行2間の東西棟建物を南北棟に建て替えたか、もしくは逆の可能性はあるが、柱穴が切り合っておらず新旧関係は不明である。主軸方位は桁行を東西に取った場合はN-83°-W、南北に取った場合はN-8°-Eである。東西棟の桁行は総長5.10m、柱間1.20m~2.00m、梁行は総長3.67m、柱間1.60m~1.94mである。南北棟の桁行は総



第222図 (12) SB067・(12) P79～(12) P85

長5.05m、柱間1.56m～1.72m、梁行は総長3.68m、柱間1.70m～1.92mである。柱穴の掘り方は円形で、径は78cm～115cm、深さは25.0cm～57.0cmである。

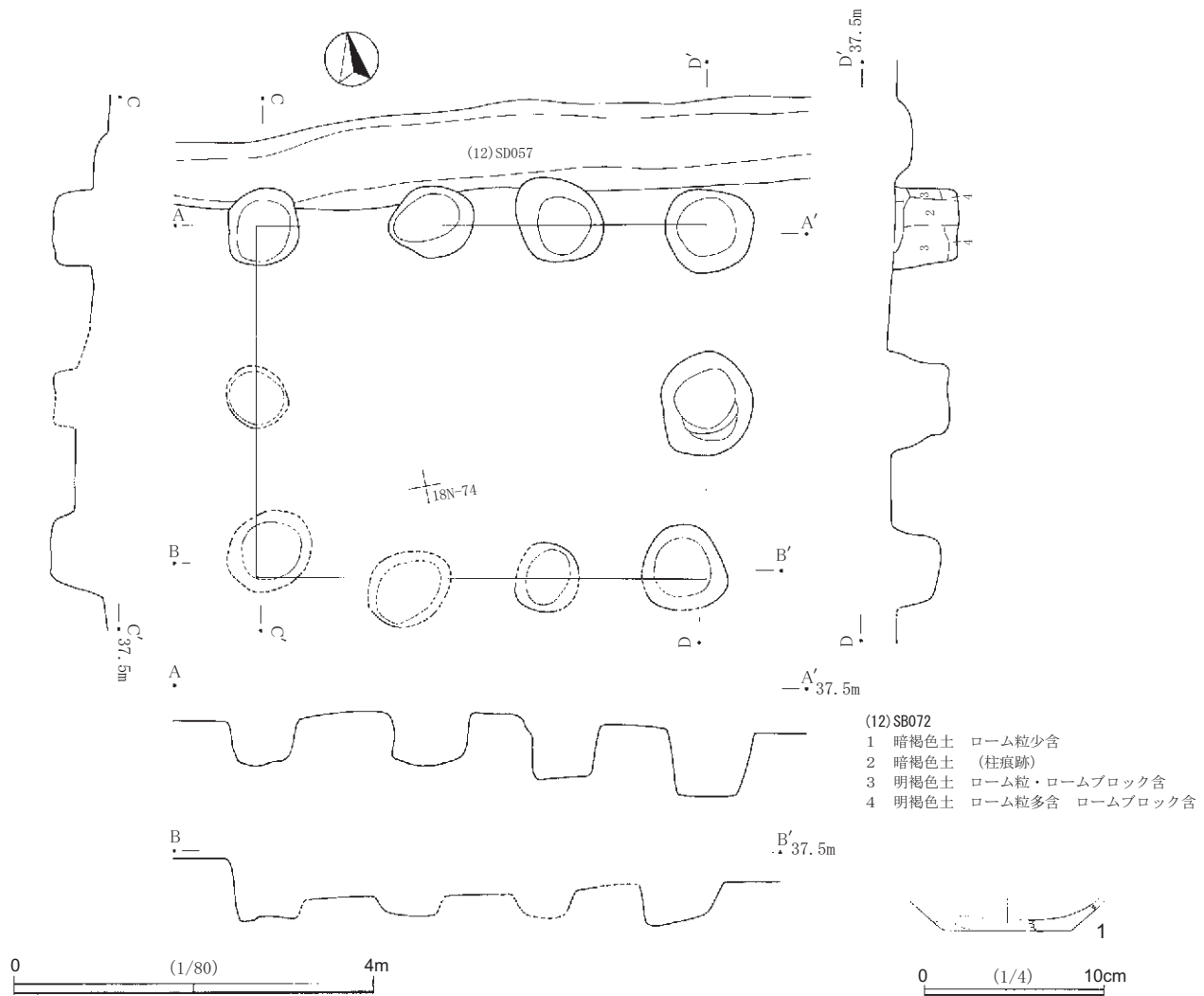
遺物の出土量は少なく4点を図化した。1、2は土師器杯である。1の底径は口径の1/2程で、体部が直線的に開く。底部回転糸切りの後体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。色調は浅黄色、胎土に多量の砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。2は底部を欠損するが、おおむね1と同様の器形と思われる。外面体部下位に手持ちヘラケズリが施される。外面と内面の一部に煤が付着している。色調は明赤褐色を呈する。胎土は1と同様である。

3は須恵器甕の口縁部片である。表面の色調は褐灰色、断面は赤褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。下総産である。

4は土器片を転用した有孔円板である。1/2程の遺存で、径3.6cm、厚さ0.9cm、孔径1.1cmである。

(12) SB067 (第222図、図版31・32)

18N-42グリッド周辺、(12) SI001の南3mに位置する。周辺の掘立柱建物跡は5m北に(12) SB016、15m東に(12) SB018、5m南東に(12) SB072が所在する。桁行3間以上、梁行2間の側柱南北棟建物と



第223図 (12) SB072

思われるが、南西へ行くほど傾斜しており、柱掘り方が検出できず不明瞭である。主軸方位はN-14°-E、桁行は現存する範囲で4.33m、柱間1.55m~1.80m、梁行は総長3.32m、柱間1.60m~1.74mである。柱穴の掘り方は円形で、径は55cm~82cm、深さは16.2cm~30.5cmである。

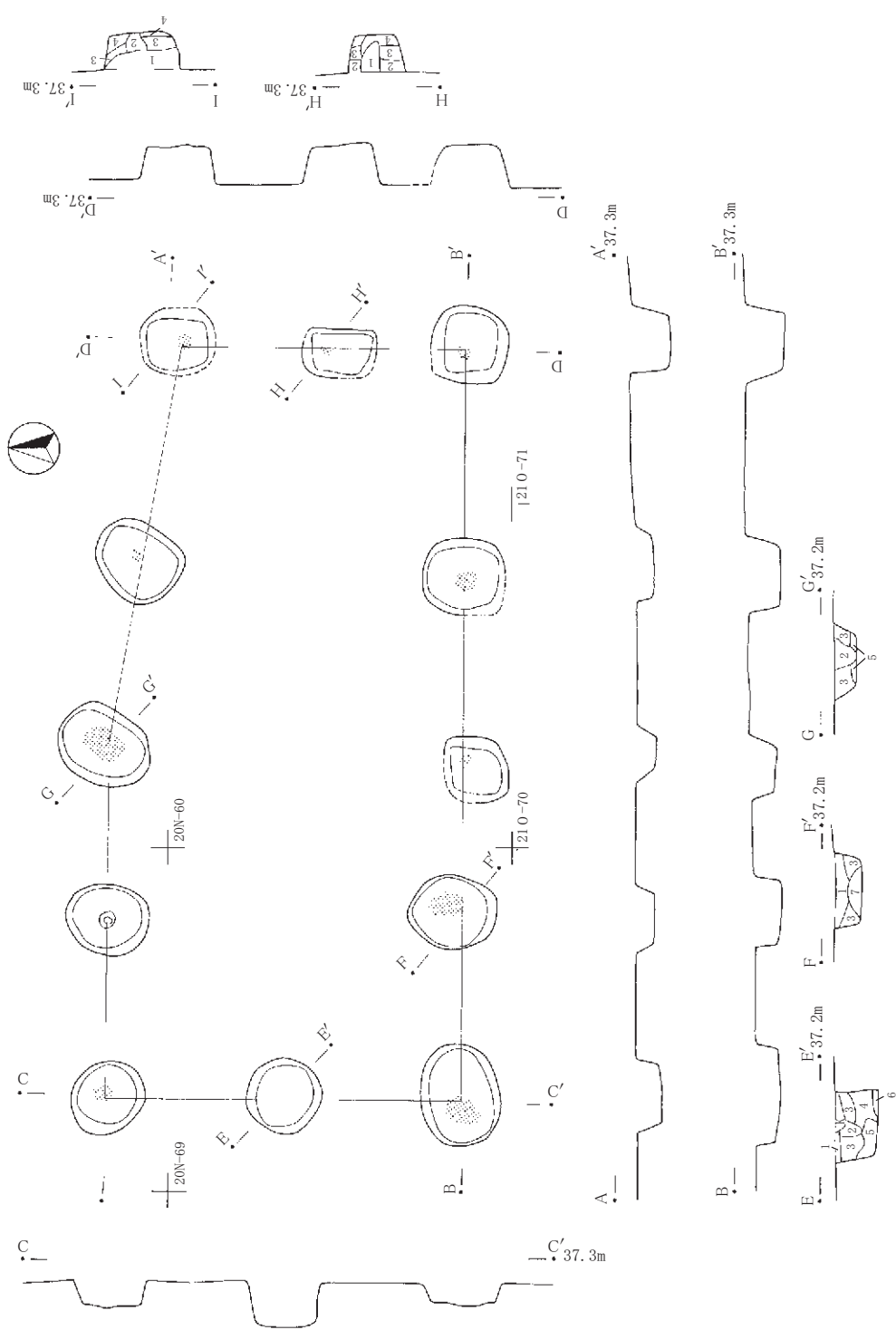
遺物の出土は少なく、(12) P080から出土した須恵器甕の胴部片2点を図化した。いずれも新治産で、外面に叩き目をもつ。1は外面胴部下位にヘラケズリを施す。内面の色調は褐色、外面は黒褐色、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。2は内面に当て具痕をもつ。灰色を呈し、胎土に雲母を含む。

(12) SB072 (第223図、図版32)

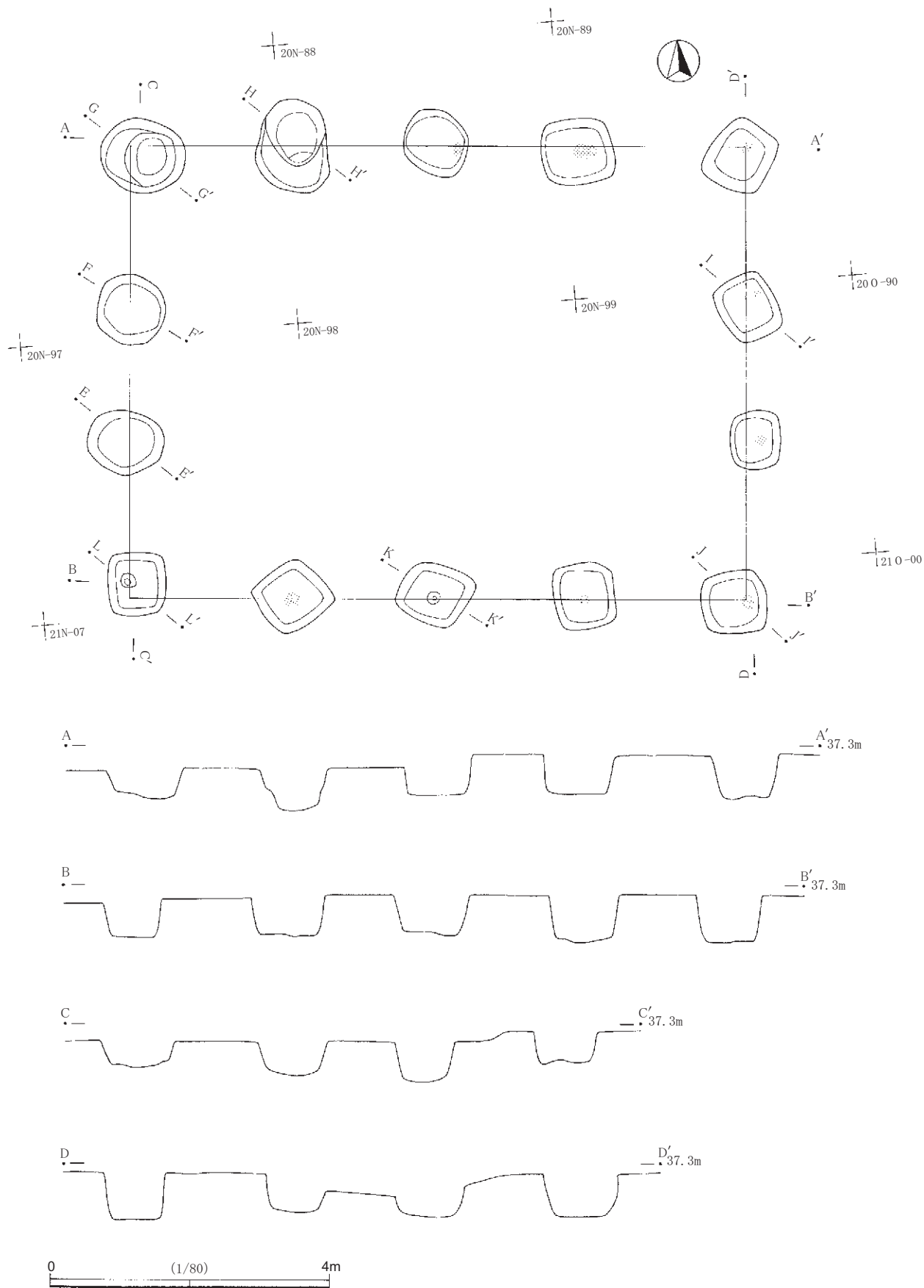
18N-63グリッド周辺に位置し、東西に走る溝(12) SD057の南に接する。5m南東には(12) SI004が、5m北東には(12) SB018が存在する。桁行3間、梁行2間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-80°-Wである。桁行は総長5.02m、柱間1.40m~1.80m、梁行は総長3.96m、柱間1.85mである。柱穴の掘り方は円形で、径は77cm~117cm、深さは14.8cm~72.2cmである。

遺物の出土は少なく、1点を図化した。1は土師器甕の底部片で、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。内面の色調は明赤褐色、外面は赤灰色を呈し、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。

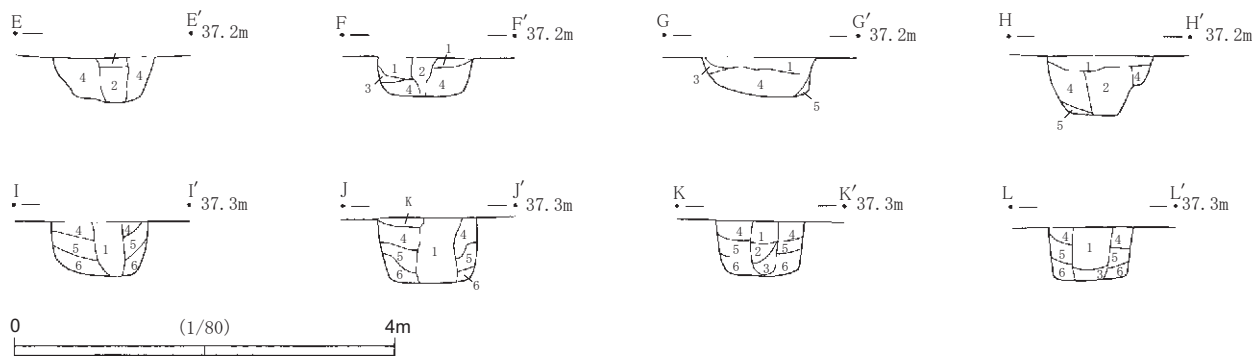
- (17) SB001
- 1 暗褐色土 ロームブロック多舎
 - 2 褐色土 ローム粒舎
 - 3 褐色土 ロームブロック多舎
 - 4 暗褐色土 ロームブロック多舎
 - 5 暗褐色土 ロームブロック多舎
 - 6 褐色土
 - 7 暗褐色土 ロームブロック多舎
- (17) SB001 H-H'
- 1 黒褐色土 ローム粒少舎
 - 2 暗褐色土 ローム粒舎
 - 3 暗褐色土 ローム粒舎
 - 4 褐色土 ローム粒多舎
 - 5 黒褐色土 ローム粒多舎
- (17) SB001 I-I'
- 1 黒褐色土
 - 2 黒褐色土 ローム粒多舎
 - 3 黒褐色土 ローム粒少舎
 - 4 黒褐色土 ローム粒多舎



第224図 (17) SB001



第225图 (17) SB002A ①

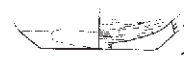


(17) SB002A E-E' ~ H-H'

- 1 暗褐色土 ロームブロック・砂含
- 2 暗褐色土 ローム粒含 (柱痕跡)
- 3 暗褐色土 ロームブロック多含
- 4 暗褐色土 ロームブロック含
- 5 黒褐色土 ロームブロック含

(17) SB002A I-I' ~ L-L'

- 1 褐色土 (柱痕跡)
- 2 黒褐色土 (柱痕跡)
- 3 黒色土 (柱痕跡)
- 4 褐色土 ローム粒少含
- 5 黒褐色土 ローム粒少含
- 6 黒色土 ローム粒少含



0 (1/4) 10cm

第226図 (17) SB002A ②

(17) SB001 (第224図)

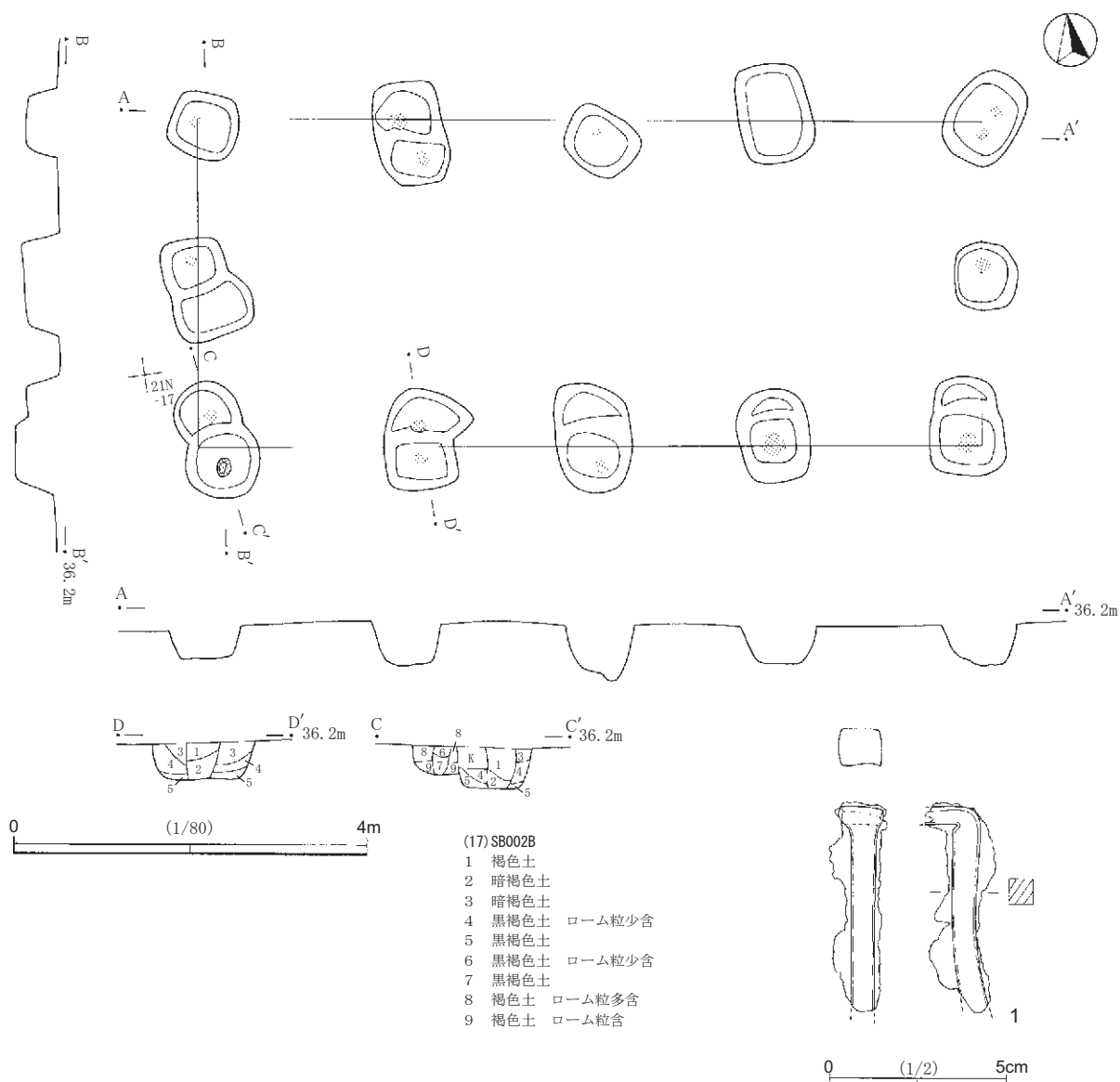
20O-50グリッド周辺、東西に走る溝(16)SD001から南へ5m程の所に位置し、(17)SI002の東に隣接する。桁行4間、梁行2間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-90°-Wである。平面形は長方形ではなく、東側柱穴列の柱間間隔が短いため北側柱穴列のみ中央で向きが変わる。北側柱穴列中央より東側の方位はN-79.5°-Wである。桁行は北側で総長8.82m、柱間2.07m~2.50m、南側で総長8.76m、柱間1.70m~2.70m、梁行は西側で総長4.16m、柱間2.06m~2.10m、東側で総長3.30m、柱間1.60m~1.70mである。柱穴の掘り方は方形もしくは隅丸方形に近い形状のものが見られ、一辺77cm~118cmを測る。深さは21.7cm~52.0cmである。

遺物の出土は少なく土師器杯2点を図化した。1は遺構北西から、2は遺構南東から出土した。1は体部外面に墨書が見られる杯である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、肥厚しわずかに外反する口縁部に至る。外面体部下位に手持ちヘラケズリが施される。内面の色調はにぶい赤褐色、外面はにぶい橙色、胎土は白色粒子を含みや砂質を帯びる。墨書は横位に「三寺」と記されている。二次的に火を受けているためか、器面の剥離が見られる。2は底部外面に墨書が見られる。1/2程を欠損するが、「三」と記されているようである。底部静止糸切り後外面体部下位から底部外周にかけて手持ちヘラケズリが施される。内面の色調は褐灰色、外面はにぶい橙色、胎土に砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。外面体部中位は帯状に黒変している。また、内面は被熱により器面が剥離している。

(17) SB002A (第225・226図、図版32)

20N-87グリッド周辺、(17)SB001から南へ6mほどの所に位置する。桁行4間、梁行3間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-85°-Wである。桁行は総長8.80m、柱間2.00m~2.40m、梁行は総長6.52m、柱間1.90m~2.35mである。柱穴の掘り方は調査年度が異なるため方形と円形が混在している。方形の柱掘り方は一辺が85cm~137cmを測り、深さは42.4cm~69.0cmである。柱痕跡部分の覆土はしまりの弱い褐色土ないし暗褐色土、周りの土は下層が黒色土、中層が黒褐色土、上層が褐色土で、いずれの層もローム粒を少量含む。

遺物の出土量は少なく、1点を図化した。1は内面にミガキが施された土師器杯の底部片である。遺存



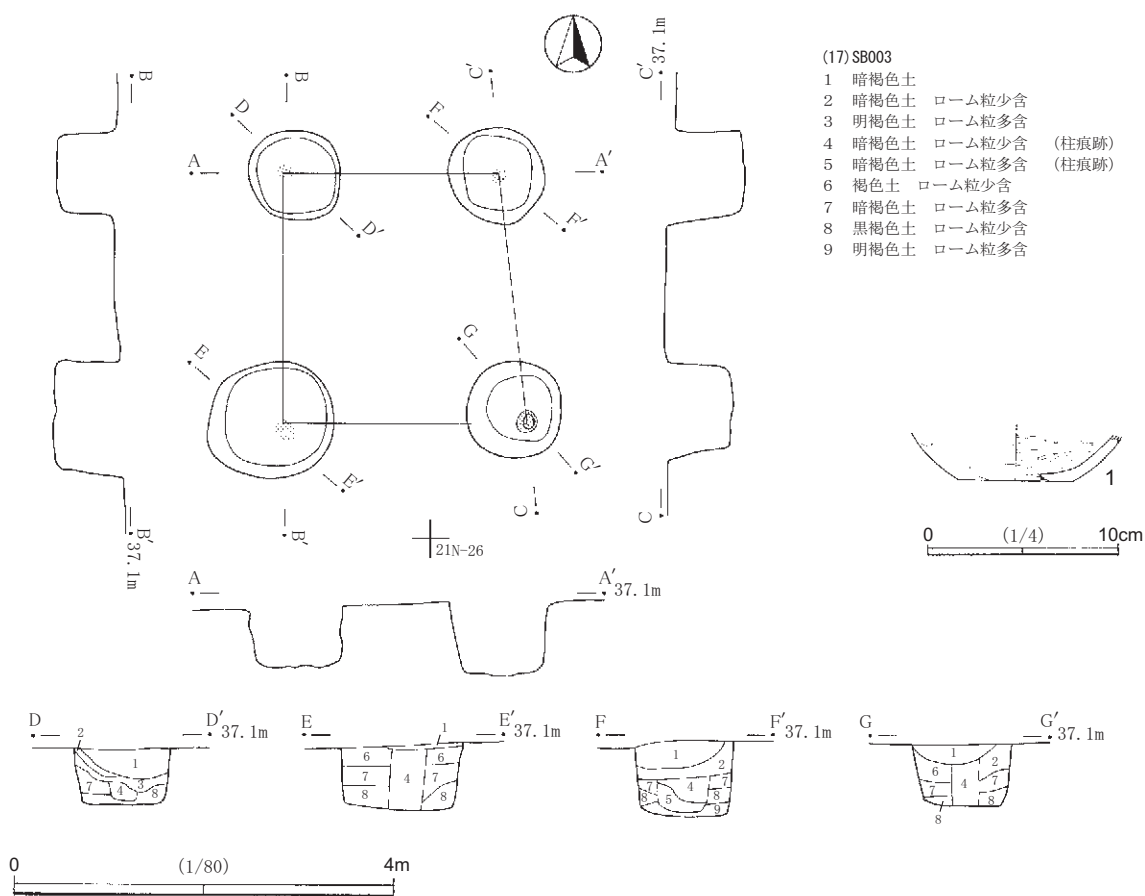
第227図 (17) SB002B

部位が少なく推定ではあるが底径6.0cmと小さい。体部及び底部外面に手持ちヘラケズリが施される。内面の色調は褐灰色、外面は黒色、胎土に砂粒を含む。図化はしていないが、他に鉄滓が出土している。

(17) SB002B (第227図、図版32・70)

21N-07グリッド周辺に位置し、(17) SB002Aの南に隣接する。桁行4間、梁行2間の側柱東西棟建物で、主軸方位はN-82°-Wである。桁行は総長8.94m、柱間2.00m~2.50m、梁行は総長3.74m、柱間1.80m~1.90mである。柱穴の掘り方は方形を基本とし、一辺77cm~139cmを測り、深さは33.0cm~64.0cmである。柱痕跡部分の覆土は下層がしまりの弱い暗褐色土、上層がしまりの弱い褐色土である。周りの覆土は下層がしまりの強い黒褐色土、中層がローム粒を少量含んだしまりの強い黒褐色土、上層がしまりの強い暗褐色土である。北側に建て替えが行われたと思われる柱穴が見られる。

遺物の出土は少なく、鉄釘1点を図化した。頭部をL字に折り曲げた角釘で、先端部が欠損している。



第228図 (17) SB003

(17) SB003 (第228図、図版32)

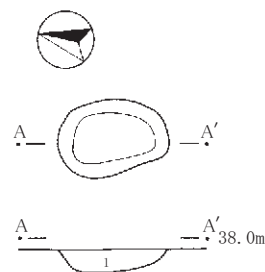
21N-05グリッド周辺、(17) SB002Bの西3m程に位置する。桁行1間、梁行1間の側柱南北棟建物と考えられるが、桁梁逆の可能性もある。桁行は2.65m~2.67m、梁行は北側で2.29m、南側で2.60mである。柱穴の掘り方は円形を基本とし、1辺97cm~139cmを測り、深さは62.6cm~82.8cmである。すべての柱穴に柱のあたりが見られ、それらを結ぶと東側のみ7°西へずれる。他3辺は南北・東西方向を指す。柱のあたりは鉄分を含んでおり、金属状に硬化している。柱痕跡部分の覆土はローム粒を含む暗褐色土、周囲の覆土は下層がしまりの強い黒褐色土、中層がローム粒を多く含む暗褐色土、上層が褐色土である。

遺物の出土は少なく土師器杯1点を図化した。体部が内湾しながら開く器形で、内面にミガキ、外面体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリを施す。色調はにぶい橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。

第3節 土坑・ピット

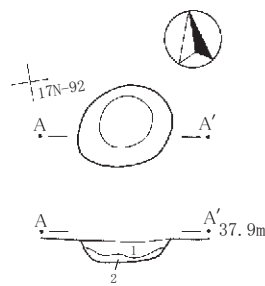
(11) SK1023

16N-24、25グリッドに位置する。北東部で縄文時代の土坑である(11) SK1047を切っている。平面形は円形で、長軸方位はN-2°-E、規模は長軸1.20m、短軸1.19m、深さは15.9cm~29.9cmと浅く、床面中央がやや高くなっている。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体である。



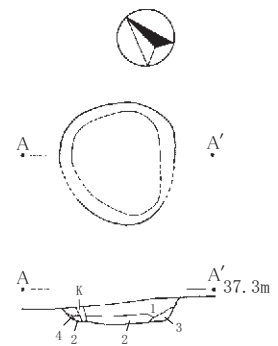
(11) SK1043

1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多含



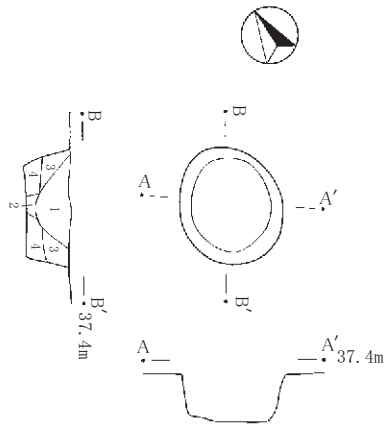
(11) SK1050

1 黒褐色土 ローム粒少含
2 暗褐色土 ローム粒含



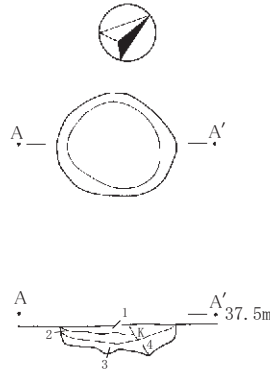
(12) SK027

1 暗褐色土 ローム粒少含
2 暗褐色土 ローム粒含
3 暗褐色土 ローム粒多含
4 暗黄褐色土 ローム粒主体



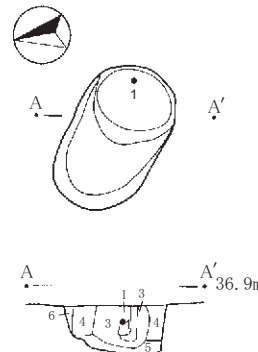
(15) SK007

1 褐色土 ローム粒含
2 暗褐色土 ローム粒多含
3 褐色土 ローム粒少含
4 暗褐色土 ローム粒多含



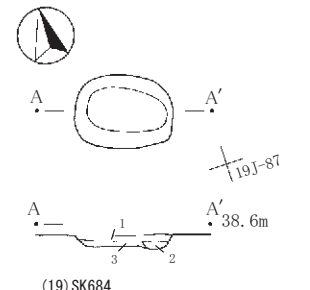
(15) SK008

1 暗黒色土 ローム粒少含
2 褐色土 ロームブロック多含
3 黒褐色土 ローム粒含
4 黒色土 ローム粒少含



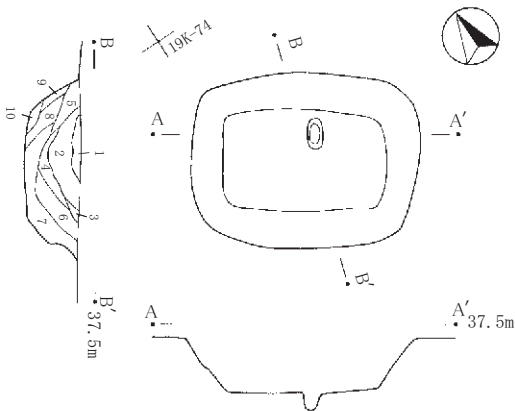
(20) SK010

1 暗褐色土
2 褐色土 ローム粒含
3 褐色土 ローム粒多含
4 黒色土 ローム粒多含
5 暗褐色土 ローム粒多含
6 暗褐色土 ローム粒含



(19) SK684

1 黒灰色土 焼土少含
2 暗茶褐色土 ローム粒含 焼土少含
3 暗灰色土 ローム粒含

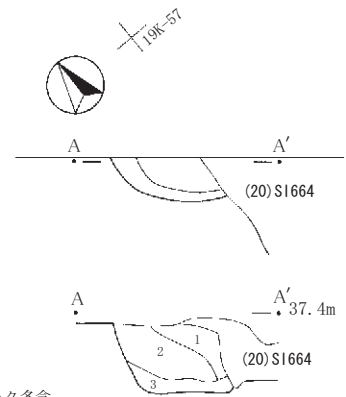


(20) SK670

1 暗褐色土 ローム粒・炭化物少含
2 暗褐色土 ローム粒・炭化物・焼土粒少含
3 暗褐色土 ローム粒含
4 暗黒褐色土 ローム粒・炭化物含
5 暗褐色土 ローム粒・炭化物・焼土粒含
6 暗黒褐色土 ローム粒・炭化物含
7 暗褐色土 ローム粒・炭化物含
8 暗褐色土 ローム粒・炭化物・焼土粒含
9 暗褐色土 ローム粒・焼土少含
10 暗赤褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物含

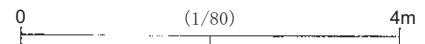
(20) SK674

1 黒灰褐色土 ローム粒少含
2 黒灰褐色土 ローム粒含
3 黒灰褐色土 ローム粒・ロームブロック多含



(20) S1664

(20) S1664



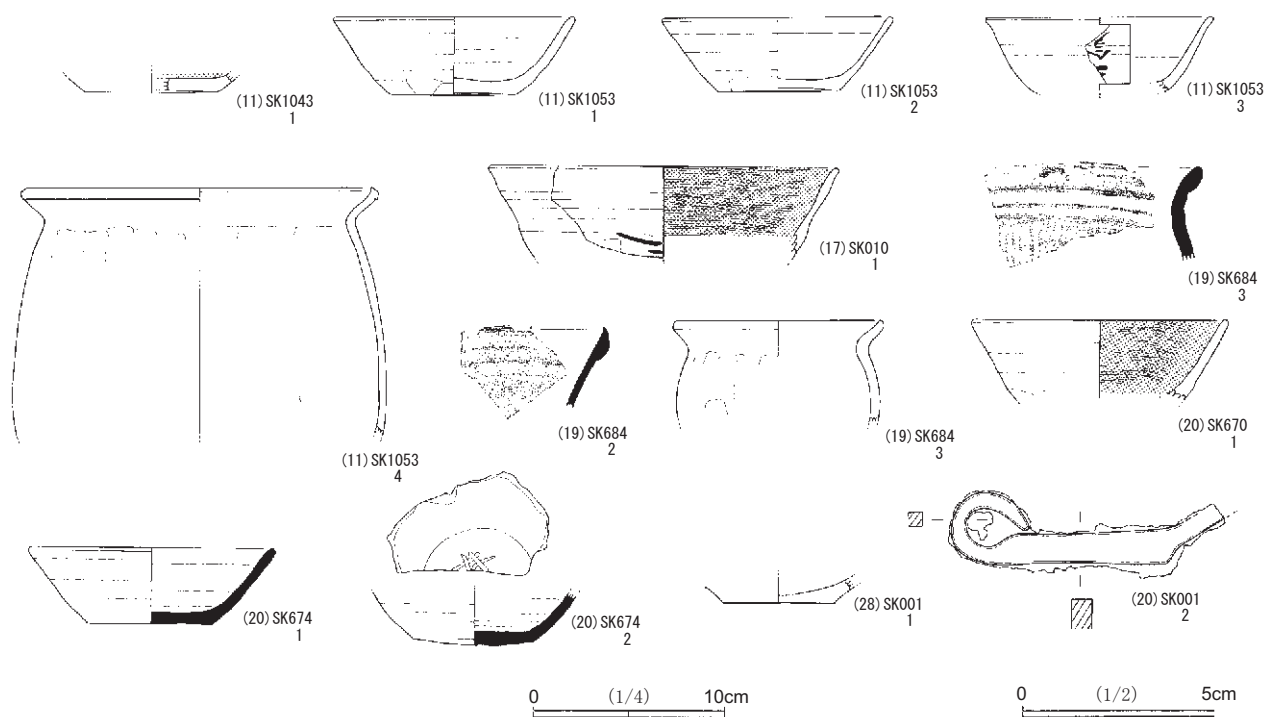
第229図 (11) SK1043・(11) SK1050・(12) SK027・(15) SK007・
(15) SK008・(17) SK010・(19) SK684・(20) SK670・(20) SK674

(11) SK1024 (図版32)

16N-21グリッドに位置する。平面形は不整な長楕円形で、長軸方位はN-47°-E、規模は長軸1.57m、短軸1.15mを測る。深さは21.0~26.5cmとやや浅く、床面はレンズ状に窪む。覆土は炭化材と焼土粒を少量含む暗褐色土主体で、覆土上層に炭化材片を多く含む暗褐色土が堆積している。

(11) SK1029 (図版32)

(11) SK1024の南西2.1m、16N-20グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-37°-W、規模は長軸1.55m、短軸1.23m、深さは7.5cm~18.0cmである。床面はレンズ状に窪む。覆土は1cm以下の炭化材片を多く含む暗褐色土の単一層である。



第230図 土坑出土遺物

(11) SK1043 (第229・230図)

17M-59、17N-50グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-23°-W、規模は長軸1.16m、短軸0.86m、深さは18.2cm~23.0cmである。床面はレンズ状に窪む。覆土は1cm大のローム粒を含む暗褐色土の単一層である。遺物の出土量は少なく、1点を図化した。1は内面黒色処理された土師器杯の底部片である。底部回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリが施される。色調はにぶい黄褐色、胎土に砂粒をやや多く含む。

(11) SK1050 (第229図、図版32)

平安時代の溝(11)SD1049の南端、17N-92グリッドに位置する。(11)SD1049を切っている。平面形は楕円形で、長軸方位はN-63°-E、規模は長軸1.03m、短軸0.86m、深さは21.3cm~29.5cmである。床面はレンズ状に窪む。覆土下層は暗褐色土、上層はローム粒を少量含む黒褐色土である。

(11) SK1053 (第141・230図、図版33・67)

(11)S11009の北壁西端から北へ20cm、17N-52グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸方位はN-29°-W、規模は長軸0.60m、短軸0.55m、深さは19.6cm~22.3cmである。床面はレンズ状に窪み、北と南に2つのピットが掘り込まれる。北側のピットは17cm×14cm、床面からの深さ6.9cm、南側のピットは28cm×21cm、床面からの深さ8.9cmである。覆土下層は焼土粒・焼土ブロック・炭化物を含む灰褐色土で、27cmほどの厚さがある。覆土上層は焼土粒を微量含む暗灰褐色土である。

覆土中から土師器杯を含む土器片12点が出土しており、覆土上層と下層の境界付近に特に集中していた。1~3は土師器杯である。1は完形品で、やや小さめの底部から体部が内湾気味に開く器形である。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。色調は橙色、胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。2は口縁部を3/4周程欠損する。底部回転糸切りの後体部下端と底部外周に手持ちヘラケズリが施される。色調はにぶい褐色ないし明褐色、胎土は1と同様である。3は体部外面に墨書が見

られる杯で、倒位に「三倉」と記されているようである。にぶい黄橙色を呈し、砂粒をやや多く含む。

4は土師器甕である。最大径を胴部中位に有し、19.8cmを測るが、胴部の張りはあまり強くない。口唇部は上下両端にわずかに突出する。内面の色調はにぶい褐色、外面は暗褐色、胎土に多量の白色粒子、砂粒、赤色スコリアを含む。

(12) SK027 (第229図、図版33)

17N-79グリッドに位置する。中央から南西1/3程を水道管に切られている。平面形は楕円形で、長軸方位はN-44°-E、規模は長軸1.30m、短軸1.22m、深さ16.4cm~22.3cmである。床面はほぼ平坦で、覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体である。

(13) SK617 (図版33)

20P-51グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸方位はN-43°-E、規模は長軸2.03m、短軸1.78m、深さは40.0cm~49.5cmである。西壁と南西壁にピットが掘り込まれている。西壁のピットは96.0cm×52.0cm、床面からの深さ11.5cm、南西壁のピットは57.0cm×36.0cm、床面からの深さ37.5cmで、いずれもオーバーハング気味に掘り込まれている。覆土は上層で攪乱を受けているもののロームブロックを多く含む暗褐色土の単一層である。

(15) SK007 (第229図、図版33)

18L-58,68グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸方位はN-11°-E、規模は長軸1.25m、短軸1.10m、深さは42.2cm~47.0cmである。床面は北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。覆土下層はローム粒を多く含む暗褐色土、上層はローム粒を少量含む褐色土で柱穴状の堆積を呈するが、周囲に建物跡は見られない。

(15) SK008 (第229図、図版33)

19L-17、27グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸方位はN-39°-E、規模は長軸1.26m、短軸1.09m、深さ12.1cm~31.9cmである。東壁は攪乱により不明瞭である。床面は南西から北東に向かって緩やかに傾斜している。覆土下層はローム粒を含む黒褐色土、上層は暗褐色土で焼土が混入している。

(17) SK010 (第229・230図)

20O-96グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-50°-W、規模は長軸1.65m、短軸1.00m、深さは44.9cm~55.4cmである。南東端に径0.95m×0.87mの掘り込みがある。北西の床面との段差は25.3cmである。覆土は褐色土を主体とする。中央に柱痕跡と思われる黒褐色土が見られることから、掘立柱建物跡等の一部になる可能性がある。

遺物は柱痕跡と思われる土層の覆土中位から土師器杯1点が出土した。1は外面口縁部直下までヘラケズリが施される口縁部片である。にぶい黄橙色を呈し、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。墨書は横位に記される。小片のため不明瞭だが他の出土例から「三倉」と推測される。

(19) SK684 (第229・230図、図版33)

19J-76グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-71°-W、規模は長軸1.03m、短軸0.78m、深さは11.0cm~18.0cmである。覆土下層はソフトロームを含む暗灰色土で自然堆積、上層は焼土粒を含む黒灰色土で人為的な埋め戻しの可能性がある。

遺物の出土量は少なく、3点を図化した。1、2は須恵器甕の口縁部である。1は橙色を呈し、胴部外面に叩きが見られる。2は内面口唇部直下に施された強いナデによって端部が内側に突出する。3は土師

器の小型甕である。口径と胴部最大径がほぼ同一で、10.8cmである。口唇部はわずかにつまみ上げられる。色調はにぶい橙色、胎土に砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。被熱により所々器面が剥離している。

(20) SK670 (第229・230図、図版33)

19K-73、74グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸方位はN-57°-W、規模は長軸2.42m、短軸1.84m、深さは49.0cm～57.7cmである。北東壁側中央に長楕円形のピットがある。長軸方向が土坑の主軸と直交するような状態で、32cm×18cm、床面からの深さ20cmである。覆土はローム粒を含む暗褐色土主体で、焼土・炭化物が含まれ、人為的に埋め戻された可能性がある。底面壁際に焼土粒ブロックが3か所見られた。

遺物は覆土中から出土した土師器杯1点を図化した。内面にミガキ及び黒色処理が施される杯で、体部が直線的に開く。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土に少量の白色粒子、赤色スコリアを含む。

(20) SK674 (第229・230図)

19K-56グリッドに位置する。北東部は調査区外、南東部は(20)SI664に切られているため、ごく一部のみの遺存である。平面形、規模は不明で、深さは54.5cmである。覆土は黒灰褐色土主体で、下層へ行くほどハードローム粒の含有量が多くなる。

遺物の出土量は少なく、須恵器杯2点を図化した。1は底径が口径の1/2で体部が直線的に開く。外面体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。色調は黒褐色だが断面は赤褐色を呈する。胎土に白色粒子、砂粒を含む。2は底部内面に「井」と思われるへう書きが見られる。外面体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリが施され、底部は丸みを帯びている。色調は褐色ないし暗褐色、断面は明褐色を呈する。砂粒、赤色スコリアなどの混入物がやや多い。

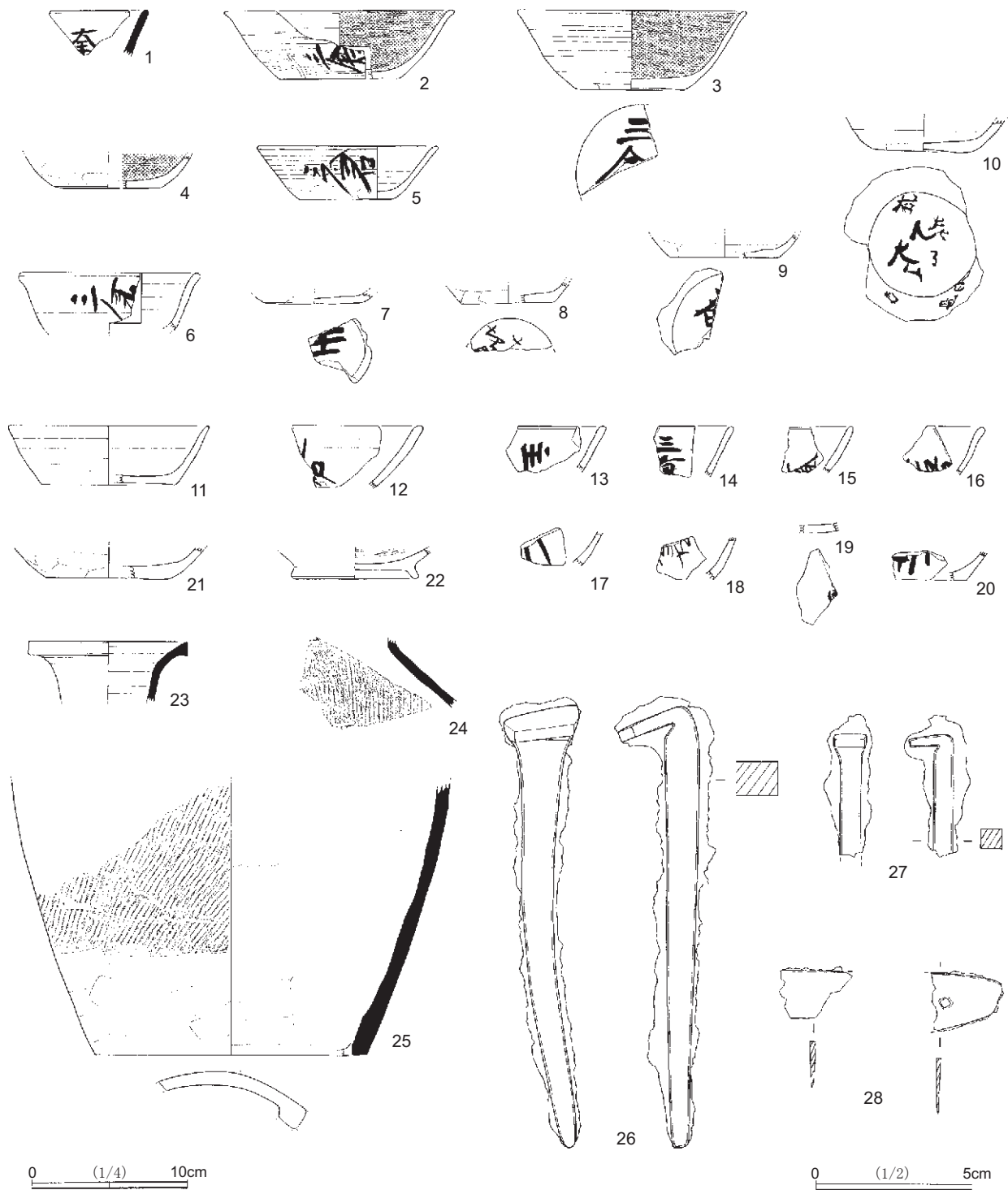
(12) P079～(12) P085 (第222図、図版31・32)

18N-32・42・52グリッドに位置し、(12)SB067周辺に点在する。P079のみSB067の内側にあり、平面円形、径0.37m×0.35m、深さ22.6cmである。P080・P081はSB067の東、P082はSB067の北東、P083～P085はSB067の北に位置する。P080は径0.75m×0.70m、深さ28.4cm、P081は径0.37m×0.35m、深さ47.3cm、P082は径0.27m×0.27m、深さ11.1cm、P083は径0.71m×0.70m、深さ24.0cm、P084は径0.36m×0.34m、深さ16.6cm、P085は径0.55m×0.48m、深さ16.6cmを測る。平面形は円形ないし楕円形を呈する。P080、P081、P083～P085の中心を結ぶと東西方向3.65m、南北方向5.60m、長軸方位N-10°-EのL字形の構造物になる。SB067の北及び東側を囲む堀の可能性はあるが、主軸が異なるためSB067との関わり等詳細は不明である。

第4節 遺構外出土遺物 (第231図、図版67・69・70)

1は須恵器杯の口縁部片で、外面に墨書が見られる。18F-20グリッドから出土した。振替後の地区割りでは(29)区にあたる。墨書は正位に記され、「全」あるいは「奈」と推測される。色調はにぶい褐色ないしにぶい褐色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。

2～4は内面にミガキ及び黒色処理が施される土師器杯である。外面体部下端から底部にかけての調整は2が回転ヘラケズリ、3・4が手持ちヘラケズリである。2は平成8年度調査時のT62-SD002、振替後地区割りの(22)区付近から出土した。外面の色調は明赤褐色で、胎土に砂粒、赤色スコリア、白色針状物を含む。体部外面に「三倉」と判読できる墨書が横位に記されている。3は(17)区20O-61グリッ



第231図 遺構外出土遺物

ドから出土した。やや小さめの底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。色調は浅黄橙色を呈し、多量の砂粒、赤色スコリアを含む砂質を帯びた胎土である。底部外面に墨書が見られ、他の出土例から「三倉」と推測される。4は(13)区20P-41グリッドから出土した。砂粒を含み、にぶい褐色を呈する。

5~21は土師器杯である。5は(13)区20P-51グリッドと20P-41グリッドから出土した口縁部片が接合した。体部外面に墨書を持ち、横位に「三倉」と記されている。色調は明褐色、胎土に砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。6は底部を欠損する。体部の開きは弱く、口縁部で肥厚しながら外反する。外面体部下位にはわずかに手持ちヘラケズリが認め

られる。色調は橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。口縁部外面に横位の墨書「三倉」が見られる。(12)区17O-86グリッドからの出土である。

7～10は底部片で、底部外面に墨書が見られる。外面体部下位から底部にかけての調整はいずれも手持ちヘラケズリである。7は(16)区20N-00グリッドから出土した。橙色を呈し、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。墨書は遺存部位が少ないため不明瞭であるが、他の出土例から「主」の可能性はある。8は(17)区21N-09グリッドから出土した。推定6cmの底部から体部が直線的に立ち上がる。墨書は細筆で二文字以上と思われるが、遺存部位が少ないため判読不能である。9は(12)区17O-21グリッドから出土した。墨書は遺存部位が少なく判読不能である。色調は橙色、砂粒、スコリアを含む精緻な胎土である。10は底部及び体部外面に墨書が見られる。平成8年度調査時のT60-SI001のカマド前から出土した。振替後の調査区割りでは(22)地区にあたる。東壁中央にカマドを設置する方形の竪穴住居跡で、東西2.4m、南北2.5mを測る。平成13年度に周囲を拡張して本調査を行ったが、他に遺構は検出されなかった。色調は橙色を呈し、細砂粒を含む精緻な胎土である。底部回転糸切りの後外周部と体部下端に手持ちヘラケズリが加えられ、外面の立ち上がりは曖昧である。墨書は「大」「人」の他記号的なものが複数記されている。底部内面には墨溜まりのような痕跡が見られる。体部は意図的な打ち欠きの可能性がある。

11は平成9年度調査時のT71-SI001から出土した。口径に比してやや大きめの底部から体部が直線的に立ち上がる。底部糸切りの後外周部と外面体部下端に手持ちヘラケズリが施される。色調は内面黒褐色、外面褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。外面体部中位に煤が帯状に付着している。

12～16は外面に墨書が見られる口縁部片である。12は平成7年度調査時の5トレンチから出土した。にぶい橙色を呈し、外面体部下端にわずかに手持ちヘラケズリが見られる。胎土は砂粒とごく微量の白色針状物を含む。体部外面に「倉」と判読できる墨書が横位に記されている。13は砂粒をやや多く含み、橙色を呈する。(12)区18N-55グリッドから出土した。墨書は横位の「主」と読める。14は(13)区20P-41グリッドから出土した。墨書は正位で「三〇」と判読でき、おそらく「三倉」であろうと思われる。15は内面ミガキ及び黒色処理が施される。(17)区20O-96グリッドから出土した。ロクロ目によって外面体部中位が括れたようになっている。体部下位には手持ちヘラケズリが施され、墨書の残画も見られる。遺存部位が少ないため判読は難しい。色調はにぶい黄橙色、胎土に細砂粒、赤色スコリアを含み精緻である。16はにぶい橙色を呈し、口縁部が緩やかに外反し肥厚する。墨痕はやや薄く、他の出土例から「倉」と推測されるが、遺存部位が少ないため詳細は不明である。(12)区18N-55グリッドからの出土である。

17、18は外面に墨書が見られる体部片である。17は内面にミガキ及び黒色処理が施される。(17)区20O-96グリッドから出土した。体部下位にはヘラケズリが施される。色調はにぶい黄橙色、胎土に砂粒を含み精緻である。墨書は遺存部位が少なく判読不能である。18は(17)区21O-30グリッドから出土した。墨書は遺存部位が少ないため判読は難しいが、他の出土例から横位の「倉」の可能性はある。色調は橙色ないしにぶい橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。

19～21は底部片である。19は(16)区20N-00グリッドから出土した。底部糸切りの後手持ちヘラケズリが施される。色調、胎土は7と同様である。底部外面に墨書が見られるが、小片であること、また糸切りの筋に掛かっているため判読は難しい。20は(17)区20N-97グリッドから出土した。外面及び底部の調整は手持ちヘラケズリである。体部外面に墨書が見られるが、遺存部位が少ないため判読不能である。色調は橙色、胎土に砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。21は(13)区20P-41グリッドから出土した。底

部外面にわずかに糸切り痕が見られる。

22は土師器高台付杯の高台部で、にぶい褐色を呈し、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。底部は回転ヘラケズリののち高台貼り付け、杯部内面にはミガキが施される。平成8年度調査時のT60-SI001、振替後の調査区(22)から出土した。

23～25は須恵器である。23は平成9年度調査C区で表採された壺の口縁部である。振替後の調査区割りでは(11)～(12)地区に当たる。色調は灰オリーブ色を呈し、内外面に灰釉が見られる。東海産である。24は(13)区20P-41グリッドから出土した。外面に叩き目を有する甕の胴部片である。色調は灰オリーブ色、胎土に雲母、白色粒子を多く含む。25は甕で、五孔になるものと思われる。平成9年度調査時のT71-SI001から出土した。振替後の調査区では(9)に当たる。胴部外面は叩きののち下位に横方向のヘラケズリ、内面はヘラケズリで当て具痕は見られない。内面浅黄色、外面にぶい黄橙色を呈し、胎土に雲母と赤色スコリアを含む。24、25は新治産である。

26、27は鉄製の釘で、26は20O-62グリッドから、27は20O-90グリッドから出土した。振替後の調査区はともに(17)区である。28は19L-15グリッドから出土した鉄製穂摘み具である。振替後の調査区は(15)区である。

第5節 溝状・道路状遺構および近世の遺構

飯積原山遺跡が所在する台地は、広範な平坦面を有しており、台地北西には近世の野馬土手が現在も残っている。主要な遺構は台地北側に集中し、それらを区画すると思われる溝も広範囲にわたるため、全体を18ブロックに分けて図示した(第232図)。

野馬土手と野馬土手に付随する野馬堀は、遺跡北西の台地縁辺部に沿って築かれている。シン穴状遺構は野馬堀の西側と、台地中央の東西に走る道路状遺構上にあり、これらのうち馬骨が出土したシン穴状遺構は台地北西部に限られる。シン穴状遺構の性格は諸説あり、農耕害獣を駆除する目的で設置されたとも言われている¹⁾。近世、飯積原山遺跡は佐倉七牧の一つである柳沢牧の北端に位置し、遺構が集中する台地北側を囲むようにシン穴状遺構が設置されていることから、害獣から馬を守る役割を担っていたと推測される。

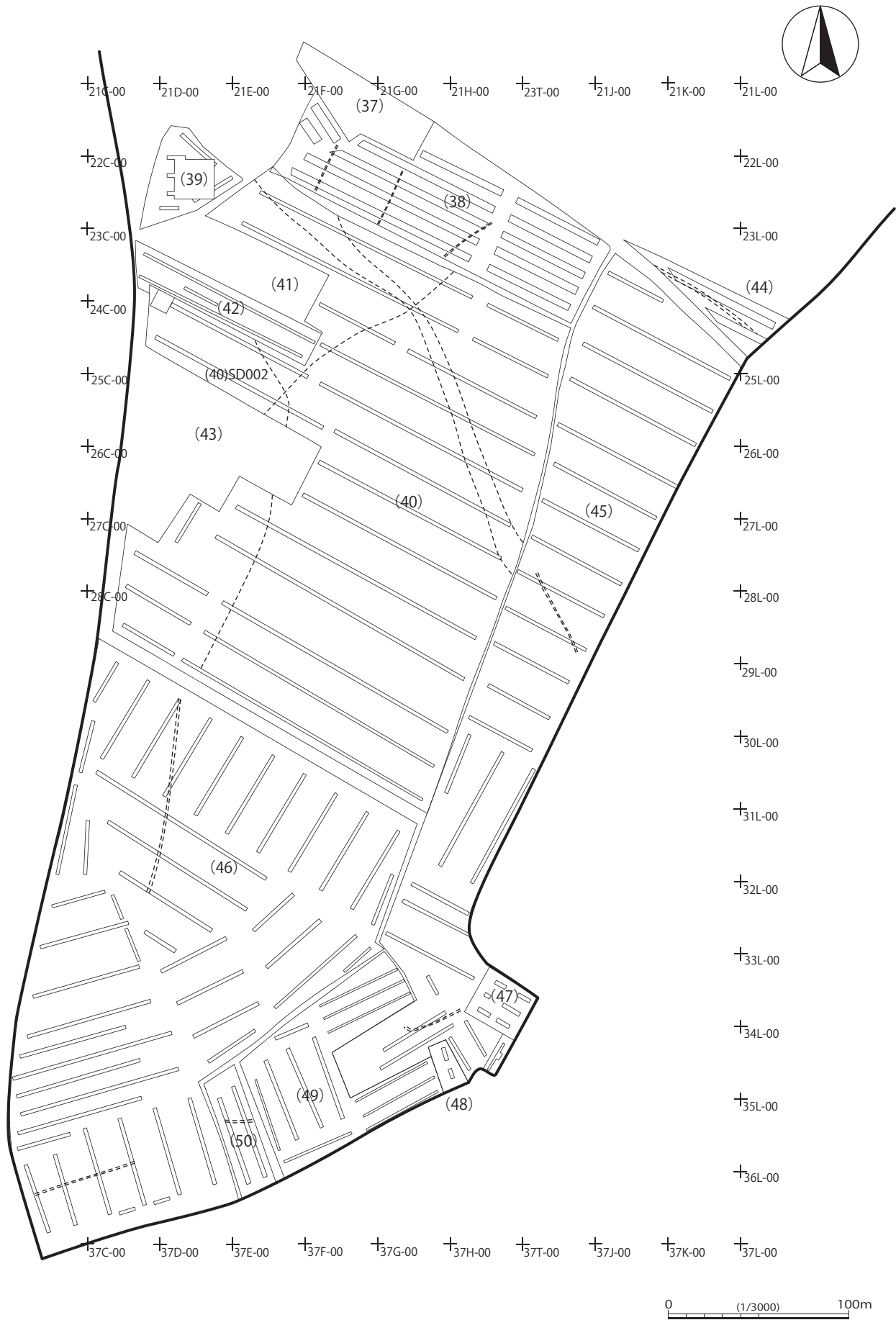
多数の遺構が展開する台地北側に比べ、台地南側は遺構数が少なく、確認調査のみで終了したところがほとんどである。一部のみ調査であり、かつ出土遺物も少ないながら中・近世と思われる溝状遺構が数条検出された。それらを概観すると、北西から南西へ台地を横切る溝が2条、北東から南西へ向かう溝が1条、北西から途中で向きを変え南へ向かう溝が1条あり、他に断続的な溝状遺構が台地中央付近や台地縁辺部に見られる。いずれも幅は1m前後、深さ10cm～20cmと浅い。覆土はローム粒を若干含む暗褐色土が主体である。中には馬骨を出土した溝があり、本項の最後にやや詳しく述べた(第233図)。

注1 糸川道行 1989「白井根塚群・唐沢シン穴」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書IX』(財)千葉県文化財センター

溝状・道路状遺構

第1分割区(第234・235図)

台地西側、平成11年度(B地点)、13年度(G区)、21年度(H2104A・B)に調査した範囲である。



第233図 溝状・道路状遺構位置 (2)

第53表 溝・道路状遺構分割枠別遺構一覧

分割区	調査年度	遺構No.
1	H2104A H13G区	(28)SD001、(28)SD002、(28)野馬堀1～3 (29)SD910
1、3	H13G区 H2104B H11	(29)SD960 (35)SD006 (33)SD021
2	H2201 H2101	(25)SD001、(25)SD002 (26)SD001、(26)SD002、(26)SD003、(26)SD005、(26)SD006
2、3	H2101 H13 G区	(26)SD004、(26)SD007 (29)SD735
3	H13 G区 H2101	(2)SD933、(29)SD961、(29)SD962、(29)SD963 (26)SD008
4	H2103 H2104	(30)SD009、(30)SD010、(30)SD011、(30)SD012 (35)SD003、(35)SD004、(35)SD005
5	H11	(37)SD105、(37)SD106、(37)SD107
6、10	H11	(33)SD022
6	H11	(33)SD023、(33)SD024、(33)SD054
7	H1904 H11	(1)SD002、(1)SD003、(1)SD005、(1)SD006 (33)SD065
8	H1904	(1)SD008
9	H1906 H12仮2区	(6)SD008、(6)SD013 (7)SD294、(7)SD295
10、11、12、13	H12 4区 H2003 H12 1a区 H13 C区 H13 B区	(13)SD627 (16)SD001 (18)SD120 (19)SD676 (20)SD661
10、11、12	H13 C区	(19)SD675
10、11	H13 C区	(19)SD682
11	H13 B区	(20)SD671
12	H13 B区 H13 H区	(20)SD665、(20)SD666、(20)SD667 (21)SD951、(21)SD952
13	H2005	(17)SD002、(17)SD003
14	H13B3区	(23)SD669
15	H12 4区	(13)SD639
15、16	H12 3区 H13 A区 H1905	(7)SD254 (11)SD1049 (12)SD038、(12)SD057
16、17	H1905	(12)SD042
17	H12 3区	(10)SD535
17、18	H2002 H12 3区	(8)SD033 (10)SD346、(10)SD430
18	H12 3区	(10)SD512、(10)SD554

(29) SD910 (図版41)

北北西から南南東へ延びるほぼ直線を呈する溝である。北側に (28) 野馬堀、南側に (35) SD006が所在するが、調査区境にかかるため、両遺構との関連性は不明である。現存部分の長さは61.8m、幅0.9m～1.5m、深さは北端で7.0cm～14.0cm、中央で10.0cm、南端で13.0～25.0cmである。覆土は下層がソフトロームを含む暗灰色土、上層が褐色土ブロック・少量のハードローム粒を含む黒褐色土である。底面に硬化面が認められるが、大きくは広がらない。南端西隣に並列するピット群が見られる。出土遺物はなく、本遺構の詳細な時期は不明である。

(28) SD001 (図版41)

Z字状に蛇行する溝である。西から東へ延びた後南下し、北東方向へ向きを変える。西端は調査区外、東端はシン穴状遺構に切られている。現存部分の長さは39.0m、幅0.5m～1.6mである。深さは斜面部に当たる西端で9.5cm～11.5cmとやや浅く、中央で12.4cm～22.0cm、東端で11.9cm～21.3cmである。覆土は暗褐色土が主体である。遺物はほとんど見られないが、近世の溝と思われる。

(28) SD002

北東方向に直線的に延びる溝で、両端はシン穴状遺構によって切られている。(28) SD001につながる可能性がある。検出部分の長さは13.6m、幅0.8m～1.5m、深さ4.3cm～19.4cmである。

(28) SD003、(28) 野馬堀 1、2、3 (図版41)

西側の台地縁辺を巡ってS字状に蛇行する野馬堀の西端部分である。北東方向に延びた後 (26) SD001、(24) 野馬土手に沿う溝へと続いていく。部分的に精査を行った結果、現存部の長さは72.5m、幅1.9m～2.6m、深さは南西端で121.4cm、中央で99.0cm、北東端で142.9cmである。覆土は暗褐色土主体である。本来野馬堀は野馬土手に沿って設置されるもので、本調査区でも幅約2.8m、高さ0.5m～0.9mほどの土手が残っていた。土手の頂部から溝の底面までの高低差は2.2m～2.6mである。野馬堀の北西にシン穴列が並んでいるが、野馬土手はシン穴状遺構を埋めて構築されていた。野馬堀2からは陶器の播り鉢などが出土している。

第2分割区 (第236・237図)

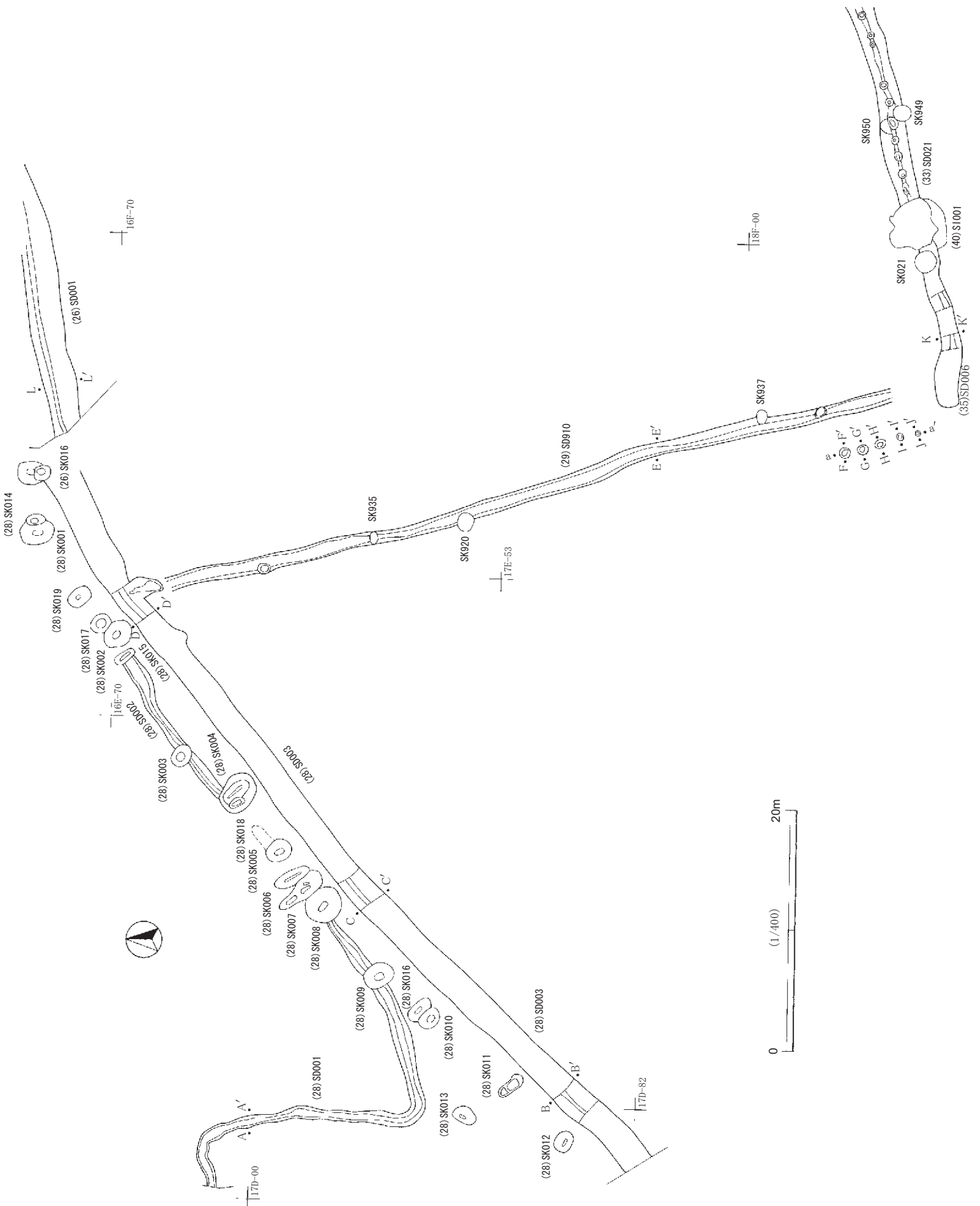
台地北西、平成21年度 (H2101)、22年度 (H2201) に調査した範囲である。本調査区は北側に低地を望む台地縁辺部に立地し、東側に谷の浸食を受けている。

(26) SD001 (図版41・67・68・70)

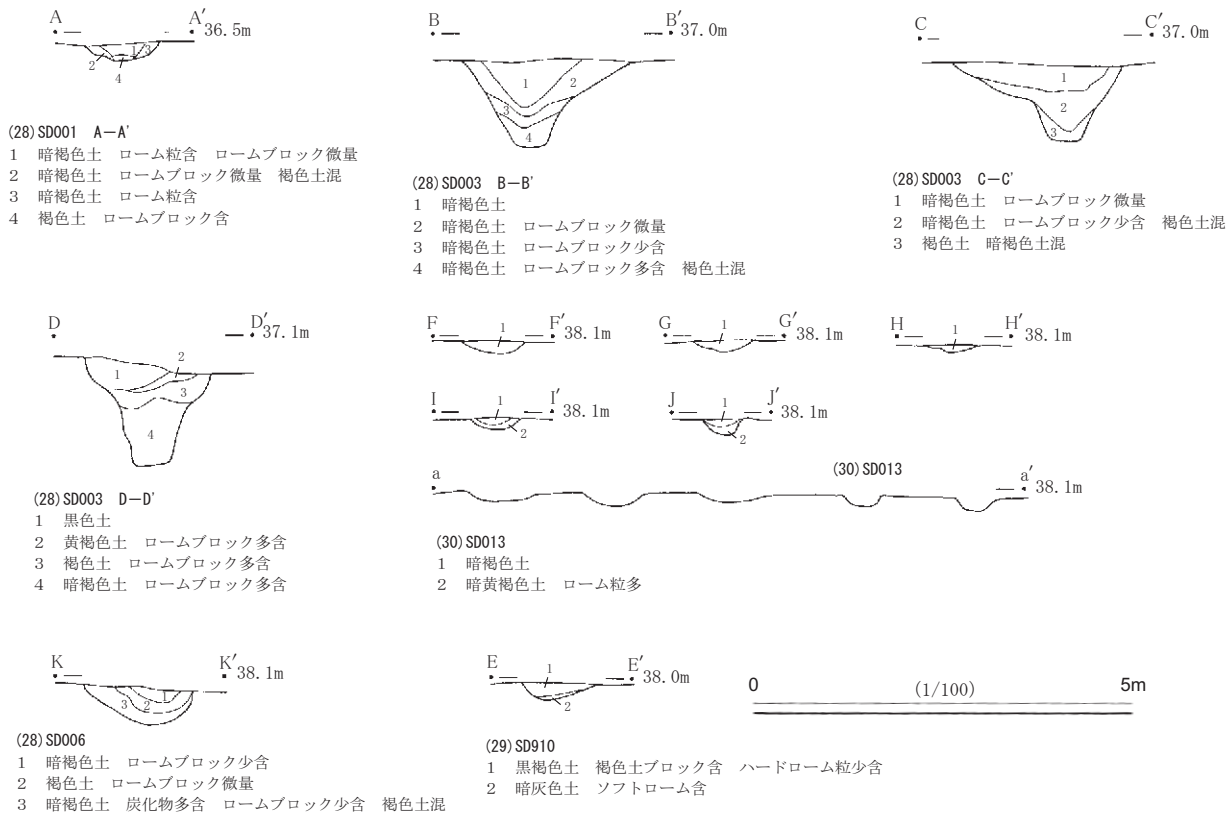
台地縁辺部を巡るようにS字状に蛇行する溝である。東西方向に延びた後南北方向へ緩やかに向きを変え、再度東西方向に向きを変える。南西で (28) 野馬堀に、北で (24) SD001に続くと思われる。現存部の長さは82.0m、幅2.2m～2.8m、深さは西端で91.5cm～113.5cm、中央で88.9cm、北端で116.5cmである。新旧2つの溝があるらしく、東西に延びる部分でのセクションでは北側に新しく溝を掘っているようである。覆土は暗褐色土、黒褐色土主体である。覆土中から陶器の椀・播り鉢・瓶、磁器の碗、七輪、内耳鍋、焙烙、砥石、銭 (政和通寶) など近世を中心とした遺物が多数出土している。

(26) SD002 (図版42・68)

南北方向に直線的に延びる溝である。北端は調査区外へ続き、南端はシン穴状遺構 (26) SK002にぶつかる。本溝のほぼ中央で東西に走る (26) SD003と交差するが、新旧関係は不明である。現存部の長さ24.0m、幅は0.6m～0.9mで南端へ向かってやや広くなる。深さは北端で15.5cm、中央で17.0cm、南端で32.8cm



第234図 溝状・道路状遺構 第1分割区①



第235図 溝状・道路状遺構 第1分割区②

である。覆土中から近世の瓦が出土している。

(26) SD003 (図版42・70)

鉤の手状に延びる溝である。東西方向に直線的に延び、東端で北方向に向きを変え(26)SD004にぶつかる。西端は調査区外へと続く。現存部の長さ46.0m、幅0.6m~0.8m、深さは西端で11.0cm、中央で20.3cm、北端で29.6cmである。覆土中から磁器の碗などが出土している。

(26) SD004、(29) SD735 (図版42・70)

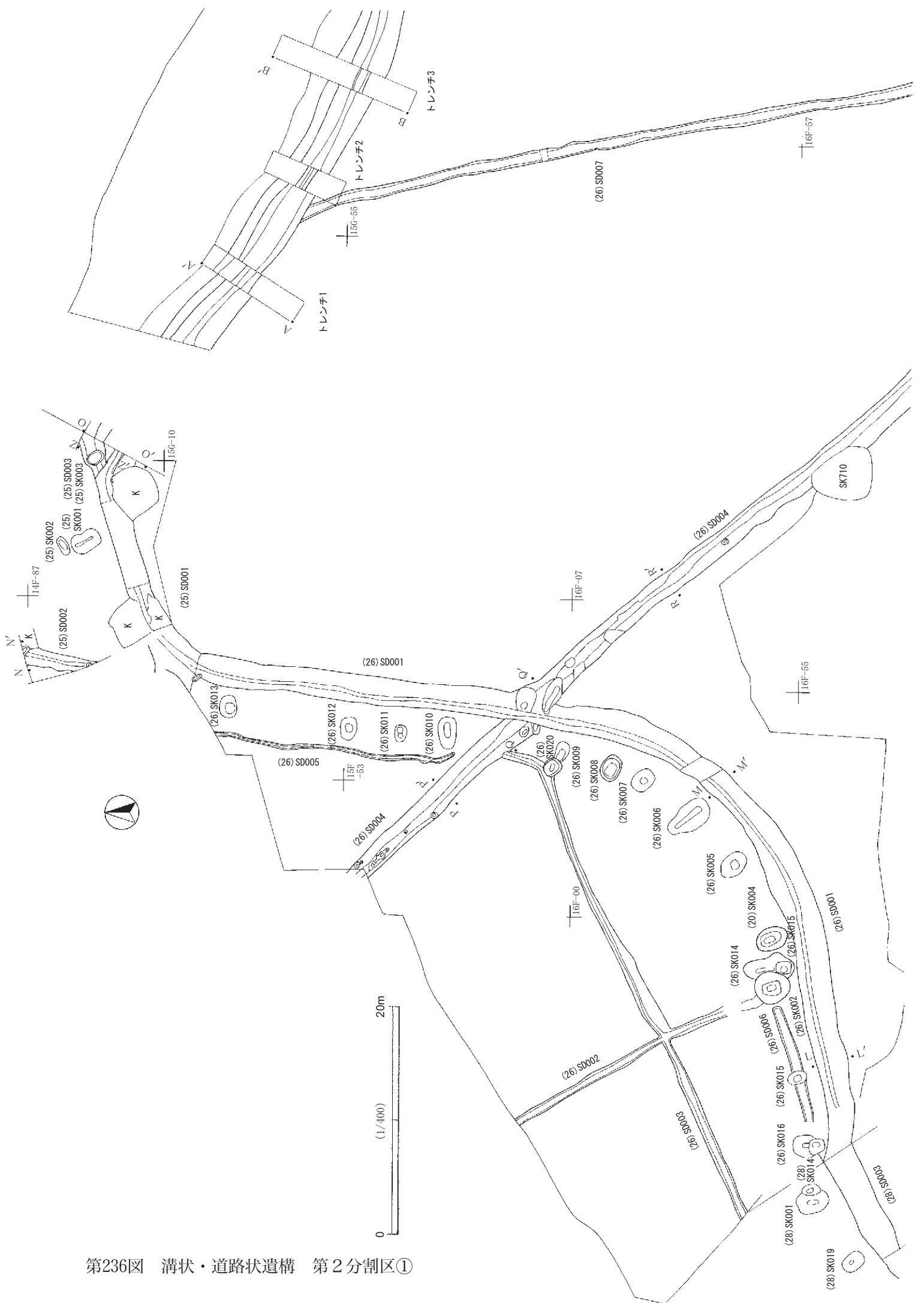
北西から南東方向へ直線的に延びる溝である。北端は調査区外へ続く。南側は(29)SD735に続き、南端で複数の溝と交差することが予想されるが、調査区境のため不明瞭である。現存部の長さは102.0m、幅1.9m~2.3m、深さは北端で40.5cm、中央で31.2cm、南端で26.9cmである。覆土下層はロームブロックを含む暗褐色土で固くしまっている。中層はローム粒が混じる黒褐色土である。床面には硬化面が見られる。(26)SD004からは磁器碗・皿、焙烙、砥石、中世常滑甕の口縁部などが出土している。

(26) SD005

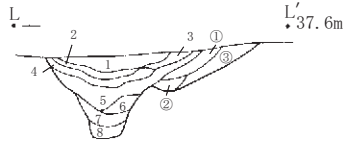
南北方向にやや蛇行しつつも直線的に延びる溝で、南端は鉤状に曲がっている。北側は調査区外へ続く。(26)SD001の西側に平行するように延び、(26)SD005と(26)SD001の間にはシシ穴状遺構が4基見られる。現存部の長さは21m、幅0.3m~0.4m、深さは北端で6.0cm~10.0cm、中央で5.5cm、南端で4.0cm~8.5cmとかなり浅い。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土でしまりは無い。

(26) SD006

北東から南西方向へ直線的に延びる溝で、中程にシシ穴状遺構(26)SK005が所在する。東端はシシ穴

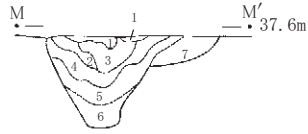


第236図 溝状・道路状遺構 第2分割区①



(26)SD001 L-L'

- 1 黒色土 ローム少含 木根多
- 2 黒色土 ローム粒含 木根多
- 3 黒色土 ロームブロック含
- 4 黒褐色土
- 5 暗黒褐色土 ローム粒少含
- 6 黒色土 ローム粒微量
- 7 黒褐色土 ロームブロック多含
- 8 黒褐色土 ローム粒含
- ① 黒色土 ローム含
- ② 黒色土 ローム粒含
- ③ 暗黒褐色土 ローム多含



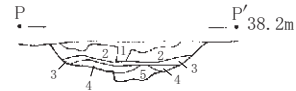
(26)SD001 M-M'

- 1 褐色土 ローム粒含
- 2 明褐色土 ローム粒多含 ロームブロック含
- 3 暗褐色土 炭化粒・ロームブロック含
- 4 褐色土 ローム粒少含
- 5 暗褐色土 ロームブロック含
- 6 褐色土 ローム粒多含
- 7 褐色土 ロームブロック含



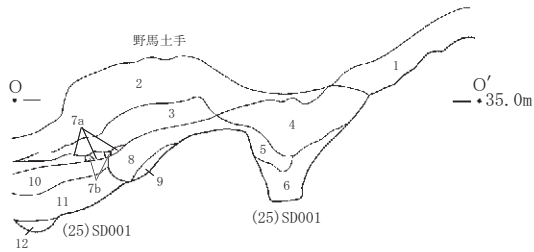
(25)SD002 N-N'

- 1 黒褐色土
- 2 黄味を帯びた黒褐色土 ハードロームブロック・ソフトローム混



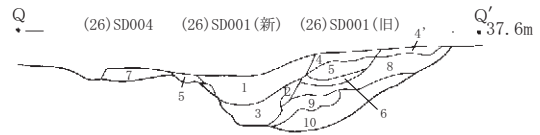
(26)SD004 P-P'

- 1 暗褐色土 ローム粒混
- 2 黒色土 ローム粒混
- 3 黒褐色土 ローム粒混
- 4 暗褐色土 ハードロームブロック多含
- 5 暗褐色土 ローム細ブロック含



(25)SD001 SD003 野馬土手 O-O'

- 1 暗褐色土 ハードロームブロック混
- 2 暗黄色土 暗褐色土混ハードロームブロック・ソフトローム含 野馬土手盛土
- 3 暗褐色土 野馬土手盛土
- 4 黒褐色土
- 5 暗黄褐色土
- 6 暗黄色土
- 7a 白色粘土ブロック
- 7b 黒褐色土
- 8 黒褐色土 ソフトローム混 野馬土手盛土
- 9 黄色土
- 10 暗黄色土
- 11 黒褐色土 ハードロームブロック混
- 12 黒褐色土



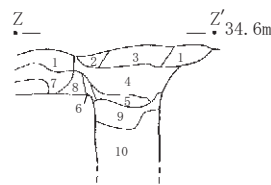
(26)SD001 (26)SD004 Q-Q'

- 1 黒褐色土 ローム粒混
- 2 黒褐色土 ローム細ブロック多含
- 3 暗褐色土 ローム細ブロック多含
- 4 黒褐色土 ローム粒多含
- 4' 黒褐色土 ローム粒多含
- 5 暗褐色土 ローム粒多含
- 6 暗褐色土 ローム細ブロック混
- 7 黒褐色土 ロームブロック多含
- 8 黒褐色土 ローム粒混
- 9 褐色土 ロームブロック大混 ロームブロック多含
- 10 暗褐色土 ローム細ブロック多含



(26)SD004 R-R'

- 1 暗褐色土 ローム粒混
- 2 暗褐色土 ローム細ブロック混 硬化面



(25)SD001内SK003 Z-Z'

- 1 黒褐色土
- 2 黄褐色土 ソフトローム多混黒褐色土
- 3 黄色土 ハードローム粒・ハードロームブロック含
- 4 黒褐色土 白色粘土ブロック・ソフトローム混
- 5 暗黄色土 白色粘土ブロック・黒褐色土・ハードロームブロック混
- 6 暗黄色土 黒褐色土・ハードロームブロック混
- 7 暗黄褐色土 ソフトローム多混黒褐色土
- 8 黄色土 ハードロームブロック・ソフトロームブロック含
- 9 黄色土 ハードロームブロック・ソフトロームブロック含
- 10 黒褐色土 ハードロームブロック混

0 (1/100) 5m

第237図 溝状・道路状遺構 第2分割区②

状遺構 (26) SK002から西へ0.3mの距離にあり、西端は調査区外に続く。現存部の長さ10.5m、幅0.6m～1.0m、深さは東端で17.5cm、中央で10.9cm、西端で8.1cmと、西へ行くほど浅くなる。

(26) SD007 (図版42)

南北に直線的に延びる溝で、北端は(24)野馬堀に切られる。南側は調査区境のため不明瞭であるが、(33)SD054に続く可能性がある。現存部の長さ82.0m、幅0.9m～1.2m、深さは北端で8.5cm～11.5cm、中央で19.5cm～31.3cm、南端で33.5cmである。U字型の断面形を呈し、床はハードロームである。覆土は下層が部分的にロームブロックを含む褐色土、中層が暗褐色土、上層が黒褐色土である。

(25) SD001 (図版41)

H2101調査区の北側縁辺部にあたり、(26)SD001の続きとなる野馬土手及び野馬堀である。本調査区で西から北東へ向かった後南東へ向きを変え、(24)野馬土手へ続いていくものと思われる。東端で二叉に分かれ、北側の溝を埋めて野馬土手と(25)SD001が形成されている。現存部の長さ14.4m、幅2.0m～2.1m、深さは西端で156.6cm、東端で138.0cmである。覆土下層は暗褐色土混ハードロームブロックとソフトロームからなる暗黄色土、中層はソフトローム混入の暗黄褐色土、上層は黒褐色土である。野馬土手の盛り土は溝を埋め白色粘土ブロックと黒褐色土で水平になるよう基盤を造った後、暗褐色土、暗黄色土を盛っている。盛り土の高さは1mほどである。

(25) SD002 (図版42)

南北に直線的に延びる溝で、(26)SD005の続きと思われる。南北両端とも調査区外へと続く。現存部の長さ5.2m、幅1.52m、深さ28.6cm～37.0cmである。溝の底面がソフトロームとハードロームの境目で、硬化面が見られる。覆土下層はハードロームブロックとソフトロームが混入する黄色みを帯びた黒褐色土、上層は黒褐色土である。

第3分割区 (第238図)

台地西側、平成13年度 (G区)、21年度 (H2101) に調査した範囲である。台地平坦面で縄文時代の遺構が多く所在する。

(35) SD006、(33) SD021、(29) SD960 (図版42)

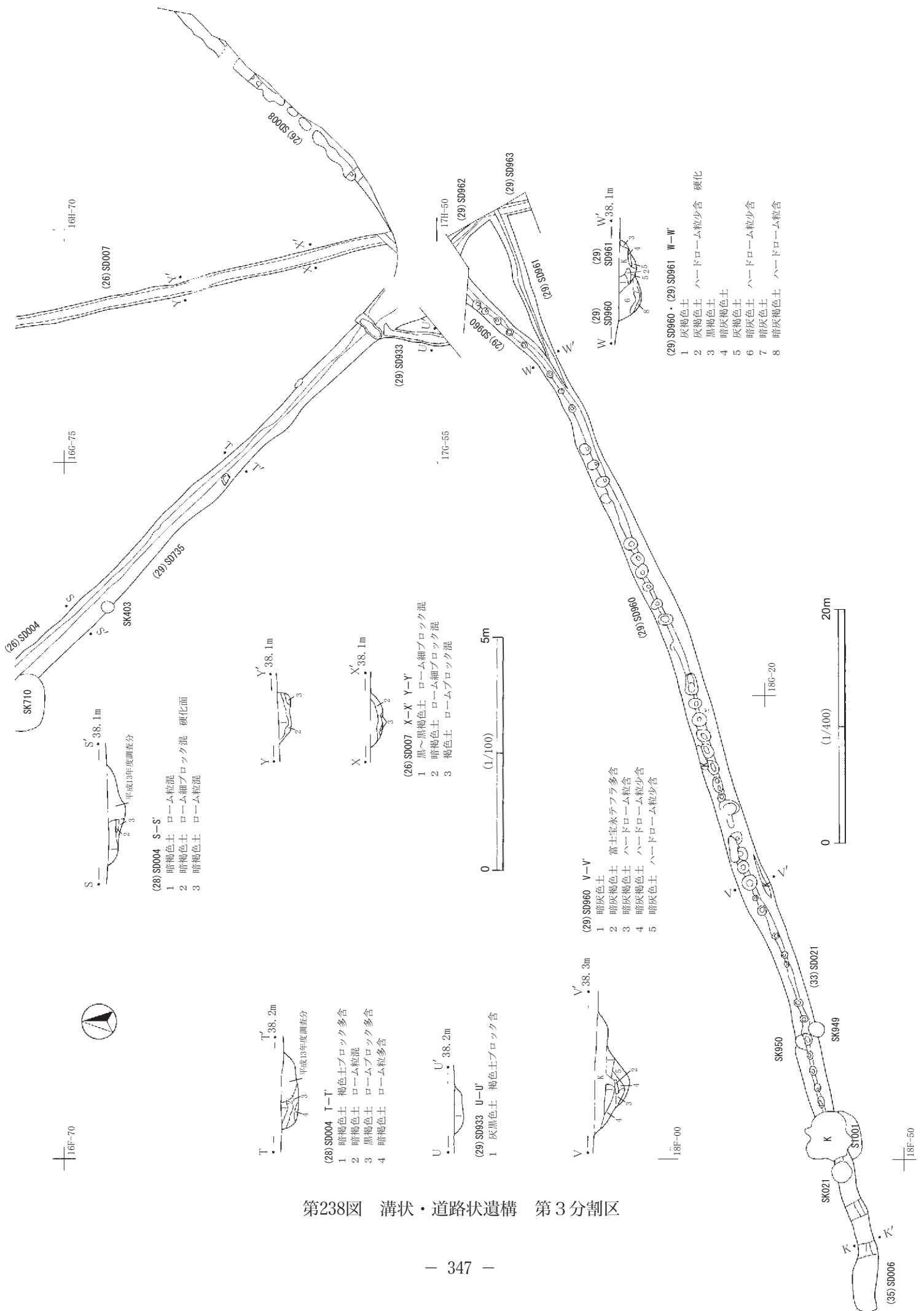
西から東へ直線的に延びた後、東端で二股に分かれ北東方向へ向きを変える。東側は複数の溝が交差するようだが、既存の道路によって破壊されており、切り合いや新旧関係は不明である。現存部分の長さは96.5m、幅1.3m～2.4m、深さは東端で41.3cm、中央で58.5cmとやや深くなる。覆土は特に硬化しておらず、宝永テフラが含まれる。底面には土坑状の落ち込みが見られる。平成11年度の調査所見によると、細長い地割りとなっている点、溝に沿って木が植えられている点などから、野馬堀である可能性が指摘されている。

(29) SD933

(26)SD004・(29)SD735の南端で分岐し、南北に直線的に延びる溝である。南端は既存の道路によって破壊されているため不明である。現存部の長さ5.5m、幅0.8m～1.1m、深さ11.0cm～23.0cmである。覆土は褐色土ブロックを含む灰黒色土の単一層で、(29)SD735との新旧関係は不明である。

(29) SD961 (図版42)

(29)SD960の東端で分岐し、東西に直線的に延びる溝である。東側は本調査未了範囲 (平成8年度確認調査済み) のため、東端で南北に延びる溝 (29)SD962、(29)SD963と交差した後更に東へ続くかどうか



第238図 溝状・道路状遺構 第3分割区

不明である。現存部の長さ16.5m、幅0.7m～1.5m、深さは西端で19.5cm、東端で24.5cm～33.5cmである。覆土下層は灰褐色土、暗灰褐色土、中層はハードローム粒を少量含む灰褐色土で硬化している。覆土の堆積状況から、(29) SD960より(29) SD961の方が新しいことが分かる。

(29) SD962 (図版43)

北西から南東方向へ直線的に延びる溝である。南端で(29) SD961と交差するが大半が調査区外のため新旧関係等は不明である。現存部の長さ4.0m、幅0.7m～1.2m、深さ44.0cmである。

(29) SD963

南北に直線的に延びる溝である。ごく一部の検出で、北側は(29) SD961と交差し、南側は本調査未了範囲へと続く。現存部の長さ3.7m、幅0.8m～0.9m、深さ26.2cmである。

(26) SD008

南西から北東方向へ延び、南西・北東端とも調査区外へと続く。連結した小土坑的な溝で、地境の植栽列痕の可能性がある。現存部分の長さ27.0m、幅0.9m～1.0m、深さは西端で43.1cm、中央で35.0cmである。覆土はロームブロックを含む軟質の暗褐色土で、一部に宝永の火山灰が認められる。

第4分割区 (第239図)

台地西端、平成21年度(H2103、H2104B)に調査した範囲である。

(30) SD010、(35) SD003 (図版43)

北西から南東方向へ直線的に延びる溝である。(30) SD010は2条に分かれており、東側の溝がH2104調査区では(35) SD003となる。南側は(35) SD005にぶつかるが、新旧関係は不明である。現存部の長さ36.4m、幅0.5m～1.6m、深さは10.8cm～19.0cmで、中央部がやや深い。覆土下層はローム細粒を含む暗褐色土、上層はローム粗粒を含む暗褐色土である。

(30) SD010、(35) SD004 (図版43)

北西から南東方向へ直線的に延びる溝で、(30) SD010の西側の溝である。北側は調査区外へ続き、南側は(35) SD005にぶつかるが、新旧関係は不明である。現存部の長さ41.0m、幅1.0m～1.2m、深さは20.0cm～23.2cmである。覆土下層はローム粒を含む黒色土、上層は黒色土である。

(35) SD005 (図版43)

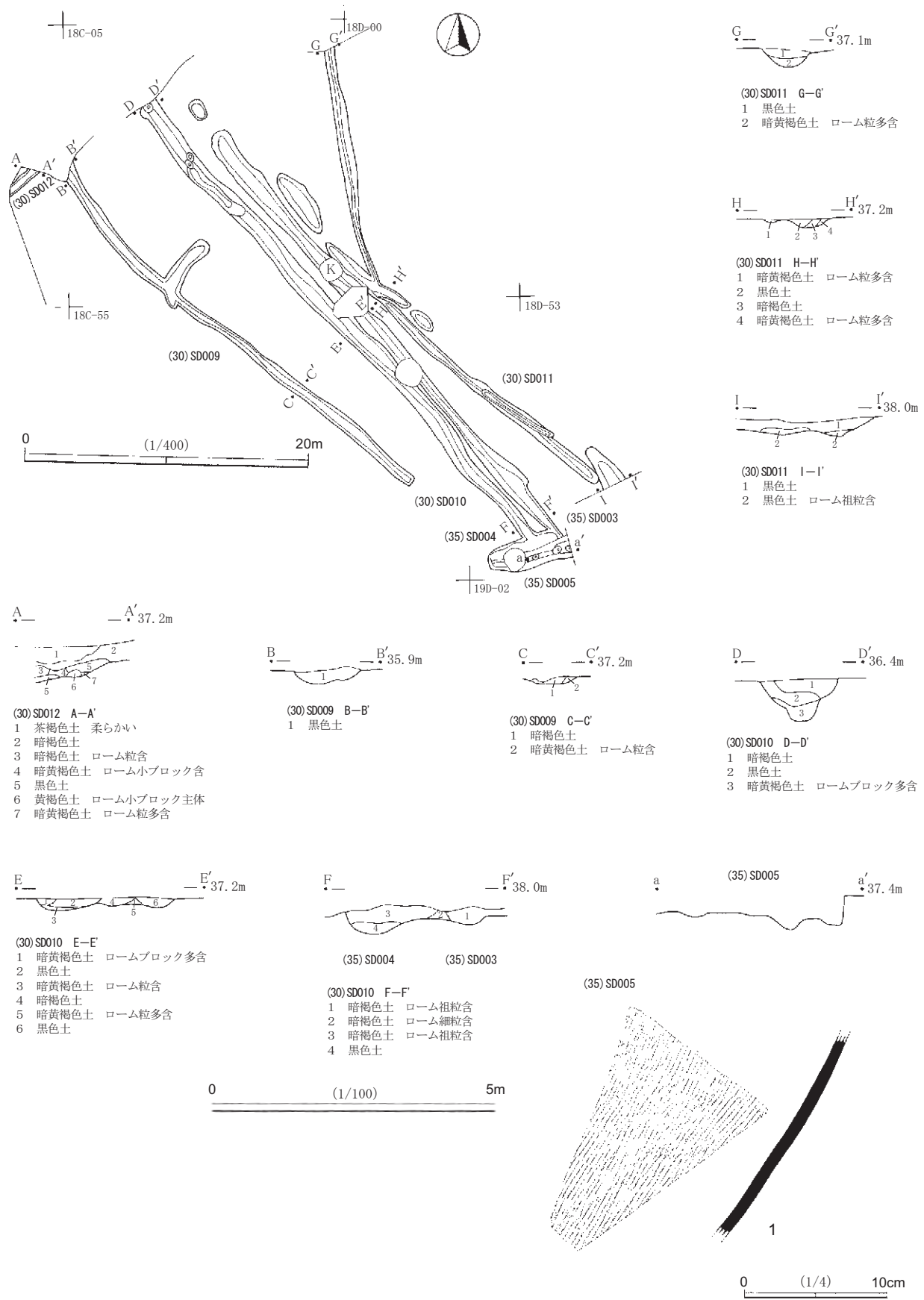
東西に直線的に延びる溝である。一部のみの検出で、現存長5.9m、西端で幅0.7m、深さ45.7cm、東端で幅1.6m、深さ39.8cmである。西側は攪乱のため不明瞭である。遺物は一点を図化した。Iは須恵器甕の胴部片である。外面に叩き目を有する。外面に釉が付着し焼成堅緻である。内面の色調は灰黄色、外面は黄灰色、精緻な胎土で白色粒子、スコリアを若干量含む。

(30) SD009 (図版43)

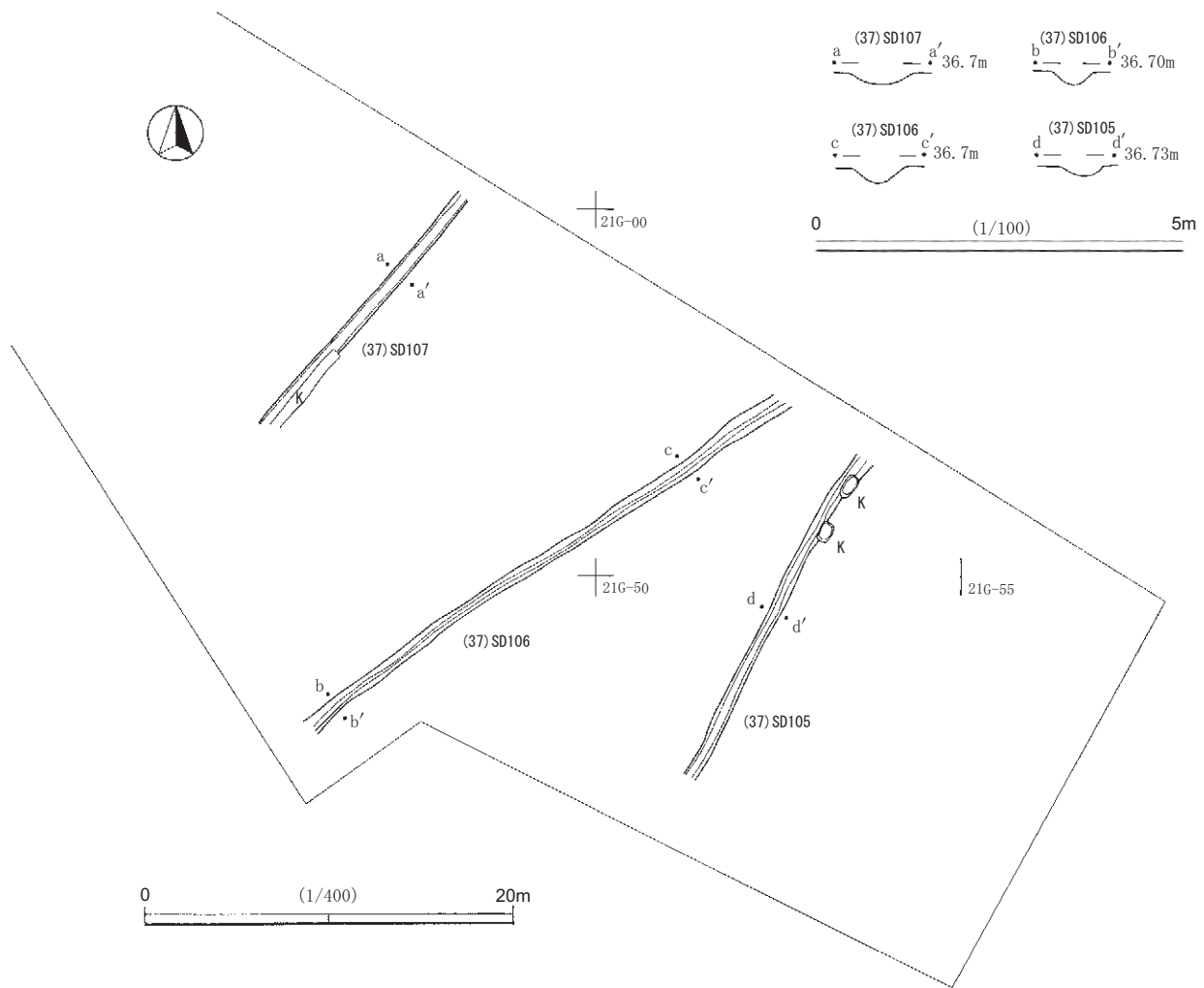
北西から南東へ直線的に延びる溝で北西端は調査区外へ続く。中央やや北寄り直交するように北東へ4.0m、南西へ0.5mほど延びる箇所がある。現存部で長さ33.0m、幅0.4m～1.0m、深さは北西端で16.0cm、中央で6.0cm、南東端で4.0cmである。覆土下層はローム粒を含む暗黄褐色土、上層は暗褐色土である。

(30) SD011

南北方向にゆるい「く」の字を描くように延びる溝である。南北両端とも調査区外へ続く。現存部で長さ38.5m、幅0.6m～0.9m、深さは北端で24.7cm、中央で17.5cm、南端で12.4cmである。確認面は南か



第239図 溝状・道路状遺構 第4分割区



第240図 溝状・道路状遺構 第5分割区

ら北へ緩やかに傾斜しており、75cmほど高低差がある。いくつか小さい土坑状の溝が重なっており、屈曲部付近も重なり合っている。覆土下層は黒色土、上層はローム粒を含む暗褐色土である。覆土中から馬の白歯が3点出土している。

(30) SD012

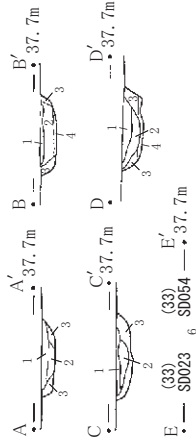
ごく一部の検出であるが、北東から南西方向へ延びると思われる。現存部長2.8m、幅0.6m～0.72m、深さ12.5cmである。覆土下層はローム粒を多く含む暗黄褐色土、ローム小ブロック主体の黄褐色土、上層は黒色土である。

第5分割区 (第240図)

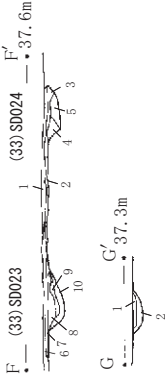
台地の南西、平成11年度に調査した範囲である。調査範囲の北側は、北西から南東へ台地を横断する現代の道路に接する。3条検出されたが、いずれも一部のみの調査である。

(37) SD105 (図版43)

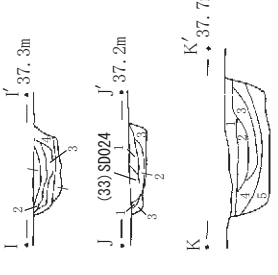
北東から南西へ直線的に延びる溝である。現存長19.6m、幅0.6m～1.0m、深さは北端で31.6cm、南端で19.7cmである。



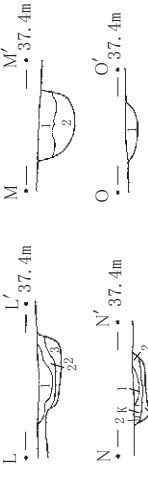
- (33) SD023 A~D
- 1 暗褐色土 砂質土 (耕作土) 含
 - 2 暗褐色土 ローム粒少含
 - 3 褐色土 ローム粒多含
 - 4 暗褐色土 ローム粒少含 一部硬化有り
- (33) SD023 E-E'
- 1 暗褐色土 ローム粒少含 (054)
 - 2 褐色土 ローム粒多含 (054)
 - 3 暗褐色土 ローム粒少含
 - 4 暗褐色土 砂質土 (耕作土) 含 (023)
 - 5 暗褐色土 ローム粒多含 (023)
 - 6 暗褐色土 ローム粒少含 (023)



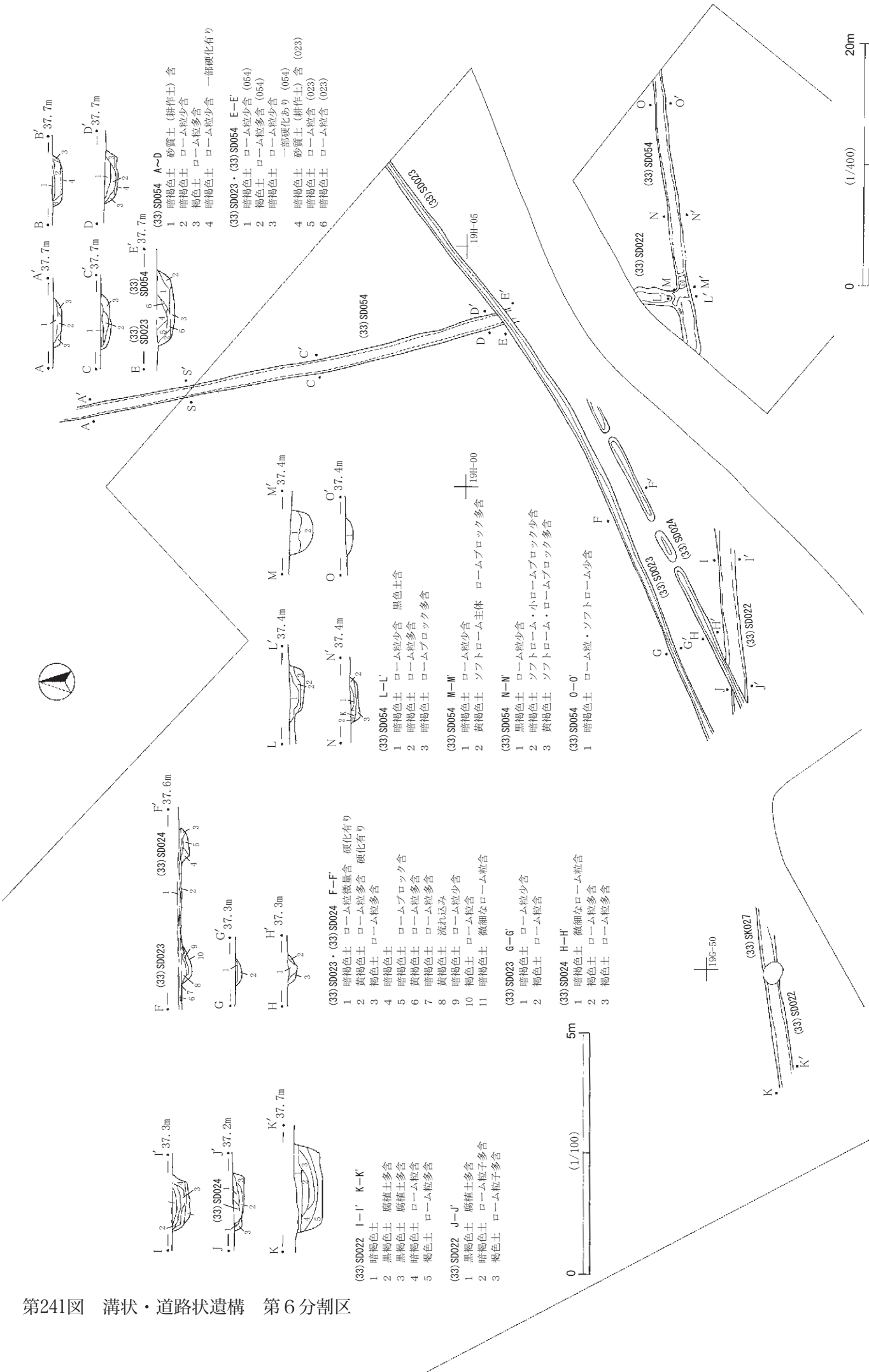
- (33) SD023 F-F'
- 1 暗褐色土 ローム粒微量含 硬化有り
 - 2 黄褐色土 ローム粒多含 硬化有り
 - 3 褐色土 ローム粒多含
 - 4 暗褐色土
 - 5 暗褐色土 ロームブロック含
 - 6 暗褐色土 ローム粒多含
 - 7 暗褐色土 ローム粒多含
 - 8 黄褐色土 流れ込み
 - 9 暗褐色土 ローム粒少含
 - 10 褐色土 ローム粒含
 - 11 暗褐色土 微細なローム粒含
- (33) SD023 G-G'
- 1 暗褐色土 ローム粒少含
 - 2 褐色土 ローム粒含
- (33) SD023 H-H'
- 1 暗褐色土 微細なローム粒含
 - 2 褐色土 ローム粒多含
 - 3 褐色土 ローム粒多含



- (33) SD022 I-I' K-K'
- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土 腐植土多含
 - 3 暗褐色土 腐植土多含
 - 4 暗褐色土 ローム粒含
 - 5 褐色土 ローム粒多含
- (33) SD022 J-J'
- 1 暗褐色土 腐植土多含
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多含
 - 3 褐色土 ローム粒子多含



- (33) SD054 L-L'
- 1 暗褐色土 ローム粒少含 黒色土含
 - 2 暗褐色土 ローム粒多含
 - 3 暗褐色土 ロームブロック多含
- (33) SD054 M-M'
- 1 暗褐色土 ローム粒少含
 - 2 黄褐色土 ソフトローム主体 ロームブロック多含
- (33) SD054 N-N'
- 1 暗褐色土 ローム粒少含
 - 2 暗褐色土 ソフトローム・小ロームブロック少含
 - 3 黄褐色土 ソフトローム・ロームブロック多含
- (33) SD054 O-O'
- 1 暗褐色土 ローム粒・ソフトローム少含



第241図 溝状・道路状遺構 第6分割区

(37) SD106 (図版43)

北東から南西へ直線的に延びる溝で、(37) SD105の北西に位置する。現存長31.0m、幅0.7m～1.1m、深さは北端で28.6cm、南端で10.6cmである。

(37) SD107 (図版43)

北東から南西へ直線的に延びる溝で、(37) SD106の北西に位置する。現存長16.0m、幅0.7m～0.85m、深さは北端で14.3cm、南端で18.9cm、南端は消滅していた。

第6分割区 (第241図)

台地の中央西寄り、平成11年度に調査した範囲である。奈良・平安時代の遺構は台地の東側に集中しており、西側から検出された遺構は3軒の竪穴住居跡だけである。その3軒ともが6区に点在する。

(33) SD022

東西に直線的に延びる溝である。調査区の関係で途切れ途切れの検出であるが、本来はつながっていたものと思われる。現存部の長さ79.0m、幅1.0m～1.4m、深さは西端で25.9cm、中央で30.1cm、東端で14.9cmである。覆土は下層から順にローム粒子を多く含む褐色土、暗褐色土、黒褐色土、腐植土を多く含む黒褐色土、ローム粒子をあまり含まない暗褐色土で、底部付近はしまりが特に強い。本遺構の東寄り、南へ2mの位置に奈良・平安時代の(34) SI121が検出されている。

(33) SD023

西から北東方向へわずかにカーブを描きながら延びる溝である。西端、北東端とも調査区外へと続く。東側で南北に延びる(33) SD054を切っている。現存部の長さ55.0m、幅0.5m～0.9m、深さは西端で6.9cm、中央で20.9cm、東端で17.3cmである。覆土下層はローム粒を含む褐色土、上層はローム粒を少量含む暗褐色土である。

(33) SD024

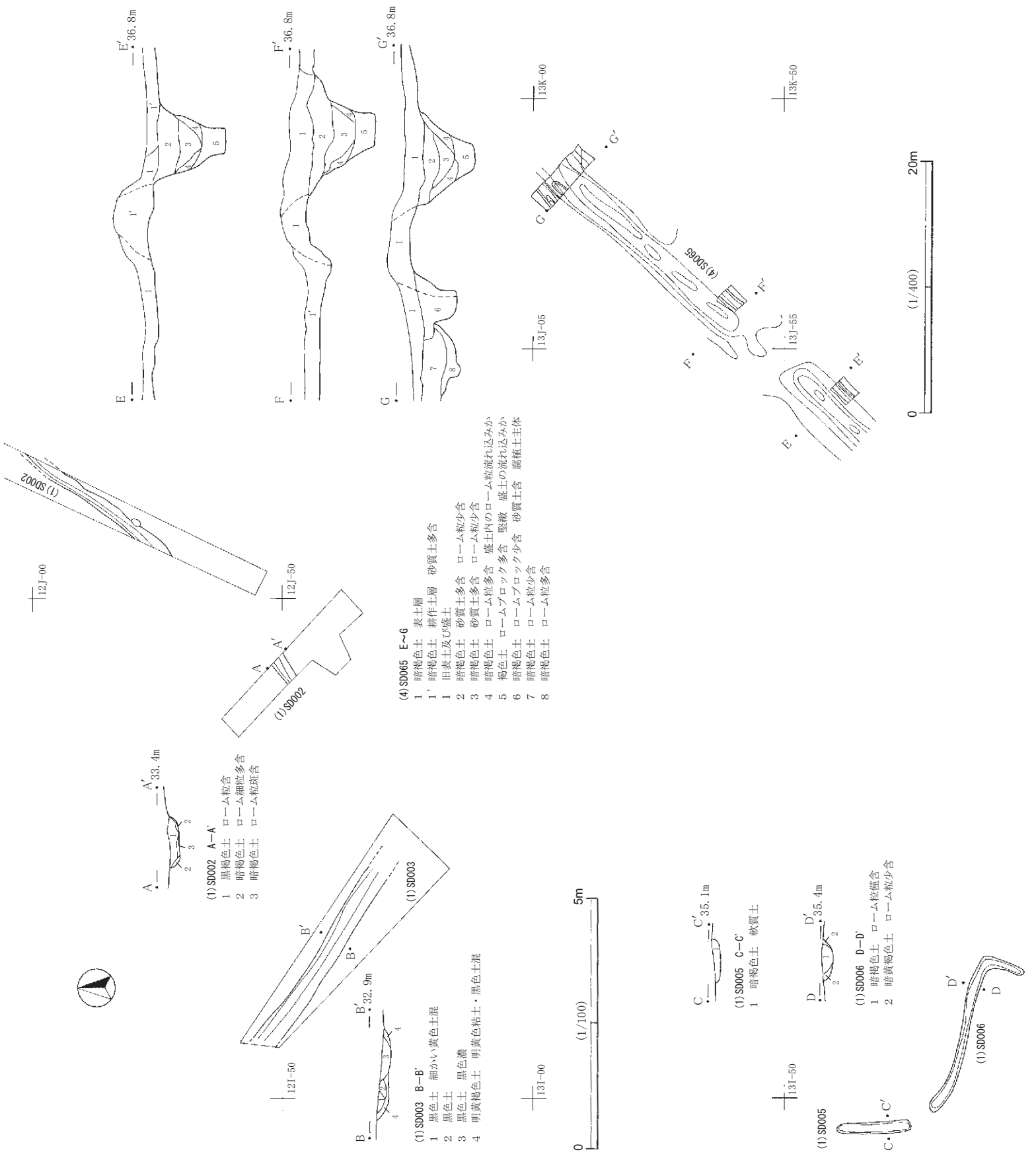
(33) SD022を切り、南西から北東方向へ直線的に延びる溝である。北側に位置する(33) SD023とはわずかに方向が異なり、西端で3.0m、東端で1.5mの間隔が開いているが、一部に硬化面が認められ、道として利用された可能性がある。現存部の長さ28.5cm、幅0.6m～0.9m、深さは西端で17.9cm、中央で24.8cm、東端で30.3cmである。覆土下層はローム粒を含む暗褐色土、上層は褐色土である。調査所見によると、畝状にロームが掘り残されており、地境の溝と考えられる、とある。

(33) SD054

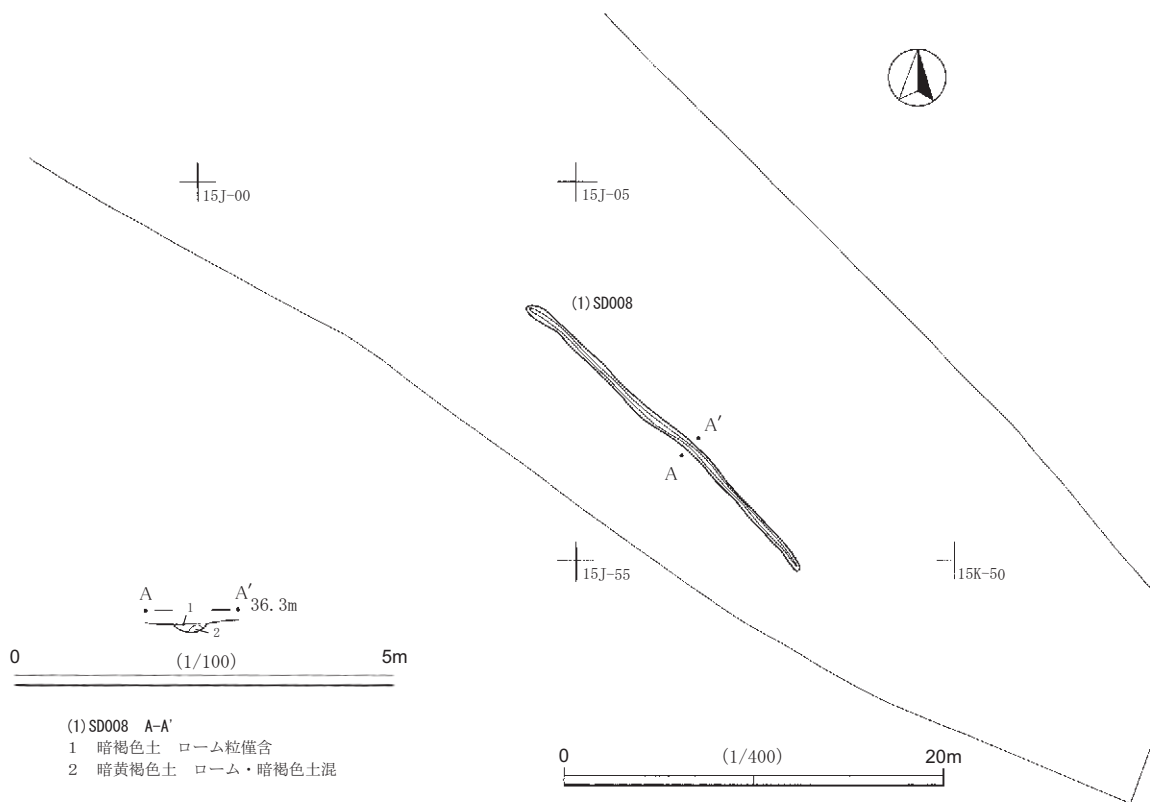
南北に直線的に延びる溝である。南端は(33) SD022にぶつかる。北側は調査区外へ続き、(26) SD007に続く可能性がある。現存部の長さ53.5m、幅1.0m～1.4m、深さは北端で16.5cm、中央で17.5cm、南端で27.6cmである。覆土下層はローム粒子を少量含む暗褐色土で、一部硬化が認められる。中層はローム粒子を含む褐色土、暗褐色土、上層は砂質土を含む暗褐色土である。中央南寄り、西へ2.5mの所に奈良・平安時代の(33) SI092が、南端から西へ20mの所に(33) SI91が所在する。(33) SI091、(33) SI092は溝によって区画された範囲の西側に所在していた。

第7分割区 (第242図)

台地の北西、平成11年度、19年度(H1904)に調査した範囲である。本区の北西、一段下がった台地上には飯積上台遺跡が所在している。溝4条と野馬堀1条が検出されているが、いずれも一部のみの調査である。



第242図 溝状・道路状遺構 第7分割区



第243図 溝状・道路状遺構 第8分割区

(4) SD065

南西から北東へ直線的に延びる野馬堀である。H2203調査区から続いているものと思われる。トレンチによる部分的な調査であるが、検出部分の長さ30.0m、幅1.3m～1.6m、深さは南西で121.0cm、中央で95.6cm、北東で91.6cmである。溝の北西に高さ70cm弱の野馬土手が伴う。野馬土手頂部と溝底部の高低差は202.4cmほどになる。覆土下層はロームブロックを多く含む褐色土と暗褐色土で、盛り土からの流れ込みと思われる。中・上層は砂質土を多く含む暗褐色土で、上層に比べ中層はしまりがなくぼそぼそとしている。盛り土も砂質土を含む暗褐色土だが、攪乱を受けており分層は困難である。

(1) SD002 (図版47)

南西から北東へ直線的に延びる溝である。現存部の長さ28.0m、幅0.9m～1.1m、深さ6.6cm～10.5cmと浅い。覆土下層はローム粒を含む暗褐色土、上層はローム粒を含む黒褐色土である。

(1) SD003 (図版47)

北西から南東へ直線的に延びる溝である。現存部の長さ16.6m、幅1.9m～2.6m、深さ37.0cm～41.2cmである。2条が並行しており、土層の堆積状況から北東側の溝の方が新しいことが分かった。南西側の溝の覆土は下層が明黄色の粘土が混じる黒色土、上層が黒色土である。北東側の溝の覆土は堅くしまった黒色土で、最も黒みが強い。

(1) SD005

南北に延びる長楕円形の溝である。長さ6.0m、幅0.7m～1.0m、深さ8.5cm～18.7cmである。覆土はやわらかい暗褐色土の単一層である。

(1) SD006 (図版47)

西からやや南寄りの東へ延びた後南へ向きを変える鉤の手状の溝である。長さ15.5m、幅0.3m～0.5m、深さは西端で24.4cm、中央で16.0cm、南端で4.3cmである。(1) SD005と一続きになる可能性もあるが、詳細は不明である。覆土はローム粒をわずかに含む暗褐色土主体で、下層に暗黄褐色土が見られる。

第8分割区 (第243図)

台地の北西、平成19年度 (H1904) に調査した範囲である。南東に入り込む谷の北側に位置する。1条のみの検出である。

(1) SD008 (図版47)

北西から南東へやや蛇行しつつ直線的に延びる溝である。長さ20.1m、幅0.3m～0.6m、深さは北西で23.2cm、中央で22.9cm、南東で11.1cmである。覆土下層はロームと暗褐色土が半々の暗黄褐色土、上層はローム粒をわずかに含む暗褐色土である。

第9分割区 (第244図)

台地の北東、平成12年度 (仮2区)、平成19年度 (H1906) に調査した範囲である。台地北側で緩やかに入り込む谷に面している。台地縁辺のため北側に遺構は見られないが、南側には縄文時代の遺構が集中している。

(7) SD294、(6) SD008 (図版44)

北西から東へほぼ直線的に延びる溝で、東側で (7) SD294につながった後更に調査区外へ続く。現存部の長さ66.0m、幅は西側0.4m～0.7m、東側で0.9m～1.2m、深さは14.2cm～25.9cmである。覆土はローム粒子を含む黒褐色土主体である。

(6) SD013 (図版44)

南北に緩いカーブを描きながら延びる溝で、南北両端と東岸が調査区外にあたる。確認面は南から北へ向かって2.6mほど下がっている。現存部の長さ49.0m、幅1.9m～2.0m、深さは北で17.6cm～27.3cm、中央で41.3cm～45.2cm、南で32.8cmである。底面は根による攪乱が著しい。北側では攪乱は少なくなるが浅くなる。南側中央に幅50.0cm～60.0cmほどの別の溝があるが、関連性は不明である。覆土は黒褐色土が主体である。遺物の出土量は少なく、須恵器甕の胴部片1点を図化した。外面に叩き目を持ち、灰色を呈する。焼成堅緻で胎土に大粒の白色粒子を含む。

(7) SD295 (図版44)

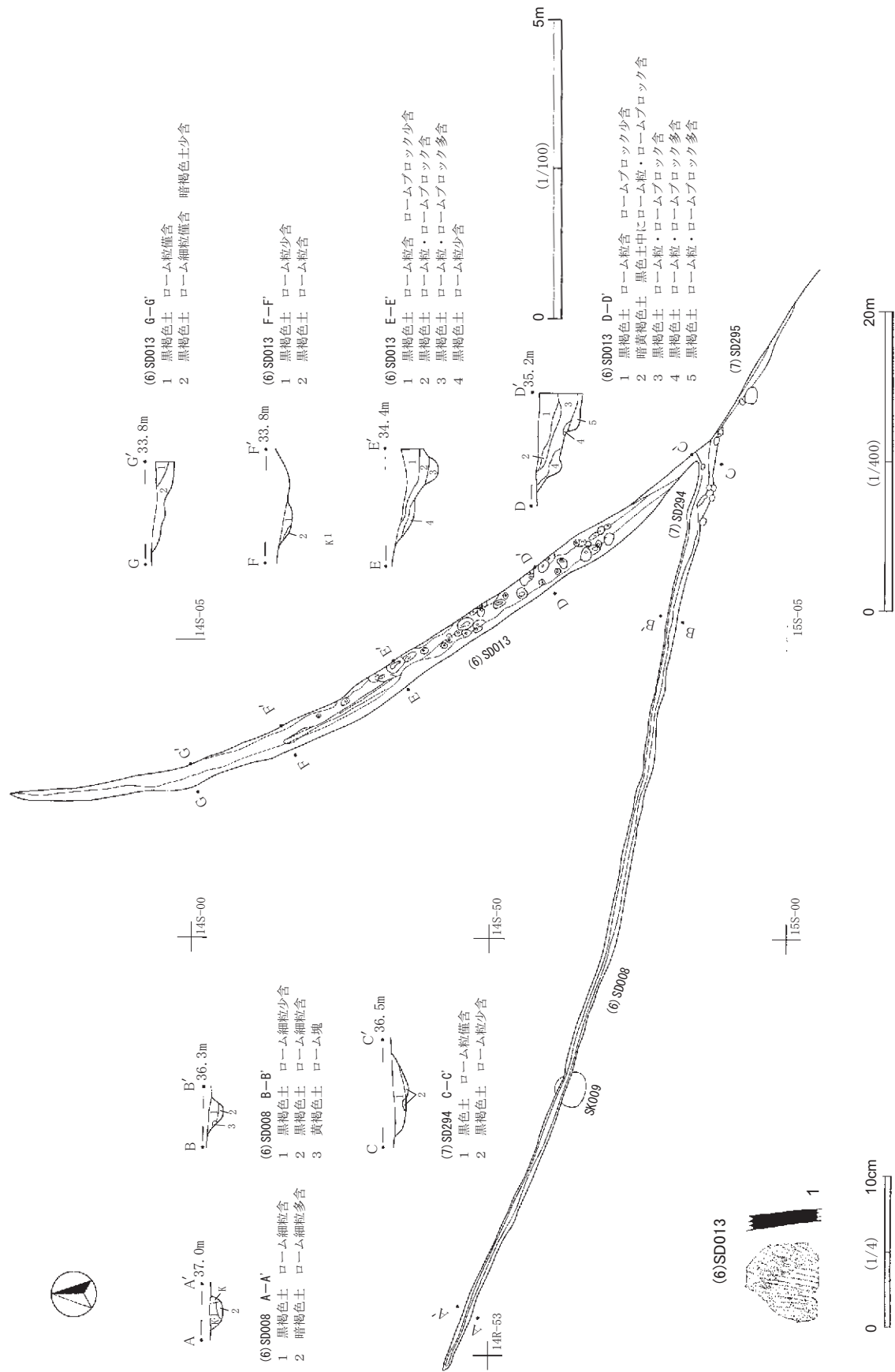
北西から南東へ延びる溝であるが、ほとんどが調査区外である。現存部の長さ10.0m、深さ34.4cm～41.0cmで、幅は計測不可である。覆土は下層がローム粒、ローム粒子を少量含む黒褐色土、上層がローム粒、ローム粒子をわずかに含む黒褐色土で、いずれもやや柔らかい土である。近接する (6) SD013、(7) SD294との関係は調査区外にかかるため不明である。

第10分割区 (第245・246図)

台地中央、平成12年度 (1a区)、13年度 (C区) に調査した範囲である。(33) SD022、(33) SD054については第6分割区で述べている。

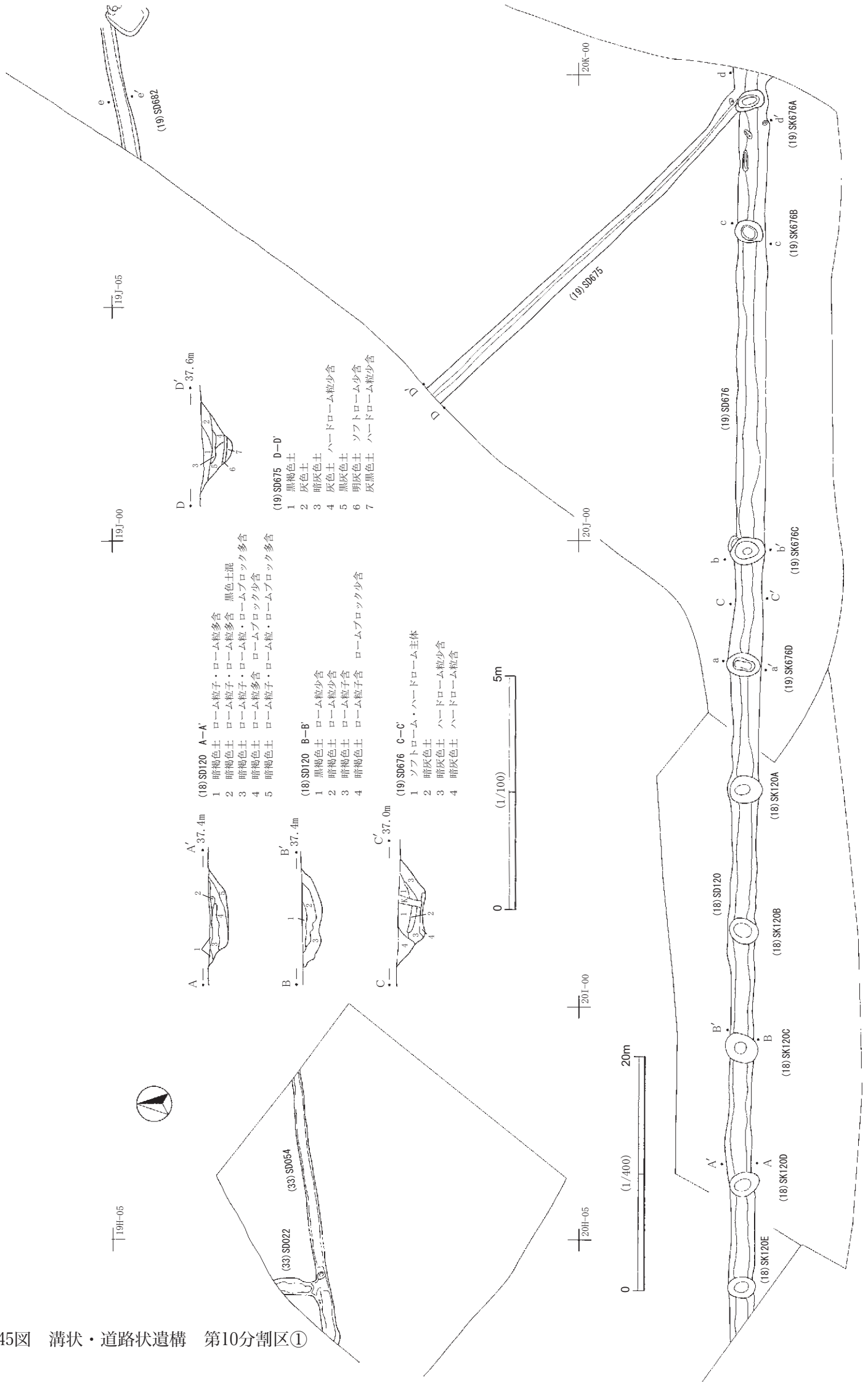
(18) SD120、(19) SD676 (第244・245図、図版44・67・70)

(18) SD120、(19) SD676、(20) SD661、(16) SD001、(13) SD627は調査年度が多年度に渡っているため、その都度遺構番号が変わっているが同一の遺構である。そのため一括して概観する。若干の振れはあるが、



第244図 溝状・道路状遺構 第9分割区

第245図 溝状・道路状遺構 第10分割区①



真東西方向に直線的に延びる道路状遺構である。東西両端とも調査区外のため不明ながらも、台地を東西に横切っていたものと思われる。台地中央付近で北西から東西方向に走る中世の溝(19)SD675に切られる。(19)SD676調査時に硬化面が検出されたため、道路状遺構とした。現存部の長さ318.5m、幅1.5m～2.2m、深さは西端で37.5cm～43.1cm、中央で40.1cm～58.7cm、東端で20.8cm～34.7cmである。覆土はローム粒を含む暗褐色土主体である。遺構東側の(16)SD001では床面壁際に2.0cm～6.0cmの浅い溝が見られる。

(19)SD676出土遺物は13点を図化した。1は須恵器の底部片である。底部は回転糸切り後無調整、外面体部下端に手持ちヘラケズリが施される。色調は灰色である。北武蔵産である。

2～6は土師器杯である。2、3は内面にミガキ及び黒色処理が施される。2は口径に比して器高がやや低く、口唇部は玉縁状を呈する。体部外面に横位の「三倉」と思われる墨書が見られる。3は口縁部を欠損する。底部回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリが施される。4は口径10.7cmとやや小ぶり、体部外面に墨書が見られる。他の出土例から横位の「倉」と思われる。色調はにぶい橙色である。5は器形に歪みがあり、5mmほどの器高差がある。外面体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。立ち上がりは丸みをもち曖昧である。基調となる色調はにぶい赤褐色、内面口縁部から体部は暗褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。6も器形に歪みが生じている。底径は口径の1/2となり、体部が内湾しながら開く。内面の色調は暗褐色、外面は黒褐色ないし黄褐色を呈する。胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。

7、8は土師器高台付杯である。7は高台部分をほとんど欠損している。口縁部に向かって器厚を減じ、端部で外反する。外面体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリを施した後高台を貼り付けている。色調はにぶい褐色、口縁部内面の1/3周程が黒褐色である。8は口縁部、高台端部とも欠損している。意図的な打ち欠きか。色調は赤褐色で、内外面とも体部下位が帯状に黒変している。全周して環状になるかどうかは遺存部位が少ないため不明である。

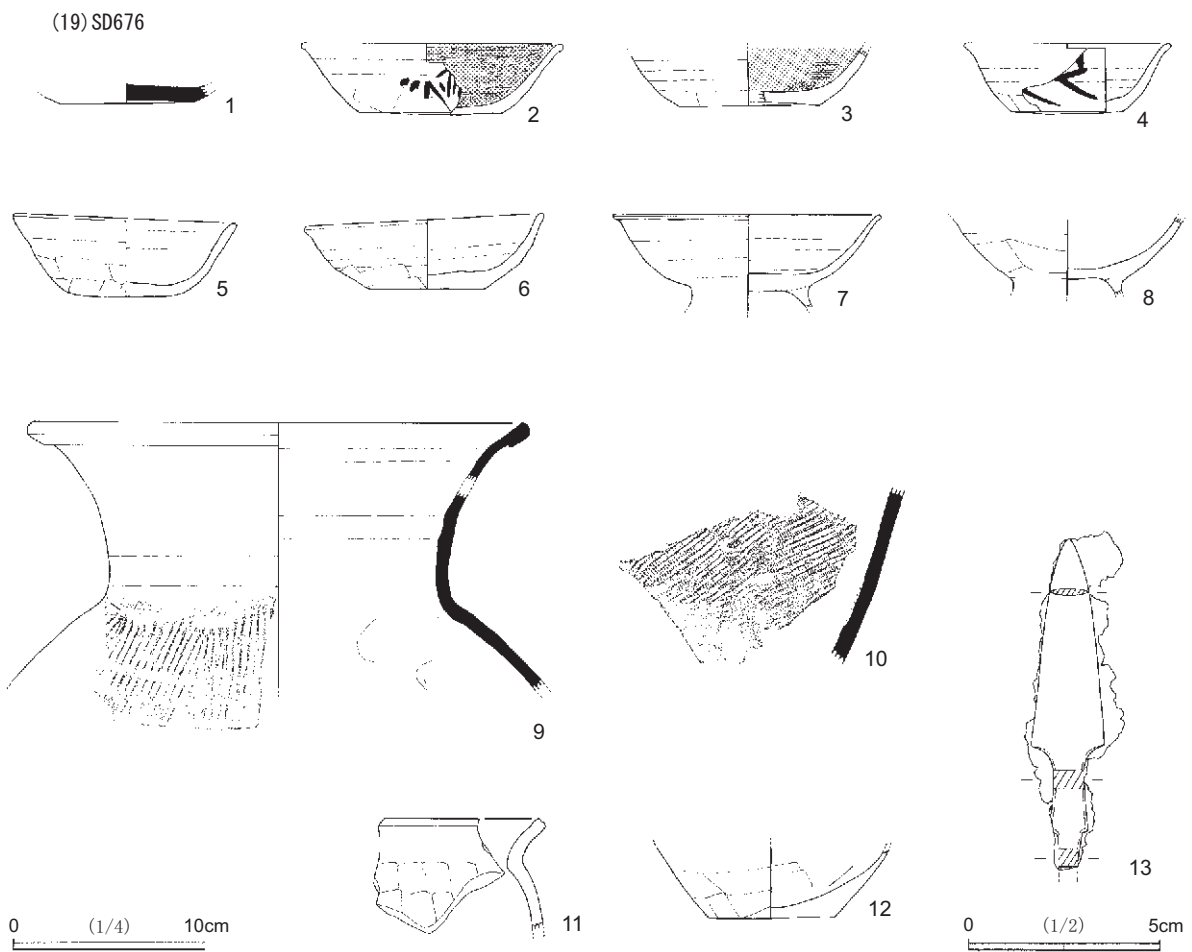
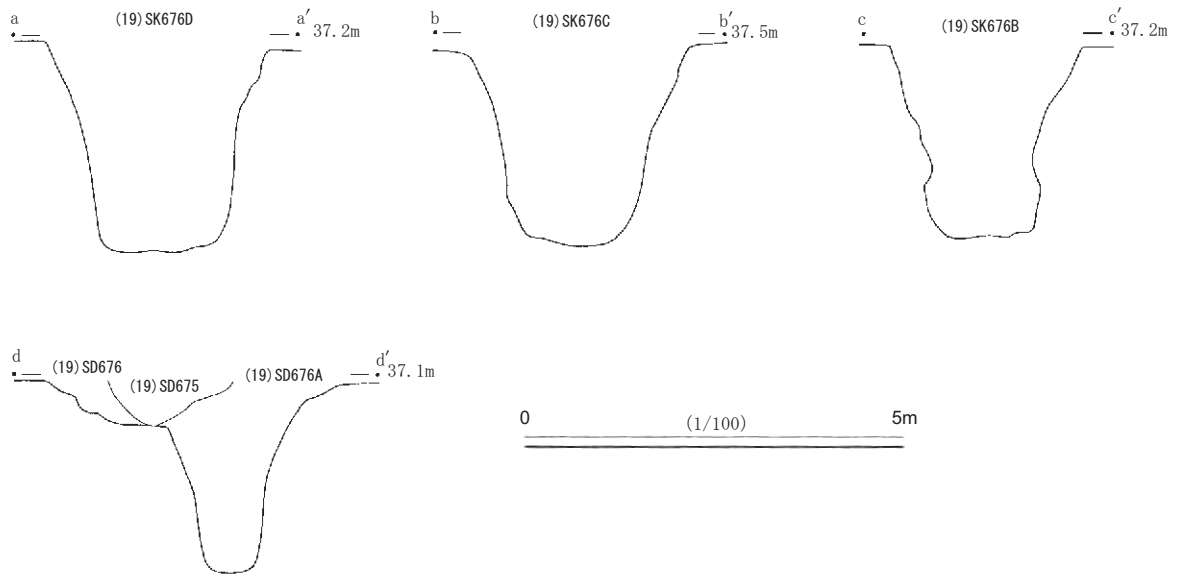
9、10は新治産の須恵器甕である。9は口縁部が「ハ」の字状に開く甕である。折り返し状の口縁端部は面取りされる。胴部外面は叩き、内面には当て具痕が見られる。内面の色調はにぶい褐色、外面は明褐色、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。10は胴部片である。外面は斜位の叩きで、叩き目と直交する方向に木目が見られる。内面の色調は黄灰色、外面は黒褐色、胎土に多量の白色粒子、雲母、大粒の赤色スコリアを含む。

11、12は土師器甕である。11は厚みのある口縁部片で、端部が面取りされる。色調は褐色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。12は底部片で、胴部がかなり薄くなる。内面の色調は明赤褐色、外面は暗赤褐色、胎土は土師器杯と同様白色粒子と赤色スコリアを含む。外面に煤が付着している。

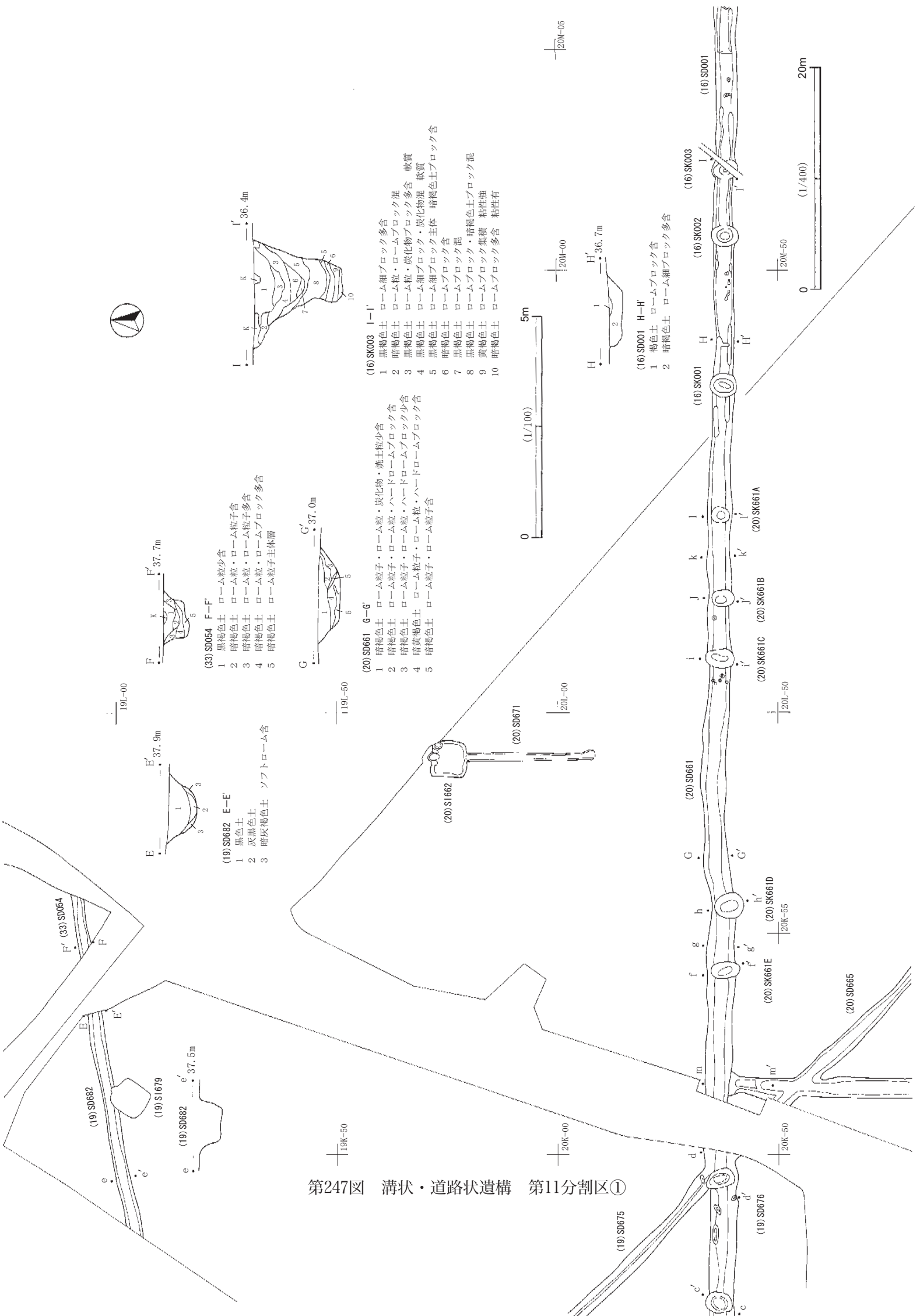
13は鉄鏃である。刃部は細身の三角形で長さ5.5cm、幅1.05cmである。頸部は短く長さ2.25cm、幅0.8cm、茎長1.0cm、幅0.55cm、全長8.75cmである。

(19)SD675 (図版44)

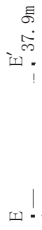
北西から南東へ直線的に延びる溝である。南東端は(19)SD676を切って遺構外へと延び、(20)SD665に続いていくものと思われる。現存部の長さ40.0m、幅1.3m～1.7m、深さは北西で49.0cm、中央で33.0cm、南東で29.0cmである。覆土下層はハードローム粒を少量含む灰黒色土でしまりが強い。中層は灰色土ないし黒灰色土、上層は黒褐色土、灰色土である。(19)SD676(道路状遺構)、(19)SK676A(シシ穴状遺構)、(19)SD675が交差する部分の土層観察によりSD676、SK676A、SD675の順に使用されたようである。



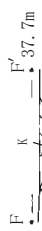
第246図 溝状・道路状遺構 第10分割区②



19L-00



- (19) SD682 E-E'
- 1 黒色土
 - 2 灰黒色土
 - 3 暗灰褐色土 ソフトローム含



- (33) SD054 F-F'
- 1 黒褐色土 ローム粒少含
 - 2 暗褐色土 ローム粒・ローム粒子含
 - 3 暗褐色土 ローム粒・ローム粒子多含
 - 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多含
 - 5 暗褐色土 ローム粒子主体層



- (20) SD661 G-G'
- 1 暗褐色土 ローム粒子・ローム粒・炭化物・凝土粒少含
 - 2 暗褐色土 ローム粒子・ローム粒・ハードロームブロック含
 - 3 暗褐色土 ローム粒子・ローム粒・ハードロームブロック少含
 - 4 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム粒・ハードロームブロック含
 - 5 暗褐色土 ローム粒子・ローム粒子含

19K-50

- (16) SK003 I-I'
- 1 ローム細ブロック多含
 - 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック混
 - 3 黒褐色土 ローム粒・炭化物ブロック多含 軟質
 - 4 黒褐色土 ローム細ブロック・炭化物混 軟質
 - 5 暗褐色土 ローム細ブロック主体 暗褐色土ブロック含
 - 6 暗褐色土 ロームブロック混
 - 7 暗褐色土 ロームブロック・暗褐色土ブロック混
 - 8 暗褐色土 ロームブロック・暗褐色土ブロック混
 - 9 黄褐色土 ロームブロック集積 粘性強
 - 10 暗褐色土 ロームブロック多含 粘性有

20M-00



- (16) SD001 H-H'
- 1 褐色土 ロームブロック含
 - 2 暗褐色土 ローム細ブロック多含

20L-00



20K-50



第247図 溝状・道路状遺構 第11分割区①

(19) SD682

東西方向に直線的に延びる溝で、SD022に続くと思われる。中央南側で9世紀前半の竪穴式住居跡(19)SI679に切られる。現存部の長さ20.7m、幅1.0m～1.4m、深さ45.0cm～62.6cmである。覆土下層はソフトローム、ハードローム主体土、中層は暗灰褐色土、灰褐色土、上層は黒色土である。床面直上の土層は人為堆積だが、特に硬化面は形成されていない。

第11分割区(第247～249図))

台地中央、第10分割区の東に位置し、平成13年度に調査した範囲である。(20)SD661、(16)SD001の遺構概要については(19)SD676の続きとなるため、第10分割区で説明した。

(20) SD661 (図版67)

(20)SD661の遺物は23点を図化した。1、2は須恵器杯である。底径と口径の差が小さく、口縁部が緩やかに外反する器形で、外面体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。2は口縁の歪みが大きく、最小径11.8cm、最大径13.5cmとなる。口唇部外面に灯明として使用したような痕跡が認められる。色調は1がにぶい黄褐色、2が灰オリーブ色を呈する。

3～7は土師器杯である。3は内面にミガキ及び黒色処理が施される杯で、体部外面には横位の墨書「三倉」が見られる。色調はにぶい黄褐色、胎土に白色粒子、砂粒を含む。4の外面体部下端は手持ちヘラケズリにより面取りされ、底径が口径の1/2となる。内面の色調は明黄褐色、外面は橙色である。5は底部回転糸切りの後体部下位と底部に回転ヘラケズリを施す。色調は明赤褐色である。6は底部片で、底部外面にヘラ書き「十」が見られる。色調は橙色である。7も底部片で、橙色を呈する。内外面に墨書が見られる。底部内面は山だれのような墨痕、外面は「變麻加」と三文字あるいはそれ以上の墨書が記されている。4～7の胎土は砂粒、赤色スコリアを基本として、5のみ雲母を混入する。

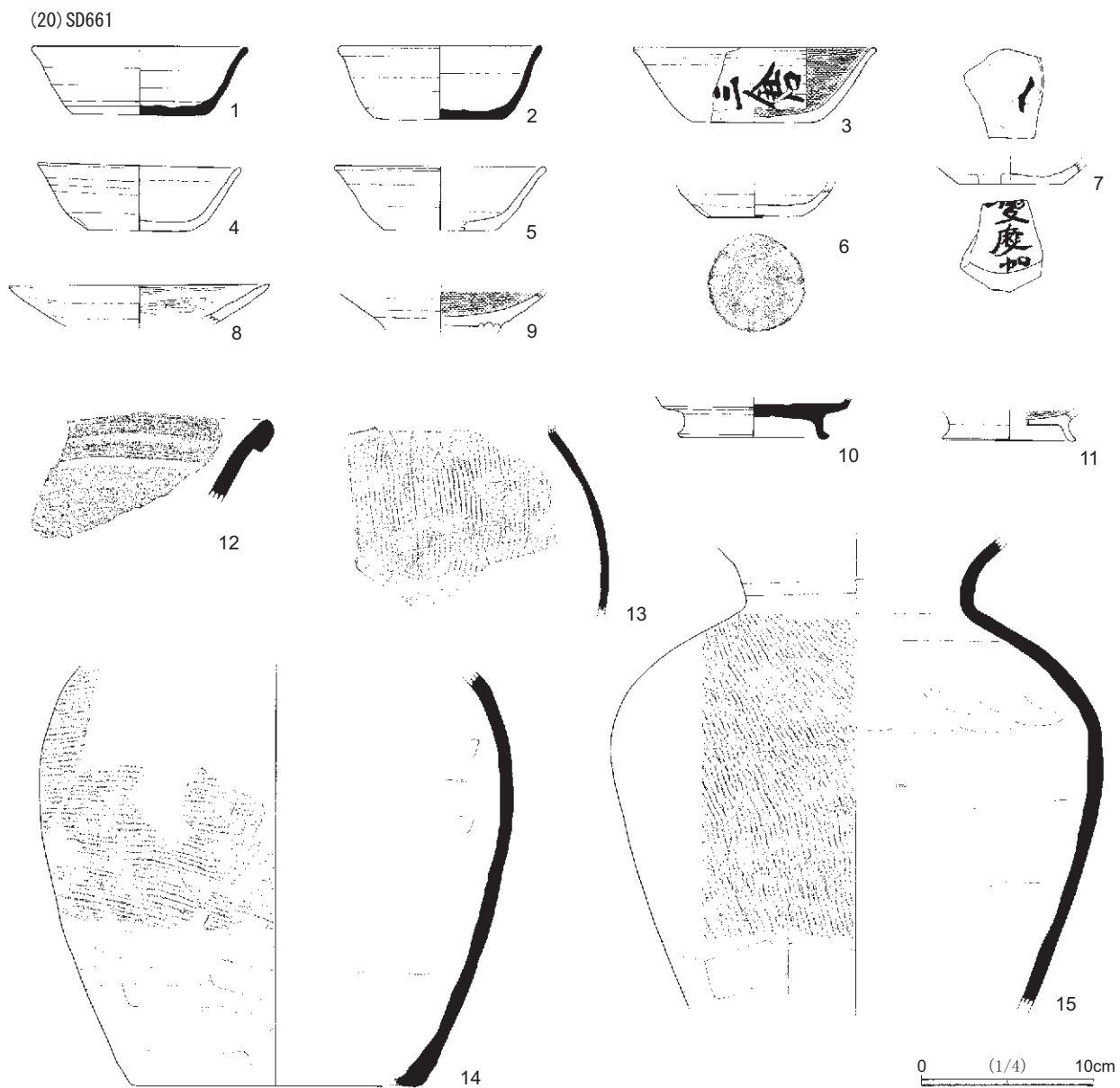
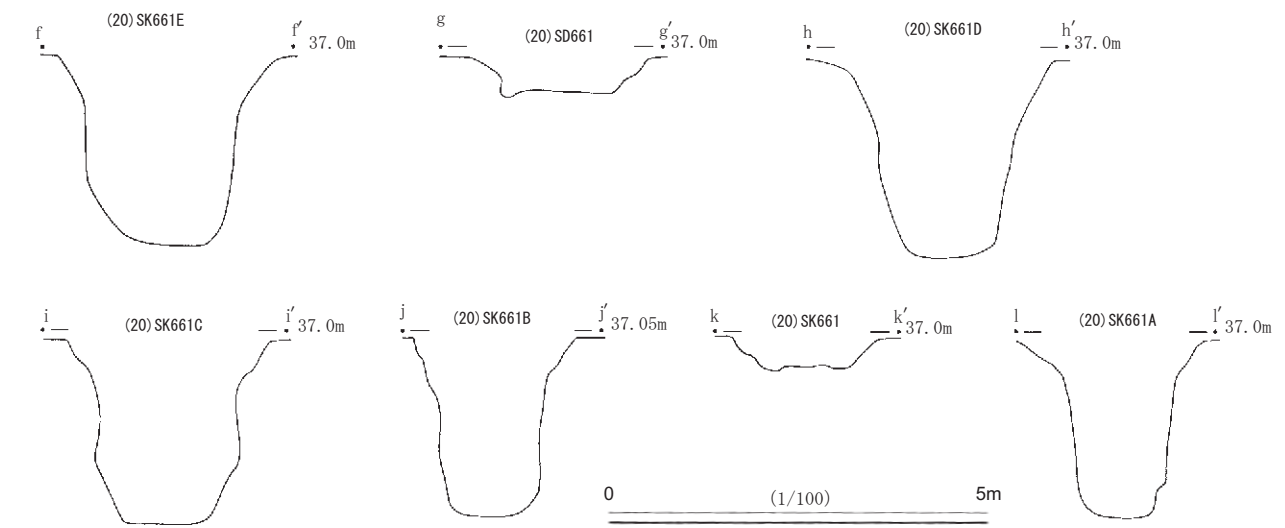
8は土師器皿の口縁部片である。口縁端部に向かって器厚を減じながら直線的に開く器形で、内面にミガキが施される。色調は明赤褐色、胎土に白色粒子、赤色スコリアを含む。

9は土師器高台付碗で、口縁部、高台部ともに欠損する。内面はミガキ及び黒色処理が施される。色調は明褐色、胎土に砂粒、雲母、赤色スコリア、少量の白色針状物を含む。

10は須恵器高台付杯の底部である。外面体部下端に稜をもつ杯部に端部が強く外反する高台が付く。底部外面にヘラ書き状の線がみえるが、遺存部が少ないため詳細は不明である。体部を意図的に打ち欠いている可能性がある。色調は灰色、胎土に多量の白色粒子、スコリアを含む。

11は土師器高台付杯の底部である。高さ1cm程の高台部は外反しながら開く。内面はミガキ及び黒色処理が施される。色調は橙色、胎土に白色粒子、砂粒、赤色スコリア、少量の白色針状物を含む。

12～17は須恵器甕である。12は口縁部片、13は胴部片である。14は胴部上位が丸く張る甕で、胴部最大径は27.8cmである。胴部外面は横位の叩きのち胴部下位にヘラケズリを施す。色調はオリーブ灰色、胎土に多量の白色粒子と雲母、大粒のスコリアを含む。15は胴部上位が丸く張り、口縁部が「ハ」の字状に開く。口縁部、底部ともに欠損する。胴部最大径は28.9cmを測る。色調は灰色、胎土に白色粒子を多く含む。内面頸部から胴部中位辺りまで、更に粘土を貼ったものか胴部下位と色調が異なっている。器表面も上半は平滑、下半はややザラつきがある等の違いが見られる。肩部は当て具痕が顕著である。外面に色調の差は見られない。16は胴部が丸く張るタイプの肩部と底部片で、胴部最大径は31.1cmと推測される。色調は褐色、胎土にやや多めの白色粒子、赤色スコリアを含む。底部外面は布目圧痕か。17は胎土に多量



第248図 溝状・道路状遺構 第11分割区②

の白色粒子と雲母を含む。色調はオリーブ灰色を呈する。いずれも新治産である。

18、19は須恵器甕である。18は接合しない破片を図上で復元したため推定ではあるが、口径32.8cm、底径20.0cmに対し器高が20.0cmとかなり低い。口縁部は水平方向に開いた後内折する。底部は五孔になると思われる。胴部外面は叩きで、叩き目と直交する方向に木目が見られる。色調は灰色、胎土に白色粒子を多く含む。新治産である。19は口縁部に最大径をもつ。表面の色調は黒褐色、断面は赤褐色を呈し、胎土に白色粒子を多く含む。下総産である。

20～23は土師器甕である。20は口縁部から胴部上位の遺存で、胴部はほぼ同じ高さで割れている。内面の色調は明赤褐色、外面は褐色、胎土に白色粒子を多く含む。21、22は常陸型甕の底部である。2点とも底部外面に木葉痕を有し、胴部外面にミガキが施される。胎土に多量の白色粒子、雲母を含む。21の色調は褐色、22は灰褐色ないし褐色を呈する。23は赤褐色を呈する薄手の甕である。

(16) SD001

(16) SD001の遺物は8点を図化した。1は須恵器杯で体部外面に墨書が見られる。遺存部位が少なく不明瞭だが、「三」の可能性がある。色調は灰色、胎土に多量の白色粒子、大粒のスコリアを含む。

2は内面ミガキ及び黒色処理が施された土師器高台付碗の口縁部片である。口唇部が強く外反して玉縁状を呈する。色調はにぶい黄橙色、胎土は混入物が少なく精緻である。体部外面に墨書の残画が見られるが、遺存部位が少ないため判読不能である。

3、4は土師器杯の底部片である。4は底部外面に墨書が見られる。残画のため詳細は不明であるが、「三」もしくは「主」の可能性がある。胎土に砂粒をやや多く含む。4は底部内面に墨書が見られる。4文字もしくはそれ以上と思われ、細筆で墨痕はやや薄い。「□宅万呂代□」か。いずれも外面の調整は手持ちヘラケズリ、色調は橙色である。

5、6は須恵器甕である。5は底部片で、外面に「天」とヘラ書きされている。内面の色調は橙色、外面は黒褐色を呈し、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。6は口縁部片で、胴部外面に叩き目を有する。白色粒子を多く含み、外面は光沢を帯びている。内面の色調はオリーブ黒色、外面は黒色を呈する。

7は須恵器長頸壺の底部である。底部内面と外面に釉が付着しており、外面の一部が褐色を帯びている。胴部外面は回転ヘラケズリ、底部回転糸切りの後高台を貼り付けている。内面の色調は黄灰色、外面は灰黄褐色、胎土にスコリアを含む。

8は土師器甕の口縁部である。焼成堅緻で内面はにぶい赤褐色、外面は黒褐色を呈する。口縁部外面に煤が付着している。

(20) SD671 (図版45・70)

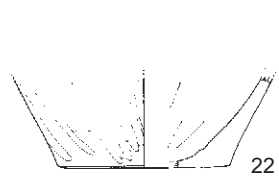
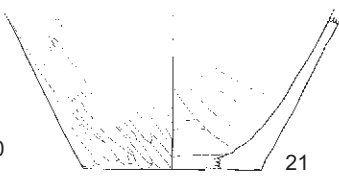
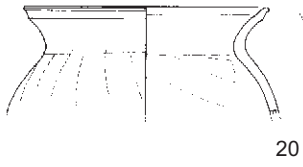
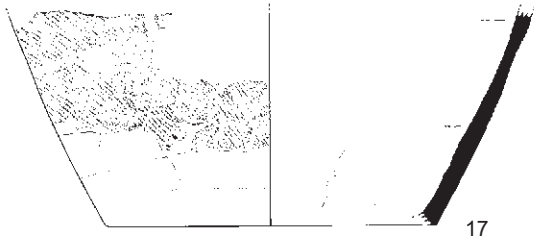
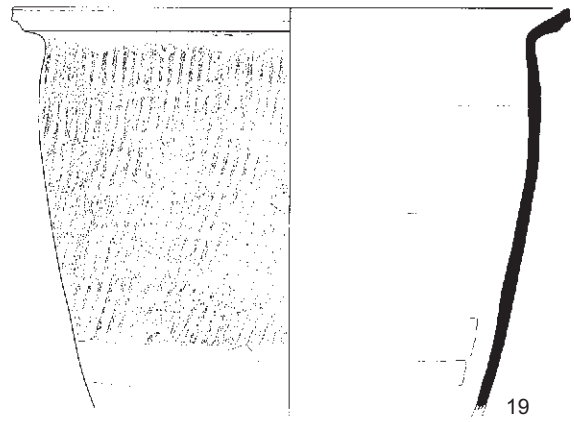
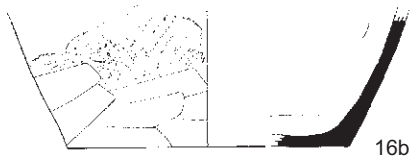
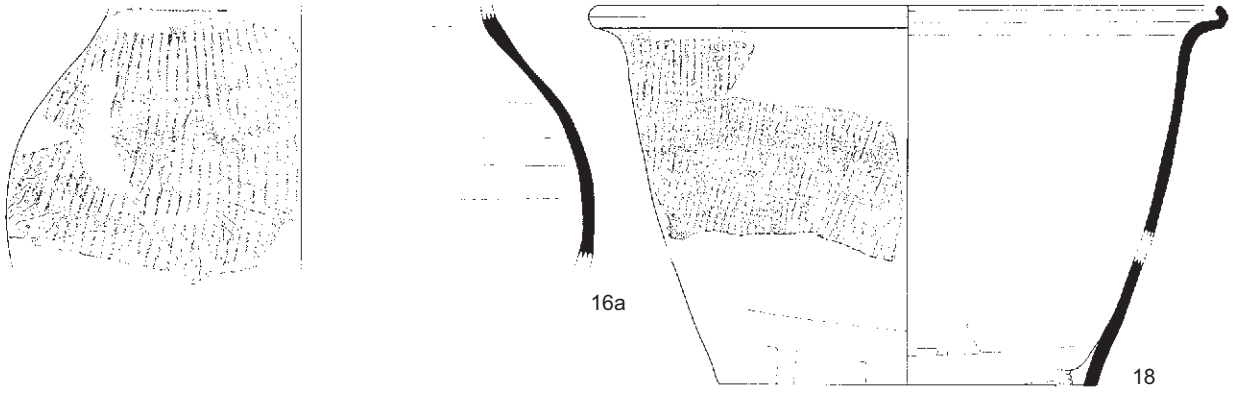
奈良・平安時代の竪穴住居跡(20) SI662から真南へ直線的に延びる溝であるが、(20) SI662との新旧関係は不明である。現存部の長さ10.6m、幅0.5m～0.8m、深さは北端で23.8cm、中央で22.0cm、南端で10.2cmである。南端で若干幅が広がるものの浅くなって形も曖昧になる。

遺物は少なく、2点を図化した。1は土師器杯の体部片で、外面に墨書が見られる。「三□」と横位に書かれており、他の出土例から「三倉」であろうと思われる。色調はにぶい橙色、胎土に細砂粒を含む。2は鉄製品であるが、製品名等は不明である。現存長23.5mm、幅6.8mm、厚さ1.7mmである。

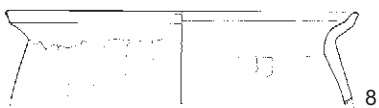
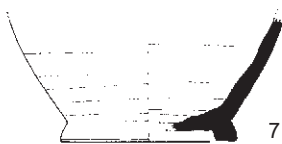
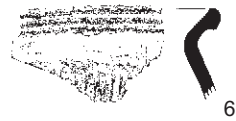
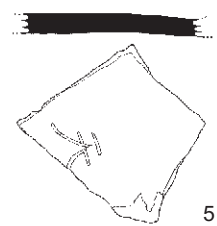
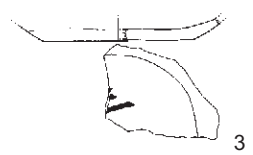
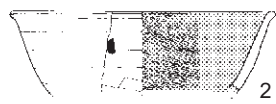
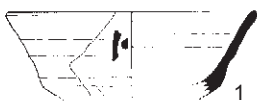
第12分割区 (第250・251図)

台地中央、第11分割区の南に位置する。平成13年度(B区、H区)に調査した範囲である。

(20) SD661



(16) SD001



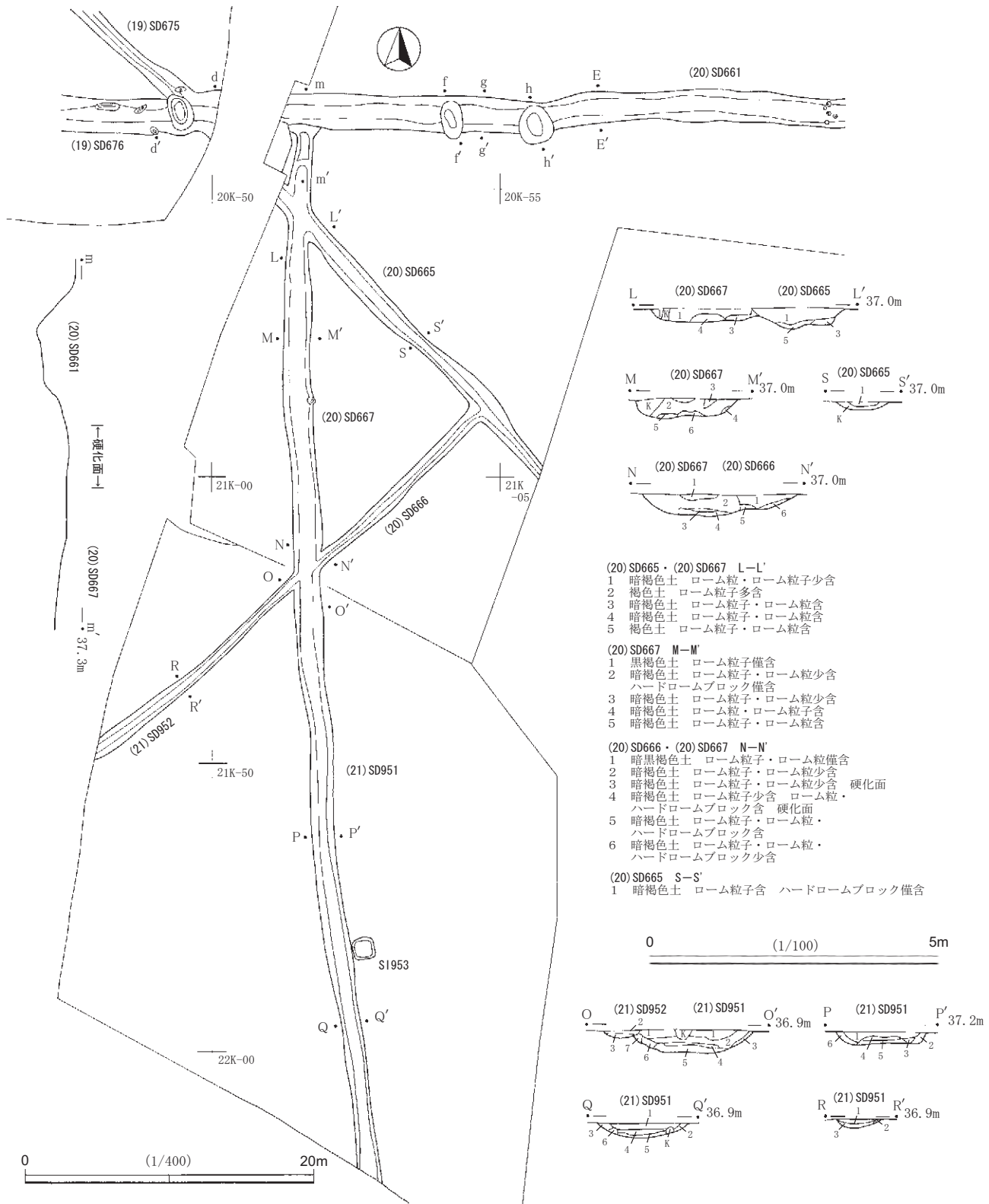
(16) SD671



0 (1/4) 10cm

0 (1/2) 5cm

第249图 沟状・道路状遺構 第11分割区③



- (21)SD951・(21)SD952 O-O'
- 1 暗褐色土 ソフトローム含 ローム粒少含
 - 2 黒褐色土 ローム粒・ソフトローム少含
 - 3 暗褐色土 ソフトローム含
 - 4 黒褐色土 硬化面
 - 5 暗褐色土 ローム粒少含 硬化面
 - 6 暗褐色土 ソフトローム含
 - 7 灰褐色土 ソフトローム多含

- (21)SD951 P-P'
- 1 暗褐色土 ローム粒・ソフトローム少含
 - 2 灰褐色土 ソフトローム多含
 - 3 暗褐色土 ローム粒少含
 - 4 黒褐色土 硬化
 - 5 暗褐色土 ローム粒少含
 - 6 暗褐色土 ソフトローム含 ローム粒少含

- (21)SD951 Q-Q'
- 1 暗褐色土 ローム粒・ソフトローム少含
 - 2 暗褐色土 ソフトローム含
 - 3 灰褐色土 ソフトローム多含
 - 4 黒褐色土 ローム粒少含 硬化面
 - 5 暗褐色土 ソフトローム含 硬化面
 - 6 灰褐色土 ソフトローム多含

- (21)SD952 R-R'
- 1 黒褐色土 ソフトローム僅含
 - 2 暗褐色土 ソフトローム少含
 - 3 灰褐色土 ソフトローム多含

第250図 溝状・道路状遺構 第12分割区①

(20) SD665 (図版45・67)

北西から南東へ直線的に延びる溝である。北西端で南北に走る溝(20)SD667と交差し、調査区外へ延び、(19)SD675へ続くものと思われる。また、南東側では南西に延びる溝(20)SD666とT字型に交わるが、(20)SD665と(20)SD666の新旧関係は攪乱のため不明である。現存部の長さ26.8m、幅0.8m～1.8m、深さは北西で25.0cm、中央で17.1cm、南東で10.7cmである。覆土下層はローム粒、ローム粒子を含む暗褐色土でしまりが強い。上層も同じく暗褐色土だが、しまりはふつうである。(20)SD667との新旧関係は土層の切り合いから(20)SD665が(20)SD667を切っていることが確認された。平成8年度に検出された溝が(20)SD665の南東端に続き、(23)SD669へ繋がっている。

遺物の出土量は少なく、5点を図化した。1、2は須恵器杯である。底径がやや大きく、外面体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。胎土に白色粒子、スコリア、小礫を含む。色調は1の内面が褐灰色、外面が灰黄褐色、2が灰色で、どちらも断面は赤褐色を呈する。

3は外面口唇部直下までヘラケズリが施される土師器杯である。色調は橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。4は体部外面に墨書が見られる土師器杯である。遺存部が少ないため文字の判読は難しい。にぶい橙色を呈し、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。

5は外面に叩き目をもつ須恵器甕の胴部片である。灰白色を呈し、胎土に多量の白色粒子、雲母を含む。

(20) SD666、(21) SD952 (図版45・67)

北東から南西に直線的に延びる溝である。北東端で(20)SD665とT字型に交わり、中央で(20)SD667、(21)SD951と交差する。現存部の長さ35.0m、幅0.6m～1.3m、深さ10.0cm～18.0cmである。覆土下層はソフトロームを少量含む暗褐色土、上層はローム粒を若干含む黒褐色土である。土層観察により(21)SD952が(21)SD951を切っていることが分かった。

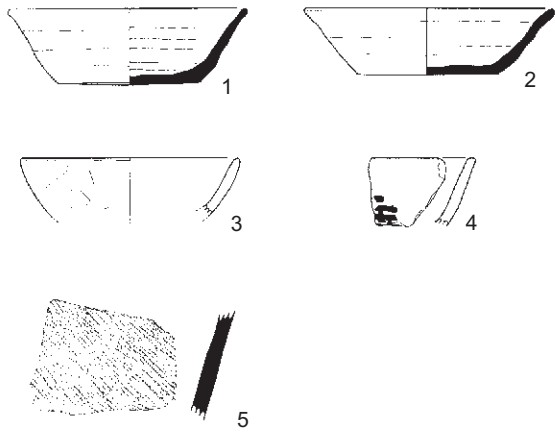
(20)SD666から出土した遺物2点を図化した。1は須恵器甕の口縁部片である。色調は表面が黒褐色、断面が褐色を呈し、胎土に微砂粒を多く含む。下総産である。2は土師器甕である。2個で一对になると思われる把手が1個残存していた。口縁部に最大径を持ち、端部はわずかにつまみ上げられる。胴部外面の調整は縦方向のヘラケズリ、内面は縦方向のやや粗いミガキが施される。色調は明褐色、胎土に細砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。

(20) SD667、(21) SD951 (図版45)

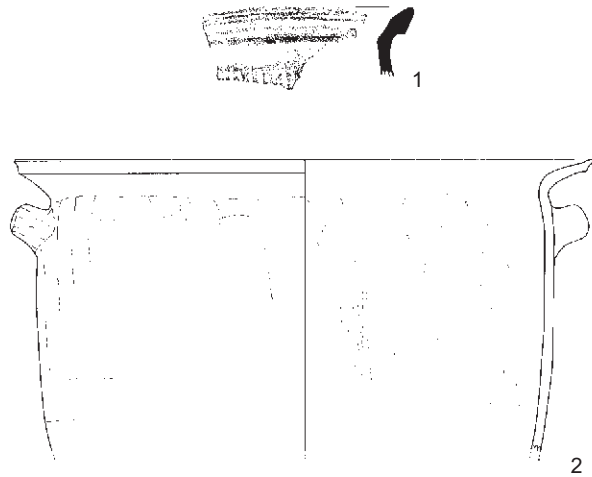
南北に直線的に延びる道路状遺構で、北端は(20)SD661にぶつかる。南は(20)SD666、(21)SD952と交差して調査区外へと続く。全面に硬化面が認められる。現存部の長さ42.5m、幅1.0m～2.0m、深さは北端で11.0cm、中央で38.0cm、南端で19.0cmである。覆土下層、硬化面はローム粒を少量含む暗褐色土、硬化面上層は黒褐色土、覆土上層はソフトローム、ローム粒を含む暗褐色土である。調査所見によると、(20)SD667は(20)SD661を横断せずT字型に交差し、(20)SD667の硬化面が(20)SD661の法面上にもかかっていることから、(20)SD661と(20)SD667は一体の遺構と考えられる。

(20)SD667から出土した遺物3点を図化した。1は内面にミガキが施された土師器杯である。やや厚手の体部が内湾しながら開く。外面体部下端から底部にかけてヘラケズリが施される。遺存部位が少ないため、手持ちか回転かは不明である。色調はにぶい褐色ないし橙色を呈し、胎土に白色粒子と赤色スコリアを含む。2は外面に叩き目をもつ須恵器甕の胴部片である。色調は暗灰黄色、胎土に白色粒子と雲母を含む。3は底部の遺存が少ないため不明瞭だが、須恵器五孔の甕と思われる。外面は叩きの後胴部下位にへ

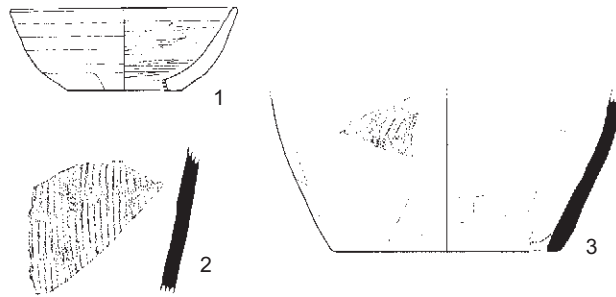
(20) SD665



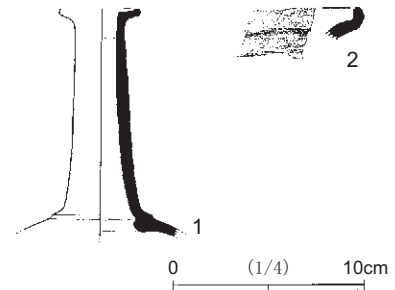
(21) SD666



(20) SD667



(21) SD951



第251図 溝状・道路状遺構 第12分割区②

ラケズリが施されている。内面の色調は褐色、外面は黒褐色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。図化はしていないが、鉄滓が1点出土している。

(21)SD951から出土した遺物2点を図化した。1は須恵器水瓶の口頸部である。頸部には歪みがありカーブしている。また、内面には絞り目のように捻った痕が見られる。口縁部は水平方向に開き、1/3周程を残して欠損している。外面頸部の一部と肩部、口縁部内面に釉が付着している。表面の色調は灰色、断面はセピア色を呈する。2は須恵器甌の口縁部片である。大きく外反する口縁部は端部で直立する。色調は灰色、胎土は白色粒子を多く含む。

第13分割区 (第252・253図)

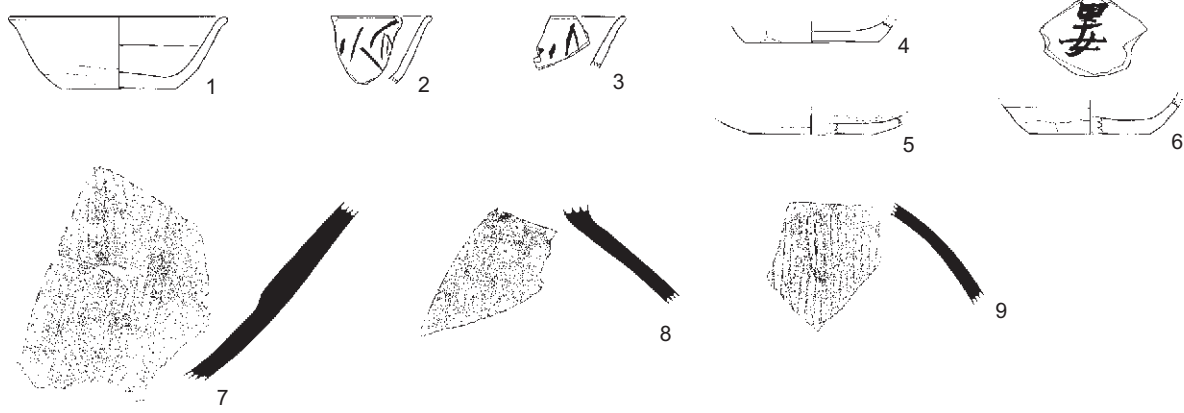
台地東側の中央、平成12年度(4区)、20年度(H2003、H2005)に調査した範囲である。台地を東西に横断する道路状遺構の南に位置し、鉤の手状に区画された一画から奈良・平安時代の遺構が検出された。

(13) SD627

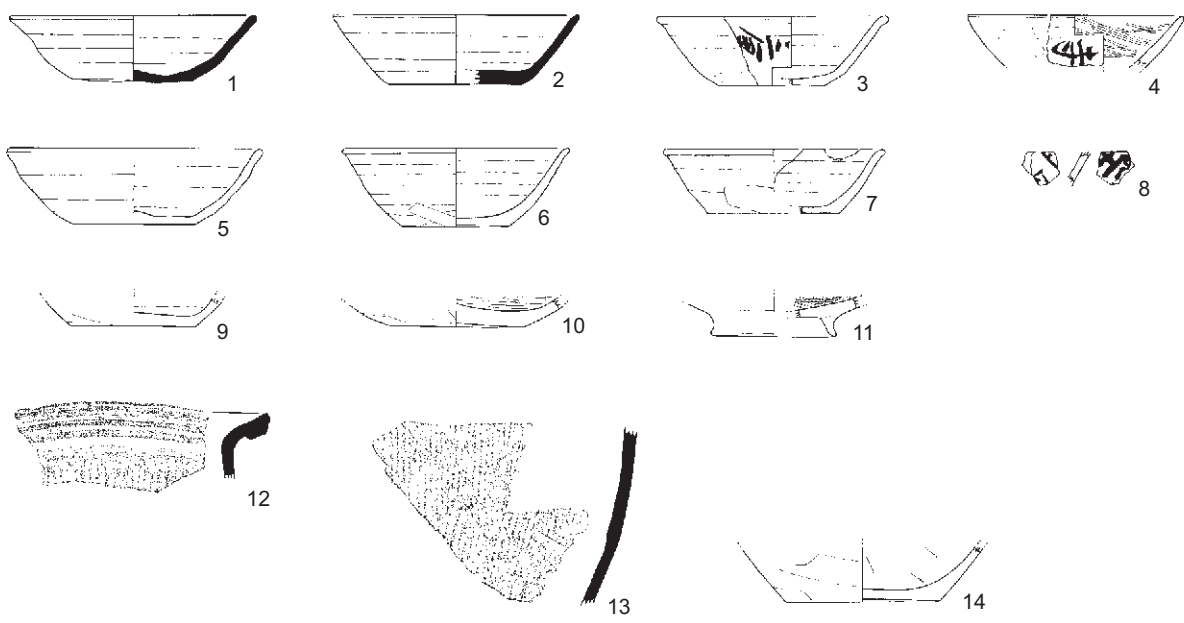
台地中央を東西方向に横切る溝の東端部分にあたる。遺構の概要については第10分割区で述べた。

(13) SD627の遺物はいずれも覆土中からの出土である。1～6は土師器杯である。1は色調橙色を呈し、胎土に多量の砂粒と大粒の赤色スコリアを含む。回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリが施される。2、3は口縁部片で「三」あるいは「三倉」と推定される墨書が記されている。4は底部片で色調、調整は1と同じである。混入物は1より若干少ない。5は内面にミガキが施された杯で、黒色処理は

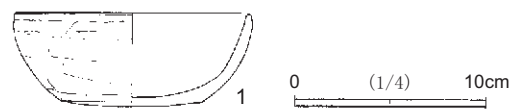
(13) SD627



(17) SD002



(17) SD003



第253図 溝状・道路状遺構 第13分割区②

見られない。橙色を呈し、胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。外面体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。6は底部内面に墨書が見られる。「□女」と二文字記されているようだが、一文字目が判然としない。あるいは「里」か。色調はにぶい黄橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。外面体部下端から底部にかけての調整は回転糸切りの後手持ちヘラケズリである。

7～9は須恵器甕である。7、8はオリーブ灰色、9は褐色を呈する。いずれも外面に叩きが見られる。

(17) SD002 (図版46・67)

東西に走る道路状遺構(16)SD001から南へ4mほど離れた位置から始まる。南下した後鍵の手状に東へ向きを変え、調査区外へと続いていく古代の区画溝と考えられ、区画内には同時期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡等が展開している。現存部の長さ72.0m、幅0.8m～1.9m、深さは北端で8.6cm、屈曲部で40.0cm、東端で29.1cmである。南辺には溝が一端途切れ、8.0cmほどの浅い掘り込みでつながっている箇所がある。溝底部との高低差14.5cm～18cm、長さは2.9mである。覆土下層はロームブロックを含む褐色土、上層は黒褐色土である。

南北方向に走る溝からは体部外面に「寺」と横書きされた土師器杯1点と須恵器甕の胴部片1点が出土した。東西方向に走る溝からは土師器杯を中心に12点の遺物を図化した。1、2は須恵器杯である。1は底部が小さめで体部が大きく開く器形である。底部回転ヘラ切りの後体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。色調は灰オリーブ色、軟質で大粒のスコリアと白色粒子を多く含む。下総産である。2はやや大きめの底部から体部が直線的に開く器形である。外面体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。灰白色を呈し、胎土は砂質を帯び細砂粒、スコリアを含む。新治産である。

3～10は土師器杯である。底径が口径の1/2以下で、体部が内湾気味に開くものが多い。おおむね色調は橙色ないしにぶい橙色で、胎土に砂粒、赤色スコリアを含んでいる。3は口縁内面に油煙が付着しており、灯芯の痕も見受けられる。先端の油煙の塊が剥がれ、幅1mm程の線状に白く抜けた痕がある。体部外面には横位の墨書が見られ、これまでの例から「三倉」と思われる。4は体部がわずかに内湾しながら開く器形で、外面口縁部直下までヘラケズリが施される。内面は疎らなミガキである。体部外面に横位の墨書「寺」が見られる。5はほぼ完形で、器形に歪みが見られる。外面には強いロクロ目が残り、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。6は口径に比してやや器高が高く、口唇部が外反する。底部回転糸切りの後体部下端から底部外周に手持ちヘラケズリが施される。二次焼成による器面の焼け・剥離が見られる。7はやや小ぶりながら底径が大きめである。口縁内面に油煙が付着しており、灯明器として利用したと思われる。外面体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。8は体部片で内外面両面に墨書が見られる。遺存部位が少ないため判読不能であるが、内面と外面の字体が異なっている。内面は太字で墨痕は薄く、外面は細字で墨痕がはっきりしている。9は底部のみの遺存で、体部は大きく4つに割れている。底部回転糸切りの後体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。10はやや上げ底気味の底部片で、内面にミガキ、体部外面及び底部に手持ちヘラケズリが施される。

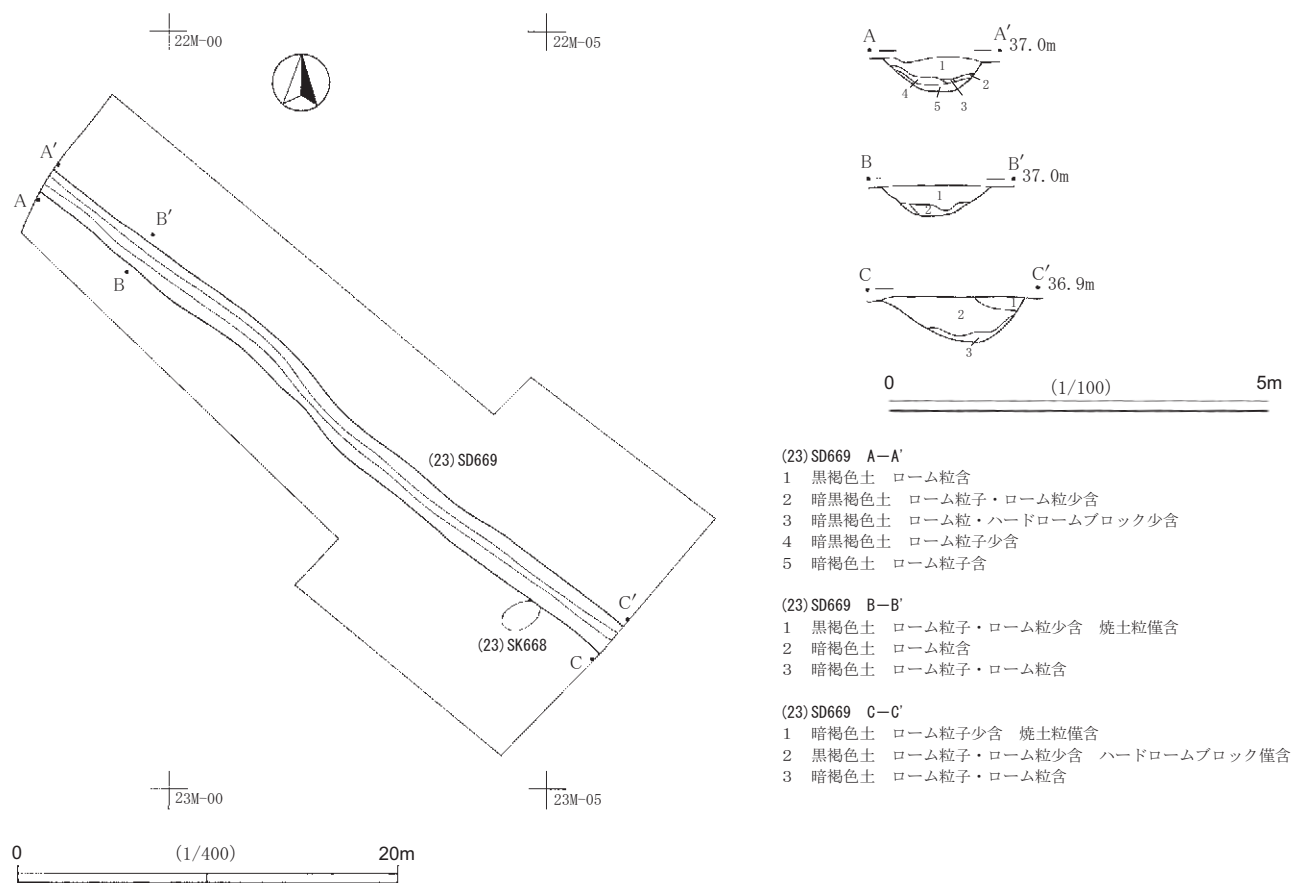
11は土師器高台付杯の底部である。内面にミガキ及び黒色処理が施される。「ハ」の字状に開く高台部は底部回転ヘラケズリの後貼り付けられ、端部で外反する。色調はにぶい黄橙色、胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。

12、13は胴部外面に叩き目をもつ須恵器甕である。12は口縁部片で、色調はにぶい赤褐色、胎土に多量の白色粒子、大粒の赤色スコリアを含む。13は胴部片で、軟質で砂粒を多く含み浅黄色を呈する。外面に叩き、内面に当て具痕が見られる。いずれも下総産である。

14は土師器甕の底部である。胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。内面の色調は明赤褐色、外面は橙色、胎土に多量の白色粒子、赤色スコリアを含む。

(17) SD003 (図版46・67)

東西に直線的に延びる溝である。調査所見によると、東側の傾斜地から西へ向かい、掘立柱建物跡に向



第254図 溝状・道路状遺構 第14分割区

かう道路状遺構と考えられる、とある。現存部の長さ15.3m、幅0.6m～1.5m、深さは東で22.3cm、西で10.7cmである。覆土下層は褐色土で硬化面が認められる。中層は暗褐色土、上層は黒褐色土である。

遺物の出土は少なく、1点を図化した。1は外面口縁部直下までヘラケズリが施された土師器杯である。底部はやや丸みを帯びた平底で、体部は内湾しながら開く。色調は橙色で、内外面に煤が付着している。外面は被熱により器面が剥離している箇所も見られる。胎土に多量の砂粒、赤色スコリアを含む。

第14分割区 (第254図)

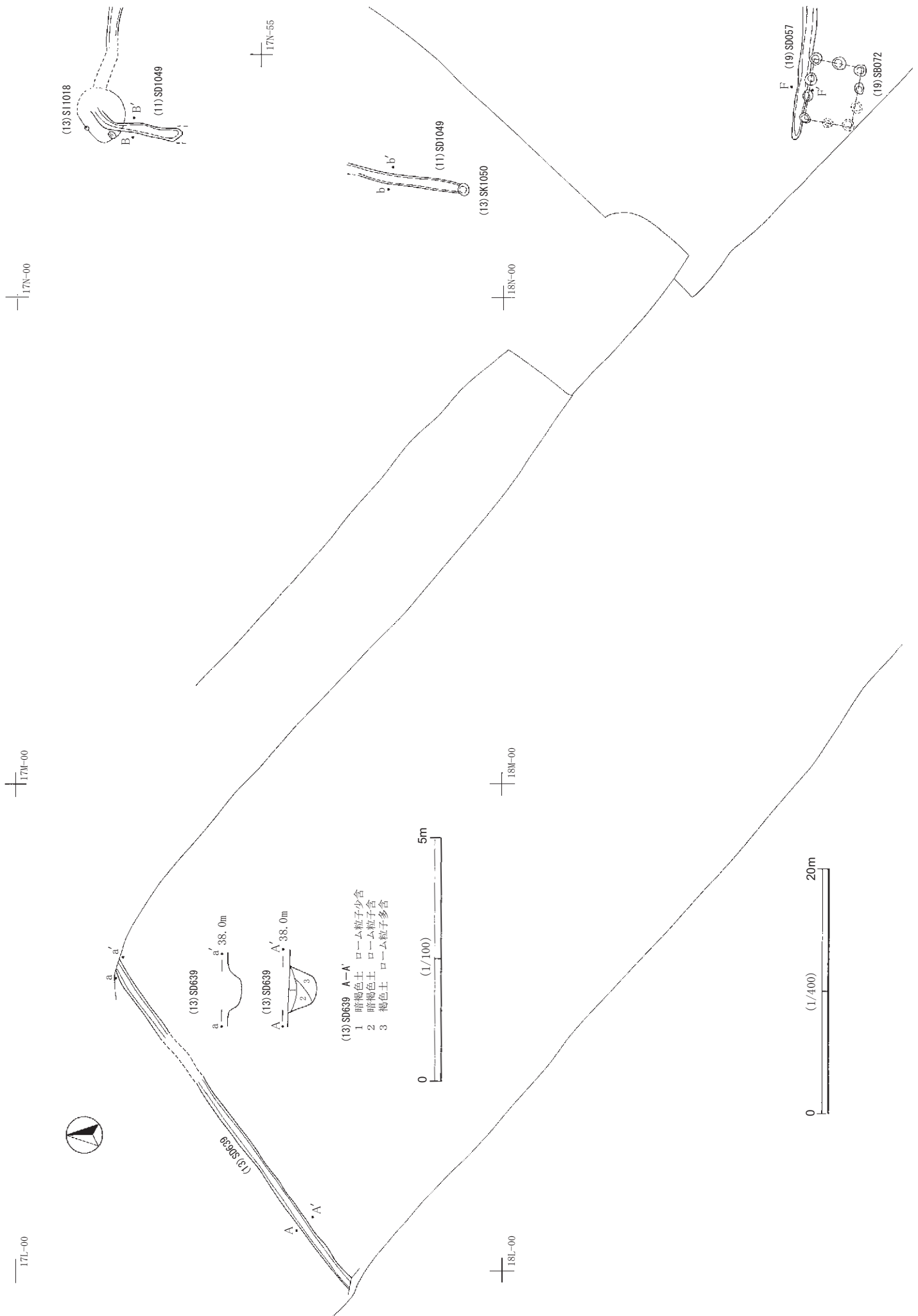
台地の東側縁辺部に位置する。平成13年度 (B3区) に調査した範囲である。

(23) SD669 (図版45)

北西から南東へ直線的に延びる溝である。北西側は平成8年度の確認調査時に検出された溝に繋がり、更に (20) SD665へと続く。台地中央を東西に横切る道路状遺構から台地の東側縁辺部まで延びていたことが分かった。現存部の長さは38.6m、確認調査時の長さを含めると115.0mとなる。幅は1.3m～1.9m、深さは北西で28.5cm～37.7cm、中央で45.4cm、南東で55.0cmである。覆土下層はローム粒を含む暗褐色土でやや軟質、中層はローム粒を含む暗褐色土、上層はローム粒を少量含む黒褐色土である。

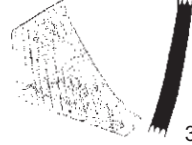
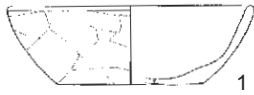
第15分割区 (第255図)

台地中央のやや北寄りに位置し、西側は谷に面している。平成12年度 (4区)、13年度 (A区)、19年度 (H1905) に調査した範囲である。本区画内には奈良・平安時代の竪穴住居跡が点在し、東側には掘立柱建物跡群も見られる。区画の都合上東隣の第16分割区と重複する部分があり、溝及び道路状遺構の主要部分は第16分割区に存在するため、ここでは (13) SD639のみ詳述する。

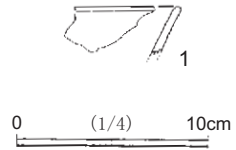


第255図 溝状・道路状遺構 第15分割区

(11)SD1049



(12)SD038



第257図 溝状・道路状遺構 第16分割区②

(13) SD639

北東から南西へ直線的に延びる溝である。一部のみの調査に止まり、現存長は32.5m、幅0.6m～0.9m、深さは北東で24.5cm、中央で23.6cm、南西で37.0cmである。覆土下層はローム粒を含む褐色土、上層は暗褐色土である。

第16分割区 (第256・257図)

台地中央、先に述べたように第15区分割の東隣に位置する。平成12年度(3区)、13年度(A区)、19年度(H1905)に調査された範囲である。東西に延びる2つの溝(11)SD1049・(12)SD038・(10)SD254、(12)SD057と南北に延びる2つの溝(11)SD1049、(12)SD042)によって方形に区画され、西側にのみ奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡群が見られる。東西溝の間隔は、西側で58m、東側で48mである。

(11) SD1049、(12) SD038、(10) SD254 (図版46)

東西に延びる溝の西端で南に向きを変える鉤の手状の溝である。規模は東西方向の長さ104.3m、南北方向の長さ31.5m、計135.8m、幅0.8m～1.2mを測る。深さは東で7.9cm、屈曲部で5.5cm～11.9cm、南で8.9cmと総じて浅い。覆土下層は暗褐色土、上層は黒褐色土である。

(11) SD1049から出土した遺物は少なく、3点を図化した。1は外面口唇部直下までヘラケズリが施された土師器杯である。内面の色調は明褐色、外面は明褐灰色、胎土に白色粒子と赤色スコリアを含む。2はロクロ成形の土師器杯である。底部がやや大きく体部が直線的に開く。外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。色調は橙色、胎土に白色粒子、赤色スコリアを含む。

3は須恵器甕の胴部片で外面に叩き目をもつ。灰色を呈し、胎土に白色粒子、スコリア、小礫を含む。

(12) SD038からは土師器杯の口縁部片1点を図化した。橙色を呈し胎土に砂粒、赤色スコリアを含む。

(12) SD057 (図版46)

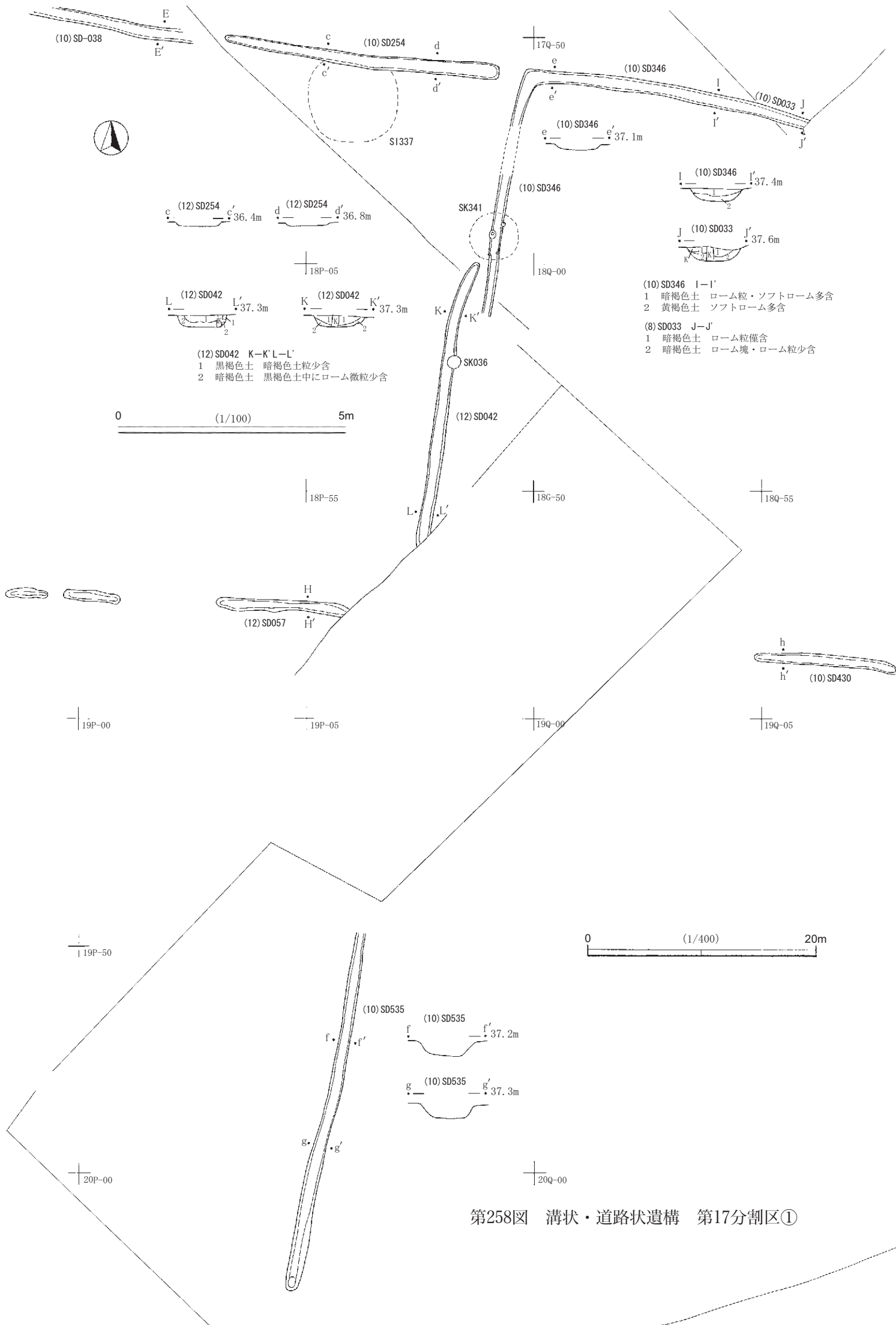
東西に直線的に延びる溝である。攪乱と調査時の霜の被害によって途切れているが、本来は繋がっていたものと思われる。東端は調査区外へと続く。現存部の長さ90.8m、幅0.7m～1.0m、深さは西端で16.2cm、中央で8.4cm、東端で15.5cmである。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体である。

(12) SD042 (図版46)

南北に直線的に延びる溝で、北側先端部が緩やかにカーブしている。南端は調査区外へ続く。現存部の長さ25.0m、幅0.6m～1.0m、深さは北端で11.6cm、中央で23.2cm、南端で21.5cmである。覆土下層は暗褐色土、上層は黒褐色土である。遺物の出土は少なく、須恵器甕の胴部片1点を図化した。外面に叩き目を持ち、黒褐色を呈する。

第17分割区 (第258・259図)

台地中央の東側、平成12年度(3区)、19年度(H1905)、20年度(H2002)に調査した範囲である。本区の南東側に掘立柱建物跡群が集中している。



(12)SD254 c-c' 36.4m d-d' 36.8m

(12)SD042 L-L' 37.3m K-K' 37.3m

(12)SD042 K-K' L-L'
 1 黒褐色土 暗褐色土粒少含
 2 暗褐色土 黒褐色土中にローム微粒少含

(10)SD346 e-e' 37.1m

(10)SD346 I-I' 37.4m

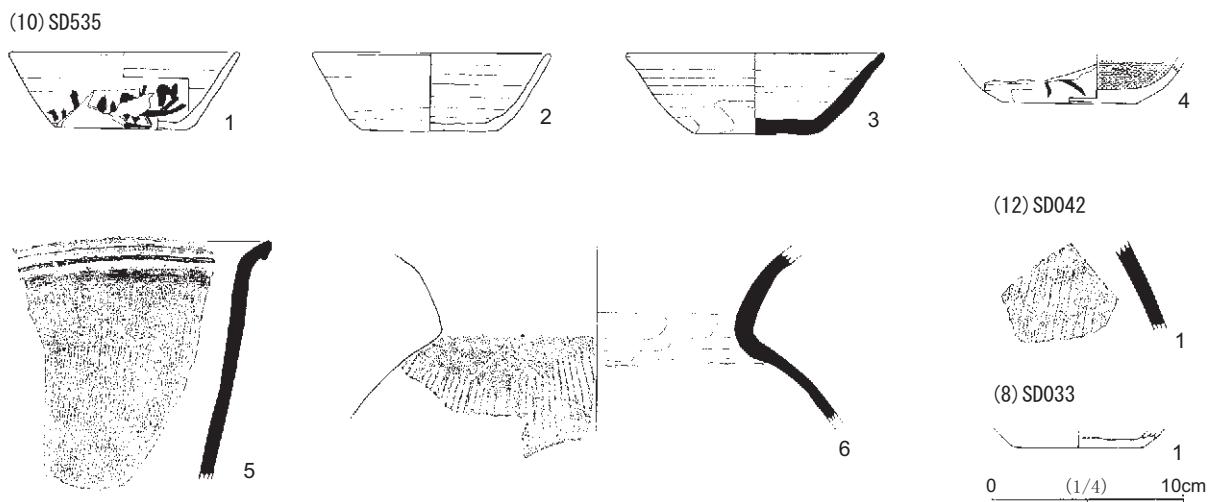
(10)SD033 J-J' 37.6m

(10)SD346 I-I'
 1 暗褐色土 ローム粒・ソフトローム多含
 2 黄褐色土 ソフトローム多含
 (8)SD033 J-J'
 1 暗褐色土 ローム粒僅含
 2 暗褐色土 ローム塊・ローム粒少含

0 (1/100) 5m

0 (1/400) 20m

第258図 溝状・道路状遺構 第17分割区①



第259図 溝状・道路状遺構 第17分割区②

(10) SD535 (図版46)

南北に直線的に延びる溝である。北側は調査区外へと続く。現存部の長さ32.1m、幅0.6m～1.2m、深さは北端で14.2cm、中央で26.0cm、南端で15.9cmである。

遺物は床面付近から覆土中層にかけて散見される。1、2は土師器杯である。1は歪みがあり、胎土に大粒の赤色スコリアを含むものの、焼成は堅緻である。色調は橙色を呈する。回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリが施される。外面体部下位に横位の墨書が見られる。欠損・剥離により不明な部分があるが、「三倉」と記されているようである。遺構中央より南の覆土中層から出土している。2は大粒で多量の赤色スコリアを含み、1に比べると荒さが目立つ胎土である。内面の色調はにぶい黄色、外面は浅黄色で軟質の須恵器に近い印象である。底部全面に手持ちヘラケズリが施されているため不明瞭だが、回転ヘラ切りの可能性がある。南端の覆土中層から口縁部を1/3周程欠いた状態で出土し、中央よりやや南の覆土中層から出土した破片と接合した。

3は須恵器杯である。胎土に多量の白色粒子と雲母を含み、灰色を呈する。底径は口径の1/2以下と小さく、体部が直線的に開く。外面体部下位から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。内外面に煤が付着している。中央より北の覆土中層から出土した。

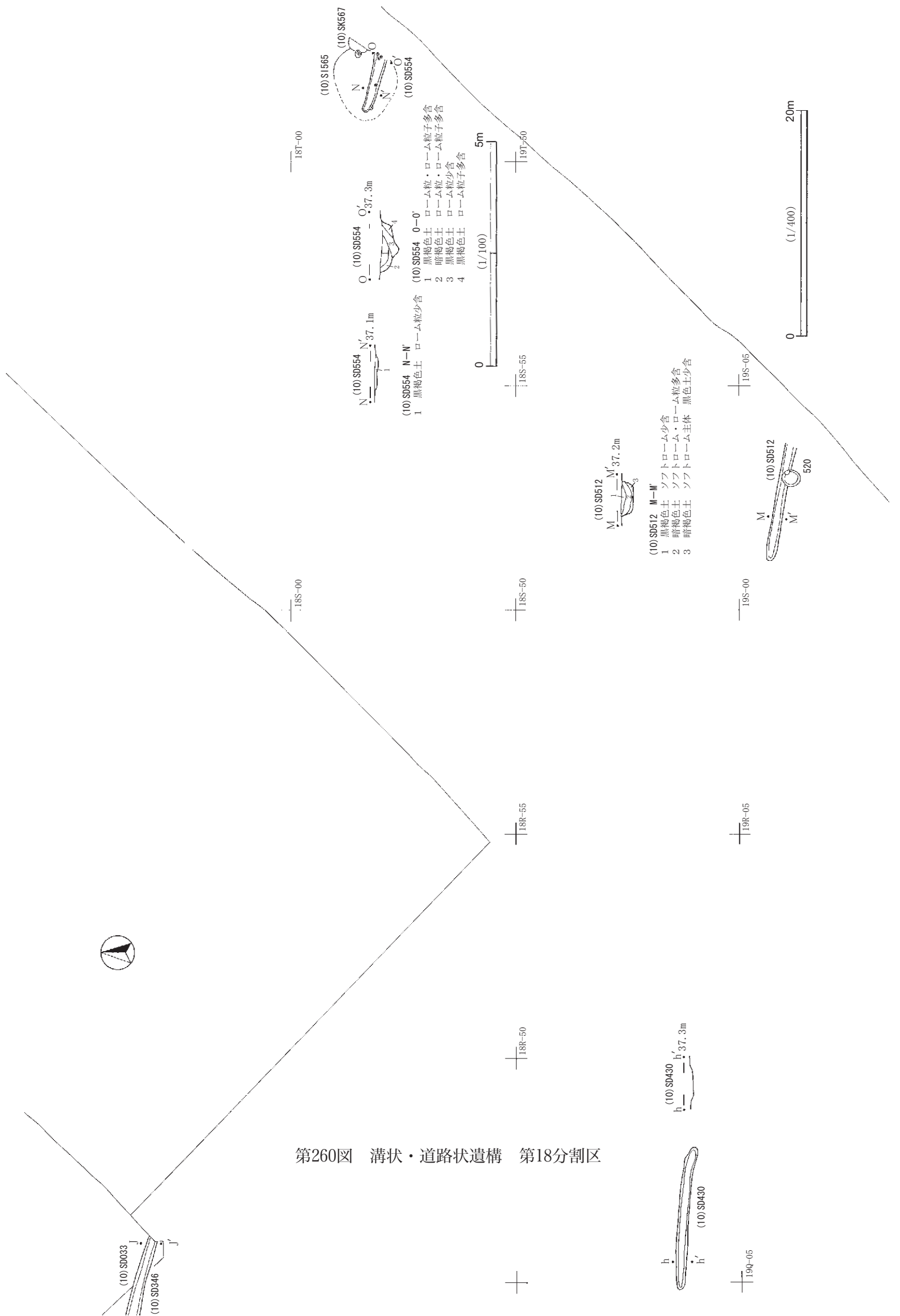
4は内面黒色処理された杯である。色調は明黄褐色、胎土に砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。回転糸切りの後体部下端と底部に手持ちヘラケズリが施される。体部外面に墨書の残画が見られるが、遺存部位が少ないため文字の判読はできない。南端の床面付近から出土した。

5、6は須恵器甕である。5は口縁部に最大径をもつ。灰色を呈し、多量の白色粒子を含む。胴部外面の叩き目はかなり細かい。口縁部のヨコナデは胴部上位にまで及んでいる。遺構中央の床面付近から出土した。6は丸く張った胴部に大きく外反する口縁部が付く甕である。内面の色調は浅黄色、外面は灰黄色を呈し、胎土に多量の白色粒子、雲母を含む。胴部外面は叩き、内面は器面に凹凸しているものの明瞭な当て具痕は見られない。出土地点は中央より北の覆土中層である。いずれも新治産である。

(10) SD346、(8) SD033 (図版46)

南北に延びた後東西方向へ向きを変える鉤の手状の溝である。東端は調査区外へ続き、南端は19年度の調査では未検出である。現存部の長さ南北21.0m、東西24.0m、計45.0m、幅0.7m～1.2m、深さは南端で4.4cm、北側屈曲部で12.7cm、東端で25.6cmである。20年度の調査所見によると、底面は平坦で典型的

第260図 溝状・道路状遺構 第18分割区



な逆台形を呈する、とある。覆土下層はソフトロームを含む黄褐色土、上層はソフトローム・ローム粒を含む暗褐色土である。遺物の出土は少なく、(18) SD033から出土した1点を図化した。1は土師器杯の底部片である。底径がやや大きく、体部が直線的に立ち上がる。底部糸切りの後外面体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。色調は橙色、胎土に砂粒を適量含む。

第18分割区 (第260図)

台地中央の東側、平成12年度に調査した範囲である。掘立柱建物跡群の北側に位置する。

(10) SD430

東西に直線的に延びる溝で、掘立柱建物跡から6m程北に位置している。長さ12.7m、幅0.8m～0.9m、深さは西端で6.0cm、東端で2.0cmと非常に浅い。(12) SD057に続く可能性がある。

(10) SD512

東西に直線的に延びる溝で、掘立柱建物跡群から北へ5m程離れた東寄りに位置する。同じく東西方向に延びる(10) SD430と一続きとなり、掘立柱建物跡群を区画していた可能性があるが、詳細は不明である。現存部の長さ10.3m、幅0.9m、深さは西端で12.1cm、東端で27.0cmである。覆土下層はソフトロームを含む暗黄褐色土、中層はソフトローム、ローム粒を多く含む暗褐色土、上層はソフトロームを少量含む黒褐色土である。

(10) SD554

東西に直線的に延びる溝で、調査区の東端に位置する。東側は調査区外へと続く。現存部の長さ5.0m、幅0.6m～1.1m、深さは西端で2.9cm、東端で25.6cmである。覆土は黒褐色土が主体で、下層へ行くほど明るみを帯びてくる。

野馬土手

(24) 野馬土手 (第236・261図)

北から南東へ入り込む谷に沿って鉤の手状に延びる野馬土手である。北西から南東へ延びた後北東へ向きを変え、H1904 調査区(確認調査のみ)、(33)SD065へ続くと思われる。北東側で蛇行している箇所があり、そこから西へも延びるようである。現存部の長さ155.0m、幅5.2m～6.2m、深さは西端で125.1cm、中央で43.3cm、北端で16.5cmである。覆土は盛り土の流れ込みが多く、黒色土、暗褐色土主体である。

馬骨出土溝

(40) SD002

(40) S1001から南東へ56m程、24E-63グリッド周辺に位置する。確認調査のため一部のみの検出であるが、北西から南東方向へ走る溝で、幅1.8m前後、深さ35.0cm前後と推定される。覆土は下層がローム粒を非常に多く含む明褐色土、中層がローム粒を多く含む暗褐色土、上層はローム粒を多く含む黒色土で、いずれの層もしまりがある。馬骨は覆土中層から上層にかけて埋葬されており、周辺の埋土は多量のロームブロックと少量のロームブロックを含む暗褐色土で、しまりはやや弱い。確認できた主な骨の部位は上臼歯7点、下臼歯1点、臼歯1点、歯3点、上腕骨1点、尺骨1点、脛骨4点である。調査時の検出状況から、頭部を北西に向け、右側を下にして埋葬されたと推定される。

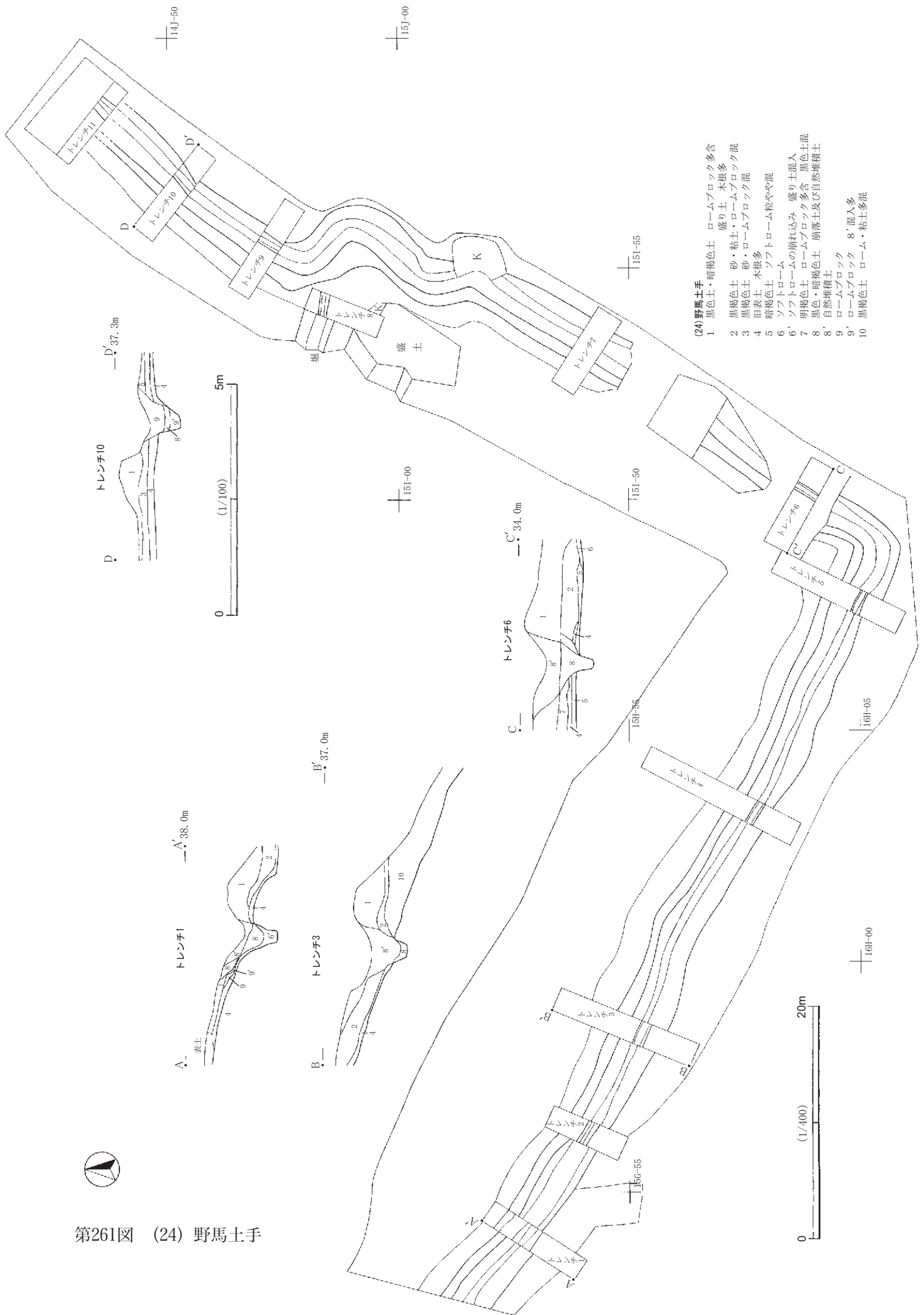
シシ穴状遺構

(11) SK1021 (図版34)

16N-04グリッドに位置する。周辺に溝や道路状遺構がなく、単独の検出である。平面形は確認面では



第261図 (24) 野馬土手



- (24) 野馬土手
- 1 黒色土・暗褐色土 ロームブロック多含 盛り土 木根多
 - 2 黒褐色土 砂・粘土・ロームブロック混
 - 3 黒褐色土 砂・ロームブロック混
 - 4 旧基土 木根多
 - 5 暗褐色土 ソフトローム粒やや混
 - 6 ソフトローム
 - 6' ソフトロームの崩れ込み 盛り土混入
 - 7 明褐色土 ロームブロック多含 黒色土混
 - 8 黒色・暗褐色土 前落土及び自然堆積土
 - 8' 自然堆積土
 - 9 ロームブロック 8'混入多
 - 10 黒褐色土 ローム・粘土多混

長楕円形であるが、底面では長方形を呈する。長軸方位は $N-21^{\circ}-W$ 、規模は確認面で $2.39m \times 1.48m$ 、底面で $1.48m \times 0.52m$ 、深さは $2.40m$ である。覆土はローム粒を含む暗褐色土主体である。

(16) SK001 (第247図、図版34)

東西に走る道路状遺構 (16) SD001上に掘り込まれたシシ穴状遺構で、(20) SK661Aの東 $11.7m$ 、 $20L-37$ 、 47 グリッドに位置する。平面形は確認面では楕円形、底面では長方形を呈する。長軸方位は $N-21^{\circ}-E$ 、規模は確認面で $2.39m \times 2.02m$ 、底面で $1.13m \times 0.42m$ 、深さ $2.31m$ を測る。

(16) SK002 (第247図、図版34)

(16) SK001の東 $13.6m$ 、 $20M-30$ 、 40 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸方位は $N-4^{\circ}-W$ 、規模は確認面で $2.20m \times 1.81m$ 、底面で $0.93m \times 0.6m$ 、深さは $1.82m$ である。覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体である。

(16) SK003 (第247図、図版34)

(16) SK002の東 $6.0m$ 、 $20M-32$ 、 42 グリッドに位置し、南側の一部が水道管によって壊されている。平面形は長楕円形で、長軸方位は $N-12^{\circ}-W$ 、規模は確認面で $2.40m \times 1.64m$ 、底面で $0.58m \times 0.46m$ 、深さ $2.28m$ である。覆土はロームブロックを含む黒褐色土が主体である。

(16) SK006

(16) SK003の東 $20.0m$ 、 $20M-37$ グリッドに位置する。平面形は確認面では楕円形、底面では瓢箪形を呈する。規模は確認面で $1.85m \times 1.41m$ 、底面で $0.92m \times 0.32m$ 、くびれ部 $0.08m$ 、深さ $2.28m$ を測る。

(18) SK120A (第245図、図版34・35)

$20I-34$ グリッドに位置する。東西に走る道路状遺構 (18) SD120上にあり、同一遺構上に掘られたシシ穴状遺構 (19) SK676Dから西へ $10.8m$ 離れている。平面形は長楕円形で、長軸方位は $N-5^{\circ}-W$ 、規模は確認面で $2.76m \times 2.34m$ 、底面で $1.30m \times 0.96m$ 、深さ $2.60m$ を測る。覆土はローム粒子を含む暗褐色土主体である。

(18) SK120B (第245図、図版35)

(18) SK120Aの西 $12.1m$ 、 $20I-31$ グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位は $N-26^{\circ}-E$ 、規模は確認面で $2.50m \times 2.24m$ 、底面で $1.44m \times 1.18m$ 、深さは $2.54m$ である。覆土はローム粒を含む暗褐色土主体で、中層以下は埋め戻しの可能性がある。

(18) SK120C (第245図、図版35)

(18) SK120Bの西 $10.0m$ 、 $20H-38$ 、 39 グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位は $N-18^{\circ}-E$ 、規模は確認面で $2.90m \times 2.24m$ 、底面で $0.96m \times 1.00m$ 、深さ $2.34m$ である。覆土はローム粒子を含む暗褐色土主体、下層はローム粒子を含む黒色土で埋め戻しの可能性がある。

(18) SK120D (第245図、図版35)

(18) SK120Cの西 $11.96m$ 、 $20H-35$ 、 36 グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位は $N-11^{\circ}-W$ 、規模は確認面で $2.58m \times 1.96m$ 、底面で $1.46m \times 1.0m$ 、深さは $2.40m$ である。

(18) SK120E (第245図、図版35)

(18) SK120Dの西 $8.6m$ 、 $20H-33$ 、 34 グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位は $N-14^{\circ}-W$ 、規模は確認面で $2.30m \times 1.92m$ 、底面で $1.34m \times 0.78m$ 、深さは $2.60m$ である。覆土はローム粒子を含む暗褐色土主体、下層は黒色土を含む黄褐色土である。

(19) SK676A (第245・246図、図版36)

東西に走る道路状遺構 (19) SD676上に掘り込まれたシシ穴状遺構で、(20) SK661E の西18.9m、20 J-39グリッドに位置する。北東部分は近世の溝 (19) SD675に切られている。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-16°-W、規模は確認面で2.58m×1.56m、底面で1.24m×0.52m、深さ2.54mである。覆土はローム粒を含む灰褐色土主体で、中層以下は埋め戻しの可能性がある。

(19) SK676B (第245・246図)

(19) SK676A の西11.2m、20 J-36グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-40°-E、規模は確認面で2.03m×1.89m、底面で1.28m×0.82m、深さ2.53mである。土層の観察結果によると、SD676の道路面と SK676B が掘り込まれるまでの間層が1層しかないため、SD676の廃絶と SK676B の時期はあまり差が無いと推察される。

(19) SK676C (第245・246図)

(19) SK676B の西28.8m、20 I-39グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-10°-W、規模は確認面で2.97m×2.22m、底面で0.87m×0.58m、深さ2.59mである。

(19) SK676D (第245・246図、図版35)

(19) SK676C の西9.3m、20 I-37グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-13°-E、規模は確認面で2.94m×2.07m、底面で0.8m7×0.58m、深さは2.72mである。覆土は黒褐色土が主体である。中層以下は黒褐色土とハードロームの混入土で、人為的な埋め戻しの可能性がある。覆土上層から10世紀代の遺物が出土しているが、小片のためこれをもって遺構の時期を決定することは難しい。

(20) SK661A (第247・248図、図版36)

東西に走る道路状遺構 (20) SD661上にあり、20 L-34グリッドに位置する。同一遺構上に掘られたシシ穴状遺構 (16) SK001から西へ11.7m離れている。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-5°-W、規模は確認面で1.80m×1.21m、底面で0.82m×0.53m、深さ2.40mである。

(20) SK661B (第247・248図、図版36)

(20)SK661A の西6.0m、20 L-32、33グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-6°-E、規模は確認面で1.95m×1.52m、底面で1.00m×0.50m、深さは2.35mである。覆土はローム粒を含む暗褐色土主体で、中層から下は人為的な埋め戻しの可能性がある。

(20) SK661C (第247・248図、図版36)

(20) SK661B の西3.8m、20 L-31、41グリッドに位置する。平面形は確認面では長楕円形、底面で長方形になる。長軸方位はN-8°-E、規模は確認面で2.76m×2.0m、底面で0.95m×0.65m、深さ2.43mである。

(20) SK661D (第247・248図、図版36)

(20)SK661C の西20.7m、20 K-35、45グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-13°-W、規模は確認面で2.54m×1.90m、底面で1.13m×0.50m、深さは2.60mである。

(20) SK661E (第247・248図、図版36)

(20)SK661D の西4.3m、20 K-34、44グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-23°-W、規模は確認面で2.44m×1.50m、底面で1.25m×0.55m、深さ2.48mである。覆土はローム粒を含む暗褐色土主体で、中層以下は人為的な埋め戻しの可能性がある。

(25) SK001 (第236・262図、図版36)

14F-97・98グリッドに位置する馬骨出土土坑である。台地先端部、野馬堀が北側に張り出し屈曲する部分の外側1.0mほどの距離にあたる。平面形は確認面で長楕円形、底面で長方形を呈し、長軸方位はN-28°-Wを指す。規模は確認面で2.70m×1.75m、底面で1.65m×0.16m、深さ2.09mを測る。覆土下層は黄褐色土、中層は黒褐色土が主体で、馬骨は中層上部の暗黄褐色土層から出土した。主な部位は頭蓋骨、上顎、下顎、臼歯、軸椎などである。

(26) SK002 (第236図、図版36)

(26) SK015の東6.3m、16E-48グリッドに位置する。(26) SD001の北1m、(26) SD002の南端にあたり、東に隣接する(26) SK014と切り合っている。平面形は確認面で楕円形、底面で長方形を呈し、長軸方位はN-19°-Wである。規模は確認面で3.09m×2.82m、底面で0.73m×0.48m、深さ2.91mを測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体である。遺物は肥前磁器の碗、瀬戸陶器の椀・瓶が出土している。

(26) (27) 調査区では台地縁辺に沿うように(26) SD001(野馬堀)が設置されている。本調査区から検出したシンシ穴状遺構は、(26) SD001の北及び西側約1.0mの所に並んでいる。

(28) 調査区は(26) (27) 調査区の西側にあり、(26) SD001に続くと思われる野馬堀の北西にシンシ穴列が並ぶ。本調査区ではシンシ穴列に沿うように溝も検出されているが、調査所見によると、これらの溝とシンシ穴列は野馬土手構築前に設置されていた。

(26) SK004 (第236図、図版36)

16E-49グリッドにあり、(26) SD001の北0.5m、(26) SK005の南西5.5mに位置する。西に隣接する(26) SK014とは最も近い上端間で45.0cmの距離である。確認面での平面形は長楕円形、底面では長方形を呈し、長軸方位はN-21°-Wを指す。規模は確認面で2.93m×2.04m、底面で0.97m×0.45m、深さ2.50mを測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土主体である。

(26) SK005 (第236図、図版37)

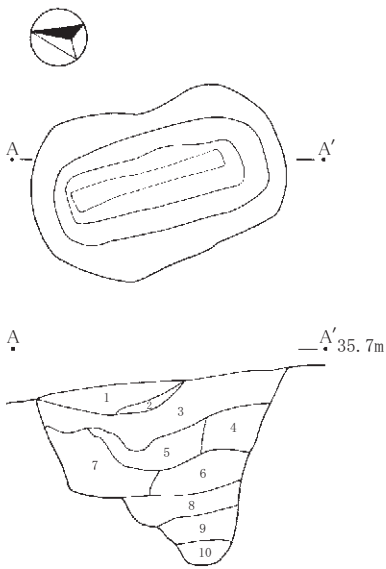
(26) SK004の北東5.5m、16F-30、31グリッドに位置する。平面形は確認面で長楕円形、底面で方形を呈し、北西側で階段状になっている。長軸方位はN-39°-W、規模は確認面で2.56m×1.83m、0.73m×0.76m、深さ2.10mを測る。底面はレンズ状に窪んでいる。覆土下層はきめの細かい軟質の暗褐色土、中層から上層にかけては暗褐色土である。

(26) SK006 (第236図、図版37)

(26) SK005の北東3.5m、16F-21、22グリッドに位置し、(26) SD001の北西0.8mにある。確認面での平面形は不整な楕円形で、底面では長方形を呈する。長軸方位はN-39°-W、規模は確認面で4.15m×2.4m、底面で1.45m×0.46m、深さ2.58mを測る。底面は南北両側に段を形成し、中央部分が窪む。段差は北側で14.9cm、南側で56.0cmである。調査所見では底面が三段になっているため、三回掘り直している可能性を推測している。覆土下層はローム粒・ロームブロックを含む褐色土、中層から上層にかけては暗褐色土主体である。

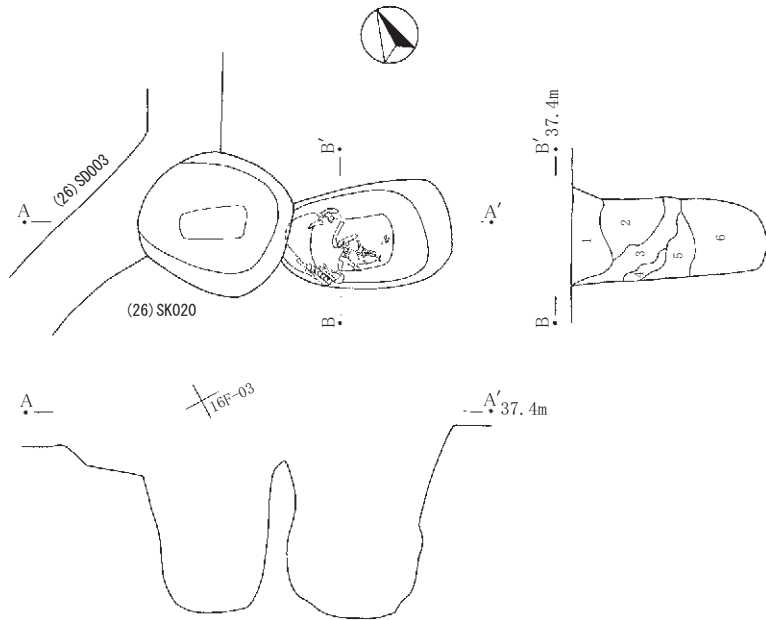
(26) SK007 (第236図、図版37)

(26) SK006の北東3.3m、16F-12、13グリッドに位置する。確認面での平面形は楕円形、底面は小さな方形で平坦である。長軸方位はN-43°-W、規模は確認面で2.15m×1.68m、底面で0.57m×0.5m、深さは1.66mを測る。覆土下層は軟質の暗褐色土で、ローム、ローム粒、ロームブロックが5.0cm～10.0cm



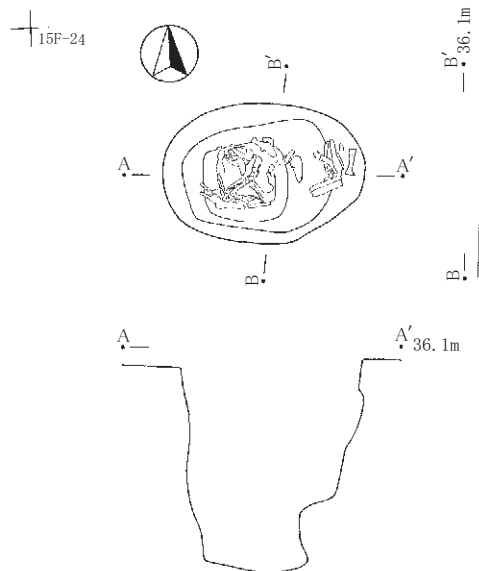
(25) SK001

- 1 暗黄褐色土
- 2 黄色土 ハードローム粒・ハードロームブロック多混
ソフトローム
- 3 暗褐色土
- 4 暗黄褐色土 ハードロームブロック混
- 5 暗黄褐色土
- 6 黒褐色土
- 7 暗黄褐色土
- 8 黄色土 ハードローム粒・ハードロームブロック・
ソフトローム含
- 9 暗黄褐色土 ハードロームブロック混黒褐色土
- 10 黄色土 ハードローム粒・ハードロームブロック・
ソフトローム含



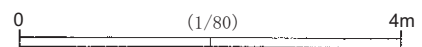
(26) SK009

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少含
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・黒色土少含
- 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック含
- 4 暗褐色土 ロームブロック微量 黒色土含
- 5 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少含
- 6 暗褐色土 馬骨出土層



(26) SK013

- 1 暗褐色土 ローム少 ローム粒多 ロームブロック含
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多含
- 3 暗褐色土 黒色土含 ローム粒・ロームブロック少含
- 4 淡褐色土 ローム粒・ロームブロック多含 暗褐色土混
- 5 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多含
- 6 暗褐色土 黒色土混 ローム粒・ロームブロック少含
- 7 暗褐色土 ローム細ブロック多含 しまりやや欠
- 8 褐色土 ロームブロック・黒褐色土ブロック混
- 9 褐色土 ロームブロック・黒褐色土ブロック混 ロームブロック5cm大含
- 10 暗褐色土 ロームブロック多含
- 11 暗褐色土 ローム細ブロック多含
- 12 褐色土 ローム細ブロック主体 暗褐色土細ブロック多含 馬骨出土層



第262図 馬骨出土シシ穴状遺構 (25) SK001・(26) SK009・(26) SK013

ほどの幅で層をなしている。中層は少量のロームを含む暗褐色土である。

(26) SK008 (第236図、図版37)

(26) SK007の北1.1m、16F-03、13グリッドに位置する。確認面での平面形は楕円形、底面では長方形を呈し、長軸方位はN-65°-Wである。規模は確認面で2.30m×1.78m、底面で1.20m×0.86m、深さ1.98mを測る。覆土下層は多量のローム、ローム粒、ロームブロックの中に褐色土を混入している。他は暗褐色土主体である。遺物は常滑甕の口縁部が出土している。

(26) SK009 (第236・262図、図版37)

(26) SK008の北2.4m、15F-93グリッドに位置する馬骨出土土坑である。(26) SD003の屈曲部にかかる(26) SK020と北東で切り合っている。(26) SD001と(26) SD004の交点に近い。確認面での平面形は長楕円形、底面は長方形で、長軸方位はN-65°-Wである。規模は確認面で1.80m×1.05m、底面で0.88m×0.54m、深さ2.07mである。覆土は軟質の暗褐色土が主体で、ロームやローム粒、ロームブロックの混入具合によって分層される。馬骨は最下層中から検出された。底面からおおむね40~50cmほど浮いた状態で、頭蓋骨、顎骨、肩甲骨、上腕骨、大腿骨、脛骨などが見られる。同一部位が重なったり点在したりしていることから、複数個体の埋葬が考えられる。

(26) SK010 (第236図、図版37)

(26) SK009の北9.4m、15F-73、74グリッドに位置する。(26) SD005と(26) SD001に挟まれており、(26) SD005南端から東へ0.5m、(26) SD001から西へ0.7mの距離である。平面形は長楕円形で、底面では長方形に近い形状になる。長軸方位はN-88°-E、規模は確認面で2.83m×1.52m、底面で1.30m×0.50m、深さ2.77mを測る。覆土はハードロームブロックを主体にした褐色土で、覆土下層ではハードロームブロックの集積が見られる。一括して埋め戻された可能性がある。

(26) SK011 (第236図、図版37)

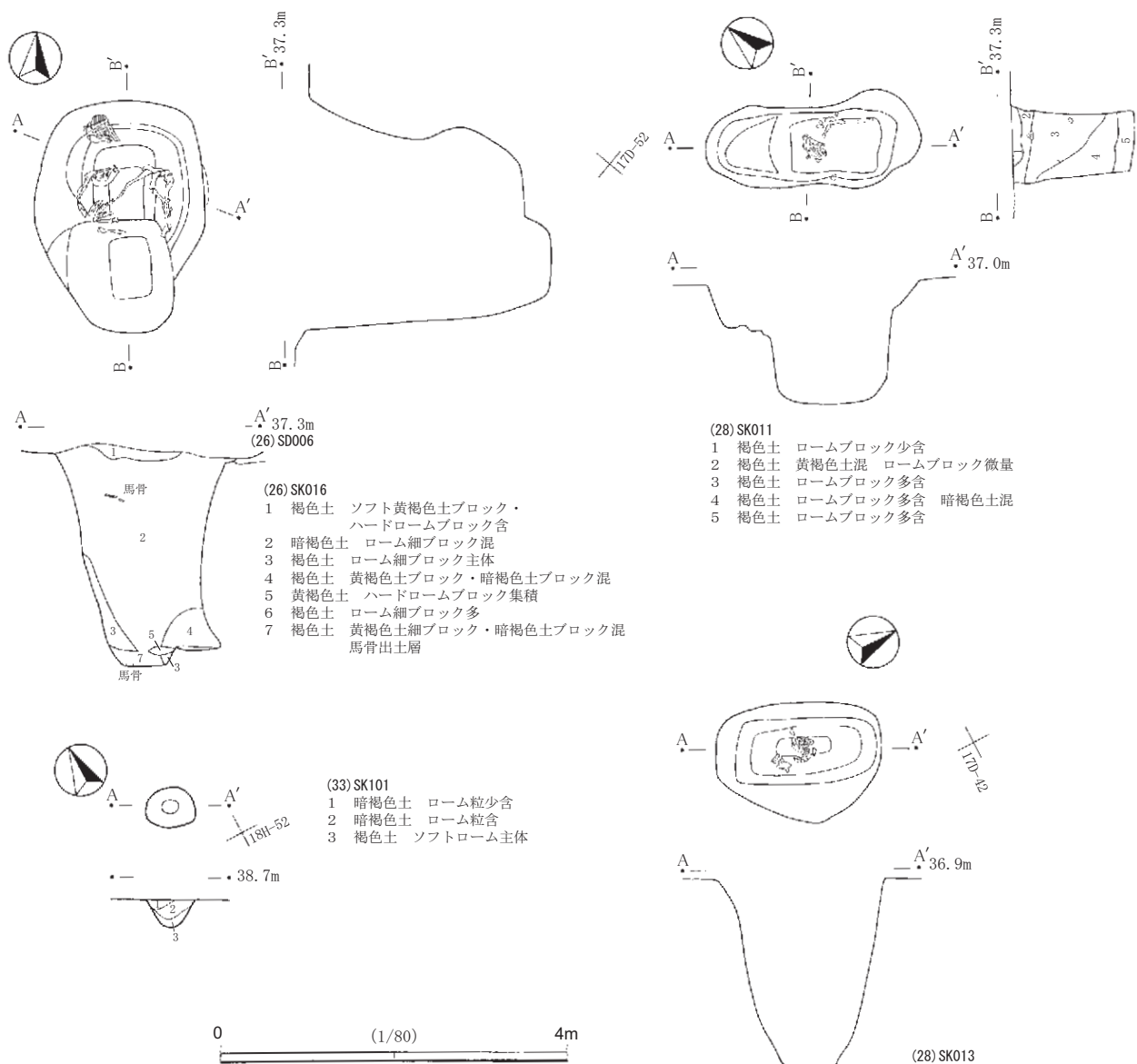
(26) SK010の北2.8m、15F-63、64グリッドに位置する。(26) SD005と(26) SD001の間にあり、それぞれの距離は1.2mと1.5mである。平面形は確認面で長楕円形、底面で長方形を呈する。主軸方位はN-86°-E、規模は確認面で1.50m×1.00m、底面で0.85m×0.50m、深さ2.62mを測る。底面にはわずかに段差が見られる。覆土下層は多量のロームブロックの中に暗褐色土が混入している。中層は暗褐色土でロームブロックを混入する。

(26) SK012 (第236図、図版38)

(26) SK011の北3.4m、15F-43、44、53、54グリッドに位置する。(26) SD001の西1.3m、(26) SD005の東0.8mの距離である。確認面での平面形は長楕円形、底面では方形を呈する。長軸方位はN-87°-W、規模は確認面で2.00m×1.42m、底面で0.70m×0.58m、深さ2.62mを測る。覆土は暗褐色土主体である。下層は褐色土ブロックと黄褐色ハードロームブロックの混合層で、一括埋め戻しの可能性がある。

(26) SK013 (第236・262図、図版38)

(26) SK012の北9.4m、15F-24グリッドに位置する馬骨出土土坑である。(26) SD001の西0.6m、(26) SD005の東1.2mの距離で、調査区の北端にあたる。平面形は確認面で楕円形、底面で方形を呈し、長軸方位はN-86°-Eである。規模は確認面で2.06m×1.50m、底面で0.90m×0.83m、深さ2.25mを測る。覆土は暗褐色土が主体である。馬骨は覆土中層から下層にかけて出土した。主な部位は頭蓋骨、臼歯、切歯、上顎、下顎、環椎、肩甲骨、上腕骨、大腿骨、指骨、肋骨などである。同一部位が重なって認められ



第263図 馬骨出土シシ穴状遺構 (26) SK016・(28) SK011・(28) SK013・土坑 (33) SK101

ることから、複数個体の埋葬が考えられる。

(26) SK014 (第236図)

16E-48、49グリッドに位置し、西側を(26) SK002と切り合う。確認面での平面形は長楕円形だが、底面では方形に近くなる。長軸方位はN-2°-W、規模は確認面で長軸4.52m、底面で0.63m×0.52m、深さ2.80mを測る。南北方向に長く、最深部は南に寄っており、北側は緩やかな段を形成している。覆土は下層がローム粒、ロームブロック主体の軟質の褐色土、中層は暗褐色土、上層は黒褐色土である。

(26) SK015 (第236図、図版38)

(26) SD006上、16E-46、56グリッドに位置する。(26) SK014の西6.5m、(26) SK016の東4.8mの距離である。平面形は長楕円形で、底面では長方形を呈する。主軸方位はN-26°-W、規模は確認面で1.65m×1.10m、底面で0.76m×0.55m、深さ1.93mを測る。覆土下層はロームブロックを多量に含む暗褐色土、中層はしまりのない暗褐色砂、上層はロームブロックを含む暗褐色土である。

(26) SK016 (第236・263図、図版38)

(26) SK015の西4.8m、16E-54、55グリッドに位置する馬骨出土土坑である。(26) SD001の北0.3m、(26) SD003の南5.5mの距離である。平面形は楕円形で、底面で長方形を呈する。長軸方位はN-1°-W、規模は確認面で2.80m×2.00m、底面で0.72m×0.48m、深さ2.82mを測る。床はほぼ粘土層で、二段掘り込みになっており、南端が最深部となる。北側との段差は29.5cm、北側は袋状になっている。覆土は下層が黄褐色土ブロックと暗褐色土ブロックの混在する褐色土、中層はローム細ブロックを含む暗褐色土で、覆土の大半は中層が占める。馬骨はこの中層から出土している。主な部位は頭蓋骨、上顎及び下顎と臼歯、胸椎、腰椎、肋骨、脛などである。体の右側を下に、頭を北向きに折り曲げて埋葬しているようである。

(26) SK020 (第236図、図版38)

15F-93グリッドに位置する。(26) SD003が南西-北東方向から、北へ向きを変える屈曲部にかかる。南東に馬骨を出土した(26) SK009が連なる。平面形は楕円形で、底面は長方形を呈する。長軸方位はN-61°-W、規模は確認面で1.62m×1.53m、底面で0.72m×0.35m、深さ1.85mを測る。覆土は下層がロームブロックを主体とした褐色土、他は暗褐色土である。

(28) SK001 (第230・234図、図版38)

16E-53グリッド、(26) SK016の西2mに位置し、東に隣接する(28) SK014と一体となっている。平面形は長楕円形で、底面は長方形を呈する。長軸方位はN-8°-W、規模は確認面で2.83m×(2.00)m、底面で0.92m×0.32m、深さ2.66mである。覆土は下層が極めて緩い褐色土、中層が暗褐色土である。

遺物は土師器杯の底部片と馬具と思われる鉄製品が出土している。1は土師器杯の底部片である。底部は糸切り後無調整、外面体部下端はヘラケズリであるが、遺存部位が少ないため回転か手持ちかは不明である。色調はにぶい赤褐色、胎土に砂粒、大粒の赤色スコリアを含む。2は先端部が円環状となる鉄製品で、現存長は7.2cmである。馬具か。

(28) SK002 (第234図、図版38)

16E-61、71グリッドに位置する。野馬堀(26) SD001の北西0.3mの距離にあり、北東に(28) SK017が隣接する。確認面での平面形は楕円形、底面では長方形を呈し、長軸方位はN-51°-Wである。規模は確認面で2.56m×2.02m、底面で0.72m×0.42m、深さ2.67mである。覆土中から陶器の甕の胴部片が出土している。

(28) SK003 (第234図、図版39)

(28) SD002上の16D-88、89グリッドに位置する。野馬堀から北西へ2.7mほど離れる。確認面での平面形は長楕円形、底面では方形を呈する。長軸方位はN-56°-W、規模は確認面で1.87m×1.34m、底面で0.70m×0.58m、深さ1.63mである。

(28) SK004 (第234図、図版39)

(28) SD002の西端、16D-98グリッドに位置する。野馬堀から0.4mの距離にあり、南西で(28) SK018が一体となっている。平面形は長楕円形、底面では楕円形を呈し、長軸方位はN-40°-Wである。(28) SK018を含めた確認面での規模は3.28m×2.80m、中端では2.48m×1.13m、底面では0.45m×0.30m、深さ2.56mを測る。覆土下層は褐色土に暗褐色土を含む層で、大小不揃いなロームブロックを多量に混入している。中層は暗褐色土が主体である。

(28) SK005 (第234図、図版39)

(28) SK004の南西3.7m、17D-07グリッドに位置する。野馬堀から北西へ1.0mの距離である。確認面での平面形は楕円形、底面では長楕円形を呈し、長軸方位はN-31°-Wである。規模は確認面で2.18m×1.75m、底面で0.87m×0.38m、深さ2.70mを測る。底面はレンズ状に窪んでいる。

(28) SK006 (第234図、図版39)

(28) SK005の南西0.9m、17D-06、16グリッドに位置する。南西で(28) SK007と切り合っているが、新旧関係は不明である。平面形は確認面、底面とも長楕円形で、南北に細長く幅の狭い形状である。長軸方位はN-30°-W、規模は確認面で3.13m×(1.00)m、底面で1.75m×0.10m、深さ1.88mを測る。

(28) SK007 (第234図、図版39)

17D-06、16グリッドに位置する。北東で(28) SK006と、南西で(28) SK008と接する。野馬堀からは0.6mの距離である。平面形は不整な長楕円形で、長軸方位はN-43°-Wである。規模は確認面で4.37m×(1.55)m、底面で0.50m×0.12m、深さ2.54mを測る。掘り込みも複雑な形状を呈し、最深部では軸がずれている。

(28) SK008 (第234図、図版39)

(28) SD001の北東端、17D-06、16グリッドに位置する。野馬堀から北西へ0.4mほど離れる。確認面での平面形は楕円形、底面は長楕円形で、断面掘り鉢状を呈する。長軸方位はN-48°-W、規模は確認面で3.12m×0.97m、底面で2.74m×0.52m、深さ2.34mを測る。覆土最下層は2.0cm～3.0cm程度のロームブロックを多く含む黄褐色土で、極めて柔らかい。中層はロームブロックを多く含む褐色土、上層は暗褐色土と褐色土混入の黄褐色土である。遺物は陶器甕の胴部片が出土している。

(28) SK009 (第234図、図版39)

17D-24グリッドに位置する。(28) SK008と同じく(28) SD001上にあって、南西へ5.0mほど離れている。また、野馬堀からは1.4mの距離である。平面形は確認面では楕円形、底面では長方形を呈し、長軸方位はN-27°-Wを指す。規模は確認面で2.45m×2.03m、底面で0.77m×0.55m、深さ2.51mを測る。遺物は陶器甕の胴部片、焙烙の口縁部が出土している。

(28) SK010 (第234図、図版39・40)

14D-33グリッドに位置し、北東で(28) SK016と切り合う。野馬堀からは1.4mの距離である。平面形は確認面では楕円形、底面では不整な長方形を呈し、長軸方位はN-45°-Wである。規模は確認面で1.90m×1.50m、底面で0.76m×0.50m、深さ1.79mを測る。

(28) SK011 (第234・263図、図版40)

(28) SK010の南西7.6m、17D-52グリッドに位置する馬骨出土土坑である。野馬堀からは0.5m離れている。平面形は不整な長楕円形で、底面では長方形に近くなる。長軸方位はN-43°-W、規模は確認面で2.51m×0.90m、底面で1.05m×0.62m、深さ1.45mである。北西側は二段掘り込みとなっており、段差は81.3cmである。馬骨は中層から上層にかけて出土した。主な部位は上顎、下顎及び臼歯、軸椎、寛骨、大腿骨、脛、踵骨、尾椎などである。覆土は下層からロームブロックを含む褐色土、暗褐色土を多く混入する褐色土、ロームブロックを多量に含む褐色土、黄褐色土が混入する褐色土の順に堆積している。

(28) SK012 (第234図、図版40)

(28) SK011の南西5.2m、17D-61グリッドに位置する。野馬堀からは1.0mの距離である。平面形は楕

円形で、底面で長楕円形になる。長軸方位はN-66°-W、規模は確認面で1.75m×1.50m、底面で0.77m×0.11m、深さ1.85mである。底面は西に向かって緩やかに傾斜している。

(28) SK013 (第234・263図、図版40)

(28) SK011の北西2.5m、17D-41グリッドに位置する馬骨出土土坑である。(28) SD001が鉤の手状に曲がる所から2.5mほどの距離にある。平面形は不整な長楕円形で、底面は長楕円形である。長軸方位はN-25°-E、規模は確認面で1.92m×1.40m、底面で0.64m×0.20m、深さ2.16mである。馬骨は底面から20cm～45cmほど浮いた状態で出土した。主な部位は上顎、下顎及び臼歯、環椎、肩甲骨、上腕骨、大腿骨、肋骨などである。

(28) SK014 (第234図、図版40)

16E-53、54グリッドに位置する。(26) SK016の西2m、野馬堀から北へ1.5mの距離にあり、(28) SK001と一体となっている。西側を(28) SK001と切り合うが、新旧関係は不明である。平面形は確認面で長楕円形、底面で長方形を呈し、長軸方位はN-7°-Wを指す。規模は確認面で1.56m×0.90m、底面で0.60m×0.40m、深さ1.53mを測る。覆土は暗褐色土が主体である。

(28) SK015 (第234図)

(28) SD002の北東端、16E-71グリッドに位置する。(28) SK002の南西0.4m、野馬堀から北へ1.3mの距離にある。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-36°-Wを指す。規模は確認面で1.80m×0.80m、底面で1.17m×0.15m、深さ1.72mを測る。

(28) SK016 (第234図、図版39・40)

(28) SK009の南西2.7m、14D-33、34グリッドに位置する。(28) SD001から南へ0.2m、野馬堀から北へ1.0mの距離にあり、南東側で(28) SK010と切り合う。平面形は長楕円形で、底面で長方形に近くなる。長軸方位はN-46°-W、規模は確認面で2.26m×(1.02)m、底面で0.76m×0.26m、深さ2.06mを測る。覆土は下層がロームブロックを少量含む褐色土、中層が黄褐色土と暗褐色土が混在する層である。

(28) SK017 (第234図、図版40)

(28) SK002の北東0.5m、16E-61、62グリッドに位置する。野馬堀からは1.0mの距離である。平面形は確認面で楕円形、底面で方形を呈し、長軸方位はN-43°-Wを指す。規模は確認面で1.72m×1.46m、底面で0.82m×0.70m、深さ1.84mを測る。

(28) SK018 (第234図、図版39)

(28) SD002の南西端、16D-98グリッドに位置する。(28) SK004と一体となっており、野馬堀からは1.8mの距離にある。確認面での平面形は長楕円形、底面では長方形で、長軸方位はN-26°-Wを指す。規模は確認面で1.33m×0.61m、底面で0.87m×0.34m、深さ2.22mを測る。

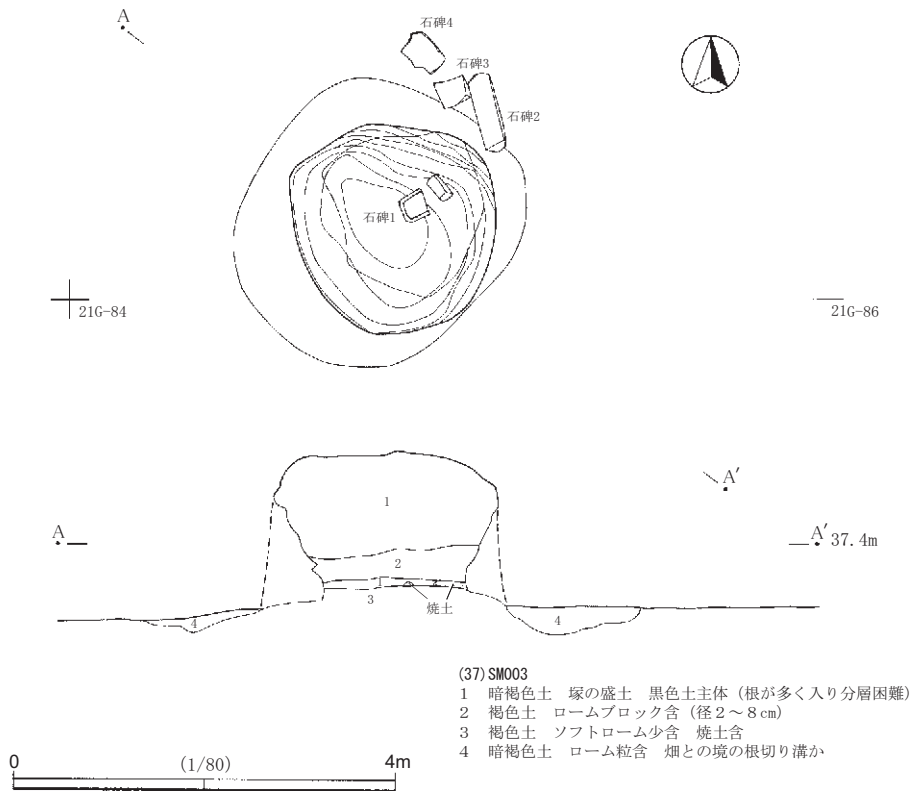
(28) SK019 (第234図、図版40)

(28) SK001の南西4.6m、16E-62グリッドに位置する。野馬堀からは1.0mの距離である。平面形は確認面で楕円形、底面で長方形を呈し、長軸方位はN-43°-Wを測る。規模は確認面で2.06m×1.47m、底面で0.40m×0.26m、深さ2.32mを測る。

近世土坑

(33) SK101 (第263図、図版68)

18H-41グリッドに位置する。平面形は東西にやや長い楕円形で、0.54m×0.47m、深さ31.8cmである。



第264図 (37) SM003

覆土はソフトロームを主体とする褐色土、ローム粒を含む暗褐色土の順に堆積していた。

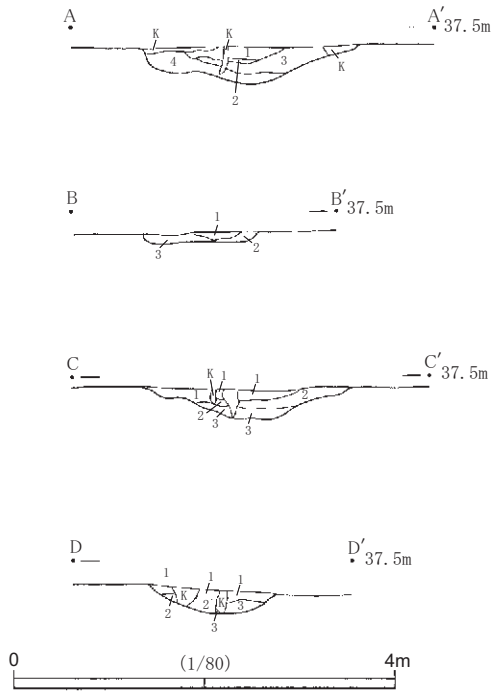
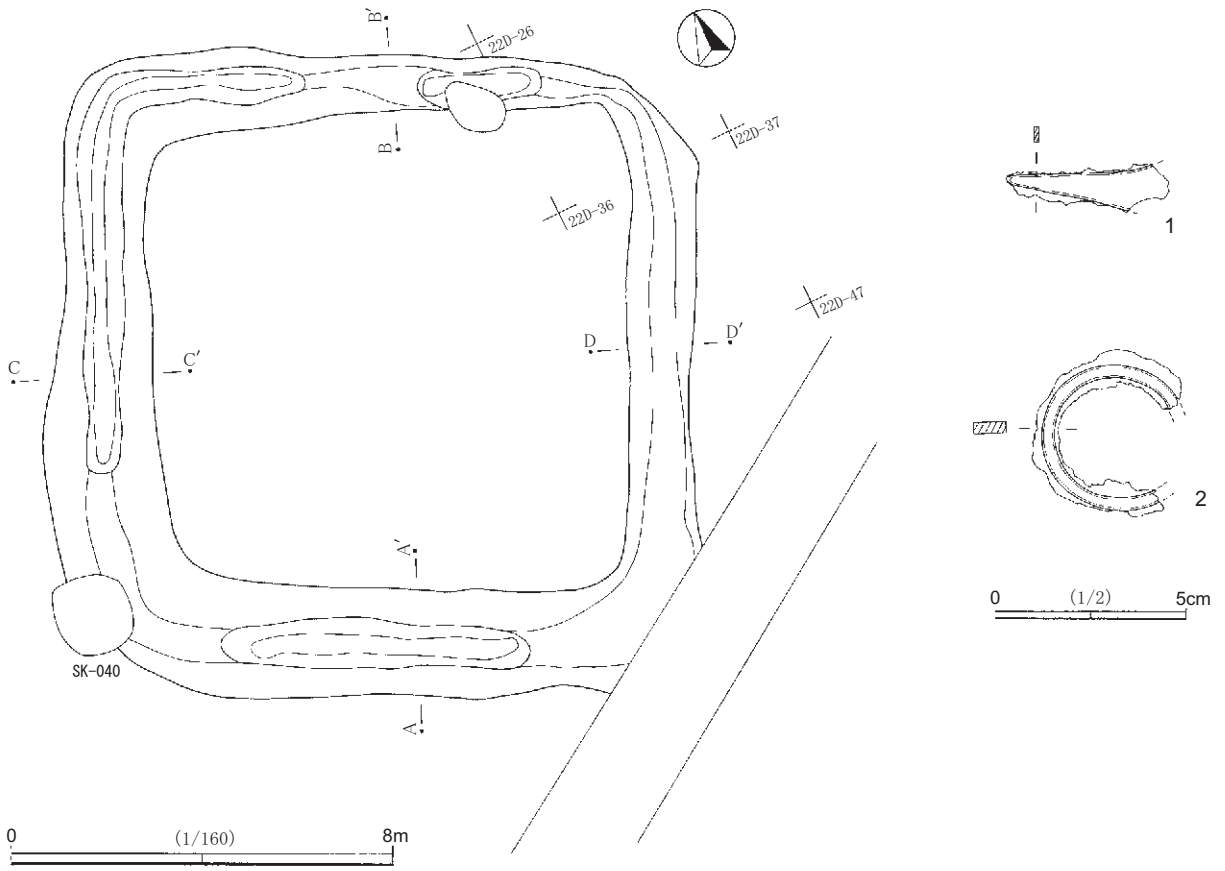
覆土中から近世のものと思われる石塔の一部と砥石が出土した。石塔は砂岩製で現存部の高さ12.3cm、直径9.2cm~9.3cmである。銘文等は特に見られず、五輪塔の風空輪、もしくは宝篋印塔の相輪の可能性はある。砥石は凝灰岩製で茶褐色を呈し、下半部を欠損している。現存部の長さ7.4cm、幅2.5cm~3.8cm、厚さ3.1cmである。欠損部を除き研磨痕が見られるが、さほど使い込んでいない。

近世塚

(37) SM003 (第264図、図版47)

平成10年度に確認調査が行われた際に精査された塚で、21G-74グリッド周辺、台地のほぼ中央、北西~南東方向へ走る現代の道路の南に位置する。塚の裾部は耕作によって削平されており、頂部と裾部北側に石碑が散乱している。規模は現存している裾部で3.0m×2.7m、上端径2.0m程、高さ1.8mである。

頂部に2基、裾部に3基あった石碑の一つに出羽三山の名が刻まれていることから出羽三山塚であることが分かった。これらの石碑は調査後現地に戻されている。頂部にある石碑1は2つに折れているが、合わせると高さ64cm、幅26cm、厚さ14cmを測る。銘文は中央に大日如来の種字と、以下に「奉納大乘妙典日本回國成就所」、右側に「天下和順 元文三戊 千天 飯積村」、左側に「日月清明 月吉日 納主 自心」とあり、元文三年(1738年)に立てられたことが分かる。



- (39) SM001
- A-A'
- 1 暗褐色土 褐色土多 ローム粒少
 - 2 褐色土 ローム粒若干
 - 3 黒褐色土 褐色土やや多 ローム粒若干
 - 4 暗褐色土 ローム粒やや多 ロームブロック (2~3cm) やや多
- B-B'
- 1 黒褐色土 褐色土やや多 ローム粒少 炭化物若干
 - 2 暗褐色土 ローム粒やや多 ロームブロック (3~5mm) やや多
 - 3 褐色土 ローム粒多
- C-C'
- 1 暗褐色土 褐色土粒多 ローム粒少 炭化物若干
 - 2 黒褐色土 褐色土やや多 ローム粒若干
 - 3 暗褐色土 ローム粒やや多 ロームブロック (2~3mm) やや多
- D-D'
- 1 暗褐色土 ローム粒やや多 炭化物やや多
 - 2 暗褐色土 ローム粒やや多 炭化物少
 - 3 褐色土 ローム粒多 ロームブロック (2~3mm) 多

第265図 (39) SM001

北側に散乱している石碑は塚の頂部から落下したものと思われ、3基あるうち最も遺存状態の良い石碑2は高さ100cm、幅24cm、厚さ16cmである。文久二年（1862年）の文字塔で「月山 湯殿山 羽黒山」銘の下に願主京増傳九良を始め飯積村・高松村・尾上村の10名の名が刻まれている。

他2基は途中で折損している。石碑3は現存する高さ30cm、幅31cm、厚さ15cmで、中央に阿弥陀三尊の種字、「奉納大」、右側に「天下泰平」左側に「國土安」（國土安穩か）と刻まれている。

石碑4は現存する高さ45cm、幅27cm、厚さ18cmで、大日如来の種字及び「奉納大乘妙典」を中心に右側に「和順 宝曆□（六カ）」、左側に「日月清明 十一月 □」と刻まれている。調査時の聞き取りによると、周辺にはこの他にも塚が所在していたが、近年の耕作時に削平を受け消滅したとのことである。

(39) SM001（第265図、図版47・69）

台地西端、台地縁辺に沿って南北に走る現代の道路の南、22D-15グリッド周辺に所在する。(37) SM003から南西へ1.1kmほどの距離にあり、南東隅は道路により切られている。一辺約13.6mの方形で、長軸方位はN-28°-Eを指す。盛り土はほとんど削平されており、残っていない。裾部には周溝が巡る。幅は北東隅が最も狭く0.64m、南西隅が2.48mと最も広くなる。深さは東辺中央で28.5cm、南辺中央で40.6cm、西辺中央で31.3cm、北辺中央で27.7cmである。北壁中央から西壁中央にかけてと南壁中央、北壁中央のやや東は周溝が二重になっている。覆土は暗褐色土が主体である。

遺物の出土量は少なく、肥前磁器碗、陶器碗、土鍋、寛永通宝2枚、鉄製品など近世の遺物が数点覆土中から出土した。これらのうち鉄製品2点を図化した。1は刀子の茎、2はリング状鉄製品である。

『千葉県埋蔵文化財分布地図 改訂版（1）-東葛飾・印旛地区』には台地南側の東端にすでに消滅した塚として飯積浅上三山塚が記載されている。盛り土が残っていないため明確なことは言えないが、(39) SM001も三山塚の可能性があり、近世飯積原山遺跡周辺は出羽三山信仰が盛んであったことがうかがえる¹⁾。

注1 立野 晃 2008「出羽三山講と行人」『千葉県の歴史 通史編 近世2』千葉県
対馬郁夫 2011『房総に息づく出羽三山信仰の諸相』対馬郁夫

第4章 まとめ

第1節 旧石器時代

石器出土総点数が1,307点で、22か所のブロックが検出された。5枚の文化層の石器群と単独出土石器20点が検出された。文化層の概要については、第5図の旧石器時代ブロック位置図、第5・6表の文化層別器種・石材組成表を参照していただきたい。

5枚の文化層のうち、第3文化層はIX a層上部～VII層下部に生活面をもち、ナイフ形石器や台形様石器を主要器種としており、折断して作出された石器の割合が多い。環状ブロックが形成される時期に後出する段階の良好な石器群である。黒曜石の推定産地はすべて高原山甘湯沢群が用いられている。第5文化層は野辺山型細石刃石核を有する石器群である。黒曜石の推定産地はすべて神津島恩馳島群が用いられている。この2枚の文化層が本遺跡を特徴づける石器群である。本節においては、文化層別に主要石器を掲載した第266～269図を中心にして、各文化層の石器群の様相をまとめ、石器群の編年的位置づけを行う。

1. 第1文化層（第266図1～4）

X層上部～IX c層に生活面をもつと考えられる石器群である。総計8点出土した。第1ブロックのみで構成される。縦長剥片を素材とした基部調整加工のナイフ形石器（1～4）がまとまって出土している。いずれも単独母岩で構成され、製品として搬入された可能性が高い。縦長剥片剥離技術を基盤とするが、石刃技法によるものではないものと判断される。類似する石器群としては、基部調整加工のナイフ形石器がまとまって出土している成田市南三里塚宮原第1遺跡第3環状ブロック群¹⁾があげられる。

2. 第2文化層（第266図5～12）

IX c層上部～IX a層下部に生活面をもつと考えられる石器群である。総計86点出土した。主要器種は、局部磨製石斧・ナイフ形石器・台形様石器である。第2ブロックから第5ブロックの4か所のブロックで構成される。第2 a文化層から第2 d文化層の4つの文化層に細分した。

(1) 第2 a文化層（第266図5～8）

ナイフ形石器（5）・台形様石器（6）が製品として搬入されている。礫器（7）は局部磨製石斧の未製品の可能性もあり、第2 b文化層で出土している局部磨製石斧と関連する資料である可能性が高い。剥片剥離技術は、楕円形礫を素材として、打面を頻繁に転移して不定形な剥片を剥離している。

(2) 第2 b文化層（第266図9）

良質な緑色凝灰岩を用いた局部磨製石斧（9）が製品として搬入されている。裏面の稜線は研磨により磨滅しているが、表面の剥離面の稜線は磨滅していないことから、大型の局部磨製石斧を再生加工してサイズが小型化した資料である可能性が高い。

(3) 第2 c文化層（第266図10）

定型な石器が出土していない。剥片剥離技術は、第2 a文化層と類似する。

(4) 第2 d文化層（第266図11・12）

縦長剥片を素材とした基部調整加工のナイフ形石器（11・12）が出土している。出土層位が異なるが、第1文化層の石器群と類似しており、同一段階の石器群の可能性が高い。

3. 第3文化層 (第266図13～23、第267図24～41)

IX a層上部～VII層下部に生活面をもつと考えられる石器群である。総計461点出土した。第6ブロックから第16ブロックの11か所のブロックで構成される。調査区全域に分布しており、同時期に形成されたか不明であったため、第3 a文化層から第3 e文化層の5つの文化層に細分した。細分化された文化層の先後関係については明確ではない。複数のブロックで構成されるものは、第3 a文化層と第3 b文化層である。このうち、ブロック間接合が見られたものは、第3 a文化層である。

(1) 第3 a文化層 (第266図13～23、第267図24～29)

総計291点出土し、第6ブロックから第10ブロックの6か所のブロックで構成される。ブロック間接合が頻繁で、一つのブロック群を形成している。ブロック群は、全体で19m×19mの範囲に分布している。明確な円環状の分布を呈しておらず、環状ブロック群とは異なる分布をしていた。IX a層上部～VII層下部に生活面をもつことから、環状ブロック群が形成される時期に後続する段階の石器群と捉えられる。

主要器種は、ナイフ形石器 (13・21・22)・台形様石器 (25～27)・削器 (15・16・20) である。製品の占める割合は低い。石材は黒曜石を主体 (68%) としており、次にチャート・玉髄・珪質頁岩が用いられている。黒曜石は4母岩で構成され、産地推定地はすべて高原山甘湯沢群のものであった。

13～15・17～27が黒曜石を用いた石器である。13・21・22はナイフ形石器である。21は右側縁と左側縁下部に調整加工が施されている。21はナイフ形石器を製作する途中で破損した資料である可能性もある。22は折断された剥片を素材として左側縁下部に調整加工が施されている。17の接合資料は本文化層の剥片剥離技術を最も良好に示す接合資料である。18～23を含む接合資料である。拳大の母岩を搬入して、打面調整を行わず、わずかに頭部調整を行って、縦長剥片を目的的に剥離している。20～23のような大きさの剥片が剥離されるような大きさの石核は残存していない。母岩を消費する過程で石核が小さくなると、石核を18・19のような横長剥片に分割して、横長剥片を折断した後に22のナイフ形石器を製作している。24の横長剥片についても同様に、折断して台形様石器 (25～27) を製作している。折断して作出された石器の割合がきわめて高いことが本文化層の特徴である。

28は玉髄を用いた石器の接合資料である。20の接合資料と同様の剥片剥離が行われている。29は良質な珪質頁岩が用いられている。幅広の剥片を素材として、打面部側に数条の槌状剥離が行われており、「下総型石刃再生技法」に関連する資料である可能性がある。第3 b文化層の34の彫器の資料と類似する。

類似する石器群としては、環状ブロック群より後出する段階として位置づけられ、複数のブロックで構成された石器群である八千代市西芝山南遺跡第1文化層²⁾、袖ヶ浦市台山遺跡第1文化層³⁾ があげられる。

(2) 第3 b文化層 (第267図30～35)

総計57点出土し、第11ブロックから第13ブロックの3か所のブロックで構成される。3か所のブロックは近接していたが、ブロック間接合は見られなかった。主要器種は、彫器 (34)・削器 (30)・楔形石器 (31) である。第3 a文化層と同様に製品の割合は低い。石材は、主に硬質頁岩 (73%) が用いられ、次に黒曜石・砂岩・玉髄が用いられている。黒曜石の産地推定地は、第3 a文化層と同様にすべて高原甘湯沢群である。33の接合資料は幅広剥片を素材として、折断されるものが見られた。彫器 (34) は、縦長剥片を素材として打面部側に4条の槌状剥離が行われていた。台石 (35) は、非常に大型で1,520gの重量感のある楕円形礫を素材としている。表面平坦面の敲打痕と線条痕が顕著である。

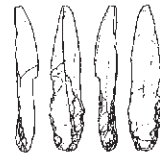
第1文化層
〔X層上部～IXc層下部〕



1 第1ブロック
ガラス質黒色安山岩101



2 第1ブロック
トロトロ石101



3 第1ブロック
珪質頁岩101



4 第1ブロック
珪質頁岩102

ナイフ形石器 (1～4)

第2a文化層
〔IXc層上部～IXa層下部〕



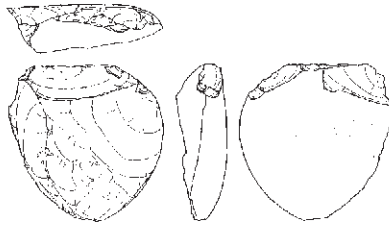
5 第2ブロック
硬質頁岩201

ナイフ形石器



6 第2ブロック
珪質頁岩202

台形様石器



7 第2ブロック
砂岩201

碟器

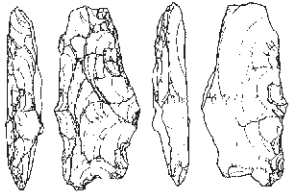


8 第2ブロック
ガラス質黒色
安山岩203

敲石

※8のみスケール1/4
(1/4) 10cm

第2b文化層
〔IXc層上部～IXa層下部〕



9 第3ブロック
緑色凝灰岩201

局部磨製石斧

第2c文化層
〔IXc層上部～IXa層下部〕



10 第4ブロック
チャート201

微細剥離痕のある剥片

第2d文化層
〔IXc層上部～IXa層下部〕



11 第5ブロック
嶺岡産珪質頁岩202

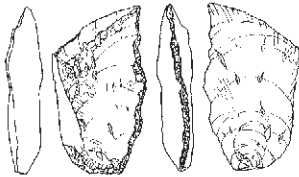
ナイフ形石器 (11・12)



12 第5ブロック
トロトロ石201

第3a文化層
〔IXa層上部～VII層下部〕

※黒曜石の産地推定地は、すべて高原山甘湯沢群。



13 第6ブロック
黒曜石302

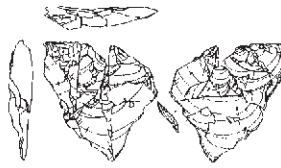
ナイフ形石器



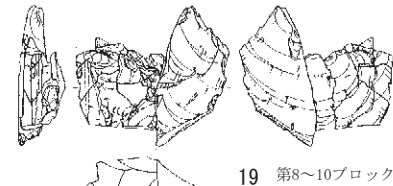
17 第6～10ブロック接合資料
黒曜石301
(18～23を含む接合資料)



14 第8ブロック
黒曜石301



18 第8・9ブロック
黒曜石301



19 第8～10ブロック
黒曜石301

接合資料 (14・17～19)



15 第7ブロック
黒曜石302



20 第9ブロック
黒曜石301



21 第9ブロック
黒曜石301



22 第9ブロック
黒曜石301



23 第7ブロック
黒曜石301

削器 (15・16・20)

ナイフ形石器 (21・22)

二次加工のある剥片



16 第7ブロック
チャート301

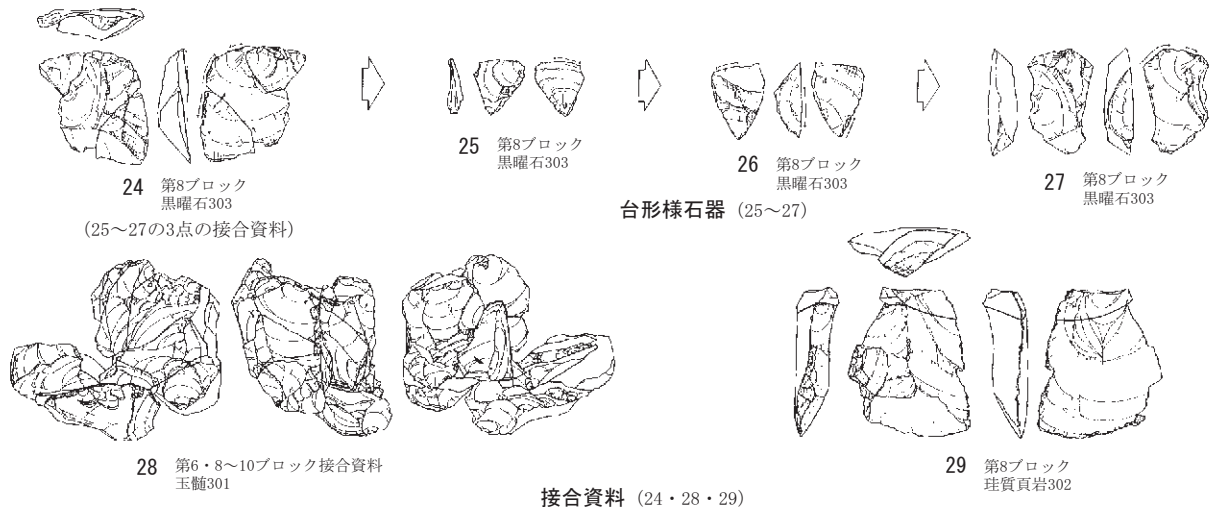
0 (1/3) 10cm

第266図 文化層別主要石器 (I)

第3a文化層

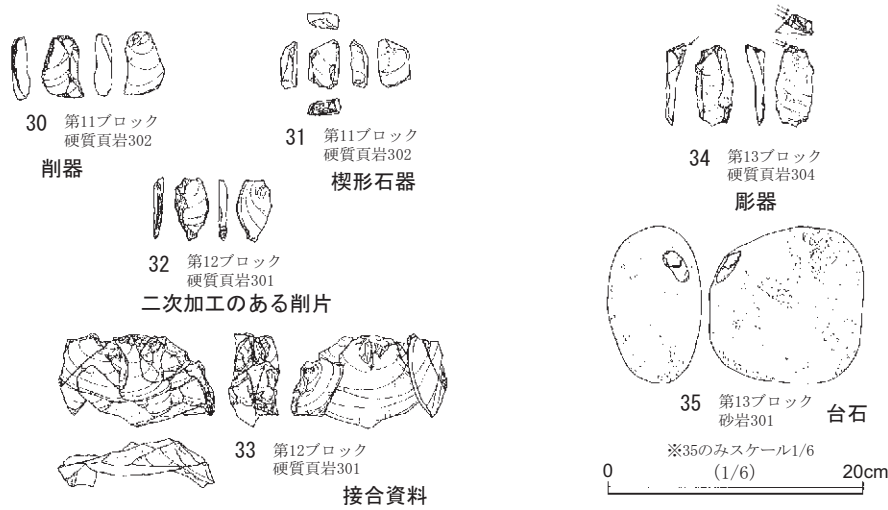
※黒曜石の産地推定地は、すべて高原山甘湯沢群。

〔IXa層上部～VII層下部〕



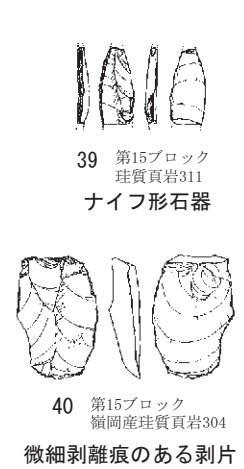
第3b文化層

〔IXa層上部～VII層下部〕



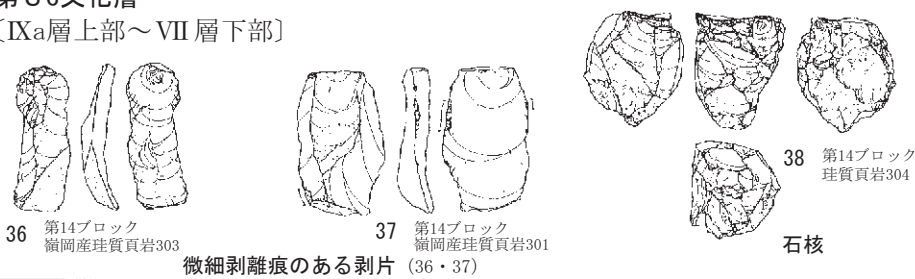
第3d文化層

〔IXa層上部～VII層下部〕



第3c文化層

〔IXa層上部～VII層下部〕



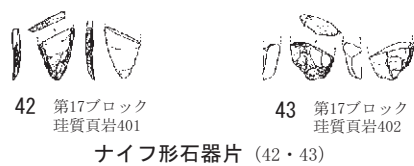
第3e文化層

〔IXa層上部～VII層下部〕



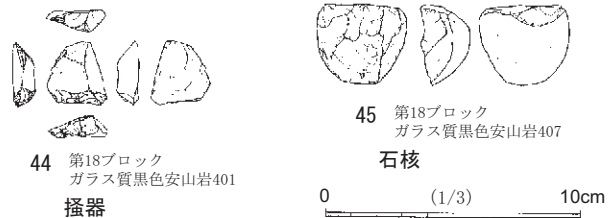
第4a文化層

〔V層～IV層下部〕



第4b文化層

〔V層～IV層下部〕



第267図 文化層別主要石器 (2)

第5a文化層
〔Ⅲ層上面〕

※黒曜石の産地推定地は、すべて神津島恩馳島。



第268図 文化層別主要石器 (3)

第5b文化層
〔Ⅲ層上面〕

※黒曜石の産地推定地は、すべて神津島恩馳島。



90 第22ブロック
珪質頁岩502



91 第22ブロック
玉髄501



92 第22ブロック
珪質頁岩504



99 第22ブロック
珪質頁岩501



100 第22ブロック
チャート501

細石刃石核 (99・100)



93 第22ブロック
珪質頁岩504



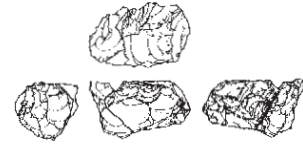
94 第22ブロック
珪質頁岩501



95 第22ブロック
玉髄501



101 第22ブロック
チャート503



102 第22ブロック
玉髄502

細石刃石核+二次加工のある削片



96 第22ブロック
珪質頁岩501

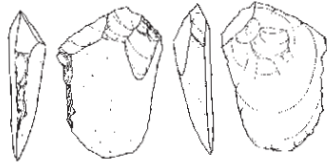


97 第22ブロック
珪質頁岩502



98 第22ブロック
珪質頁岩502

細石刃 (90~98)



103 第22ブロック
ガラス質黒色安山岩503



108 第22ブロック
チャート504



109 第22ブロック
チャート501

楔形石器 (108・109)

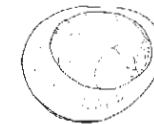
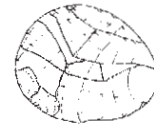


104 第22ブロック
ガラス質黒色安山岩505



105 第22ブロック
珪質頁岩501

削器 (103~105)



110 第22ブロック
頁岩502

敲石



106 第22ブロック
ガラス質黒色安山岩502



107 第22ブロック
玉髄503

二次加工のある削片 (106・107)

※90~110のスケール2/5
(2/5) 0 10cm

単独出土石器



111 16L-44グリッド
硬質頁岩

ナイフ形石器



112 210-22グリッド
硬質頁岩

尖頭器 (112・113)



113 18K-52グリッド
ガラス質黒色安山岩



114 29F-35グリッド
硬質頁岩

搔器

※111~114のスケール1/3
(1/3) 0 10cm

第269図 文化層別主要石器 (4)

(3) 第3 c文化層 (第267図36～38)

総計45点出土し、第14ブロックの1か所のブロックで構成される。石刃技法を基盤にもつ石器群と思われる。珪質頁岩と嶺岡産珪質頁岩を主体とする。

(4) 第3 d文化層 (第267図39・40)

総計7点出土し、第15ブロックの1か所のブロックで構成される。第3 c文化層と同様に、石刃技法を基盤にもつ石器群と思われる。

(5) 第3 e文化層 (第267図41)

総計56点出土し、第16ブロックの1か所のブロックで構成される。両極剥離を多用する石器群である。

4. 第4文化層 (第267図42～45)

V層～IV層下部に生活面をもつと考えられる石器群である。総計49点出土した。第17ブロックと第18ブロックの2か所のブロックで構成される。両ブロックは出土地点が離れており、ブロック間接合が見られないことから、第4 a文化層と第4 b文化層に細別した。

(1) 第4 a文化層 (第267図42・43)

総計31点出土し、第17ブロックの1か所のブロックで構成される。ナイフ形石器が2点(42・43)出土しているが、いずれも良質の珪質頁岩が用いられている。珪質頁岩とチャートを主体とする。

(2) 第4 b文化層 (第267図44・45)

総計16点出土し、第18ブロックの1か所のブロックで構成される。主要器種は、搔器(44)と石核(45)である。石材はガラス質黒色安山岩が用いられている。

5. 第5文化層 (第268図46～89、第269図90～110)

Ⅲ層上面に生活面をもつと考えられる石器群である。総計683点出土した。第19ブロックから第22ブロックの4か所のブロックで構成される。野辺山型の細石刃石核を有する石器群である。本文化層が最も低い標高に位置し、谷津の谷津頭を取り囲むように立地している。谷津頭付近に埋没谷が形成され、その縁辺を選地して居住したことが推定される。ブロック間接合関係やブロックの分布位置などから、第5 a文化層と第5 b文化層の2つの文化層に細分した。両文化層の接合関係は見られなかった。細分した文化層の先後関係については、出土層位の差異がなく、石器群の様相も類似しており明確ではない。

(1) 第5 a文化層 (第268図46～89)

総計513点出土し、第19ブロックから第21ブロックの3か所のブロックで構成される。主要器種は、細石刃石核(46～60)・細石刃石核原型(61)・細石刃(66～85)である。その他に点数は少ないが、搔器(86)・石核(87)・敲石(88)・礫器(89)が出土している。石材は、黒曜石の占める割合(88%)が高く、産地推定地はすべて神津島恩馳島群であった。石材別に分布状況を示したものが第75～77図である。母岩別資料一覧は第43・44表のとおりである。黒曜石は22母岩識別されたが、母岩単位で消費過程や分布状況が異なっていた。想定される母岩消費過程は、次の類型①～類型③に分類される。

類型①：細石刃石核・細石刃石核原型を含み、細石刃が含まれない母岩。

黒曜石512が最も良好な資料で、細石刃石核2点(47・48)と細石刃石核原型1点の3点で構成される。このほか、黒曜石515が細石刃石核(52・53)、黒曜石533が細石刃石核+打面再生剥片(62)、黒曜石537が細石刃石核(46)で構成されている。細石刃石核や細石刃石核原型のかたちで遺跡内に搬入して、細石刃が枯渇した時に備えてストックされていた母岩と考えられる。

類型②：細石刃を含み、細石刃石核・細石刃石核原型が含まれない母岩。

黒曜石501・502・504・511・513・516・522・535・536・540・550の母岩があげられ、66・68・69～72・74・76・78・81・82・84・85などの石器が該当する。本遺跡において細石刃を剥離した母岩で、細石刃石核は、他の遺跡に搬出されたか、消費し尽くされた母岩と考えられる。本遺跡では、本類型の母岩の消費過程を示すものが最も多い。

類型③：細石刃石核・細石刃石核原型・細石刃を含む母岩。

黒曜石521が最も良好な資料である。黒曜石521は、本遺跡において大型の細石刃石核（58）を分割して、二つの細石刃石核（59・60）から細石刃（79・80など）を剥離している。また、母岩を分割して細石刃石核原型（61）も作出している。黒曜石521は、本遺跡において、母岩→細石刃石核原型→細石刃石核→細石刃という一連の細石刃製作過程を行っていることが窺えた。このほか、黒曜石503が細石刃石核（51・54）と細石刃（75・83など）、黒曜石531が細石刃石核（49・50）と細石刃（83など）で構成されている。本類型は母岩を持ち込み本遺跡において最終まで消費した可能性の高い母岩と考えられる。

以上のように、本遺跡においては、三つの母岩消費過程が抽出された。母岩を消費するとともに、一方では他の母岩をストック・補充していることが推察される。

分布状況を母岩消費過程の類型を対応させながら見ていくと、類型①の母岩が第19ブロック、類型②の母岩が第20ブロックにそれぞれ分布する傾向が見られた。また、類型③の母岩は第19～21ブロック全体に分布していた。これらのことから、第19ブロックにおいて母岩をストック・補充し、第20ブロックにおいて母岩を消費するというような場の機能の使い分けが行われたことが推察される。

類似する石器群としては、黒曜石を主体とする成田市十余三稻荷峰遺跡（空港No.67遺跡）第6文化層⁴⁾があげられる。

（2）第5 b文化層（第268図90～110）

総計169点出土し、第22ブロックの1か所のブロックで構成される。主要器種は、細石刃石核（99・100・102）・細石刃（90～98・101）である。珪質頁岩が主体を占め（41%）、次にガラス質黒色安山岩、チャート、玉髓が用いられている。黒曜石は、わずかに4点（2%）である。産地推定地は第5 a文化層と同様にすべて神津島恩馳島群である。第5 a文化層の石器群とは石材組成に違いが見られるが、第5 a文化層と同様に野辺山型細石刃核を有する石器群で同じ内容の石器群といえよう。

類似する石器群としては、非黒曜石を主体とする佐倉市大林遺跡第1文化層⁵⁾があげられる。

6. 単独出土石器（第269図111～114）

ナイフ形石器（111）と搔器（114）は、第2文化層の段階に帰属される可能性がある。尖頭器（112・113）は、第4文化層よりも新しく第5文化層よりも古い時期の所産の石器と思われる。

注1 宇井義典 2004『南三里塚宮原第1遺跡・南三里塚宮原第2遺跡』（財）印旛郡市文化財センター

2 島立 桂ほか 2012『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書2—八千代市西芝山南遺跡—』（公財）千葉県教育振興財団

3 新田浩三ほか 2002『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書10—袖ヶ浦市台山遺跡—』（財）千葉県文化財センター

4 永塚俊司 2004『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XX—十余三稻荷峰遺跡（空港No.67遺跡）—』（財）千葉県文化財センター

5 田村 隆ほか 1989『佐倉市南志津埋蔵文化財調査報告書I』（財）千葉県文化財センター

第2節 掘立柱建物跡について

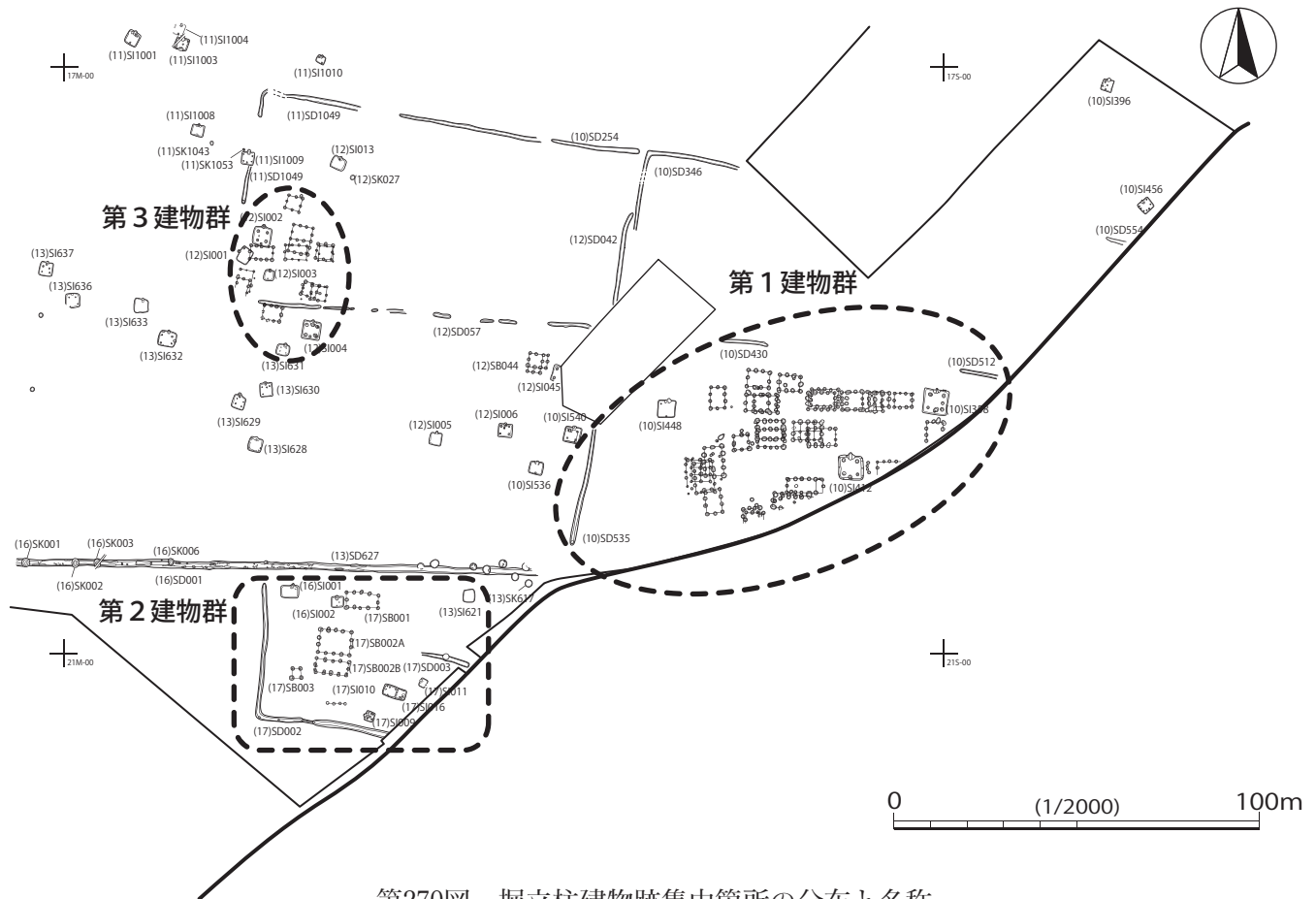
(1) 全体の概要 (第270図)

飯積原山遺跡における平成22年度 H2202調査分までの掘立柱建物跡の棟数は42棟である。竪穴建物跡¹⁾が66棟であるので、竪穴建物跡に対して2/3に近い。掘立柱建物跡の竪穴建物跡に対する比率はかなり高い。

掘立柱建物跡の分布は、竪穴建物跡とあわせた全体の分布からみて、東部・東南部・中央部の3か所に偏っている。各々の集中箇所について、本項では東部のものを「第1建物群」、東南部を「第2建物群」、中央部を「第3建物群」として記述する。この「建物群」には掘立柱建物跡だけでなく、近接する竪穴建物跡及び関連する区画溝などほかの遺構も含める。

なお本項では詳述しないが、竪穴建物跡や確認されていない平地建物で構成されるものを「第4建物群」とみれば、それは広域に及び、いくつかの支群に分けられるであろう。

第1建物群の掘立柱建物跡は26棟であり、全体のほぼ2/3を占める。南側は調査区外であるため、この棟数を上回るのは確実である。上空からみた建物群全体の配置はおおむね長方形状を呈しているとみられ、整然としている。また周囲には3棟の竪穴建物跡があり、掘立柱建物跡群に関わる建物とみられる。建物群の北方及び西方には溝状遺構があり、走行方向及び遺構の分布状況から第1建物群を区画する溝と考えられる。これらの区画溝までが第1建物群の直接的な領域であろう。区画溝に囲まれた範囲は東西110m以上、南北60m以上であるが、南東側は斜面となるため、長方形の区画はとれない。西方溝の西方は竪穴建物跡が接近して位置するが、北方溝の北方には遺構がみられない。しかし平地建物や畑・林など、遺構



第270図 掘立柱建物跡集中箇所の分布と名称

の痕跡を残しにくい土地利用がされていた可能性も考えられる。いずれにしても第1建物群は周囲の一般的な竪穴建物跡群からの隔絶性が高い。

第2建物群の掘立柱建物跡は4棟で、重複はみられない。遺構配置及び「三寺」の墨書土器から、村落寺院または村の仏堂といえる一画である。周囲に竪穴建物跡が数棟存在するが、それらは村落寺院関係のものと思われる。第2建物群の西方及び南方には直角に曲がる溝状遺構があり、寺院を区画する溝と考えられる。南溝及びその内側に出入り口部と目隠し塀がある。建物群の北方には区画溝がみられないが、元々存在しないのか、失われたのか不明である。区画溝の西及び南方には竪穴建物跡の分布がみられない。また建物群北方も竪穴建物跡の空白域が広がっている。宗教的な空間近くには、竪穴建物跡の建設が忌避されたのであろう。

第3建物群には11棟の掘立柱建物跡が分布する。近接する場所で建て替えられたため、何棟か重複している。周囲に竪穴建物跡が存在し、掘立柱建物跡との重複もみられる。複数の掘立柱建物跡・竪穴建物跡でひとまとまりをもつ集団が構成されていたものとみられる。前二者とは異なり、建物群の隔絶性は認められない。2棟の竪穴建物跡で墨書「主」が出土しており、量的にも多いことから、「主」でくくることのできる集団であろう。

以上をまとめると、第1建物群は集落内の管理施設といえる建物群で、建設を主導したのは集落全体の指導者層であろう。第2建物群はいわゆる村落寺院である。第3建物群は掘立柱建物跡と竪穴建物跡の組み合わせであるが、第1建物群との違いは集落全体の指導者層とまではいえない集団の建物群と思われる。

(2) 第1建物群

A 全体及び個別的様相について (第54表)

掘立柱建物跡の構造をみると、総柱建物(10) SB515の1棟のみである。(10) SB441は床束建物であり、(10) SB420も片側に床束をもつ建物であろう。そのほかの23棟は側柱建物である。なお(10) SB432も片側に床束をもつ可能性があるが、不規則な位置であり、側柱建物に含めておく。

掘立柱建物跡の規格をみると、桁行2間×梁行2間(以下この順序で記述)のものは2棟、3間×2間のものは7棟、3間×3間が3棟、4間×2間が2棟、4間×3間が10棟、5(6)間×2間のものが2棟である。なお調査区外にかかるものについては間数を推定した場合があり、また次に述べる面積の値も推定値である。

2間×2間のものは、(10) SB413と(10) SB517である。面積は前者が13.2㎡、後者が16.1㎡であり、第1群における最小値とそれに次ぐ数値である。小規模な建物である。

総柱建物 SB515は3間×2間の規模である。面積が31.1㎡で、4間×3間の下位に匹敵する。内部に側柱と変わらない平面規模の柱穴をもつ。西方に一直線状のピット列があり、この倉に対する目隠し塀と思われる。

桁行3間の側柱建物9棟は面積がすべて30㎡未満であり、また平均値は24.6㎡である。梁行3間の側柱建物2棟の面積はこのなかでは最大値及び上位であるが、2間のものでも同程度のものがあり、大差はみられない。なお梁行3間のうちの1棟である SB420が床束をもつ。また床束をもつ可能性のある SB432は3間×2間の建物である。これらは一部が床張りか、または倉庫機能があつたのかもしれない。

第54表 第1建物群の建物規模

No.	遺構番号	桁行数	梁行数	面積(m ²)	方位型	備考
1	(10)SB413	2	2	13.2	C後	
2	(10)SB517	2	2	16.1	B	
3	(10)SB411	3	2	18.3	C後	
4	(10)SB418	3	2	18.1	C前	
5	(10)SB432	3	2	23.5	A	束柱あり?
6	(10)SB434	3	2	28.2	A	
7	(10)SB437	3	2	26.2	C後	
8	(10)SB513	3	2	28.7	B	
9	(10)SB518	3	2	21.9	C後	
10	(10)SB420	3	3	27.1	C前	束柱あり
11	(10)SB436	3	3	29.3	C前	
12	(10)SB515	3	3	31.1	C後	総柱建物
13	(10)SB514	4	2	43.2	B	
14	(10)SB516	4	2	39.6	B	
15	(10)SB419	4	3	30.4	C後	推定値
16	(10)SB421	4	3	32.7	C後	
17	(10)SB422	4	3	30.9	C前	
18	(10)SB440	4	3	31.9	C前	
19	(10)SB441	4	3	36.3	C後	床束建物
20	(10)SB445	4	3	34.2	C後	
21	(10)SB446	4	3	34.1	C前	
22	(10)SB504	4	3	32.7	C前	推定値
23	(10)SB508	4	3	33.1	B	推定値
24	(10)SB509	4	3	34.1	C前	推定値
25	(10)SB449	5(6)	2	35.2	C後	
26	(10)SB503	5	2	37.6	A	推定値
27	(10)SI358			45.2	A	竪穴建物
28	(10)SI412			43.6	C前	竪穴建物
29	(10)SI448			21.1	C後	竪穴建物
3×2間建物面積平均値				24.4		
桁行4間建物面積平均値				34.4		

桁行4間の12棟のうち、最大値及びそれに次ぐ数値は梁行2間のものである。両者は西側に位置する(10)SB514・(10)SB516で、重複している。調査時における新旧関係は不明であるが、SB516を建て替えてSB514を建設したと思われる。これについては後述したい。そのほかの10棟はすべて梁行3間の建物である。面積が30m²から36m²であり、ばらつきが少ない。しかし桁行3間で30m²を超えるものはないので、桁行4間と3間では明確な規模の格差がある。桁行4間・梁行3間の掘立柱建物跡は数も多く、第1群の主体をなす規格的な建物である。

床束建物のSB441は4間×3間で、床張りの建物とみられる。面積はSB514・SB516に次ぐ規模であるが、第1群の中央に位置し、内容からも中核的な建物であろう。またSB441の建て替え前の建物と思われる(10)SB440も4間×3間の側柱建物である。構造はやや異なるが、機能は同様かもしれない。

桁行5(6)間の2棟は(10)SB449・(10)SB503で、同様の作りの建物である。第1建物群の南側に近接して位置し、建て替え前後の建物とみられる。ともに梁行が2間で、やや細長い平面形である。面積は36m²前後である。SB503は柱穴が重複しており、同一の位置で建て替えがあったとみられる。両者はほか

の多くの掘立柱建物跡とは長辺・短辺の比率が異なっている。機能については特定しがたいが、第1群にこの種類の掘立柱建物跡が少なくとも1棟、同様な位置に長期にわたって必要であったことが分かる。

竪穴建物跡は第1群を建設した指導者集団の家屋と思われる。(10) SI358は45.2㎡、(10) SI412は43.6㎡であり、第1群のなかで最大及びそれに次ぐ面積をもつ。(10) SI448は面積が小さいが、竪穴建物跡の周囲はほかの建物との間隔が空いており、建物が竪穴の外側に広がることも考えられる²⁾。そのためSI358・SI412との比較は慎重を期す必要がある。SI448については評価を保留したいが、SI358・SI412の竪穴建物跡だけをみても面積が大きく、両者はリーダー格の住まいであるかもしれない。しかしそれだけではなく、集落の構成員に対して飲食物を供給する竈屋的な機能をもつことも考えられる。その機能は春の田植え・秋の収穫など多数の共同作業時だけではなく、製糸作業や日用品製作など日常的な場においても考えられる。なお集団指導者の住まいは竪穴建物跡ではなく、床張りのSB441やその前身のSB440などであることも考えられる。あるいは夏季は掘立柱建物跡、冬季は竪穴建物跡という使い分けがされていたことなど、さまざまな可能性がある。なおSI412と掘立柱建物跡(10)SB504の間には南北に並ぶ4基のピットがあるが、SI412からみてSB504を遮蔽するための塀とみられる。両者は同時存在の時期があったと思われる。

4間×3間・3間×2間など多くの側柱建物の機能についても、作業や執務などの仕事の間であるのか、指導者集団の家屋であるのか、あるいはほかの用途か、また複数の機能を兼ねるのか、識者による一定の意見集約はなされていないと思われる。規模の違いによる機能の違いがあるのかも難しい問題であろう。特に桁行5間以上のやや細長い建物については、4間×3間の建物などと機能の違いがあったと思われるが、それが何であるのかを断定するのは難しい。

B 第1建物群の変遷について (第271図)

第1群建物のうち、西側に位置する(10) SB514・SB515・SB516の3棟が重複しており、3回に及ぶ建て替えがあったことがわかる。また(10) SB503も建て替え前後の2時期があり、近接する(10) SB449との同時存在が不可能とすると、3時期にわたることになる。

次に竪穴建物跡出土遺物の時期をみたい。第1群の竪穴建物跡は3棟あり、各々の出土遺物から歴年代を推定すると、(10) SI358は9世紀前葉、(10) SI412は9世紀第2四半期頃である。(10) SI448は椀杯類の出土が少ないため断定しがたいが、回転糸切り無調整の杯皿類の底部をもつことなどにより、9世紀中葉～後葉とみられる。このように竪穴建物跡の変遷は3時期に分かれ、掘立柱建物跡の重複関係からうかがえる3期の変遷と対応することが考えられる。竪穴建物跡の存続年代が出土遺物よりも一世代古いとすると、SI358の構築時期は9世紀初頭か、あるいは8世紀末まで遡るかもしれない。同様にSI412の構築時期は9世紀前葉、SI448の構築時期は9世紀中葉となる可能性がある。

以上、第1建物群はおおよそ3時期に変遷するとみられる。想定される歴年代は以下のとおりである。

- 1期 8世紀末～9世紀前葉
- 2期 9世紀第2四半期
- 3期 9世紀第3四半期

歴年代については若干幅をとったため、1期に8世紀末を加えたが、主体は9世紀代と思われる。しかし各遺構が何期に属するかの判断は、出土遺物が少ないため、概して難しい。そのため本項では、建物の向きを重視して変遷を検討したい。

第1群の建物は正方位を示すものが多いが、北からやや東または西に振れるものが少数存在する。そこで東に振れるものをA型、西に振れるものをB型、正方位のものをC型とする。

官衙遺跡では例外はあるものの概して斜方位から正方位への移行が指摘されている³⁾。ただし本遺跡の掘立柱建物跡群の場合、竪穴建物跡の様相から建設が始まったのは遡っても8世紀末と思われる。そのころは官衙遺跡でも正方位を採用するのが一般的である。官衙遺跡の方位を検討した大橋泰夫氏によれば、郡衙施設では真北を志向しながらも真北から数度以上離れた方位を採用するケースが多く、それは測量技術によるところもあったと指摘している⁴⁾。

第1群のA・B型も真北からの振れはわずかであり、揺らぎといえる程度のもものかもしれない。しかし掘立柱建物跡については検討するための手がかりが少ないため、若干の振れでも類似方位のものは同一時期に設計・測量されたか、またはその延長上にあるとみなして論を進める。

A型の建物は(10)SI358、(10)SB432・SB434・SB503の4棟である。このうちSI358・SB432・SB434の北辺はほぼ同一直線上に位置する。また北方の区画溝(10)SD430・SD512の走行方向が上記の同一直線とほぼ平行しており、区画溝もA型の遺構と思われる。SI358との同方向性により、ほかのA型遺構もSI358と同様の時期とみておく。これらA型遺構が主体的に存在する時期を第1建物群1期とする。なおSB503は建て替えられており、建て替え前のものを1期、建て替え後のものを2期としたい。また区画溝の内側は後述する2・3期にわたって遺構がみられないことから、区画遺構は1期から2・3期まで継続して続くとみられる。

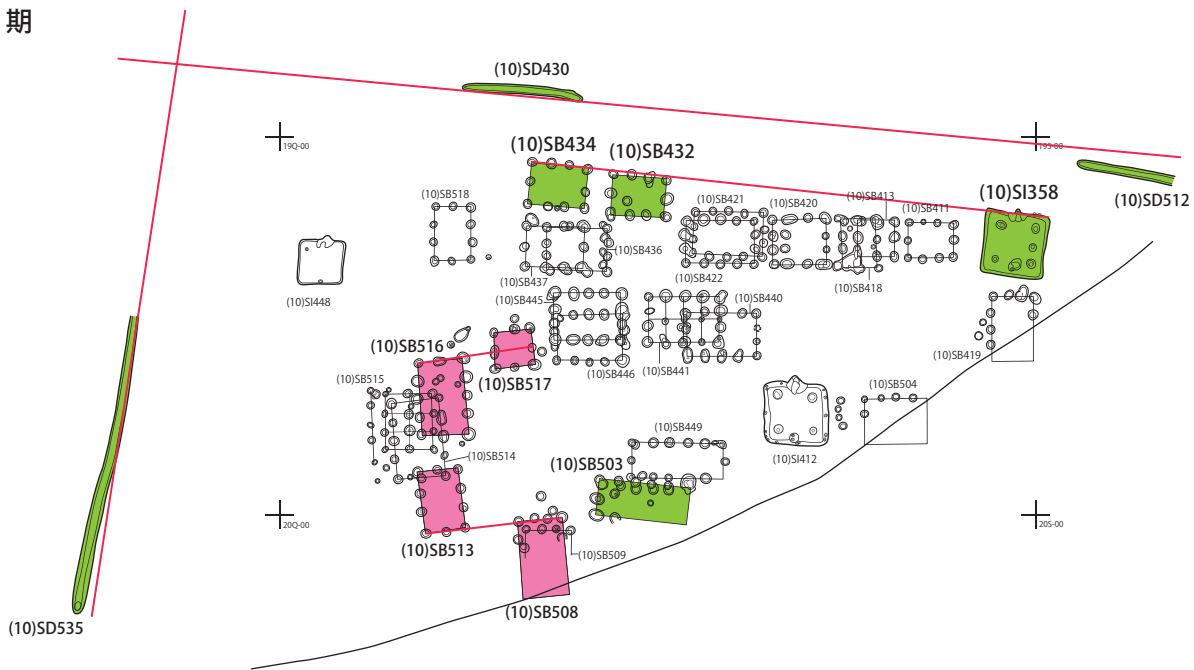
B型の建物は(10)SB508・SB513・SB514・SB516・SB517の5棟であり、第1群西側に位置する。出土遺物からは判然としないが、前述した重複関係と、斜方位であることから1期の遺構が存在すると思われる。SB516の北辺とSB517の東西中軸線が同一直線上であり、SB513南辺とSB508北辺が同一直線上であること及び重複関係がないことから、これら4棟が1期に存在した可能性が高いと考える。SB516を建て替えたと思われるSB514については、斜方位であるが2期に降るものとする。

C型遺構は数が多く、重複関係も著しいため、前後の2時期に区分した。全体としてはC型前期を2期、C型後期を3期とした。竪穴建物跡SI412が2期、SI448が3期の遺構である。掘立柱建物跡については建物の向き及び発掘調査時における新旧関係の様相から区分した。各遺構名及び建物の向きの詳細な様相については省略し、図をもって説明に代えたい。なお調査時の新旧関係よりも建物の向きを優先したことがある。たとえば(10)SB422は(10)SB411よりも新しいと把握されたが、3期よりも2期とみた方がほかの建物との並びがよい。またA型のSB503はC型のSB449よりも新しいと把握されていたが、これも本項では逆とした。

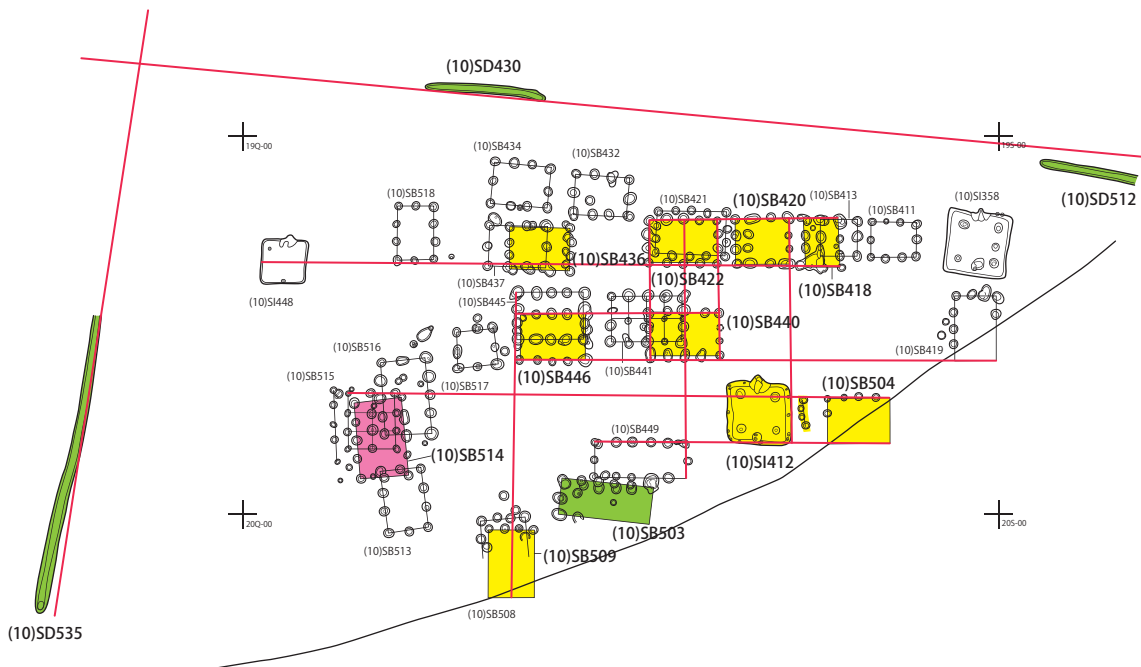
なお建物の向きは2期とした遺構と3期とした遺構で共通するケースがあり、2期と3期の区分は不安定である。しかし正方位のものを主体としてわずかに斜方位のものが残る2期、正方位だけの3期のあり方は、各遺構の実際の帰属はともかくとして、実態に近いように思われる。むしろ斜方位だけの1期の方が掘立柱建物跡の数が少なく、問題があると思われる。実態としては斜方位の掘立柱建物跡に正方位のものが何棟か加わってくるように思われる。ただしそれがどの遺構であるのか抽出することが難しい。

以上、個々の建物の時期については不安定な場合も多いが、各時期を通観してみたい。1期は掘立柱建物跡が7棟、竪穴建物跡が1棟である。2期は掘立柱建物跡が10棟、竪穴建物跡が1棟である。3期も掘立柱建物跡が10棟、竪穴建物跡が1棟である。合算した掘立柱建物跡の棟数が総数よりも1棟多いのは、

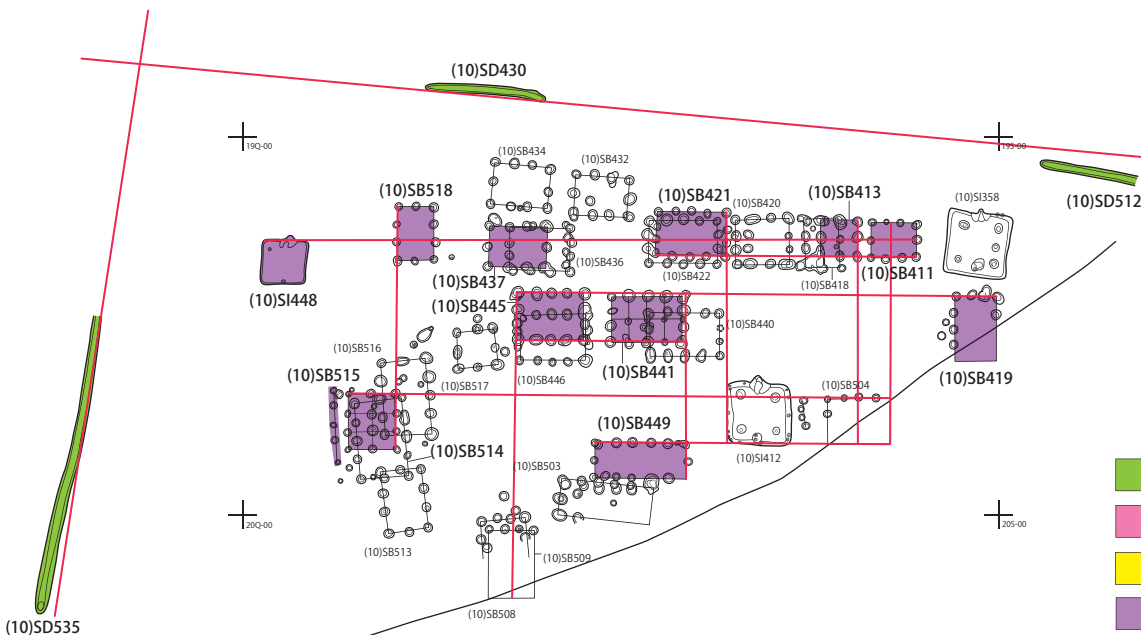
1期



2期



3期



- A型
- B型
- C型前期
- C型後期
- 遺構間の同一
直線・平行線

第271図 第1建物群の変遷

SB503建て替え前のものを1期、建て替え後のものを2期としたためである。1期は斜方位のものだけであるので棟数が少ないが、それでも2間×2間から5間×2間まで各規格の建物がそろっている。2・3期はバランスのとれた棟数と規格である。

1期のSB517は2間×2間で、倉庫と思われる。SB517が4間×2間のSB516に付属する建物とすると、SB516を建て替えた2期のSB514の時期まで存続したことも考えられる。SB517は焼却または火災にあったとみられることから、SB517から3期の総柱建物SB515へと、倉庫機能を強化して移転したのかもしれない。2期まで続くかどうか不明瞭なSB517を除くと、2期の倉庫として可能性があるのは、3間×2間でやや小規模なSB418である。3期はSB515のほか、小規模なSB413も倉庫と思われる。またやや小規模なSB411も倉庫の可能性はある。桁行5(6)間のやや長大な建物は建て替えにより全期を通して少なくとも1棟がほぼ同位置に存在する。

以上、第1建物群をみてきたが、その景観を端的に表現すると、溝状遺構によって区画されたなかに、東西棟の掘立柱建物跡群を主体として、若干の南北棟と規模の大きな竪穴建物跡が整然と配置されたあり方といえよう。確認はできないが、区画溝のおそらく内側(建物側)に土塁または垣が存在したかもしれない。

(3) 第2建物群 (第272図)

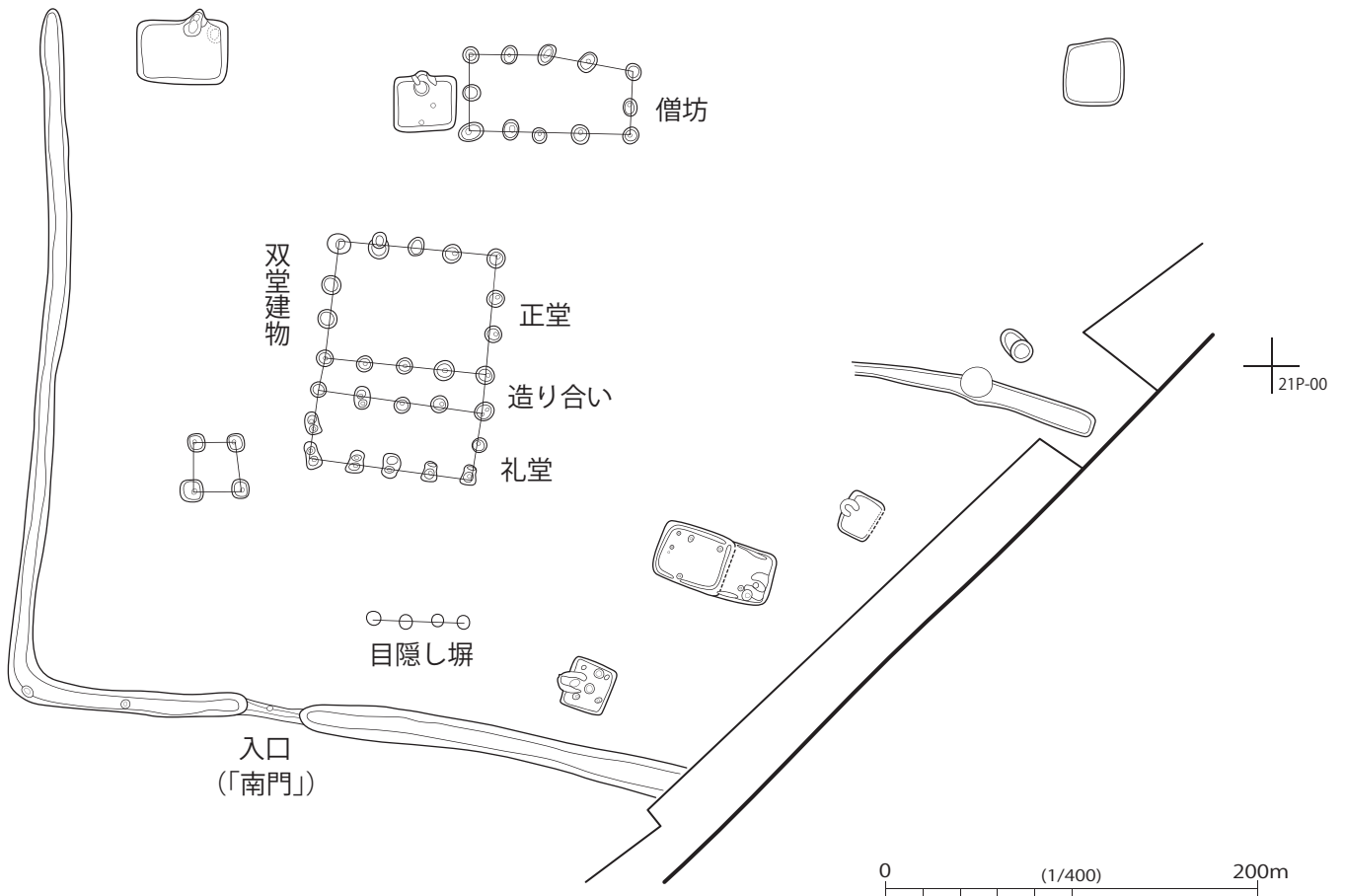
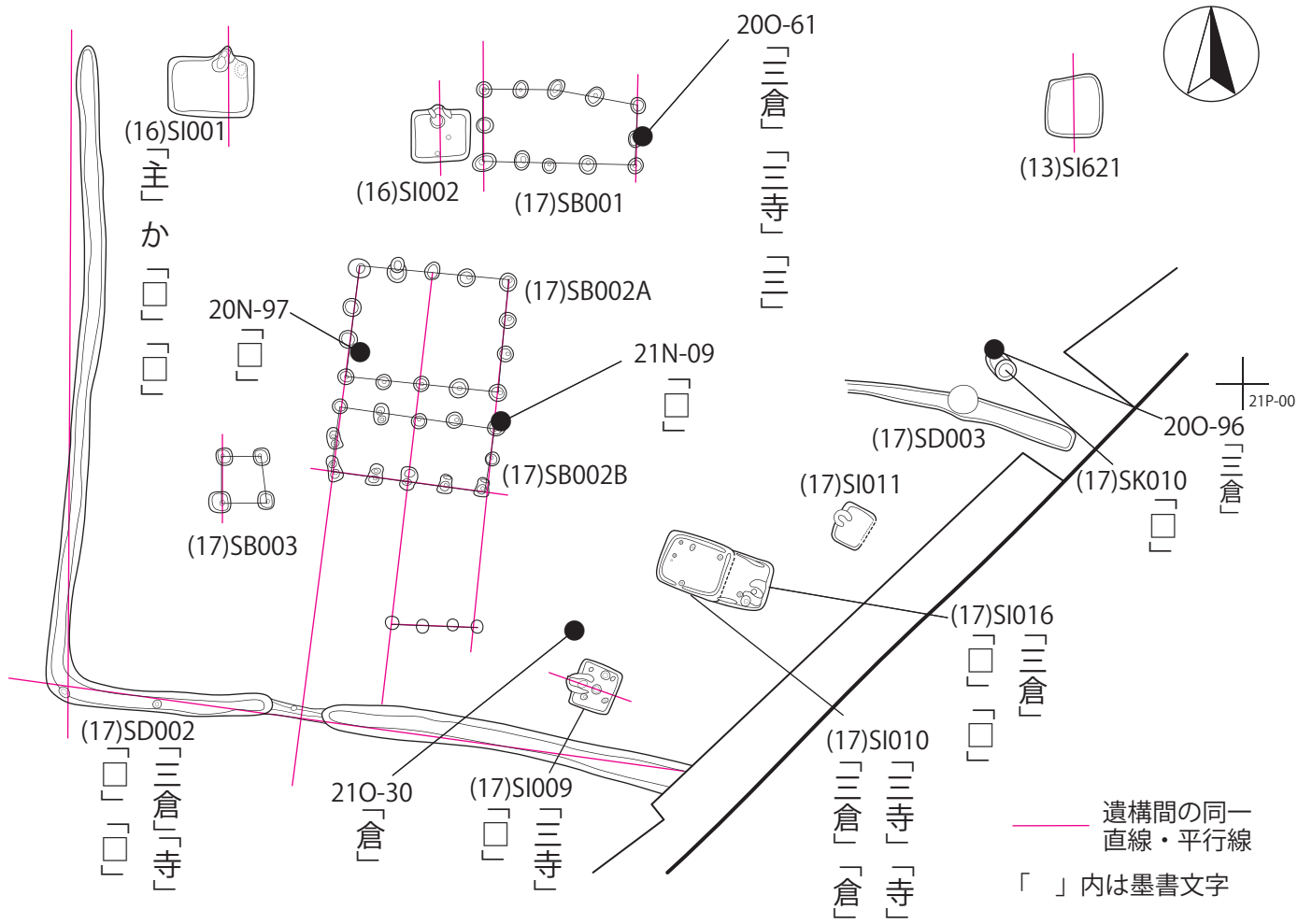
第2建物群を構成する遺構は、掘立柱建物跡4棟、竪穴建物跡7棟または6棟、区画溝1条及び門関係の施設である。

掘立柱建物跡は(17) SB001・SB002A・SB002B・SB003で、いずれも側柱建物である。規格をみると、SB001・SB002Bは4間×2間、SB002Aは4間×3間、SB003は1間×1間である。

SB002AとSB002Bはその位置関係から双堂建物といえるものである。両者は梁行の柱筋をそろえて至近に位置する。規模の大きなSB002Aが正堂、その前面に位置するやや細長いSB002Bが礼堂である。正堂・礼堂間の距離は1.6m~2.0mで、この中間部分は造り合いと呼ばれる部分である。SB002Aの内部は柱穴が検出されなかったが、縄文時代の竪穴住居と重複していることと耕作機械の攪乱によりやや不明瞭である。しかし側柱の柱穴と同等規模のものは確実になく、やや不安があるが廂をもたない建物とみておきたい。礼堂の南側を正面入口とすると、正面の幅(礼堂の桁行側)は8.9m、双堂建物全体の奥行きは11.9mである。面積は正堂が58.2㎡、礼堂が33.6㎡、造り合いが16.9㎡で、総面積は108.7㎡である。正面から奥行きに向かう方位は北からわずかに東に振れている。礼堂は柱穴が重複しており、柱痕跡を2か所もつ柱穴もかなりあることから、建て替えられたとみられる。正堂のほりかたも一部重複か柱の抜き取りかと思われるところがあるが、建て替えられているか判然としない。正堂のほりかたは方形を呈するものが多い。

SB001はSB002Aの北やや東に位置する。面積は35.3㎡である。双堂建物がやや振れているのに対して、正方位の建物である。東妻側が西妻側に比べて短く、柱穴の配置が長方形にならない。僧坊と思われる建物である。

SB003は礼堂の西やや南に位置する。面積は6.5㎡である。これも正方位の建物である。法具などを納めた倉や瓦塔を納めた建物などさまざまな可能性が考えられる⁵⁾。なお瓦塔は1点も出土していないが、木製塔の存在も考えられる。



第272図 第2建物群—村落寺院全体図—

周囲に存在する竪穴建物跡は、(13) SI621・(16) SI001・(16) SI002・(17) SI009・(17) SI010・(17) SI016・(17) SI011である。このうち(17) SI010・(17) SI016は双方の形態とSI010にカマドがみられないことから、同一の竪穴建物跡か、または拡張された可能性が考えられる。当初から同一の建物とすると、7棟ではなく、6棟ということになる。これらの竪穴建物跡群はすべて後述する区画溝から仏堂側に存在する。それに対して建物群の北方は遺構の空白域が広がっている。遺構の痕跡を残さない土地利用がされたかもしれないが、竪穴建物は構築されなかった可能性が高い。竪穴建物跡群のなかではSI621がやや仏堂群から離れているが、ほかの竪穴建物跡との位置関係からSI621も含めてすべて仏堂関係の竪穴建物跡とみておく。

竪穴建物跡及び掘立柱建物跡から出土した遺物の歴年代は9世紀前葉から中葉と思われる。第2建物群の時期も同様とみられる。

個々の竪穴建物跡をみると、形態が長方形のものや、規模の小さなものが目立つ。(16) SI001・(17) SI011は横長の長方形であり、(16) SI002もやや横長である。また(17) SI010・(17) SI016が一体の遺構であれば縦長長方形であるが、別々の遺構の場合、(17) SI010は横長長方形の可能性もある。

規模の小さなものとしてはまず(17) SI009・(17) SI011があり、壁上端の面積をみると、前者は4.5㎡、後者は6.8㎡である。また(16) SI002は9.7㎡、(13) SI621は10.4㎡であり、小規模な方であろう。面積はカマド部分も含んだ数値であるので、実際の居住空間はさらに狭い。SI011は成人一人が伸展になれる限界の広さであろう。もちろん先述したとおり、家屋は竪穴の外側を含む場合があり、竪穴部分の面積だけをみるのは危険である。しかし(17) SI009をみると南方の区画溝に近い位置であり、家屋の空間が竪穴外にあったとしてもあまり広いものとは思えない。

竪穴建物跡については、僧尼や寺院運営に従事した農民の厨や住まいなどの用途が考えられる。特に小規模なものについては、僧侶など単独者の建物の可能性を考える。

「L」字形の溝状遺構(17) SD002が建物群の南方及び西方に存在する。建物群との位置関係及び溝状遺構の南方及び西方に建物がみられないことから、仏堂関係の建物群を区画する溝といえる。区画溝西側部分はほぼ南北に走行しており、正方位の掘立柱建物跡SB001・SB003と平行関係にある。また区画溝南側部分は東に向かうが、やや南に逸れていく。この走行方向は双堂建物の向きとほぼ平行関係にある。

区画溝は南東の調査区外に続くが、北側は竪穴建物跡(16) SI001近くまでであり、その北方は確認できなかった。そのため区画された建物側の範囲はやや不明瞭であるが、東西60m、南北40m程とみられる。

南溝のうち双堂西梁行の延長上の部分は浅くなっており、出入り口部と考えられる。底面は周囲の確認面よりも5cm前後低いだけであり、実際に掘り込まれていたかやや疑問がある。この部分の幅は3mである。確認面からの深さ15cmのピットが検出されたが、他にはみられない。しかし簡素な造りの門であれば存在した可能性も考えられる。たとえば溝を掘削した土を積み上げた土塁があり、そこに柱が立てられたとすれば、あまり地中深く打ち込む必要はなかったかもしれない。この部分に確実な門遺構はみられないが、広義の意味で「南門」としたい。

ここから内側の北東に3間4本柱の柱穴列があり、目隠し塀とみられる。この柱穴列は航空写真により判明したものである。耕作機械による攪乱が著しいため、調査時には確認できなかった遺構である。柱穴列の長さは4.9m、柱間隔は1.5m～1.7mである。一直線状であり、南溝及び双堂建物桁行と平行する。東端の柱穴は双堂建物東梁行の延長上にあり、西端の柱穴は双堂建物の中軸線上に位置する。双堂建物の

2間分を3間に分割した柱列である。また南溝からの距離は、礼堂と造り合いを合わせた梁行側の数値に近い。この目隠し堀の存在と、「南門」との関係から双堂建物の入口は礼堂正面の西側と思われる。1間×1間の(17)SB003は双堂建物の西やや前側にあり、「南門」との位置関係からも倉庫より塔がふさわしいと思われる。

第2建物群内から出土した墨書土器をみると、「三寺」・「三倉」が目立つ。仏堂の名称の一つとして「三寺」と呼ばれたことがわかる。「三倉」は飯積原山遺跡全域で出土する文字であるが、「三倉」そのものは第1建物群を指すとみられるので、両者の強い関係性がうかがえる。第2建物群は「三倉」の「寺」であろう。また(16)SI001からは「主」と思われる墨書が出土しているため、第3建物群グループとの関連もみられる。

飯積原山遺跡の第2建物群は、遺構の重複が少なく、竪穴建物跡も一般的なものと区別できることから、地方村落における9世紀代の仏堂と、仏堂をとりまく景観を復元できる良好な事例である。双堂建物・僧坊・塔安置の建物または倉・南門施設・区画溝は同存在の遺構群であろう。礼堂に建て替えがみられるので、その期間もやや長期であった可能性がある。竪穴建物跡群はすべてが同時存在かわからないが、そうでない場合でも継起的に存在したとみられる。

第2建物群のかなり北方、遺跡全体では中央部に位置する(12)SI013から「栄信」の墨書土器が出土した。この墨書を僧侶名とすると、二通りの解釈が考えられる。一つ目は僧侶栄信がこの建物に住んでいたことである。この場合僧侶の住まいは仏堂施設域にとどまらなかったことになる。もう一つは一般農民が墨書土器を所持していた場合であり、この場合は功德を説く僧侶栄信の名前が吉祥句扱いされた状況を示している。いずれにしても8世紀末から9世紀前葉くらいの時期に栄信という僧侶が飯積原山の村に止宿しており、双堂建物等の仏堂施設で法会を開いていたことも十分に考えられる。

(4) 第3建物群 (第273図、第55表)

中央に位置する掘立柱建物跡と周辺の竪穴建物跡群を第3建物群とした。掘立柱建物跡は、(12)SB016～SB023・SB067・SB072の10棟である。なおSB067は建て替えられていると思われ、2棟分とみると、11棟であるが、以下は建て替え前後で1棟とみなして記述する。これらの周辺に竪穴建物跡(12)SI001～SI004・(13)SI631が位置する。しかしSI631に近い南方には(13)SI630があり、やや離れているが西方・北方にも竪穴建物跡群がみられる。したがって掘立柱建物跡とセットになる竪穴建物跡について、その総数を確定することが難しく、その範囲も不安定である。また(12)SD057が第3建物群のまとまりとしたなかにあるが、この溝状遺構は第1建物群を区画する(10)SD430から続く遺構とみられる。この区画溝から続く(12)SD057は(12)SB072と重複しているが、時期が異なるためと思われる。

周囲の竪穴建物跡から出土した遺物の時期をみると、9世紀前葉から中葉であり、掘立柱建物跡もこの間に造営されたとみられる。

建物の方位から、建物群については以下の四者に区分する。

- A 北からやや東に振れるもの… (12)SB017・SB021・SB022・SB067・SB072、(12)SI002・SI003・SI004・(13)SI631
- B Aよりさらに東に振れるもの… (12)SB018・SB019
- C ほぼ正方位のもの… (12)SB016・SB020・SB023
- D 大きく西に振れるもの… (12)SI001

以上のうち、Dは(12)SI001の竪穴建物跡1棟だけであり、建物方位を重視する前提でみた場合、掘立柱建物跡とはセットにならない可能性が考えられる。A・Bについては、東に振れる点で共通し、その差も少ないが、(12)SB017とSB018が重複していることから二者に区分した。

Aが最も多く、掘立柱建物跡5棟、竪穴建物跡4棟である。このうち(12)SB017・SB021・(12)SI004の東辺はほぼ一直線状であり、建物の間隔からも同時に存在した可能性が高いとみられる。またSB021と(12)SB022は近い位置関係であるが、SB021の北辺とSB022の梁行側中軸線及び(12)SI002の東西中軸線が同一線上にあることから、これら三者も同時存在か、計画的な配置状況がうかがえる。さらに(12)SI002の主軸線は(12)SB067の東辺とほぼ同一一直線上にある。以上のことから、A型建物の多くが、同時存在である可能性が考えられる。A型が第3建物群の中核をなす建物群であり、B・C型はA型の建て替え前後のものと思われる。なお(12)SI003はC型の(12)SB016の方位にも若干近い。しかし(12)SI003の主軸線と(12)SB072の西梁行延長線が同一一直線上にあることから、(12)SI003についてはA型とした。

遺構の重複関係をみると、A型の(12)SB017とB型のSB018、A型の(12)SB021とC型のSB020、A型の(12)SB022とC型のSB023、A型の(12)SI002とC型の(12)SB016、D型の(12)SI001とC型の(12)SB016があげられる。このうち調査時に新旧関係が分かったのは、SB017・SB018とSB020・SB021の2者で、SB017・SB021が古く、SB018・SB020が新しいと把握されている。すなわちA型が古く、B・C型はA型よりも新しいということになる。しかし掘立柱建物跡群のやや北方に位置する(12)SI013はC型の方位であるが、出土遺物の歴年代は9世紀前葉と思われる。このことからC型方位はA型方位より古い可能性も考えられ、A・C型の新旧関係については保留したい。SB020とSB021は大きく重複しており、SB021からSB020への建て替えが考えられる。

第55表 第3建物群の建物規模

No.	遺構番号	桁行数	梁行数	面積(m ²)	方位型	備考
1	(12)SB017	2	2	16.0	A	総柱建物
2	(12)SB018	2	2	14.9	B	
3	(12)SB019	2	2	14.3	B	
4	(12)SB020	2	2	15.4	C	
5	(12)SB021	2	2	17.2	A	
6	(12)SB023	3	2	23.0	C	
7	(12)SB067	3	2	20.8	A	推定値
8	(12)SB067	3	2	17.6	A	推定値
9	(12)SB072	3	2	20.0	A	
10	(12)SB016	4	2	22.0	C	
11	(12)SB022	4	3	41.4	A	束柱あり
12	(12)SI001			14.6		竪穴建物
13	(12)SI002			25.6		竪穴建物
14	(12)SI003			7.7		竪穴建物
15	(12)SI004			24.6		竪穴建物
16	(13)SI631			10.6		竪穴建物
2×2間建物面積平均値				15.6		

A型のなかでも(13) SI631出土遺物の歴年代は9世紀前葉と思われる。ほかの3棟はそれよりもやや新しい9世紀中葉とみられ、A型建物の歴年代の中心を示すものであろう。

A型掘立柱建物跡の規格・構造をみると、2間×2間が2棟で、1棟は総柱建物、もう1棟は側柱建物である。3間×2間のものは2棟(1棟は推定)で側柱構造である。4間×3間は1棟である。梁行側中央に2か所の柱穴が検出され、間仕切りの柱穴と思われる。床束建物であり、床張りの建物であろう。これらが同時に存在した可能性がある最大限の棟数である。竪穴建物跡は4棟であるが、同時に存在した可能性があるのは、竪穴規模のやや大きなSI002・SI004、小さいSI003の3棟である。また多くの掘立柱建物跡とも共存したとみられる。もちろんこれらのすべてが同時に建設・廃棄されたのではなく、存続年代の一部が重なる可能性があるということである。

B型掘立柱建物跡の規格・構造をみると、2間×2間が2棟で、ともに側柱建物である。

C型掘立柱建物跡の規格・構造をみると、2間×2間が1棟、3間×2間が1棟、4間×2間が1棟で、すべて側柱建物である。

2間×2間のものは倉庫とみられる。のべ5棟と数がやや多いが、一時期の棟数は2棟程度であろう。平均面積は15.6㎡で、第1群2間×2間の建物と同等である。SB020は柱穴が小さく、比較的軽いものを納めた倉庫であろう。C型で3間×2間のSB023も柱穴が小さいことから、規模が小さいのは建築時期の違いによるのかもしれない。4間×3間で内部に柱穴をもつSB022は面積が41.4㎡であり、ほかの建物より際だって規模が大きい。面積は第1群の桁行4間の建物と比べても最上位クラスであり、第3群の中心的な建物である。

第3建物群の基本形は、A型建物群の様相から、2間×2間から4間×3間までバランスのとれた規格・構造の掘立柱建物跡が複数棟、大小の面積の竪穴建物跡が数棟とみられる。

溝状遺構(12) SD057が第3群内に位置することは先に述べたが、その南北の建物群は上記の様相からまとまった建物群とみられる。溝状遺構は第3群の北西方・北方にもみられ((11) SD1049)、その西側部分は第3群北方の竪穴建物跡(11) SI1009と重複している。しかし(11) SD1049から東方に延びる同一の溝は、第1建物群を区画するとみた溝(10) SD535の北方に延びる同一の溝とT字状に交差する。このことから(12) SD057及び(11) SD1049も古代の溝の可能性が考えられる。もしそれが正しい所見であるならば、いったん区画されたものの区画の西側は、集落の発展に伴い、比較的早い時点で区画がなくなったことが考えられる。

注1 本項では住居以外の機能も考慮したいので、竪穴住居に代えて竪穴建物跡と記述する。また単に建物と記述した場合、掘立柱建物跡と竪穴建物跡の双方を含む場合がある。

2 近年、各地で竪穴外周柱穴の存在が指摘されている。

桐生直彦 2005『竈をもつ竪穴建物跡の研究』六一書房

辻 史郎 2013「古代の竪穴建物跡づくりと集落」『技術と交流の考古学』(株)同成社

3 大橋泰夫 2013「地方官衙と方位」『技術と交流の考古学』同成社

4 註3前掲書

5 須田 勉氏は双堂建物の近くに位置する1間×1間の掘立柱建物跡について多くを倉としている。

須田 勉 2006「古代村落寺院とその信仰」『古代の信仰と社会』国土館大学考古学会

第3節 飯積原山遺跡出土の文字・記号 (第274～277図、第56～58表、図版71～75)

飯積原山遺跡からは多数の墨書土器が出土している。文字・記号のある土器の点数は図化したものだけでも222点を数える。小片のため図化できなかったものを含めるともう少し量が増える。代表的な文字は「三」、「三倉」、「三寺」、「主」、「六」、「佐山」、「福善」などであり、1点ずつではあるが「財」、「原」、「人」、「栄信」といった文字も確認できる。また、高崎川を挟んで本遺跡の対岸に位置する酒々井町尾上木見津遺跡、富里市駒詰遺跡から多数出土している「奈野」も1点出土している¹⁾。ヘラ書きは須恵器杯1点、須恵器甕2点、土師器杯1点の計4点出土している。須恵器杯は底部内面に「井」、須恵器甕は底部外面に「天」、「×」、土師器杯は底部外面に「×」とヘラ書きされている。線刻は1点のみで、土師器杯の底部内面に「×」が記されている。朱書きのものは4点出土しており、(9) SI201、(14) SI129の「六」、(17) SI010の「三寺」のほか、(11) SI1001の「直」がある。「直」と記された土器は1点のみで、土師器高台付皿の高台内に記されている。

墨書土器を器種別に見ると土師器杯が210点と圧倒的に多く、須恵器杯、土師器皿、土師器高台付皿がそれぞれ3点、土師器高台付杯、土師器碗、土師器高台付碗が1点ずつとなる(第56表)。最も多く、かつ遺跡全体から出土している文字は「三倉」である。一部のみの遺存で「三倉」と推測される破片を含め

第56表 墨書土器 器種別部位一覧

	須恵器		土師器					計
	杯	杯	高台付杯	碗	高台付碗	皿	高台付皿	
体部外面		35	1			1	1	38
体部外面 正位	2	25						27
体部外面 横位	1	93		2		2	2	100
体部外面 倒位		3						3
体部内面		6						6
底部内面		9						9
底部外面		39			1		3	43
計	3	210	1	2	1	3	6	226

*朱墨4点含む

第57表 主な文字と記載部位

	底部		体部						計
	内面	外面	内面	外面	外面正位	外面横位左	外面横位右	外面倒位	
三倉		3			5	33	21	1	63
倉		1			1	8	2		12
三		9				2	2		13
三寺						6	1		7
寺						3	2		5
主		2				3	4		9
六					3				3
計		15			9	55	32	1	112

ると、63点にのぼる。墨書の記されている部位は底部外面が3点、体部外面が60点、このうち正位が5点、倒位が1点で、大半が横位に記されている。口縁部を上にして見た場合、文字の書き出しが右に来るもの（右向き）が21点、左に来るもの（左向き）が33点と左向きのものがやや多い。また、「倉」の一部と思われる破片が12点あるが、「倉」一文字で完結する破片は見られず、本来は「三倉」の一部であったと考えられる。底部外面に記されたものは1点のみで、他はすべて体部外面である。正位1点、横位10点で、破片のため判然としないが横位の内左向きが8点、右向きが2点と推測される。一方、「三」と記された土器は13点あり、そのうち底部外面が9点となる。他は体部外面横位だが、「三倉」あるいは「三寺」の一部と推測され、「三」一文字が記された土器は底部外面に限定される可能性がある（第57表）。出土地点は台地東側、第1建物群及びその近辺に集中する。

特徴的な出土傾向のある墨書としては「三寺」が上げられる。7点中6点が(17)SD002によって区画された第2建物群から出土している。その中には朱書きのもの1点を含む。全て体部外面横位に記され、(12)SI002から出土した1点のみ右向き、第2建物群から出土した6点は左向きである。また、第2建物群からは「三寺」の一部と考えられる「寺」も5点出土している。「三寺」と同じく全て体部外面横位に記されている。

「三」「三倉」以外の多様な文字は台地中央及び台地西側に分布する。「主」は第3建物群とそれより西側の遺構から15点出土している。底部外面に記されているもの2点、体部外面横位7点である。

3点出土している「六」は全て体部外面正位に記され、そのうち2点は朱書きである。「六」と墨書される例は佐倉市内田端山越遺跡や四街道市南作遺跡など鹿島川水系の遺跡に共通して見られるようで、内田端山越遺跡からは須恵器に「六」（一画目の点無し）と朱書きしたものが出土している²⁾。内田端山越遺跡は須恵器の窯が所在することから、何らかの関連性が想起され興味深い。

「十」は3点あり、土師器杯体部外面正位に記されているが、1点は倒位もしくは別の文字の可能性もある。「万呂」の略字もしくは崩し字と思われるものは第3建物群西側の(11)SI1009から3点出土している。土師器杯2点、土師器高台付皿1点の計3点あり、いずれも体部外面正位に記されている。「佐山」と記された土器は2点あり、どちらも体部外面横位左向きである。そのうち1点は「三倉」と同一の土師器腕に1/4周程の間隔を空けて記されている。

「福善」「善」は台地西寄りの隣接する2軒の竪穴住居跡から出土している。土師器高台付皿の底部外面に「善」と記されたものが2点あり、1点は体部外面に「福」が「善」の右にくるよう配されている。もう1点は底部のみの遺存のため、体部に墨書があったかどうか不明である。「福善」と判読できるものは土師器杯にも2点あり、体部外面横位左向きに記されている。

1点のみ出土した「奈野」は土師器杯の底部外面に記され、台地中央の(13)SI1628から「天」「三」と共に出土している。(11)SI1001の9は「弘」の異体字で、東金市久我台遺跡、作畑遺跡に出土例がみられ、「偏の“弓”は“方”で、傍の“ム”は“ロ”で表す異体字」と記載されている³⁾。ほかに人名と推測される「栄信」は第3建物群北側(12)SI013から、「人」と共に出土している。土師器杯の体部外面に細筆で正位に記されている。「栄信」は山武郡成東町八幡神社南(1)遺跡(現山武市)からも出土しており、僧侶の名前であろうと推察されている⁴⁾。八幡神社南(1)遺跡出土品は墨痕が比較的鮮明で字体が異なることから別人の手になるものと思われる(今泉潔氏のご教示による)。

長文の墨書は破片であることとやや崩し気味に書かれていることから判読が難しい。おおむね土師器杯



第274図 文字・記号資料の分布図

の内面に見られる例が多い。(16) SD001の4は「□宅万呂代□」、(20) SD661の7は「變□(摩カ)加」、(9) SI199の6は「□□良女□□」であろう。

多数出土した墨書だが、地区ごとに出土する文字の傾向が窺える。掘立柱建物群が集中する3地点のうち、台地東側の第1建物群は最も掘立柱建物跡が多いが、出土する文字は「三」「三倉」に限られるようである。第1建物群の東側中央に位置する(10)SI412からは「三倉」あるいは「三倉」と推測される墨書が多数出土している。南の第2建物群は「三倉」に加え「三寺」「寺」などがみられる。

台地中央に位置する第3建物群は「三倉」に加え「主」が多い。「主」は比較的中央寄りの遺構に多く、第3建物群の西側に位置する(12)SI002からは「三倉」「三寺」「主」が揃って出土している。また、第3建物群を区画する西側の溝上には「万呂」「下」などの墨書を出土した(11)SI1009が所在する。

集中した建物群がみられない台地北側は、「六」や「奈」に近い文字と共に人面へう描き土製支脚を出土した(11)SI1006、朱書きの「直」を有する高台付皿を出土した(11)SI1001、「□□良女□□」の墨書を出土した(9)SI199など、他の地区とは異なった様相をみせている。

更に、西から入り込む谷の南側付近は「福善」「子山」「佐山」「十」「原」など、他地区の遺構からは出土していない文字がある。カマド煙道部から須恵器・土師器の杯6点が重なって出土した(19)SI679もこの地区である。杯は底部を奥に向けた横向きの状態で床面から20cm程浮いていた。墨書のある土師器杯4点の上に墨書のない土師器杯、一番上に須恵器杯が重なっており、何らかの祭祀が行われた可能性が考えられる。墨書は「三倉」3点と「子山」1点で、「三倉」は3点とも体部外面横位左向き、「子山」は体部外面正位であった。一番下となる杯の法量が若干大きいものの、ほかの3点は口径11.4cm～11.9cm、底径7.0cm～7.4cm、器高3.3cm～3.9cmと器形・胎土共によく似ている。

遺跡全体にみられる「三倉」や「三寺」は何を指すのか。「三」一文字を記す墨書があることから「三」がこの地域の地名、或いは地名の一部を表すことは問題ないと思われる。「三」の倉、「三」の寺を「三倉」「三寺」、あるいは「三倉寺」を省略して「三寺」と表記したのであろう。古代の印幡郡において、『和名類聚抄』に記載されている「三」のつく郷名は三宅郷のみである。三宅郷は亀成川下流域を想定する説が有力と思われ⁵⁾、飯積原山遺跡とは距離がある。「三」については今後更なる検討が必要であろう。

注1 阿部寿彦 2010「尾上木見津遺跡(第2地点)・駒詰遺跡(第2地点)－「奈野って何なの?」『第14回遺跡発表会発表要旨』(財)印旛都市文化財センター

2 松田富美子ほか 2008『内田端山越遺跡 ちばりサーチパーク開発事業予定地内埋蔵文化財調査(7)』(財)印旛都市文化財センター

3 萩原恭一 1988「出土文字資料について」『東金市久我台遺跡－房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－』(財)千葉県文化財センター

4 今泉 潔 2006「山武郡成東町八幡神社南(1)遺跡」『両総農業利水事業第3揚水機場建設工事埋蔵文化財調査報告1』(財)千葉県教育振興財団

5 天野 努 1986「下総国印幡郡村神郷とその故地」『研究紀要10』(財)千葉県文化財センター

糸原 清 1997「房総における古代寺院の成立過程－印旛郡・埴生郡を例として－」『研究紀要18』(財)千葉県文化財センター



第275図 文字・記号資料集成①



第276図 文字・記号資料集成②

第58表 出土文字一覧-1

坪区番号	調査年度	遺構番号	器種・器形	部位	方向	文字	備考	
108	12	H12	(9)S1198	土師器 杯	体外	横位	三倉	
108	13	H12	(9)S1198	土師器 杯	体外	横位	匚倉	
108	14	III2	(9)S1198	土師器 杯	体外	正位	十	
110	6	III2	(9)S1199	土師器 杯	口縁～底内		良女口口	
110	7	III2	(9)S1199	土師器 杯	口縁内	正位	右か	
110	8	H12	(9)S1199	土師器 杯	口縁内	倒位か		
110	9	H12	(9)S1199	土師器 杯	体内	正位か		
110	10	H12	(9)S1199	土師器 杯	体内			
110	11	H12	(9)S1199	土師器 杯	底内			
111	2	H12	(9)S1200	土師器 杯	体外	横位	匚倉	
112	11	H12	(9)S1201	土師器 杯	口縁外	横位か		
112	12	H12	(9)S1201	土師器 杯	口縁外	横位	三匚 (倉か)	
112	13	III2	(9)S1201	土師器 杯	体外	横位	三倉	
112	14	H12	(9)S1201	土師器 杯	体外	正位	六	未出
115	4	H12	(9)S1203	土師器 杯	体外	横位	三倉	
115	7	III2	(9)S1203	土師器 杯	体外	横位	匚倉	
116	11	H12	(9)S1204	土師器 杯	体外	横位	三倉	
116	12	H12	(9)S1204	土師器 杯	口縁外	正位か	○	
116	14	H12	(9)S1204	土師器 杯	体外	横位	匚倉	
119	6	H12	(10)S1358	土師器 杯	底外		倉か	
119	7	H12	(10)S1358	土師器 杯	底外		三	内外面油煙
119	8	III2	(10)S1358	土師器 杯	底外		三	
121	4	H12	(10)S1396	土師器 杯	口縁外	正位	三匚	
121	5	H12	(10)S1396	土師器 杯	体外	横位	三倉	
123	12	H12	(10)S1412	土師器 杯	口縁外	横位	三匚	
123	13	III2	(10)S1412	土師器 杯	体外	正位	三倉	
123	14	III2	(10)S1412	土師器 杯	体外	横位	三倉か	
123	15	H12	(10)S1412	土師器 杯	体外	正位	三倉	
123	16	H12	(10)S1412	土師器 杯	口縁外	横位	倉	
123	17	H12	(10)S1412	土師器 杯	体外	横位	倉か	底内墨痕
123	18	III2	(10)S1412	土師器 杯	口縁外	横位	三倉か	
123	19	H12	(10)S1412	土師器 杯	体外	横位	三倉か	
123	25	H12	(10)S1412	土師器 杯	口縁外	横位	三倉か	
123	26	H12	(10)S1412	土師器 杯	口縁外	横位	倉か	
123	27	H12	(10)S1412	土師器 杯	口縁外	横位		
123	28	III2	(10)S1412	土師器 杯	体外	横位	三倉か	
123	29	H12	(10)S1412	土師器 杯	体外	横位	三匚	
123	30	H12	(10)S1412	土師器 杯	体外	横位	三匚	
123	31	H12	(10)S1412	土師器 杯	体外	横位	倉	
123	32	H12	(10)S1412	土師器 杯	口縁外	横位	三倉か	
123	33	III2	(10)S1412	土師器 杯	口縁外	横位	倉か	
123	34	III2	(10)S1412	土師器 杯	口縁外	横位	三倉か	
123	35	H12	(10)S1412	土師器 杯	口縁外	横位	匚倉	
123	36	III2	(10)S1412	土師器 杯	口縁外	横位		
123	37	H12	(10)S1412	土師器 杯	口縁外	横位	倉か	
123	38	H12	(10)S1412	土師器 杯	口縁外	正位	三倉	
127	5	H12	(10)S1536	土師器 杯	底外		三倉か	
195	1	III2	(10)SB413	土師器 杯	体外	横位	三か	
195	2	H12	(10)SB413	土師器 杯	体外			
198	2	H12	(10)SB421	土師器 杯	体外	横位	三か	
203	4	H12	(10)SB441	土師器 杯	体外	横位	倉か	
204	1	III2	(10)SB445	土師器 杯	体外			
205	3	III2	(10)SB446	土師器 杯	底外		三倉	
207	1	H12	(10)SB503	土師器 杯	口縁外	横位	倉か	
212	1	H12	(10)SB516	土師器 杯	底外		三	
213	1	H12	(10)SB517	土師器 杯	体外	横位	倉か	

第58表 出土文字一覧-2

神岡番号	調査年度	遺構番号	器種・器形	部位	方向	文字	備考
213	2	H12	(10)SB517	土師器 杯	体外		
213	3	H12	(10)SB517	土師器 杯	体外	正位	倉か
213	4	H12	(10)SB517	土師器 杯	体外	横位	倉か
213	5	H12	(10)SB517	土師器 杯	体外		
259	1	III2	(10)SD535	土師器 杯	体外	横位	三倉か
259	4	III2	(10)SD535	土師器 杯	体外		
130	5	III3	(11)SI1001	土師器 杯	底外		
130	6	H13	(11)SI1001	土師器 杯	底外		主か
130	7	H13	(11)SI1001	土師器 杯	体外	横位	倉か
130	8	H13	(11)SI1001	土師器 杯	体外	横位	
130	9	H13	(11)SI1001	土師器 杯	底外		弘口
130	10	H13	(11)SI1001	土師器 杯	体外	横位	三口
130	11	H13	(11)SI1001	土師器 杯	底外		継か
130	12	III3	(11)SI1001	土師器 杯	体外	横位	倉
130	13	III3	(11)SI1001	土師器 高台付皿	底外		直
132	3	H13	(11)SI1003	土師器 杯	体外	横位	三倉
137	2	H13	(11)SI1006	土師器 杯	体外	正位	六
137	3	H13	(11)SI1006	土師器 杯	体外	正位	索もしくは倉か
137	4	H13	(11)SI1006	土師器 杯	体外		
139	5	III3	(11)SI1008	土師器 皿	体外	横位	庄か
139	6	III3	(11)SI1008	土師器 杯	体外		
141	2	H13	(11)SI1009	土師器 杯	体外	正位	万呂
141	3	H13	(11)SI1009	土師器 杯	体外	正位	万呂
141	6	H13	(11)SI1009	土師器 杯	体外	正位	
141	7	III3	(11)SI1009	土師器 杯	体外	正位	下
141	10	H13	(11)SI1009	土師器 杯	体外	倒位か	(記号)
141	11	H13	(11)SI1009	土師器 杯	体外	正位	下
141	12	H13	(11)SI1009	土師器 杯	体外		
141	14	H13	(11)SI1009	土師器 高台付皿	体外	正位	万呂
141	16	H13	(11)SI1009	土師器 高台付皿	体外	横位	三口
230	3	H13	(11)SK1053	土師器 杯	体外	倒位	三倉か
145	1	H1905	(12)SI001	土師器 杯	体外	正位	日
146	2	H1905	(12)SI002	土師器 杯	底外		主か
146	3	H1905	(12)SI002	土師器 杯	底外		継か
146	4	H1905	(12)SI002	土師器 杯	体外	横位	主
146	5	H1905	(12)SI002	土師器 杯	体外	横位	三倉
146	6	H1905	(12)SI002	土師器 杯	体外	横位	主
146	7	H1905	(12)SI002	土師器 杯	体外	横位	三寺
146	8	H1905	(12)SI002	土師器 杯	体外	横位	主か
146	9	H1905	(12)SI002	土師器 杯	口縁外		
146	10	H1905	(12)SI002	土師器 杯	体外		主か
146	11	H1905	(12)SI002	土師器 杯	体外		
146	12	H1905	(12)SI002	土師器 杯	体外		
146	13	H1905	(12)SI002	土師器 杯	体外		
151	4	H1905	(12)SI004	土師器 杯	体外	横位	主
151	5	H1905	(12)SI004	土師器 杯	底外		主
151	6	H1905	(12)SI004	土師器 杯	体外	横位	主
151	7	H1905	(12)SI004	土師器 杯	底外		
153	2	H1905	(12)SI006	土師器 杯	体外	倒位か	十か
153	11	H1905	(12)SI006	土師器 杯	口縁外	正位	日
155	2	H1905	(12)SI013	土師器 杯	口縁～体外	正位	糸信
155	3	H1905	(12)SI013	土師器 杯	底外		人
156	1	H1905	(12)SI045	土師器 杯	体外		
219	4	H1905	(12)SB021	土師器 杯	底外		
158	6	H12	(13)S1628	土師器 杯	底外		天
158	7	III2	(13)S1628	土師器 杯	底外		三

第58表 出土文字一覧-3

插图番号	調査年度	遺構番号	器種・器形	部位	方向	文字	備考
158	8	H12	(13)SI628	土師器 杯	底外		奈野
159	2	H12	(13)SI629	土師器 杯	体外		
161	3	H12	(13)SI631	土師器 杯	底外		三
161	4	H12	(13)SI631	土師器 杯	底外		三
161	7	H12	(13)SI631	土師器 杯	底外		三
162	1	H12	(13)SI632	土師器 杯	底内		十
162	2	H12	(13)SI632	土師器 杯	底外		
163	4	H12	(13)SI633	土師器 杯	体外		
164	8	H12	(13)SI636	土師器 杯	底外		
165	3	H12	(13)SI637	土師器 杯	体外		
166	1	H12	(13)SI638	土師器 杯	体外	横位	倉か
253	2	H12	(13)SD627	土師器 杯	体外	横位	三倉か
253	3	H12	(13)SD627	土師器 杯	体外	横位	三
253	6	H12	(13)SD627	土師器 杯	底内		里女
168	3	H12	(14)SI129	須恵器 杯	体外	正位	六
169	1	H2004	(15)SI004	土師器 杯	体外	正位	原
169	4	H2004	(15)SI004	土師器 杯	体外	横位	佐川か
169	5	H2004	(15)SI004	土師器 杯	体外		
169	8	H2004	(15)SI004	土師器 杯	体外	横位	倉か
169	9	H2004	(15)SI004	土師器 杯	体外		
169	10	H2004	(15)SI004	土師器 杯	底外		
171	1	H2004	(15)SI007	土師器 杯	底外		三
173	1	H2003	(16)SI001	土師器 杯	体外	横位	主か
173	2	H2003	(16)SI001	土師器 杯	体外		
173	3	H2003	(16)SI001	土師器 杯	体外		
249	1	H2003	(16)SD001	須恵器 杯	体外	横位	三
249	2	H2003	(16)SD001	土師器 杯	体外		
249	3	H2003	(16)SD001	土師器 杯	底外		
249	4	H2003	(16)SD001	土師器 杯	底内		口宅万呂代口
249	5	H2003	(16)SD001	須恵器 甕	底外		天
175	5	H2005	(17)SI009	土師器 杯	体外	横位	三口
175	7	H2005	(17)SI009	土師器 皿	口縁外		
176	3	H2005	(17)SI010	土師器 杯	体外	横位	三寺
176	4	H2005	(17)SI010	土師器 杯	体外	横位	三寺か
176	5	H2005	(17)SI010	土師器 杯	体外		
176	6	H2005	(17)SI010	土師器 杯	体外	横位	倉か
176	7	H2005	(17)SI010	土師器 杯	口縁外	横位	三倉か
176	8	H2005	(17)SI010	土師器 杯	口縁外	横位	寺
176	9	H2005	(17)SI010	土師器 杯	口縁外		
176	10	H2005	(17)SI010	土師器 杯	口縁外		
176	11	H2005	(17)SI010	土師器 杯	体外	横位	寺
176	12	H2005	(17)SI010	土師器 杯	体外	横位	三口
176	13	H2005	(17)SI010	土師器 杯	体外	横位	三寺か
176	14	H2005	(17)SI010	土師器 杯	体外	横位	寺か
176	16	H2005	(17)SI010	土師器 杯	体外		
176	20	H2005	(17)SI010	土師器 杯	体外	横位	
178	2	H2005	(17)SI016	土師器 杯	体外	横位	三倉か
178	3	H2005	(17)SI016	土師器 杯	口縁外		
178	4	H2005	(17)SI016	土師器 杯	体外	横位	三
178	5	H2005	(17)SI016	土師器 高台付杯	体外		
224	1	H2003	(17)SB001	土師器 杯	底外	横位	三寺
224	2	H2005	(17)SB001	土師器 杯	底外		三
230	1	H2005	(17)SK010	土師器 杯	体外		
253	3	H2005	(17)SD002	土師器 杯	体外	横位	三倉か
253	4	H2003	(17)SD002	土師器 杯	体外	横位	寺
253	8	H2005	(17)SD002	土師器 杯	体内・体外		

第58表 出土文字一覧-4

挿図番号	調査年度	遺構番号	器種・器形	部位	方向	文字	備考	
179	15	H13	(19)SI677	土師器 杯	体外	正位	十	
179	16	H13	(19)SI677	土師器 杯	体外	横位	三倉か	
179	17	H13	(19)SI677	土師器 杯	体外	横位	倉	
179	18	H13	(19)SI677	土師器 杯	体外	正位	口入	1文字目削られている
179	19	H13	(19)SI677	土師器 杯	底内		口	墨痕あり
179	20	H13	(19)SI677	土師器 高台付皿	底外・体外	横位	善福	
179	21	H13	(19)SI677	土師器 高台付皿	底外・体外	横位	山 口須口	
179	22	H13	(19)SI677	土師器 杯	体外	横位	山か	
179	23	H13	(19)SI677	土師器 杯	口縁外			
179	24	H13	(19)SI677	土師器 杯	底外			
179	25	H13	(19)SI677	土師器 杯	底内		酒	
181	11	H13	(19)SI678	土師器 杯	底外		○	
181	12	H13	(19)SI678	土師器 杯	体外			
182	4	H13	(19)SI679	土師器 杯	体外	横位	三倉	
182	5	H13	(19)SI679	土師器 杯	体外	正位	了山	
182	6	H13	(19)SI679	土師器 杯	体外	横位	三倉	
182	7	H13	(19)SI679	土師器 杯	体外	横位	三倉	
183	1	H13	(19)SI680	土師器 杯	体外	横位		
183	5	H13	(19)SI680	土師器 杯	底内		酒	
183	6	H13	(19)SI680	土師器 杯	体外	横位	福善	
183	9	H13	(19)SI680	土師器 杯	体外	横位	福善か	
183	10	H13	(19)SI680	土師器 杯	体外			
183	12	H13	(19)SI680	土師器 高台付椀	底外		善	
183	13	H13	(19)SI680	土師器 椀	体外	横位	三倉 佐山	
246	2	H13	(19)SD676	土師器 杯	体外	横位	三門	
246	4	H13	(19)SD676	土師器 杯	体外	横位		
185	6	H12	(20)SI662	土師器 高台付皿	体外			
230	2	H13	(20)SK674	須恵器 杯	底内		井	ヘラ書き
248	3	H13	(20)SD661	土師器 杯	体外	横位	三倉	
248	6	H13	(20)SD661	土師器 杯	底外		十	ヘラ書き
248	7	H13	(20)SD661	土師器 杯	底内・底外		底内人?底外「櫻麻加」	
251	4	H13	(20)SD665	土師器 杯	体外			
249	1	H13	(20)SD671	土師器 杯	体外	横位	三口	
189	4	H11	(33)SI092	土師器 杯	底外		財	「貝」の下 欠け
189	9	H11	(33)SI092	須恵器 甕	底外		十	ヘラ書き
231	1	H13	18F-20	須恵器 杯	口縁外	正位か	奈か	SK-947
231	2	H8	T62-SD-2	土師器 杯	体外	横位	三倉	
231	3	H2005	200-61	土師器 杯	底外		三口	
231	5	H12	(13)SK617 (20P-51)	土師器 杯	体外	横位	三倉	
231	6	H1905	170-86	土師器 杯	体外	横位	三倉	
231	7	H2003	20N-00	土師器 杯	底外			
231	8	H2005	21N-09	土師器 杯	底外			
231	9	H1905	170-21	土師器 杯	底外			
231	10	H8	T60-SI-1	土師器 杯	体外・底外		大 人など	習書か
231	12	H7	5T	土師器 杯	体外	横位	介	
231	13	H1905	18N-55	土師器 杯	口縁外	横位	主	
231	14	H12	(13)SK646 (20P-41)	土師器 杯	口縁～体外	正位	三口	
231	15	H2005	200-96	土師器 杯	体外	横位	倉か	
231	16	H1905	18N-55	土師器 杯	体外	横位		
231	17	H2005	200-96	土師器 杯	体外			
231	18	H2005	210-30	土師器 杯	体外	横位	倉か	
231	19	H2003	20N-00	土師器 杯	底外			
231	20	H2005	20N-97	土師器 杯	体外			

写 真 图 版



飯積原山遺跡



9地区 北から



11地区 北やや東から



12地区 西から



12 地区 南西から



17 地区 北から



26 地区 西から



第1文化層第1ブロック 北西から



第2 a文化層第2ブロック 北東から



第2b文化層第3ブロック 北西から



第2b文化層第3ブロック 南西から



第2 c文化層第4ブロック 北西から



第2 d文化層第5ブロック 南から



第3 b文化層第11・13ブロック 南から



第3 b文化層第12ブロック 北西から



第3 a文化層第6～10ブロック 北西から



第3 a文化層第6～10ブロック 南東から



第3文化層単独出土(121-96グリッド) 南西から



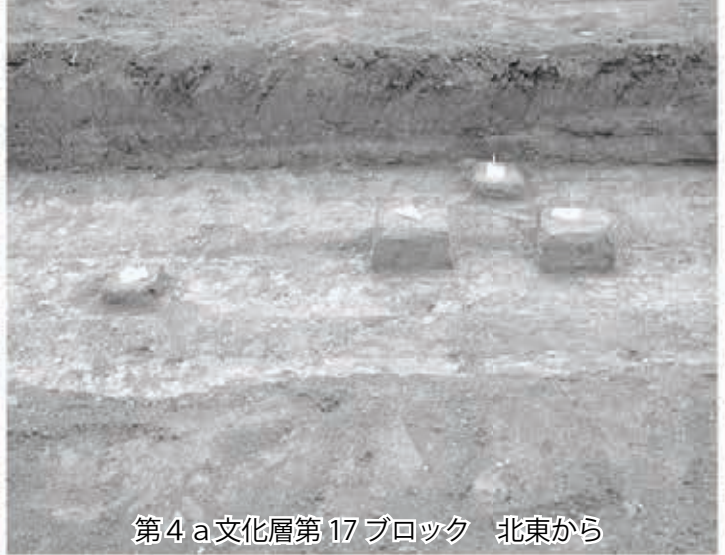
第3 c文化層第14ブロック(西側) 南西から



第3 c文化層第14ブロック(東側) 南西から



第4 a文化層第17ブロック 南東から



第4 a文化層第17ブロック 北東から



第4 b文化層第18ブロック 西から



第4文化層単独出土(19I-40グリッド) 北西から



第19ブロック

第20ブロック

第21ブロック

第5 a文化層第19～21ブロック 西から



第19ブロック

第20ブロック

第5 a文化層第19・20ブロック 西から



第5 a文化層第20ブロック 西から



第5 a文化層第21ブロック 西から



第5 a文化層第21ブロック 北西から



第5 b文化層第22ブロック 南東から



第5 b文化層第22ブロック 南東から



第5 b文化層第22ブロック 東から



第5 b文化層第22ブロック 南から



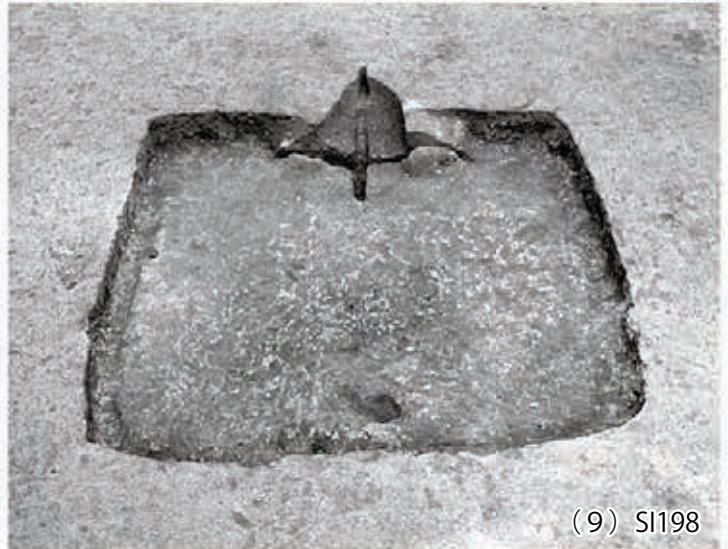
(9) S1157



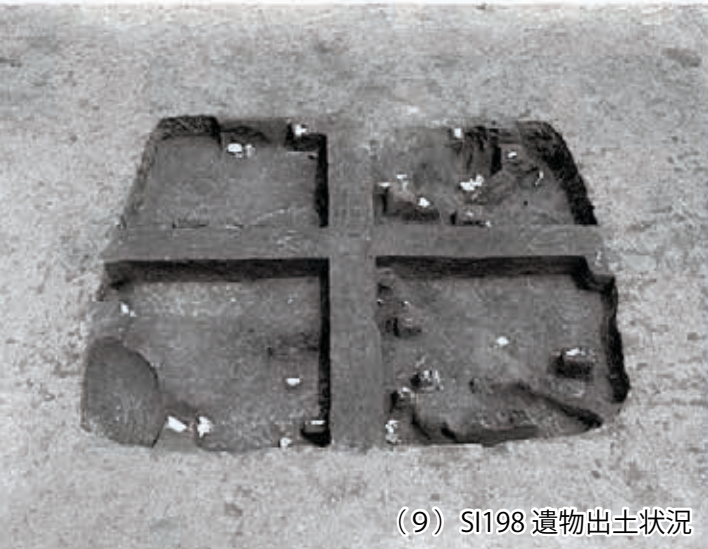
(9) S1157 西カマド



(9) S1157 北カマド



(9) S1198



(9) S1198 遺物出土状況



(9) S1199



(9) S1199 カマド



(9) S1200



(9) SI200 カマド



(9) SI200 カマド



(9) SI200 遺物出土状況



(9) SI201



(9) SI201 カマド



(9) SI201 遺物出土状況



(9) SI202



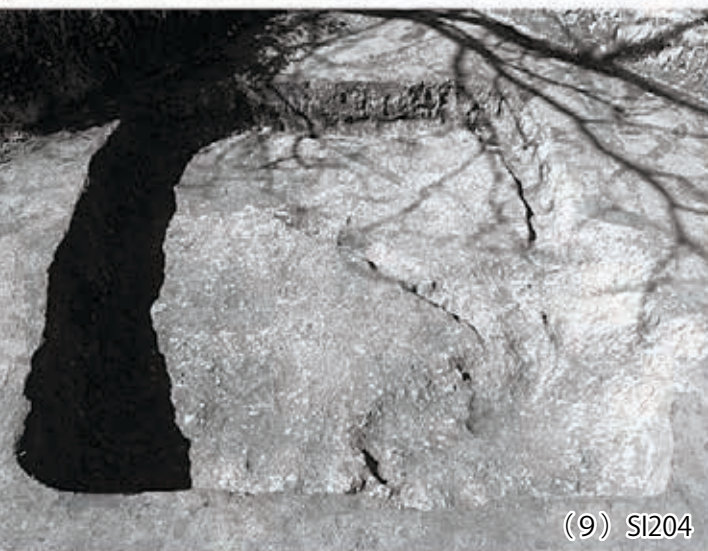
(9) SI202 カマド



(9) SI203



(9) SI203 カマド遺物出土状況



(9) SI204



(9) SI204 カマド



(9) SI204 遺物出土状況



(9) SI205



(9) SI205 カマド



(9) SI205 遺物出土状況



(10) S1358



(10) S1358 カマド



(10) S1396



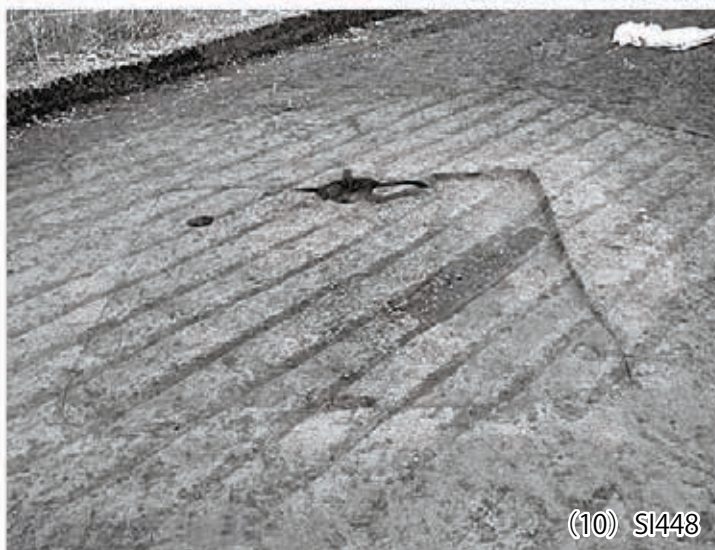
(10) S1396 カマド



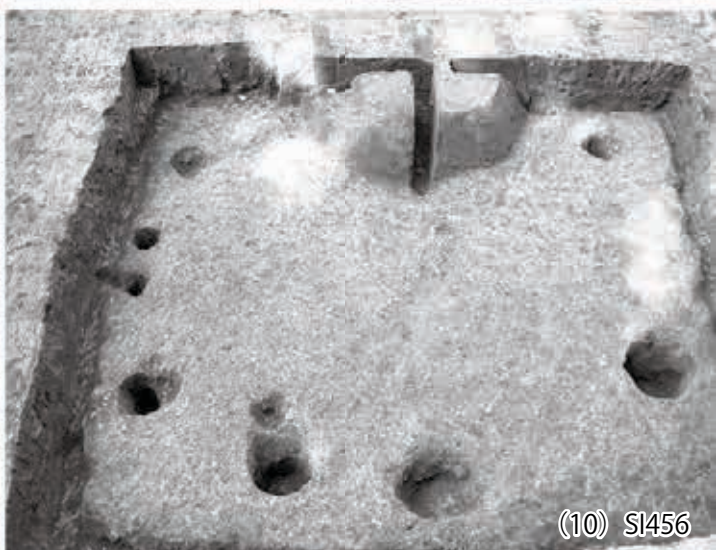
(10) S412



(10) S412 カマド



(10) S1448



(10) S1456



(10) SI456



(10) SI536



(10) SI536 カマド



(10) SI540B



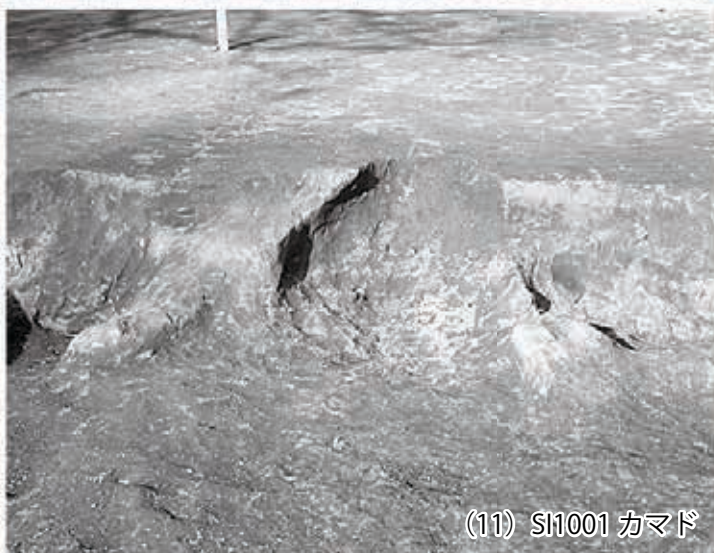
(10) SI540A



(10) SI540B カマド



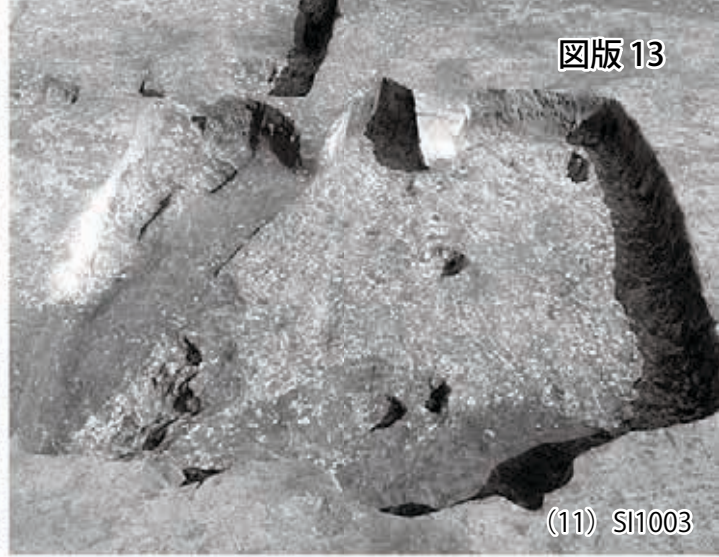
(11) SI1001



(11) SI1001 カマド



(11) SI1001 遺物出土状況



(11) SI1003



(11) SI1003 カマド



(11) SI1003 遺物出土状況



(11) SI1003 貯蔵穴 遺物出土状況



(11) SI1003・1004



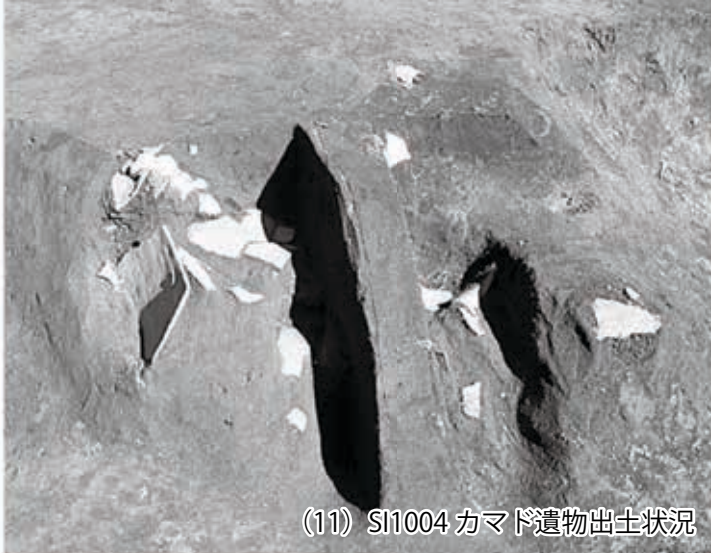
(11) SI1004



(11) SI1004 カマド



(11) SI1004 遺物出土状況



(11) SI1004 カマド遺物出土状況



(11) SI1005



(11) SI1005 カマド



(11) SI1005 遺物出土状況



(11) SI1005 カマド遺物出土状況



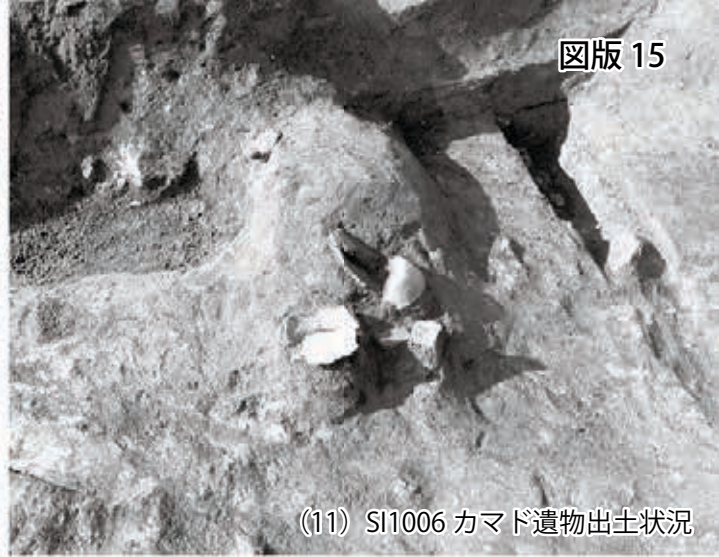
(11) SI1006



(11) SI1006 カマド



(11) SI1006 遺物出土状況



(11) SI1006 カマド遺物出土状況



(11) SI1006



(11) SI1007



(11) SI1007 カマド



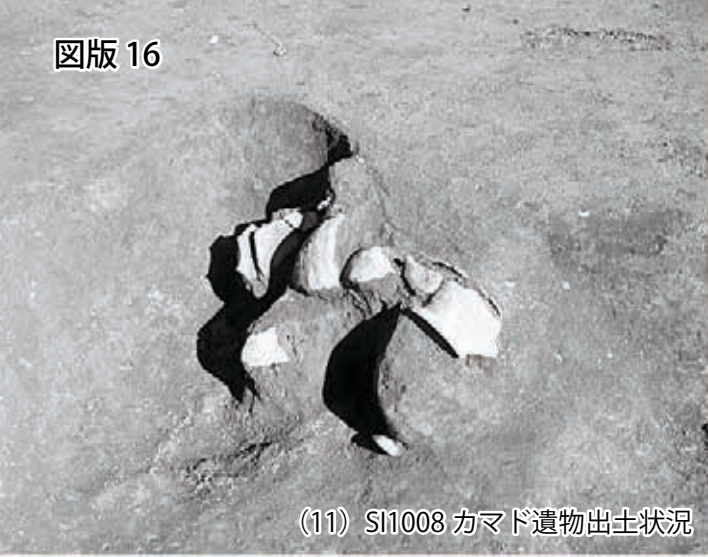
(11) SI1007 遺物出土状況



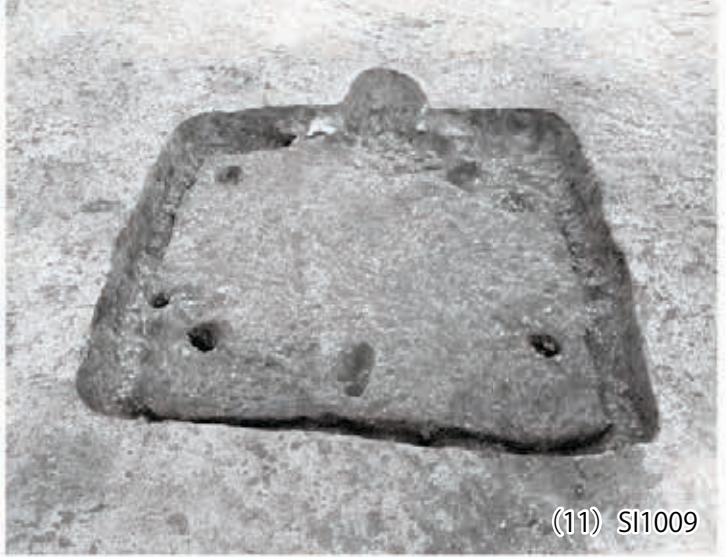
(11) SI1008



(11) SI1008 カマド



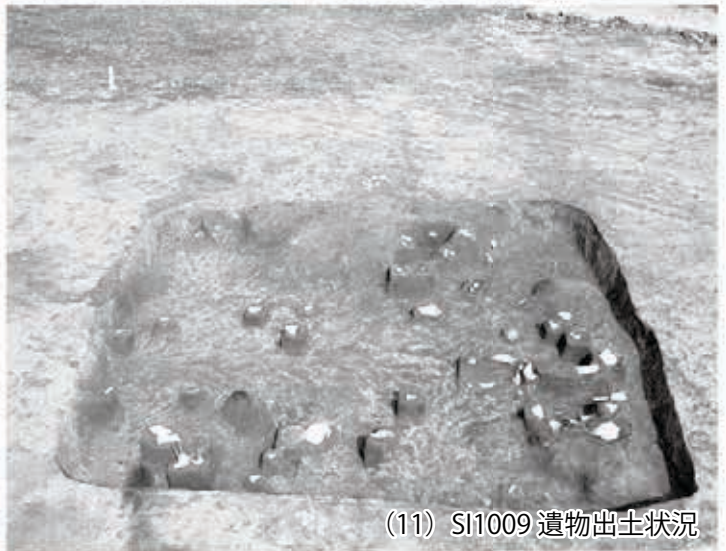
(11) S11008 カマド遺物出土状況



(11) S11009



(11) S11009 カマド



(11) S11009 遺物出土状況



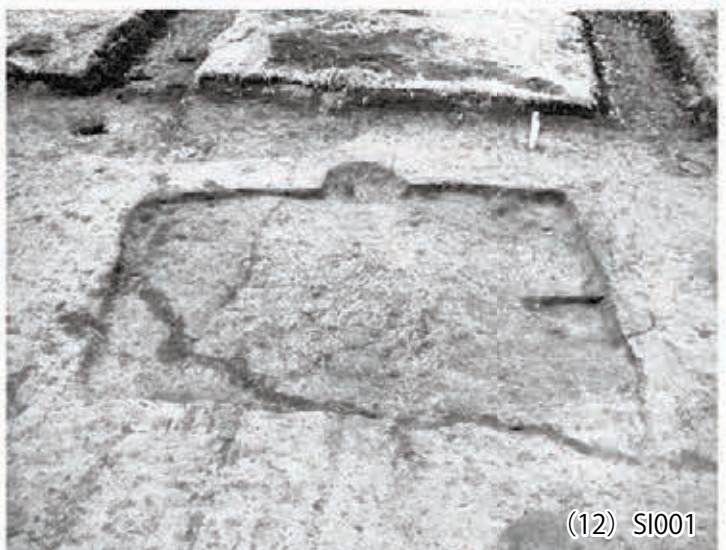
(11) S11009 遺物出土状況



(11) S11009 カマド炭化物出土状況



(11) S11010



(12) S1001



(12) SI001 西カマド



(12) SI001 北カマド



(12) SI002



(12) SI002・SB016



(12) SI002 カマド遺物出土状況



(12) SI002 遺物出土状況



(12) SI003



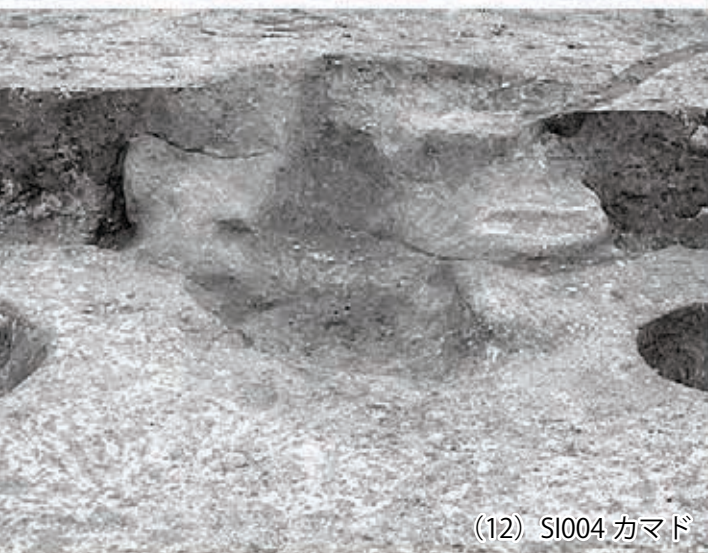
(12) SI003 カマド



(12) S1003 遺物出土状況



(12) S1004



(12) S1004 カマド



(12) S1004 遺物出土状況



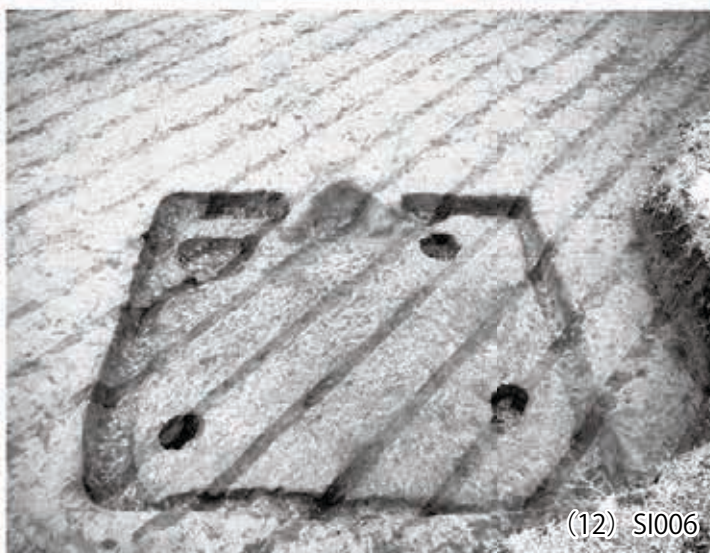
(12) S1004 遺物出土状況



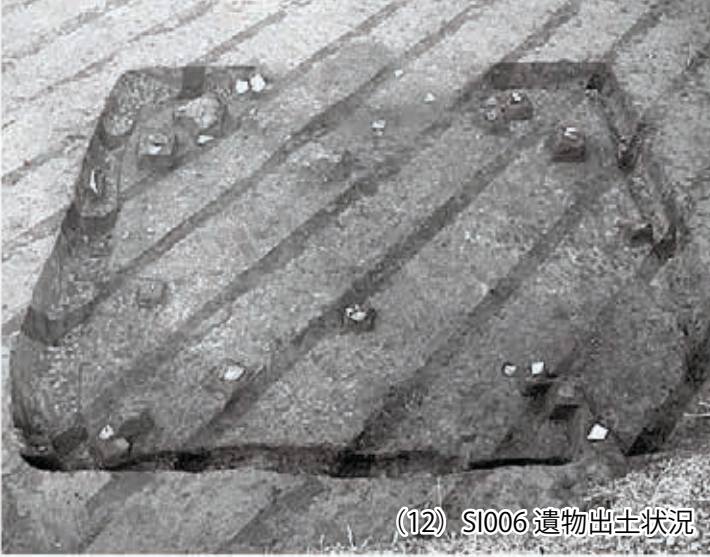
(12) S1005



(12) S1005 カマド



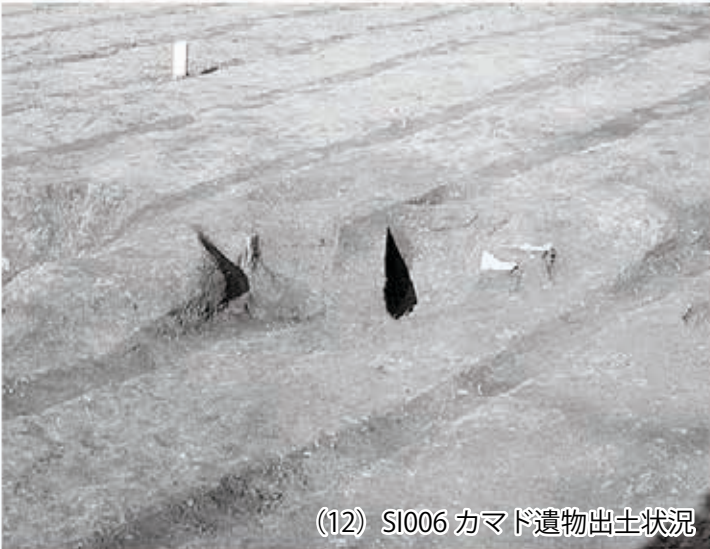
(12) S1006



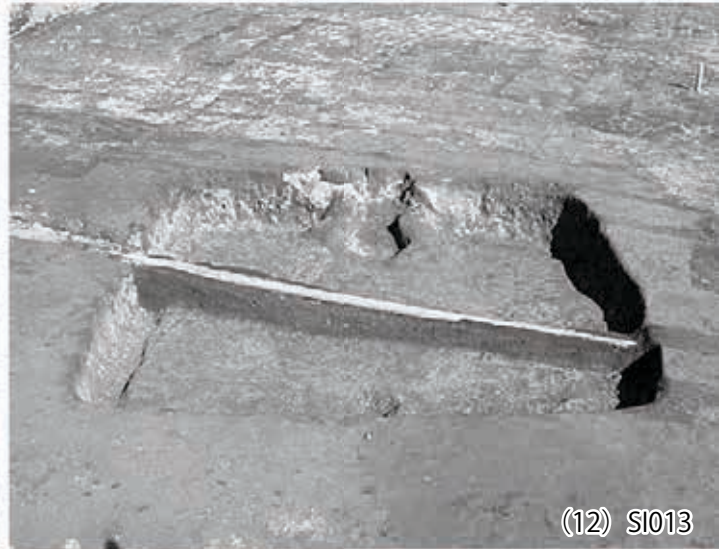
(12) SI006 遺物出土状況



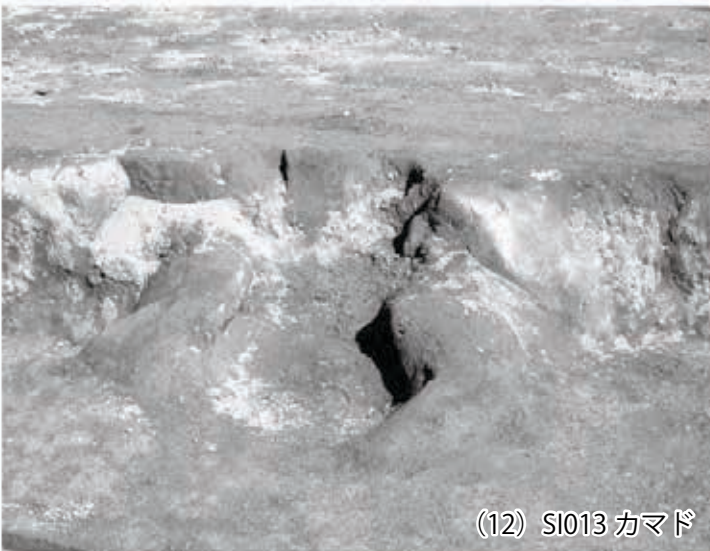
(12) SI006 遺物出土状況



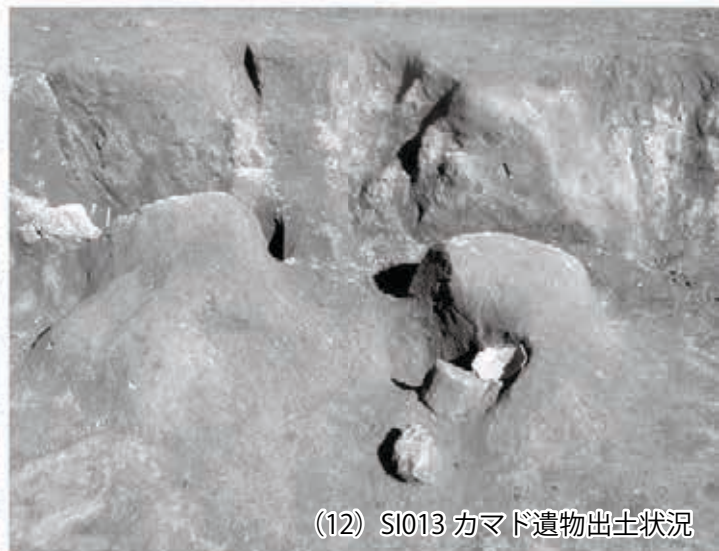
(12) SI006 カマド遺物出土状況



(12) SI013



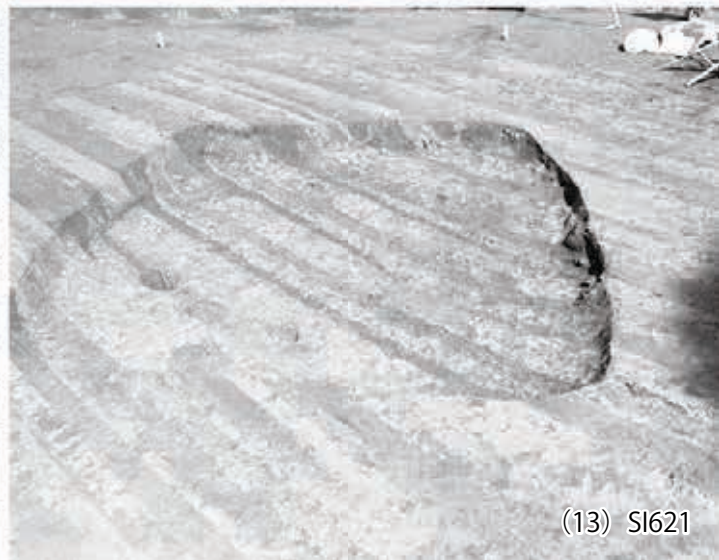
(12) SI013 カマド



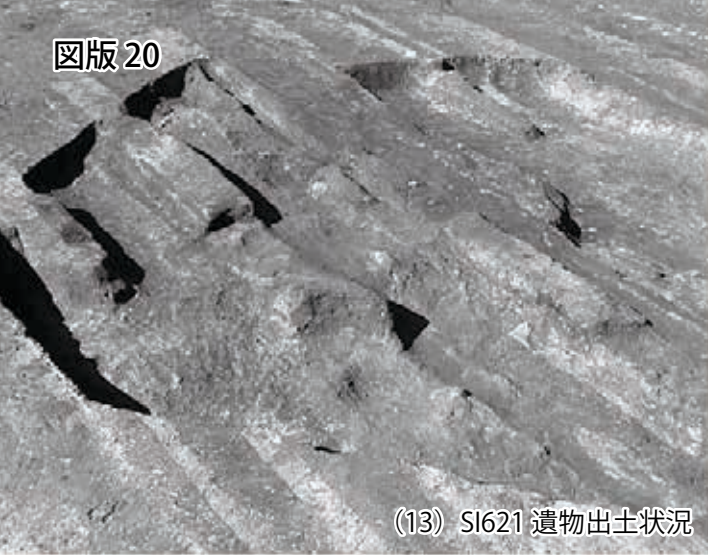
(12) SI013 カマド遺物出土状況



(12) SI045



(13) SI621



(13) SI621 遺物出土状況



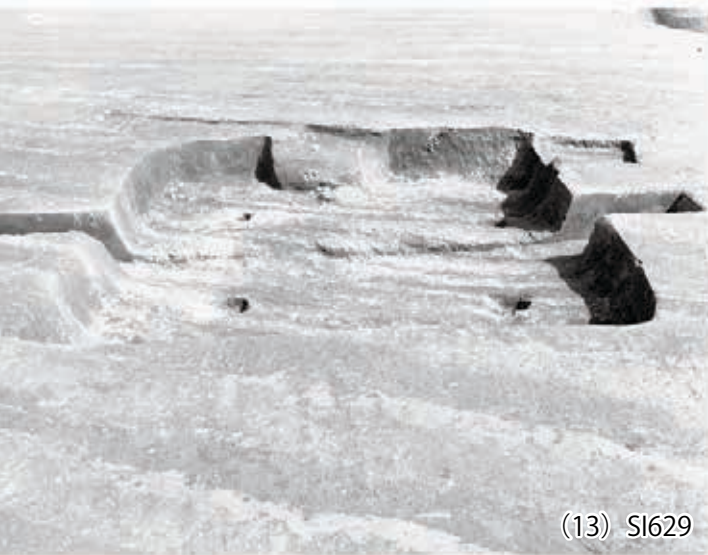
(13) SI628



(13) SI628 カマド



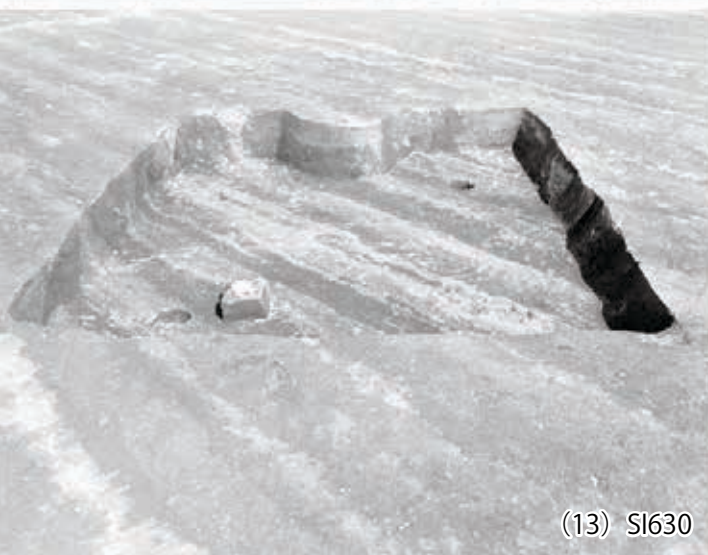
(13) SI628 遺物出土状況



(13) SI629



(13) SI629 カマド遺物出土状況



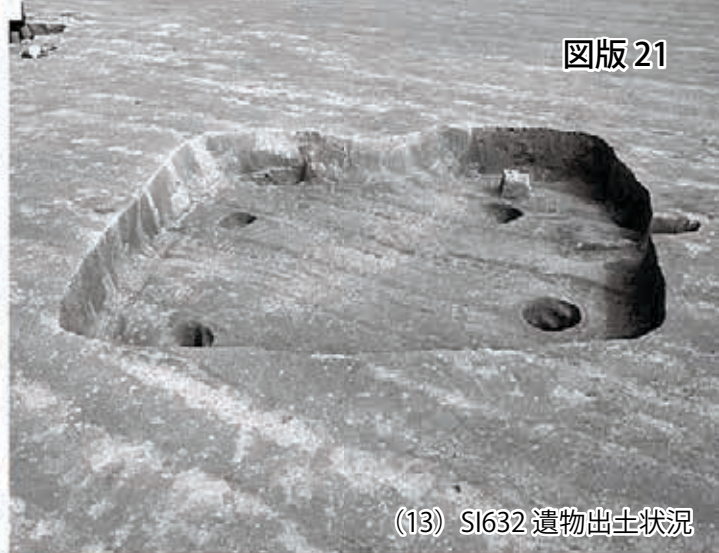
(13) SI630



(13) SI631



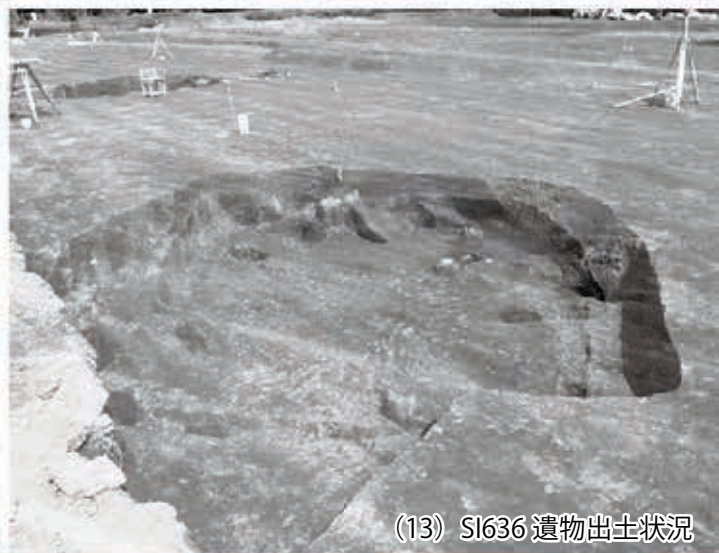
(13) SI631 カマド遺物出土状況



(13) SI632 遺物出土状況



(13) SI633 遺物出土状況



(13) SI636 遺物出土状況



(13) SI637



(13) SI638 遺物出土状況



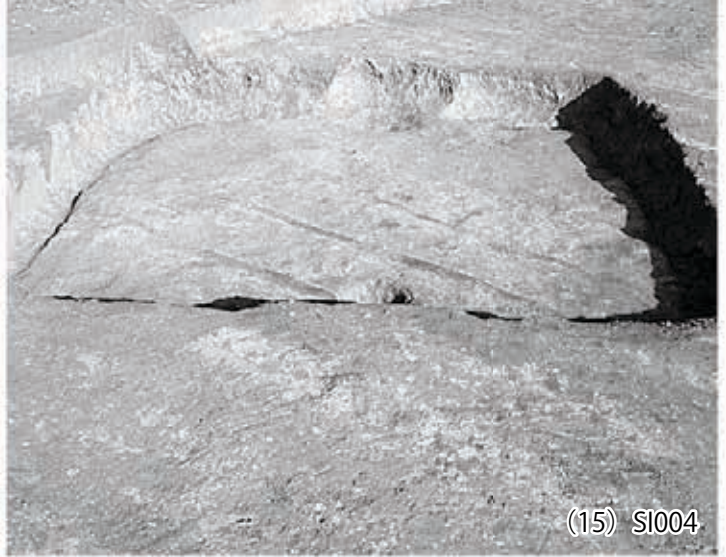
(14) SI129



(14) SI129 カマド



(14) S1129 カマド



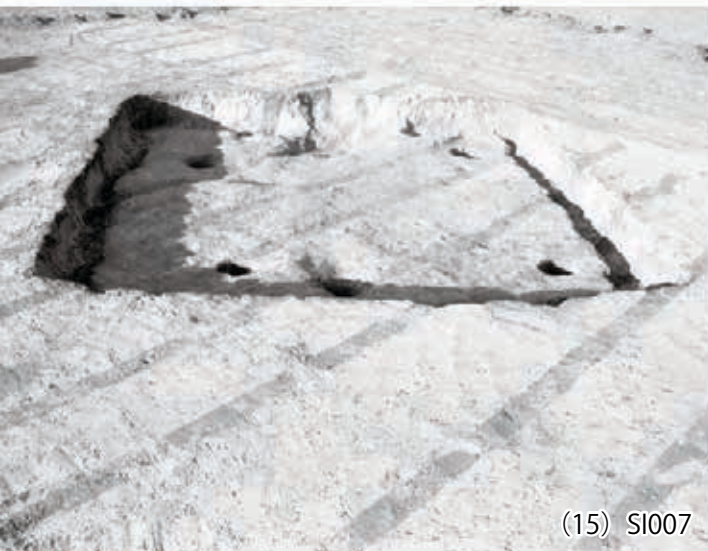
(15) S1004



(15) S1004 カマド



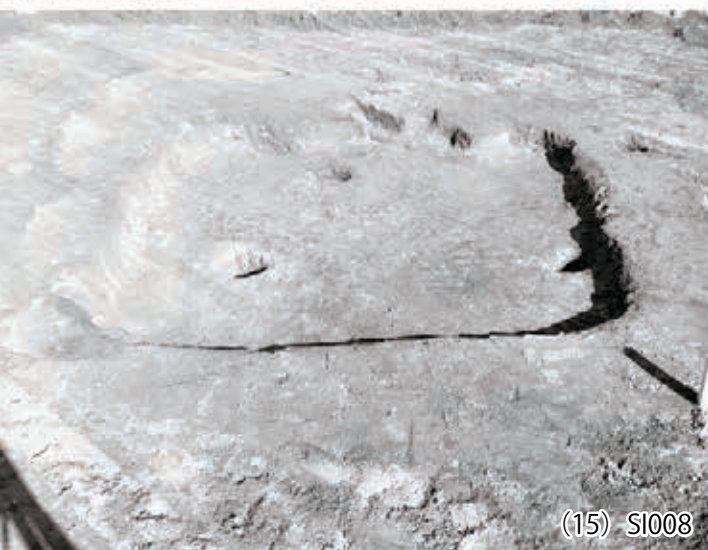
(15) S1004 カマド遺物出土状況



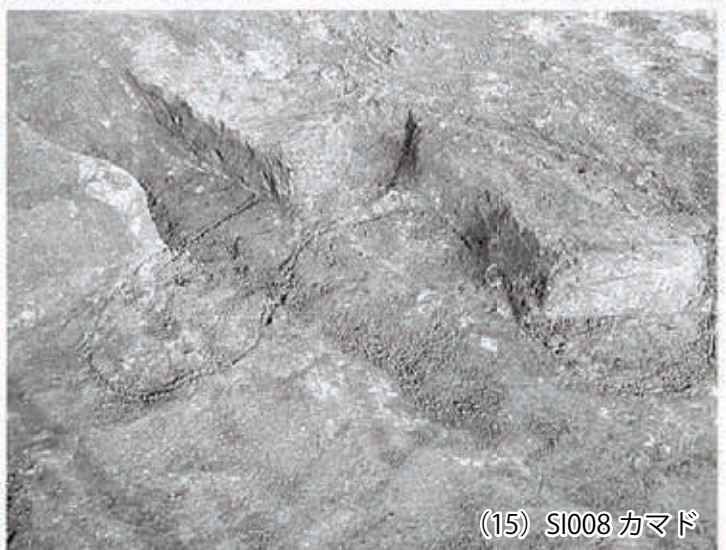
(15) S1007



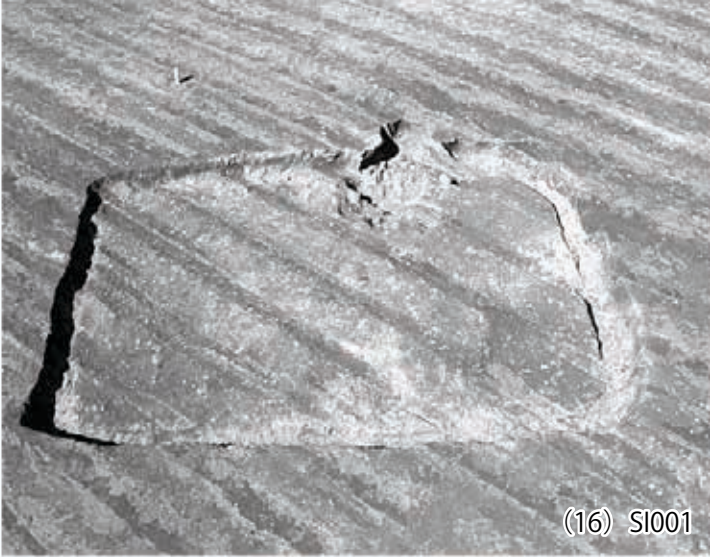
(15) S1007 カマド



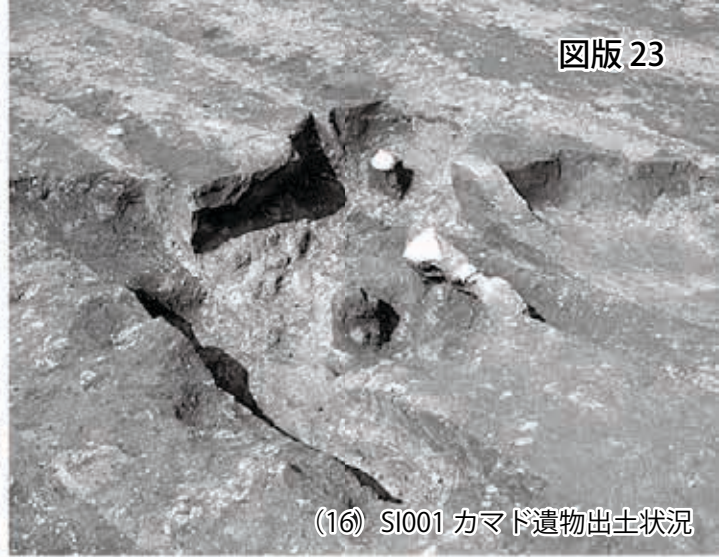
(15) S1008



(15) S1008 カマド



(16) SI001



(16) SI001 カマド遺物出土状況



(16) SI001 カマド



(16) SI001 遺物出土状況



(16) SI002



(16) SI002 カマド



(17) SI009



(17) SI009 カマド



(17) SI010・016



(17) SI010 遺物出土状況



(17) SI011



(17) SI011 カマド



(17) SI016 カマド



(19) SI677



(19) SI677 遺物出土状況



(19) SI678



(19) SI678 カマド遺物出土状況



(19) SI679



(19) SI679 カマド遺物出土状況



(19) SI679 カマド遺物出土状況



(19) SI680



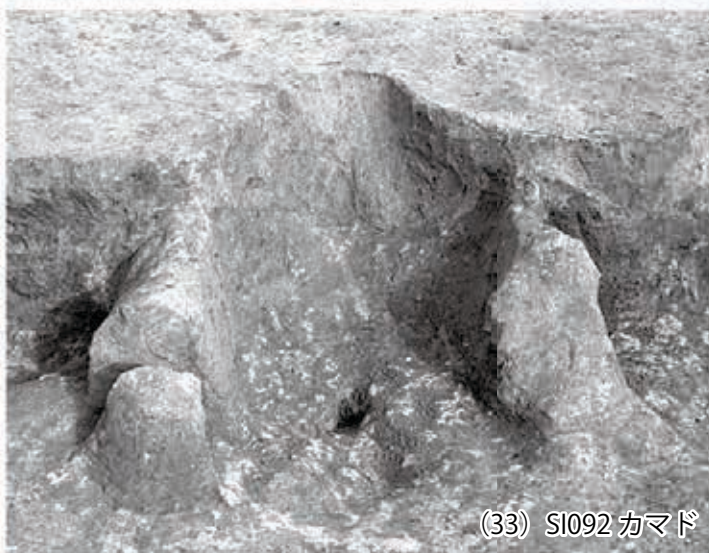
(20) SI662



(20) SI662 カマド

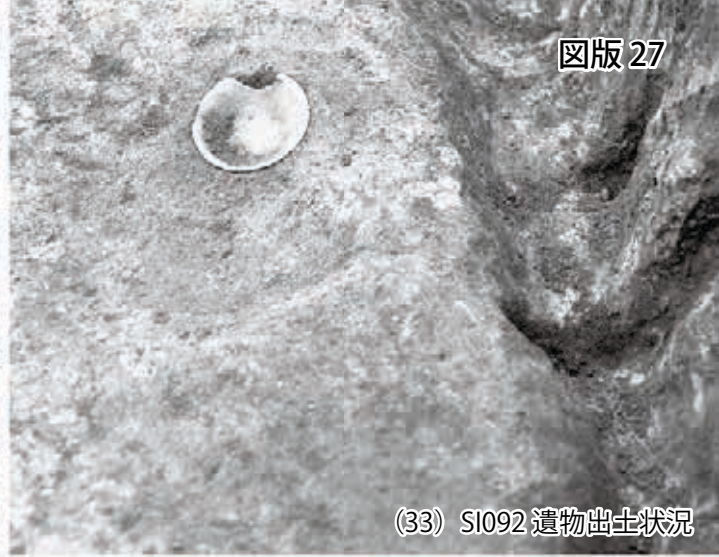


(20) SI662 カマド遺物出土状況

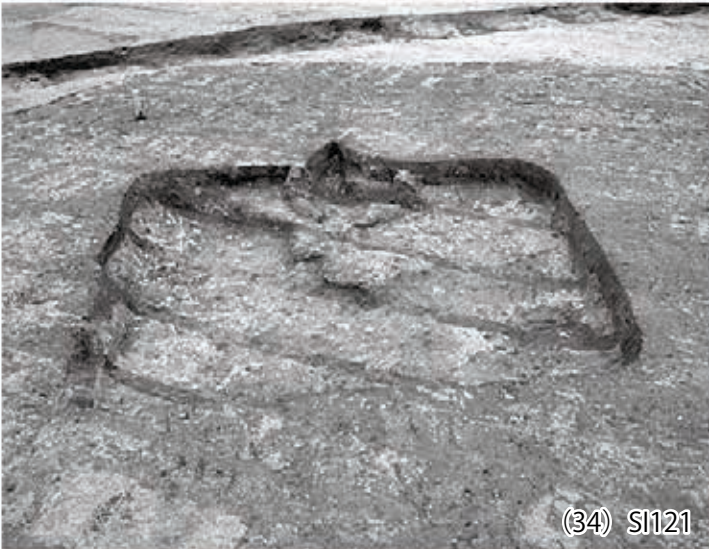




(33) S1092 カマド遺物出土状況



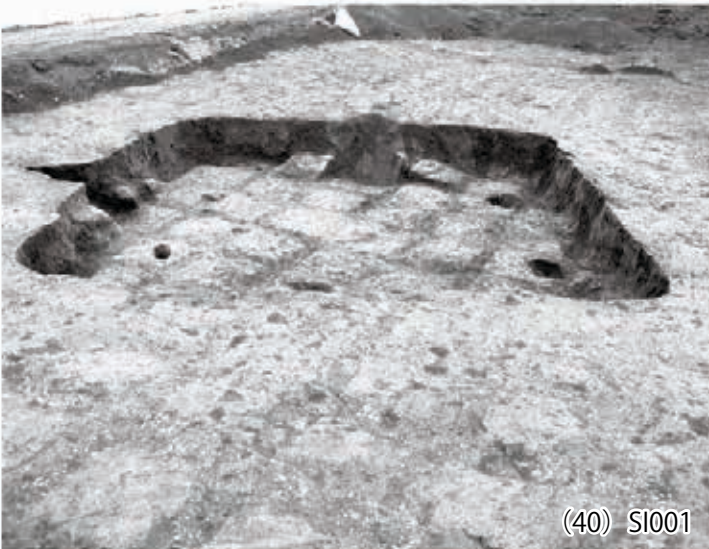
(33) S1092 遺物出土状況



(34) S1121



(34) S1121 カマド



(40) S1001



(40) S1001



(40) S1001 北カマド



(40) S1001 東カマド



(40) SI001 東方マド遺物出土状況



(40) SI001 遺物出土状況



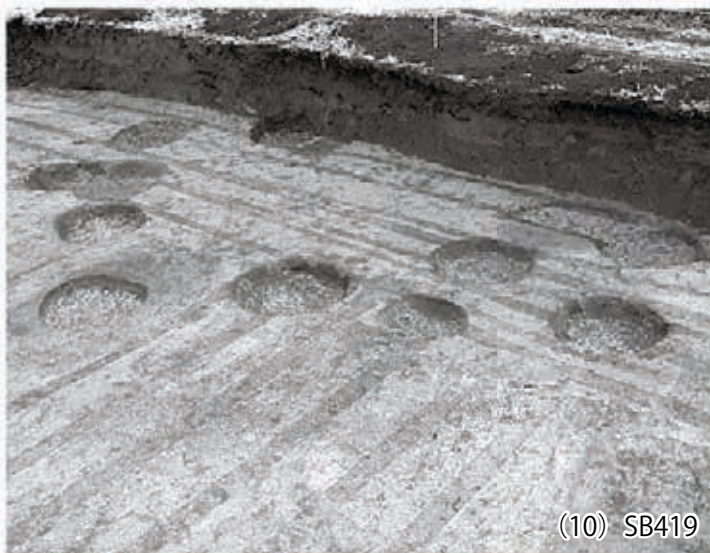
(10) SB411



(10) SB413



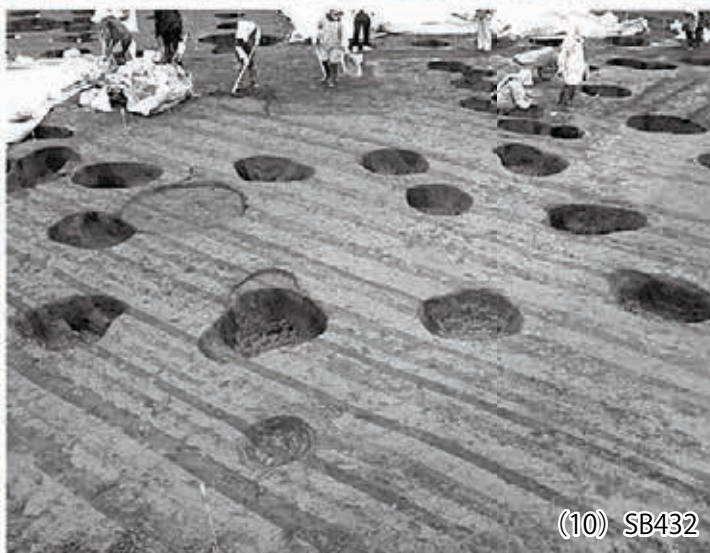
(10) SB418



(10) SB419



(10) SB420



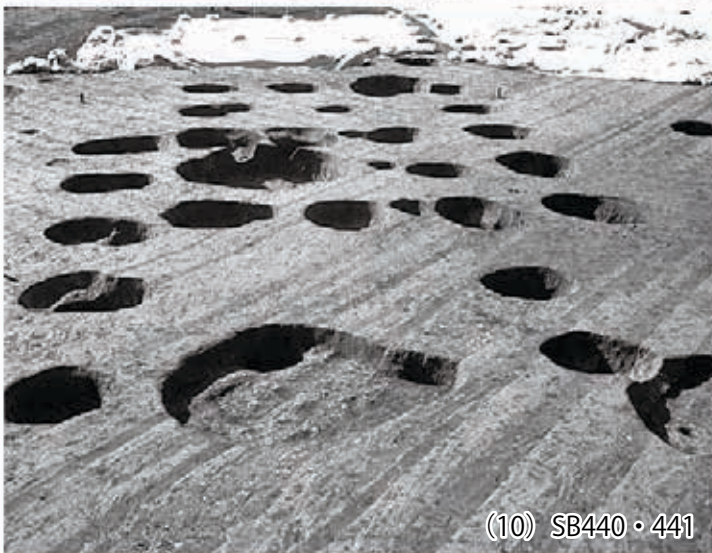
(10) SB432



(10) SB434



(10) SB436・437



(10) SB440・441



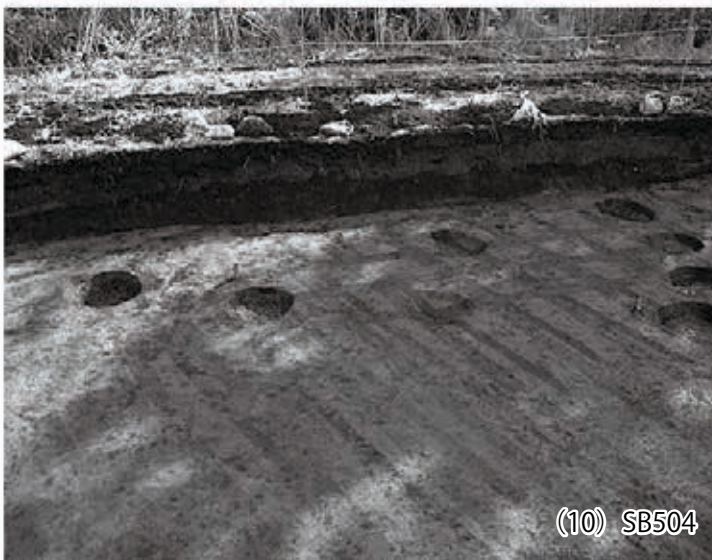
(10) SB445・446



(10) SB445 炭化物出土状况



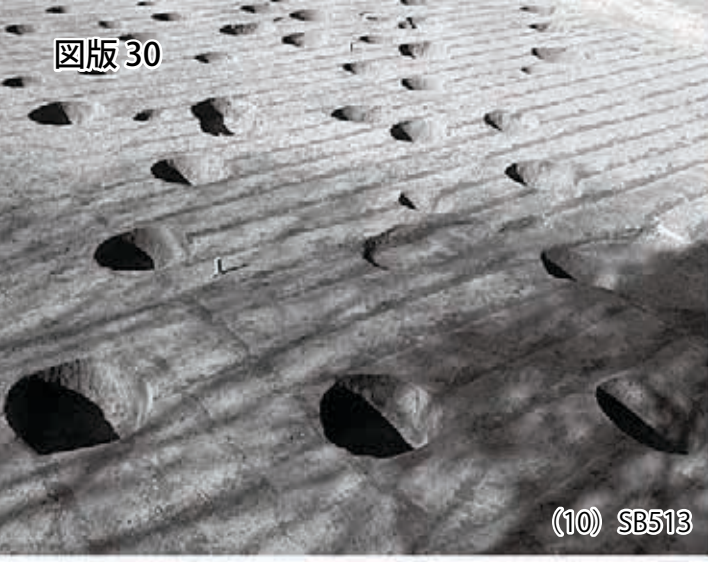
(10) SB449・503



(10) SB504



(10) SB508・509



(10) SB513



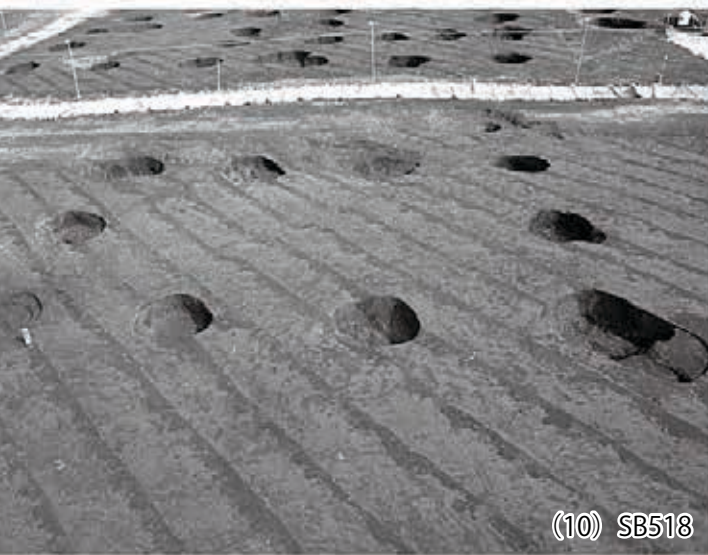
(10) SB514・515



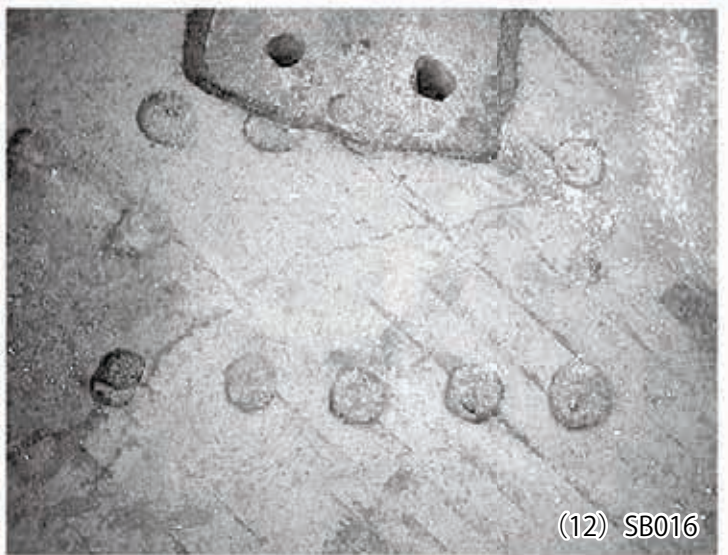
(10) SB516



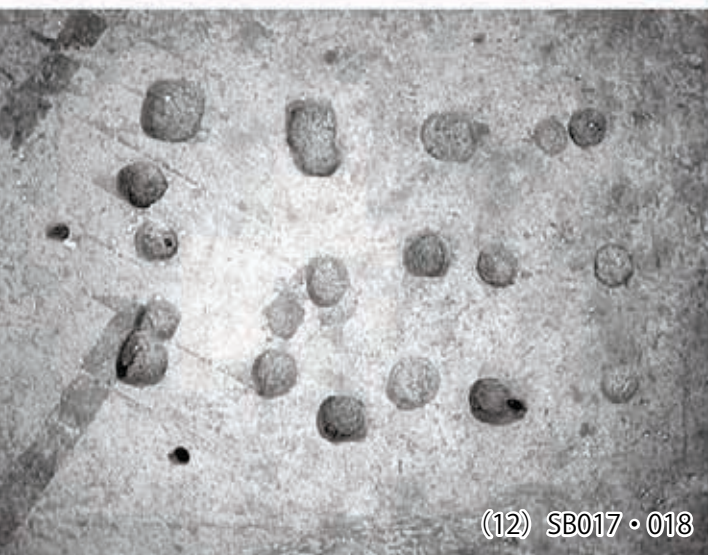
(10) SB517



(10) SB518



(12) SB016



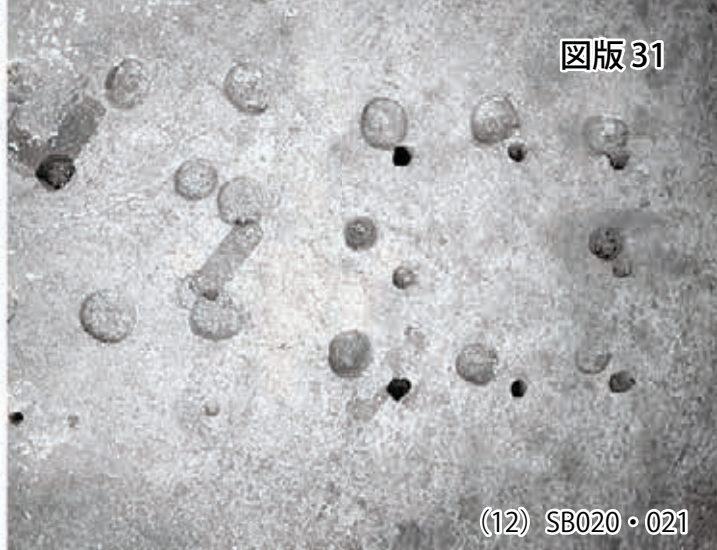
(12) SB017・018



(12) SB017・018



(12) SB019



(12) SB020 · 021



(12) SB020 · 021



(12) SB022 · 023



(12) SB022 · 023



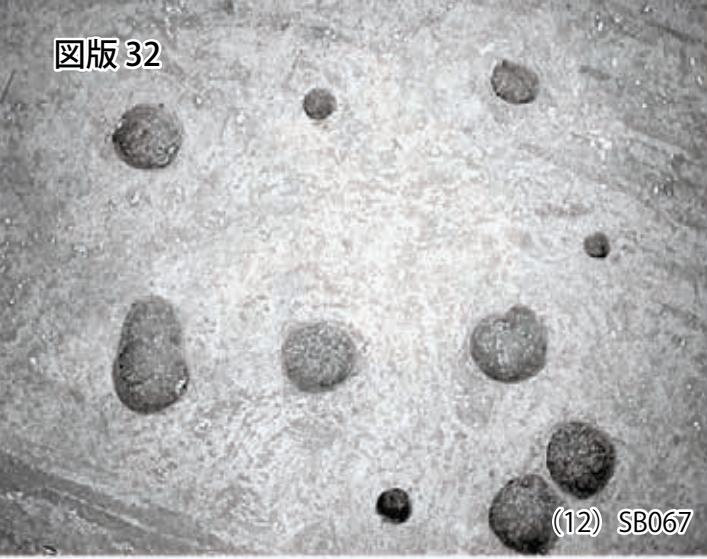
(12) SB022 · 023



(12) SB044



(12) SB067



(12) SB067



(12) SB072



(17) SB002A · B · 003 · 南門



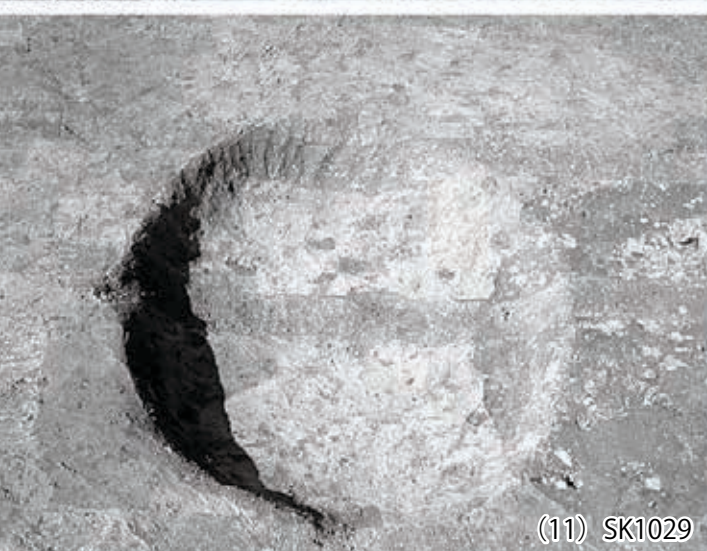
(17) SB002A · B



(17) SB003



(11) SK1024



(11) SK1029



(11) SK1050



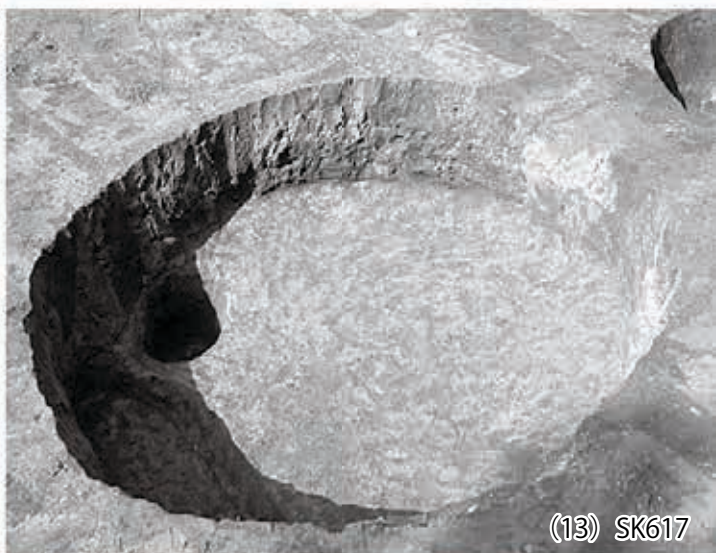
(11) SK1053



(11) SK1053 遺物出土狀況



(12) SK027



(13) SK617



(15) SK007



(15) SK008



(19) SK684



(20) SK670



(11) SK1021



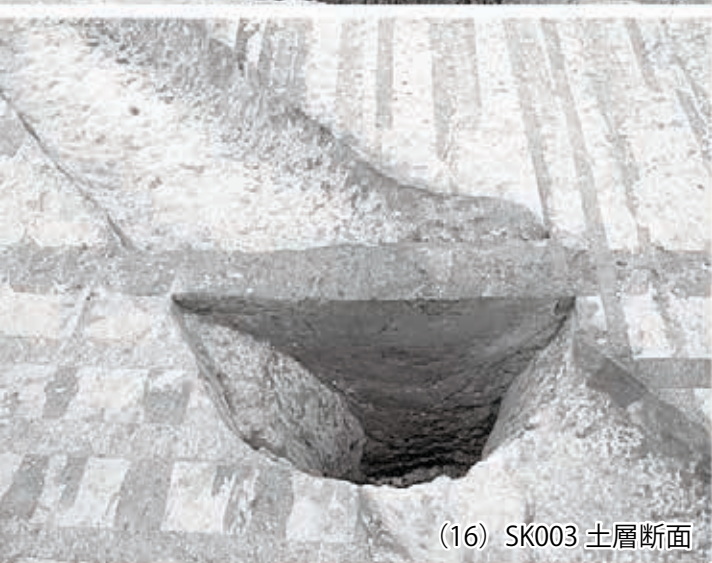
(16) SK001



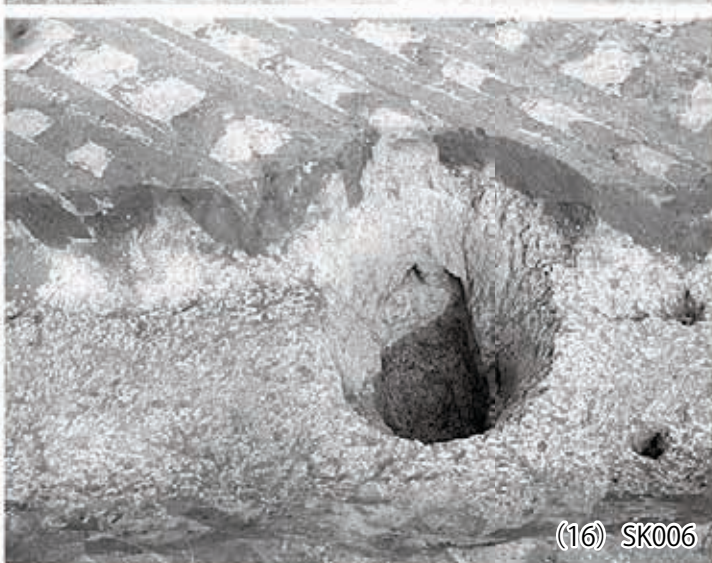
(16) SK002



(16) SK002 土层断面



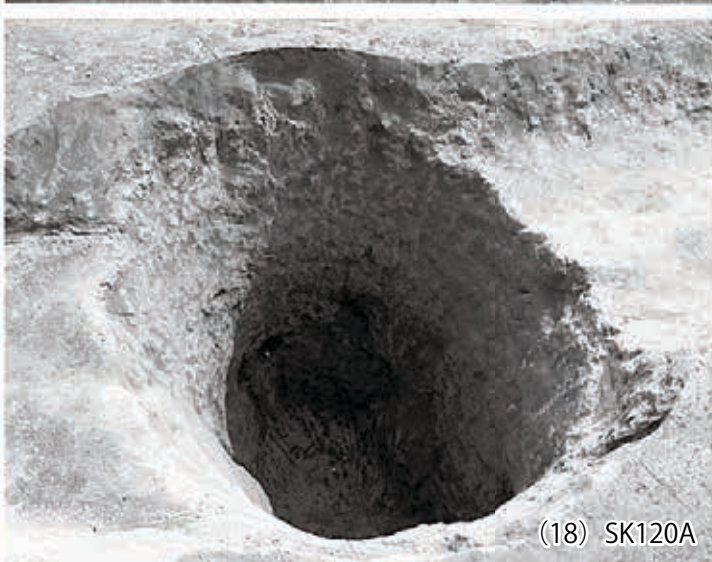
(16) SK003 土层断面



(16) SK006



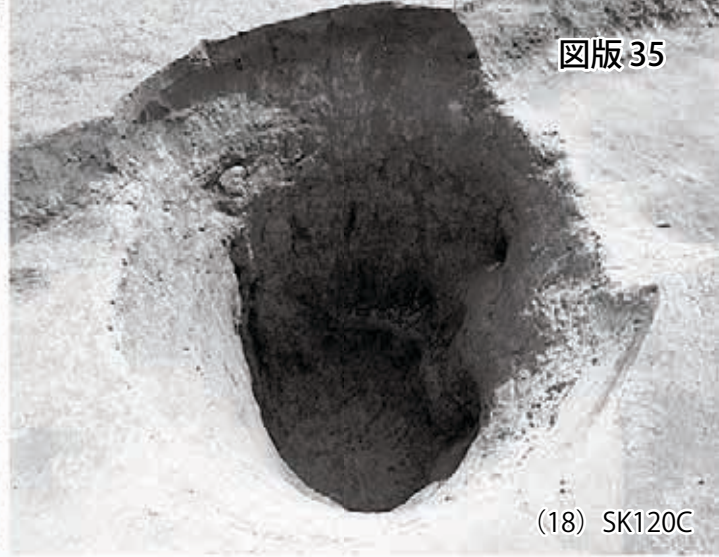
(16) SK006



(18) SK120A



(18) SK120B



(18) SK120C



(18) SK120D



(18) SK120E



(18) SK120A 土层断面



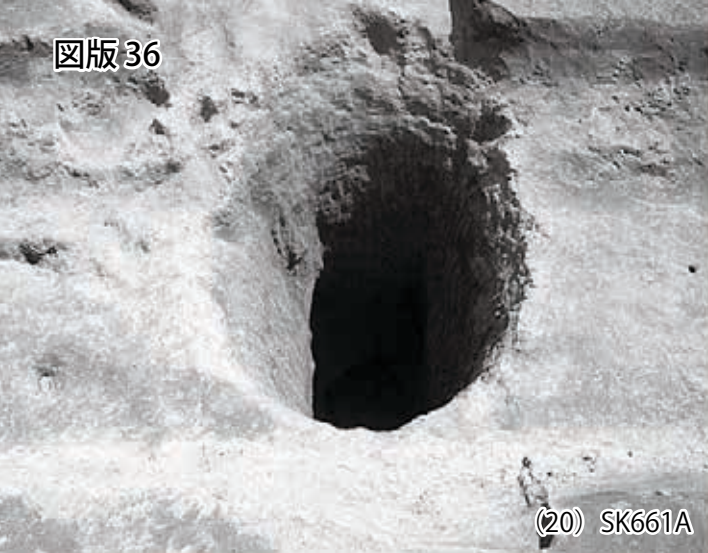
(18) SK120B 土层断面



(19) SK676A



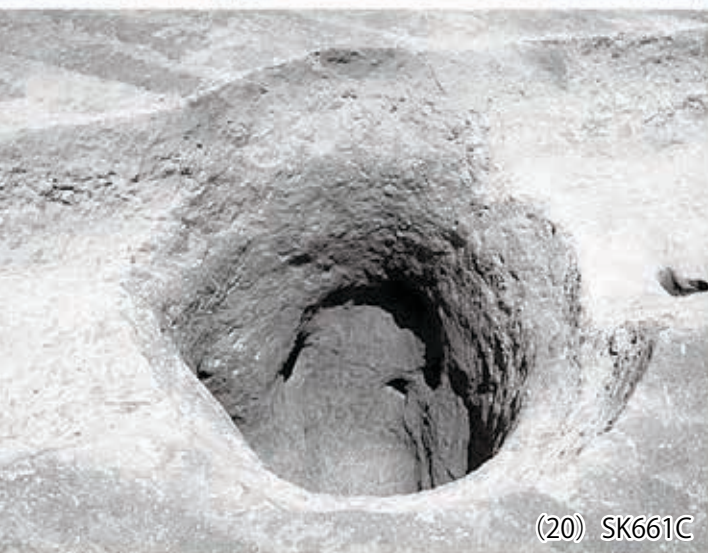
(19) SK676D



(20) SK661A



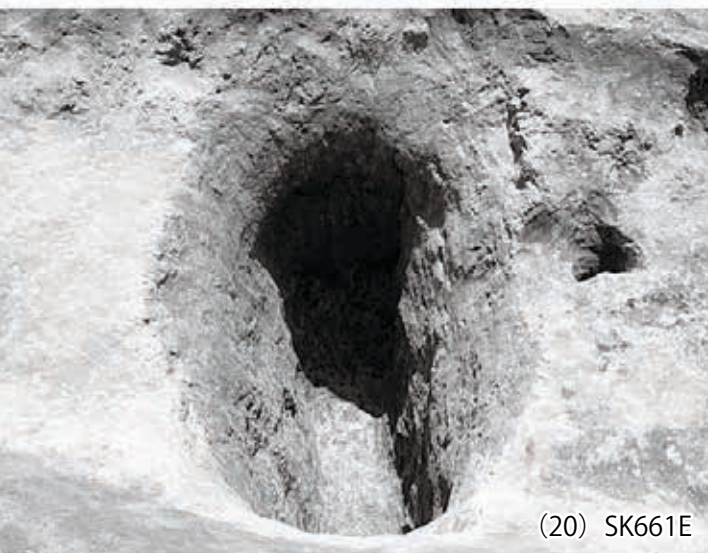
(20) SK661B



(20) SK661C



(20) SK661D



(20) SK661E



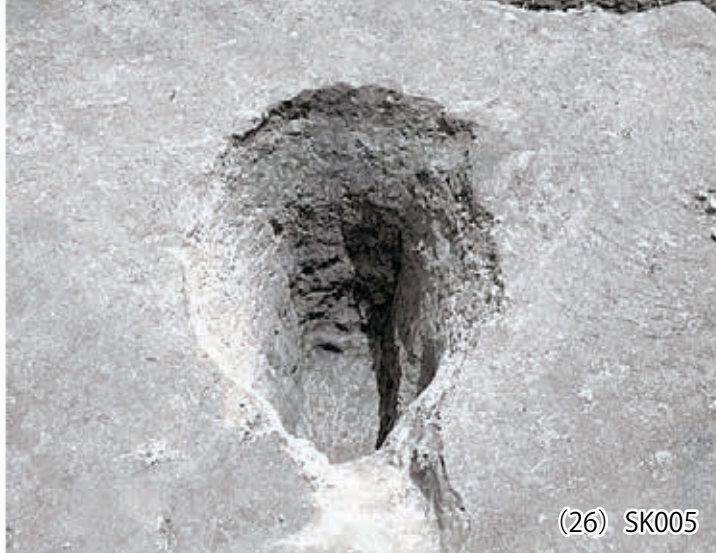
(25) SK001



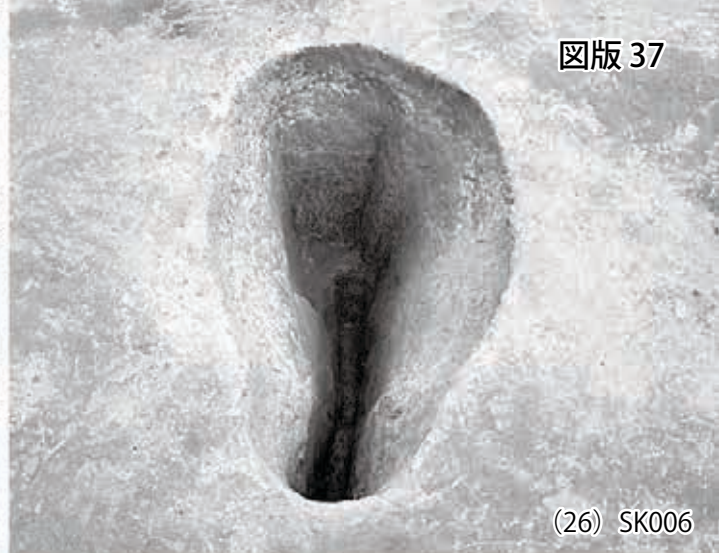
(26) SK002 · 014



(26) SK004



(26) SK005



(26) SK006



(26) SK007



(26) SK008



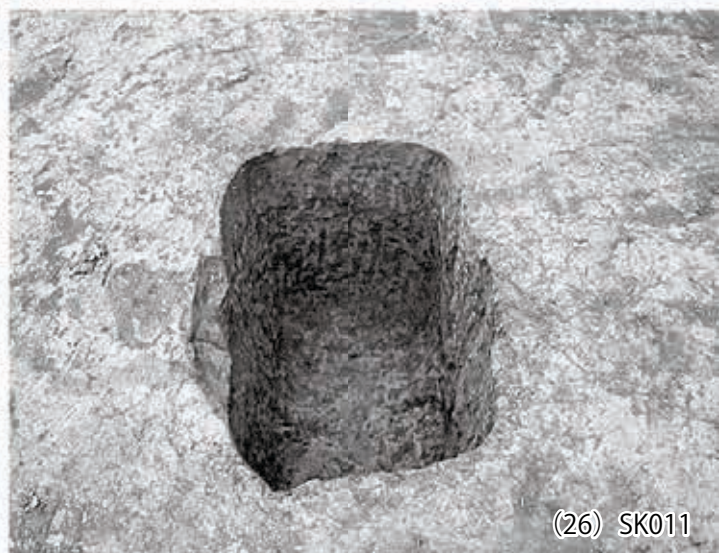
(26) SK009



(26) SK009 馬骨出土狀況



(26) SK010



(26) SK011



(26) SK012



(26) SK013 馬骨出土狀況



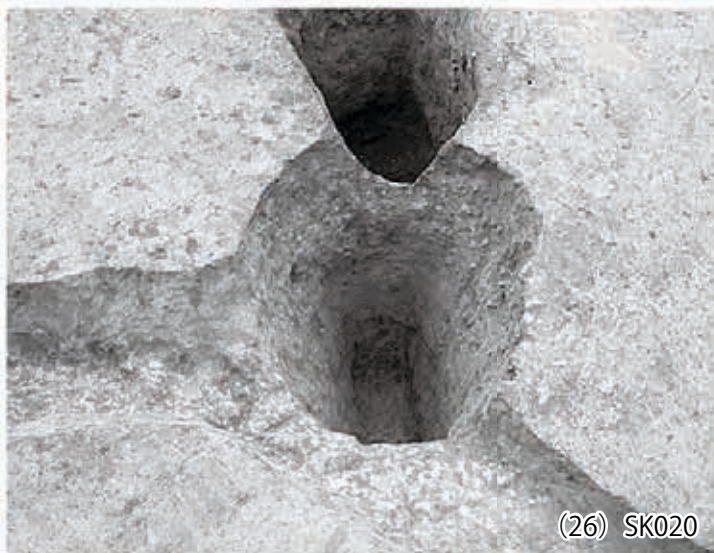
(26) SK015



(26) SK015 馬骨出土狀況



(26) SK016



(26) SK020



(28) SK001



(28) SK002



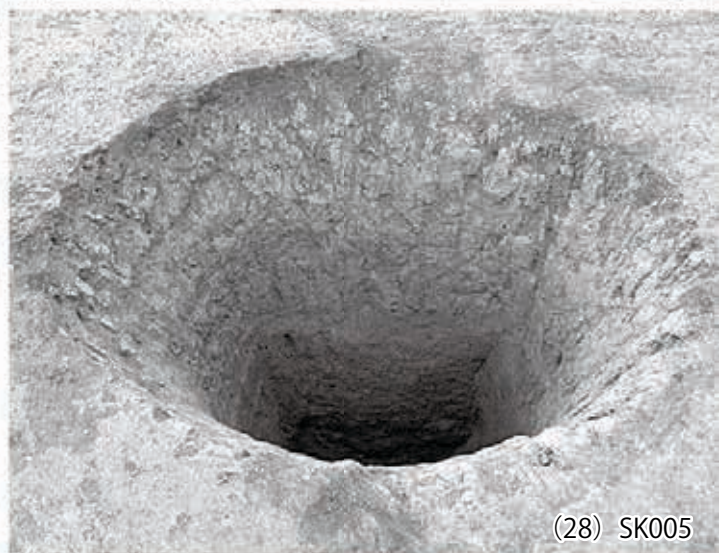
(28) SK003



(28) SK004 · 018



(28) SK004 · 018



(28) SK005



(28) SK006 · 007



(28) SK008



(28) SK009



(28) SK010 · 016





(29) SD910



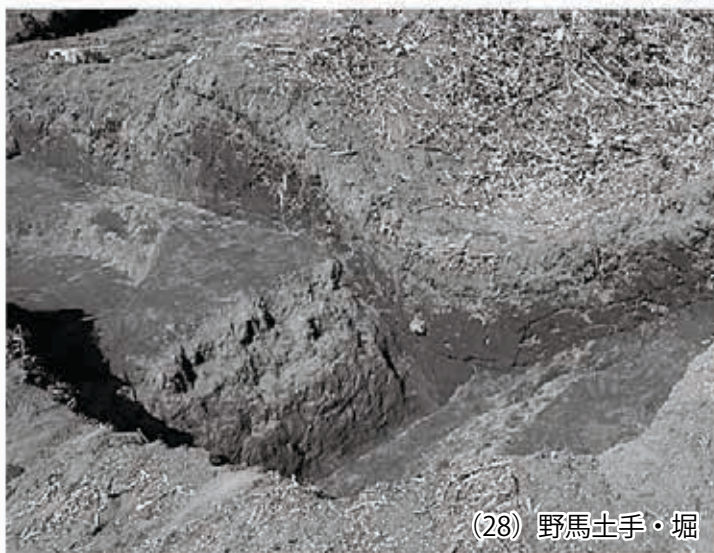
(28) SD001



(28) SD001



(28) 野馬土手



(28) 野馬土手・堀



(26) SD001



(26) SD001



(25) SD001・003



(26) SD002



(26) SD003



(26) SD004



(26) SD004



(26) SD007



(25) SD002



(29) SD960・961



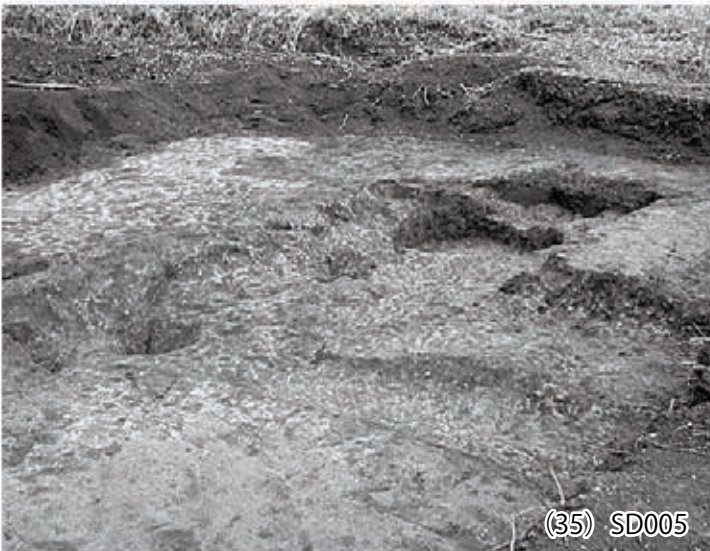
(29) SD960・961



(29) SD962



(30) SD009・010



(35) SD005



(37) SD105



(37) SD106



(37) SD107



(33) SD054



(33) SD054



(6) SD008



(7) SD294・295



(6) SD013



(18) SD120



(19) SD676



(20) SD661



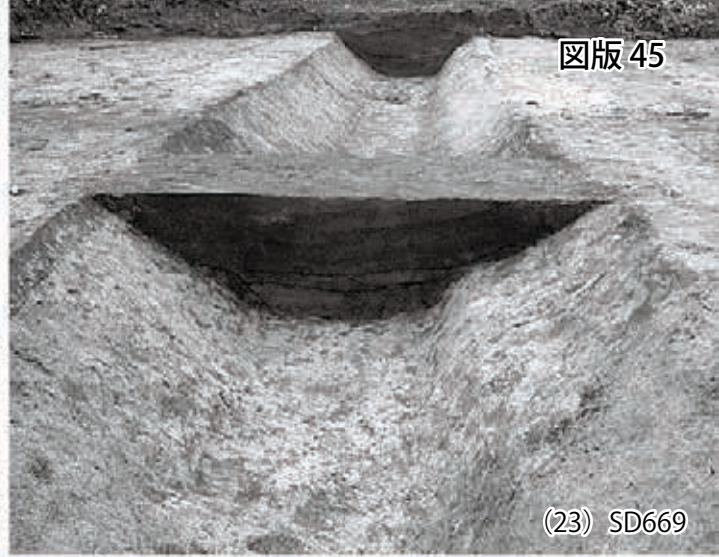
(16) SD001



(19) SD675



(20) SD665



(23) SD669



(20) SD671



(20) SD666



(21) SD952



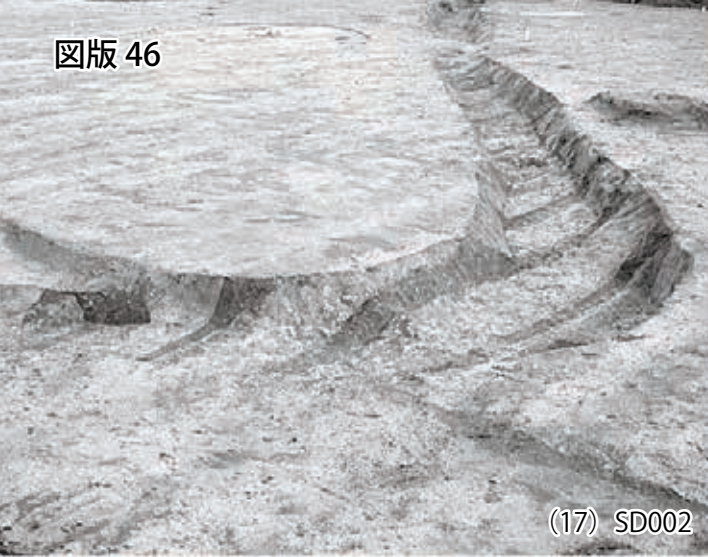
(20) SD667



(21) SD951



(21) SD951



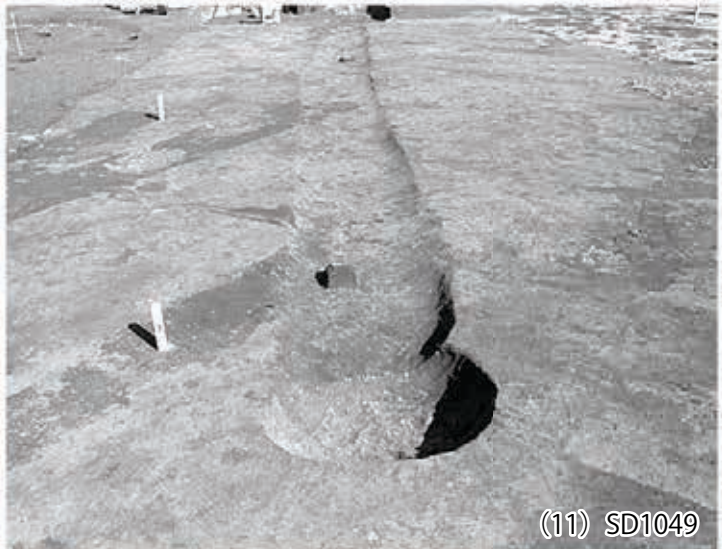
(17) SD002



(17) SD002



(17) SD003



(11) SD1049



(12) SD038



(8) SD033



(12) SD057



(12) SD042



(1) SD002



(1) SD003



(1) SD006



(1) SD008



(39) SM001



(37) SM003



石碑 1



石碑 3



石碑 4



石碑 2



出羽三山塔

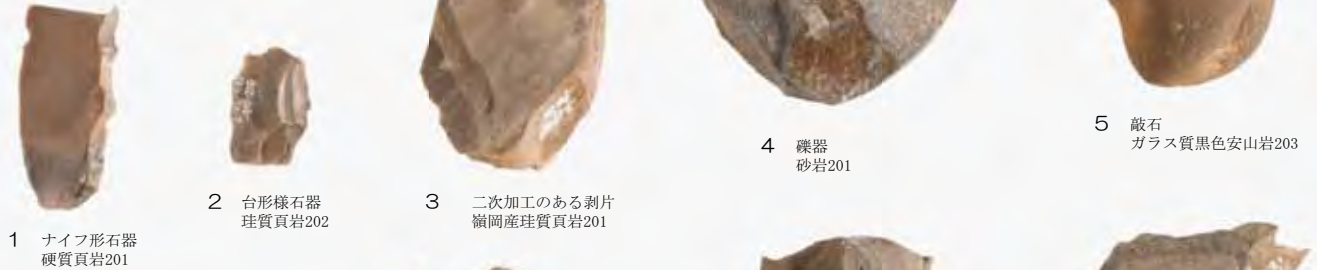
第1文化層

第1ブロック



第2a文化層

第2ブロック



第2c文化層

第4ブロック

第2b文化層

第3ブロック



第2d文化層

第5ブロック



※第3ブロック4のみ 1/2スケール (1/2)

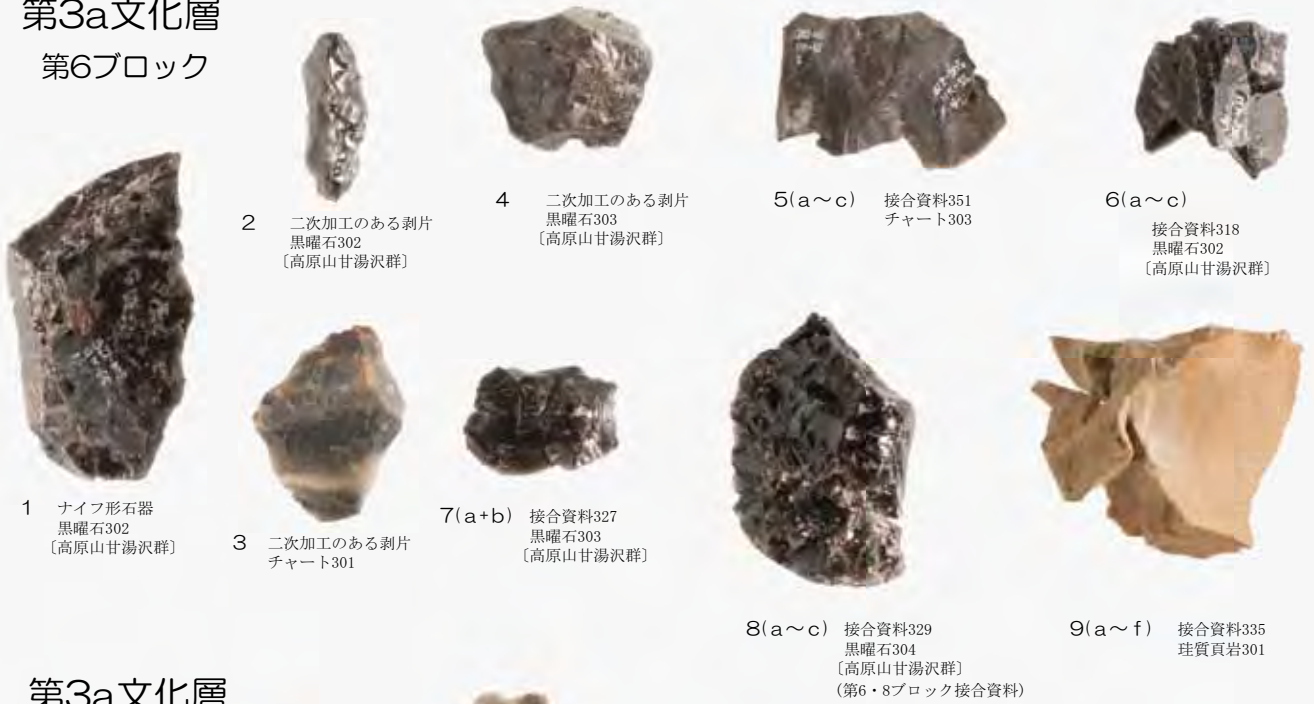
0 10cm

0 5cm

(2/3)

第3a文化層

第6ブロック



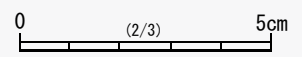
第3a文化層

第7ブロック



第3a文化層

第8ブロック



※ [] 内は、黒曜石産地推定結果を示す。

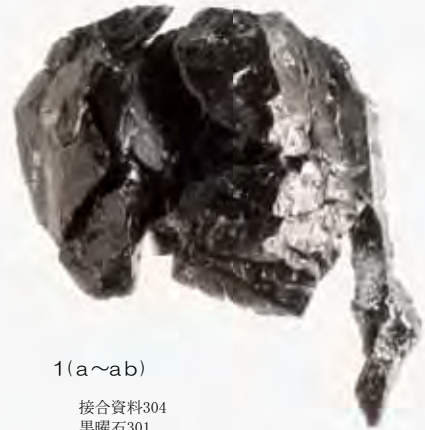
旧石器時代出土石器(2)

第3a文化層 第9ブロック



1(a~p)
接合資料354
玉髓301
(第6・8~10ブロック接合資料)

第3a文化層 第10ブロック



1(a~ab)
接合資料304
黒曜石301
〔高原山甘湯沢群〕
(第6~10ブロック接合資料)

第3b文化層
第11ブロック



1 削器 硬質頁岩302
2 楔形石器 硬質頁岩302
3 微細剥離痕のある剥片 玉髓305



4 剥片
ガラス質黒色安山岩304



5 石核 黒曜石306
〔高原山甘湯沢群〕

第3b文化層 第12ブロック



1 二次加工のある剥片 硬質頁岩301
2(a~f) 接合資料343 硬質頁岩301

第3b文化層 第13ブロック



1 彫器 硬質頁岩304
2 剥片 嶺岡産珪質頁岩305



3(a+b) 接合資料332 砂岩301

第3c文化層 第14ブロック



1 微細剥離痕のある剥片 珪質頁岩309
2 微細剥離痕のある剥片 嶺岡産珪質頁岩301
3 剥片 嶺岡産珪質頁岩303



4 剥片 流紋岩302



5 石核 珪質頁岩304



1 ナイフ形石器 珪質頁岩311

第3d文化層
第15ブロック



6(a+b) 接合資料341 珪質頁岩305

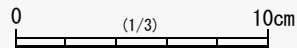
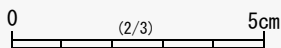


7(a+b) 接合資料342 珪質頁岩306



2 微細剥離痕のある剥片 嶺岡産珪質頁岩304

※第13ブロックの3(a+b)のみ 1/3スケール



※〔 〕内は、黒曜石産地推定結果を示す。

旧石器時代出土石器(3)

第3e文化層

第16ブロック



1 楔形石器
ガラス質黒色安山岩310



2 二次加工のある剥片
チャート305



3 剥片
黒曜石307
〔高原山甘湯沢群〕



4 剥片
珪質頁岩314



9 蔽石
砂岩304



5 剥片
トロトロ石310



6 石核
珪質頁岩312



7(a+b)
接合資料301
ガラス質黒色安山岩307



8(a+b)
接合資料302
ガラス質黒色安山岩308

第3文化層 単独出土

12I-96



1 剥片
ガラス質黒色安山岩305

15J-29



1 二次加工のある剥片
硬質頁岩306

第4a文化層

第17ブロック



1 ナイフ形石器
珪質頁岩401



2 尖頭器
珪質頁岩402



3 石核
珪質頁岩403



4 剥片
ガラス質黒色安山岩408



5 剥片
玉髄401



6(a+b) 接合資料402
珪質頁岩401

第4b文化層

第18ブロック



1 搔器
ガラス質黒色安山岩401



2 二次加工のある剥片
ガラス質黒色安山岩406



3 石核
ガラス質黒色安山岩407



4(a+b) 接合資料401
ガラス質黒色安山岩401

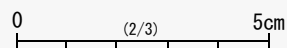
第4文化層 単独出土



1 二次加工のある剥片
珪質頁岩406



2 剥片
珪質頁岩406



※ [] 内は、黒曜石産地推定結果を示す。

第5a文化層
第19ブロック

※黒曜石の産地推定地は、すべて神津島恩馳島群。



第5a文化層
第20ブロック



第5 a文化層

第20ブロック

※黒曜石の産地推定地は、すべて神津島恩馳島群。



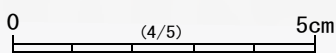
旧石器時代出土石器(6)

第5a文化層 第21ブロック

※黒曜石の産地推定地は、すべて神津島恩馳島群。



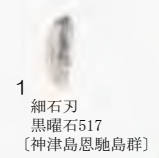
第5b文化層 第22ブロック



第5b文化層 第22ブロック



第5文化層 単独出土石器

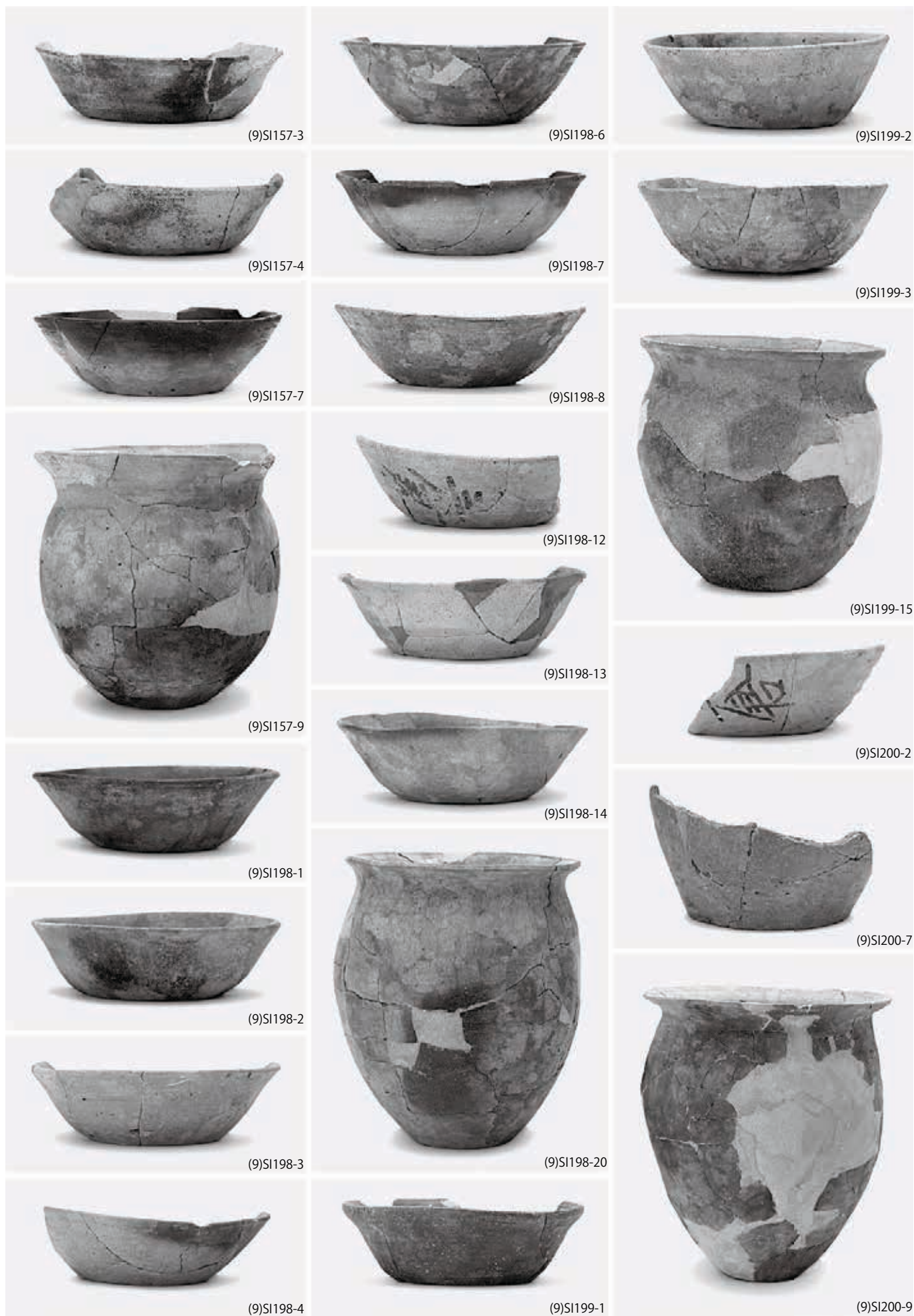


単独出土



0 (4/5) 5cm

旧石器時代出土石器(8)



豎穴住居跡出土土器(1)



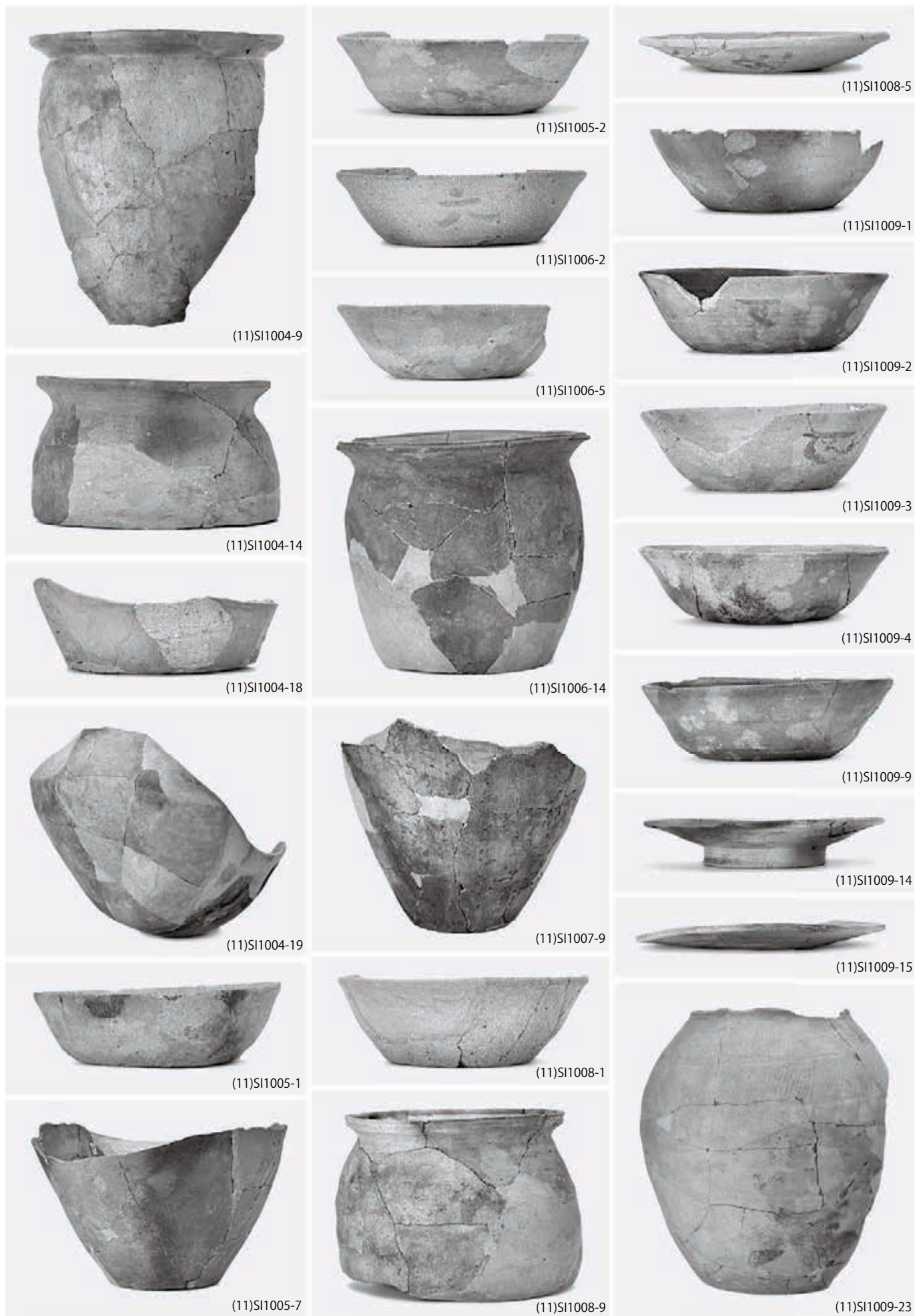
豎穴住居跡出土土器(2)



豎穴住居跡出土土器(3)



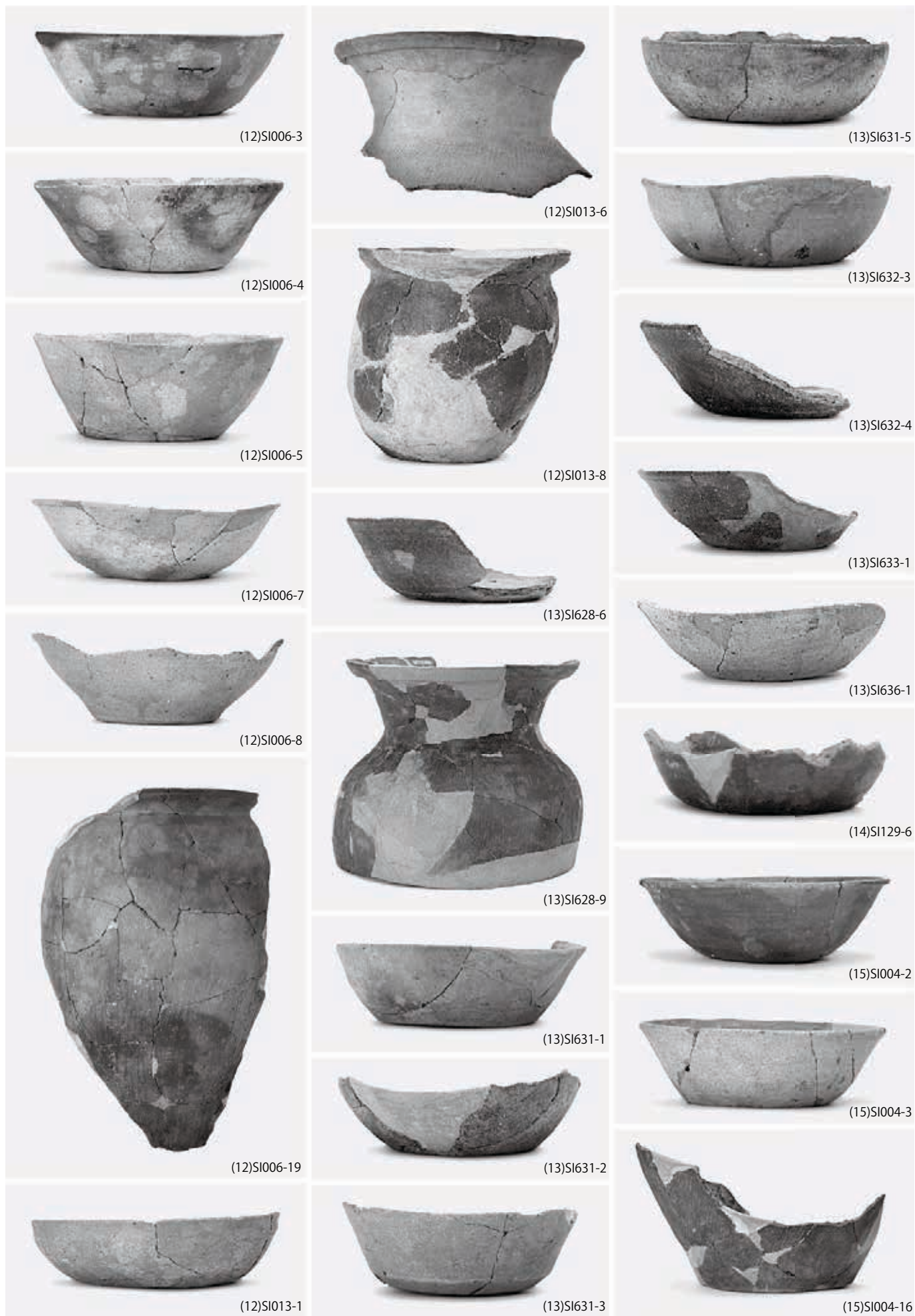
豎穴住居跡出土土器(4)



豎穴住居跡出土土器(5)



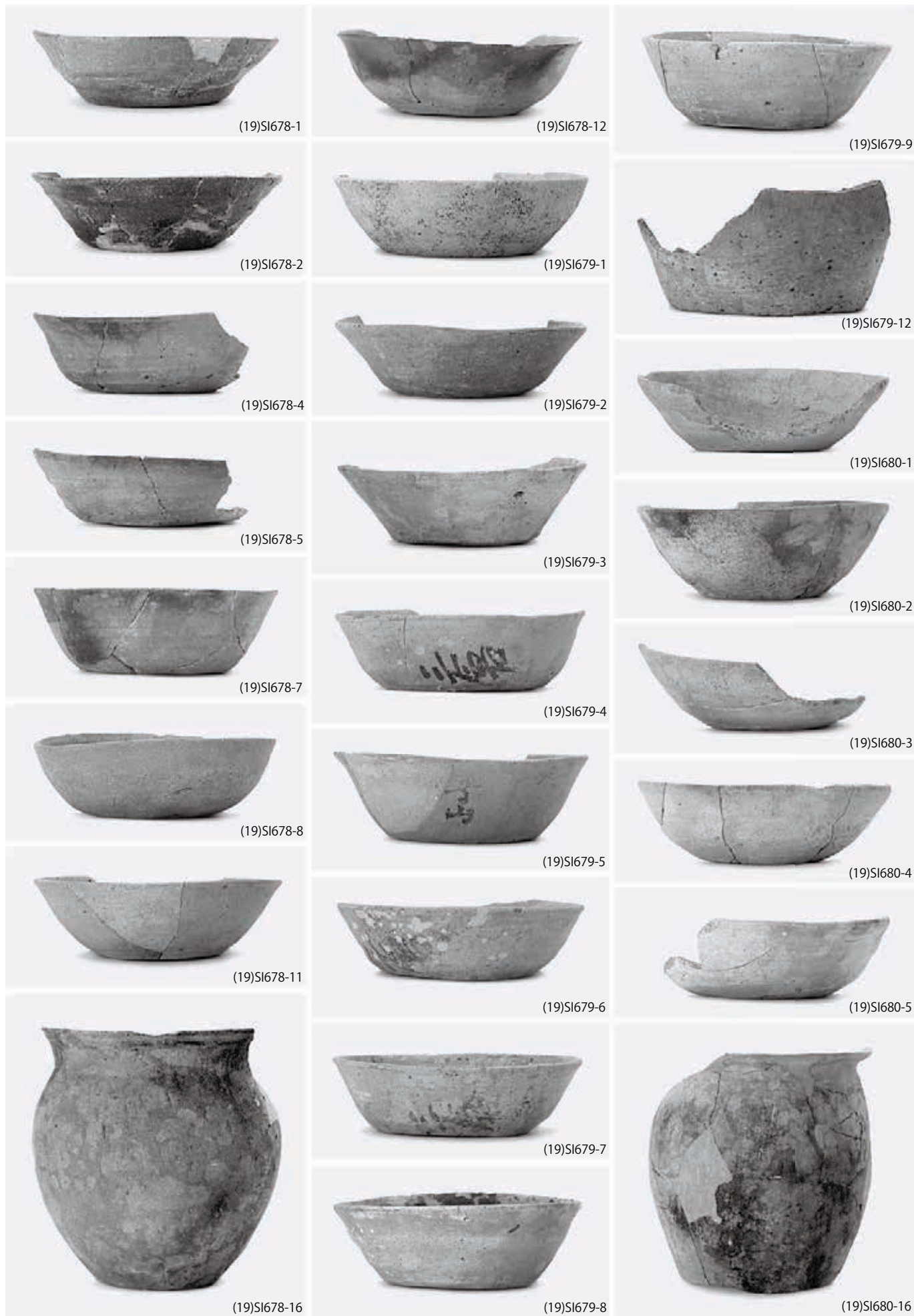
豎穴住居跡出土土器(6)



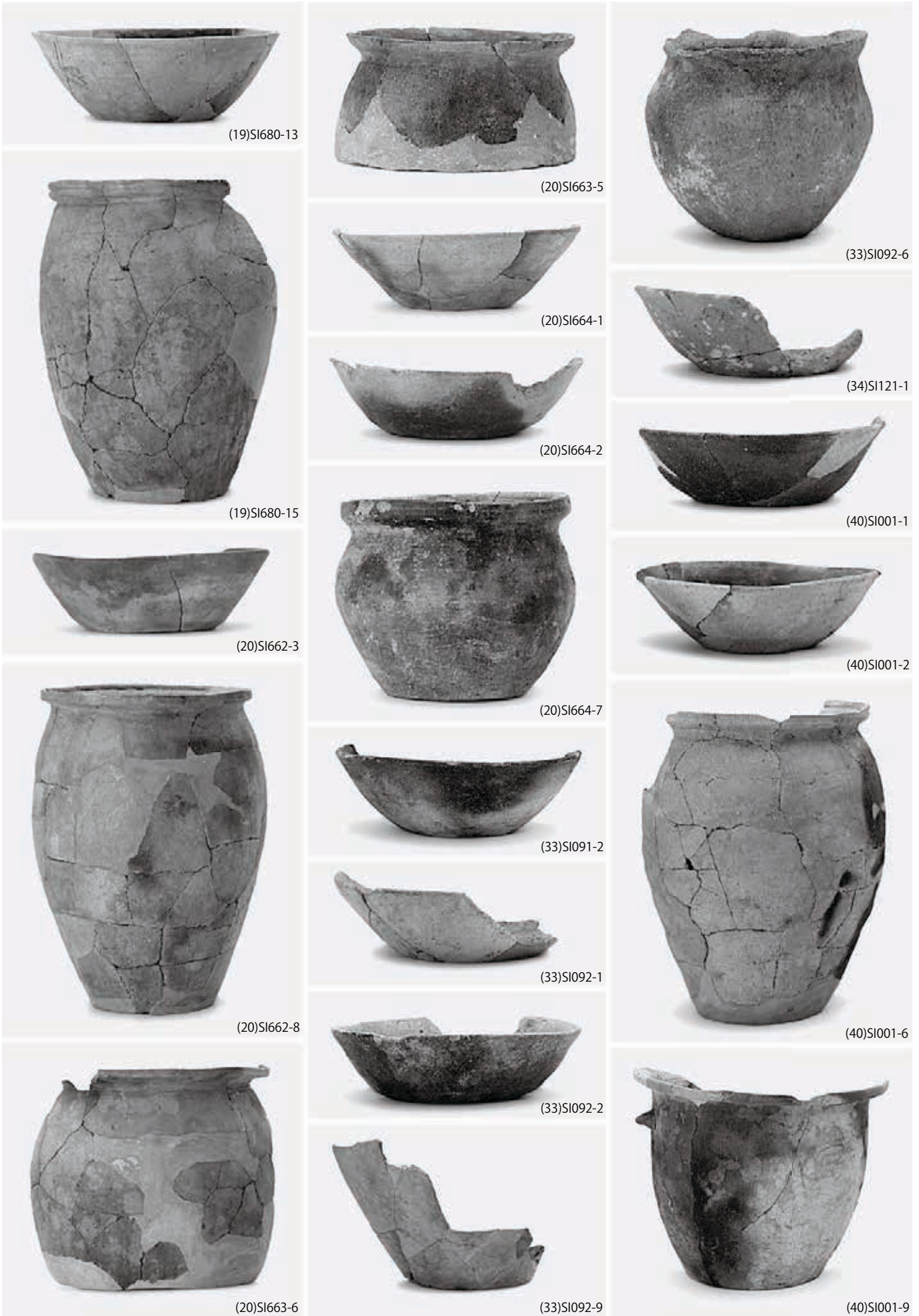
豎穴住居跡出土土器(7)



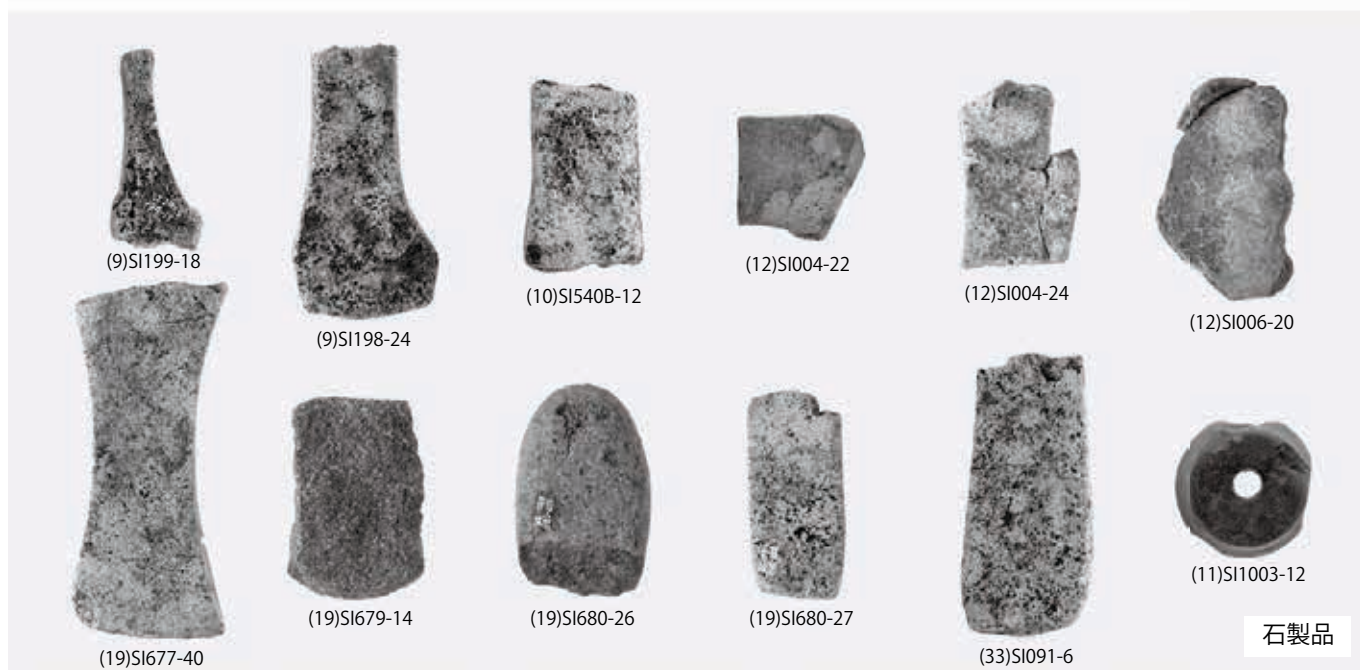
豎穴住居跡出土土器(8)



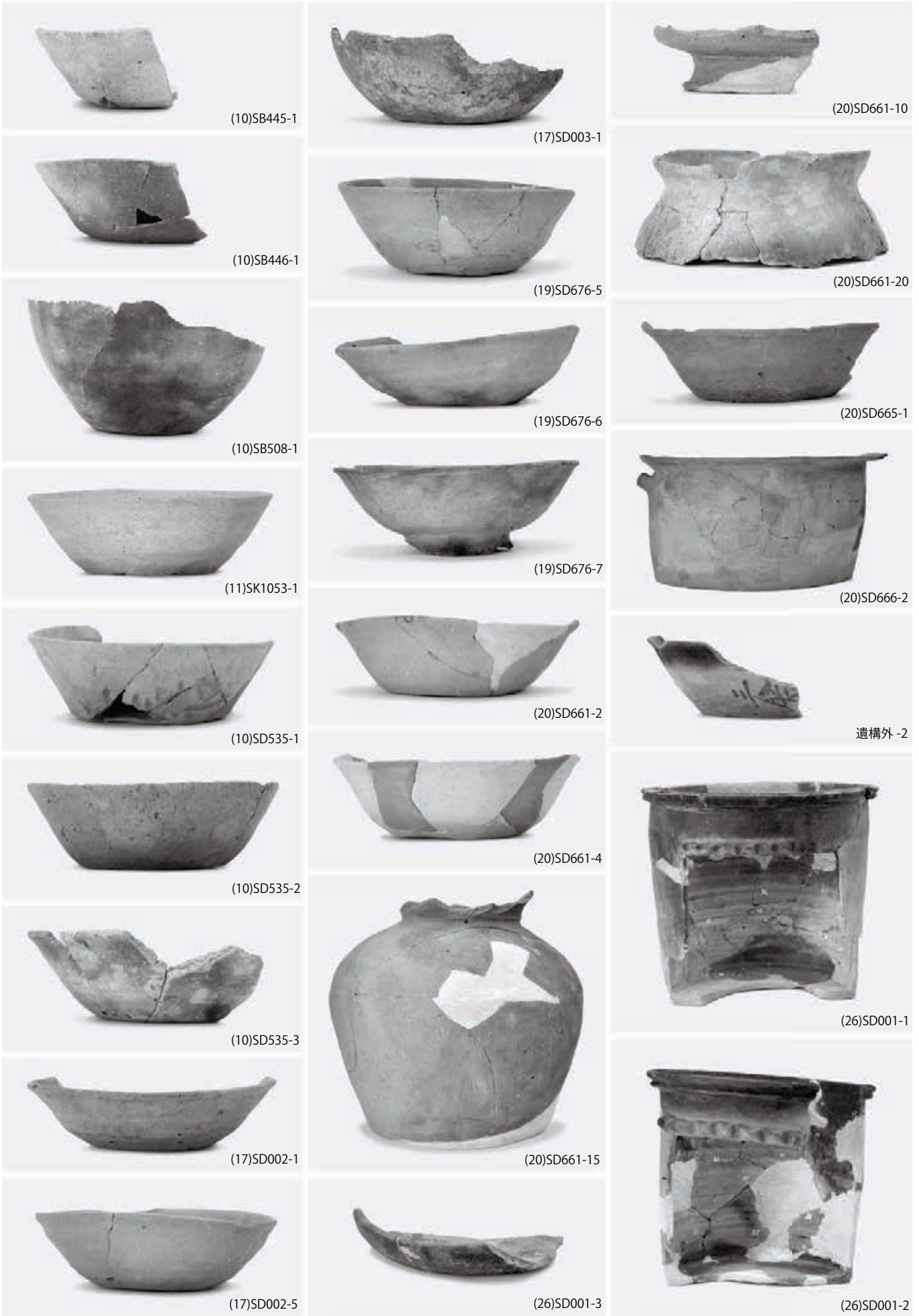
豎穴住居跡出土土器(9)



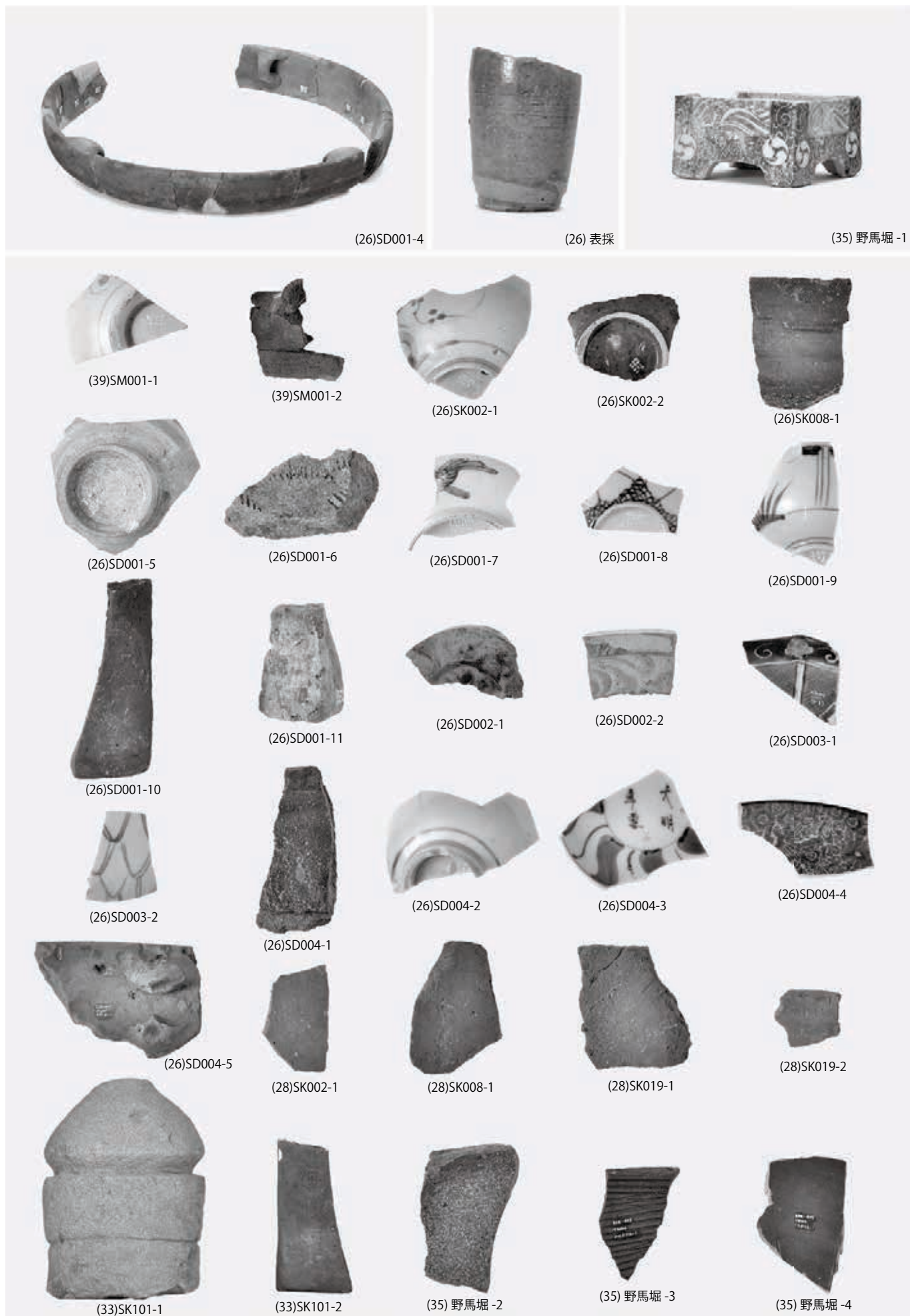
豎穴住居跡出土土器(10)

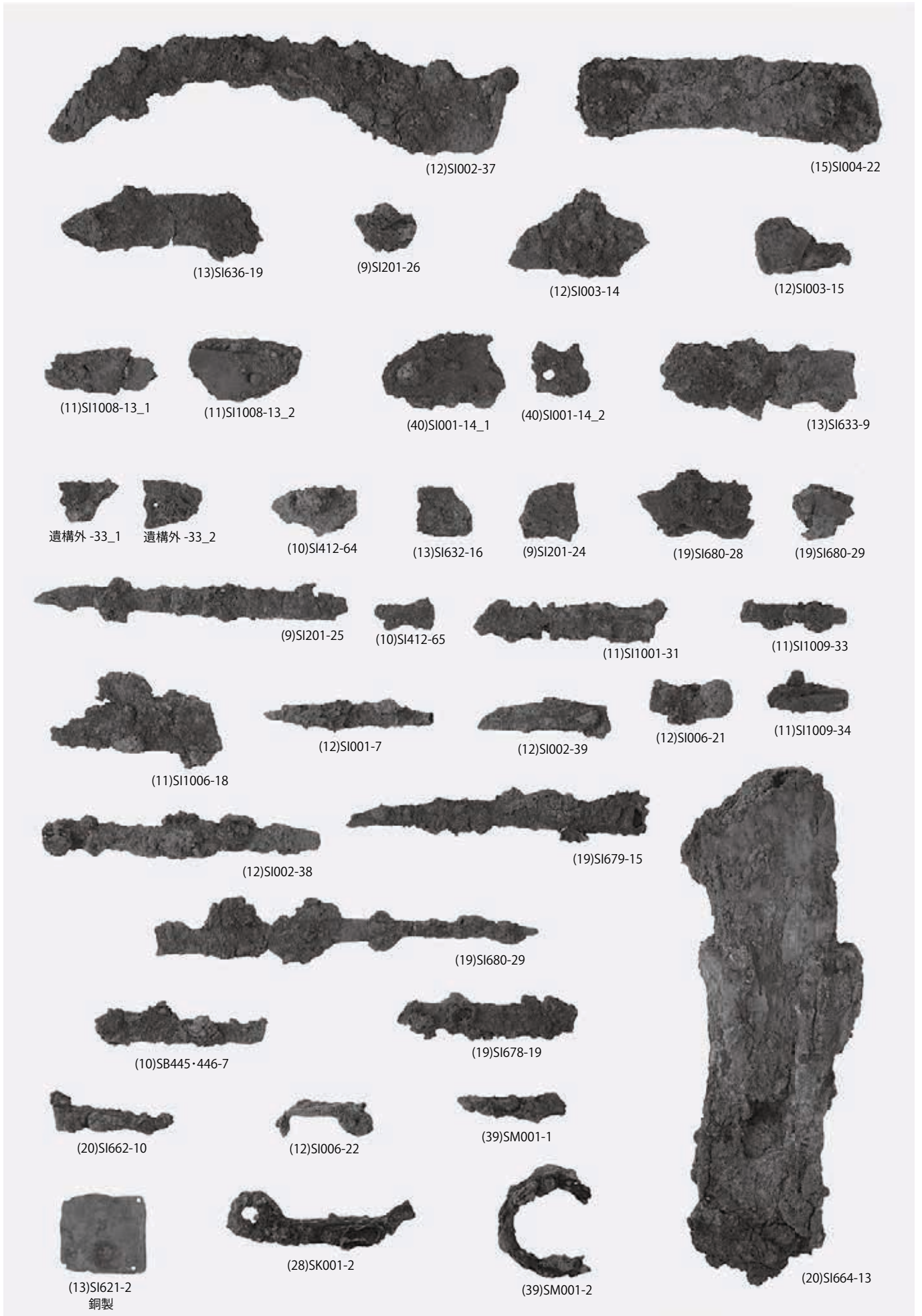


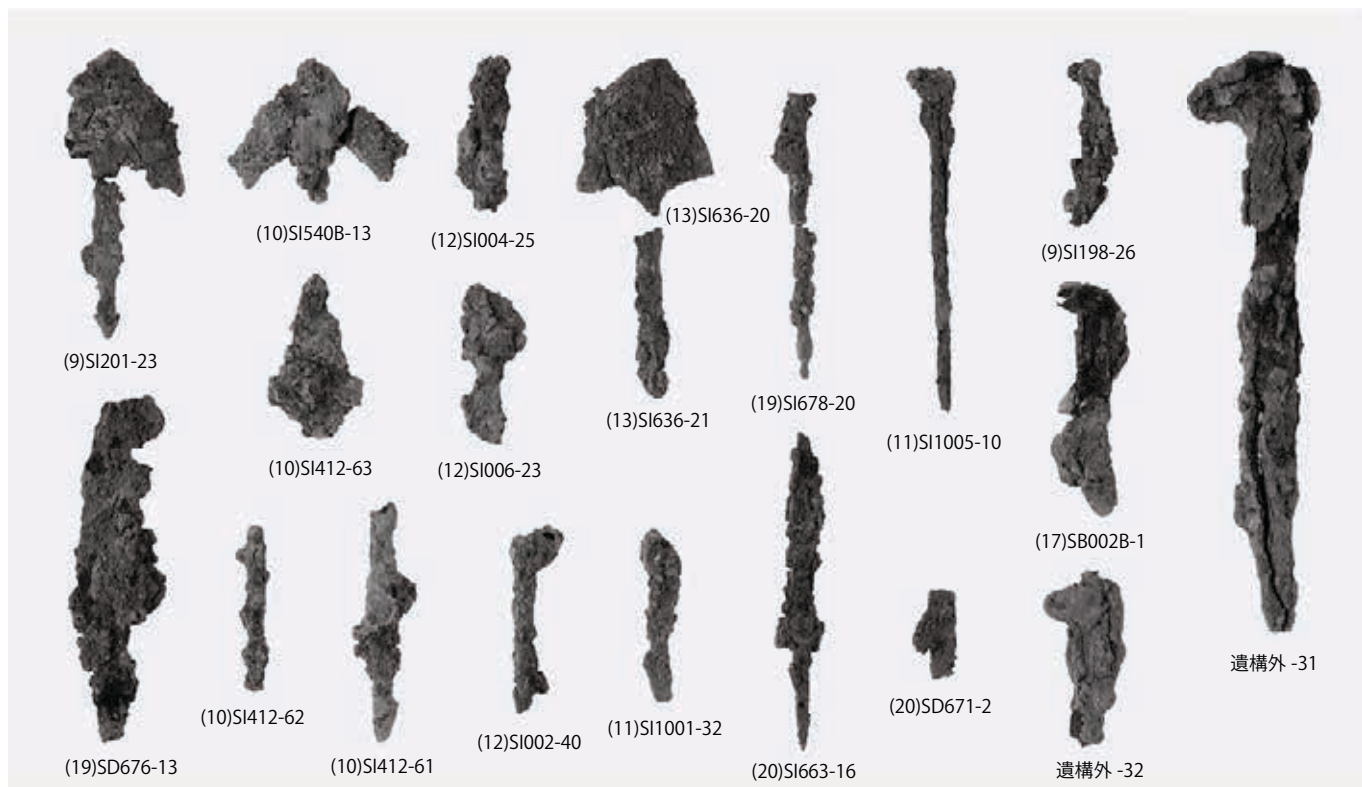
竪穴住居跡出土土器(11) 土製品・石製品



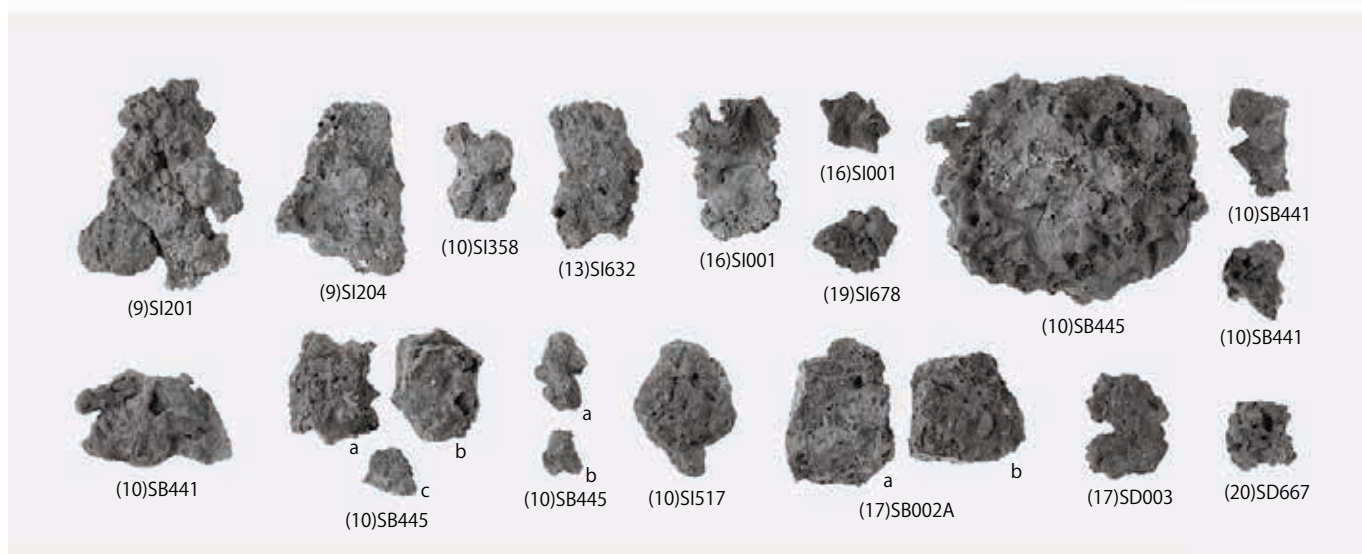
その他遺構・遺構外出土土器・中近世遺物(1)



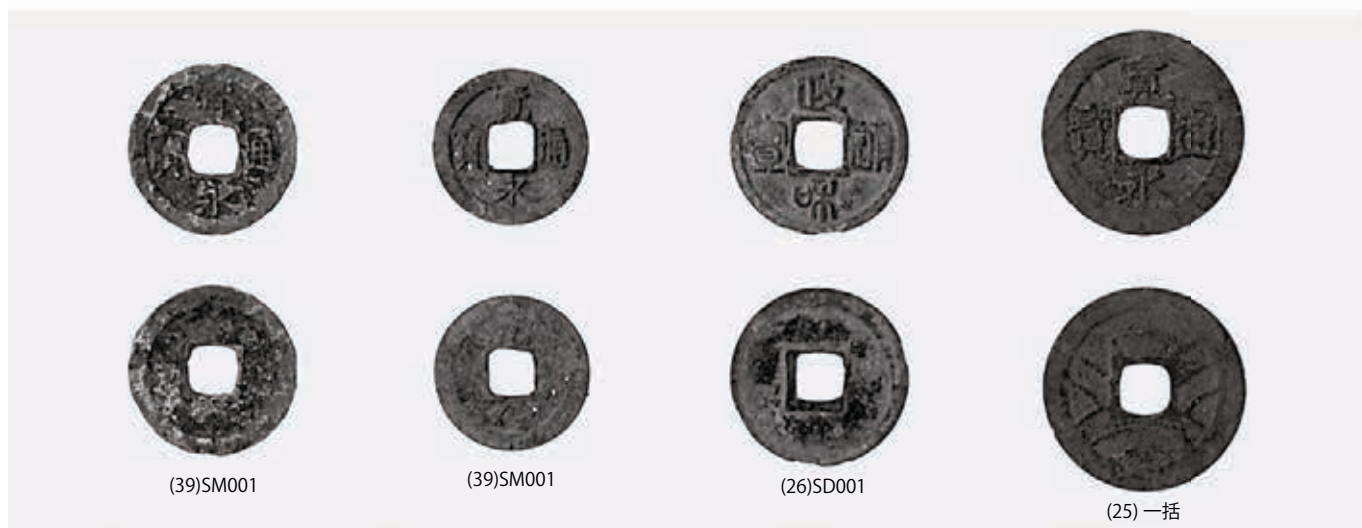




鉄製品(2)

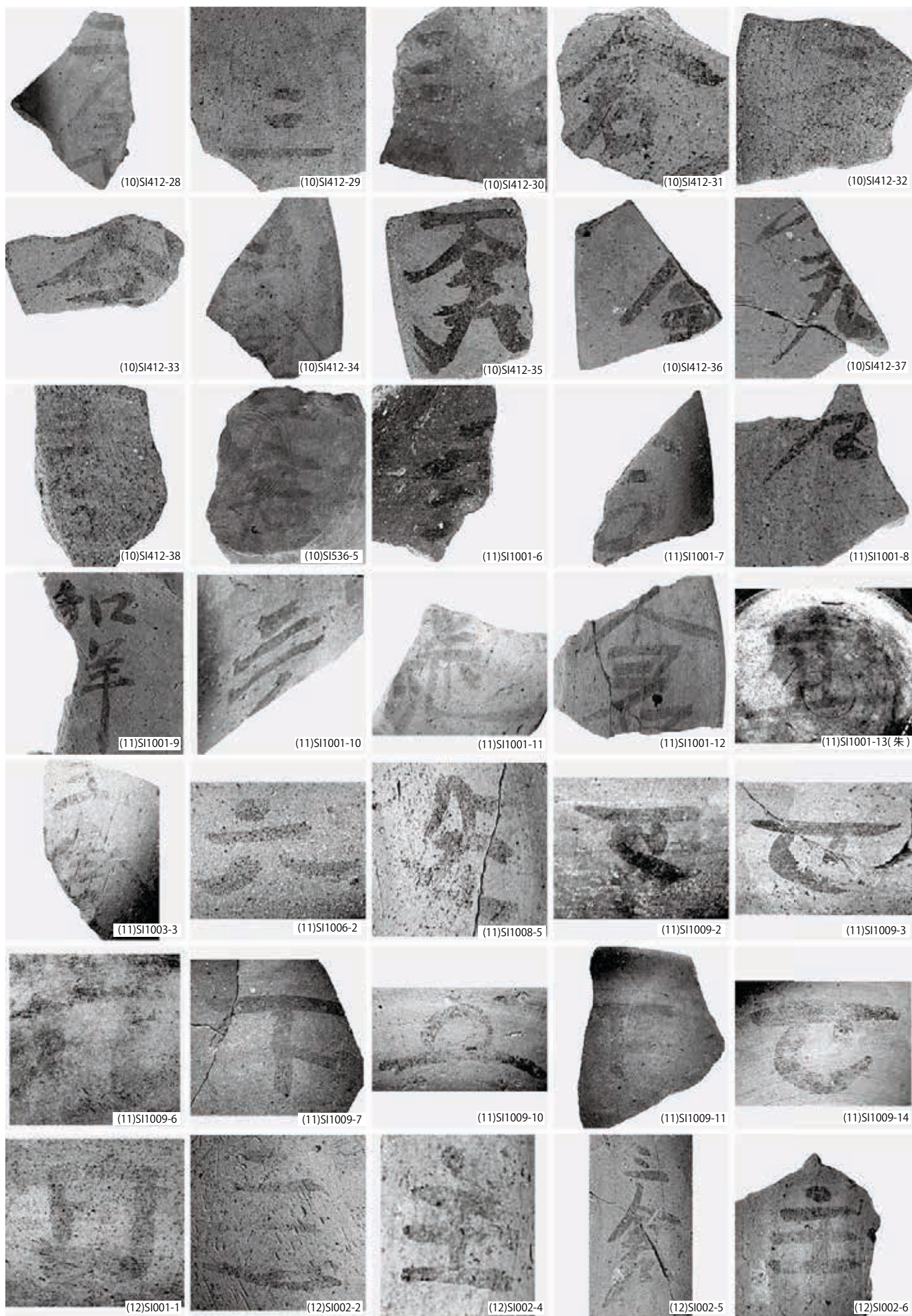


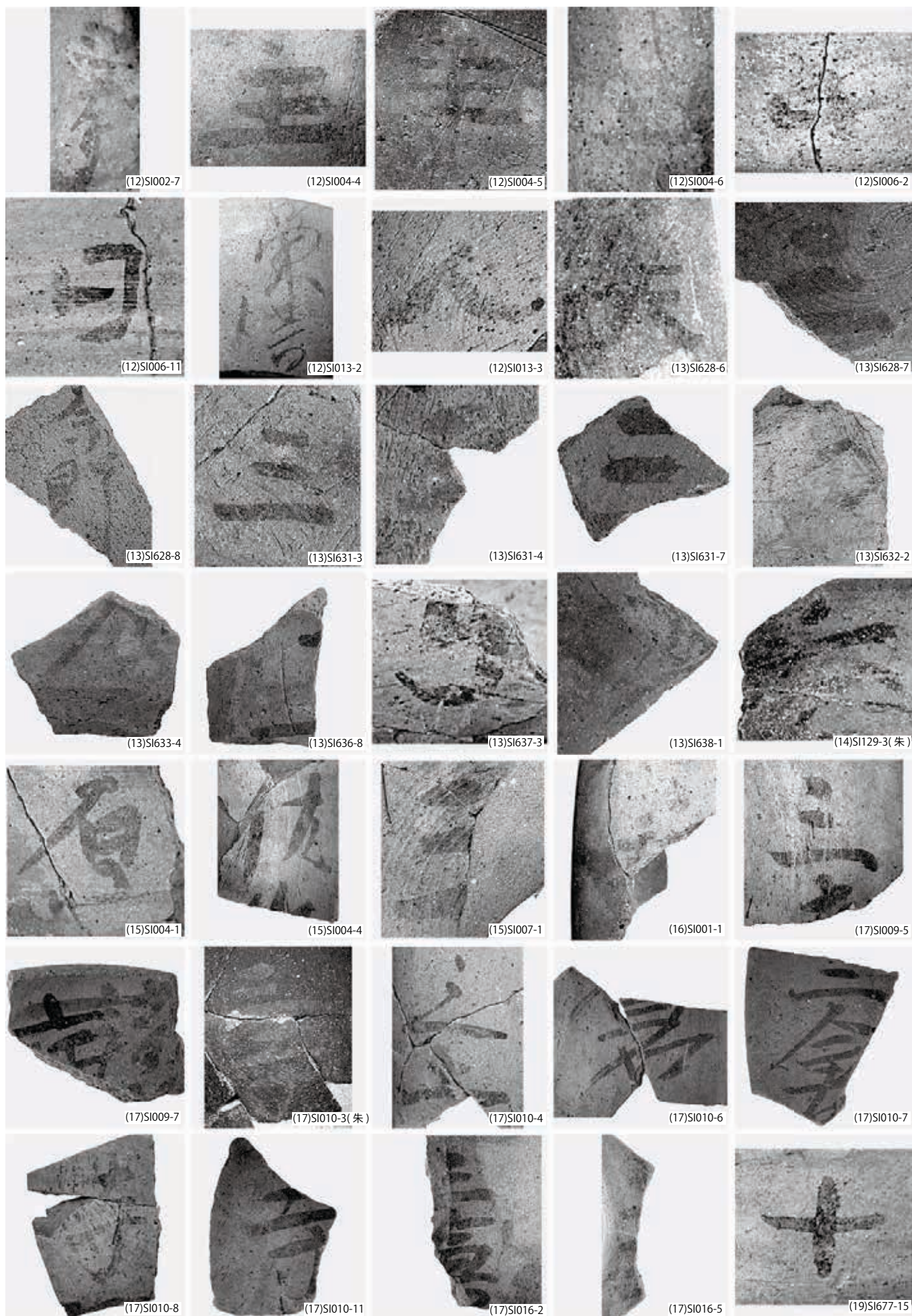
鉄滓

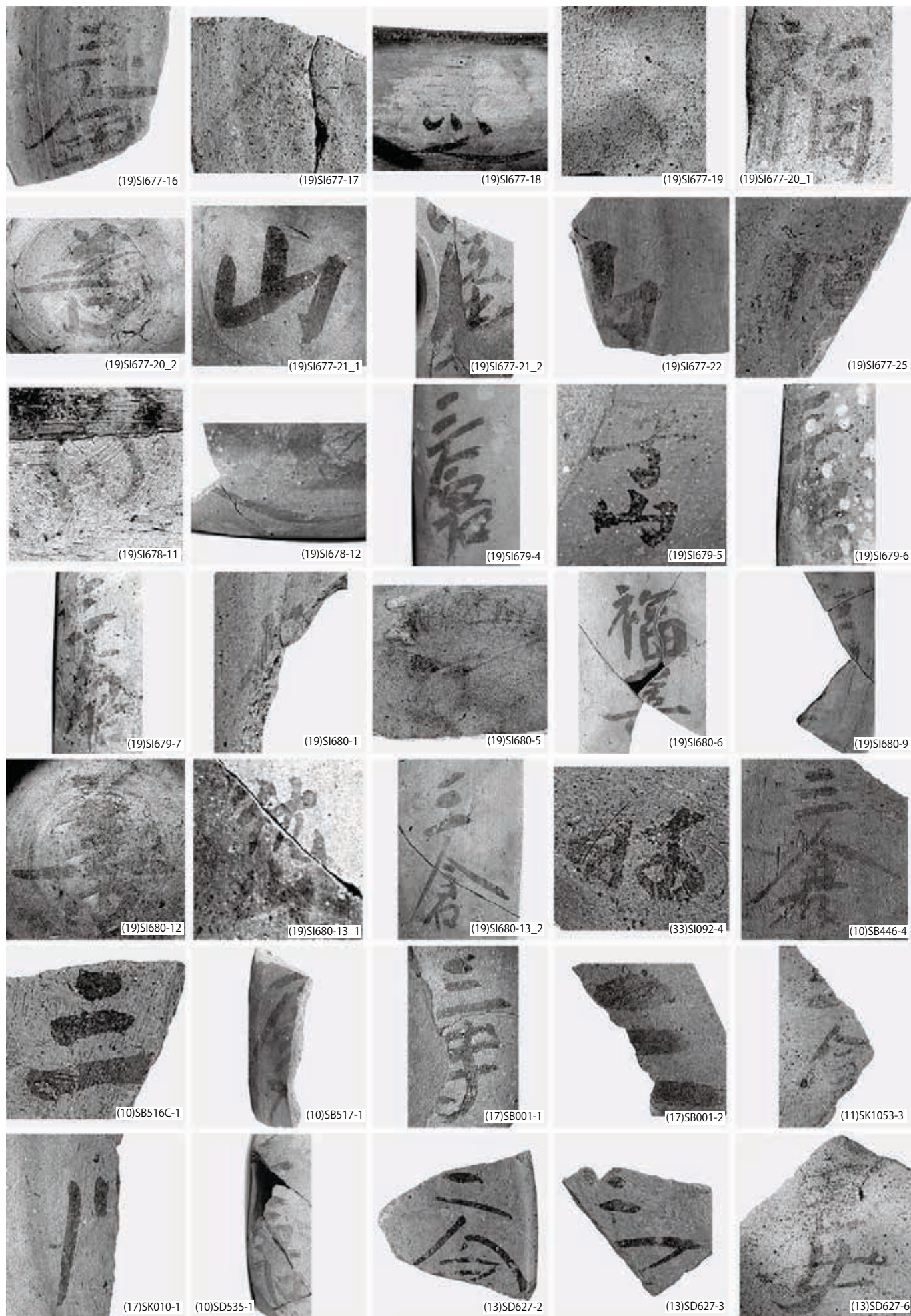


銭貨











墨書(5)

報告書抄録

ふりがな	しすいまちいづみはらやまいせき いち							
書名	酒々井町飯積原山遺跡 1							
副書名	酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書 (旧石器時代 奈良時代～中・近世編)							
巻次	2							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第720集							
編著者名	糸川道行 新田浩三 平井真紀子							
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡 809 番地の2 TEL 043 (424) 4848							
発行年月日	西暦 2014 年 3 月 12 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いづみはらやまいせき 飯積原山遺跡	しすいまちいづみあざ 酒々井町飯積字 みやただい 宮田台535-2 ほか	12322	005	35度 42分 53秒 (日本測地系)	140度 17分 43秒	19950106～ (調査開始日) 20101227 (本書所収調査期 間終了日 その間 断続的に調査 第 1章参照)	154,073	土地区画整理事業に 伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
飯積原山遺跡	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点 22 か所		ナイフ形石器、台形様石器、礫器、敲石、局部磨製石斧、削器、彫器、楔形石器、尖頭器、搔器、石核、剥片、二次加工のある剥片、細石刃、細石刃石核、石刃		野辺山型細石刃石核を有する石器群がまとまって出土した。黒曜石は、すべて神津島恩馳鳥群のものが用いられていた。	
	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡	66 軒	土師器、須恵器、灰釉陶器、砥石、羽口、金属製品、鉄滓	9世紀後葉の竪穴住居跡から人面へう描き支脚や多数の墨書土器が出土した。		
	包蔵地	中・近世	溝状・道路状遺構	60 条	陶磁器、砥石、銭貨、馬骨	柳沢牧の一部が台地北西部を中心に現存している。		
要約	<p>飯積原山遺跡は高崎川及びその谷部に北面する台地上に立地する。縄文時代・奈良・平安時代の集落、近世の野馬土手・土坑（シシ穴）などが発見された。旧石器時代は石器出土総点数が 1,307 点で、22 か所のブロックと 5 枚の文化層の石器群が検出された。第 3 文化層は IX a 層上部～VII 層下部に生活面をもち、ナイフ形石器や台形様石器を主要器種としており、折断して作出された石器の割合が多いことが特徴である。環状ブロックが形成される時期に後出する段階の良好な石器群である。黒曜石の推定産地は、すべて高原山甘湯沢群のものが用いられている。第 5 文化層は野辺山型細石刃石核を有する石器群である。黒曜石の推定産地は、すべて神津島恩馳鳥群のものが用いられている。</p> <p>平安時代の集落は概ね 9 世紀後葉を中心とした時期で、中央東寄りの台地上に展開している。台地北寄りの竪穴住居跡から人面へう描き支脚が出土したほか、集落全体から「三倉」「三寺」など多数の墨書土器が出土している。掘立柱建物跡が集中する地区は 3 箇所あり、台地南東に位置する一群は村落内寺院の可能性がある。</p> <p>本遺跡周辺は近世柳沢牧が所在した地区で、台地北西を中心に野馬土手やシシ穴状の土坑が残されている。シシ穴状土坑の一部から馬骨が出土している。</p>							

千葉県教育振興財団調査報告第 720 集

酒々井町飯積原山遺跡 1

旧石器時代 奈良時代～中・近世編
一酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書 2 一

平成 26 年 3 月 12 日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 独立行政法人 都市再生機構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿 6-5-1

公益財団法人 千葉県教育振興財団
千葉県四街道市鹿渡 809 番地の 2

印 刷 株式会社 東 プ リ
千葉県船橋市咲が丘 1-11-9
